秋田県文化財調査報告書第166集

# 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ

## ——上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡——

上

秋田県埋蔵文化財センター

1988・3

秋田県教育委員会

# 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ

## —上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—

上

1988・3

秋田県教育委員会

# 序

東北横断自動車道秋田線は、今後の秋田県発展の基となる高速交通体系の根幹をなすものであります。この建設工事は、秋田市～横手市間から開始されることになり、すでに昭和61年度から本工事の一部が着工されております。

この区間の路線上には、分布調査などの結果、旧石器時代から中世に至る38箇所の遺跡が確認され、昭和60年度には、工事に先立って河辺郡河辺町七曲地区に所在する６遺跡の発掘調査を実施いたしました。

昭和61年度は仙北郡協和町に所在する４遺跡の発掘調査を実施いたしましたが、本書は協和インターチェンジ予定地内に所在する縄文時代の３遺跡についてまとめたものであります。

調査の結果、上ノ山Ⅰ遺跡と館野遺跡では、竪穴住居跡、土坑などの遺構と遺物を検出しました。また、上ノ山Ⅱ遺跡ではこれまでに例のない放射状に配列された大型住居跡と多数の竪穴住居跡や土坑などを検出しました。遺物は新発見の石器２種類と多数の玦状耳飾などのほか大量の土器、石器が出土しました。この上ノ山Ⅱ遺跡の調査成果は、単に秋田県の歴史に新資料を加えたにとどまらず、縄文時代の社会と文化の研究に寄与するところが大であると思います。

本書を刊行するにあたり、専門指導員、日本道路公団、協和町、同教育委員会、西仙北町教育委員会並びに関係各位に対し深く感謝の意を表するとともに、本書が学術上はもちろんのこと、埋蔵文化財に対する御理解と保護のために広く活用されることを期待します。

昭和62年11月30日

秋田県教育委員会
教育長　斎藤　長

# 例　言

1　本書は、東北横断自動車道秋田線の建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和61年度に調査した3遺跡の報告書である。

2　本書の内容と既発表との見解が異なる場合は、本報告書の記述内容が優先するものとする。

3　Ⅱ・第2章「周辺の地形と地質」は、専門指導員白石建雄秋田大学助教授に執筆をお願いした。

4　Ⅴ・第3章自然科学的分析のうち、「鉱物組成の分析」はパリノ・サーヴェイ株式会社に、「残存脂肪の分析」は㈱北海道測量図工社に分析を委託した報告書である。

5　本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ、Ⅱ・第1章・第3章、Ⅴ・第1章・第2章第2節3(1)、Ⅴ・第4章 …… 大野　憲司
Ⅲ …… 柴田陽一郎
Ⅳ …… 栗沢　光男
Ⅴ・第2章第1節1 …… 桜田　隆
Ⅴ・第2章第1節2 …… 山崎　文幸
Ⅴ・第2章第2節1・2 …… 児玉　準
Ⅴ・第2章第2節3(2) …… 高橋　学
Ⅴ・第2章第2節4 …… 高橋　忠彦

6　土色の記載は、農林省水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。

7　調査ならびに本書を刊行するにあたり、専門指導員、文化庁記念物課をはじめ次の諸氏から指導と助言を賜った。記して謝意を表します。

上野修一　岡崎里見　久保哲三　斎藤　隆　酒井重洋　佐々木清文　佐々木洋治　高橋与右ェ門　田熊清彦　中川重紀　芳賀英一　橋本正春　福田友之　藤田富士雄　藤沼邦彦　古川知明　本間　宏　山内幹夫　渡辺　誠　（敬称略、五十音順）

# 凡　例

1　遺構図面は原則として竪穴住居跡１／40（館野・上ノ山Ⅰ）、竪穴住居跡１／60（上ノ山Ⅱ）、土坑・その他の遺構１／40で収載し、それぞれにスケールを付した。

2　遺物実測図は主として土器１／４、土器拓影図１／2.5、土製品１／２で収載した。石器は器種に応じて２／３～１／４で収載し、それぞれにスケールを付した。

3　遺構番号は原則として検出順に通し番号を付したが、上ノ山Ⅱ遺跡の発掘調査は３班による分担制を採用したため１班は001～043、２班は100～199・300～328、３班は200～244間の番号を付した。また最終的に遺構と判断されなかったものについては欠番とした。

調査において遺構・遺物には下記の略号を使用した。

| | | |
|---|---|---|
| ＳＢ……掘立柱建物跡 | ＳＤ……溝状遺構 | ＳＩ……竪穴住居跡 |
| ＳＫ……土坑 | ＳＫＦ……フラスコ状土坑 | ＳＫＴ……陥し穴状遺構 |
| ＳＭ……道路状遺構 | ＳＮ……焼土遺構 | ＳＱ……配石遺構 |
| ＳＲ……土器埋設遺構 | ＲＰ……土器 | ＲＱ……石器 |

4　遺構・遺物挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

……遺構（地山）　……遺構（焼土）　……遺構（炭化物）

……遺物（磨り）　……遺物（擦り）　……遺物（敲き）

……遺物（擦り切り）

# 総 目 次

## 上

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 9
Ⅲ　上ノ山Ⅰ遺跡 …… 25
Ⅳ　館野遺跡 …… 95

## 下

Ⅴ　上ノ山Ⅱ遺跡 …… 1

## 付 図

# 上 目 次

序 …… i
例　言 …… iii
凡　例 …… iv
総目次 …… v
上目次 …… v

Ⅰ　はじめに …… 1
第1章　調査に至るまで …… 3
第2章　調査の組織と構成 …… 4
第3章　調査の方法 …… 5
第4章　調査の経過 …… 6

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 9
第１章　遺跡の立地 …… 11
第２章　周辺の地形と地質 …… 14
第３章　歴史的環境 …… 21

Ⅲ　上ノ山Ⅰ遺跡 …… 25
第１章　調査の概要 …… 27
第１節　遺跡の概観 …… 27
第２節　調査の経過 …… 27
第２章　調査の記録 …… 31
第１節　検出遺構と遺物 …… 31
第２節　遺構外の出土遺物 …… 50
第３章　まとめ …… 74
図　版 …… 75

Ⅳ　館野遺跡 …… 95
第１章　調査の概要 …… 97
第１節　遺跡の概観 …… 97
第２節　調査の経過 …… 97
第２章　調査の記録 …… 101
第１節　検出遺構と遺物 …… 101
第２節　遺構外の出土遺物 …… 119
第３章　まとめ …… 129
図　版 …… 131

# I はじめに

# 第1章　調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、秋田市―横手市―岩手県北上市を結ぶ、秋田県期待の高速交通体系の基幹をなす道路である。これが、昭和53年11月には秋田市―横手市間の第8次施行命令があり、昭和54年11月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、昭和55・56年に第1次の遺跡分布調査(註1)、同58年に第2次遺跡分布調査(註2)を行い、路線上には37箇所の遺跡のあることを報告した。

その後、路線内に所在する遺跡について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会との間で協議が持たれ、最終的には記録保存することで合意し、昭和60年度には河辺郡河辺町に所在する6遺跡について発掘調査が実施された(註3)。

そして昭和61年度は、仙北郡協和町中淀川地内に所在する上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・館野遺跡の3遺跡と、同町峰吉川地内に所在する半仙遺跡について調査することとなったのである。なお、発掘調査の開始にあたって、中淀川地内に予定されている協和インターチェンジ予定部分の範囲確認調査を行ったところ、新たに館野遺跡の一部がその中に含まれることが判明した。このため、東北横断自動車道秋田線上に所在する遺跡数は合計38遺跡となったのである。

註1　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集　1982（昭和57年）

註2　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第116集　1984（昭和59年）

註3　秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第150集　1986（昭和61年）

# 第2章　調査の組織と構成

調査主体　　秋田県教育委員会

遺跡名・所在地・面積・調査期間・担当者

| 番号 | 遺跡名 | 所在値 | 予定面積 | 調査面積 | 調査期間 | 担当者 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 28 | 半仙 | 仙北郡協和町<br>峰吉川字半仙48他 | 2,300㎡ | 2,300㎡ | 昭和61年<br>9月20日～11月19日 | 熊谷太郎<br>柴田陽一郎 |
| 29 | 上ノ山Ⅰ | 仙北郡協和町<br>中淀川字千着上ノ山64他 | 4,100㎡ | 4,100㎡ | 昭和61年<br>6月17日～9月13日 | 熊谷太郎(学芸主事)<br>柴田陽一郎(文化財主事) |
| 30 | 上ノ山Ⅱ | 仙北郡協和町<br>中淀川字千着上ノ山1他 | 24,330㎡ | 24,300㎡ | 昭和61年<br>6月16日～12月9日 | 大野憲司(学芸主事)<br>桜田　隆(文化財主任)<br>児玉　準(文化財主事)<br>高橋忠彦(文化財主事)<br>栗沢光男(文化財主事)<br>山崎文幸(文化財主事)<br>高橋　学(講師) |
| 38 | 館野 | 仙北郡協和町<br>中淀川字千着館野183他 | 4,870㎡ | 4,900㎡ | 昭和61年<br>9月12日～12月9日 | 大野憲司<br>栗沢光男 |

専門指導員　　小林達雄　　国学院大学文学部教授
白石建雄　　秋田大学教育学部助教授
林　謙作　　北海道大学文学部助教授
藤沼邦彦　　宮城県教育庁文化財保護課調査第一係長
村越　潔　　弘前大学教育学部教授

総務担当　　加藤　進　　(秋田県埋蔵文化財センター主査)
高橋忠太郎　(秋田県埋蔵文化財センター主事)

協力機関　　協和町・協和町教育委員会・西仙北町教育委員会

# 第3章　調査の方法

発掘調査は、グリッド法を用いた。グリッドの起点は、東北横断自動車道秋田線路線内の日本道路公団設置の中心杭を各遺跡において1箇所選び、それにあてた。各起点には、国土調査法第X座標系での座標値が与えられているので、これをもとに国土方眼方位を求め、調査区全体に4m×4mの方眼杭を打設したのである。各遺跡で依拠した中心杭とその座標値は、以下の通りである。

| | 中心杭 | X座標値 | Y座標値 |
|---|---|---|---|
| 上ノ山Ⅰ遺跡 | STA 466 + 40 | − 45.067.6430 | − 46.916.9196 |
| 上ノ山Ⅱ遺跡 | STA 468 + 40 | − 44.906.3922 | − 47.035.1709 |
| 館野遺跡 | KYOW・ICE＝RAMP 0 + 60.000 | − 44.871.5837 | − 46.739.4000 |

方眼杭には、東西方向にLA、LB、……LT、MA、MB……MJとアルファベットの組み合わせを、南北方向は南から北に向かって昇順となる連続した2桁の数字をあて、その両者を組み合わせて各グリッドを呼ぶこととした。方眼杭に囲まれたグリッドについては、その東南隅に位置する杭が自己の呼称を示すものとしている。なお、起点となった中心杭には、各遺跡ともMA 50の呼称が与えられている。

発掘調査予定地の大部分は、雑木林や水田休耕地の牧草畑で攪乱が相当に進んでいると予想された。このため、範囲確認調査の結果をもとに、各遺跡の遺物包含層や遺構面には極力影響を及ぼさない程度に、重機による表土除去を行った。

遺構の精査は四分法を用いた。住居跡等は、プランを確認した後、東西及び南北の二方向または長軸及び短軸の二方向に直交する断面観察用のベルトを残して、その遺構を四分割して掘進むこととした。また土坑等小さな遺構にあっては、その長軸によって二分割し、片側を掘込んで残った他の側によって埋土の断面を観察することとした。

調査の記録には主に二つの方法を用いた。一つは図面による記録であり、一つは写真による記録である。他に、日誌、記録カードなども用いている。遺構図面は、一つの遺構につき原則として平面図1葉以上を縮尺1／20でとることとし、他に埋設土器や炉跡など細部の表現が必要な場合は縮尺を1／10とした。

写真撮影については、撮影機材としてニコンFEを用い、35㎜フィルムにはネオパンSS及びコダクローム64、エクタクローム100を使用した。また、必要に応じて、ゼンザブロニカETR—3、ブロニー版フィルムとしてネオパンSS、コダクローム64を使用している。

# 第4章　調査の経過

昭和61年度の調査経過は大略下記の通りであるが、調査した各遺跡の詳しい調査経過は、それぞれの遺跡の報告の中に記してある。

第1章で述べた遺跡分布調査の際に、協和町中淀川地内の本線上に二つの遺跡（上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ遺跡）の存在することが知られていた。しかしながら、2つの遺跡に隣接する形で協和インターチェンジが計画されたため、その範囲を含めて範囲確認調査を行ったところ、新たに館野遺跡が計画路線内に存在することが判明した。この範囲確認調査は、61年4月30日から5月15日に行ったものである。

6月12日、発掘調査作業員に対して調査に関しての説明と諸注意をする。6月16日までに事務所の設置、諸機材の整備等の発掘準備を行い、6月17日から本格的な調査に入る。

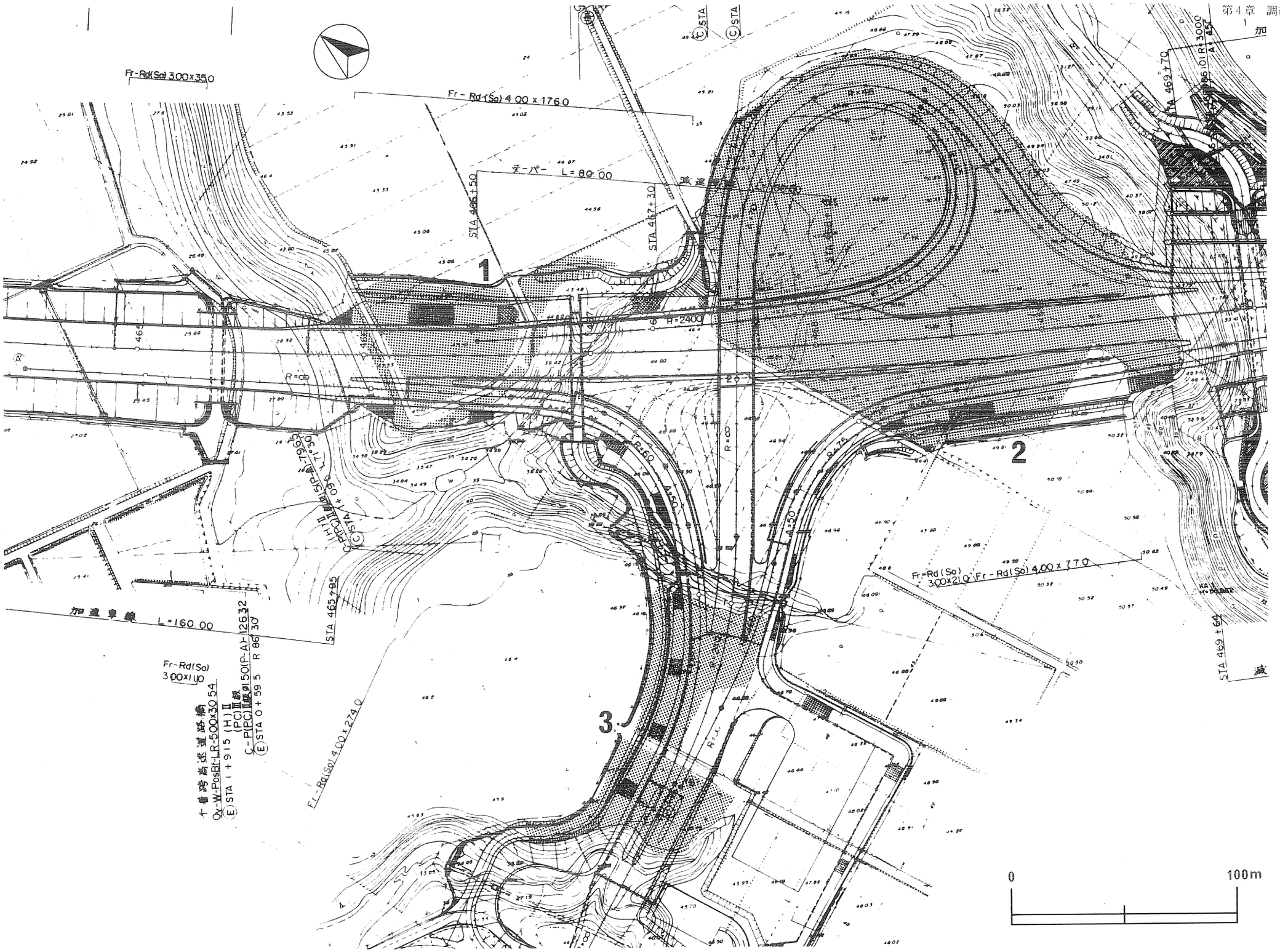
6月17日、上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡の調査を開始する。上ノ山Ⅱ遺跡は調査対象面積が広大なため、調査員と作業員を3班に分けて行う。両遺跡とも表土を現表面下10～20ｍの厚さに重機で除去していたが、特に上ノ山Ⅱ遺跡においては、その段階で遺物が散乱しているような状況であり、多くの遺物の出土が予想された。

上ノ山Ⅰ遺跡は、縄文時代の竪穴住居跡や、土坑等を検出して、9月13日に全ての調査を終了し、これと相前後して、9月12日からは、館野遺跡の調査を開始した。

一方、半仙遺跡については、雄物川を横断する架橋工事との関連で、急拠本年度中に調査対象面積の約半分を調査することとなった。9月20日に調査を開始し11月19日に終了したが、縄文時代前期の竪穴住居跡や土坑などの検出があった。

上ノ山Ⅱ遺跡は、予想を上回る遺物量と遺構数で、遺跡の全容を知るまでには期間を要した。特に、大型住居跡が多くしかもその掘り込みが浅かったり住居の壁や床面が明確でなかったために、柱穴の配置などによってその全体プランを把握することが多かった。しかしながら、降雪がほとんどなく、例年にない好天に恵まれ、12月4日には館野遺跡とともに調査を終了させることができた。そして諸器機材や遺物等を搬出し、調査が完了したのは12月9日であった。

出土遺物の整理は発掘調査と併行して行ったが、報告書作成作業は昭和61年12月から62年3月まで秋田県埋蔵文化財センターで行った。



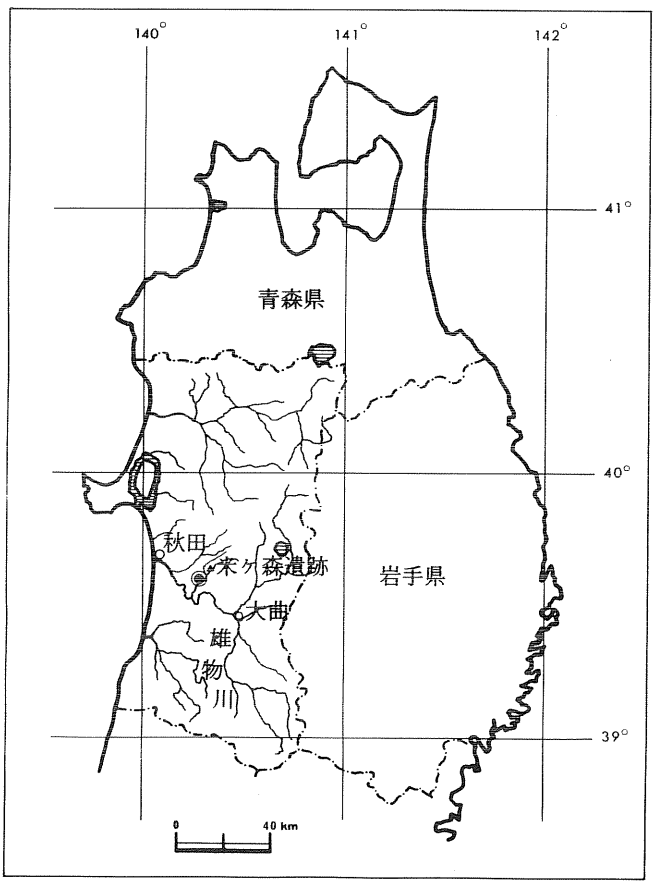

第１図　東北横断自動車道秋田線の計画路線と上ノ山Ⅰ.Ⅱ.館野遺跡発掘調査の位置　　１.上ノ山Ⅰ遺跡２.上ノ山Ⅱ遺跡３.館野遺跡

# Ⅱ　遺跡の立地と環境

# 第１章　遺跡の立地

上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・館野遺跡が所在する協和インターチェンジ予定地は、国鉄奥羽本線羽後境駅の南西約４㎞にある。協和町上淀川地内で、国道13号線から主要地方道協和・松ケ崎線に入り、本荘市方面に約５㎞行くと、そこが協和インターチェンジ予定地の中淀川字千着館野である。

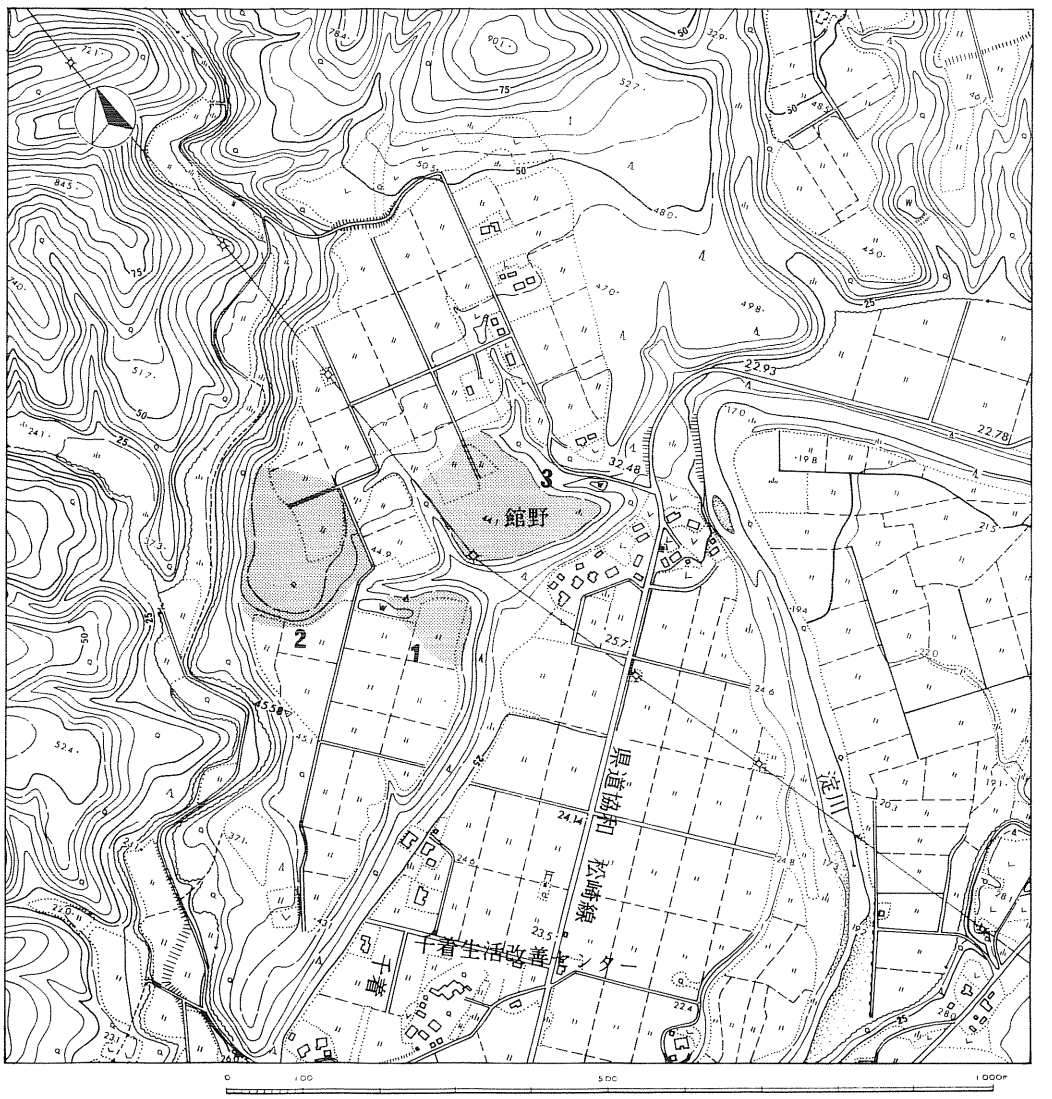
３つの遺跡は、淀川北西岸の台地上に所在する。この付近には、雄物川の一支流である淀川によって形成された８段の河岸段丘面があり、上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡・館野遺跡は中位Ⅱ段丘上に立地する。この中位Ⅱ段丘は、第２章第１節で述べてあるように、遺跡付近では中位Ⅱ段丘の離水時の局所的な下刻によってあたかも２面の段丘面（以下、便宜的に上位面をＡ面、下位面をＢ面と呼ぶ）が存在するように見え、上ノ山Ⅰ・館野遺跡がＢ面上に、上ノ山Ⅱ遺跡がＡ面上に立地する。Ａ面の標高は約50ｍ、Ｂ面のそれは約45ｍである。Ｂ面は沖積面との比高差が約25ｍで、淀川に面する側で急峻な崖面を形成している。この段丘面の縁辺からは、崖線にほぼ直行する形でいくつかの小さな開析谷が段丘面奥部寄りに入っており、それらの開析谷相互の間隔は約200ｍである。従って段丘面の縁辺寄りの部分は、崖面に沿って連続する平坦面ではなく、上面幅150～200ｍの小さな舌状台地が飛石状に続く形となっている。上ノ山Ⅰ遺跡と館野遺跡はともに、このような舌状台




第１図　遺跡の位置　（◉印が遺跡である）

地上に形成された遺跡で、小さな開析谷をはさんで隣接している。調査前の状況は、上ノ山Ⅰ遺跡が水田の休耕地（昭和45年に原野が開田された）、館野遺跡が水田と一部山林であった。

A面は、B面との比高差が数mしかない。A面は、遺跡付近の現地形あるいは等高線などからすれば、坊台―館野―上ノ山を結ぶ線で、北側背後の種沢丘陵裾に沿ってせまい幅で分布しているものと見られる。上ノ山Ⅱ遺跡は、そのようなA面の、南西端にわずかに残る崖面を含む舌状部に形成された遺跡である。遺跡の東―南側はゆるい斜面を経て平坦なB面に移行し、西側は古種沢川の下刻によってできた深い谷となっている。調査前の状況は、調査区北東部が昭和37年の開田によって造成された水田、他は雑木を主体とする山林で、調査区外である南西側は、やはり昭和45年の開田事業でその裾部が削平されている。




第2図　上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡・館野遺跡の立地

1　上ノ山Ⅰ遺跡　2　上ノ山Ⅱ遺跡
3　館野遺跡

1：50,000

1000 m　0　1000　2000　3000

26　寺沢遺跡　　28　半仙遺跡　　30　上ノ山Ⅱ遺跡
27　大巻野遺跡　　29　上ノ山Ⅰ遺跡　　38　館野遺跡

**第３図　協和町・西仙北町における東北横断自動車道秋田線上の遺跡分布図**

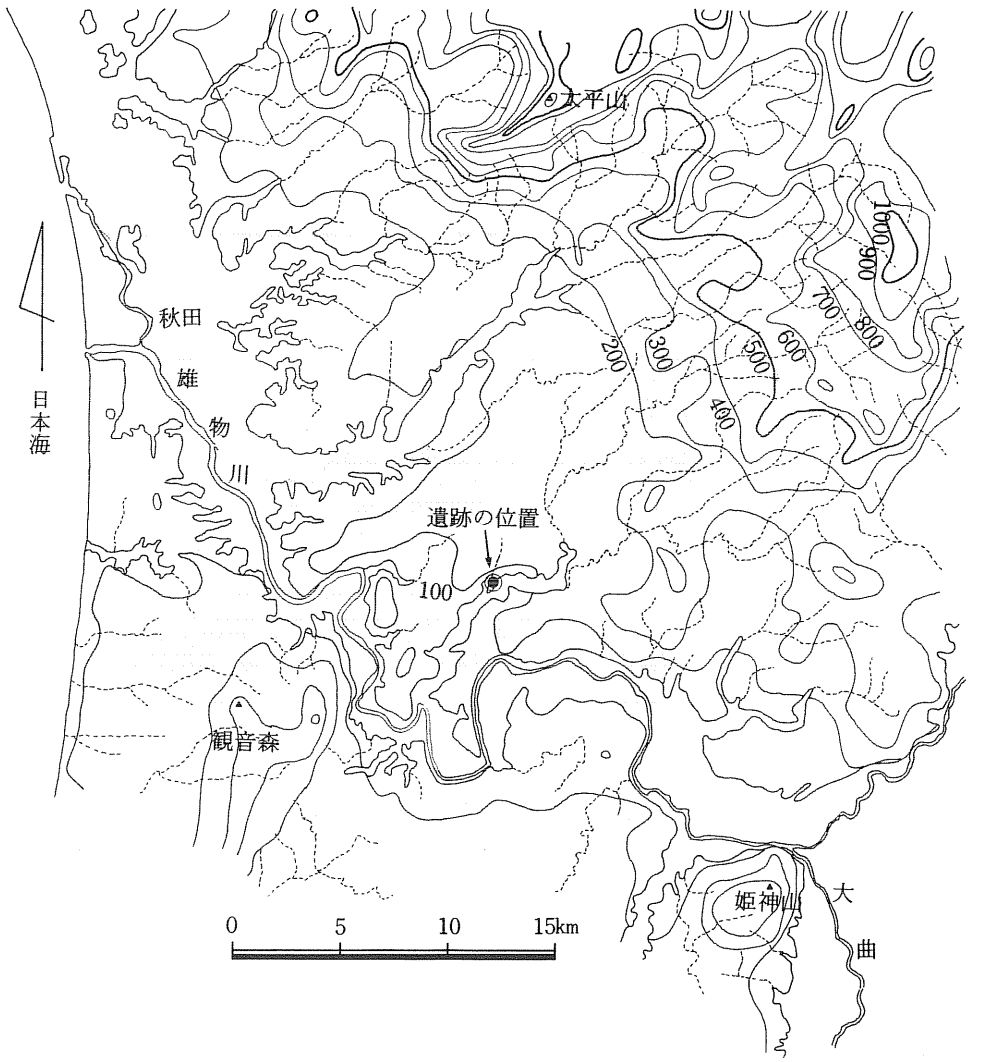
# 第2章　調査地域の地形と地質

## 第1節　地形・地質の概要

上ノ山Ⅰ・Ⅱ、館野遺跡は雄物川の一支流、淀川の左岸にある河岸段丘面上に位置している（第3図）。第4図は遺跡周辺地域の接峰面図であり、埋谷法により幅2㎞未満の谷を消去して作成した。本地域は太平山の南麓に当たり、出羽丘陵（または出羽山地）と称される山地・丘陵が広く発達する他、これらを開析する河川に沿って沖積平野が狭長に分布している。本地域の地形断面には標高200ｍ付近の所に明瞭な遷緩点が存在する。その遷緩点より高位の部分が山地である。山地は本地域北東に分布し、比高700～800ｍの急斜面が北西一南東方向に続いている。丘陵はこの山地の西部～南西部に分布し、本地域の地形の主たる構成要素である。標高100～200ｍの部分が最も広い。この丘陵地は河川によって密に開析されているものの、頂高はよくそろい、遠望するとほとんど平坦に見える。雄物川の左岸地域ではこの斉頂丘陵は西方（観音森）と東方（姫神山）の高所の間にあり、相対的な低地帯をなしている。この低地帯は和田堆積盆地の複向斜構造の中軸部と一致している（第5図）。したがって丘陵地の成立とその配置は造盆地運動の支配を受けている可能性がある。

この丘陵地を横断して雄物川が流れている。雄物川は出羽丘陵に対する先行河川であり、流路は峡谷状の地形を呈している。また山地に源を発する諸河川は南西方向に流れて雄物川に合流する。水系の配置は斜面の走向に直交しており、ほぼ必従的である。沖積平野はこれらの河川の谷底平野として狭長に分布している。これらの平野に面する丘陵末端部には数段の河岸段丘が形成されている。とくに岩見川、淀川流域においてその発達が良好である。雄物川流域では蛇行流路の内側によく発達している。

第5図は本地域の地質図である。本地域の地質は中世代白亜紀の花崗岩とその上位に重なる新第三系、第四系からなる。新第三系は東北地方日本海沿岸地帯では伝統的に上下に二分され、下部は「下部グリーンタフ」、上部は「含油新第三系」と呼称されている。本地域では下部グリーンタフは下位より順に大又層、萩形層、大倉又層、砂子淵層からなり、主として火山噴出物で構成されている。一方、含油新第三系は女川層、船川層、天徳寺層、笹岡層からなる。最近、笹岡層の一部は第四系に含められているが、下位の鮮新統天徳寺層とは整合一連の地層である。これらは泥岩、シルト岩、砂岩などの堆積岩で構成されている。第四系は高岡層、段丘堆積物、および沖積層からなる。

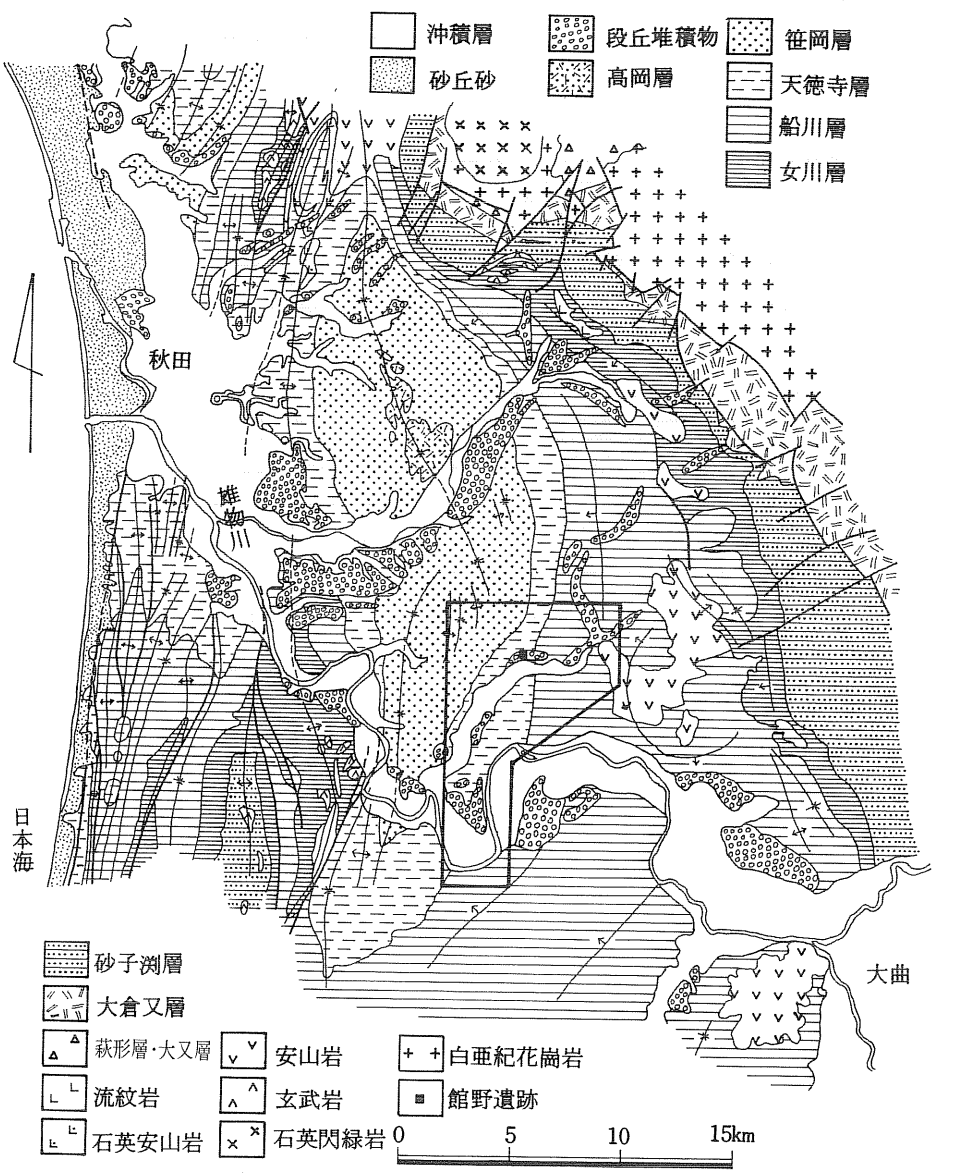



第４図　調査地域周辺の接峰面図・水系図

以上の諸地層は前記した地形と密接な関係をもって分布している。すなわち、山地には白亜紀の花崗岩と下部グリーンタフが分布し、丘陵地は含油新第三系からなる。このように下部の地層が山地を構成していることは、山地が隆起量の大きい地域であることを示している。したがって本地域の地形は地質構成と地殻変動の影響を大きく反映しており、地質支配を受けた地形であると考えることができる。

## 第２節　淀川流域の地質

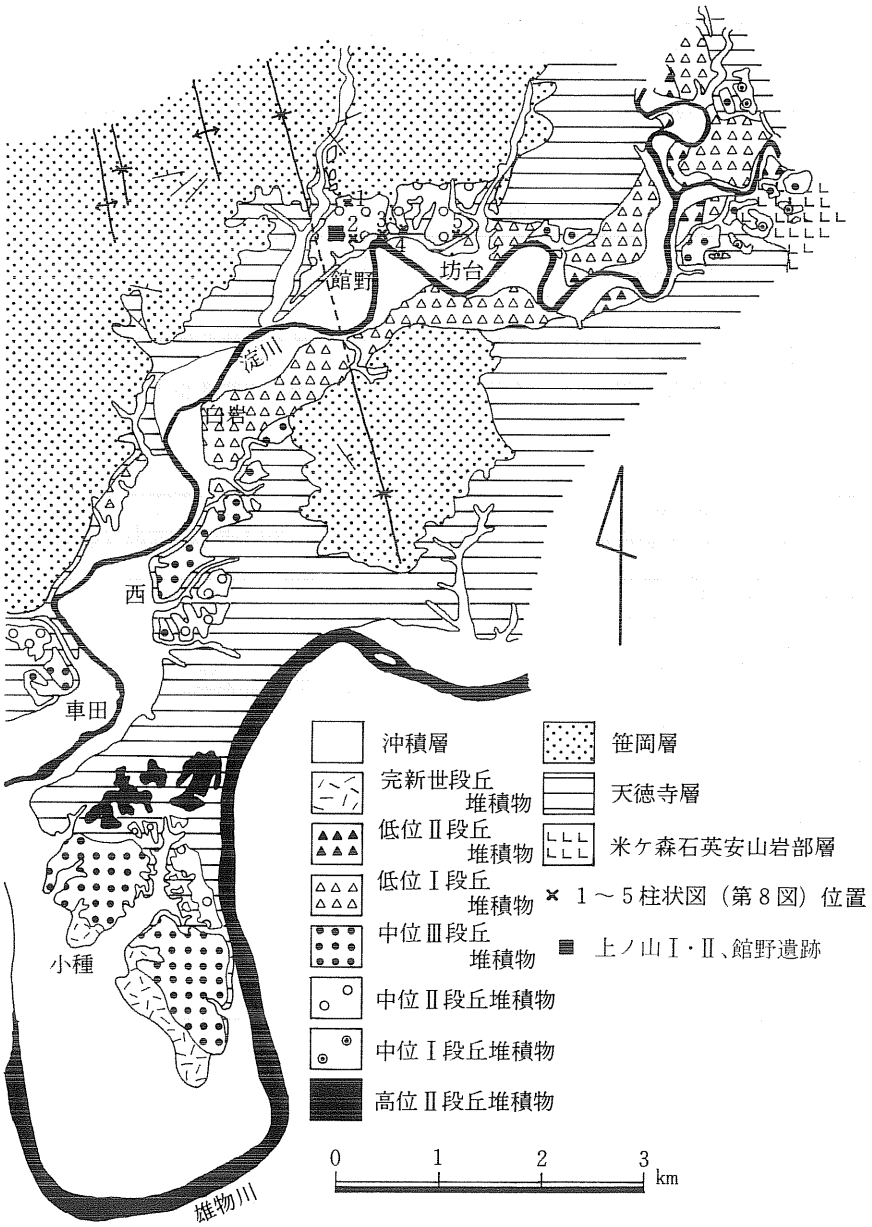
第６図、第１表はそれぞれ淀川中～下流域の地質図と層序表である。本地域には下位から順に船川層中の米ケ森石英安山岩部層（臼田ほか，1979）、天徳寺層、笹岡層、段丘堆積物、沖積層が分布する。




第５図　調査地域周辺の地質図

## １　含油新第三系

最下位の米ケ森石英安山岩部層は輝石安山岩やハリ質安山岩の凝灰岩頂丘とその自破砕溶岩、集塊岩、火山角礫岩などからなる。船川層上部層の堆積と同時期の火成活動によってもた




第６図　淀川流域の地質図

第１表　淀川流域の層序

| 時代 | | 層序 | | NAKATA (1976) の段丘区分 |
|---|---|---|---|---|
| 完新世 | | 沖積層 | 完新世段丘堆積物 | 完新世段丘 |
| 更新世 | 後期 | 低位段丘堆積物 | Ⅱ | 赤平面 |
| | | | Ⅰ | |
| | | 中位段丘堆積物 | Ⅲ | 相川野面 |
| | | | Ⅱ | 上の台面 |
| | | | Ⅰ | 椿台Ⅲ面 |
| | 中・前期 | 高位Ⅱ段丘堆積物 | | 椿台Ⅱ面 |
| 鮮新世 | | 笹岡層 | | |
| | | 天徳寺層 | | |
| 中新世 | | 船川層 | 米ヶ森石英安山岩部層 | |

らされたものであり、本地域北東端に分布する。

天徳寺層は細粒砂岩およびシルト岩からなり、船川層および同層中の米ヶ森石英安山岩部層上に整合に重なる。第２図中央部を通る向斜軸を取り巻くように分布している。本層は新第三紀鮮新世に対比されている。

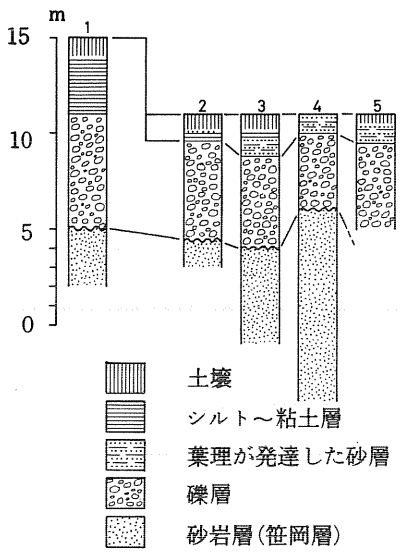
笹岡層は生痕がよく発達した固結度の弱い含礫砂岩からなり、天徳寺層上に整合に重なる。上記した向斜構造の芯部を占めるほか、ゆるやかな褶曲を繰り返しながら西方に分布している。本層はいわゆる含油新第三系の構成層であり、従来新第三紀鮮新世に対比されていた。しかし最近、少なくともその一部は第四紀更新世に堆積したものであることが判明している。(TUCHI, 1984)。

以上の諸地層は和田堆積盆地の中軸部を通る北北西―南南東方向の斜軸に規制されて分布している。地層の傾斜は10°前後もしくはそれ以下であり、非常に緩い。

## 2　段丘堆積物ならびに沖積層

淀川流域および淀川と雄物川の合流点付近には８段の河岸段丘が分布する。高位のものより順にそれらは高位Ⅰ～Ⅱ段丘、中位Ⅰ～Ⅲ段丘、低位Ⅰ～Ⅱ段丘、完新世段丘とよばれている(臼田ほか, 1979)。これらのうち、調査地域周辺には高位Ⅱ段丘、中位Ⅰ～Ⅲ段丘、低位Ⅰ～Ⅱ段丘、完新世段丘が分布する（第６図, 第１表)。

高位Ⅱ段丘は地域南端の車田東方の丘陵頂に分布する。段丘面の高度は標高約70ｍであり、本地域最高位の面である。段丘面は開析されているものの平坦面の保存は良好である。段丘面の配置から判断して、この段丘は雄物川の河岸段丘であると考えられる。堆積物は地域内では露出に恵まれず確認できなかったが、本地域西方の餅ヶ沢付近では、この段丘は約３ｍの層厚




第7図　館野付近の中位Ⅱ段丘堆積物柱状図

の段丘堆積物を伴う。下部は大礫を含む淘汰不良の礫層、上部は葉理の発達した砂層からなる。この段丘はNAKATA（1976）の椿台Ⅱ面に相当する。

中位Ⅰ段丘は、本地域北東端の荒川と船岡川の合流点付近に分布する。高位段丘とは明瞭な高度差をもって低位側に配置している。この段丘は荒川、船岡川にそって上流へと広く分布している（臼田ほか，1979）。本地域における段丘面の高度はおよそ標高80 mである。段丘堆積物は層厚7 mの小～中礫からなり、礫はクサリ礫化している。この段丘はNAKATA（1976）の椿台Ⅲ面に相当する。中位Ⅱ段丘は、館野および西周辺に分布する。館野における本段丘面上に今回調査した3遺跡が位置している。段丘面の高度は館野において標高50 m前後、西周辺で40 m前後である。平坦面の保存は良好である。最大層厚10 mの段丘堆積物を伴う。主として淘汰不良の礫層からなり、しばしば泥層を挟んでいる。西における淀川左岸の本段丘堆積物は、基底部に3 mほどの厚い粘土質泥炭層を含んでいる。この段丘はNAKATA（1976）の上の台面に相当する。

中位Ⅲ段丘は、上記中位Ⅱ段丘の低位側につき、坊台東方、西周辺に分布する。面の高度は坊台東方で標高40 m前後、西周辺で30 m前後である。西付近の本段丘は斜交葉理の発達した中礫を主とする堆積物を伴う。層厚は5 mである。この段丘はNAKATA（1976）の相川野面に相当する。

低位段丘Ⅰ～Ⅱは、相伴って白岩より上流の淀川水系全流域に連続的に分布する。ただし縦断面勾配が大きく、高位の低位段丘Ⅰは白岩付近で、そして低位側の低位段丘Ⅱは坊台東方で沖積平野面と交差し、それより下流側には分布しない。おそらくそれぞれの地点で平野面下に埋没しているものと考えられる。両段面とも層厚2～3 mの中礫を主とする薄い堆積物を伴っている。これらの低位段丘群はNAKATA（1976）の赤平面に相当する。

完新世段丘は本地域最低位の段丘である。この段丘は淀川流域には存在せず、本地域南端小種付近の雄物川の流域にのみ分布する。段丘面の高度は標高15 m前後である。段丘堆積物は確認していない。

以上の諸段丘は段丘面の特徴、段丘面の高度、配置、段丘堆積物の特徴等にもとずいて中位段丘群が約12万年前頃の最終間氷期に、そして低位段丘群が最終氷期に対比されている（NAKATA, 1976；臼田ほか, 1979）。

## 3　館野付近における中位Ⅱ段丘

これまでの研究（NAKATA, 1976; 臼田ほか, 1979）において淀川流域における中位Ⅱ段丘は単一の段丘面であると考えられていた。しかし今回の遺跡発掘によって、館野における本段丘面は約4mほどの軽微な比高をもって2段に段化していることが判明した。高位の面は北方の丘陵側に、そして低位の面は河岸平野側に配置し、上ノ山Ⅱ遺跡の主部は高位側の面上に位置している。このような段化現象は他の中位Ⅱ段丘分布地では見られない。

第7図は館野付近における中位Ⅱ段丘堆積物の主な露頭の柱状図である。柱状図作成地点は第6図に示した。地点1の柱状図は高位側の段丘の堆積物であり、他は低位側の段丘堆積物である。高位側の段丘堆積物は層厚およそ6mの礫層とその上位に重なる層厚4mのシルト層からなる。このシルト層の最上部1mは土壌化している。一方、低位側の段丘堆積物は5～7mの層厚を有する。下部に厚い礫層が存在することは上位側のものと同じであるが厚いシルト層を欠き、かわって葉理の発達した砂の薄層が重なっている。

このような堆積物の関係は、両面間の比高が4mであることから、中位Ⅱ段丘の離水時の局所的な下刻によって生じたことであると解釈される。すなわち、初成的な中位Ⅱ段丘が離水する過程で下刻作用が進行して末端部をわずかに削り込み、厚いシルト層を削剝するとともにそこに新たに葉理の発達した薄い砂層を残したのであろうと考えられる。この考えによれば、低位側の段丘は中位Ⅱ段丘のフイルストラス段丘（fill strath terrace）であることになる。

NAKATA, T.（1976） Quaternary Tectonic Movements in Central Tohoku. Sci. Rep. Tohoku Univ.（7 th ser.）, 26, 213－239.

大沢　穠（1980） 20万分の1地質図，秋田および男鹿．地質調査所.

TUCHI, R.（1984） Neogene Biostratrgraphy and Chronology of Japan. IKEBE, N. and TUCHI, R. ed., Pacific Neogene datum Planes. 223－233.

臼田雅郎・村山　進・白石建雄・高安泰助・乗富一雄（1979） 秋田県総合地質図幅 「刈和野」. 秋田県.

# 第３章　歴史的環境

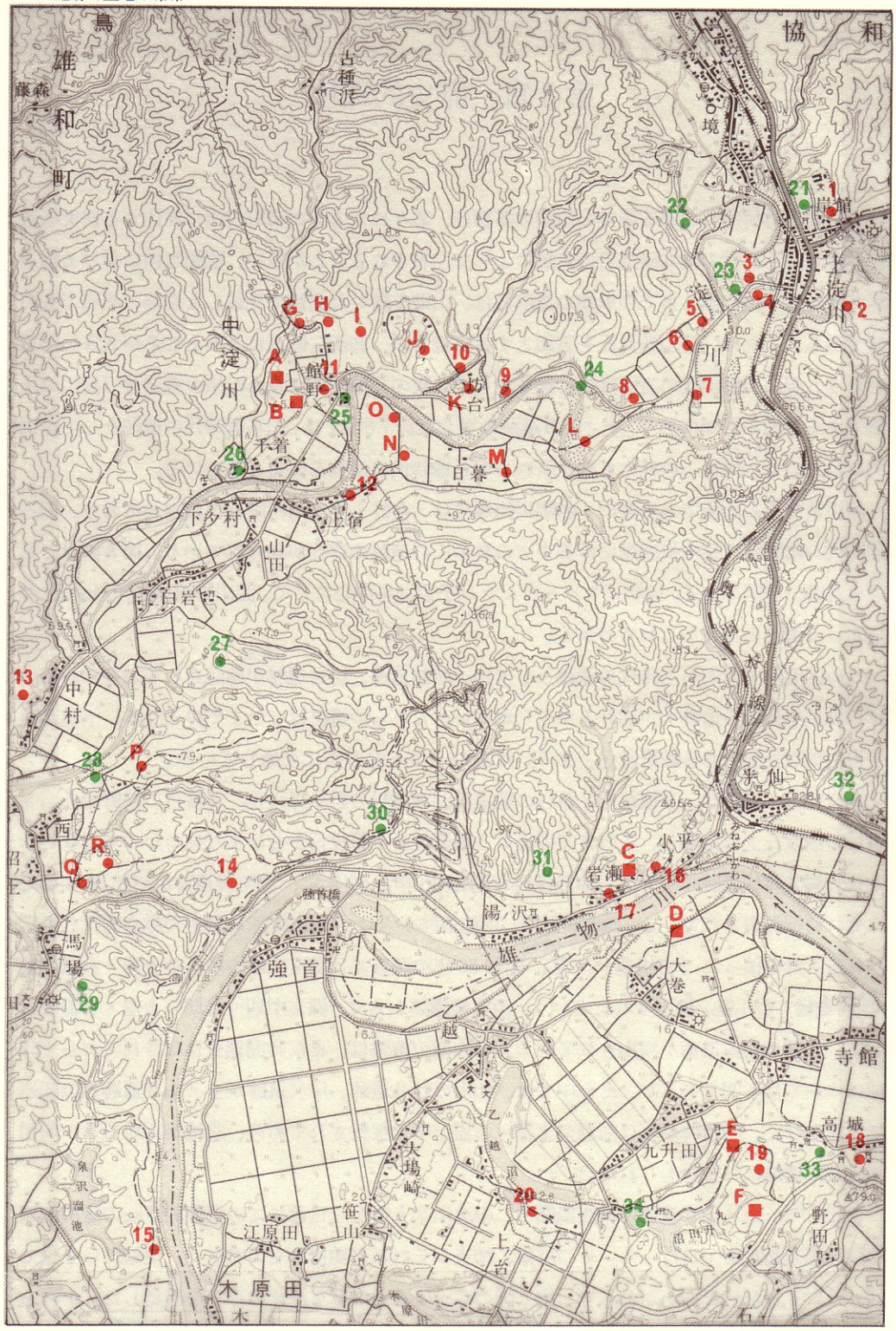
１つの市町村内における周知の遺跡の多寡は、応々にしてその市町村内に在住する研究者数の多寡よりも、精力的な研究者の有無によって左右されることが多い。協和町内における旧石器時代から中世に至るまでの周知の遺跡数は、山地を除いた面積で比較した場合、県内でも有数である。これは、長山幹丸氏を筆頭とする研究者の、細密な踏査によるところが大きいと思われる。現に、長山氏の表面採集に端を発して３次の発掘調査に及んだ米ケ森遺跡（淀川の上流である荒川の右岸にあり、上ノ山Ⅱ遺跡の東北東約7.5㎞）は、旧石器時代の遺跡として全国的に名高いし(註１)、氏はこの他にも数ケ所から旧石器時代の遺物を採集されている。

淀川及びその上流である荒川・船岡川流域には、合計７面の河岸段丘が発達しており、旧石器時代の遺跡からま中世城館に至るまでの数多くの遺跡の存在が知られている。第８図は、周辺の遺跡分布図である(註２)。協和インターチェンジ予定地を中心にして、淀川の流域約10㎞の区間における遺跡の分布がこれでわかる。

この区間内での旧石器時代の遺跡としては、岸館遺跡、坊台遺跡(註３)が確認されており、あるいはこれに未命名の遺跡Ⅰ(註４)が加わるかもしれない。これらの遺跡はこれまでのところ、下位から４番目の段丘面である館野段丘、あるいはその一つ上位の面に立地している。

縄文時代の遺跡は、下位から２番目の境段丘、３番目の君ケ野段丘、４番目の館野段丘、５番目の西段丘上に立地し、これまでのところ最低位の千着段丘からはまだ見つかっていない。これら縄文時代遺跡の中では、岸館遺跡が昭和26年と50年に、西町後遺跡が昭和30年にそれぞれ発掘調査されている。調査の結果、岸館遺跡からは、昭和26年の調査で鎌倉時代と推定される人骨を伴った「古墳墓」１基(註５)、昭和50年の調査では縄文中期の多量の土器・石器の他「組石遺構」が１基、検出されたという(註６)。西町後遺跡からは、縄文中期～後期の土器・石器とともに、３基の石組遺構が検出されている(註７)。その他の遺跡は、まだ発掘調査はなされておらず詳細については不明であるが、その中では、和田の台Ⅱ遺跡、川又遺跡が上ノ山Ⅱ遺跡との関連で注意をひく。両遺跡からは前期の土器・石器が多く採集されており、立地からすると、前期の広大な遺跡になるかもしれない。

ところで、上ノ山Ⅱ遺跡の調査期間中、中淀川字上宿から日暮までの区間約３㎞の淀川流域の段丘面の踏査を１日行った。その結果、踏査がそれほど綿密なものでなく、畑地だけを見て回ったにすぎないにもかかわらず、第８図のG～Oまでの計９遺跡の存在を確認した。それらの遺跡の時期は、Ⅰを除いて全て縄文時代前期以降と見られる。この踏査区間における淀川流




1：50,000

1000 m　0　1000　2000　3000

第８図　東北横断自動車道秋田線関係遺跡と周辺の遺跡

## 第２表　東北横断自動車道秋田線関係遺跡と周辺の遺跡一覧表

| 図中の番号・記号 | 遺跡名 | 時代 | 時期 | 図中の番号・記号 | 遺跡名 | 時代 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 岸館 | 旧石器・縄文・中世 | 縄文中期 | 27 | 石神館 | 中世 | |
| 2 | 鷺ノ巣 | 縄文 | | 28 | 西台館 | 中世 | |
| 3 | 中島 | 縄文 | 後期 | 29 | 馬場城 | 中世 | |
| 4 | 西町後 | 縄文 | 中～晩期 | 30 | 白岩城 | 中世 | |
| 5 | 和田の台Ａ | 縄文 | 中期 | 31 | 湯ノ沢城 | 中世 | |
| 6 | 和田の台Ｂ | 縄文・平安 | 縄文前～中期 | 32 | 馬館 | 中世 | |
| 7 | 川又 | 縄文 | 前～後期 | 33 | 高城 | 中世 | |
| 8 | 和田の台Ｃ | 縄文 | 後期 | 34 | 称宣館 | 中世 | |
| 9 | 五百刈田 | 縄文 | | Ａ | 上ノ山Ⅱ | 縄文 | 前期 |
| 10 | 坊台 | 旧石器・縄文 | 縄文晩期 | Ｂ | 上ノ山Ⅰ | 縄文 | 前～晩期 |
| 11 | 館野 | 縄文 | | Ｃ | 半仙 | 縄文 | 前期 |
| 12 | 日暮 | 縄文 | 晩期 | Ｄ | 大巻野 | 縄文 | |
| 13 | 中村 | 縄文 | | Ｅ | 寺沢 | 縄文 | |
| 14 | 小俤 | 縄文 | | Ｆ | 上野台Ⅱ | 縄文 | |
| 15 | 太平山 | 縄文 | | Ｇ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 16 | 小平 | 縄文 | | Ｈ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 17 | 岩瀬 | 縄文 | 後～晩期 | Ｉ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 18 | 高城 | 縄文 | 晩期 | Ｊ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 19 | 上野山Ⅰ | 旧石器・縄文 | 縄文中～後期 | Ｋ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 20 | 上の台 | 縄文 | | Ｌ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 21 | 岸館城 | 中世 | | Ｍ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 22 | 唐松城 | 中世 | | Ｎ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 23 | 唐松林館 | 中世 | | Ｏ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 24 | 館の沢城 | 中世 | | Ｐ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 25 | 長者森館 | 中世 | | Ｑ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |
| 26 | 上総介館 | 中世 | | Ｒ | 未命名の遺跡 | 縄文 | |

※未命名のうちＩのみは旧石器時代の可能性あり。

域の段丘面は、右岸に中位段丘、左岸に低位段丘が主に分布している。

この地域においても、より綿密な遺跡分布調査が行なわれれば、もっと多くの縄文時代遺跡の存在が明らかになるものと考えられる。

この区間における弥生時代～古代の遺跡は、これまでのところ和田の台Ｂ遺跡において、平安時代と思われる須恵器片が採集されているにすぎない。未発見の該期の遺跡が存在するかもしれない。

本図幅中の淀川流域に所在するいわゆる館跡とよばれている遺跡は９箇所である。それらの館跡は、淀川の形成した河岸段丘端部に立地し、館と館の間隔は１～２㎞である。この９箇所のうち、岸館は発掘調査による人骨の出土などから、鎌倉時代頃の土豪の古墳墓を伴う時期のものと考えられ、上総介館が室町時代の戸沢三十五城の一つとされている他は、中世頃というだけで築城年代・居住者とも不明である。

本８図中での雄物川両岸における縄文時代～中世までの周知の遺跡数は、ほぼ拮抗している。しかしながら、第１章でも述べたとおり、この地区における河岸段丘の発達は、その左岸で著しく、段丘面そのものも右岸に比べてはるかに広い。従って、少なくとも旧石器時代～古代における遺跡は、左岸に多く分布すると予想される。これは、西仙北町強首地区における遺跡分布調査が未だ進んでおらず、遺跡の確認が遅れていることにも起因すると思われる。

註１　協和町教育委員会『米ケ森遺跡発掘調査報告書』1977（昭和52年）

註２　この分布図は、『秋田県遺跡地図』1976（昭和51年）と『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）（ともに秋田県教育委員会）をもとに、昭和60年度の遺跡分布調査（協和町調査委員は伊藤攻・斎藤幸七・進藤太一郎の３氏）結果および、今回の調査結果を加えて作成したものである。

註３　昭和40年頃の開田中に、土地所有者である安田信雄氏が、多数の縄文時代晩期の土器・石器とともに黒曜石製のエンドスクレーパー・頁岩製のブレイドなどを採集していたのを、昭和58年冨樫泰時氏が旧石器として確認した。

註４　剥片のみ10点以上を表面採集したが、土器は１点もなく、剥片の形状・石質などからして旧石器時代の遺跡である可能性が高い。

註５　発掘者は協和町教育委員会と秋田大学。

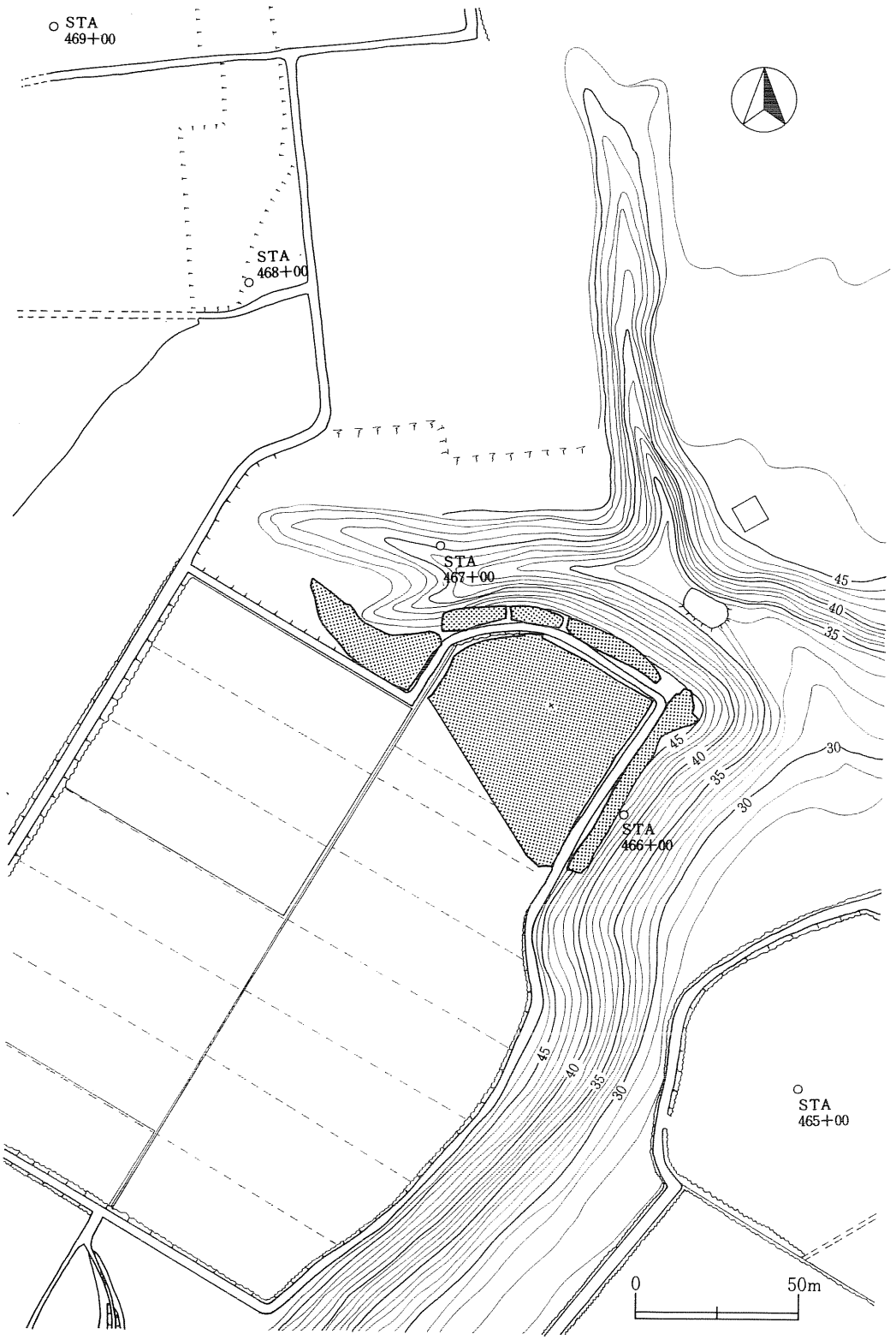
註６　発掘者は武藤鉄城氏と半田市太郎氏。長山幹丸「郷土資料遺物研究」『協和村郷土誌』1968（昭和43年）

註７　武藤鉄城・長山幹丸「西町後石器時代遺跡発掘報告」『協和村郷土史料第４集』1956（昭和31年）

# Ⅲ　上ノ山Ⅰ遺跡

（7UNYⅠ・№29）

所　在　地　秋田県仙北郡協和町中淀川字千着上ノ山64他
調査期間　昭和61年6月17日～9月13日
調査面積　4,100㎡




第１図　遺跡周辺の地形と調査区

# 第1章　調査の概要

## 第1節　遺跡の概観

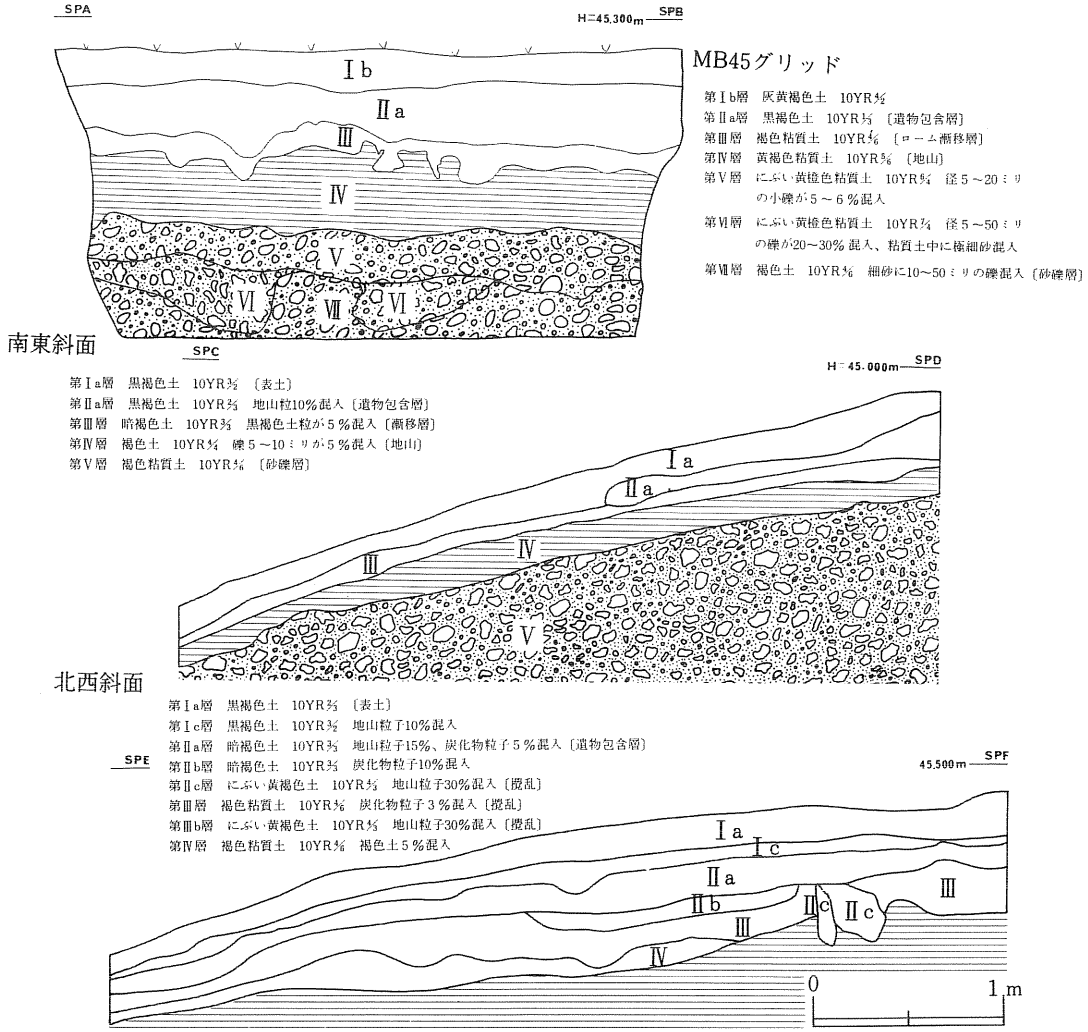
本遺跡は、雄物川の一支流である淀川によって形成された、標高約45ｍの館野段丘上に立地する。その北側には小さな開析谷が形成され、その比高差は約18ｍである。東側は崖で下は沖積地の水田となっておりその比高差は19ｍほどあり、遺跡地は北東側に張り出した舌状台地となっている。上面は原野であったところが昭和45年に水田として平坦に造成され、調査前は休耕田となっており北側と東側斜面には杉が植栽されていた。

遺跡の基本層位（第2図参照）はMB45グリッドの深掘り部分によれば、7層に分けられる。Ⅰb層は水田耕作面にあたる盛土で比較的多くの遺物を含む。本来の表土は、南東斜面や北西斜面に見えるⅠa層である。Ⅱa層は遺物包含層で、Ⅰa層と同様、斜面に見えるが、平坦部では東西45ラインから南側にわずかに残るのみである。Ⅲ層は、褐色土で粘性の大きいローム層である。Ⅴ～Ⅵ層は砂礫混入層である。ロームは粘性が大きく、径5～20㎜の小礫がわずかに混じりⅥ層になると礫の混入度が高くなる。Ⅶ層は細砂に礫が混入する。

検出遺構は、北、東、西の斜面かその肩部、中央部の斜面寄りに分布するが、特に北東から東斜面にかけては遺構が集中し、縄文時代前期・中期の竪穴住居跡やフラスコ状土坑などが多く分布している。中央部は、東西の44ライン付近から南側に遺物包含層が残っていたのみで、北側には存在せず、礫層が一部露出している場所があることから、水田造成時にかなり削平されたものであろう。それはⅠb層とした盛土中に遺物が含まれていた事からも推測できる。44ラインから南側に残っていた遺物包含層においてはSI34、SR33などの遺構の他、その西側に焼土遺構を検出したが遺物の出土はなく、特に焼土遺構周辺にはその傾向が大きかった。

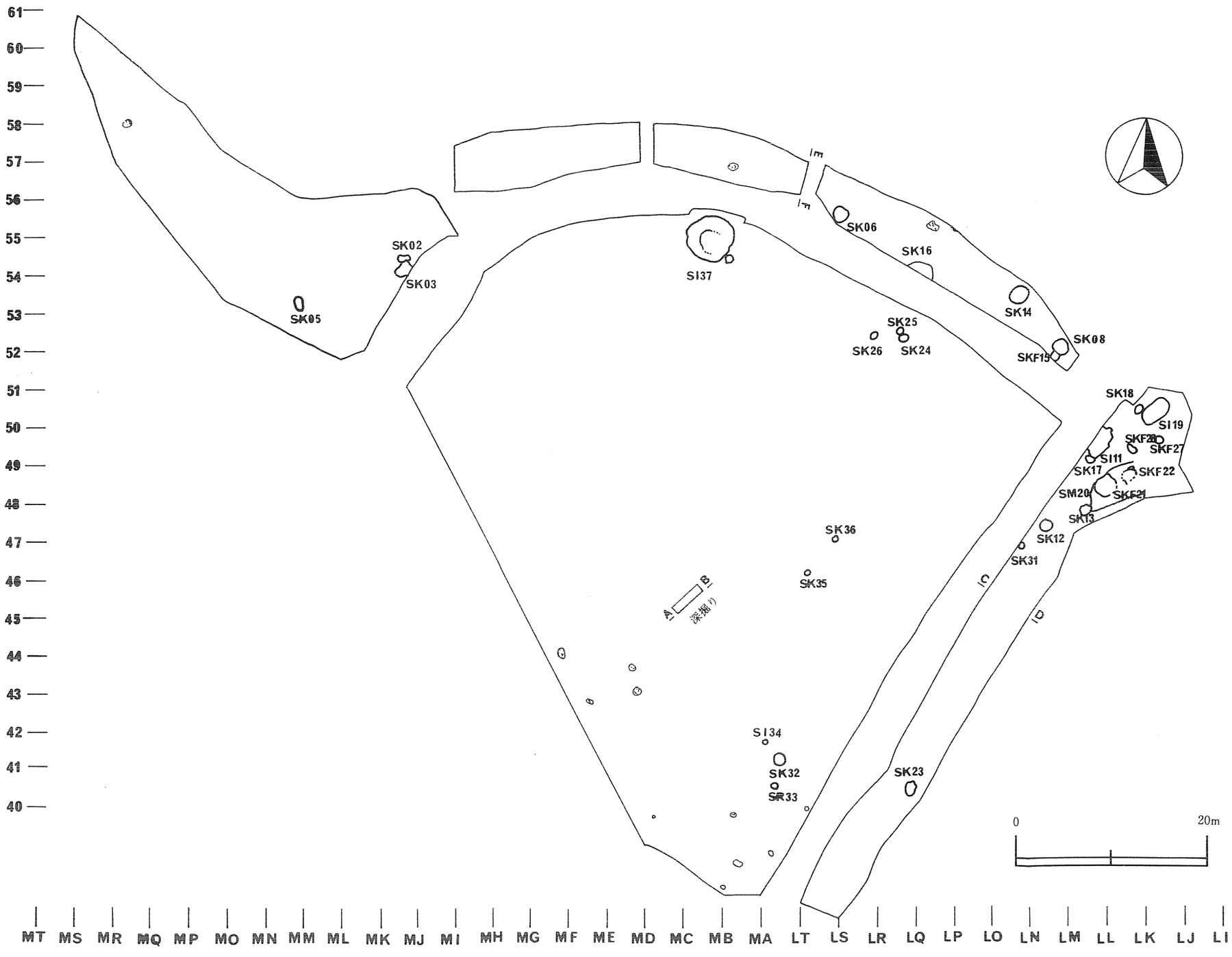
## 第2節　調査の経過

調査は6月17日から9月13日まで行った。最初は北側斜面の粗掘りから入り、20日には東側斜面も併行して調査を開始した。25日には西斜面寄りの農道脇よりSK02・03の土坑を検出。26・27日には重機により休耕田となっていた中央部の表土除去を行った。7月1日、業者委託によるグリッド杭打設作業に入る。3日、中央部の遺構検出作業をし、北西側は盛土である事が判明した。8日、台地下の南側より遠景写真撮影を行う。14日、中央部南西側では、黒




**第2図　基本土層図**

褐色の遺物包含層が残っており、MD 43、MD 44 グリッドで2基の焼土遺構を、25日には、LT 41 グリッドで炉跡1基（SI 24）を、また、LT 40 グリッドでは土器埋設遺構（SR 33）を検出し、周囲の精査を行う。8月2日、好天続きで遺構にひび割れが生じてきたため散水後にシートで覆いをかける。17日、この頃より9月10日まで北東から東斜面の遺構検出・精査を集中的に行い SI 11 ・SI 19 や、その周辺のフラスコ状土坑群などを確認精査した。この後、中央部の遺構精査に移り、北側農道脇の黒褐色の落ち込みが竪穴住居跡（SI 37）であることが判明、12日には SI 34 ・SR 33 などの精査・図面作成を行い、13日に全体写真を撮影し、調査を終了した。


61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
SK02
SK03
SK05
SI37
SK06
SK16
SK14
SK25
SK26
SK24
SK08
SKF19
SK18
SI19
SKF28
SKF27
SI11
SK17
SKF22
SM20
SKF21
SK13
SK12
SK31
SK36
SK35
A
B
深掘り
SI34
SK32
SK33
SK23
0
20m
MT MS MR MQ MP MO MN MM ML MK MJ MI MH MG MF ME MD MC MB MA LT LS LR LQ LP LO LN LM LL LK LJ LI

第3図　遺構配置図

# 第2章　調査の記録

## 第1節　検出遺構と遺物

### 1　竪穴住居跡

SI 19 竪穴住居跡　（第4図）

北東端のLJ 50 グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で検出したが、杉根が多くあり、上面はかなり攪乱されている。したがって、SK 18 と重複しているが、新旧関係は明瞭ではない。平面形は楕円形で、長軸 3.17 m、短軸 2.00 m、深さ 0.83 m、長軸方向は南西→北東で、床面積は 4.1 ㎡である。

埋土は13層に区分した。砂礫層まで掘り込まれているが、各層には礫をほとんど含まない。8・9・10・14～16層には地山の黄褐色粘質土が主体、もしくは大ブロック状に混入し、人為的な堆積状況を呈するもので、総じて比較的良く締まっている。南西壁際には、確認面から0.25 m下に、長さ 0.30 mの礫が2個確認され、その礫から床面までさらに 0.58 mも下がる。したがって上記した層の上面と礫のレベルがほぼ同一であるということ、さらに埋土の状況を勘案すれば、礫のある南西壁寄りを出入口とし、8・9・10・14～16層上面を再度、床面として使用した可能性が考えられる。

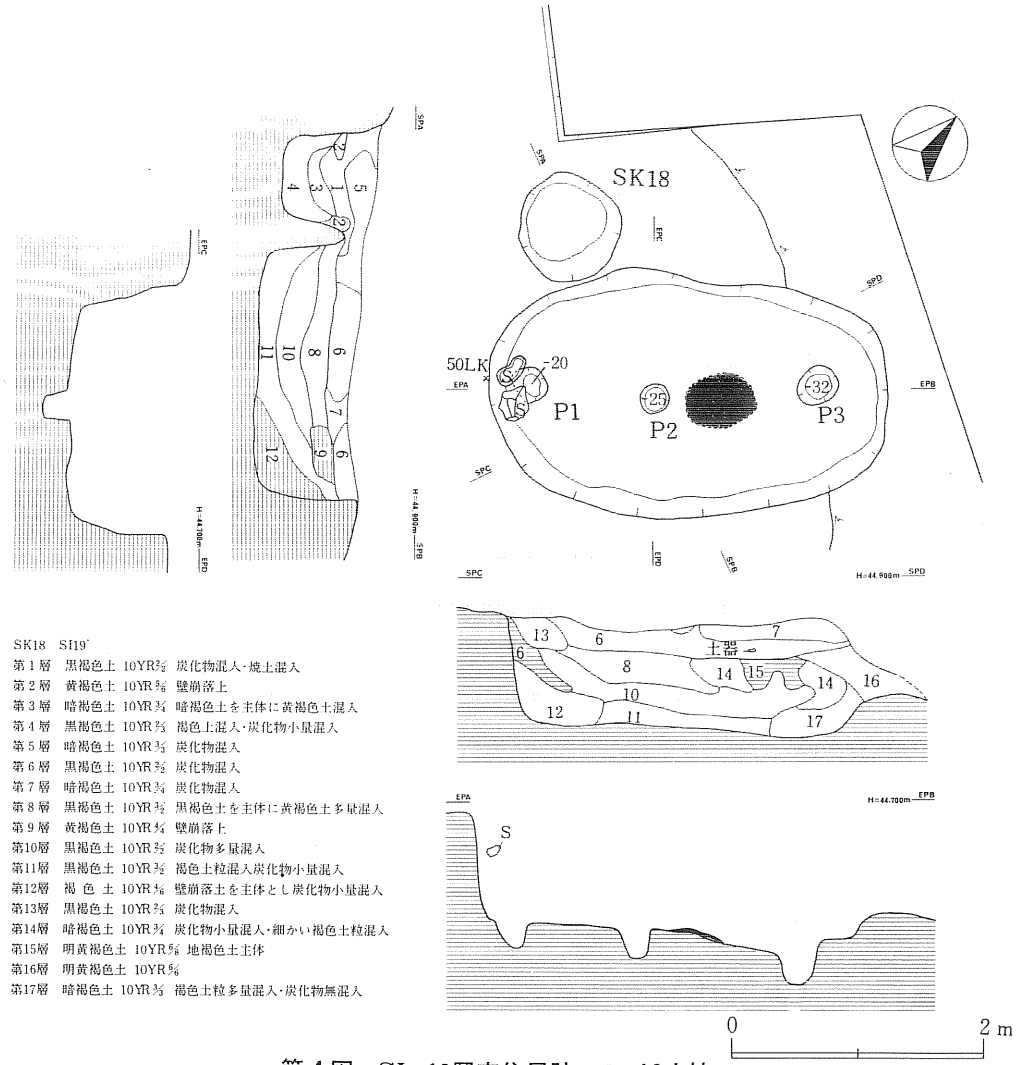
本住居跡は南西から北西に向かって傾斜している斜面の肩部に構築されている。そのため、南西の壁高は 0.83 mと深く、北東では 0.18 mと極めて浅くなる。床面はやや凹凸があるが比較的良く締まっており、柱穴は長軸線に沿って3本配列されているが、壁際や遺構外周辺には検出されなかった。柱穴のP2とP3の間には 0.57 × 0.45 mの範囲に、厚さ 0.03 mの炭化物粒子の層があるが、炉か否か不明である。下に掘り込みは確認されなかった。

出土遺物（第12図1～3・5・8、第14図1～5）

1は深鉢形土器と思われ、単節斜縄文を施すもので、胎土にはわずかに砂粒を含む。2は底部で、胎土・焼成から1と同じ土器であろう。3は口縁部で側面圧痕を5は単節斜縄文に垂下する綾絡文を施すものである。8は単節斜縄文を施文後、細い粘土紐を貼付するものである。1～3・5は確認面から、8は埋土の5層から出土した。これらの出土土器の時期は縄文時代中期前葉から中葉に比定される。第14図1は石匙、2は篦状石器で表裏ともかなり剝離面が磨滅して光沢がある。3・4は削器で、5は擦石で全面に擦った痕跡が見られる。

本遺構のあった場所には多くの杉根があり、確認面および埋土上面はかなりの攪乱が見られ

た。したがってこの竪穴住居跡から出土した土器は遺構外からの流れこみと考えられる。竪穴住居跡の形態・規模からすれば本遺構が構築された時期は縄文時代前期と考えられる。



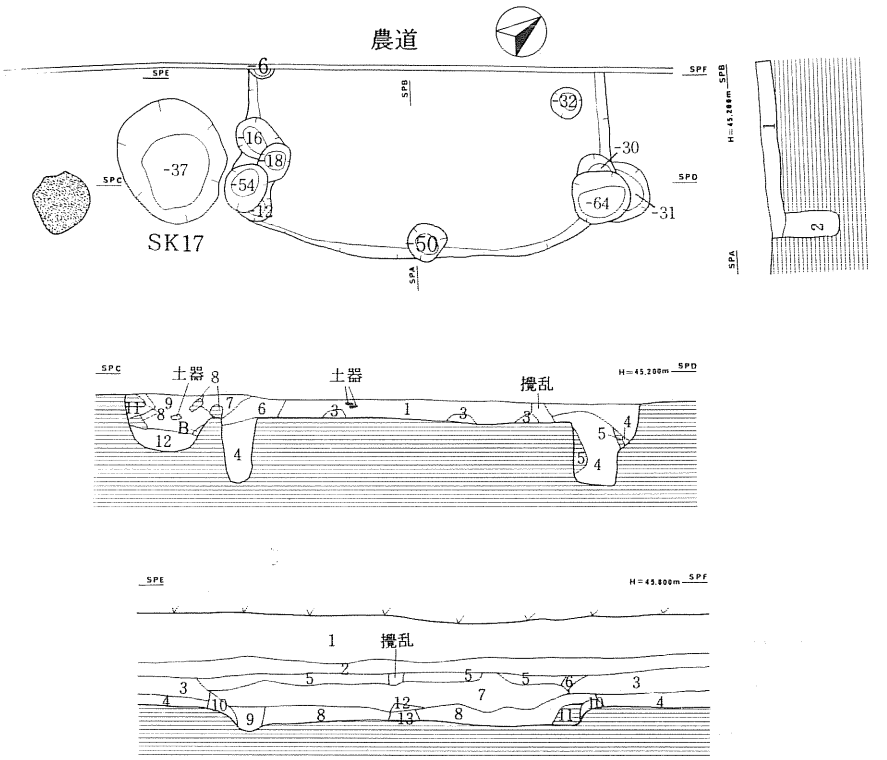

SK18　SI19
第１層　黒褐色土 10YR2/2　炭化物混入・焼土混入
第２層　黄褐色土 10YR5/6　壁崩落土
第３層　暗褐色土 10YR3/4　暗褐色土を主体に黄褐色土混入
第４層　黒褐色土 10YR2/3　褐色土混入・炭化物小量混入
第５層　暗褐色土 10YR3/3　炭化物混入
第６層　黒褐色土 10YR2/2　炭化物混入
第７層　暗褐色土 10YR3/4　炭化物混入
第８層　黒褐色土 10YR2/2　黒褐色土を主体に黄褐色土多量混入
第９層　黄褐色土 10YR5/4　壁崩落土
第10層　黒褐色土 10YR2/2　炭化物多量混入
第11層　黒褐色土 10YR2/2　褐色土粒混入炭化物小量混入
第12層　褐 色 土 10YR4/6　壁崩落土を主体とし炭化物小量混入
第13層　黒褐色土 10YR2/3　炭化物混入
第14層　暗褐色土 10YR3/4　炭化物小量混入・細かい褐色土粒混入
第15層　明黄褐色土 10YR6/6　地褐色土主体
第16層　明黄褐色土 10YR6/6
第17層　暗褐色土 10YR3/3　褐色土粒多量混入・炭化物無混入

第４図　SI　19竪穴住居跡・SK18土坑

### SI 11 竪穴住居跡　　（第５図）

北東端寄りのLL 49 ・ 50、LM 49 ・ 50 グリッドで検出した。SK 17 と重複しており本遺構が古い。約半分が農道の下にあり全容は不明であるが、南北の長さは 3.02 m、推定面積は 6.1 ㎡である。

埋土は 13 層に区分した。SP・E～F の土層断面図中の 5 層からが本遺構の埋土で、自然堆積土である。ほぼ中ほどにある 12 ・ 13 層には焼土・炭化物粒子が比較的多く混入しており、この付近に炉の存在する可能性がある。壁高は北壁が 0.09 m、南壁 0.07 m で床面は平坦で堅く締




SK17.SI11　SP.C～D
第１層　褐 色 土　10YR4/4　黄褐色土＋黒褐色土粒、炭化物混入
第２層　暗 色 土　10YR3/4　炭化物多量に混入
第３層　黄褐色土　10YR3/4　炭化物小量に混入
第４層　暗褐色土　10YR3/4　第２層と同質土
第５層　暗 色 土　10YR3/4　壁崩落土
第６層　暗褐色土　10YR3/3　黄褐色土粒全体に混入、炭化物小量混入
第７層　黒褐色土　10YR3/2　炭化物・焼土混入
第８層　黄褐色土　10YR5/6　黄褐色土・黒褐色土粒混入、炭水化物混入
第９層　黒褐色土　10YR3/2　SPA～B第１層と同質土
第10層　黄褐色土　10YR5/6　壁崩落土
第11層　暗褐色土　10YR3/4　第９層に似ているが炭化物･焼土は無混入
第12層　黒褐色土　10YR3/2　SK17、SPA～B第４層と同質土

SI11　SP.E～F
第１層　暗褐色土　10YR3/3　部分的に褐色土大ブロック状に混入
第２層　黒色土　10YR2/1　木根主体層
第３層　黒褐色土　10YR2/3　炭化粒子混入、黄褐色土粒部分的に混入
第４層　暗褐色土　10YR3/3　漸移層、黄褐色土主体に黒色土、炭化物少量混入
第５層　黒褐色土　10YR3/2　炭化物粒混入、褐色土粒散布状に混入
第６層　暗褐色土　10YR3/3　第５層に似てるが炭化物多量に混入
第７層　黒褐色土　10YR3/2　炭化物混入、一部焼土粒混入
第８層　褐色土　10YR4/4　SPC～D第１層と同質土
第９層　暗色土　10YR3/4　SPC～D第４層と同質土
第10層　褐色土　10YR4/6　黒褐色土混入
第11層　褐色土　10YR4/6　壁崩落土、黒褐色土混入
第12層　黒褐色　10YR2/1　第７層に類似、焼土・炭化物多く混入、地床炉の可能性有
第13層　黄褐色土　10YR5/6　第８層に類似、焼土・炭化物多く混入
第７・８・９・10・11・12層が住居跡の堆積土

0　2 m

第５図　SI 11竪穴住居跡・SK17土坑

まっている。柱は各コーナーに主柱穴があり、その間の壁際に副柱穴が１本ずつ配列されるものと推定される。

出土遺物（第12図４・６・７、第14図６）

４は細い隆起線と棒状工具による瓜形文を、７は単節斜縄文を施すものでいずれも胎土は良好である。縄文時代中期中葉に比定される土器である。

SI 37 竪穴住居跡　（第６図）

MA 54 ・ 55、 MB 54 ・ 55 グリッドの第Ⅳ層上面で検出した。 水田造成時に削平されたため、大変浅い。2時期の重複で、小さい住居跡が拡張されたもので SI 37 A（古）→SI 37 B（新）という変遷をたどる。いずれもほぼ円形で炉を有する。以下、SI 37 A・B の順に記述する。

**SI 37A 竪穴住居跡**

規模は直径 3.02 mで、床面積は 5.4 ㎡である。床面は大変堅く、SI 37 B より低く、壁高は 0.05 ～ 0.06 mである。炉は南東寄りにあり、長さ 0.55 m、幅 0.42 mで、0.10 ～ 0.52 mの扁平の河原石を 9 個略方形に並べている。その中に深鉢形土器の口縁部を上にして、斜めに埋設しており胴部上半は欠失している。炉石内側がよく焼けている。炉の南東には長軸 0.90 m、短軸 0.86 m、深さ 0.15 mの擂鉢状の落ち込みがあるが、炉に伴うか否かは明らかではない。炉埋設土器（第 12 図 9 ）は底部から胴部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がる深鉢形土器で、単節の斜縄文を施す。胎土には細砂粒をやや含むが精選され、焼成は良好で、全体が二次的な加熱を受けほぼ全体が赤褐色となっている。底部には網代痕を施す。土器の器形・胎土・焼成から、時期は縄文時代中期末の大木 10 式期に比定される。

**SI 37B 竪穴住居跡**

規模は直径 5.10 mで、床面積は 17.9 ㎡である。壁高は 0.09 ～ 0.15 mで、床の内側は平坦で堅い。柱穴配置は不規則で主柱穴を推定できない。炉は北東にあり、石囲部の外に掘り込みをもつ石組炉である。石囲部は長さ 0.92 m、幅 0.67 mで扁平な河原石を長方形に並べ、石の内側や底面は加熱により赤変している。前庭部は径 0.82 mで、炉全体の長さは 1.92 mである。埋土は土層断面図 SP・A～B によって 4 区分できる。4 層は地山ブロックを含み、堅く締まっており SI 37 A を埋めた土であろう。 4 層の上面には厚さ 0.5 ～ 1 ㎝の硬化した焼土がみられ、平面的には SI 37 B の床面に、SI 37 A の炉や壁を覆いながら部分的に広がる。

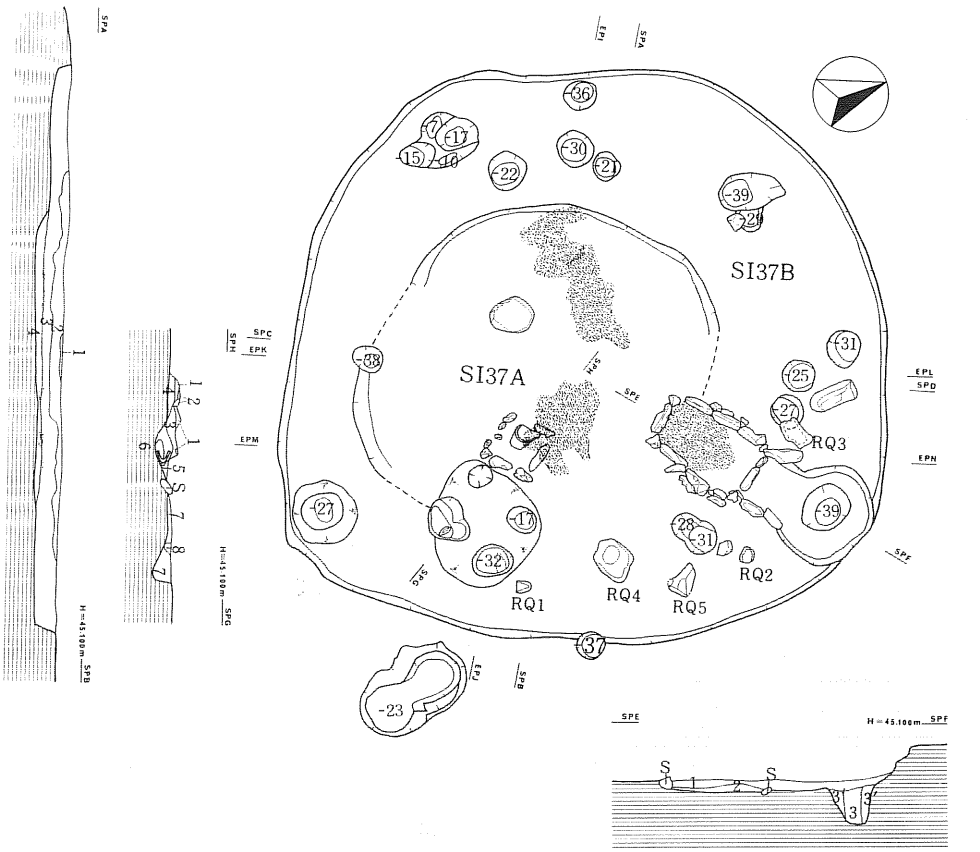
出土遺物（第 15 図 14 ・ 15、第 33 図 95 ～ 97）

床面から凹石 2 点（14 ・ 15）、石皿 3 点（95 ～ 97）が出土している。

他に埋土から、石鏃（第 15 図 7 ）、円形石器（ 8 ～ 10）、石匙（11）、篦状石器（12）、削器（13）が出土している。

**SI 34 竪穴住居跡**　（第 7 図）

南側の LT 42 グリッド周辺の第Ⅱa 層黒褐色土を掘り下げ中に石囲炉を検出した。炉は 6 個の扁平な石をほぼ円形に並べたもので径 0.45 mである。炉内には、土器を内側方向に斜めにして埋設しており、土器口縁部付近の内外面と炉石の間は焼けてやや硬化している。土器を埋設した際の掘り込みは上面で 0.62 m、底面は 0.26 m、深さ 0.30 mで、土器は掘り込みの西壁と底面との間にすき間なく埋設されている。検出面である黒褐色土の周囲には粗製の深鉢形土器が出土しており、炉の周囲を何度か平面的に精査したが、柱穴や壁などは確認できなかった。し




SI137　SP·A～B, C～D
第1層　黒褐色土 7.5YR3/2 攪乱土
第2層　黒 色 土 10YR2/1 炭化物、焼土粒を含まない
第3層　暗褐色土 10YR3/4～3/3～ 黒褐色土 10YR 3/2 炭化物、焼土粒混入
第4層　にぶい黄褐色土 10YR4/3～ 暗褐色土 10YR3/4 炭化物、焼土粒混入
第5層　明褐色土 7.5YR5/6 地山土が主体
第6層　明褐色土 7.5YR5/6 暗褐色土　10YR3/4 混入
第7層　暗褐色土 7.5YR3/4 地山土、砂利 少量混入

SI37B　炉断面図　SPG～H
第1層　橙 色 土 5YR6/6～ にぶい赤褐色(5YR 5/4)、焼土、地山土
第2層　黒褐色土 7.5YR3/2 焼土
第3層　暗褐色土 7.5YR3/4 焼土粒、炭化物混入
第4層　明褐色土 7.5YR5/6 地山土(明黄褐色土10YR7/6)混入
第5層　にぶい黄褐色土 10YR5/4 炭化物混入
第6層　黒褐色土 10YR3/2 炭混入 SI37-B 埋設土器の中の土
第7層　褐 色 土 10YR4/6 明黄褐色土(10YR7/6)の粒子混入

SI37A　炉　SP·E～F
第1層　褐色土 7.5YR4/4 小量炭化作混入、住居跡埋土の主体土
第2層　黒褐土 7.5YR2/1 炭化物、焼土粒混入
第3層　褐色土 7.5YR4/4 橙色粘質土粒(7.5YR7/6)混入、柱跡
第3'層　褐色土 7.5YR4/4 第3層より硬くしめられている

0　2 m

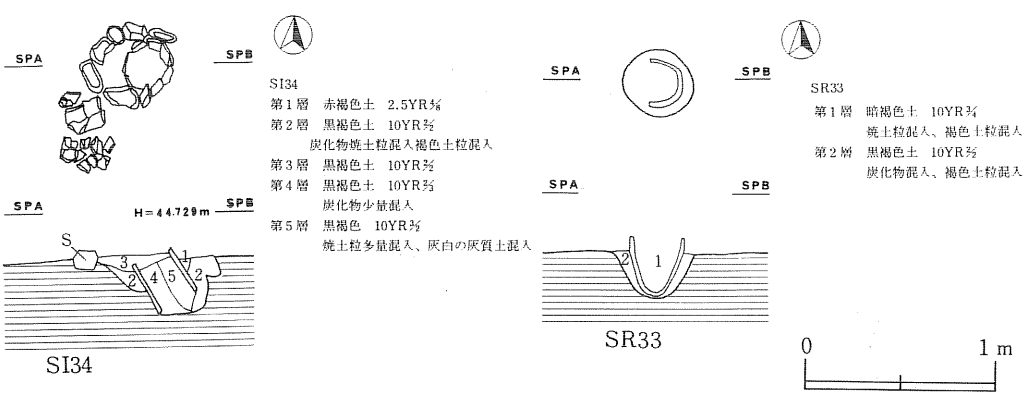
第6図　SI 37A・B竪穴住居跡

かし、炉内のみならずその周囲に炭化物粒子が多くみられ、深鉢形の粗製土器が少なからず出土したことなど、周囲の状況や床面と柱穴が黒褐色土中に構築された可能性もあることを勘案して、竪穴住居跡として把らえておきたい。炉埋設土器（第12図10）は、底部を欠く深鉢形土器で、器表面には複節斜縄文を施文後、口縁部に平行な一条の沈線を引き、口縁部との間を磨消しているものである。胎土にわずかに砂粒を含むが、焼成良好で硬質である。縄文時代中期末の大木10式期に比定される土器である。

## 2　土器埋設遺構

### SR33 土器埋設遺構　（第7図）

南側のLTグリッド第Ⅱa層上面で検出した。土器を埋設した際の掘り込みは、上面で0.43m、底面で0.18m、深さは確認面から0.26mである。土器は掘り込みのほぼ中央に成立状態で埋設されており、器高は32cmで全面に単節斜縄文を施す粗製の深鉢形土器である。




**第7図　SI 34竪穴住居跡・SR33土器埋設遺構**

## 3　土坑

土坑は25基検出した。これらの土坑を平面形・断面形・規模からa～hに分けた。

**土坑a**　平面形は円形か楕円形、もしくはそれに近いもので、断面形はフラスコ状もしくは円筒形を呈する。

### SKF15　（第8図）

北東斜面寄りのLM51グリッドに位置している。SK08と重複しており、本遺構が新しい。平面形は円形で、断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径0.9m、底面径1.07mで、深さ0.85mで礫層まで掘り込まれている。遺物は出土しなかった。

SKF21　（第9図）

北東斜面肩部のLL 48グリッドに位置し、SKF 22と隣接している。北東部は現代の炭焼窯資材の運搬に使われていた道路（SM 20）によって崩されているが、ほぼ円形で開口部径2.02 m、底面径1.42 m、深さ0.85 mで礫層まで掘り込まれている。断面形はフラスコ状を呈し、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

SKF22　（第9図）

北東斜面肩部のLK 48グリッドに位置し、SKF 21に隣接している。北東部はSM 20によって崩されているが不整円形で、開口部径1.26 m、底面径1.07 m、深さ1.13 mで、礫層まで掘り込まれている。断面形はフラスコ状を呈し、底面は平坦である。埋土には地山が多く混入し、人為的な堆積状況を呈する。遺物は出土しなかった。

SKF23　（第8図、第13図22）

南東斜面肩部のLQ 40グリッドに位置している。楕円形で、長軸1.40 m、短軸1.09 m、深さ1.04 mで礫層まで掘り込まれている。断面形はフラスコ状を呈し、底面は礫でデコボコしている。埋土6層・9層には地山・礫が多く混入し、人為的堆積状況を示す。埋土から縄文時代前期中葉かと思われる撚糸文を施した土器（22）が1点出土している。胎土は精選され軽い。

SKF27　（第8図、第16図18）

北東斜面寄りのLJ 49グリッドに位置している。円形で開口部1.20 m、底面1.00 m、深さ0.90 mで、礫層まで掘り込まれている。断面形は円筒形に近いが、埋土の4層は壁崩落土と思われる黄褐色土で、本来はフラスコ状を呈していたものであろう。遺物は半円状扁平打製石器（18）が1点出土している。

SKF28　（第8図、第33図98）

北東斜面寄りのLK 49グリッドに位置している。楕円形で、開口部の長軸1.12 m、底面の長軸1.02 m、深さ0.88 mで、礫層まで掘り込まれている。断面形はフラスコ状で、埋土の4層は壁崩落土で、1層には地山ブロックが多く混じる。遺物は6層より縁をもつ石皿（98）が出土している。

**土坑b**　平面形は円形か楕円形で、断面形は袋状を呈し土坑aに比較してやや規模が小さい。

SK17　（第5図、第13図14～21）

北東端のLL 49グリッドで検出した。SI 11と重複しており、本遺構が新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸1.02 m、短軸0.86 m、深さ0.45 mである。埋土は8層と10層が黄褐色土ブロックの壁崩落土で、自然堆積であろう。遺物は埋土上面から土器が出土している。14は粗製の鉢形土器で、19はやや器厚があり、胎土に砂粒を含み口縁部のやや下に粘土紐を貼付してい

る。縄文時代中期に比定される土器であろう。

SK18　（第4図）

北東のLK 50グリッドで検出した。SI 19と重複しているが、埋土上部は杉根による攪乱が著しく、新旧関係は不明である。平面形は円形で、規模は径0.87 m、深さ0.75 mである。埋土は2層が黄褐色土ブロック壁崩落土で、4層には炭化物粒子が含まれる。自然堆積であろう。出土遺物はない。

**土坑c**　平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。

SK14　（第10図）

北のLN 53グリッドで検出した。断面形は浅い皿状を呈し、その規模は長軸2.23 m、短軸1.73 m、深さ0.33 mである。1・2層とも南から流れ込んだ軟かい褐色土粒子が混入しており、2層には炭化物粒子も混入している。埋土の堆積状況から自然堆積と思われる。出土遺物はない。

SK32　（第10図、第13図23）

LT 41グリッドに第Ⅱ層で検出した。その規模は長軸1.30 m、短軸1.17 m、深さ0.47 mである。埋土は1～3層に炭化物粒子、4層には褐色粒子が混入し、5層は地山の黄褐色土が主体をなしており、人為的に埋められたものと判断される。出土遺物は23の1点のみである。細い粘土紐を貼付し、浅い沈線を施すもので、縄文時代中期後葉の土器である。

**土坑d**　2段構造をもつものである。

SK08　（第8図、第13図12）

北東斜面寄りのLM 51グリッドの第Ⅲ層上面で検出した。SKF 15と重複しており、本遺構が古い。2段構造をしており、いずれも平面形は楕円形で、断面形は上部が皿状、下部が袋状を呈する。規模は上部が長軸1.82 m、短軸1.61 m、深さ0.49 mで、下部が長軸1.05 m、短軸0.95 m、深さ0.56 mで、底部に径0.38 m、深さ0.08 mのピット1個を検出した。埋土の観察によれば同一時期の所産で1～4層に地山粒子が混入しており、レンズ状の堆積を示す。遺物は12の深鉢形土器が確認面から出土した。外面は羽状縄文を、口唇部に縄文の側面圧痕を施すもので、胎土は精選されている。縄文時代前期中葉の土器と思われる。

**土坑e**　平面形は不整楕円形で、断面形は皿状か、それに近い形状を呈する。

SK02　（第10図）

MJ 54グリッドに位置し、SK 03に隣接している。平面形は不整楕円形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.24 m、短軸0.87 m、深さ0.18 mである。底面には根による攪乱と思われる落ち込みが2カ所にみられる。埋土の5・6層には地山がブロック状に混入している。遺物は出土しなかった。

SK03　（第10図、第13図11）

MJ 54 グリッドに位置している。平面形は不整楕円形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸 1.77 m、短軸 1.25 m、深さ 0.22 mである。11 は地文が縄文でその上に細い粘土紐を貼付した小型の鉢形土器で、縄文時代中期中葉の土器と思われる。

SK05　（第10図）

MM 53 グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸 1.53 m、短軸 0.92 m、深さ 0.27 mで、底面にはやや凹凸がある。出土遺物はない。

SK16　（第10図、第13図13）

LP 53・54 グリッドに位置し、約1／3が農道の下になっているため未掘である。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は深い皿状を呈するものと思われる。規模は短軸 2.32 m、深さ 0.85 mで、長軸は調査部分で 2.15 mを計る。底面は礫層まで掘りこまれており、凹凸がある。埋土には地山土が多く、それが主体をなしている層、ブロック状や斑状に混入している層などがあり、人為的に埋められたものと思われる。 13 は撚糸文を施した深鉢形土器である。 胎土は精選され、軽く焼成も良好である。縄文時代前期後葉の土器と思われる。

**土坑 f**　平面形が円形で、断面形は浅い皿状を呈するものである。

SK24　（第11図）

LQ 52 グリッドに位置し、SK 25・26 と隣接している。規模は直径 0.96 m、深さ 0.14 mで、底面は平坦でよく締まっている。出土遺物はない。

**土坑 g**　平面形が円形で、断面形が鍋底形を呈するもので、いずれも配石をもつものである。

SK25　（第11図）

LQ 52 グリッドに位置する。規模は直径 0.80 m、深さ 0.23 mで、長さ 0.23 ～ 0.33 mの石 4 個を配している。埋土は 2 層のように地山土が主体をなすものもあり、全体的に地山土の混入が多く、粘性もある。人為的堆積かと思われる。出土遺物はない。

SK26　（第11図）

LR 52 グリッドに位置する。直径 0.66 m、深さ 0.23 mで、中に長さ 0.20 ～ 0.32 mの石 4 個を配している。埋土は 1・6 層を除きいずれも地山土が混入しており、人為的堆積状況を呈する。出土遺物はない。

SK35　（第11図）

調査区中央部の LS 47 グリッドに位置し、SK 36 と隣接している。規模は直径 0.64 m、深さ 0.20 mで、中に長さ 0.15 ～ 0.23 mの石 4 個を配している。出土遺物はない。

SK36　（第11図）

調査区中央部の LS 46 グリッドに位置している。規模は直径 0.57 m、深さ 0.18 mで、中に長

さ 0.12～0.22 mの石 4 個を配している。埋土には暗褐色土や炭化物が混入している。出土遺物はない。

**土坑 h**　平面形が円形か楕円形で、断面形が皿形を呈するものである。

**SK06**　（第 11 図）

LR 55 グリッドに位置している。平面形は楕円形で、規模は長軸 1.72 m、短軸 1.53 m、深さ 0.38 mである。埋土は 2・3 層に地山粒子、4 層は炭化物粒子が多く混入し、5 層は粘性や締まりのない炭化物層となっている。出土遺物はない。

**SK12**　（第 11 図）

LM 47 グリッドに位置し、SK 13 や SK 31 と隣接している。平面形は楕円形で、規模は長軸 1.38 m、短軸 1.25 m、深さ 0.33 mである。底面から北側にかけては加熱を受けて赤変している。埋土は全体に黒色土が多く混入し、本遺構の確認は容易であった。特に 5 層は炭化物かと思われる黒色粒子が多く混入している。出土遺物はない。

**SK13**　（第 9・11 図）

LL 48 グリッドに位置し、SKF 21・SK 12 と隣接している。平面形は楕円形で、規模は長軸 1.48 m、短軸 1.23 m、深さ 0.30 mである。埋土は 1 層が黒色土、2 層が暗褐色土で、特に 1 層に炭化物粒子が多く混入し、坑底面にその傾向が著しい。出土遺物はない。

**SK31**　（第 11 図）

LN 47 グリッドに位置し、SK 12 と隣接している。平面形は円形で、規模は直径 0.70 m、深さ 0.18 mである。埋土は 2 層だけで、いずれも炭化物粒子を含み、特に 1 層にはその細粒が多量に混入している。出土遺物はない。

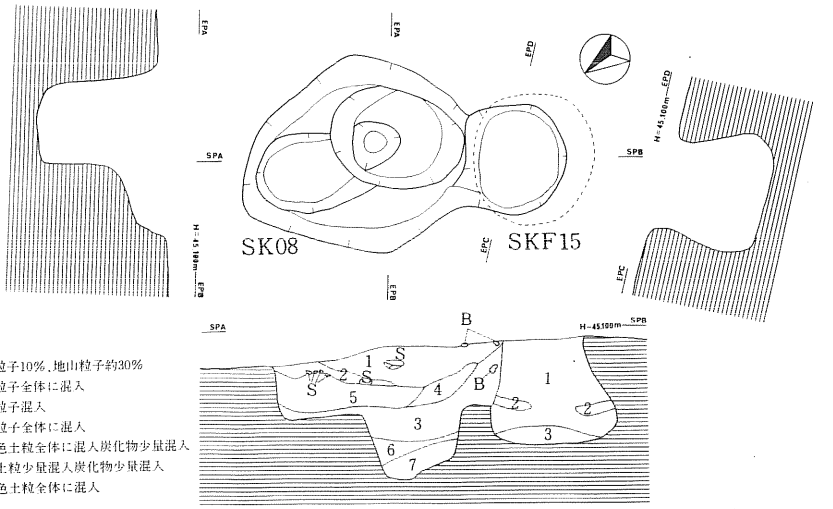
## 4　焼土遺構　（第 3 図）

検出した焼土遺構は13基である。西側に 1 期、北端に 2 基あるが、その他は調査区の南側に集中しており、他の遺構は周辺に見られない。焼土遺構の平面形は略円形か略楕円形で、長さ 0.02 m～1.70 mで、焼土は薄く、その下に遺構は検出されなかった。出土遺物はなかったが全体の遺構や遺物の出土状況から勘案すれば、縄文時代の所産であろう。

## 5　道路状遺構

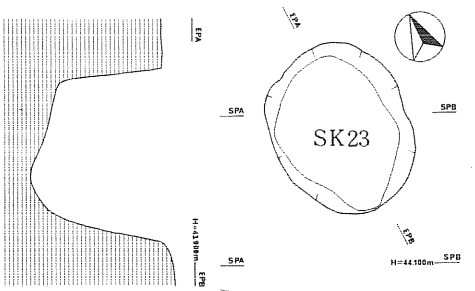
**SM20**　（第 9 図）

北東端にあり、北斜面に向かって作られている。SKF 21・22 と重複しており、両遺構の東半分を削っている。路線外の約 15 mほど下の斜面には現代の炭焼窯跡が 1 基あり、おそらくはその作業道として使われたものであろう。

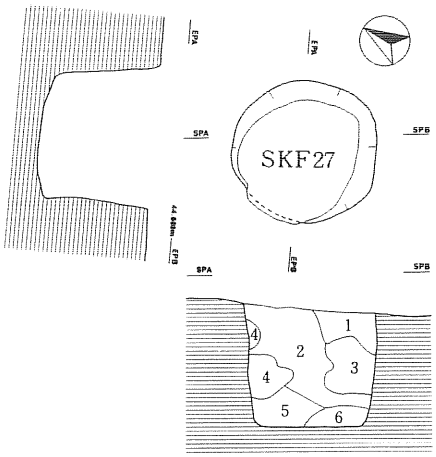



SK 23
第１層　暗褐色土 10YR3/3 炭化粒子10%、地山粒子約30%
第２層　暗褐色土 10YR3/3 地山粒子全体に混入
第３層　褐 色 土 10YR4/4 地山粒子混入
第４層　黒褐色土 10YR3/2 地山粒子全体に混入
第５層　褐 色 土 10YR4/6 暗褐色土粒全体に混入炭化物少量混入
第６層　暗褐色土 10YR3/3 褐色土粒少量混入炭化物少量混入
第７層　褐 色 土 10YR4/4 黒褐色土粒全体に混入

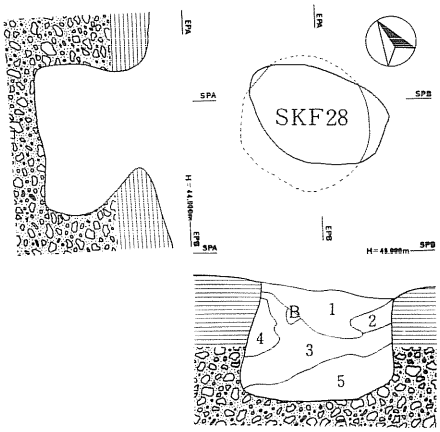
SKF15
第１層　黒褐色土 10YR2/2 黄褐色土粒状に混入、炭化物少量混入
第２層　にぶい黄褐色土 10YR5/4 壁崩壊土、少量の黒褐色土混入
第３層　褐色土 10YR4/4 炭化物少量混入




SK 08
第１層　黒褐色土 10YR2/2 炭化物粒子
第２層　暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒子　2～3%混入
第３層　黒褐色土 10YR3/2 炭化物粒子　2～3%混入
第４層　暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒子　2～3%混入
第５層　黒褐色土 10YR3/2
第６層　褐 色 土 10YR4/4 地山粒子30%、炭化物粒子5%混入
第７層　暗褐色土 10YR3/4 炭化物粒子　2～3%混入
第８層　褐色粘質土 10YR4/6 （暗褐色土＋地山）
第９層　黄褐粘質土 10YR5/6 地山主体で砂礫が多い
第10層　褐 色 土 10YR4/6 細砂全体に混入炭化物粒子１%混入



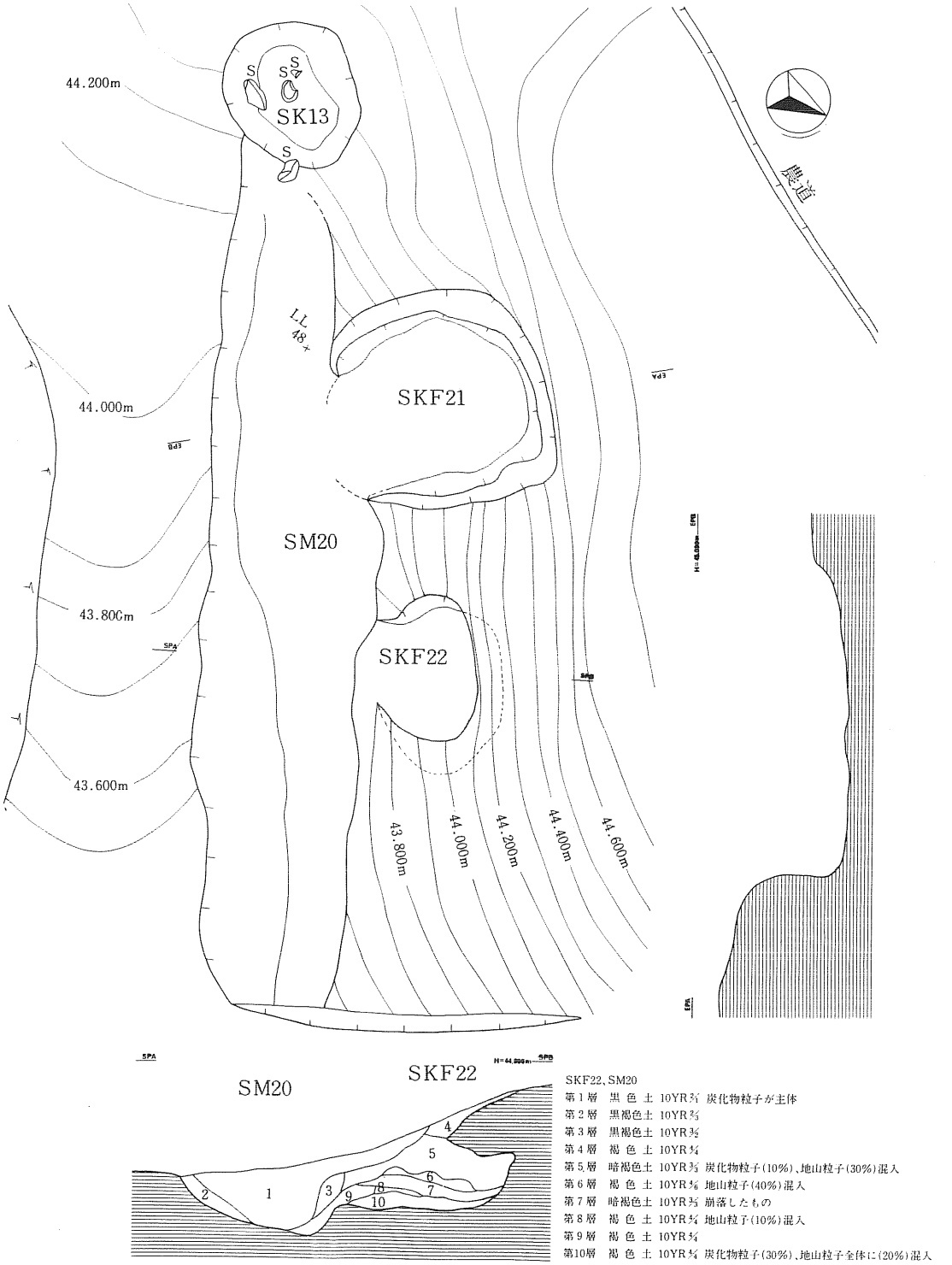

SKF27
第１層　暗褐色土 10YR3/3 木根による攪乱層、褐色土粒少量混入
第２層　暗褐色土 10YR3/4 細い炭化物粒子混入
第３層　褐 色 土 10YR4/6 褐色土主体に暗褐色土混入、炭化物少量混入
第４層　黄褐色土 10YR5/3 壁崩落土主体層
第５層　黒褐色土 10YR3/2 炭化物多量混入
第６層　黒褐色土 10YR3/2 炭化物少量混入



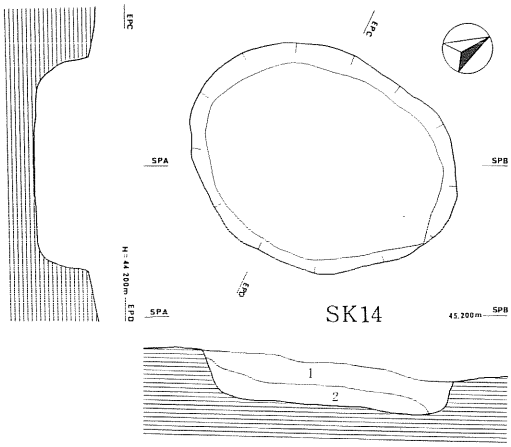

SKF28
第１層　暗褐色土 10YR3/3 地山褐色土混入、炭化物微量混入
第２層　暗褐色土 10YR3/4 褐色土粒全体に混入、炭化物混入
第３層　黒褐色土 10YR2/2 褐色土混入、炭化物多量混入
第４層　黄褐色土 10YR5/6 壁崩落土主体
第５層　褐 色 土 10YR4/6 炭化物混入、下部に黒色土多く混入

0　1 m

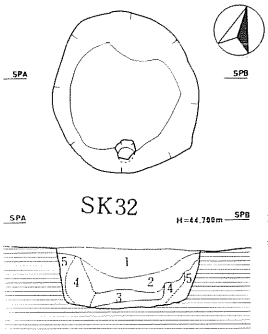
第８図　SK08・23土坑、SKF15・27・28フラスコ状土坑



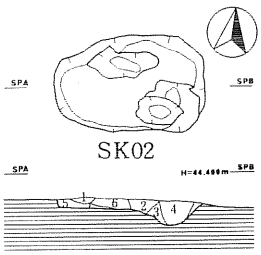

第9図　SK13土壙・SKF21・22フラスコ状土坑



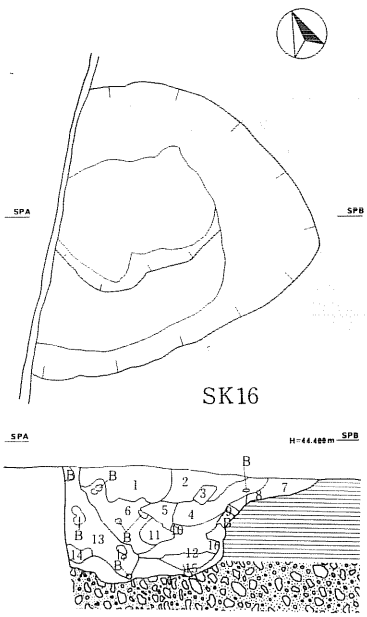

SK14
第１層　黒褐色土　10YR3/2　褐色土粒全体に混入、部分的に撹乱
第２層　暗褐色土　10YR3/4　褐色土粒子多量混入、炭化物混入、小石混入



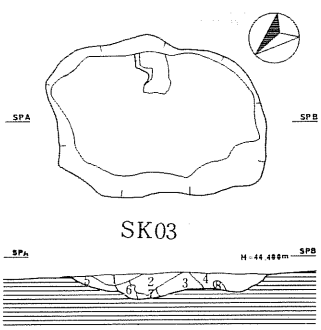

SK32
第１層　暗褐色土　10YR3/3炭化物混入(一部粒子大)
第２層　黒褐色土　10YR3/3炭化物混入、褐色土粒少量混入
第３層　褐色土　10YR3/3褐色土粒多量混入、炭化物少量混入
第４層　暗褐色土　10YR3/3暗褐色土粒子状に混入
第５層　褐色土　10YR4/6暗褐色土部分的、粒子状に混入



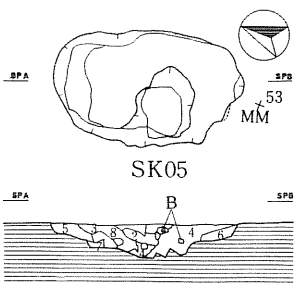

SK02
第１層　黒褐色土　10YR3/2　炭化物粒子、地山粒子20－30%混入
第２層　暗褐色土　10YR3/4
第３層　黒褐色土　10YR3/2　地山粒子５～６%混入
第４層　黒褐色土　10YR3/2　地山粒子10%混入
第５層　暗褐色土　10YR3/4　地山ブロック混入
第６層　褐色粘質土　10YR4/6　地山ブロック混入
第７層　黒褐色土　10YR3/3　地山粒子混入




SK16
第１層　明黄褐色土　10YR7/6　小礫（径２～３mm）混入
第２層　褐色土　10YR4/4　炭化物粒子１%混入
第３層　暗褐色土　10YR3/4
第４層　褐色土　10YR4/4　地山粒子30%混入
第５層　暗褐色土　10YR3/3　地山半々に混入
第６層　褐色土　10YR4/4　地山、小礫５%混入、地山ブロック多く60%混入
第７層　褐色土　10YR4/4　地山粒子20%混入
第８層　地山土　褐色土10YR4/4　20%混入
第９層　暗褐色土　10YR3/4
第10層　地山ブロック
第11層　地山　暗褐色土10YR3/4が10%混入
第12層　暗褐色土　10YR3/4　明黄褐色粘質土10YR6/6が（40%）斑状に混入
第13層　暗褐色土　10YR3/4　暗褐色土多く混入
第14層　地山土（70%）暗褐色土10YR3/4　30%混入
第15層　地山土　暗褐色土10%混入
第16層　地山土　小礫を多く含む。暗褐色土５%混入



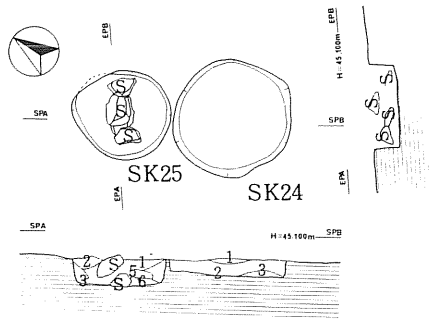

SK03
第１層　黒褐色土　10YR3/2　炭化物粒子30%混入
第２層　黒褐色土　10YR3/4　地山粒子、炭化物粒子20%倍混入
第３層　暗褐色土　10YR3/4　地山粒子40%
第４層　暗褐色土　10YR3/3　地山粒子、炭化物粒子各10%混入
第５層　褐色粘質土　10YR4/4　炭化物50%
第６層　黒褐色土　10YR3/2　地山粒子20%
第７層　黒褐色土　10YR3/2　炭化物粒子、地山粒子10%混入
第８層　地山ブロック（褐色-10YR4/6）




SK05
第１層　褐色粘質土　10YR4/6　黒褐色土粒子１%混入
第２層　暗褐色土　10YR3/3　地山土粒子30%混入
第３層　黒褐色土　10YR3/2　地山土粒子20%混入
第４層　暗褐色土　10YR3/4　地山粒子20%混入
第５層　褐色粘質土　10YR3/3　地山土黒褐色土混入
第６層　暗褐色土　10YR3/4　地山土
第７層　褐色土　10YR4/6　地山に暗褐色土(20%)混入
第８層　黒褐色土　10YR3/2
第９層　黒褐色土　10YR3/2
B　地山ブロック

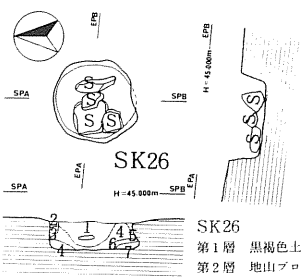
0　1 m

第10図　SK02・03・05・14・16・32土坑

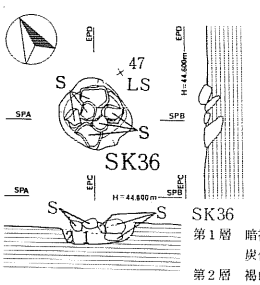



SK25
第1層　暗褐色土　10YR3/4　地山粒子5％混入
第2層　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4　地山土が主体
第3層　黄褐色土　10YR5/6　にぶい黄褐色土
第4層　褐色粘質土　10YR5/4
第5層　黄褐色土　10YR5/6　地山ブロック
第6層　黒褐色土　10YR3/2

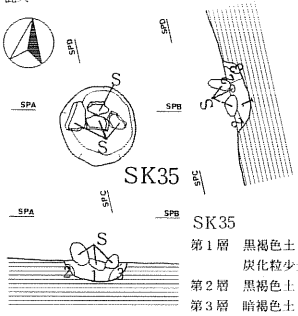
SK24
第1層　黒褐色土
第2層　褐色粘質土　10YR5/4
　　暗褐色土（10YR3/4）混入
第3層　黒褐色土



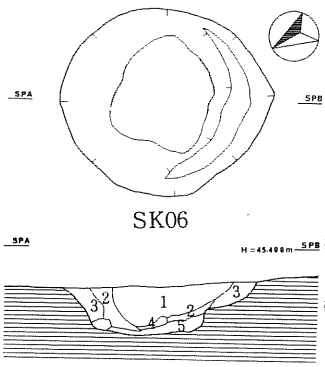

SK26
第1層　黒褐色土　10YR3/2
第2層　地山ブロック
第3層　褐色土　10YR4/4　地山粒子30%混入
第4層　褐色土　10YR5/4　地山粒子20%混入
第5層　褐色土　10YR4/4　地山粒子30%混入
第6層　黒褐色土　10YR3/2
第7層　黄褐色粘質土　10YR5/6　地山土30～40%混入



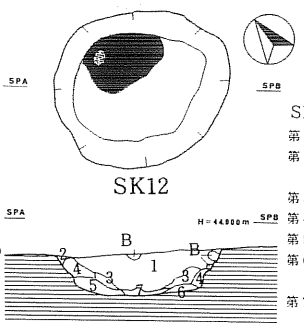

SK36
第1層　暗褐色土　10YR3/4　褐色土粒多量混入
　　炭化物粒少量混入
第2層　褐色土　10YR4/6　褐色土を主体に黒色土粒混入



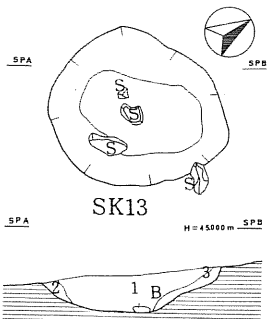

SK35
第1層　黒褐色土　10YR3/4　褐色土粒部分的小ブロック状に混入
　　炭化粒少量混入
第2層　黒褐色土　10YR3/2　炭化粒少量混入
第3層　暗褐色土　10YR3/4　褐色土粒多量混入



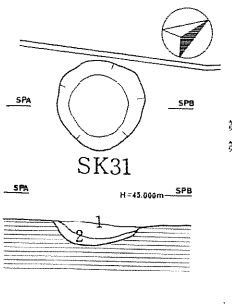

SK06
第1層　黒色土　7.5YR3/2　炭化物粒子
第2層　黒褐色土　10YR3/2 炭化物5～6％混入
第3層　暗褐色土　10YR3/4 地山粒子30%混入
第4層　褐色粘質土　10YR4/4
　　地山黒色土（7.5YR3/1）炭化物粒子
第5層　黒色土　10YR3/1
　　炭化物粒子5％混入



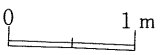

SK12
第1層　黒色土　10YR3/1
第2層　暗褐色土　10YR3/3　Ⅲ層ローム漸移層と似ている
第3層　黒褐色土　10YR3/2　地山粒子20%混入
第4層　褐色土　10YR3/2
第5層　暗褐色土　10YR3/4　黒色粒子30%混入
第6層　褐色粘質土　10YR4/6　地山　黒褐色土（10YR3/3）斑点状に混入
第7層　黒褐色土　10YR3/2　明黄褐色粘質土（10YR6/6）粒子及びブロック径5～20mmが10%混入



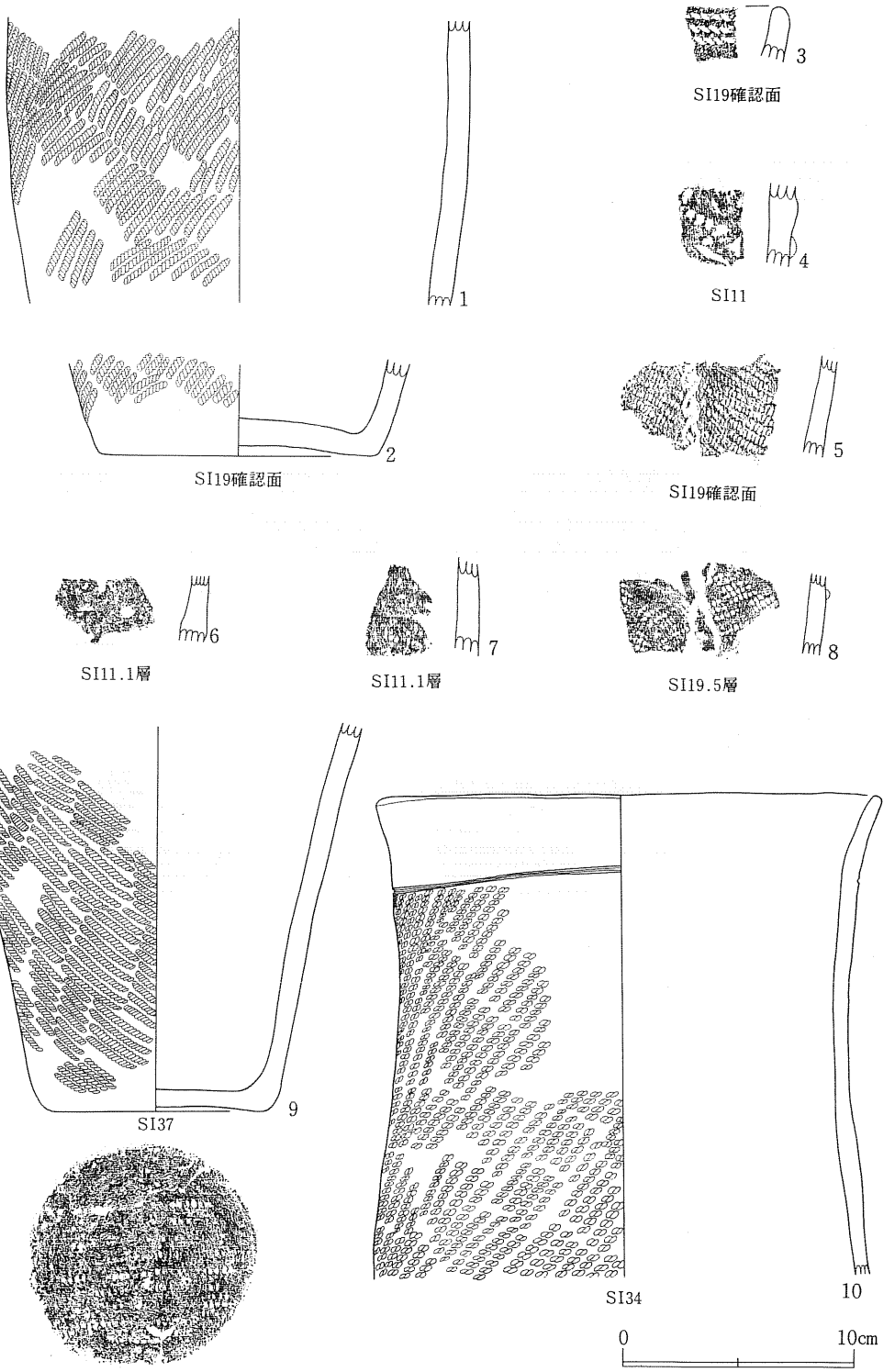

SK13
第1層　黒褐色土　10YR3/1　炭化物粒子（径10mm）多く混入
第2層　暗褐色土　10YR3/4　地山多く混入
第3層　黒褐色土　10YR3/2



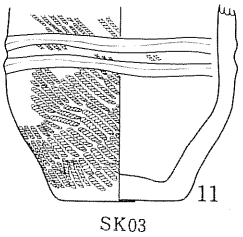

SK31
第1層　黒色土　10YR3/1　炭化物多量混入
第2層　暗褐色土　10YR3/4　褐色土粒多量混入、炭化物少量混入




第11図　SK06・12・13・24～26・31・35・36土坑

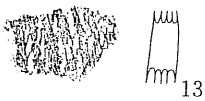



第12図　遺構内出土土器（１）

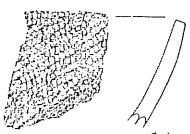


SK03

SK08確認面

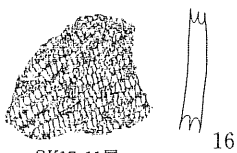


SK16埋土



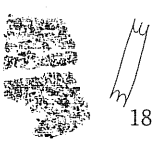
SK17,11層

SK17,11層



SK17,11層

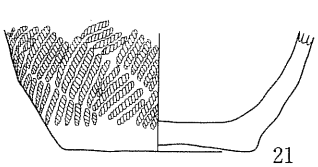
SK17,11層



SK17,11層

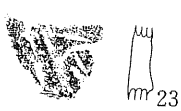
SK17,11層

SK17,11層

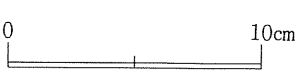


SK17,11層

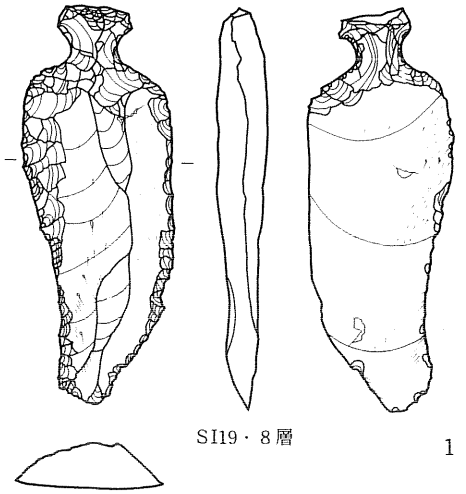
SKF23埋土中



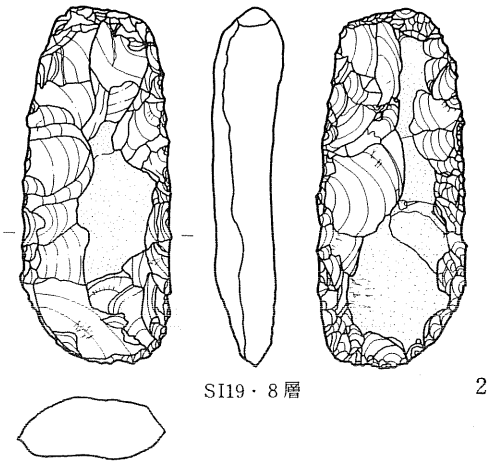
SK32埋土中



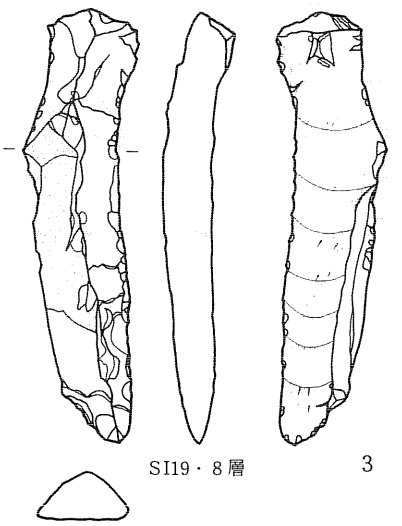

第13図　遺構内出土土器（2）



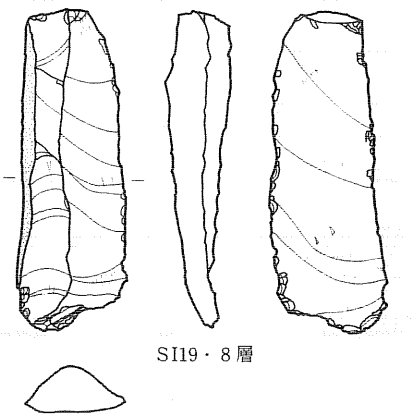
SI19・８層　1



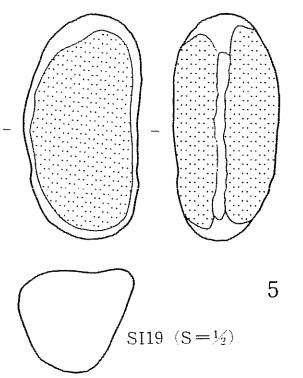
SI19・８層　2



SI19・８層　3



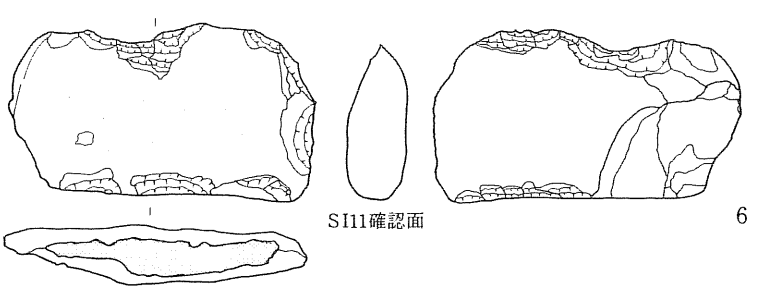
SI19・８層　4



5

SI19（S＝½）

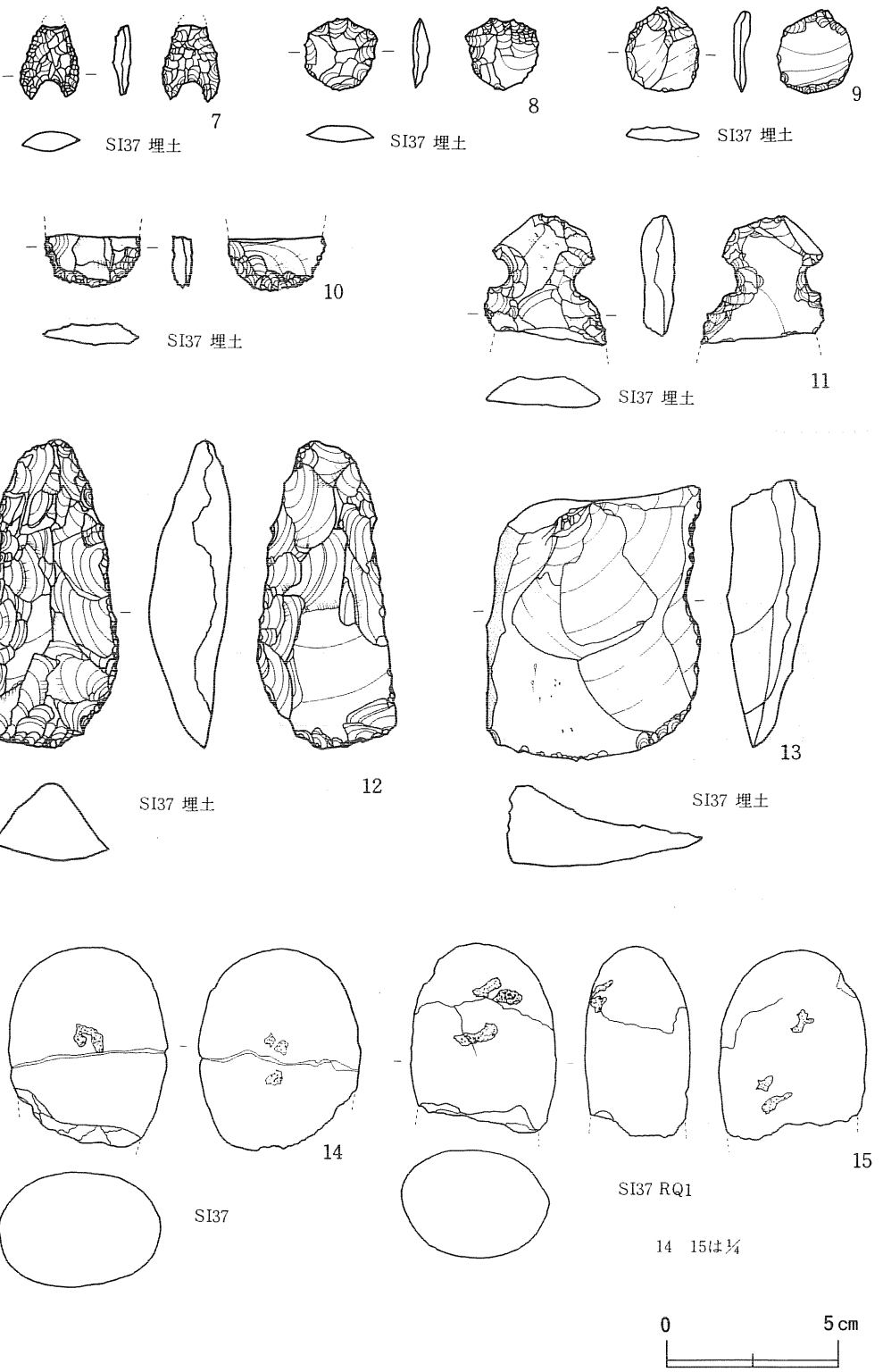
5、6はS＝¼



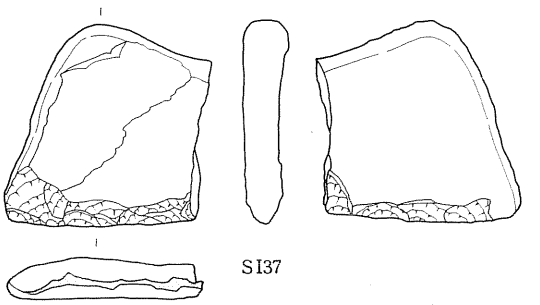
SI11確認面　6

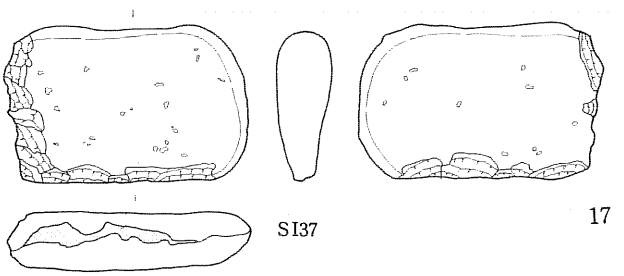
0　5cm

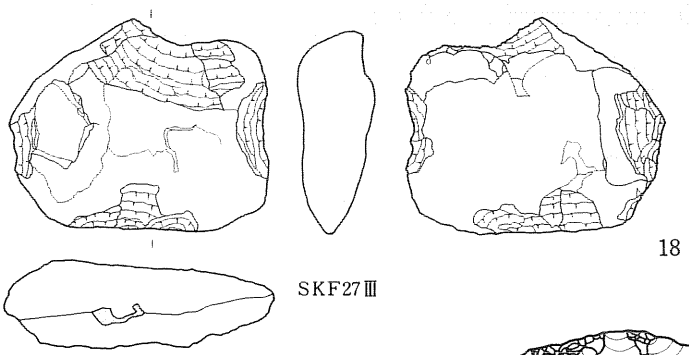
第14図　遺構内出土石器（１）

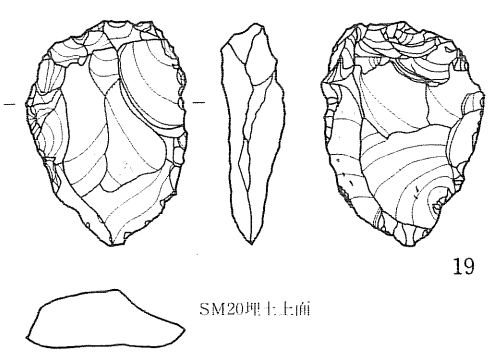


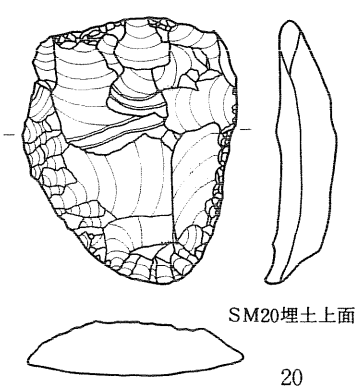

第15図　遺構内出土石器（2）

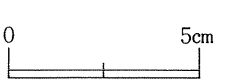



第16図　遺構内出土石器（３）

## 第2節　遺構外の出土遺物

### 1　土器

遺構外から出土した土器は、縄文時代前期・中期・晩期・弥生時代のものである。以上の土器を文様・器形・胎土・焼成により分類し、さらに細分した。

a　**第Ⅰ群土器**　縄文時代前期後葉の土器群である。

第1類土器　（第19図30・31）

羽状縄文を施すもので、30は鉢形土器の口縁部であろう。

第2類土器　（第19図32～35）

撚糸文を施すものである。33・34は不整撚糸文である。

第3類土器　（第19図36）

1点のみで、竹管による刺突文を施すものである。

第4類土器　（第19図37・38）

条線を施こしている土器である。いずれも底部から胴部にかけての破片で、土器は大変軽く、胎土は精選されている。

b　**第Ⅱ群土器**　縄文時代中期の土器である。

第1類土器　（第19図39）

綾絡文を施すものである。中期前葉大木7a式の土器である。

第2類土器　（第19図40）

口縁部に「S」字条の側面圧痕を施すもので、鉢形土器であろう。中期前葉大木7b式の土器である。

第3類土器　（第19図41）

地文が縄文で、沈線によって渦巻文を施すものである。中期中葉大木8a式の土器である。

第4類土器　（第19図42・43・46～49）

地文が縄文で、1～3条の沈線で文様帯を区画するもので、中期中葉の土器である。

第5類土器　（第19図44）

口縁部が波状を呈する土器で、深めの沈線で渦巻文を施すもので、深鉢形土器であろう。中葉の大木8b式の土器である。

第6類土器　（第19図45）

深鉢形土器の把手部分で、縄文の側面圧痕を施すものである。中期中葉の土器であろう。

第7類土器　（第19図50～55）

沈線で文様帯を区画し、中を磨消するものである。51は地文に撚糸文を施しているが、他

は縄文である。中期末葉の土器である。

第8類土器　（第20図56）

垂下する1条の細い沈線から、左右斜め上に3条の沈線を施すものである。

第9類土器　（第20図57・58）

粘土紐を貼付して、縄文帯と磨消帯を区画するものである。

第10類土器　（第20図59・60）

細い粘土紐を2本平行に貼付しているもので、地文は無文である。

第11類土器　（第17図25～26、第18図27・28、第20図61～71、78～81）

縄文のみが施された土器である。24・25は全体に単節斜縄文を施文した深鉢形土器で、色調は赤褐色、焼成は堅緻である。26も深鉢形土器で、底部から胴部過半にかけてアスファルトによる補修痕（スクリーントーン部）が見られる。

第12類土器　（第20図72～77）

無文の土器で、いずれも口縁部である。色調は黒褐色を呈する。

第13類土器　（第21図83・86～88）

撚糸文を施した土器である。

第14類土器　（第21図82・84・85）

条痕を施した土器である。

c　**第Ⅲ群土器**　縄文時代晩期の土器である。

第1類土器　（第21図89）

口縁部に羊歯状文を施すもので、前葉のB—C式土器である。

第2類土器　（第22図90）

胴部に3条の沈線を巡らすものである。

第3類土器　（第21図91）

胴部の上半に撚りの細かい縄文を施文し、下半は無文となる。

第4類土器　（第21図92～98）

縄文のみを施した粗製土器である。

d　**第Ⅳ群土器**　弥生時代の小坂X式に比定される土器である。

第1類土器　（第21図99）

鉢形土器の胴下半部に細かい撚糸文、その下に沈線を巡らす土器である。

第2類土器　（第21図100・101）

細かい撚糸文のみを施した土器である。

e　**土器底部**　（第18図29、第21図102）

いずれも底外面に網状痕をもつもので、胎土には砂粒を多く含み、色調は明赤褐色を呈する。縄文時代中期の所産かと思われる。

## 2　石器

縄文時代の遺構外出土石器は、フレイクを除くと総数129点であるが、そのうち100点を図示した。

**石鏃**　（第22図21～23）

21・22は平基式で、表・裏面とも非常に薄く、丁寧に作られている。23は両端とも折損しているが、石鏃と思われる。

**石錐**　（第22図24～26）

24・26は小形で、24は先端部が折損している。25は大形で、片側縁に押圧剥離を施しており、削器とも考えられるが、先端部が尖っていることから石錐とした。

**石匙**　（第22図27～30）

いずれも横型で、27・29は周縁に押圧剥離を施す丁寧な作りである。28は小形で、30は粗製のものである。

**箆状石器**　（第22図31・32）

31は表面のみに、32は表裏面に押圧剥離を施している。

**掻器**　（第22図33・34）

いずれも小形で、縦長剥片の両側縁に剥離を施している。

**削器**　（第22図35・36、第23図37～42）

縦長・円形及び不定形の剥片の1～2側縁に、片面及び両面からの剥離で刃部を作出したものである。37～39は比較的大形で、37・38は直刃、39は弧刃となる。42は円形で、周縁に両面から加撃を加え刃部としているものである。

**敲石**　（第22図43）

1点のみである。円形で厚みがあり、両面に剥離を施しているもので、全周縁に敲打痕を有するものである。

**残核**　（第22図44・45）

いずれもやや縦長で、45は、両端に平坦面を残している。

**磨製石斧**　（第23図47）

1点のみである。基部は折損しており、刃部は刃こぼれによる磨滅が著しい。

**打製石斧**　（第24図50）

1点のみである。途中で折れているため、刃部の状態は不明であるが、形状は撥形を呈する

ものかと思われる。

**石錘**　（第24図48・49）

いずれも両端を打ち欠いた切目石錘で、48は円形、49は長方形で扁平な礫を用いている。

**半円状扁平打製石器**　（第25図52～56、第26図57～61、第27図62～66、第28図67～71、第29図72～76）

29点出土したが、そのうち折損したものを除いた25点を図示した。扁平な石材を半円状に成形し、直線的な底縁を使用したもので、その結果、底縁にある幅の磨滅痕を有するものである。打ち欠きは1底縁のみのものが多いが、70～75のようにほぼ周縁に行なっているものもある。59のように底縁の両端に抉りを入れるものもある。石質は比較的軟かい安山岩・凝灰岩を主に用いているが、62は頁岩である。

**凹石**　（第30図77～82、第31図83～87）

円形と楕円形を呈するが、いずれも表裏に凹みを有し、周縁か表裏に擦った痕跡がみられる。

**擦石**　（第30図88～94）

円形か楕円形で、いずれかに擦った痕跡をもつものである。91・93は断面形が三角形であるが、側縁の三面とも使用している。

**石皿**　（第33図99～101）

100・101は扁平だが、99は大ぶりで厚みのある河原石を使用している。100は中央部付近が特に凹んでいる。

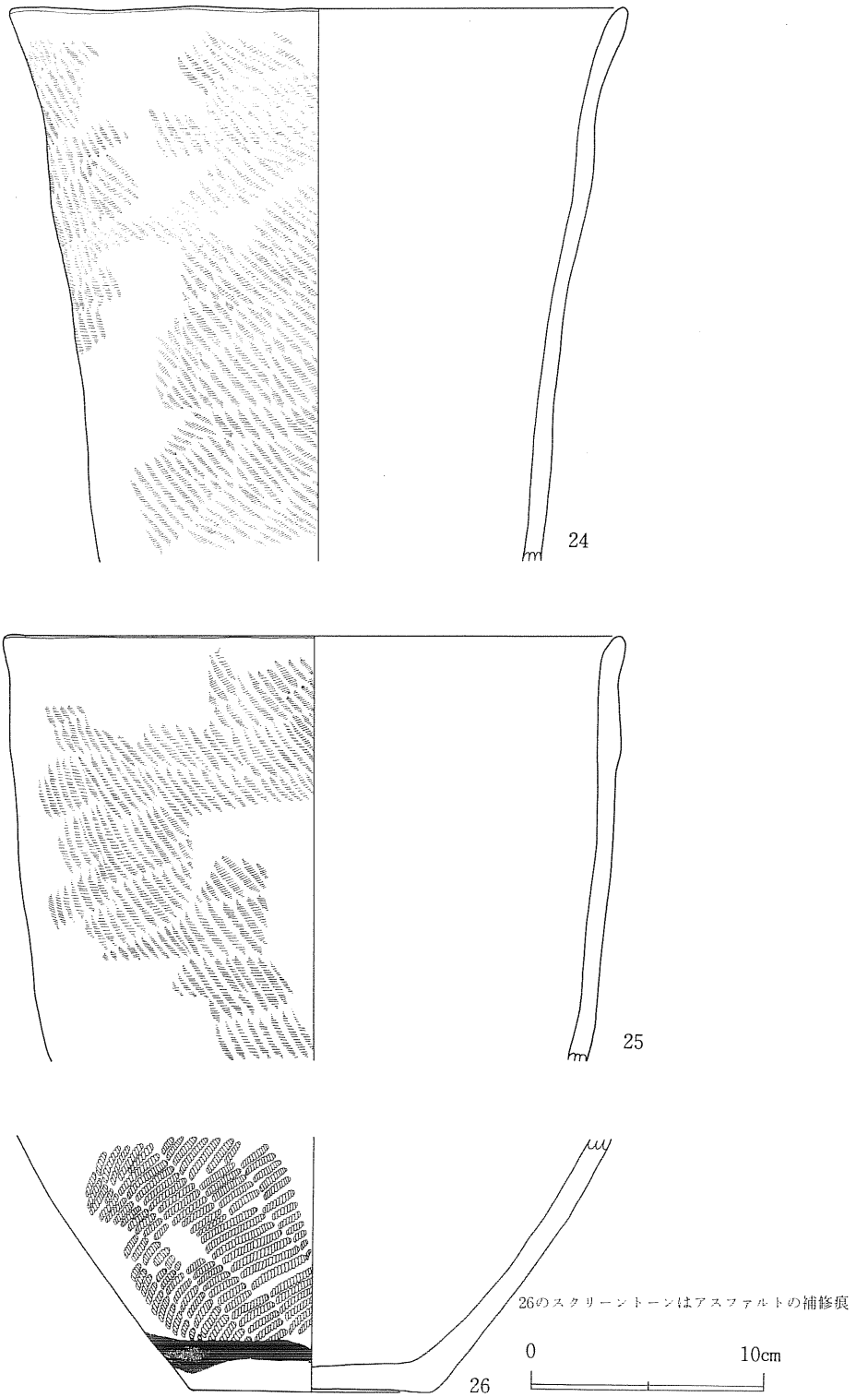
## 3　石製品

**燕尾状石製品**　（第24図46）

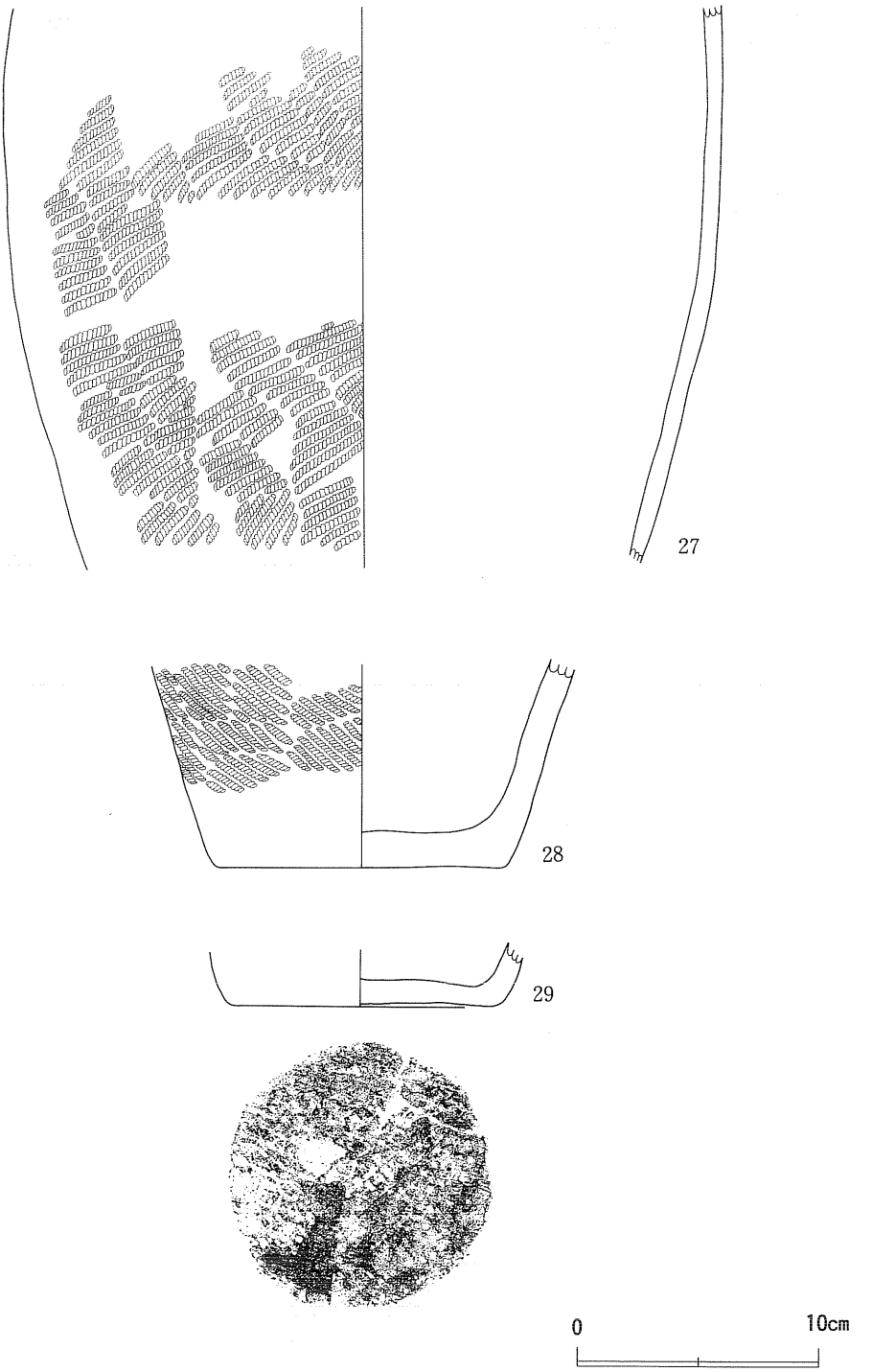
1点の出土である。全体を研磨して作っているもので、端部の片方に6㎜ほどの穴を穿ち、もう1方は縦方向に全体の1／3ほど刻みを入れて、二又にしている。全体に擦痕が著しい。

**線刻礫**　（第24図51）

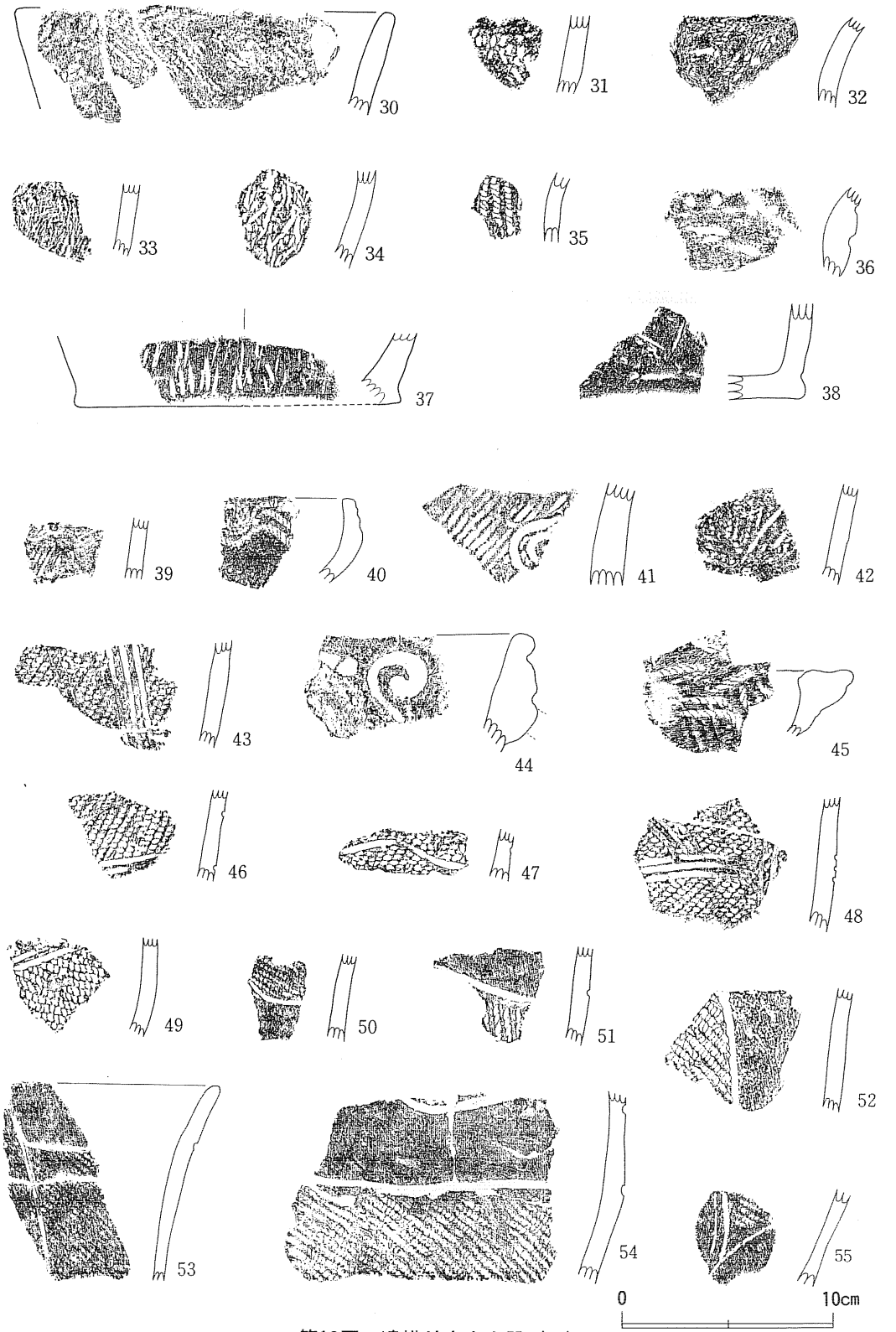
扁平な礫の片面に、交叉する2方向に10数条の線を刻んだものである。



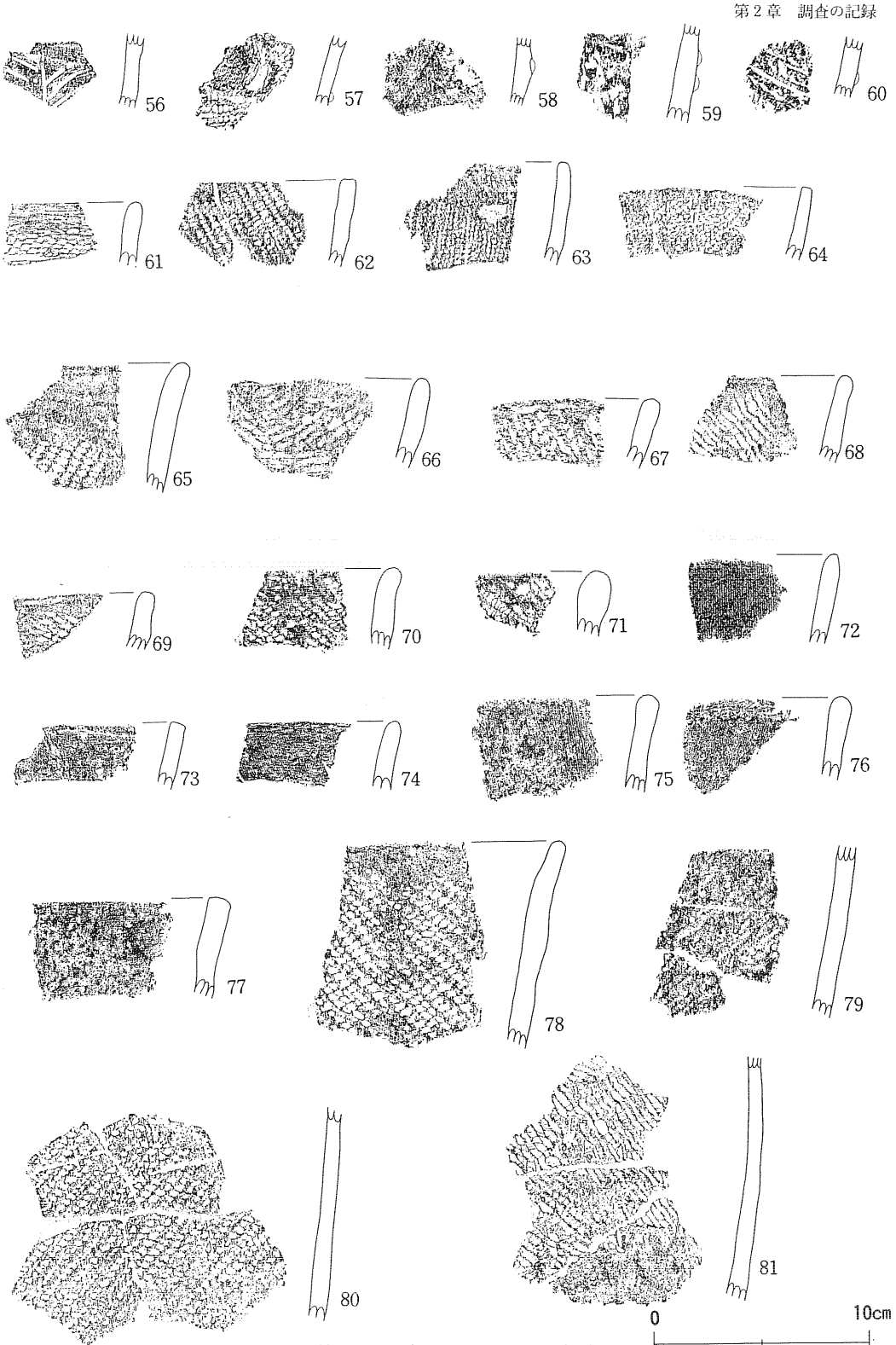

第17図　遺構外出土土器（1）



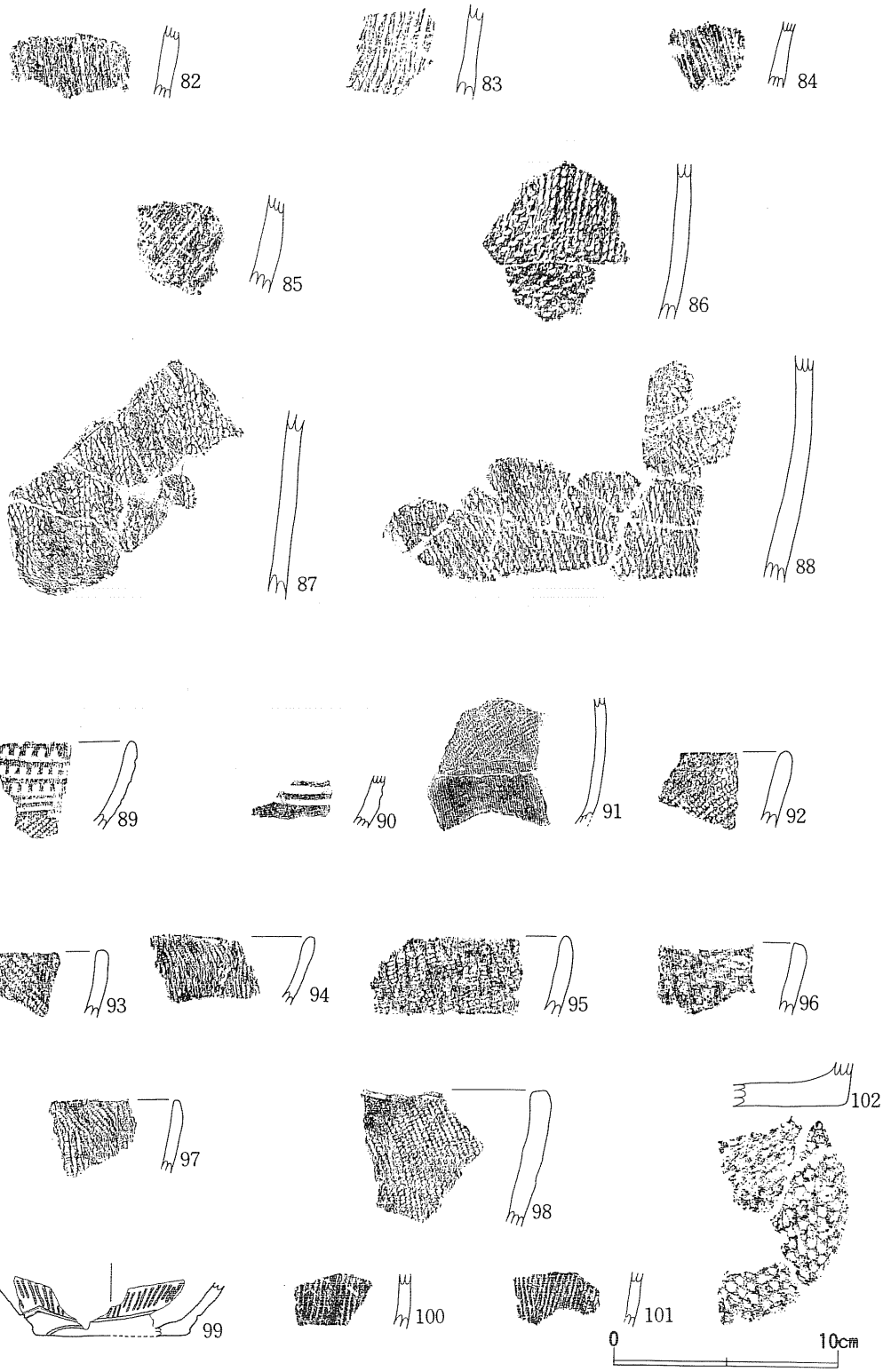

第18図　遺構外出土土器（２）



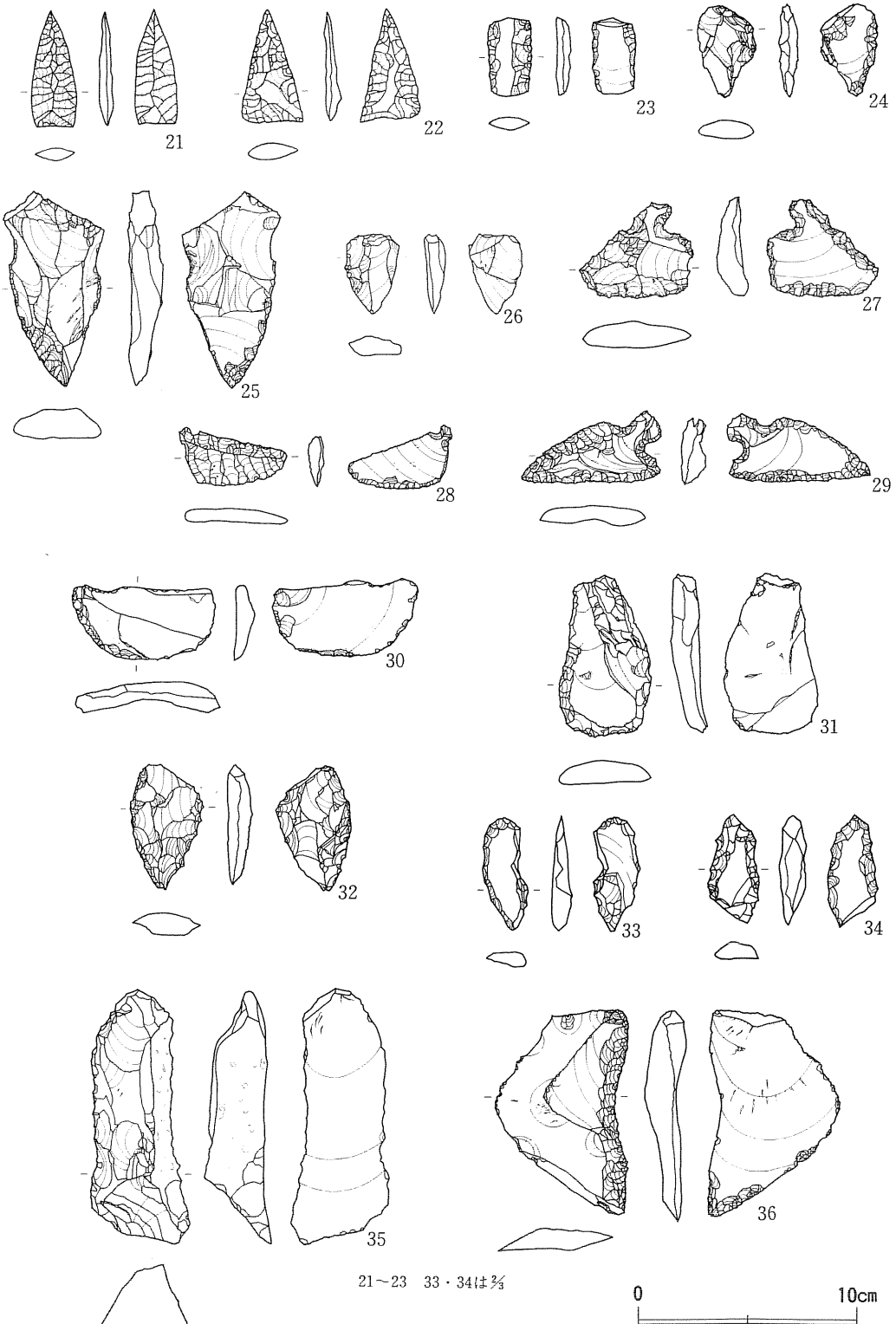

第19図　遺構外出土土器（３）




第20図　遺構外出土土器（４）



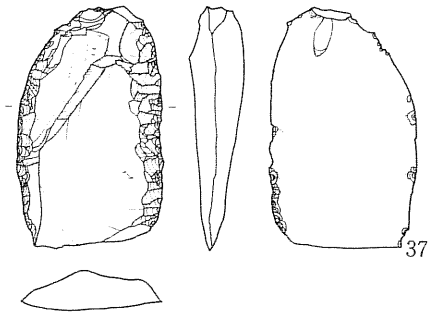

第21図　遺構外出土土器（5）

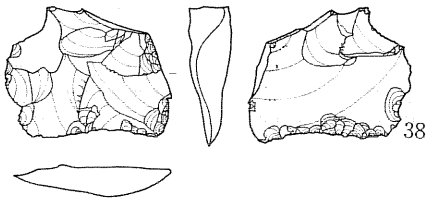


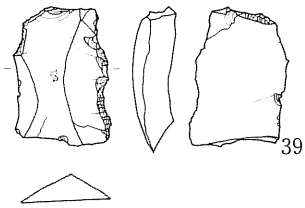

21～23　33・34は⅔

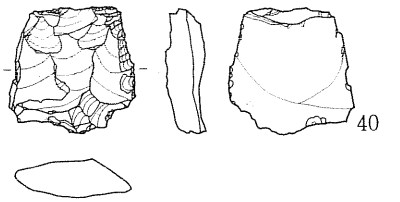
0　10cm

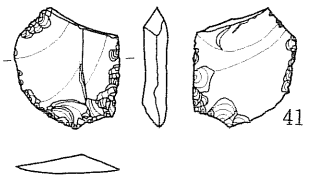
第22図　遺構外出土石器（１）

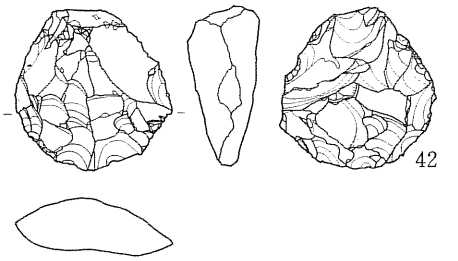


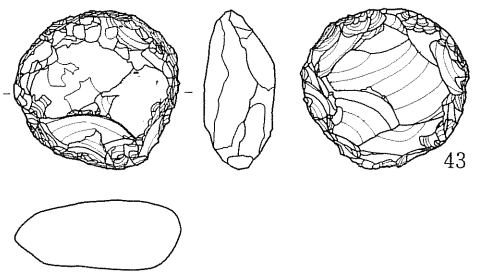



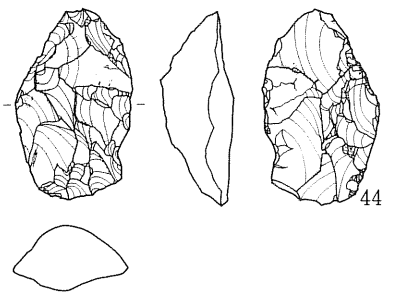



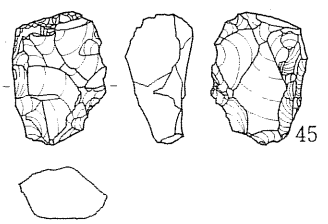



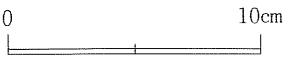



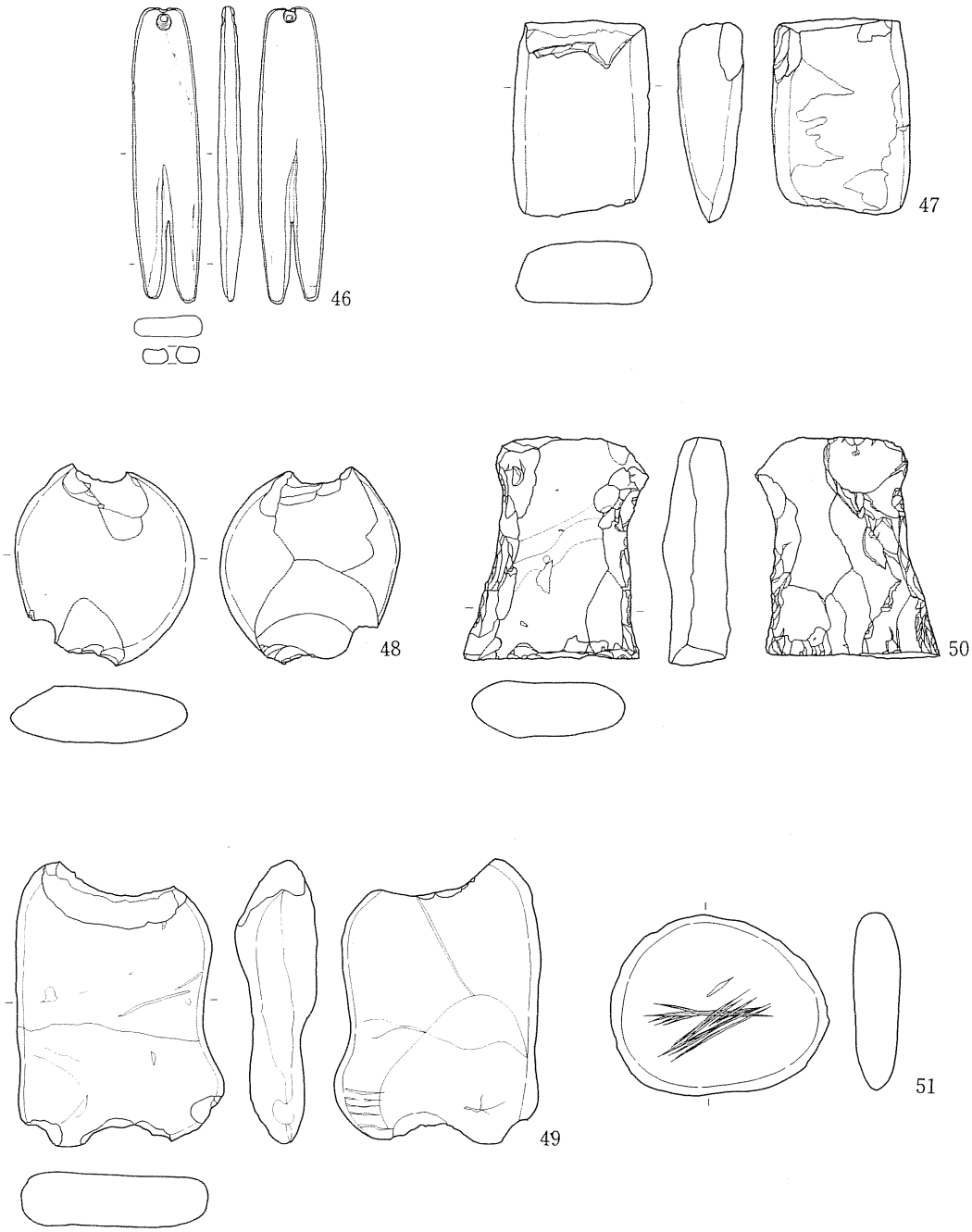



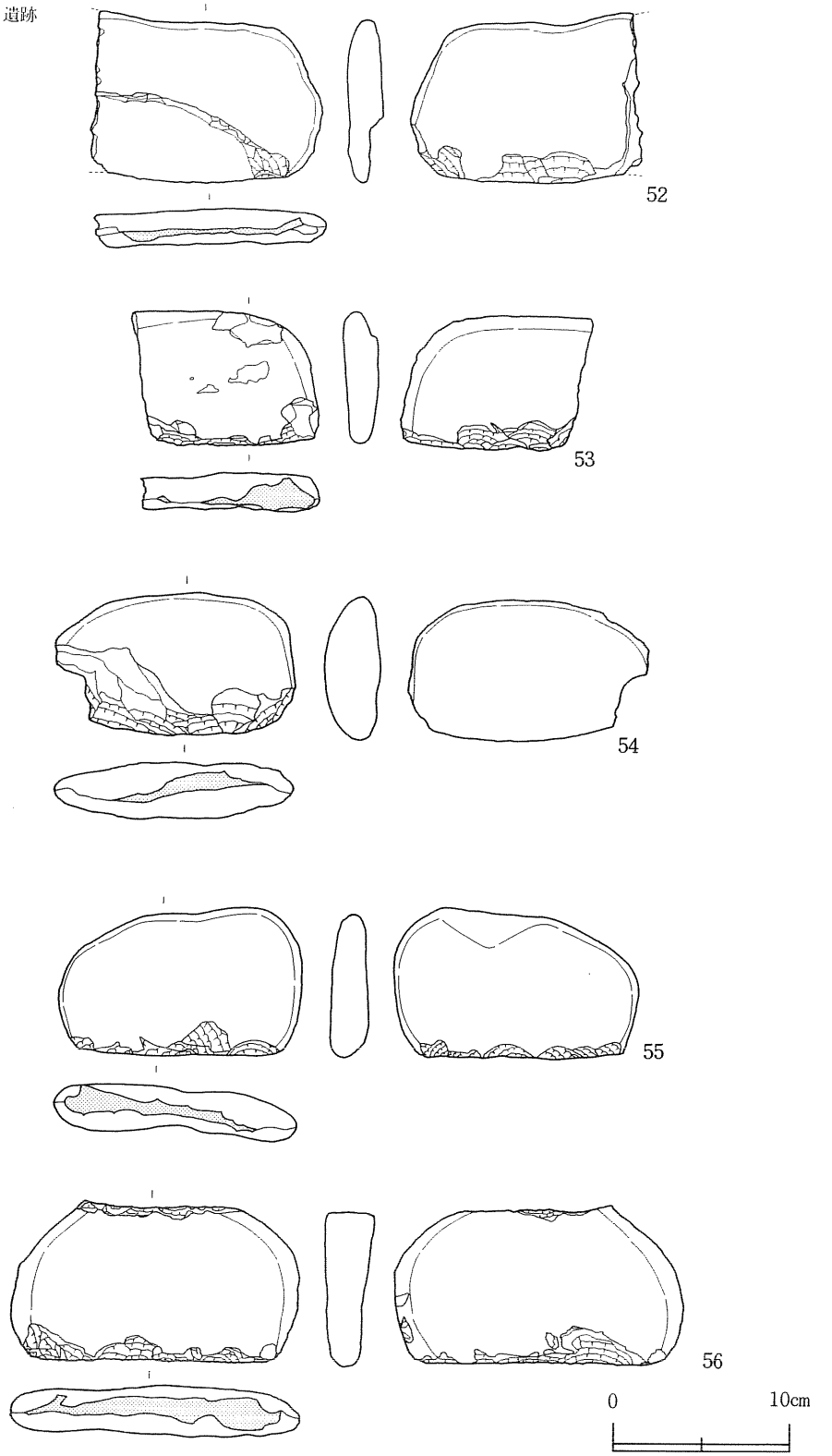



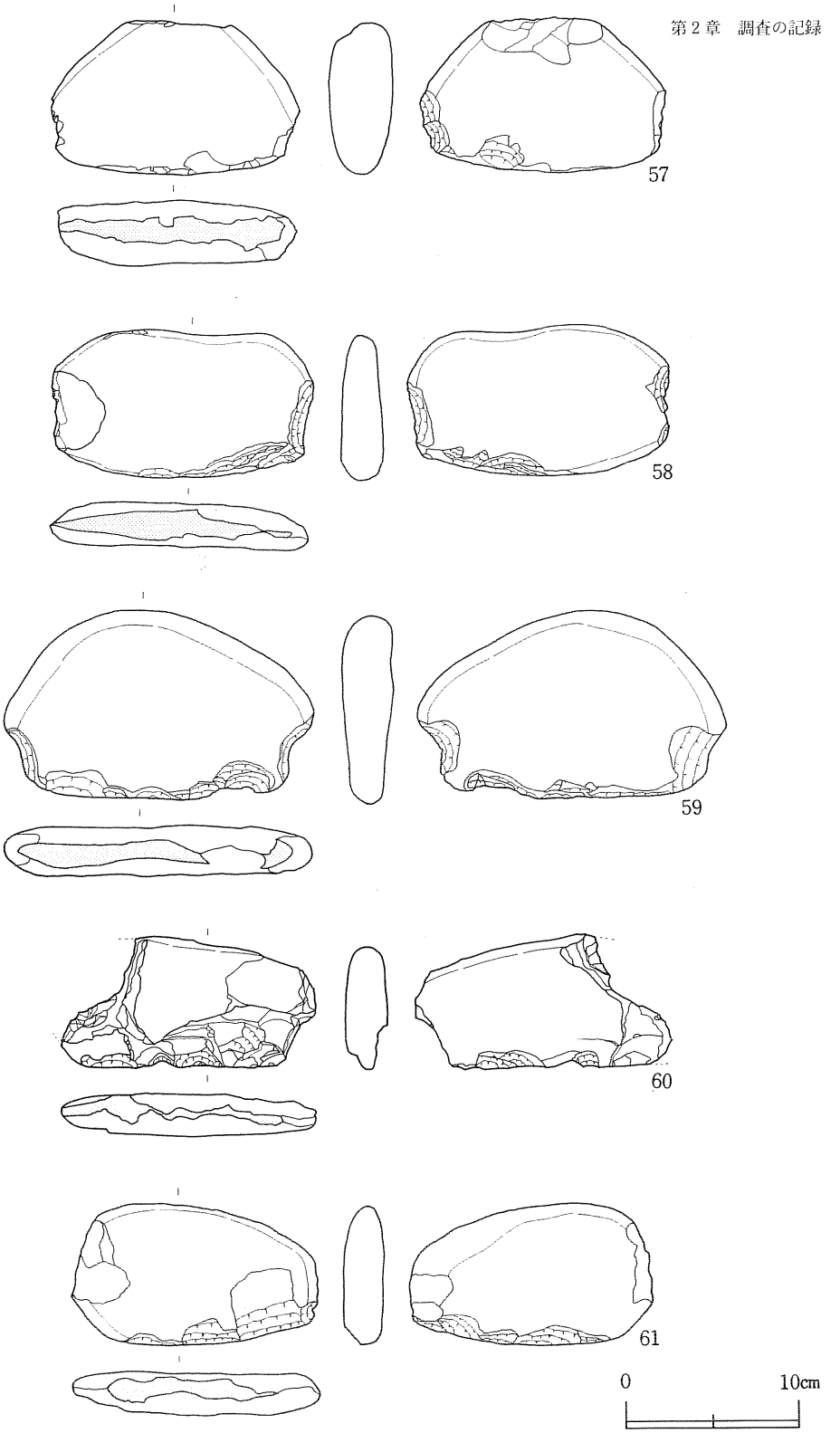

第23図　遺構外出土石器（２）



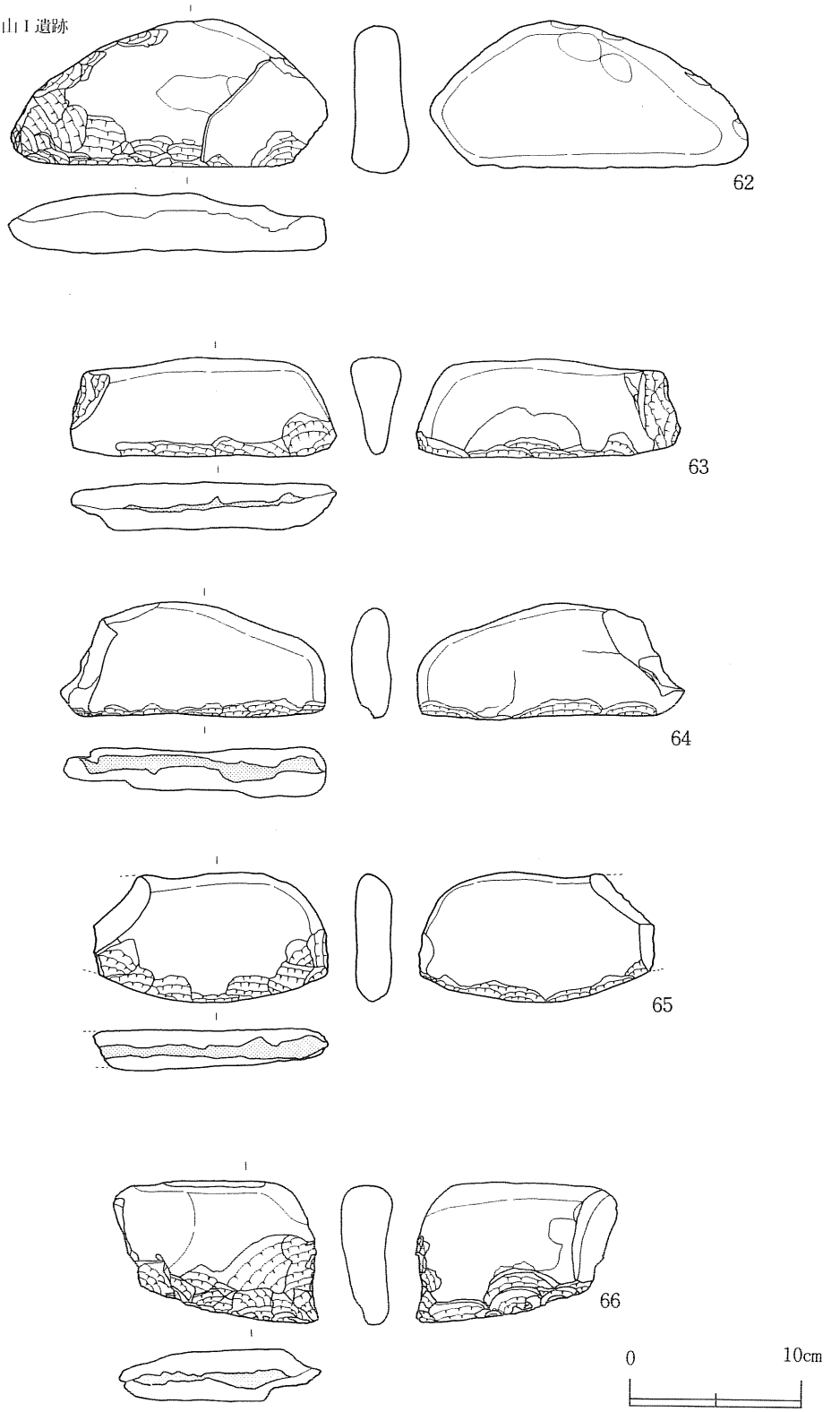

第24図　遺構外出土石器（３）



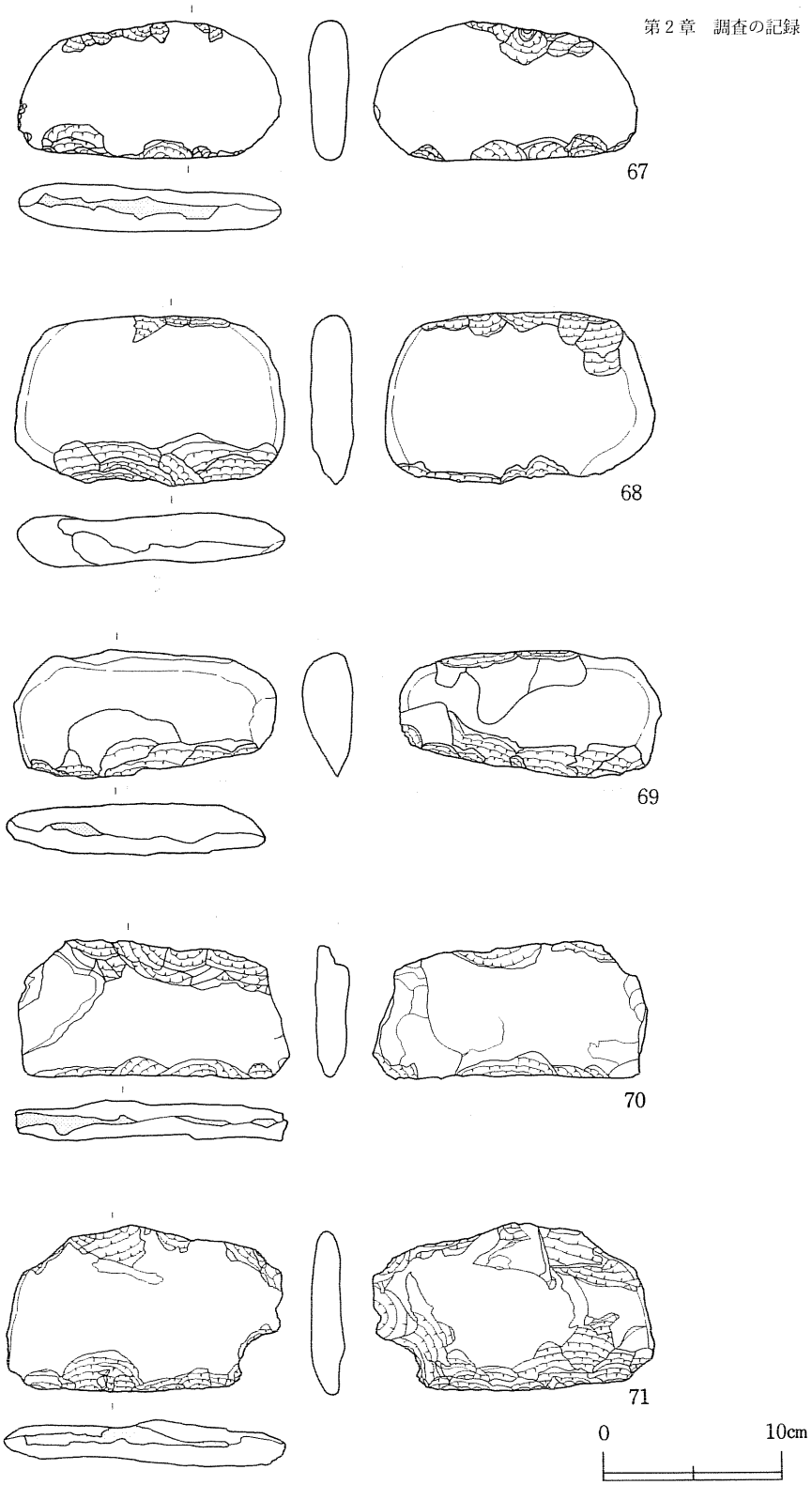

第25図　遺構外出土石器（4）



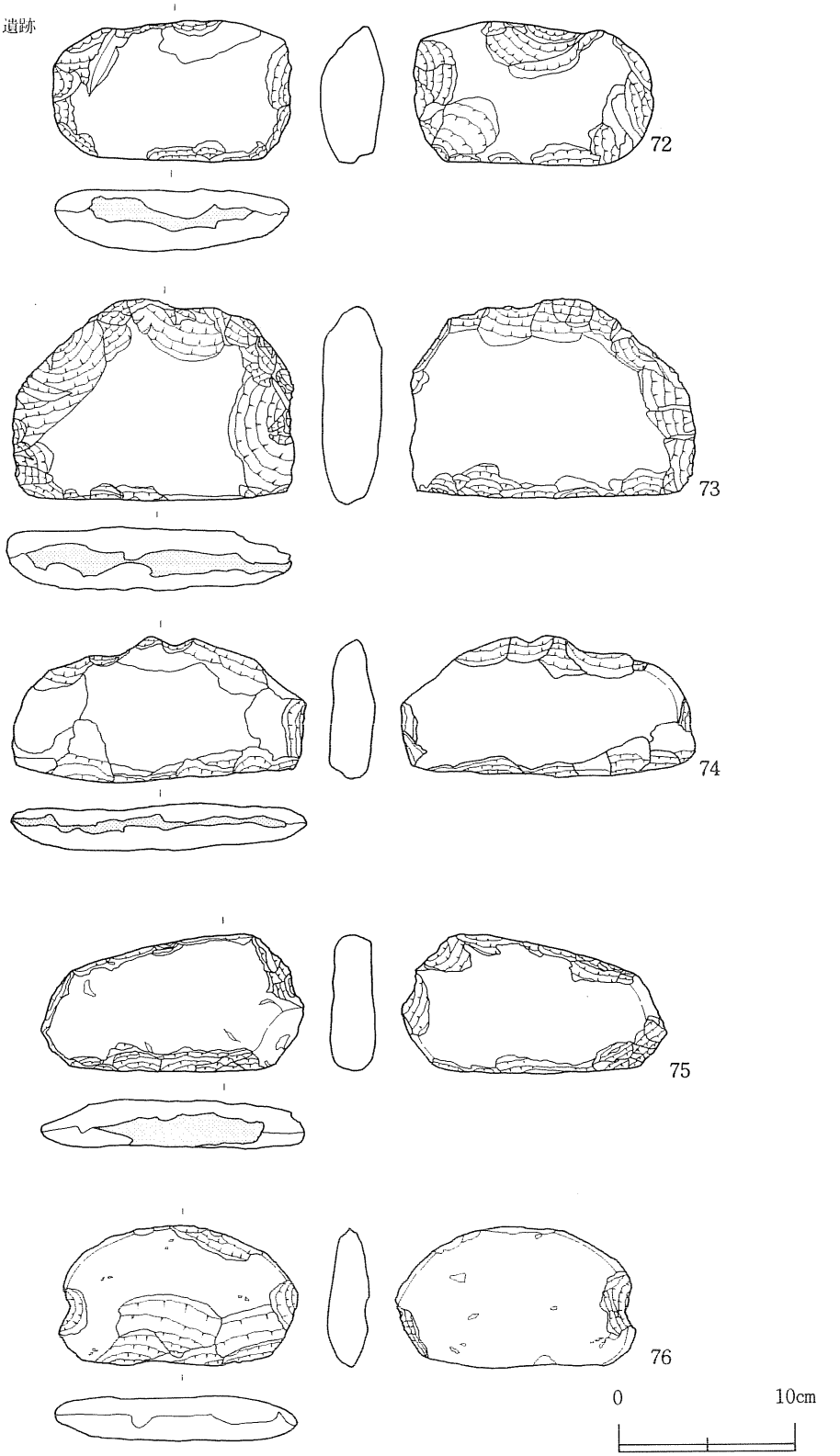

第26図　遺構外出土石器（５）



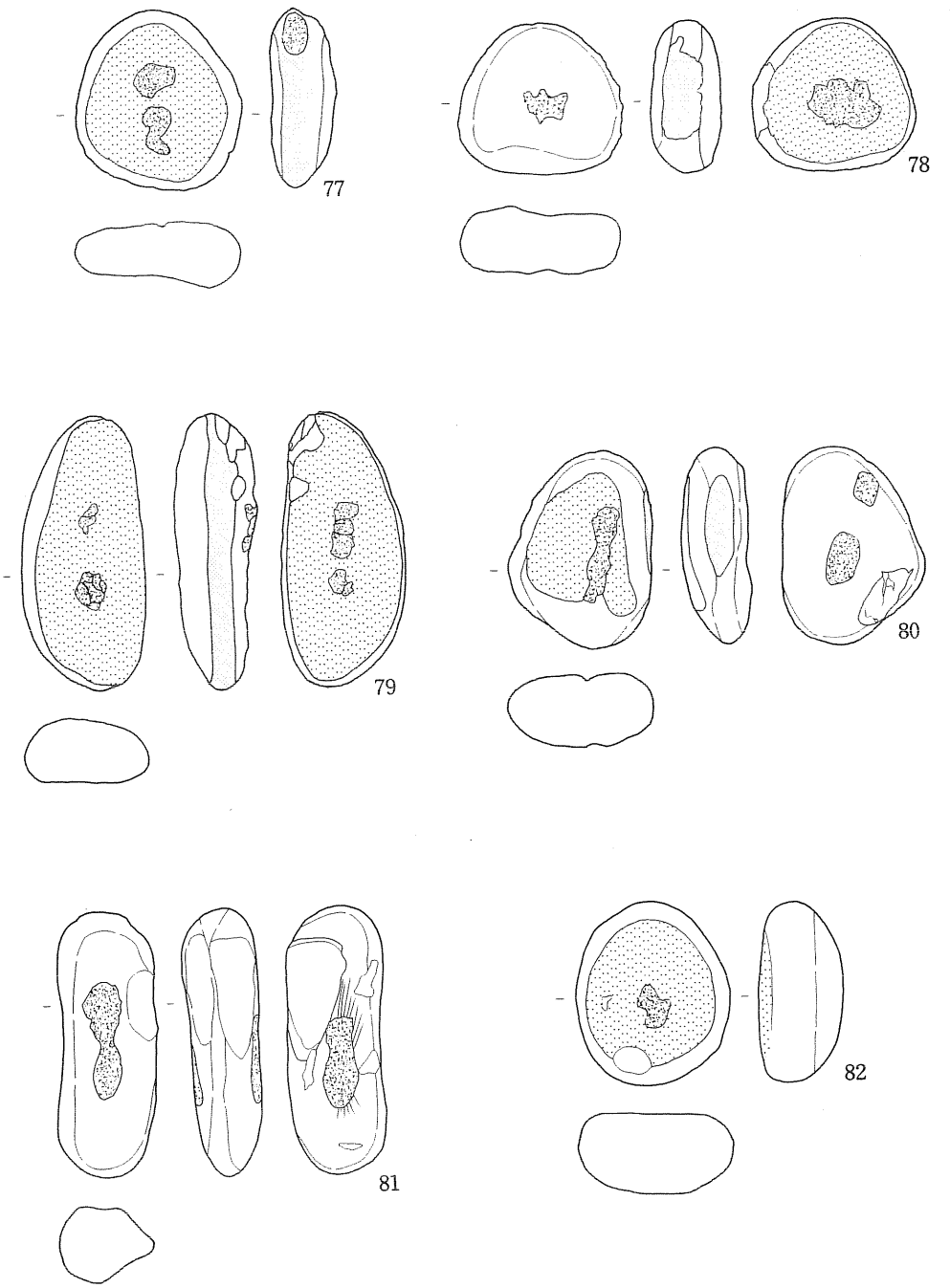

第27図　遺構外出土石器（6）




第28図　遺構外出土石器（７）

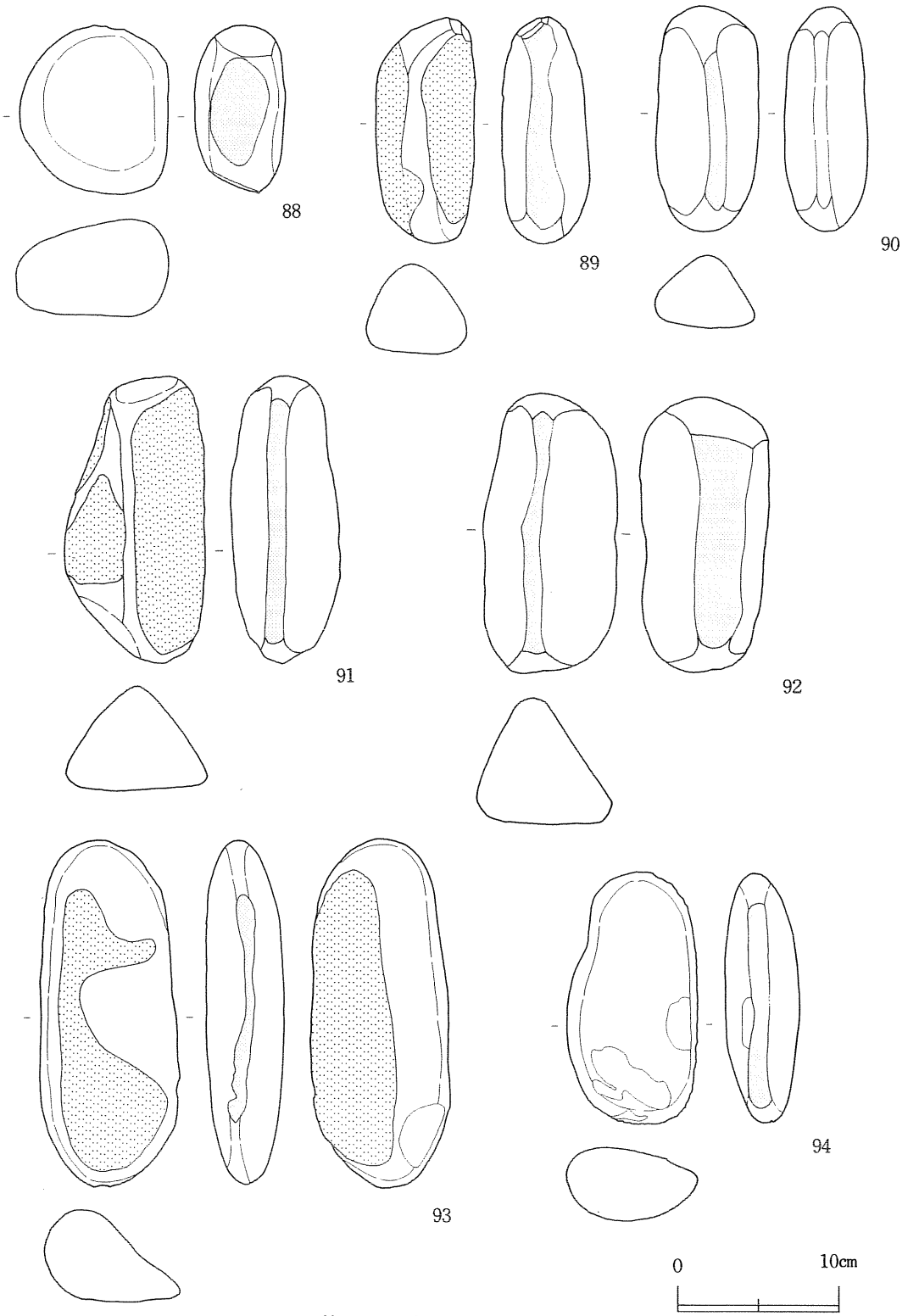



第29図　遺構外出土石器（8）

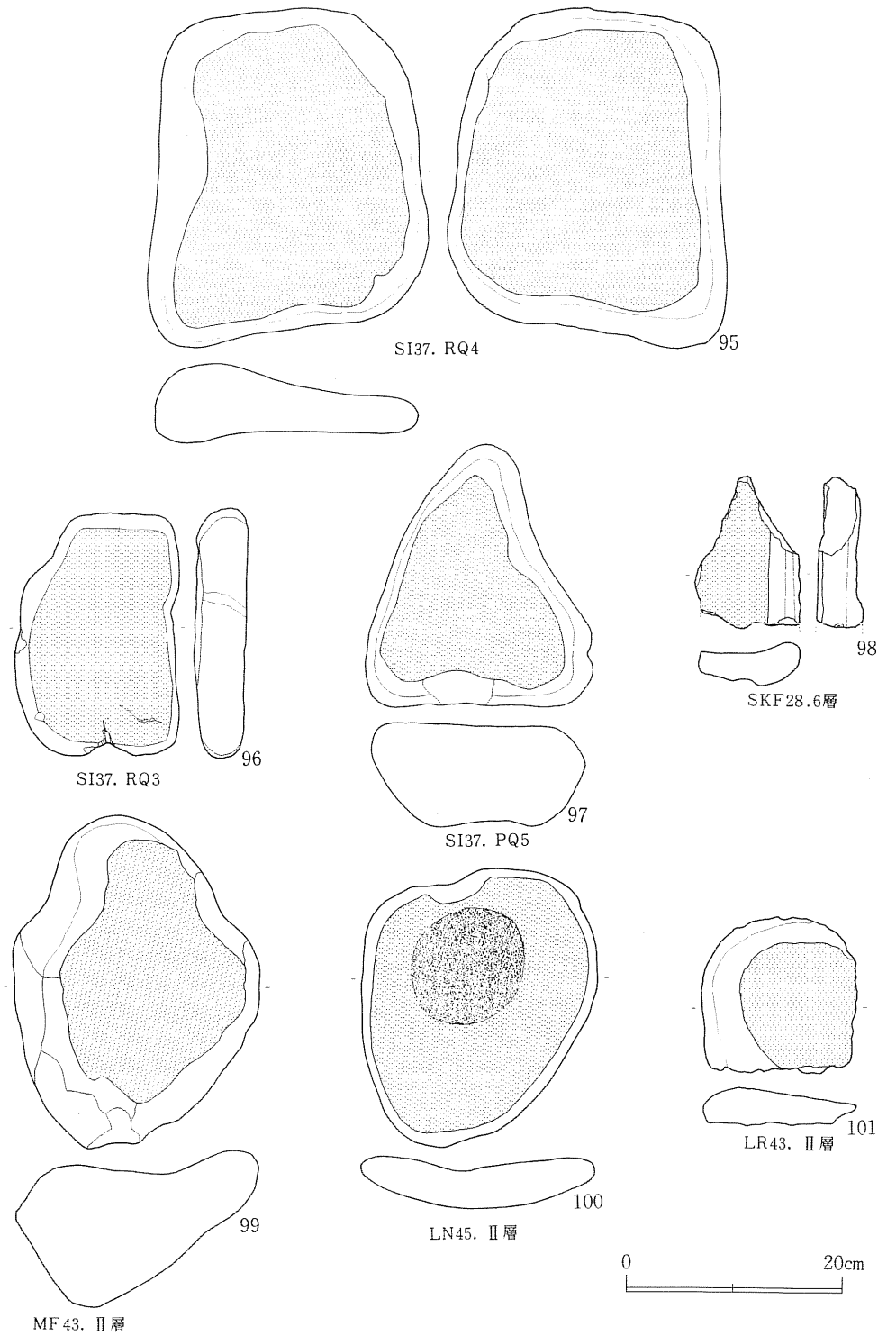



第30図　遺構外出土石器（9）

第31図　遺構外出土石器（10）




第32図　遺構外出土石器（11）




第33図　遺構内外出土石器

| 種類 | 挿図番号 | 出土地区 | 大きさ 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重量 | 石質 | 分類 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 石匙 | 1 | SI19 8層 | 10.5 | 4.1 | 1.4 | 43.9 | 泥岩 | b－4 |
| 篦状石器 | 2 | SI19 8層 | 9.4 | 4.0 | 1.8 | 76.3 | 頁岩 | A－1 |
| 削器 | 3 | SI19 8層 | 11.4 | 2.9 | 1.8 | 39.6 | 〃 | C |
| | 4 | SI19 8層 | 8.5 | 2.9 | 1.7 | 31.6 | 〃 | C |
| 擦石 | 5 | SI19 | 11.9 | 6.1 | 5.6 | 520 | 凝灰岩 | |
| 扁平半円状 | 6 | SI11 確認面 | 16.0 | 9.2 | 3.4 | 455 | 〃 | |
| 石鏃 | 7 | SI37 埋土 | 2.2 | 1.7 | 0.5 | 1.4 | 頁岩 | D |
| 円形 | 8 | SI37 埋土 | 2.1 | 2.1 | 0.5 | 1.9 | 〃 | |
| | 9 | SI37 埋土 | 2.5 | 2.1 | 0.5 | 2 | 〃 | |
| | 10 | SI37 埋土 | 1.5 | 2.8 | 0.6 | 2.5 | 〃 | |
| 石匙 | 11 | SI37 埋土 | 3.9 | 3.7 | 1.0 | 12.9 | 〃 | |
| 篦状石器 | 12 | SI37 埋土 | 9.2 | 3.9 | 2.3 | 62 | 〃 | B－2 |
| 削器 | 13 | SI37 埋土 | 7.9 | 6.7 | 2.9 | 115.7 | 〃 | |
| 凹石 | 14 | SI37 RQ2 | (11.7) | 9.3 | 6.2 | 788 | 流紋岩 | |
| | 15 | SI37 RQ1 | (11.2) | 8.6 | 6.2 | 823 | 安山岩 | |
| 半円状扁平打製 | 16 | SI37 | 10.2 | 10.8 | 2.3 | 275 | 凝灰岩 | |
| | 17 | SI37 | 12.8 | 8.3 | 3.2 | 457 | 〃 | |
| | 18 | SKF27 Ⅲ層 | 13.7 | 11.4 | 4.8 | 820 | 安山岩 | |
| 削器 | 19 | SM20 埋土 | 5.9 | 4.2 | 1.7 | 35.9 | 頁岩 | C |
| | 20 | SM20 埋土 | 7.1 | 5.7 | 2.9 | 59.2 | 〃 | F |
| 石鏃 | 21 | MD41 Ⅱ層 | 3.6 | 1.3 | 0.5 | 1.8 | 〃 | B |
| | 22 | LD54 Ⅱ層 | 3.5 | 1.9 | 0.5 | 1.8 | 〃 | B |
| | 23 | MD41 Ⅱ層 | 2.4 | 1.3 | 0.4 | 1.4 | 〃 | |
| 石錐 | 24 | ME57 Ⅱ層 | 4.2 | 2.6 | 0.8 | 7.5 | 玉髄 | E－b |
| | 25 | LT56 RQ7 | 9.0 | 4.6 | 1.6 | 45.7 | 頁岩 | E－a |
| | 26 | ME57 Ⅱ層 | 3.6 | 2.5 | 1.0 | 8.3 | 玉髄 | E－b |
| 石匙 | 27 | MB56 RQ1 | 4.4 | 5.2 | 1.5 | 20.7 | 頁岩 | d |
| | 28 | LQ55 | 2.6 | 5.1 | 0.6 | 5.2 | 〃 | b |
| | 29 | LM50 Ⅲ－b | 3.3 | 6.4 | 1.1 | 13.1 | 〃 | a |

| 種類 | 挿図番号 | 出土地区 | 大きさ 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重量 | 石質 | 分類 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 石匙 | 30 | MB56 Ⅱ層 | 6.6 | 3.7 | 1.5 | 18.7 | 頁岩 | b |
| 篦状石器 | 31 | MI50 Ⅰ層 | 7.5 | 4.2 | 1.7 | 40 | 〃 | A－3 |
| | 32 | MD57 Ⅱ層 | 5.8 | 3.4 | 1.2 | 18.5 | 〃 | B－2 |
| 掻器 | 33 | ME30 Ⅰ層 | 3.5 | 1.4 | 0.7 | 2.4 | 〃 | C |
| | 34 | ME30 Ⅰ層 | 3.4 | 1.5 | 0.8 | 3.7 | 〃 | C |
| 削器 | 35 | LP54 Ⅱ層 | 11.8 | 4.6 | 2.9 | 124 | 〃 | C |
| | 36 | MG53 Ⅱ層 | 9.4 | 6.1 | 1.8 | 65.3 | 〃 | C |
| | 37 | LN46 Ⅱ層 | 9.7 | 5.8 | 2.2 | 108 | 〃 | d |
| | 38 | LK50 Ⅱ層 | 5.2 | 6.5 | 1.7 | 48.1 | 〃 | e－1 |
| | 39 | MG51 Ⅱ層 | 5.5 | 4.8 | 1.7 | 24.7 | 〃 | e－2 |
| | 40 | MA56 Ⅱ層 | 5.1 | 5.0 | 1.6 | 36.7 | 〃 | e－3 |
| | 41 | MC44 Ⅱ層 | 4.9 | 4.2 | 1.0 | 17.3 | 〃 | |
| | 42 | LN49 Ⅰ－b | 6.5 | 6.3 | 2.8 | 87.8 | 〃 | |
| たたき石 | 43 | MA56 RQ5 | 6.4 | 6.6 | 2.8 | 135.9 | 〃 | |
| 残核 | 44 | ME44 Ⅰ層 | 7.7 | 4.6 | 2.8 | 76.2 | 〃 | |
| | 45 | MF53 Ⅰ－b | 5.2 | 3.8 | 2.8 | 47.6 | 〃 | |
| 燕尾形 | 46 | LR38 Ⅱ層 | 12.9 | 2.9 | 1.0 | 56 | 〃 | |
| 磨製石斧 | 47 | LK50 Ⅱ層 | 8.4 | 5.9 | 2.8 | 218 | 安山岩 | |
| 石錘 | 48 | LS55 Ⅲ層 | 8.7 | 7.8 | 2.4 | 142 | 凝灰岩 | ⅠA |
| | 49 | LT45 Ⅲ－b | 12.3 | 8.9 | 3.6 | 370 | 〃 | ⅠB |
| 打製石斧 | 50 | LM48 Ⅱ層 | 9.7 | 7.8 | 2.5 | 246 | 閃緑岩 | |
| 線刻礫 | 51 | LP54 RQ16 | 9.3 | 7.7 | 2.0 | 154 | 凝灰岩 | |
| 半円状扁平打製石器 | 52 | LR54 Ⅲ層 | 13.1 | 10 | 2.3 | 302 | 〃 | ⅠA |
| | 53 | LS37 Ⅱ層 | 10.6 | 7.7 | 2.3 | 220 | 〃 | ⅠA |
| | 54 | 表面採集 | 13.6 | 8.2 | 3.3 | 390 | 安山岩 | ⅠA |
| | 55 | LR48 Ⅰ－b | 13.6 | 8.7 | 2.9 | 425 | 凝灰岩 | ⅠA |
| | 56 | RQ71 LN45 | 16.3 | 9.2 | 3.0 | 532 | 〃 | |
| | 57 | LS47 Ⅰ－b | 14.3 | 8.9 | 3.8 | 589 | 〃 | ⅠB |
| | 58 | LO43 Ⅱ層 | 15.2 | 8.6 | 2.7 | 475 | 〃 | Ⅱ1 |

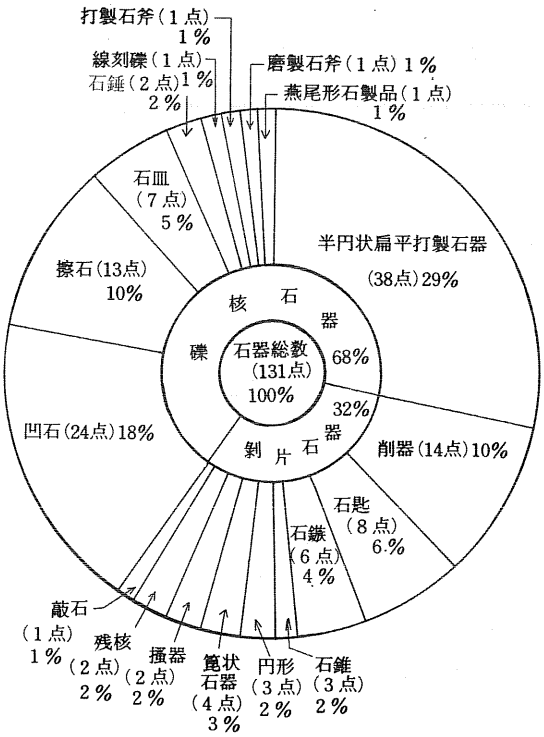
第1表　出土石器観察表

| 種類 | 挿図番号 | 出土地区 | 大きさ 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重量 | 石質 | 分類 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 半円状扁平打製石器 | 59 | LO44 RQ24 | 17.9 | 11 | 3.0 | 755 | 安山岩 | Ⅱ1 |
| | 60 | LM48 RQ22 | 14.7 | 7.7 | 2.4 | 305 | 凝灰岩 | Ⅱ2 |
| | 61 | LO53 Ⅱ層 | 14.3 | 8.3 | 2.7 | 380 | 〃 | Ⅲ2 |
| | 62 | LN48 Ⅰ－b | 18.4 | 8.7 | 3.6 | 627 | 頁岩 | Ⅲ2 |
| | 63 | MG53 Ⅱ層 | 15.5 | 5.8 | 2.8 | 323 | 凝灰岩 | Ⅲ2 |
| | 64 | LO54 Ⅱ層 | 15.4 | 6.9 | 3.0 | 337 | 〃 | Ⅲ2 |
| | 65 | MG52 RQ34 | 13.6 | 7.6 | 2.5 | 345 | 〃 | Ⅲ2 |
| | 66 | LS45 Ⅲ－b | 11.7 | 8.6 | 3.4 | 294 | 安山岩 | Ⅲ2 |
| | 67 | LR48 Ⅱ層 | 14.5 | 7.8 | 2.5 | 356 | 〃 | Ⅳ1 |
| | 68 | LN46 Ⅲ層 | 15.0 | 9.6 | 3.0 | 525 | 凝灰岩 | Ⅳ1 |
| | 69 | MH56 Ⅱ層 | 14.6 | 7.2 | 3.1 | 386 | 泥岩 | Ⅳ1 |
| | 70 | MF53 RQ36 | 15.2 | 7.8 | 2.2 | 270 | 安山岩 | Ⅳ1 |
| | 71 | LT54 Ⅰ－b | 15.4 | 9.4 | 2.7 | 351 | 凝灰岩 | Ⅳ3 |
| | 72 | MC57 Ⅱ層 | 13.5 | 8.0 | 3.5 | 420 | 〃 | Ⅴ1 |
| | 73 | LO49 Ⅰ－b | 16 | 11.6 | 3.7 | 851 | 〃 | Ⅴ1 |
| | 74 | LR43 RQ28 | 16.7 | 8.3 | 2.7 | 413 | 〃 | Ⅴ2 |
| | 75 | LM47 RQ20 | 14.9 | 7.8 | 2.8 | 363 | 安山岩 | Ⅴ2 |
| | 76 | LP54 Ⅱ層 | 13.5 | 8.1 | 2.6 | 310 | 凝灰岩 | Ⅴ3 |
| 凹石 | 77 | 表面採集 | 9.9 | 9.2 | 3.6 | 314 | 〃 | ⅠA |
| | 78 | LQ41 Ⅱ層 | 8.3 | 9.0 | 3.9 | 360 | 安山岩 | ⅠA |
| | 79 | LP54 Ⅱ層 | 15.1 | 6.8 | 4.5 | 461 | 〃 | ⅡA |
| | 80 | LP54 Ⅱ層 | 10.9 | 7.9 | 4.0 | 363 | 〃 | ⅡA |
| | 81 | MC57 Ⅱ層 | 14.6 | 5.4 | 4.2 | 358 | 泥岩 | ⅡA |
| | 82 | MC57 Ⅱ層 | 10 | 8.4 | 4.6 | 423 | 凝灰岩 | ⅡB |
| | 83 | LR40 Ⅱ層 | 10.6 | 8.6 | 5.1 | 640 | 花崗岩 | ⅡB |
| | 84 | LP43 Ⅱ層 | 10.1 | 8.1 | 6.2 | 641 | 〃 | ⅡC |
| | 85 | LQ40 Ⅱ層 | 12.7 | 9.2 | 6.0 | 1150 | 凝灰岩 | ⅡC |
| | 86 | LL49 Ⅱ層 | 14 | 10 | 3.6 | 620 | 〃 | ⅡC |
| | 87 | RQ52 LQ54 | 11.4 | 7.7 | 4.9 | 484 | 流紋岩 | ⅡC |
| 擦石 | 88 | LR45 Ⅲ－b | 10.4 | 9.3 | 5.7 | 782 | 花崗岩 | A2 |
| | 89 | LT56 RQ5 | 14 | 6.1 | 5.4 | 649 | 〃 | |
| | 90 | MI50 Ⅲ層 | 14 | 6.3 | 5.2 | 580 | 〃 | |
| | 91 | LO45 Ⅱ層 | 17.7 | 8.7 | 6.9 | 1250 | 〃 | |
| | 92 | MF55 Ⅱ層 | 17.5 | 8.2 | 7.8 | 1530 | 〃 | |
| | 93 | LT54 Ⅰ－b | 21.6 | 8.6 | 4.8 | 1110 | 安山岩 | |
| | 94 | LP43 Ⅱ層 | 15.6 | 8.2 | 4.6 | 663 | 砂岩 | |
| 石Ⅲ | 95 | SI37 RQ4 | 32 | 26.4 | 7.4 | 6230 | 凝灰岩 | |
| | 96 | SI37 RQ3 | 23.1 | 15.7 | 5.1 | 2700 | 安山岩 | |
| | 97 | SI37 RQ5 | 25.1 | 21.2 | 9.8 | 5550 | 〃 | |
| | 98 | SKF28 6層 | (14.5) | (9.7) | 4.4 | 423 | 砂岩 | |
| | 99 | MF43 Ⅱ層 | 31.6 | 23.1 | 14.6 | 7790 | 凝灰岩 | |
| | 100 | LN45 PQ70 | 26.3 | 22 | 4.9 | 3410 | 安山岩 | |
| | 101 | LP43 Ⅱ層 | (14.8) | 14.4 | 3.7 | 925 | 凝灰岩 | |

（単位は、cm及びg）

※分類は上ノ山Ⅱ遺跡の基準に従った

第2表　出土石器観察表




第３表　石器種類別の出土割合

# 第3章　ま　と　め

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡4軒、土器埋設遺構1基、土坑25基、焼土遺構13基である。出土遺物は縄文時代前期・中期・晩期の土器とそれに伴う石器、弥生時代の土器などである。遺構の占地を見てみると、焼土遺構以外は台地の縁辺部それに近い位置にあり、特にフラスコ状土坑はその傾向が強い。焼土遺構は南側に多く分布しており、その周辺に遺構は少ない。中央部は開田による削平が著しく、遺構の有無を確認することは困難であった。出土遺物からは、縄文時代前期から中期にかけて構築された遺構であることが判明したが、前期の遺構が縁辺部か斜面肩部に占地する傾向が比較的強いことがうかがえる。中央部寄りに位置する、小規模な円形の土坑（SK 24～26・35・36）は比較的良好に残っていた。このうち、SK 24以外は配石をもつもので、出土遺物がなく特定できないが、その形態から縄文時代後・晩期のものと思われる。さらに、遺構外から晩期の土器が出土していることを考え合わせると、その時期に構築された可能性が強い。

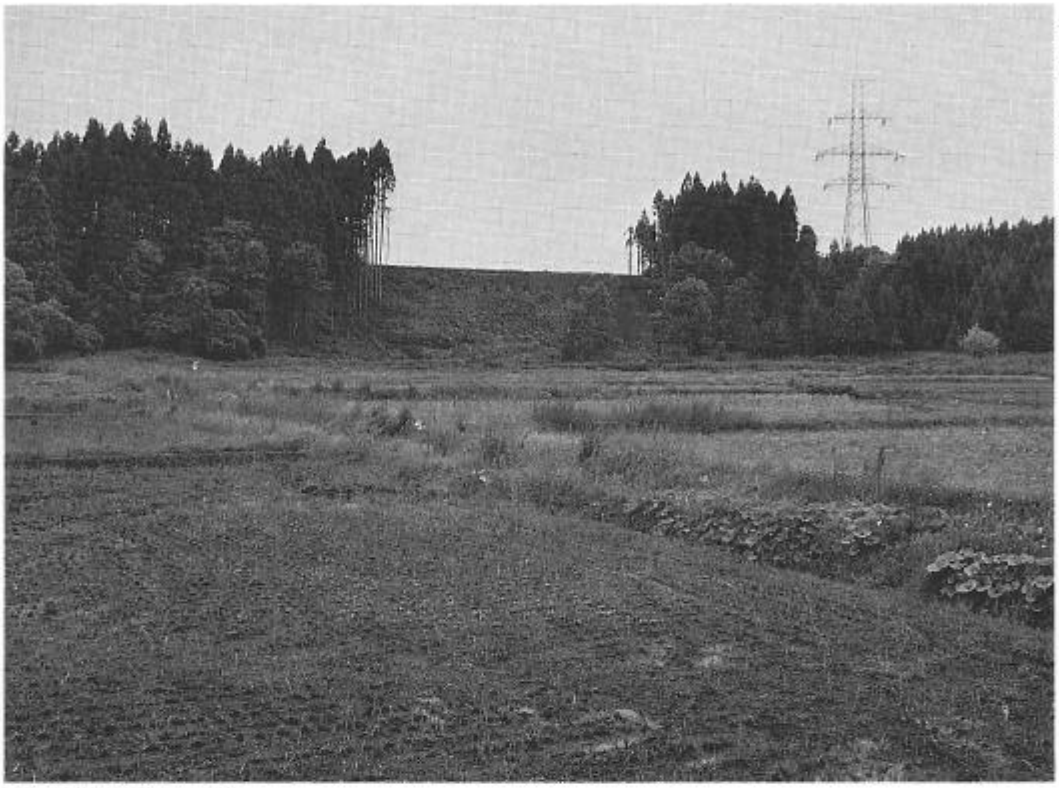
検出した竪穴住居跡のうち縄文時代のものは4軒あり、炉をもつものが2軒である。SI 34は炉のみの確認で全体の形状は不明であるが、石をほぼ円形に並べ、その中に土器を斜めに埋設したものである。SI 37は2時期の重複であるが、このうちSI 37 Aは、石を略方形に並べ、その中に土器を斜めに埋設したものである。このように石囲炉中に土器を斜めに用いる例はこれまで県内ではないが、大岱Ⅰ遺跡のSI 03とやや類似性がある(註1)。大岱Ⅰ遺跡の炉は、円形石組炉で、炉石の間に粗製深鉢形土器の口縁を、二重に炉の内側に向けて横位に置いたもので、縄文時代後期初頭に属する。県外では岩手県の湯沢遺跡(註2)に共通性が見られる。湯沢遺跡の炉は、「石組形斜位土器埋設炉……円形の石組の一端に土器を斜めに埋設したもの(註3)」で、縄文時代中期末葉の大木10式期に比定され、本遺跡の時期と同じである。また、SI 37 Bの炉は、石囲部の外に掘り込みをもつもので、「前庭部付石組炉(註4)」と呼ばれるものである。SI 37は前記のように2時期の重複があり、「石組形斜位土器埋設炉」から「前庭部付石組炉」へと変遷したことが判明したが、いずれも類例が少なく、資料の増加を待って検討したい。

註1　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』　1984（昭和59年）

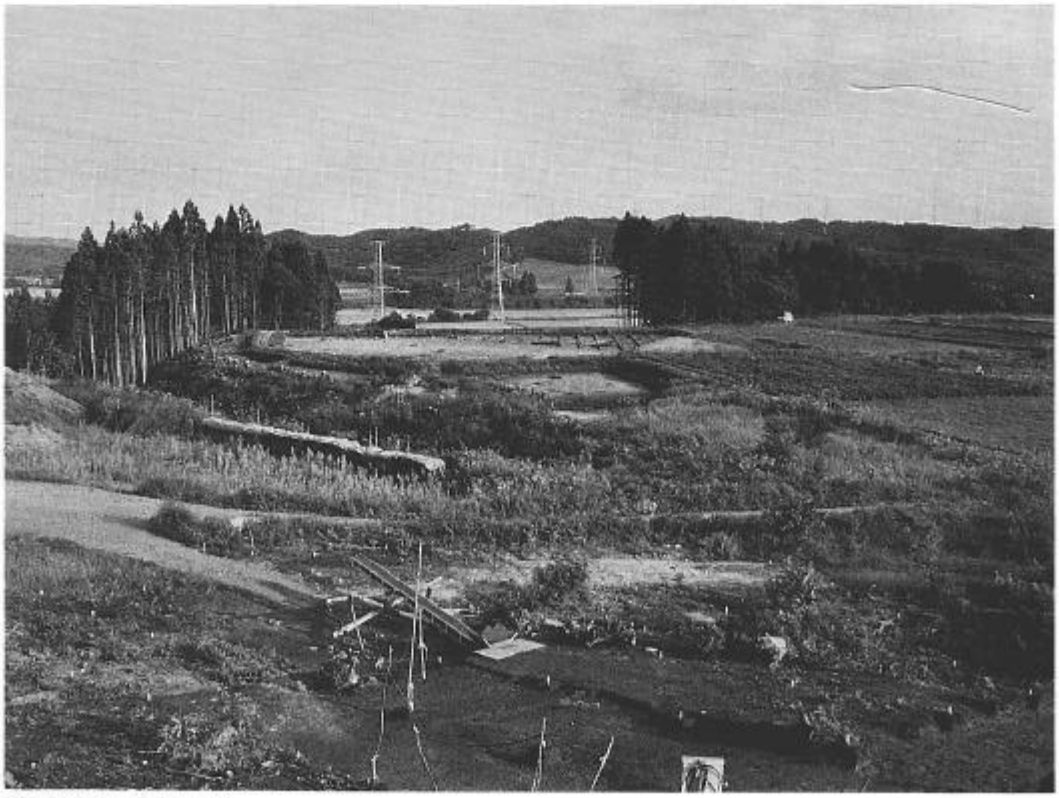
註2　岩手県埋蔵文化財センター『都南村湯沢遺跡』1978（昭和53年）

註3　目黒吉明「住居の炉」『縄文文化の研究8』雄山閣　1982（昭和57年）

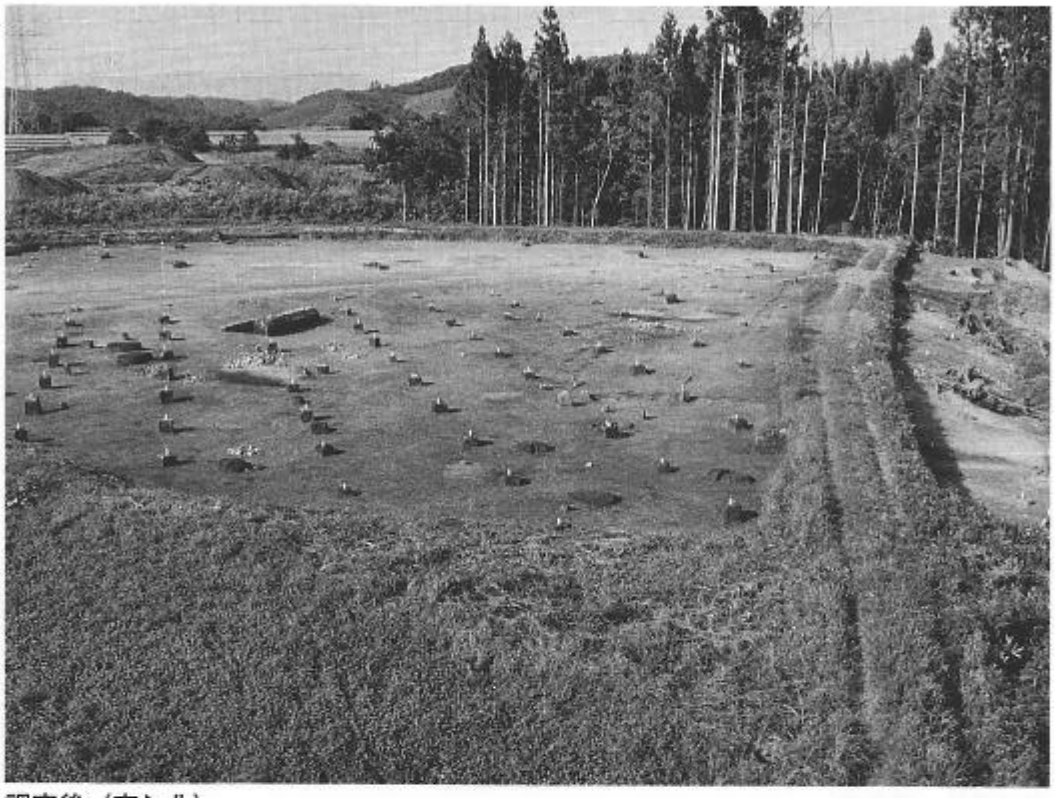
註4　註3文献と同じ



遺跡遠景（南▶北）

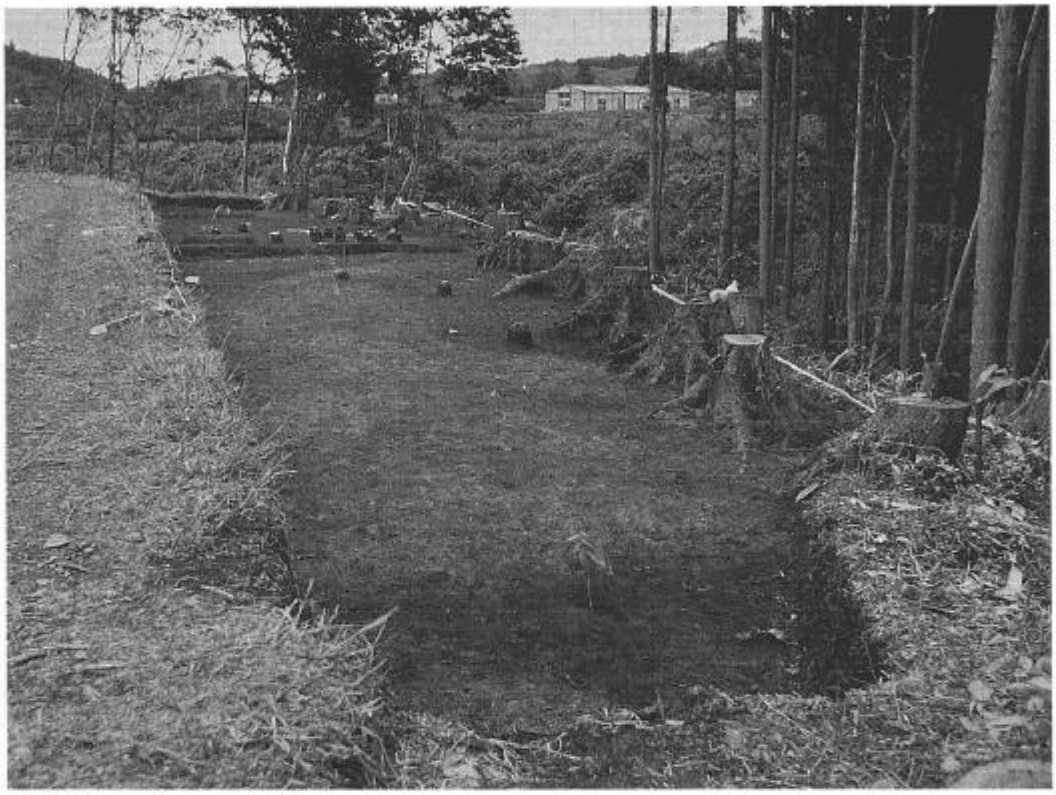


遺跡遠景（南▶北）

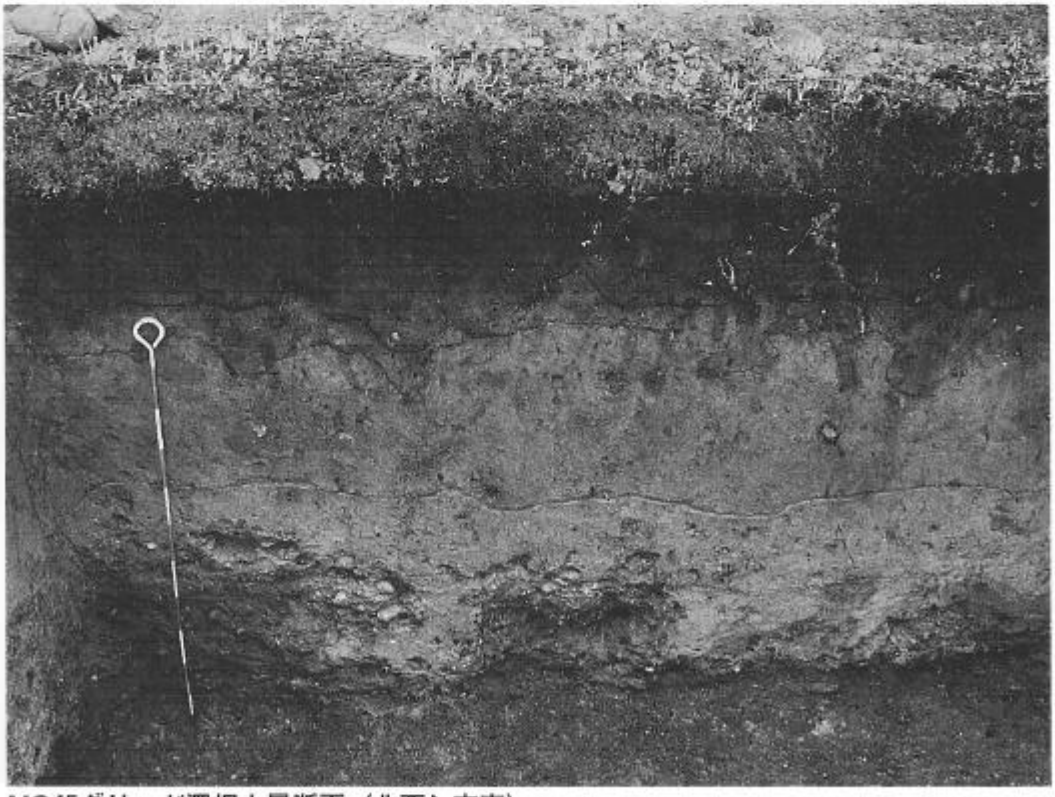


調査後（南▶北）

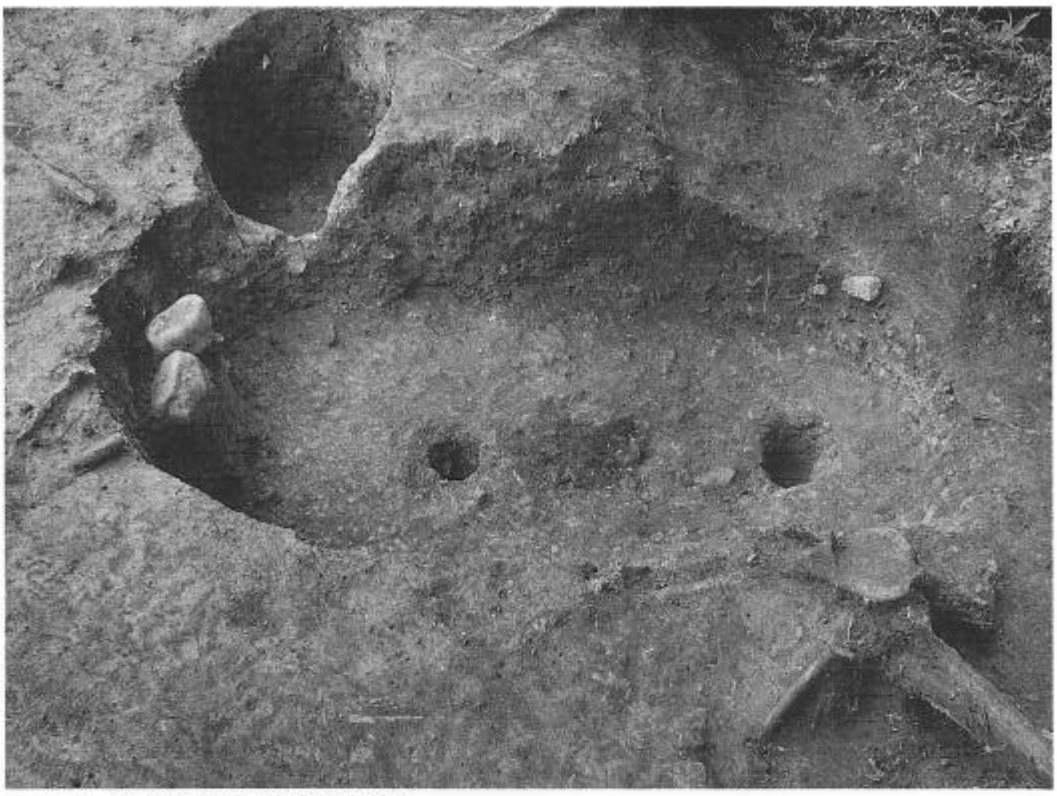
北東部調査後（北西▶南東）



東端部調査状況（南▶北）



MC45グリッド深掘土層断面（北西▶南東）



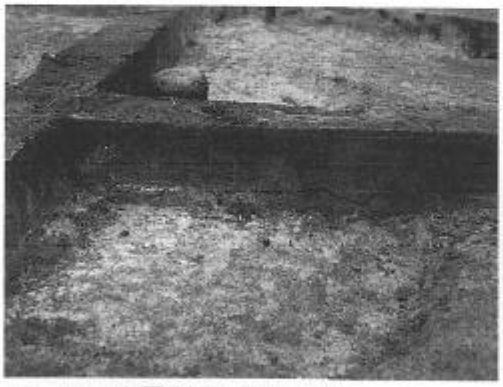
SI 19　竪穴住居跡（南東▶北西）

SI 19　竪穴住居跡（北東▶南西）

SI 11　完掘状況（北東▶南西）

SI 37　完掘状況（南東▶北西）

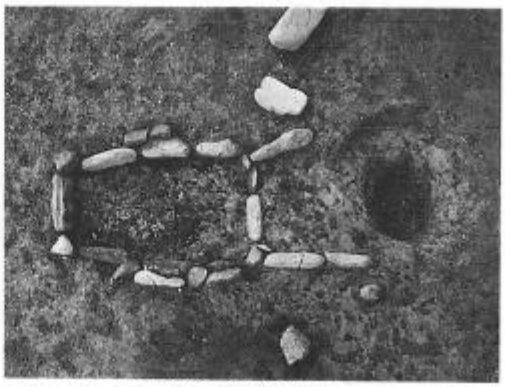
SI 37　A・B完掘状況（東▶西）



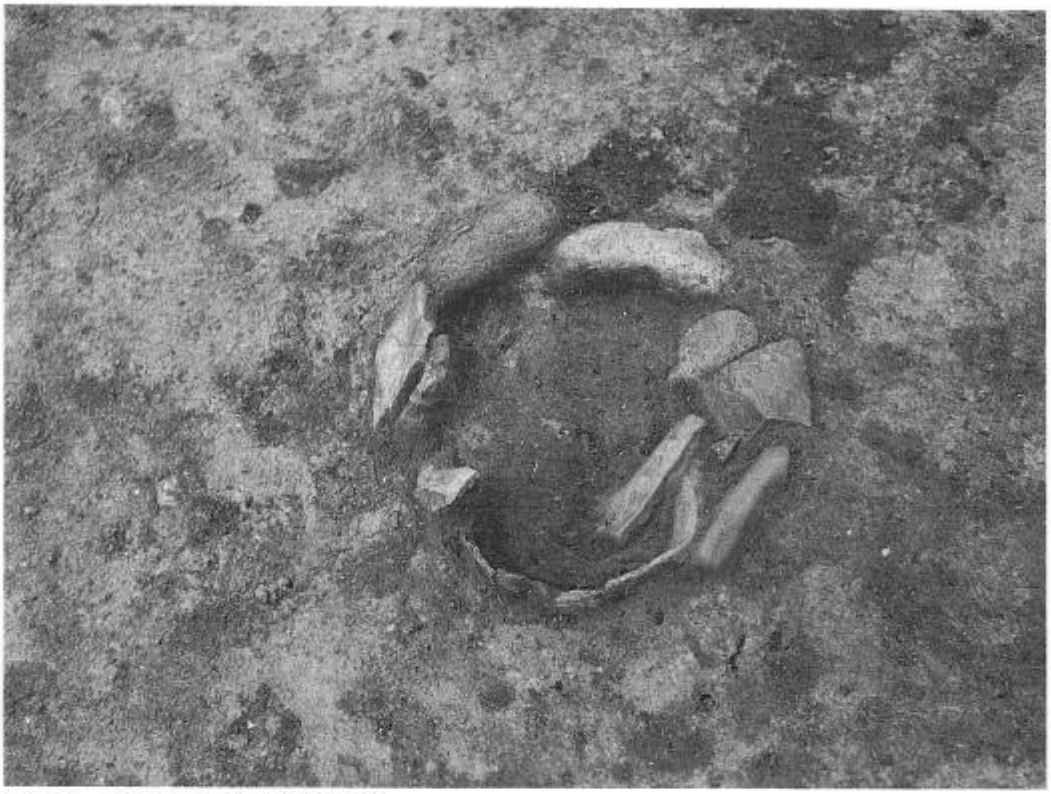
SI 37　土層断面（北▶南）

SI 37　Aの炉（西▶東）

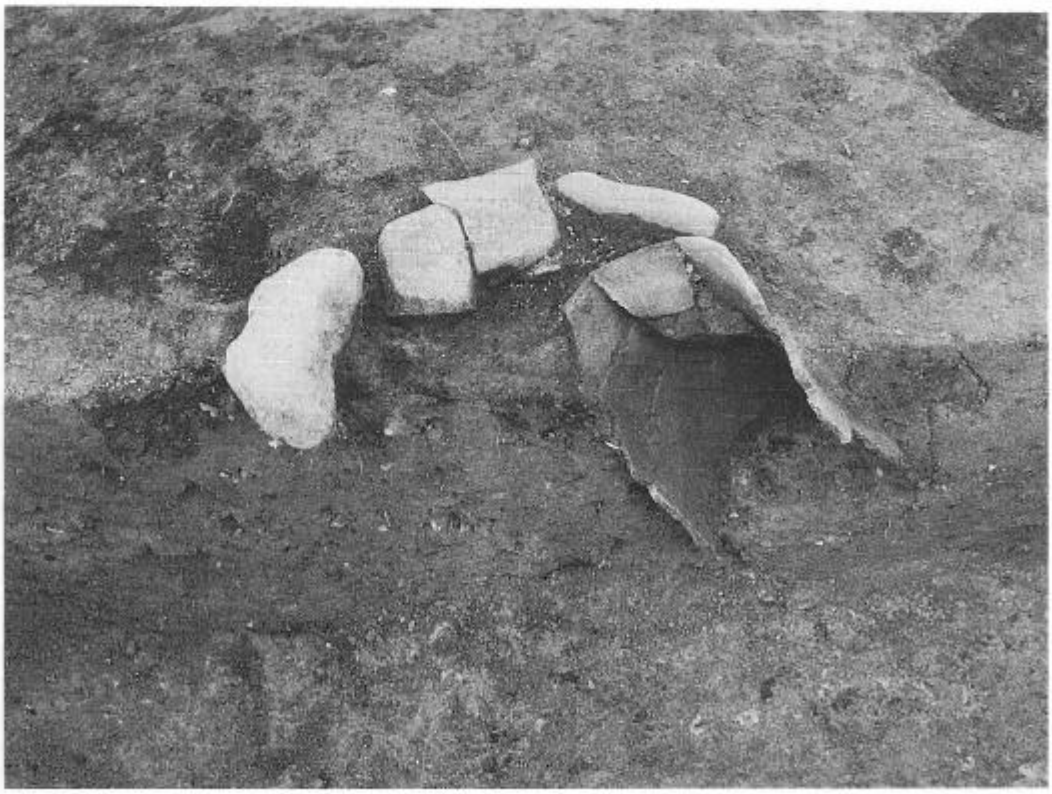
SI 37　Aの炉（西▶東）



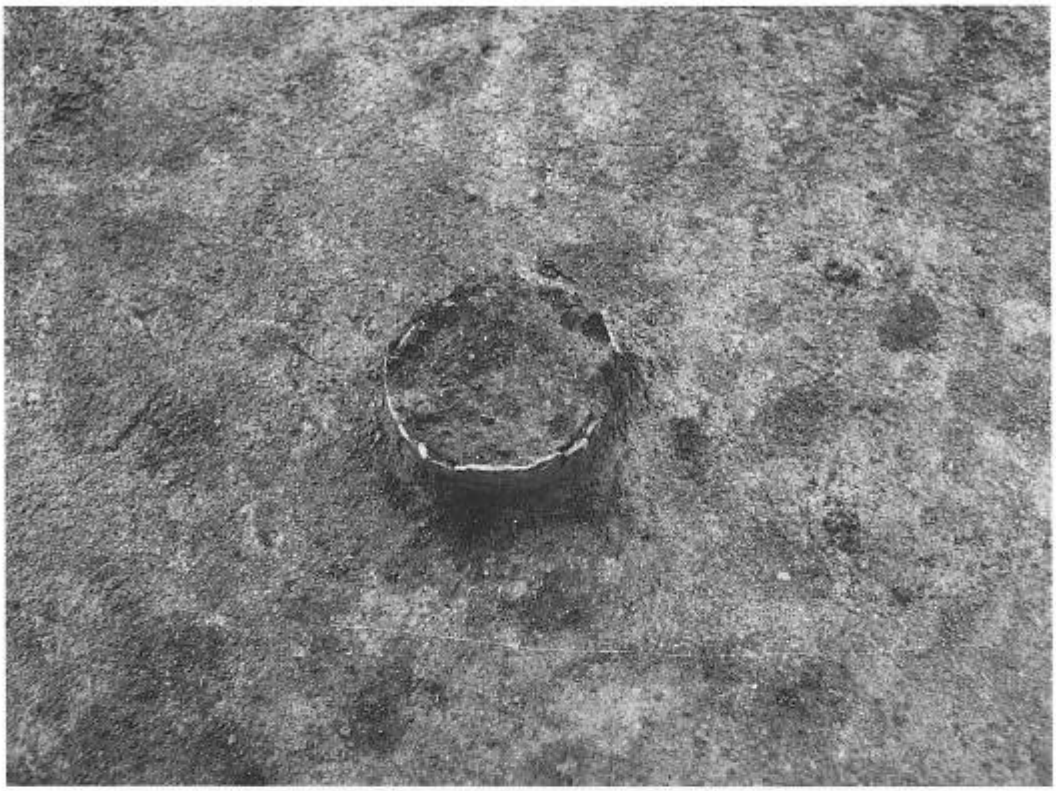
SI 37　B石組炉検出状況



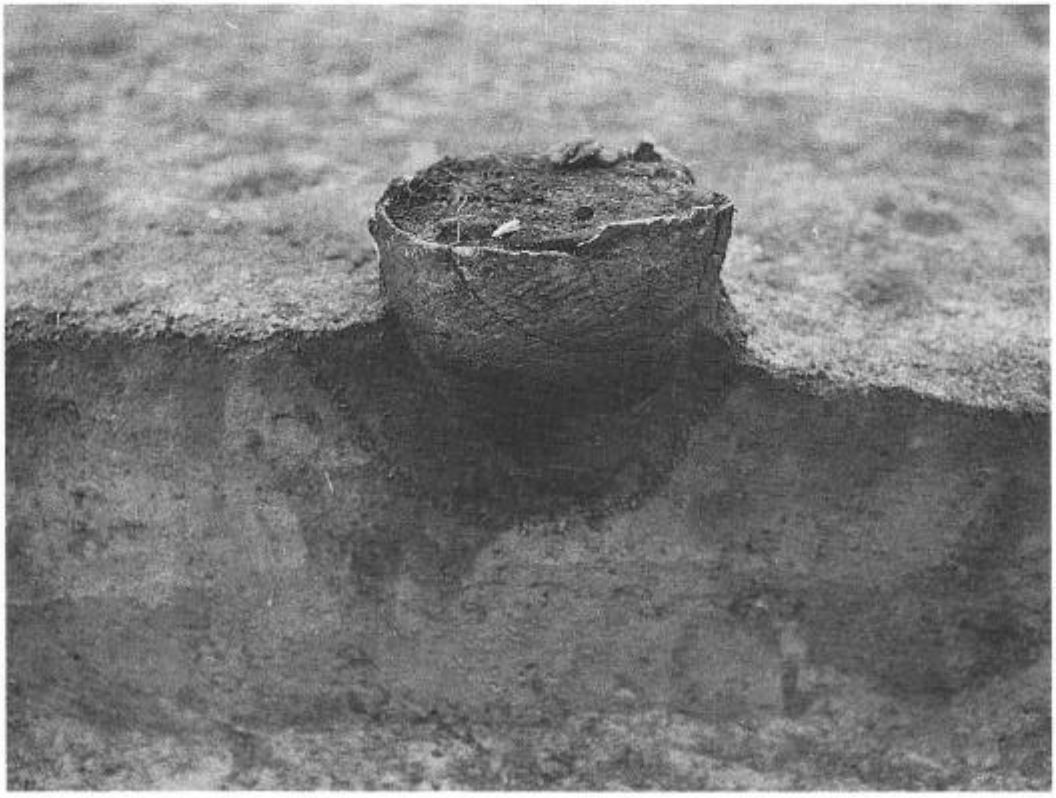
SI　34　検出状況（北東▶南西）



SI　34　立割り状況（北東▶南西）



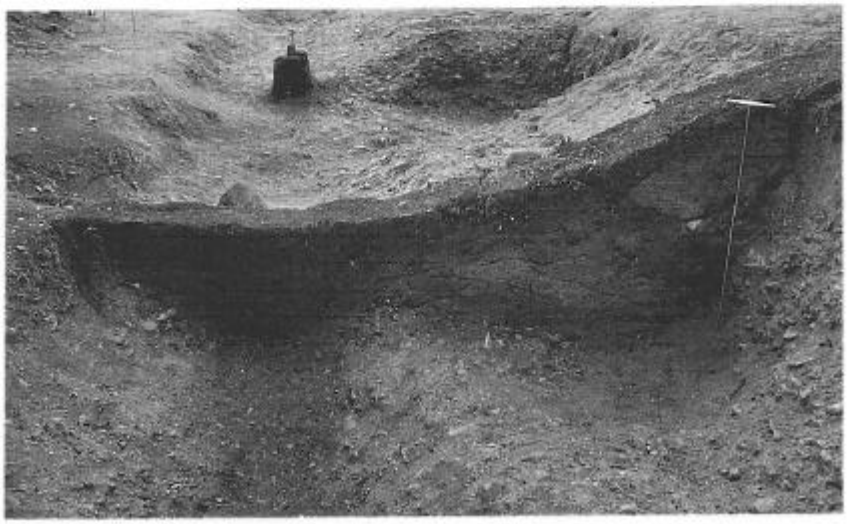
SR33　検出状況（東▶西）



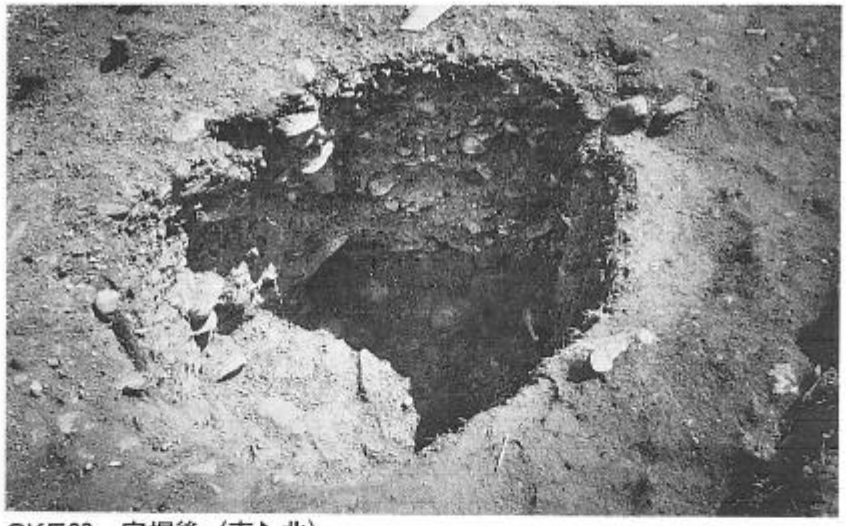
SR33　埋設状況（東▶西）

南端部遺構検出状況（南▶北）

南端部遺構検出状況（北東▶南西）

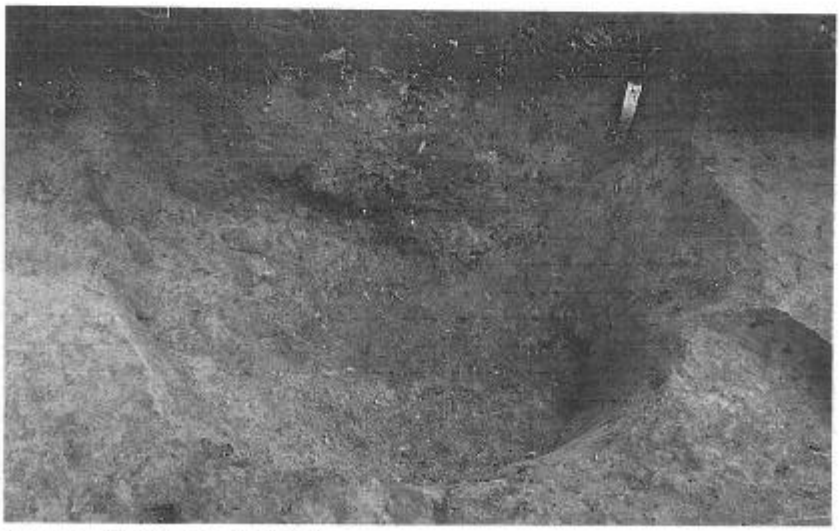


SKF22　SM20　土層断面（北東▶南西）

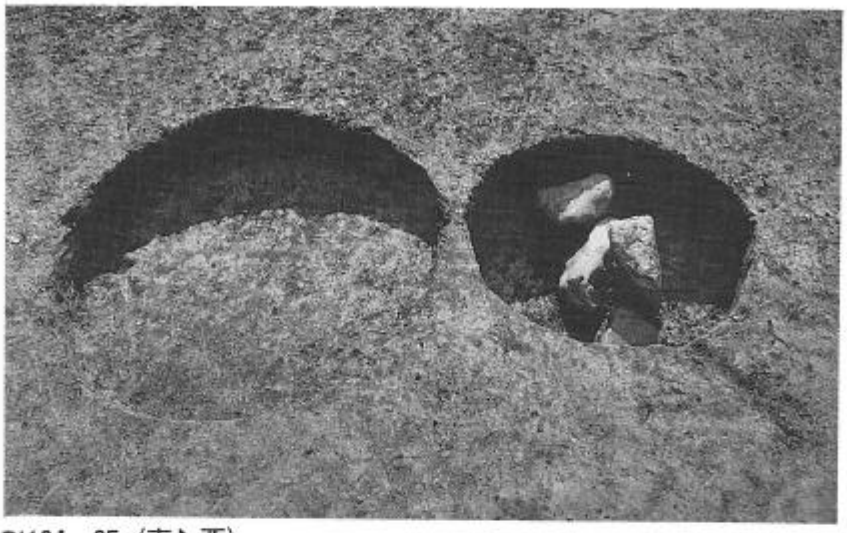


SKF23　完掘後（南▶北）

SK16　土層断面（南東▶北西）

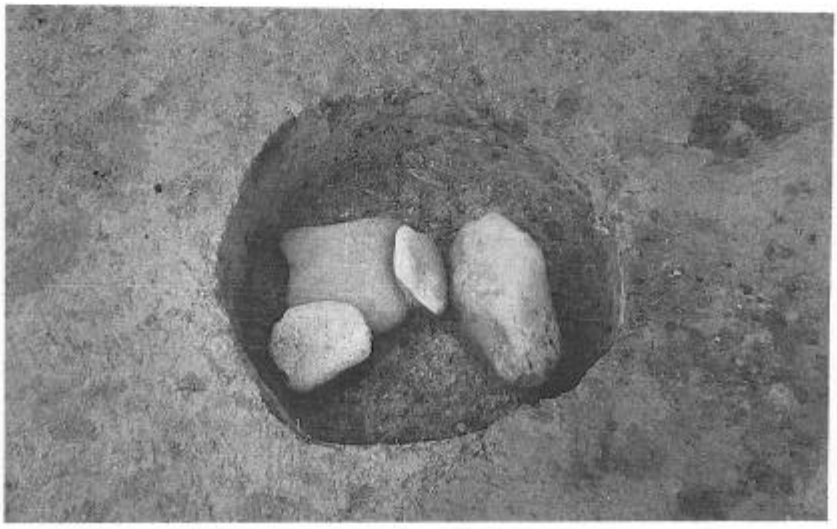


SK16　完掘状況（東▶西）



SK24　25（東▶西）

SK24（南▶北）

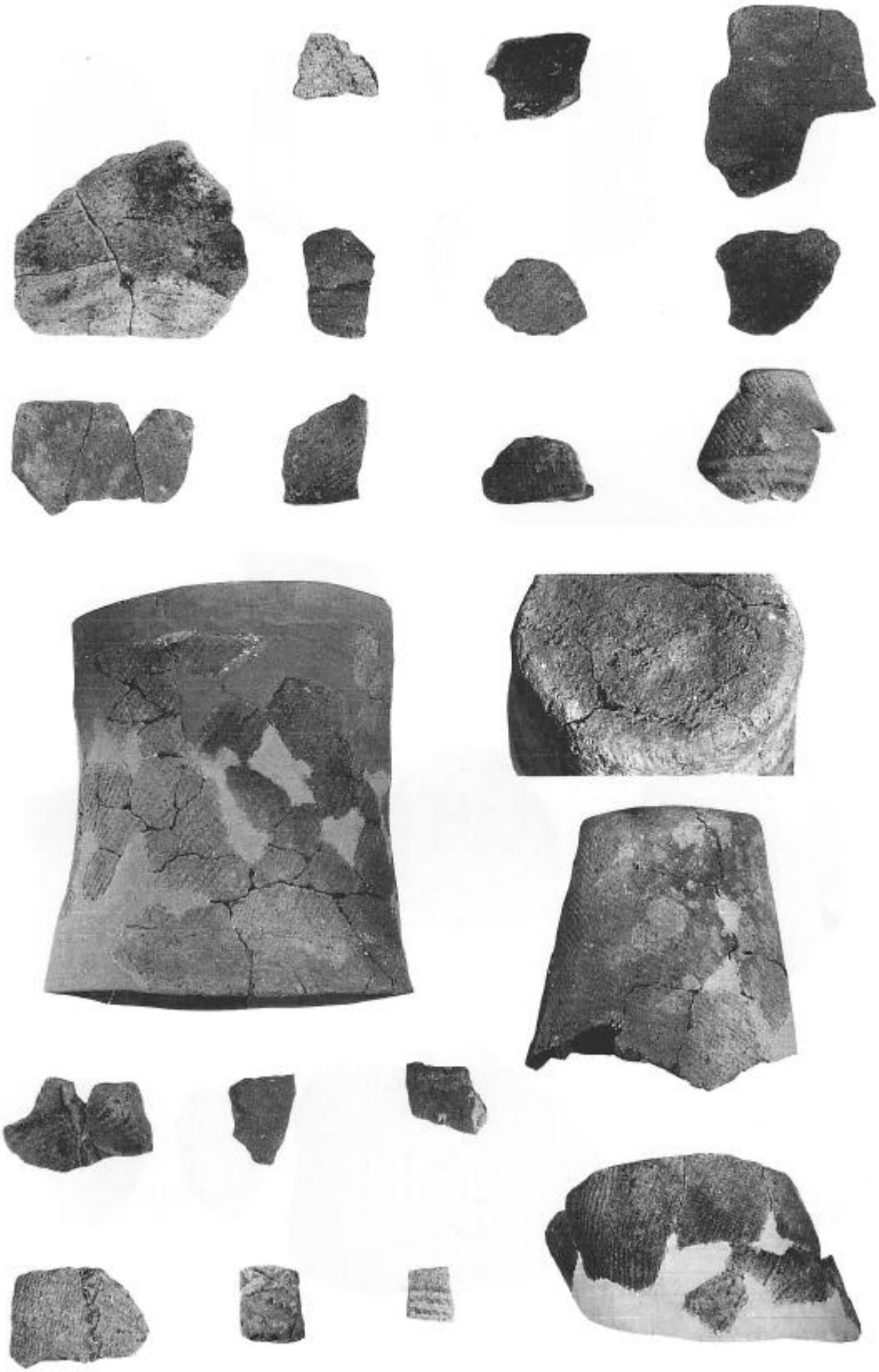


SK26　完掘状況（北▶南）

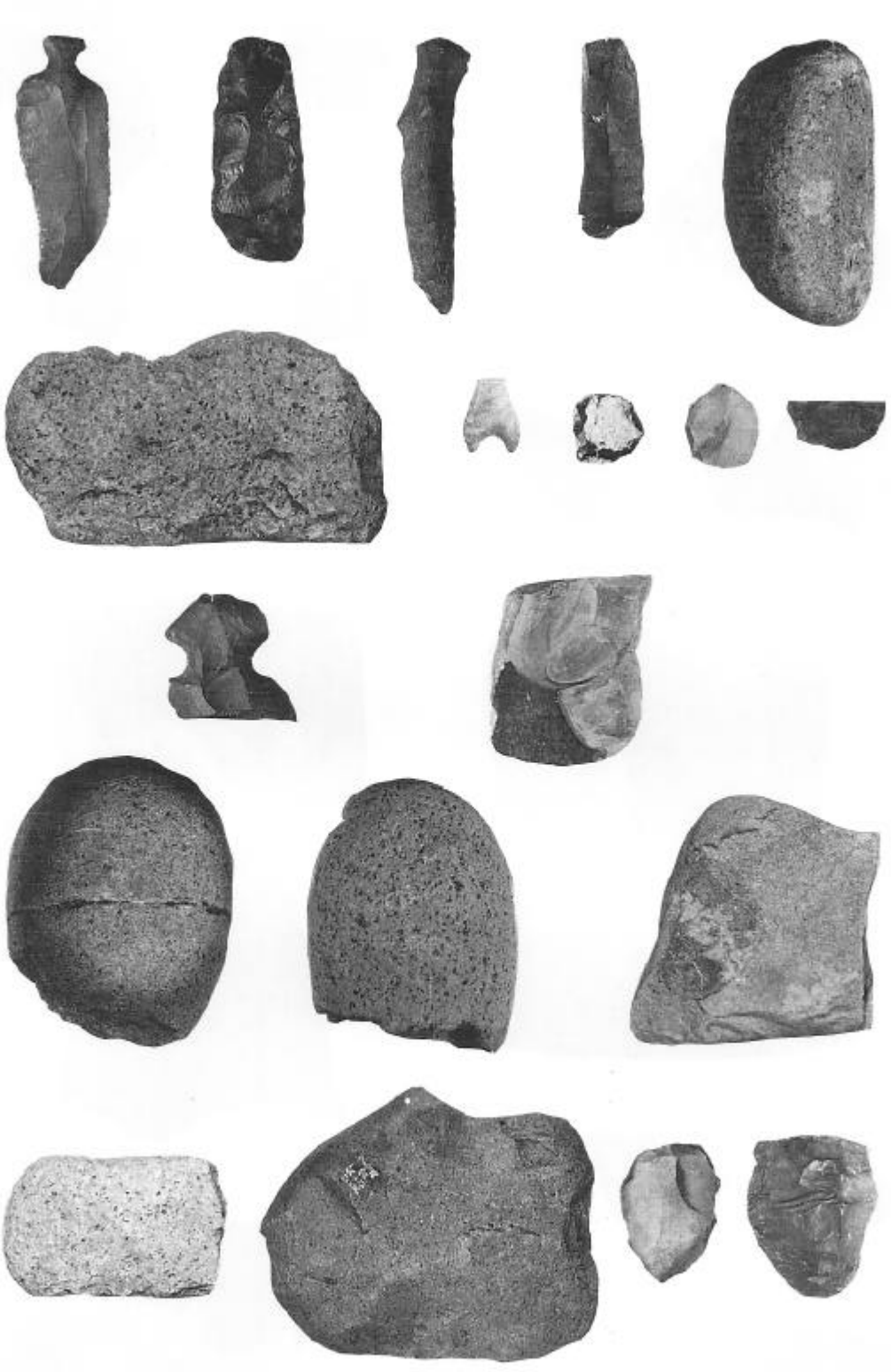
SK06　完掘状況（北西▶南東）

SK06　土層断面（北東▶南西）

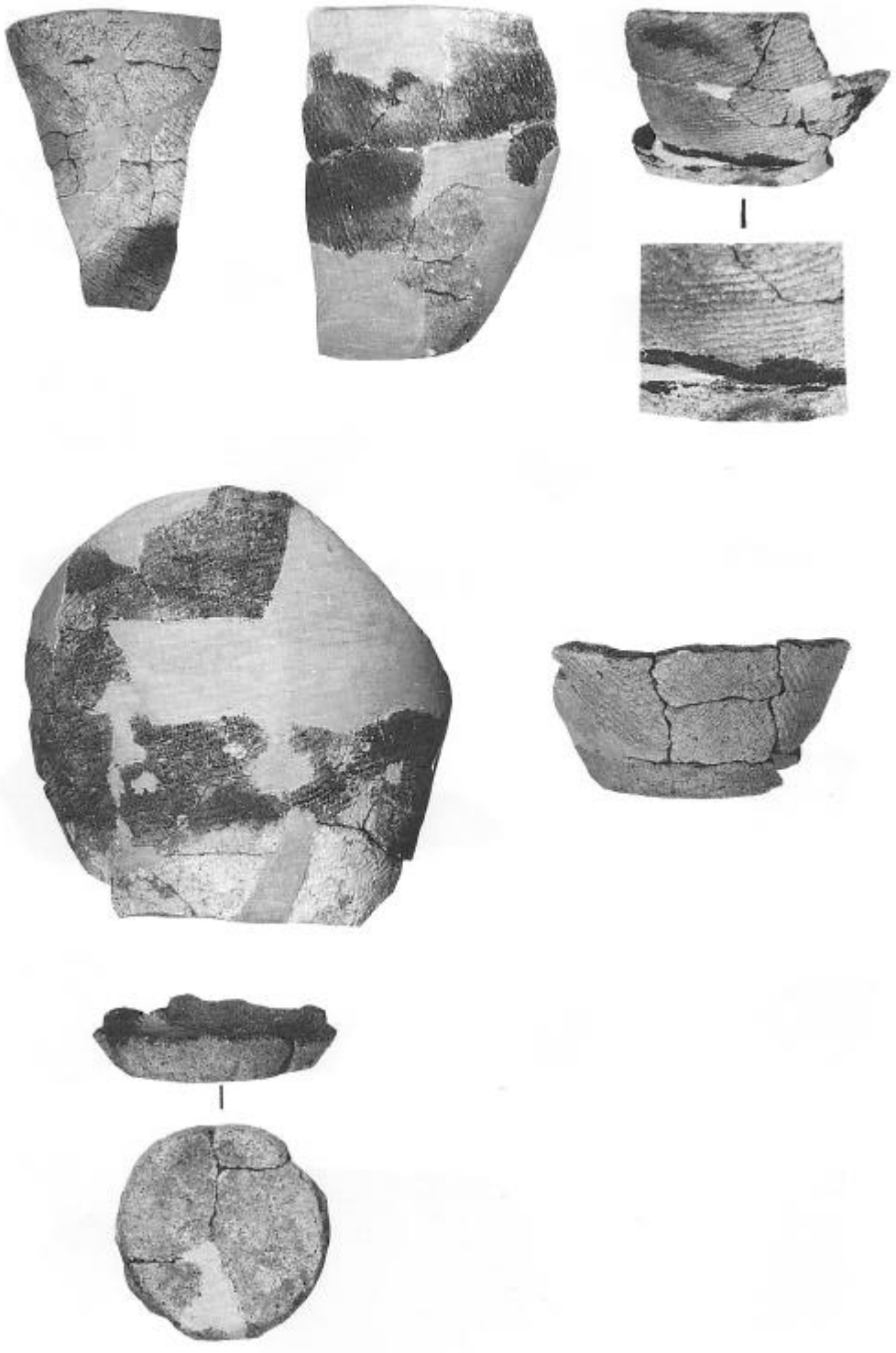
SK12　完掘状況（北東▶南西）



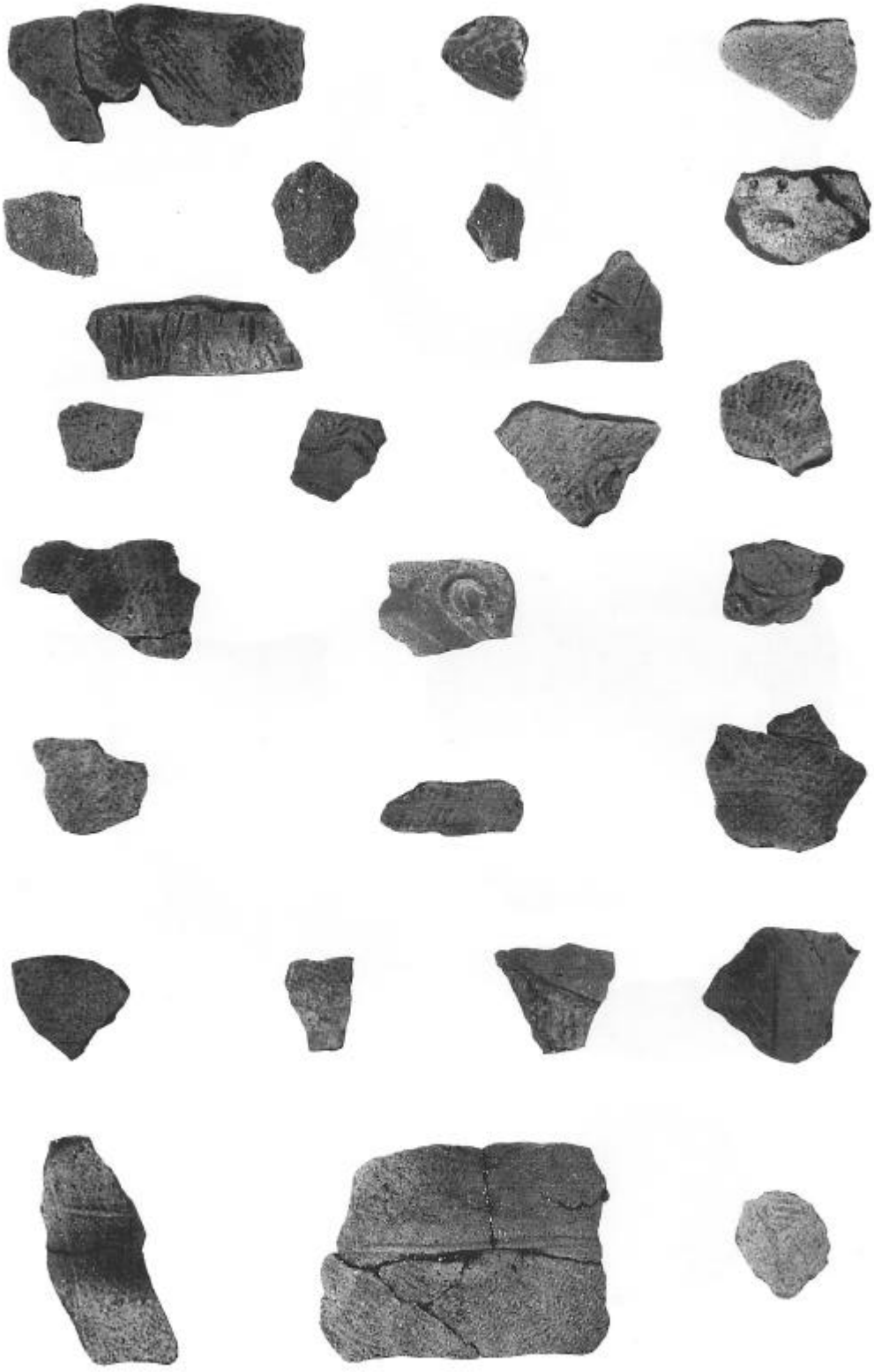
遺構内出土石器（1）



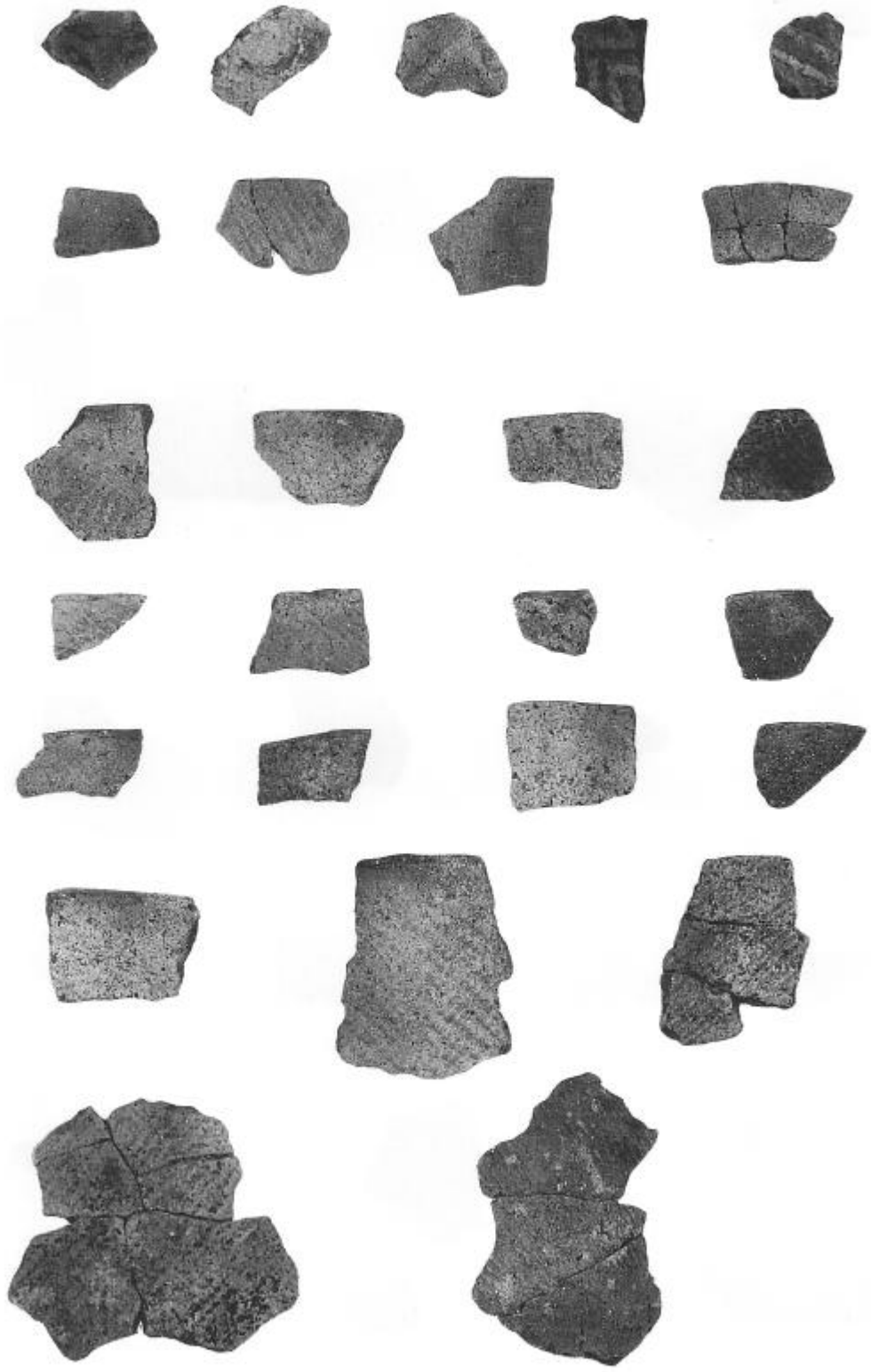
遺構内出土石器（2）



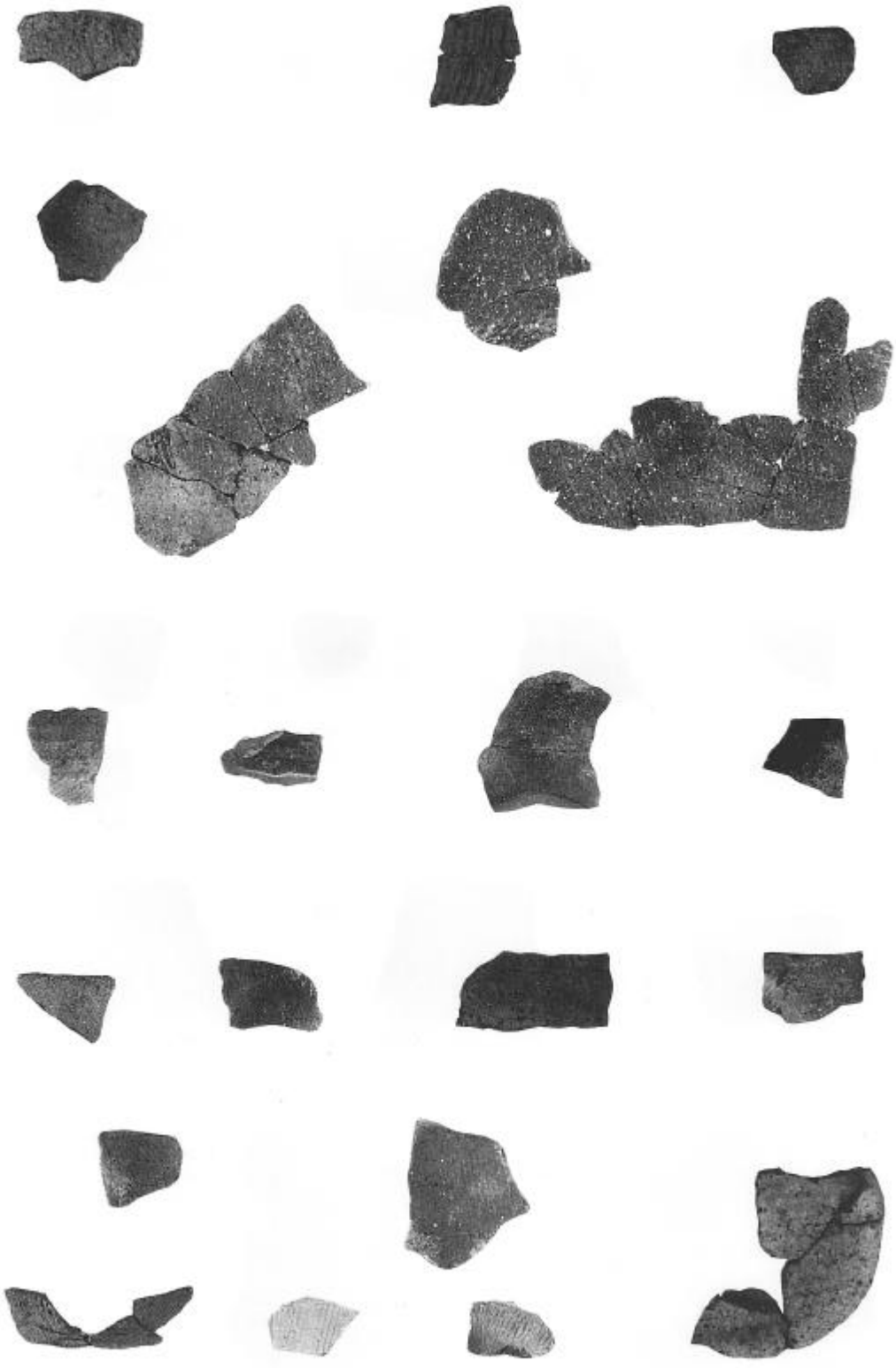
遺構外出土石器（1）



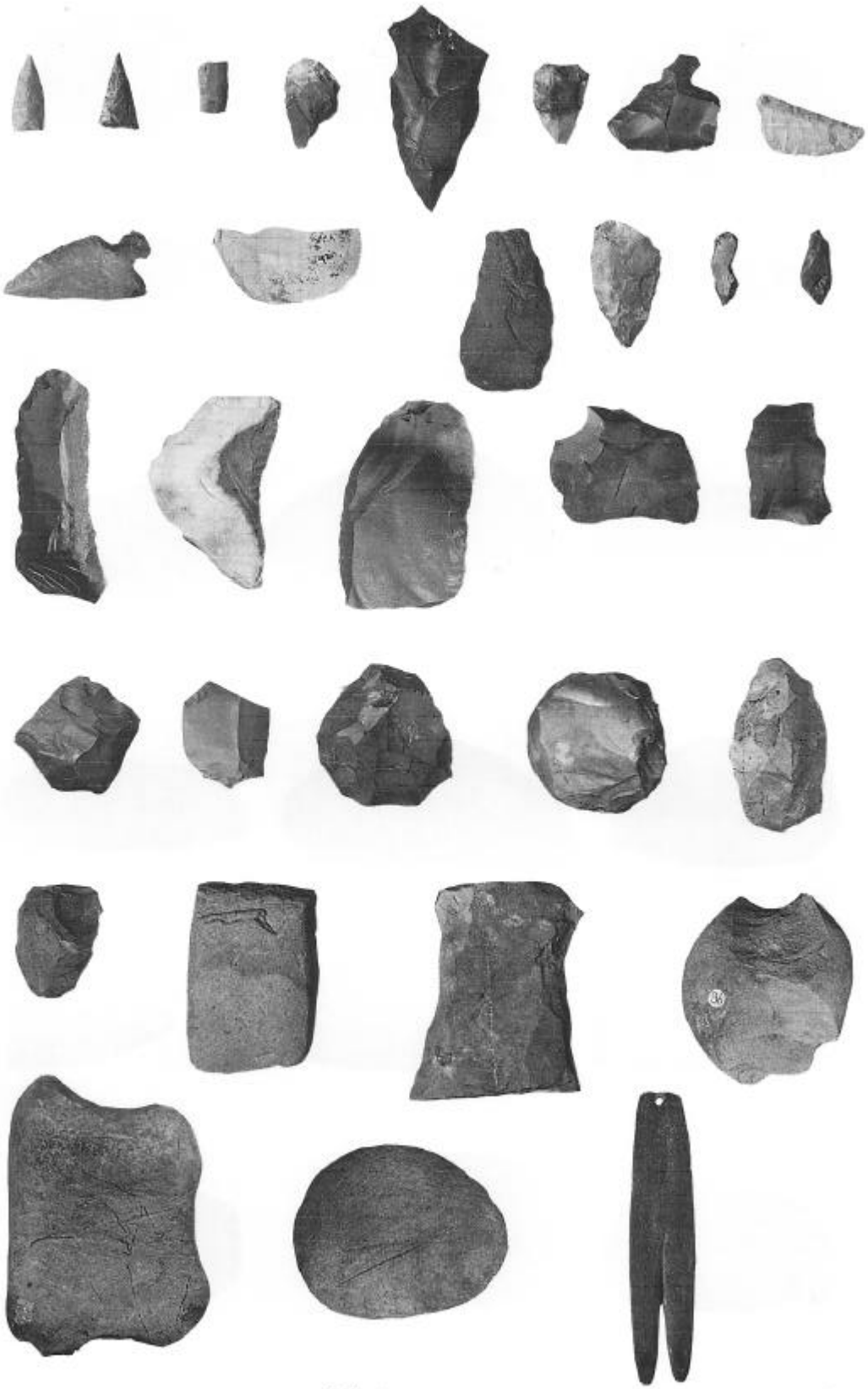
遺構外出土石器（2）



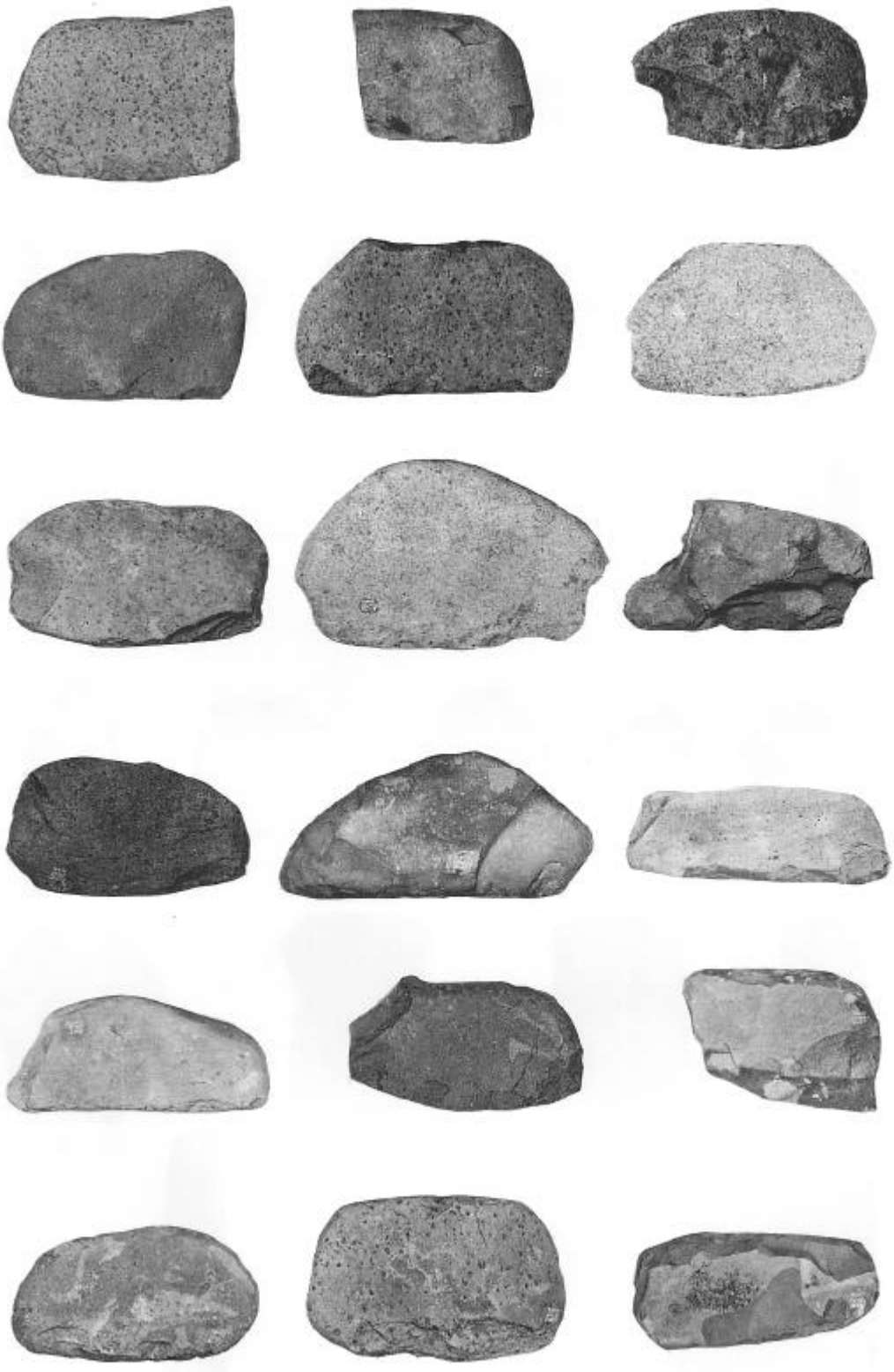
遺構外出土石器（3）



遺構外出土石器（4）



遺構外出土石器（5）



遺構外出土石器（6）

# Ⅳ　館野遺跡

（7TN・№38）

所　在　地　秋田県仙北郡協和町中淀川字千着館野184他
調査期間　昭和61年9月12日～12月9日
調査面積　4,900㎡

第１図　遺跡周辺の地形と調査区

# 第1章　調査の概要

## 第1節　遺跡の概観

館野遺跡は、奥羽本線羽後境駅から南西3.8㎞の地点に位置する。遺跡は雄物川の支流淀川の右岸に発達して南東へ舌状に張り出した河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は46m前後で、調査地区を除いたその大半は杉林である。また、遺跡西側の沢目をはさんで隣接する南西側の台地上には、上ノ山Ⅰ遺跡（遺跡№29）が所在し、同台地より一段高い西側の台地上には、上ノ山Ⅱ遺跡（遺跡№30）が所在している。調査地区の現況は、調査区外南側の墓所に通じる農道が南北に走っており、この農道を境に東側が杉林と水田、西側が休耕田（牧草地）となっている。調査地区の標高は46m前後の平坦地で、MDライン付近から西側の沢にかけては緩く傾斜している。

なお、調査区全域は、過去に行なわれた水田造成の際に遺構確認面である第Ⅳ層面まで攪乱を受けており、遺存状態の良好な遺構は少なかった。また、LGライン付近からMDライン付近にかけては第Ⅱ層を欠如する箇所が多く、ほとんど遺物も出土しなかった。調査区全体で土層は以下の通り分けられた。

第Ⅰ層は13～40㎝の層厚をもつ表土（耕作土）であり、農道東側は黒色、農道西側は暗褐色を呈する。

第Ⅱ層は3～38㎝の層厚をもつ黒褐色土である。縄文土器片、石器を含んでいるが、水田造成時に攪乱を受けたものと推定される。

第Ⅲ層は6～14㎝の層厚をもつ褐色粘質土である。第Ⅳ層漸移層で縄文土器片などを若干含んでいる。

第Ⅳ層は明黄褐色粘質土で小砂礫を含んでいる。上面で縄文時代の遺構が確認できる。

## 第2節　調査の経過

4月30日～5月15日まで範囲確認調査を実施した。その結果、高速道路建設予定地内の発掘対象区域は、水田造成などによって第Ⅳ層まで攪乱を受けていることが判明した。これを基に6月下旬、バックホーで第Ⅰ層表土除去と抜根を行い、その後グリッド杭を打設した。

館野遺跡の発掘調査は、昭和61年9月12日から12月9日まで実施した。

9月12日、発掘機材の搬入と調査区の草刈り作業を行った。翌13日、農道西側から粗掘りと遺構確認精査を開始し、土坑1基（SK 01）を検出した。24日、土坑2基（SK 02・03）、翌25日は、土坑14基（SK 04～17）を検出した。また縄文土器と石器などが少量出土した。29日、農道西側調査区の調査と平行して、同東側調査区の粗掘りと遺構確認精査を開始した。30日、土坑2基（SK 18・19）を検出した。10月1日から検出された遺構の調査を始めた。6日、土坑2基（SK 20・21）、7日にも土坑2基（SK 22・23）を検出した。15日は土坑4基（SK 24～26・28）、竪穴住居跡1軒（SI 27）、掘立柱建物跡1棟（SB 29）を検出した。25日、ほぼ粗掘りを終了。この後11月7日までに土坑16基（SK 30・33～47）、陥し穴状遺構1基（SKT 31）、焼土遺構1基（SN 32）を検出したが、遺物の出土量は少ない。13日、SK 06・34・41・42は現代の攪乱や木の根跡であることが判明したため欠番とした。また17日には、SK 08・10・11・14・16・17は同一の竪穴住居跡に伴う柱穴であり、SK 09・12は、この竪穴住居跡の地床炉であることが判明したため、SI 08として他の遺構は欠番とした。28日、SI 27と重複関係にある土坑1基（SK 48）、掘立柱建物跡1棟（SB 49）を検出。同日、遺構確認精査とSB 49を除く各遺構の調査を終了した。12月8日、全遺構の実測と写真撮影および発掘後の調査区全景の写真撮影を終えた。9日、発掘器材を撤収し、館野遺跡の発掘調査を終了した。

61
58
55
52
49
46
43
40
SK45
SK28
SK30
SKT31
SK46
SK36
SK39
SB49
SN32
SB29
SK40
SK33
SK43
SK35
SK47
SK44
SI27
SK48
SK26
SK25
SK04
SK05
SK23
SK02
SK22
SK07
SK03
SI08
SK15
SK20
SK13
SK21
SK01
SK37
SK18
SK19
SK24
LL
LI
LF
LC
KT
KQ
MJ
MG
MD
MA
LR
LO
0
20 m

第２図　遺構配置図

# 第２章　調査の記録

## 第１節　検出遺構と遺物

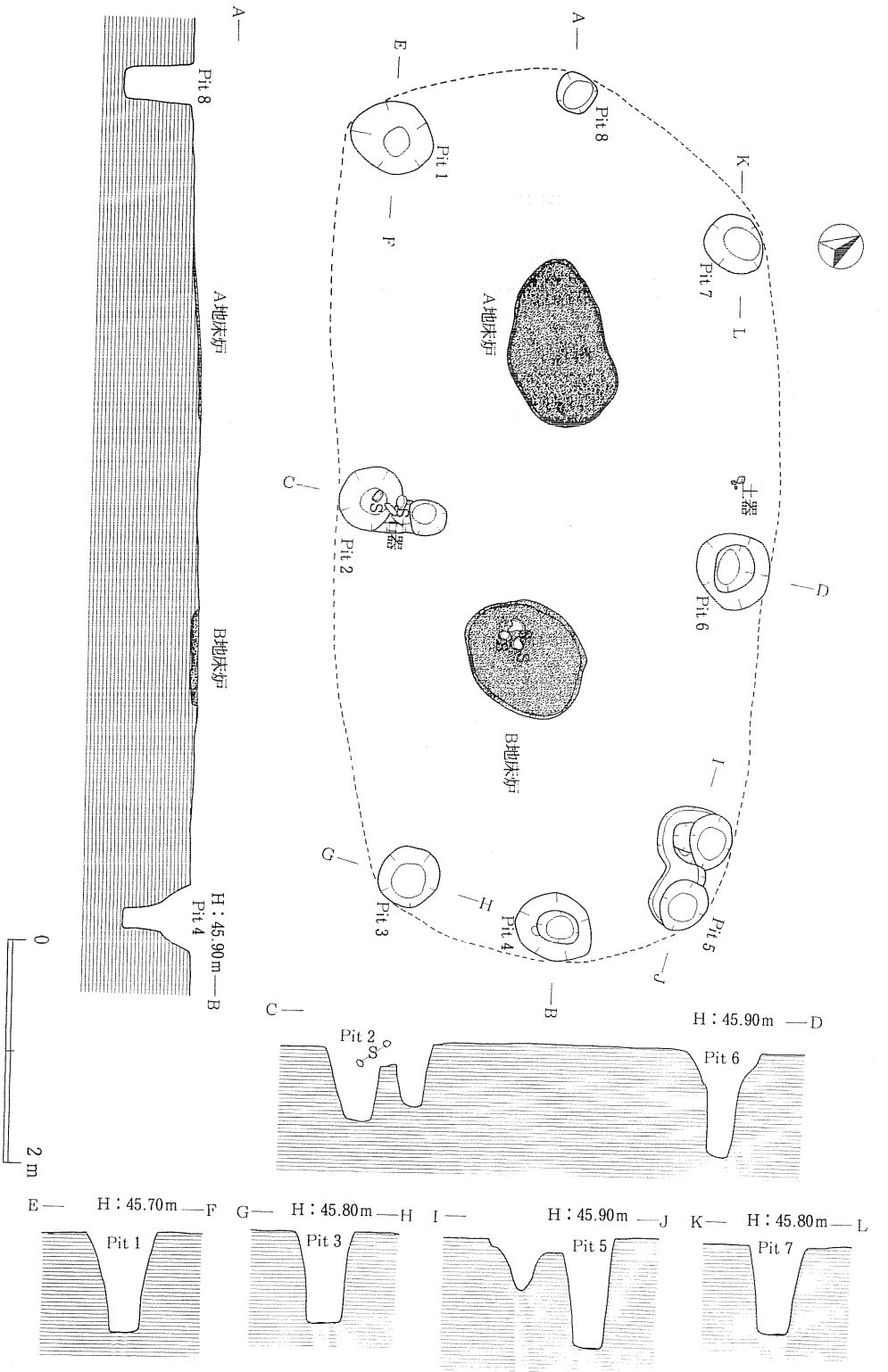
本調査では、縄文時代の竪穴住居跡２軒、土坑31基、陥し穴状遺構１基、焼土遺構１基、その他時期不明の掘立柱建物跡２棟の計37遺構が検出されたが、第１章の第１節でも記した通り調査区全域が水田造成の際に、遺構確認面である第Ⅳ層明黄褐色粘質土面まで攪乱されており、遺存状態の良好な遺構はほとんどなかった。遺物は縄文時代前期・中期・晩期の土器片と石器が出土したが、その出土量は遺構内外合わせてコンテナ（大）４箱であった。また37遺構のうち遺物が出土したのは９遺構と少なかった。

### １　竪穴住居跡

**SI08**　（第２・３図、図版３）

MD 45～47、ME 46・47、MF 46・47 グリッドにかけて確認され、SK 13・15 と重複している。SK 13 は本竪穴住居跡の床面を掘り込んで構築されており、本竪穴住居跡より新しい。SK 15 は Pit 4 の確認面と同レベルで確認されたが、新旧関係を決定できる遺物も出土しなかったため本竪穴住居跡との新旧関係は不明である。本竪穴住居跡の平面形は、検出された８個の柱穴の位置関係から長楕円形を呈するものと推察される。またその規模は推定で、長軸（北西―南東）7.96 m、短軸（北東―南西）3.88 m、床面積 25 ㎡である。壁は水田造成によって削平されており、明確に把握することができなかった。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。住居壁に沿うと思われる各柱穴の平面形はほぼ円形を呈しており、Pit 1 は径0.75m・深さ0.9m、Pit 2 は径 0.6 m・深さ 0.67 m、Pit 3 は径 0.56 m・深さ 0.82 m、Pit 4 は径 0.69 m・深さ 0.6 m、Pit 5 は径 0.47 m・深さ 1 m、Pit 6 は径 0.68 m・深さ 0.93 m、Pit 7 は径 0.54 m・深さ 0.79 m、Pit 8 は径 0.38 m・深さ 0.6 m を測る。炉は地床炉が２基あり、それぞれ床面中央部を境として、北西側と南東側に位置している。北西側の A 地床炉の平面形は楕円形を呈し、長軸（北西―南東）1.5 m、短軸（北東―南西）0.9 m を測り、0.02 m ほど凹んでいる。南東側の B 地床炉の平面形も楕円形を呈しており、長軸（北東―南西）1.14 m、短軸（北西―南東）0.94 m を測り、0.04～0.07 m ほど凹んでいる。

遺物は Pit 6 から北西へ 0.5 m の床面で縄文土器片、Pit 2 の覆土上層部から石器が出土した（第４図１・２）。１は深鉢形土器の体部下端から底部の破片で、底径約 8.5 ㎝を測る。２は安山

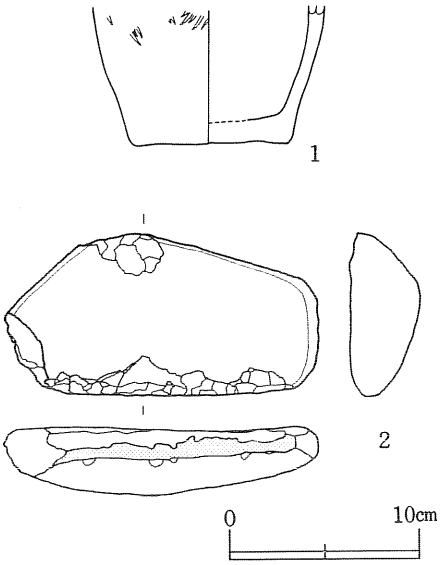



第３図　SI08竪穴住居跡

岩を石材とした半円状扁平打製石器である。平坦で直線的な側縁を打ち欠き、その側面には長さ13.2cm、幅0.5～1.2cmほど擦痕が認められる。

SI27　（第2・5図、図版3）

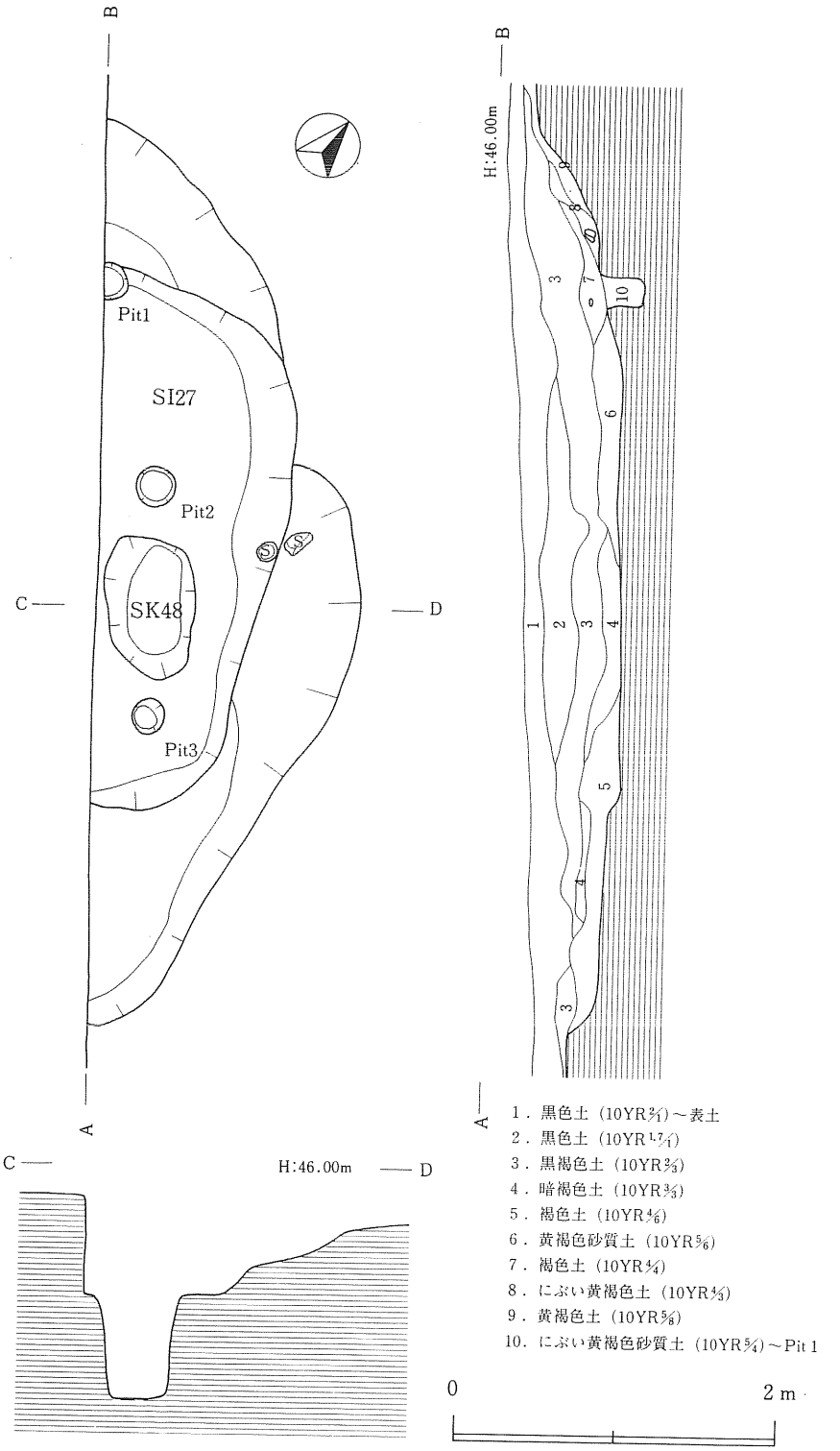
KS 44・45、KT 45 グリッドにかけて確認された。SK 48 と重複関係にあり、本竪穴住居跡が新しい。大部分は調査区外西側にかかっているため、全容を把握することができなかったが、円形もしくは楕円形を呈するものと推察される。検出部分のみ長軸は（北西―南東）5.64 m、短軸は（北東―南西）1.64m を測る。　覆土は8層に分けられ、全体的にしまりがない。壁は緩やかに立ち上がっており、確認面からの深さは 0.2 ～ 0.46 m を測る。床面は軟らかくほぼ平坦であるが、南東側は一段高くなっている。検出された柱穴は3個で、平面形はほぼ円形を呈しており、Pit 1 は径 0.23 m・深さ 0.26 m、Pit 2 は径 0.25 m・深さ 0.21 m、Pit 3 は径 0.21 m・深さ 0.16 m を測る。壁溝は検出されなかった。



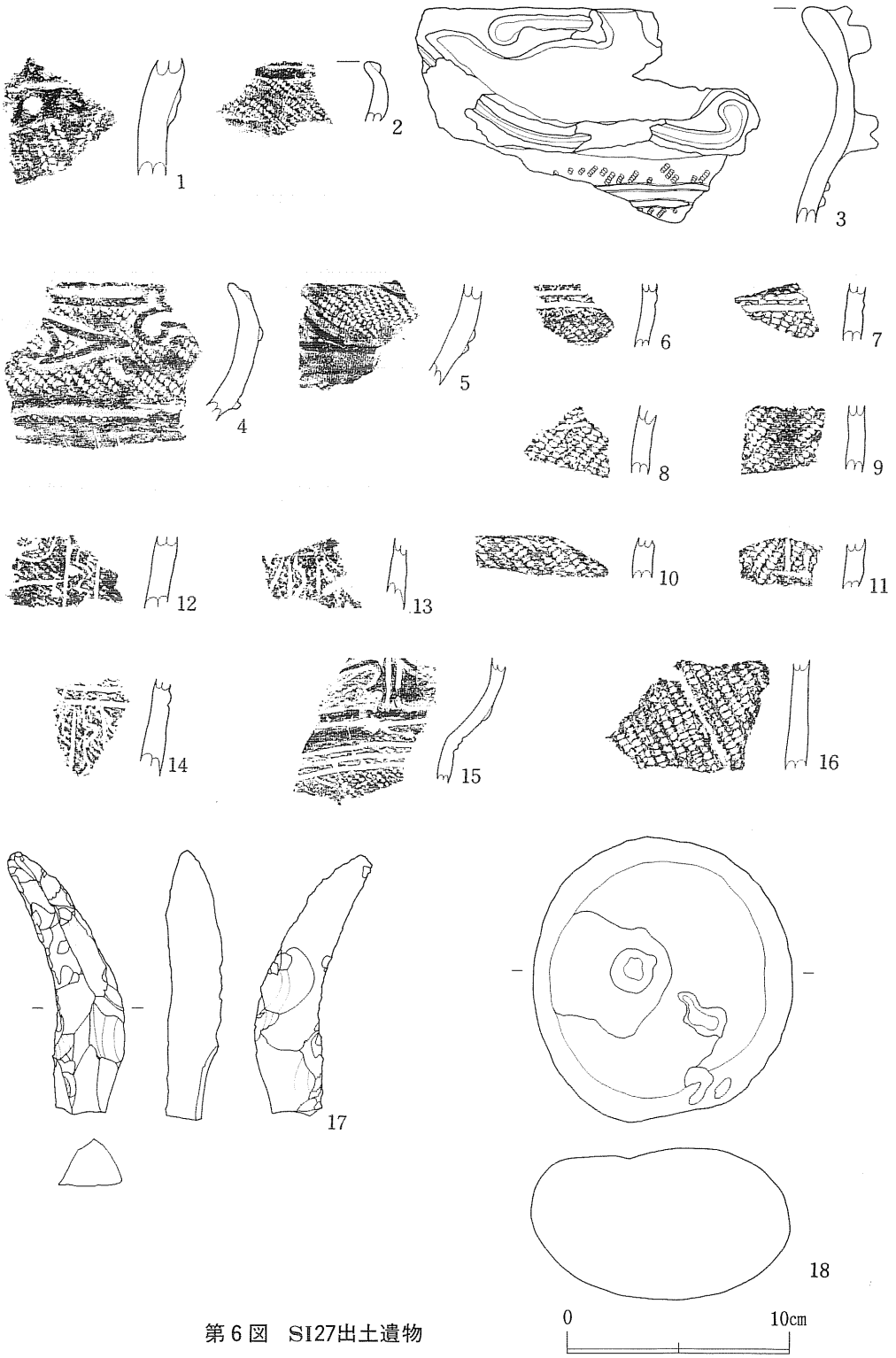
第4図　SI 08出土遺物

遺物は主に1・2・8層から縄文土器の破片少量と石器2点が出土したが、うち土器は磨滅したものが多い（第6図1～18）。1は指頭押圧文が施文された1条の隆帯がめぐり、体部には木目状撚糸文が施されている。2・4・5は RL 縄文を地文として、口縁部には粘土紐貼付による隆帯が施されている。3は口縁部に渦巻状の隆帯が2段あり、体部上端には RL 縄文を地文として、粘土紐貼付による細い隆帯が2条平行にめぐらされている。6・7・8は LR 縄文を地文として、2条の平行沈線が、9・10は LR 縄文が施されている。11は LR 縄文を地文として、縦方向に1条の沈線が施されている。12・13・14は同一個体である。撚糸文を地文として、2条の平行沈線をめぐらし、それに連繋して沈線が垂下する。15の口縁部は無文部を隆帯で横長に区画し、LR 縄文の施される体部とは3条の沈線で画される。16は LR 縄文が施されている。

石器17・18は一層中から出土した。17は頁岩を石材としたスクレイパーである。刃部は弧状で、断面形はほぼ三角形を呈している。片面には加工が施されているが、背面はあまり加工されておらず主要剝離面を残している。18は安山岩を石材とした凹石である。片面の中央部が1箇所凹んでいる。また凹をもつ面の背面から火熱を受けており、ほぼ全体が赤変している。




第5図　SI27竪穴住居跡、SK48土坑




第6図　SI27出土遺物

## 2　土　坑

SK01　（第２・７図、図版４）

LQ 46、LR 46・47 グリッドにかけて確認された。平面形は不整楕円形を呈し、長軸（北西―南東）2.58 m、短軸（北東―南西）0.98 m、確認面からの深さ 0.54 m である。底面は南東側から北西側へ傾斜しており、壁は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK02　（第２・７図、図版４）

ME 47 グリッドの東側で確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北西―南東）1.26 m、短軸（北東―南西）0.78 m、確認面からの深さ 0.2 m である。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がっている。覆土中には拳大の礫２個と大きさが 0.22 m 前後ある扁平な礫１個が含まれている。遺物は、北東隅１層中から同一個体の縄文土器が一括して出土した（第13図１）。１は口縁部がやや外反し、体部中央でわずかに膨らみをもつ深鉢形土器である。口縁部と体部には縄文が施され、両部の境には原体の先端部の側面圧痕文が施された１条の隆帯がめぐらされている。

SK03　（第２・７図）

MD 47 グリッド中央部の南西寄りで確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸(北西―南東)1.46 m、短軸(北東―南西)1.2 m、確認面からの深さ 0.2 m である。底面はわずかに丸みを帯びて北東側から南西側へ傾斜しており、壁は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK04　（第２・８図、図版４）

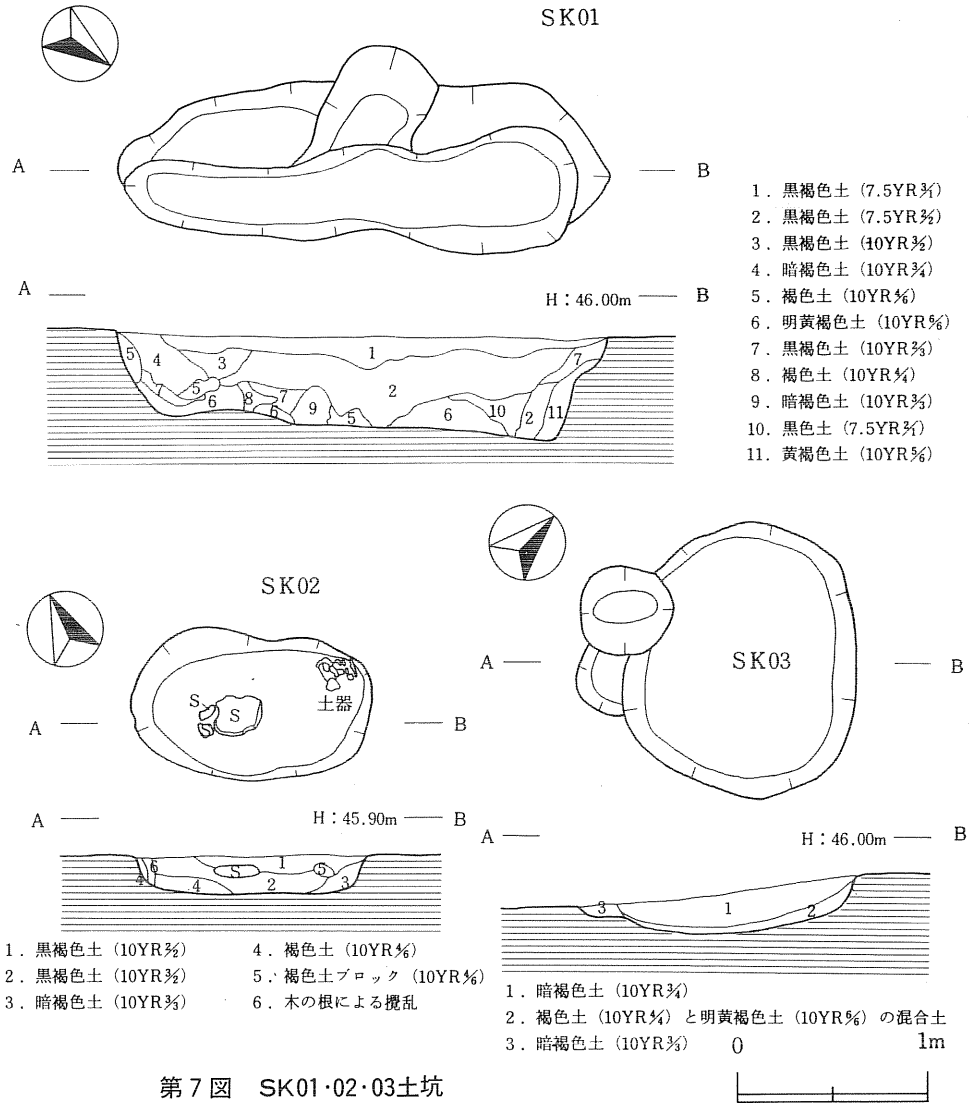
ME 48、MF 48 グリッドにかけて確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（北東―南西）1.0 m、短軸（北西―南東）0.8 m、確認面からの深さ 0.23 m である。底面はほぼ平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK05　（第２・８図、図版４）

ME 48、MF 48 グリッドにかけて確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北東―南西）2.39 m、短軸（北西―南東）1.52 m、確認面からの深さ 0.21 m である。底面は北東側から南西側へ緩く傾斜しており、中央部の南西寄りに径 0.33 m、底面からの深さ 0.28 m のピットをもっている。壁は南西側が緩傾斜で、北西・北東・南東側は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK07　（第２・８図）

ME 47 グリッド中央部の西寄りで確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（北東―南西）0.82 m、短軸（北西―南東）0.64 m である。底面は南西側の長軸 0.3 m、短軸 0.23 m の凹みに向かって傾斜している。確認面からの深さは、南西側の凹み最深部で 0.41 m、中央部で 0.2 m、最も浅い東側で 0.13 m を測る。壁は南西側が急傾斜で、北東側は緩やかに立ち上がっている。



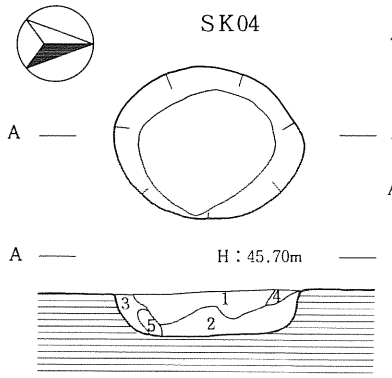

第７図　SK01･02･03土坑

遺物は出土しなかった。

SK13　（第２・８図、図版５）

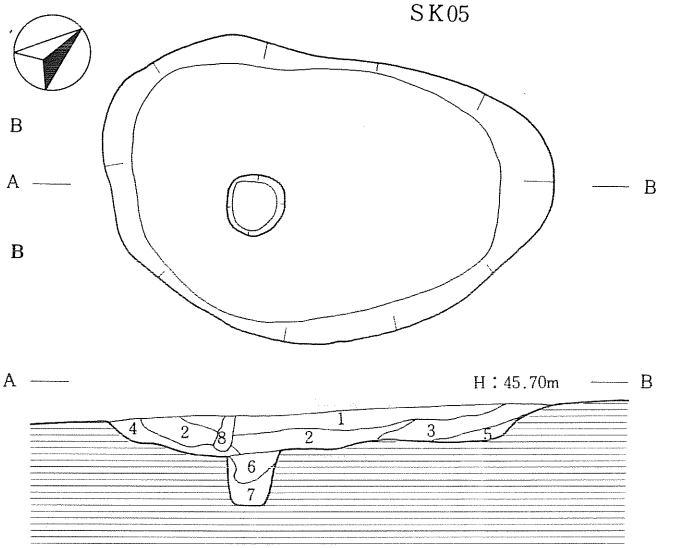
MD 46 グリッド南西隅で確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北東―南西）0.8 m、短軸（北西―南東）0.55 m である。底面は西側から中央部のやや東寄りへ緩く傾斜し、ここで 0.02 m ほど高くなって東壁下に至っている。確認面からの深さは中央部の東寄り最深部で 0.14 m、わずかに高い東側で 0.12 m を測る。壁は緩やかに立ち上がっている。覆土上層部には 0.12 ～ 0.14 m の細長い礫３個と径 0.15 ～ 0.3 m の扁平な礫４個が含まれている。遺物は北西部の覆土上層部から、結晶片岩を石材とした刻線礫（第 13 図２）が出土した。

SK04



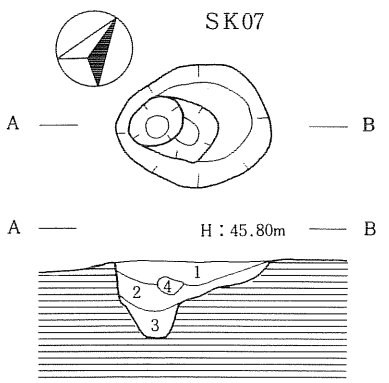

1．暗褐色土（10YR3/4）4．黄褐色土（10YR5/6）
2．褐色土（7.5YR4/6）　5．木の根による攪乱
3．褐色土（10YR4/4）

SK05



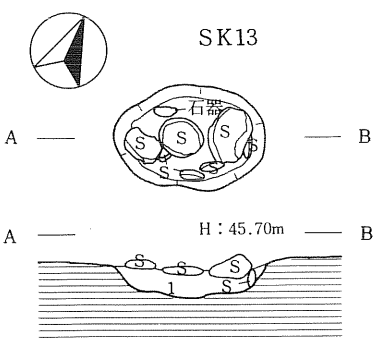

1．黒褐色土（10YR3/2）
2．黒褐色土（10YR3/3）
3．黒褐色土（10YR3/2）
4．暗褐色土（10YR3/4）
5．褐色土（10YR4/4）
6．黒褐色土（10YR1.7/1）と暗褐色土（10YR3/4）の混合土
7．褐色土（10YR4/6）の混合土
8．木の根による攪乱

SK07



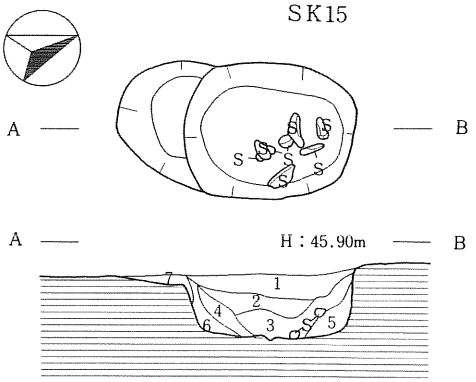

1．黒褐色土（10YR3/3）
2．暗褐色土（10YR3/4）
3．褐色土（10YR4/6）
4．黄褐色土ブロック（10YR5/6）

SK13

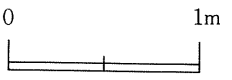



1．暗褐色土（10YR3/3）

SK15




1．黒褐色土（10YR2/3）　5．暗褐色土（10YR3/4）
2．黒褐色土（10YR3/2）　6．黒色土（10YR2/1）
3．暗褐色土（10YR3/3）　7．黄褐色土（10YR5/6）
4．褐色土（10YR4/4）




第8図　SK04·05·07·13·15土坑

SK15　（第2・8図、図版5）

MD 46 グリッド中央部の南寄りで確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北東—南西）0.89 m、短軸（北西—南東）0.72 m、確認面からの深さ 0.34 m である。底面は若干凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土下部層と底面には 0.11 ～ 0.19 m の細長い礫5個と拳大の礫2個が含まれている。遺物は出土しなかった。

SK18　（第2・9図、図版5）

ME 43 グリッドの北西隅部で確認された。本土坑は覆土の堆積状況や断面形からフラスコ状土坑と考えられる。平面形はほぼ円形を呈し、上面径約 1.19 m、底面径約 1.17 m で、上面より 19 ㎝下部は径 1.05 m と狭くなっており、確認面からの深さは 0.56 m である。底面は平坦であり、壁は北側がオーバーハングし、南側は急傾斜で立ち上がっている。遺物は縄文土器細片が若干出土したが、図示できなかった。

SK19　（第2・9図）

MD 43、ME 43 グリッドにかけて確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北東—南西）1.44 m、短軸（北西—南東）1.31 m、確認面からの深さ 0.16 m である。底面は砂礫が多く露出しており若干凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は縄文土器細片が若干出土したが、図示できなかった。

SK20　（第2・9図）

MD 45・46 グリッドにかけて確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（北東—南西）0.96 m、短軸（北西—南東）0.57 m、確認面からの深さ 0.21 m である。底面はほぼ平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK21　（第2・9図、図版6）

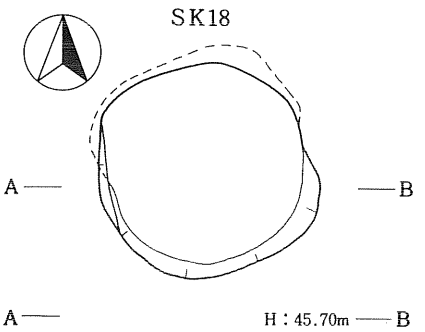
MC 45 グリッド北側中央部の西寄りで確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北東—南西）0.70 m、短軸（北西—南東）0.57 m、確認面からの深さ 0.32 m である。底面は丸底ぎみであり、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土上層部には長さ 0.23 m・幅 0.12 m ほどの礫が1個含まれている。遺物は出土しなかった。

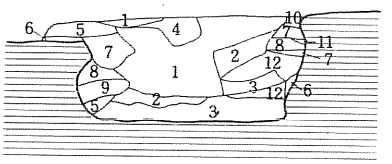
SK22　（第2・9図）

MC47グリッドの北西隅部で確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北西—南東）0.56 m、短軸（北東—南西）0.48 m、確認面からの深さ 0.18 m である。底面は丸みを帯びており、壁は北東側が緩傾斜で、南西側は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

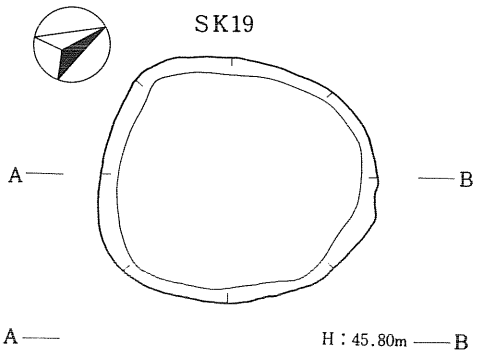
SK23　（第2・9図）

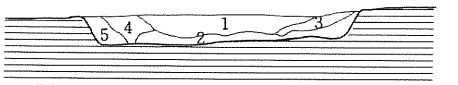
MC 48 グリッドの南西隅部で確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（東西）0.67 m、短軸（南北）0.56 m、確認面からの深さ 0.17 m である。底面はほぼ平坦で、東側から西側へ傾



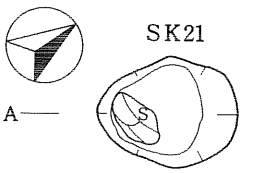



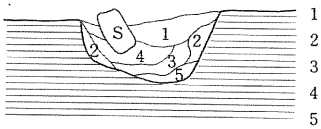
1．黒色土（10YR1.7/1）
2．黒色土（10YR3/1）
3．黒褐色土（10YR3/2）
4．黒褐色土（5YR3/1）
5．黒褐色土（10YR3/1）
6．明黄褐色土（10YR6/6）
7．黒褐色土（10YR3/3）
8．黒褐色土（10YR3/2）
9．黒色土（7.5YR3/1）
10．暗褐色土（10YR3/4）
11．褐色土（10YR4/6）
12．暗褐色土（10YR3/3）



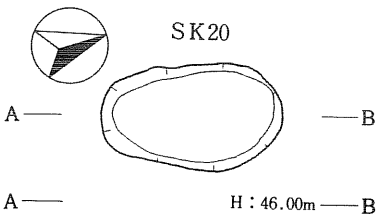



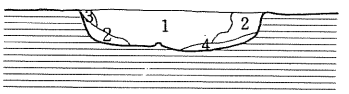
1．黒褐色土（10YR3/2）
2．褐色土（10YR4/6）
3．黒褐色土（10YR3/2）
4．暗褐色土（10YR3/3）
5．褐色土（10YR4/4）



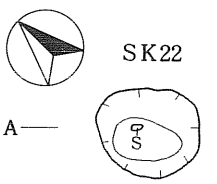



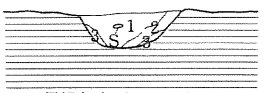
1．暗褐色土（10YR3/3）
2．褐色土（10YR4/6）
3．褐色土（10YR4/4）
4．黒褐色土（10YR3/2）
5．明黄褐色砂質土（10YR6/6）



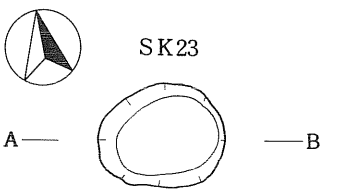



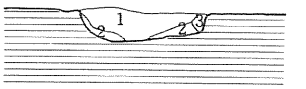
1．暗褐色土（10YR3/3）
2．褐色土（10YR4/4）
3．暗褐色土（10YR3/3）
4．明黄褐色土（10YR6/6）



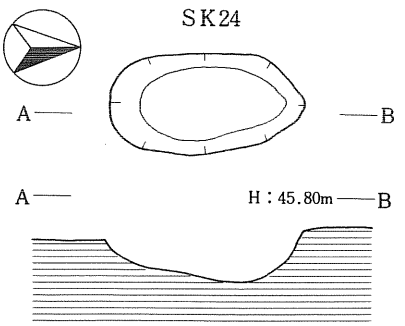



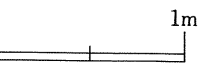
1．黒褐色土（10YR3/2）
2．褐色土（10YR4/6）
3．黄褐色土（10YR5/6）



1．黒褐色土（10YR3/2）
2．黄褐色土（10YR5/6）
3．暗褐色土（10YR3/4）




第9図　SK18·19·20·21·22·23·24土坑

斜しており、壁は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK24　（第2・9図）

MD 42・43 グリッドにかけて確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（南北）1.03 m、短軸（東西）0.53 m、確認面からの深さ 0.24 m である。底面は北側から南側へ傾斜しており、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK25　（第2・10図）

MC 49 グリッド中央部の北東寄りで確認された。平面形はほぼ円形を呈し、上面径約1.04 m、底面径約 0.55 m、確認面からの深さ 0.24 m である。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK26　（第2・10図）

KS 44 グリッド中央部の南東寄りで確認された。本土坑の西側は調査区外にかかっているため、全容を把握することができなかったが、その平面形は楕円形を呈するものと思われる。検出部の長軸（北西―南東）1.14 m、短軸（北東―南西）1.12 m で、確認面からの深さは 0.28 m である。底面はほぼ平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK28　（第2・10図）

LF 58、LG 58 グリッドにかけて確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（北西―南東）1.32 m、短軸（北東―南西）1.04 m、確認面からの深さ 0.35 m である。底面はほぼ平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK30　（第2・10図）

LE57・58グリッドにかけて確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（東西）0.99m、短軸（南北）0.81m、確認面からの深さ0.09m である。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

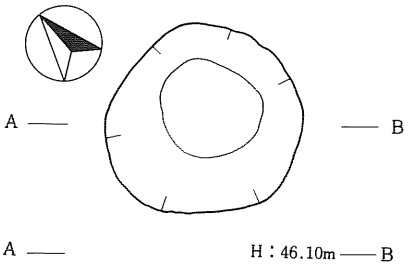
SK33　（第2・10図、図版6）

LB48・49グリッドにかけて確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北西―南東）0.93m、短軸（北東―南西）0.53mである。底面は中央部を境に北側が高く南側が一段低くなっており、両面とも丸みを帯びている。確認面からの深さは北側で0.6m、南側で0.7mを測る。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土上層部には拳大と0.13m前後の細長い礫7個、大きさが0.3m前後の礫2個、上面から0.51m下部には大きさ0.15mほどの礫が含まれている。遺物は出土しなかった。

SK35　（第2・11図）

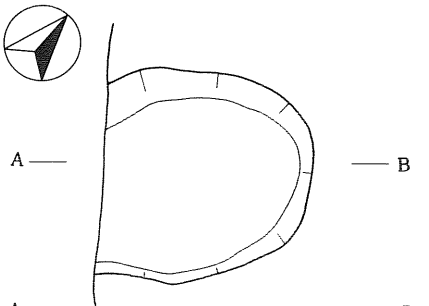
LD 48 グリッド南東隅部で確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（南北）0.8 m、短軸（東西）0.52 m、確認面からの深さ 0.12 m である。底面は北側から南側へ傾斜しており、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK25



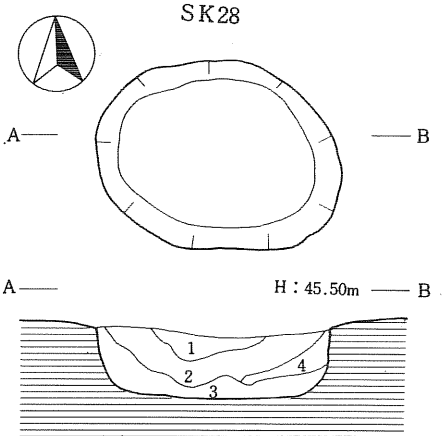

1．褐色土（10YR4/4）　4．黄褐色土（10YR5/6）
2．褐色土（10YR5/6）　5．明黄褐色土（10YR6/6）
3．黄褐色土（10YR5/8）

SK26



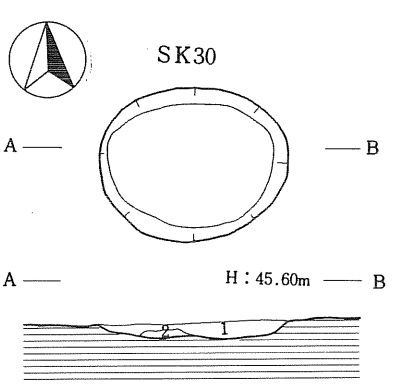

1．黒色土（10YR3/1）　4．褐色土（10YR4/6）
2．黒褐色土（10YR3/2）　5．木の根による攪乱
3．暗褐色土（10YR3/3）

SK28



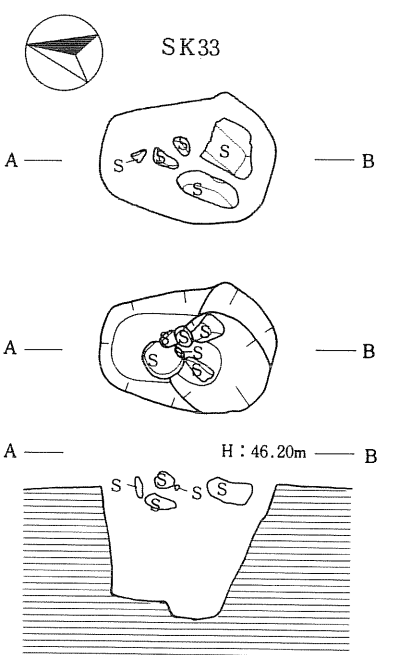

1．暗褐色土（10YR3/4）　4．黒褐色土（10YR3/2）
2．黒褐色土（10YR3/3）
3．暗褐色土（10YR3/3）

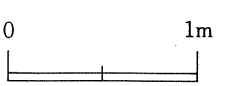
SK30




1．暗褐色土（10YR3/3）　2．黄褐色土（10YR5/4）

SK33




第10図　SK25・26・28・30・33土坑

SK36　（第2・11図）

LF 51、LG 51 グリッドにかけて確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（東西）1.34 m、短軸（南北）1.09 m である。底面は西側から中央部の東寄りの最深部へ向かって緩やかに傾斜し、ここで 0.1 m ほど高くなって東壁下に至っている。確認面からの深さは西側で 0.16 m、中央部の東寄り最深部で 0.37 m、一段高い東側で 0.23 m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK37　（第2・11図、図版6）

LS 44 グリッド東側中央部で確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（北東―南西）0.73 m、短軸（北西―南東）0.46 m、確認面からの深さ 0.47 m である。底面は北側から南側に向かって緩く傾斜しており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺物は縄文土器片が若干出土した（第13図3・4）。3 は RL の原体による側面圧痕文、4 は木目状撚糸文が施されている。

SK39　（第2・11図）

LF 51 グリッド中央部のやや西寄りで確認された。平面形はほぼ円形を呈し、上面径約 0.78 m、底面径約 0.67 m、確認面からの深さ 0.14 m である。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK40　（第2・11図）

LC 49 グリッド南東側で確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（北東―南西）1.07 m、短軸（北西―南東）0.78 m で、確認面からの深さは 0.06 m と浅い。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK43　（第2・11図）

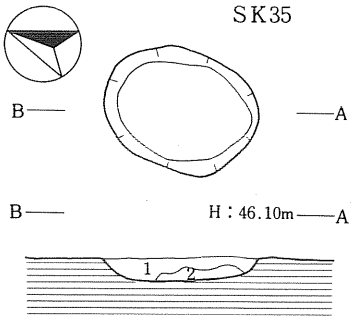
LA 48 グリッド中央部の北東寄りで確認された。平面形はほぼ円形を呈し、上面径約 1.56 m、底面径約 1.38 m、確認面からの深さ 0.11 m である。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK44　（第2・12図、図版7）

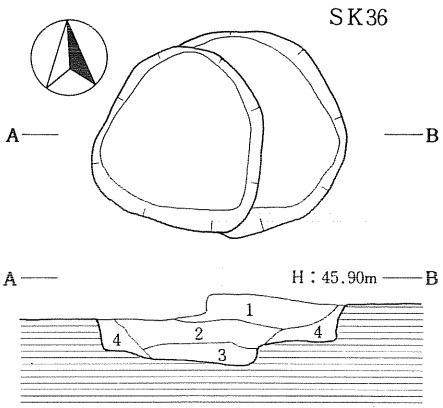
LA 48 グリッドの西側で確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸（北東―南西）0.86 m、短軸（北西―南東）0.64 m である。底面は中央部を境に東側が高く西側が一段低くなっているが、両面とも平坦である。確認面からの深さは東側で 0.33 m、西側で 0.41 m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

SK45　（第2・12図）

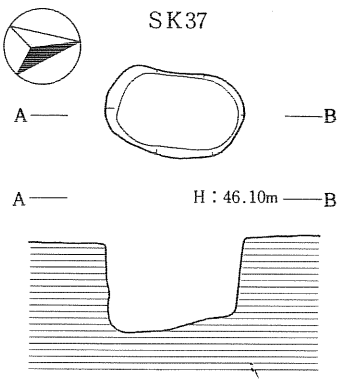
KJ 58・59 グリッドにかけて確認された。平面形はほぼ円形を呈し、上面径約 0.78 m、底面径約 0.68 m、確認面からの深さ 0.22 m である。底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

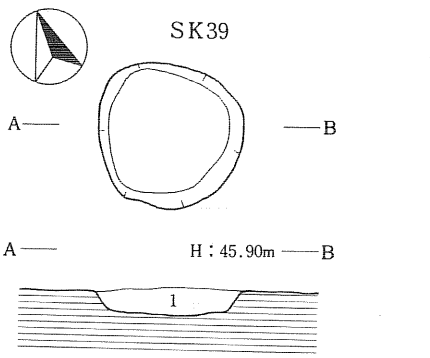



1．暗褐色土（10YR¾）　2．黄褐色土（10YR⅝）

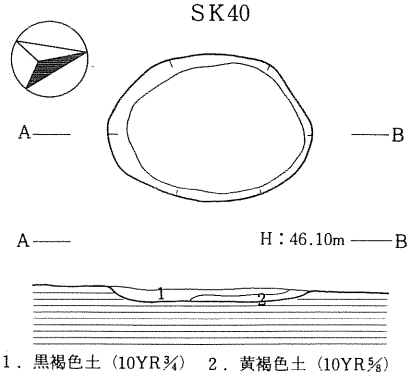



1．黒褐色土（10YR⅔）　3．暗褐色土（10YR¾）
2．黒褐色土（10YR⅔）　4．黄褐色土（10YR⅝）

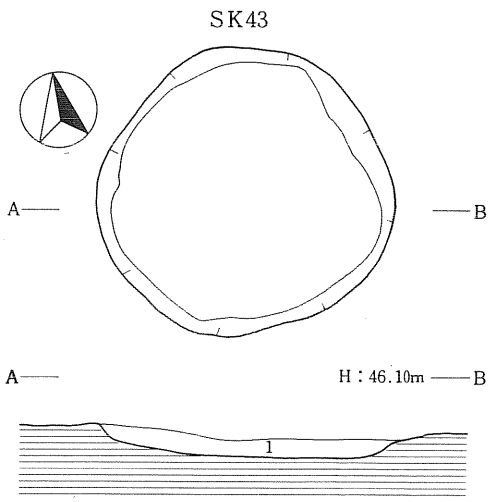



1．黒褐色土（10YR⅔）と黄褐色土（10YR⅝）の混合土



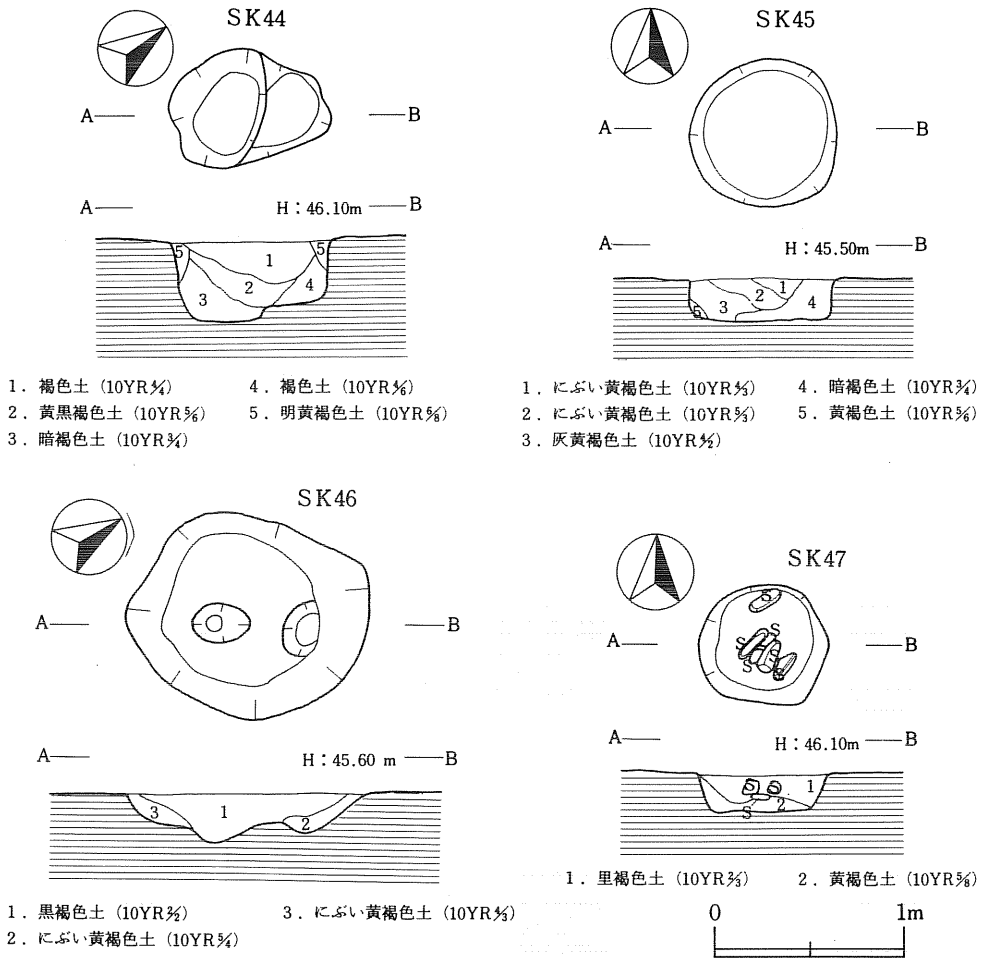

1．黒褐色土（10YR¾）　2．黄褐色土（10YR⅝）




1．黒褐色土（10YR⅔）

第11図　SK35・36・37・39・40・43土坑

0　1m



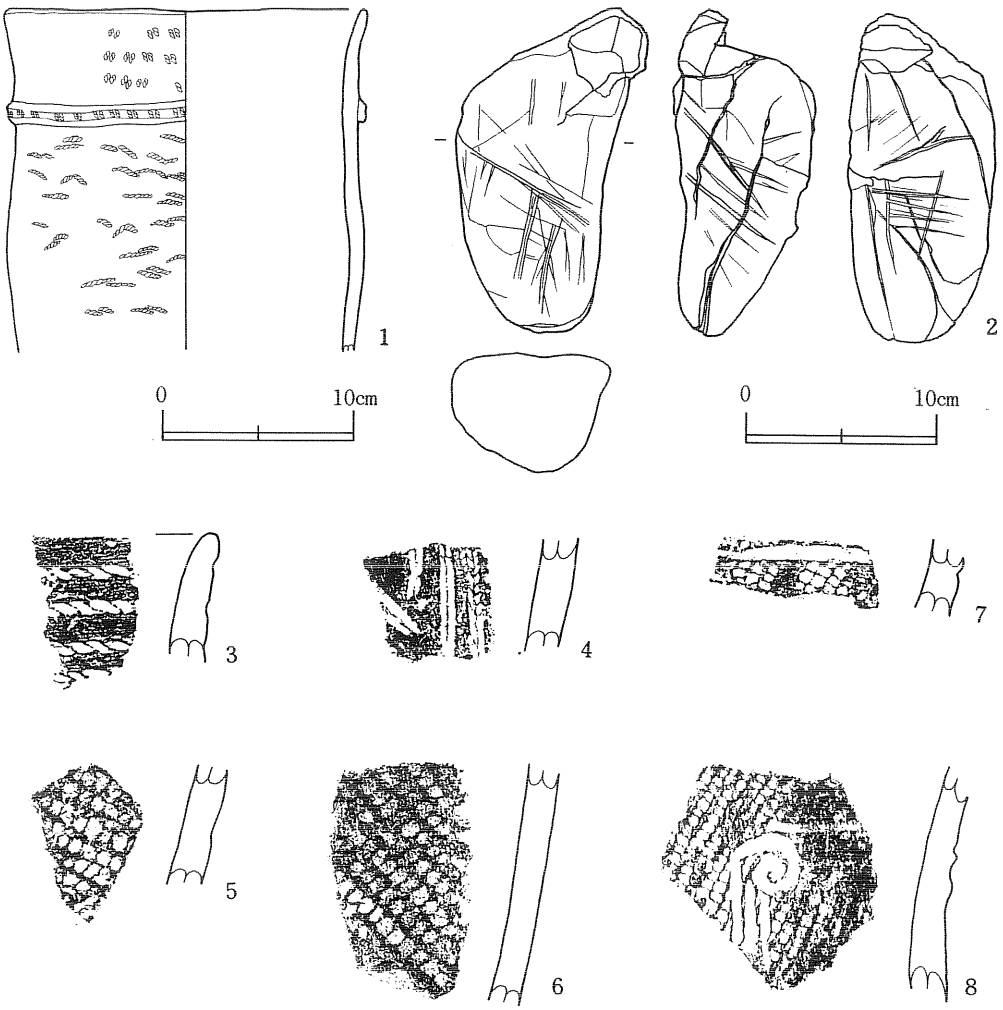

第12図　SK44・45・46・47土坑

SK46　（第２・12図）

LH 57 グリッド中央部で確認された。平面形は不整楕円形を呈し、長軸（北東―南西）1.28 m、短軸（北西―南東）1.08 m である。底面は凹凸しており、中央部のやや南西寄りが最も深く凹んでいる。確認面からの深さは北東側で 0.2 m、中央部のやや南西寄り凹最深部で0.26 m、南西側で 0.17 m を測る。壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は縄文土器片が若干出土した（第13図５・６）。５・６は同一個体である。器面にはLR縄文が施されている。

SK47　（第２・12図、図版７）

LC 48 グリッドで確認された。平面形はほぼ円形を呈し、上面径約 0.69 m、底面径約 0.55 m、確認面からの深さ 0.18 m である。底面はほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土中には 0.18 ～ 0.23 m の細長い礫５個が含まれている。遺物は縄文土器片が若干出土した（第 13 図７・８）。７・８は LR 縄文を地文として、先端が渦巻状の沈線文が施されている。

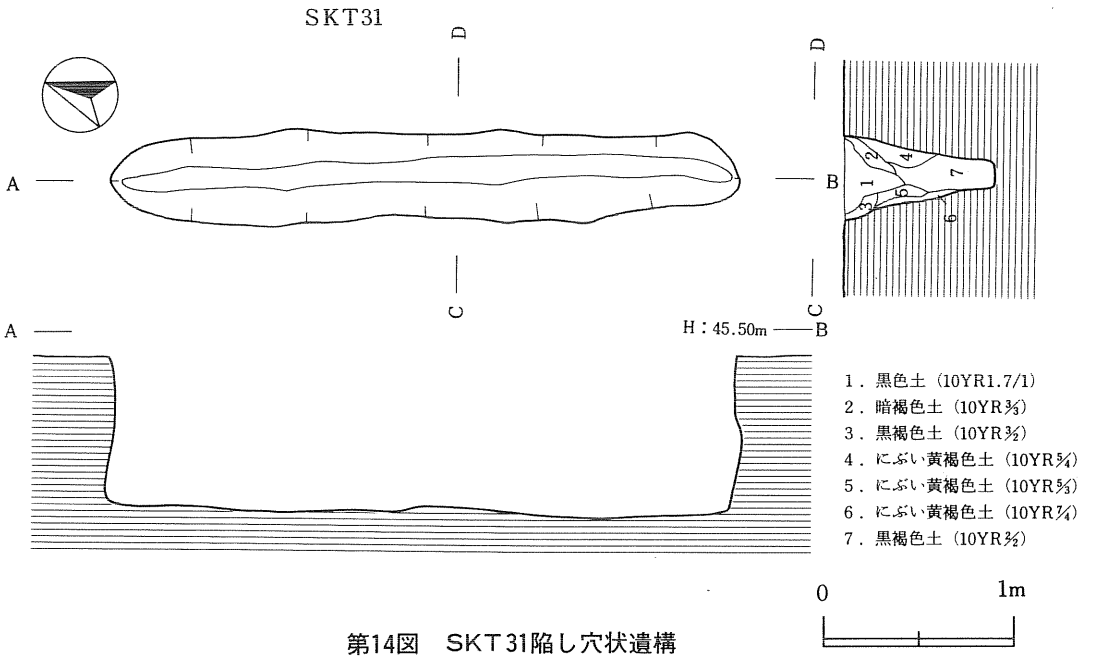



1：SK02　　5・6：SK46
2：SK13　　7・8：SK47
3・4：SK37

第13図　SK02·13·37·46·47出土遺物

SK48　（第2・5図、図版3）

KS 45、KT 45 グリッドにかかる SI 27 の床面で確認された。本土坑は SI 27 構築の際に上部を削平されたものと考えられる。平面形はほぼ楕円形を呈し、長軸（北西—南東）0.87 m、短軸（北東—南西）0.57 m、SI 27 床面からの深さ 0.65 m である。遺物は出土しなかった。




第14図　SKT31陥し穴状遺構

## 3　陥し穴状遺構

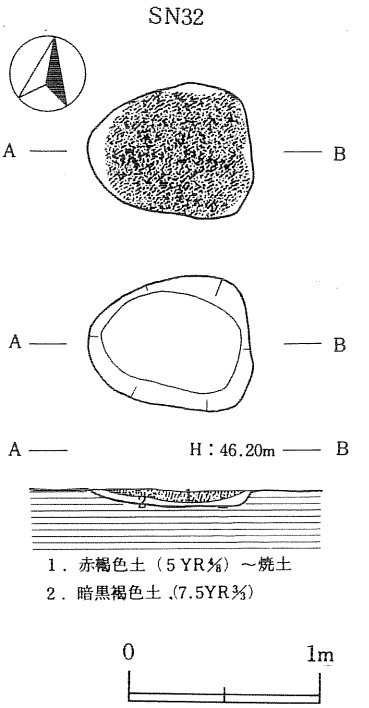
SKT31　（第２・14図、図版７）

LJ57・58グリッドにかけて確認された。平面形は溝状を呈し、上面の長軸（北西―南東）3.3ｍ、短軸（北東―南西）0.45m、底面の長軸（北西―南東）3.19m、短軸（北東―南西）0.09m、確認面からの深さは0.76～0.86mである。底面はほぼ平坦であり、壁は北・南側がややオーバーハングぎみで、東・西側は急傾斜で立ち上がっている。遺物は出土しなかった。

## 4　焼土遺構

SN32　（第２・15図）

LE49グリッド中央部より北側で確認された。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸（東西）0.89ｍ、短軸（南北）0.71ｍ、確認面からの深さは0.08ｍである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。この浅い凹に含まれた焼土の広がりは、長軸（東西）0.76ｍ、短軸（南北）0.65ｍ、確認面からの厚さは0.02～0.06ｍであった。遺物は出土しなかった。




第15図　SN32焼土遺構

## 6　掘立柱建物跡

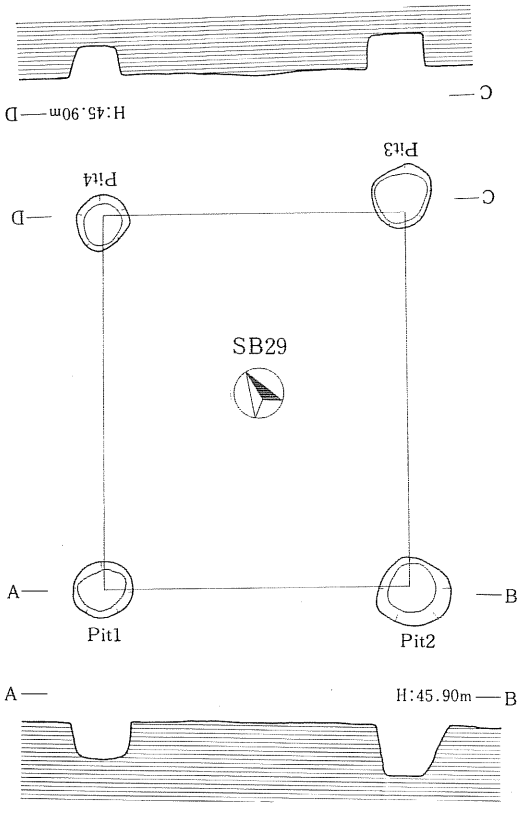
### SB29　（第２・16図）

LI 49、LJ 48 ・ 49 グリッドにかけて確認された。桁行（北東―南西）１間×梁行（北西―南東）１間の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行が 2.99 m、梁行が2.42m であり、柱穴は直径 0.4 ～ 0.57 m でほぼ円形を呈し、深さは 0.25 ～ 0.41 m である。覆土は上層部が黒褐色土で、下層部が黄褐色土粒子を含む暗褐色土である。柱痕跡は認められず、遺物の出土もなかった。

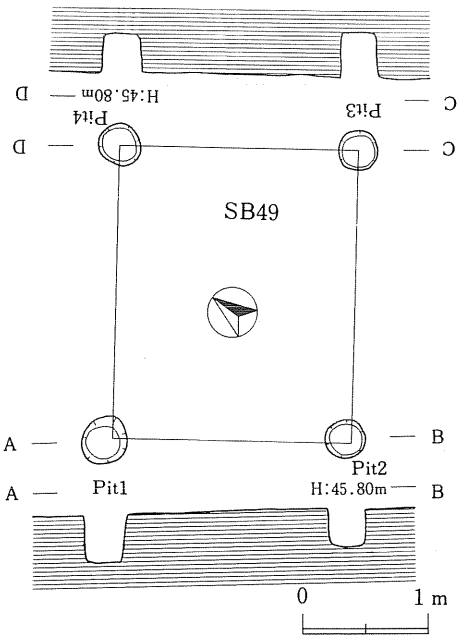
### SB49　（第２・17図）

LI 50 ・ 51 グリッドにかけて確認された。桁行（北東―南西）１間×梁行（北西―南東）１間の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行が 2.34 m、梁行が 1.9 m であり、柱穴の直径は 0.29 ～ 0.35 m でほぼ円形を呈し、深さは 0.3 ～ 0.37 m である。覆土は上層部が黒褐色土で、下層部が暗褐色土である。柱痕跡は認められず遺物の出土もなかった。

上記 SB 29 ・ 49 は、４個の深いピットが方形に配置されていることから掘立柱建物跡としたが、水田造成の際に上部を削平されて本来の形を失っており、遺物の出土もなく、その内容は明瞭でないため竪穴住居跡の主柱穴であった可能性も考えられる遺構である。




第16図　SB29掘立柱建物跡




第17図　SB49掘立柱建物跡

# 第２節　遺構外の出土遺物

遺構外の遺物は主に、調査区の南東部とMDライン以西の第Ⅱ層黒褐色土中から出土したもので、その出土量はコンテナで３箱ほどである。

## １　土　器

出土した土器は破片で磨滅したものが多く、図示可能な資料は少なかった。

**縄文時代前期の土器**　（第18図１～29）

１は口唇部にＬＲの原体による側面圧痕文、体部にはＬＲとＲＬの結束羽状縄文が施されている。２はＬ撚糸文が、３はＲＬ縄文が施されている。４～６は同一個体である。器面にはＲ撚糸文が施されている。７・８は同一個体である。口縁上端にはＬＲ縄文、その下部にはＬとＲを結束して１本の原体とした側面圧痕文が施されている。９・14は竹管状工具によって斜めに刻みが施された１条の隆帯がめぐり、口縁部にはＲＬＲの原体による側面圧痕文が施されている。10は指頭押圧文が施された１条の隆帯がめぐり、その下面にはＬとＲの撚糸文が施文されている。11は刻みが施された１条の隆帯がめぐり、その上下面にはＬＲの原体による側面圧痕文が施されている。12はＬ原体による網目状撚糸文が施されている。13・15はＬＲの原体による側面圧痕文が施されている。16はＬ撚糸文が施されている。17は羽状縄文が施されている。18はＲＬの結節縄文が施されている。19～23は木目状撚糸文が施されている。24はＲＬの原体による側面圧痕文、鋸歯状の沈線文が２条施されている。25は平行沈線文が３条、鋸歯状の沈線文が１条施されている。26は口縁部上端に鋸歯状の沈線文と刺突文、その下にＲＬの原体による側面圧痕文が施されている。27は口縁部上端に幾何学状の沈線文と刺突文、その下には２条の平行沈線文が施されている。28は口唇部に斜めの刻み、その下には３条の平行沈線文が施されている。29は口唇部に太い刻み、その下には１条の沈線文が施されている。

**縄文時代中期の土器**　（第19図30～43・第20図50～56）

30は外反する口縁部に波状の太い隆帯がめぐる。体部にはＲＬ縄文が施されている。31は内湾する口縁部でＲＬの縄文帯を狭んで上下に隆帯がある。33は指頭押圧とＲＬの原体による側面圧痕文が施されている。34は渦巻文が施されている。35は波状口縁部の頂部から垂下する隆帯をもち、隆帯上にはＲＬの原体による側面圧痕文が施されている。36～38は縄文を地文として、沈線が施されている。39は口縁部に指頭押圧文、体部にはＬＲ縄文が施されている。40～43は粗製深鉢形土器の体部の破片で、器面には縄文が施されている。

50・51は深鉢形土器の体部半ばから底部の破片である。50は体部にＬＲ縄文、51はＬＲ縄文を地文として垂下沈線が施されている。52は口縁部に波頂部をもつ深鉢形土器である。口縁部には沈線による渦巻文、体部には上端に平行沈線をめぐらし、それから連繋する垂下沈線が施されている。地文はＲＬ縄文で口縁部は横位、体部は縦位に施されている。53～55は深鉢形土器の体部下端から底部の破片である。53は体部にＬＲ縄文、54・55はＬＲ縄文を地文として縦方向に波状の隆帯が施されている。56は渦巻文をあしらった中空把手である。

**縄文時代晩期の土器**　（第19図44～49）

44は口縁部に三叉文、その下には2条の平行沈線に画くされて、体部にＬＲ縄文が施されている。45～49は粗製深鉢形土器の体部の破片で、体部にはＬＲ縄文が施されている。

## 2　石器

出土した石器の多くは半円状扁平打製石器・凹石などで、他の石器は少なかった。

**石鏃**（第21図57・58）：凹基式（57）と平基式（58）の2点である。

**石錐**（第21図59）：つまみ部と錐部は両面から二次加工が施されている。

**石匙**（第21図60～63）：縦型（60）と横型（61～63）の2種類ある。いずれもつまみ部以外は主要剝離面を残し、背面に二次加工が施されている。

**掻器**（第21図64）：主要剝離面を残し、背面に二次加工を施して刃部が作出されている。

**石箆**（第21図65～69）：両側縁と先端部に二次加工が施されている。66～69は両面とも二次加工が施されているが、65は背面だけで主要剝離面は未加工のままである。

**石槍**（第22図70）：基部は片側が抉れ、左右非相称形を呈する。二次加工は両面とも全面に施され、素材の剝離面を残さない。

**磨製石器**（第22図71）：一端を欠損するが、残存部の平面形は切っ先形をなすが、側面形は若干そっている。全面は丁寧に研磨されている。他に類がなく性格不明の石器である。

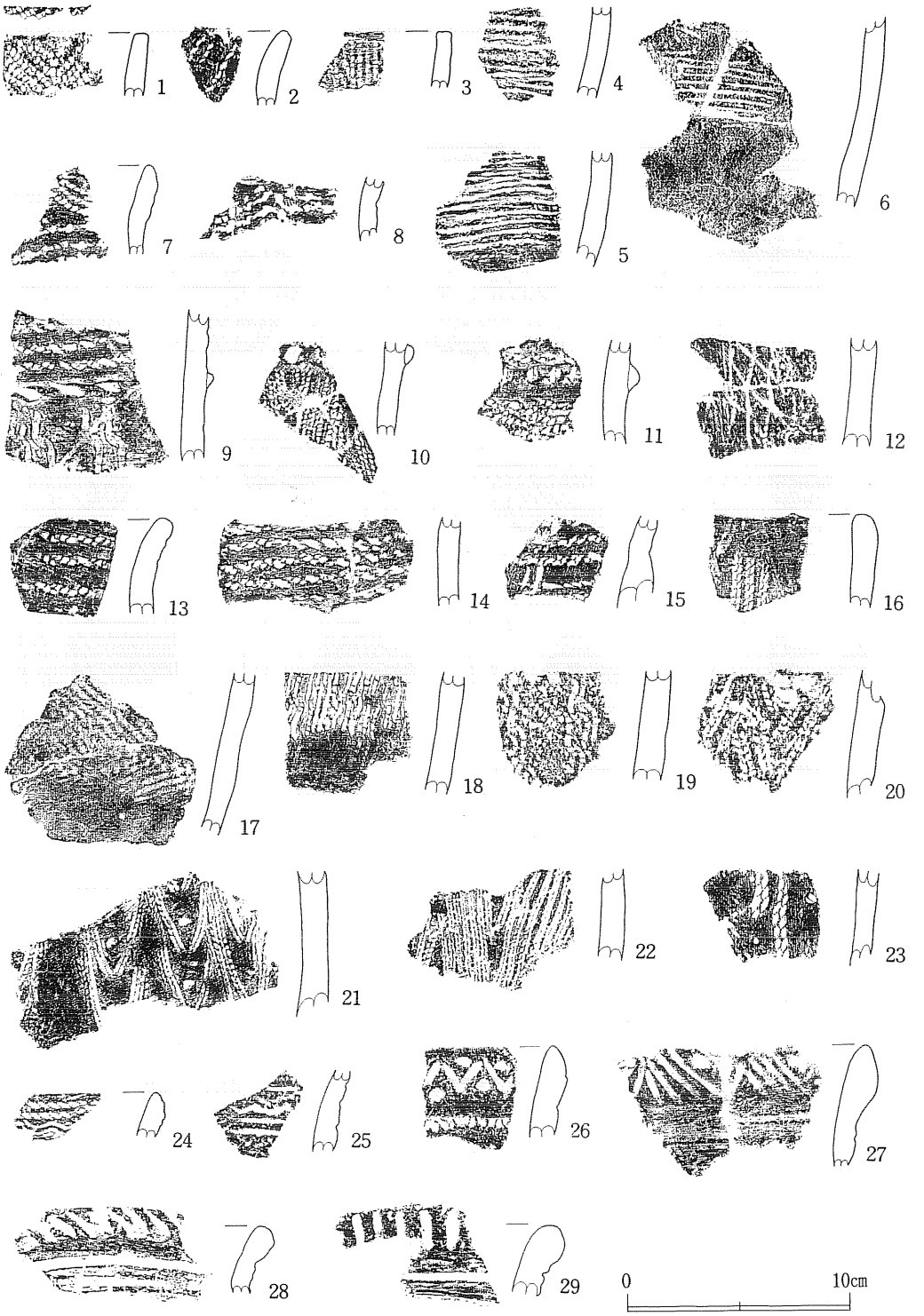
**磨製石斧**（第22図72～74）：3点出土したうち完形のものは1点で、他は基部や刃部を欠損している。いずれも定角式磨製石斧である。72・73は使用による刃こぼれが認められる。

**石錘**（第22図75・76）：扁平な河原石の長軸両端を打ち欠いている。

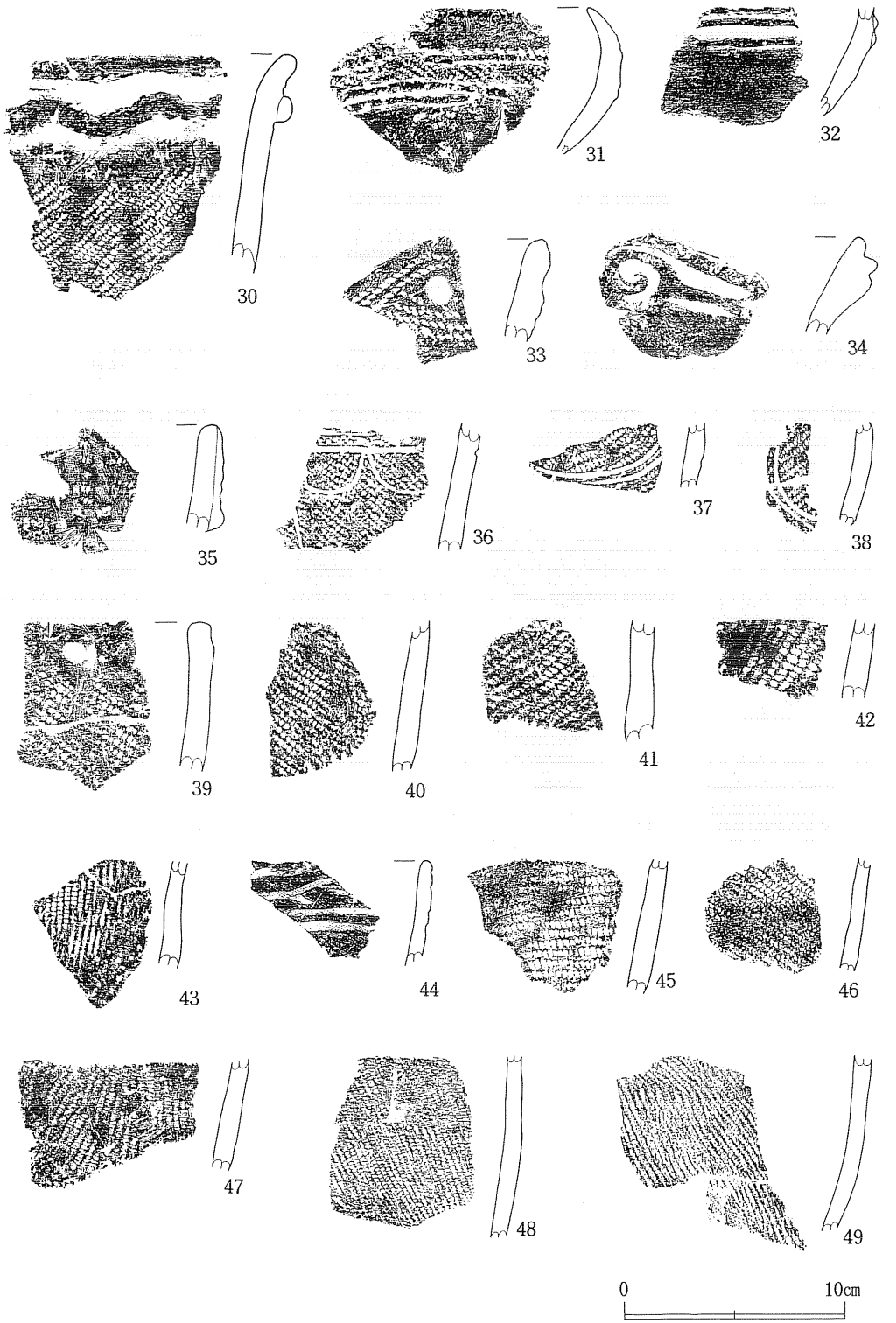
**半円状扁平打製石器**（第23図77～84・第24図85～92・第25図92・93）：河原石の側縁を打ち欠いており、両面には自然面を残している。77～90は直線状を呈する側面が摩耗している。92・93は片面に、94は両面に敲打による凹が存在する。

**凹石**（第25図95～100）：円礫などを素材とし、両面に1～3箇所ずつの凹が作られている。

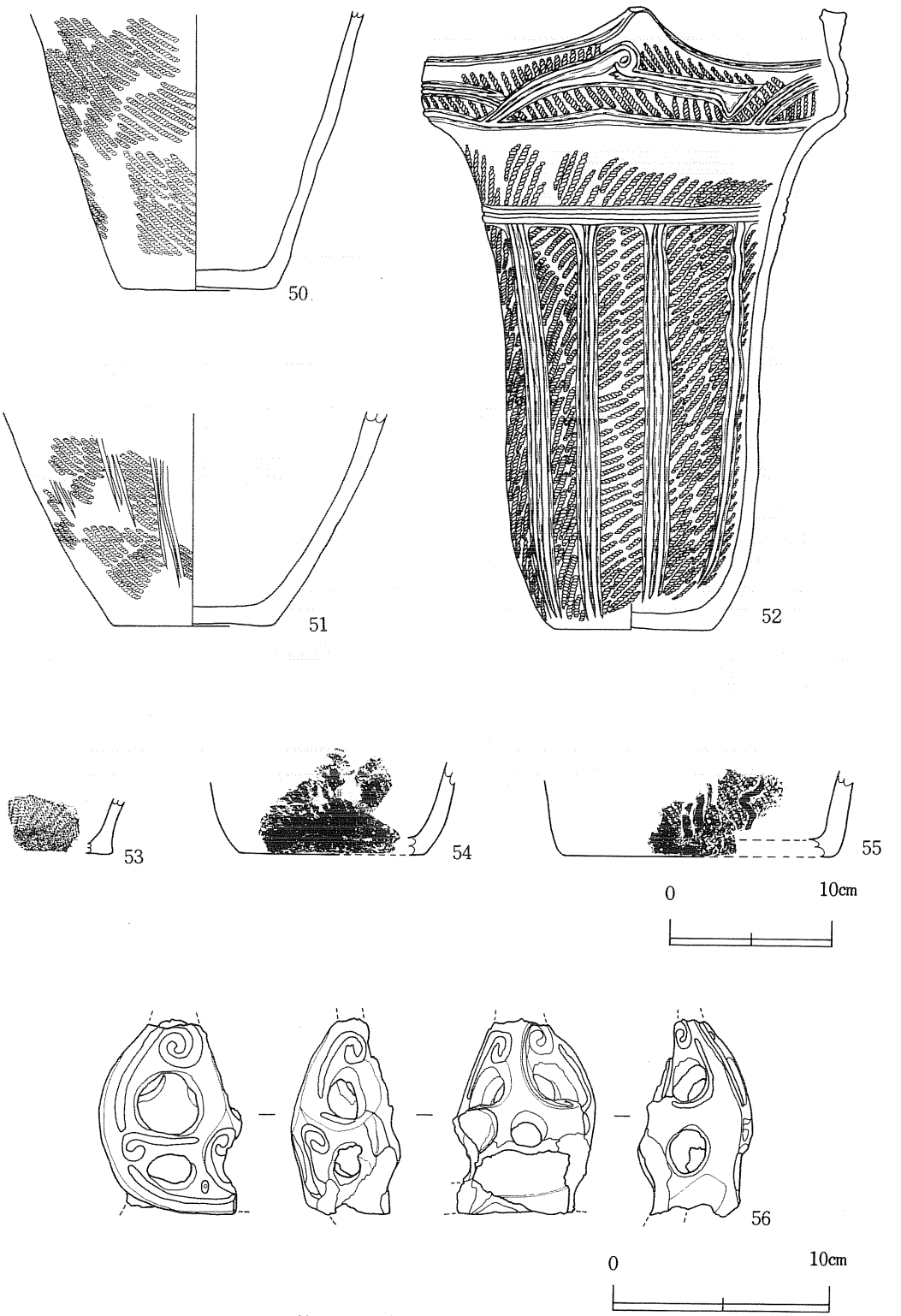
以上これらの石器は、頁岩（57～71・87・88）、安山岩（72・73・75・77～86・89～100）・蛇紋岩（73）・凝灰岩（76）などを石材としている。



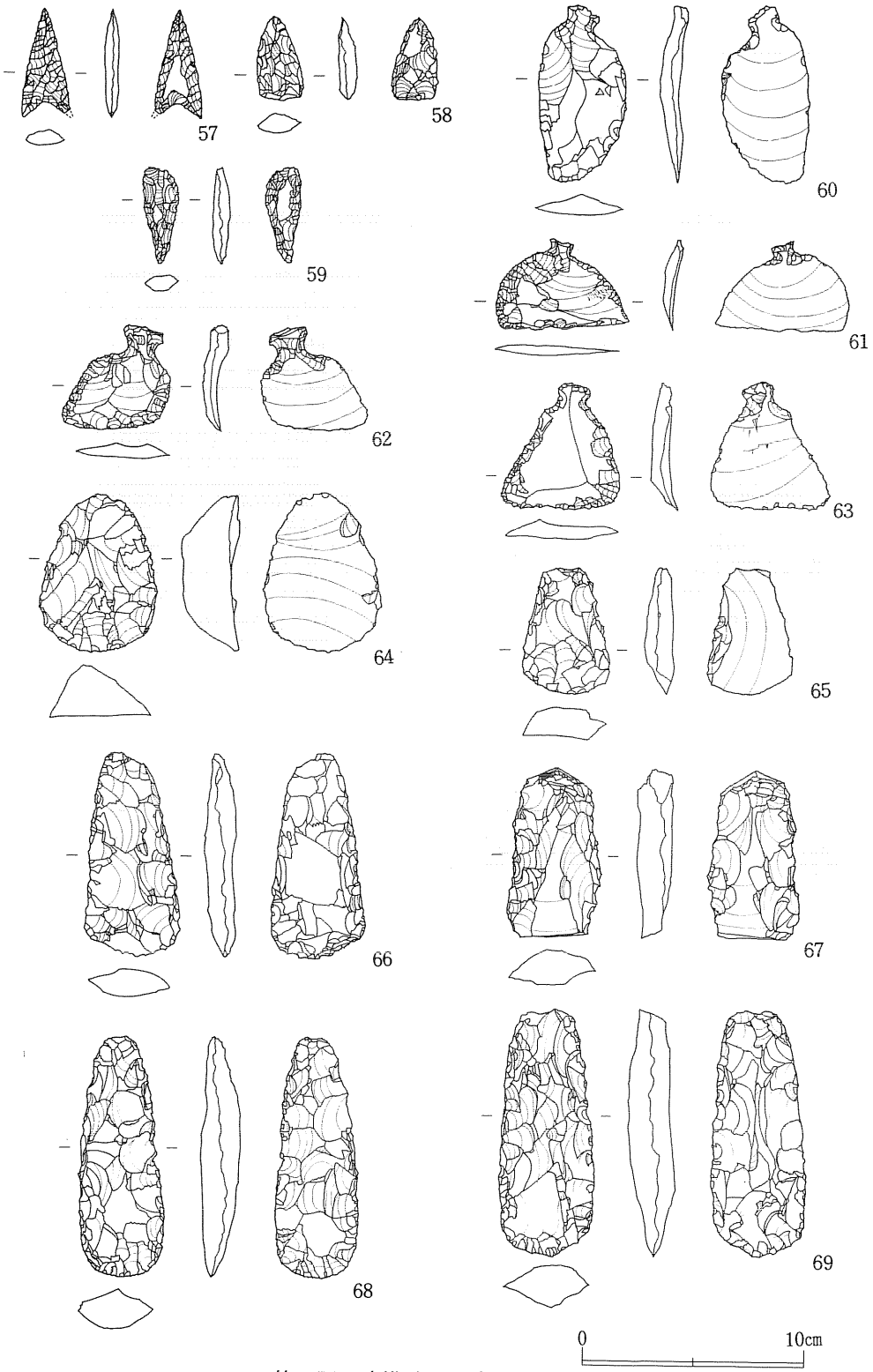

第18図　遺構外出土遺物（１）



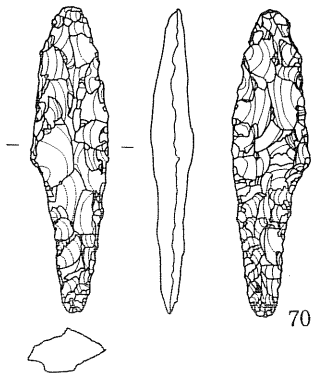

第19図　遺構外出土遺物（２）

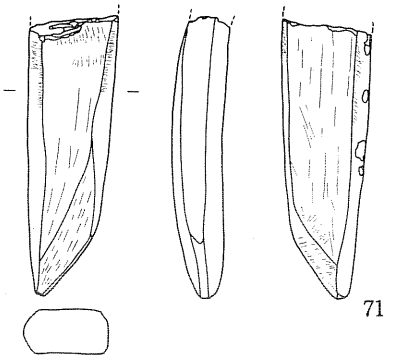


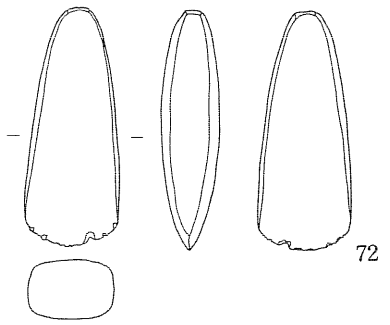

第20図　遺構外出土遺物（3）

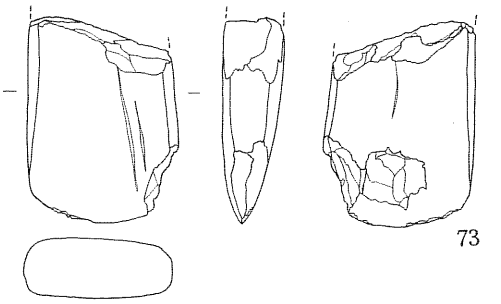


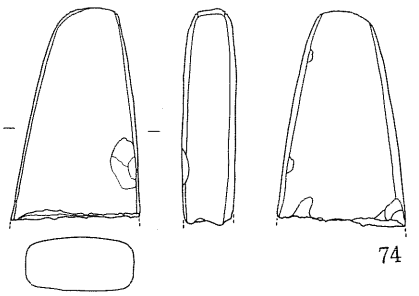

第21図　遺構外出土遺物（４）

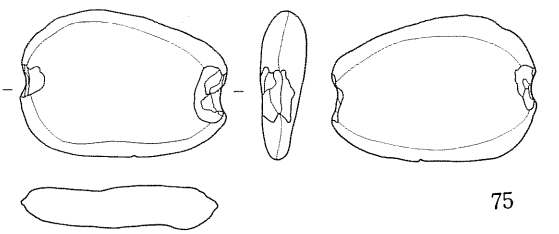


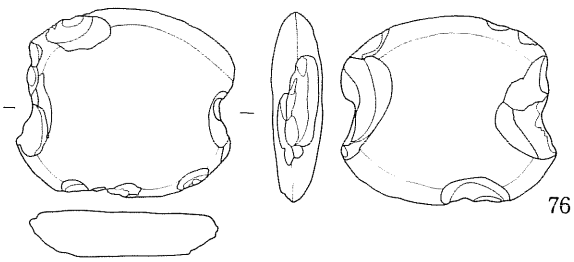



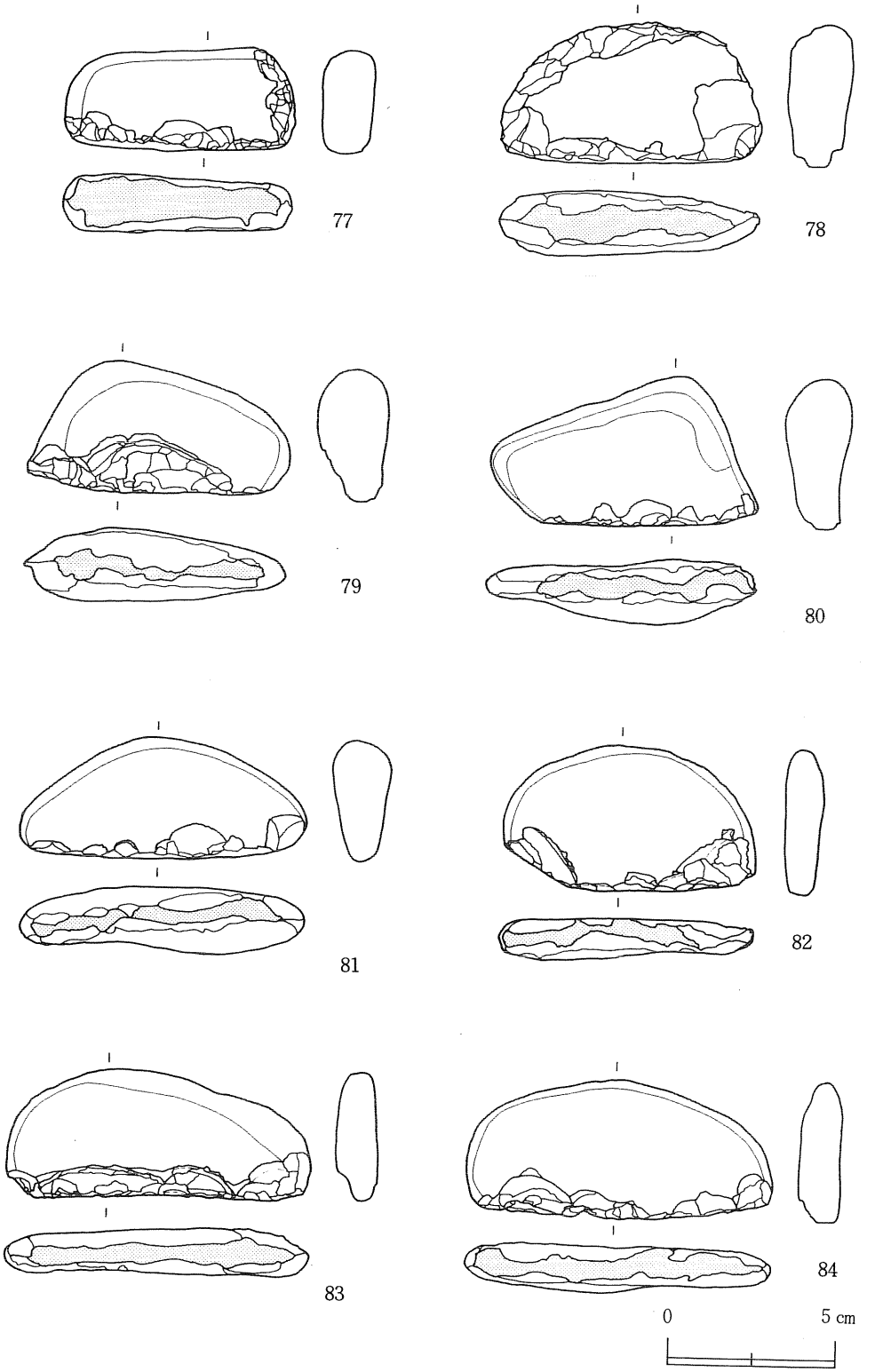



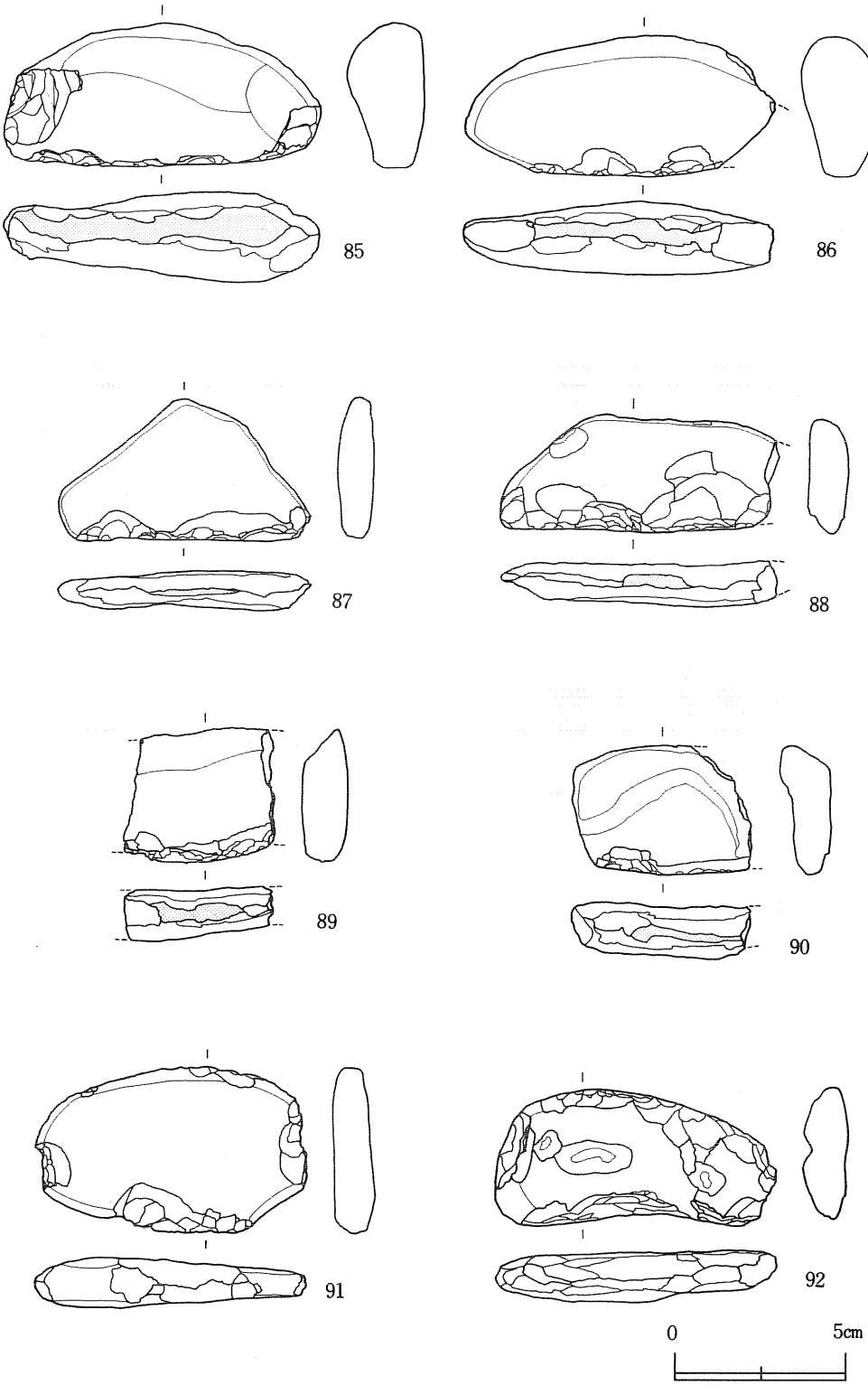



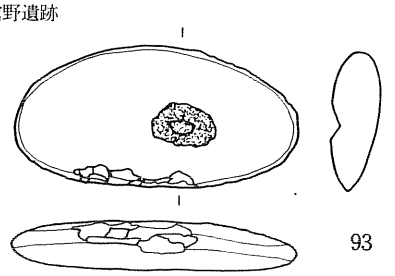
第22図　遺構外出土遺物（５）

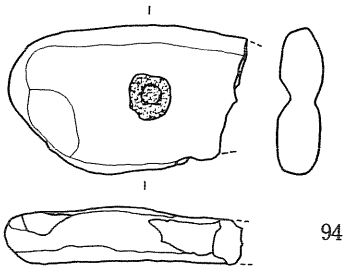


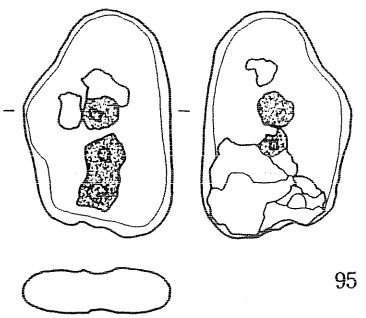

第23図　遺構外出土遺物（6）

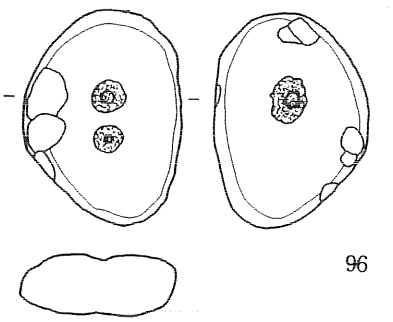


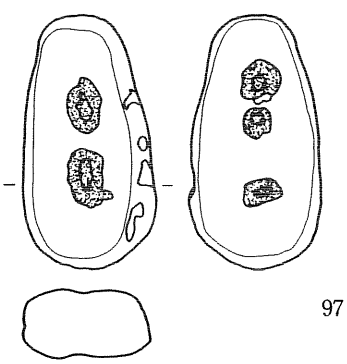

第24図　遺構外出土遺物（７）

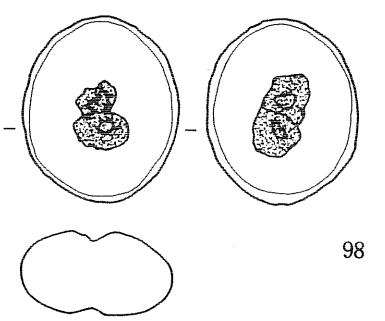


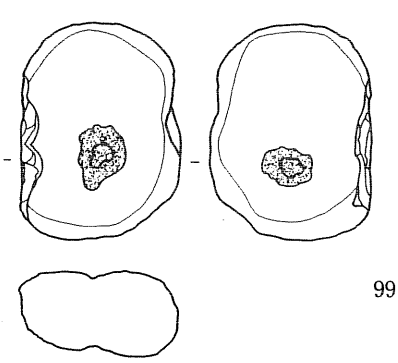



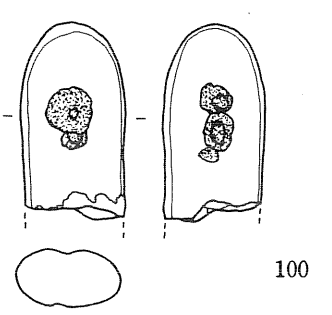



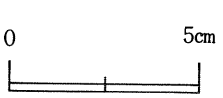




第25図　遺構外出土遺物（8）

# 第3章　まとめ

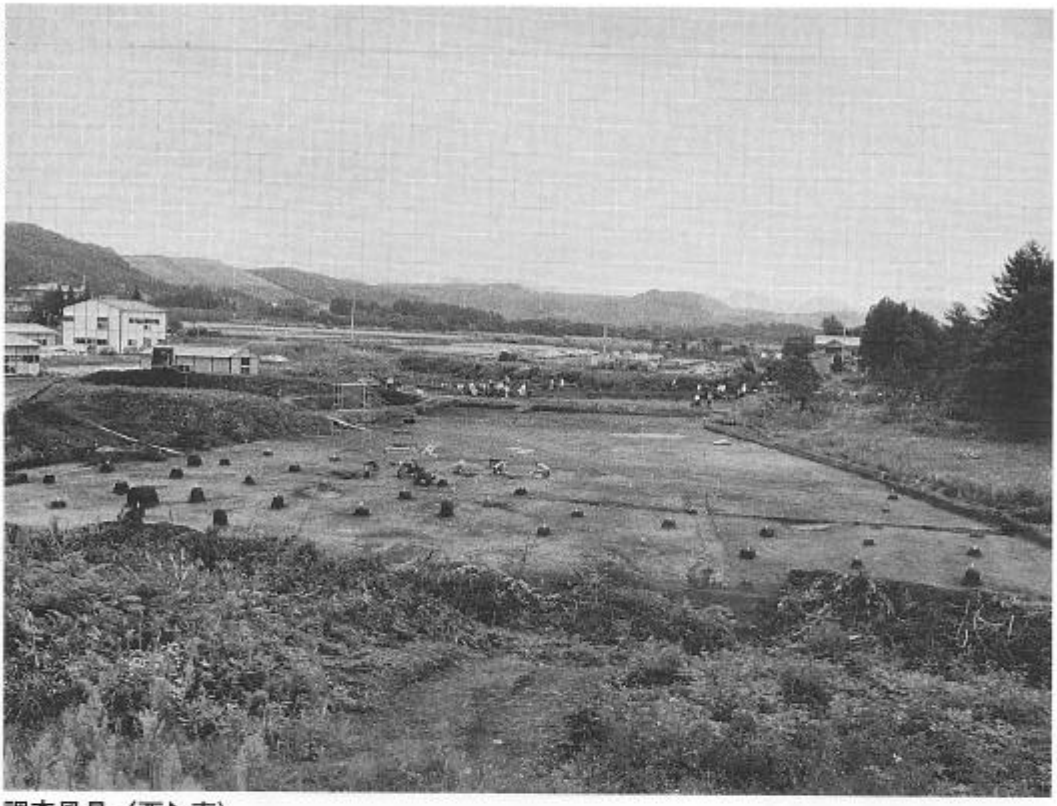
調査の結果、館野遺跡は縄文時代前期・中期・晩期に営まれた遺跡であることが判明した。検出された遺構は、調査区の東端部と西側の沢に向かった緩斜面に集中しており、遺物もこの地区から多く出土し、調査区中央部では、遺構や遺物の数が僅少である。また調査区中央の東寄りを南側の墓所に通じる農道が南北に走っているが、この農道を境にして、調査区西側では、主に円筒下層ｂ式土器をはじめとする、縄文時代前期の土器片や円筒土器に伴う石器とされている半円状扁平打製石器などが、調査区東側では、縄文時代中期の大木８ａ・８ｂ式土器等の土器片と石器、縄文時代晩期の土器片などが出土した。

調査対象区は水田造成の際に地山面まで削平されており、遺存状態が良好な遺構は少なかった。調査区西側で数基の土坑とともに検出された縄文時代前期の竪穴住居跡（SI 18）は、壁の立ち上がりを明瞭に確認することができず、竪穴住居全体のプランは柱穴の配置から推定した。調査区東側で検出した縄文時代中期の竪穴住居跡（SI 27）は大半が調査区外にあり、その全容を明らかにできなかった。また調査区中央部で検出された掘立柱建物跡（SB 29 ・ 49）とした遺構は、水田造成時に壁面を失った竪穴住居跡であった可能性も考えられる。時期は出土遺物がなく不明である。土坑は平面形が円形もしくは楕円形を呈するもの30基（SK 01～05・07・13・15・19～26・28・30・33・35～37・39・40・43～48）、フラスコ状土坑１基（SK 18）及び陥し穴状遺構（SKT 31）１基である。これらの遺構からは遺物が出土しなかったものもあり、全土坑の時期を明確にすることはできないが、一部の土坑や周囲の出土遺物から縄文時代のものと考えられる。

なお、調査区東側で検出された竪穴住居跡（SI 27）と土坑（SK 26）等が調査区外南側の墓所・杉林へのびていることや同南側で多くの土器片、石器が採集されていることから、館野遺跡は東西を開析谷にはさまれた南北約170ｍ、東西約120ｍの舌状台地全体を占め、その主体となる遺構群などは、今回の調査区の南側台地縁辺部に存在するものと推察される。従って今回の調査は、遺跡北端部を調査したことになると考えられる。しかしながら、今回の調査では、本遺跡の西側に隣接する上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡と共通する時期の遺構や遺物などが検出されており、この両遺跡と関連を持つ遺跡であることが考えられる。

西側調査区全景（西▶東）

東側調査区全景（北西▶南東）



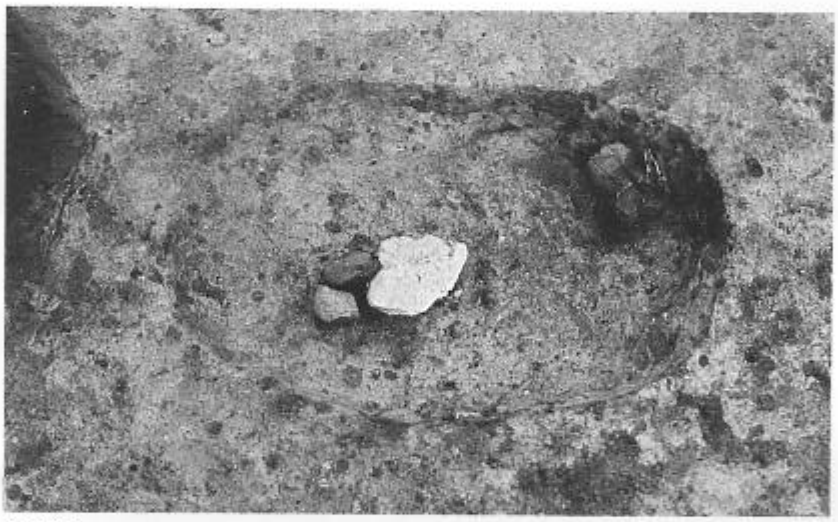
調査風景（西▶東）

調査風景（北西▶南東）

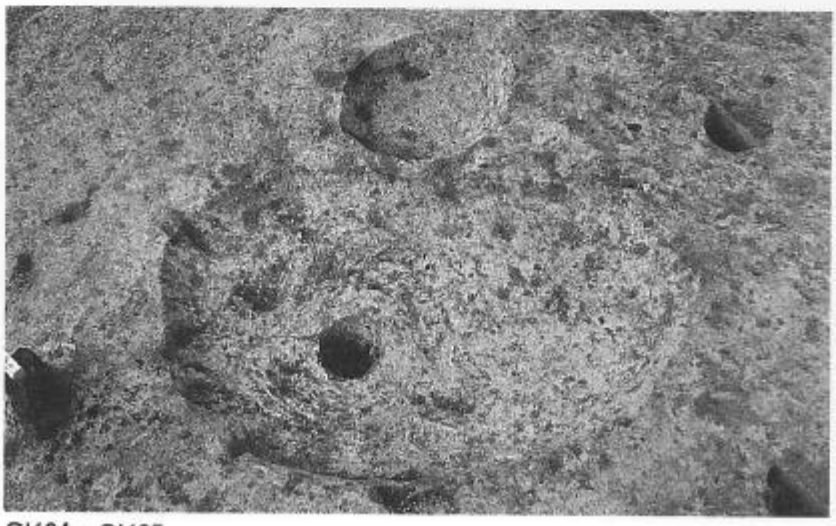
SI 08　完掘状況（南東▶北西）

SI 27　完掘状況（東▶西）

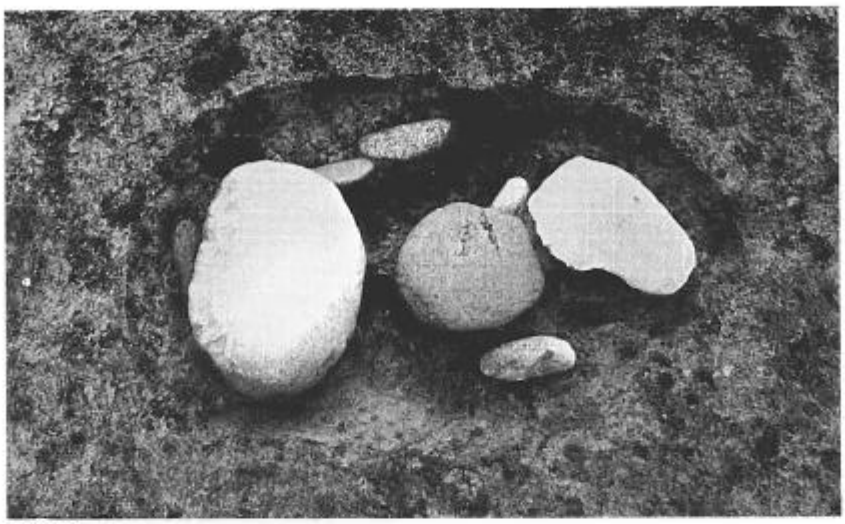
SK01



SK02



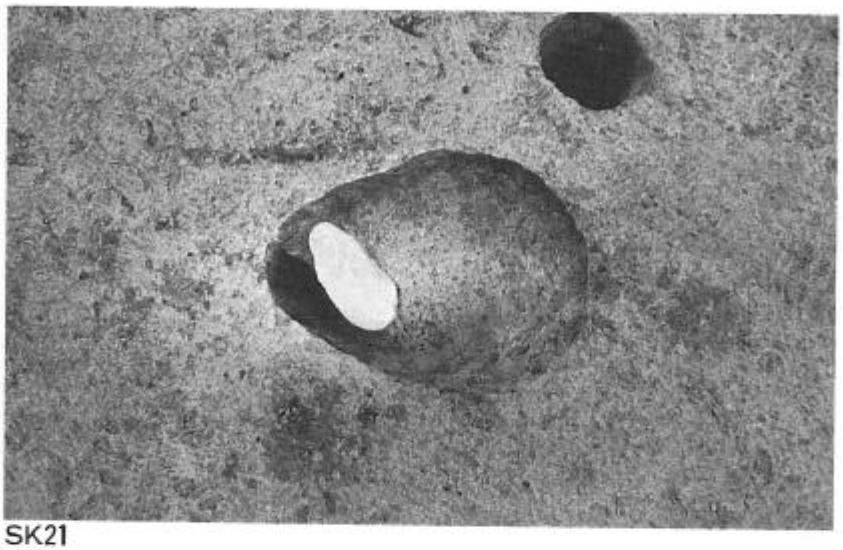
SK04・SK05



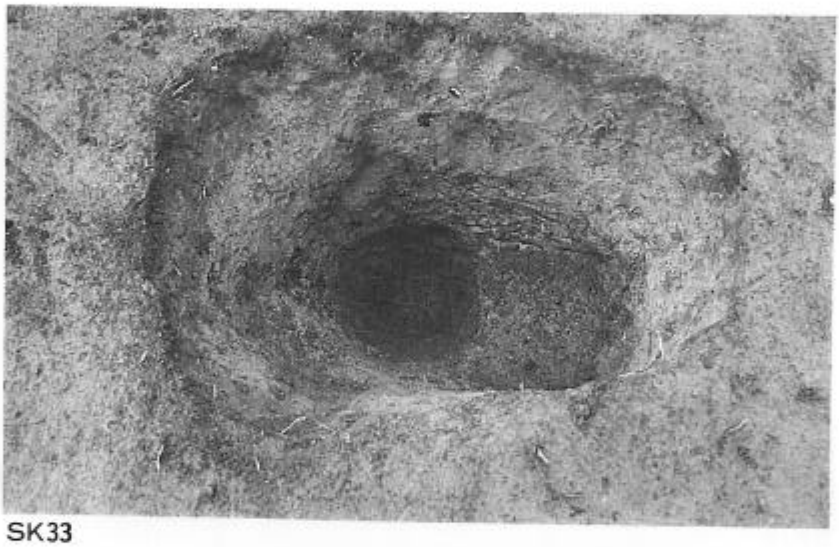
SK13

SK15

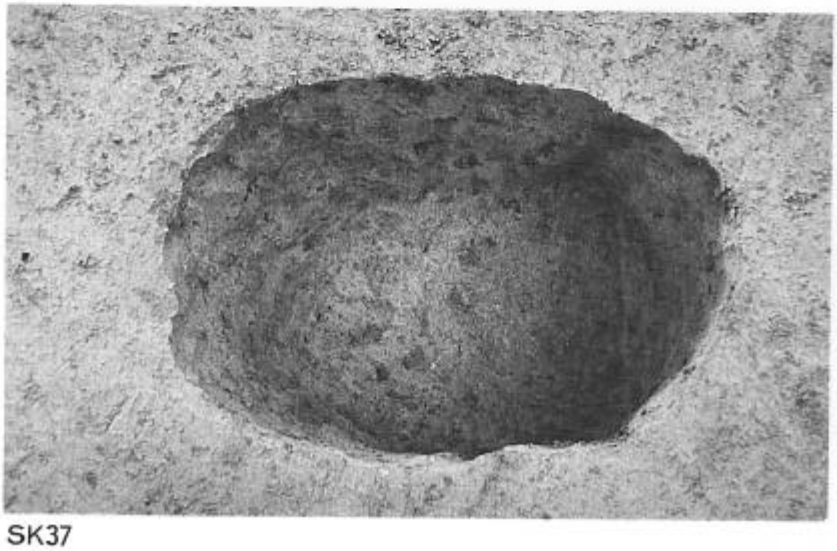
SK18



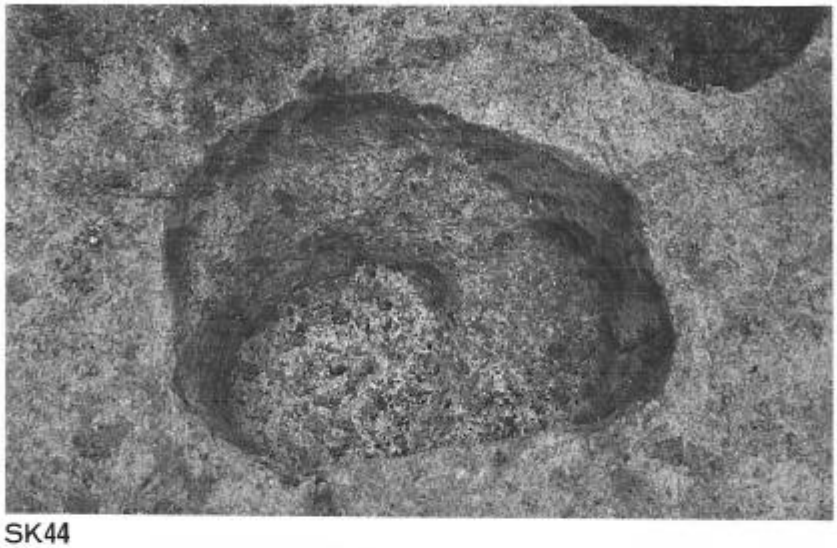
SK21



SK33

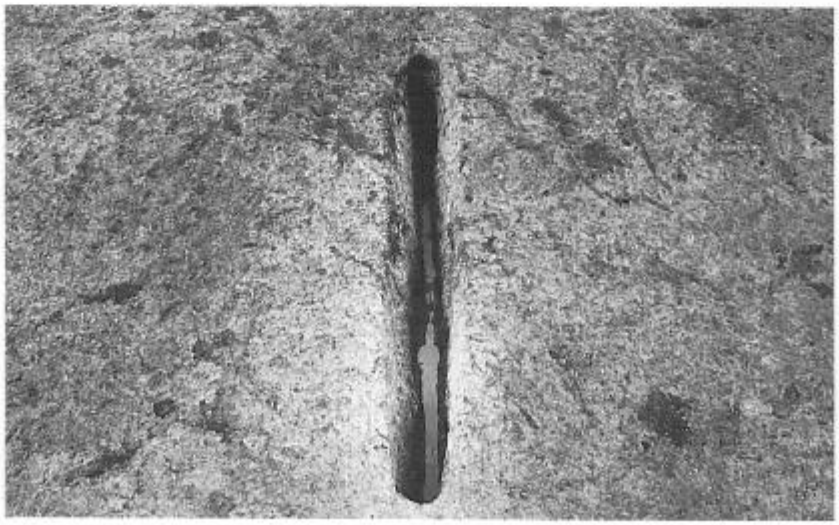


SK37



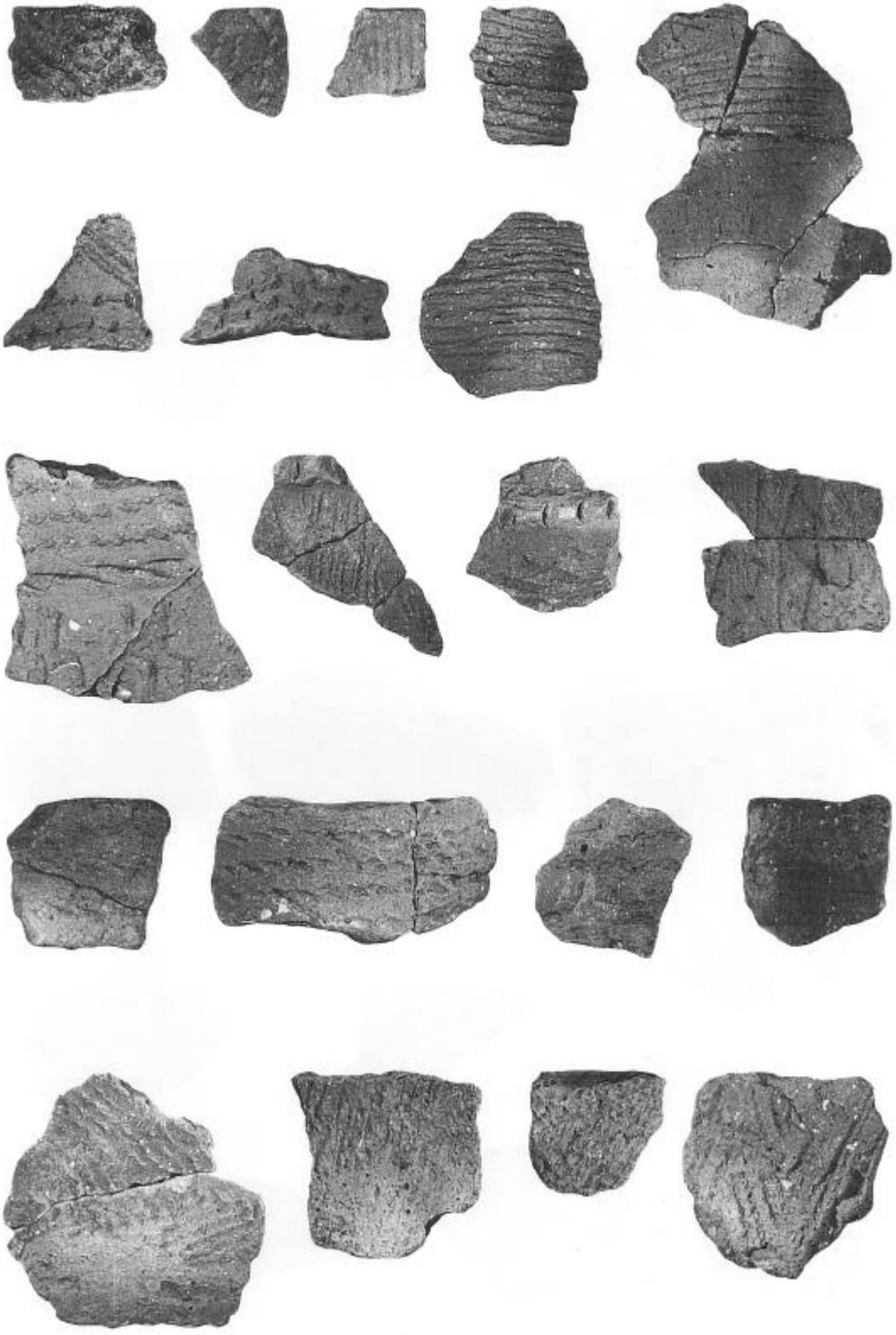
SK44

SK47

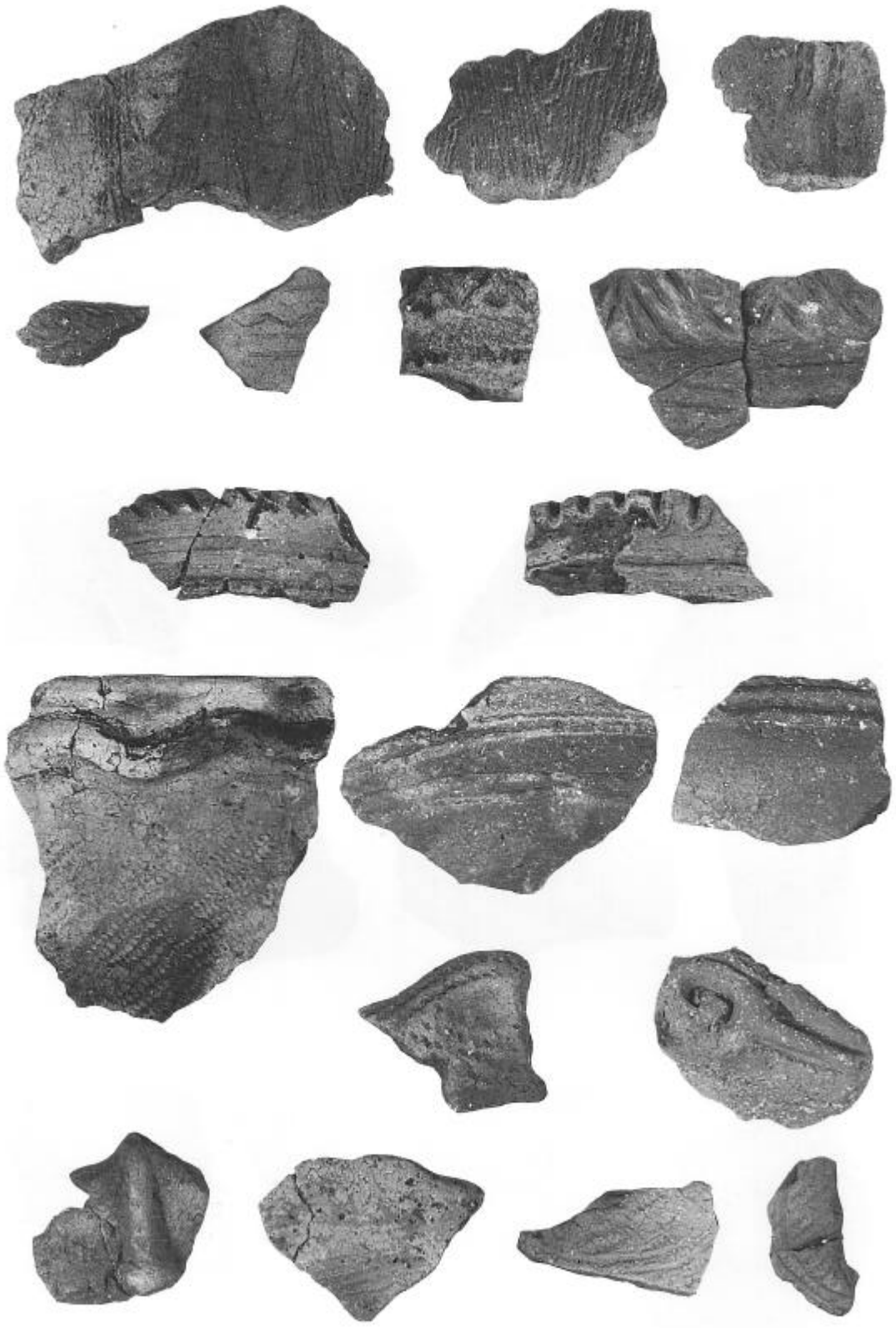


SKT31

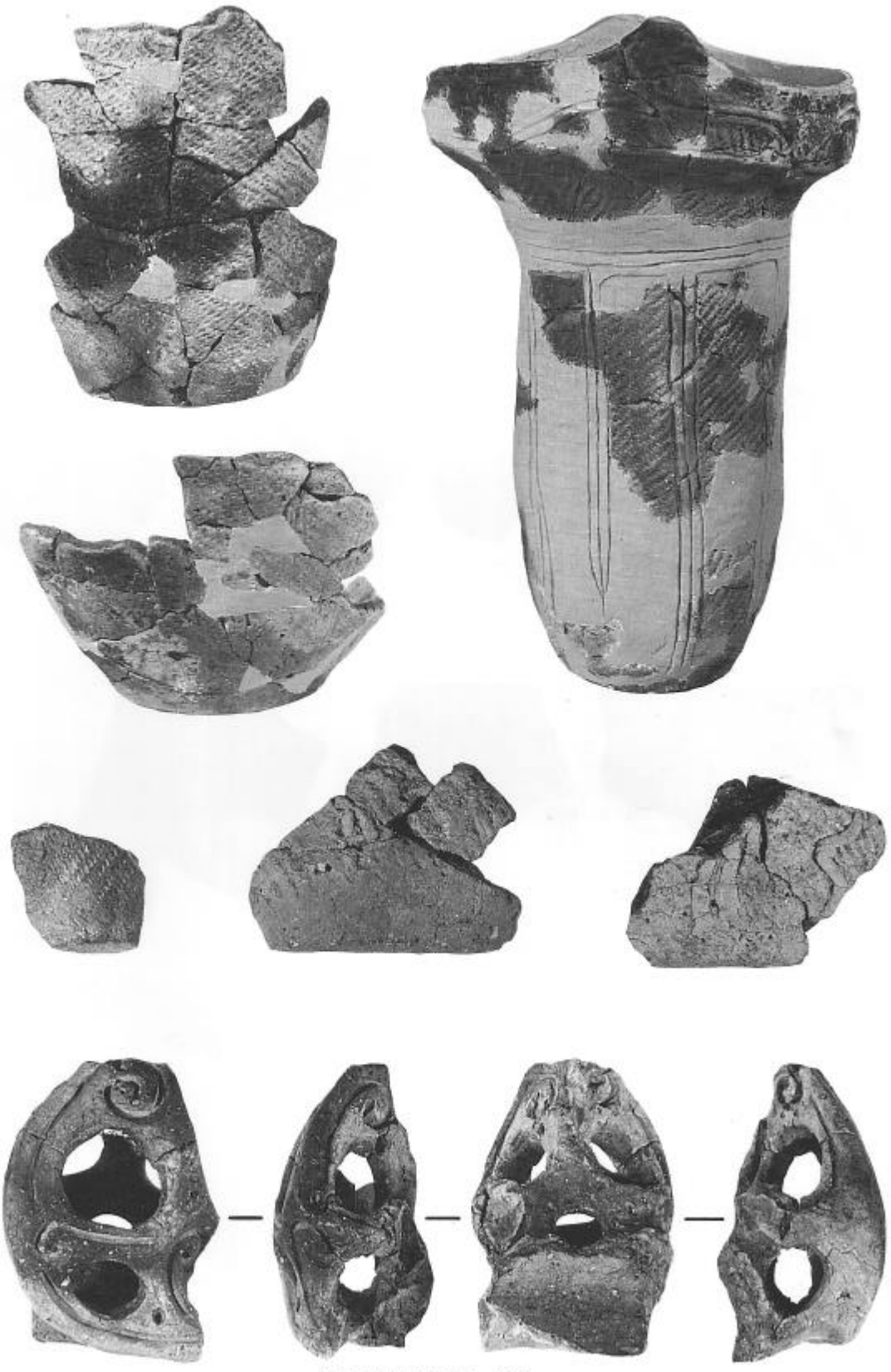
遺構内出土遺物



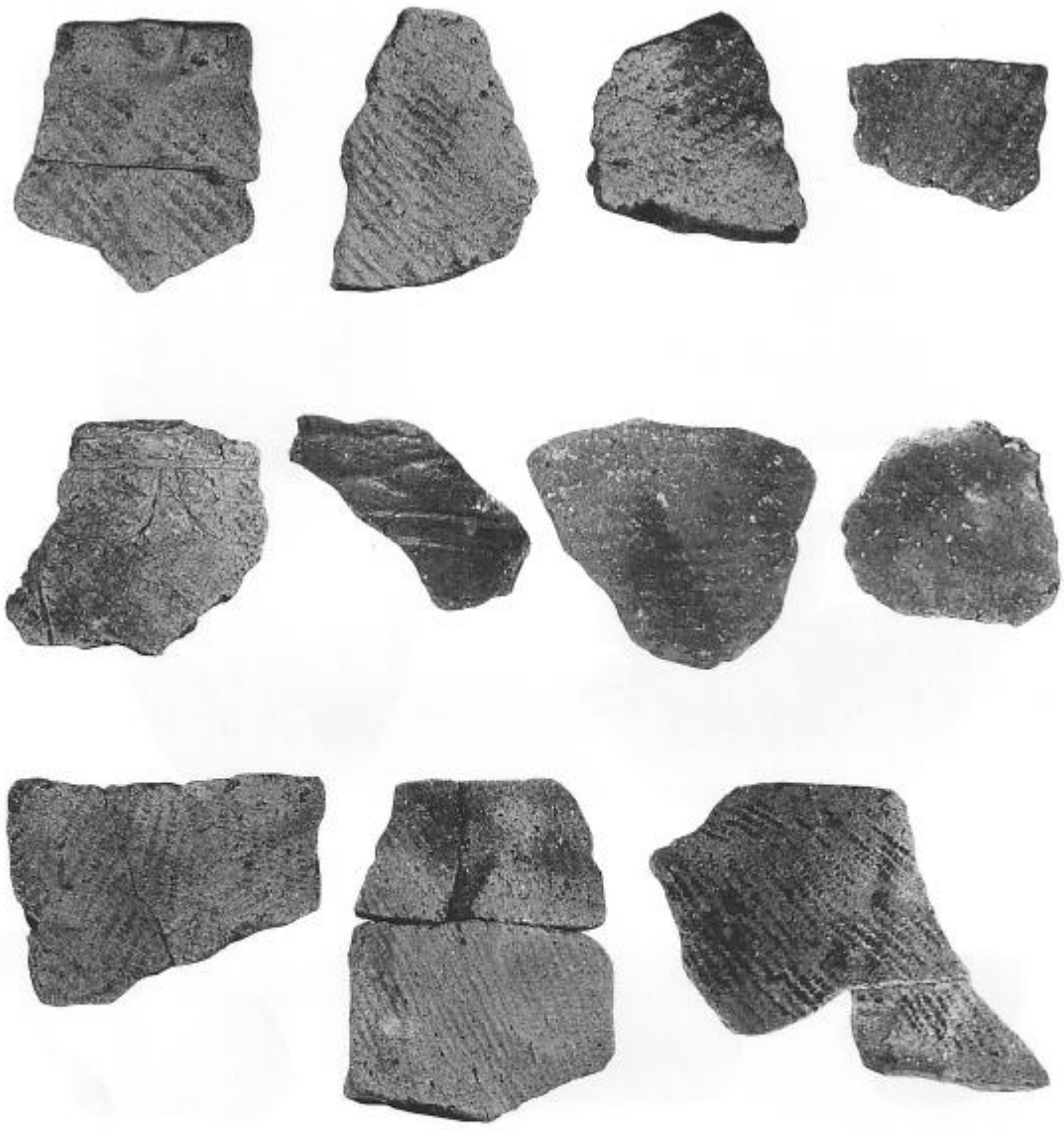
遺構外出土遺物（1）



遺構外出土遺物（2）



遺構外出土遺物（3）



遺構外出土遺物（4）

秋田県文化財調査報告書第166集

# 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ

——上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡——

下

1988・3

秋田県教育委員会

# 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ

## —上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—

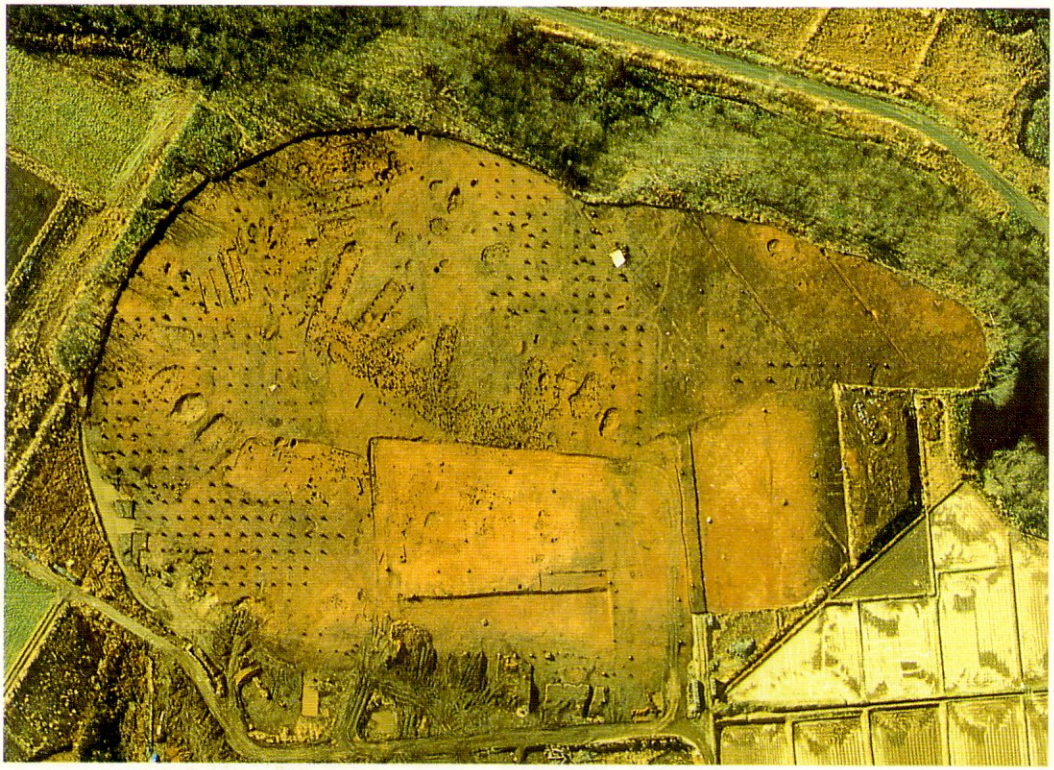
下

１９８８・３

秋田県教育委員会

上ノ山Ⅰ・Ⅱ、館野遺跡航空写真（北東▶）

同上（南西▶）



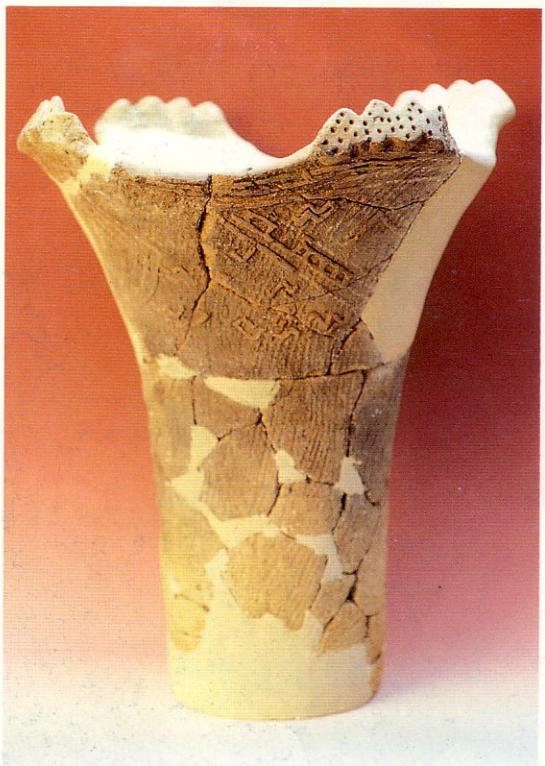
上ノ山Ⅱ遺跡全景（上が東）

上ノ山Ⅱ遺跡SI 150（右）・SI 170竪穴住居跡（北西▶）

上ノ山Ⅱ遺跡　SI 213竪穴住居跡（東▶）

上ノ山Ⅱ遺跡　SI 217（手前）·SI 218竪穴住居跡（北東▶）

上ノ山Ⅱ遺跡　出土遺物（縄文前期土器）



上ノ山Ⅱ遺跡　出土遺物（縄文前期土器）

上ノ山Ⅱ遺跡　出土遺物（燕尾形石製品）

上ノ山Ⅱ遺跡　出土遺物（カツオブシ形石製品）

上ノ山Ⅱ遺跡　出土遺物（玦状耳飾）

上ノ山Ⅱ遺跡　出土遺物（磨製石斧）

# 総 目 次

## 上

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 9
Ⅲ　上ノ山Ⅰ遺跡 …… 25
Ⅳ　館野遺跡 …… 95

## 下

Ⅴ　上ノ山Ⅱ遺跡 …… 1

## 付 図

# 下 目 次

巻頭図版
総目次 …… i
下目次 …… i

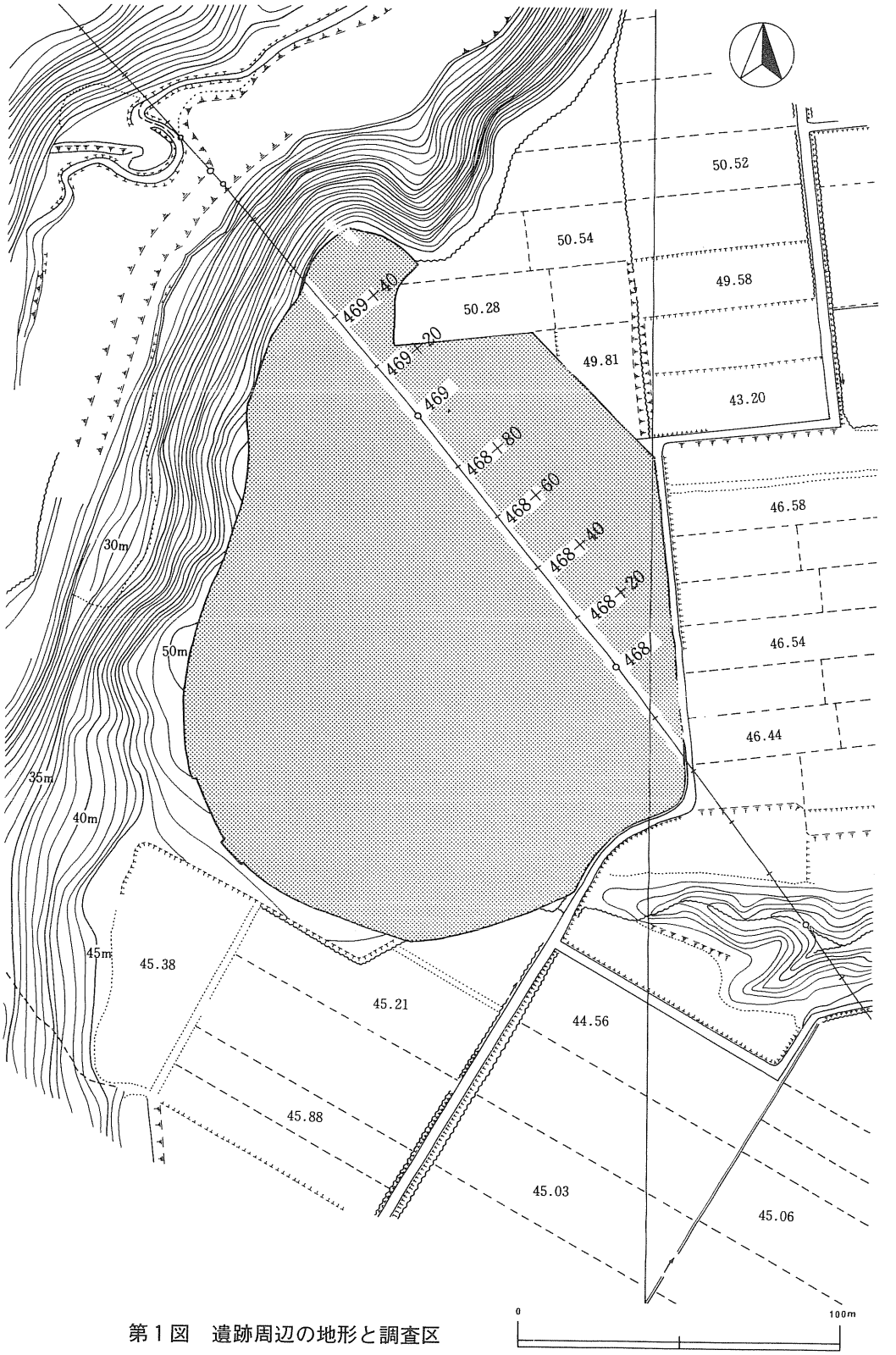
Ⅴ　上ノ山Ⅱ遺跡 …… 1
　第1章　調査の概要 …… 3
　　第1節　遺跡の概観 …… 3
　　第2節　調査の経過 …… 6
　第2章　調査の記録 …… 8
　　第1節　検出遺構と遺物 …… 8
　　　1　竪穴住居跡 …… 8
　　　2　土坑・その他の遺構 …… 46

第2節　遺構外の出土遺物 …… 166
1　土器 …… 166
2　土製品 …… 172
3　石器 …… 233
4　石製品 …… 337
第3章　自然科学的分析 …… 385
第1節　鉱物組成の分析 …… 385
第2節　残存脂肪の分析 …… 391
第4章　まとめ …… 405
図　版 …… 413

# Ⅴ　上ノ山Ⅱ遺跡

（7UNYⅡ・№30）

所　在　地　秋田県仙北郡協和町中淀川字千着上ノ山1他
調査期間　昭和61年6月16日～12月9日
調査面積　24,300㎡




第１図　遺跡周辺の地形と調査区

# 第1章　調査の概要

## 第1節　遺跡の概観

### 1　遺跡とその周辺の微地形・立地

遺跡は、淀川によって形成された数面の河岸段丘のうち、中淀川地区では標高45～50mの館野段丘上に立地する。遺跡付近における館野段丘は、その東端が淀川に面して沖積地との比高差約20mの明瞭な崖面をなしているが、西側は山地に向かって緩やかに高度を上げている。段丘東端部と西端部の高低差は5mほどであるが、山地裾部では横幅数10～100mの平坦面となって坊台北側から上ノ山まで続いている。この平坦面の南西端部が上ノ山Ⅱ遺跡の立地する部分で、比高差5mの斜面をもって上ノ山Ⅰ遺跡側の平坦面に続いている。従って遺跡付近では、あたかも2つの段丘面が存在するように見える。また、遺跡の西～北西側は古種沢が刻んだ深い谷となっており、急な斜面である。

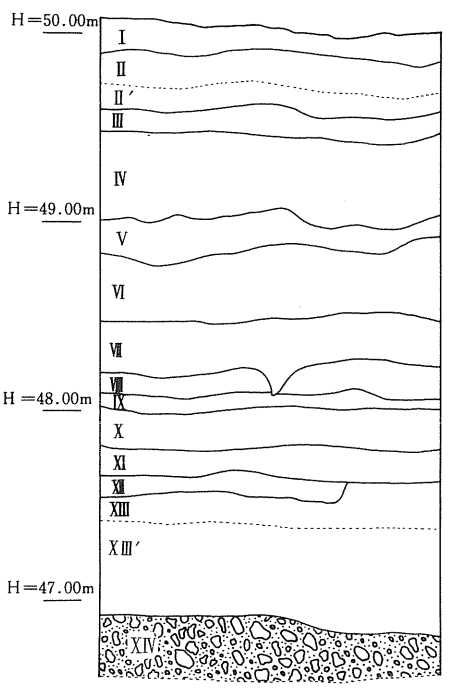
また、微視的にみれば、遺跡の南西～南裾と、東～北東裾にかけては、上ノ山Ⅰ遺跡と館野遺跡とを画する沢が2つに分岐して入り込んでおり、特に遺跡北東部には一方の沢頭がある。そして、遺跡の西～北西側は比高差約28mもの急な斜面となって古種沢に至る。この斜面は北西側ほどきつく、西側部分では斜面の途中に小さな範囲ではあるが、ごくゆるい斜面かあるいは平場に近いような部分があり、わずかながら湧水もあり、現在でもグチャグチャした湿地となっている。

調査区あるいはその周囲の現況は、大部分がミズナラ・クリ・ヤマザクラ・ヤマホウシなどの落葉広葉樹林で、下草としてササダケが見られる。遺跡の南西～南にかけては昭和45年の、東～北東にかけては昭和37年の開田事業により、それぞれ削平を受けており、特に調査区北東部では遺物包含層・遺構の大部分が失われている。

### 2　遺跡の基本層序

第2図は本遺跡調査区中央やや北寄りのMT54～NA54ラインの北面土層断面図である。これによると本遺跡における土層の基本層序は、同様な段丘面上に立地する他の遺跡と大差はない。つまり一番上位に黒ボクと呼ばれる黒～黒褐色の腐蝕土層（Ⅰ～Ⅱ′）及び漸移層（Ⅲ）があり、以下褐～黄褐色の粘質土（Ⅳ～Ⅵ）、灰白色粘質土と同色か灰黄色の砂質土の互層（Ⅶ～ⅩⅢ′）、段丘砂礫層（ⅩⅣ）の順となっている。しかしながら、この基本層序は広い調査区全面で

一様でない。例えば、調査区北半では最上位の腐蝕土の色調が黒褐色ではなく赤褐色を呈しており(註1)、調査区の南側段丘南端部では漸移層（Ⅲ）の下に直接砂礫層が存在したりする箇所もある。このうち縄文時代の遺物は第Ⅱ層中にほとんどが包含され、生活面もこの層中にあったものと考えられる。




**第2図　遺跡の基本土層**

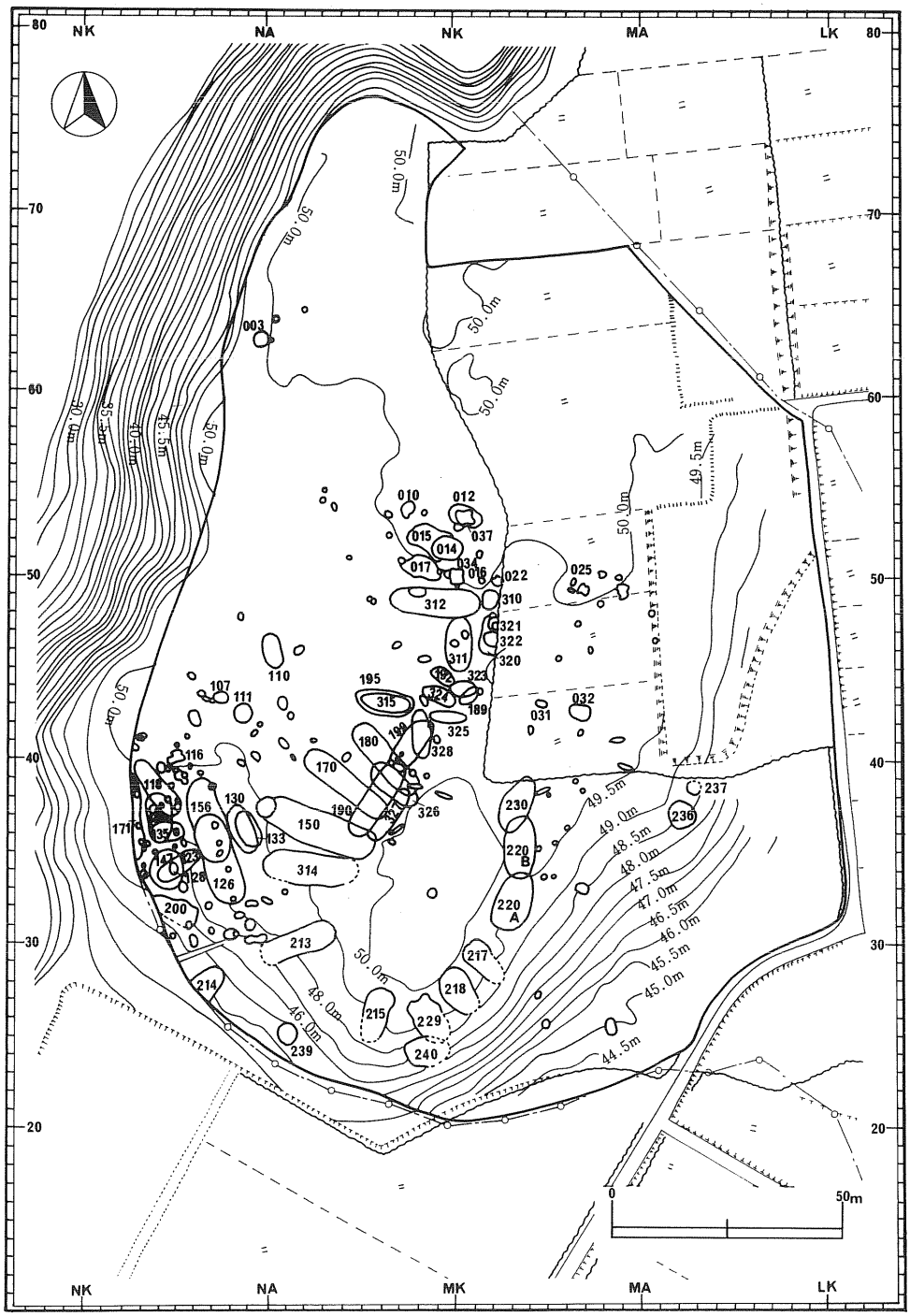
## 3　遺構の分布

検出された遺構は縄文時代前期の竪穴住居跡・土坑・土器埋設遺構・配石遺構などである。これらの遺構の段丘面における位置は、北西側から南西に延びる段丘の南西端部にあたる。また、調査区を南北約220 m、東西約150 mの楕円形の範囲としてみた場合北西端の竪穴住居跡1軒と3基の土坑を除くと、楕円形の南部5分の3に遺構群が集中し、その範囲は直径約130 mの円形の中に含まれる。この大部分の遺構が集中する直径130 mの円形の範囲内における遺構の分布を観ると、円の中心点の南側約20 mには1基の配石遺構があり、この配石遺構を中心として長軸約50 m×短軸約25 m（長軸方向は南西―北東）の範囲にはほとんど遺構の存在しない部分がある。（これを仮に「広場」とよぶ)。そしてこの広場の周囲には、いずれも長軸線が広場の中央部に集まるように配置された9軒の大きな住居跡（大型住居）が存在する。さらに広場を囲む放射状配列の大きな住居跡群の西側と北東側には、大小の住居跡・土坑などの遺構が集中する部分があり、南西―南―東側には遺物の捨場がある。

## 4　遺物の分布

遺物の大部分は、調査区の中央部から南側で出土した。その出土のあり方には、大きく2つの傾向が見られた。1つは調査区南西―南―南東斜面から集中して出土したものであり、他は、広場とこれを放射状に囲む大きな住居跡群以外の竪穴住居跡及びその周囲から集中して出土したものである。広場とこれを放射状に囲む大型住居跡群の範囲からと、その北東側水田部分からは遺物の出土量が他の部分に比べて非常に少ない。

註1　これが南側に行くに従って黒味を増し、調査区中央やや南寄りあたりで最も厚い。




第３図　遺構の分布とグリット配置図

## 第2節　調査の経過

調査対象面積が24,330㎡と広いために、昭和61年4月30日から5月15日まで行った範囲確認調査の結果をもとに、人力による発掘作業前に重機で表土を約20㎝（場所によっては約10㎝）掘削した。ただし、立木の切株は遺構・遺物の破壊を招く恐れがあったためにこれを残し、調査と併行して人手で抜根することとした。また、面積と調査期間との関係から調査員2名1組で計3班編成の調査体制とし、調査区を東西3つに輪切りするように各班を配した。

昭和61年6月16日、調査区北半部から人力による発掘調査に入り、6月30日からはそれぞれの班の担当部分に従って作業を行う（調査区北側から1班・2班・3班の順である）。2・3班は調査区西側から東の方向に調査を進める。調査区南西部では発掘開始と同時に多量の遺物が出土し、その中には玦状耳飾も含まれている。7月5日～8日にかけて、調査区西端部（NA～NF・30～40グリッド周辺）Ⅱ層上面で土色の分布に違いのあることを4箇所で確認する。初めは小さな沢が入り込んでいるのかとも考えたが、よく観察するとそれは第Ⅰ層が大きな楕円形に落ち込んでいるもので4箇所の長軸線方向が一定していないことに気づく。このためこの下に何らかの遺構が存在するかもしれないとして、ベルトを残してそのうちの1カ所を掘り下げる。同9日には床面を検出できたのでこれを竪穴住居跡とする（SI 200）。この竪穴住居跡はゆるい斜面に構築されているために、その南壁を確認することはできなかったが、長軸が10mを超す大きな住居跡（大型住居）である。その後の調査で、同様な他の3箇所の黒色土の落ち込みも大型の竪穴住居跡であることが判明し（SI 118・123・156）、しかも他の住居跡との重複があった場合はその中で最も新しいものであることがわかる。このことは、大型の竪穴住居跡が、廃棄された後完全には埋まりきらないで、現在に至ったものと考えられた。

7月中旬から調査区西部などで土坑や竪穴住居跡などの遺構確認が相次ぎ、南西端斜面からは大量の土器・石器が出土し始める。この南西端斜面の遺物包含層は最も厚いところで60～80㎝に達し、この部分が遺物の捨場であったと判明する。

8月22日、調査区南部の平坦面から南西斜面にゆるく傾斜するその肩部から斜面にかけて長さ17m余、幅5m弱のプランを確認する。同月25日にはこれが大型の竪穴住居跡であることが判明し（SI 213）、本遺跡にもりっぱな大型住居の存在することを知らしめ、この後の大型住居跡の確認の先達となる。

8月27日から、調査区中央部から北側にかけて検出していた竪穴住居跡（SI 010や013など）土坑（SK 006や007など）の精査などを行うが、これらの遺構群の北側にはSI003やSK001・002・004を除いて他に全く遺構の存在しないことがわかる。

9月12日頃から調査区南部の台地縁辺に平面形があまり整っていない大きな住居跡（SI

215・216・217）を確認するがいずれも南側の壁は斜面であるため検出できない。また、これと相前後して、この大型住居群とは遺構が全くなく遺物も希薄な平坦面をはさんで北西側に、長大な遺構プラン（SI 150）が確認される。このSI 105は大型住居跡で長径が約24 mほどもあるが、確認面からの掘り込みが浅く、床・壁面とも明確ではない。9月22日、周囲に全く遺構のないMK 32グリッドに、人頭大の河原石を30個前後配した配石遺構（SQ 219）を確認する。この頃に、平坦部の縁辺から検出されている大型住居群と、SQ 219を点対象として検出されている大型住居跡の長軸方向が、SQ219周辺に集中するのではないかということに気付く。その後、SI 150の北東側にSI 170・SI 180と続けて大型住居跡が検出されるに及んでこれは動かし難い事実となる。それにしても、SQ 219の周囲には遺構が検出されず、遺物も少ない。

10月中はこれまで検出した竪穴住居跡（大型住居跡を含む）や土坑等の精査と併行して、他の遺構の検出にも努める。その結果、それまで1基しか検出されていなかったフラスコ状ピットが、調査区中央西端部から7基が列をなすように検出される。この部分は台地の西端にもあたる所であるが急な斜面にまではまだ数mを残しているので、その部分にも多数のフラスコ状ピットの存在することが予想される。下旬になって、SI 150・170・180などの広場を囲む放射状配列の大型住居跡に長軸線が直交し、それよりも新しい大型住居跡（SI 190・199など）を検出する。また11月にはSI 230やSI 180と重複のある陥し穴状遺構を検出するが、いずれも大型住居跡を切っており、調査区中央部から東側に分布する陥し穴状遺構は、大型住居跡などよりは新しいと考えられる。また、調査区中央部から北東部にかけては、昭和37年の開田事業により上部が削平されているためにほとんど遺構等は存在していないものと見られたが、精査の結果小さな竪穴住居跡（SI 132）や土坑などと共に小さい柱穴様のピットが数多く検出される。広場の北側にある遺構群が北東側にものびていたことがわかる。

広場を囲む放射状配列の大型住居跡のうち、SI 217の北側には台地から斜面にかけての肩部に連続的に分布する焼土と若干の柱穴が認められるがこれがSI 217などと中軸線が同方向のものなのか、そうでないのか、ほとんど掘り込みなどがないために不明であったが、調査最終末にやっとSI217の中軸線などと、ほぼ直交する3軒の大型住居跡であると判断を下す。

11月下旬からは、最終的な図面のチェックや柱穴の確認などの作業に追われたが、この時期にしてはめずらしく雪が少なく、5㎝積もったのが最大でそれもすぐ消えてしまうという好天にめぐまれ、12月9日には全ての調査を終えることができた。また、調査期間中10月第1週から第4週にかけては毎週専門指導員の先生方の来跡による指導を得、10月25日には現地説明会を開くことができた。現地説明会には200名余の参加が得られたが、これは前例のない大型住居跡の数とその配列のあり方、燕尾形石製品・カツオブシ形石製品・玦状耳飾をはじめとする珍しくしかも大量に出土した遺物などが、一般の方々の興味を呼んだものと思われる。

# 第2章　調査の記録

## 第1節　検出遺構と遺物

今回の上ノ山Ⅱ遺跡発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡64軒・土坑117基・フラスコ状土坑13基・陥し穴状遺構6基・土器埋設遺構6基・配石遺構3基・溝状遺構1条の他、多数の焼土・小ピット、それに捨場である。これらの遺構は、その伴出遺物などから全て縄文時代前期後葉に属するものと考えられる。これらの遺構は、前節で述べたように、調査区北部西端部の小さな竪穴住居跡1軒と3基の土坑を除けば、南北に長い調査区の南側に集中する。調査区中央から北東側では、確認された遺構数が少ないが、これは昭和37年の開田事業によって上面数十cmが削平されたためであり、わずかに残った竪穴住居跡や小ピットなどからして、この部分にももともとは多数の遺構が存在したものと推測される。これらの遺構の説明にあたっては、大きく竪穴住居跡と竪穴住居跡以外の遺構に分けて行うこととする。

### 1　竪穴住居跡

64軒を数える竪穴住居跡には、住居跡プランを確認しその全容を検出できたものと、住居跡プランは明確ではないが、焼土例と柱穴配置からその存在を推定したものがある。この2者を同一レベルで扱うことと、機能面から全てを竪穴住居跡としてしまうことに問題がない訳ではない。深く掘り込まれ、住居跡プランが明確なものは問題とならないが、極めて浅い掘り込みあるいは掘り込みを全く検出できなかった住居跡や、柱穴配列から住居跡プランを推定した住居跡の場合は、前述の通り調査区中央から北東側の開田時削平地区に検出された柱穴あるいは柱穴様ピット群と、推定プランによる住居跡集中地区におけるプラン推定に「使用されなかった」柱穴あるいは柱穴様ピット群の中には、より詳細・綿密なる検討から更に多くの住居跡プランが推定できよう。本報告書での63軒という数字は、調査担当者が明らかに竪穴住居跡であると認めたものに限って図示・カウントした数字である。

各竪穴住居跡については、規模の小さい方から順次説明を加える。

**SI003**　（付図3、第69図、図版7）

MT 62・63、NA 62・63の4グリッドで検出された。北北西―南南東に長軸3.8m、短軸3.4mの楕円形プランを呈する。覆土は8層に分層された。壁に近い初期の堆積土層は地山層の再堆積土と見られることから、本竪穴住居跡を掘り下げた際の排土を、その周囲に盛土して

いたが、廃棄後に流入堆積したと推定される。壁面は緩く傾斜しているが、壁高は東側と北側で0.2m、西側と南側で0.3mである。床面は、2段の鍋底状を呈する。柱穴・炉・壁溝等は検出されなかった。

ごく少量の土器と石錘1点及びフレイク1点が覆土中から出土している。石錐（第69図219）は、多孔質の石材を用いている。

**SI010**　（付図3、図版7）

ML 53・54、ML 53・54の4グリッドで検出され、長軸方向を北東―南西にもち、長軸3.5m、短軸2.6mの楕円形を呈する。覆土は、木根による攪乱の影響か、複雑な様相を呈している。壁高は、0.1～0.15mである。床面は、凹凸があり、特に北西側と東側にベット状の盛り上がりがみられる。柱穴・炉・壁溝等は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI016**　（付図3、第40図、図版11）

MJ 49・50の両グリッドで、SI 034と重複して検出されたが、本竪穴住居跡の方が新しい。長軸方向をほぼ南北にもち、長軸3.46m、短軸2.78mの長方形プランを呈する。覆土は、柱穴・くぼみ部分を除けば同じ土層である。壁面は若干傾斜しており、壁高は0.1～0.15mを測る。床面は踏み固められており、ほぼ平坦である。西側壁下、東側壁中央から北半、南東側隅部に壁溝があるが一巡せず、深さも一定しない。東側壁の北半にある壁溝は0.18～0.2m壁面から離れている。柱穴は、4個（P1～P4）穿たれているが、P1―P2が主柱穴と考えられる。また、住居の中軸線上の南・北に各1個、東側に1個、径0.4～0.6mの円形・楕円形のピットが穿たれている。炉は検出されなかった。

遺物は、覆土中から土器片4点、フレーク4点が、床面から土器片2点出土した。第40図31・32は地文として縦位の撚糸文を施し、頸部には隆帯を巡らす。隆帯中央部に深い凹線があるので、隆帯は粘土紐2本の貼付のように見える。

**SI022**　（付図3、第60・71図、図版10）

MH 49・50の2グリッドで検出され、平面プランの東側約半分を開田のため削平されている。削平部に2箇所柱穴が残っていることから、その規模・プランを推定できる。西北西―東南東に長軸方向をもち、長軸2.65m、短軸1.95mの胴張りのある長方形プランと推定される。覆土は3層に分層されるが、上位層である1層に炭化物粒が混入している。床面は、木根による攪乱等のため凹凸が激しい。柱穴は、P1～P5が主柱穴と考えられる。

遺物は、床上5㎝の覆土中から土器片1点、半円状扁平打製石器1点（第60図149）、凹石1点（第71図246）、床面から礫1点出土した。凹石は3面に凹みの認められるものである。

**SI025**　（付図3、図版10）

MC 49 と MC 50 の 2 グリッドで検出されたが、開田時に削平されている。直径 2.5 m の略円形を呈するが、周囲に 1 段高い床面をもち、外側の壁下に柱穴のある竪穴住居であるとすれば、南北に長軸約 3.7 m、短軸 3.6 m の略円形プランの竪穴住居跡となる。覆土は、5 層に分層されたが、上位層に炭化物粒の混入がみられる。現況では、0.04 ～ 0.08 m の壁高を計測するが、上部が削平されており、2 段の床面をもつ竪穴住居であったとすれば、外側の壁高は不明である。床面は、木根による攪乱が多く凹凸が激しい。柱穴は内側に 6 個、外側に 13 個存在する。外側の柱穴は、外側の壁下に穿たれた柱穴と考えられる。炉および焼土は検出されなかった。壁溝は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI031**　（付図 3 、図版 9 ）

ME 42 ・ 43、MF 42 ・ 43 のグリッドに検出されたが上部を開田のため削平されている。北西―南東に長軸方向をとり、長軸 2.56 m、短軸 1.85 m のやや胴張りのある長方形プランである。壁高が 0.025 ～ 0.11 m と低いためか、覆土は、黒褐色土の 1 層しか認められなかった。床面は、わずかに凹凸があるが、よく踏み固められている。柱穴は床面に 2 個検出されたが、主柱穴なのか不明である。炉・壁溝・出入口は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI032**　（付図 3 ）

MC 42、MD 42、MC 43、MD 43 の 4 グリッドで検出されたが、開田のため上部を削平されている。長方形の掘り込みの外側に、柱穴様ピットが並んでいることから、上・下 2 段の床面をもち、外側の壁面下に柱穴が穿たれている竪穴住居跡と判断された。掘り込み部は、長軸 4.24 m、短軸 2.93 m で西側壁が若干短く、弧を描いている。また外側の柱穴の外側を結んだプランでは、長軸 4.75 m、短軸 4.1 m を推測する。長軸方向は西北西―東南東である。覆土は、5 層に分層された。1 層には、水田粘土の浸透が認められた。床面は平坦であるが、西側壁中央部に幅 0.2 m、長さ 0.5 m、高さ 0.16 m の盛り上がり部分がある。柱穴は、掘り込み部床面に 7 個、外側に 14 個検出された。P 1 ―P 2 、P 3 ―P 4 、P 5 ―P 6 、P 7 ―P 8 が対となり、P 9 ―P 10（未検出）を合わせ主柱穴と考えられる。その他の柱穴は副次的な柱穴あるいは、時間差のある柱穴と考えられる。炉・壁溝及び出入口は検出されなかった。

遺物はごく少量の土器片が出土した。

**SI034**　（付図 3 、図版 11）

MJ 50、MK 49 ・ 50、の 3 グリッドに、SI 016 と重複して検出されたが、SI 016 に東側を掘り込まれているので、本竪穴住居跡の方が古い。平面プランは、竪穴住居の西側部分しか遺存していないので、不明確であるが、長軸 4 m を超えない楕円形プランと思われる。遺存部分は、

南北2.6m、東西1.5mで半円形を呈する。壁高は、0.04～0.07mである。床面は、小さな凹凸はあるが、堅く踏み固められている。柱穴は床面上に3個（P1～P3）検出されている。炉・壁溝及び出入口は検出されなかった。

大きな礫が2点出土したのみで、人工遺物は出土しなかった。

**SI037**　（付図3、図版6）

MI52・53、MJ52・53の4グリッドに位置し、SI012と重複するが、SI012が本遺構上面に貼床して構築されているので、本遺構がSI012より古い。長軸方向を東西にとり、長軸3.22m、短軸2.72mの隅丸形プランを呈する。覆土は、1層のみで上部が堅く踏みしめられている。壁高は、SI012の床面から測ると0.07～0.1mであるが、遺跡のプラン確認面からは、0.31～0.47mとなる。壁面は外側にやや傾斜している。張り出し部では、0.04～0.07mの高さである。床面は、中央部が直径2～2.3mの略方形に0.07～0.11m掘りくぼめられて、平坦な踏み固められ、張り出し部は緩やかな傾斜がつけられている。円形に掘りくぼめられた床面の西側と、張り出し部のある南東隅部の一部に深さが、0.02mと非常に浅い壁溝が検出された。柱穴は16個（P1～P16）検出されP1—P2—P3が主柱穴で、他は支柱的要素の柱穴と考えられる。炉は検出されなかった。張り出し部は出入口かとも思われる。

覆土中から少量の土器片とフレイク1点が出土した。第40図33は網代痕のある底部破片である。

**SI107**　（付図3、図版9）

NB43、NC43に位置し、SK112と重複するが、プラン確認時の切り合い関係からSK112より新しいことが確認された。長軸方向を北西—南東にとり、長軸3.1m、短軸2.65mの楕円形プランを呈する。覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、炭化物粒が含まれているが、2・4層ではその含有が顕著である。壁面は外傾して緩やかに立ち上がり、壁高は0.16～0.2mである。床面は平坦である。柱穴は5個検出されたが、上部構造を支える主柱穴なのか明確にできなかった。炉・壁溝・出入口は検出できなかった。

遺物は覆土中からフレイク2点が出土したにとどまる。

**SI116**　（付図3、第43図）

NE39・40に位置し、SK121と重複するが、切り合い状態からSK121より新しいことを確認した。長軸方向を北西—南東にとり、長軸3.4m、短軸2.6mの歪んだ楕円形プランを呈する。覆土は暗褐色土と褐色土を主体とし、1層には炭化物と焼土粒を含んでいる。壁面は南東側の一部が攪乱されているが、やや外傾して立ち上がる。床面は平坦ではあるが北から南へわずかに傾斜している。柱穴は2個検出されているが、主柱穴かどうか不明である。炉は住居跡の中央やや北寄りに0.3×0.36mの地床炉があり、地床炉はやや凹み、焼土は堅くしまっている。

遺物は覆土中からごく少量の土器が出土した。第43図34は少なくとも2段にわたる粘土紐の波状文が描かれるが剝落している。口唇部にはそれよりも幅の広い波状文が貼付されている。

**SI128**　（付図3、図版14）

NE 33・34に位置し、SI 123・SI 147と重複している。新旧関係は、SI128の覆土上部が踏み固められた部分にSI 123の焼土が堆積していることから、SI 123・SI 147より古いことが確認された。長軸方向を北北西—南南東にとり、長軸3.1 m、短軸2.5 mの隅丸方形プランを呈する。覆土は褐色土を主体とする。壁高は0.16～0.3 mで、外傾する壁面は焼けているが、炉は検出されなかった。床面は平坦で堅くしまっている。本住居跡のものと特定できる柱穴はない。壁溝・出入口は検出できなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI237**　（付図3、図版20）

LQ・LR 38のグリッドに位置する。一辺約2.9 mの方形プランを呈している。壁高は東北隅を中心とする部分が不明であるが、他では0.1 mほどでほぼ垂直に立ち上がる。柱穴や炉は検出できなかったが、床面は周辺の地山よりも若干堅く、しまりのある黒色土が混入している。

**SI189**　（付図3、第71図）

MI 43、MJ 42・43に位置し、SI 323・SK 188と重複しているが、SK 118の覆土に柱穴が穿たれていることから、SK 188より新しいことは確認されたが、SI 323との新旧関係はどちらも柱穴配置から確認しているため不明である。柱穴配置から、長軸方向を北東—南西にとる。柱穴間距離から推定する規模は長軸4.7 m、短軸2.7 mとなるが、他の住居跡の柱穴配置とプランとの関係から推定すると、長軸6.5 m、短軸4.3 mの楕円形となる。柱穴はP 10—P 11を結ぶ線を中軸線として、P 1～P 6とP 7～P 9が対称に配列されており、P 1～P 11の11箇所が、上部構造を支える主柱穴と考えられる。炉・壁溝・出入口等は検出されず、平坦な床面もあまり堅くない。

遺物は、床面から土器底部1点と柱穴中から凹石1点（第71図247）が出土している。

**SI239**　（付図3、図版21）

MR 25、MS 24・25、MT 24・25の南西に降りる緩斜面に位置する。住居跡の北側を径が3 mを超す大きな倒木痕により破壊されている。遺構は、倒木痕の南側の地山面において、堅く締まった床面と炉と考えられる焼土を確認したことから住居跡と確認したものである。北東—南西の傾斜に平行する線を長軸とすると、対をなして柱穴の並ぶ短軸では柱穴間3.5～4 mを測る。床面の高低差を考慮して図のように線引きを行った。従って推定される長軸は約5 m、短軸約4.8 mの円形に近いプランを推定できる。倒木痕に切られる形で東壁のごく一部を確認している。最大で0.33 mの壁高がある。残存する床面は非常に堅く締まっている。柱穴は、径

0.15～0.3 m の小さいもので、深さは床面から 0.08～0.22 m である。床面中央北側には炉が検出された。径 0.25 m の範囲に焼土が塊様に固化して認められるもので、中軸線にのるものであろう。

遺物は出土しなかった。

**SI310**　（付図 3、図版 22）

MH 48・49、MI 48・49 に位置し、東側が開田のため削平されている。長軸方向を東—西にとり、東西 3.2 m、南北 3.15 m の方形プランを呈する。黒褐色土を主体とする覆土には炭化物がわずかに含まれている。壁は東側で欠失するが、残存する壁の高さは 0.1～0.14 m である。床面はほぼ平坦であるがあまり堅くない。主柱穴は、4 隅（P 1～P 4）にあり、ほかの支柱穴と考えられる柱穴も検出されている。炉は検出されなかった。壁溝は各壁際に幅 0.1～0.25 m、深さ 0.03～0.11 m である。

遺物は出土しなかった。

**SI321**　（付図 3、図版 23）

MH 47 に位置し、東側半分が開田時に削平されているが、柱穴配置により全容を推定できる。また、SK 308 と重複するが、新旧関係は不明である。柱穴配置と壁溝から推定される住居跡の形態は長軸方向をほぼ東—西にとり、長軸 3.1 m、短軸 2.6 m の隅丸方形あるいは長円形プランと考えられる。床面は SK 308 との重複により明確ではない。柱穴は P 8 と P 9 及び P 10 を結ぶ線を中軸線として P 1～P 3 と P 5～P 7 がほぼ対称に配列されており、これに P 4 を加えた 10 箇所が主柱穴と考えられる。西側に断続的ではあるが、幅 0.25～0.3 m、深さ 0.07～0.15 m の壁溝が検出された。炉・出入口は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI322**　（付図 3、第60図、図版23）

MH 46・MI 46 に位置し、東側半分を開田時に削平されているが、柱穴配置により、全容を推定できる。また SI 320 と重複するが、新旧関係は不明である。柱穴配置と壁溝から推定される住居跡の形態は、長軸方向を北西—南東にとり、長軸 4 m、短軸 3.5 m の長円形を呈する。床面は明確ではない。柱穴は、P 10 と P 13 を結ぶ線を中軸線とし、P 1～P 4 と P 5～P 9 がほぼ対称に配列されているので、これらの柱穴が上部構造を支える主柱穴と考えられる。対称に配列された柱穴は幅 0.2～0.3 m、深さ 0.01～0.2 m の壁溝の中に穿たれている。その他副次的な柱穴も多く検出されている。炉・出入口は検出されなかった。

出土遺物は、柱穴内から擦り面を長辺の 2 辺にもつ半円状扁平打製石器（第 60 図 150）が 1 点出土したのみである。

**SI111**　（付図 3、第40・60図、図版12）

NA 42・43、NB 42・43 のグリッドに位置しており、長軸方向を北東—南西にとり、長軸

5.2 m、短軸 4.2 m の楕円形を呈するプランであるが、北西部がやや張り出している。覆土には暗褐色土を主体とし、拳大の礫を含んでいる。1 層中には炭化物や、土器片を多く含んでいる。壁面は外傾して立ち上がり、0.11 ～ 0.14 m の高さである。床面は、ほぼ平坦で堅くしまっている。柱穴は P 1 を通る長軸を中軸線とし、P 2 ～P 5 と P 6 ～P 8 が対称に配列されている。床面のほぼ中央に不整形を呈する焼土の堆積が検出された。焼土はしまりがないが、地床炉と思われる。壁溝・出入口は検出されなかった。

覆土中から多量の土器片と、半円状扁平打製石器 2 点（第 60 図 154 ・ 155）フレイク 77 点及び礫が出土している。第 40 図 35 はわずかに外反する口頸部破片で、外面に斜縄文、口唇部に刺突文が並列する。半円状扁平打製石器 154 は擦り面がやや凸状を示している。多孔質の石材を用いている。

**SI014**　（付図 3 、第60・69・71図、図版 8 ）

MJ 51 ・ 52、MK 51 ・ 52 のグリッドに位置する。SI 015 の床面上の柱穴配置からその存在が確認された。SI 015 との新旧関係は、床面まで達する土坑状の攪乱が多いため不明であった。P 1 ～P 13 を結ぶ柱穴配列から、長軸方向を東―西にとる長軸 4.8 m、短軸 4 m の楕円形プランと考えられる。床面を明確にできず、炉・壁溝も検出できなかった。

遺物は少量の土器片と、半円状扁平打製石器 3 点（第 60 図 151 ～ 153）、石錘 2 点（第 69 図 220 ・ 221）、凹石 1 点（第 71 図 248）、フレイク 1 点が覆土中から出土している。半円状扁平打製石器は 3 点とも両面に凹みを有し、4 は刃部の擦り面を上下の 2 辺にもつ。石錘 72 は大型のもので、半円状扁平打製石器の未製品の可能性もある。凹石は、火熱を受け部分に煤の付着が認められる。凹面と摩面が 2 面ずつあり、両端部を敲いている。

**SI192**　（付図 3 、第61・79・82図、図版13）

MJ 44、MK 44 ・ 45 に位置しており、楕円形に暗褐色土が落ち込むプランが確認され、その後柱穴配列がプランの中軸線とずれて検出されたものである。落ち込みプランと柱穴列の中軸線はずれているが、 1 棟と考えている。長軸方向を北西―南東にとり、柱穴間距離で長軸 5.2 m、短軸 1.8 m を計測するが、一段低く掘り込まれたプランから推定すると、長軸 6.5 m、短軸 3.3 m の楕円形プランと考えられる。楕円形の一段低い部分の覆土は、暗褐色土と褐色土を主体とし、人頭大の礫が 9 個混入している。外側の壁面は検出されなかったが、0.04 ～ 0.1 m 低い部分の壁面は外傾しており床面はほぼ平坦である。柱穴は長軸線を中心として、P 1 ～P 7 と P 8 ～P 14 がほぼ対称に配置されており、主柱穴と考えられる。この柱穴列の中で、4 個の柱穴に根固めと思われる礫が入っていた。長軸線上の中央やや北西寄りで、堆積する焼土を確認したが、約 0.1 m の厚さにもかかわらず床面が焼けていないことから、炉と断定することはできない。壁溝・出入口は検出できなかった。

遺物は、覆土中から半円状扁平打製石器1点（第61図156）と、石皿1点（第79図316）、フレイク1点、なお、P4とP5の間で検出された台石様の石には図（第82図326）のように、沈線・刺突が認められる。半円状扁平打製石器は刃部の剝離の大きく粗いもので、未製品の可能性もある。石皿（316）は厚さ3.2㎝の板状の石材を用いており、長方形を呈すると思われるが、幅20.5㎝を測るが長さは欠損しており不明である。使用面はほぼ平坦である。

**SI236**　（付図3）

LQ36・34、LR36・37、LS36・37に位置する。長軸方向を北北西―南南東にとり、その規模は推定で長軸6.1 m、短軸5.4 mの長方形プランを呈すると考えられる。この推定線は遺構掘り下げ前後の土の状況から判断したものである。床面の中央部分に長軸で2.2 m、短軸1.95 mの楕円形を呈する掘り込みを確認したが、この住居に伴うものと思われる。この床面は地山砂礫層面にあり、南側に径約0.5 mの焼土を確認できる。焼土はごく薄く広がっており、地山土に類似する褐色を示している。北側には床面からは約0.05 m浮いているが、厚さ0.04～0.05 mの焼土が径約0.3 mに認めることができる。柱穴は大小14個確認したが。南東部分はレベルが低いせいもあろうが、柱穴を検出できなかった。柱穴の深さは床面から0.13～0.35 mである。北西側の一部に断面V字状の浅い溝が認められる。地山面から0.1～0.15 m、床面から0.03～0.05 mほどの深さがある。西壁の一部が、二重に確認でき、かつ柱穴が2個1組のように配されていることから、2時期にわたる住居跡とも考えられるが、明確にできなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI323**　（付図3）

MI43・44、MJ43・44に位置し、SI189、SK188と重複している。新旧関係はSK188の覆土を柱穴が掘り込んでいることから、SK188より新しいことは確認されたが、SI189との関係は明確に出来なかった。壁面は確認されていないが、柱穴配置から長軸方向を西南西―東北東にもち、柱穴間距離で長軸6 m、短軸3.3 mの楕円形プランと推定される。床面は平坦ではあるが、あまり堅くない。柱穴は、P13とP14を結ぶ線を中軸線として、P1～P6とP7～P12が対称に配列されており、P1～P14の14箇所が上部構造を支える主柱穴と考えられる。炉・壁溝・出入口等は検出できなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI324**　（付図3）

MK43・ML43に位置しており、柱穴配置からその存在を確認したもので、長軸方向を北西―南東にとり、柱穴間距離で長軸6.2 m、短軸2.8 mの楕円形プランを呈すると考えられる。長軸線を中軸とてP1～P8とP9～P15が対称に配列されており、上部構造を支える主柱穴と考えられる柱穴も検出されたが特定できない。床面は現状では平坦であるが、しまりがない。

炉・壁溝・出入口等は検出できなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI135**　（付図４、第61図）

NE 35・36、NF 35・36 に位置し、SI 148・SK 136・SK 139 と重複している。新旧関係は、SI 148 の構築時に SI 135 の炉に貼床しているため SI 148 が新しい。SK 136・SK 139 は、本住居跡床面にてプランが確認されており、上部がわずかに堅く固められていることから、本住居跡の方が新しい。床面は確認されていないが柱穴配置から長軸方向を東―西にとり、柱穴間距離で長軸 6.7 m、短軸 3.1 mであるが、東側に残る壁面から推定すると長軸 8.3 m、短軸 4 mの楕円形プランと考えられる。わずかに残る褐色土を主体とし、炭化物を含んでいる。東側に残る壁の高さは 0.05 ～ 0.12 mで外傾して立ち上がっている。床面は平坦で堅くしまっているが東側の床面がベット状の高まりを有することから、２段の床面をもつ可能性もある。柱穴は、P9 と P 10 を結ぶ線を中軸線として P 1 ～P 4 と P 5 ～P 8 が対称に配列されており、この 10 箇所が上部構造を支える主柱穴と考えられる。副次的な支柱穴も推定されるが特定できない。中軸線上にほぼ等間隔に地床炉を 4 箇所検出した。このうち西側から 3 箇所の炉は、SI 148 構築時に貼床されている。壁溝・出入口は検出できなかった。

覆土中から半円状扁平打製石器 1 点（第 61 図 157）とが出土した。片面の一部に擦り切り痕跡をもつことから石鋸とも考えられる。片面の 2 箇所に凹みが認められる。

**SI240**　（付図４、第43・61図、図版21）

MK 23・24、ML 23・24、MM 23・24 に位置する。北側に SI 229 が存在し一部重複も考えられるが、両遺構とも壁が途切れる箇所であるので、重複の有無も含めて、新旧関係は不明である。柱穴間では東西約 4.7 m、南北約 6 m。北壁での柱穴までの間隔を均一に保って線引きすると、東西 6.4 m、南北 6.2 mのほぼ円形プランを呈すると考えられる。壁は北側で一部を確認した。0.18 ～ 0.33 mの壁高がある。床面は地山砂礫層面にある。特に堅く締められた様子はないが、４箇所の焼土の内側は周囲より若干堅くなっている。床面東側には長軸を南―北にとる細長い土坑が掘り込まれている。長さ約 2.6 m、幅 0.6 ～ 0.8 m、深さ 0.1 m前後である。確認状況・位置から、この住居に伴うものと考えられる。34 個の柱穴を確認している。規模の割には密度は大である。焼土を囲むように円形に配されているが、上部構造を支える主柱穴は、明らかにできなかった。床面のほぼ中央に 4 箇所の焼土があり、いずれも掘り込みを持たない地床炉と考えられる。A が最も良く焼けており、直下の砂礫が赤化している。なお、住居外東側にある焼土は地山面から 0.3 m以上浮いていた。遺物は覆土中と柱穴 P 1 ～P 9 から出土している。P 9 では、高さ 0.15 m位のほぼ完形の土器を、横倒しの状態で確認した。しかし、非常にもろく、図化はできなかった。なお、この住居は焼土と柱穴のあり方から、１時期ではなく

複数期にわたって建替えが行なわれた可能性がある。P10は焼土（炉）Aより古いもので、柱穴内の覆土に焼土・炭化物を含んでいることから、少なくともP10の住居の時期と焼土（炉）Aを有する住居の2時期を推定できよう。

遺物は覆土中からごく少量の土器と、フレイクが49点出土したにすぎないが、柱穴内からは、石器が出土している。P6から縦型石匙（第43図2）、P7から先端が尖り内弯する側に刃部を持つ削器（第43図1）が、半円状扁平打製石器はP1（第61図158）と、P3（159）から出土している。158は片面を整形剥離したのちに刃部を作出している。擦り面はトロトロしており、稜線が丸味をもつ。

**SI012**　（付図4、第43図、図版6）

MI52・53、MJ52・53、MK53のグリッドで検出され、SK013、SI037と重複する。SI037を貼床しているので、SI037よりは新しく、SK013に切られているのでSK013よりは古い。長軸方向を北西―南東にとり、長軸7.4m、短軸4.3mの楕円形を呈する。覆土は6層に分層されたが上位の層中には炭化物粒の混入がみられる。壁高は0.24～0.37mで、壁面はやや外側に傾斜している。床面は、中央部がSI037に貼床したためか、若干低くなっているが、ほぼ平坦である。また、北東側は幅0.56～0.83mでU字形に一段高くなっており、その上面は平坦である。また東側には壁から一段下がった平坦面とそれに続くスロープがあり、出入口と思われる。柱穴は14個（P1～P14）検出されたが、P1～P7が上部構造を支える主柱穴、P11～P13が支柱穴、P8とP9が出入口部の上部構造を支える柱穴と考えられる。出入口部の南側の壁面下方には、長軸0.61m、短軸0.48m、深さ0.2mの楕円形を呈するピットがあるが、これは、屋内貯蔵穴と考えられる。炉は、長軸線上に2箇所検出された。東側の炉は、長軸0.7m、短軸0.6mの楕円形を呈する地床炉である。1.2m離れた西側の炉は長軸0.83m、短軸0.56mの楕円形を呈するが、その周囲に3箇所、炉石の抜き取り痕と思われるくぼみが検出されたことから石組炉とも思われる。壁溝は検出されなかった。

遺物は、覆土中から5点の土器片と縦型石匙（第43図3）、削器（第43図5）、41点のフレイク、12点の大礫が出土し、床面上から削器（第43図4）、土器片、フレイク、巨礫各1点が出土した。

**SI017**　（付図4、第35・71・83図、図版11）

MK49・50、ML49～51、MN50・51のグリッドにまたがり検出された。SK018、SK038と重複するが、その新旧関係は土層の堆積状態から、SK038→SI017→SK018と新しくなる。また、床面下まで達するものは少ないが、木根による攪乱も多い。長軸方向を西北西―東南東にもち、長軸7.9m、短軸4.8mの楕円形を呈する。覆土は11層に分層されたが、木根による攪乱も多い。壁高は0.04～0.09mを計測する。床面は中央部が低くなっており、所謂鍋底状を呈する。長軸方向の両側の壁面下方には、0.8～1.05mの幅で、1段高い（0.07～0.16m）平

坦面がある。床面と1段高い平坦面は木根による攪乱のため凹凸が激しいが、よく踏み固められている。柱穴は住居跡内に6個（P1～P6）検出されたが、主柱穴かどうか不明である。P7は長径0.6 m、短径0.52 m、深さ0.12 mの楕円形プランを呈するピットで、屋内貯蔵穴かと思われる。炉は長軸線上に3箇所検出され、いずれも掘り込みのない地床炉である。炉Aは長軸0.85 m、短軸0.47 m、炉Bは直径0.38 m、炉Cは長軸0.24 m、短軸0.16 mで焼土の厚さは0.003～0.005 mである。壁溝は東南部壁下に幅0.1～0.15 m、深さ0.08 mで、長さ0.9 m、0.38 mの2条が検出された。出入口は検出されなかった。

遺物は、覆土中及び床面から土器片、半円状扁平打製石器2点、凹石1点（第71図249）、石剣1点（第83図の330）、フレイク8点の他、礫が多量に出土した。炉Aの焼土中から石剣が床面とほぼ平行に出土した。第35図1は、内傾する体部上半から口頸部が強く外反する器形である。口縁部に粘土紐貼付による鋸歯状装飾体があり、頸部にも横位の粘土紐波状文が貼付される。凹石は両面に浅い凹みをもつ。石剣は、粘板岩を素材とし、全面に斜め方向の擦痕が認められる。頭部は粗く磨かれており、断面はカマボコ形を呈する。

**SI110**　（付図4、第43図、図版12）

MS 45・46、MT 45～47、NA 46に位置し、長軸方向を北北西―南南東にとり、長軸7.7 m、短軸4.5 mの楕円形を呈するプランである。覆土は黒褐色土と褐色土を主体とし、第6・8・9・11層に炭化物がわずかに含まれている。壁面は凹凸が多いが、緩やかに立ち上がる。壁高は0.1～0.15 mである。柱穴は長軸を中軸線としてP1～P5とP6～P10がほぼ対称に配列されており、これらが主柱穴と考えられる。中軸線のほぼ中央の床面上に0.2×0.3 mの焼土推積が見られるが、地床炉とは断定しがたい。壁溝・出入口は検出されなかった。

遺物は覆土中から篦状石器1点（第43図6）とフレイク7点が出土している。

**SI133**　（付図4、第35・36・43・61・85図、図版37・38）

NA 35～37、NB 35～37に位置し、SI 130と重複するが、SI 130より新しい。長軸方向を北北西―南南東にとり、東側に壁面が残存している。住居跡の規模は、全容を知ることが出来ないので、残存する壁面と、柱穴配置の関係から推定すると、長軸約8.6 m、短軸約4.1 mの楕円形と考えられる。なお、柱穴配置のみで計測すると長軸6.85 m、短軸30 mである。面積はそれぞれ33.2 ㎡、17.6 ㎡となる。住居跡覆土は、黒褐色土を主体とし、大量の縄文土器片、炭化物、焼土粒を含んでいる。残存する壁は、緩やかに立ち上がり、高さは0.08～0.2 mである。柱穴は多数検出されたが、P19―P20を結ぶ中軸線を中軸とし、ほぼ対称に並ぶ18個が主柱穴と考えられる。副次的な支柱穴も考えられるが、重複するSI 130の柱穴と区別しがたい。焼土の堆積が床面に近い覆土中の長軸線上に3箇所、方向の柱穴の西方で1箇所確認された。しかし、土器片と混じり合う状態であり、本住居跡廃棄後に土器と共に廃棄された焼土と考えられ、本

住居跡の炉としては認められない。壁溝・出入口は検出されなかった。

覆土中からやや多量の土器と、石器3点、玦状耳飾1点、フレイク62点、自然礫が出土した。第35図2は口縁部が外反し、ほぼ直線的な体部を有するが底部付近では内湾に転じ、底部に至ると外方に強く張り出す。外面と口唇部に同一原体の複節斜縄文を施す。3は外反する口縁部、わずかに内傾ぎみとなる頸部を有し、張りの少ない体部から直線的に底部へすぼむ。底部はいくぶん外方へ張り出している。外面と口唇部に単節斜縄文を施す。2個1対の補修孔と思われる小孔がある。4はわずかに外反する口縁部を有し、体部最大径が口径とほぼ同じである。5も4に似た器形であるが外面のほか内面の口唇部にも羽状縄文が施される。この羽状縄文の原体はR $\{^{\ell}_{\ell}$とL $\{^{r}_{r}$を結束したもので施文時にこの原体の上下を持ちかえている。第36図6は口径が33.5㎝ほどに復原される大型の土器で、口頸部がなだらかなカーブを描き、胴部が少し張り出す。口縁部に原体の側面圧痕による2段の平行線とこれを斜位に連結する文様を描く。7～9は口縁部に2個1対の山形突起が付されるものである。器形は各々異なり、7は口縁部から底部までほぼ直線的にすぼむが、8は直立する口縁部からやや丸みをもって底部に至る。9は口縁部が外反して体部がわずかに膨らむ。山形突起も7の場合は1単位であるが、8は4単位、9は少なくとも2単位が残存するが、正確な数は不明である。10は口縁部から底部にかけてほぼ直線的にすぼむ。口唇部に指頭圧痕を施す。石錐（第43図7）の錐部は破損後再調整されている。箆状石器（第43図8）は基端の腹面側から1～2回の加撃によって彫刀面を作出し、彫刻刀石器に転用された疑いもある。半円状扁平打製石器（第61図160）は多孔質の石材を素材としている。断面が丸みのある棒状の自然礫（第85図340）は、片面に縦方向の擦痕があり、中央下半には深く鋭い溝がある。玦状耳飾（第85図341）は凝灰岩を素材とする破片である。両面を粗く磨き出してはいるが、切り目部も破損している。

**SI147**　（付図4、第44・83図、図版14）

NF33・34に位置し、SI123、SI128と重複している。SI123の南西側と大きく重なり、中央部では円形のSI128が重なっている。確認面が、北東から南側に傾斜する地山面であったため、北側では暗褐色土（7.5YR3／3）の広がりをプランとして認めたが、南側では全くプランは把えられなかった。覆土の観察によれば、SI147の覆土を切ってSI123の覆土が堆積している。このことから、3つの住居跡の新旧関係は、古い方からSI128→SI147→SI123の順になる。北側ではラインがやや不整であるが壁を確認している。北側柱穴の列よりは、1.0m前後外側にある。この壁が柱穴の外側を全周するものと考えると長軸方向を北東—南西方向にもち、長軸約10.0m、短軸7.5m前後の楕円形を呈する住居跡と考えられる。SI123に切られているため、北側に一部しか残っていない覆土は、しまりのある暗褐色土（7.5YR3／3）で、炭化物を含んでいる。北側にのみ確認された壁は、高さ約0.4mで緩く立ち上がる。SI123とほ

ぼ共有する床面は、全体的に堅くしまっているが南側では軟かくなる。地形に左右されるためか、わずかに北から南に傾斜している。柱穴は整然としないが、ほぼ楕円形に並んでいる。柱穴は径0.2ｍ前後で、深さは0.1～0.6ｍと幅があり、このうち0.3～0.6ｍほどのものが主柱穴（P1～P14）と考えられる。住居南側に4箇所焼土の広がりを確認したが、位置的に炉とするには無理がある。壁溝と出入口は検出されなかった。

土器は出土しなかったが、石剣が1点覆土掘り下げ中にほぼ直立して出土した。床面に若干埋って立っていた可能性もあるが、これを確認できなかった。石剣（第83図331）は、全面を磨いており、断面は楕円形を呈している。切先側は切り落とされたように平滑である。またP4の覆土中からは箆状石器1点（第44図9）が出土している。刃部背面側と右側辺の一部が再調整されている。刃縁は丸刃、側面形は片刃となっている。

**SI325**　（付図4、第68図）

MJ41・42、MK41・42、ML42に位置しているが、柱穴配置からその存在を確認したもので、壁面、壁溝、炉、出入口等は不明である。柱穴配置から長軸方向を東―西にとり、柱穴間距離で長軸8.1ｍ、短軸3.2ｍの楕円形プランを呈すると推定される。P15～P16を中軸線としてP1～P7とP8～P14が対称に配列されており、P17、P18も含めたこれらが主柱穴と考えられる。副次的な支柱穴も存在するであろうが、明確にできなかった。

柱穴内より断面が逆三角形を呈する扁平擦石1点（第68図214）が出土した。

**SI130**　（付図4）

NA35～37、NB35～37に位置し、SI133と重複するが、本住居跡がSI133に切られているので、SI133より古いことが確認された。長軸方向を北北西―南南東にとり、長軸9.8ｍ、短軸は東側がSI133と重複して壁面が不明であるが、推定で4.4ｍを計測し、楕円形プランと思われる。覆土は褐色土を主体とし、土器片や炭化物が含まれている。壁面は東側を除いて検出されており、0.05～0.22ｍの高さで緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦で堅くしまっている。柱穴は長軸を中軸線としてP1～P7とP8～P14がほぼ対称に配列されているが、これに中軸線上のP15を加えた15箇所が主柱穴と考えられる。また中軸線上の床面に地床炉が5箇所並んで検出された。壁溝は両側の柱列ラインを幅0.1～0.2ｍ、深さ0.04～0.1ｍで断続的に巡っている。

覆土中から多量の土器と石匙2点（第44図11・12）、箆状石器1点（第44図13）、削器2点（第44図14・15）、有撮石器の撮部破片1点、半円状扁平打製石器2点（第61図161・162）、凹石3点（うち2点は第72図250・251）とフレイク251点が出土した。土器は多量に出土したが、復原できるものはない。第40図36は横走、縦走する沈線文と菱形状に角張った渦巻を施す。37もこれに似た渦巻文となるらしい。38・39は斜縄文と綾絡文が施される。36

～38は口唇部にも斜縄文を施してあり、鋸歯状の装飾効果を高めたものかと思われる。

**SI015**　（付図4、図版8）

MJ 50～52、MK 50～52、ML 51・52・MM 51・52の各グリッドにまたがり、黒褐色土（10 YR 2／2）の落ち込みが確認された。精査の過程で、柱穴配置により確認された円形プランをもつSI 014と重複し、かつSI 015も少なくとも一度の建替えと数回の部分補修が行なわれた形跡がある。柱穴配置の検討過程で、SI 015が中軸線をそのままに建替えられたのか、中軸線を南・北いずれかに移動して建替えられたのか疑義を生じたが、中軸線を狭ぐで対称となる柱穴配置を考慮すれば、中軸線をそのままに建替えられたとした方がより妥当と判断された。しかし、この建替えプランの新旧関係は明確にできなかった。便宜上柱穴配置に関してはA・Bと分けて説明する。長軸方向を北西—南東にとり長軸11.8 m、短軸5.65 mの楕円形プランを呈する。覆土は28層に分層されたが、土坑様の落ち込みや、木根による攪乱が認められる。壁高は一部攪乱部分で0.19～0.28 mを計測するが、全体的には0.03～0.15 mを計測する。床面は土坑様の落ち込みや、木根による攪乱が認められ、凹凸が激しく、ベット状に2段の床面を持つように観察される部分もあるが、本来は1段の平坦な床面であることが土層堆積図によっても確認される。柱穴の配列は、プランAがP 14～P 29までの16個の柱穴で上部構造を支えたと考えられ、P 15—P 28—P 29—P 23が中軸線となりP 14—P 17、P 18—P 27、P 19—P 26、P 20—P 25、P 21—P 24が対称に配置されている。P 30は貯蔵穴と考えられる。プランBでは、P 31～P 48までの19個の柱穴で上部構造を支えたと考えられ、P 31—P 46—P 47—P 48—P 39が中軸線となり、P 14—P 32、P 33—P 45、P 34—P 44、P 35—P 43、P 36—P 42、P 37—P 41が対称に配置されている。P 49、P 50は貯蔵穴と考えられる。このプランA・Bに配列された柱穴以外の柱穴は、副次的な支柱穴と考えられる。炉・壁溝及び出入口は検出できなかった。

遺物は覆土中からごく少量の土器片と、内湾してつまみの軸線に直交する刃部を持つ石匙の破片が1点、フレイク17点が出土した。

**SI123**　（付図4、第40・45・72図、図版14）

SI 147は調査途中で、北側の壁と壁溝・柱穴によって把握された住居跡でND 34・35、NE 33～35、NF 33・34に位置する。SI 147、128と重複しており、また東側にはSI 123の長軸に直交するようにSI 156・SI 126が近接している。覆土の堆積状況を観察すると、SI147の覆土を切ってSI 123の覆土が堆積している。また中央部床面は、SI 128を埋めて貼り床をしており、このことから3つの住居跡の新旧関係は、古いほうからSI 128→SI 147→SI 123となる。SI 123が最も新しいことは、この部分が表土除去後に、SI 123の長軸方向と一致するように窪んでいたことからも明らかである。北側に一部残る壁、北と南側の柱穴列、それに重なる壁溝

を検出している。北側の壁の推定延長線上をたどるとほぼ壁溝に至るので、住居の規模はおおよそ柱穴列のラインに考えられる。このことから本住居跡は、長軸方向を北東―南西方向にとり、長軸約10m、短軸（北・南側の壁溝間）約3.5mの楕円形を呈していたと思われる。覆土は、厚さ0.1mほどの暗褐色土（7.5YR3／3）で、明褐色土（7.5YR5／5）のブロックや焼土ブロックが多量に混入している。北東側に残る壁は高さ0.3～0.1mでほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に比較的堅くしまっているが、特に中央部のSI128上に貼床した部分、それに炉の周辺は堅い。直径0.2m、深さ0.3～0.6mの柱穴が壁溝内あるいは北側の壁に沿って検出されている。また住居内北側の小ピットは径0.1m、深さ0.4～0.6mである。長軸を中軸線としてP1～P9とP10～P17が対称に配列されており、主柱穴と思われる。長軸線上の北東部に地床炉が4箇所検出されている。炉の焼土は堅くしまり、最も北東側の炉は浅い落ち込みを伴う。また南西側の炉焼土はSI128の上面を一部覆っている。南北両側にほぼ平行して検出されており、北側は長さ4.1m、南側は1.5mほどで、溝の幅は約0.2m、深さは0.1mほどである。北側の壁溝内にはいくつかの柱穴がある。

覆土中からやや多量に土器と石器・フレイク・礫が出土している。第40図40は上部の沈線による孤文と横位沈線が見られ、その下位に斜縄文を施す。41は口縁部の破片で、横走する波状沈線と斜位の2条単位の沈線文が見られ、口唇部に指頭圧痕が並ぶ。石器は、石鏃2点（第45図16・17）、削器1点（第45図18）、凹石1点（第72図252）と石匙の破損品が1点出土している。また、フレイクは26点出土している。

**SI148**　（付図4、第79・83図、図版14）

NE35～37、NF35～37に位置し、SI118・SI135・SKF143・SKF149・SK137・SK138・SK146と重複している。新旧関係は、SI135の地床炉に貼床していることから、SI135より新しい。また、SI118に切られていることからSI118よりは古いことが確認された。SKF148の柱穴が掘り込んでおり、その他の土坑も床面でプラン確認されたことから、これらの土坑よりは新しいことが確認された。長軸方向を北北西―南南東にとり、柱穴間距離で長軸9.4m、短軸4.1mを計測するが、西側に残る壁面から推定すると、長軸11m、短軸5mの楕円形プランを呈すると思われる。褐色土を主体とする覆土には炭化物が混入している。壁高は0.1～0.18mで、緩やかに立ち上がっている。床面は、平坦で堅くしまっている。長軸はP13―P14―P15を結ぶ線を中軸線として、P1～P6とP7～P12が対象に配列されており、この15箇所が上部構造を支える主柱穴と考えられる。副次的な支柱穴もあると思われるが特定しがたい。床面の中軸線上には地床炉が3箇所検出された。

住居跡南東壁際で床に密着した状態で石棒が出土した。この石棒の南側に石棒に接するように径8cm、深さ12cmのピットが検出されており、本来石棒はこのピットに立てられていた可能

性も考えられる。遺物は、石棒1点（第83図329）と柱穴内から石皿1点（第79図317）が出土している。石棒は柱状節理のある凝灰岩の稜を磨いており両端も粗く磨いている。石皿は、両面を使用している。使用面はいずれもやや凹状を呈している。欠損のため形状は不明であるが、厚さは4.2～5.0㎝である。火熱を受けている。

**SI217**　（付図4、第45・62・72図、図版18）

MG 28・29、MH 27～30、MI 28～30、MJ 29に位置する。長軸方向を北西—南東にとり、推定長軸11.2 m、短軸5.5～5.8 mの楕円形プランを呈する。覆土の2層には地山砂礫層に含まれる小礫を多量に混入している。3層は地山土の盛り上がりであり、倒木痕によるものである。壁高は北壁で最大0.46 m、南壁は確認できなかった。床面は地山砂礫層面に位置している。特に堅く締められてはいない。北東部では、壁外に一部テラス状の段差を認めることができる。残存する長さは約0.3 m、幅約0.6 mでテラスから住居内、テラスから住居外の高低差はどちらも0.1～0.15 mである（床面での高低差は長軸方向で0.5 mある）。柱穴は床面に掘り込まれているものと、壁と重複しているものがある。焼土の堆積が床面北側に検出された。住居跡の中軸線よりは、やや西にずれており、1.1×0.6 mの範囲に焼土粒子がうすく分布している程度であるが一応地床炉と考えられる。

覆土中から少量の土器片と、石鏃2点（第45図19・20）、箆状石器1点（45図21）、掻器1点（第45図22）、打製石斧1点（第45図23）、半円状扁平打製石器4点（うち2点は第62図163・164）、凹石2点（第72図253・254）の他、フレイク45点が出土している。21は横長剥片素材で片面調整である。23の打製石斧は撥形の河原石の先端部に両面からの加撃で刃部を形成している。半円状扁平打製石器第62図163の擦り面は平坦で使用頻度は高いと思われる。164は花崗岩を素材としている。凹石第72図254は、両面に凹み、磨りは片面に、線条痕を両面にももつ。2面ともほぼ同一方向に走っている。

**SI218**　（付図4、第45図、図版18・19）

MI 26・28、MJ 26・28、MK 26・28にありSI 229とSI 217の間に位置する。住居跡の中央から西側にかけて大きな倒木痕があり、床面と西壁の一部を破壊している。長軸方向を北西—南東にとり推定長軸10.7 m、短軸で最大5.5 m、最小4.4 mを計測し、楕円形プランを呈する。西壁は外側にふくれる形状を呈しているが、これは倒木に起因するものであり、本来は東壁のように南北にやや丸みをもちながらもほぼ直線的に結んでいたものと推定される。覆土はしまりのあまりないやわらかい土が入っている。3～7層は倒木痕に伴い逆転された土層である。壁高は、最大0.6 mで、南にいくにつれて次第に高さを減じ南壁は確認できなかった。床面は地山砂礫層面にある。特に堅く締められた様子は観察できない。床面での長軸方向の高低差は0.4 mある。柱穴は住居の規模の割には数が少ない。焼土は床面北側、ほぼ中軸線にのる位置

で検出した。径約0.4 mの小さいもので炉と考えられる。西壁中央部分にも焼土の広がりを見いだせるが、住居を切っっている倒木痕より新しい時期のものである。

覆土中から第45図24の篦状石器1点、25の削器1点の他、フレイク4点が出土している。24は、両面調整で刃縁は直刃、側面形は両刃となっている。

**SI229**　（付図5、第46・62・79図、図版18・19）

MJ 25・26、MK 25～27、ML 24～27、MM 26にあり、SI 218とSI 215の間に位置する。住居跡は、2つの大きな倒木痕により破壊を受けている。長軸方向を北西―南東にとり推定長軸10.4 m、短軸は最大で7.0 m、最小で5.4 mの不整楕円形を呈する。覆土は大きく2層に分けられる。長軸に添って北側3分の1を1層、それ以南を2層とした。両層の識別は容易である。1層は粒子の細かい褐色土が充塡しており、混入物をほとんど含まない。一方の2層は、地山砂礫層の小礫を多量に含む暗褐色土である（周囲の住居跡確認面での覆土は、おおよそ本住居跡覆土の2層と同じであるのに対し、1層の存在は特異である。この1層は人為的に埋められた土である可能性がある）。壁高は北壁で0.2～0.25 m、東・西壁では0.15～0.2 mあるが、南壁と東壁の南半は検出できなかった。床面は地山砂礫層面にあり、堅く踏み締められてはいない。長軸方向における高低差は0.45 mである。柱穴はほぼ壁に沿うように配置されているものと、中央部寄りにも掘り込まれている。P 4・6・7では、長さ0.2～0.28 m、幅0.22～0.26 m、厚さ0.05～0.06 mの板状の石材が立った状態で検出された。石の位置は柱穴中央より片方に偏している。P 4・P 6は磨製石斧などの素材と考えられる緑色凝灰岩であり、P 7では石が赤化しており、もろくなっていた。焼土は4箇所で確認した。うち焼土Aと焼土Cは床面上に位置し、おおよそ中軸線上に並ぶようであり、この2つは炉と考えられる。焼土Bは、床面よりやや浮いているが、炉の可能性もある。焼土Dは確認面で検出できたものであり、住居跡より新しい。P 1～P 3・P 5から遺物が出土している。

覆土中から削器1点（第46図26）、半円状扁平打製石器6点（うち4点は第62図165～168）、凹石2点の他、フレイク4点が出土している。またP 4内から石皿1点（第79図318）が出土している。図示した半円状扁平打製石器は、いずれも刃部の擦りの顕著のものはない。石皿（318）は片面を使用したもので、使用面はやや凹んでいる。厚さは4.2～4.7 cmである。

**SI315**　（付図5、第80図）

MM 42・43、MN 42・43、MO 42・43に位置し、SI 315を拡張して、SI 195を構築しているので、SI 315はSI 195より古い。壁面が失われているので柱穴配置でその存在が確認されたもので、長軸方向を西北西―東南東にとり、柱穴間距離で長軸9.8 m、短軸3.2 mであるが、他の住居跡の柱穴配置とプランの関係から推定すると長軸11 m、短軸4.5 mの楕円形プランを呈すると思われる。床面は平坦でしまっている。P 11とP 23を結ぶ線を中軸線としてP 1～P 10

とP12～P21が対称に配列されている。これらの柱穴にP22を加えた23箇所が上部構造を支える主柱穴と推定される。重複するSI195の柱穴より規模が小さく、柱穴覆土に白色粘土ブロックを含むものがある。炉・壁溝・出入口は検出できなかった。

遺物は、床面から石皿1点（第80図319）とフレイク1点が出土している。使用は1面のみでやや凹状を呈しており、使用頻度は高くない。厚さ3.2㎝前後の板状の石材を用いている。

**SI320**　（付図5、図版23）

MG46～47、MH45～47、MI45～47の各グリッドにまたがり位置する。壁面も確認されず東側半分も、開田のため削平されていたが、柱穴配置から住居跡プランを確認したものである。SI321・SI322・SK308・SK309と重複するが、柱穴配置のみでその存在を確認したことから新旧関係は不明である。長軸方向を北北東―南南西にとり、柱穴間距離から推定すると、長軸8.7m、短軸4.8mの楕円形を呈するプランと考えられる。床面は明確ではなく、プラン確認面ではしまりがない。柱穴はP21―P22―P23―P24を中軸線として、P1～P10とP11～P20がほぼ対称に配置されており、これらが主柱穴と考えられる。また、西側の柱穴列がP25～P30の柱穴列と重複しており、改築が行なわれたと考えられる。重複関係からP1～P10の柱穴列がP25～P30の柱穴列より古いと考えられる。炉・壁溝・出入口は検出できなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI118**　（付図5、第37・46・47・63・69・72・80図、図版14）

ME36～38、NF36～39、NG37～39に位置する。この部分は、SI200と同様表土除去した段階で長楕円形に若干窪んでおり、その中央部には基本土層の第1層である黒色土が見えた。SI148・SK114・SK129・SK132・SK146・SKF149と重複する。SI148との新旧関係は、土層堆積状況から本住居跡のほうがSI148より新しいことを確認した。SK129・SK132・SK146・SKF149との関係では、プラン確認時に本住居跡の方が新しいことを確認した。また、SK114はプラン確認時に本住居跡の方が古いことを確認した。長軸方向を北西―南東にとり、柱穴間距離は長軸11.7m、短軸4.5mであるが、残存する壁面から推定すると長軸14.3m、短軸5.5mの楕円形を呈するプランと思われる。覆土は黒色土と暗褐色土を主体とし、焼土・炭化物・土器片が含まれている。壁面は凹凸があるが、緩やかに立ち上がる。壁高は0.11～0.25mである。柱穴は長軸を中軸線としてP1～P8とP9とP15がほぼ対称に配列されており主柱穴と考えられる。床面の14箇所で焼土堆積を検出した。いずれも堅くしまっており、下方の床面も焼けている。特に中軸線上の焼土の範囲が比較的大きく明確で、本住居跡に伴う地床炉である。

遺物は、覆土中から少量の土器と、石鏃1点（第46図27）、石錐1点（第46図28）、箆状石器2点（第46図29・30）、削器7点（第46図31～34、第47図35～37）、石匙の破損品1点、

半円状扁平打製石器1点（第63図171）、石錘1点（第69図222）、凹石2点（第72図257・258）、台石1点（第80図320）が出土した。第37図11は体部下半の破片で摩滅しているが斜縄文と綾絡文が見られる。石鏃27は両側辺の中央部に抉りを持つもので、本遺跡出土の石鏃では少ない形態の1つである。半円状扁平打製石器（第63図171）は多孔質の石材を用いている。擦りの使用頻度は高い。凹石258は3面の凹みのうち2面の凹みから放射状に線状痕が走る。台石は片面に凹みと弱い線状痕をもつものである。

**SI326**　（付図5、第37図）

ML 37～39、MM 37～39、MN 37～40、MO 39に位置し、SI 180・SI 190・SI 199・SI 327・SKT 319と重複している。これらの新旧関係は、SI 326がSI 190・SI 199・SI 327廃棄直後に投棄されたと考えられる焼土に覆われていることから、これら3住居跡より古いことが判明している。SI 180との関係は、本住居跡がSI 180の壁面の一部を掘り込んでいることからSI 180より新しい。SKT 319との関係は、プラン確認時の切り合い関係から本住居跡の方が古いことがわかっている。このことからSI 180→SI 326→SI 190・SI 199・SI 327・SKT317の順に新しくなる。長軸方向を北西―南東にとり、柱穴間距離では、長軸10.7 m、短軸3.2 mであるが、北西部に残る壁と壁溝から推定すると長軸14.1 m、短軸6.8 mの楕円形を呈するプランと思われる。覆土は褐色土を主体とし、焼土と炭化物をわずかに含んでいる。壁面は一部が残っているだけであるが、0.04～0.11 mの高さをもち、緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦である。柱穴は長軸を中軸線として、P 1～P 7とP 8～P 14がほぼ対称に配列されている。壁溝内にも柱穴が多いが、他の遺構との重複があるため、本住居跡の副次的な柱穴かどうか判断がつかないものが多い。炉は検出されなかった。壁溝は北西部に幅0.2～0.25 m、深さ0.05～0.22 mで断続しながら巡っている。

遺物は、斜縄文が施された小型土器の底部付近の破片が1点（第37図12）出土したのみである。

**SI195**　（付図5、第37・47・62・69・72・74・85図、図版13・39・40）

ML 42・43、MM 42・43、MN 42・43、MO 42・43の各グリッドに位置し、SI 315と重複するが、SI 315の上面を本住居跡廃棄直後に投棄されたと考えられる焼土が覆っていることから、SI 315より本住居跡の方が新しい。長軸方向を西北西―東南東にとり、柱穴間距離では長軸12.7 m、短軸4.85 mであるが、3方に残る壁溝から推定すると長軸14.3 m、短軸6.56 mの長方形プランを呈すると思われる。覆土は褐色土を主体とし、焼土・炭化物・土器片を多量に混入している。床面は平坦で堅くしまっている。柱穴は長軸を中軸線としてP 1～P 10とP 11～P 20が対称に配列されており、これらが上部構造を支える主柱穴と考えられる。柱穴を連結するように幅0.15～0.3 m、深さ0.06～0.1 mの壁溝が断続し、その底面に柱穴が多く検出されている。焼土の堆積を8箇所確認したが、しまりがなく床面も焼けていないことから、土

器と共に廃棄されたと思われる。

遺物は、覆土中から多量の土器と、縦型石匙（第47図38）、半円状扁平打製石器4点（うち2点は第62図169・170）、石錘2点（第69図223・224）、凹石2点（うち1点は第72図259）、磨石2点（第74図279・280）、石製品（第85図343）の他フレイク18点が出土している。第37図13は外反する口縁部を有し、体部が強く張り出すため頸部がかなりくたびれた感じとなる。底部は少し外方に張り出す。口縁部に2個1対の突起を相対して付し、口頸部には向きが異なり左右対称となる2個1対の粘土紐の渦巻文を、これも反対側器面に相対して貼付する。口唇部と器外面に斜縄文を施すが、器外面のそれは撚りの異なる2種の原体を用いている。14・15は口縁部からほとんど直線的に底部に至る器形で、それぞれ太い斜縄文、縦走する撚糸文施され、口唇部に指頭圧痕を付す。16は口唇部が外反し、頸部が少しくびれ、体部はいくぶん丸みを帯びる。口唇部に指頭圧痕、器外面全体に縦位の撚糸文を施す。17は口径と体部最大径がほぼ同一に復原され、口頸部は極めて緩やかなカーブを描いて外反する。口唇部に指頭圧痕、器外面に網目状撚糸文を施文する。縦型石匙は、つまみ部の幅が他の石匙に比べて非常に大きい。半円状扁平打製石器（170）は軟質の石材（凝灰岩）を用いている。石錘は小型でいずれも火熱を受けている可能性がある。279は火熱を受けている。石製品は軟質の凝灰岩を粗く打ち欠いた後に縦方向に磨きを行っている。剥離は両辺にのみ行なわれている。

**SI199**　（付図5、第47・63・70・72・74図）

MK41・42、ML39～42、MM39～41に位置し、SI180・SI190・SI328・SK196・SK300～SK303と重復している。各遺構との新旧関係は、本住居跡に伴う焼土がSI328の一部を覆っており、本住居跡が新しい。SI190との関係は不明である。SK196・SK303との関係はプラン確認時の切り合いからこられ土坑より古いことがわかっている。SK300～SK302は本住居跡に伴う土坑と考えられる。長軸方向を北東―南西にとり、住穴間距離から推定すると長軸は11.7m、短軸4mを計測するが、西側に一部残存する壁溝から推定すると長軸14.7m、短軸7mの楕円形を呈するプランと思われる。覆土は、暗褐色土を主体とし、焼土を多量に含んでいる。床面は平坦であるがしまりはない。柱穴は、長軸を中軸線としてP1～P10とP11～P21がほぼ対称に配置され、主柱穴と考えられる。他に支柱穴と考えられる柱穴が多数検出されているが本住居跡と特定できない。中軸線上に3箇所（図中A～C）の厚い焼土の堆積する地床炉がある。西側に長さ約3.6m、幅0.1～0.15m、深さ0.03～0.18mの壁溝が検出されている。

遺物は、覆土中から少量の土器と、削器1点（第47図40）、半円状扁平打製石器4点（うち2点は第63図172・173）、石錘1点（第70図225）、凹石6点（うち2点は第72図260・261）、磨石1点（第74図281）の他、フレイク23点が出土している。石匙39はつまみの中心線が器中軸線よりも少しずれる横型石匙で下端の表裏面にポリッシュ（光沢）がある。削器の

40の裏面左側辺にもポリシュが見える。凹石（260）は片面に凹みをもち、両面に磨りが入る。磨石としての利用が大である。

**SI200**　（付図5、第63・70・85図、図版15）

ND 30～32、NE 30～32、NF 31・32グリッドで検出した。この部分は南側に下降する緩い斜面であるが、表土を除去した段階で黒色土全体が窪んでおり、当初は小さな沢が何か自然的な要因による落ち込みと考えられた。しかしながら、沢とした場合その方向が現地形に合わないで、竪穴住居跡の可能性もありとして、ベルトを十字に残して掘り下げることとした。プラン内にSK 208が重復するが新旧関係は判然としない。NE・NF 31グリッド内にあるピットの状況が、この住居の規模を示すものと考えられ、長軸推定8.8 m、短軸推定5.3 mの楕円形を呈し、面積約38.4 ㎡に推定される。覆土は壁のある北側から軟らかな黒褐色土が流入し、その上に焼土粒が少量混入した黒褐色土、さらに黒色土が乗り、自然堆積の様相を呈する。壁は北側に0.2～0.25 mほどの高さでやや急角度の立ち上がりを示して残存するが、東側では非常になだらかとなり、SK 208の西側には全く見られない。床面は地山に含まれる小礫が露出しており、さほど堅くはない。南・西側ほどしだいに傾斜して低くなる。P 1～P 17は床面からの深さが0.14～0.67 mと一定しないが、位置的に本住居の柱穴であろうと思われる。東寄りの床に0.56×0.4 mの範囲でわずかに焼土を有する地床炉がある。P 16の西側には約0.1 mの厚さで調査範囲外に入り込んで焼土が見られるが、住居範囲からは逸脱する位置にあり、この住居に伴う炉ではない。P 1・2付近に幅0.2 mほどの壁溝が1.5 mほどの長さで検出されたが、他所では検出されなかった。出入口の位置は定かでない。住居東端に南北2.2 m、東西1.75 mほどで、床面からの深さが0.55 mほどの大きな凹みがある。この南側は床面から0.35 mで、一段浅くなっている。この凹みのすぐ西側に径約0.9 m、深さ約0.36 mの円形のピットがあり、両者の堆積土は非常に近似している。東端の凹みの堆積土上方にはわずかに黄褐色の地山土が貼られており、埋土後に住居の床面としたものらしい。堆積土は住居覆土とは異なっており、両ピットは住居構築前の遺構である可能性が強い。

遺物は少量の土器と半円状扁平打製石器1点（第63図174）、石錘1点（第70図226）、凹石2点（うち1点は第63図26）、玦状耳飾1点（第85図342）が出土している。第40図42の土器はわずかに外反する口縁部である。外面に太い斜縄文を施し、口唇部に刻み目を加えている。半円状扁平打製石器は軟質の石材を用い、片面の半分を整形剝離ののち刃部を作出している。2点の凹石は住居内東端の土坑から出土している。玦状耳飾（第85図の342）は、緑色凝灰岩を素材とし、切目部の長いものである。穿孔は両面からの回転運動による。補修孔も両面から行なわれる。断面形はほぼ台形を呈し、切目部先端は研ぎ出されている。

**SI214**　（付図5、第38・40・41・44・47・48・63・70・73図、図版17・40）

NC 26～28、ND 27･28の南西に降りる緩斜面に位置する。南西側は調査区外に延びているため、長軸方向の長さは不明であるが、現存長7.2 m、短軸は最大で6.2 mである。長軸方向を北東―南西にとるやや先細りの楕円形を呈する形態のものと考えられる。覆土は傾斜に沿って流れ込んでいる様子を観察できる。全層にわたって炭化物を若干含み、1～3層には焼土を若干含んでいる。壁は一部を除き明確に残る。北東側で0.34 m、南側で0.1 mの壁高がある。床面はほぼ平坦で、中央部分を中心にやや堅く踏み締められている（床面での高低差は長軸方向で0.3 mある）。柱穴は住居跡内外に多数あり、そのいずれが住居に伴うものか特定できない。床面上ほぼ中軸線に添って3箇所の焼土を検出した。南西の一箇所については調査区外にも延びている。いずれも掘り込みをもたない地床炉と考えられる。

遺物については、この場所は遺構確認以前から捨場と考えられる箇所の一部であったため、多量の遺物を検出していた。遺構確認面上にも多くの遺物を検出している。明らかに住居跡に伴うと考えられるものは、床面直上の第38図18、第40・41図43～54と凹石がある。第38図18は、口縁部のみが短く外反し、直線的に底部へ至る。網目状の撚糸文を施し、口唇部には指頭圧痕を並べる。第40図43・45・46、第41図47は頸部に指頭押圧のある隆帯が巡るものであるが、第40図44のみは縦位に垂下する。第41図48は地文として細かな斜縄文を施し、そのうえに半截竹管によると思われる4条の細い平行沈線文を施す。49～51は網目状撚糸文、52も撚糸文である。53は縦位の羽状縄文、54は波状口縁頂部の突起で、中央の孔を中心にして半截竹管による円状刺突文が取り囲む。覆土中及び柱穴内から石匙1点（第47図41）、箆状石器3点（うち1点は第44図10）、削器6点（うち5点は第47図42、第48図43～46）、掻器1点（第48図47）、磨製石斧3点（うち1点は第48図48）が出土している。第47図41と第48図44は本住居跡のピット内から出土したもので、41はつまみ部が欠損した縦型石匙である。箆状石器のうち図示しなかったもののうち1点は、小型で片面調整、刃縁は円刃、側面形が片刃をなすものである。第48図48は緑色凝灰岩製で、擦切手法によって製作されたことが側面に残る擦切痕によってわかる。他の2点の磨製石斧は刃部破片である。また、半円状扁平打製石器6点（第63図175～178）、石錘2点（第70図227・228）、凹石5点（第73図263・264）も出土している。175は床面出土。176と凹石263は柱穴内出土。半円状扁平打製石器175は小型であるが刃部は両面から剝離して作出してある。176は両面を粗く整形剝離したのち、刃部を作出している。石錘228は図右の抉りは敲きによる。凹石264は断面かまぼこ状の球形を呈するものに凹みが2箇所入るものである。

**SI215**　（付図5、第49・63・70・73・85図、図版17）

MM 26・27、MN 24～27、MO 24～27に位置する。壁は南側と西側の南半を確認できず、長軸に添って柱穴が対をなして配列されている箇所から推定すると、長軸方向を北北東―南南西にとり、長軸12.4 m、短軸は最大で6 mを測り、南にいくにつれて幅がやや狭くなり最少で

約4.5 mになると思われる。覆土2層には焼土を少量含んでいる。3層は地山砂礫層の小礫を極めて多く含有している。壁高は、北壁で最大0.2 m、その他は0.1 m前後を測る。床面は地山砂礫層面にあり、小さな凹凸がある。北東部では一部、柱穴と周壁の間でベット状の高まりを確認している。床面より約0.2 m高くなっている。床面での高低差は長軸方向で0.4 mである。柱穴は、壁からおよそ0.7～0.8 mの間隔を保って配されている。焼土の堆積が床面の北側に1箇所あり、ほぼ中軸線上にのる。長さ0.9 m、幅0.5 mで焼土粒子が密に分布しているとは言えないが、地床炉と考えられる。

土器は出土しなかったが、覆土中から篦状石器3点（うち2点は第49図49・50）、削器1点（第49図51）、半円状扁平打製石器1点（第63図179）、石錘1点（第70図229）、凹石2点（うち1点は第73図265）、フレイク38点の他石製品1点（第85図347）が出土している。49は両面調整で刃縁は円刃、側面形は両刃であるが、50は半両面調整で、側面形が片刃を呈するものと考えられる。凹石は片面のみに凹みをもち、裏面には磨りが認められる。火熱を受けている。石製品は、棒状の凝灰岩に4条の溝を巡らしたものであり、下端の折損部はちょうど溝からきれいに折れており、この溝が、石を切断する過程を示すものかもしれない。

**SI220**

遺構は当初、南西側の壁を確認した時点において住居跡番号を付し、南北方向に長軸をとるものと考えていた。しかし規模については精査を繰り返してもなかなか特定できなかったもので、最終的に炉・柱穴の配列から軸線の異なる2軒の重復と判断し、南側をSI 220 A、北側をSI 220 Bとした。両者の新旧関係は不明である。

**SI220A**　（付図6）

MF 31～33、MG 30～33、MH 30～33に位置する。西壁には一部接合しない箇所がありかつピットが2個1組のように配られていることから、二時期あるいは重復も考えられる。長軸方向を北東―南西にとり、規模は推定で長軸13.2 m、短軸8.6 mである。壁は南壁と西壁のそれぞれ一部を確認しており、壁高は最大でも0.2 mである。床面は地山面上にあり、特に堅く締められた様子は観察できない。床面南側ほぼ中央部には土坑様の掘り込みを2箇所で検出した。いずれも住居に伴うものと考えられる。柱穴と考えられるピットは規模の割には検出個数が少ない。床面に堆積する焼土は推定中軸線に対しやや北西側に偏在している。4箇所の焼土のうち、A・Bは地床炉と考えられる。Cは炉がいくつか複合したものとも思われる。Dは焼土粒子の分布が密でなく、炉とは明確に言えない。

**SI220B**　（付図6）

MF 33～36、MG 33～36、MH 34～36に位置する。北側でSI 230と重複する。新旧関係は不明であるが、SI 230壁が、この住居跡を重複する箇所で途切れていることから、SI 230より

新しい時期の可能性はある。長軸方向を南―北にとると考えられ、中軸線上には細長い焼土列がある。壁を全く確認できず、規模を明確にできないが、焼土列と柱穴から推定して、長軸約13.5 m、短軸7.1 mになるものと考えている。床面は地山面にある。堅く締められてはいない。中軸線の東側ではほとんど柱穴を検出できなかった。さらにSI 230との重複部分での柱穴がどちらに属するのかについても明らかにできなかった。中軸線上にのる焼土列は、炉の複合しているものと理解される。

**SI230**　（付図6、第49・64・73図、図版20）

MF 36～39、MG 36～39、MH 36・37に位置する。南側でSI 220 Bと重複し、新旧関係は明確にできなかったが、SI 230の壁が重複部分で検出できなかったことから、SI 220 Bより古い可能性がある。さらに東壁をSKT 231に、また北側を東西に走る新しい水路（現代）にそれぞれ切られている。東・西壁の残る短軸は6.6 mであるが、長軸は南北とも重複があり推定ではつぎのようになる。南限は、西壁が南側でおれて南壁に移行する箇所、北限は新しい溝の北側に残る柱穴としてみると、推定長軸12.6 mになり、長軸方向は北北東―南南西にとる。覆土は全層にわたって焼土・炭化物を微量含んでいる。壁高は、西壁で最大0.25 m、東壁では0.05～0.06 mである。床面は掘り込んだ地山面をそのまま使用している。中央部近くに長軸1.7 m、短軸0.7 mの隅丸長方形プランを呈する土坑がある。柱穴は位置・深さなどからP 1～P 12を主柱穴と考えている。焼土の堆積が床面上に10箇所近く認められる。うち明らかに炉と考えられるのはAとBで焼土面が堅く締まっている。その他については、焼土粒子が薄く分布しているのみであり、仮に炉としてもごく短期間に使用されたものと思われる。壁溝は西壁中央部で一部を確認している。幅約0.2m、深さは床面から0.1m前後で、壁から約0.1m内側に掘り込まれている。

覆土中から、箆状石器1点、削器1点（第49図53）、磨製石斧1点（第49図55）、半円状扁平打製石器4点（うち2点は第64図180・181）、凹石5点の他、フレイク33点が出土している。床面に穿たれた土坑内からは、削器2点（第49図52・54）と凹石1点（第73図266）が出土している。磨製石斧（55）の刃部には、刃縁に平行する微細な線と、これに直行する微細な線とが見える。この2種類の微細な線は、前者がより組織的で研磨の際の擦痕と見られるのに対し、後者は刃縁から線が始っていて使用による痕と考えられる。後者が前者を切っており、この磨製石斧が横斧であったことを示している。半円状扁平打製石器180は、約12 m距てたMC 37グリッドから出土した破片と接合してできたものである。181は擦り面が2辺にあるもので、どちらも使用頻度は高い。多孔質の石材を用いている。

**SI311**　（付図6）

MI 44～47、MJ 44～47のグリッドに位置するが、柱穴配置からその存在を確認したものである。SK 197・SK 198が本住居跡内で検出されている。新旧関係はSK 197・SK 198の覆土

上面に本住居跡廃棄直後に投棄されたと考えられる焼土が一部堆積していることから、本住居跡が新しいと判断された。長軸方向を北―南にとり、柱穴間距離から推定すると長軸 11.6 m、短軸 5.7 mであるが、他の住居跡柱穴配置とプランの関係から推定すると長軸 13.6 m、短軸 7.2 mの楕円形を呈するプランと思われる。覆土は暗褐色土を主体とするが極めて薄い。床面は平坦でしまりがない。柱穴は長軸を中軸線として、P 1 ～P 8 と P 9 ～P 15 が対称となり、上部構造を支えたと考えられる。炉は検出されなかった。

遺物は、床面上からフレイクが 1 点出土しただけである。

**SI156**　（付図 6）

NB 34 ～ 36、NC 34 ～ 38、MD 35 ～ 38 に位置している。この部分でも SI 118 ・ 123 ・ 200 と同様に表土を除去した段階で、南北に長い窪みを確認したが、これ程大きな規模の竪穴住居跡であるとは予測できなかったものである。他の遺構との重複は、本住居跡の南半で SI 126 の北半と、北東部で SK 159 と、中央部で SK 157 とそれぞれ切り合っている。SI 126 とは、表土除去後の窪みの範囲及び覆土の観察から本住居跡が新しく、SK 159 ・SK 157 とは、本住居跡の覆土が SK 159 ・ 157 によって切られていることから本住居跡が古い。 従ってこれらの遺構の新旧関係は古い方から SI 126 →SI 156 →SK 157 ・ 159 となる。また、本住居跡の東側には、本住居跡と長軸方向をほぼ同じにする SI 130 ・ 133 が隣合っている。柱穴は中軸線にほぼ平行し、これに東・西側には溝が伴う。西側の溝からさらに外側に 1.0 mほどで出入りのある立ち上がりがあるが、SI 156 の壁かどうかは明らかではない。柱穴間だけを計ると、長軸約 17.0 m、短軸 5.3 mほどであるが仮に西側の立ち上がりを壁として、柱穴列の外をめぐるとすれば、推定規模は長軸 20.0 m、短軸 7.7 mほどになる。長軸方向を北北西―南南西にとっている。覆土はしまりのある暗褐色土と褐色土からなるが、SI 126 の覆土に比べて、土器・石器の出土量は極めて少ない。住居西側で検出された立ち上がりは高さ 0.2 mほどあるが、この立ち上がりのラインは出入りが激しく、また南側の端部は柱穴列から大きく離れて外側に開く傾向にあるため、SI 156 の壁かどうかは明らかではない。床面は重複する SI 126 よりも軟かく、特別堅い部分はない。柱穴は床面からの深さ 0.5 ～ 0.7 mほどのものが主柱穴（P 1 ～P 31）と考えられる。柱穴内には人頭大の礫の混入するものもある。また主柱穴に深さ 0.2 ～ 0.3 mの小ピット（P 32 ～P 46）があり、さらに東側の主柱穴列の外側には、内傾するピット（P 47 ～P 52）がある。床面には若干の焼土が認められたが、ごく痕跡程度のものであった。東・西にほぼ平行して検出された溝は、両者とも長さ約 7.3 m、幅 0.2 m、深さ 0.1 m程で、柱穴と重なることもある。炉は図示出来なかったものの、調査中に中軸線上で極めて薄く堆積する焼土を 2 箇所で確認している。

覆土中から全面を斜め方向に磨き、頭部先端も丁寧に磨いた石剣の頭部破片 1 点（第 85 図 345）の他少量の土器片、フレイク 24 点が出土している。

**SI171**　（付図6）

NG 33～38に位置するが、西側部分には調査区外にあり、全容を知り得ない。また、SKF 177、178、181、182、184と重複するが、土壙が人為的な堆積状況を示すことから、本住居構築時にこれらの土壙を埋め戻したと思われる。全容が明らかになっていないが、住居跡の規模は、柱穴配列から推定すると長軸方向を北北西―南南西にもち、長軸16.2 mの楕円形プランと考えられる（短軸は不明）。褐色土を主体とする覆土には、炭化物が多く混入している。残存する壁面は、0.09～0.12 mの高さをもち、緩く立ち上がっている。床面は、ほぼ平坦で部分的に堅くしまっている。床面上には上部構造を支える主柱穴は14個（P 1～P 14）の他に、副次的な支柱穴と考えられる柱穴も検出された。この主柱穴を結ぶ幅0.1～0.15 m、深さ0.05～0.3 mの溝が検出されており、壁溝と断定された。長軸線上の南壁際に堆積する焼土を検出したが、しまりもなく床面も焼けていないため、本住居跡の地床炉とは断定しがたい。

遺物はごく少量の土器片とフレイク8点が出土したにとどまる。

**SI180**　（付図6、第49・50・64・69・70・73・81・84図）

ML 37～39、MM 37～40、MN 38～41、MD 39～42、MP 40・41に位置している。放射状に配列された住居群の1つで、SI 170に隣接している。確認時には、住居跡北西側のプランと壁溝の一部を把握できたが南東側はSI 190・199・326・327・SKT 319と重複しており、明確なプランは確認できなかった。重複する遺構群との新旧関係は、覆土の堆積状況や、柱穴の切り合いなどからSI 180がこれら遺構群よりは古いと判断された。長軸線に平行する北東側と南西側には柱穴列、北西側には一部二重となる「コ」の字状の溝がある。この溝が住居跡を全周するとすれば、住居跡の規模は長軸方向を北西―南東にとり長軸18.0 m、短軸4.5 m前後となり、溝状の形状からすれば平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。覆土の厚さは0.2 mほどしかなく、暗褐色土や褐色土がブロック状に入り込んでいる。明確な立ち上がりをもつ壁は検出できなかったが、住居長軸線に向かって、北東側と南西側から地山確認面が緩やかに落ち込む程度で、住居跡床面と周辺の地山面との比高差は約0.15 mである。床面は全体的に軟かい。柱穴は、床面からの深さが0.4 m以上のもの（P 1～P 30）が主柱穴と考えられ、他の柱穴は深さ0.3 m前後である。柱穴列は東西に認められるが、長軸線上の東側には0.4 mほどの深さの柱穴があるだけである。炉は、中軸線上北西側に1箇所認められた。焼土の広がりは0.9×0.6 mであるが、焼土自体にはそれほど堅さはみられない。また焼土の下には掘り込みも認められない。住居跡北西側を取り囲むような「コ」の字状の溝は、幅0.2 m、深さ0.1 m前後で柱穴列から約0.1 m外側を巡っている。またこの溝と平行して北西側には内側にさらに1条の溝があり、これは幅0.2 m、深さ0.2 mほどである。

遺物は覆土中、床面上、柱穴内から出土している。土器は少量出土したのみである。石器は

覆土中及び柱穴内、床面直上から石鏃1点（第49図56）、石錐1点（第49図57）、石匙5点（第50図58～62）、削器2点（うち1点は第50図63）、箆状石器1点、掻器1点（第50図64）、磨製石斧1点（第50図65）、半円状扁平打製石器7点、扁平磨石1点、石錘4点、凹石3点、敲石1点、石皿1点、石製品の他フレイク44点が出土している。56はP29、箆状石器はP24、65はP13からそれぞれ出土した。61と62の石匙はつまみ部あるいはつまみ部側を欠損している。58～60は赤色をした鉄石英の小さな剥片を素材とし、つまみ部のみを作出した石匙で、これで完形である。床面直上からまとまって出土している。敲石は柱穴から、石皿（第81図322）はP24から、半円状扁平打製石器（第64図183）、凹石（第73図268）はP29から、凹石（第73図269）は柱穴内から、石錘（第70図232）は壁溝からの出土である。半円状扁平打製石器（第64図182～184）182は両面の一部に磨きが入る。3箇所の打ち欠きは両面から丁寧に施されている。183は擦り面を2辺にもつ。図上の辺は打ち欠きをほとんど伴わず、扁平擦石様である。184も2辺に擦り面を有する。片面に凹みを合わせ持つ。扁平擦石（第69図216）は2辺に擦り面をもつが、使用頻度は高くないようである。凹石（268）は片面に磨面を有する。石皿（322）は片面を使用しており、火熱を受けている。使用面はやや凹状を示している。形状は不明であるが、厚さは4.2～4.8cmある。石製品（第84図333）は短冊型の凝灰岩の縁辺を粗く剥離し、その後磨いている。

**SI190**　（付図7、第50・51・56・64・65・73・74・83・84図）

MM 37～39、MN 36～39、MO 35～38、MP 35～37のグリッドに位置し、SI 150・SI 170・SI 180・SI 199・SI 326・SI 237・SK 302・SK 303と重複している。本住居跡廃棄直後に投棄されたと考えられる。焼土がSI 150・SI 170・SI 180・SI 326を一部覆っていることからこれら竪穴住居跡より新しいことが確認されている。SI 199・SI 327・SI 302・SK 303との新旧関係は不明である。長軸方向を北東—南西にとり、柱穴間距離から推定すると長軸17.2 m、短軸4.1 mの楕円形を呈するプランと思われる。覆土は、暗褐色土を主体とし焼土を多量に含んでいる。壁面は極く一部に認められ、壁高は0.03～0.07 mである。床面は平坦である。柱穴は、長軸を中軸線として、P 1～P 13とP 14～P 26がほぼ対称に配列されており主柱穴と考えられる。炉は、中軸線上にある焼土（図中A～D）4箇所である。他の焼土は、しまりがなく、薄く堆積しているだけで炉とは考えられない。壁溝・出入口は検出されなかった。

遺物は、覆土中から少量の土器と縦・横9 cm、厚さ4 cmの焼けた粘土塊1点、石匙3点（第50図66・第51図67・68）、箆状石器1点、削器2点（第51図69・70）、打製石斧1点（第51図72）、半円状扁平打製石器11点（うち5点は第64図185・186、第65図187・190・191）、凹石6点（うち2点は第73図271・272）、磨石1点（第74図282）、石剣1点（第83図332）、球状石製品1点（第84図335）の他フレイク67点出土している。また、柱穴内からも遺物が出土している。石鏃1点（第56図166）、石匙2点、磨製石斧1点（第51図71）の他、半

円状扁平打製石器はP5（第65図191）、P2（188）・P27（189）から、凹石はP21（第73図270）、P27から1点出土している。石匙67の裏面下半にはポリッシュが見える。71の磨製石斧は刃部側を欠損しているが、右側面に明瞭な擦切痕を残している。この磨切痕をもとに、擦切具が作った溝の深さは7㎜以上、幅は上面近くで8㎜以上、下面で2㎜以上あったことがわかる。半円状扁平打製石器185～187は多孔質の石材を用いている。191は花崗岩である。187は接合資料である。図右の破片はMJ47グリッドから出土したもので、SI190の北東約36mの位置で検出されたものである。ここはSI311の北部にあるため、同住居跡に帰属する可能性がある。188は2つの擦り面が同一接地面になく、別個に使用された可能性がある。刃部の対辺には2つの扶りを有する。凹石271には端部に敲きによるつぶれが認められる。磨石は285は片面にのみ磨面をもつもので、顕著な使用は観察できない。球状の石製品は、青白色の灰を磨いており、中央部をさらにくぼませている。石剣332は頭部に穿孔の痕跡があり、その部分から折損している。先端部は鋭く研ぎ出されているが、この部分は再加工したものである。

**SI213**　（付図7、第41・51～53・65・66・69・70・74・81・84図、図版16）

MP30、MQ29～31、MR29～31、MS29・30、MT28～30、NA29グリッドにある。長軸推定17.9m、短軸6.2mの長円形で、面積推定93.6㎡、長軸方向は北東～南西である。覆土全体に焼土を多く含み、殊に床面に近い下方ではレンガ状のブロックとなって固まっている。住居廃絶直後にこれら焼土が投棄されたものと考えられる。壁は住居西側では検出できなかったが、東側では0.2m前後の高さの急角度で立ち上がり、北側では0.17～0.28m、南側では0.15～0.2mの高さで、東壁よりは緩やかに外方に傾斜する。床面は全体に堅く地山に含まれる小礫がわずかに露出する。住居が西向きの斜面に構築されているため、床面も東西両端では約1mの高低差がある。中央部よりやや西寄りに0.7×0.6mの範囲で、焼土が非常に硬化した地床炉がある。この他に床面がやや広い範囲で焼けているが、硬質化せず不整形で焼土範囲も地床炉のように明瞭ではなく、地床炉とは異なった様相を示す。住居廃絶後の凹みを利用し短時間の焚火によるものかと考えられる。壁溝は設けられてない。床面に多数の柱穴が検出されたが、P1～P49が柱穴間隔・配列から主柱穴と考えられるが、複数期（建て替え）が推定できる。またP50～61も柱筋が通る。P62～P68、P69～P74、P75～P79の3列は間仕切りの柱穴かと思われる。出入口の位置は不明である。この炉の西側に2.85×1.74mの規模の楕円形の土坑がある。深さ0.23～0.27mで、底面はほぼ平坦、壁もしっかりとしている。若干の土器片などが出土したほか特に南側において東西方向から焼土が坑底まで流入していた。同様の形態の土坑は他の住居内に見られず、この住居廃絶後に構築され、住居内の焼土が流入したものと考えられる。遺物は主として覆土中よりやや多量に出土した。

覆土中・床面上及び柱穴内からやや多量の土器と、石器・フレイク・礫が出土している。土

器は図示し得るものは少ない。第41図55は外反する口縁部で縦位の撚糸文と沈線による鋸歯文が施されている。56・57は指頭圧痕のある隆帯が巡るもので、58は網目状撚糸文である。石鏃2点（第51図73・74）、石錐1点（第51図75）、石匙3点（うち2点は第51図76・77）、箆状石器7点（うち4点は第52図78～81）、削器9点（うち8点は第52図82・83、第53図84～89）、掻器1点（第53図90）は覆土中からの出土である。石匙77は、側縁の製作過程がわかる。これによるとまず背面左側縁から細かい調整を加えた後、これを打面にして覆面側から丁寧な押圧剝離を背面側に施している。箆状石器の刃部側面形は第52図78が両刃、第52図79～81が片刃である。第52図82は大型で器中央部が分厚く、刃縁は丸のみ状を呈し、形状のみからすると縄文時代初頭の片刃石斧に似る。削器は、比較的大きな剝片を素材とし、刃部が内湾する形態のもの（第52・53図82～85）が多い。半円状扁平打製石器30点、扁平磨石3点、石錘8点、凹石1点、台石1点、その他自然石であるが孔を有する石も1点出土しており、半円状扁平打製石器のうち第65図193・第66図200が床面から出土し、2点（第65図194、第66図195）が柱穴内から出土した。石錘（第70図235）、凹石（第74図274）も柱穴内からの出土である。半円状扁平打製石器（第65図193～第67図204）では、197・202が多孔質の石材を用いている。193は片面を整形剝離ののち刃部を作出している。203は、片面を部分的に整形剝離ののち刃部作出。刃部の擦りは顕著でほぼ平坦となっている。この擦り幅は最大で1.6㎝ある。204の抉りは握手状を呈する。扁平磨石（第69図217・218）では（217）が、両面に凹み、片面に線状痕を有する。石錘（第70図234～第71図239）では柱穴内から出土した235のみ3方の抉りで、他は全て2方から抉りを入れている。239は敲きにより抉りを完成させている。凹石（第74図273・274）では274が欠損後に火熱を受けている。273は両面に磨きが入るもので、片面の断面Ｖ字形の凹みは意図的に穿ったものである。石皿（第81図324）は、使用面がＵ字形に大きく凹むもので、使い込まれている。この面には、幅0.7㎝程の断面Ｕ字形の沈線が2条、裏面にもほぼ同じ幅の沈線が2条認められる。火熱を受けて多少もろくなっている。台石（第81図323）は凹石を大型にしたような形状を示す。片面に浅い凹みをもつ。フレイクも350点出土しているが、第84図338は棒状の凝灰岩をさらに研磨しており、断面形はほぼ楕円形を呈する。先端部（図では下端）は薄く研ぎ出され、横方向の擦痕が観察できる。両端とも黒色に変化している。

**SI327**　（付図7、第48・54図）

MM 36～38、MN 35～38、MO 35・36に位置し、SI 170・SI 190・SI 326・SKT 317と重複するが、SI 170とSI 326を本住居跡に伴う焼土が覆っているとから本住居跡の方が新しい。SI 190との関係は不明である。SKT 317との関係は、SKT 317が本住居跡の壁面を掘り込んでいるので、SKT 317が新しい。長軸方向を北東―南西にとり、柱穴間距離から推定すると

長軸16.5m、短軸3.1mとなるが、北東側に残存する壁面プランから推定すると長軸17.2m、短軸4.3mの楕円形を呈するプランと思われる。覆土は暗褐色土を主体とし、少量の炭化物と焼土を含んでいる。北東側に一部残存する壁は、緩やかに立ち上がり、0.03～0.06mの高さをもっている。床面は平坦であるが、しまりがない。柱穴は、長軸を中軸線としてP1～P10とP11～P20がほぼ対称に配列されており主柱穴と考えられる。P22～P25は、間仕切用の柱穴かとも思われる。P21は、他の柱穴より大きいので貯蔵穴と考えられる。炉は、中軸線上にある3箇所の焼土がこれに該当する。壁溝・出入口は検出できなかった。

遺物は、覆土中からフレイク3点、柱穴中から石匙1点（第54図91）、箆状石器1点（第48図44）、半円状扁平打製石器1点が出土した。

**SI328**　（付図7）

MK39～41、ML38～42、MM39～41に位置し、SI199、SK196と重複している。放射状に配列された住居群のうちでは最も北にある。特に落ち込みとして確認されてはおらず、またSI199の柱穴やその他のピット群が複雑に重なりあっているため、住居としての認定が極めて困難であった。南北に並ぶ焼土の列と、それを中心とする東西の柱穴列によって、おおよその規模を把握している。SI328の焼土を切ってSI199の柱穴が掘り込まれており、SI328がSI199より古い。長軸線上における柱穴は確認できなかったものの、東西の柱穴列から推定すると、長軸方向を北―南にとり、長軸15.0m、短軸4.0mほどの楕円形プランを呈すると考えられる。床面は全体的に比較的軟かい。中軸線を対称に東西にある柱穴列のうち、径0.4m前後、床面からの深さ0.5～0.7mのピットが主柱穴と考えられる（P1～P12）。またこの主柱穴間には、径0.2m、深さ0.3～0.6mの小ピット（P12～P24）がある。南北に連なる焼土は、床面全体に広がっており、このうち中軸線上の焼土（図中A～C）は堅くしまっており、地床炉と考えられる。焼土の広がりは、住居床面積の5割強を占めている。壁面・壁溝・出入口は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI126**　（付図7、第41・54・55・67・68・71・74・85図）

NA32・33、NB32～35、NC32～36、ND34～36に位置しており、北側ではSI156と一部重複している。東側には長軸方向をほぼ同じくして、SI130・133が隣接している。SI156と長軸方向をほぼ同じくして重複しているため、確認時には南北に伸びた長楕円形の黒色土（7.5YR1.7／1）が緩く落ち込んだ状態であった。確認面は北東から南西にかけて緩く傾斜している。柱穴はほぼ楕円形に巡るが、東側には柱穴列から1.3mほど離れて壁が確認されている。壁はこの東側に検出されただけで、西及び南・北には検出されていない。東壁は南側で溝に変わり、この溝の南端がほぼ住居跡の南端部に連なると考えられる。また、東側の柱穴列か

ら東壁までは床面が1段高くなり、ベット状を呈している。住居の規模は、柱穴のプランでは長軸方向を北北西―南南西にとり、長軸19.5 m、短軸5.3 mであるが、柱穴外側の一連の溝と壁が全周するとすれば推定で長軸22.0 m、短軸8.0 m前後となる。覆土は厚さ0.2 mほどの暗褐色土で、炭化物、焼土粒、土器片を多量に含んでいる。特に住居跡南側では厚い遺物包含層があり、これから多量の遺物が住居跡内に流れ込んでいる。東側にのみ10 mにわたって検出された壁は、高さ0.15 mで、ほぼ直に立ち上がる。床面は南側では堅くしまりがあるが、SI 156と重複する部分では比較的軟らかい。また東側のベット状の面は、堅くしまっている。床面全体は凹凸がなく平坦であるが、わずかに東から西に傾斜している。柱穴は、床面からの深さが0.3 m以上のもの（P 1 ～P 13）が主柱穴と考えられるが、長軸線上には柱穴は確認できない。ほぼ長軸線上に地床炉が5箇所並んでいる。焼土の厚さは0.05 mほどである。南側の炉の焼土の広がりは径1.0 mであるが、他は径0.5 mほどの広がりである。これらの炉の床面は焼けているが掘り込みは認められない。

住居跡南側で多量の土器片や石器が出土しているが、包含層からの流れ込みと考えられる。第41図59～61は口縁部付近の破片で、太めの沈線により鋸歯文を主体とする幾何学的文様が描かれている。62は横位の綾絡文である。石器は覆土中から石鏃3点（第54図92～94）、尖頭器1点、有撮石器1点、石匙9点（うち7点は第54図96～102）、箆状石器1点（第55図103）、削器（第55図106～108）、磨製石斧1点（第55図109）、半円状扁平打製石器5点（うち3点は第67図205～207）、扁平擦石1点（第68図215）、石錘2点（第71図240・241）、磨石1点（第74図278）、ナタ状を呈する礫器1点（第74図283）、石製品（第85図346・347）の他に孔のあいた自然石1点、フレイク311点が出土している。また、柱穴からも出土しており、P 6から石鏃1点（第54図95）、P 35から削器（第55図104）が出土している。床面からは削器1点（第55図105）が出土した。尖頭器は先端部、有撮石器は撮部の破片である。箆状石器は両面調整ながら、刃部の側面形は片刃状を呈する。磨製石斧は基端側の破片で、擦切手法により製作されたと思われる。基端上面に敲打痕がある。半円状扁平打製石器（206）は図の左側破片が、東方に約22 m距てたMQ 34グリッドから出土したものである。MQグリッドは、SI 314内に位置するので、同住居跡から出土した可能性がある。この半円状扁平打製石器は、欠損後も左側破片が使用されており、右側と比較して最大4 ㎜擦り減っている。207は両面に凹みをもっている。扁平擦石215は断面逆三角形を呈しており、擦り面は凸状となっている。石錘240は扁平な石材を用いている。（241）は4方に抉りをもつが、作りは雑である。磨石（278）は片面のみ磨面を有する。ナタ状の礫器（283）は握手部分と刃部から成るもので、板状節理の石材を用いている。握手は両面から打ち欠いて握り易くしてある。刃部は片面からの打ち欠きである。石製品（346）は扁平な細長の自然石の一端に切り込みを入れたものである。347

も扁平な短冊型に整形した石の両端に孔を穿ち、一方にはこれも切り込みを入れた石器である。

**SI150**　（付図8、第38・55・56・67・68・74・81・85図）

MN 34・35、MO 34～36、MP 34～36、MQ 35～37、MR 35～37、MS 35～37、MT 36・37に位置しており、SI 170、SI314の間にある。住居北西側ではSK 155と、また南東側ではSI 190・327と重複している。SK 155との関係は、SK 155の覆土中に、本住居跡の焼土が、多量に流れ込んでいることからSK 155が古いことが判る。またSI 190・327とは、両者の一部が重複するだけで、3者の新旧を明確にはできなかったが、柱穴の切り合いや、柱穴の配列、焼土のあり方などから、SI 150がSI 190・327より古い住居跡であることを確認している。従って本住居跡を中心として各遺構新旧関係は古い方から、SK 155→SI 150→SI 190・327（両者の新旧関係は不明）となる。本住居跡は、暗褐色土（7.5 YR 4／4）のプランとして、北西から南東方向に楕円形に広く確認されたが、南東側に行くほど確認のしにくい状況にあった。長軸線（N―67°－E）を中心に南西と北東にほぼ平行して柱穴列が並ぶが、長軸線上北西端には、柱穴を検出できなかった。柱穴を結ぶ線がほぼ住居の規模を示すとすれば、長軸が推定で24.5 m、短軸が5.3 mほどの楕円形を呈するものと考えられる。覆土は厚さ0.2 mほどで、比較的しまりのある暗褐色土（7.5 YR 3／3）や褐色土（7.5 YR 4／4）であり、これには炭化物・土器片が混入している。また柱穴内の覆土は暗褐色土（7.5 YR 3／3・4／4）である。住居中央に向かって、南西側と北西側が緩やかに落ち込んでいるが、明確な立ち上がりとしては把握できなかった。周辺の地山面と住居床面との比高差は0.2 mほどである。床面は全体的に軟かく、特に堅くしまりのある部分は確認できなかった。深さ0.5～1.0 mほどの柱穴（P 1～P 26）が主体穴と考えられ、この他に0.3 m前後の深さの柱穴がある。主体穴からは挙大の礫が出土しているものもある。長軸線上の両端に焼土の広がりがあり、これが地床炉である。また北東の炉の北側にも焼土があるが、これは床面よりやや浮いて検出されている。

遺物は、覆土中及び床面からの出土は少なく、柱穴内からの出土が多い。土器は覆土中から少量出土した。第38図19はほぼ直立する口縁部から直線的に底部に至る。縦走する羽条縄文が施されている。第38図20は土製の丸玉で一孔を有する。装飾品と考えられる。また、覆土中から石鏃1点（第55図110）、石匙3点（うち2点は第56図111・112）、削器3点（うち2点は第56図113・114）、磨製石斧1点（第56図115）、フレイク150点の他、凝灰岩質の剝片の両側縁に粗い剝離を施す石器（第85図348）が出土した。石匙111は刃部下半、112はつまみ部を欠損している。磨製石斧115は手頃な河原石の全面を研磨しているが、基端側を欠き、刃部も使用による剝落によって打製石斧状になっている。石匙はP 17から、半円状扁平打製石器はP 5・P 9（第68図210）、P 13（第67図208）から出土しており、凹石はP 3（第74図276）・P 4（277）、P 9（275）から、石皿（第81図325）はP 14からの出土である。石錘（第

71図242～244）244は大型で左右の抉りの入れ方が異なる。凹石（第74図275～277）275は火熱を受けもろくなっている。276は片面にのみ凹みと摩面を有する。277は片面に磨面もち、端部は敲石としても使用されつぶれが認められる。石皿（325）は、片面を使用面としているが、使用頻度は高くない。形状は不明、厚さは4.2～5.5㎝である。

**SI170**　（付図8、第56・68・71図）

暗褐色土（7.5 YR 3／3）が広く楕円形にほぼ落ち込んで確認され、MN 36～38、MO 37～39、MP 37～40、MQ 38～40、MR 39・40に位置する。SI 180とSI 150の間にある。住居南東側ではSI 190・327と重複している。本住居跡の北西で検出されたSK 175は、本住居跡確認面より上面で確認されており底面も住居覆土中であり新しいことが判る。またSI 190・327も覆土の堆積状況や柱穴の切り合いから本住居跡より新しい。壁は、住居北壁と南壁、それに西壁を検出しているが、北壁と南壁は、途中で消える。また西壁の内側には溝がある。西壁から南壁は、高さ0.2ｍで緩やかに立ち上がるが、特に南壁は出入りの激しいラインを示している。北壁は顕著な立ち上がりが見られず、隣接するSI 180との間を鞍部として緩やかに傾斜しており、これも出入りが激しい。規模は、西壁から南東端の柱穴を結ぶ線を住居の長軸と考えると、長軸方向を北西―南東にとり長軸約21.0ｍ、短軸は南壁が柱穴列と距離を置かずに平行するとすれば約4.2ｍで、ほぼ楕円形を呈するプランと考えられる。覆土は、厚さ0.1ｍほどで、暗褐色土（7.5 YR 3／3）が主体で、これに褐色土や黒褐色土がブロック状に含まれる。南東部には0.4×0.2ｍほどの自然礫が、これも床面より浮いた状態で2個出土している。床面は比較的軟らかく、特に堅い部分はない。長軸線を中心にほぼ対称に南北に柱穴列が並んでおり、深さ0.4～0.7ｍのものが主柱穴と考えられる（P 1～P 23）。さらにこの主柱穴間には深さ0.3ｍほどの小ピット（P 24～P 40）がある。柱穴内には挙大～人頭大の礫が入っているものもある。炉は、住居北西部に広がる4箇所の焼土のうちほぼ中軸線上にある2箇所（A・B）である。他の焼土は、床面上にフロック状に薄く堆積しており、炉とは考えられない。

遺物は、覆土中から少数の土器・石器及びフレイクが少量出土した。石器は、石錐1点（第56図117）、箆状石器1点（第56図118）、半円状扁平打製石器3点、石錐1点（第71図245）が出土している。箆状石器は、両面調整されているが、刃部を欠損している。石錐は多孔質の石材を用いたもので、抉りは凹状というより直線的ある。また、柱穴内からも石器が出土しており、P 41から石鏃1点（第56図116）、P 9とP 11から石匙各1点、P 2（第68図212）・P 4（第68図213）・P 5（第68図211）、P 14から半円状扁平打製石器出土している。213は短辺に敲きを有する。火熱を受けており、折断面の一部も赤化していることから火を受けることによって割れたか、割れた後で火を受けたものと考えられる。

**SI312**　（付図8、図版22）

MI 47～49、MJ 47～49、MK 47～49、ML 47～49、MM 47～49、MN 48 に位置し、SK 313 と重複しているが、プラン確認時の切り合い関係では SK 313 より古いことが確認された。長軸方向を東―西にとり、柱穴間距離から推定すると長軸 18.1 m、短軸 3.8 mとなるが、北東部に残る壁溝のプランから推定すると長軸 20 m、短軸 6.5 mの長楕円形を呈するプランと思われる。わずかに残る覆土は、暗褐色土を主体とし炭化物・焼土を含んでいる。床面は、ほぼ平坦である。柱穴は長軸線を中軸線として、P 1～P 14 と P 15～P 28 がほぼ対称に配列されており、P 29 も含めて主柱穴と考えられる。北東部に残る幅 0.25～0.3 m、深さ 0.09～0.12 mの壁溝中にも小さな柱穴が確認されており、主柱穴の外側に副次的な支柱穴と思われるこれら小規模な柱穴が巡る。また、長軸線上東寄りに焼土の薄い堆積を確認しており地床炉と考えられる。出入口は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

**SI314**　（付図8）

MN 34・35、MO 34～36、MP 34～36、MQ 35～37、MR 35～37、MS 35～37、MT 36・37 に位置している。放射状に並ぶ住居群の1つである。北側に SI 150 が隣接し、また南側には 15 mほど離れて、長軸をほぼ東―西にとる SI 213 がある。地山面で柱穴列によって確認した住居跡であるがこの柱穴も、整然と並ぶものではない。特に東西の柱穴は確認できなかった。また柱穴の確認される前に壁面が確認できなかったので、柱穴の配列から規模を推定すると、長軸方向を東―西にとり、長軸 21 m、短軸 7 mであるが、他の住居跡の柱穴配置とプランの関係から推定すると長軸 23 m、短軸 9 mの楕円形を呈するプランとなる。床面は全体に軟かい。柱穴は床面からの深さ 0.4～0.7 mのもの（P 1～P 17）が主柱穴と考えられる。その他に 0.2 m前後の深さのピット（P 18～P 23）があるが、長軸線を中心に対称となる柱穴は少ない。炉は住居内に確認された6箇所の焼土のうち、ほぼ中軸線上にある2箇所（図中 A・B）の焼土がこれに当たるものと考えられる。他の4箇所の焼土はブロック状で床面よりやや浮いている。

遺物は出土しなかった。

## 小　結

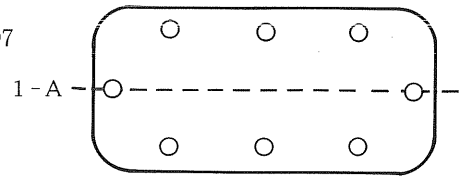
64 軒の竪穴住居跡について説明したが、ここでは平面形と柱穴配置について若干の分類を試みたい。

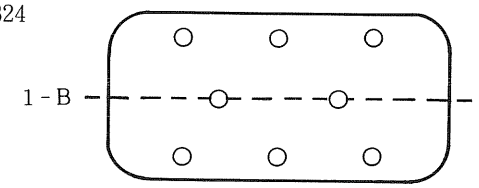
既に説明した通り、明確な住居跡平面プランを把握できたものと、不明確なまま推定プランを描いたものがあるが、平面プランは方形6軒（SI037・128・180・310・237・321）、長方形6軒（SI016・022・031・032・195・236）、円形5軒（SI014・025・239・240・322）、楕円形 47 軒（SI003・010・012・015・017・034・107・110・111・116・118・123・126・130・133・135・

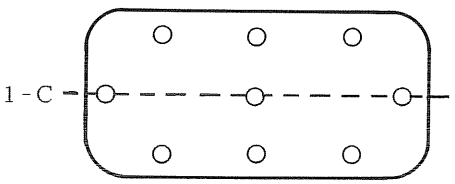
147・148・150・156・170・171・189・190・192・199・200・213・214・215・217・218・220A・220B・229・230・311・312・314・315・320・323～328）である。方形・長方形プランよりも、円形・楕円形のプランの方が圧倒的に多い。この傾向はたとえ柱穴群から住居跡が推定されても変わらないと思われる。

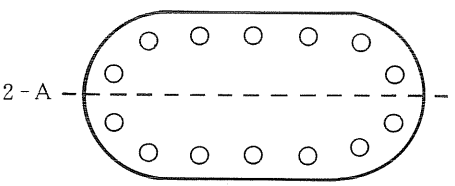
竪穴住居跡の大きさを検討する場合、壁面が完全に残っていてその全容が明確なものと、柱穴配置から推定せざるを得ないもの、わずかに残る壁面から全容を推測せざるを得ないものなどがあり、同一条件でその大きさを比較することは極めて困難であるが、竪穴住居跡の長軸の長さを細かくまとめると、次のようになる。

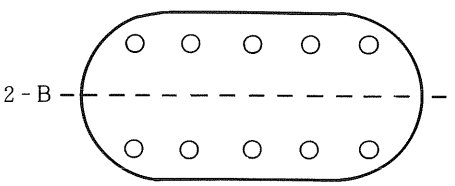
2ｍ台　SI022・031・034
3ｍ台　SI003・010・016・025・037・107
　　116・128・310・321
4ｍ台　SI014・032・322
5ｍ台　SI239・111
6ｍ台　SI236・240・189・192・323・324
7ｍ台　SI012・017・214・110
8ｍ台　SI200・133・135・320・325
9ｍ台　SI130
10ｍ台　SI218・229・123・147
11ｍ台　SI015・148・217・315
12ｍ台　SI215・220A・230
13ｍ台　SI220B・311
14ｍ台　SI118・195・199・326
15ｍ台　SI328
17ｍ台　SI213・156・190・327
18ｍ台　SI171・180
20ｍ台　SI312
21ｍ台　SI170
22ｍ台　SI126
23ｍ台　SI314
24ｍ台　SI150



縄文時代の竪穴住居跡のうち、長径あるいは長軸が10ｍを超えるものについては、「大型（型）住居跡」と呼び、それ以下のものについては「一般住居」と呼ぶことにする。近年検出例の増加に伴い、「大型（型）住居」といいう名称についての概念規定の違いや、該当遺構の分布範囲からの説に端を発した機能・用途についての諸説が論議されている。名称・機能について新たな説を唱えることは、ますます混迷の度を深めるだけであり、本報告では一応、「大型住居」と仮称して、その「大型」の目安となる長軸が10ｍを超えるものが29軒あり、ほぼ半数に近い。

ほとんどの竪穴住居跡内部に柱穴を検出しているが、全容が明らかな竪穴住居跡でその配置を観察すると、竪穴住居跡長軸を中軸線として対称するように柱穴が存在している。中軸線上に柱穴が存在するか否かにより2大別でき、更に個々の状況により細分が可能である。

1類　　中軸線上に柱穴を有する類である。中軸線上の柱穴位置と個数により3細分される。

1—A類　中軸線の両端に柱穴があり、中軸線で対称するように壁面下方に柱穴を有する類で、SI014・016・032・189・323・156・314・315がこの類である。

1—B類　中軸線上の壁面から離れて2個の柱穴があり、中軸線で対称するように壁面下方に柱穴を有する類で、SI322がこの類である。

1—C類　中軸線の両端と、中央部に1個あるいは複数個の柱穴があり、中軸線で対称するように壁面下方に柱穴を有する類で、SI015・037・320・133等がこの類である。

2類　　中軸線線上に明確な柱穴がなく、中軸線で対称するように両側壁面下方に柱穴を有する類であるが2細分できる。

2—A類　胴張りの強い平面形状の関係から、壁面下方の柱穴の配列が弧状を呈する類で、SI147・325・118・130・311・110・012・324等がこの類である。

2—B類　胴張りの弱いかあるいはほとんどない平面形状の関係から壁面下方の柱穴の配列が平行線となる類で、SI180・312・170・126・150・190・327・195・199等がこの類である。

柱穴配置1類のうちでも規模の比較的小さい竪穴住居跡では、中軸線上の柱穴が他の枝穴よりも直径・深さが大きいという特徴がある。（大型の竪穴住居跡では、中軸線上の柱穴と他の柱穴の直径・深さに大きな差異はみられない）。また、平面プランが楕円形となっている竪穴住居跡でも柱穴配置でみる限り、大型の竪穴住居跡では全柱穴が中軸線からほぼ等距離の対称形に穿たれていることから、長方形プランとするのが妥当のように思われるものもある。

また、「間仕切り」のための施設として穿たれたと考えられる柱穴列がSI213で確認されている。

住居跡内の焼土堆積については、地山面にまで赤色の熱変化が生じる程強い火力を長期に亘って維持して出来た焼土堆積箇所と、弱い火力を短期あるいは長期に亘って維持して出来た

焼土堆積箇所、あるいは床面上での焚火と住居跡廃絶後の埋没過程における凹みを利用しての焚火が考えられる。本報告では、これらのことを念頭に置き、住居跡内の焼土堆積を「炉」と表記したもの、単に「焼土堆積」と表記したものがある。住居跡内に複数の炉が存在する例や、埋没過程に堆積した焼土のみ存在する例もあるが、「竪穴住居跡」の機能を考える上で重要である。

炉は、比較的良好な状態で検出されたSI012で地床炉と石組炉が検出されている以外、ほとんど地床炉である。

SI012では、長軸方向の一方に段が形成され、その反対方向に出入口と屋内貯蔵穴と考えられるピットが検出されている。出入口は住居跡内部にスロープと段が形成されているがSI037の場合は外部に張り出し部が付けられている。

住居跡プラン確認時とその後の精査により、竪穴住居跡の他遺構等との重複関係が明らかなものがいくつかある。それを列挙するとつぎのようになる。（矢印の方向に新しくなる。）

SI 037 → SI 012 → SK 013　　SI 034 → SI 016

SK 038 → SI 017 → SK 018

SI 230 → SI 220B　　SK 112 → SI 107

SI 230 → SKT 231

SKF 177, 178, 181, 182, 184 → SI 171

SI 128 → SI 147 → SI 123

SI 126 → SI 156　　SI 130 → SI 133

SKF 149 → SI 148

SK 146 → SI 148

SK 146 → SI 118 → SK 114

SK 129 → SI 118

SK 132 → SI 118

SI 126 → SI 157

SI 156 → SI 157

SI 156 → SK 159

SI 180 → SI 326 → SKT 317

SK 188 → SI 189

SK 188 → SI 323

SI 315 → SI 195

SK 197・SK 198 → SI 311

SI 312 → SK 313

これらの関係のうち、竪穴住居跡の重複関係に注目すると、「広場」を囲んで放射状に配列をなしている大型住居群の一部を構成するSI 180 ・ 170 ・ 150 が同じ地区のSI190・199・326 ・ 327 ・ 230 などあたかも「広場」を挟んで平行するような配列の住居跡群よりも古いことが明らかとなる。このことから平行に配列する大型住居の構築時には、放射状配列した時の「広場」を意識して平行配列したと推定することもできよう。

## 2　土坑・その他の遺構

本調査において土坑113基、フラスコ状土坑16基、陥し穴状遺構6基、土器埋設遺構5基、配石遺構3基、溝状遺構1条を検出した。以下、説明は次の条件のもとに記述する。各遺構は遺構毎に遺構番号順に記載し、全てに実測図を付した。図版は主要な遺構に限って収載した。遺構の新旧関係は全て切り合い関係によるものであり、竪穴住居跡との重複状況の詳細については前項で既述済みなのでここでは省略する。遺構の平面形は形態の基本形によって円形・楕円形・方形・不整形に分類し、全体を検出できなかった遺構については現存部分から推定しえる平面形態を記した。平面形の分類中、円形と楕円形は遺構の長径（長軸）と短径（短軸）の比率を参考にして、おおよそ比率が1.0～1.2を円形、1.3以上を楕円形とした。法量の単位は各数値に尤も適切と考えられるものを用いている。各遺構の説明文中、遺構との関係が明確なピット・礫・遺物の検出状況についてはその旨を記した。覆土の堆積状況は覆土全体の特徴についてのみ簡潔に触れている。

### （1）　土坑

**SK001**　（第4図）

MR 64に位置している。平面形は円形を呈しており、径97～98㎝、深さ20㎝である。底面は平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片が多量に混入している。遺物は出土しなかった。

**SK002**　（第4図、図版24）

MT 64に位置している。平面形は円形を呈しており、径1.05～1.24 m、深さ20㎝である。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片が多量に混入している。遺物は出土しなかった。

**SK004**　（第4図）

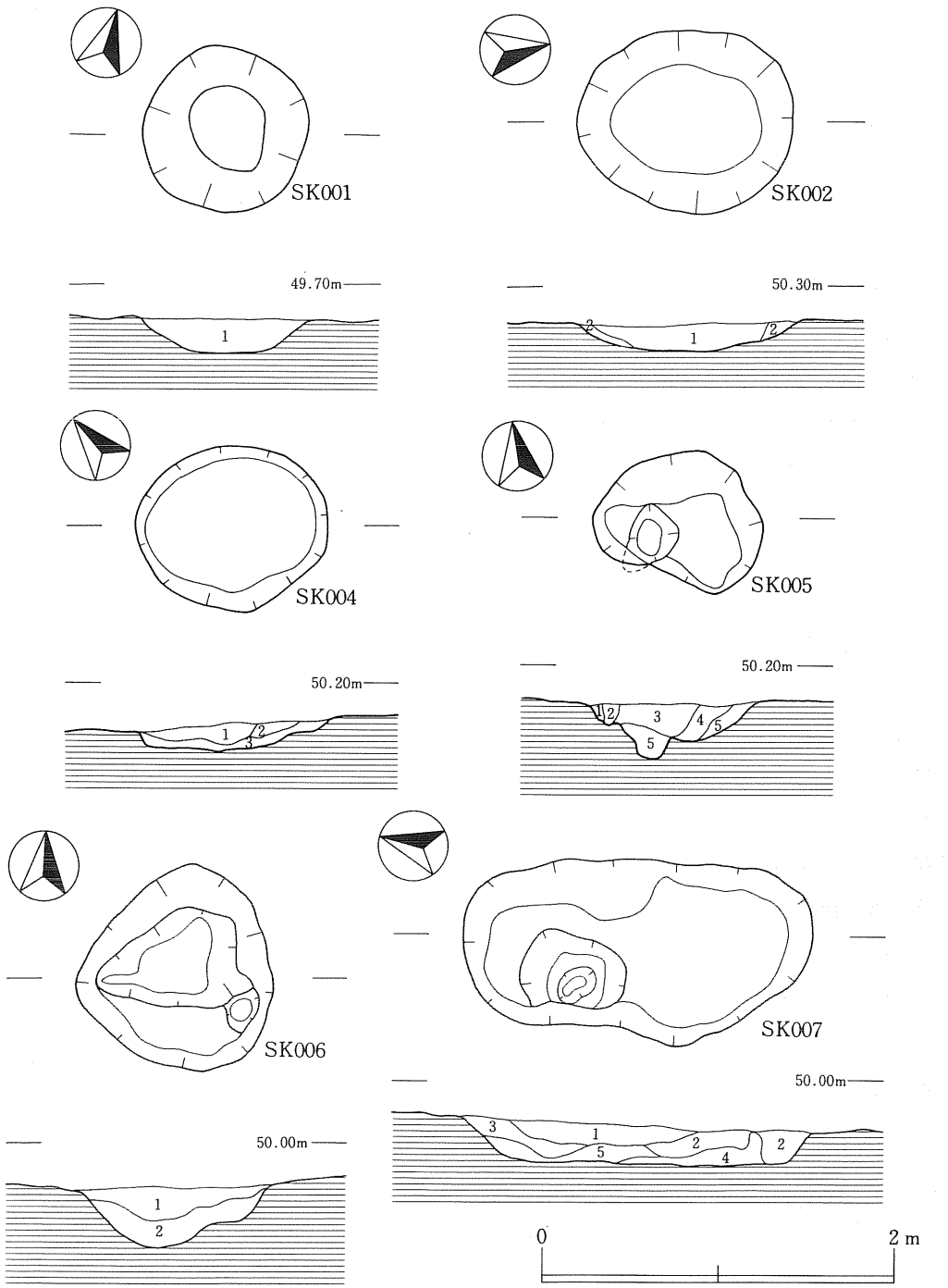
MT 62・MT 63に位置している。平面形は円形に呈しており、径0.96～1.11 m、深さ11㎝である。底面は凹凸があり、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片を多量に混入している。遺物は出土しなかった。

**SK005**　（第4図）

MN 56に位置している。平面形は不整形を呈しており、長軸95㎝、短軸72㎝、深さ25㎝である。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。底面にて25×40㎝の楕円形を呈する深さ17㎝のピットを検出した。覆土中に地山土ブロックが多量に混入している。遺物は出土しなかった。

**SK006**　（第4図）

MQ 54に位置している。平面形は円形を呈しており、径1.12～1.28 m、深さ42㎝である。




SK001　1　黒色土　10YR1.7/1　炭化物多量に混入
SK004　1　黒色土　10YR1.7/1　炭化物多量に混入
　　2　暗褐色土　10YR3/3
　　3　明黄褐色土　10YR7/6
SK006　1　黒褐色土　10YR3/2
　　2　にぶい黄褐色土　10YR5/4
SK002　1　黒色土　10YR1.7/1　炭化物多量に混入
　　2　明黄褐色土　10YR6/6
SK005　1　褐色土　10YR4/4
　　2　撹乱
　　3　黒褐色土　10YR3/2
　　4　黒褐色土　10YR3/2
　　5　にぶい黄褐色土　10YR4/3
SK007　1　黒褐色土　10YR3/2
　　2　暗褐色土　10YR3/3
　　3　暗褐色土　10YR3/3
　　4　黄橙色土　10YR8/8
　　5　明黄褐色土　10YR6/8

第4図　SK001・002・004～007土坑

底面は凹凸があり、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土は凹レンズ状を呈する堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

SK007　（第4図）

MQ 53・MQ 54に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2 m、短径1.05 m、深さ24 cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。北西壁際にて40 × 60 cmの楕円形を呈する深さ30 cmのピットを検出した。覆土中に地山土ブロックが多量に混入している。遺物は出土しなかった。

SK008　（第5図）

MN 53に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.88 m、短径1.4 m、深さ11 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK009　（第5図）

MN 52に位置している。平面形は円形を呈しており、径1 ～ 1.18 m、深さ9 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。底面にて径20 cm、深さ5 ～ 7 cmのピット2個を検出した。覆土中に地山土ブロックを多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK011　（第5図）

ML 53に位置している。平面形は円形を呈しており、径1.15 ～ 1.43 m、深さ31 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に地山土ブロックを多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK013　（第5図）

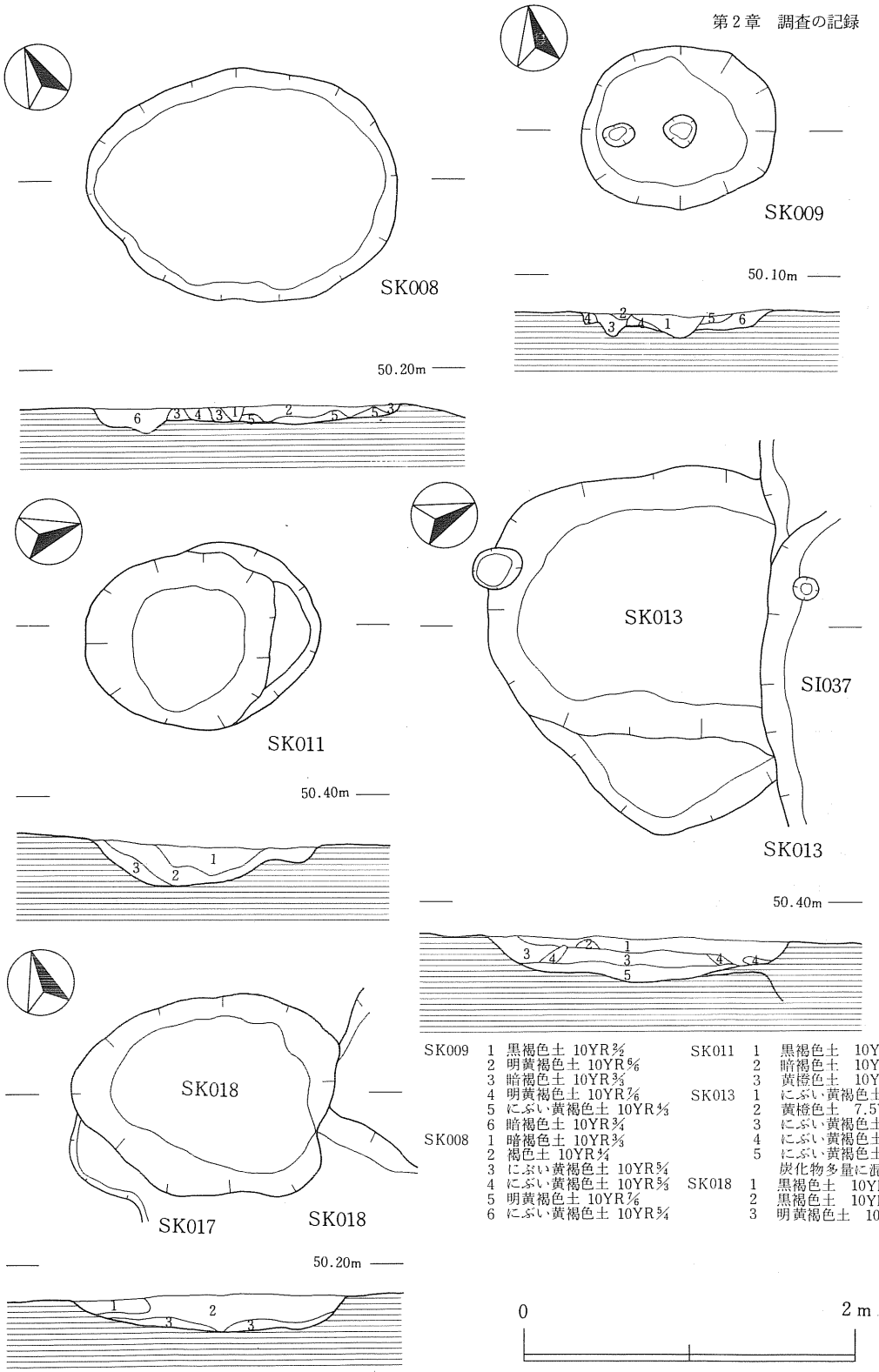
MJ 52に位置し、SI 012より新しい。平面形は円形を呈しており、径1.66 ～ 1.85 m、深さ19 cmである。底面は平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。南西壁際に径25 cm、深さ20 cmのピットを検出した。覆土中に炭化物細片を含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK018　（第5図）

MM 50・MM 51に位置し、SI 017より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径1.58 m、短径1.21 m、深さ15 cmである。底面は平坦で、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK019　（第6・42図）

MP 50・MP 51に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.33 m、短径88 cm、深さ15 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土は凹レンズ状を呈する堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は縄文土器片が出土した。第42図63・64はいずれも




SK009
1 黒褐色土 10YR3/2
2 明黄褐色土 10YR6/6
3 暗褐色土 10YR3/3
4 明黄褐色土 10YR7/6
5 にぶい黄褐色土 10YR4/3
6 暗褐色土 10YR3/4

SK008
1 暗褐色土 10YR3/3
2 褐色土 10YR4/4
3 にぶい黄褐色土 10YR5/4
4 にぶい黄褐色土 10YR5/3
5 明黄褐色土 10YR7/6
6 にぶい黄褐色土 10YR5/4

SK011
1 黒褐色土 10YR3/2
2 暗褐色土 10YR3/4
3 黄橙色土 10YR7/8

SK013
1 にぶい黄褐色土 10YR5/4
2 黄橙色土 7.5YR8/8
3 にぶい黄褐色土 10YR4/3
4 にぶい黄褐色土 10YR5/4
5 にぶい黄褐色土 10YR5/3
炭化物多量に混入

SK018
1 黒褐色土 10YR3/2
2 黒褐色土 10YR3/2
3 明黄褐色土 10YR6/6

第５図　SK008・009・011・013・018土坑

網目状の撚糸文が施文されている。

SK020　（第6図、図版24）

MI 51に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2 m、短径1.52 m、深さ13 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土は凹レンズ状を呈する堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK021　（第6図）

MQ 54に位置している。平面形は円形を呈しており、径63～65 cm、深さ20 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土中に地山土ブロックが多量に混入している。遺物は出土しなかった。

SK026　（第6・38・84図）

MA 48・MA 49・MB 49に位置している。平面形は不整形を呈しており、長軸3.29 m、短軸2.39 m、深さ27 cmである。底面は凹凸があり、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土中に地山土ブロックが多量に混入している。遺物は縄文土器片と石製品1点（第84図334）が出土した。第38図の21は深鉢形土器の底部付近で、斜縄文が施されている。334は棒状の石製品で、軟質の凝灰岩の特に側面を磨き、両端を突出させたものである。

SK027　（第6・57図）

MB 48・MC 48に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.28 m、短径98 cm、深さ8 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片を多量に含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片と篦状石器1点（第57図119）が出土した。

SK028　（第6図）

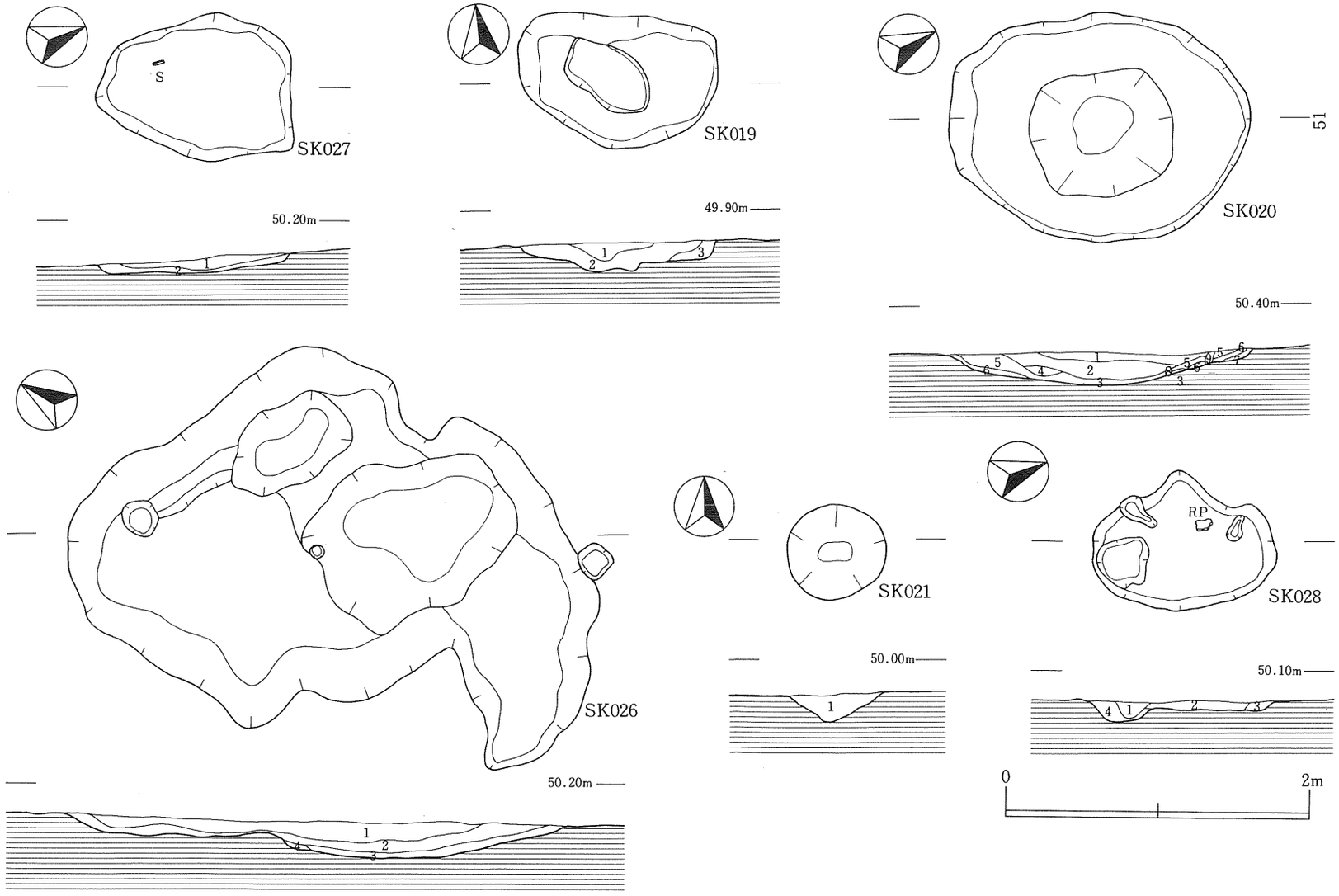
MD 47に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.22 m、短径93 cm、深さ7 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片を多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK029　（第7図）

MC 45・MC 46に位置している。平面形は不整形を呈しており、長軸1.24 m、短軸89 cm、深さ10 cmである。底面は平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土中に地山土ブロックが多量に混入している。遺物は出土しなかっな。

SK033　（第7・57図）

MC 41・MD 41に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.8 m、短径1.23 m、深さ8 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。底面から径10～35 cm、深さ3～15 cmのピット6個、底面北寄り部分より縄文土器片を検出した。覆土中に地山土ブロックが多量に混入している。遺物はごく少量の縄文土器片と石錐2点（第57図120・121）が出




SK027　1　暗褐色土　10YR3/3　炭化物多量に混入
　　2　黄橙色土　10YR7/8
SK019　1　黒褐色土　10YR2/2
　　2　にぶい黄褐色土　10YR5/3
　　3　にぶい黄褐色土　10YR5/4
SK026　1　黒褐色土　10YR3/1
　　2　黒褐色土　10YR3/1
　　3　黒褐色土　10YR3/1
　　4　暗褐色土　10YR3/3
SK028　1　暗褐色土　10YR3/3
　　2　暗褐色土　10YR3/3
　　3　黄橙色土　10YR7/8
　　4　黄橙色土　10YR8/6
SK020　1　黒褐色土　10YR3/2
　　2　黒褐色土　10YR3/3
　　3　にぶい黄褐色土10YR5/3
　　4　黒褐色土　10YR2/2
　　5　暗褐色土　10YR3/4
　　6　黄褐色土　10YR5/8
　　7　黄褐色土　10YR5/8
　　8　黄褐色土　10YR5/8
　　9　撹乱
SK021　1　黒褐色土　10YR3/2

第６図　SK019～021・026～028土坑

土した。石錐はいずれも菱形で小さいが厚みのある剥片の先端部に小さな錐部を作出したものである。

SK035　（第7図）

MJ 49・MJ 50に位置している。平面形は円形を呈しており、径1.59～1.98 m、深さ9 cmである。底面は平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。底面に径20～25 cm、深さ18～35 cmのピット2個を検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK036　（第7図）

MJ 49に位置している。平面形は円形を呈しており、径86～90 cm、深さ15 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中には炭化物細片を含み、5 cm大～20 cm大の礫4個を検出した。遺物は出土しなかった。

SK038　（第7図）

MK 50に位置し、SI 017より古い。平面形は円形を呈しており、径79～83 cm、深さ14 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片を多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK039　（第8図）

MB 49・MB 50・MC 50に位置している。平面形は不整形を呈しており、長軸1.75 m、短軸1.23 m、深さ16 cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。覆土はその堆積状況から自然堆積とは考えにくく、人為的埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。

SK043　（第8図）

LS 46に位置している。平面形は円形を呈しており、径72～73 cm、深さ28 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は地山土ブロック混入の割合が高い。遺物は出土しなかった。

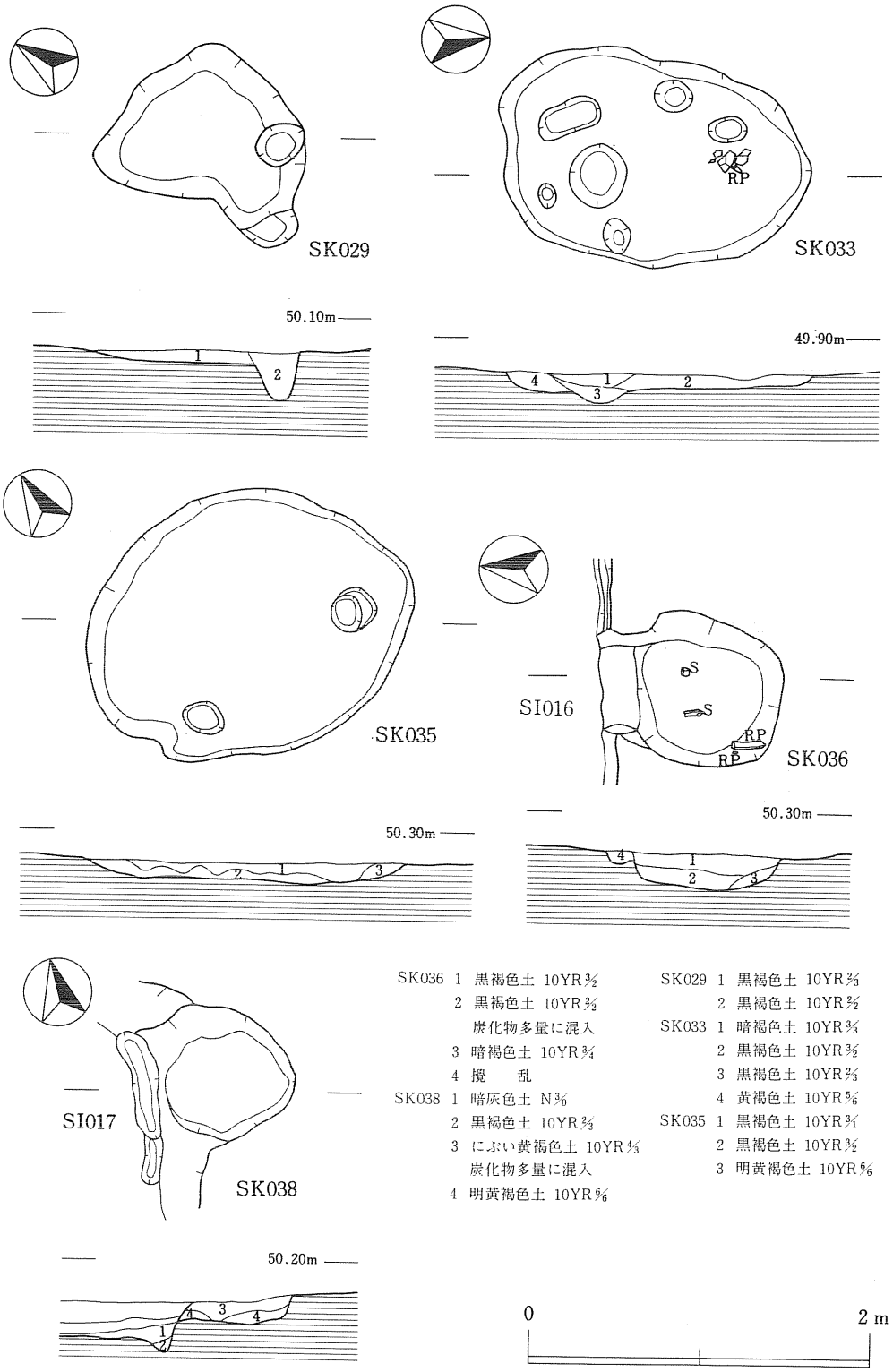
SK100　（第8・9図、図版24）

NF 33・NG 33に位置し、SK 103より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径1.59 cm、短径1.17 cm、深さ20 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。10 cm大～15 cm大の礫4個がいずれも底面より5～16 cm浮いた状態で検出された。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク11点が出土した。

SK101　（第8図、図版25）

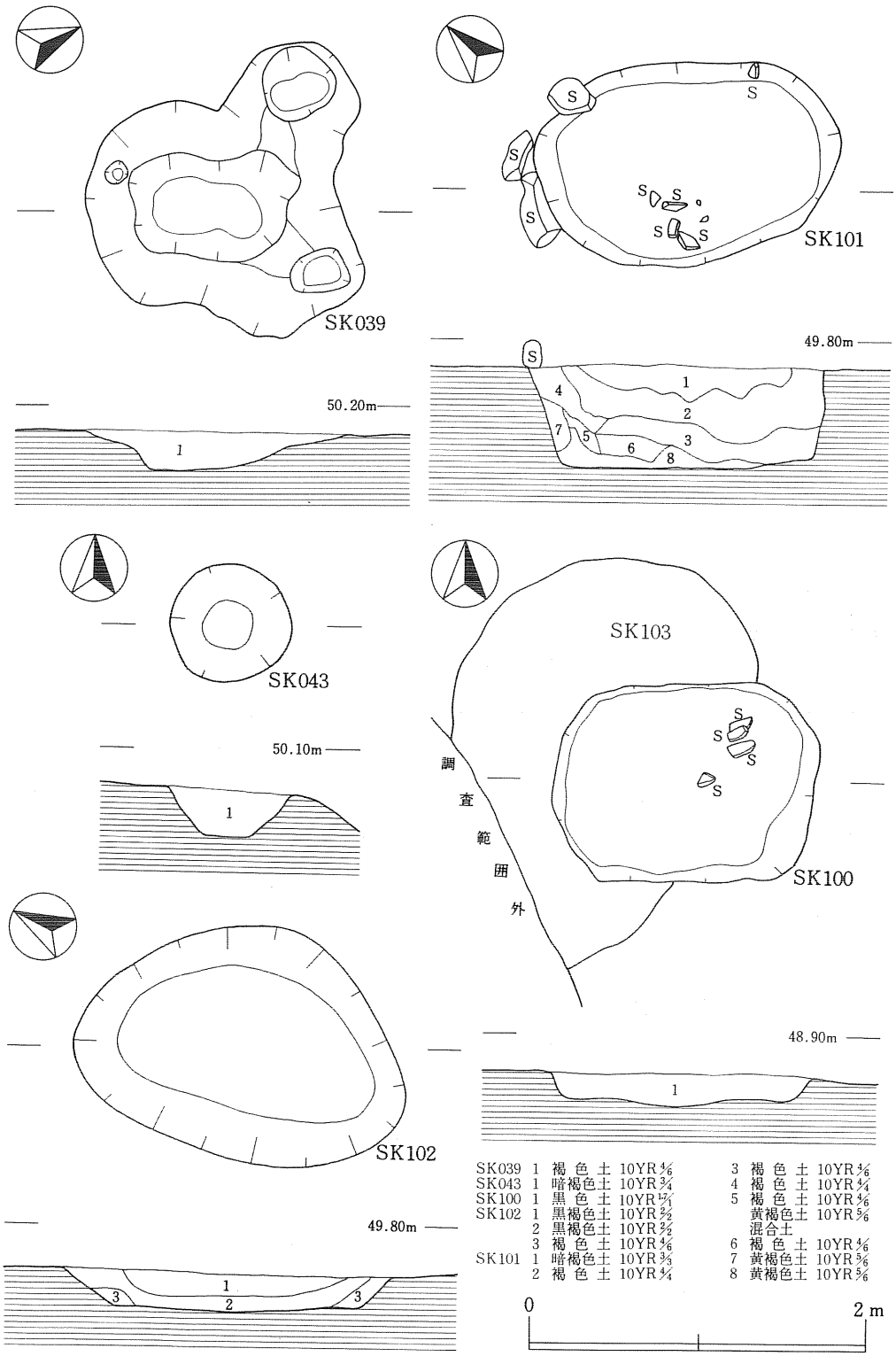
ND 44に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.82 m、短径1.25 m、深さ60 cmである。底面は平坦で堅くしまっており、壁は外傾している。遺構北東部上面プランに接して、20 cm大～40 cm大の礫が3個検出された。覆土中に炭化物細片・縄文土器片・礫・フレイクを含んでいる。覆土はその堆積状況から自然堆積とは考えにくく、人為的に埋められたものであろう。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク2点が出土した。

SK102　（第8図）




SK036　1　黒褐色土　10YR3/2
　　2　黒褐色土　10YR3/2
　　炭化物多量に混入
　　3　暗褐色土　10YR3/4
　　4　撹　　乱
SK038　1　暗灰色土　N3/0
　　2　黒褐色土　10YR3/3
　　3　にぶい黄褐色土　10YR4/3
　　炭化物多量に混入
　　4　明黄褐色土　10YR6/6
SK029　1　黒褐色土　10YR3/3
　　2　黒褐色土　10YR3/2
SK033　1　暗褐色土　10YR3/3
　　2　黒褐色土　10YR3/2
　　3　黒褐色土　10YR2/3
　　4　黄褐色土　10YR5/6
SK035　1　黒褐色土　10YR3/1
　　2　黒褐色土　10YR3/2
　　3　明黄褐色土　10YR6/6

第7図　SK029・033・035・036・038土坑




第8図　SK039·043·100～102土坑

NB 47・NB 48 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 2 m、短径 1.41 m、深さ 22 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土はその堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

SK103　（第 8・9 図）

NG 33 に位置し、SK 100 より古い。平面形は一部調査区外に延びているものの楕円形を呈すると考えられ、長径（現存長）2.26 m、短径 1.74 m、深さ 27 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。10 cm大の礫 1 個が底面より 7 cm浮いた状態で検出された。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はフレイクが 6 点出土したのみである。

SK104　（第 9・57 図）

ND 43 に位置し、SK 108 より新しい。平面形は円形を呈しており、径 1.73～1.93 m、深さ 71 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片・縄文土器片をわずかに含んでいる。遺物は少量の縄文土器片と彫刻刀形石器 1 点（第 57 図 122）、フレイク 18 点が出土した。彫刻刀形石器はプラン確認面より出土し断面は多角形をした分厚い剝片の両先端に数回の加撃でもって彫刀面を作出したものである。

SK106　（第10・38図、図版26・40）

ND 40・ND 41 に位置し、SK 109 より新しい。平面形は円形を呈していたと考えられ、径 2.33～2.55 m、深さ 26 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。遺構のほぼ中央に 25 cm～45 cm大の礫 1 個があり、周囲に 2 個体分の土器を検出した。覆土中に焼土粒子・炭化物細片・礫・縄文土器片を含んでいる。遺物は縄文土器とフレイク 1 点が出土した。第 38 図 22 は器高 52 cmに復元される大型の深鉢である。ゆるやかに外反する口縁部を有し、わずかに膨らんだ体部からなだらかに底部にすぼむ。L $\{^{R}_{R}$ 縄文が外面全体・口唇部・口頸部内面に施されている。

SK108　（第 9 図）

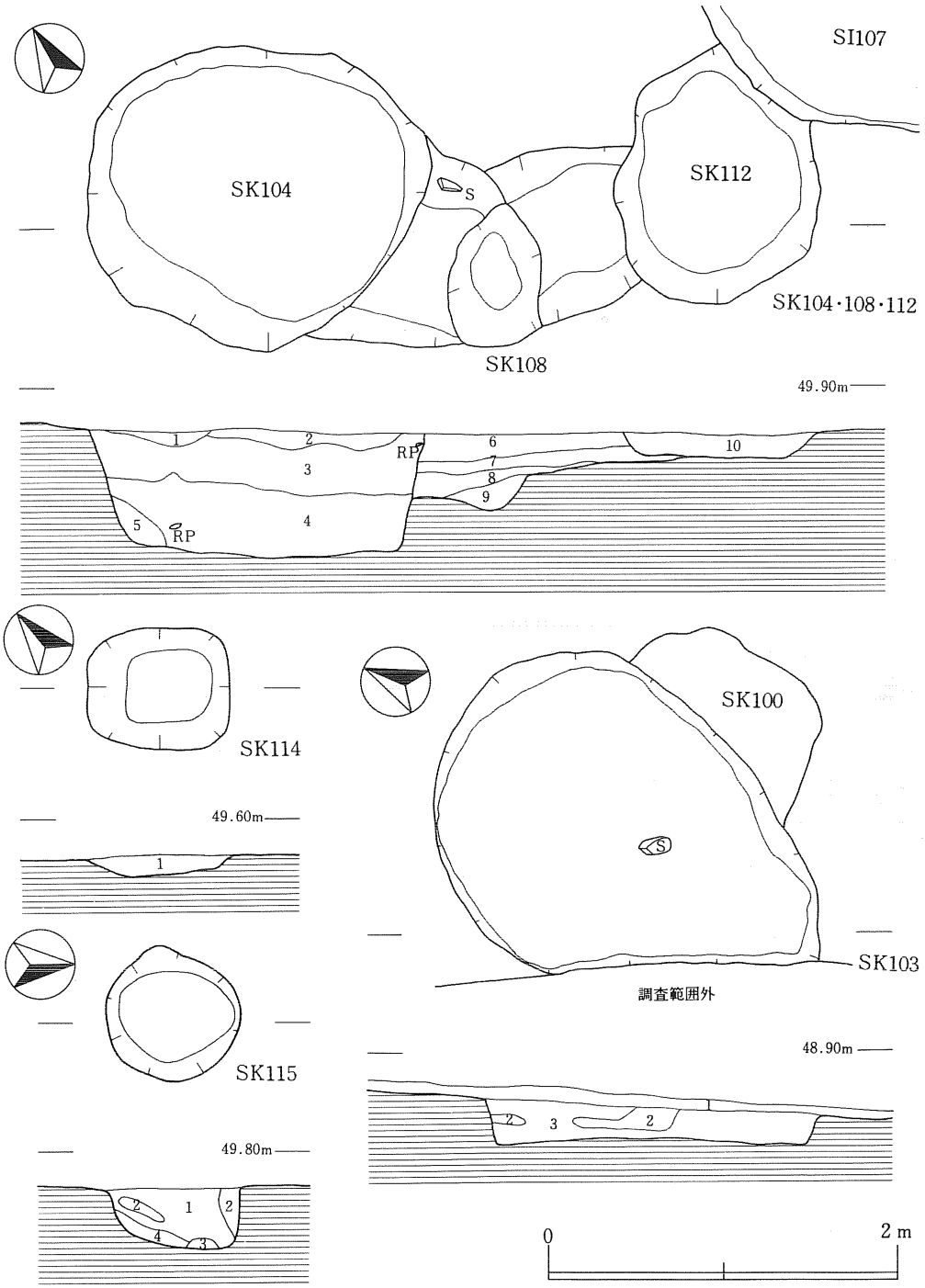
NC 43・ND 43 に位置し、SK 104・SK 112 より古い。平面形は不整形を呈しており、長軸（現存長）1.25 m、短軸 1.04 m、深さ 61 cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK109　（第 10 図、図版 26）

ND 41 に位置し、SK 106 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.7 m、短径 1.1 m、深さ 24 cmである。底面は平坦で、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に焼土粒子・炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

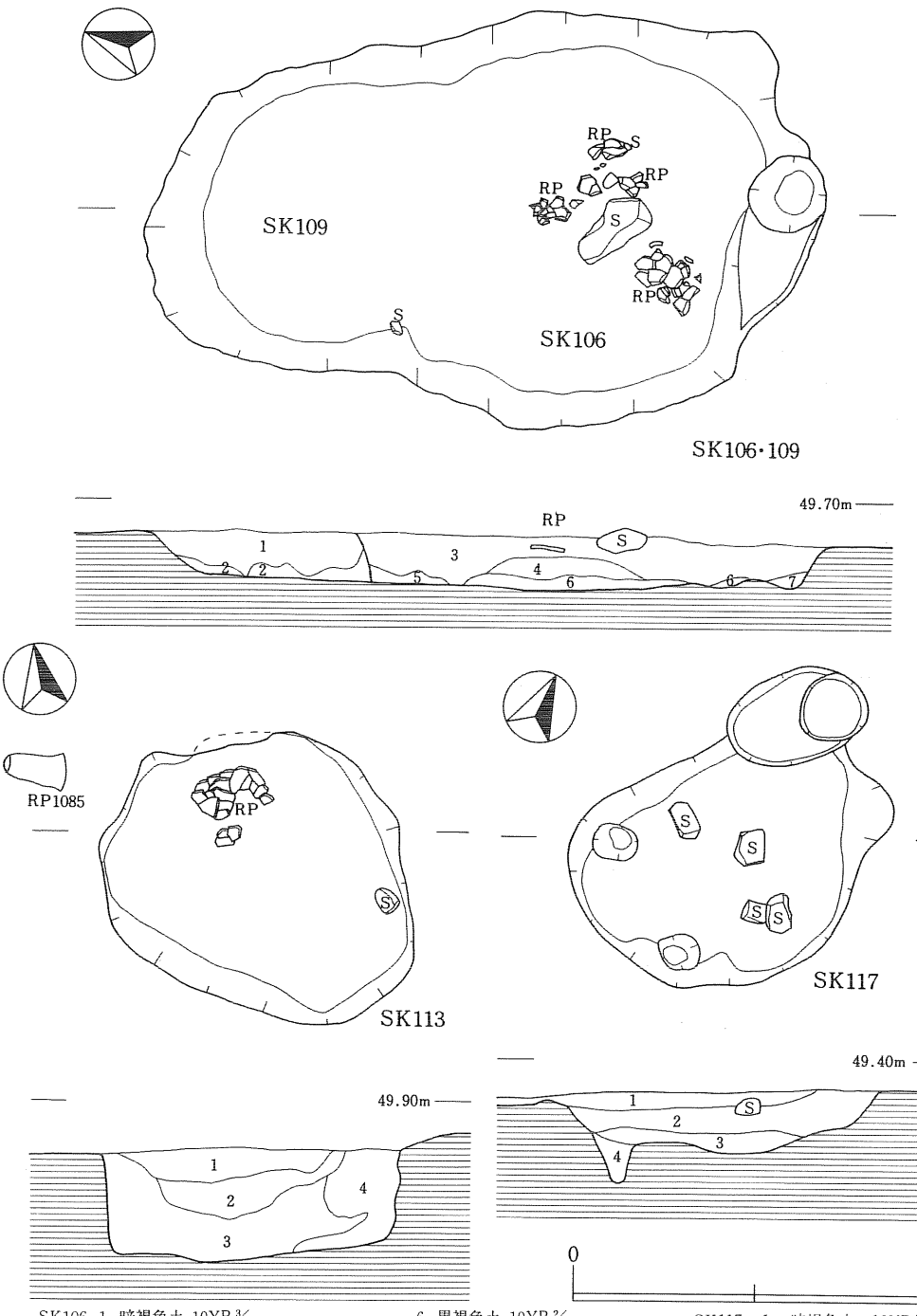
SK112　（第 9 図）

NC 43 に位置し、SK 108 より新しく、SI 107 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.45 m、短径 1.17 m、深さ 16 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細




SK104　1　黒色土　10YR3/1
108　2　暗褐色土　10YR3/4
112　3　褐色土　10YR4/4
4　褐色土　10YR4/4
5　明黄褐色土　10YR5/6
6　暗褐色土　10YR3/4
7　褐色土　10YR4/4
8　褐色土　10YR4/4
9　褐色土　10YR4/6
10　暗褐色土　10YR3/4
SK114　1　黒褐色土　7.5YR3/2
115　1　褐色土　7.5YR4/4　炭化物多量に混入
2　明褐色土　7.5YR5/8
3　褐色土　7.5YR4/6
4　明褐色土　7.5YR5/8 ｝混合土
暗褐色土　7.5YR3/4 ｝
SK103　1　暗褐色土　10YR3/4
2　褐色土　10YR4/4
3　暗褐色土　10YR3/4

第9図　SK103・104・108・112・114・115土坑




SK106 1 暗褐色土 10YR3/4
109 2 褐 色 土 10YR4/6
3 暗褐色土 10YR3/4
4 暗褐色土 10YR3/3
5 褐 色 土 10YR4/6
暗褐色土 10YR3/4 } 混合土

SK113 6 黒褐色土 10YR2/3
7 黒褐色土 10YR2/3
1 黒褐色土 7.5YR3/2
2 褐色土 7.5YR4/6
黒褐色土 7.5YR3/2 } 混合土
3 褐色土 7.5YR4/6
4 褐色土 7.5YR3/4

SK117 1 暗褐色土 10YR3/4
2 暗褐色土 10YR3/4
3 褐色土 10YR4/4
4 褐色土 10YR3/4

第10図　SK106・109・113・117土坑

片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK113　（第10・57・98図）

NG 40に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.96 m、短径1.59 m、深さ24 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。プラン確認面において縄文土器1個体分が出土しており、遺構外北東部30cmには縄文土器深鉢完形品（RP1085＝第98図157）が出土している。覆土中に焼土粒子・炭化物細片・縄文土器片をわずかに含んでいる。遺物は縄文土器と篦状石器の破片1点、削器2点（第57図123・124）、フレイク58点が出土した。

SK114　（第9図）

NE 37に位置し、SI 118より新しい。平面形は方形を呈しており、一辺が70～82 cm、深さ15 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片を多量に含み、壁面は焼けている。遺物は出土しなかった。

SK115　（第9図）

NE 40に位置している。平面形は円形を呈しており、径72～78 cm、深さ34 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片を多量に含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク7点が出土している。

SK117　（第10・57・58・75～77図、図版26）

NE 37に位置し、SI 118より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径1.78 m、短径1.32 m、深さ18 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片・縄文土器片をわずかに含んでいる。遺物は少量の縄文土器片と篦状石器3点（第57図125～127）、削器2点（第58図128・129）、半円状扁平打製石器1点（第75図284）、石錘1点（第76図296）、凹石1点（第77図302）、フレイク24点が出土している。篦状石器の125は半円状扁両面調整、126・127は両面調整で、125の刃部側面形は片刃、126・127は両刃を呈する。半円状扁平打製石器は多孔質の石材（凝灰岩）を素材としている。刃部の擦りは顕著ではない。石錘は左右とも両面から打ち欠いている。凹石は1面に磨面をもつ。

SK119　（第11図）

NE 35に位置しているる。平面形は楕円形を呈しており、長径2.15 m、短径1.25 m、深さ13 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。遺構東部にて25 cm～35 cm大の礫1個が底面からわずかに浮いた状態で検出された。覆土中に炭化物細片を含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク1点が出土した。

SK120　（第11図、図版26）

ND 35・NE 35に位置し、SI 135より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径1.97 m、短径1.57 m、深さ20 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に焼土および炭化物が

層を形成しており、これらは埋没過程の中で投棄されたものと考えられる。炭化物は堅果類の果皮と思われ、果実は含まれていない。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK121　（第 11 図）

NE 39 ・NF 39 ・NE 40 ・NF 40 に位置し、SI 116 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.06 m、短径 1.55 m、深さ 31 ㎝である。底面は凹凸があり、壁は外傾している。覆土中に 10 ㎝～ 20 ㎝大の礫 1 個を含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK122　（第 11 図）

NF 39 に位置し、SK 140 より新しい。平面形は円形を呈しており、径 2.47 ～ 2.7 m、深さ 47 ㎝である。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片を多量に含んでおり、一部に壁の崩壊土が見られる。遺物は出土しなかった。

SK124　（第 12 ・ 26 ・ 75 図、図版 27）

NG 41 に位置し、SK 131 より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.97 m、短径 1.57 m、深さ 51 ㎝である。底面は凹凸があり、壁は外傾している。遺構南部上面にて 20 ㎝大の礫 1 個が検出された。覆土中に炭化物細片・縄文土器を多量に含む部分が複数箇所に認められ、埋没過程の中で何度か炭化物・縄文土器が投げ込まれたものであろう。遺物は縄文土器と半円状土扁平打製石器 1 点（第 75 図 285）が出土した。半円状扁平打製石器は欠損しているが刃部以外の 3 辺にも鋭利な打ち欠きを施している。刃部には部分的に擦りが認められる。

SK125　（第 12 図）

NF 34 ・NF 35 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.9 m、短径 1.2 m、深さ 5 ～ 8 ㎝である。底面は凹凸があり、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は半円状扁平打製石器 1 点が出土した。半円状扁平打製石器は多孔質の石材を用いており、擦りの入る刃部は分厚い。

SK127　（第 12 図、図版 27）

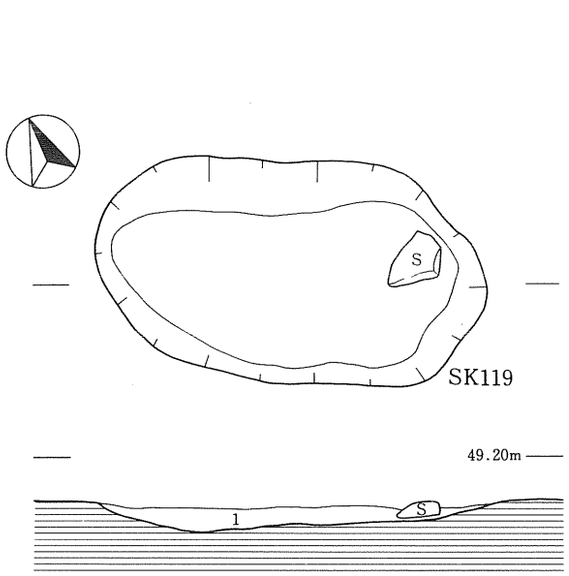
NF 34 ・NF 35 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.9 m、短径 1.2 m、深さ 8 ㎝である。底面は凹凸があり、壁は外傾している。南壁にて 5 ㎝～ 25 ㎝大の礫 1 個を検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

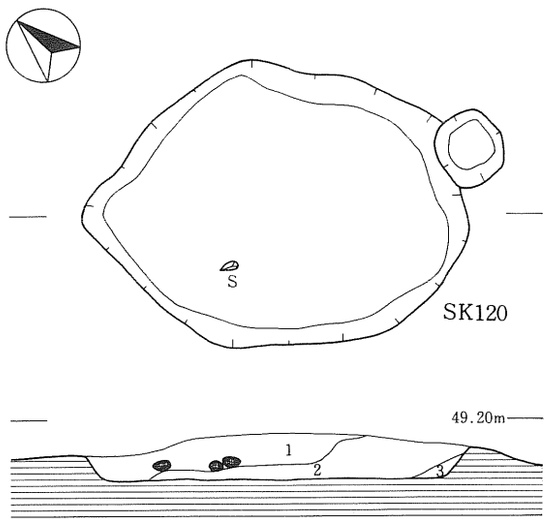
SK129　（第 12 図）

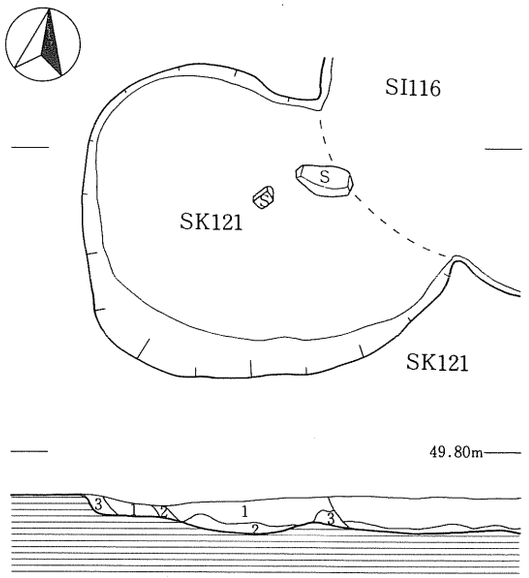
NE 38 に位置し、SI 118 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.89 m、短径 1.49 m、深さ 33 ㎝である。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に 5 ㎝～ 25 ㎝大の礫 1 個と炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はフレイク 2 点が出土したのみである。

SK132　（第 12 図）

NE 37 ・NE 38 に位置し、SI 118 より古い。平面形は円形を呈しており、径 1.07 ～ 1.19 m、



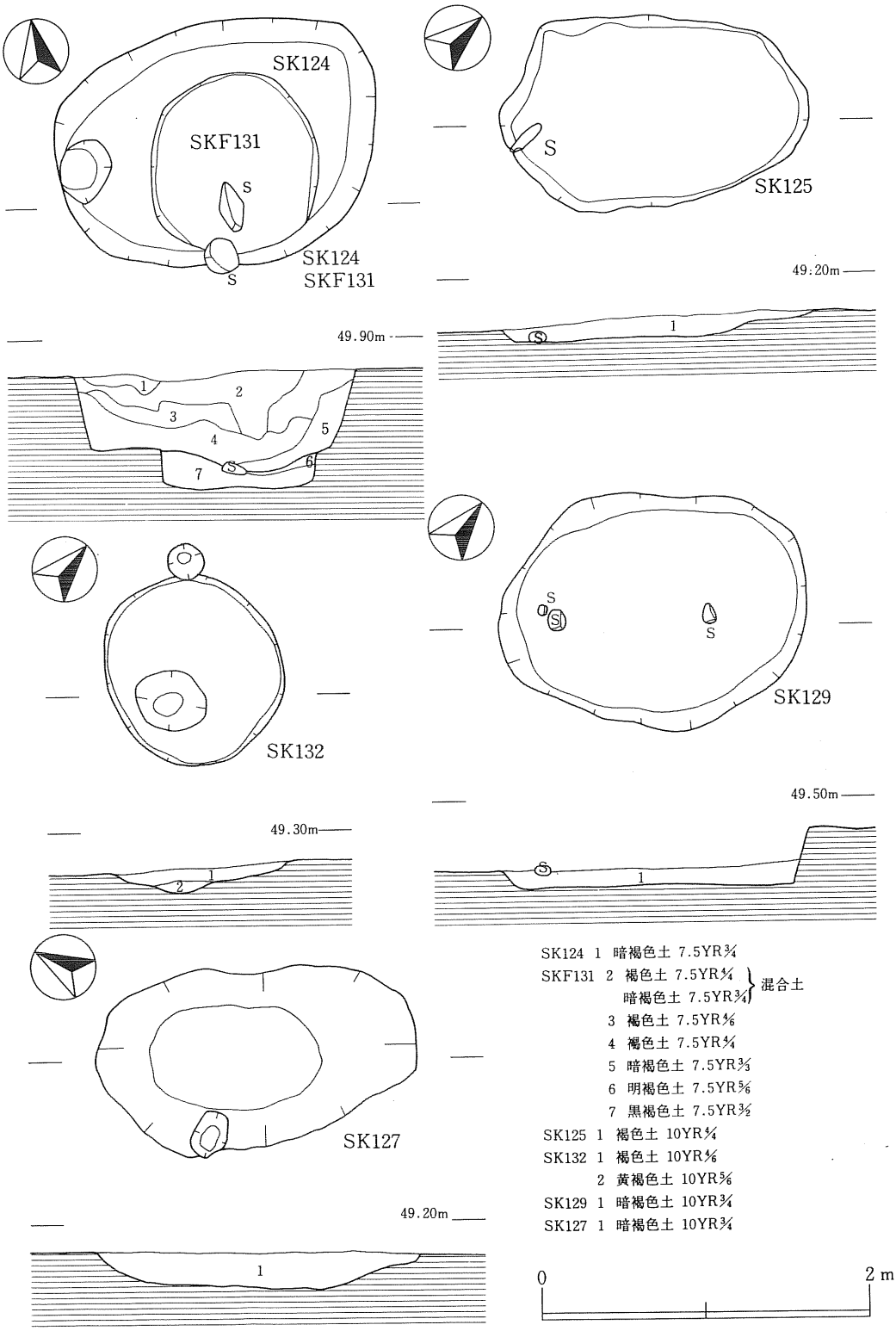



SK119　1　褐色土　10YR4/4
SK120　1　褐色土　10YR4/4
　　2　褐色土　10YR4/6
　　3　黄褐色土　〃　5/6
SK121　1　黒褐色土　7.5YR3/1
　　2　褐色土　7.5YR4/4　｝混合土
　　　黒褐色土　7.5YR3/1　｝
　　3　褐色土　7.5YR4/4
SK122　1　褐色土　10YR4/4
　140　2　にぶい黄褐色土　10YR5/4
　141　3　黄褐色土　10YR5/6
　　4　にぶい黄褐色土　10YR5/4
　　5　暗褐色土　7.5YR3/4
　　6　褐色土　10YR4/6

0　2 m

第11図　SK119･120～122･140･141土坑

61、 62




第12図　SK124・125・127・129・132土坑、SKF131フラスコ状土坑

深さ 11 cmである。底面は凹凸があり、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK134　（第 13 ・ 58 図、図版 27）

ND 39 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.27 m、短径 83 cm、深さ 37 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片・縄文土器片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片と小型篦状石器 1 点（第 58 図 130）、フレイク 4 点が出土した。

SK136　（第 13 図、図版 28）

NE 36 に位置し、SK 139 より新しく、SI 135 より古い。平面形は円形を呈しており、径 89 ～ 95 cm、深さ 34 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK137　（第 13 図）

NE 36 ・NF 36 に位置し、SI 148 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.44 m、短径 1.04 m、深さ 20 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。西壁際にて径 25 cm、深さ 15 ～ 25 cmのピット 2 個を検出した。覆土中に炭化物細片を多量に含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK138　（第 13 ・ 58 図）

NG 36 ・NG 37 に位置し、SI 143 より新しく、SI 148 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.42 m、短径 1.7 m、深さ 15 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に焼土ブロック・炭化物細片・縄文土器片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片と石鏃 1 点（第 58 図 131）、削器 1 点（第 58 図 132）が出土した。石鏃は側面形がやや湾曲している。

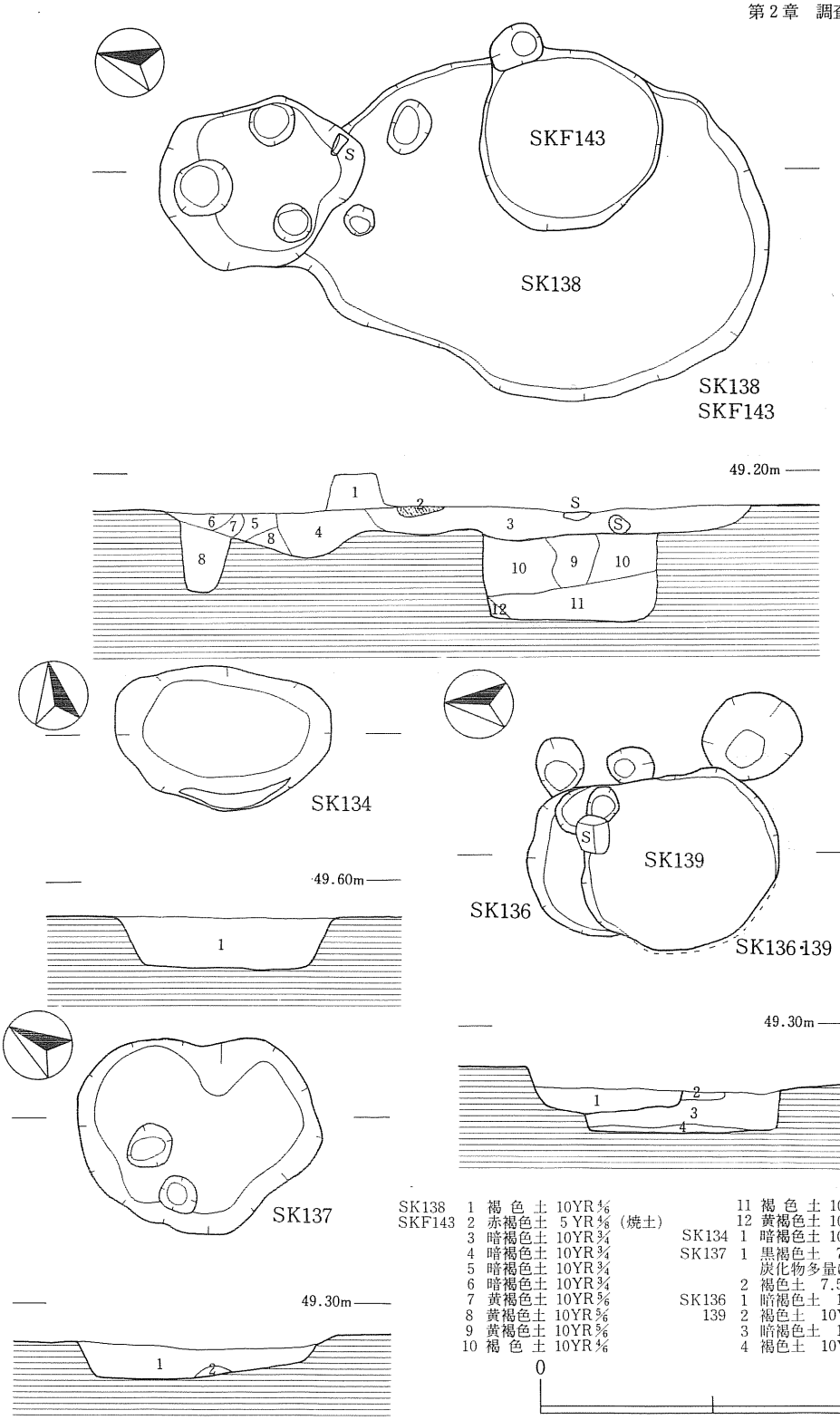
SK139　（第 13 図、図版 28）

NE 35 ・NE 36 に位置し、SK 136 ・SI 135 より古い。平面形は円形を呈しており、径 1.02 ～ 1.13 m、深さ 25 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK140　（第 11 図）

NE 39 ・NF 39 に位置し、SK 141 より新しく、SK 122 より古い。平面形は重複のため定かではないが、円形を呈していたと考えられ、径 1.28 ～ 1.42 m、深さ 35 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は堆積状況から人為的埋土と考えられる。遺物は半円状扁平打製石器 1 点が出土した。

SK141　（第 11 図）




第13図　SK134･136～139土坑

NE 39 に位置し、SK 140 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.74 m、短径 1.3 m、深さ 31 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK142　（第 14 ・ 38 図、図版 29）

NA 41 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.8 m、短径 1.3 m、深さ 6 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。プラン確認面において南東壁上面に縄文土器 1 個体分と 10 cm大～ 20 cm大の礫 1 個、ほぼ中央に縄文土器 1 個体分と 5 cm～ 10 cm大の礫 2 個が検出された。中央やや東寄りに径 30 cm、深さ 17 cmのピットを検出した。覆土中に焼土粒子・炭化物細片・縄文土器片を多量に含んでいる。遺物は縄文土器が出土した。第 38 図 23 は斜縄文が施文された深鉢形土器下半部でる。 丸みを帯びてすぼみ、 底部末端が外方に向かって張り出している。

SK144　（第 14 図）

ND 32 ・NE 32 ・ND 33 ・NE 33 に位置している。 平面形は隅丸方形を呈しており、 一辺 2.16 ～ 2.18 m、深さ 22 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。東壁際にて径 40 cm、深さ 14 cmのピットを検出した。覆土中に炭化物細片を含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK145　（第 15 図）

NE 35 ・NF 35 に位置し、 SI 135 ・SI 148 より古い。 平面形は不整形を呈しており、 長軸 1.91 m、短軸 1.16 m、深さ 9 cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。西壁際と北壁際にて径 20 cm、深さ 7 ～ 13 cmのピットを検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

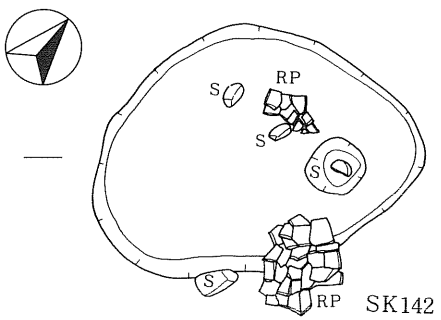
SK146　（第 14 図）

NE 37 ・NF 37 に位置し、SI 118 ・SI 148 より古い。平面形は円形を呈しており、径 1.2 ～ 1.23 m、深さ 22 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。南壁・北壁・西壁際にて径 25 cm、深さ 12 ～ 36 cmのピットを検出した。覆土はその堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

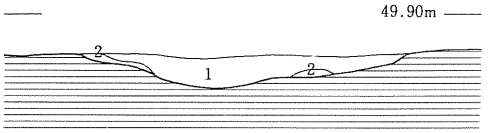
SK152　（第 15 図）

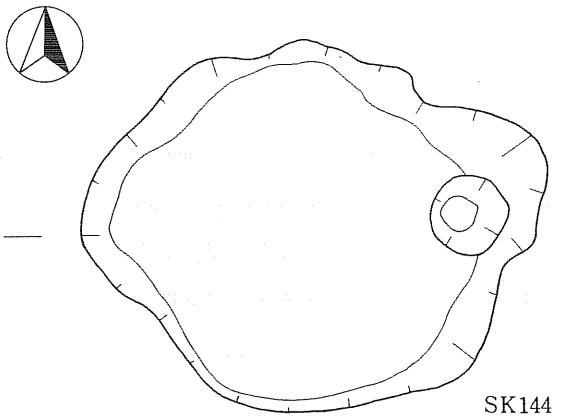
NA 39 ・NB 39 ・NA 40 ・NB 40 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.48 m、短径 1.62 m、深さ 27 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片・縄文土器片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク 2 点が出土した。

SK154　（第 14 図）

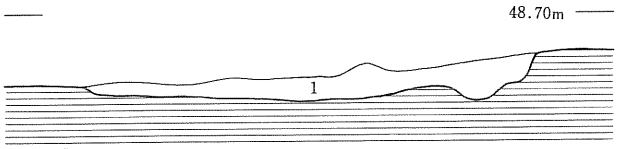


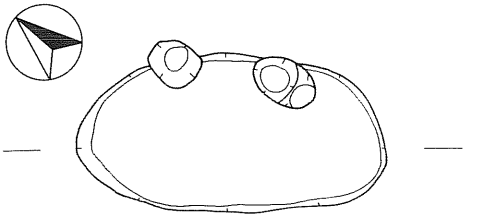

SK142



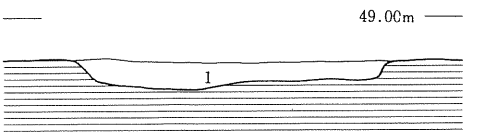



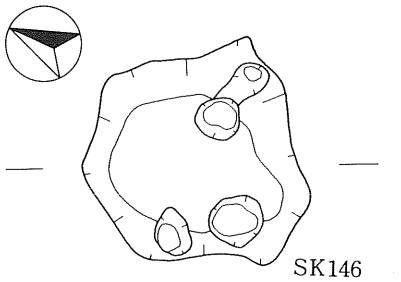
SK144



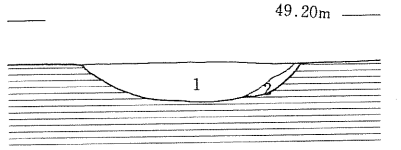



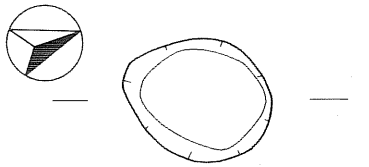
SK158



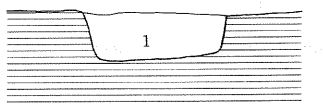



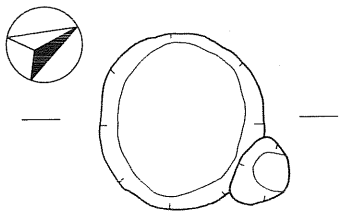
SK146



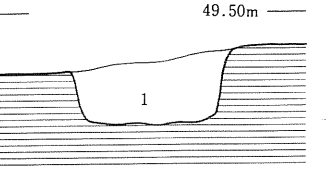



SK154

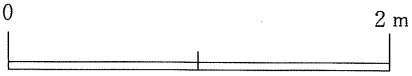


SK159




SK142　1　黒褐色土　7.5YR3/2　炭化物・焼土・土器多量に混入
　　2　暗褐色土　7.5YR3/4
SK146　1　褐　色　土　10YR4/4
　　2　黄褐色土　10YR5/6
SK144　1　暗褐色土　7.5YR3/4
SK154　1　暗褐色土　7.5YR3/3
SK158　1　黒褐色土　7.5YR3/2
SK159　1　暗褐色土　7.5YR3/3　炭化物・焼土・土器多量に混入




第14図　SK142・144・146・154・158・159土坑

NC 35 に位置し、SI 126 に伴う。平面形は楕円形を呈しており、長径 80 ㎝、短径 66 ㎝、深さ 27 ㎝である。底面は平坦で堅くしまっており、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片・縄文土器片を含んでいる。遺物は少量の縄文土器片とフレイク 2 点が出土した。

SK155　（第 15 ・ 42 ・ 58 ・ 75 ～ 77 ・ 82 ・ 84 図）

MT 37 に位置し、SI 150 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 3.04 m、短径 2.51 m、深さ 33 ㎝である。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。ほぼ中央にて縄文土器 1 個体分が底面よりわずかに浮いた状態で出土した。覆土中に焼土・炭化物細片を多量に含み、10 ㎝大～ 40 ㎝大の礫 7 個をも含んでいる。遺物は縄文土器と石匙 1 点（第 58 図 133）、削器 1 点（第 58 図 134）、半円状扁平打製石器 1 点（第 75 図 286）、凹石 2 点（第 77 図 303 ・ 304）、扁平磨石 1 点（第 76 図 295）、石皿 1 点（第 82 図 327）、石製品 1 点（第 84 図 339）、フレイク 10 点が出土した。第 42 図 65 は口縁部破片で、沈線文と円形の竹管文が施文されている。口唇部には斜縄文が見られる。削器は大型の縦長剝片を素材にしている。半円状扁平打製石器は東北東に約 34 m離れた場所で出土した破片と接合し完形となったものである。凹石の 304 は両面に凹みを有し、片面には磨りが認められる。火熱を受けている可能性がある。303 は 1 面に 2 孔、もう 1 面に 1 孔の凹みがある。磨石は多孔質の石材（凝灰岩）を素材としている。擦り面やや凸状となっている。石皿は両面を利用している。片面は中央部分がやや凹んでいるが、もう 1 面はほぼ平らになっている。石皿の平面形・法量は欠損しているため不明だが、厚さは 3.5 ～ 4 ㎝である。339 の石製品は安山岩質で、片面のみに剝離を施している。風化が著しく詳細に観察できないが、片面は礫皮面を残したままである。

SK157　（第 15 図）

NC 36 に位置し、SI 126 より新しい。平面形は円形を呈しており、径 1.47 ～ 1.66 m、深さ 19 ㎝である。底面は平坦で堅くしまっており、壁は外傾している。東壁際と南壁際にて径 20 ㎝、深さ 22 ～ 25 ㎝のピットを検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK158　（第 14 図）

NC 33 ・NC 34 に位置し、SI 126 ・SI 156 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.6 m、短径 84 ㎝、深さ 14 ㎝である。底面は平坦で、壁は外傾している。東壁の一部を SI 156 主柱穴 2 個に切られている。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク 3 点が出土した。

SK159　（第 14 図）

NC 38 に位置し、SI 156 より新しい。平面形は円形を呈しており、径 87 ～ 98 ㎝、深さ 39 ㎝である。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に焼土粒子・炭化物細片を多量に含んでい

る。遺物はフレイクが5点出土したのみである。

SK160　（第15図）

MS 41・MS 42に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2.73 m、短径2.17 m、深さ10 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。南壁際と北壁際に径20～25 cm、深さ9～26 cmのピットを検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK161　（第16図）

MT 41・NA 41・MT 42・NA 42に位置している。平面形は円形を呈しており、径83～84 cm、深さ19 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片を含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK162　（第16・42図）

MS 40・MS 41に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2.73 m、短径1.69 m、深さ9 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。南壁際にて径15～30 cm、深さ13～21 cmのピット2個を検出した。覆土中に炭化物細片・縄文土器片をわずかに含んでいる。遺物は縄文土器片が2点のみ出土した。第42図66はやや外反する頸部付近で、1条の沈線とそれに接して竹管による円文が見られる。縄文は施されていない。

SK163　（第16図）

NA 40に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2.9 m、短径1.84 m、深さ18 cmである。底面は平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。ほぼ中央部にて径20 cm、深さ23 cmのピット、壁際に径15～40 cm、深さ14～37 cmのピット6個を検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK166　（第16図）

MS 45・MS 46に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2.34 m、短径1.37 m、深さ8 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。南壁際にて20×60 cm、深さ17 cmのピット、北壁際にて径20 cm、深さ9 cmのピットを検出した。遺物は出土しなかった。

SK167　（第17図）

MP 39・MP 40に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2.69 m、短径1.68 m、深さ16 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。西壁際に10 cm～20 cm大の礫1個、遺構西半にて径15～25 cm、深さ5～13 cmのピット9個を検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK174　（第16・42・58図）

NC 34に位置し、SI 126に伴う。平面形は楕円形を呈しており、長径1.54 m、短径83 cm、深さ34 cmである。底面は平坦で堅くしまっており、壁は外傾している。覆土中に焼土粒子・炭化

物細片を多量に含んでいる。全体的にフレイク・チップが多量に出土しており、この中には石鏃の未完成品などが含まれている。覆土中の焼土および炭化物は近くのSI 126地床炉からの流入ないし廃棄と推察され、遺物の出土状況などから石器製作にかかわりのある遺構とも考えられよう。遺物は少量の縄文土器片と石鏃4点（第58図135～138）、石匙1点、削器1点（第58図139）、凹石1点、フレイク383点が出土した。第42図67は横位の羽状縄文が施文されたものである。石鏃は底面付近から383点のフレイクと共に出土したもので、135を除いてはその一部を欠損している。石匙は縦型で刃部下半を欠いている。

SK175　（第17図）

MQ 39・MQ 40に位置し、SI 170より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径1.24 m、短径1.05 m、深さ15 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中には炭化物細片を多量に含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク8点が出土した。

SK176　（第17図）

ND 39に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.25 m、短径91 cm、深さ28 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK179　（第17図）

NG 34に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径92 cm、短径76 cm、深さ16 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はフレイクが4点出土したのみである。

SK185　（第17・75図）

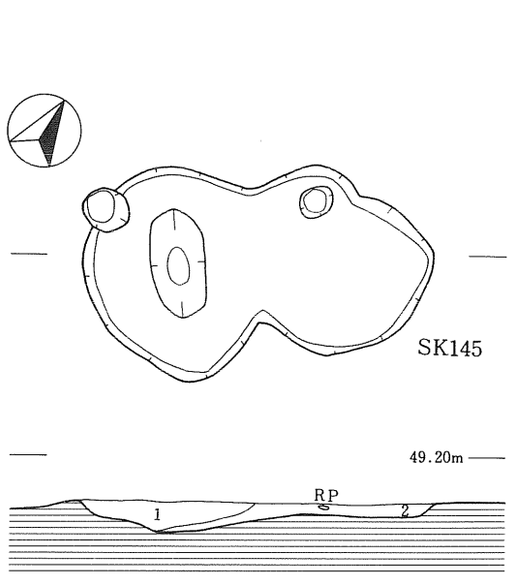
MO 48に位置している。平面形は円形を呈しており、径1.1～1.12 m、深さ33 cmである。底面は平坦で、壁は弧を描いて立ち上がる。遺物は半円状扁平打製石器1点（第75図287）、凹石1点が出土している。半円状扁平打製石器は凸状を呈する擦り面を2辺にもつもので、擦りとしての使用頻度は高い。短辺の打ち欠きは鈍角である。

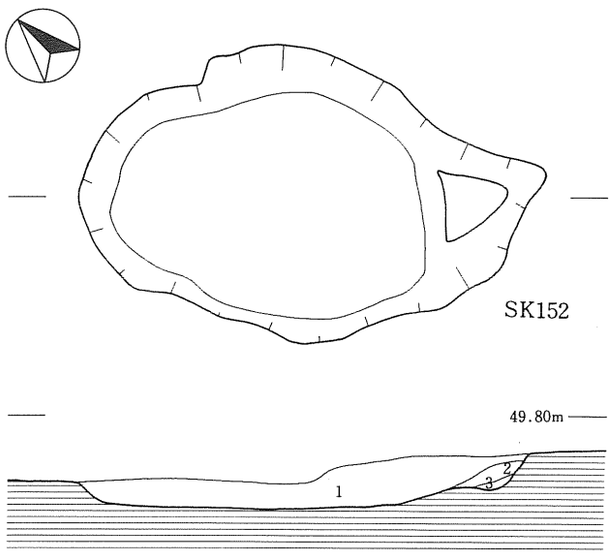
SK187　（第18図）

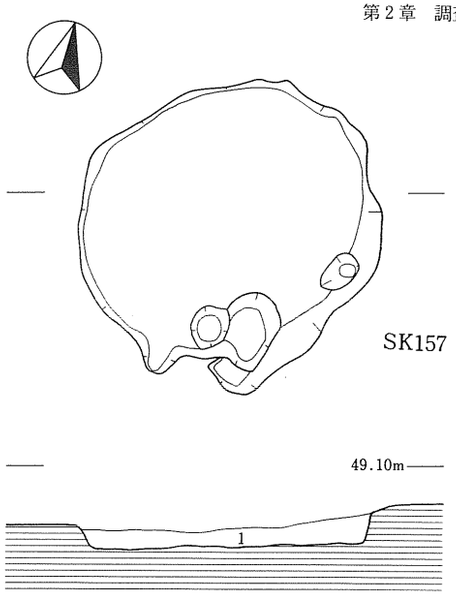
MM 46に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.94 m、短径1.53 m、深さ9 cmである。底面は凹凸があり、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。ほぼ中央にて径15 cm、深さ5 cmのピット、東壁際にて径30 cm、深さ7 cmのピットを検出した。覆土はその堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク3点が出土した。

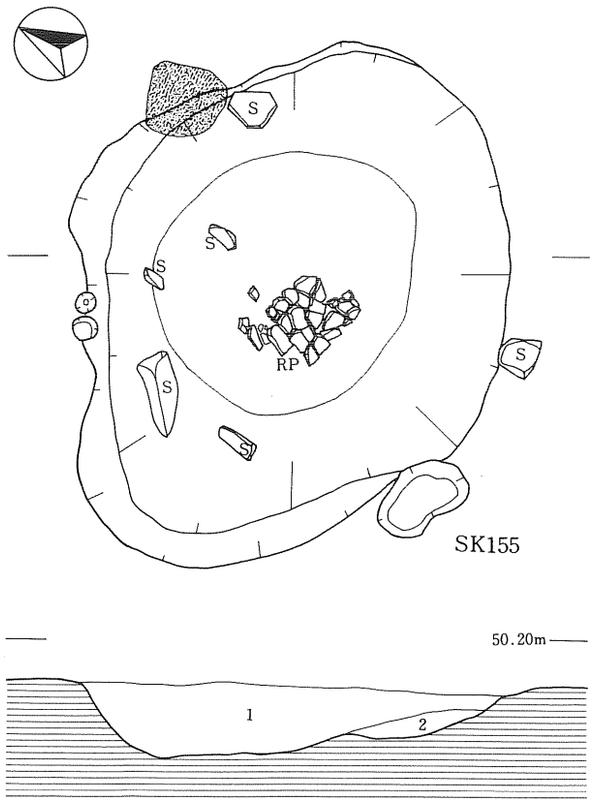
SK188　（第18図）

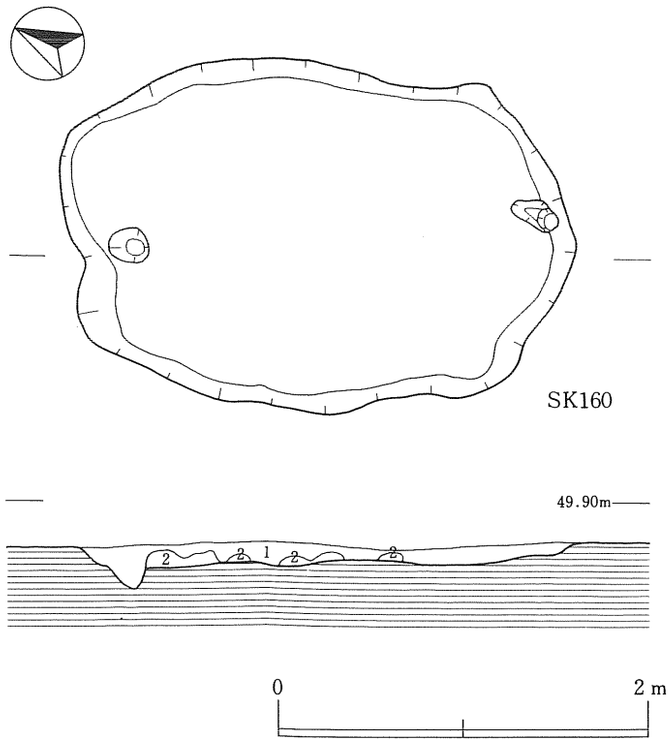
MI 43に位置し、SI 189・SI 323より古い。平面形は円形を呈しており、径1.16～1.19 m、深さ29 cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。SI 189・SI 323の主柱穴3個に切ら



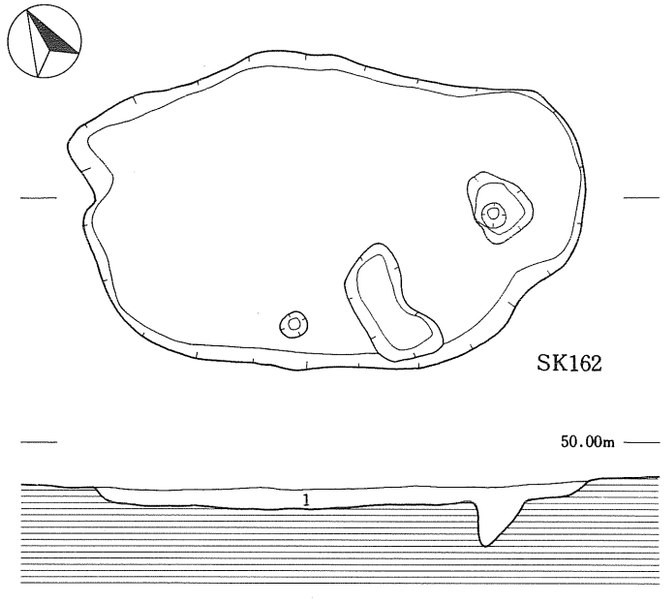



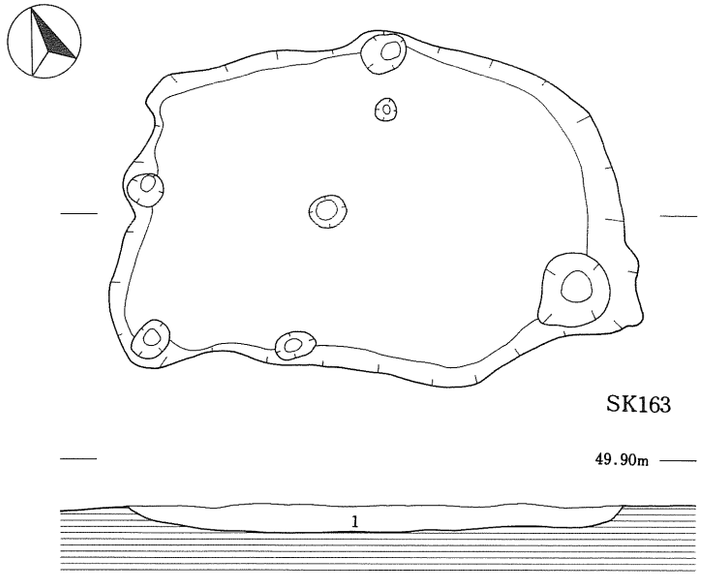



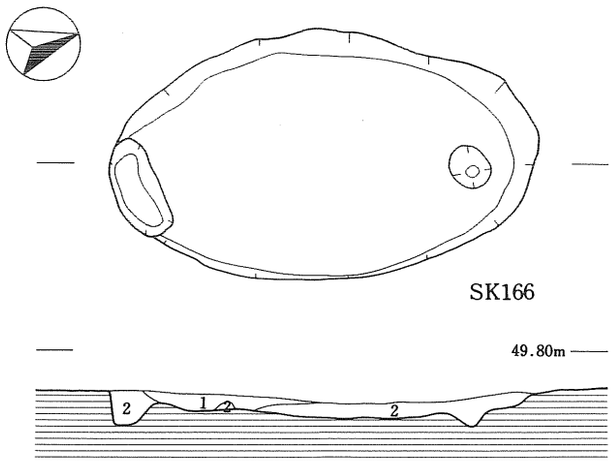



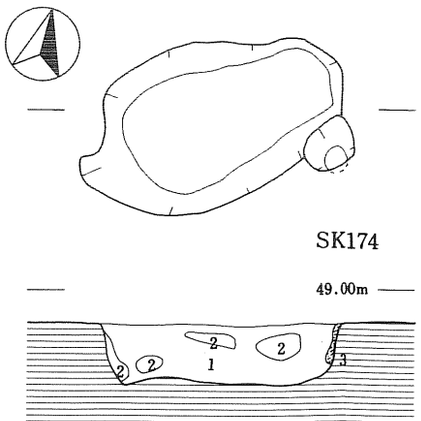

SK145　1　暗褐色土　10YR3/4
　　2　暗褐色土　10YR3/4
SK152　1　暗褐色土　10YR3/4
　　2　褐色土　10YR4/4
　　3　黒褐色土　10YR2/3
　　炭化物・土器多量に混入
SK157　1　黒褐色土　7.5YR3/2
SK155　1　黒褐色土　7.5YR3/2
　　2　赤褐色土　5YR5/6(焼土)　} 混合土
　　黒褐色土　7.5YR3/2
SK160　1　暗褐色土　10YR3/3
　　2　黄褐色土　10YR5/6

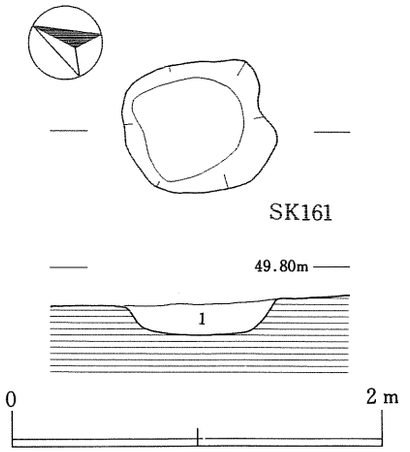
第15図　SK145・152・155・157・160土坑



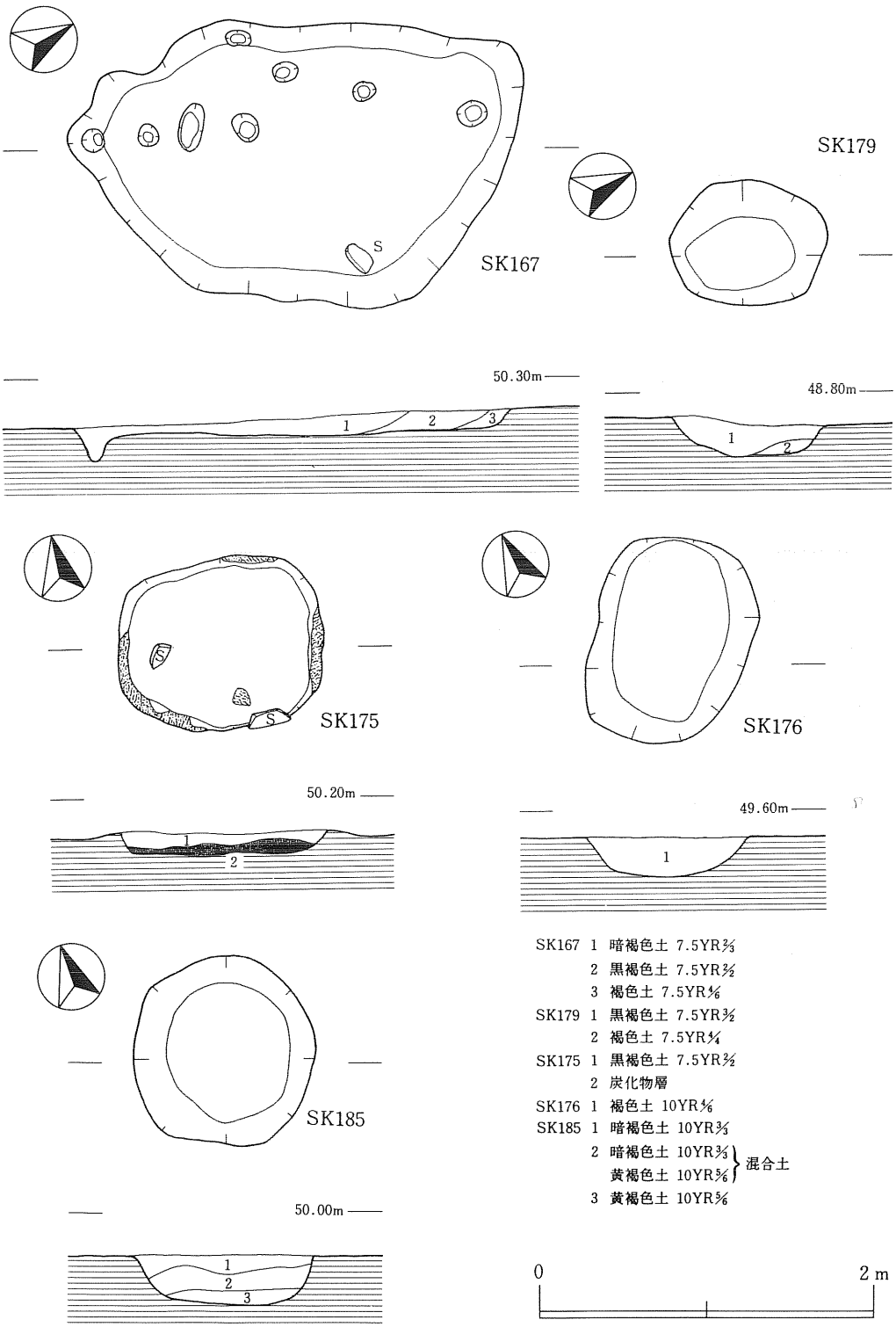




SK162　1　暗褐色土　10YR3/3　SK163　1　暗褐色土　10YR3/3　SK166　1　暗褐色土　7.5YR3/4　SK174　1　黒褐色土　7.5YR3/2　SK161　1　黒褐色土　10YR3/2
2　明褐色土　7.5YR5/6　2　灰褐色土　7.5YR4/2
3　赤褐色土　7.5YR4/8（焼土）

第16図　SK161～163・166・174土坑




第17図　SK167・175・176・179・185土坑

れている。覆土はその堆積状況から人為的埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。

SK191　（第18図）

ML 45に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2.88 m、短径2.13 m、深さ4 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。中央やや東寄りと西寄りにて径20 cm、深さ12～25 cmのピットを検出した。遺物は出土しなかった。

SK194　（第18・77図）

MK 40・MK 41に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2.41 m、短径1.71 m、深さ12 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。西壁際に径25～30 cm、深さ11～32 cmのピット3個を検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器と凹石1点（第77図305）、フレイク1点が出土した。

SK196　（第18・42・75・77・84図）

MK 41・ML 41に位置し、SI 199・SI 328より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径1.79 m、短径1.18 m、深さ15 cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。遺構中央に15 cm大～65 cm大の礫を3個検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は少量の縄文土器片と半円状扁平打製石器1点（第75図288）、凹石1点（第77図306）などが出土した。第42図68は外面が摩滅しており文様が定かでないが、口縁部付近に横位の梯子状文が垂下する。半円状扁平打製石器は砂質系の石材（砂岩か）を素材としている。同一刃部上に擦り面を2箇所にもち、それぞれ接地面が異なるため2期の使用が想定できる。凹石は片面が剝落している。第84図337は細長い石斧状の石器を再利用し、縁辺に剝離を施したもので、先端部（図の下端）には再利用の際の縦方向の使用痕が認められる。

SK197　（第19図）

MJ 46に位置し、SI 311より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径2.56 m、短径1.61 m、深さ15 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。西壁際にて径10 cm、深さ15 cmのピットを検出した。遺物は出土しなかった。

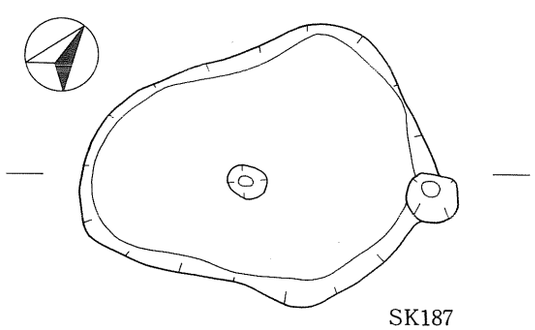
SK198　（第19図）

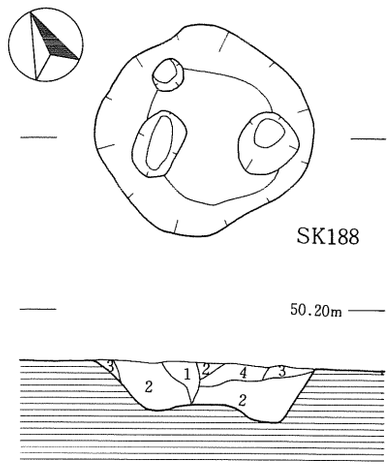
MJ 46・MJ 47に位置し、SI 311より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径2.42 m、短径1.78 m、深さ17 cmである。底面は平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。北壁際にて径20 cm、深さ12～31 cmのピットを5個検出した。遺物は出土しなかった。

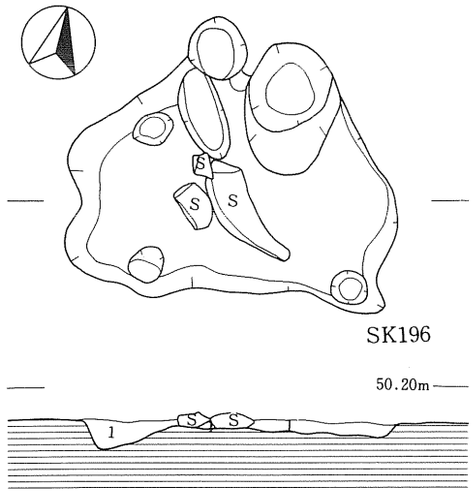
SK201　（第19図）

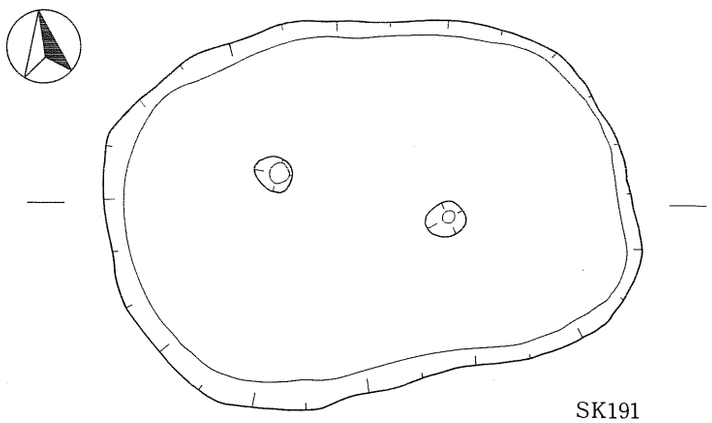
NE 30に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径91 cm、短径72 cm、深さ18 cmである。底面は平坦で、壁は弧を描いて立ち上がる。遺物は少量の縄文土器片が出土した。

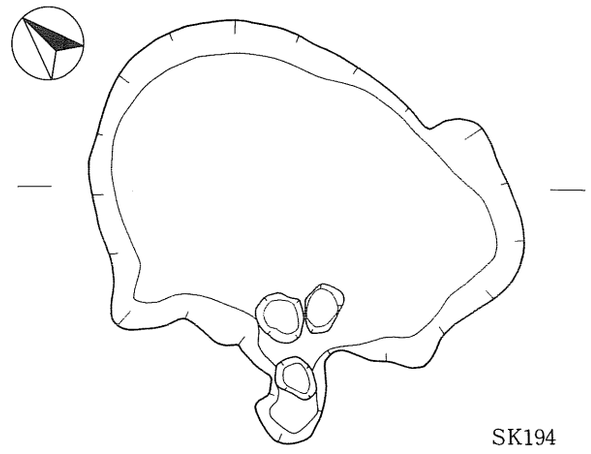
SK202　（第19図）



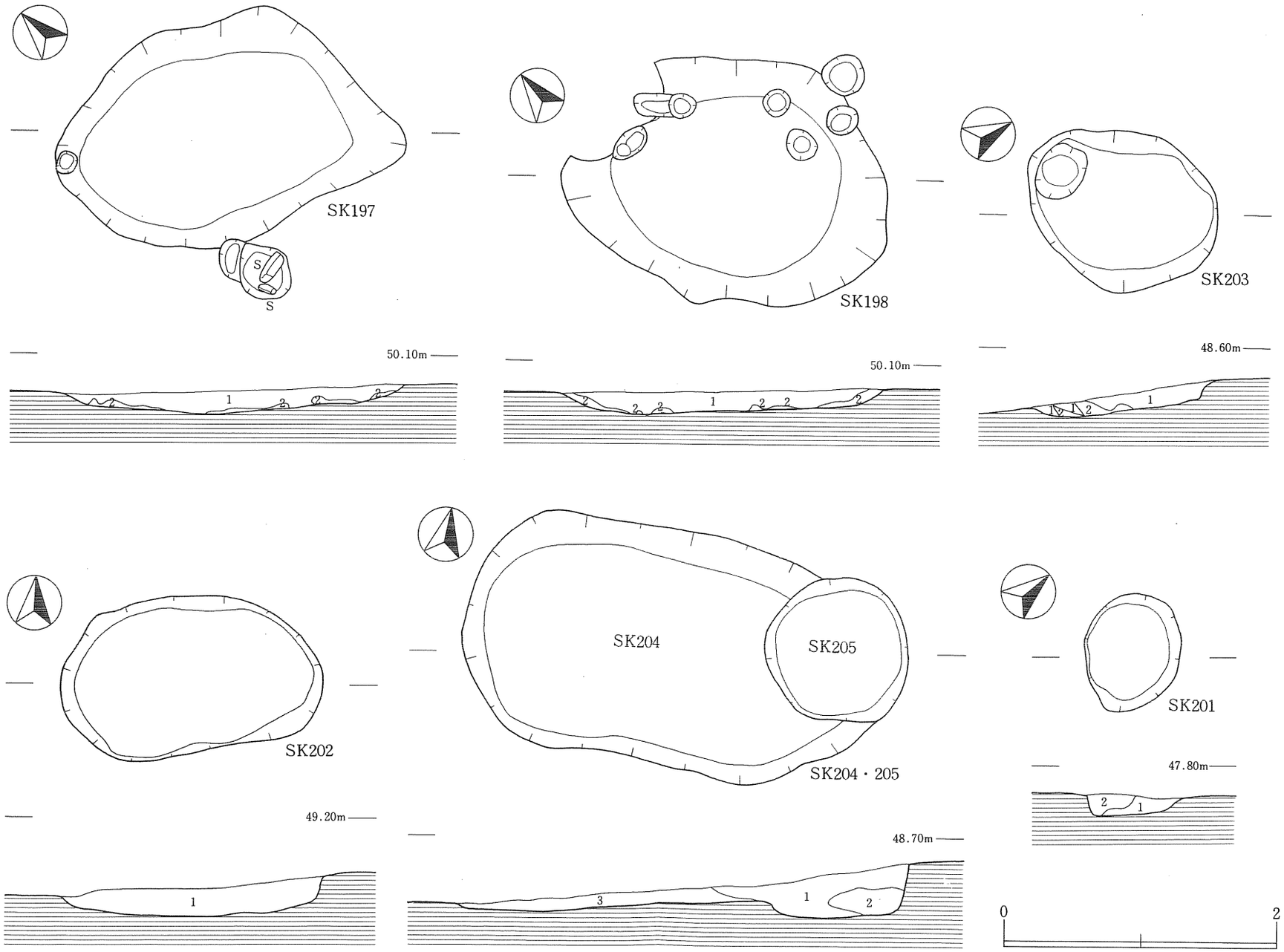




0　2 m

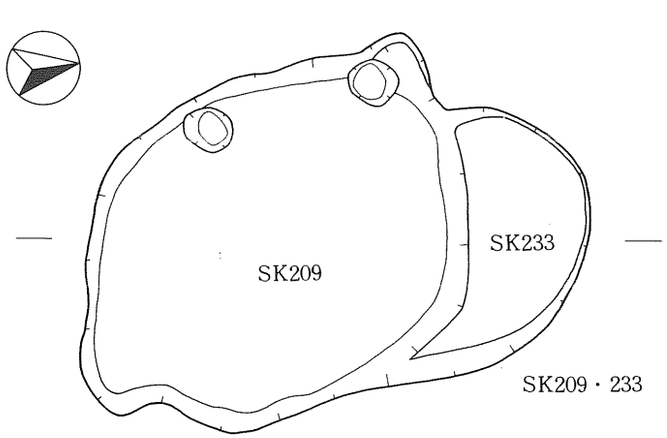
SK187　1　黒色土　10YR2/1
　　2　黒褐色土　10YR3/2
　　3　黒褐色土　10YR2/3
　　4　黒褐色土　10YR3/2
SK188　1　暗褐色土　10YR3/4
　　2　黄褐色土　10YR5/6
　　3　黄褐色土　10YR5/6
　　4　暗褐色土　10YR3/4
SK191　1　褐色土　10YR4/3
　　2　黒褐色土　10YR2/3
　　3　褐色土　10YR4/4　黒褐色土　10YR2/3　混合土
SK196　1　極暗褐色土　7.5YR2/3
SK194　1　極暗褐色土　7.5YR2/3
　　2　明褐色土　7.5YR5/8　極暗褐色土　7.5YR2/3　混合土

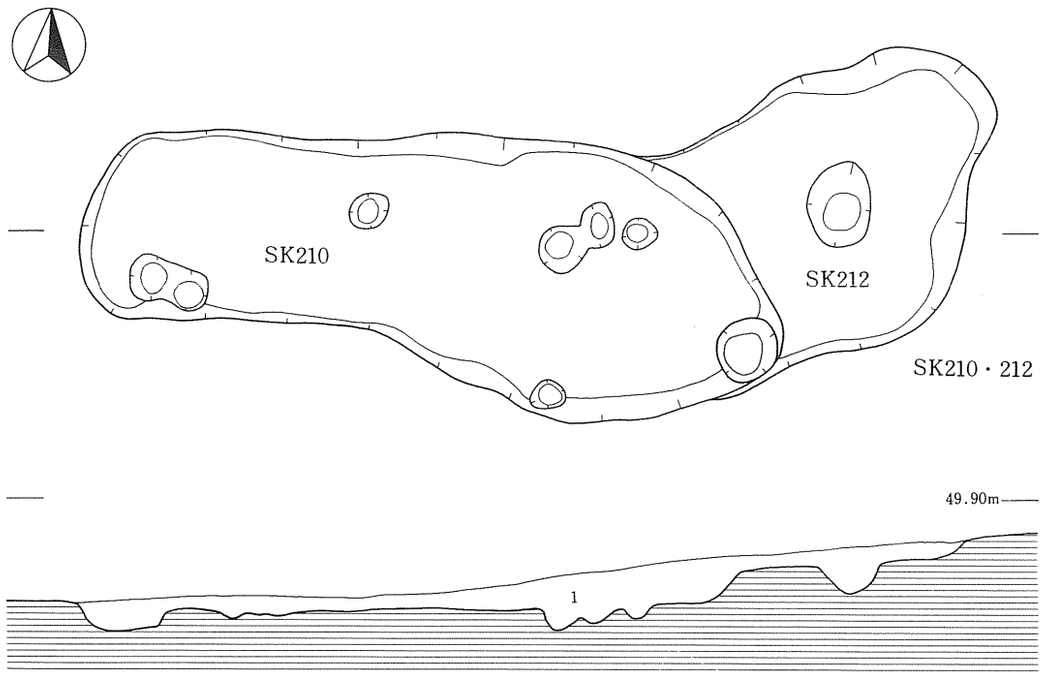
第18図　SK187・188・191・194・196土坑

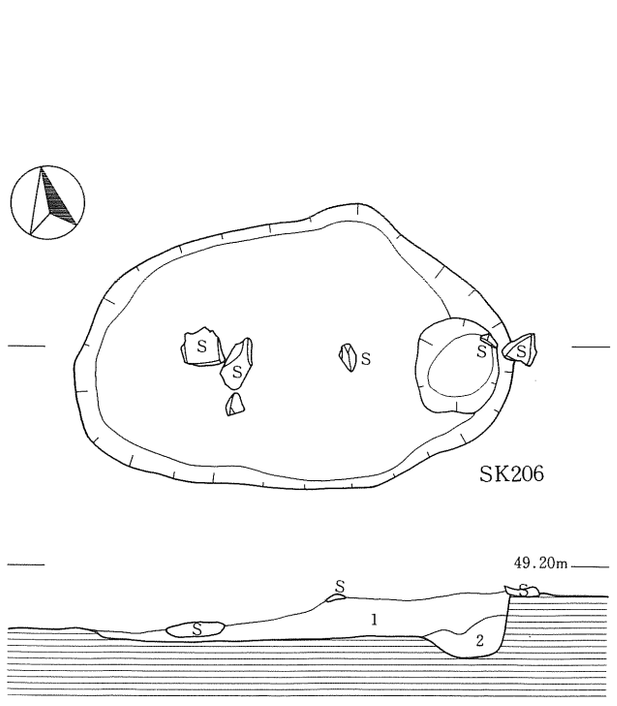


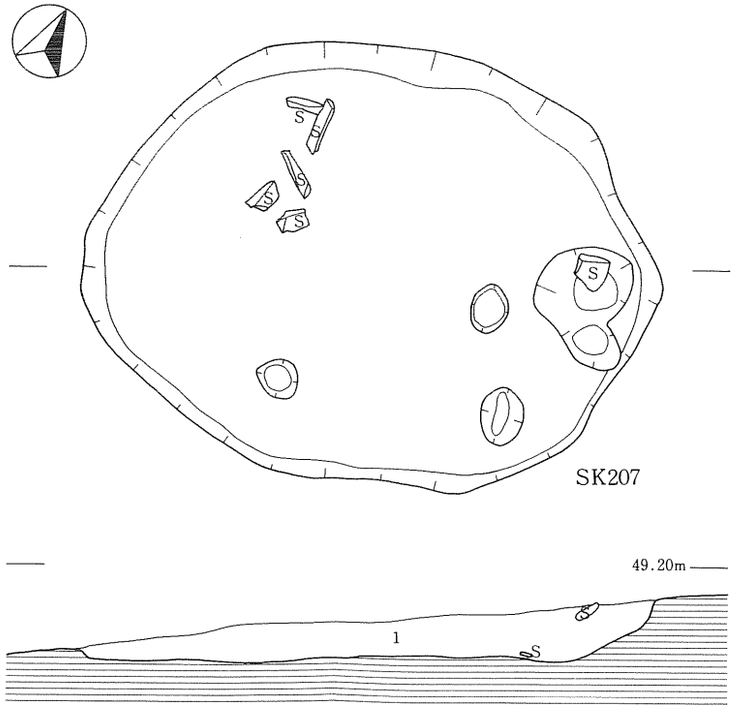

SK197　1　暗褐色土　10YR3/3
　　2　黄褐色土　10YR5/6
SK198　1　暗褐色土　10YR3/3
　　2　黄褐色土　10YR5/6
SK201　1　黒褐色土　10YR3/2
　　2　黒褐色土　10YR3/3
SK202　1　暗褐色土　7.5YR3/3
SK203　1　黒褐色土　7.5YR3/2
　　2　褐色土　7.5YR4/6
SK204　1　黒褐色土　7.5YR3/2
205　2　極暗褐色土　7.5YR2/3
　　3　暗褐色土　7.5YR3/3

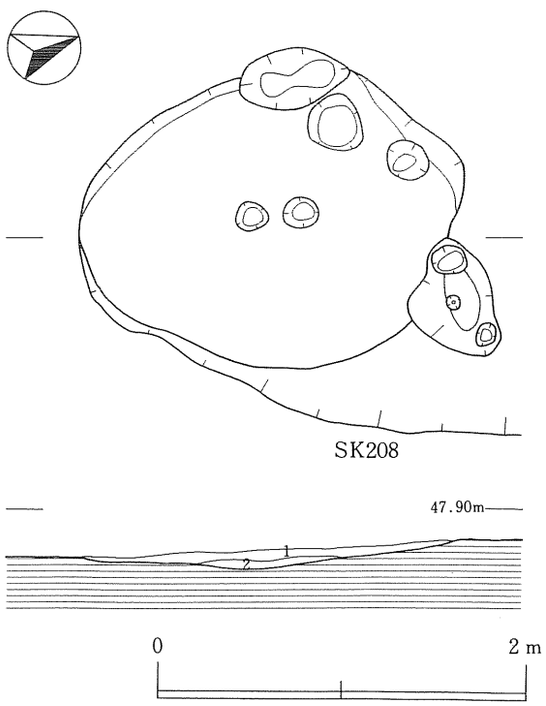
第19図　SK197・198・201～205土坑




SK209　1　暗褐色土　10YR3/4
233　2　褐色土　10YR4/6

SK210　1　黒褐色土　10YR3/3
212

SK206　1　黒褐色土　7.5YR3/2
2　黒褐色土　7.5YR3/2

SK207　1　黒褐色土　7.5YR3/2
SK208　1　黒褐色土　7.5YR3/2
2　黒色土　5YR1.7/1

第20図　SK206～210・233土坑

NC 32 ・ND 32 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.92 m、短径 1.17 m、深さ 19 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK203　（第 19 図）

NC 30 に位置している。平面形は円形を呈しており、径 1.19 ～ 1.48 m、深さ 17 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。南西壁際にて径 35 cm、深さ 10 cmのピットを検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK204　（第 19 図）

NB 30 に位置し、SK 205 より新しい。平面形は円形を呈しており、径 1.07 m、深さ 35 cmである。底面は堅くしまっており、凹凸がある。壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK205　（第 19 図）

NB 30 に位置し、SK 204 より古い。平面形は楕円形を呈しており、長径 3.11 m、短径 1.71 m、深さ 22 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土の堆積状況から自然堆積とは考えにくく、人為的埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。

SK206　（第 20 ・ 82 図、図版 29）

NA 31 ・NB 31 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.35 m、短径 1.56 m、深さ 23 cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。プラン確認面において 10 cm大～ 30 cm大の礫 6 個を検出した。東壁際に径約 50 cm、深さ 15 cmのピットを検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は石皿 1 点（第 82 図 328）が出土した。石皿は片面のみの使用である。使用面はやや凹状を呈している。形状は欠損しており不明であるが、厚さは 8 ～ 10.5 cmである。

SK207　（第 20 図、図版 29）

NA 30 ・NA 31 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 3.14 m、短径 2.37 m、深さ 30 cmである。底面は平坦で堅くしまっており、特に北側が顕著である。底面北西部に 80 cm × 1 mの範囲で灰状を呈する炭化物の堆積が認められる。壁は弧を描いて立ち上がる。東壁際にて径 50 cm、深さ 20 cmのピット 1 個と径 20 cm、深さ 28 cmのピット 1 個を検出した。他に底面に 3 個のピットを検出したが、いずれも径 20 cm、深さ 10 cm程度である。覆土中には炭化物細片をわずかに含んでおり、遺構北東部からは 15 cm大～ 30 cm大の礫 5 個がいずれも底面から浮いた状態で検出された。遺物は少量の縄文土器片とフレイク 1 点が出土した。

SK208　（第 20 図）

ND 30 ・ND 31 ・NE 30 ・NE 31 の SI 200 床面南東部に位置している。両者の新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.17 m、短径 1.63 m、深さ 14 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。底面中央に 35 × 60 cmの範囲で炭化物が薄く広がっている。ピットは北壁際に位置するものと底面中央に位置するものがあり、前者は SI 200 の柱穴と考えられる。後者は径 18 cm、深さ 22 ～ 23 cmの 2 個のピットで、SI 200 ・SK 208 との新旧関係は不明である。遺物は出土しなかった。

SK209　（第 20 図）

ND 29 ・ND 30 に位置し、SK 233 より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.45 m、短径 1.8 m、深さ 22 cmである。底面は平坦で、壁は弧を描いて立ち上がる。西壁際にて径 25 cm、深さ 15 cmのピット 2 個を検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片が出土した。

SK210　（第 20 図）

MT 30 ・NA 30 に位置し、SK 212 と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈しており、長径 3.87 m、短径 1.5 m、深さ 22 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。底面に径約 20 ～ 35 cm、深さ 5 ～ 20 cmのピット 8 個を検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク 1 点が出土した。

SK212　（第 20 図）

MT 30 に位置し、SK 210 と重複しているが新旧関係は不明である。平面形は不整形を呈していたと考えられ、長軸（現存長）1.62 m、短軸 1.41 m、深さ 20 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。底面中央に径 40 cm、深さ 15 cmのピットを検出した。遺物は出土しなかった。

SK221　（第 21 図）

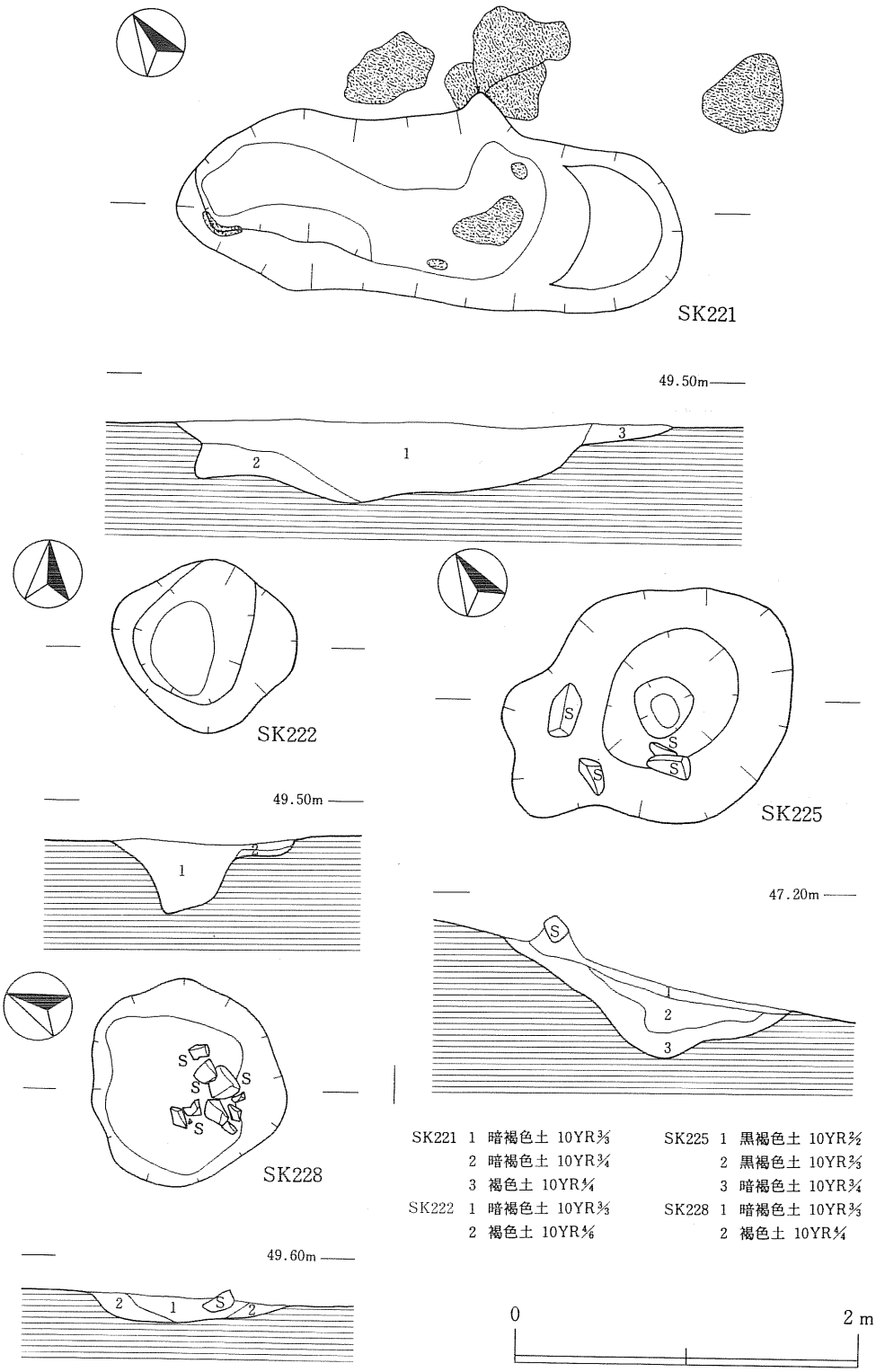
MT 31 に位置し、SI 238 より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.96 m、短径 1.08 m、深さ 48 cmである。底面は凹凸があり、壁は外傾している。覆土中に焼土粒子・炭化物細片をわずかに含んでいる。底面の一部にも焼土が薄く広がっており、北西壁の一部は焼けている。SK 221 北東部で焼土の広がりを 3 箇所で確認した。うち 1 箇所は SK 221 に切られており、SK 221 より古い。これらの焼土は当初竪穴住居跡の地床炉と考えられたが、精査の結果竪穴住居跡は検出されなかった。遺物は少量の縄文土器片とフレイク 13 点が出土した。

SK222　（第 21 図）

MS 32 に位置している。平面形は円形を呈しており、径 1.03 ～ 1.06 m、深さ 42 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK224　（第22・38・39・42・59・75～78・84図、図版30・40・41）

MC 32・MC 33・MD 32・MD 33に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径2.86 m、短径2.24 m、深さ1.2 mである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。遺構確認以前から遺物の出土量が多く、小規模な捨て場を想定していた箇所である。しかし土層の堆積状況からSK 224廃棄後、焼土粒子・縄文土器片・炭化物細片をわずかに含む土砂によって人為的に埋められ（5層）、流入土（4層）を経て、凹状となった部分を捨て場として利用したものと考えられる。遺物は大量の縄文土器片と石器が出土した。第38図24は底部付近から口縁部に至るまで大きく外反して開き、器高よりも口径が大きい。R $\{^{L}_{L}$ とL $\{^{R}_{R}$ 縄文を結束して2段にわたる羽状縄文を施すが、この原体を互いに上下逆にすることによって装飾効果を高めている。第39図25は全体にややいびつな土器で、口縁部が外反し、頸部が少しくびれ、わずかに張り出す体部からほぼ直線的に底部へ至る。口縁部は4単位の低い波状をなし、その頂部には小型の鋸歯状装飾体が付く。体部と口唇部に撚糸を回転する。この原体の単位は幅1.8 cm程である。頸部文様帯には上下2段の波状沈線文が巡り、この間に角張った渦巻文が交互に渦巻の方向を変えて施文されている。26は口縁部が外反する深鉢で、R $\{^{L}_{L}$ の斜縄文が施される。27もいびつな深鉢で、ほぼ円筒形に近い形状を呈する。口唇部に指頭圧痕が並列し、体部には太い原体を用いた撚糸文が縦走する。28および29は斜縄文の施された土器下部である。第42図69は粘土紐貼付による梯子状文や区画内の格子状文が見られる。70は原体圧痕が少なくとも横位3段に見られ、これを連絡して縦位にも施されている。口唇部に指頭圧痕が並び、鋸歯状装飾体も貼付される。71・72は沈線による鋸歯文、73はこれよりも頂部が丸みを帯びた波状文が横位に施文されている。74は斜縄文、75・76は綾絡文を施す。77・78は底面のスダレ状圧痕である。石器は石鏃1点（第59図140）、石匙3点（第59図141～143）、箆状石器1点（第59図144）、削器2点（うち1点は第59図145）、半円状扁平打製石器2点（第75図289・第76図290）、石錘4点（第76図297・298、第77図299・300）、凹石4点（第77図307・308、第78図309）、石製品1点（第84図336）が出土している。石鏃は床面から出土した。石匙は斜型のもので裏面刃部にポリッシュが見える。箆状石器は刃部中央から抉りが入っており、あるいは他の箆状石器とは機能を異にするものかも知れない。289は凹みと敲きを有する半円状扁平打製石器である。刃部の擦りは顕著ではない。凹みは2面にあり、敲きは長辺2辺と短辺にも加えられている。これは刃部にも認められることから、半円状扁平打製石器として用いた後に敲きを行ったと考えられる。290は床面出土の半円状扁平打製石器である。刃部長辺の端々を自然面として残し、擦りも認められないことから未使用と考えられる。297～300はいずれも2方に抉りをもつ石錘である。300は最終的に敲きにより抉りを完成させているもので、最凹部につぶれが認められる。307～309は凹石で、307と308は床面出土である。




第21図　SK221・222・225・228土坑

309は3面に凹みをもつ。2面には線状の擦痕を合わせもっている。336は先端部を鋭く研ぎ出した磨製の石製品を粗く打ち欠いたものである。石質は凝灰岩である。他にフレイクが64点出土している。

SK225　（第21・59・78図）

ME 26に位置している。平面形は不整形を呈しており、長軸1.7 m、短軸1.4 m、深さ15 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。プラン確認面において20 cm大～35 cm大の礫4個を検出した。覆土はその堆積状況から自然堆積とは考えられず、人為的埋土と考えられる。遺物は少量の縄文土器片と尖頭器1点（第59図146）、凹石1点（第78図310）、フレイク2点が出土した。尖頭器は器中央部近くからおれているが、図示した部分が尖頭部か基部かは不明である。凹石は凹みの裏面に薄く線状痕が認められる。

SK226　（第23図）

MF 27に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径1.14 m、短径77 cm、深さ40 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。プラン確認面において10 cm大～40 cm大の礫11個を検出した。最大の25 × 40 cm大の礫は火を受けてボロボロになっている。覆土中に焼土粒子・炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は少量の縄文土器片とフレイク3点が出土した。

SK228　（第21・76・78図）

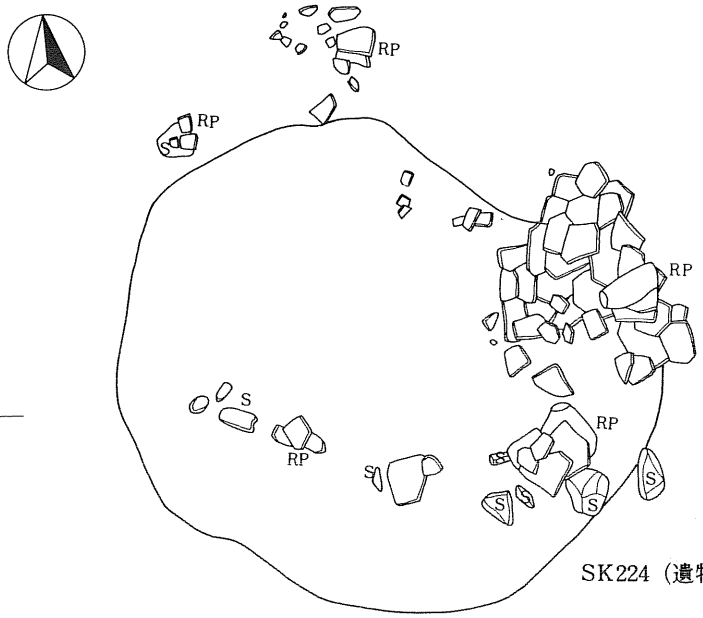
ME 33・MF 33に位置し、平面形は円形を呈しており、径1.15～1.23 m、深さ15 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。SQ 227の礫と同一レベルに5 cm大～25 cm大の礫10個を検出した。当初はSQ 127と同種の遺構と考えていたが、その後礫の下に掘り込みが検出され土坑としたものである。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。検出された10個の礫の内、3点は石器類（石錘・凹石・フレイク）である。その他の礫中2個は焼けており、SQ 227の焼土分布との関連が考えられる。遺物は少量の縄文土器片と半円状扁平打製石器1点（第76図291）、凹石1点（第78図311）、フレイク2点が出土した。凹石は両面に凹みをもつ。

SK233　（第20図）

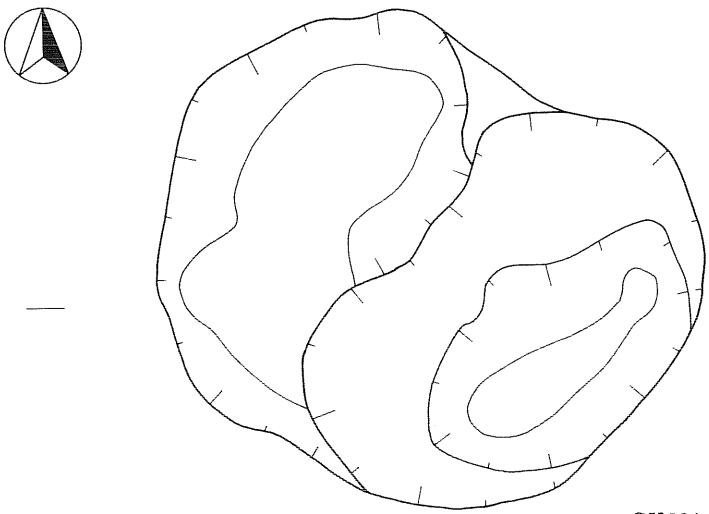
ND 30に位置し、SK 209より古い。平面形は楕円形を呈していたと考えられ、長径（現存長）72 cm、短径1.41 m、深さ8 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土はその堆積状況から自然堆積とは考えられず、人為的埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。

SK234　（第23図、図版30）

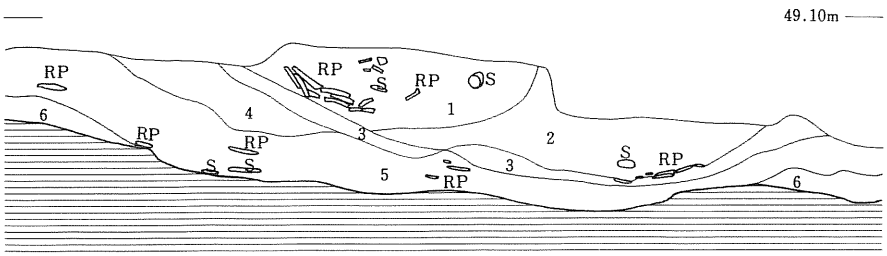
MD 38に位置している。平面形は円形を呈しており、径67～73 m、深さ50 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に焼土粒子・炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。




SK224（遺物出土状態）



SK224




SK224　1　黒褐色土　10YR3/2
2　黒褐色土　10YR3/3
3　黒褐色土　10YR3/2
4　黒褐色土　10YR3/3
5　暗褐色土　10YR3/3
6　黒褐色土　10YR3/2

第22図　SK224土坑

SK235　（第23図）

MC 38に位置している。平面形は不整形を呈しており、長軸1.07 m、短軸56 cm、深さ14 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に焼土粒子・炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK242　（第23図、図版30）

MF 35に位置している。平面形は円形を呈しており、径1.32～1.38 m、深さ28 cmである。底面は平坦で、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はフレイクが6点出土したのみである。

SK243　（第23図）

MD 36に位置している。平面形は円形を呈しており、径59～63 cm、深さ55 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。南壁際にて径25 cm、深さ35～42 cmのピット2個を検出した。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK300　（第23・78図）

MM 39・MM 40に位置し、SI 199に伴う。平面形は楕円形を呈しており、長径1.33 m、短径1.09 m、深さ20 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は少量の縄文土器片と凹石1点（第78図312）が出土した。凹石は両面に断面V字状の凹みをもつ。片面には磨りが入っている。

SK301　（第23・76図）

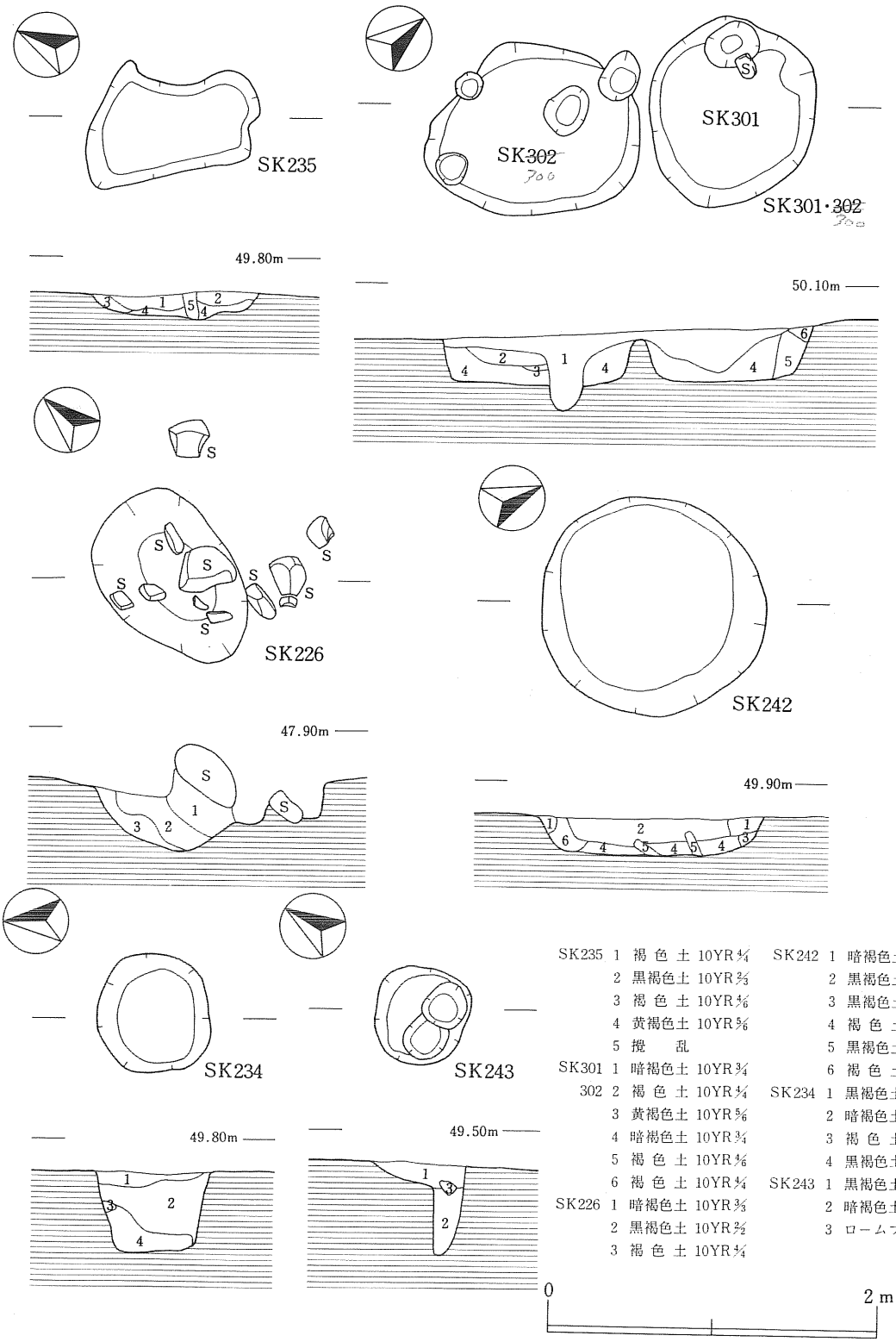
MM 40に位置し、SI 199に伴う。平面形は円形を呈しており、径1.04～1.14 m、深さ39 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は石鋸1点（第76図292）、フレイク2点が出土した。石鋸は刃部両側縁に擦痕を有するものである。擦痕は刃部に対し、平行もしくは右下がりの条痕を残す。この部分はのちに一部打ち欠かれ、底面を擦り、半円状扁平打製石器として使用もしくは類似した目的に使用されたと考えられる。抉りは最終的には敲きにより仕上げられている。全体に火熱を受けている。

SK302　（第25・78図）

MM 39・MN 39に位置し、SI 199に伴う。平面形は円形を呈しており、径1.4 m、深さ31 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は凹石1点（第78図313）、磨石1点（第78図315）、フレイク2点が出土した。凹石は片面に凹み両面に磨りを有するもので、凹みの裏面の磨りは顕著である。磨石は2面に磨りをもつが、いずれも使用頻度は低いようである。

SK303　（第25・76図）

MN 39・MM 39に位置し、SI 180・SI 199より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径




第23図　SK226・234・235・242・243・300・301土坑

2.28 m、短径 1.35 m、深さ 15 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土はその堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物はごく少量の縄文土器片と半円状扁平打製石器 1 点（第 76 図 293）、フレイク 1 点が出土した。半円状扁平打製石器は多孔質の石材（凝灰岩）を素材としている。刃部は鈍角に仕上げられており、一方に小さな抉りをもつ。

SK307　（第 25 ・ 56 図）

ML 43 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.64 m、短径 1.57 m、深さ 17 cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。底面にて径 20 ～ 25 cm、深さ 20 ～ 37 cmのピットを 7 個検出した。遺物は少量の縄文土器片と削器 2 点（第 56 図 147 ・ 148）、フレイク 8 点が出土した。148 の削器はつまみ部の欠損した縦型石匙の可能性もある。

SK308　（第 25 図）

MH 47 に位置し、 SI 320 ・SI 321 と重複するが新旧関係は不明である。 削平により東半を失っているが、平面形は楕円形を呈していたと考えられ、長径 2.16 m、短径（現存長）99 cm、深さ 15 cmである。底面は平坦で、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK309　（第 25 図）

MH 47 ・MH 48 に位置し、 SI 120 と重複するが新旧関係は不明である。 削平により一部を失っているが、平面形は円形を呈していたと考えられ、径 1.8 m、深さ 32 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK313　（第 24 図）

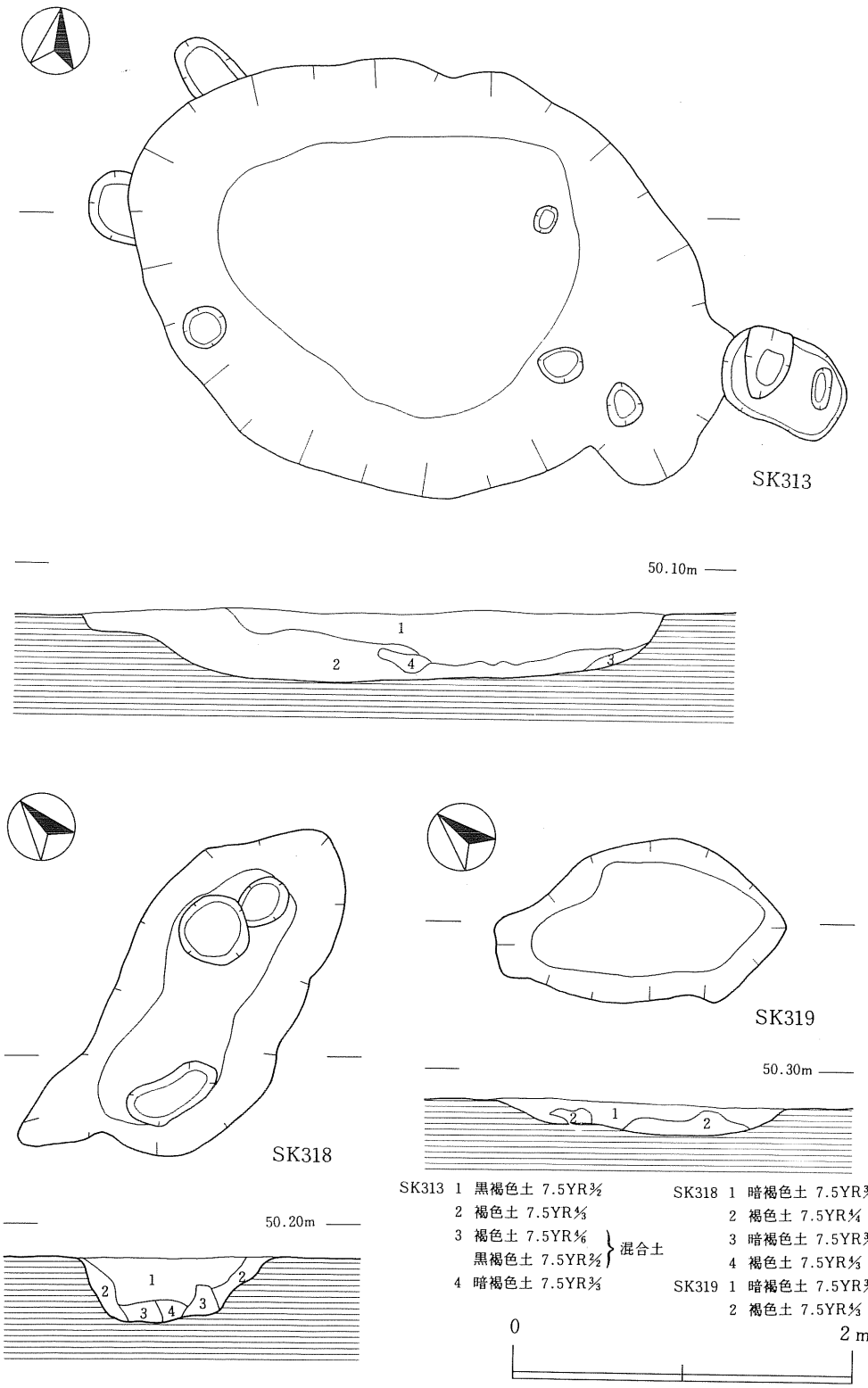
ML 48 ・ML 49 ・MM 49 に位置し、SI 312 より新しい。平面形は楕円形を呈しており、長径 3.72 m、短径 2.59 m、深さ 35 cmである。底面は丸みを帯び、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK318　（第 24 図）

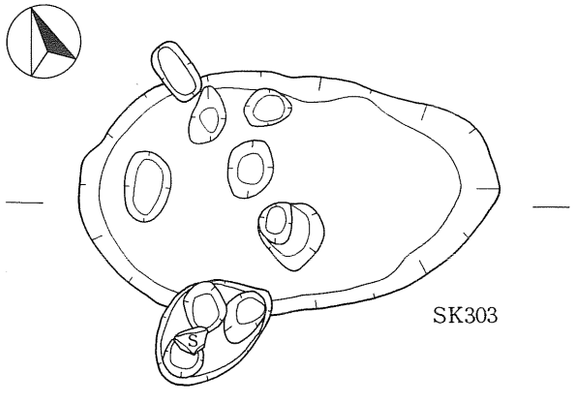
ML 38 ・ML 39 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 2.05 m、短径 1.07 m、深さ 37 cmである。底面は凹凸があり、壁は弧を描いて立ち上がる。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

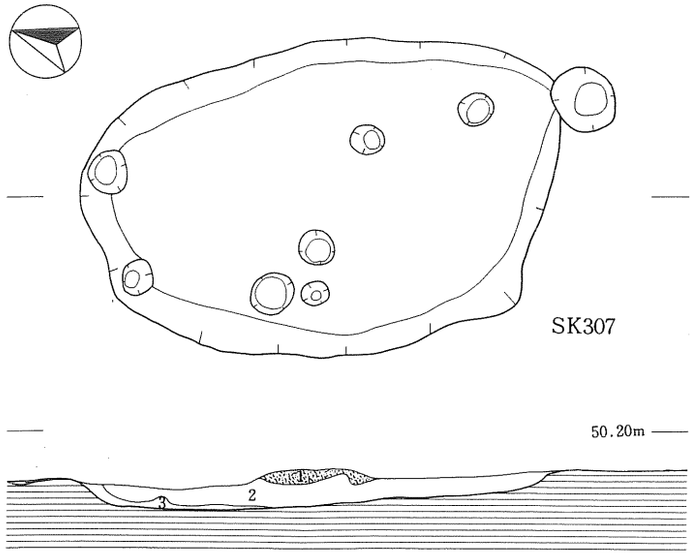
SK319　（第 24 図）

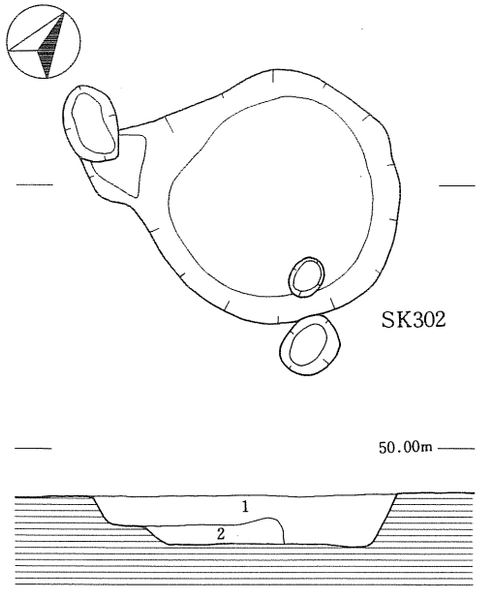
MM 35 ・MN 35 に位置している。平面形は楕円形を呈しており、長径 1.72 m、短径 95 cm、深さ 15 cmである。底面は丸みを帯び、壁はゆるい弧を描いて立ち上がる。覆土はその堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

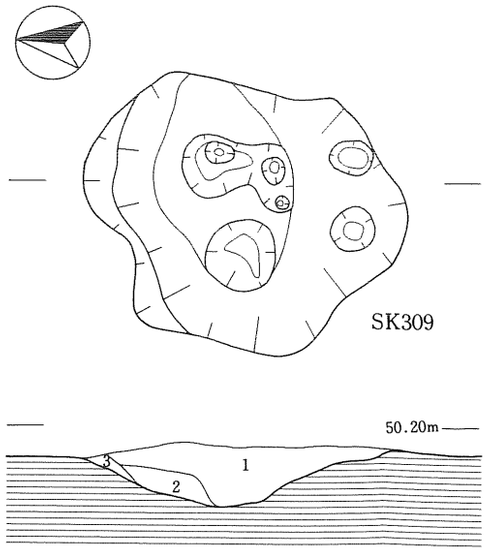


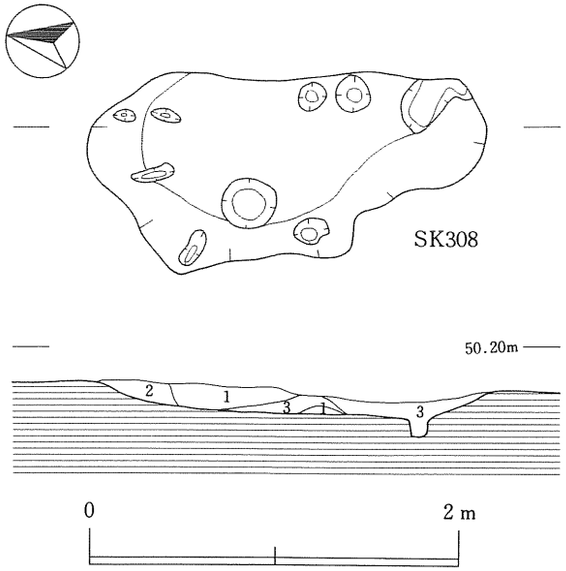

第24図　SK313·318·319土坑



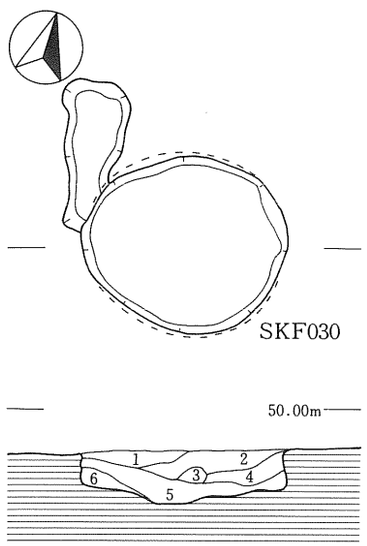



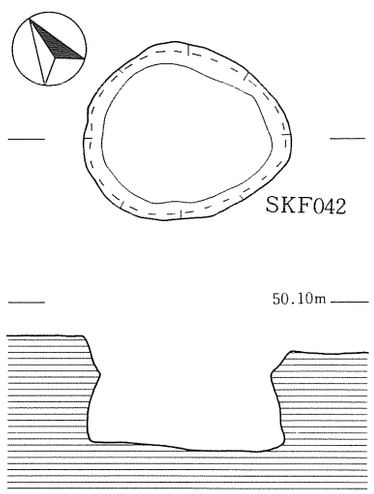

SK303　1　黒褐色土　10YR3/2
　　2　黄褐色土　10YR5/6
　　3　黒褐色土　10YR3/3　混合土
　　黄褐色土　10YR5/6　混合土

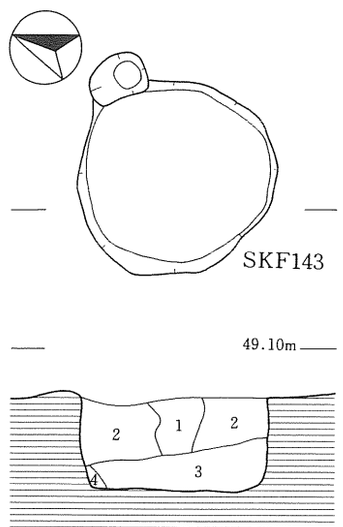
SK307　1　赤褐色土　2.5YR4/6（焼土）
　　2　暗褐色土　7.5YR3/3
　　3　褐色土　7.5YR3/4　混合土
　　暗褐色土　7.5YR3/3　混合土

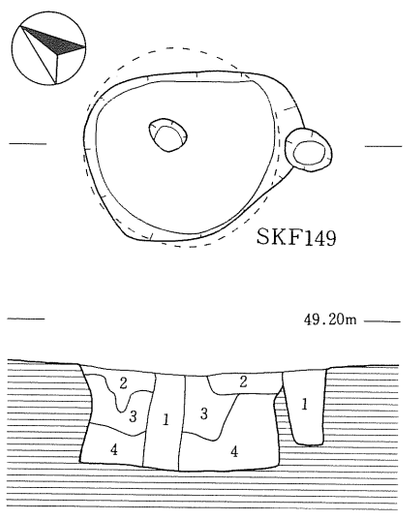
SK302　1　暗褐色土　10YR3/4
　　2　暗褐色土　10YR3/4
SK309　1　黒褐色土　10YR3/2
　　2　暗褐色土　10YR3/3
　　3　にぶい黄褐色土　10YR5/4
SK308　1　黒褐色土　10YR3/2
　　2　暗褐色土　10YR3/4
　　3　黒褐色土　10YR3/2

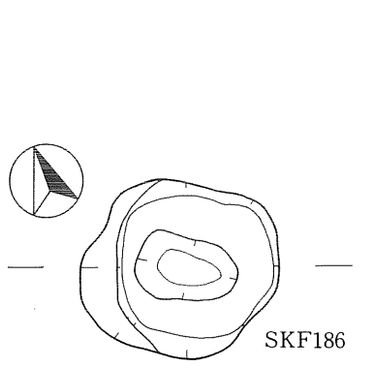
第25図　SK302・303・307～309土坑

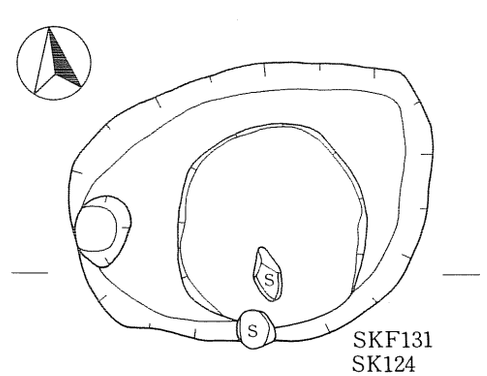


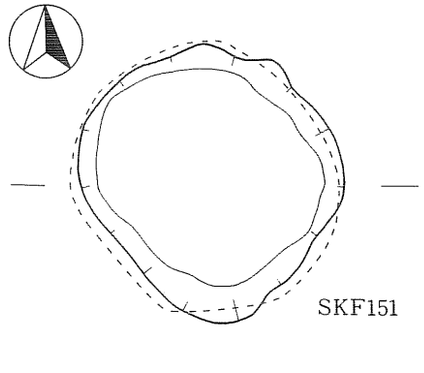



SKF030
1 黒褐色土 10YR2/3
2 暗褐色土 10YR3/4
3 黄橙色土 10YR7/8
4 にぶい黄褐色土 10YR4/3
5 暗褐色土 10YR3/4
6 明黄褐色土 10YR6/6

SKF143
1 黄 褐 土 10YR5/6
2 褐 色 土 10YR4/6

SKF149
1 褐 色 土 7.5YR4/3
2 黒褐色土 7.5YR3/2
3 褐 色 土 7.5YR4/4 } 混合土
暗褐色土 7.5YR3/4
4 暗褐色土 7.5YR3/4

SKF186
1 褐 色 土 10YR4/4
2 黒褐色土 10YR2/2
3 褐 色 土 10YR4/4
4 黄褐色土 10YR5/6

SK124
SKF131
1 暗 褐 土 7.5YR3/4
2 褐 色 土 7.5YR4/4 } 混合土
暗褐色土 7.5YR3/4
3 黄褐色土 10YR5/6
4 褐 色 土 10YR4/4
5 褐 色 土 10YR4/6
6 褐 色 土 10YR4/4

SKF151
1 黒 色 土 10YR2/1
2 黒 色 土 10YR2/1
3 暗褐色土 10YR3/4
4 黒褐色土 10YR2/2
5 黒褐色土 10YR2/2
6 黄褐色土 10YR5/6
7 暗褐色土 10YR3/4
8 黒褐色土 10YR2/3
9 黒褐色土 10YR2/2
10 黒 色 土 10YR2/1
11 暗褐色土 10YR3/4 } 混合土
黄褐色土 10YR5/6
12 黒褐色土 10YR2/2
13 黄褐色土 10YR5/6
14 黒褐色土 10YR2/2
15 暗褐色土 10YR3/4

第26図　SK124土坑、SKF030・042・131・143・149・151・186フラスコ状土坑

（2）　フラスコ状土坑

SKF030　（第26図）

ME 45 に位置している。平面形は円形を呈しており、開口部径 92 ㎝、深さ 24 ㎝である。断面形は袋状を呈している。最大径は底部径の 1 m、最小径は開口部やや下の 89 ㎝である。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土はブロック混入土の割合が高いことから人為的な埋土であろう。遺物は出土しなかった。

SKF042　（第26図）

LS 48 ・LT 48 に位置している。平面形は円形を呈しており、開口部径 1 m、深さ 58 ㎝である。断面形は袋状を呈している。最大径は開口部径の 1 m、最小径は開口部やや下の 90 ㎝である。覆土は堆積状態から自然堆積であろう。遺物は出土しなかった。

SKF131　（第12 ・ 26図）

NG 41 に位置し、SK 124 より古い。平面形は円形を呈しており、現存開口部径 1.1 m、深さ 20 ㎝である。SK 124 との重複により定かではないが、断面形は袋状を呈していたと考えられる。最大径は現存開口部の 1.1 m、最小径は底部径の 1 mである。覆土中に 15 × 30 ㎝大の礫を含んでいる。遺物は出土しなかった。

SKF143　（第13 ・ 26図）

NG 36 ・NG 37 に位置し、SI 138 ・SI 148 より古い。平面形は円形を呈しており、開口部径 1.1 m、深さ 67 ㎝である。断面形は袋状を呈している。最大径は開口部の 1.1 m、最小径は底部径の 95 ㎝である。覆土はこの堆積状況から自然堆積とは考えにくく、廃棄後人為的に埋められたものであろう。覆土中には炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

SKF149　（第26図）

NF 37 に位置し、SI 118 ・SI 148 より古い。平面形は円形を呈しており、開口部径 90 ㎝、深さ 58 ㎝である。断面形は袋状を呈している。最大径は底部径の 1.12 m、最小径は開口部やや下の 85 ㎝である。覆土上部には SI 118 から流入した焼土・炭化物細片が多量に含まれている。SKF 149 の遺構中央には SI 148 の主柱穴が認められるため、人為的に埋められた後 SI 148 の柱穴によって掘りこまれ、覆土のくぼみに SI 148 廃絶後構築された SI 118 の焼土・炭化物細片が流入したと考えられよう。遺物は出土しなかった。

SKF151　（第26図、図版31）

MS 41 に位置している。平面形は円形を呈しており、開口部径 1.3 m、深さ 1.3 mである。断面形は袋状を呈している。最大径は底部径の 1.4 m、最小径は開口部やや下の 1.1 mである。覆土の堆積状況から自然堆積による埋没と考えられ、一部には壁の崩落も認められる。遺物は少量の縄文土器片とフレイク 3 点が出土した。

SKF164　（第27図）

NE 38・NE 39に位置し、SKF 173より新しく、SKF 165より古い。プラン確認時においては3遺構の重複状況は不明瞭であったが、土層断面図および底面レベルの相違によって新旧関係が判明した。平面形は円形を呈していたと考えられ、開口部径1.48 m、深さ67 cmである。断面形はフラスコ状を呈している。最大径は底部径の2.2 m、最小径は開口部の1.48 mである。底面は堅く締まっており、中央やや北寄りに径18 cm、深さ18 cmの小ピット、南壁際に径18 cm、深さ30 cmの小ピットがある。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土はブロック混入土の割合が高いことから人為的な埋土であろう。遺物は出土しなかった。

SKF165　（第27図）

ND 38・NE 38位置し、SKF 164・SKF 173より新しい。プラン確認時においては3遺構の重複状況は不明瞭であったが、土層断面図および底面レベルの相違によって新旧関係が判明した。平面形は円形を呈していたと考えられ、開口部径2 m、深さ40 cmである。断面形は袋状を呈していたと考えられるが、風倒木による攪乱によって定かではない。最大径は開口部径の2 m、最小径は開口部やや下の1.73 mである。底面は堅くしまっている。覆土中に炭化物細片を多量に含んでおり、人為的な埋土であろう。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク2点が出土した。

SKF173　（27図）

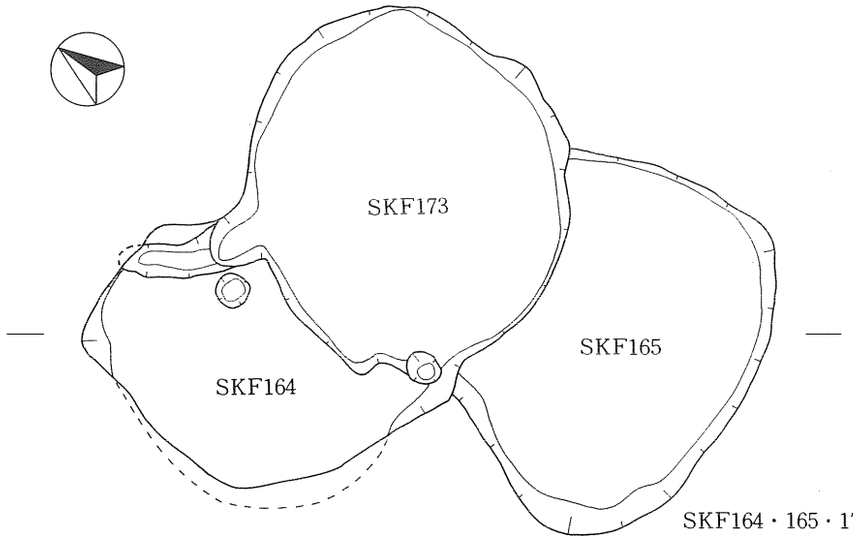
ND 38・NE 38・ND 39・NE 39に位置し、SKF 164・SKF 165より古い。プラン確認時において3遺構の重複状況は不明瞭であったが、土層断面図および底面レベルの相違によって新旧関係が判明した。平面形は円形を呈しており、開口部径1.9 m、深さ89 cmである。断面形はフラスコ状を呈していたと考えられる。最大径・最小径は他の遺構との重複によって定かではない。底面は堅くしまっている。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。遺物はごく少量の縄文土器片とフレイク1点が出土した。

SKF177　（第27図）

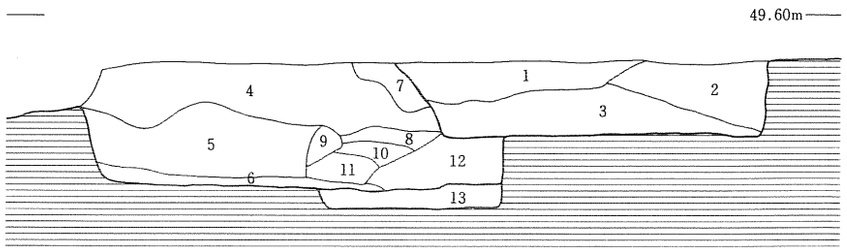
NG 37に位置し、SI 171より古い。平面形は円形を呈しており、開口部径1.1 m、深さ1.27～1.44 mで、底面が西から東へわずかに傾斜している。断面形は袋状を呈している。最大径は底部径で1.2 m、最小径は開口部やや下の90 cmである。覆土中には炭化物細片を多量に含んでいる。覆土は全体的にしまりがなく、SI 171構築時に人為的に埋められたものであろう。遺物は出土しなかった。

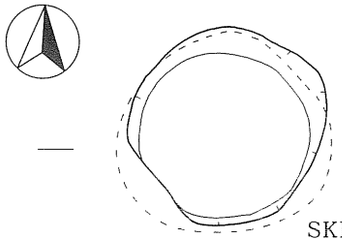
SKF178　（第27図・図版31）

NG 35に位置し、SI 171より古い。平面形は円形を呈しており、最大径1.1 m、深さ87 cmである。断面形はフラスコ状を呈している。最大径は開口部径と底部径で1.1 m、最小径は開口部

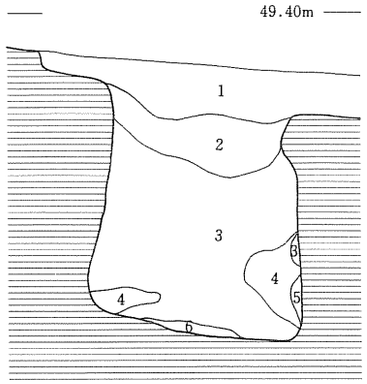


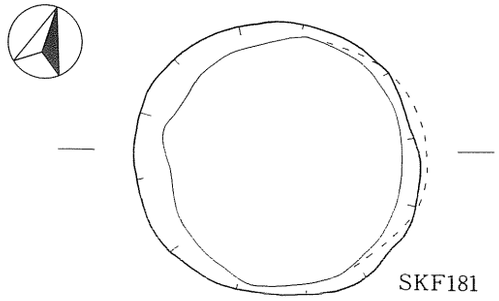

SKF164・165・173



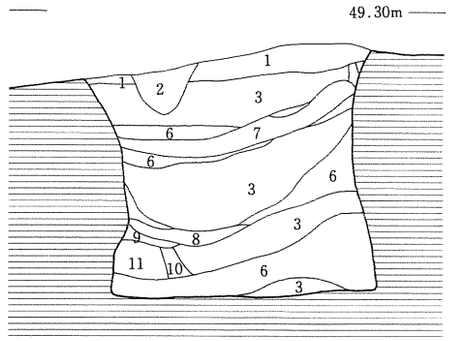



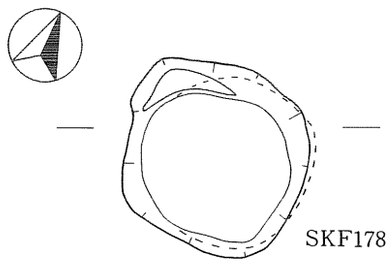
SKF177



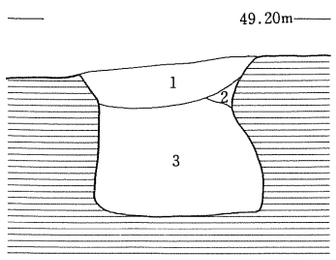



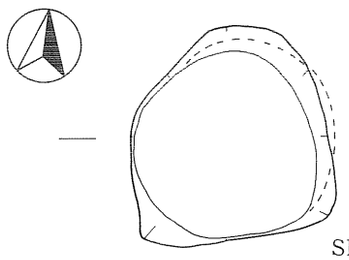
SKF181



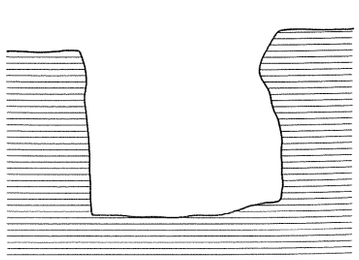



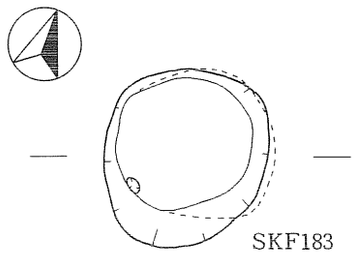
SKF178



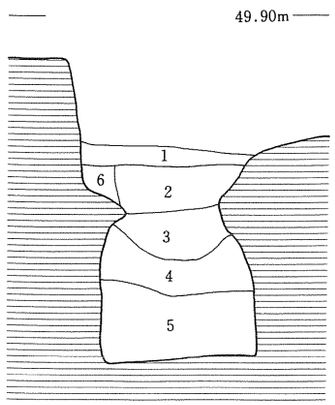



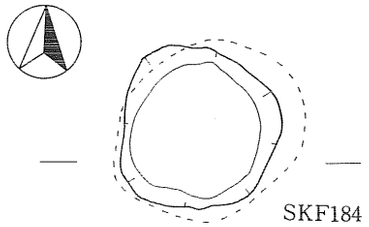
SKF182



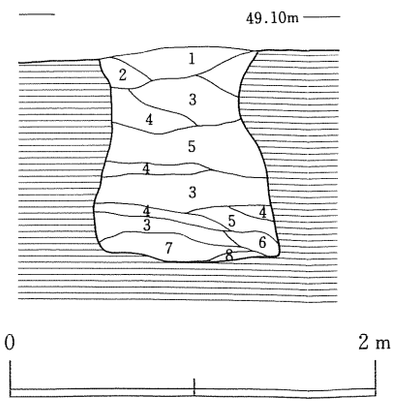



SKF183



SKF184







第27図　SKF164・165・173・177・178・181～184フラスコ状土坑

SKF164　1　褐色土　7.5YR4/6
165　2　明褐色土　7.5YR5/8
173　3　褐色土　2.5YR4/6
明褐色土　7.5YR3/3　混合土炭化物多量に混入
4　暗褐色土　7.5YR3/2
5　褐色土　7.5YR4/4
6　褐色土　7.5YR4/3
7　褐色土　7.5YR4/4
8　褐色土　2.5YR4/4
明褐色土　7.5YR3/3　} 混合土
9　極暗褐色土　7.5YR2/3
10　黒褐色土　7.5YR3/2
11　黒褐色土　7.5YR3/2
明褐色土　7.5YR5/8　} 混合土
12　明褐色土　7.5YR5/8
13　灰褐色土　7.5YR5/2

SKF177　1　褐色土　7.5YR4/4　炭化物多量に混入
2　褐色土　7.5YR4/4
3　明褐色土　7.5YR5/8　炭化物多量に混入
4　褐色土　7.5YR4/6
5　明黄褐色砂質土　10YR7/6
6　明褐色砂質土　7.5YR5/6

SKF181　1　褐色土　10YR3/6
2　褐色土　10YR4/4
3　褐色土　10YR4/6
4　褐色土　10YR4/6
5　黄褐色土　10YR5/6
6　黄褐色土　10YR5/6
7　褐色土　10YR4/6
8　にぶい黄褐色シルト質土　10YR5/4
9　黄褐色シルト質土　10YR5/6
10　褐色土　10YR4/6
黄褐色シルト質土　10YR5/6　混合土
11　黄褐色シルト質土　10YR5/6

SKF178　1　褐色土　7.5YR4/4
2　褐色土　7.5YR4/6
暗褐色土　7.5Y R 3/4　} 混合土
3　暗褐色土　7.5YR3/4

SKF183　1　褐色土　10YR4/6
2　褐色土　10YR4/6
3　褐色土　10YR4/6
4　褐色土　10YR4/6
5　褐色土　10YR4/6
6　褐色土　10YR4/6
1～6層は地山土ブロックの混入比率によって区分される

SKF184　1　褐色土　10YR4/6
2　褐色土　10YR4/6
3　暗褐色土　10YR3/4
4　暗褐色土　10YR3/4
黄褐色土　10YR5/6　} 混合土
5　明褐色土　10YR3/4
6　明黄褐色シルト質土　10YR6/6
7　明黄褐色シルト質土　10YR6/6
8　明黄褐色シルト質土　10YR6/6
暗褐色土　10YR3/4　} 混合土

からやや下の95㎝である。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土は全体的にしまりがなく、ブロック混入土の割合も高いことからSI 171構築時に人為的に埋められたものであろう。遺物は出土しなかった。

SKF181　（第27図、図版31）

NG 37・NG 38に位置し、SI 171より古い。平面形は円形を呈しており、開口部径1.5 m、深さ1.38 mである。断面形は袋状を呈している。最大径は開口部径の1.5 m、最小径は開口部から約60㎝下の1.35 mである。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土は全体的にしまりがなく、ブロック混入土の割合も高いことからSI 171構築時に人為的に埋められたものであろう。覆土全体が褐色土と黄褐色土の互層になっているのは人為的な埋め立ての際の作業工程を示すものであろう。遺物は出土しなかった。

SKF182　（第27図）

NG 37に位置し、SI 171より古い。平面形は円形を呈しており、開口部径1.2 m、深さ96㎝である。断面形は袋状を呈している。最大径は開口部径と底部径で1.2 m、最小径は開口部やや下の1 mである。覆土はSKF 183と同じ様相を呈していた。遺物は出土しなかった。

SKF183　（第27図）

NG 38・NF 38に位置している。平面形は円形を呈しており、開口部径1 m、深さ1.09 mである。断面形はフラスコ状を呈している。最大径は開口部で、最小径は開口部やや下の75㎝である。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土は全体的にしまりがなく、ブロック混入土の割合も高いことから人為的な埋土であろう。遺物は出土しなかった。

SKF184　（第27図）

NG 35に位置し、SI 171より古い。平面形は円形を呈しており、開口部径90㎝、深さ1.22 mである。断面形は袋状を呈している。最大径は底部径の1 m、最小径は開口部やや下の70㎝である。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土は全体的にしまりがなく、ブロック混入土の割合も高いことから人為的な埋土であろう。遺物は出土しなかった。

SKF186　（第26図）

MN 48・MO 48に位置している。平面形は円形を呈しており、開口部径1 m、深さ54㎝ある。最大径は開口部の1 m、最小径は底部の85㎝である。覆土は全体的にしまりがなく、ブロック混入土の割合も高いことから人為的な埋土であろう。遺物は出土しなかった。

（3）　陥し穴状遺構

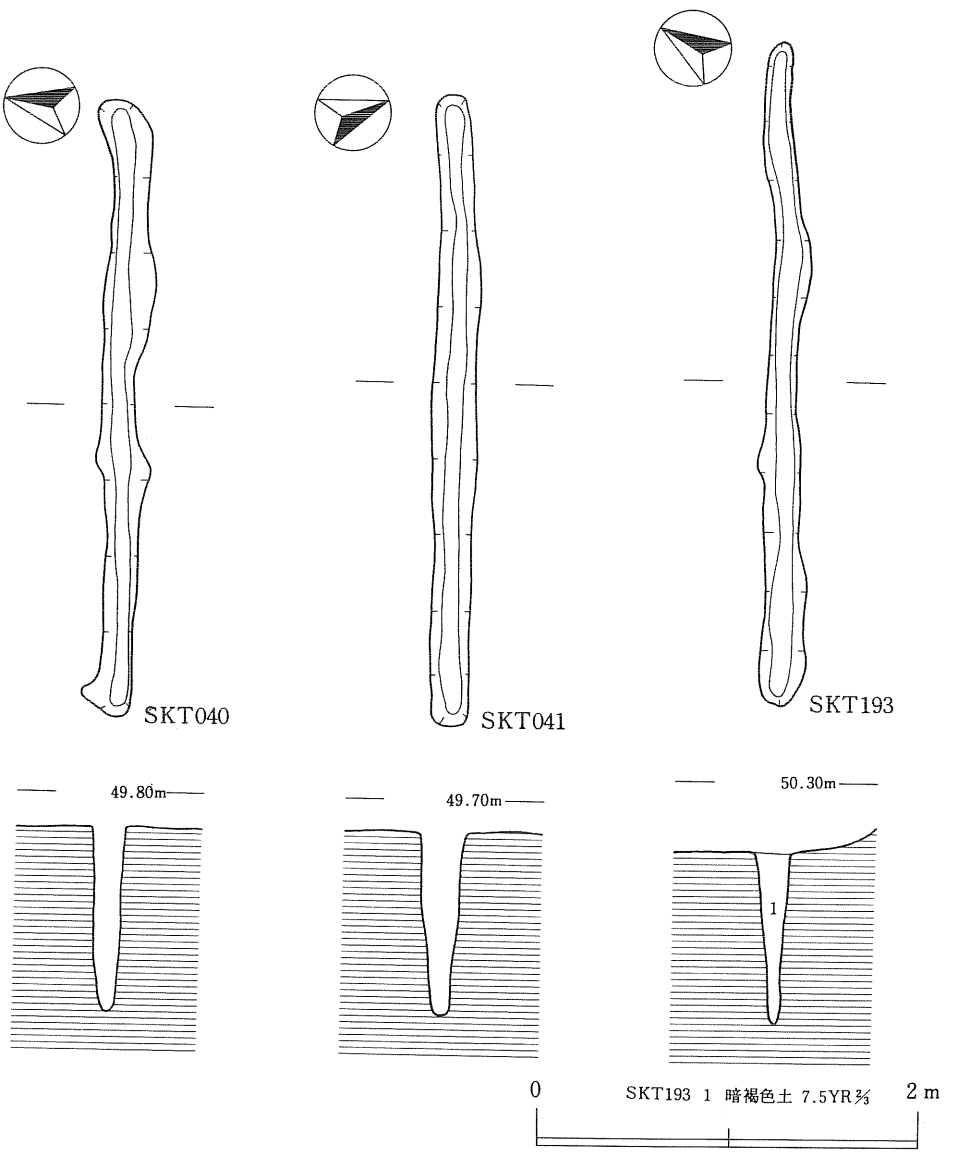
SKT040　（第28図）

MA 41・MB 42に位置している。平面形は長楕円形を呈しており、開口部の長軸3.72 m、短軸27㎝、底部の長軸3.18 m、短軸8㎝、深さ99㎝である。長軸断面形はほぼ長方形を呈して

おり、短軸断面形はＶ字形を呈している。覆土は全体的にしまりがなく、一部に壁の崩落土がブロック状に混入していることから自然埋没であろう。遺物は出土しなかった。

SKT041　（第28図、図版32）

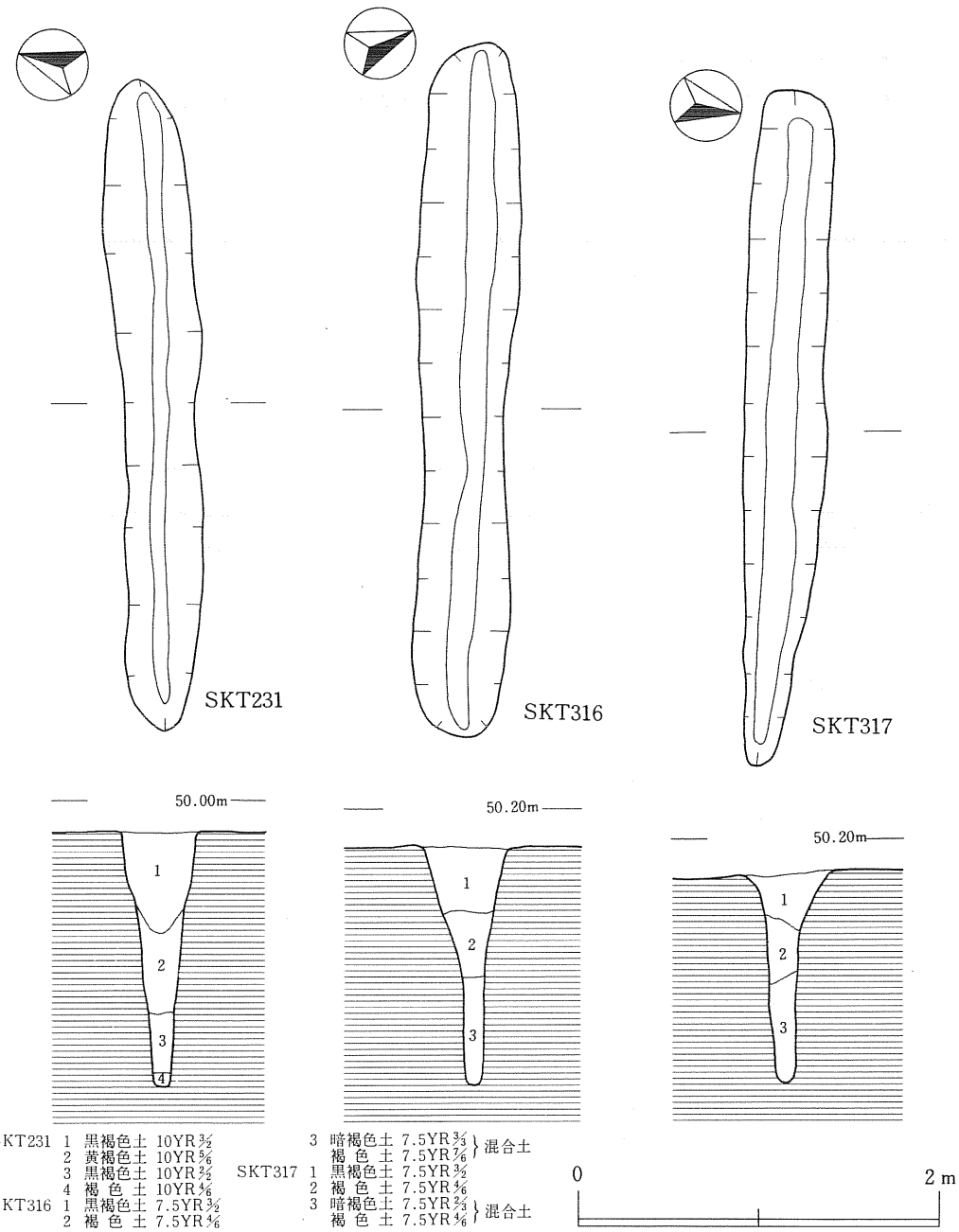
MA 39に位置している。平面形は長楕円形を呈しており、開口部の長軸3.34 m、短軸24 cm、底部の長軸3.21 m、短軸9 cm、深さ95 cmである。長軸断面形はほぼ長方形を呈しており、短軸断面形はＶ字形を呈している。覆土は全体的にしまりがなく、一部に壁の崩落土がブロック状に混入していることから自然埋没であろう。遺物は出土しなかった。




第28図　SKT040・041・193陥し穴状遺構

SKT193　（第28図）

MM 36・MN 36に位置している。平面形は長楕円形を呈しており、開口部の長軸3.54 m、短軸23 cm、底部の長軸3.42 m、短軸11 cm、深さ88 cmである。長軸断面形はほぼ長方形を呈しており、短軸断面形はV字形を呈している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土




第29図　SKT231・316・317陥し穴状遺構

は全体的にしまりがなく、一部に壁の崩落土がブロック状に混入していることから自然埋没であろう。遺物は出土しなかった。

SKT231　（第29図、図版32）

ME 38・MF 38に位置し、SI 230より新しい。平面形は長楕円形を呈しており、開口部の長軸3.65m、短軸47cm、底部の長軸3.45m、短軸8cm、深さ1.42mである。長軸断面形はほぼ長方形を呈しており、短軸断面形はV字形を呈している。覆土は全体的にしまりがなく、一部に壁の崩落土がブロック状に混入していることから自然埋没であろう。遺物は出土しなかった。

SKT316　（第29図、図版32）

MJ 37・MK 37・MK 38に位置している。平面形は長楕円形を呈しており、開口部の長軸3.9 m、短軸58 cm、底部の長軸3.82 m、短軸17 cm、深さ1.44 mである。長軸断面形はほぼ長方形を呈しており、短軸断面形はV字形を呈している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土は全体的にしまりがなく、一部に壁の崩落土がブロック状に混入していることから自然埋没であろう。遺物は出土しなかった。

SKT317　（第29図、図版32）

ML 38・MM 38に位置している。平面形は長楕円形を呈しており、開口部の長軸3.8 m、短軸46 cm、底部の長軸3.54 m、短軸16 cm、深さ1.15 mである。長軸断面形はほぼ長方形を呈しており、短軸断面形はU字形を呈している。覆土中に炭化物細片をわずかに含んでいる。覆土は全体的にしまりがなく、一部に壁の崩落土がブロック状に混入していることから自然埋没であろう。遺物は出土しなかった。

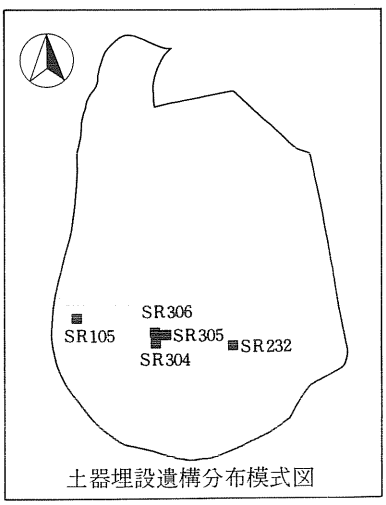
（4）　土器埋設遺構

SR105　（第30図、図版33）

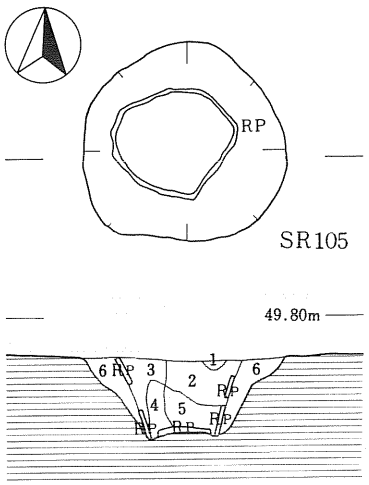
NE 41に位置する。土器は径50 cm、深さ22 cmの掘形に正位に埋設されているが、口縁部を欠損している。土器は埋設後に体部のみ沈下しており、体部下端は土器底部より1～2 cm下がる。土器内には炭化物細片をわずかに含む褐色土と暗褐色土が充塡されており、掘形埋土は地山土ブロック・炭化物細片を含む暗褐色土である。土器は体部に斜縄文を施した深鉢形であるが細片となっており、復元不可能である。

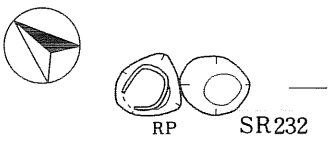
SR232　（第30図、図版33・41）

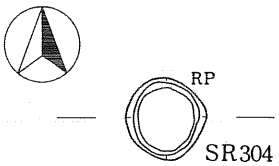
ME 38に位置する。土器は径35 cm、深さ22 cmの掘形に底部を下にしてやや西に傾いた状態で埋設されており、口縁部を欠損している。埋設土器に隣接して径30 cm、深さ45 cmのピットが存在するが、両者の関係は不明である。土器内には焼土粒子・炭化物細片をわずかに含む暗褐色土が充塡されており、掘形埋土は地山土ブロック・炭化物細片を含む褐色土である。土器は口頸部がわずかに外反する浅鉢形土器で、器高30.5 cmに推定される。外面には底部付近を除

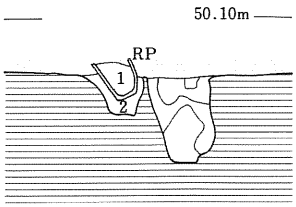


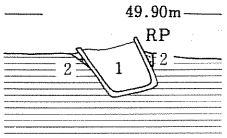

土器埋設遺構分布模式図

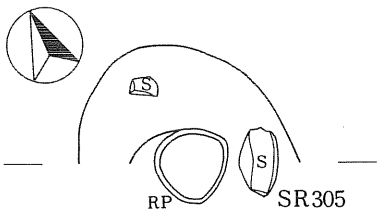


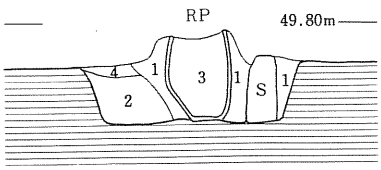



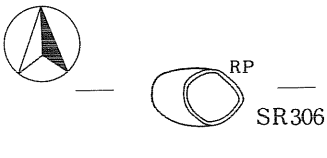



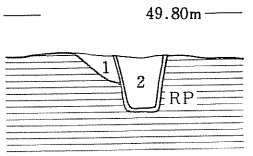



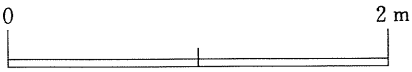




SR105　1　暗褐色土　10YR3/4
　　2　褐　色　土　10YR4/4　混合土
　　　　黄褐色土　10YR5/6　混合土
　　3　褐　色　土　10YR4/4
　　4　黄褐色土　10YR5/6
　　5　暗褐色土　10YR3/4
　　6　暗褐色土　10YR3/4
SR232　1　暗褐色土　10YR3/3
　　2　褐　色　土　7.5YR4/4
SR305　1　褐　色　土　10YR4/6
　　2　黄褐色土　10YR5/6
　　3　暗褐色土　10YR3/4
　　4　褐　色　土　10YR4/4
SR304　1　暗褐色土　7.5YR3/2
　　2　赤褐色土　2.5YR4/8　（焼土）
SR306　1　暗褐色土　10YR3/4
　　2　暗褐色土　10YR3/3

第30図　SR105・232・304～306土器埋設遺構

いて網目状撚糸文が施され、内面は煤状炭化物が全体に付着している。

SR304　（第30図、図版34）

MO 37に位置し、SI 190に伴うものと考えられる。土器は径17㎝、深さ16㎝の掘形に底部を下に西に傾いた状態で埋設されているが、口縁部を欠損している。土器内には炭化物細片をわずかに含む暗褐色土が充塡されており、掘形埋土は赤褐色の焼土である。

SR305　（第30図、図版34）

MN 37に位置し、SI 190に伴うものと考えられる。土器は径58㎝、深さ24㎝の掘形に正位に埋設されているが、口縁部を欠損している。土器内には褐色土が充塡されており、掘形埋土は地山土ブロックを含む褐色土である。掘形埋土中には礫が含まれているが、土器との関係は不明である。

SR306　（第30図、図版34）

MN 37に位置し、SI 190に伴うものと考えられる。土器は楕円形を呈する15×25㎝、深さ14㎝の掘形に正位に埋設されているが、口縁部を欠損している。土器内には焼土をわずかに含む暗褐色土が充塡されており、掘形埋土は地山土ブロックを含む暗褐色土である。

（5）　配石遺構

SQ219　（第31・78図、図版35）

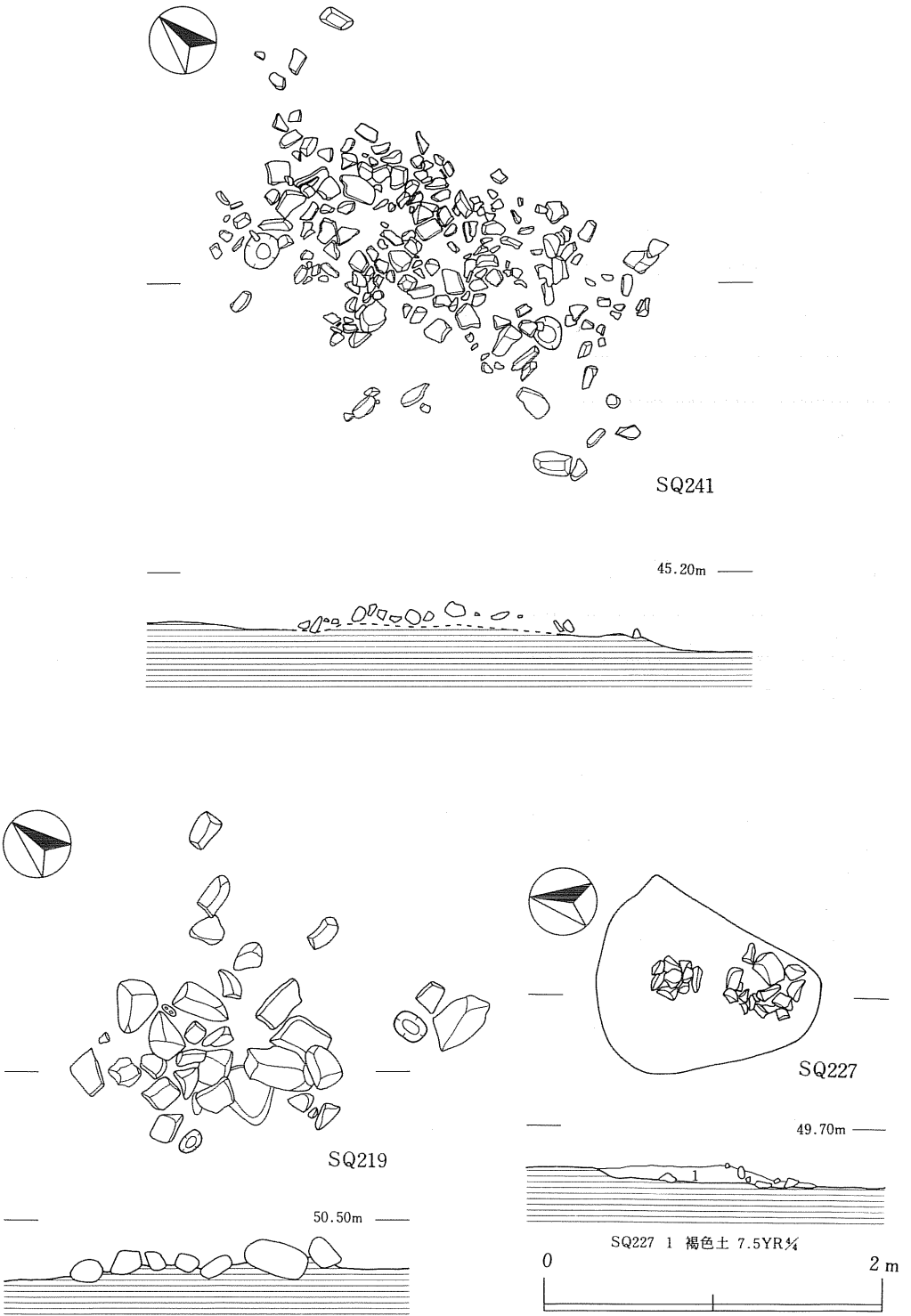
MK 32・ML 32に位置している。SQ 219は大型住居跡に囲やれた東西27ｍ、南北40ｍの意図的空間の中央に位置し、他の遺構とはその目的を異にしている。配石は人頭大の河原石を中心に大小約30個の石から構成されている。配石は後世の攪乱により一部原形を失っているものの径約1.5ｍの規模であったと推定される。配石の下に掘り込みやピットはめられず、地山面に石を配しただけである。配石の中に凹石が1点（第78図314）含まれている。凹石は4方向に数多くの凹みをもつものである。

SQ227　（第31図、図版36）

ME 33に位置している。配石はこぶし大の石を中心に構成されており、2つのまとまりからなる。北のまとまりは9個の石から構成されており、径約30㎝の規模である。南のまとまりは16個の石から構成されており、径約50㎝の規模である。北のまとまりの下から50×40㎝、深さ10㎝のピットを検出したが、配石との関係は不明である。配石の上面を焼土が東西1.1ｍ×南北1.3ｍの範囲で薄く覆っているが、配石に焼けた痕跡は認められない。南のまとまりの中に凹石が1点含まれている。

SQ241　（第31図、図版35）

MB 25に位置している。配石はこぶし大の石を中心に構成されており、その規模は東西1.85ｍ、南北3.2ｍである。配石の下から径20㎝、深さ10～15㎝のピット2個を検出したが、配




第31図　SQ219·227·241配石遺構

石との関係は不明である。配石中に石器は含まれていない。

（6）　溝状遺構

SD216　（第76・77図）

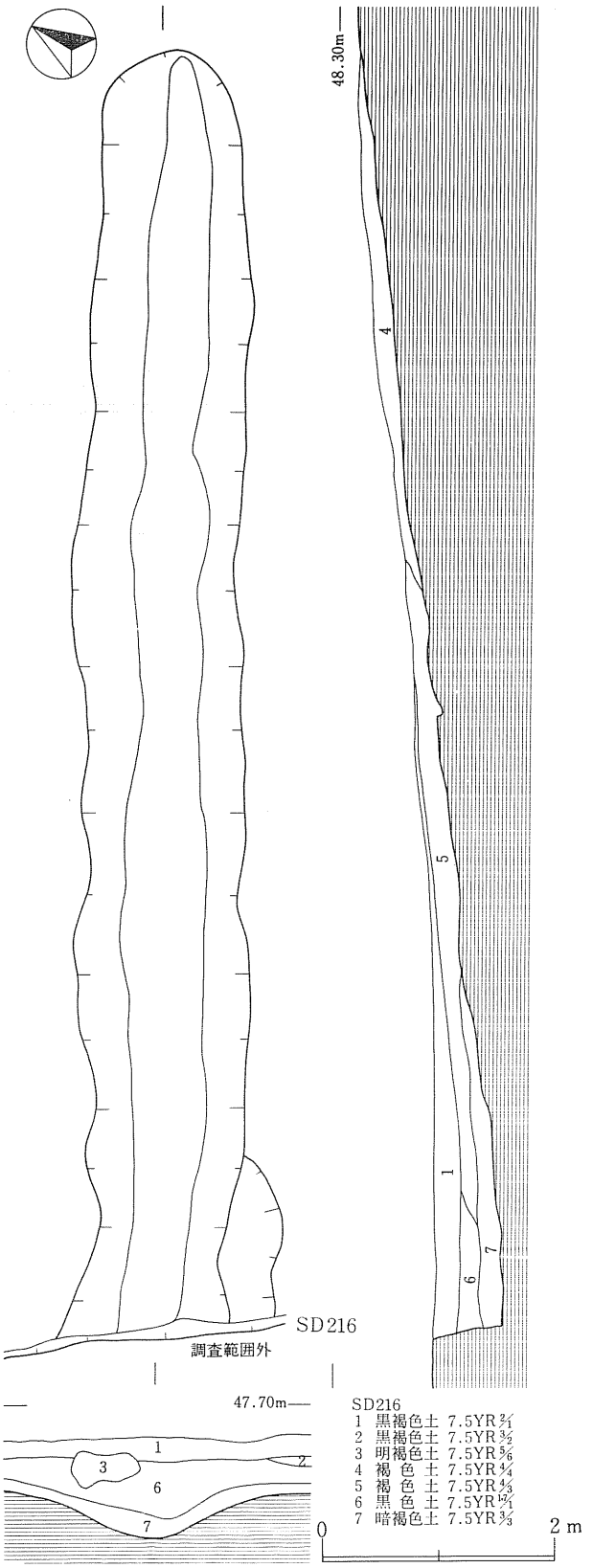
NB 30・NC 29・NC 30・ND 29・ND 30・NE 29に位置する。上面幅1.04～1.85 m、底面幅28～50 ㎝、深さ5～35 ㎝の溝状遺構で、北東から南西方向に下り、底面でのレベル差は1.2 mである。遺構南西部は調査区外に延びており、現存長で10.75 mを計る。 5層と7層に縄文土器片が含まれており、3層は地山土のブロックである。遺物はごく少量の縄文土器片と半円状扁平打製石器1点（第76図294）、石錘1点（第77図301）が出土している。半円状扁平打製石器は欠損しているが、短辺にも両面からの打ち欠きを有し、両面に凹みをもっている。石錘は大型のもので形状から半円状扁平打製石器の未製品とも考えられる。多孔質の石材（凝灰岩）を素材とし、3方から抉りが入る。

小　　結

遺構の分布状況は、平坦面である中央部から緩傾斜面の南西部に集中しており、北部の平坦面、南部の傾斜面に位置するものは少ない（第33図）。

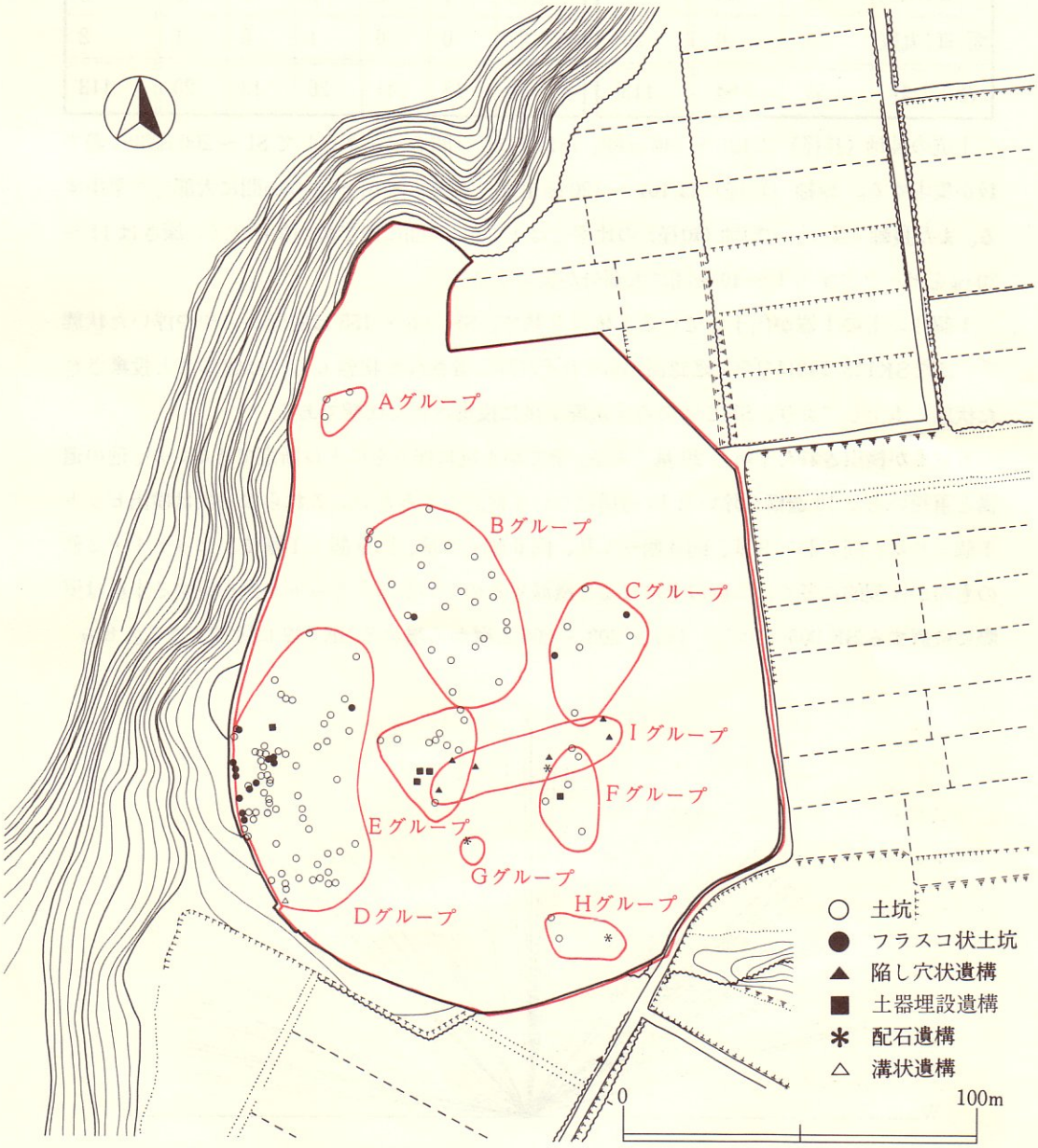
①土坑

土坑の平面形態は円形ないし楕円形を呈するものが主体を占め、方形・不整形を呈するものは極めて稀である（第1・2表）。断面形は底面が平坦なものをⅠ、




第32図　SD216溝状遺構

底面に凹凸のあるものをⅡ、底面が丸底を呈するものをⅢとし、壁の立ち上がりが直線的に外傾するものをa、孤を描くものをbとして遺構の無いⅢ-bを除きⅠ-a、Ⅰ-b、Ⅱ-a、Ⅱ-b、Ⅲ-aに分類した。底面は平坦なものが過半数を占め、丸底を呈するものは少ない。壁の立ち上がりはa、bほぼ同数で、両者による差異は認められない。分類別では底面の平坦なものに外傾する例が多く、凹凸するものに孤を描く例が多い。これらと平面形との関係は第2表に見られるようにⅠ-bが円形・楕円形とも多く、Ⅱ-aが続く。




第33図　土坑・その他の遺構分布図

平面形態が楕円形を呈する土坑の長軸(長径)が指す方向は、第34図に見るようになんら規則性を認めることができない。

**第1表　土坑断面形分類表**

| | | 壁の立ち上がり | | |
|---|---|---|---|---|
| | | a：弧 | b：外傾 | 合　計 |
| 底面 | Ⅰ：平坦 | 13 | 41 | 54 |
| | Ⅱ：凹凸 | 26 | 13 | 39 |
| | Ⅲ：丸底 | 20 | 0 | 20 |
| 合　計 | | 59 | 54 | 113 |

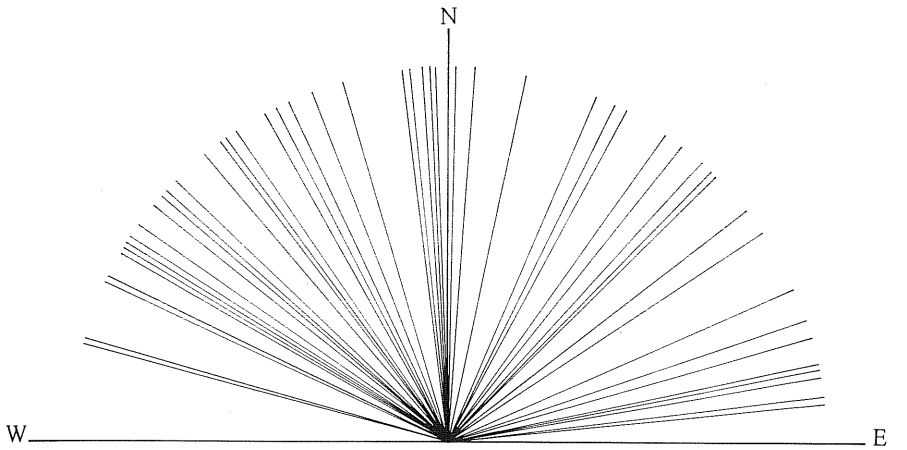
**第2表　土坑平面形・断面形分類長**

| | Ⅰ－a | Ⅰ－b | Ⅱ－a | Ⅱ－b | Ⅲ－a | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 円　形 | 4 | 15 | 6 | 3 | 7 | 35 |
| 楕円形 | 8 | 26 | 14 | 7 | 12 | 67 |
| 不整形 | 1 | 0 | 5 | 3 | 0 | 9 |
| 方　形 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 |
| 合　計 | 13 | 41 | 26 | 13 | 20 | 113 |

土坑の長軸（長径）は121～140㎝間、181～200㎝間をピークとして81～200㎝間に過半数が集中する。短軸（短径）は101～120㎝をピークとする61～180㎝間に大部分が集中する。また長軸（長径）・短軸（短径）の比率では1.0～1.4間に過半数が集中する。深さは11～20㎝をピークとする1～40㎝間に大部分が集中する。

1個体以上の土器が出土している土坑は5基で、SK 106・155は底面からやや浮いた状態で、またSK113・142はプラン確認面からそれぞれ押し潰された状態もしくは個体ごと投棄された状態で出土しており、SK 244のみ土坑廃棄後に投棄された状態である。

ピットが検出された土坑は29基である。全てが土坑に伴うものとは断定できないが、他の遺構と重複のある10遺構を除いた19遺構について検討してみたい。これらの内訳は検出ピット1個―6基、同2個―9基、同3個―1基、同6個―2基、同9個―1基で、ピット1・2個のものが圧倒的に多く、3個以上になると激減するのがわかる。ピット1個を有する土坑は壁際に位置するSK 005・007・144・203・206と壁から離れるSK 142に区別できる。ピッ




**第34図　土坑長軸方位分布**

## 第３表　土坑一覧表(1)

| グループ | 遺構名 | 平面形 | 断面形 | 長径（cm） | 短径（cm） | 深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | SK001 | 円形 | Ⅰ－a | 98 | 97 | 20 | 遺物なし |
| | SK004 | 円形 | Ⅱ－b | 111 | 96 | 11 | 遺物なし |
| | SK002 | 円形 | Ⅲ－a | 124 | 105 | 20 | 遺物なし |
| B | SK013 | 円形 | Ⅰ－a | 185 | 166 | 19 | 土器 |
| | SK035 | 円形 | Ⅰ－a | 198 | 159 | 9 | 遺物なし |
| | SK185 | 円形 | Ⅰ－a | 112 | 110 | 33 | 石器 |
| | SK038 | 円形 | Ⅰ－b | 83 | 79 | 14 | 遺物なし |
| | SK006 | 円形 | Ⅱ－a | 128 | 112 | 42 | 遺物なし |
| | SK009 | 円形 | Ⅱ－a | 118 | 100 | 9 | 遺物なし |
| | SK188 | 円形 | Ⅱ－b | 119 | 116 | 29 | 遺物なし |
| | SK011 | 円形 | Ⅲ－a | 143 | 115 | 31 | 遺物なし |
| | SK021 | 円形 | Ⅲ－a | 65 | 63 | 20 | 遺物なし |
| | SK036 | 円形 | Ⅲ－a | 90 | 86 | 15 | 遺物なし |
| | SK309 | 円形 | Ⅲ－a | 180 | (143) | 32 | 遺物なし |
| | SK018 | 楕円形 | Ⅰ－a | 158 | 121 | 15 | 遺物なし |
| | SK198 | 楕円形 | Ⅰ－a | 242 | 178 | 17 | 遺物なし |
| | SK308 | 楕円形 | Ⅰ－a | 216 | (99) | 15 | 遺物なし |
| | SK191 | 楕円形 | Ⅰ－b | 288 | 213 | 4 | 遺物なし |
| | SK307 | 楕円形 | Ⅰ－b | 264 | 157 | 17 | 土器・石器 |
| | SK008 | 楕円形 | Ⅱ－a | 188 | 140 | 11 | 土器 |
| | SK019 | 楕円形 | Ⅱ－a | 133 | 88 | 15 | 土器 |
| | SK187 | 楕円形 | Ⅱ－a | 194 | 153 | 9 | 土器・石器 |
| | SK007 | 楕円形 | Ⅱ－b | 200 | 105 | 24 | 遺物なし |
| | SK020 | 楕円形 | Ⅲ－a | 200 | 152 | 13 | 土器 |
| | SK197 | 楕円形 | Ⅲ－a | 256 | 161 | 15 | 遺物なし |
| | SK313 | 楕円形 | Ⅲ－a | 372 | 259 | 35 | 遺物なし |
| | SK005 | 不整形 | Ⅱ－a | 95 | 72 | 25 | 遺物なし |
| C | SK043 | 円形 | Ⅰ－b | 73 | 72 | 28 | 遺物なし |
| | SK027 | 楕円形 | Ⅰ－b | 128 | 98 | 8 | 土器・石器 |
| | SK028 | 楕円形 | Ⅱ－a | 122 | 93 | 7 | 遺物なし |
| | SK033 | 楕円形 | Ⅱ－a | 180 | 123 | 8 | 土器・石器 |
| | SK029 | 不整形 | Ⅰ－a | 124 | 89 | 10 | 遺物なし |
| | SK026 | 不整形 | Ⅱ－a | 329 | 239 | 27 | 土器・石器 |
| | SK039 | 不整形 | Ⅱ－b | 175 | 123 | 16 | 遺物なし |
| D | SK104 | 円形 | Ⅰ－b | 193 | 173 | 71 | 土器・石器 |
| | SK106 | 円形 | Ⅰ－b | 255 | 233 | 26 | 土器・石器 |
| | SK122 | 円形 | Ⅰ－b | 270 | 247 | 47 | 遺物なし |
| | SK136 | 円形 | Ⅰ－b | 95 | 89 | 34 | 遺物なし |
| | SK139 | 円形 | Ⅰ－b | 113 | 102 | 25 | 遺物なし |
| | SK140 | 円形 | Ⅰ－b | 142 | 128 | 35 | 石器 |
| | SK157 | 円形 | Ⅰ－b | 166 | 147 | 19 | 土器 |
| | SK159 | 円形 | Ⅰ－b | 98 | 87 | 69 | 石器 |
| | SK161 | 円形 | Ⅰ－b | 84 | 83 | 19 | 遺物なし |
| | SK203 | 円形 | Ⅰ－b | 148 | 119 | 17 | 遺物なし |
| | SK132 | 円形 | Ⅱ－a | 119 | 107 | 11 | 遺物なし |
| | SK222 | 円形 | Ⅱ－a | 106 | 103 | 42 | 遺物なし |
| | SK204 | 円形 | Ⅱ－b | 107 | 107 | 35 | 土器 |
| | SK115 | 円形 | Ⅲ－a | 78 | 72 | 34 | 土器・石器 |
| | SK146 | 円形 | Ⅲ－a | 123 | 120 | 22 | 遺物なし |
| | SK109 | 楕円形 | Ⅰ－a | 170 | 110 | 24 | 遺物なし |
| | SK163 | 楕円形 | Ⅰ－a | 290 | 184 | 18 | 土器 |
| | SK207 | 楕円形 | Ⅰ－a | 314 | 237 | 30 | 土器・石器 |
| | SK209 | 楕円形 | Ⅰ－a | 245 | 180 | 22 | 土器 |
| | SK100 | 楕円形 | Ⅰ－b | 159 | 117 | 20 | 土器・石器 |
| | SK101 | 楕円形 | Ⅰ－b | 182 | 125 | 60 | 土器・石器 |
| | SK102 | 楕円形 | Ⅰ－b | 200 | 141 | 22 | 遺物なし |
| | SK103 | 楕円形 | Ⅰ－b | (226) | 174 | 27 | 石器 |

## 第4表　土坑一覧表(2)

| グループ | 遺構名 | 平面形 | 断面形 | 長径（cm） | 短径（cm） | 深さ（cm） | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| D | SK112 | 楕円形 | Ⅰ－b | 145 | 117 | 16 | 遺物なし |
| | SK113 | 楕円形 | Ⅰ－b | 196 | 159 | 24 | 土器・石器 |
| | SK120 | 楕円形 | Ⅰ－b | 197 | 157 | 20 | 土器 |
| | SK129 | 楕円形 | Ⅰ－b | 189 | 149 | 33 | 石器 |
| | SK134 | 楕円形 | Ⅰ－b | 127 | 83 | 37 | 土器・石器 |
| | SK137 | 楕円形 | Ⅰ－b | 144 | 104 | 20 | 遺物なし |
| | SK154 | 楕円形 | Ⅰ－b | 80 | 66 | 27 | 土器・石器 |
| | SK158 | 楕円形 | Ⅰ－b | 160 | 84 | 14 | 土器・石器 |
| | SK160 | 楕円形 | Ⅰ－b | 273 | 217 | 10 | 遺物なし |
| | SK162 | 楕円形 | Ⅰ－b | 273 | 169 | 9 | 土器 |
| | SK174 | 楕円形 | Ⅰ－b | 154 | 83 | 34 | 土器・石器 |
| | SK201 | 楕円形 | Ⅰ－b | 91 | 72 | 18 | 土器 |
| | SK202 | 楕円形 | Ⅰ－b | 192 | 117 | 19 | 遺物なし |
| | SK205 | 楕円形 | Ⅰ－b | 311 | 171 | 22 | 遺物なし |
| | SK117 | 楕円形 | Ⅱ－a | 178 | 132 | 18 | 土器・石器 |
| | SK138 | 楕円形 | Ⅱ－a | 242 | 170 | 15 | 土器・石器 |
| | SK141 | 楕円形 | Ⅱ－a | 174 | 130 | 31 | 土器 |
| | SK142 | 楕円形 | Ⅱ－a | 180 | 130 | 6 | 土器 |
| | SK152 | 楕円形 | Ⅱ－a | 248 | 162 | 27 | 土器・石器 |
| | SK155 | 楕円形 | Ⅱ－a | 304 | 251 | 33 | 土器・石器 |
| | SK210 | 楕円形 | Ⅱ－a | 387 | 150 | 22 | 土器・石器 |
| | SK121 | 楕円形 | Ⅱ－b | 206 | 155 | 31 | 遺物なし |
| | SK124 | 楕円形 | Ⅱ－b | 197 | 157 | 51 | 土器・石器 |
| | SK125 | 楕円形 | Ⅱ－b | 190 | 120 | 8 | 石器 |
| | SK206 | 楕円形 | Ⅱ－b | 235 | 156 | 23 | 石器 |
| | SK221 | 楕円形 | Ⅱ－b | 296 | 108 | 48 | 土器・石器 |
| | SK119 | 楕円形 | Ⅲ－a | 215 | 125 | 13 | 土器・石器 |
| | SK127 | 楕円形 | Ⅲ－a | 196 | 111 | 23 | 遺物なし |
| | SK166 | 楕円形 | Ⅲ－a | 234 | 137 | 8 | 遺物なし |
| | SK176 | 楕円形 | Ⅲ－a | 125 | 91 | 28 | 遺物なし |
| | SK179 | 楕円形 | Ⅲ－a | 92 | 76 | 16 | 石器 |
| | SK208 | 楕円形 | Ⅲ－a | 217 | 163 | 14 | 遺物なし |
| | SK233 | 楕円形 | Ⅲ－a | (72) | 141 | 8 | 遺物なし |
| | SK212 | 不整形 | Ⅱ－a | (162) | 150 | 20 | 遺物なし |
| | SK108 | 不整形 | Ⅱ－b | (125) | 104 | 61 | 遺物なし |
| | SK145 | 不整形 | Ⅱ－b | 191 | 116 | 9 | 遺物なし |
| | SK144 | 方　形 | Ⅱ－a | 218 | 216 | 22 | 遺物なし |
| | SK114 | 方　形 | Ⅲ－a | 82 | 70 | 15 | 遺物なし |
| E | SK301 | 円　形 | Ⅰ－b | 114 | 104 | 36 | 石器 |
| | SK302 | 円　形 | Ⅰ－b | 140 | 140 | 31 | 石器 |
| | SK167 | 楕円形 | Ⅰ－b | 269 | 168 | 16 | 土器 |
| | SK175 | 楕円形 | Ⅰ－b | 124 | 105 | 15 | 土器・石器 |
| | SK194 | 楕円形 | Ⅰ－b | 241 | 171 | 12 | 土器・石器 |
| | SK300 | 楕円形 | Ⅰ－b | 133 | 109 | 20 | 土器・石器 |
| | SK303 | 楕円形 | Ⅰ－b | 228 | 135 | 15 | 土器・石器 |
| | SK318 | 楕円形 | Ⅱ－a | 205 | 107 | 37 | 遺物なし |
| | SK196 | 楕円形 | Ⅱ－b | 179 | 118 | 15 | 土器・石器 |
| | SK319 | 楕円形 | Ⅲ－a | 172 | 95 | 18 | 遺物なし |
| F | SK242 | 円　形 | Ⅰ－a | 138 | 132 | 28 | 石器 |
| | SK234 | 円　形 | Ⅰ－b | 73 | 67 | 50 | 遺物なし |
| | SK228 | 円　形 | Ⅱ－a | 123 | 115 | 15 | 土器・石器 |
| | SK243 | 円　形 | Ⅱ－a | 63 | 59 | 55 | 遺物なし |
| | SK224 | 楕円形 | Ⅱ－a | 286 | 224 | 120 | 土器・石器 |
| | SK235 | 不整形 | Ⅱ－a | 107 | 56 | 14 | 遺物なし |
| G | SK226 | 楕円形 | Ⅲ－a | 114 | 77 | 40 | 土器・石器 |
| | SK225 | 不整形 | Ⅱ－a | 170 | 140 | 53 | 土器・石器 |

ト2個を有する土坑は長軸線上の両端に位置するSK 160・166とその他のSK 009・035・162・187・191・207・243に区別できる。3個以上のものではSK 163のピットが長軸線上の両端に位置している。ピットを有する土坑で留意しておきたいのは長軸線上の両端にピットが位置するSK 160・163・166である。ピットの径が約20㎝、深さ9～26㎝あり、上屋施設を想定することも可能であろうが、ここではその指摘に留めたい。

礫が覆土中ないしプラン確認面から検出された土坑は17遺構で、覆土中から検出されたSK 101・142・206・226・228とプラン確認面から検出されたSK 036・100・103・106・119・121・124・127・129・155・167・196・207・224に区別される。

また覆土の堆積状況も、土坑廃後捨場として利用したものや人為的に埋め立てられたもの、自然堆積による埋没示すものなどに区別される。

さらにSK 120出土の炭化した堅果類の果皮は、当時の食生活事情を如実に物語るものであろう。

本調査において検出された113基の土坑には前述の特徴ないし傾向が見出されるが、これらによって本稿でいう土坑の構築目的ないし使用状況を特定できるものはない。

②　フラスコ状土坑

フラスコ状土坑は、調査区西側の台地縁辺部に集中している。開口部が円形を呈するものを主体とし、断面形は袋状を呈するものが多い。覆土の堆積状態は人為的に埋められた状況を示すものが多く、遺物はほとんど含まれていない。種子・堅果類は出土していないが、他の遺跡で見られるように種子・堅果類の貯蔵に利用されたものであろう。

③　陥し穴状遺構

陥し穴状遺構の機能をいわゆる陥し穴状のものととらえるならば、平面分布状況から他の遺構との共存関係は考えにくい。SKT317は、SI180・326との切り合いによる新旧関係から、竪穴住居跡より新しいことが判明している。また竪穴住居跡は出土土器の時期などからみても大きな時期差を持たなかったと考えられる。よって、陥し穴状遺構はおそらく全ての竪穴住居跡より新しいと考えられ、一括して検出遺構中最も新しい時期に属するものと想定することができよう。また本遺跡では底面中央にピットを有する円形の「陥し穴」は検出されなかった。

④　土器埋設遺構

土器埋設遺構は、SI 190に伴うと考えられる3基を中心として東西に各1基が位置している。土器はいずれも正位ないし正位に近い状態で埋設されており、口縁部欠損している。

⑤　配石遺構

配石遺構は放射状配列の大型住居群の“核”と考えられるSQ 219を除けば、他の2基が遺跡内（集落内）においてどのような位置付けになるのか不明である。

⑥　溝状遺構

溝状遺構は、検出状況および覆土の堆積状況から台地に入り組んだ小規模な沢と考えられるが、位置などからして他の機能を有していた可能性もある。

⑦　土坑・その他の遺構の分布　（第33図）

遺構は平面的な分布によってA・B・C・D・E・F・G・H・Iグループに分けられる。

Aグループは調査区北西部の平坦面に位置し、土坑3基からなる。

Bグループは調査区中央の平坦面に位置し、土坑24基、フラスコ状土坑1基の計25基からなる。

Cグループは調査区東部の水田開墾地跡の平坦地に位置し、土坑7基、フラスコ状土坑2基の計9基からなる。本来はもっと多くの遺構が存在したと考えられる。

Dグループは調査区南部の平坦面から緩斜面にかけて位置し、土坑61基、フラスコ状土坑13基、土器埋設遺構1基、溝状遺構1条の計76遺構からなる。

Eグループは調査区中央部やや南寄りの平坦地に位置し、土坑10基、土器埋設遺構3基の計13基からなる。

Fグループは調査区南東部の緩斜面に位置し、土坑6基、土器埋設遺構1基、配石遺構1基の計8基からなる。

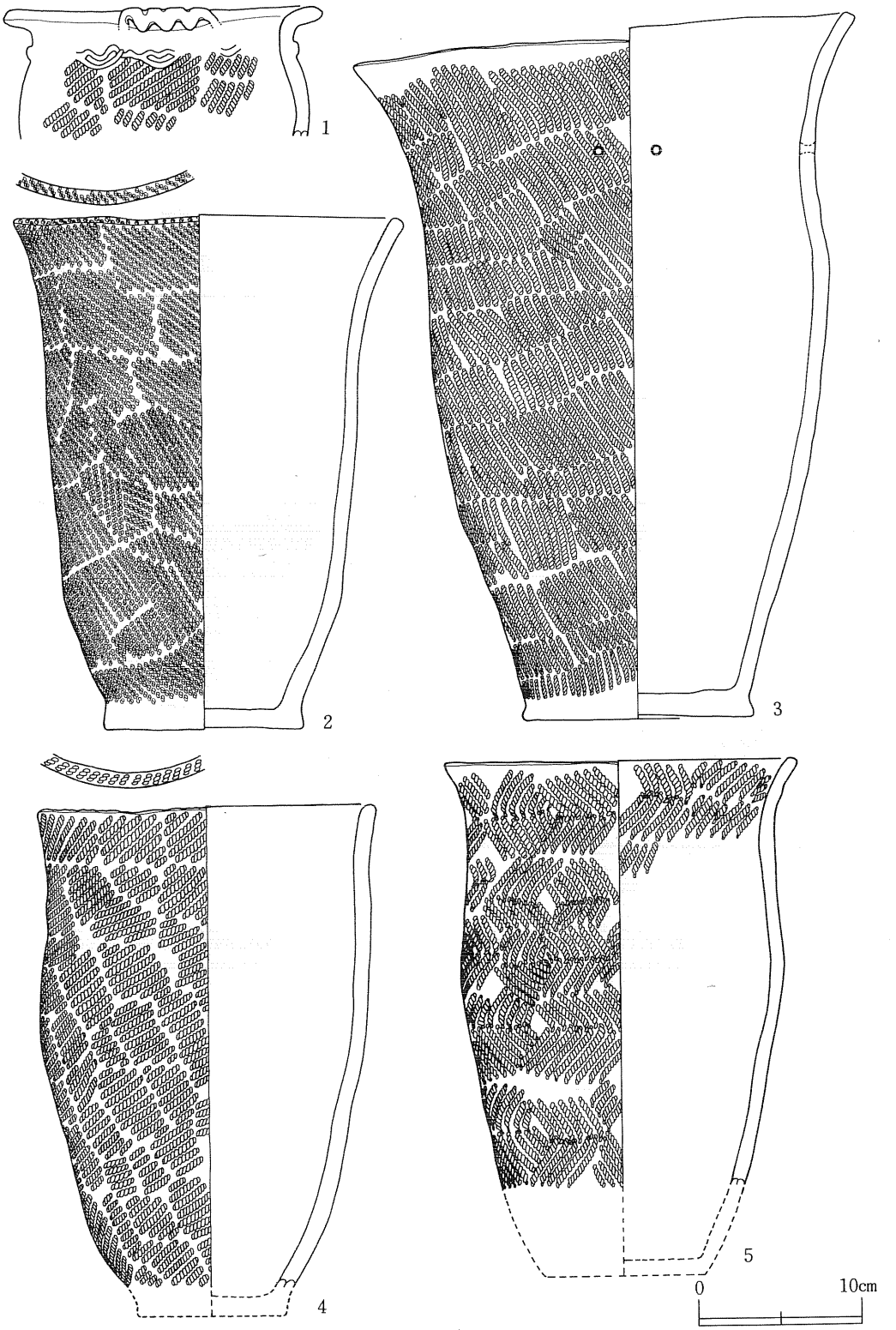
Gグループは調査区南部の平坦地に位置し、配石遺構1基でかる。広場の中心に位置し、他の遺構とは画された存在である。おそらくは広場、放射状配列大型住居群等の“核”としての位置付けがなされよう。

Hグループは調査区南東部の斜面に位置し、土坑2基、配石遺構1基の計3基からなる。

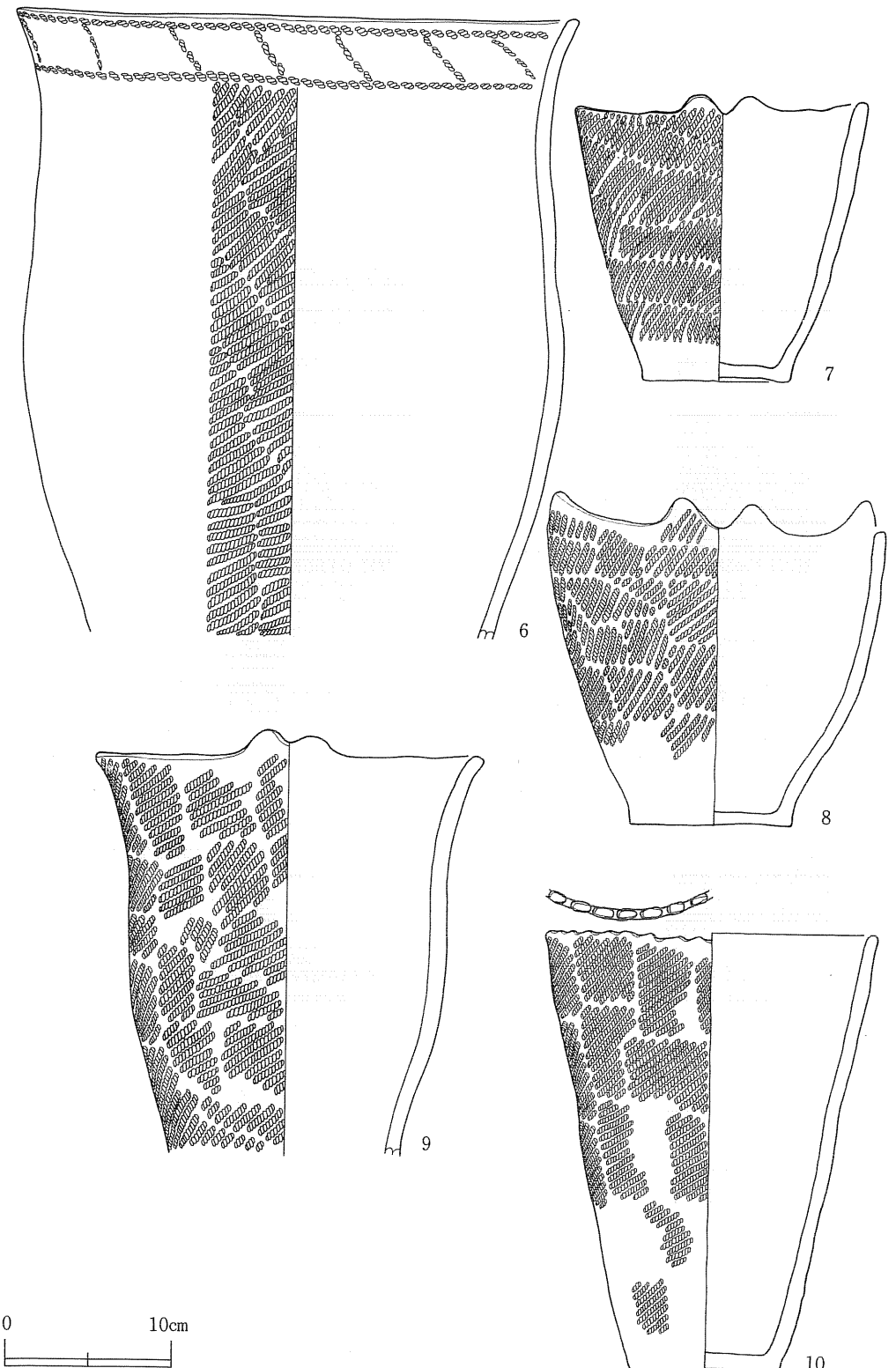
Iグループは調査区中央部の平坦面に位置し、陥し穴状遺構6基からなる。

遺構全体の分布状況としては、遺跡の南半に集中している。各グループの配置は、Gグループを中心（“核”）とする広場をおおよそ取り囲むB・C・Dグループ、広場をはさんで相対するE・Fグループが想定できる。A・Iグループは他のグループとの共通要素も無く、単独グループと考えたい。

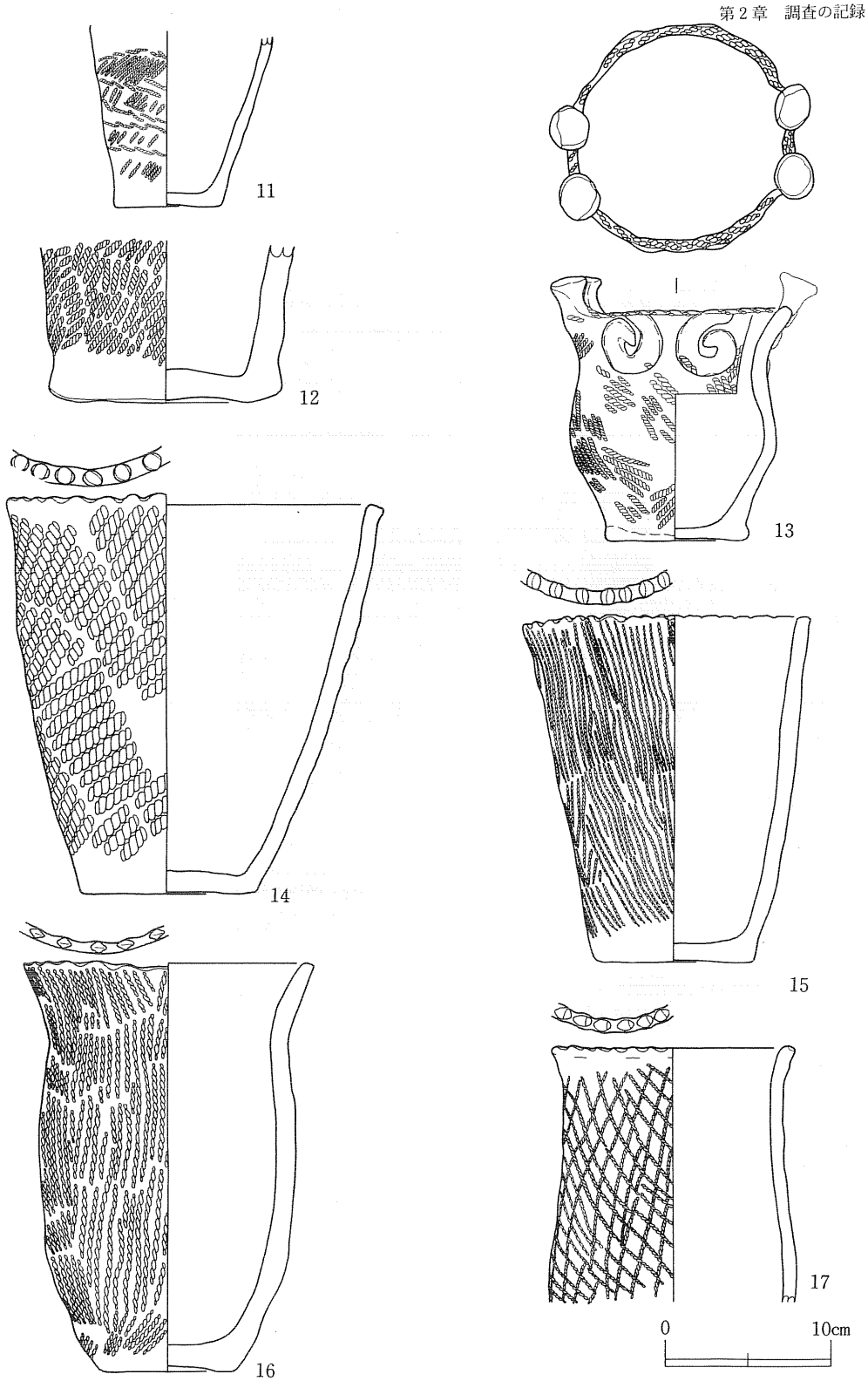
以上、個々の遺構の傾向、平面分布による各グループの傾向から竪穴住居跡との関連を考えてみると、配石遺構（SQ219）を中心とする広場に構築位置を規制される大形住居の存在が挙げられよう。また判然とはしなかったが、土坑等も広場に構築位置を規制されたであろうことは充分に予測されよう。



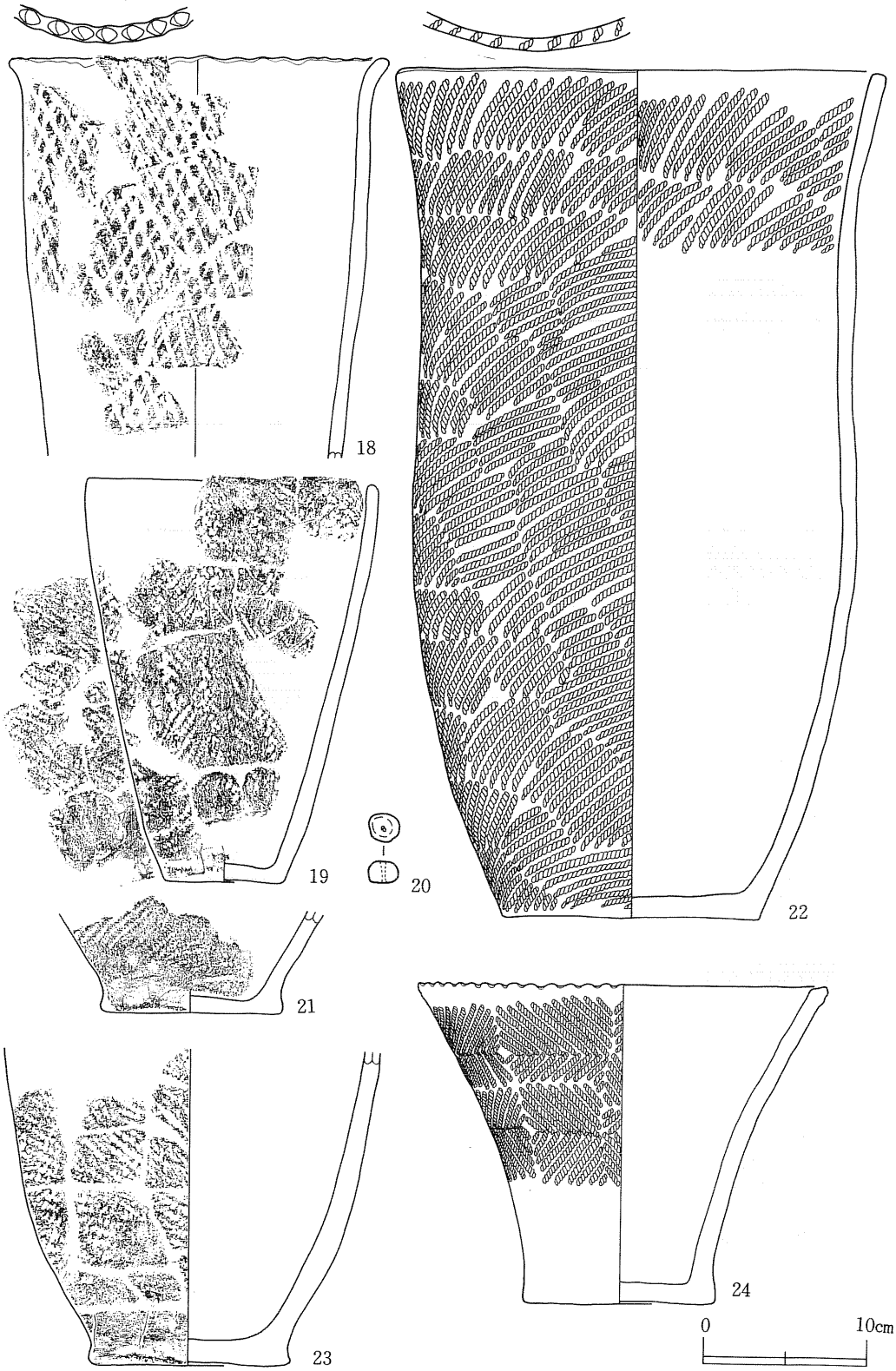

第35図　遺構内出土土器(1)　1 SI017　2～5 SI133



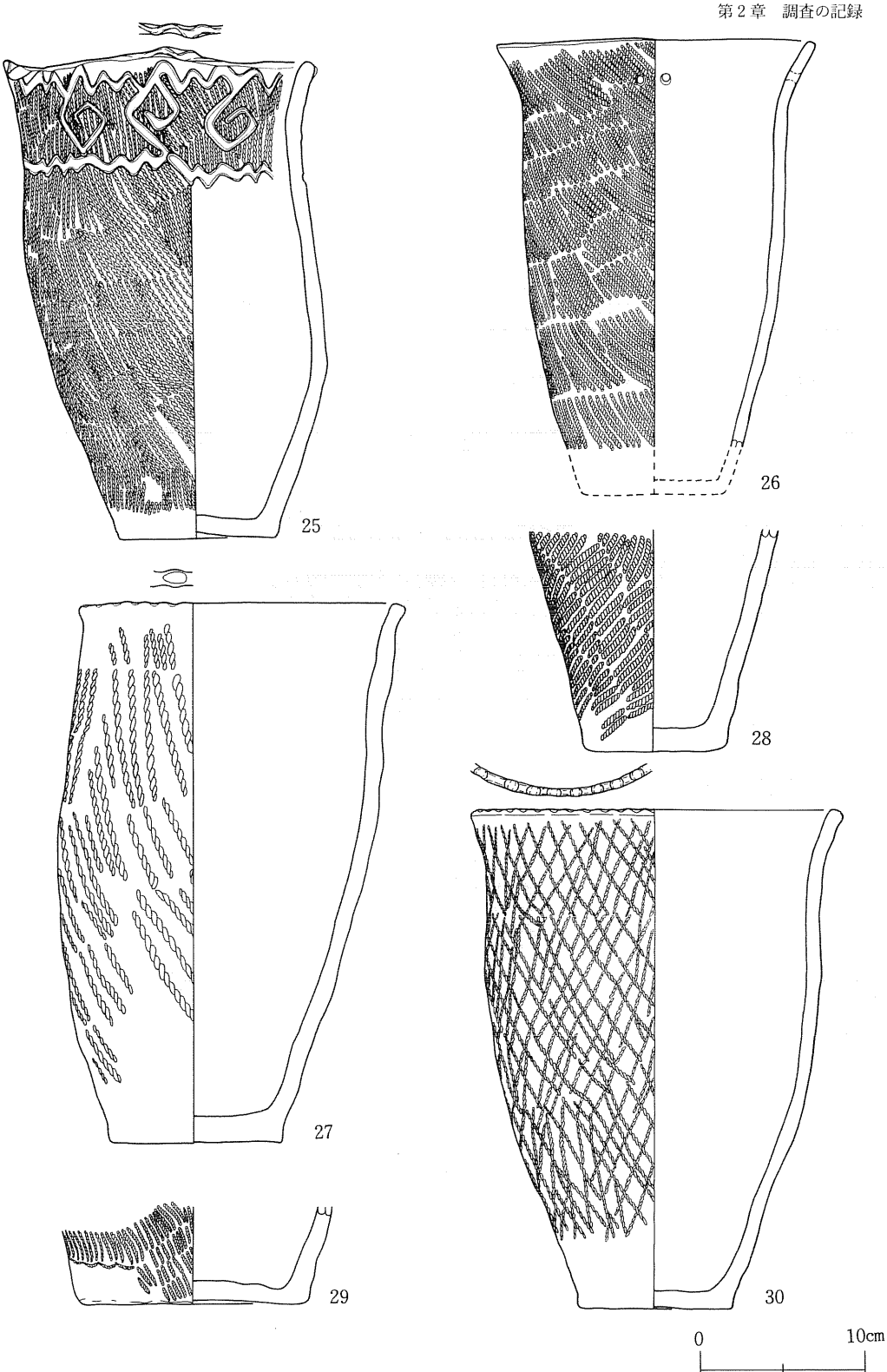

第36図　遺構内出土土器(2)　6～10 SI133



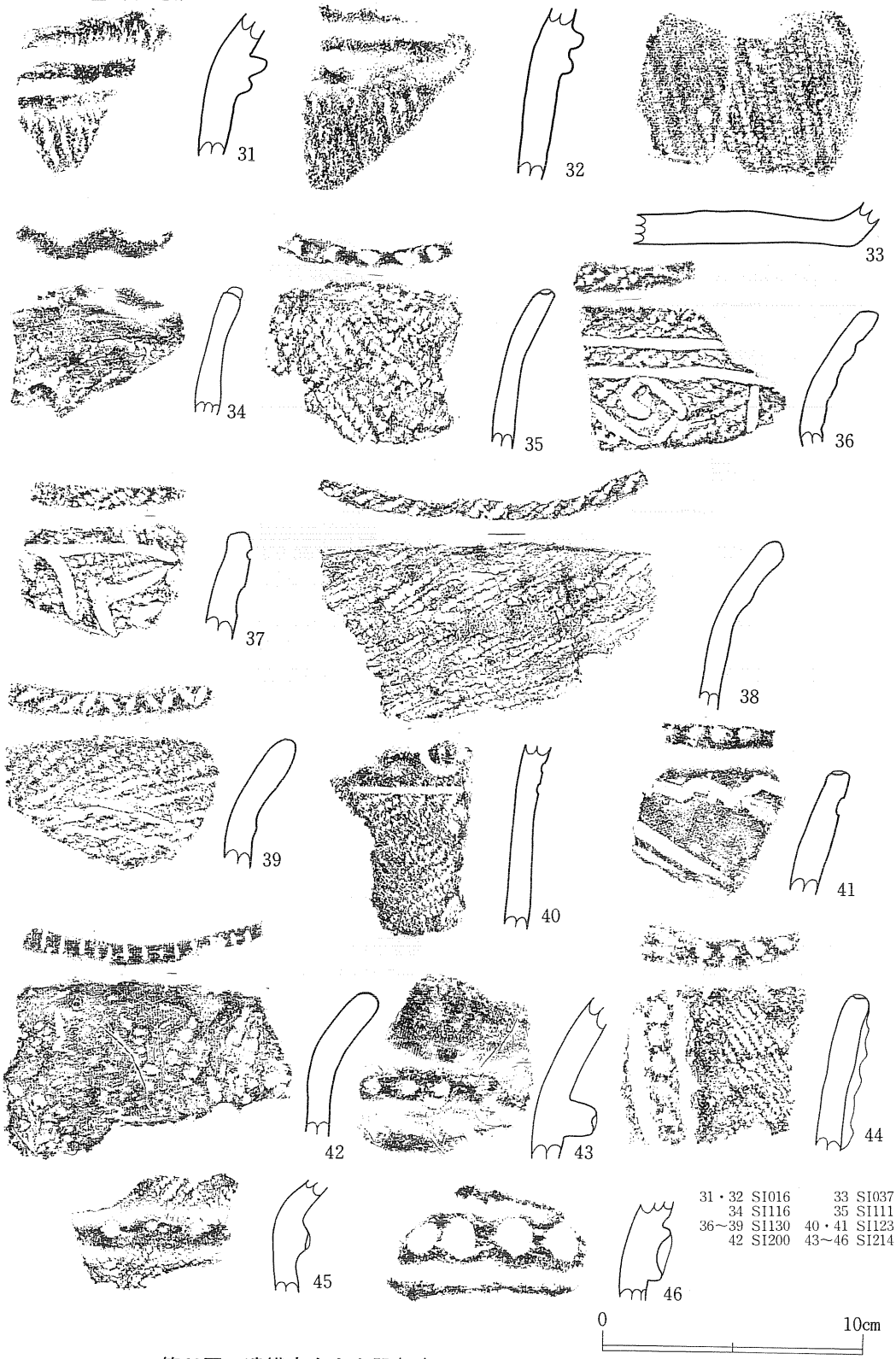

第37図　遺構内出土土器（３）　11 SI118　12 SI326　13～17 SI195




第38図　遺構内出土土器・土製品(4)　18 SI 214　19・20 SI 150　21 SI 026　22 SK106　23 SK142　24 SK224

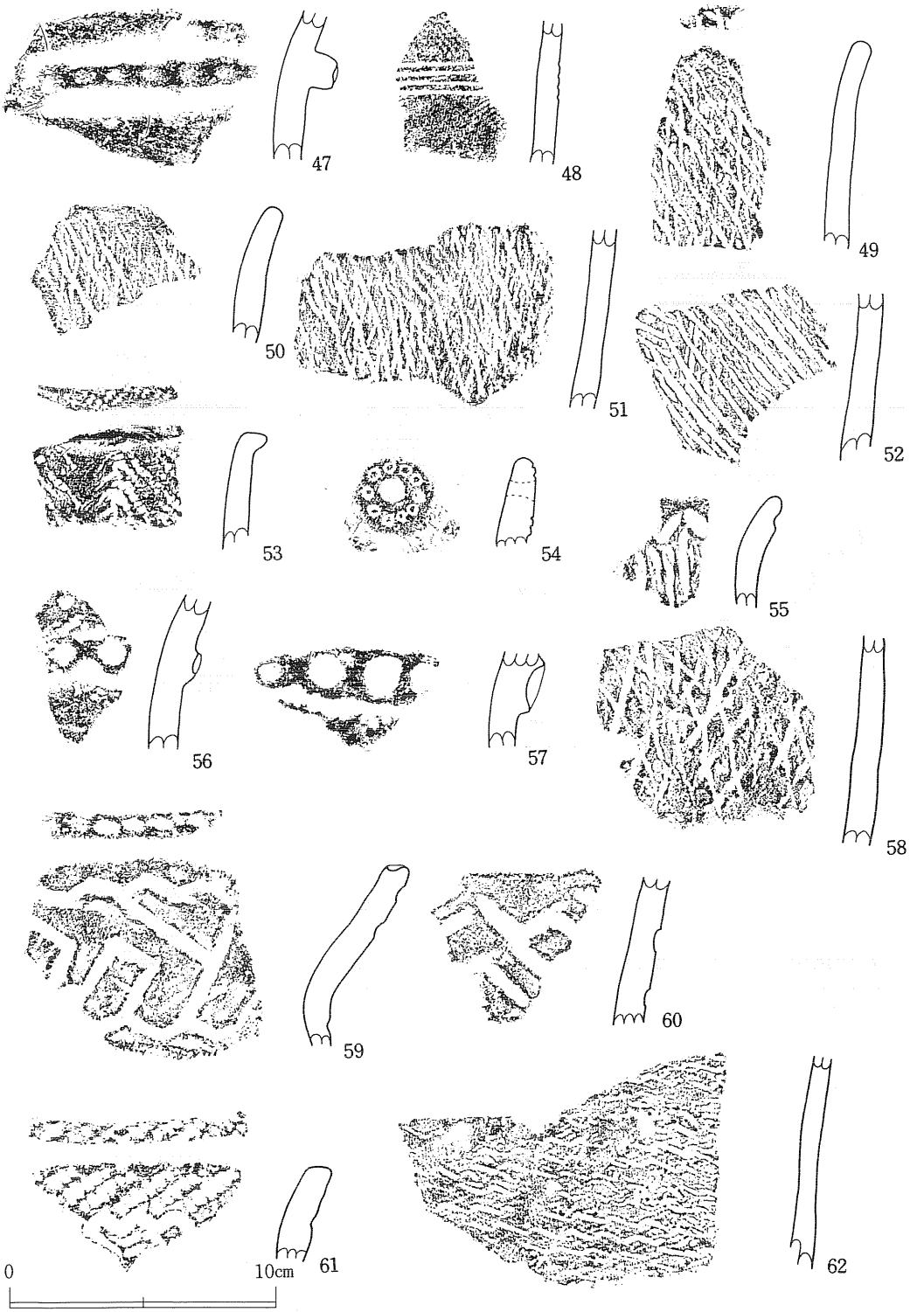



第39図　遺構内出土土器(5)　25～29 SK224　30 SR232



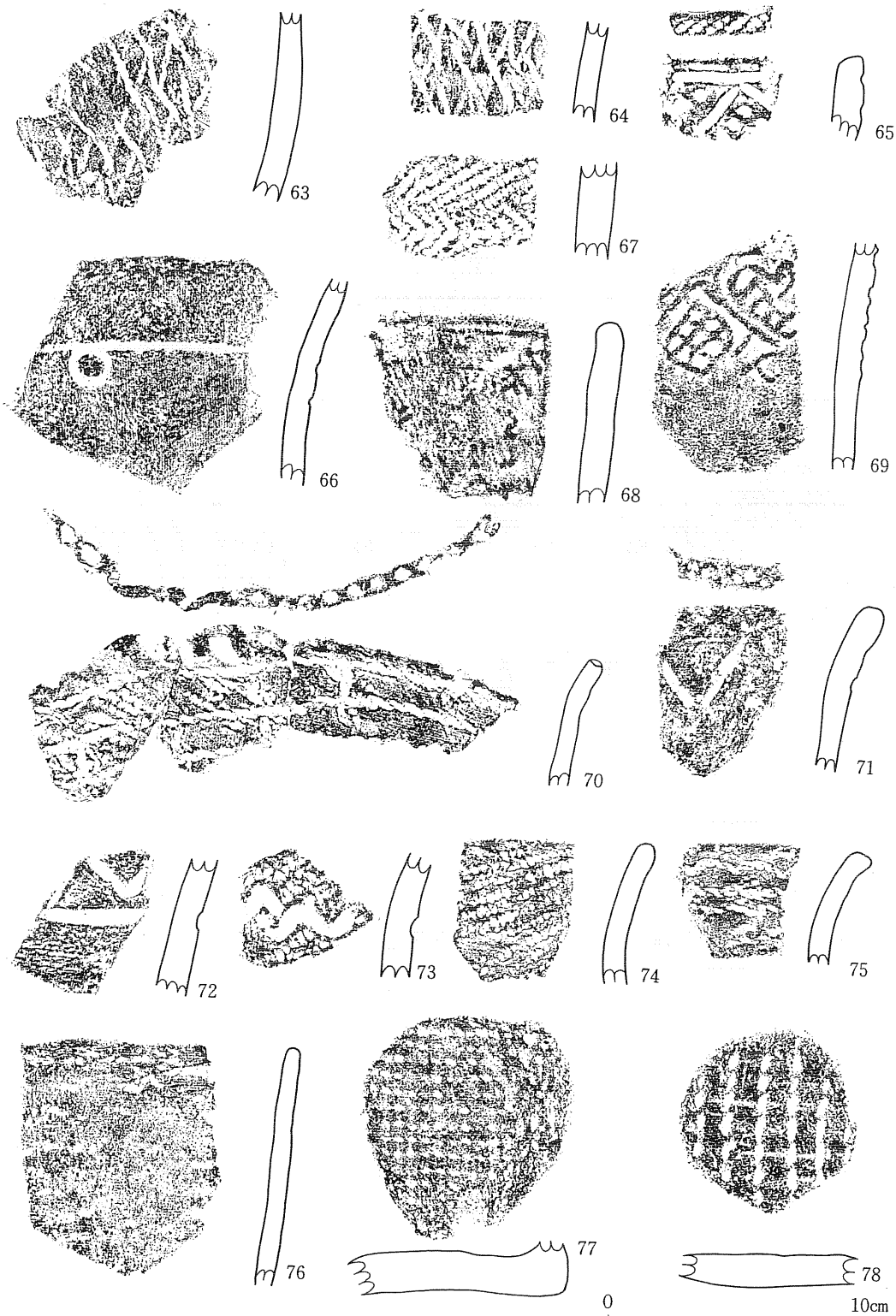

31・32 SI016　33 SI037
34 SI116　35 SI111
36～39 SI130　40・41 SI123
42 SI200　43～46 SI214

第40図　遺構内出土土器(6)



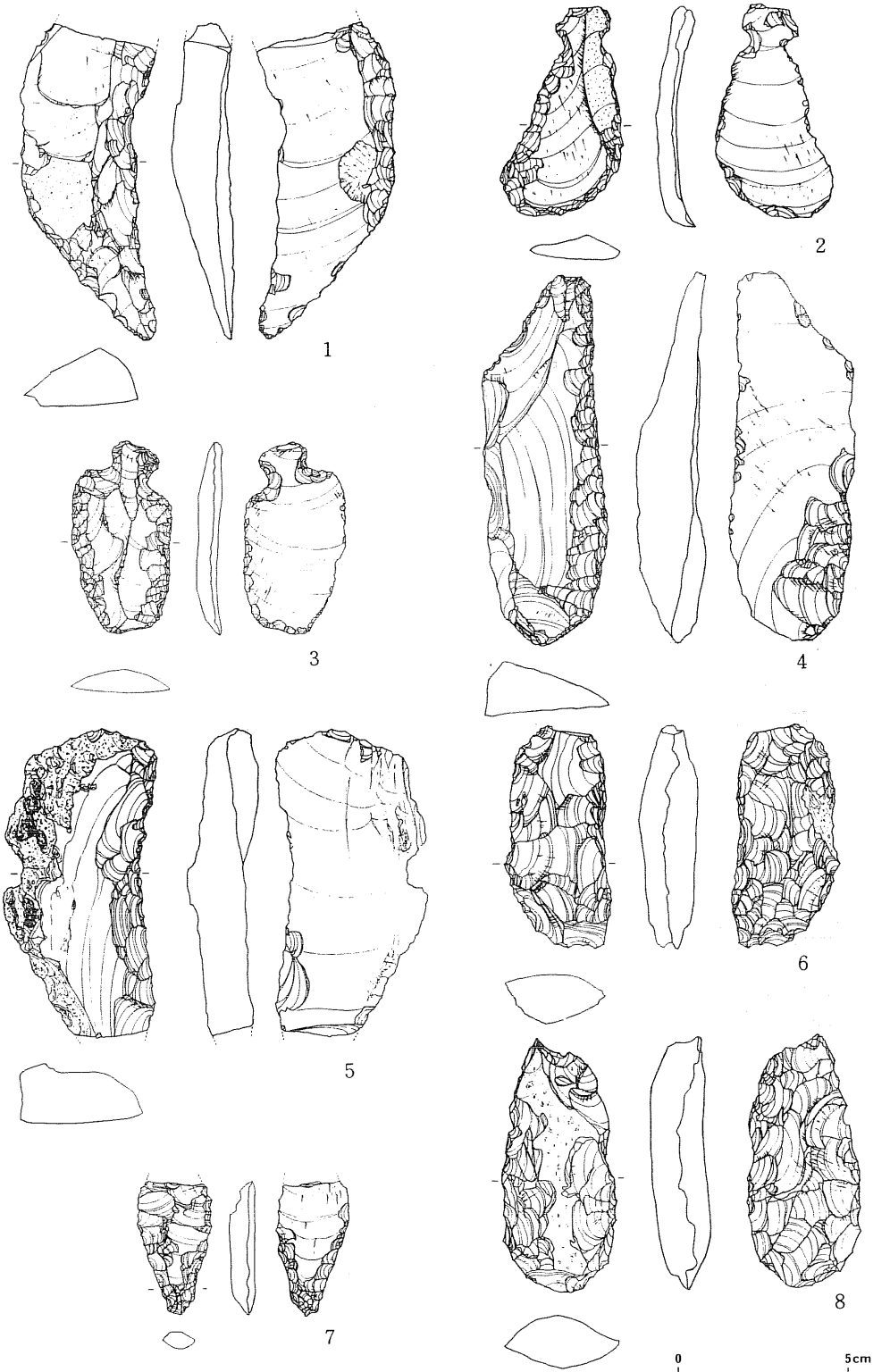

第41図　遺構内出土土器（７）

47～54　SI214
55～58　SI213
59～62　SI126



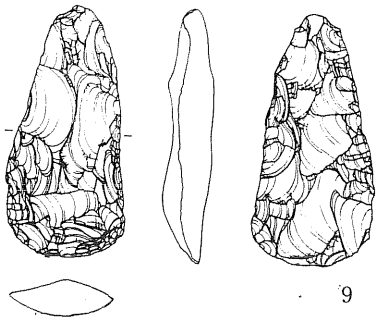

第42図　遺構内出土土器(8)

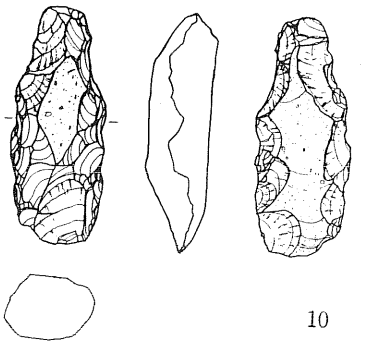
63・64 SK19　65 SK155　66 SK162
67 SK174　68 SK196　69～78 SK224

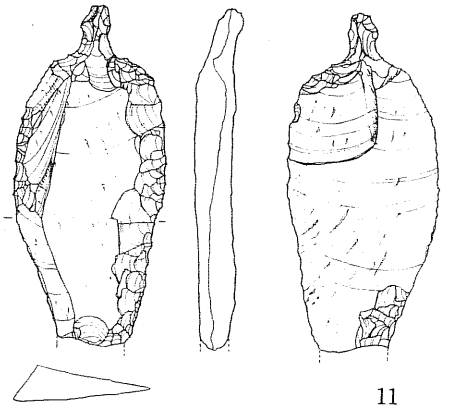


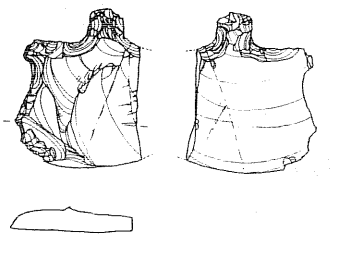

第43図　遺構内出土石器（１）

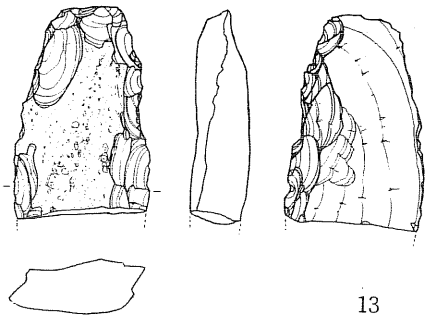
１・２：SI240　３～５：SI012
６：SI110　７・８：SI133

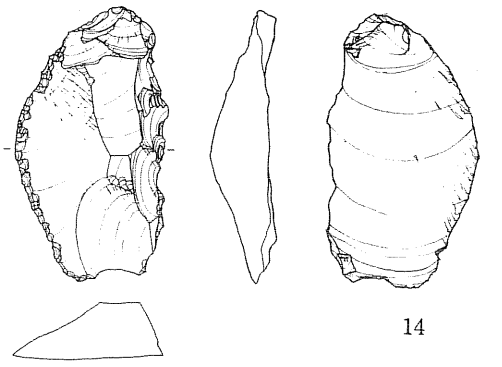


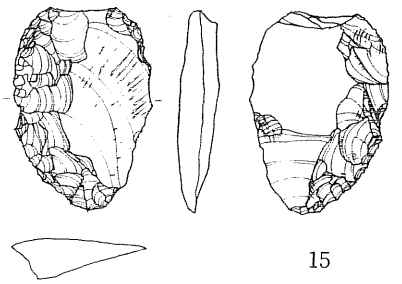



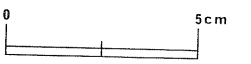



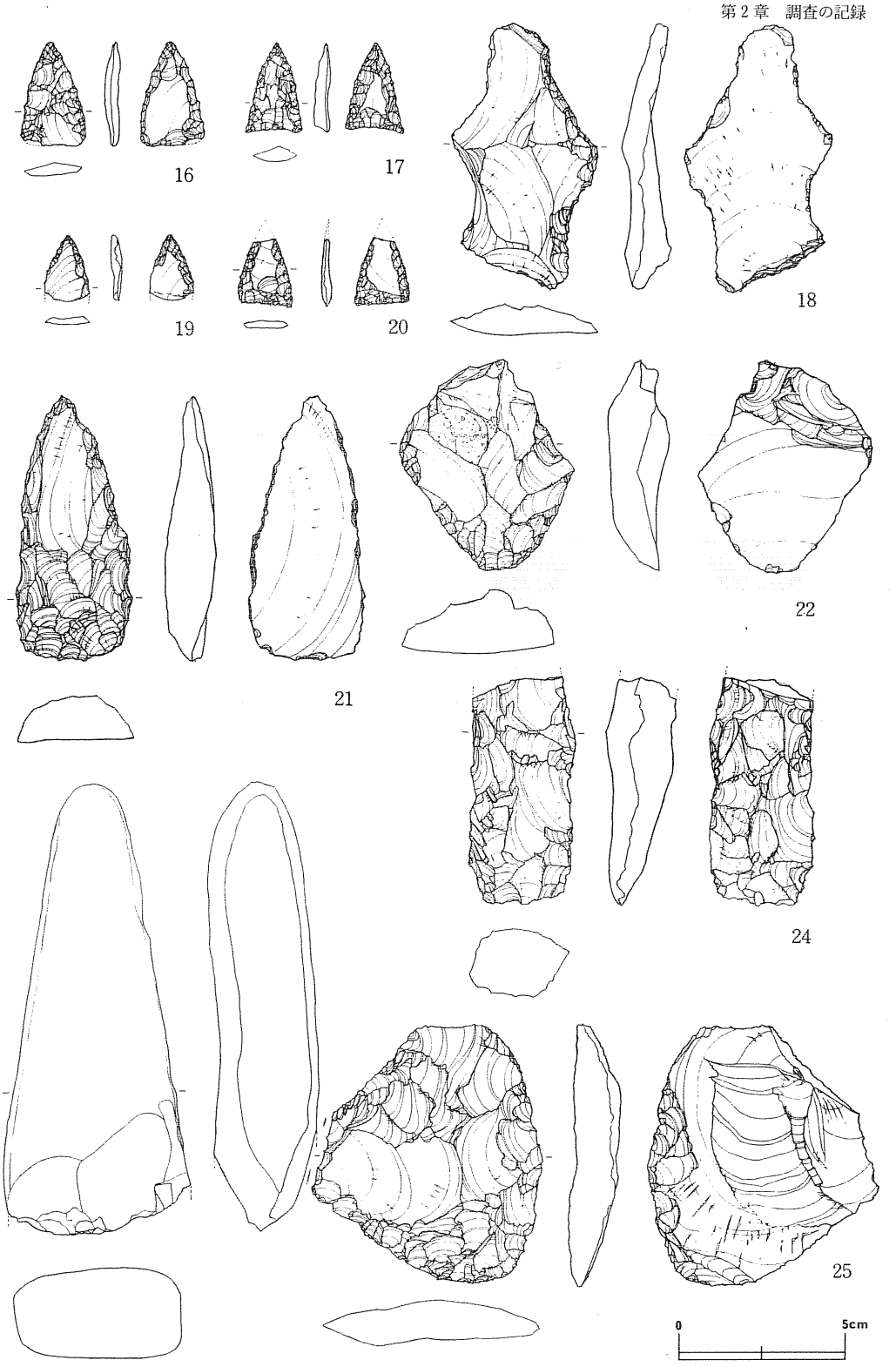



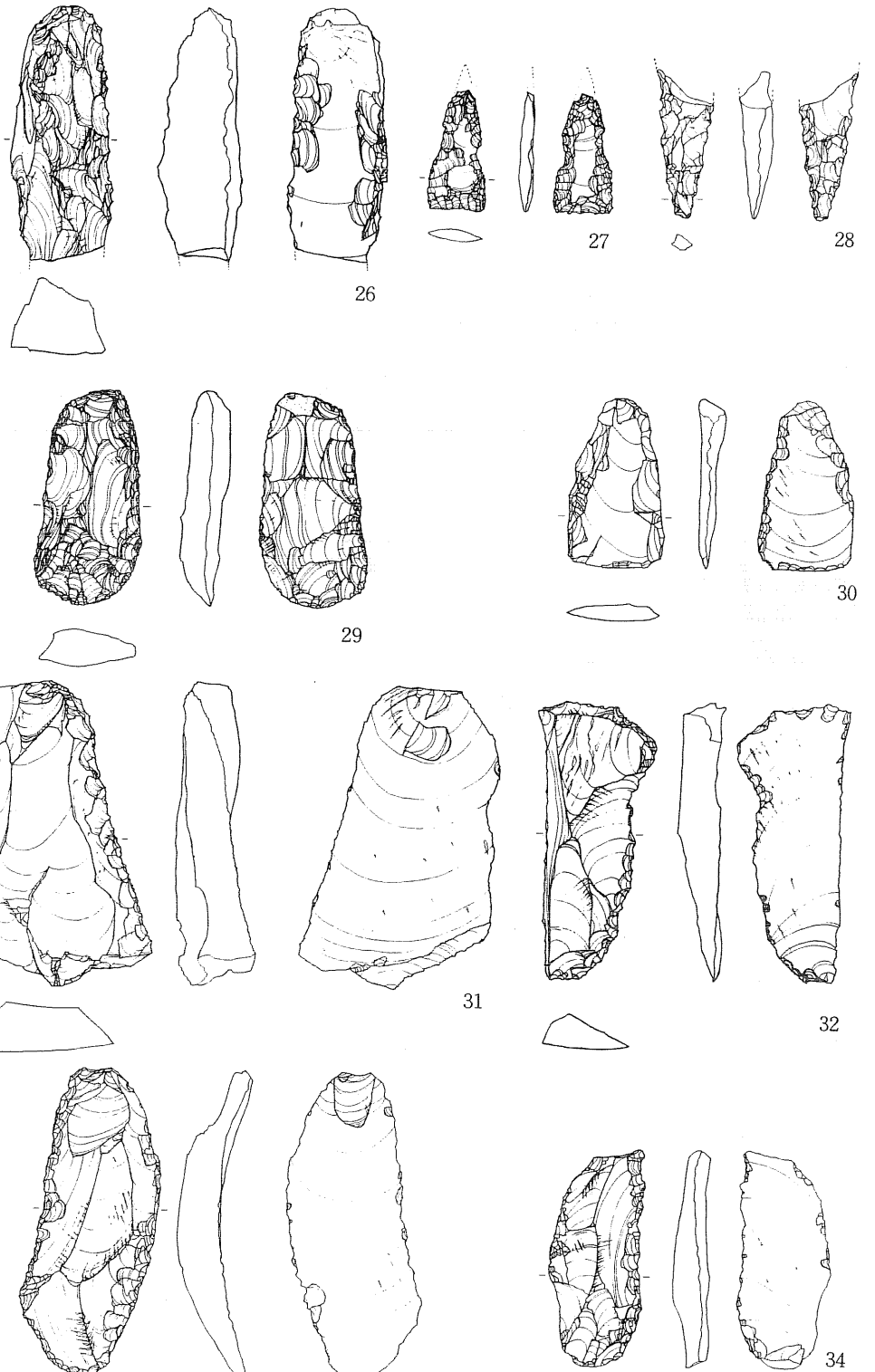

第44図　遺構内出土石器（2）

9：SI147　10：SI214
11~15：SI130



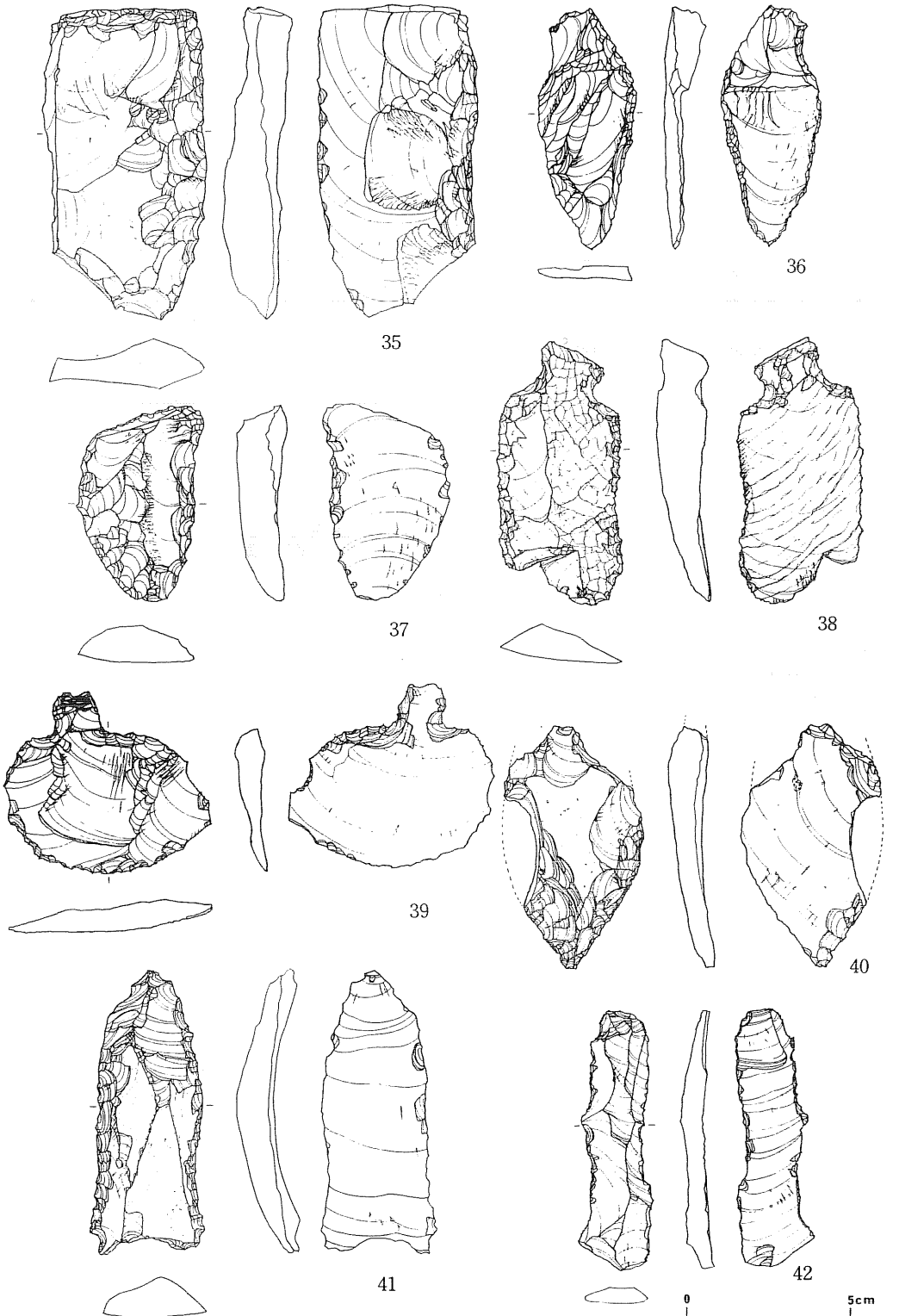

16～18：SI123　19～23：SI217
24・25：SI218

第45図　遺構内出土石器（３）



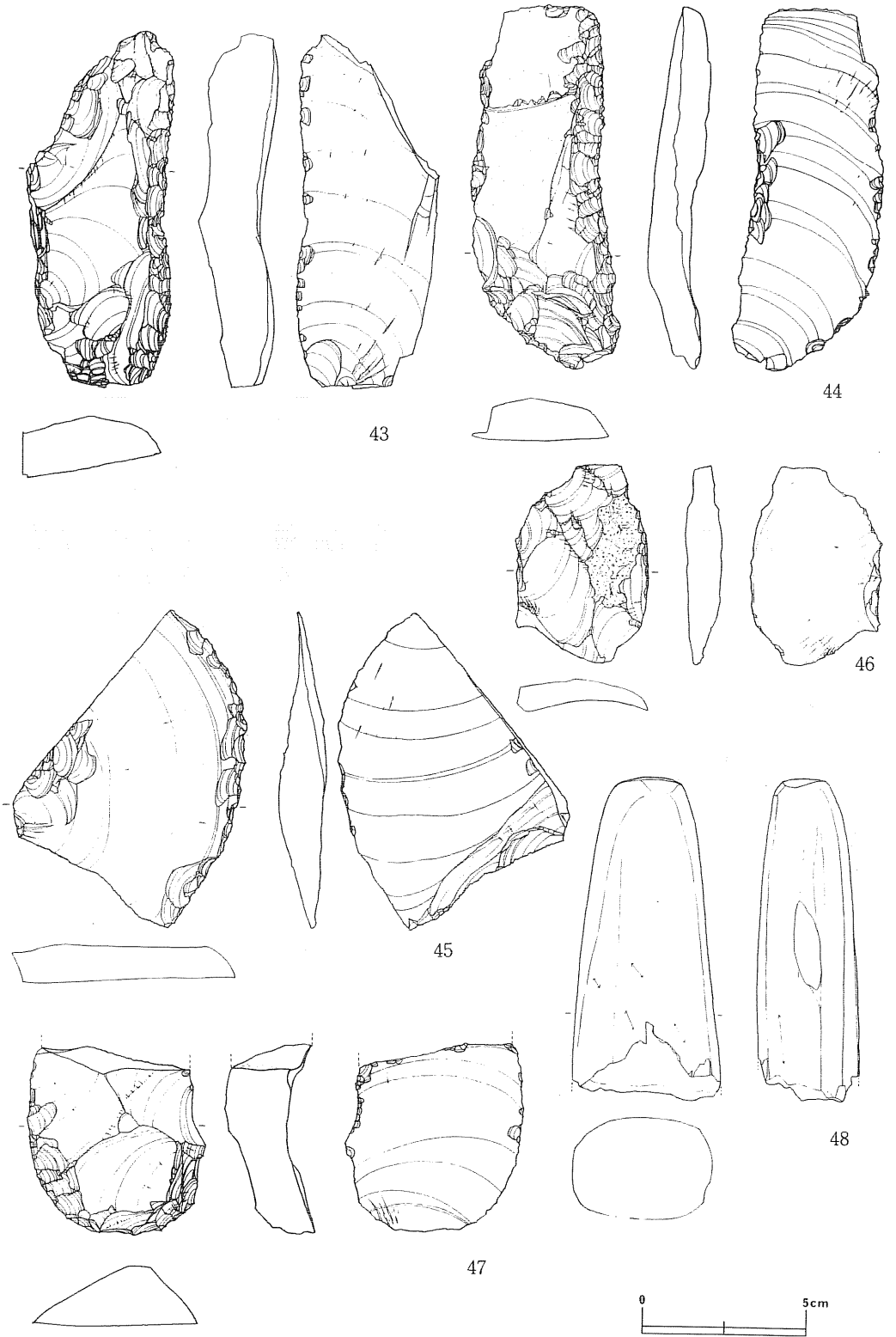

第46図　遺構内出土石器（4）

26：SI229　27～34：SI118



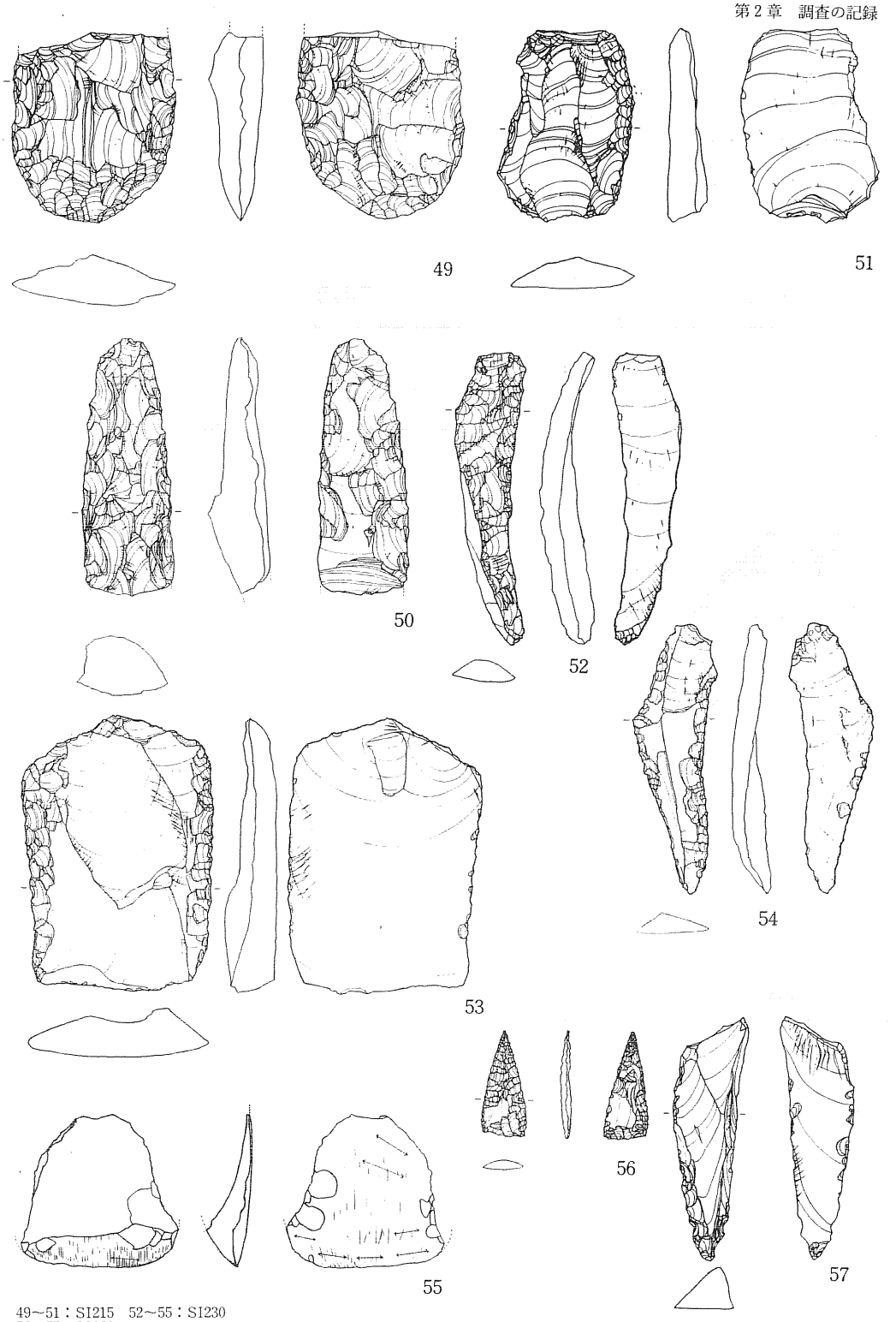

第47図　遺構内出土石器（5）

35～37：SI118　38：SI195
39・40：SI199　41・42：SI214



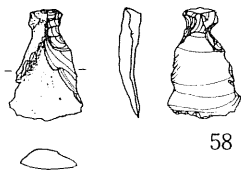

第48図　遺構内出土石器（6）

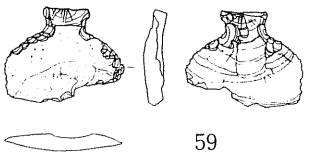
43～48：SI214

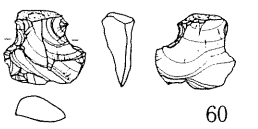


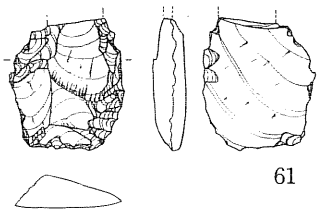

49～51：SI215　52～55：SI230
56・57：SI180

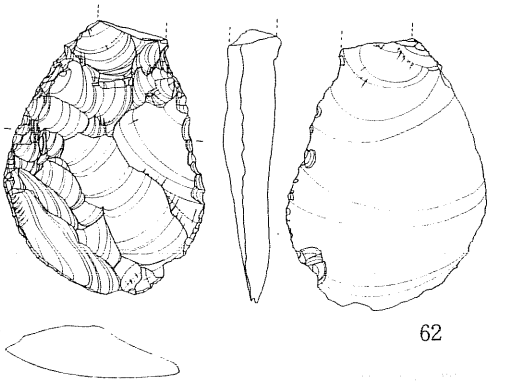
第49図　遺構内出土石器（7）

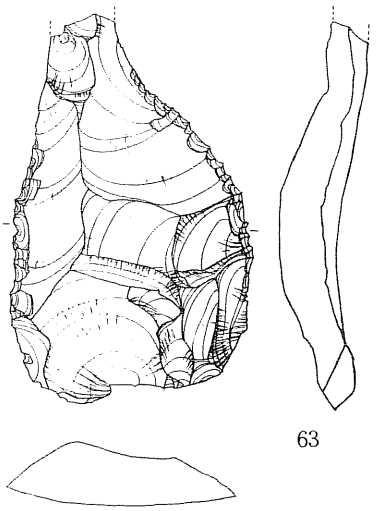

58

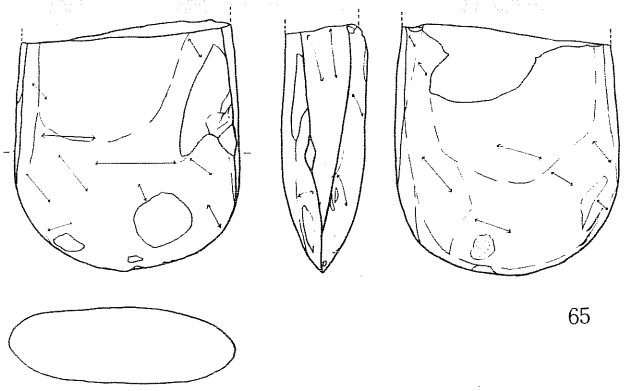

59

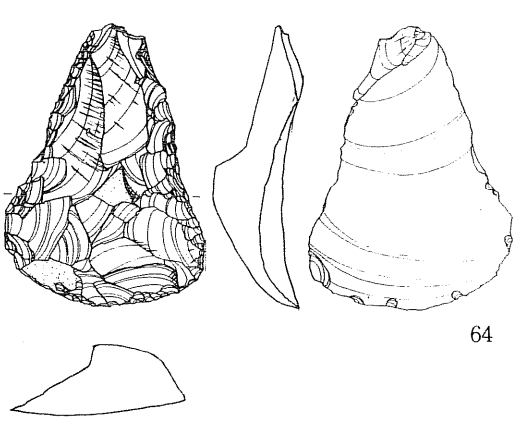

60

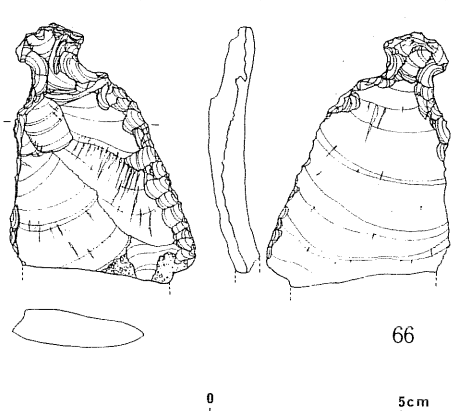

61


62

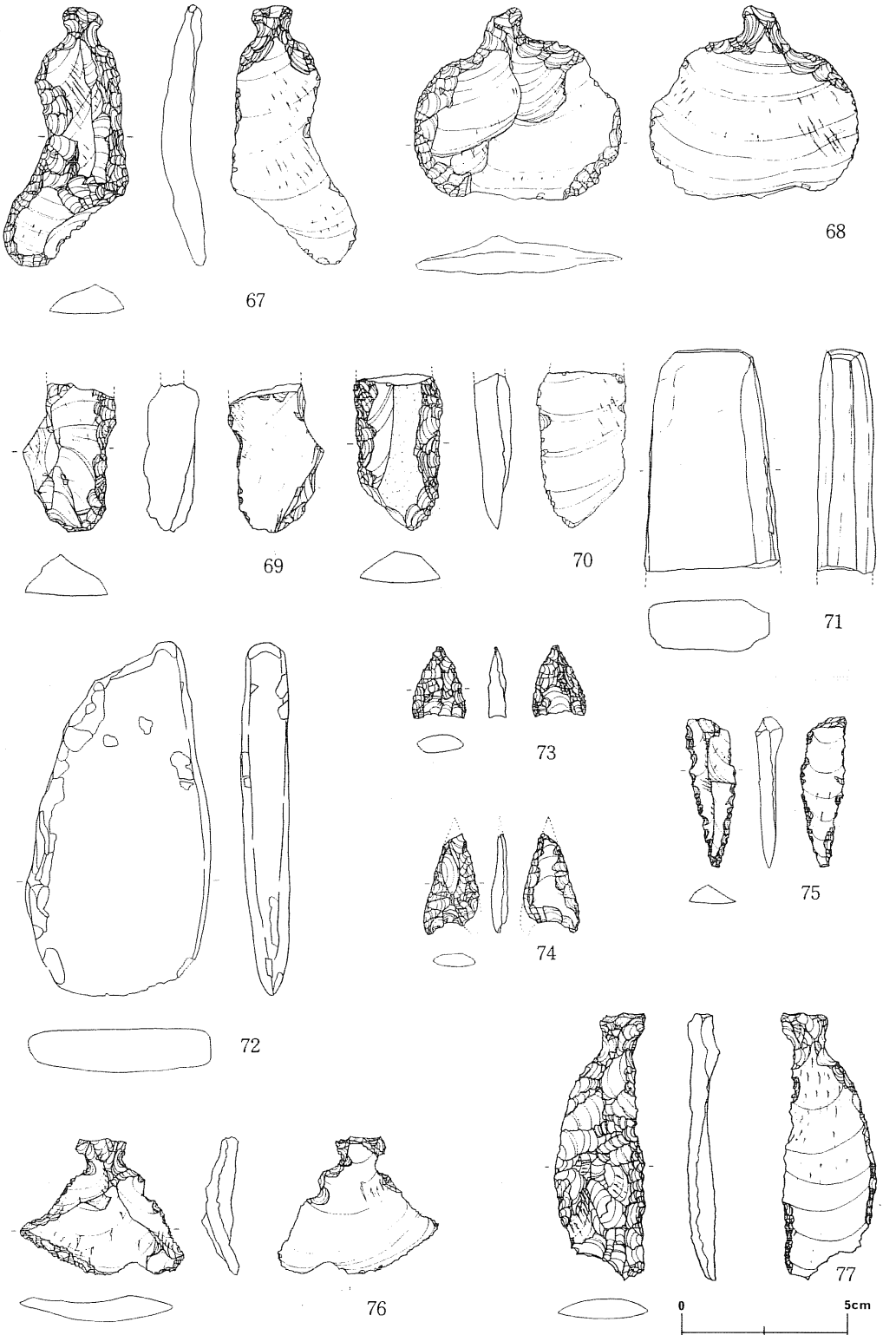

63


65


64

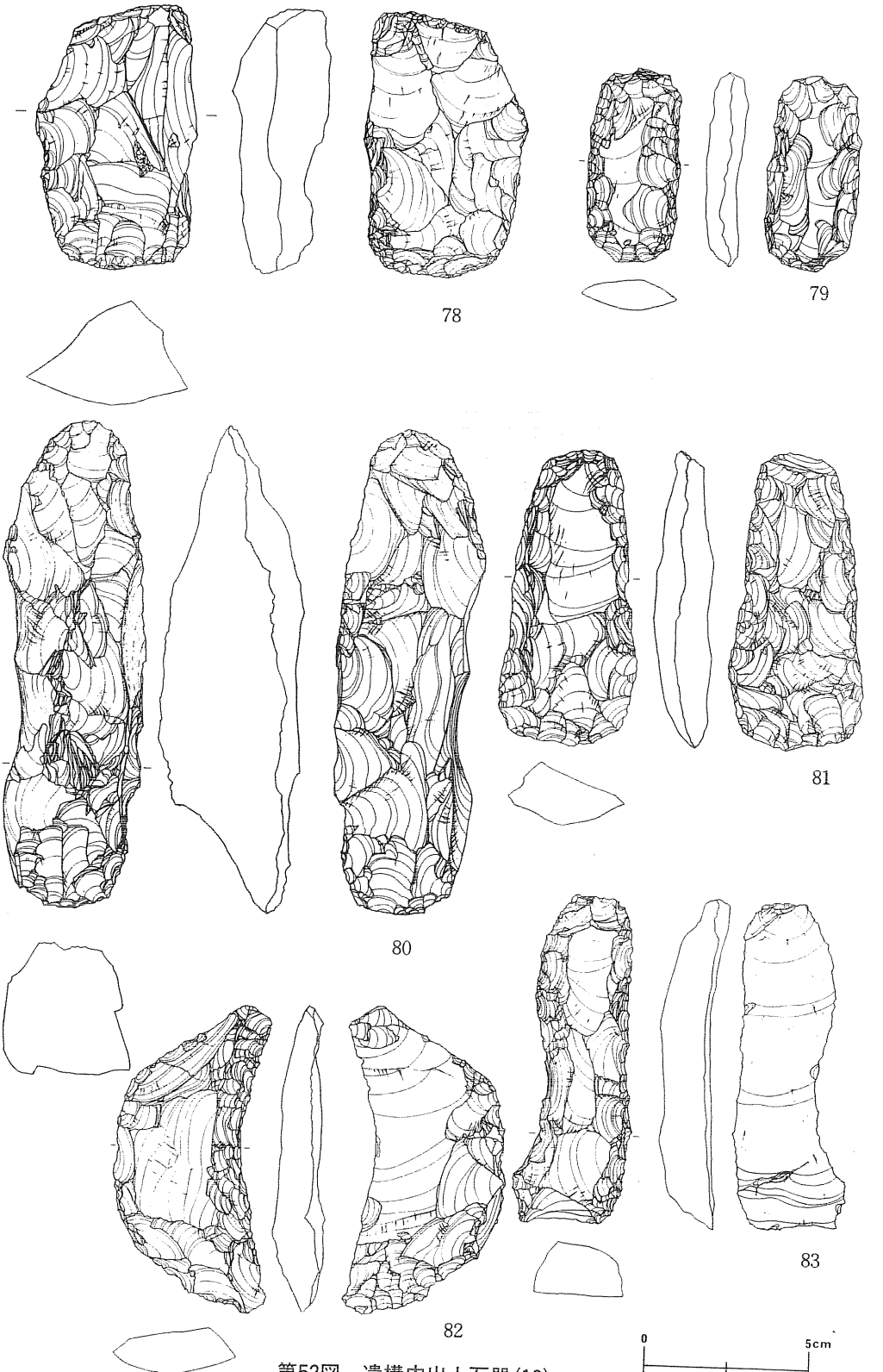

66

第50図　遺構内出土石器（8）　58～65：SI180　66：SI190



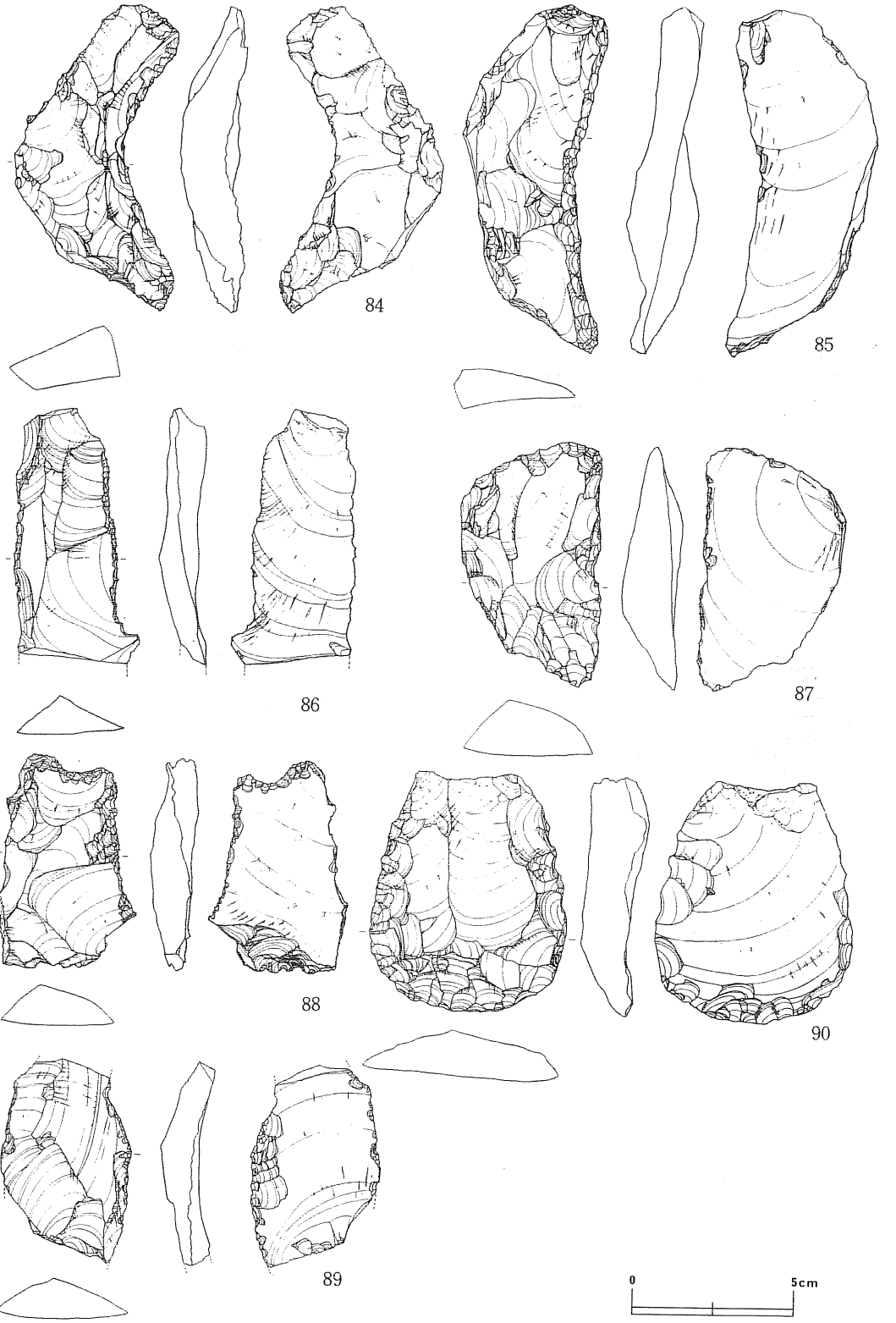

67～72：SI190　73～ 7：SI213

第51図　遺構内出土石器（９）

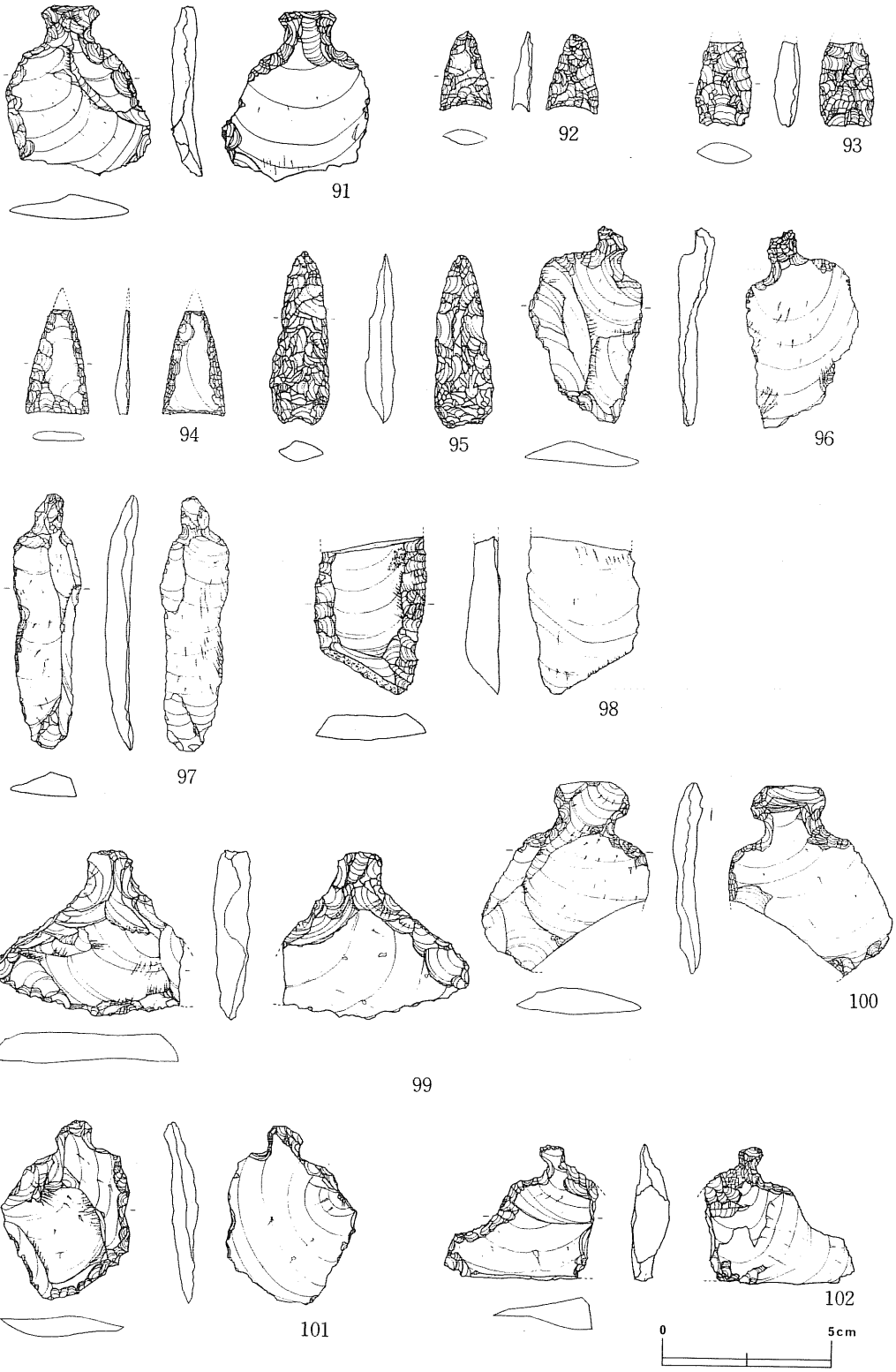



第52図　遺構内出土石器(10)

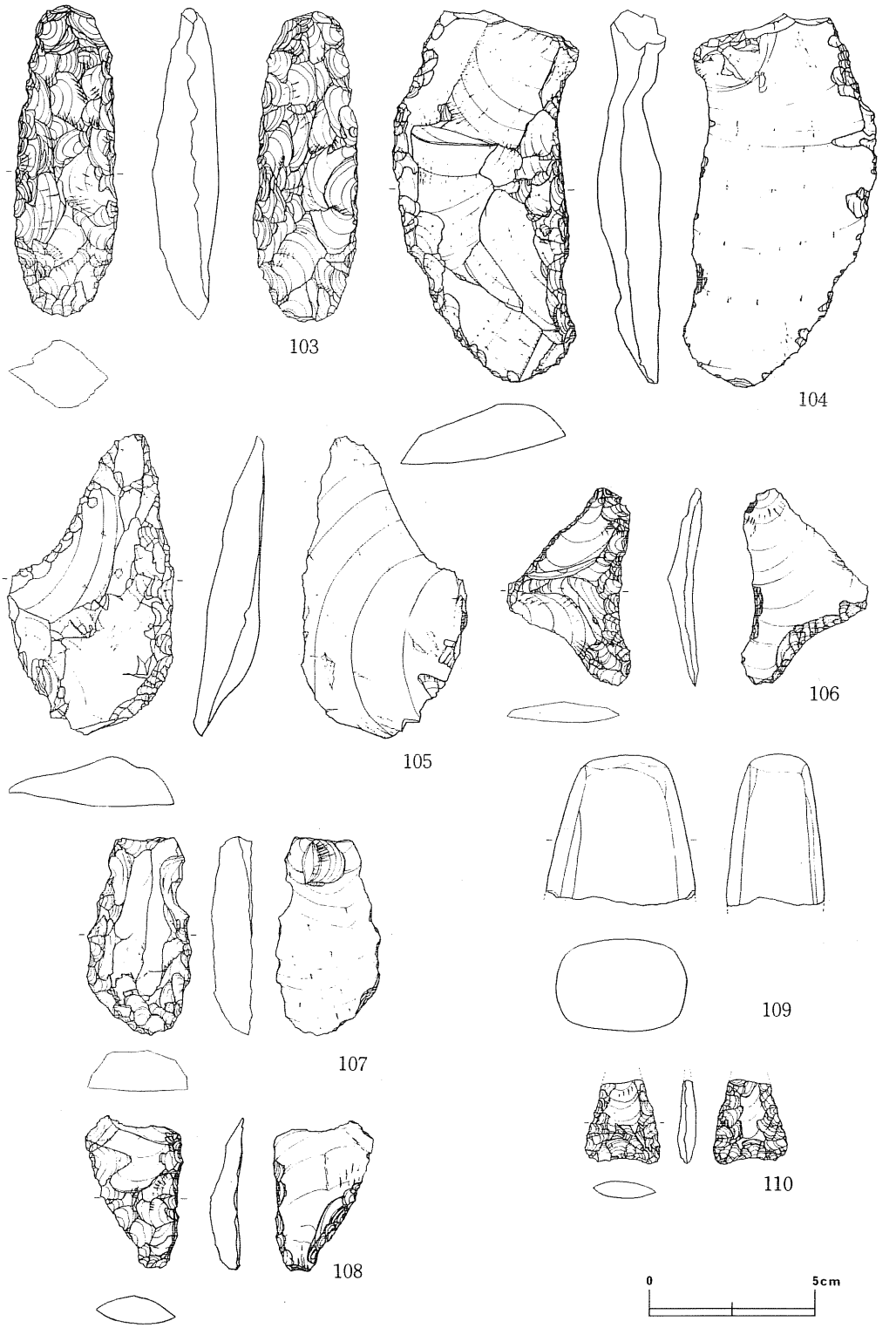
78～83：SI213




第53図　遺構内出土石器(11)　84～90：SI213

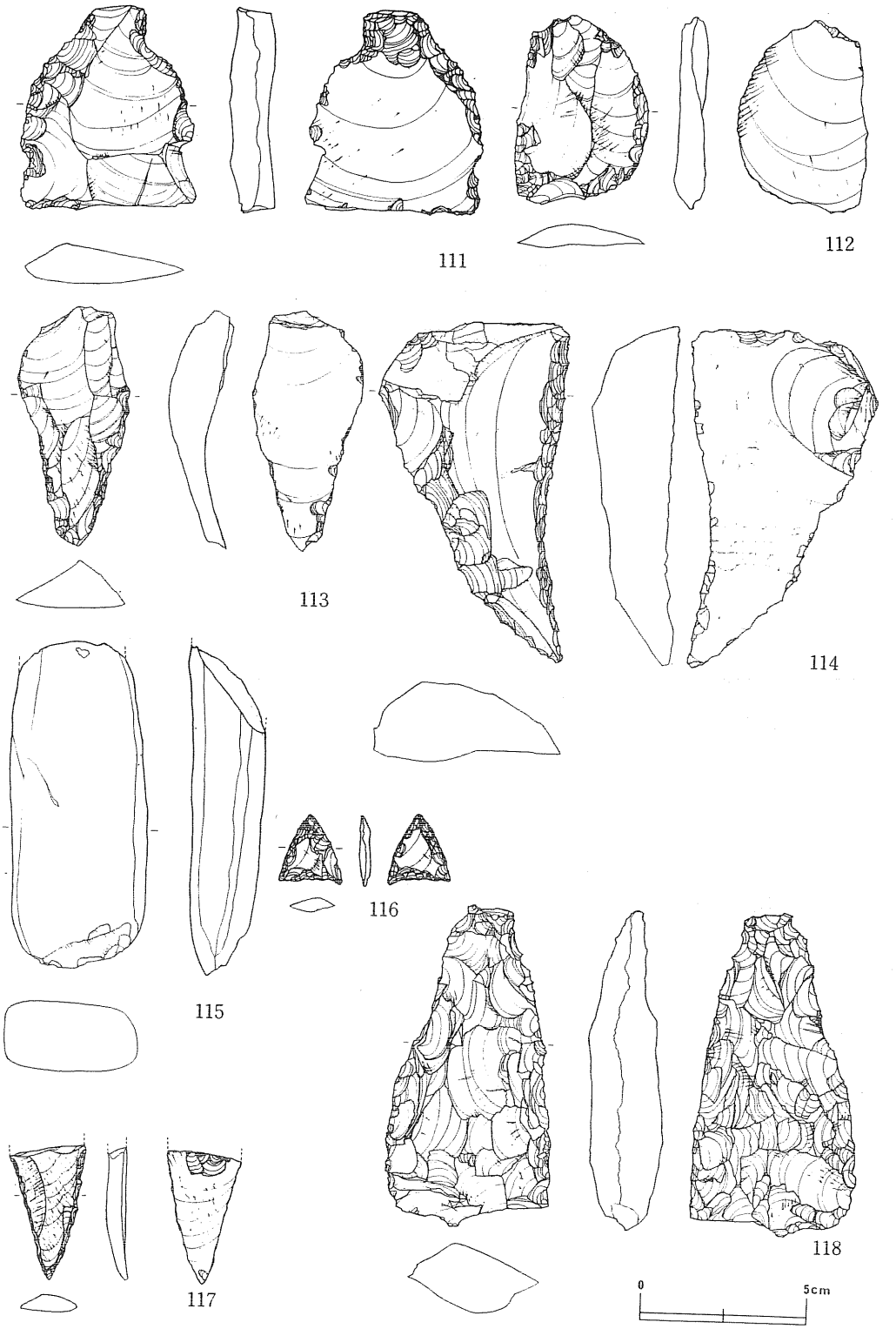



第54図　遺構内出土石器(12)　91：SI327　92～102：SI126



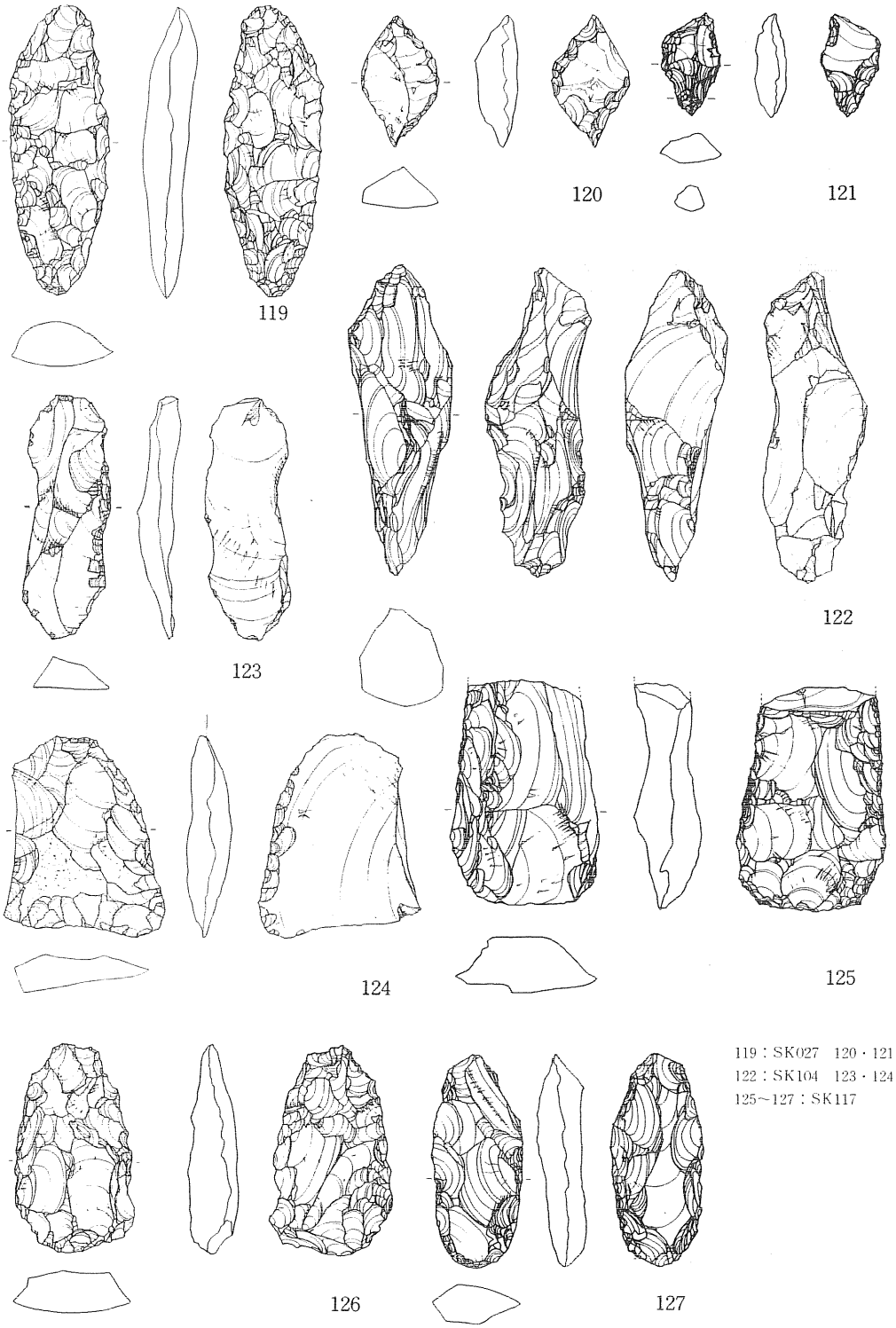

103～109：SI126　110：SI150

第55図　遺構内出土石器(13)



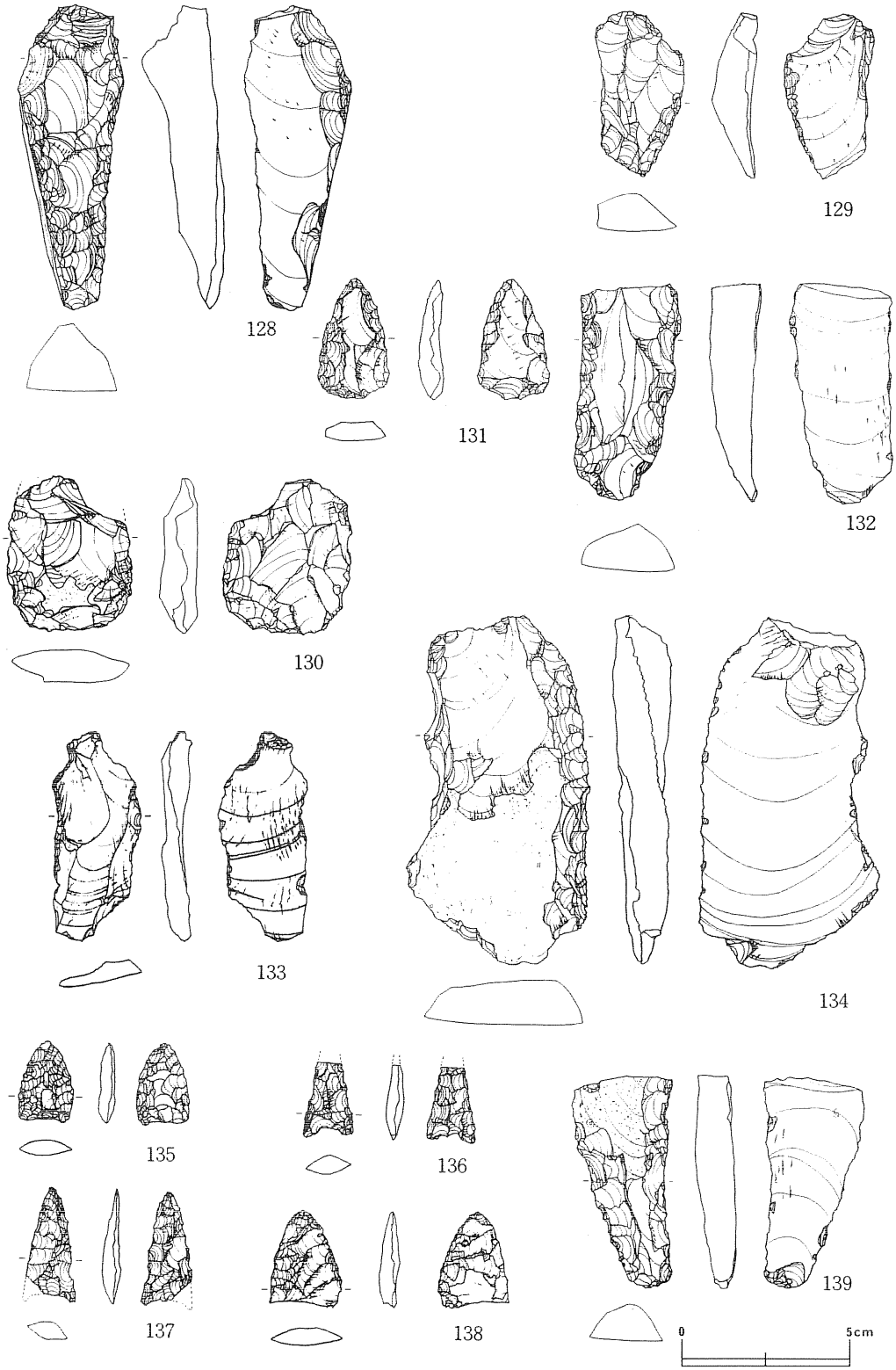

111～115：SI150　116：SI190
117・118：SI 170

第56図　遺構内出土石器(14)



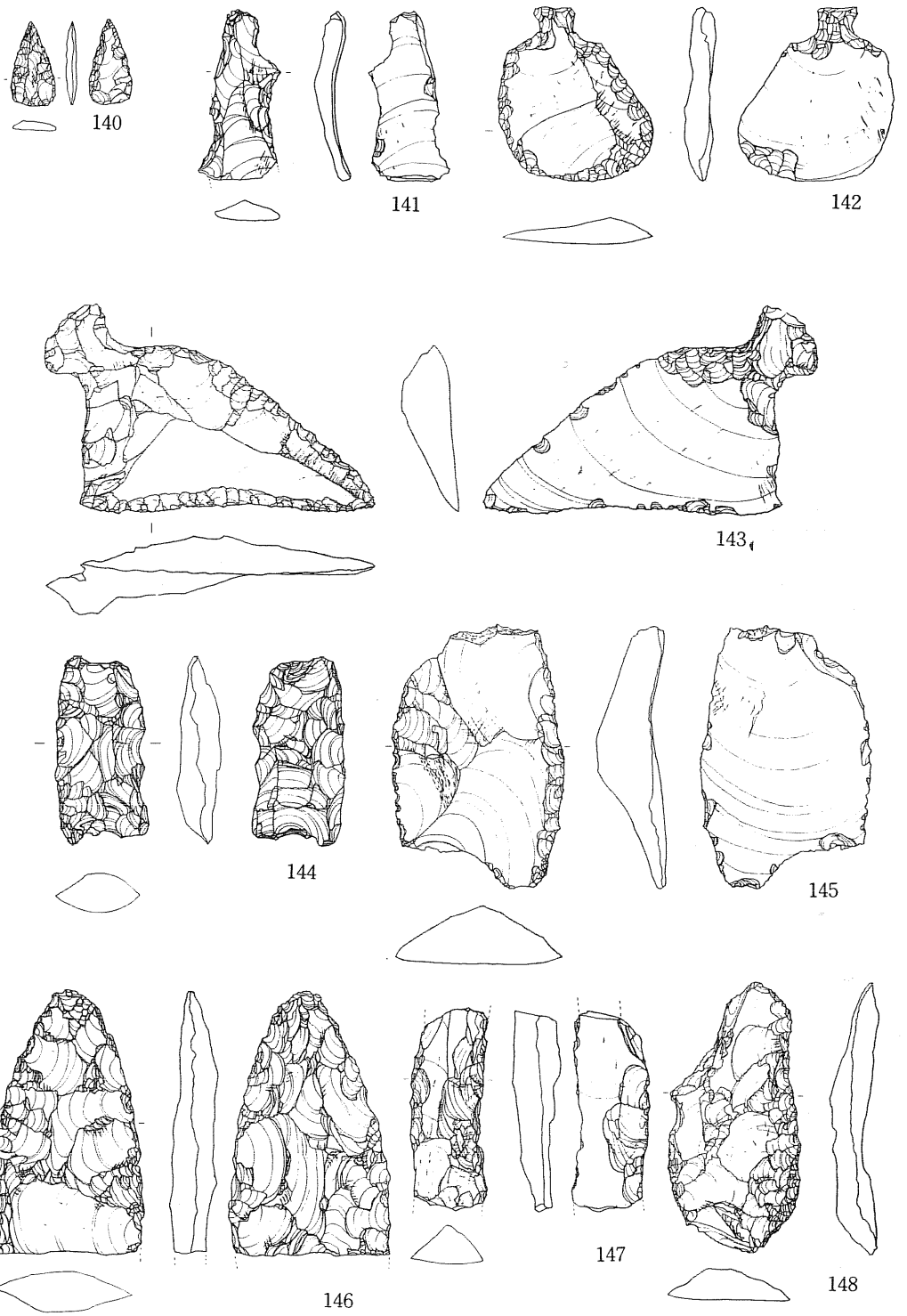

119：SK027　120・121：SK033
122：SK104　123・124：SK113
125～127：SK117

第57図　遺構内出土石器(15)




第58図　遺構内出土石器(16)

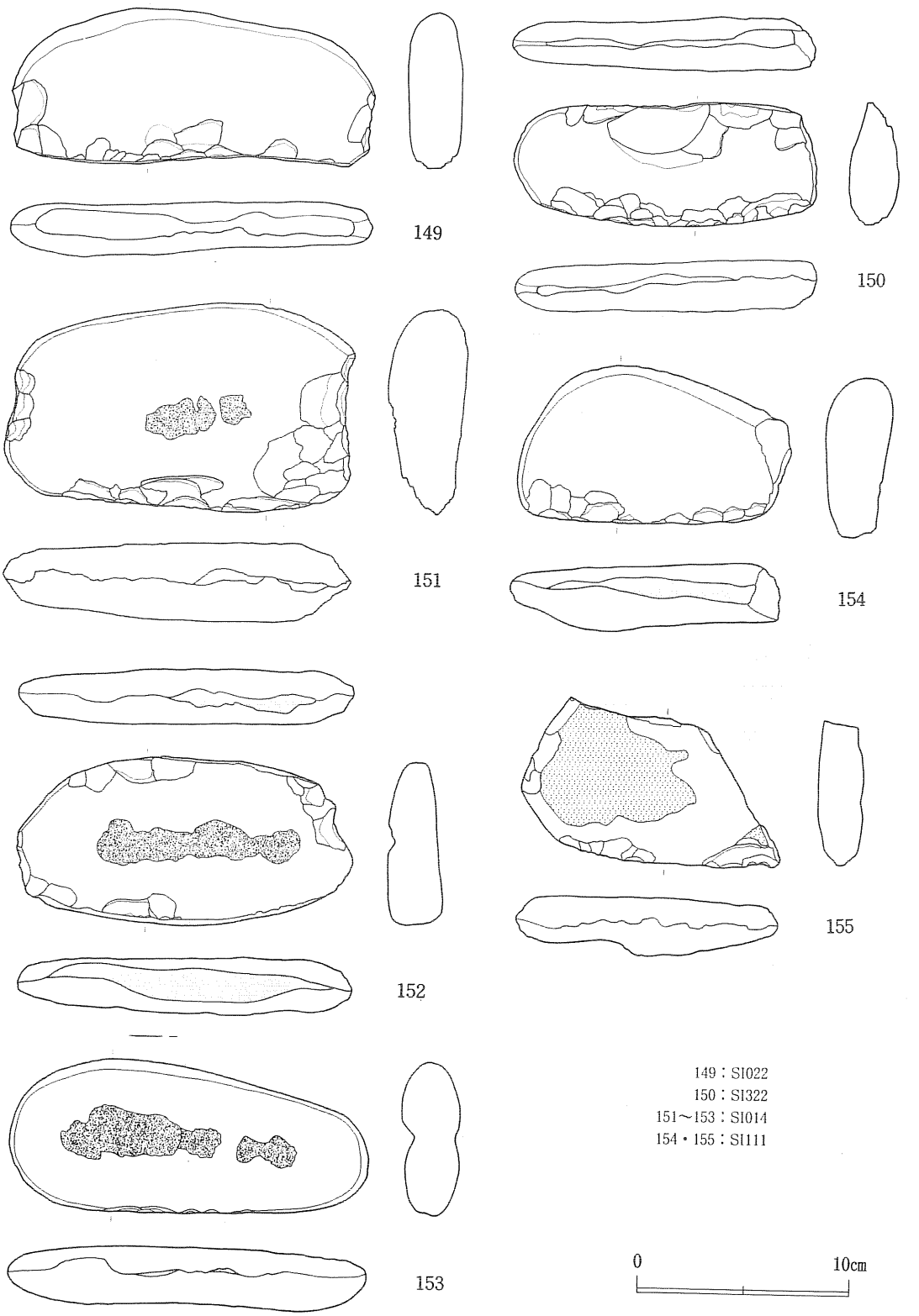
128・129：SK117　130：SK134
131・132：SK138　133・134：SK155
135～139：SK174



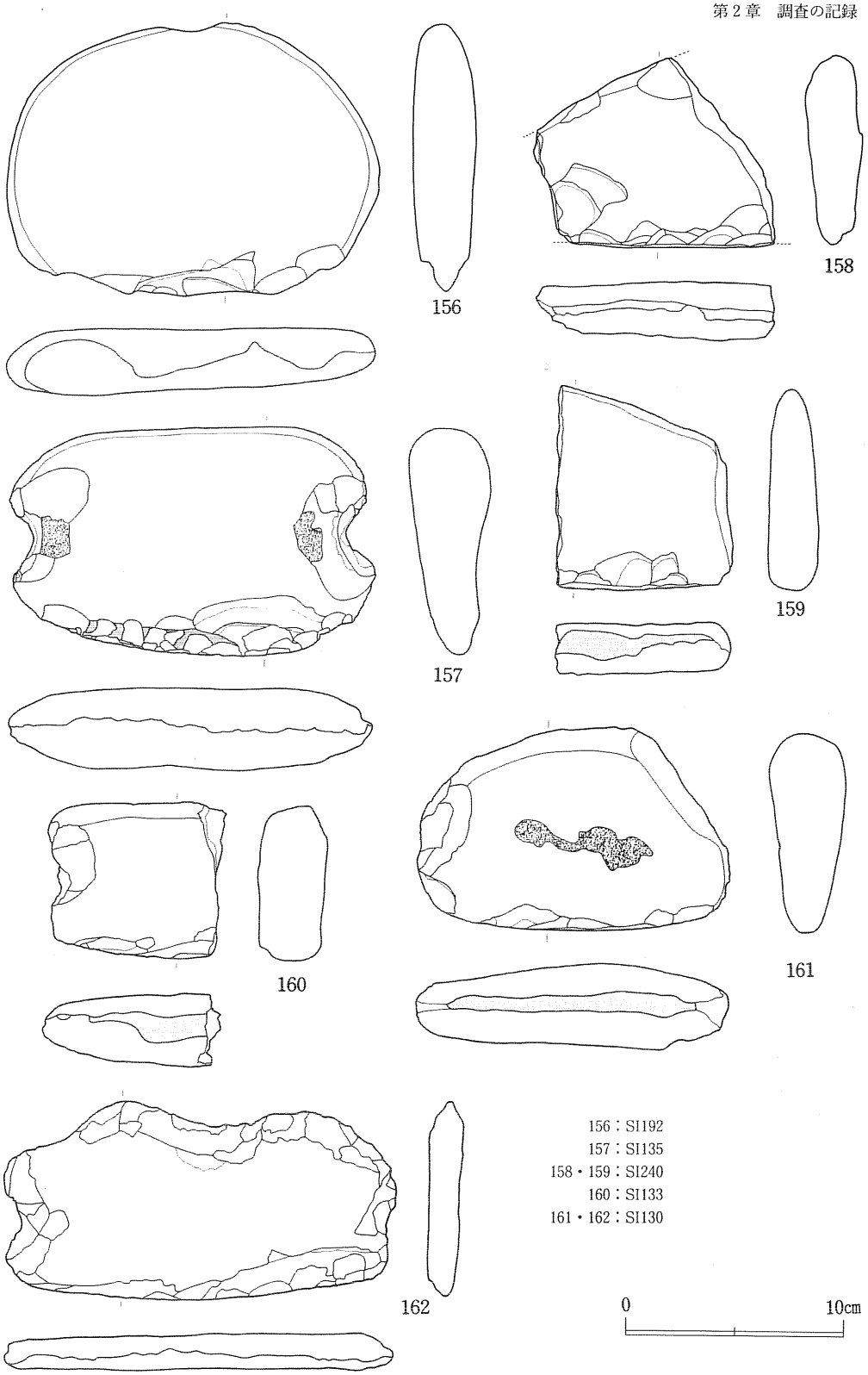

140～145：SK224　146：SK225
147・148：SK307

0　5cm

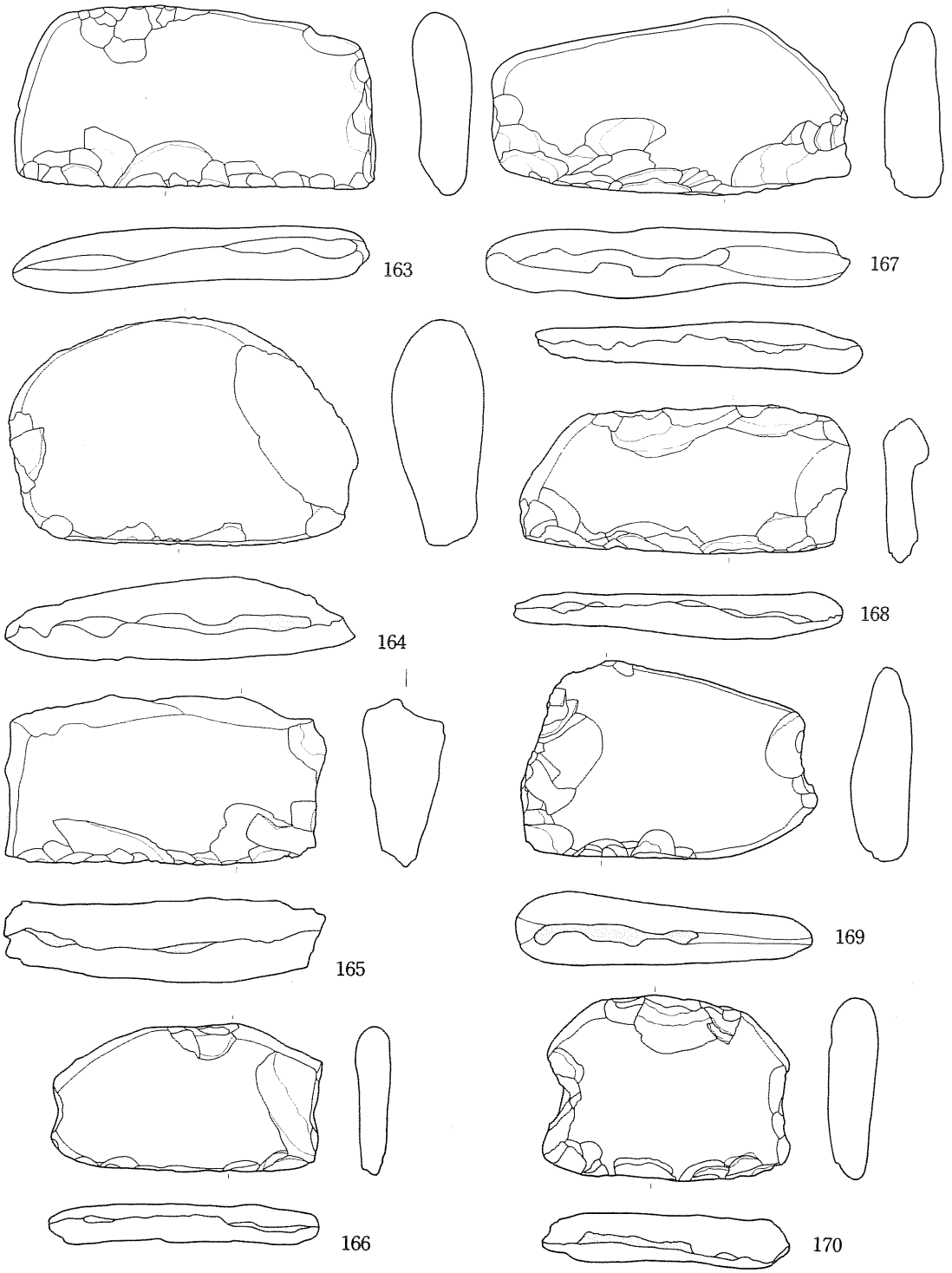
第59図　遺構内出土石器(17)




第60図　遺構内出土石器(18)　半円状扁平打製石器(1)

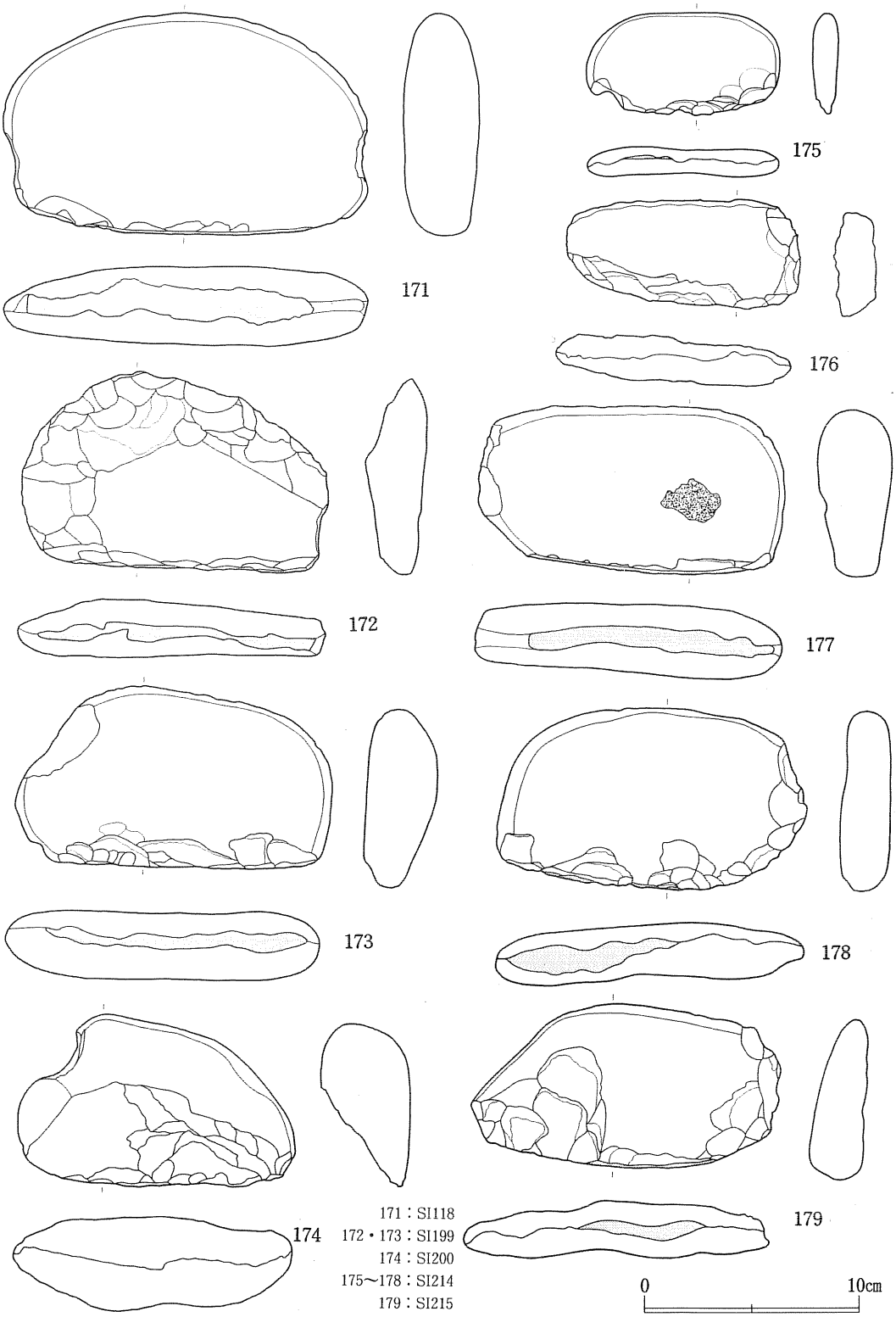



第61図　遺構内出土石器(19)　半円状扁平打製石器(２)

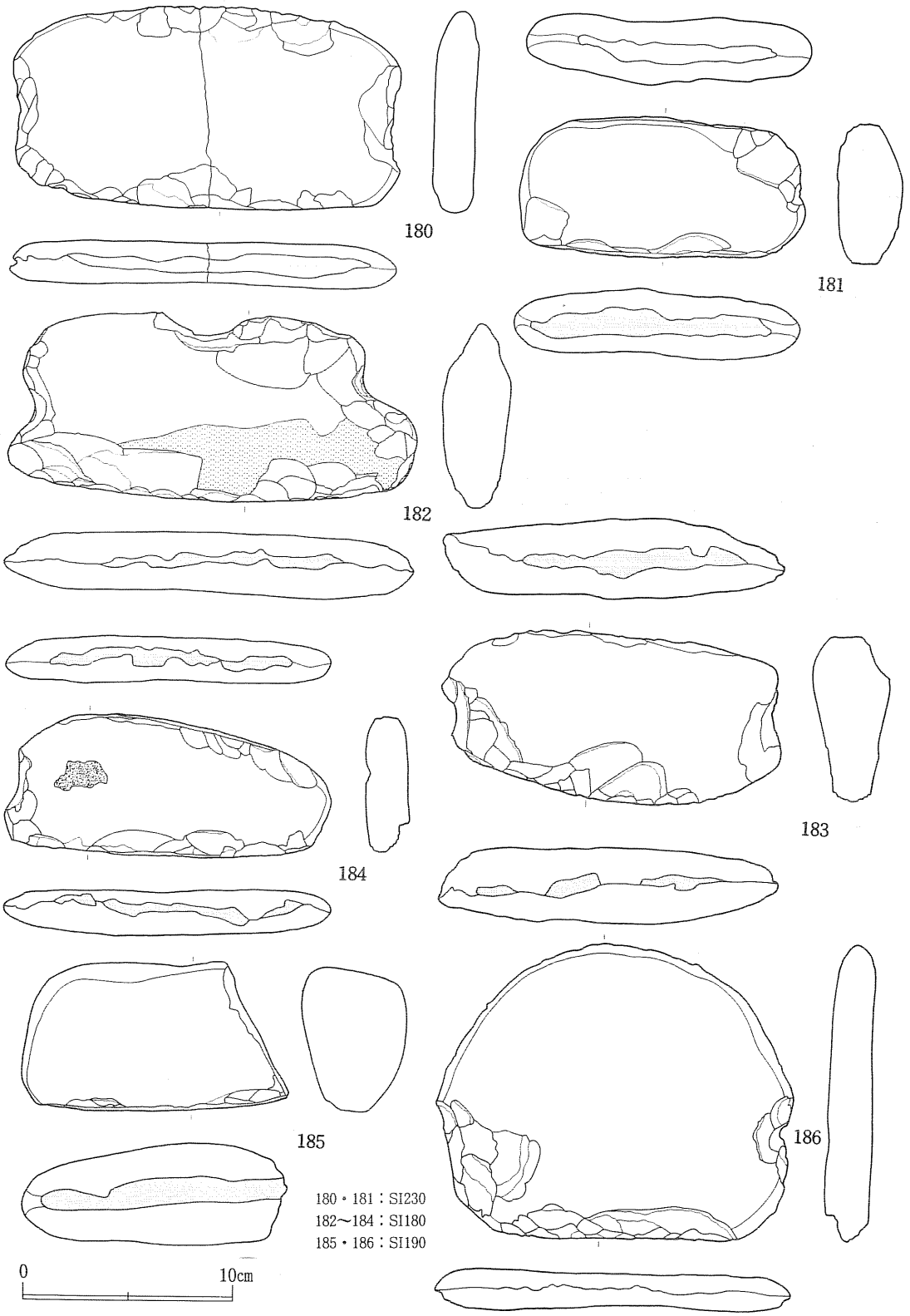



163・164：SI217
165～168：SI229
169・170：SI195

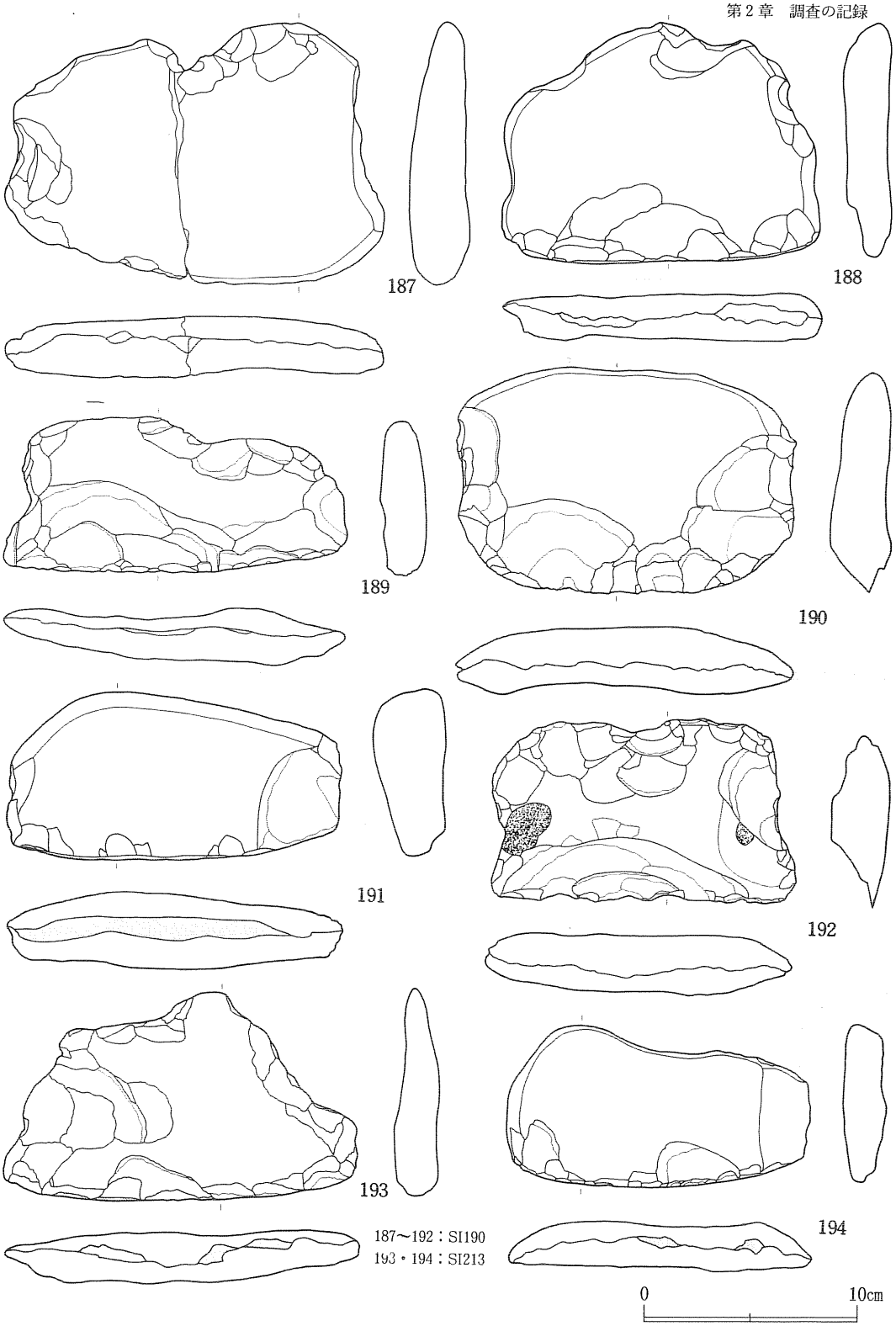
第62図　遺構内出土石器(20)　半円状扁平打製石器(3)



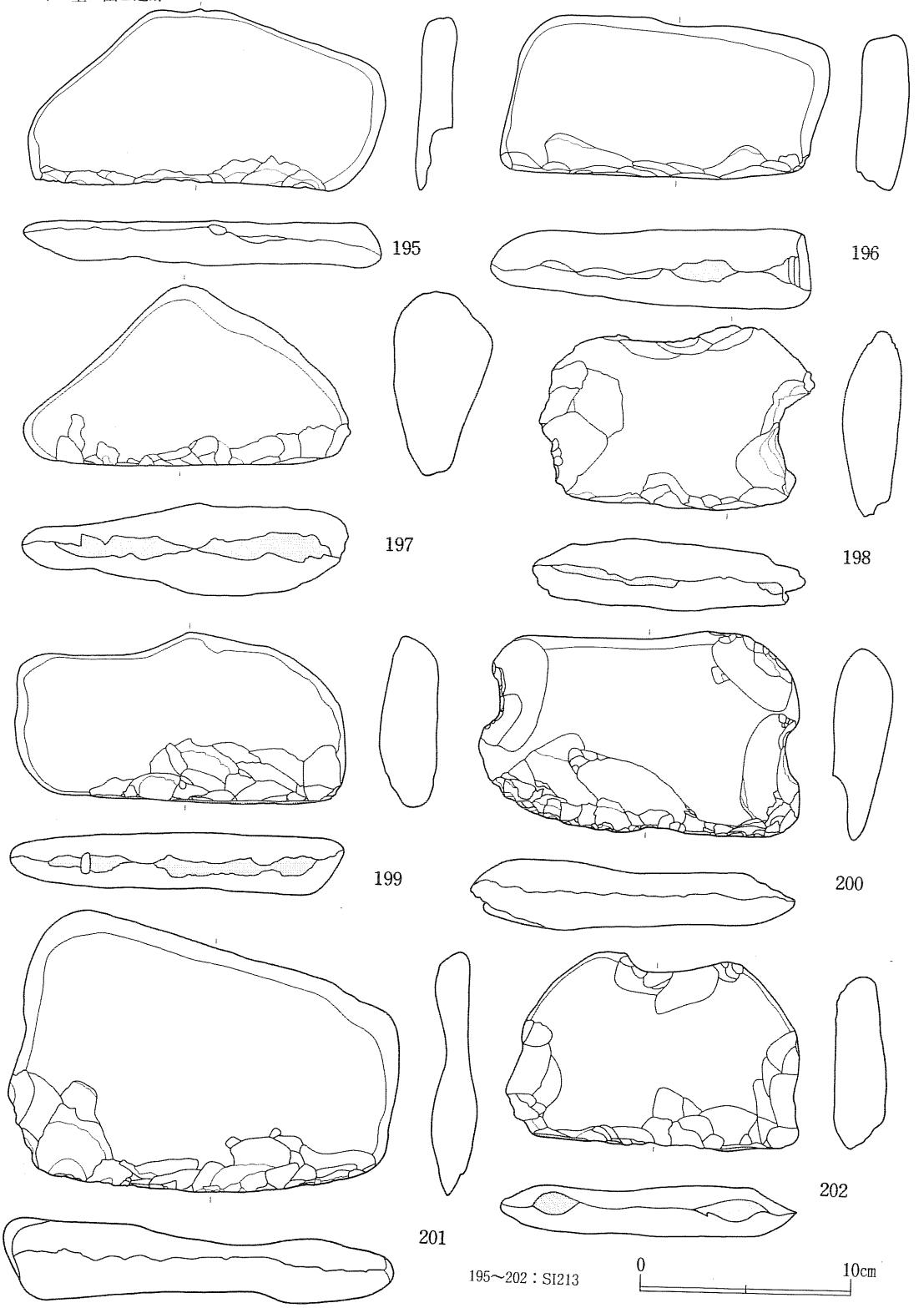

第63図　遺構内出土石器(21)　半円状扁平打製石器(４)



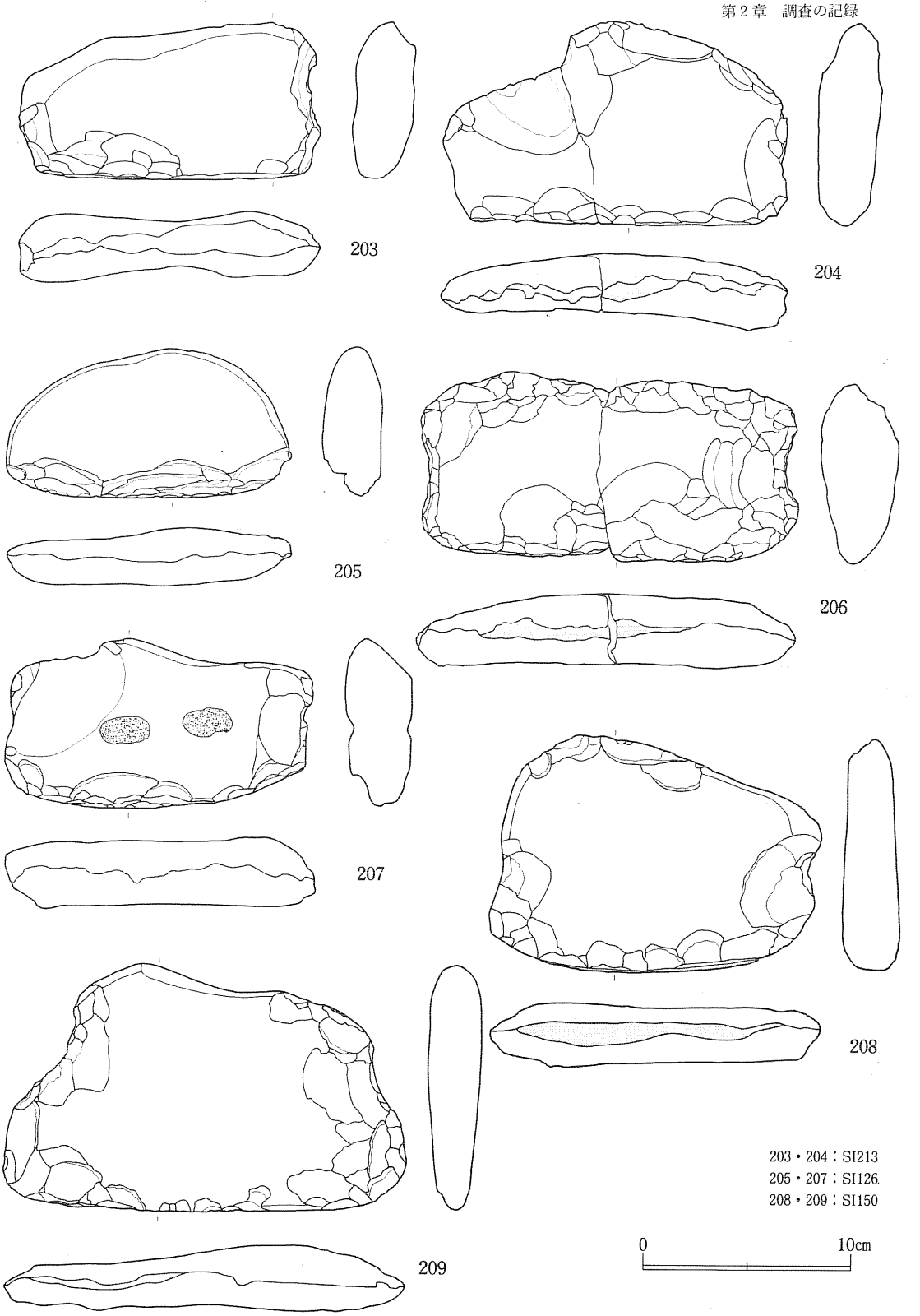

第64図　遺構内出土石器(22)　半円状扁平打製石器(5)



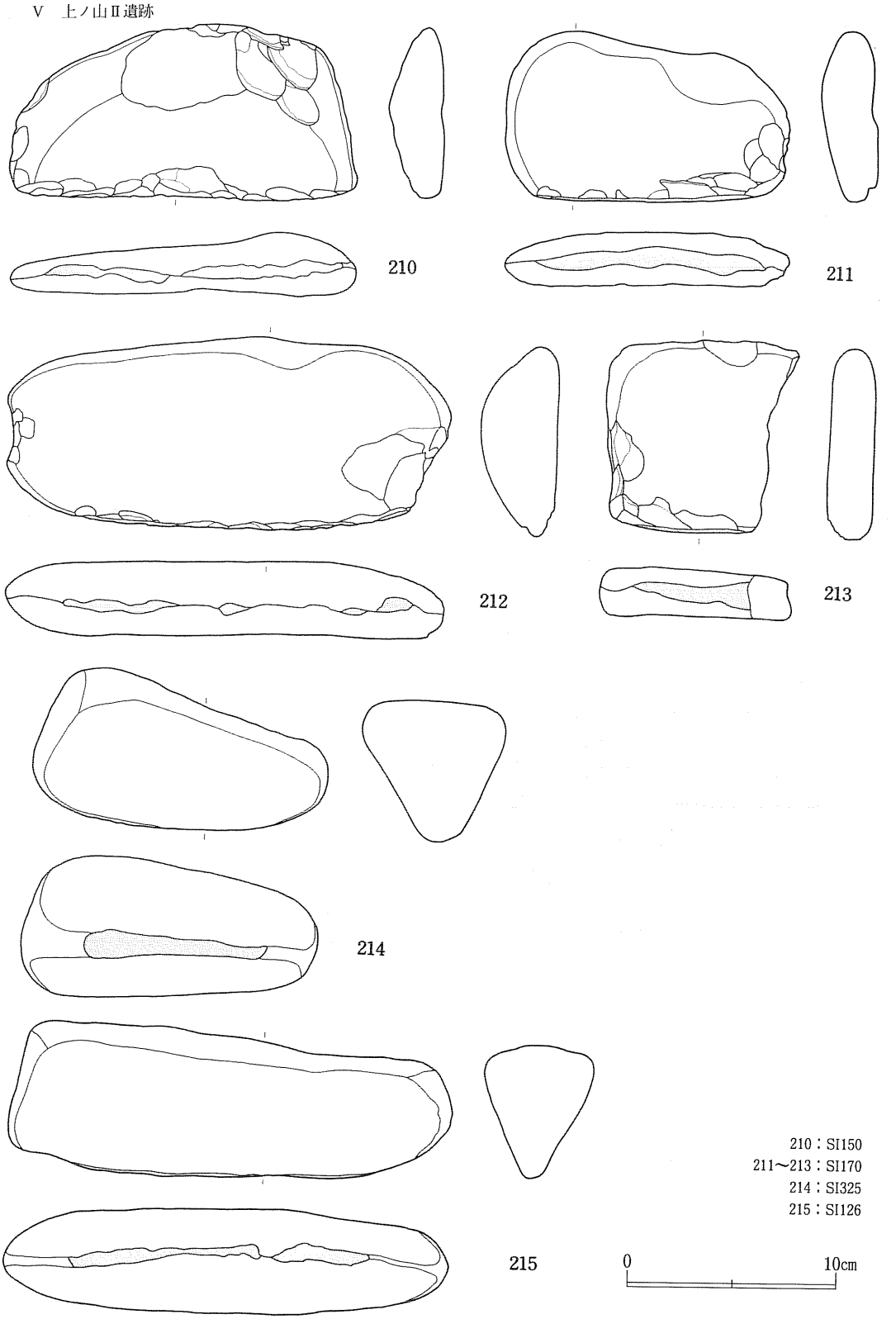

第65図　遺構内出土石器(23)　半円状扁平打製石器(6)



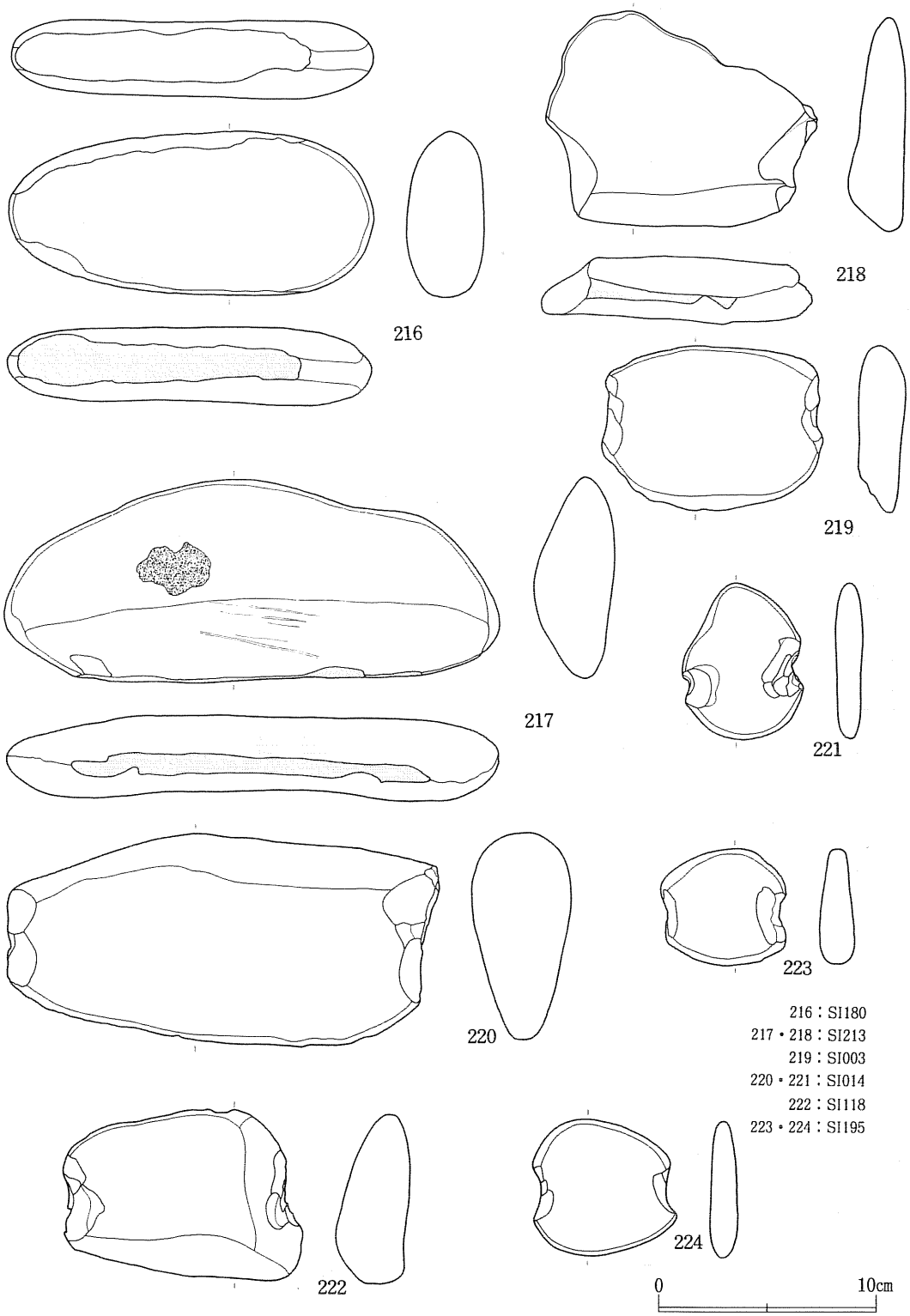

第66図　遺構内出土石器(24)　半円状扁平打製石器(7)




第67図　遺構内出土石器(25)　半円状扁平打製石器(8)

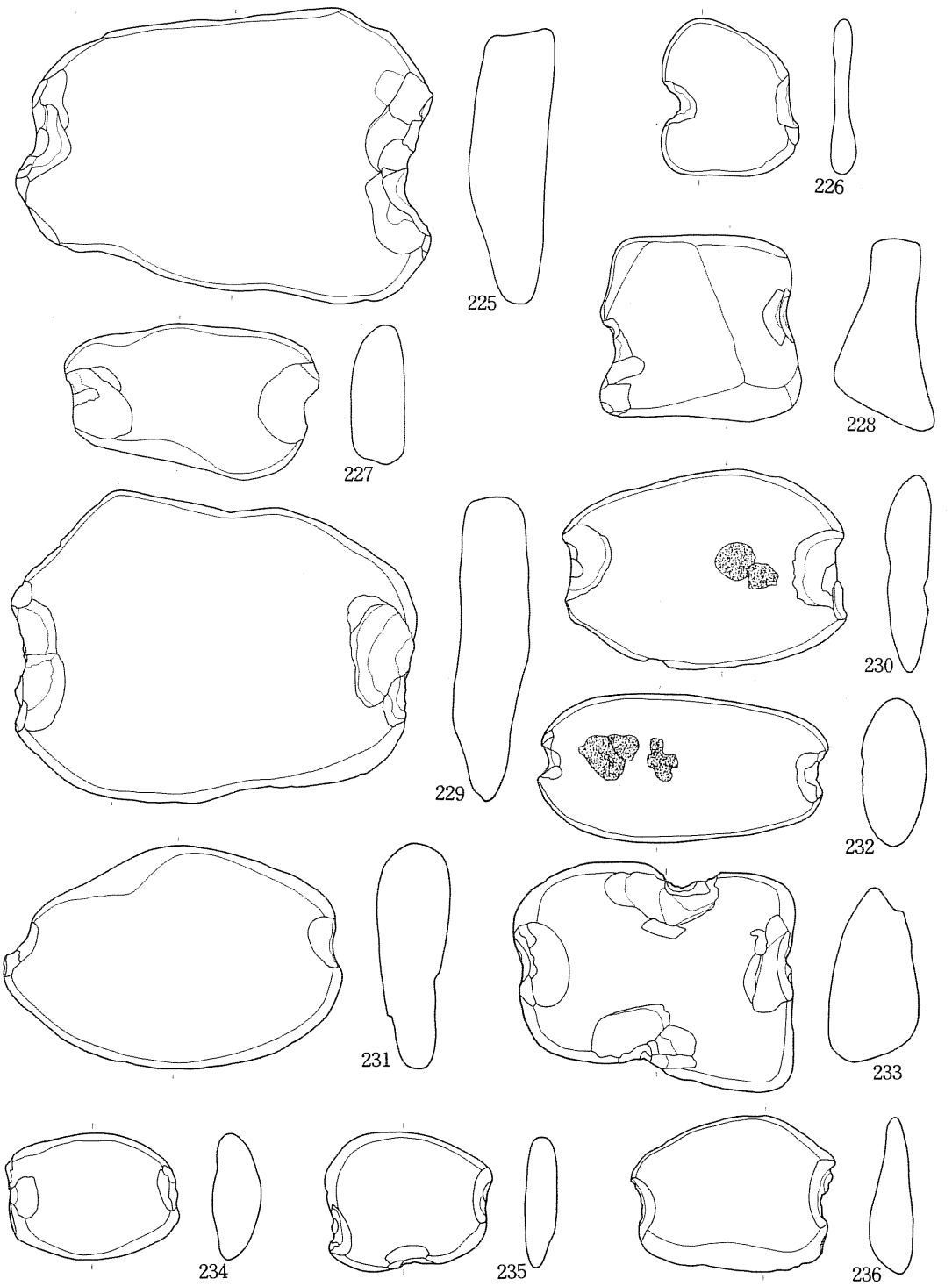



第68図　遺構内出土石器(26)　半円状扁平打製石器(9)　擦石(1)




216：SI180
217・218：SI213
219：SI003
220・221：SI014
222：SI118
223・224：SI195

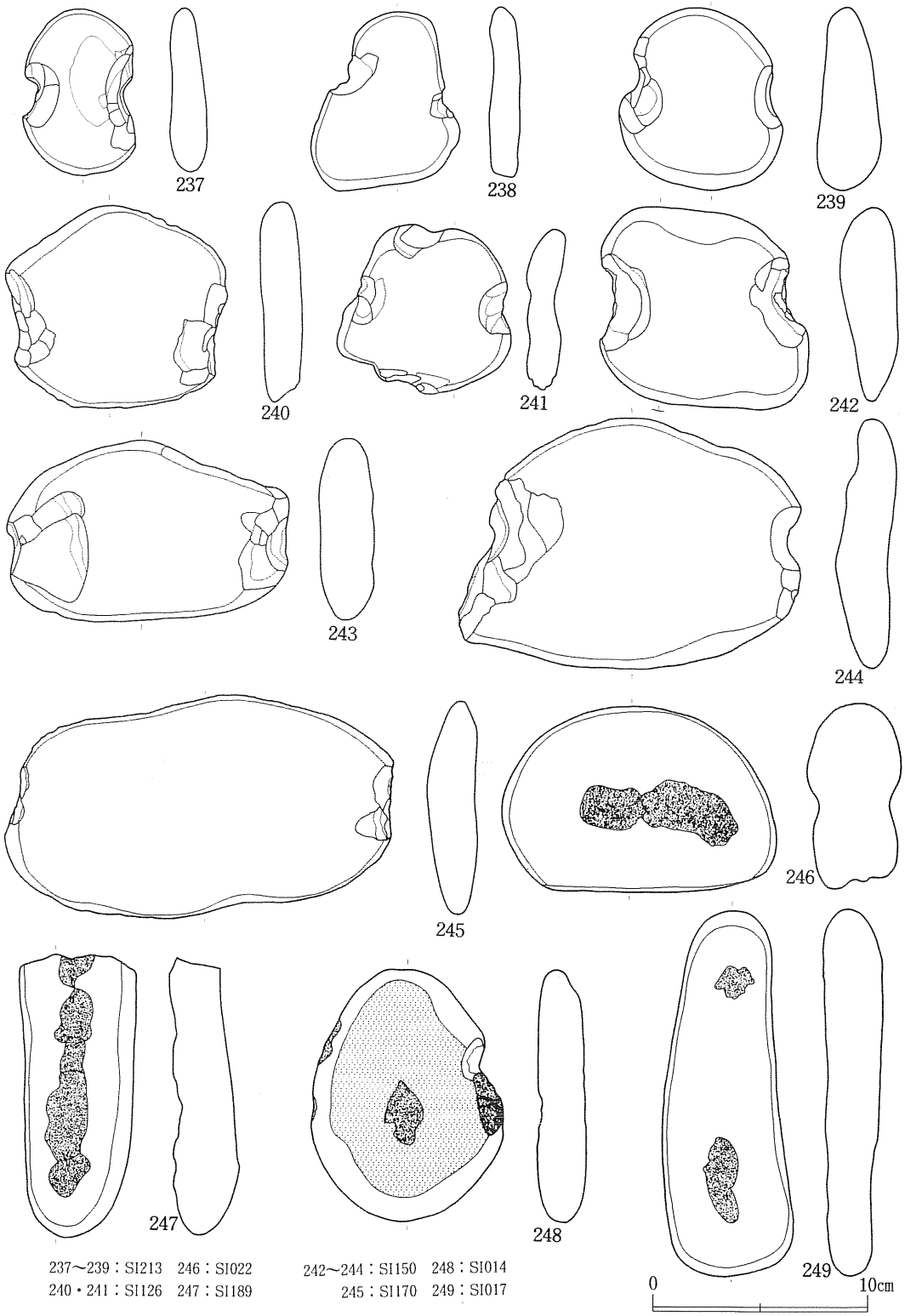
第69図　遺構内出土石器(27)　擦石(２)　石錘(１)




225：SI199
226：SI200
227・228：SI214
229：SI215
230～233：SI180
234～236：SI213

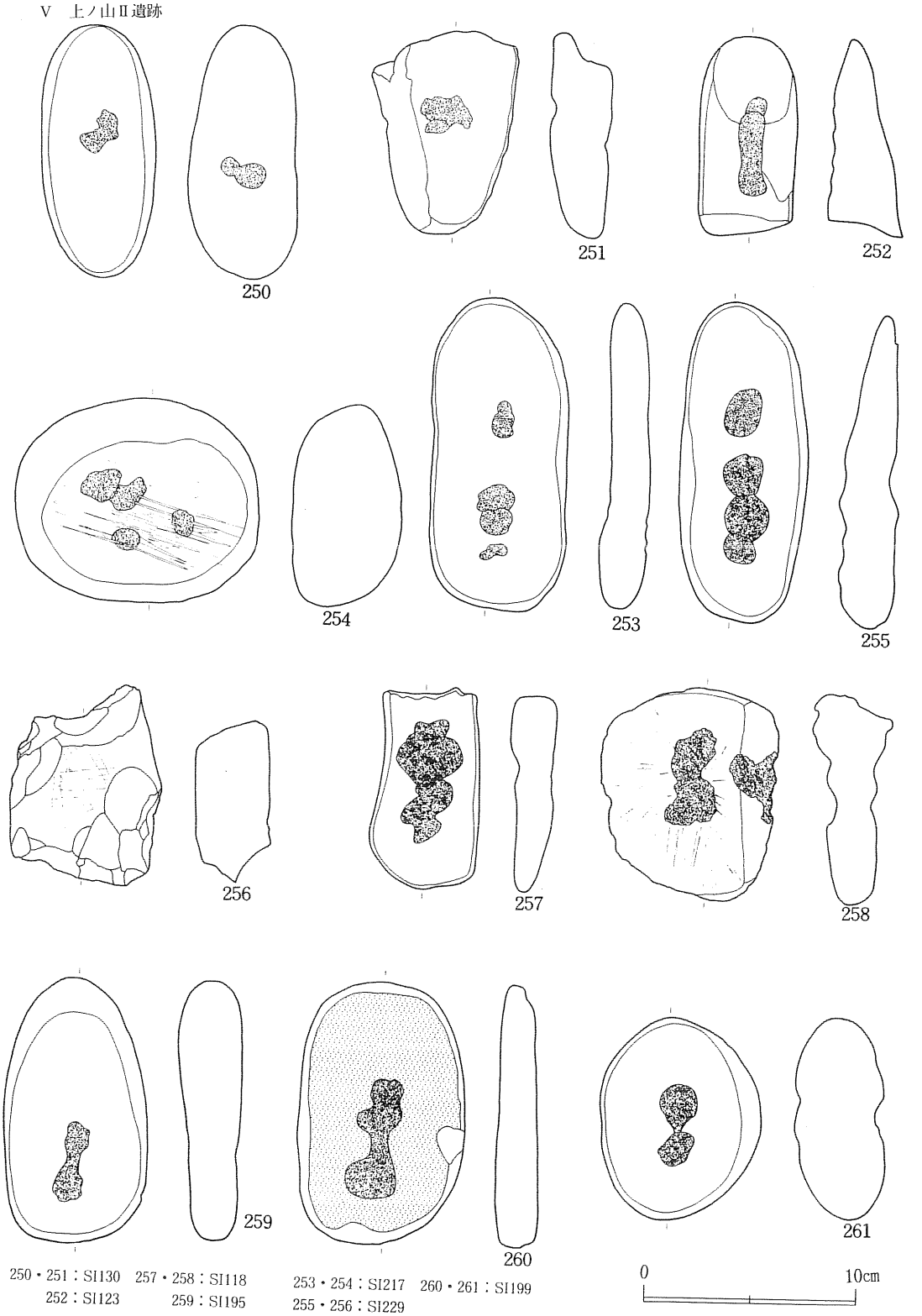
0　10cm

第70図　遺構内出土石器(28) 石錘(2)



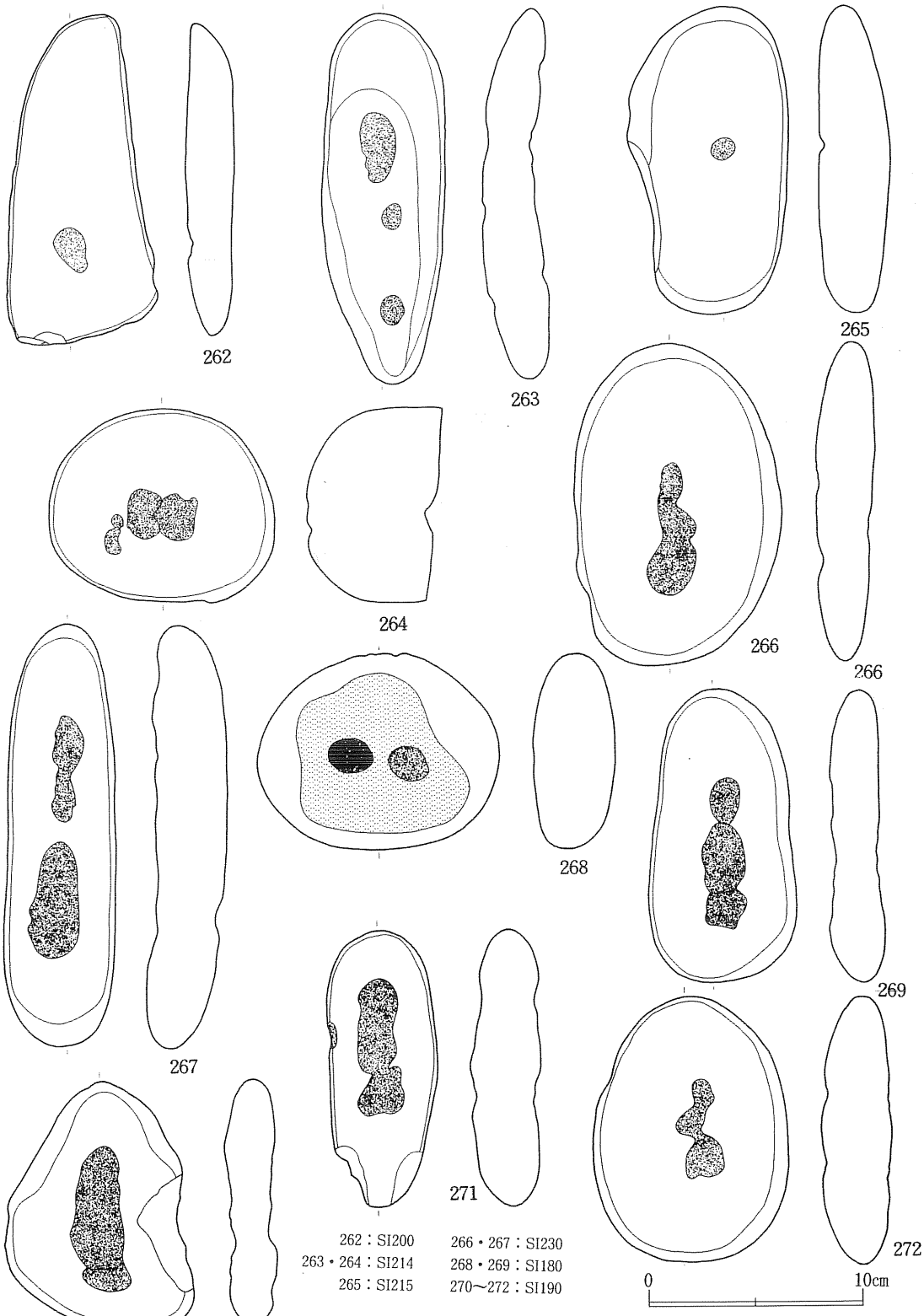

237～239：SI213　246：SI022
240・241：SI126　247：SI189
242～244：SI150　248：SI014
245：SI170　249：SI017

第71図　遺構内出土石器(29) 石錘(３)・凹石(１)

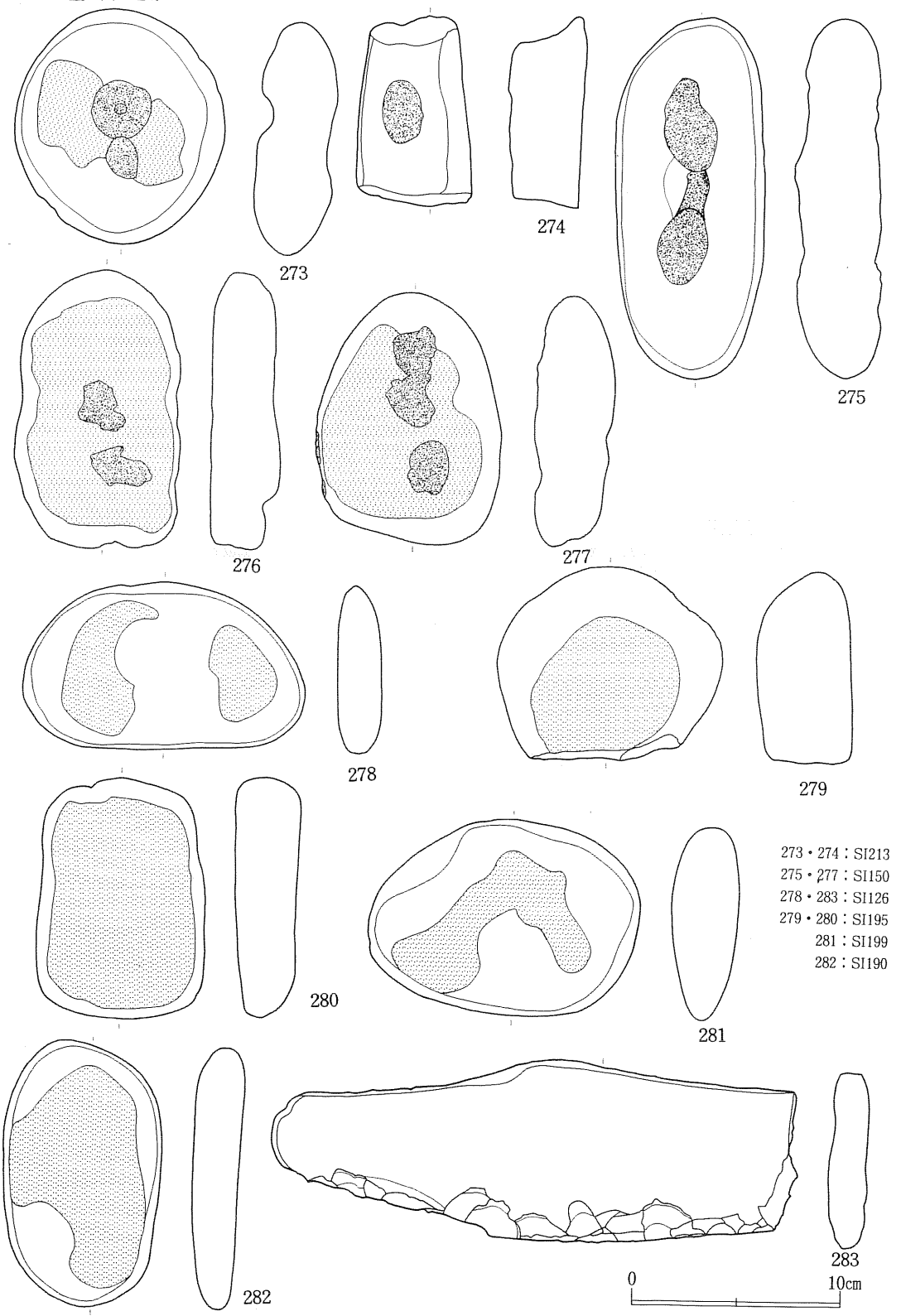



250・251：SI130　257・258：SI118
252：SI123　259：SI195
253・254：SI217　260・261：SI199
255・256：SI229

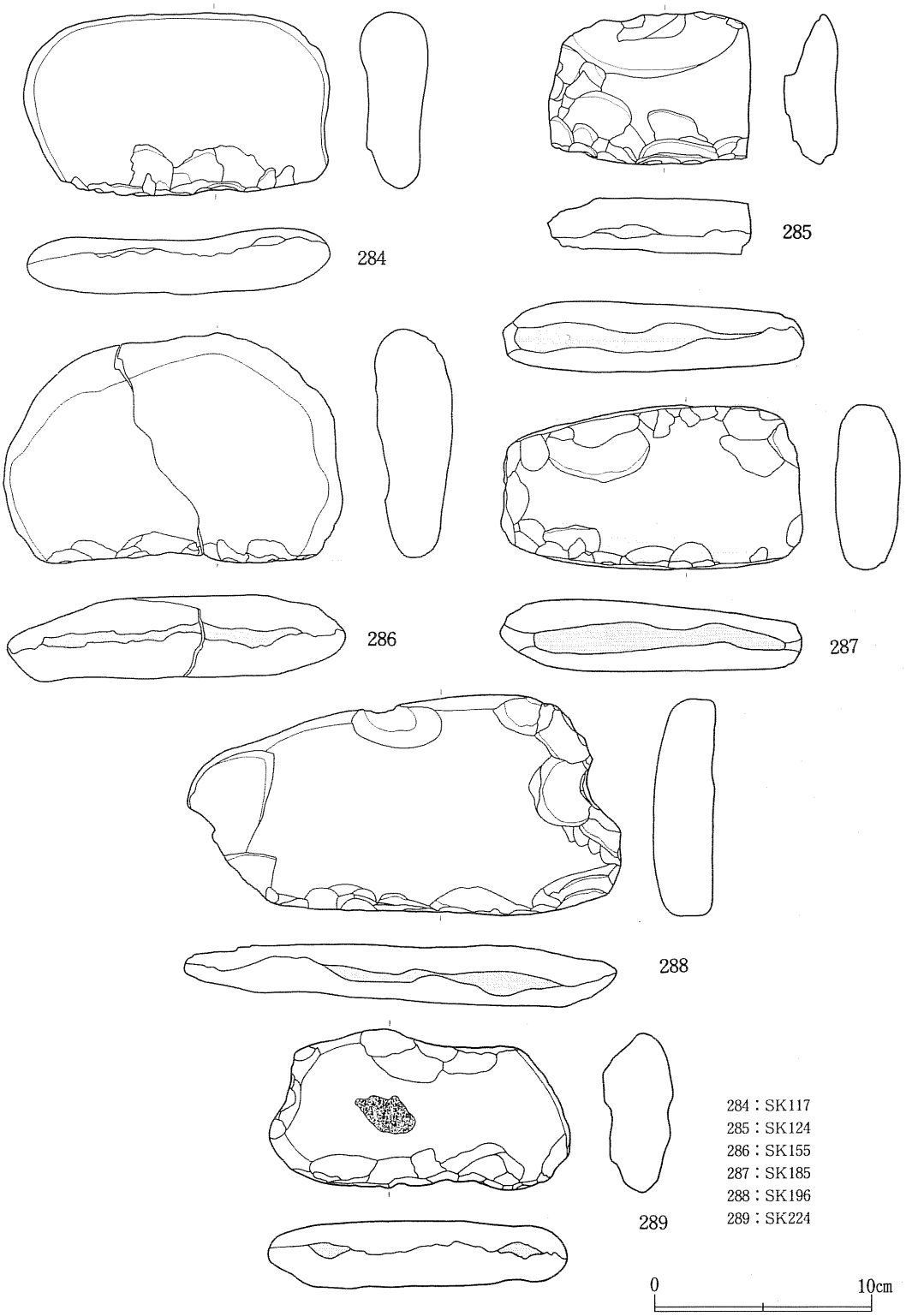
第72図　遺構内出土石器(30) 凹石(2)



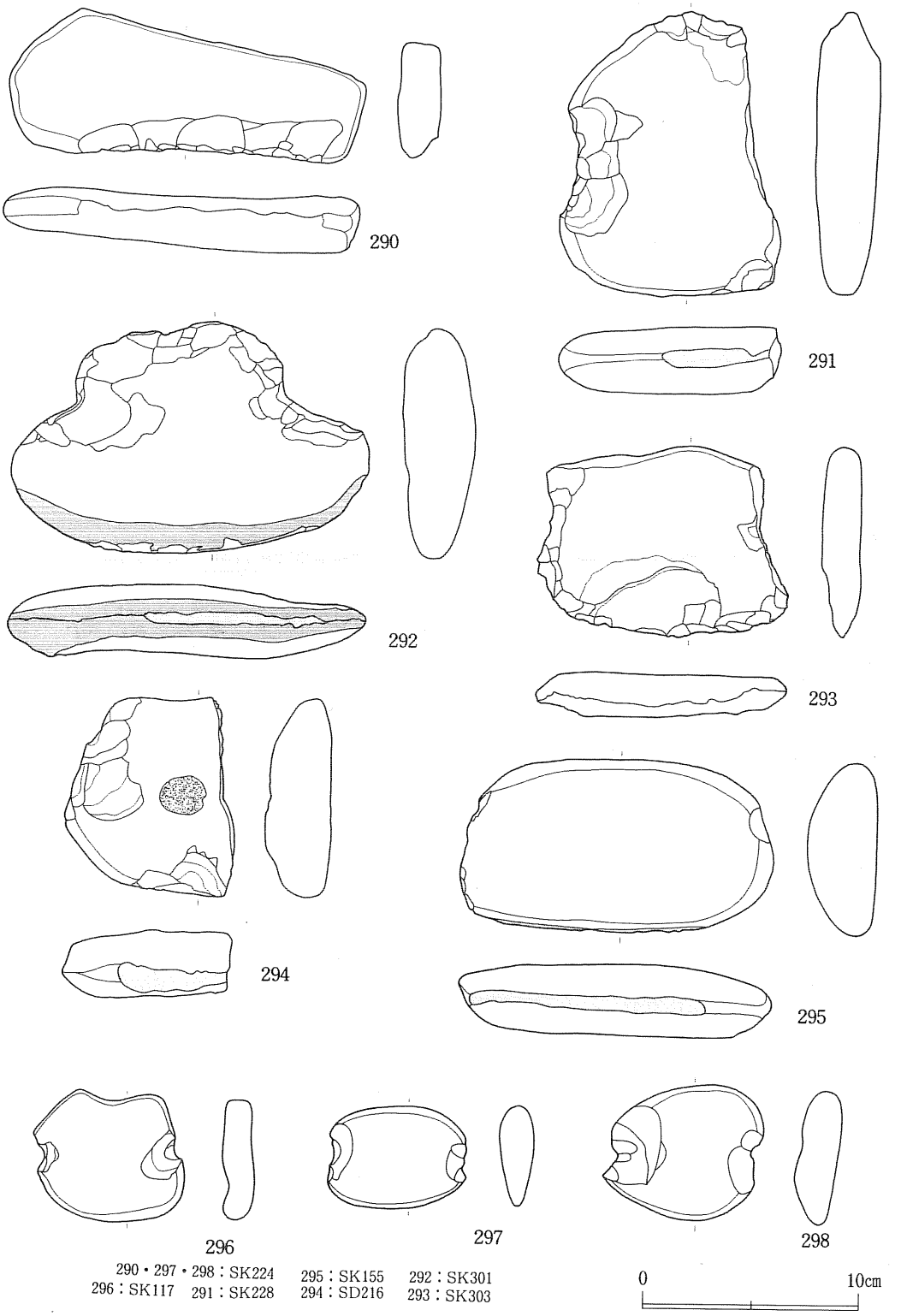

第73図　遺構内出土石器(31)　凹石(3)



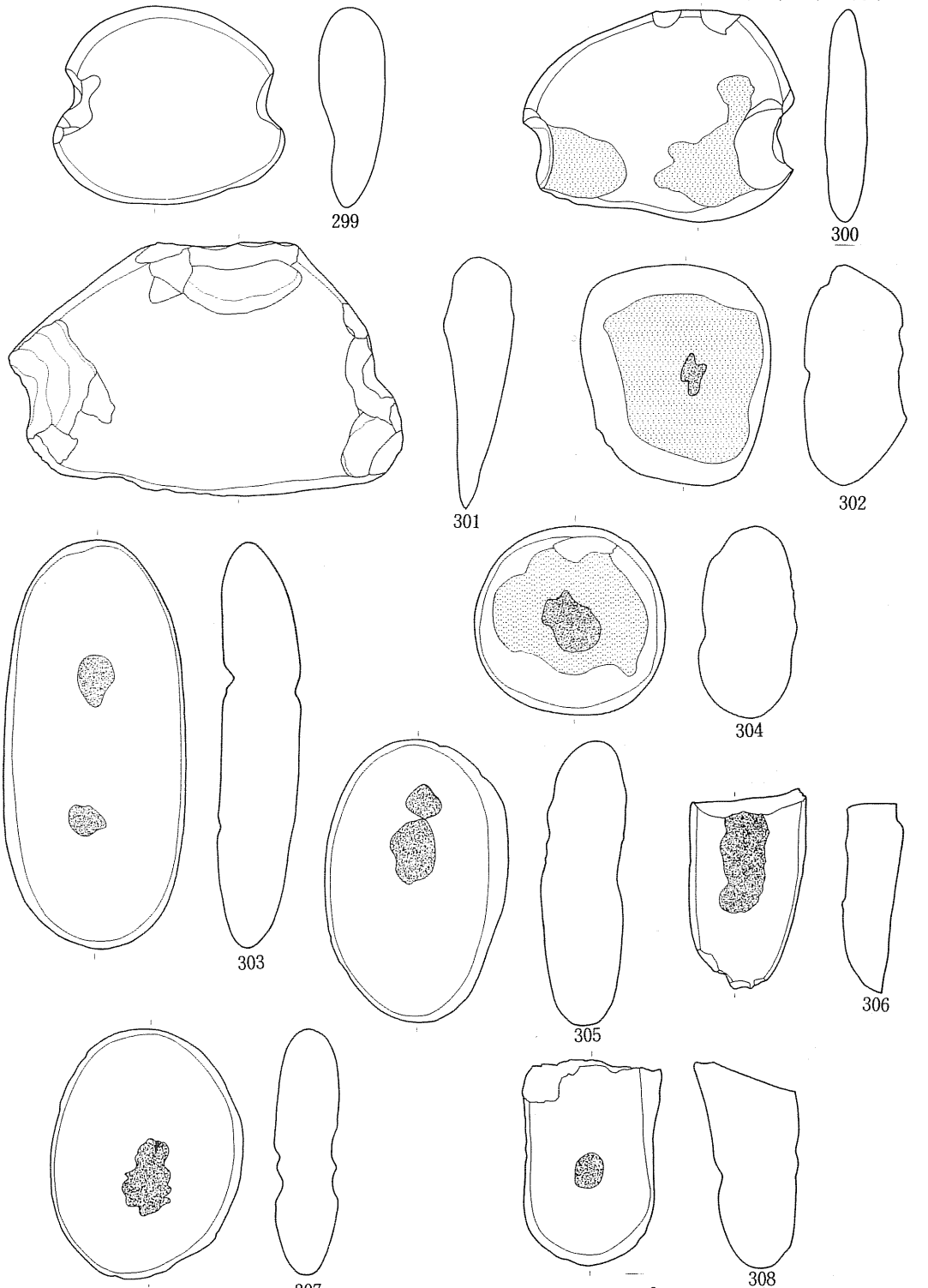

第74図　遺構内出土石器(32) 磨石(1) ナタ状石器




第75図　遺構内出土石器(33)　半円状扁平打製石器(10)

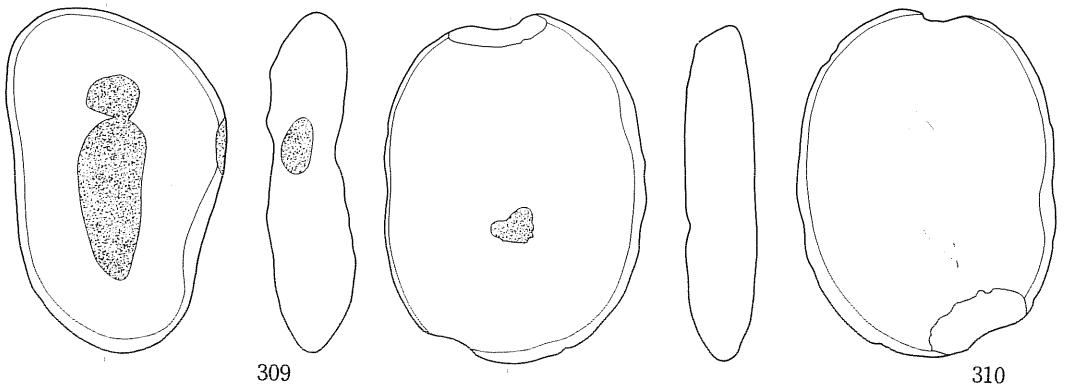


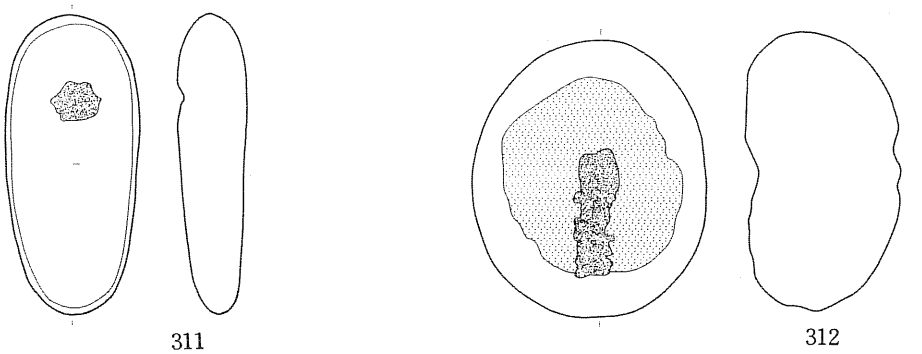

第76図　遺構内出土石器(34)　半円状扁平打製石器(11)　擦石(3)　石錘(4)

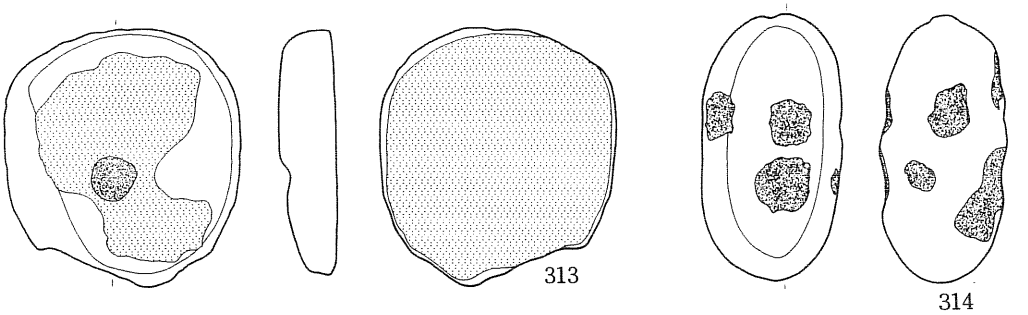


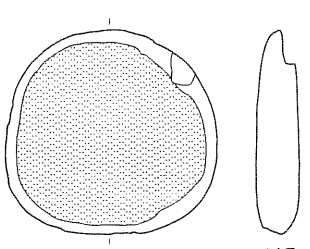

299・300・307・308：SK224　301：SD216　302：SK117　303・304：SK155
305：SK194　306：SK196

第77図　遺構内出土石器(35) 石錘(５)・凹石(５)



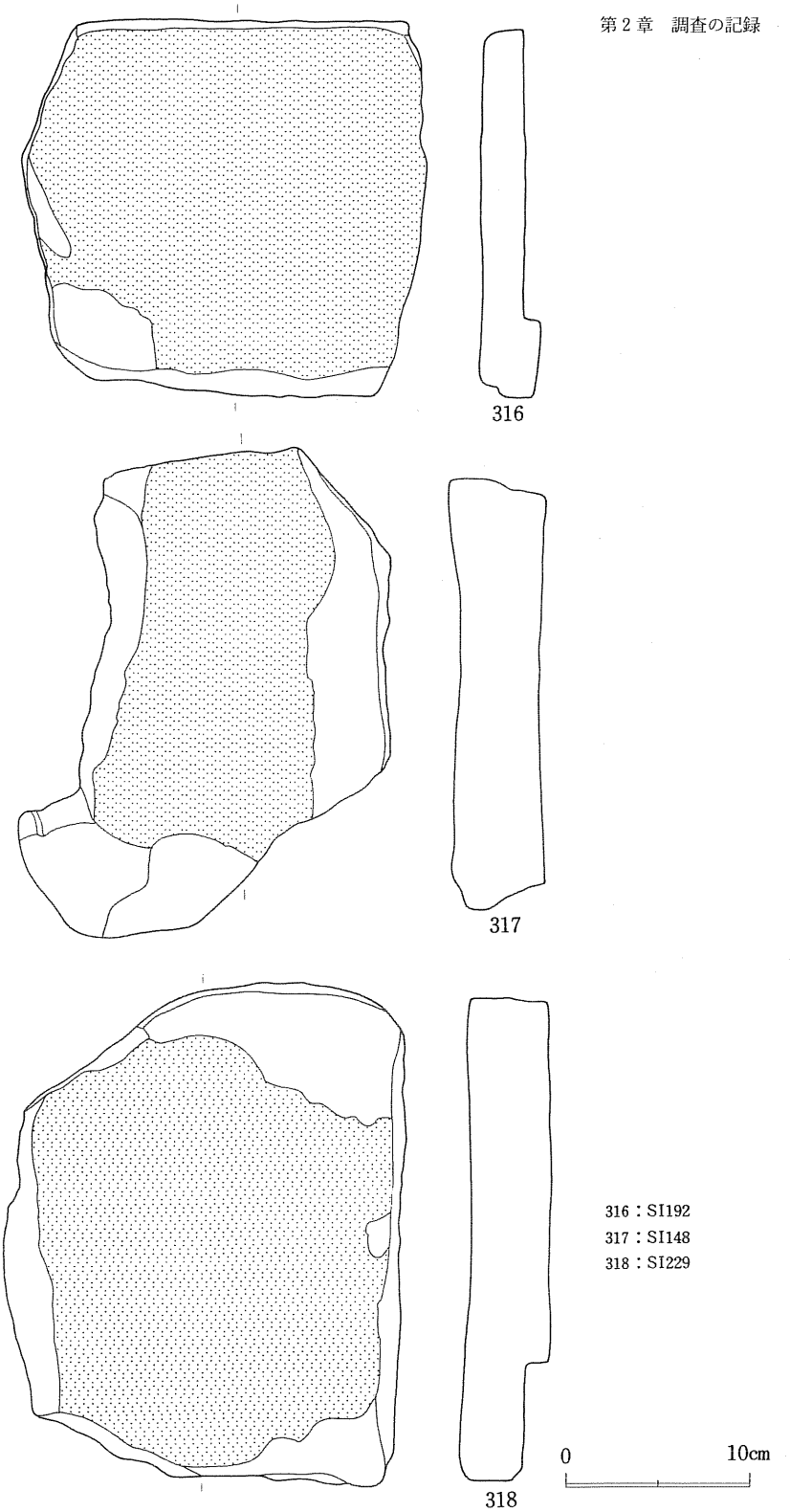



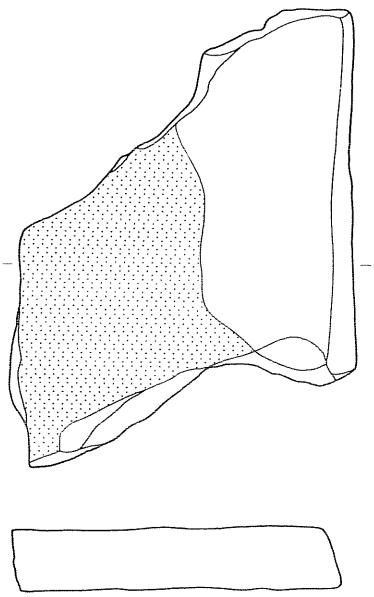

309：SK224
310：SK225
311：SK228
312：SK300
313・315：SK302
314：SQ219

0　10cm

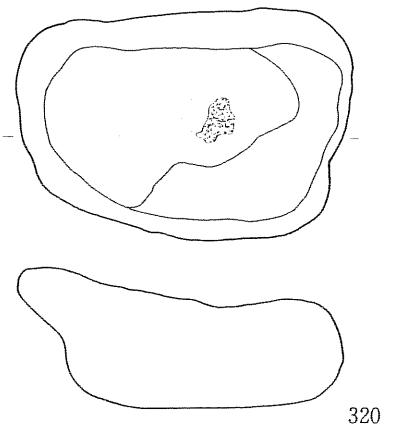
第78図　遺構内出土石器(36)　凹石(6)・磨石(2)



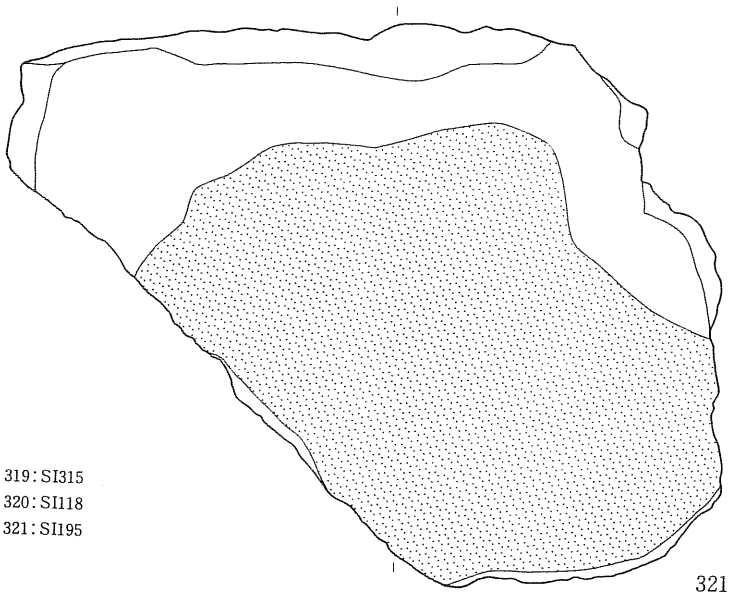

第79図　遺構内出土石器(37)　石皿(1)



319



320

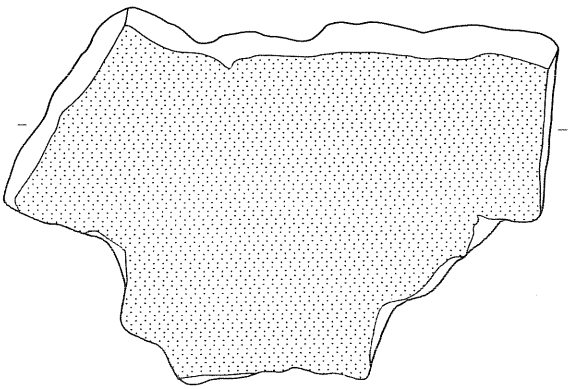


321

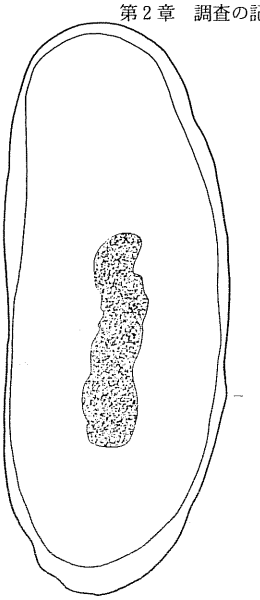
319：SI315
320：SI118
321：SI195

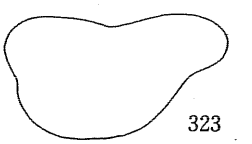
0　10cm

第80図　遺構内出土石器(38)　石皿(2)・台石(1)

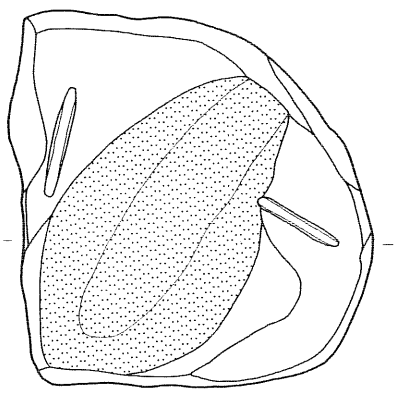


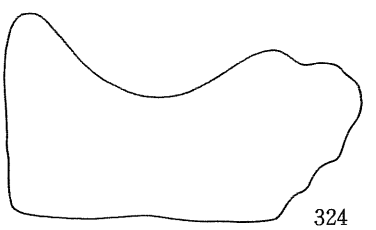
322



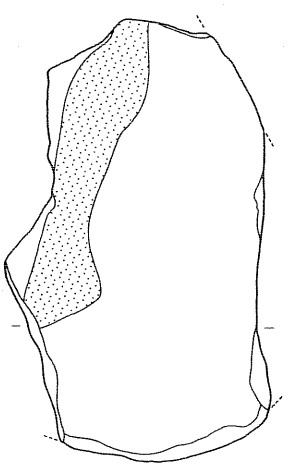


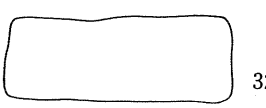
323





324



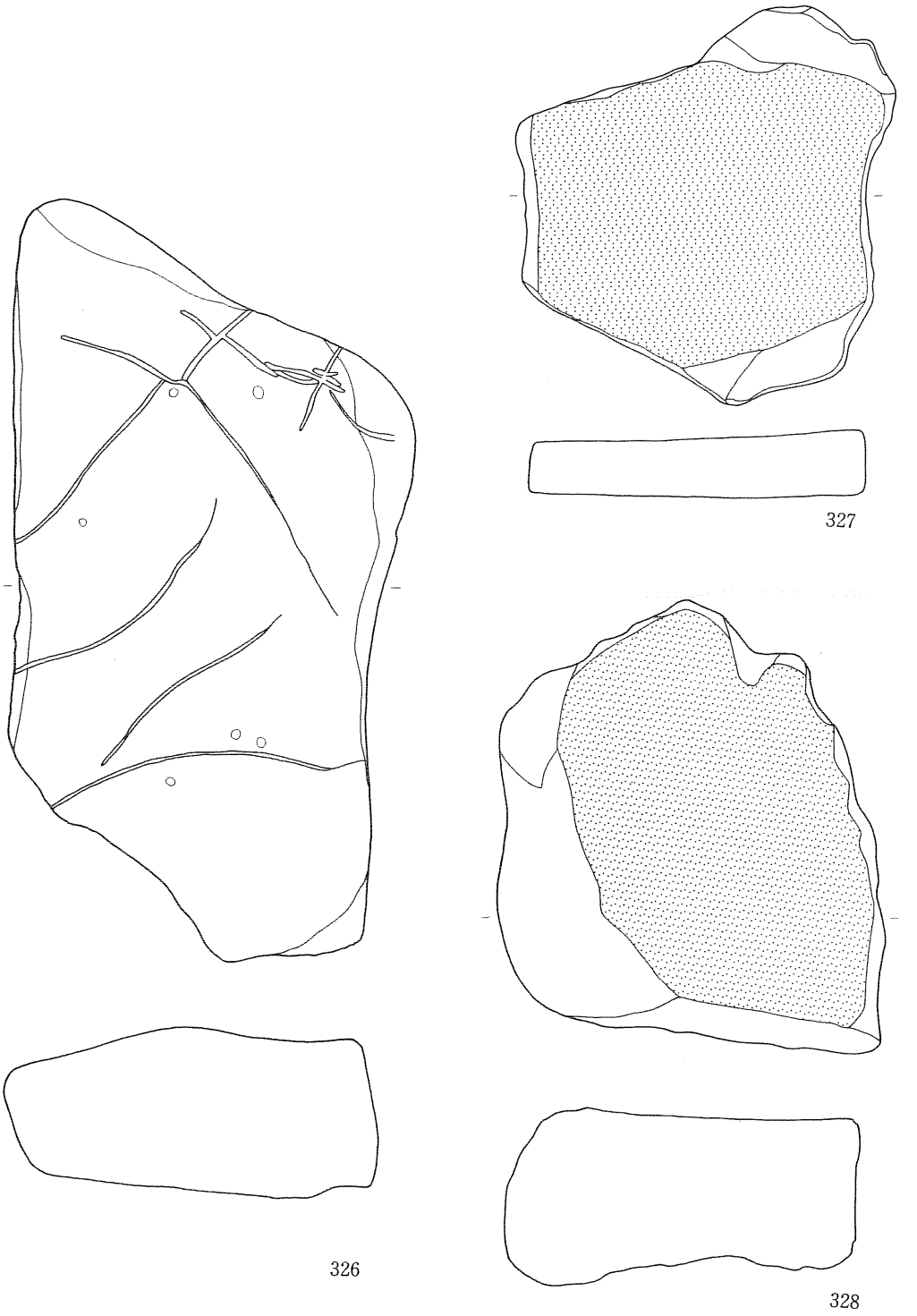


325

322：SI180
323・324：SI213
325：SI150

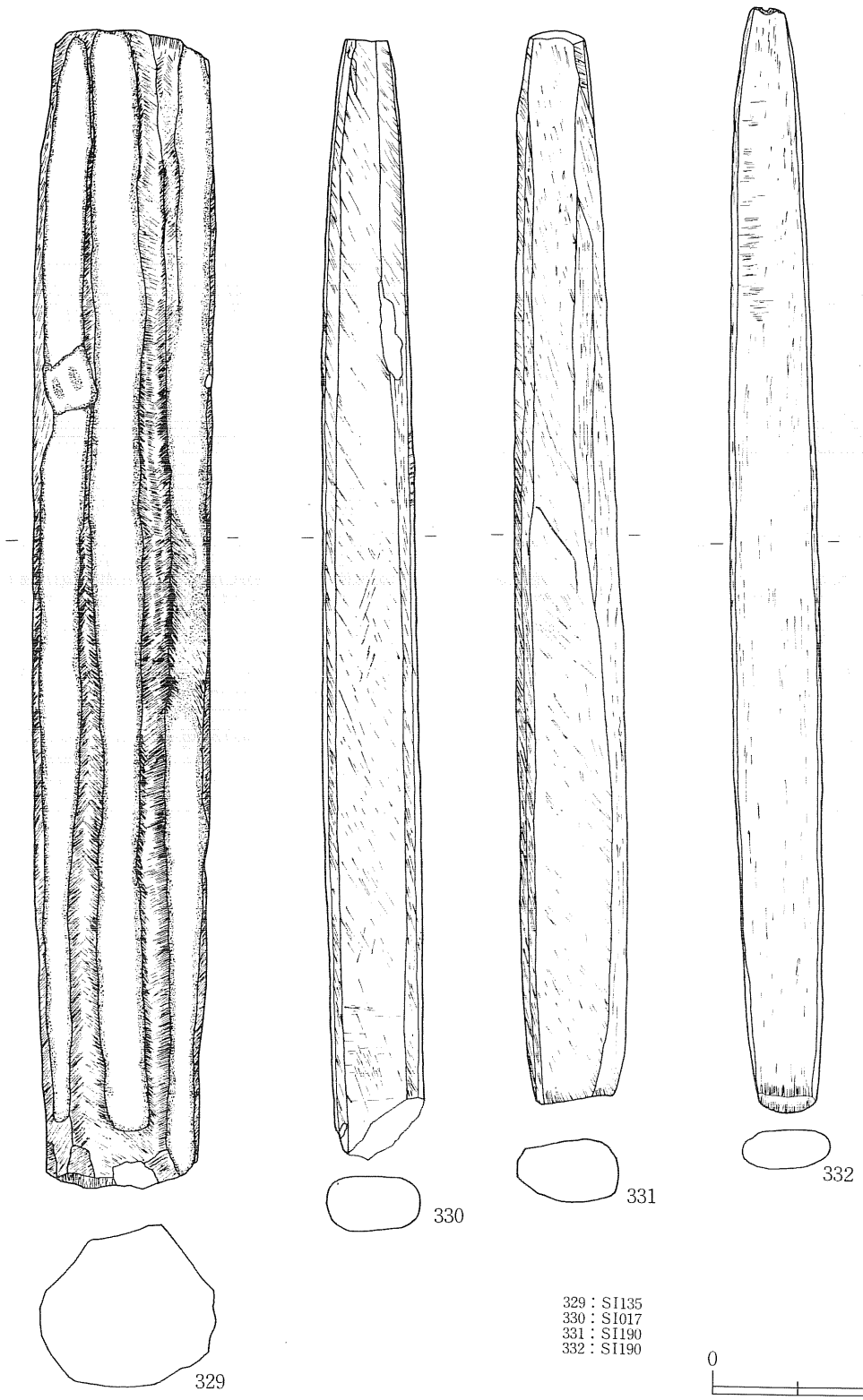
0　10cm

第81図　遺構内出土石器(39) 石皿(3)・台石(2)

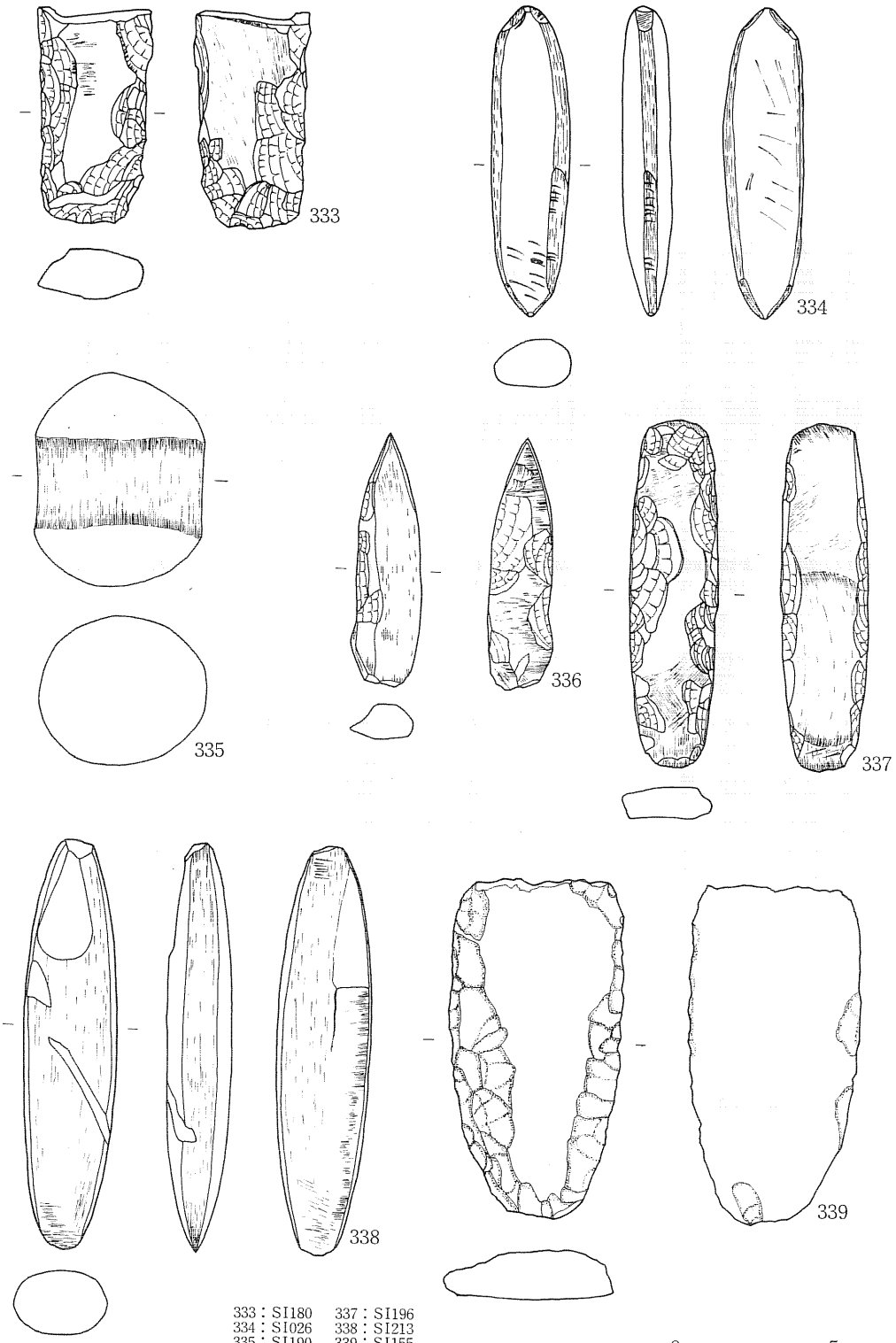



326：SI192
327：SK155
328：SK206

第82図　遺構内出土石器(40)　石皿(4)

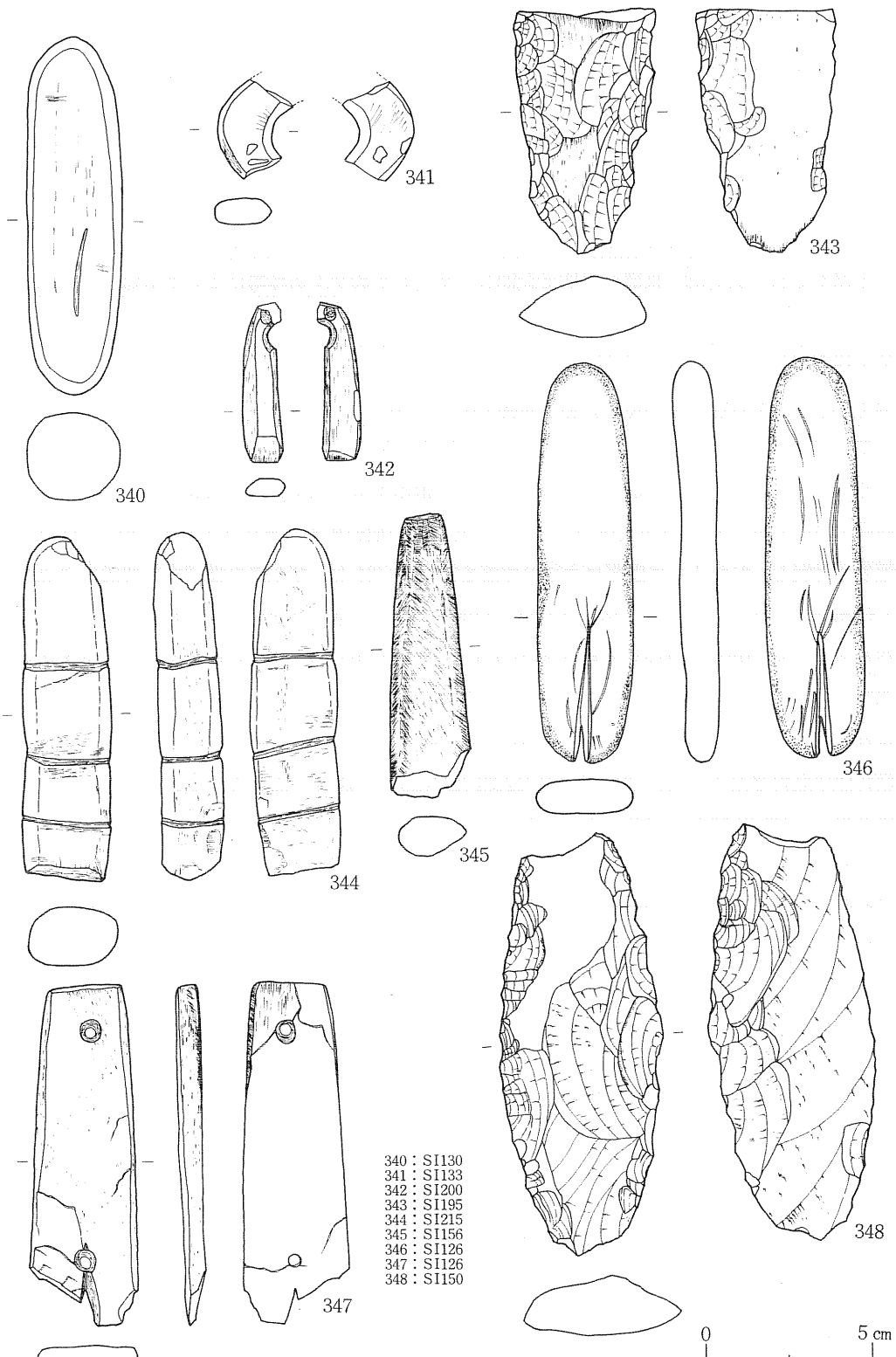



第83図　遺構内出土石製品（1）




333：SI180　337：SI196
334：SI026　338：SI213
335：SI190　339：SI155
336：SI155

第84図　遺構内出土石製品（2）




第85図　遺構内出土石製品（3）

## 第2節　遺構外の出土遺物

### 1　土器

上ノ山Ⅱ遺跡から出土した土器は、コンテナにして約500箱に上る。遺構に伴う土器は少なく、その多くは遺構外の捨場からの出土である。これらの土器の時期は前期後葉から晩期初頭にわたるが、前期の他は極めて微量に出土したのみである。前期の土器をⅠ群、中・後・晩期の土器をそれぞれⅡ群・Ⅲ群・Ⅳ群に大別し、主として施文上の特徴によって分類して説明する。

**第Ⅰ群土器**

第1類　（第86図、第101図、第102図197・198）

粘土紐貼付により梯子文、波状文などが描かれる。79・80は口頸部が強く外反し、体部が丸みを帯びて内傾する鉢形土器で、79の3条の平行線の下位には角張った渦巻きとなる梯子文が横位に展開する。80の肩部文様や192・194もこれに類似するモチーフである。81～83は口頸部が外反し、なだらかに底部にすぼむ体部を有する。81および185の梯子文は複雑に発達して体部下方にまで及ぶ。82の格子状貼付文を取り囲む粘土紐は、その先端が互いに逆方向の渦巻となり、83の場合は横位の波状文も加わる。口縁は平坦口縁と波状口縁とがあり、鋸歯状装飾体が80・82・83に見られる。83の場合は4単位の波状口縁となり、肥厚する装飾体上には列点が施される。188のように波状口縁の中央部に孔を有するものがあり、189・190は環状装飾体が貼付されている。80・82の口縁部内面には、波状文が2段にわたって施される。

第2類　（第87図84～90、第102図199～212、第103図213～220）

Ⅰ類同様粘土紐貼付による文様であるが梯子文はなく、渦巻文、波状文、波状文と弧線文との組み合わせなどの文様が描かれる。器形には84・86のように口縁から底部まで直線状にすぼむものと、87のように口縁部が直立し、球形の体部から急激に底部にすぼむもの、および89や219のように口縁部が内湾するものなどがあり、変化に富む。口縁部の渦巻文は完形土器で見ると、渦巻が逆方向となるものが連結して1対となり、84の場合はこれが1単位のみであるが、87では3個1対の渦巻文が反対側口縁にも1対付され、さらに別種の渦巻文が1対貼付されている。199・201は、82の角張った渦巻文と酷似する。口頸部に横位の波状文がめぐり、この下位に88や209・211などのように弧線文が貼付されることがあり、こうした文様は口縁部内面にも施される。口縁部は平坦であるが渦巻文の部分のみ波状を呈し、低い鋸歯状装飾体が付く。213・214・219の口縁部突起の上面観は渦巻き文である。220の縦位の波状文は1類の第86図81の体部文様にも似る。89は全体がキャリパー形となる小形の土器で、平坦口縁に小突起が付設され、地文の撚糸文の上に流動的な文様が貼付されるが一部剥落している。

第3類　（第88図95・96）

粘土紐がいくぶん角度のある鋸歯状となり縦位あるいは斜位に展開する。95は口縁部に4単位の肥厚する鋸歯状装飾体が取り付けられる。

第4類　（第87図91～94、第103図221～224、第104・105図）

粘土紐による波状文が口頸部に主として横位にめぐるものを本類としたが、破片の場合には2類に含めた波状文下部の弧線文の有無は不明である。器形には口縁から直線的に底部に至るものと、口頸部が外反するものの2種がある。波状文の数は1条から3条にわたり、2条1組が2段にわたることもある。94・233・240・243のように直線文を伴うこともある。口縁部内面にも1、2条施される。235のみ縦位で、91の口縁部には粘土紐貼付による小突起がある。

第5類　（第88図97・98）

器体上半が大きく外反し、4単位の波状口縁となり、粘土紐による波状文が横位あるいは縦位に貼付される。波状文は第3・4類とは異なり、粘土紐を細かくちぎって1つずつ貼付しており、角度も鋭く、鋸歯文と言う方が適切である。97の波頂部には肥大した鋸歯状装飾体が取付く。

第6類　（第106図、第107図260～266）

粘土紐の上に刺突文、刻み目文が加えられる。252～254は同一個体で、幅12㎜ほどの粘土紐を貼付け、縦長の刻み目文を施す。口縁部に渦巻状の突起・細い波状文・鋸歯状装飾体を思わせる幅広の波状文などを付す。258・259も同一個体であるが、貼付文に2種あり258は第87図85のそれに近い。262のように鋸歯状装飾体の粘土紐にも施文される。

第7類　（第88図99・100、第89図101、第107図267～272、第108図、第109図290～298）

沈線による横位の波状文が施されたものを本類とする。器形には口頸部がゆるやかに外反し、体部がわずかにふくらむ深鉢と口頸部が強く外反し、体部も丸みを帯びるもの、口縁から直線状に底部に至り、底部のみが強く外方に張出すものとがある。波状文は波頂部が丸みを帯びるものと鋭角の鋸歯状となるものの両者がある。1条か2条が多く、太く明瞭に掘り込まれる場合と、半截竹管状の工具により浅い掘り込みとなるものがある。多くは口頸部に施文され、この部位には縄文を施文しないことが多いが、縄文施文後に重ねて沈線を施すこともある。101のみは器体全面にわたって施文される。指頭圧痕が口唇部や頸部隆帯上に施される。

第8類　（第89図102・103、第109図299～305、第110・111図、第112図332～334）

上下2段にわたる鋸歯文や平行沈線文が、斜位または縦位の鋸歯文あるいは沈線文によって連結され、これらによる文様が外反する口頸を有する大型の深鉢の口頸部文様帯を構成する。102は横位の波状文が3条で、これに2条1組の斜線が加わる。103は器高54㎝ほどの大型深鉢で、頸部文様は菱形文の連続となる。体部には複節斜縄文を施す。316・334は菱形文を充塡

するモチーフとなる。318は上下2条の平行沈線間に鋸歯文を描き、口縁部内面に斜縄文を施文する。

第9類　（第90図104・107、第112図335～344、第113図）

頸部文様帯に沈線による渦巻文が施文されるものである。渦巻文は単独で用いられる場合と鋸歯文や波状文あるいは平行沈線文と併用される場合があり、また、角張った菱形に近いものや、流動的な曲線で描かれるものがある。器形には口頸部が強く外反する小型の土器、360～362は波状口縁となる。

第10類　（第90図105・106・108、第114図363～369）

沈線文が土器体部下方にまで垂下して施文される。108は円筒形の土器で半截竹管状工具による鋸歯文が、縦位沈線・格子文・刺突文と組み合わされる。363は角張った渦巻文と併用されるらしい。

第11類　（第90図109、第114図370～374、第115図375）

頸部に2条の平行沈線文が施文されるものである。109は底部が揚底の浅鉢形土器、371は口頸部が内湾する小型の土器であるが、他は外反する深鉢である。370の口唇部には指頭圧痕が加えられる。

第12類　（第115図376～381）

円形文が施文されたものを本類とした。平行沈線や波状文も施文され、376の場合2条の平行沈線の間に施された円形文の中央を貫いて直線文が垂下している。円形文は378・379・381がヘラ描き、他は竹管状工具の刺突による。

第13類　（第90図110・111、第115図382～392）

その他の沈線が施されたものを一括した。110・384～386は流動的な波状文が横位に展開する。111もこれに類似するが、連続する下向きの弧線文である。他に鋸歯文や渦巻文が施されている。

第14類　（第116図）

沈線文に円形や爪形の刺突文が加えられた土器である。沈線文には上下2条の間を斜位に連結するものや、縦位に垂下する鋸歯文などがあり、第8類や第10類と共通するモチーフである。刺突文はこれら沈線間を充填したり単独で用いられる。411・412は渦巻状あるいは上下の横位刺突列を斜位刺突によって連結するもので、沈線文によるモチーフと同じである。405・413のように刺突が内面にも施されるものがある。

第15類　（第117図、第118図431～433）

口頸部に縄文原体の圧痕文が施される。器形はおおよそ口頸部が外反する深鉢形土器で施文部位にはあらかじめ斜縄文を施さない場合が多い。体部と同じ単節斜縄文の原体を横位に押圧

するが、428～733は縦位・斜位の圧痕も加わり、第8・10類と共通するモチーフとなる。418は口縁部突起から粘土紐の渦巻文が垂下している。426の口縁部はこの部分のみの鋸歯状装飾体である。口唇部には指頭圧痕や、斜縄文が施される。

第16類　（第118図434～442）

体部に組紐を回転施文したものである。434・437は口縁部に縦位の刻み目を有し、体部には横位の綾絡文を施文する。

第17類　（第90図112・113、第91～93図、第94図129～133、第119～121図）

体部全体に斜縄文が施文されるもののうち、綾絡文が顕著でないものを本類とした。器形には112のように口頸部が外反し、丸みを帯びた体部を有するもの、114・118・119などのように口頸部がゆるやかに外反し、体部のふくらみが少ないもの、113・121・123・124のように口頸部の外反がほとんどないものの3種がある。底部周縁部も外方に張出す場合と、それが無い場合とがある。器高も変化に富む。平坦口縁が多いが、124のみは2個1対の山形突起が1単位付されている。447～450は口縁部が部分的に鋸歯状となる。451は肥厚する山形突起で、頂部は円形にくぼんでいる。470～474は異条斜縄文である。

第18類　（第94図134～138、第95・96図、第97図146～151、第122～124図）

体部に斜縄文と綾絡文、頸部に綾絡文を重ねるものを本類とした。器形には136・139などのように口頸部が外反し、体部がわずかにふくらむものと、143・145のように口縁から底部に至るまで直線的にすぼむものの2種がある。平坦口縁のほか、491・500のように大きな波状口縁となるものもある。136・137・485・492などは低い瘤状突起が付される。口唇部の指頭圧痕は少ないが、483～485などは刻み目を加えている。487・493もこれに類似してヘラ状工具の圧痕が施される。これらの刻み目が加えられるものの口唇部はその断面が平坦か、わずかに中央部が凹み、その外縁部に刻み目が加えられている。綾絡文は体部全体に斜位、横位あるいは縦位に表出されるほか、頸部のみ横位に重層的に際立たせるものがある。

第19類　（第125図514～517）

羽条縄文の施文された土器である。514・515は縦位、516・517は横位であるが、517は原体の上下を持ち変えて菱形の構図を作り出している。514の口唇部には指頭圧痕が並列する。

第20類　（第97図152・153、第98図154・155、第125図518～524、第126図）

撚糸文が縦位または横位に施されるものを本類とした。152は口縁から底部まで直線的にすぼむが、153は丸みのある体部からすぼむ底部が外方に張出し、底面には網代痕がある。528は口頸部が直立し、体部下半はわずかに外方へ張出すものであろう。154は口頸部がわずかに内傾する。155は全体にややいびつな鉢形土器である。撚糸文は口縁端から底部までのほぼ全面に施されるらしく、524の場合は口唇部にも施文される。

第21類　（第98図156～161、第127図540～549）

体部に網目状撚糸文が施された土器である。口頸部がわずかに外反し、体部はほとんど張出さずにそのまま底部へすぼむ。156は底部が外方に張出す。口縁部は平坦であるが、160の場合波状となる部分があるらしい。158には山形突起が付され、160には平坦な口唇部上に粘土紐で鋸歯状装飾体が貼付される。157の頸部には指頭圧痕のある隆帯が一条めぐる。544の口縁部にも低い隆帯があり、その両側が沈線となっている。

第22類　（第127図550～552、第128図553～563）

木目状撚糸文が施文された土器である。口頸部がゆるやかに外反するものと、562のように急角度で外傾するものとがある。撚糸は555を除き2条1組となるように軸に巻付けたもので、562の口縁部文様はその圧痕である。562・563の頸部には指頭圧痕のある隆帯がめぐる。

第23類　（第128図564～571）

指頭圧痕のある隆帯を貼付する土器である。横位がほとんどであるが571のみは縦位に貼付される。口頸部や体部には斜縄文・撚糸文が施されている。

第24類　（第129図572～574）

平織状撚糸文が施文された土器である。572・573は同一個体である。

第25類　（第99図162）

頸部に低い隆帯と縦位の爪形文がめぐる土器である。口頸部がゆるやかに外反して体部がいくぶん丸みを帯び、いずれにも横位の綾絡文が施文される。爪形文は5段にわたって施されている。

第26類　（第99図163～169、第129図575～590、第130図）

条線による文様を施す土器である。器形には163・169のように直立する口縁部からゆるやかにカーブを描いて底部にすぼむもの、164・165のように口縁部から直線的に底部へ至るもの、166・168のように口頸部がわずかに外反するが、体部のふくらみが少ないものなどがある。口縁は平坦であるが、163は山形突起を有する。条線はヘラ状工具で1本ずつ施される場合と櫛歯状の工具によるものとがあり、櫛歯状の工具による場合もその間隔は様々である。条線は縦位または格子状に施され、縄文に重ねられることはない。607・608は縄文との併用であるが、条線は底部付近に限られる。口唇部に指頭圧痕が並列するものがある。581は頸部に2条の縄文原体圧痕がめぐる。

第27類　（第131図、第132図625～634）

口縁部内面に外面と同じ斜縄文を施す土器である。口唇部にも施文されるものがあり、631～634は頸部に縄文原体圧痕がめぐる。

第28類　（第132図635～638）

貝殻腹縁状の工具を用いて器面調整を施した土器である。外面には調整後に斜縄文を施文する。個体数は極めて少ない。

第29類　（第100図170）

内傾する口頸部を有し、頸部が丸みを帯びてふくらみ、体下半部は直線的に底部に至る。口縁は低い波状口縁で、頂部に山形突起を有する。山形突起から口縁部にややカーブする隆帯が垂下する。口縁部には爪形あるいは方形の刺突が加えられる。頸部は半截竹管状工具によって引かれた沈線で口縁および体部と画し、この間に横位に連続して波状に展開する渦巻文を描き三角形の刺突も加えられる。地文は縦位の撚糸文で、底部周縁は磨かれている。本類は1個体のみである。

第30類　（第100図171～173）

無文の土器である。171は体部上半がわずかに外反する鉢形土器で、粘土紐巻上げの痕跡が明瞭である。172もほぼ同様の器形であるが、173は直立する体部から下部が急激にすぼむ。

**第Ⅱ群土器**

第1類　（第133図639）

直立する口縁部を有し、体部が直線的に底部へ至る浅鉢形土器である。口縁部に粘土紐をめぐらし、これに沿って縄文原体を押圧して口縁部文様帯を構成する。口唇部と内面はヘラ磨きを施す。

第2類　（第133図640）

浅鉢形土器の口縁部に付された肥厚する突起で、突起下には沈線による平行線と渦巻文を描く。

第3類　（第133図641・642）

口頸部がわずかにキャリパー状となる深鉢形土器である。口縁部に丸みのある山形突起があり、突起を相互に連結するように渦巻文と隆線による文様を描く。体部には磨消縄文手法を用いて縦に長く、下部の切れる楕円形モチーフを描く。

**第Ⅲ群土器**　（第133図643）

外反する口頸部である。2条の横走する平行沈線で口縁部と頸部を画し、体部には縦・横の沈線文を描く。地文に斜縄文を施すが、頸部には見られない。

**第Ⅳ群土器**　（第133図644）

口縁部に羊歯状文による文様帯を描く土器である。

**土器底部**　（第100図174～184、第134・135図）

174～179は底面が揚底となるものである。181は体部から急激にすぼみ、外方に張り出すもので、173や第87図87などの器形となるものであろう。181・182は各々1.6㎝、2.4㎝の高さ

を有する高台である。183は推定5個の脚部が取り付けられるもので、脚部先端部は破損しているが約1.5㎝ほどの高さに推定される。184は7個の透し孔を有し、高台部の高さは約1㎝である。645～656はスダレ状圧痕である。647は揚底で、底面全体に付いた圧痕をナデ消している。648はスダレ状編物が底径より小さいために、外縁部に圧痕が付着していない。648は圧痕をヘラ状工具でナデ消している。657～663は網代圧痕、664～669は底面に斜縄文を施す。665～667は内面にも施文されている。670は1条の綾絡文を施す。671は細い撚糸文とスダレ状圧痕である。

以上の底部は第Ⅰ群に伴うものであろう。

**小型土器**　（第136図672～683）

小型土器およびその高台部で、675・682は完形である。683は条線による格子状の文様が施されている。高台が付き、この部分に4個の透し孔が外方から斜めに穿たれている。上部にも2個の孔がわずかに残っている。

上記の遺構外出土土器は主として捨場から出土したものである。捨場内における土層は第Ⅰ層が黒色の表土、第Ⅱ層黒褐色土、第Ⅲ層暗褐色土、第Ⅳ層黒褐色土からなり、遺物包含層はⅡ・Ⅲ層で就中Ⅲ層よりその多くが出土している。これらの土層も層厚は薄く、遺物の層位的な取り上げを正確に行い得たとは言えない。しかし、遺跡西南部にある捨場内のMS 26～28、MT 26～28、NA 26～28、MB 26～28グリッドの範囲内は3回に分けて掘り下げを行ったので、これにより土器の共伴関係の把握にあてたい。1回目は調査開始から7月28日まで、2回目は7月29日から8月2日まで、3回目は8月4日から9日までで、遺構外出土土器として掲載したものの中から、前記範囲内で各期間内に出土した土器を抽出して第137～143図に示した。1回目には粘土紐貼付による1類・2類・4類・6類、沈線文による7類・8類・13類、刺突文の14類、斜縄文を施す17類、綾絡文を施す18類、羽条縄文の19類、撚糸文を施す20類、網目状撚糸文の21類が含まれる。2回目には粘土紐貼付による1類・2類・4類・6類、沈線文による7類・12類、組紐縄文の施される16類、斜縄文の17類、綾絡文の見られる18類、網目状撚糸文の21類、条線文を施す26類が含まれる。3回目には粘土紐貼付による2類・4類・6類、沈線文を施す10類・13類、斜縄文の17類、綾絡文のある18類、粘土紐巻上げ痕および無文の30類が含まれている。

## 2　土製品

**1　土偶**　（第136図684）

十字形に両手を広げた格好の土偶である。正面左半から下部にかけてと右腕を欠損している。胸部に盲孔がある以外、顔などの表現は全くない。

**2　きのこ形土製品**　（第136図685）

きのこの形状を呈する土製品である。円形の傘部の径27㎜、高さ30㎜を測る。下部も末広がりとなり、底面が平坦であるため直立させて置くことができる。

**3　板状土製品**　（第136図686）

推定長径6㎝、短径4.7㎝、厚さ0.8㎝の楕円形、板状を呈する土製品である。文様はなく、全体が削り調整を施されている。

**4　土製小玉**　（第136図687・688）

687は直径1.5㎝、厚さ1.1㎝、褐色を呈し、688は直径1.7㎝、厚さ1.5㎝を測り、黄褐色である。いずれも彩色は施されていない。

## 小　結

前期大木式土器の調査例は秋田県内のみならず、隣接諸県においても極めて少なく、上ノ山Ⅱ遺跡出土土器を検討するにあたり、比較資料を欠いている。しかし仙台湾周辺における興野義一氏による研究や、福島県内での調査報告、芳賀英一氏による研究などに依拠して土器型式の比定を行いたい。

第Ⅰ群土器のうち、遺構内で一括出土状況を示すものは、SI 133・SI 195・SK 224の3遺構のみである。まず、SI 133出土土器（第35図2～5、第36図）を見ると、6のように口頸部に原体圧痕による文様の施された土器がある。この特徴を有する土器は古くから東関東地方で注意され、福島県では大木5a式土器の一部を構成している。6の土器の縄文原体圧痕によるモチーフは第14類土器の沈線文によるモチーフと共通性を有している。5の口縁部内面に縄文が施されるものは第27類の特徴であるが、この類の第132図633・634の土器のように、口頸部内面に第15類の特徴の縄文原体圧痕が施される場合があり、SI 133において口縁部内面に縄文を施す土器と縄文原体圧痕による文様の共伴関係が示す事実とは整合する現象である。この口縁部内面に縄文を施文する土器は円筒下層a式の一部にも見られるが、第27類の他、第8類の第111図318の土器のように1つずつ区切るように施文した鋸歯文を外面に施すものに伴う場合があり、このことから第8類もSI 133出土土器との同時性が推定される。ただし、第8類の一部、例えば第89図102や303・310のように沈線文が波状文である場合もあり、大木4式に近い要素もないわけではないが、以上から、SI 133出土土器の7～9に見られる口縁部の山形突起も、この時期、大木5a式期の特徴と見なせるであろう。次にSI 195出土土器とSK 224出土土器には粘土紐貼付文と沈線文という違いを見せながらも、口頸部に互いに方向を変えた渦巻文が施文され、これらの土器に伴って口唇部に指頭圧痕文を有し、体部全面に縦位の撚糸文を施文する土器が出土しているという共通性がある。13と25の渦巻文は互いにネガと

ポジの関係にあると考えられる。13のように粘土紐貼付による渦巻文は明らかに大木4式と考えられる第1類・第2類あるいは第6類に見られ、25のように沈線による渦巻文は第9類土器を見ると鋸歯状沈線文が伴う場合があるが伴わないものが多く、25のように上下の波状文に挟まれ、しかもSI 195の15・16、SK 224の27と同じく体部の地文には縦位の撚糸文が施されている。この縦位の撚糸文はSI 133の大木5a式には全く含まれていないことからもSI 133出土土器とは時間差があり、反面、SI 195・SK 224の同時性を示すものであろう。SK 224からは縄文原体圧痕土器も1点出土しているが、両遺構出土土器は大木4式に含めておく。SI 133出土の網目状撚糸文を施す土器は、SI 195・SK 224からも出土しており、大木4・5a式にまたがるものである。羽状縄文を施す土器はSI 133・SK 224にあり、これも同様である。

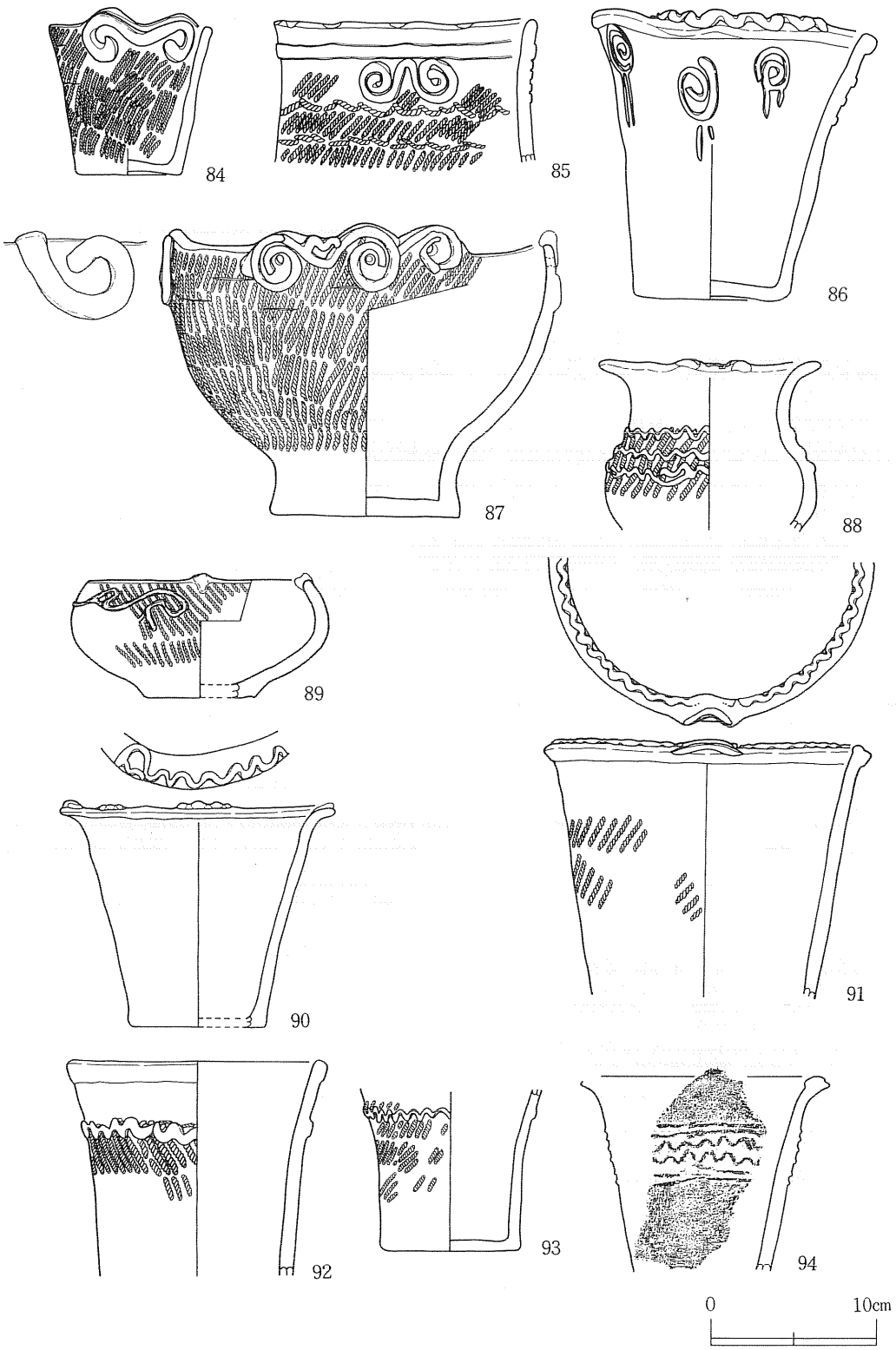
次に遺構外の土器では、第3類・第5類が粘土紐を細かくちぎって貼付した鋸歯文の特徴から大木5a式、波状沈線文の第7類が大木4式、沈線による渦巻文のある第9類は360～362のように鋸歯文と同居することもあり、岩手県大陽台貝塚の大木5a式土器に類するものもあるが、他は4式であろうか。第10類は大木5a式に属しよう。第11類は大木5式、円形文のある第12類は、これに似たものが宮城県糠塚貝塚の大木3式中にある。第30類の粘土紐巻上げ痕のある土器は、捨場最下層から出土したが、糠塚貝塚の大木5a式中に見られる。

上ノ山Ⅱ遺跡からは少量であるが円筒土器や、大木・円筒いずれともつかない土器が出土している。このうち、縦位の撚糸文が口縁部から底部にまで施文されるものは円筒下層a式あるいはb式に多く、第20類がこれにあたり、第21類の網目状撚糸文は円筒下層b式、第22類の木目状撚糸文は円筒下層d式の主たる特徴であるが円筒下層b式の第23類に伴うものがある（第128図563）。第25類の頸部に刺突文帯を有する土器は米代川流域に多く、円筒下層b式に比定されている。また、第27・28類の口縁部内面の縄文あるいは条痕は円筒下層a式にも見られる。本遺跡では円筒系では下層b式、大木系では4式が多く、両者がほぼ併行するものであろう。

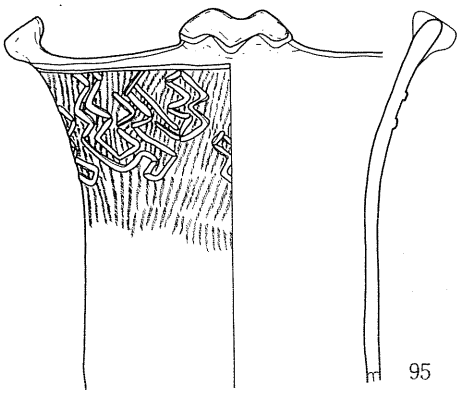
これらの大木式、円筒式、大木・円筒のいずれにもつかない土器とも異なる特徴を有する土器として第29類がある。刺突文の施された肥厚する口縁部と半截竹管状工具による浅い沈線文は、東部関東地方の興津Ⅱ式に類似している。この型式は福島県では大木5a式の一部を構成し、宮城県大木囲貝塚が分布の北限とされている。全体のプロポーションや体部地文の撚糸文は異なるが、やはり興津Ⅱ式と一脈の繋りを有する土器であろう。出土地点は大型竪穴住居群に囲まれた広場中央部の配石遺構付近であるが、他に伴出土器が無いのが惜しまれる。

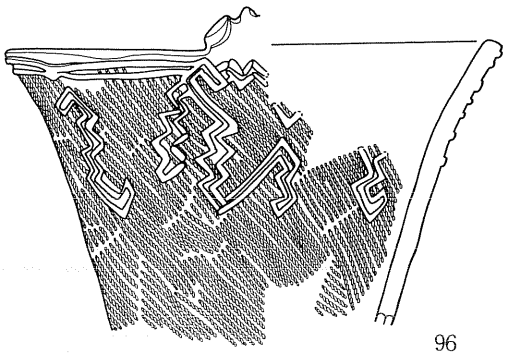
以上のように大木系・円筒系、両者の融合型式、さらには東関東系土器の出土は、大木式土器・円筒式土器両分布圏の接点にあたる本遺跡において、関東地方までも含めた広範な交流の一端を物語るものであろう。Ⅱ群第1類は大木7b式、同2類は大木8a式、同3類は大木9式、Ⅲ群は十腰内Ⅱ式、Ⅳ群は大洞BC式である。

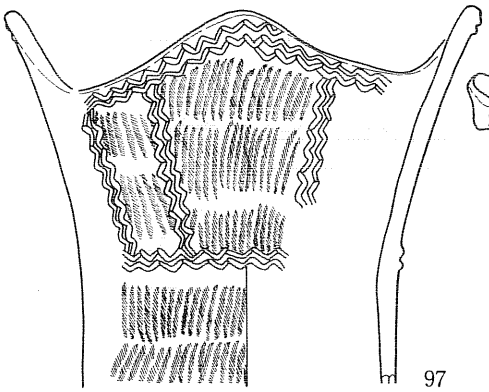
第86図　遺構外出土土器（１）　　第Ⅰ群第１類

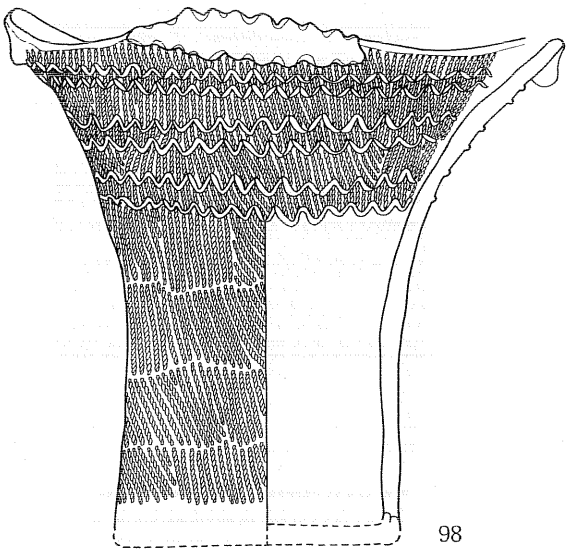


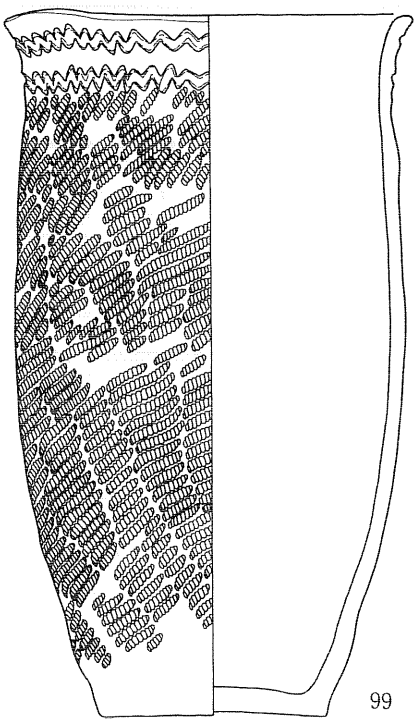

第87図　遺構外出土土器（2）　　84～90：第Ⅰ群第2類　91～94：第Ⅰ群第4類

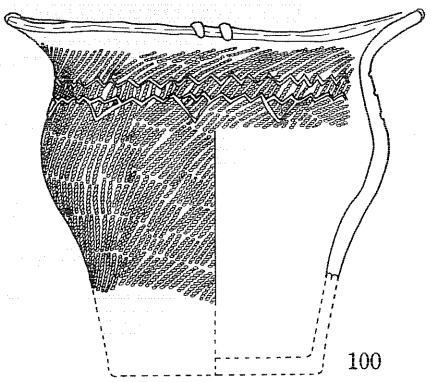


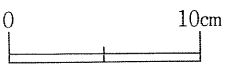



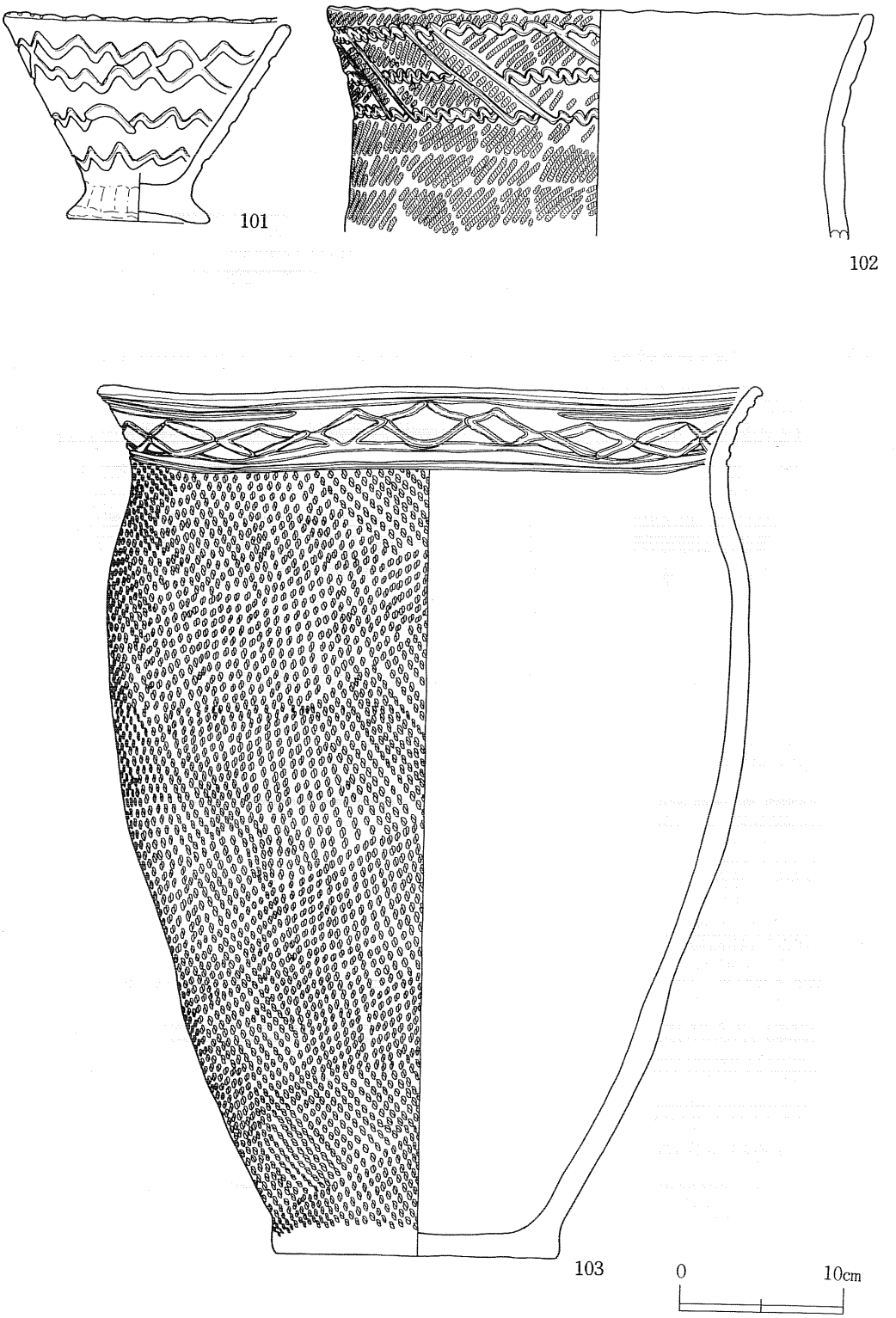




95・96：第Ⅰ群第3類　97・98：第Ⅰ群第5類　90・100：第Ⅰ群第7類

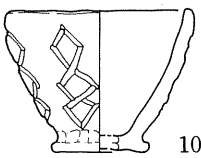
**第88図　遺構外出土土器（3）**

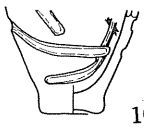


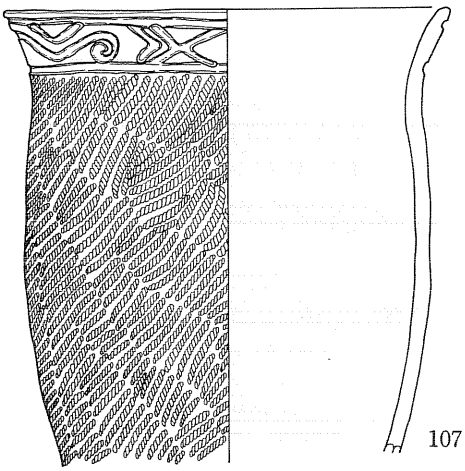

101：第Ⅰ群第７類　102・103：第Ⅰ群第８類

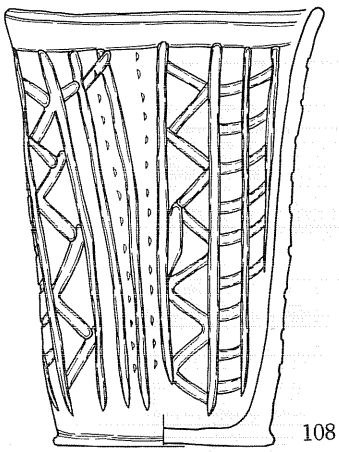
第89図　遺構外出土土器（４）

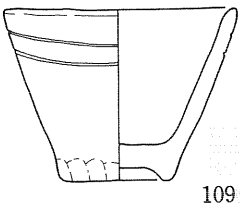
104

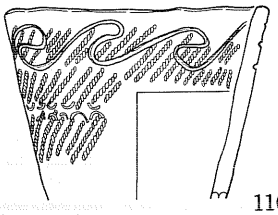

105

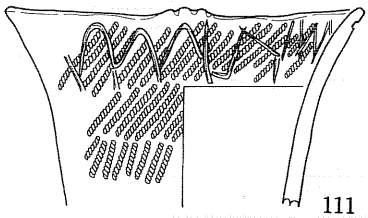

106

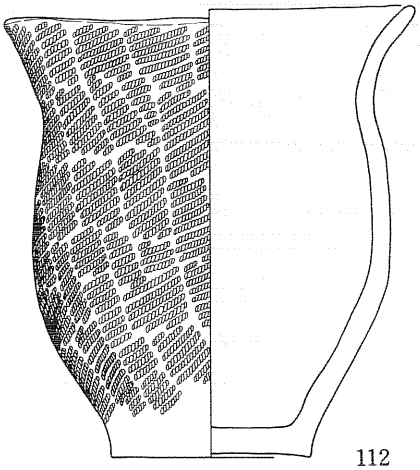

107

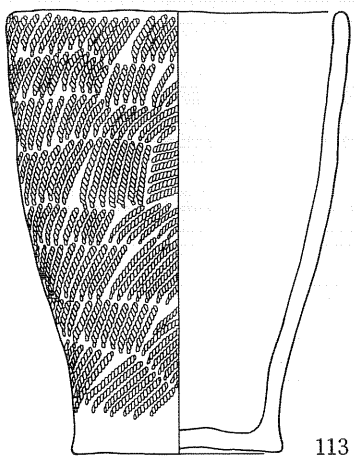

108


109


110


111

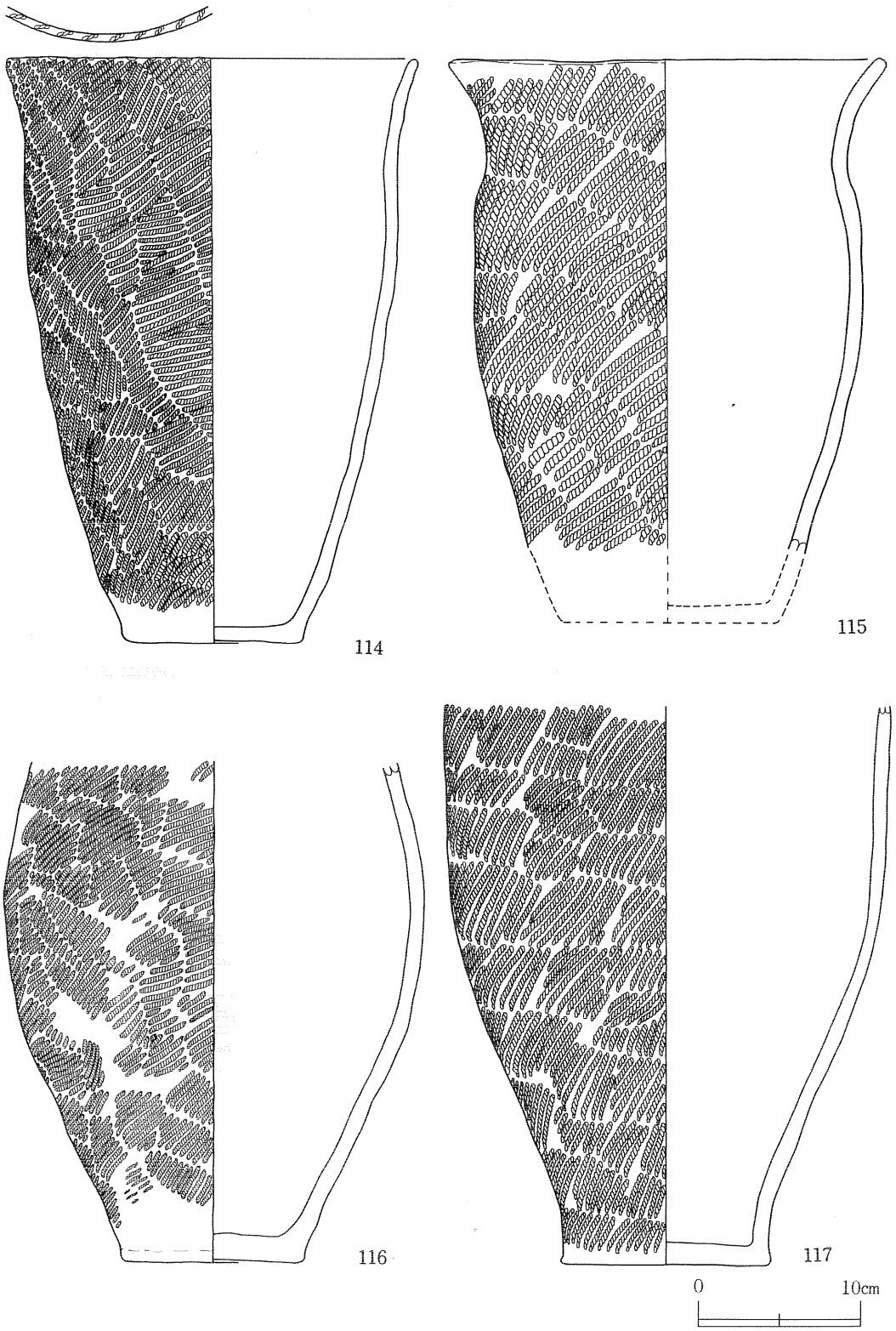

112


113

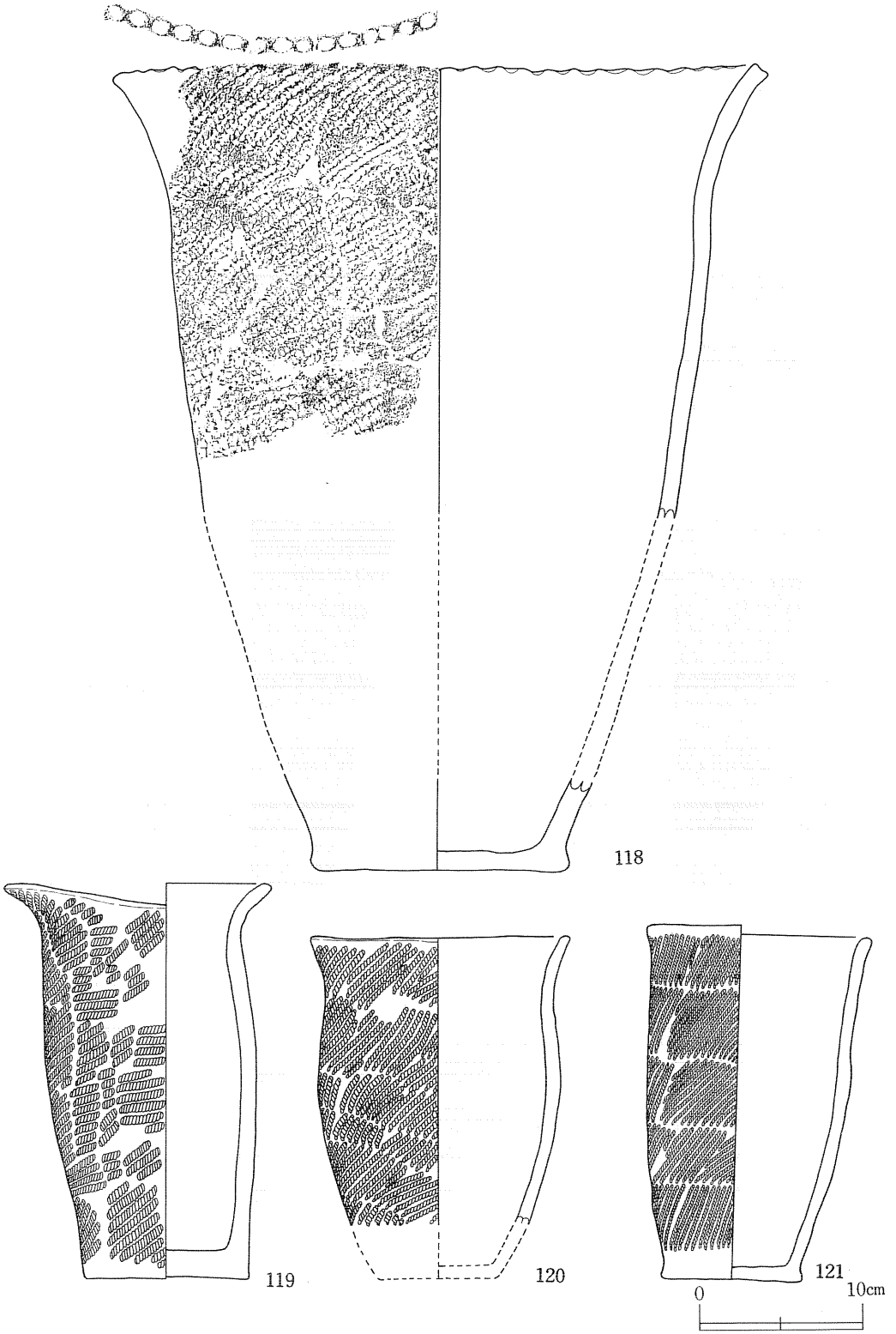
104・107：第Ⅰ群第９類　105・106・108：第Ⅰ群第10類
109：第Ⅰ群第11類　110・111：第Ⅰ群第13類　112・113：第Ⅰ群第17類

0　10cm

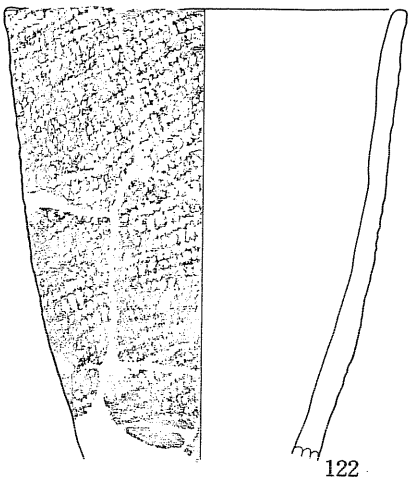
**第90図　遺構外出土土器（５）**

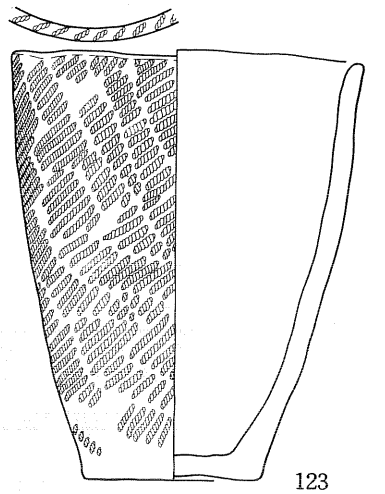


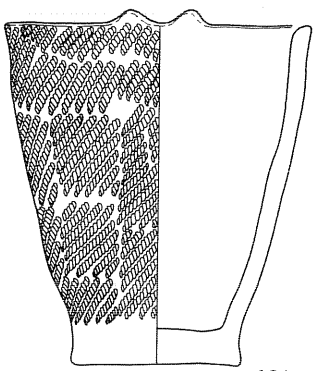

第91図　遺構外出土土器(6)　　第Ⅰ群第17類

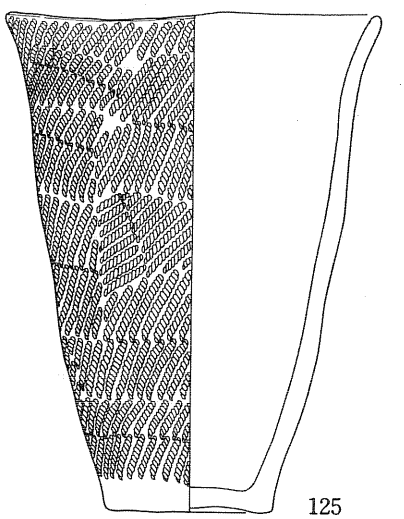


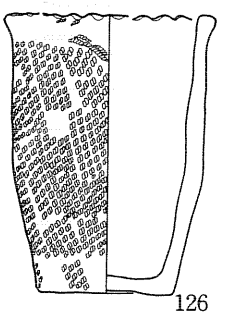

第92図　遺構外出土土器(7)　　第Ⅰ群第17類

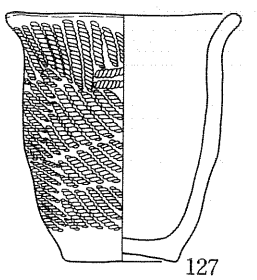


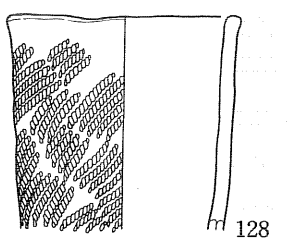



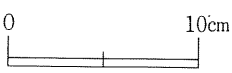



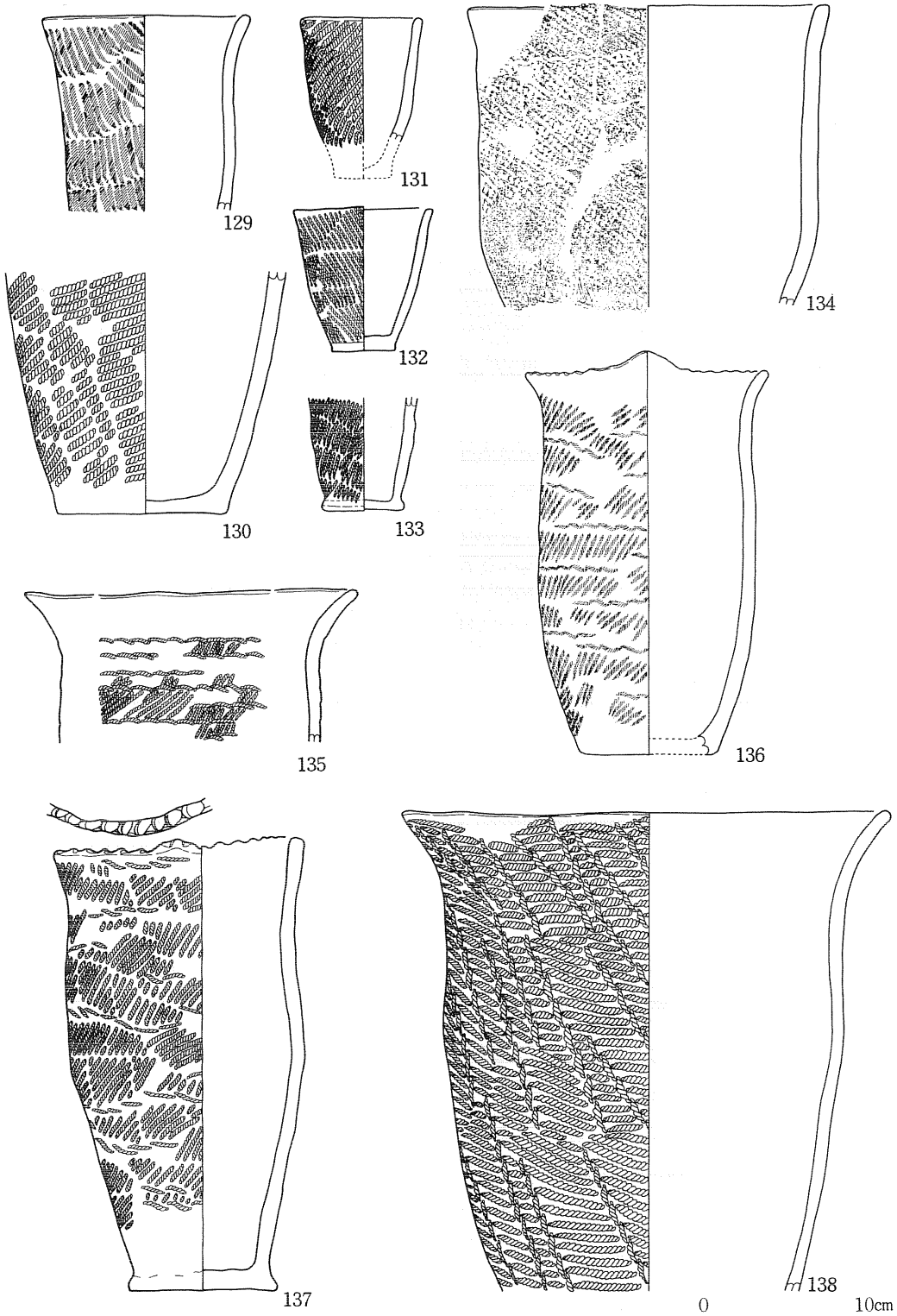



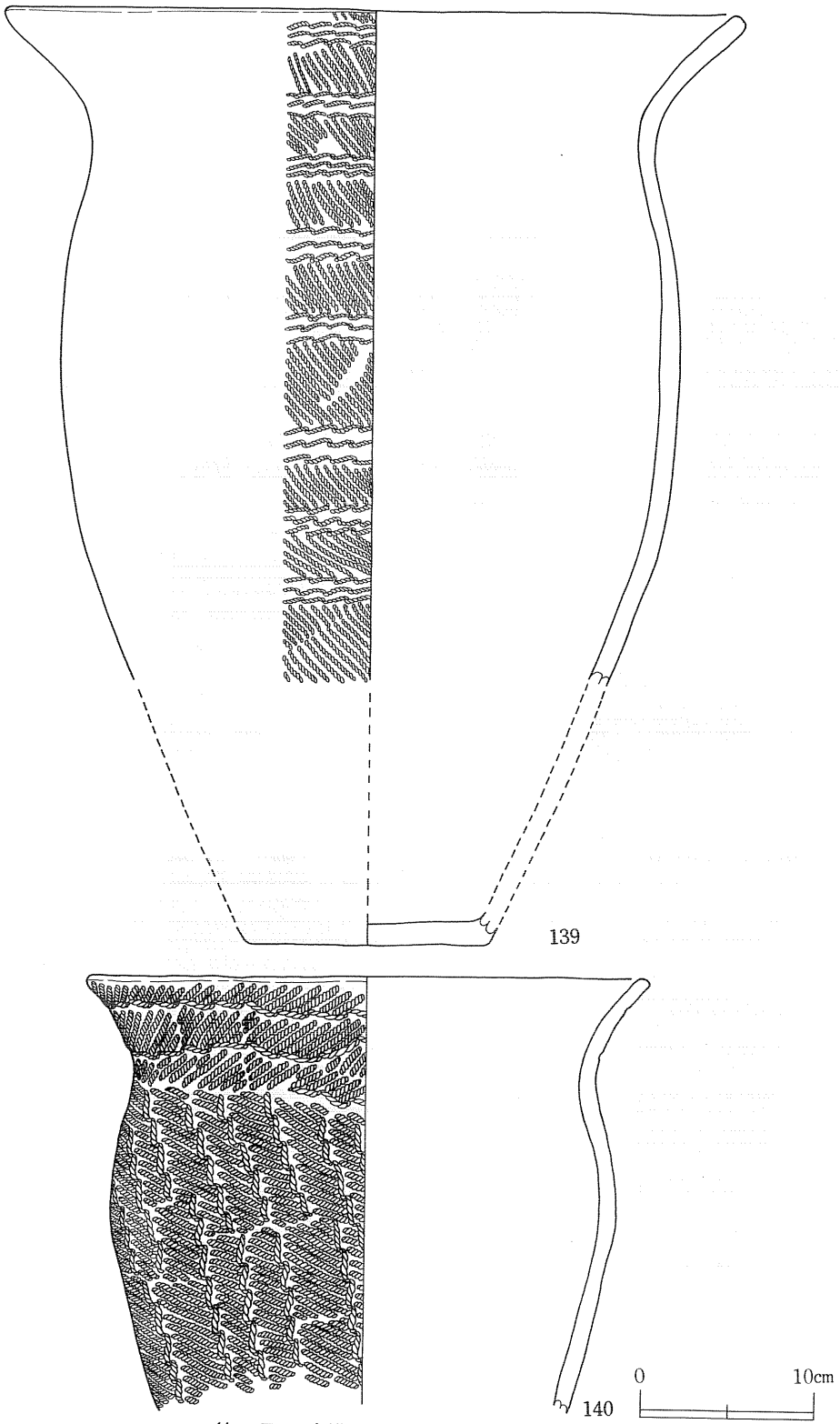




**第93図　遺構外出土土器（8）**　第Ⅰ群第17類

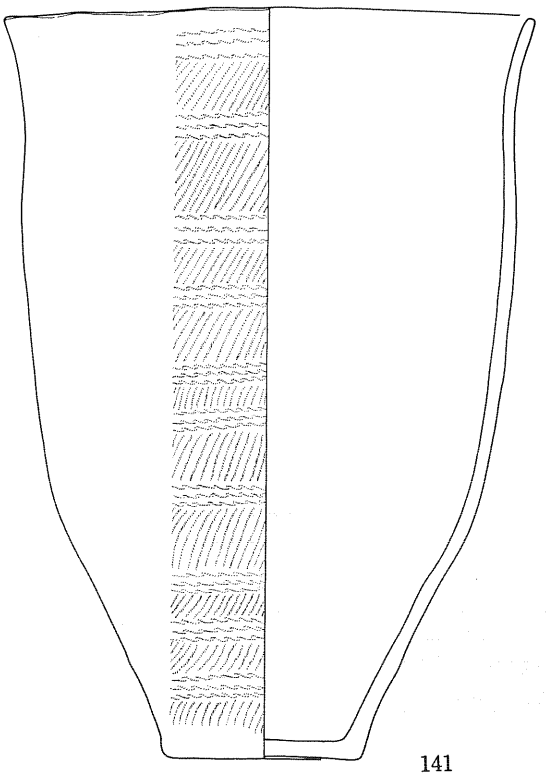


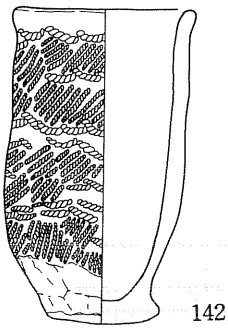

129～133：第Ⅰ群第17類　134～138：第Ⅰ群第18類

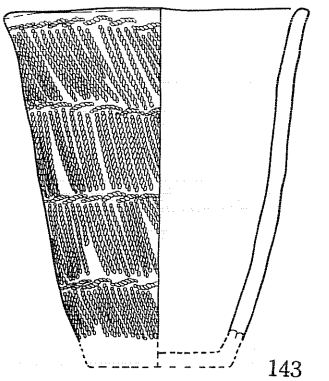
第94図　遺構外出土土器（９）

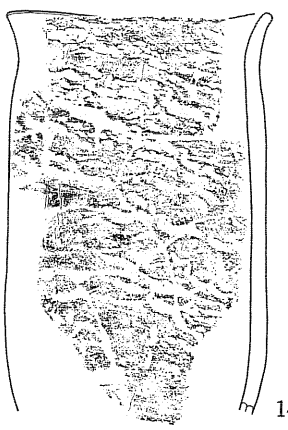


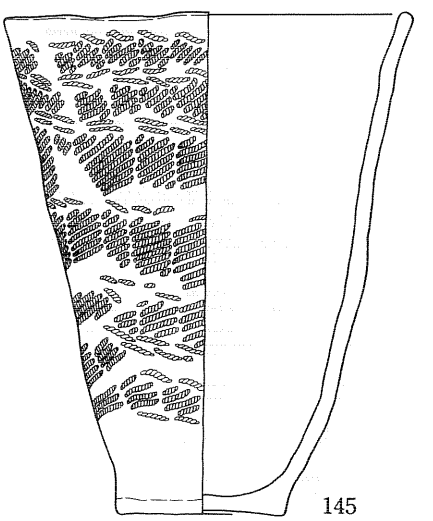

第95図　遺構外出土土器(10)　　第Ⅰ群第18類

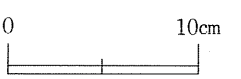


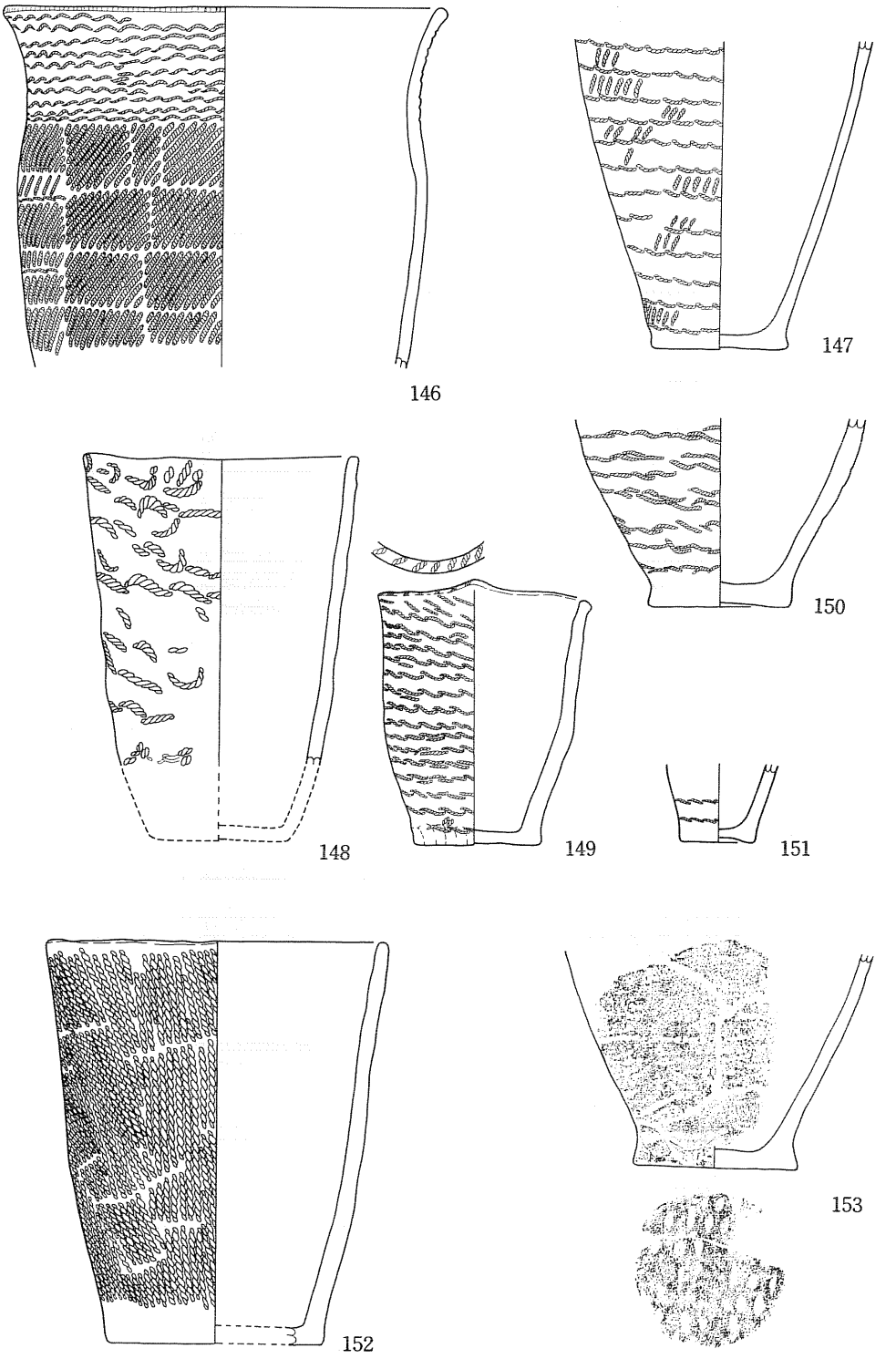



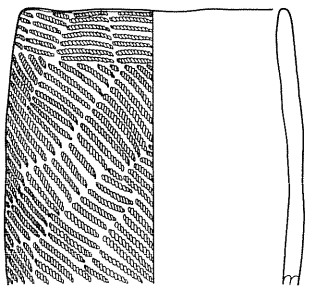




**第96図　遺構外出土土器(11)**　　第Ⅰ群第18類

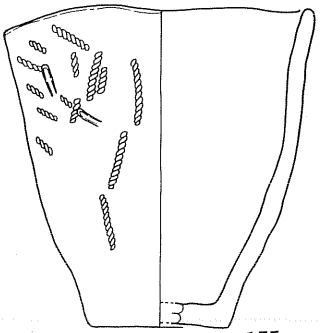



146～151：第Ⅰ群第18類　152・153：第Ⅰ群第20類

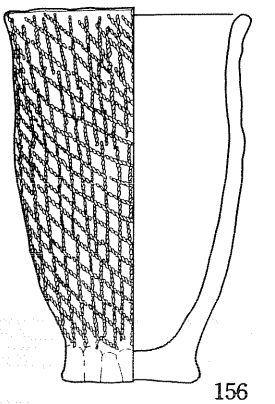
第97図　遺構外出土土器(12)



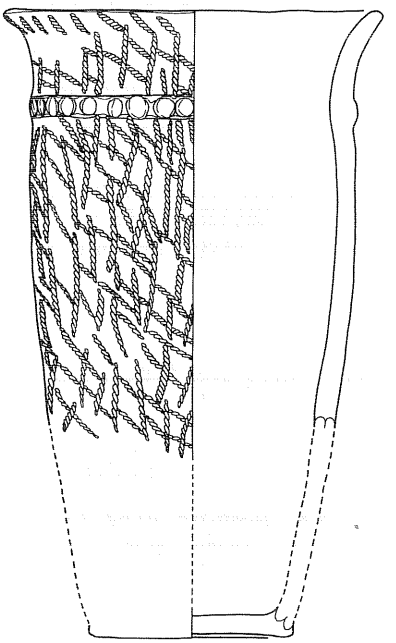
154



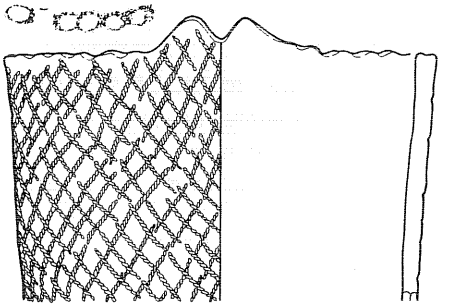
155



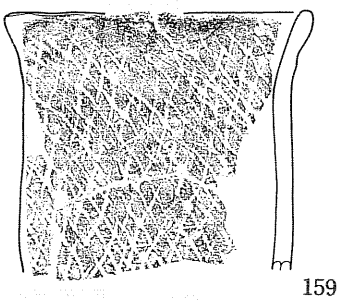
156



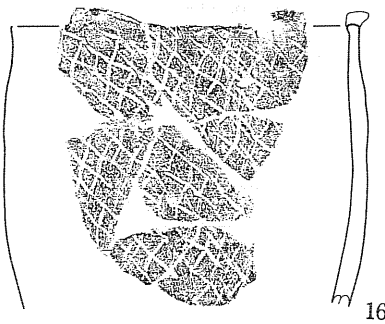
157



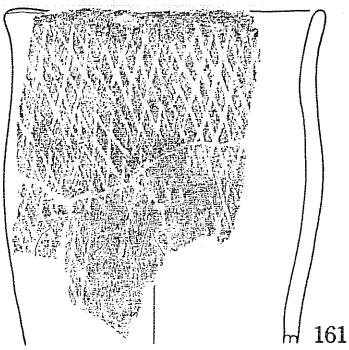
158



159



160

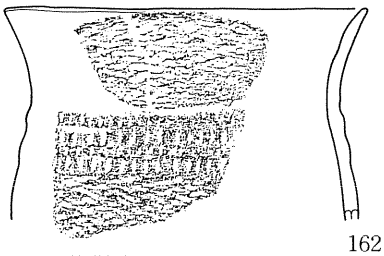


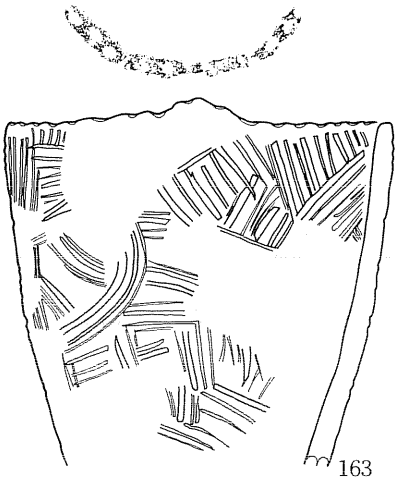
161

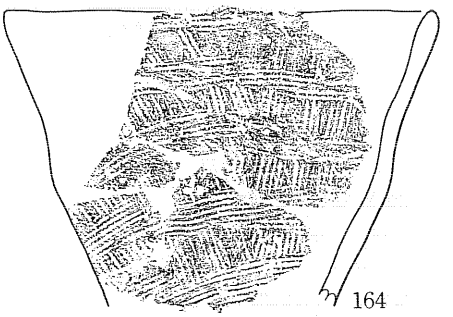
154・155：第Ⅰ群第20類　156～161：第Ⅰ群第21類

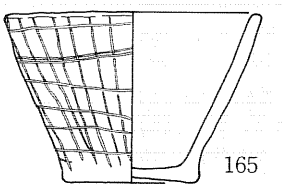
0　10cm

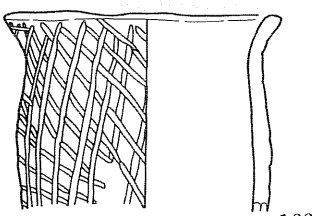
第98図　遺構外出土土器(13)

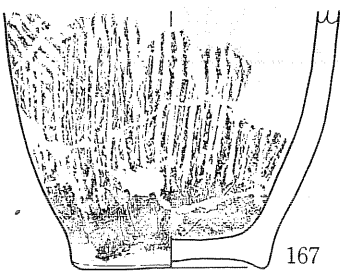

162

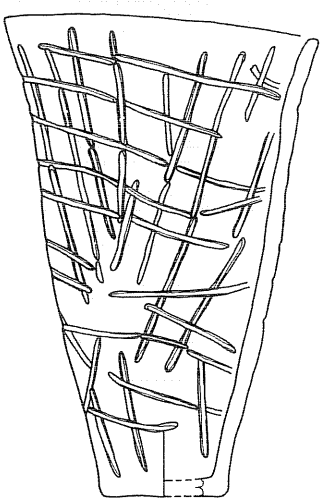

163

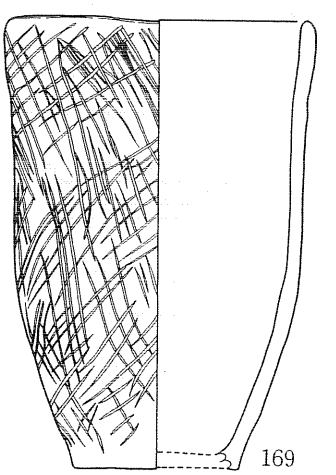

164

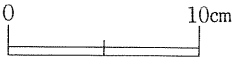

165


166


167

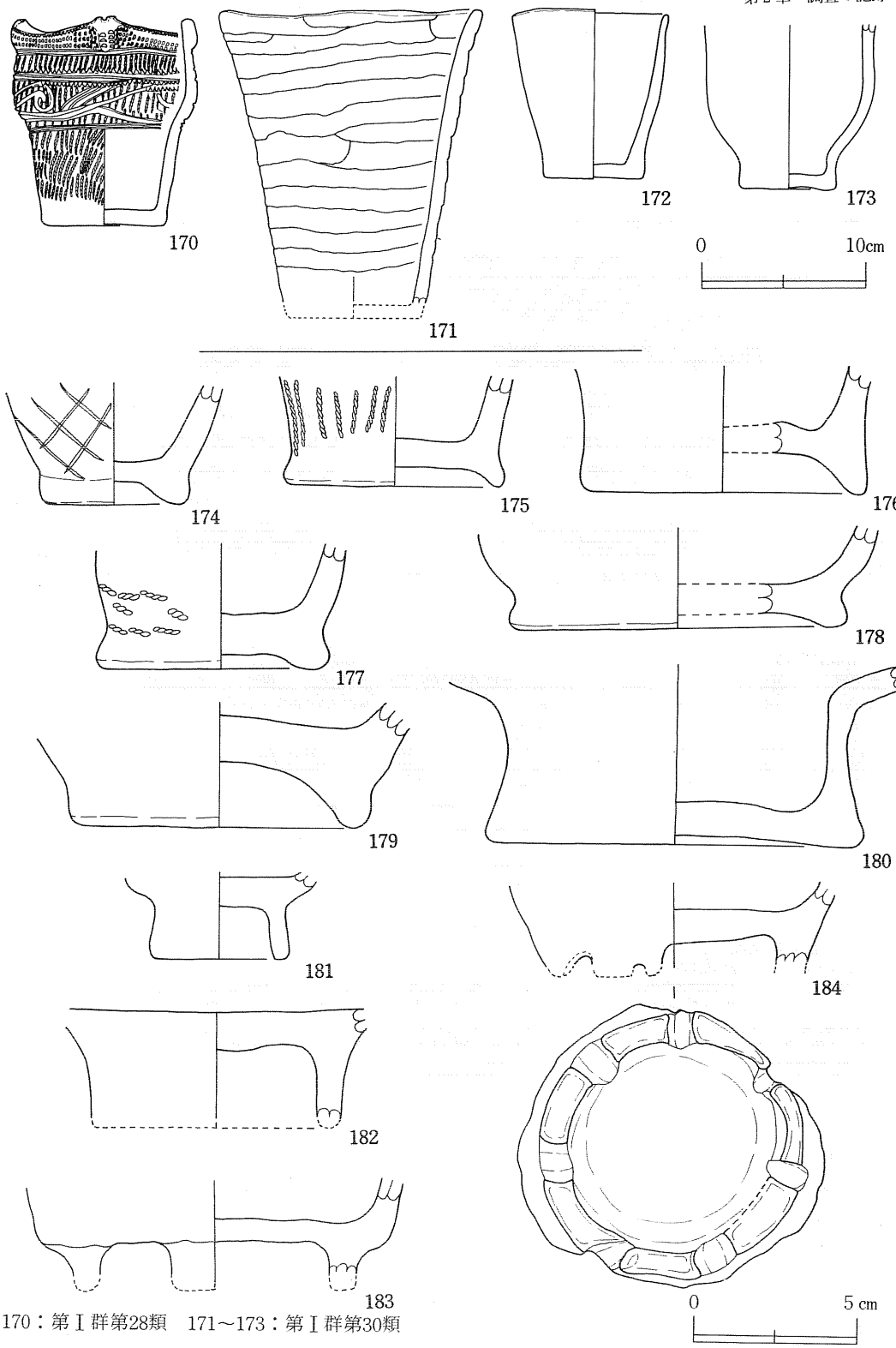

168


169



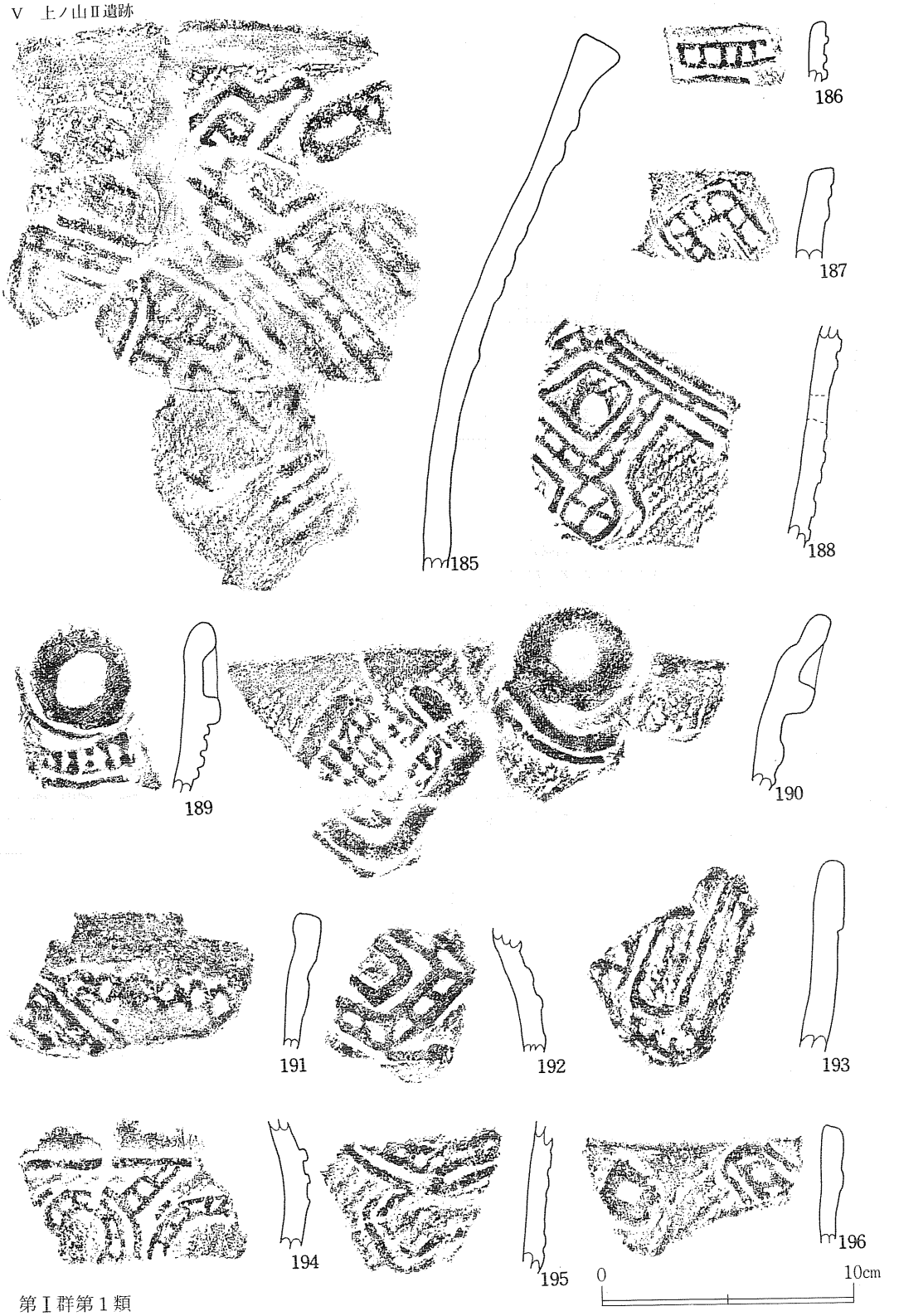

162：第Ⅰ群第25類　163～169：第Ⅰ群第26類

第99図　遺構外出土土器(14)



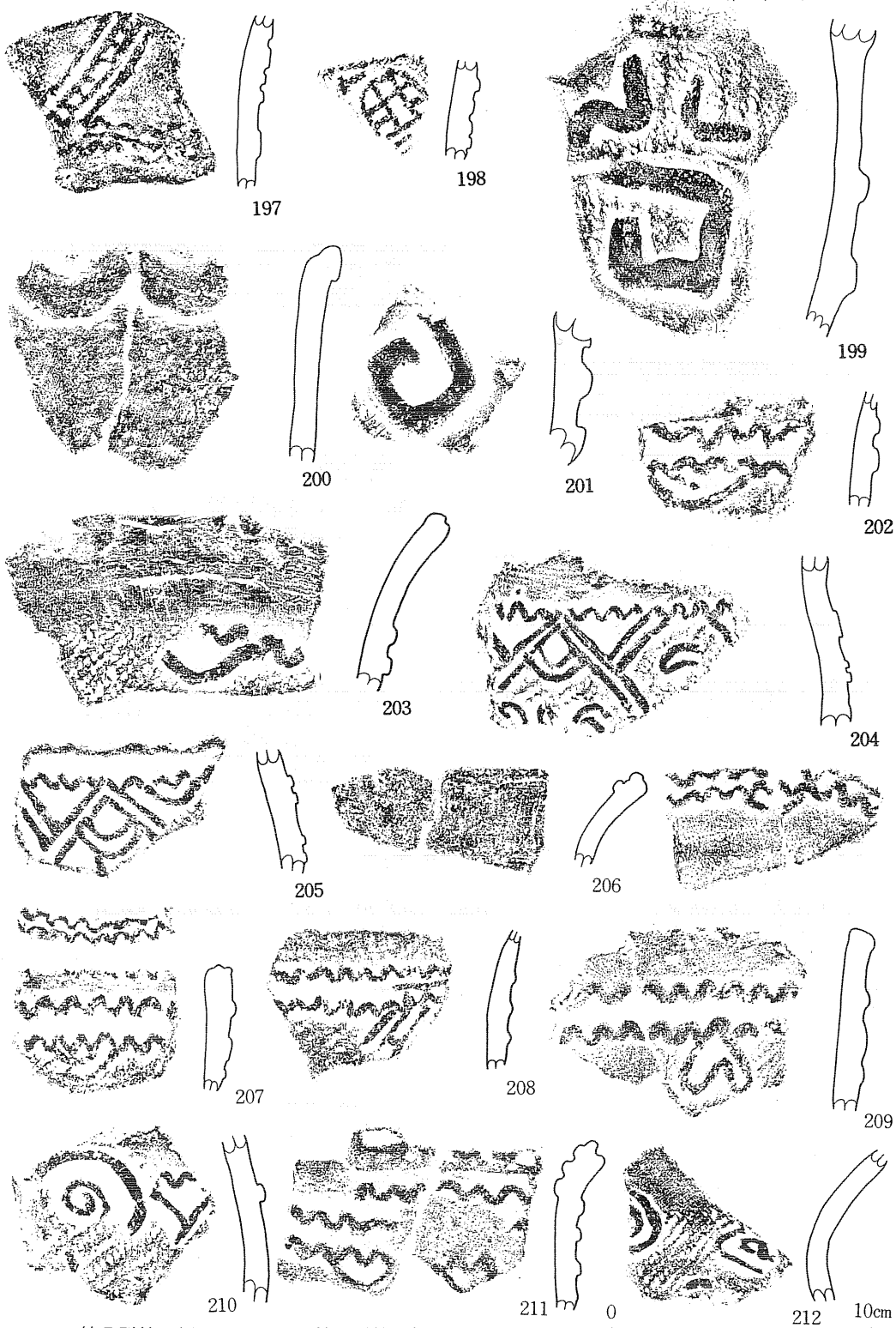

170：第Ⅰ群第28類　171～173：第Ⅰ群第30類

第100図　遺構外出土土器(15)



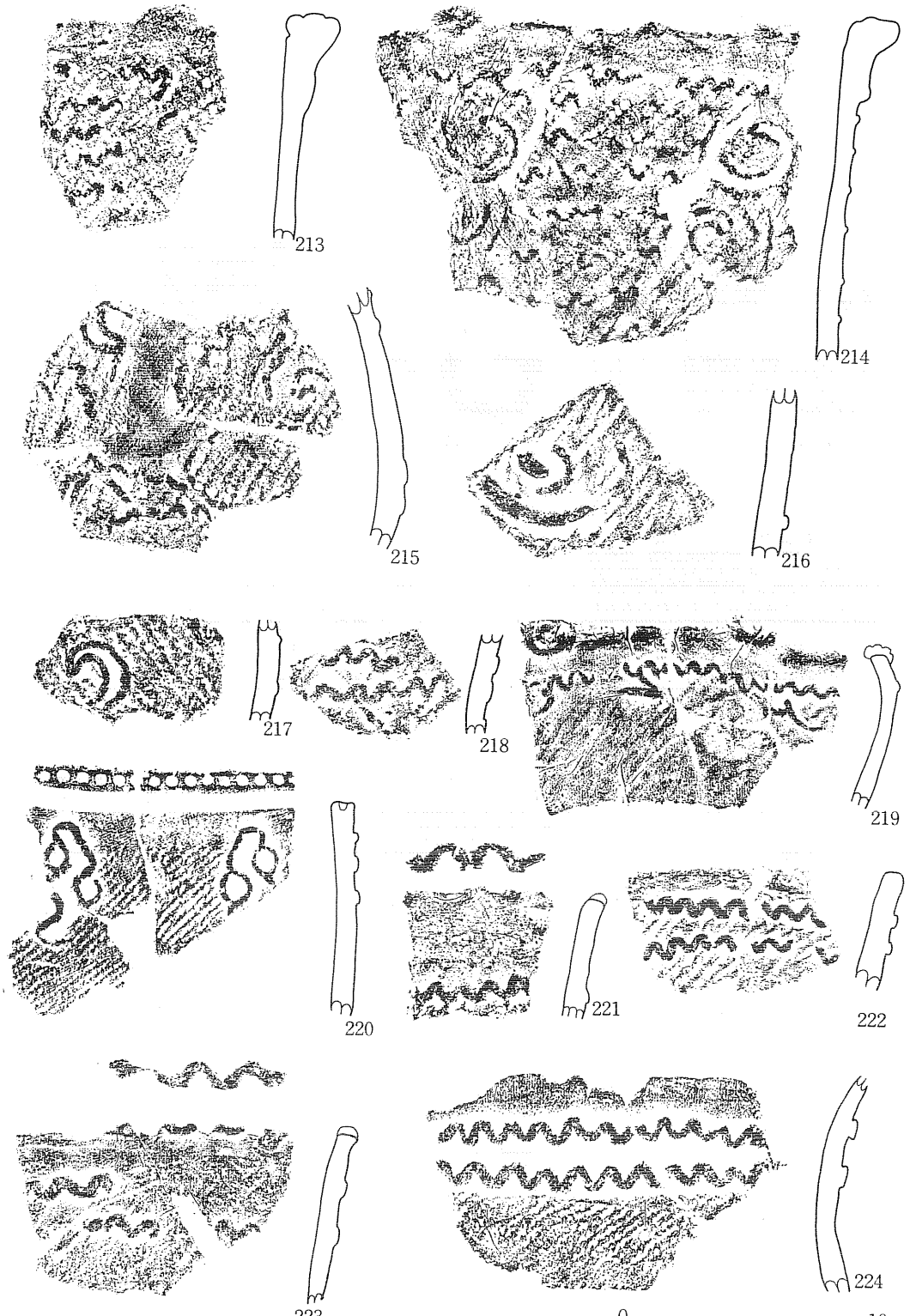

第Ⅰ群第１類

第101図　遺構外出土土器(16)



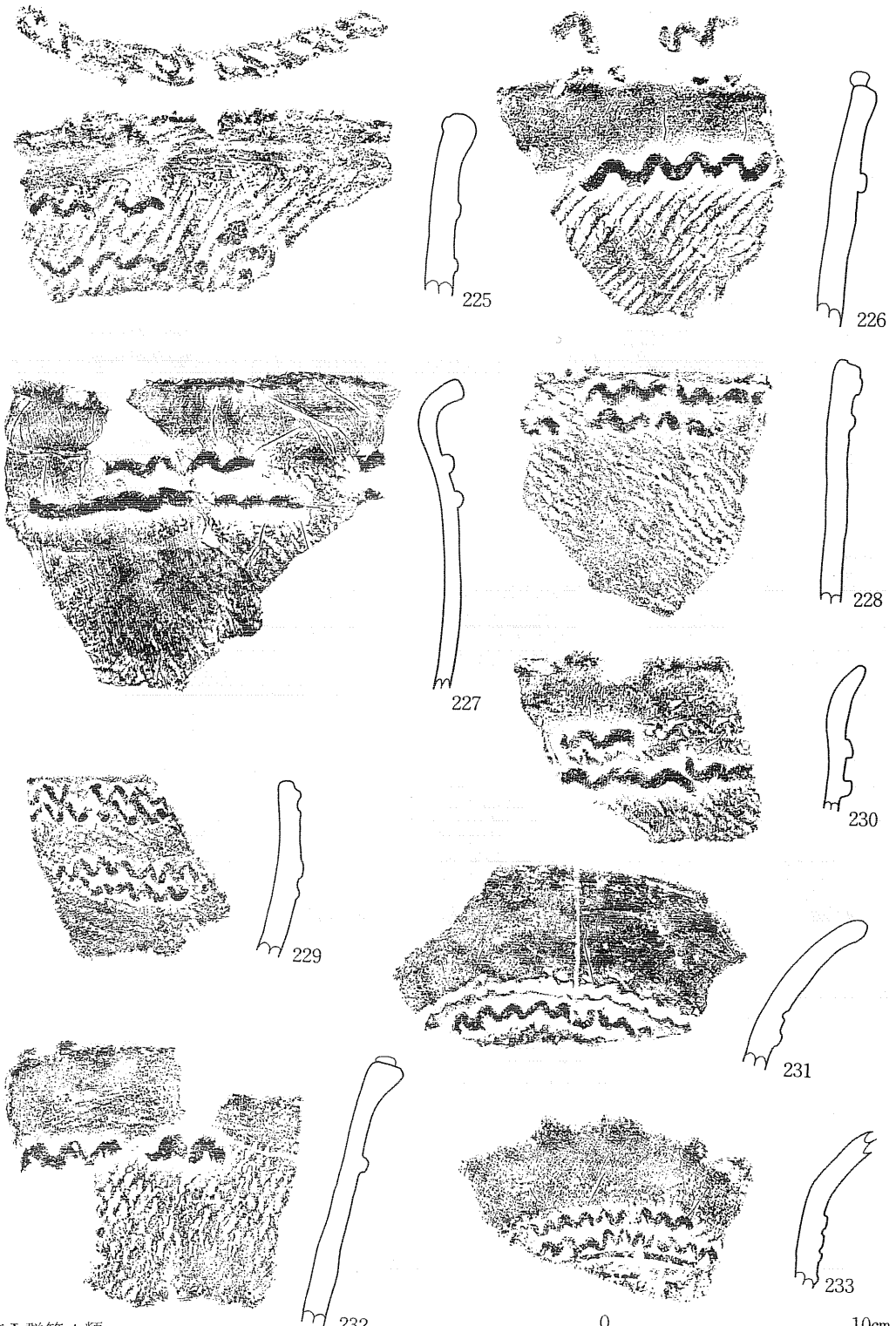

197・198：第Ⅰ群第１類　199～212：第Ⅰ群第２類

第102図　遺構外出土土器(17)



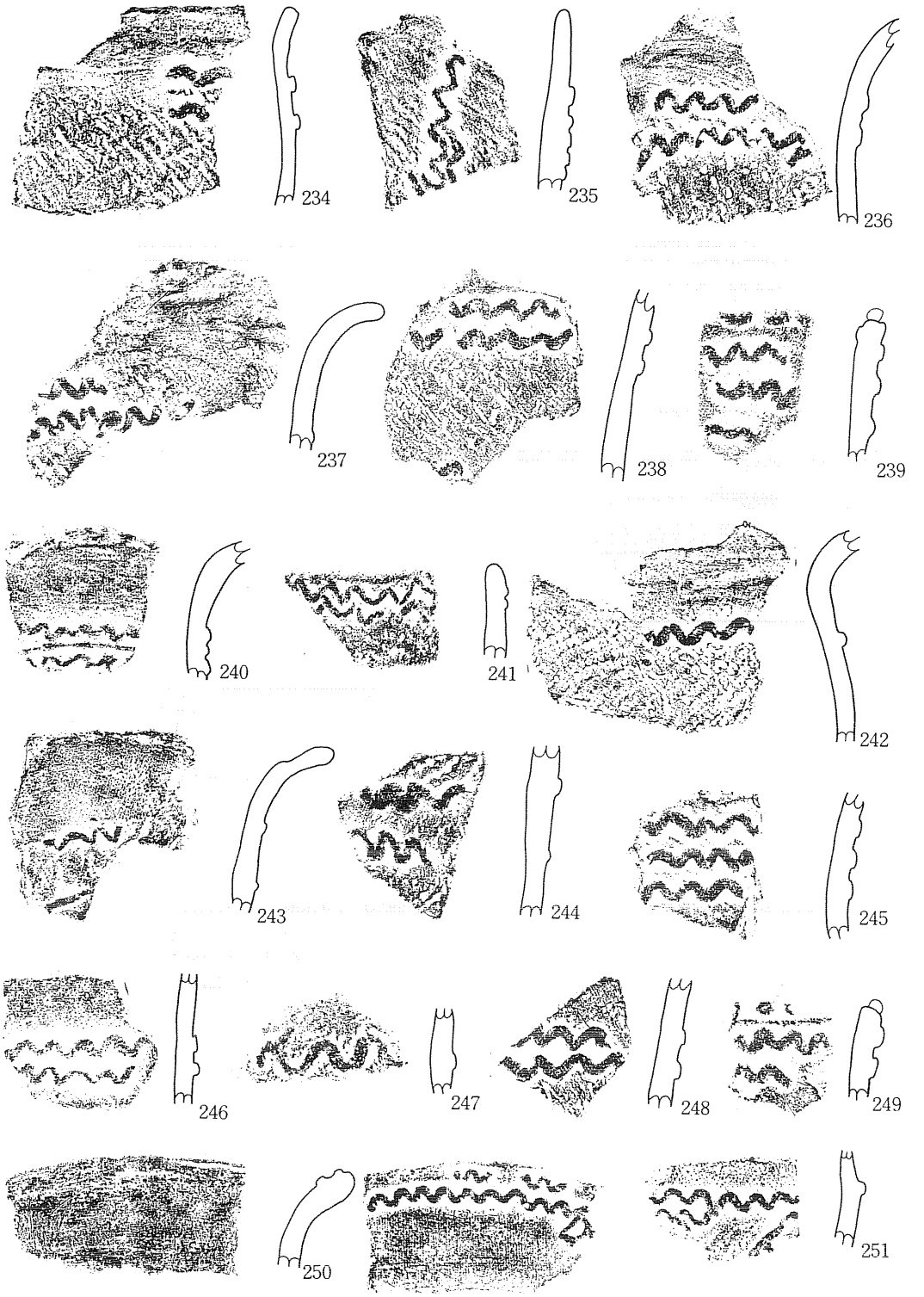

213～220：第Ⅰ群第２類　221～224：第Ⅰ群第４類

第103図　遺構外出土土器(18)



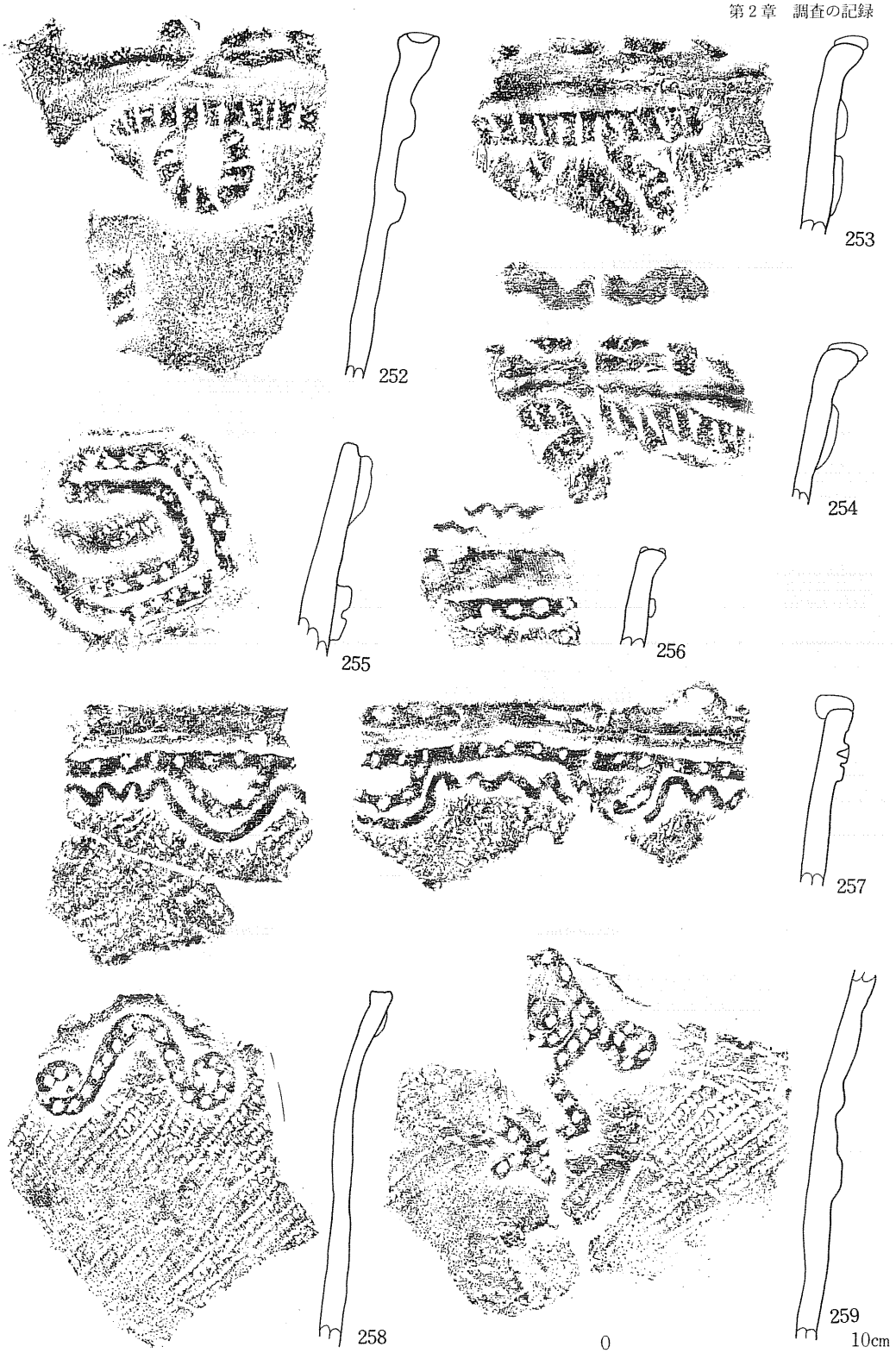

第Ⅰ群第4類

第104図　遺構外出土土器(19)



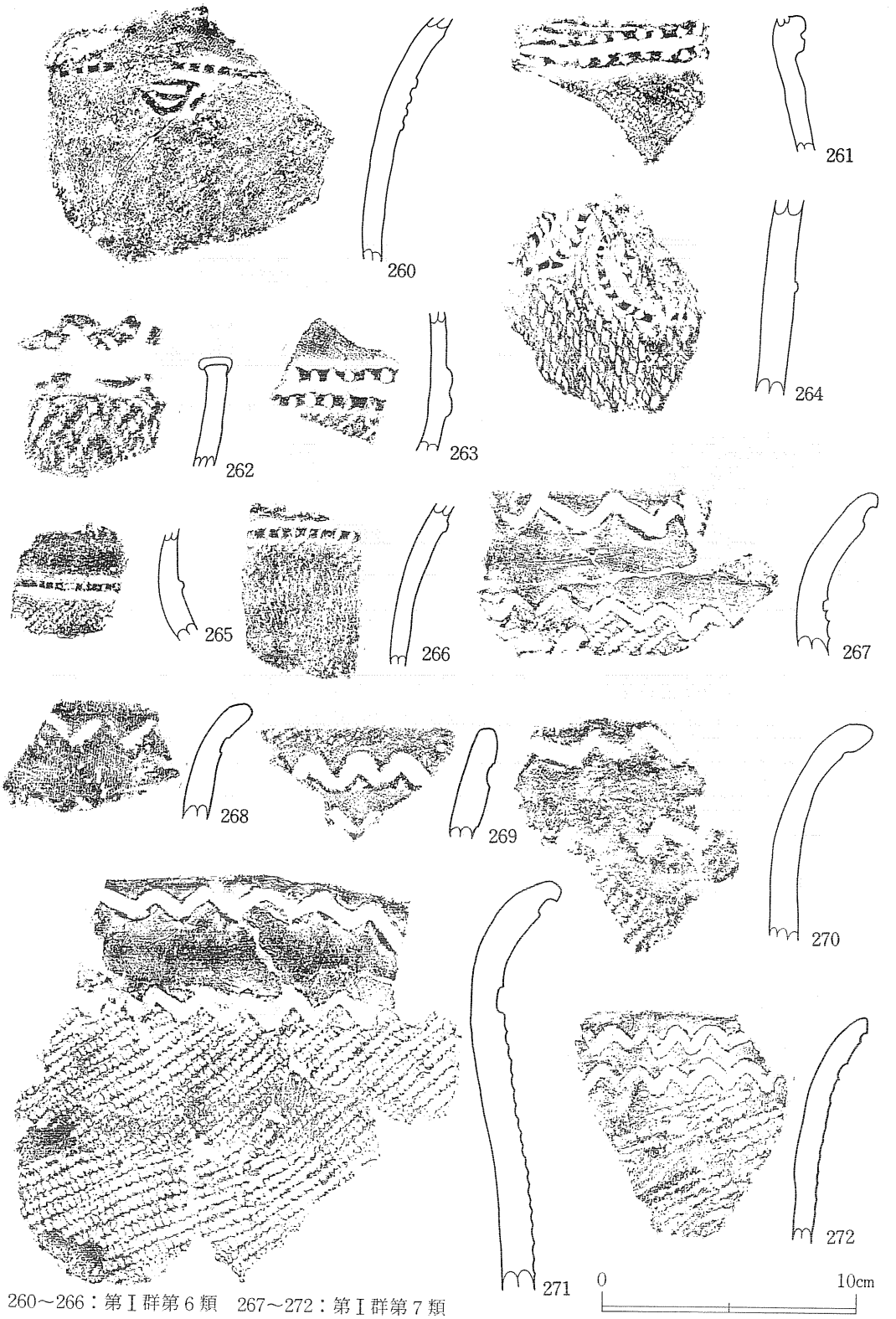

第Ⅰ群第４類

第105図　遺構外出土土器(20)



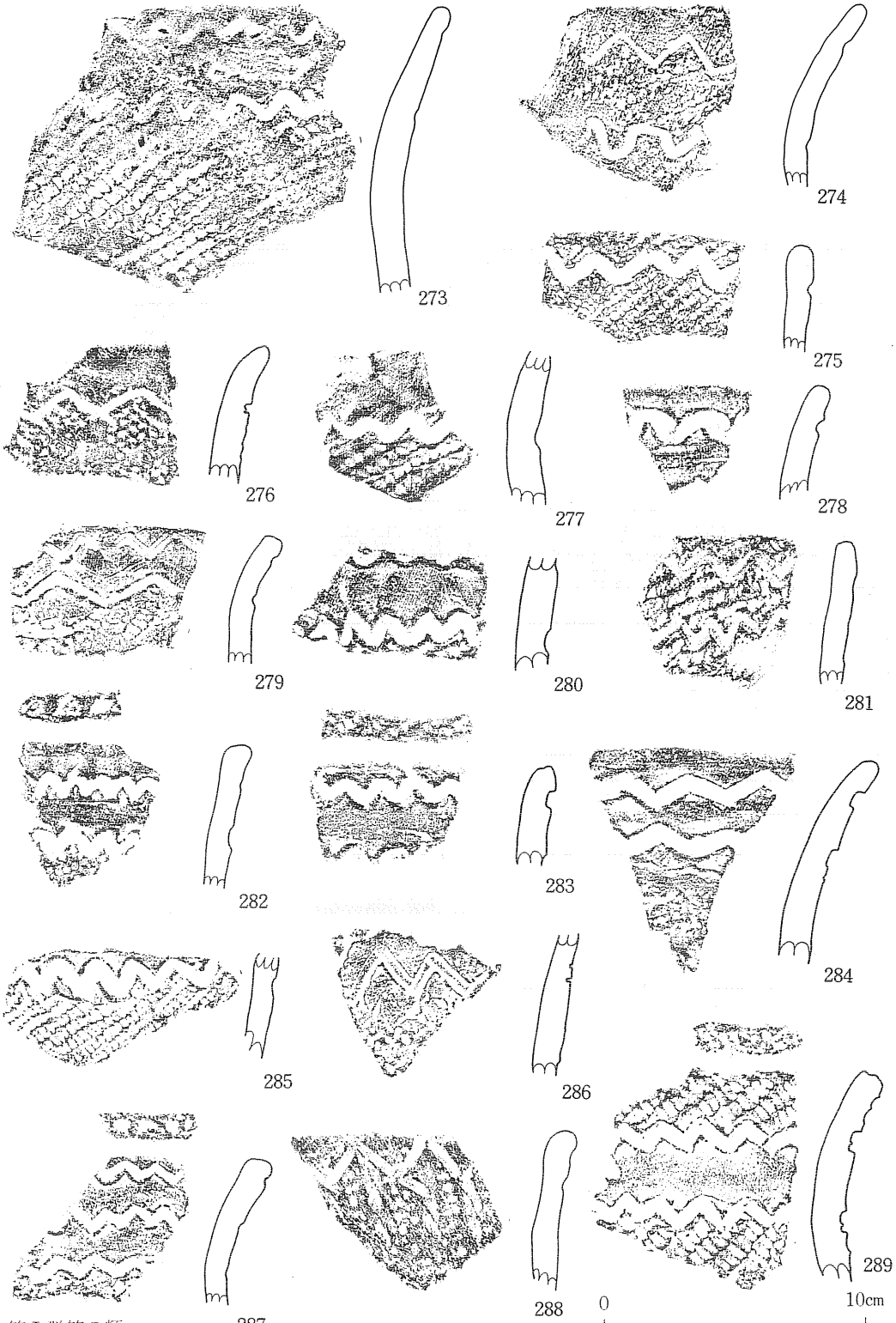

第Ⅰ群第６類

第106図　遺構外出土土器(21)



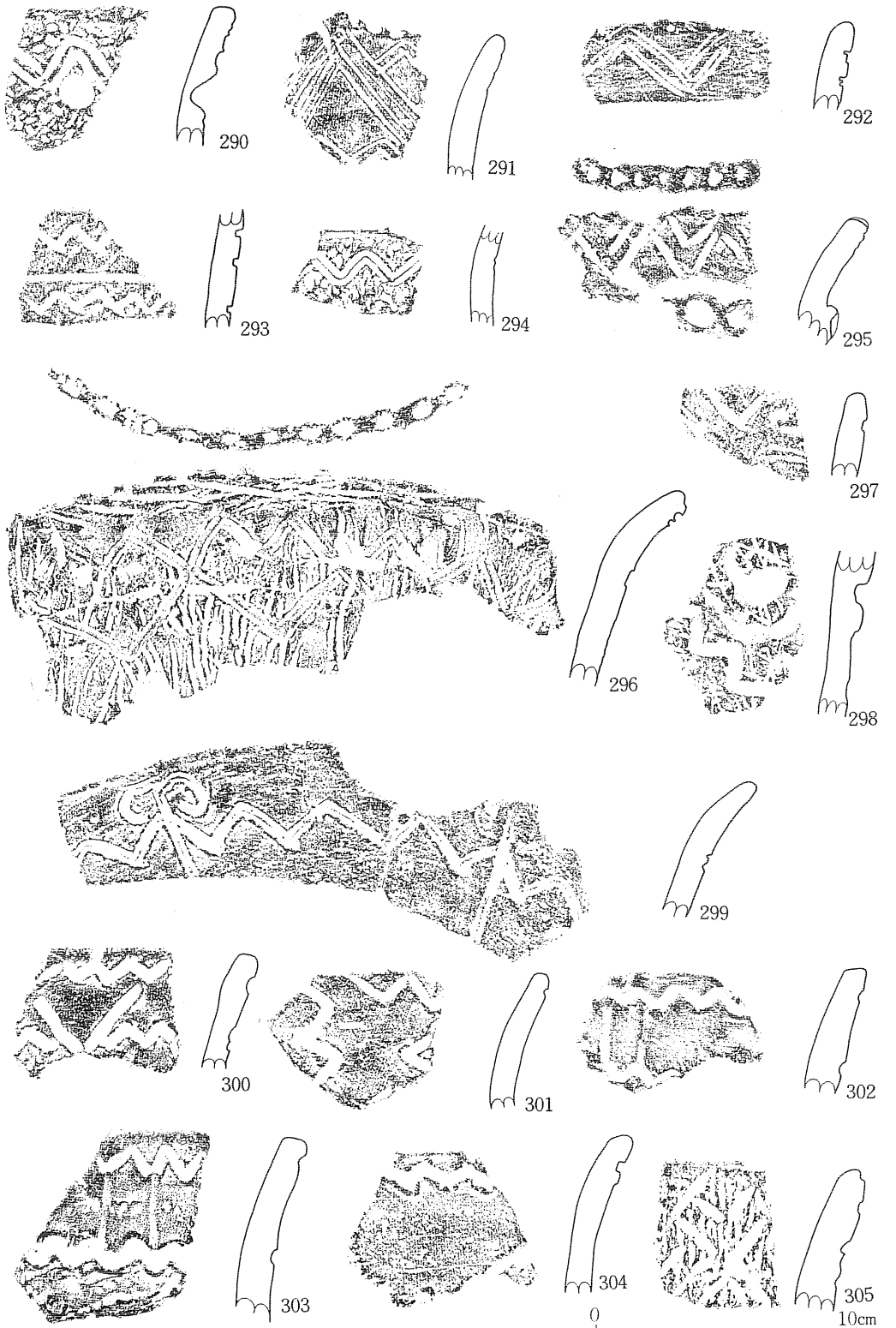

260～266：第Ⅰ群第６類　267～272：第Ⅰ群第７類

第107図　遺構外出土土器(22)




第Ⅰ群第7類

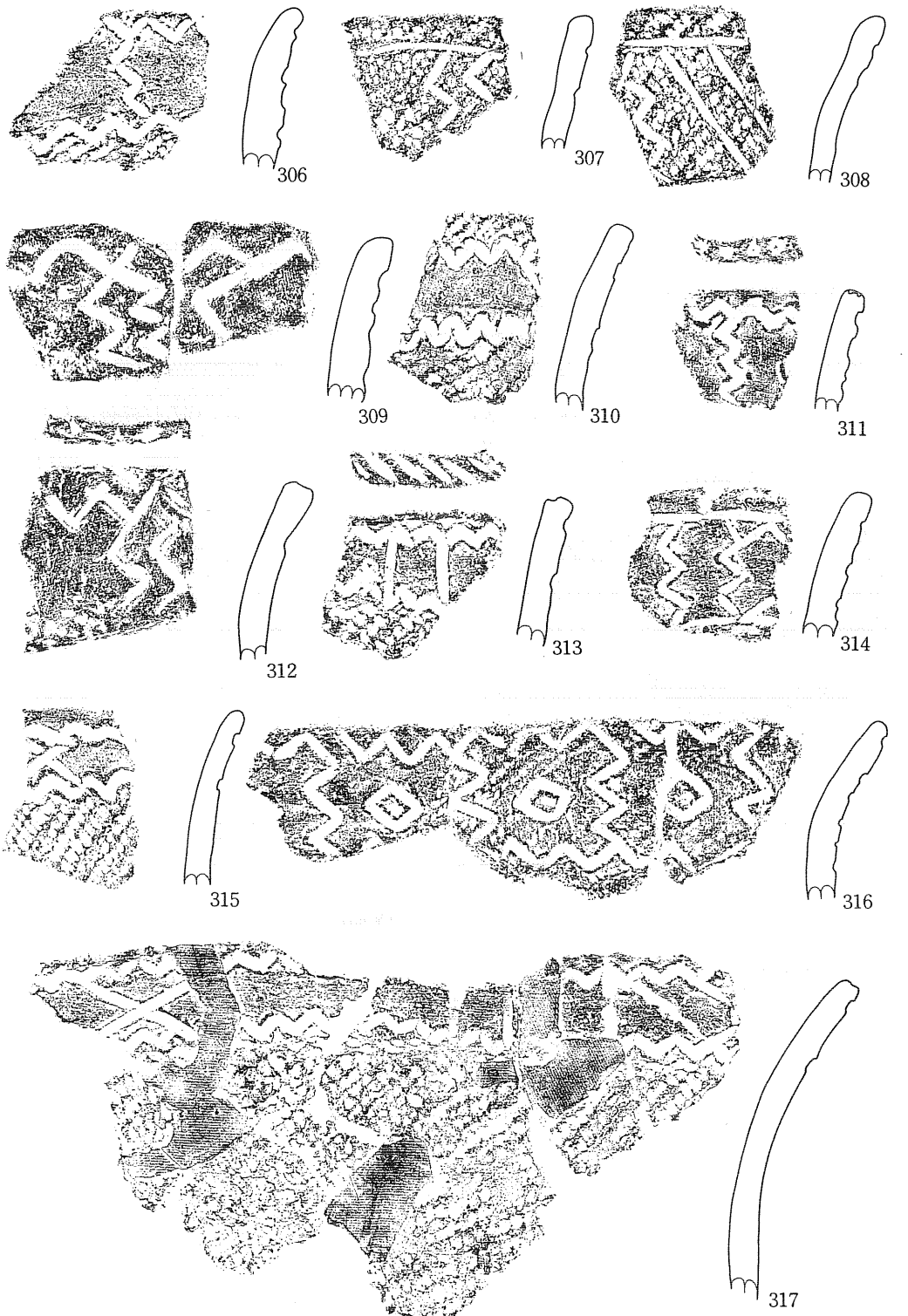
第108図　遺構外出土土器(23)




290～298：第Ⅰ群第７類　299～305：第Ⅰ群第８類

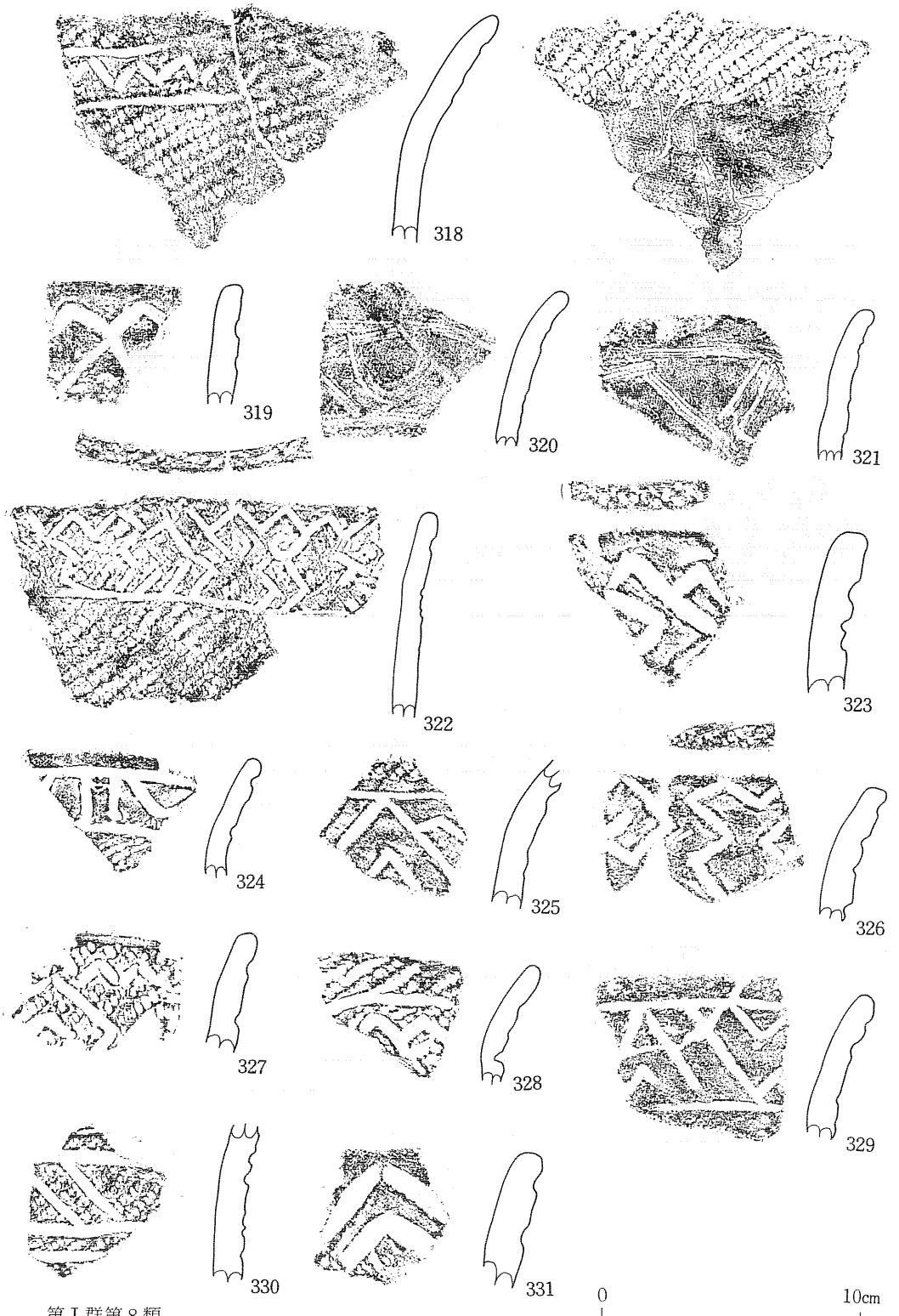


第109図　遺構外出土土器(24)



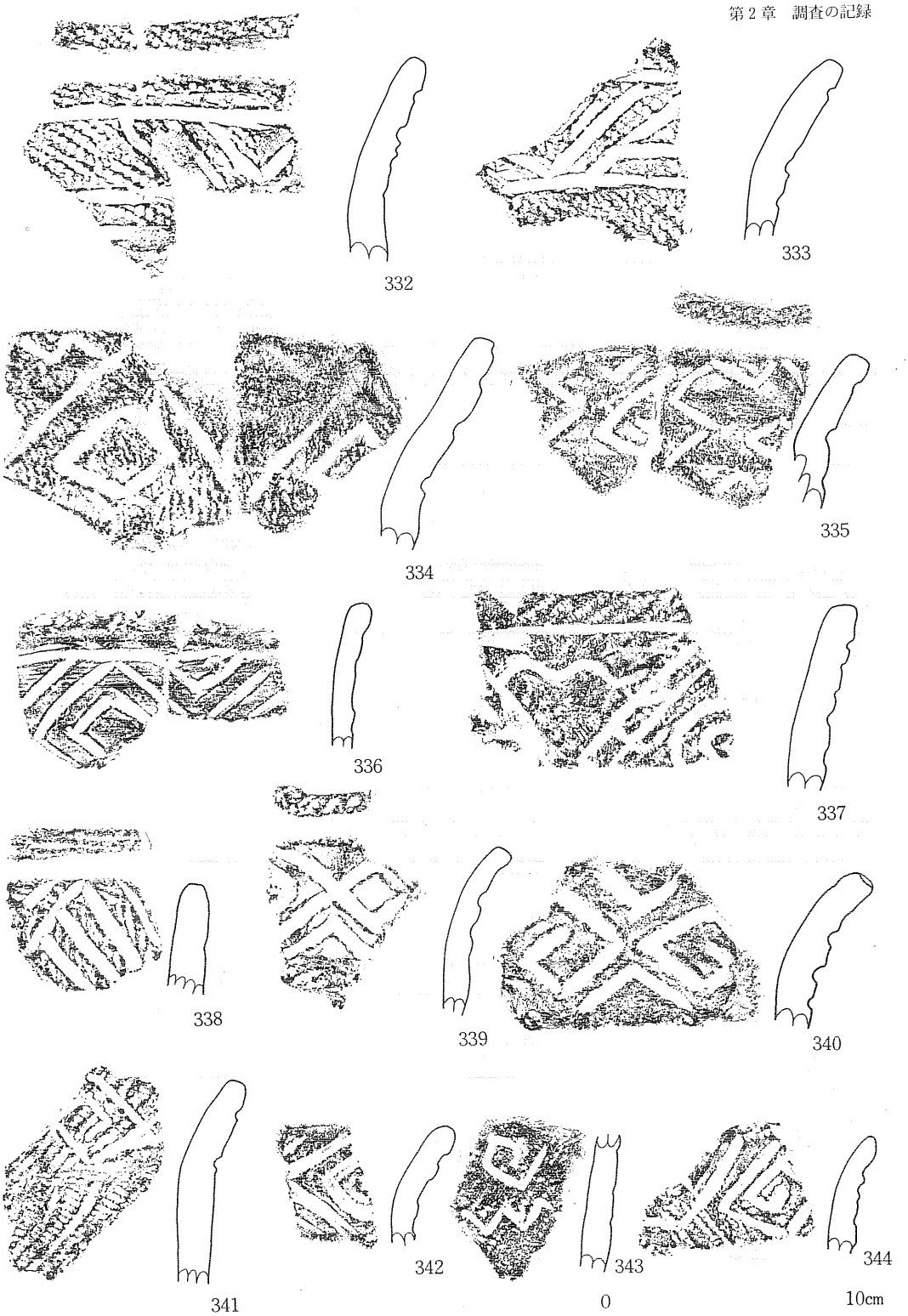

第Ⅰ群第8類

第110図　遺構外出土土器(25)



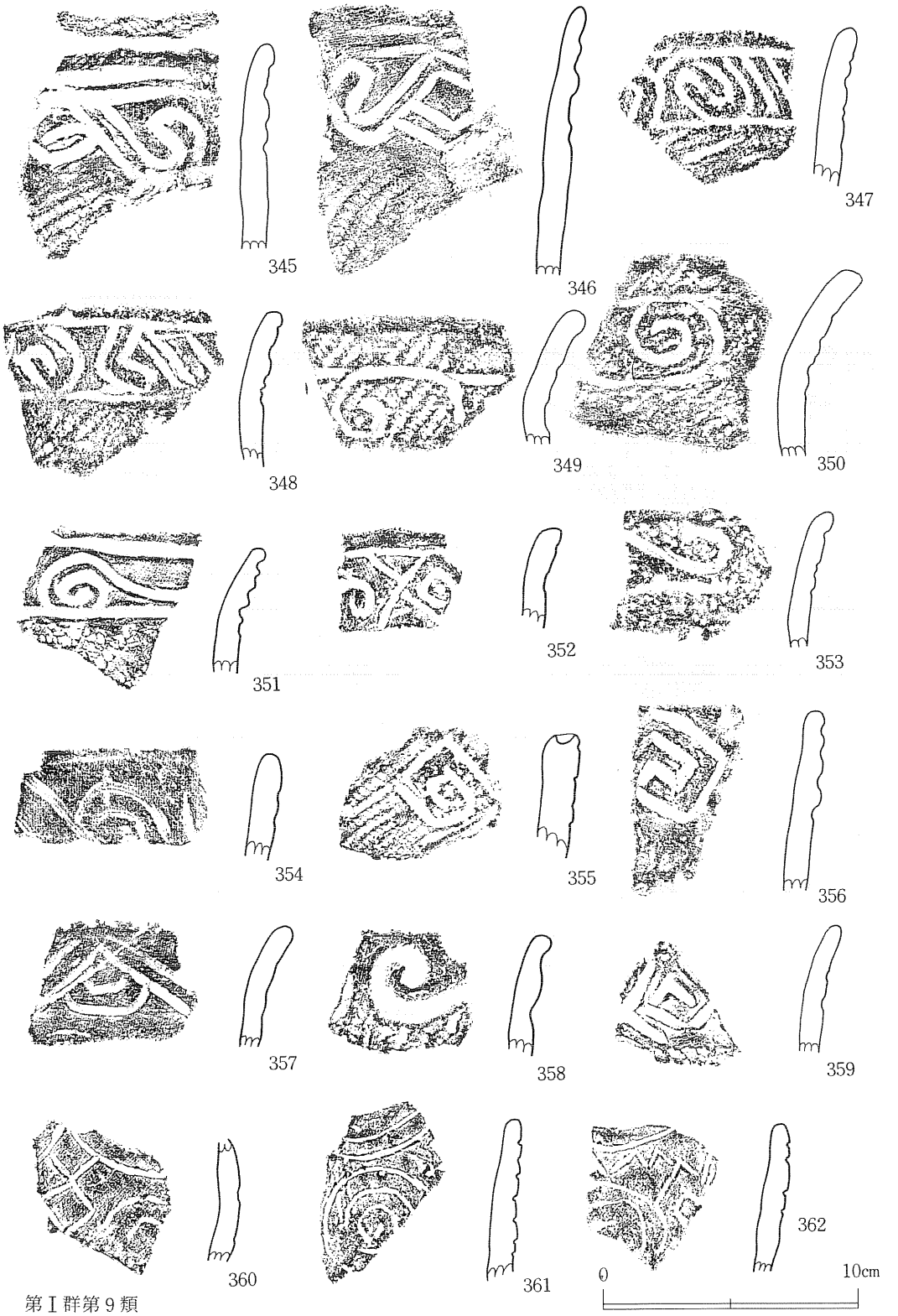

第Ⅰ群第８類

第111図　遺構外出土土器(26)



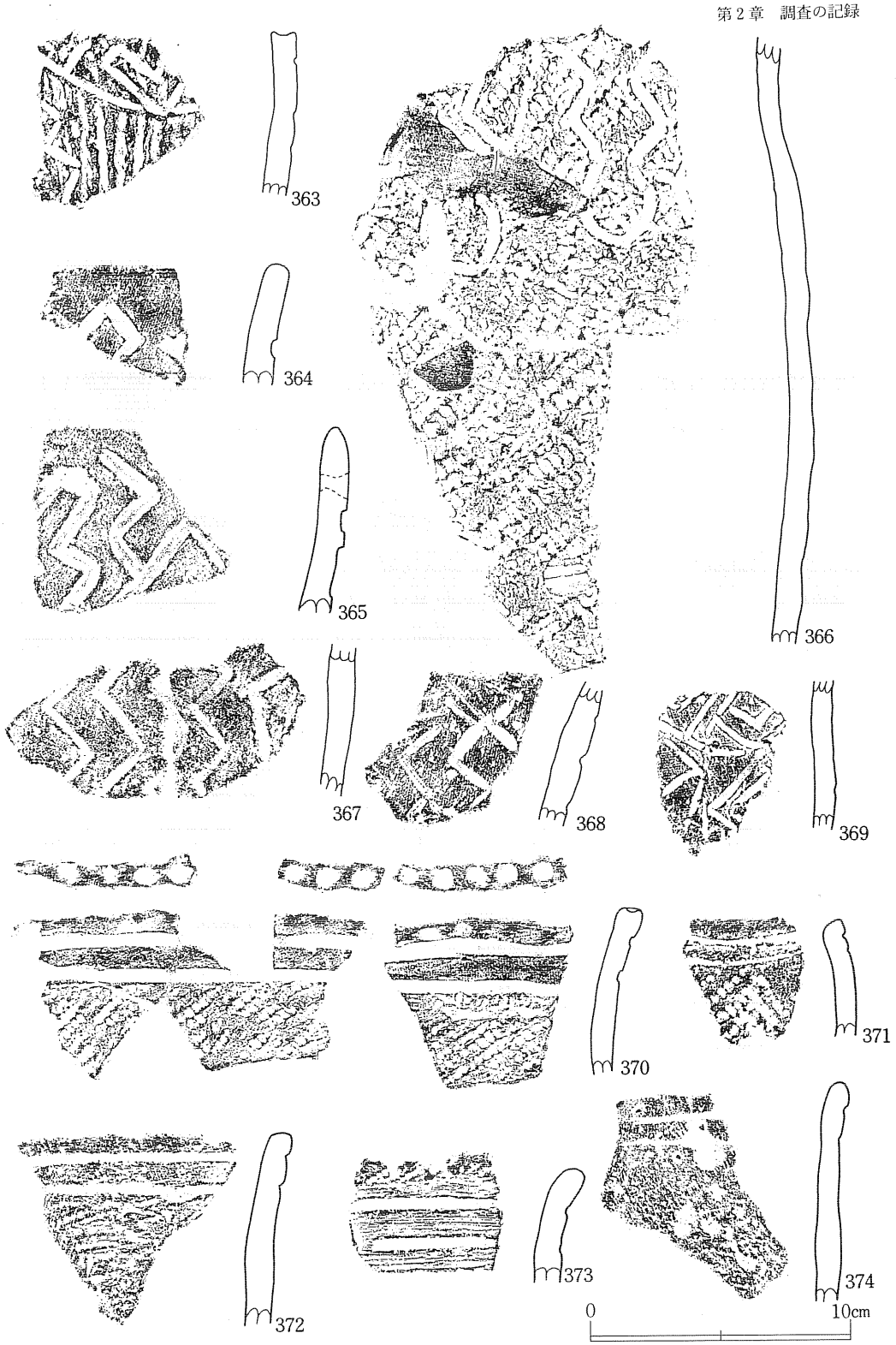

332～334：第Ⅰ群第8類　335～344：第Ⅰ群第9類

第112図　遺構外出土土器(27)



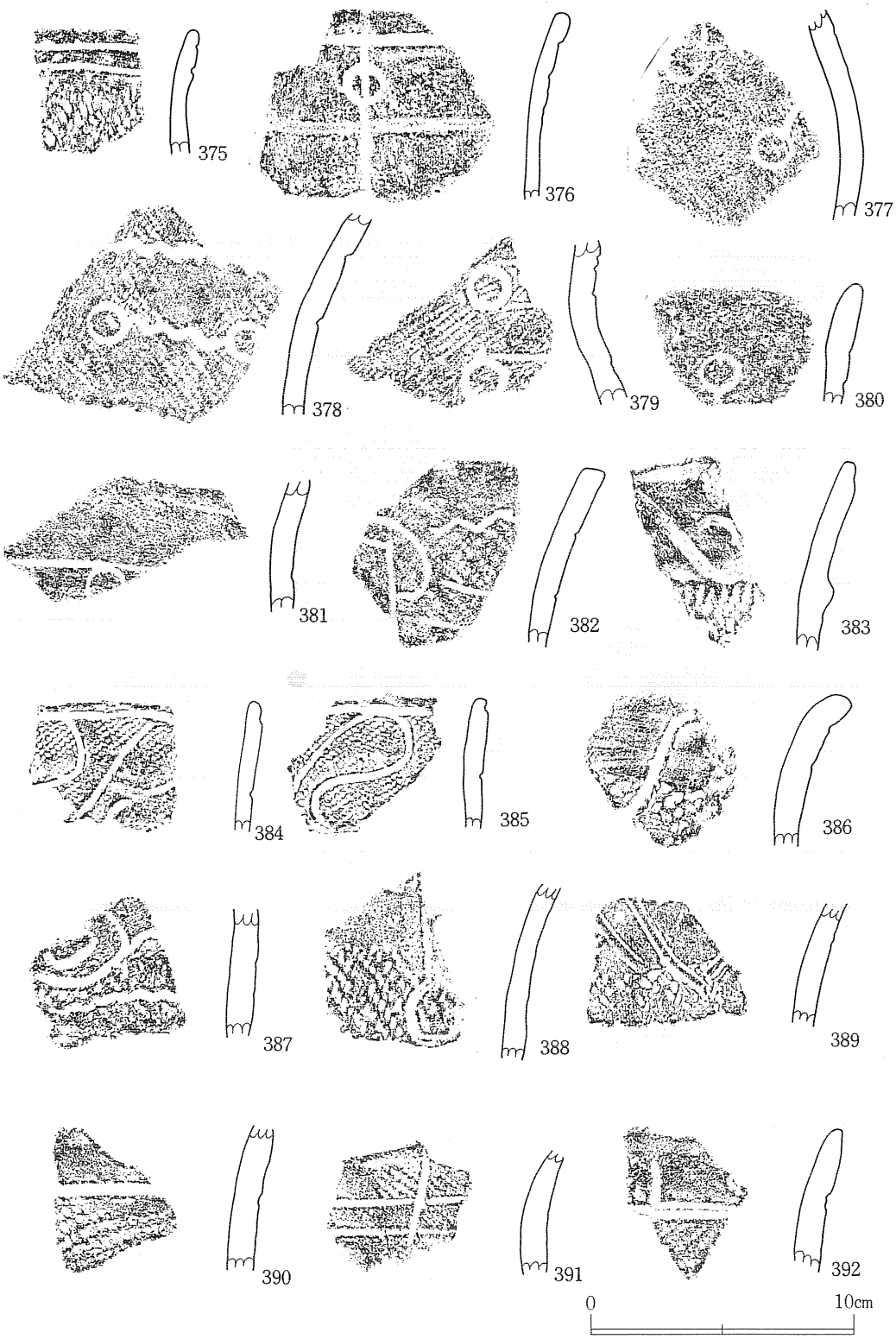

第Ⅰ群第９類

第113図　遺構外出土土器(28)



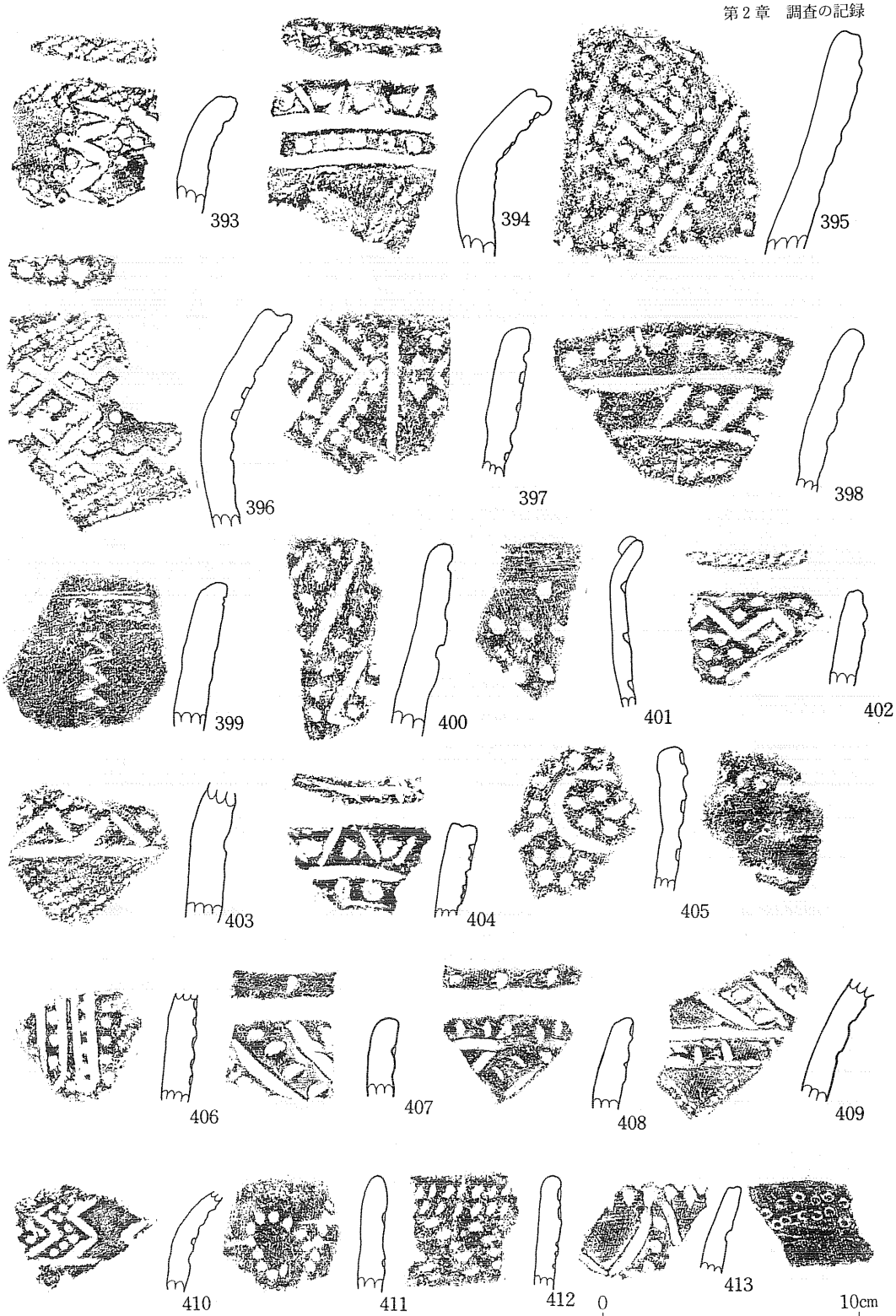

363～369：第Ⅰ群第10類　370～374：第Ⅰ群第11類

**第114図　遺構外出土土器(29)**



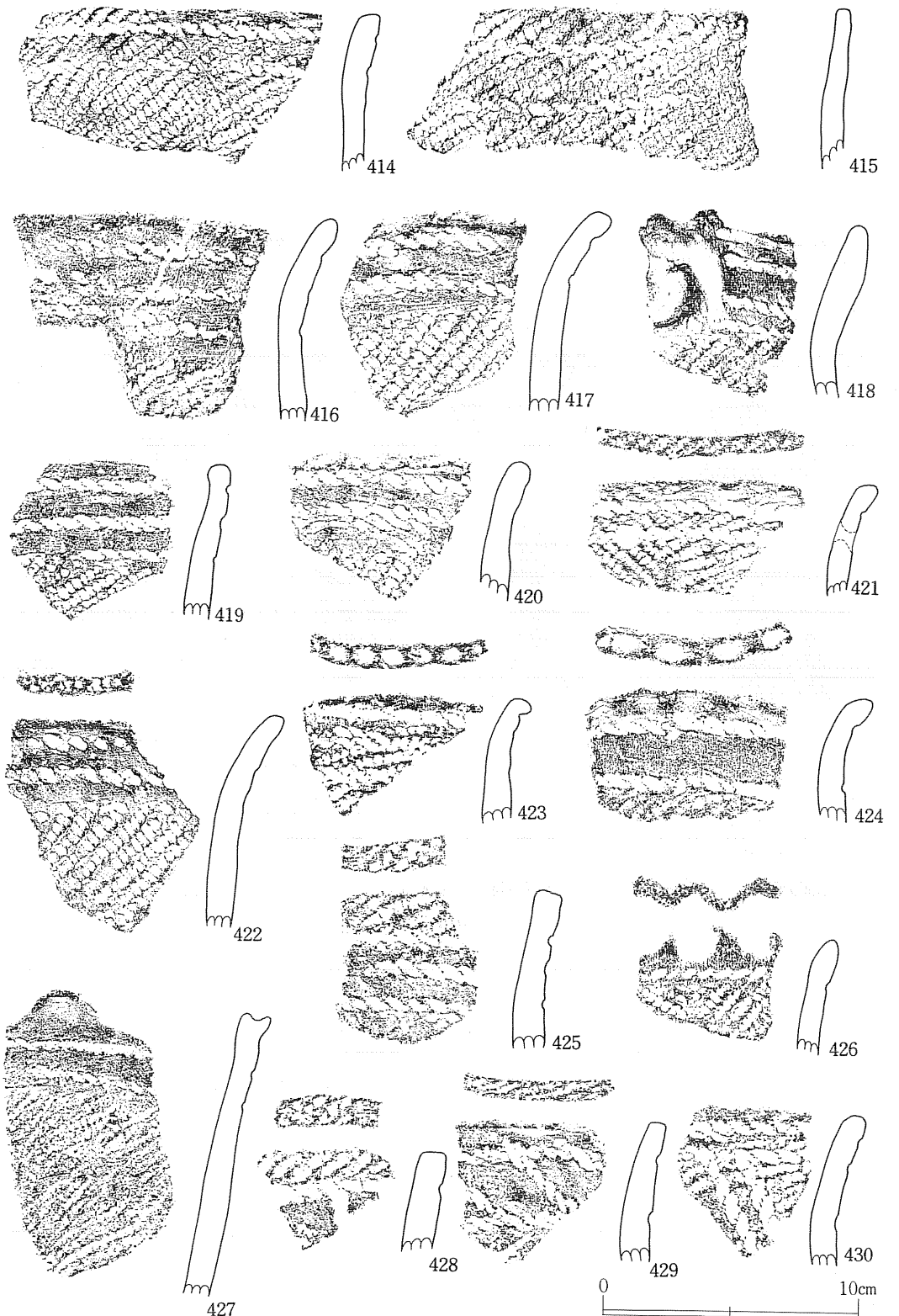

375：第Ⅰ群第11類　376～381：第Ⅰ群第12類　382～392：第Ⅰ群第13類

第115図　遺構外出土土器(30)



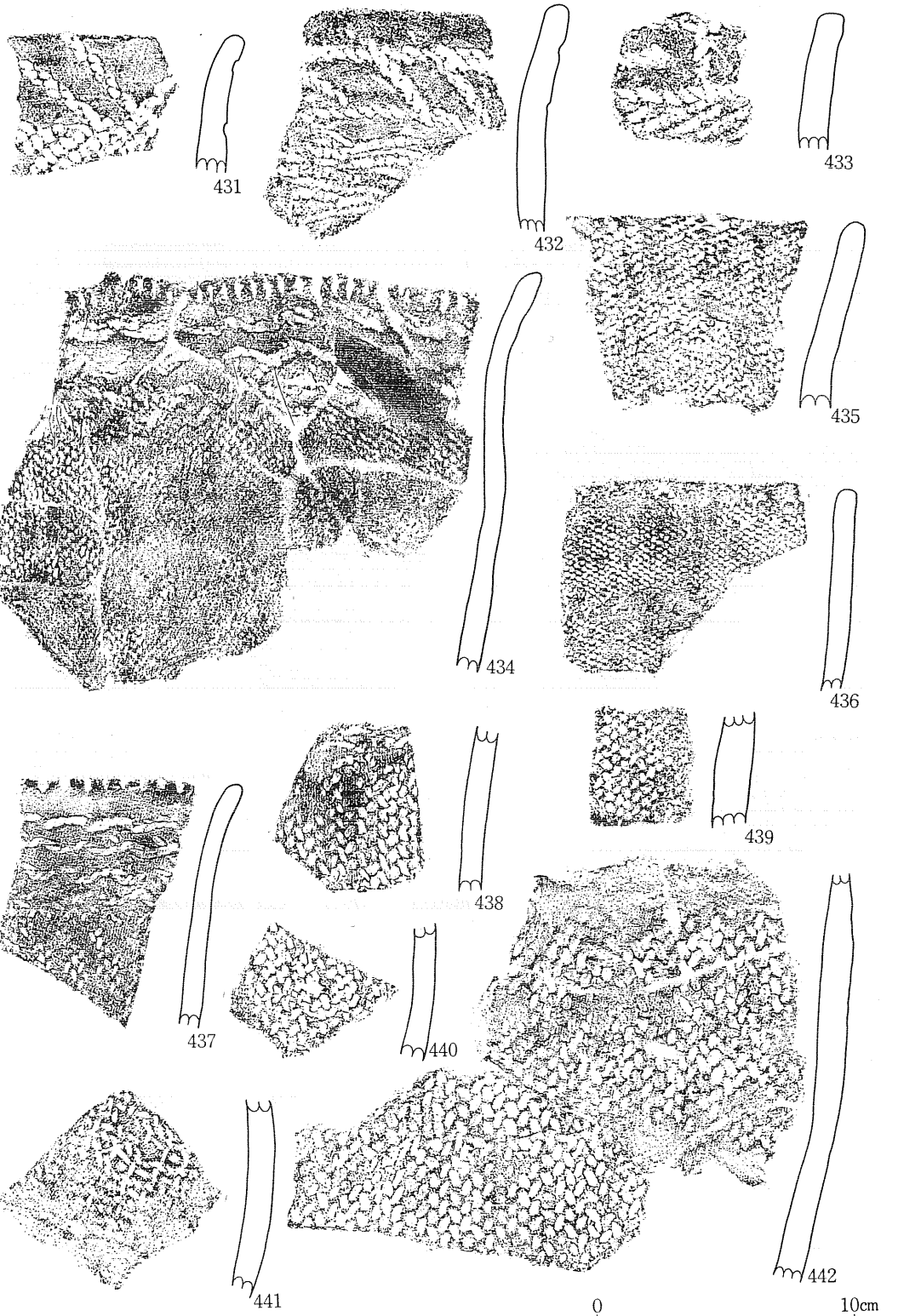

第Ⅰ群第14類

第116図　遺構外出土土器(31)



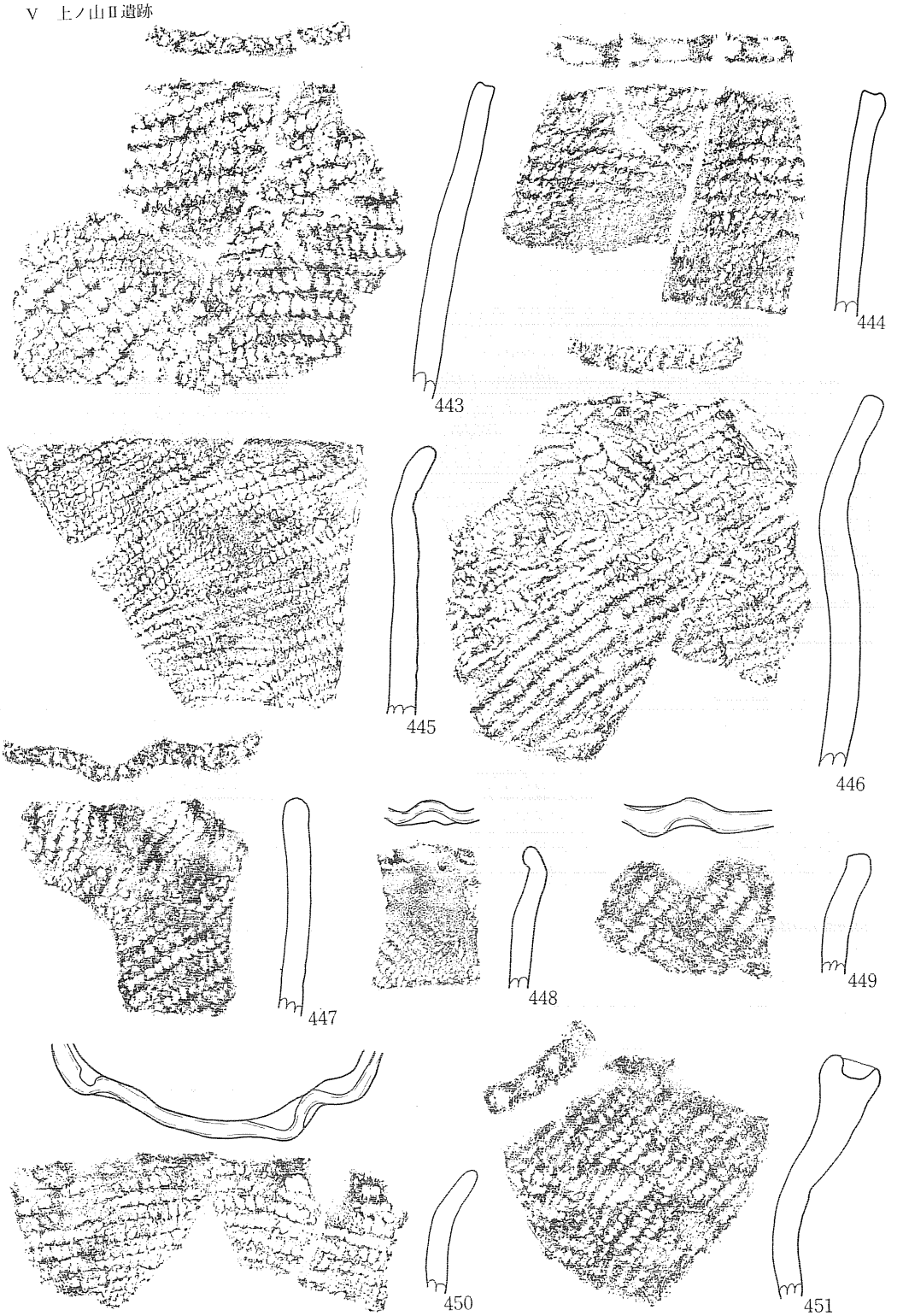

第Ⅰ群第15類

第117図　遺構外出土土器(32)



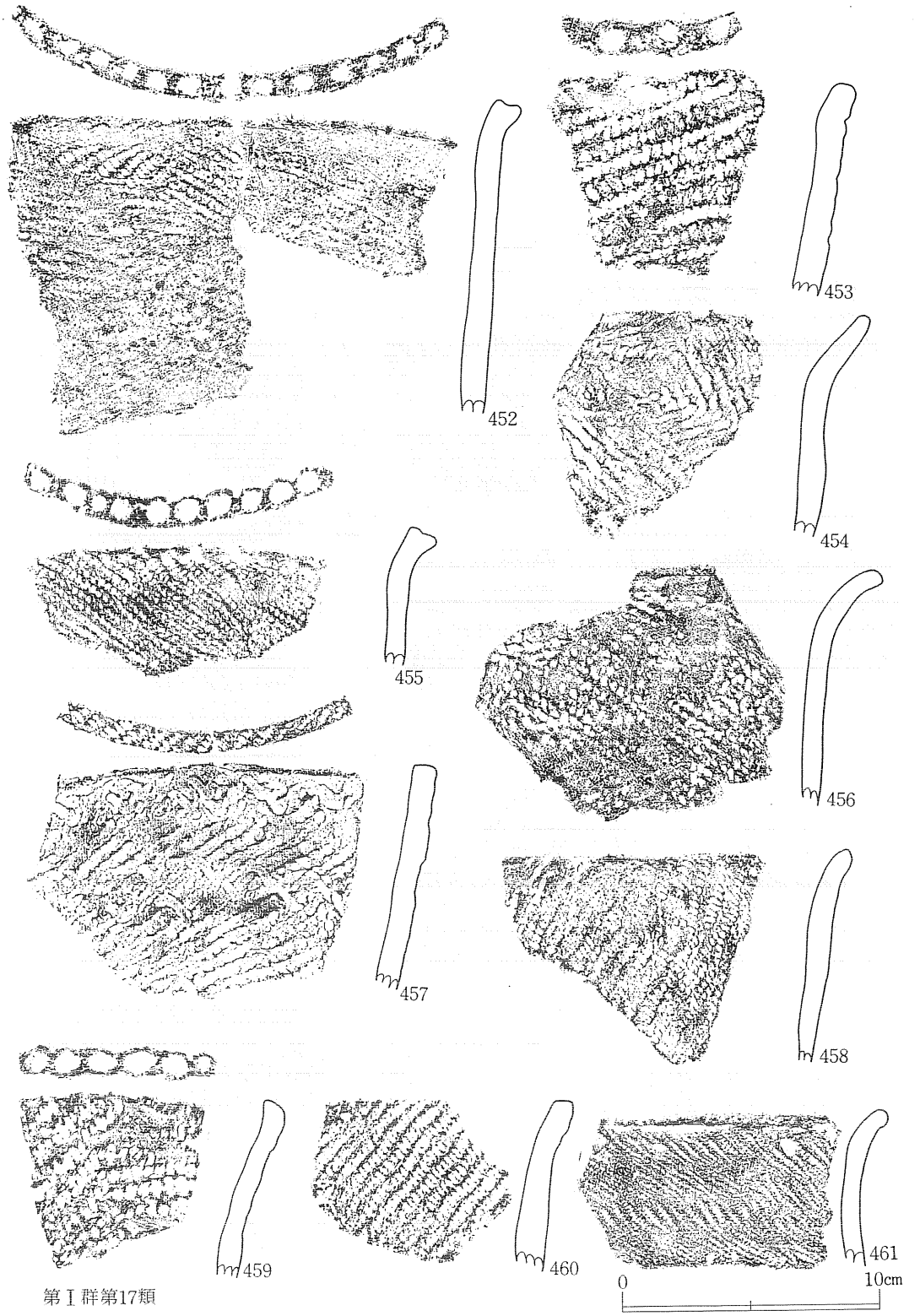

431～433：第Ⅰ群第15類　434～442：第Ⅰ群第16類

第118図　遺構外出土土器(33)



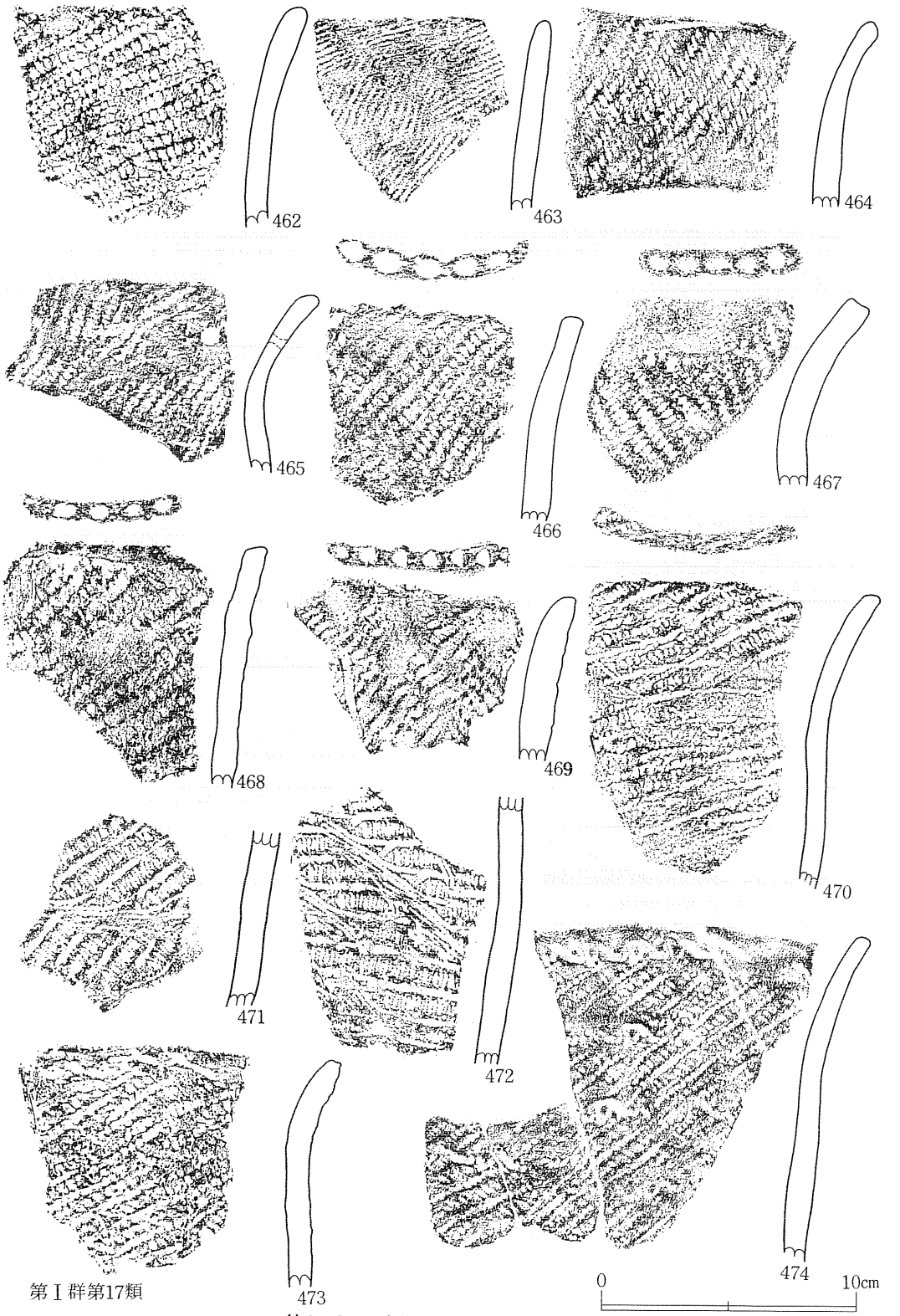

第Ⅰ群第17類

第119図　遺構外出土土器(34)

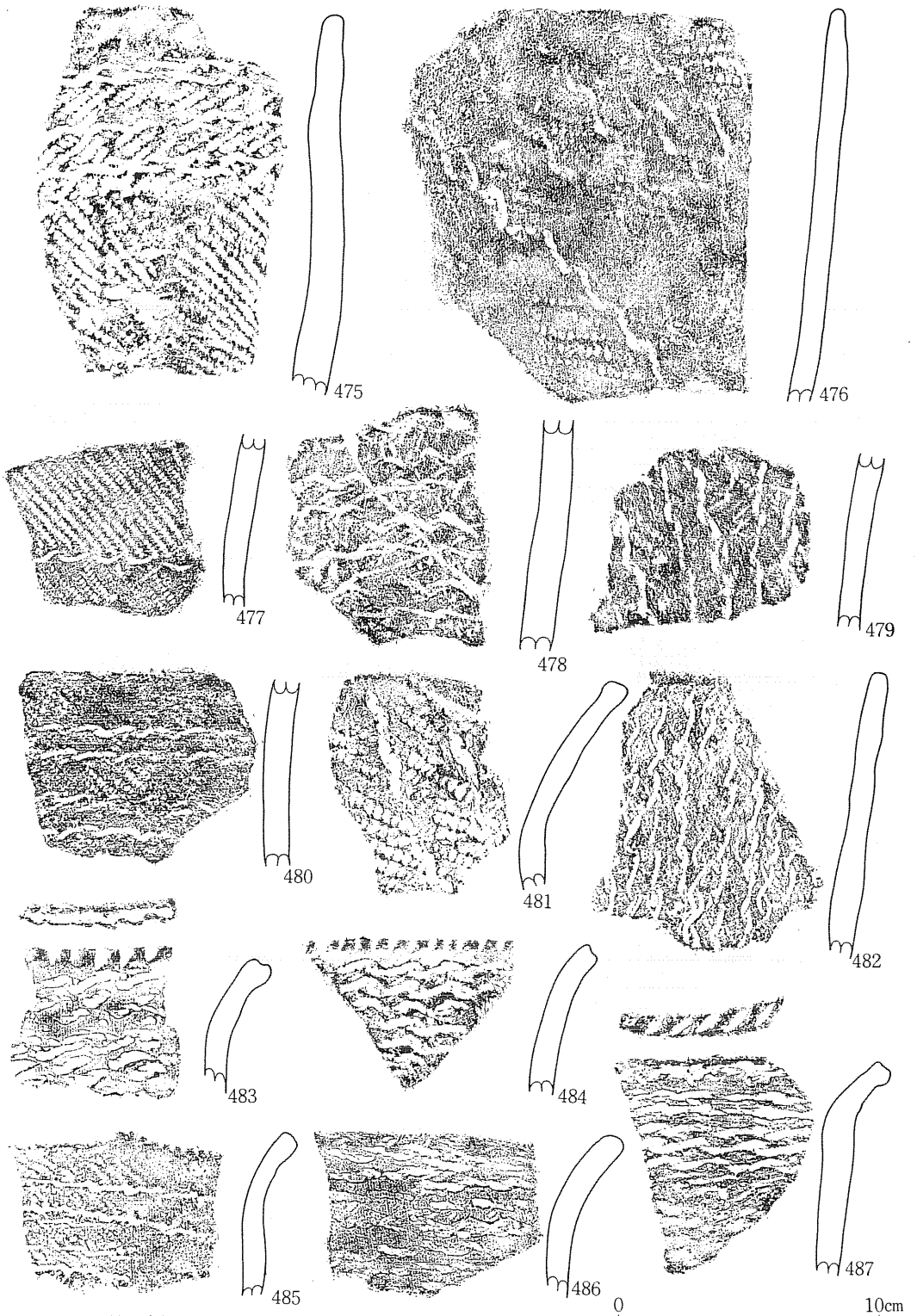



第Ⅰ群第17類

第120図　遺構外出土土器(35)

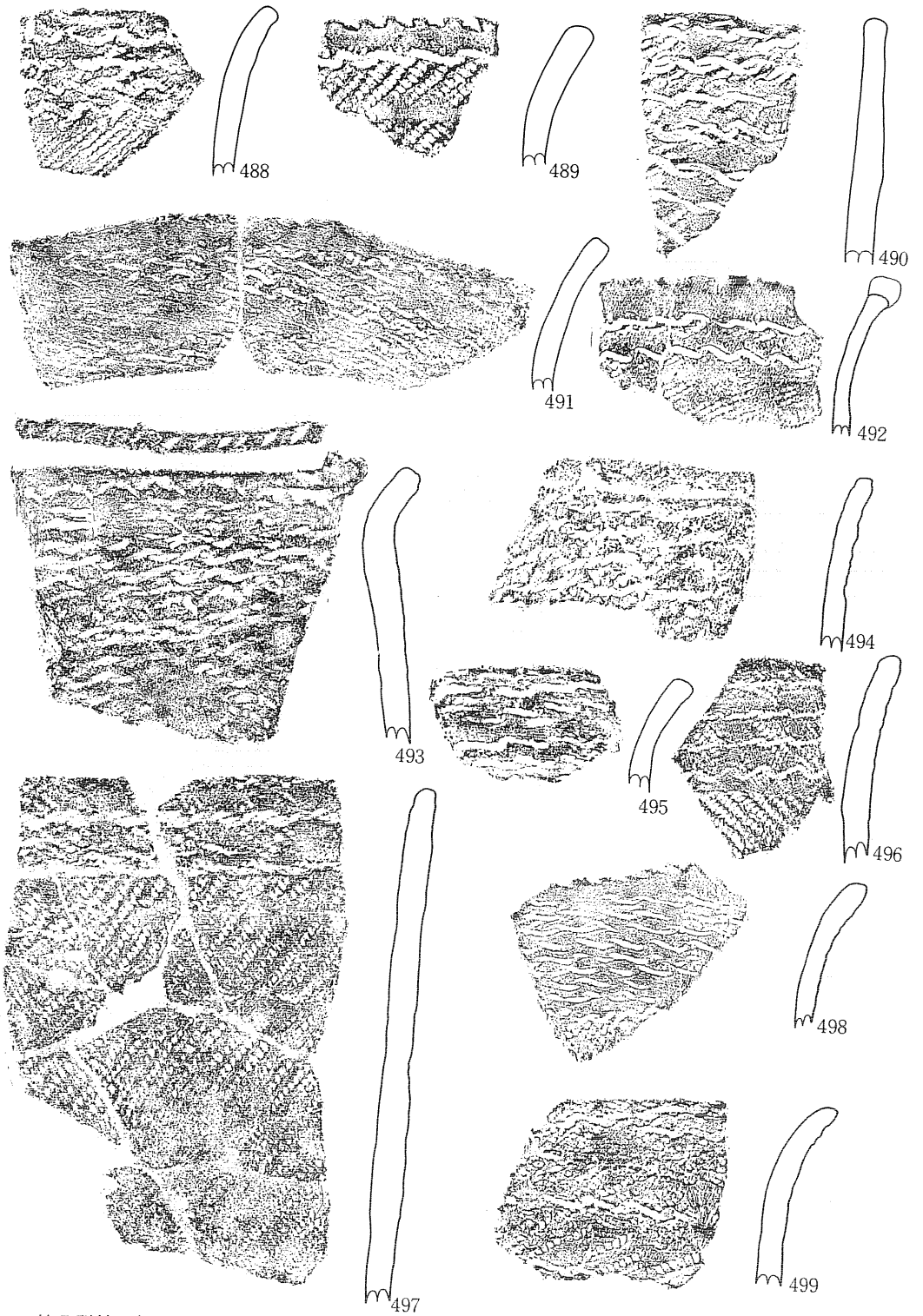



第121図　遺構外出土土器(36)

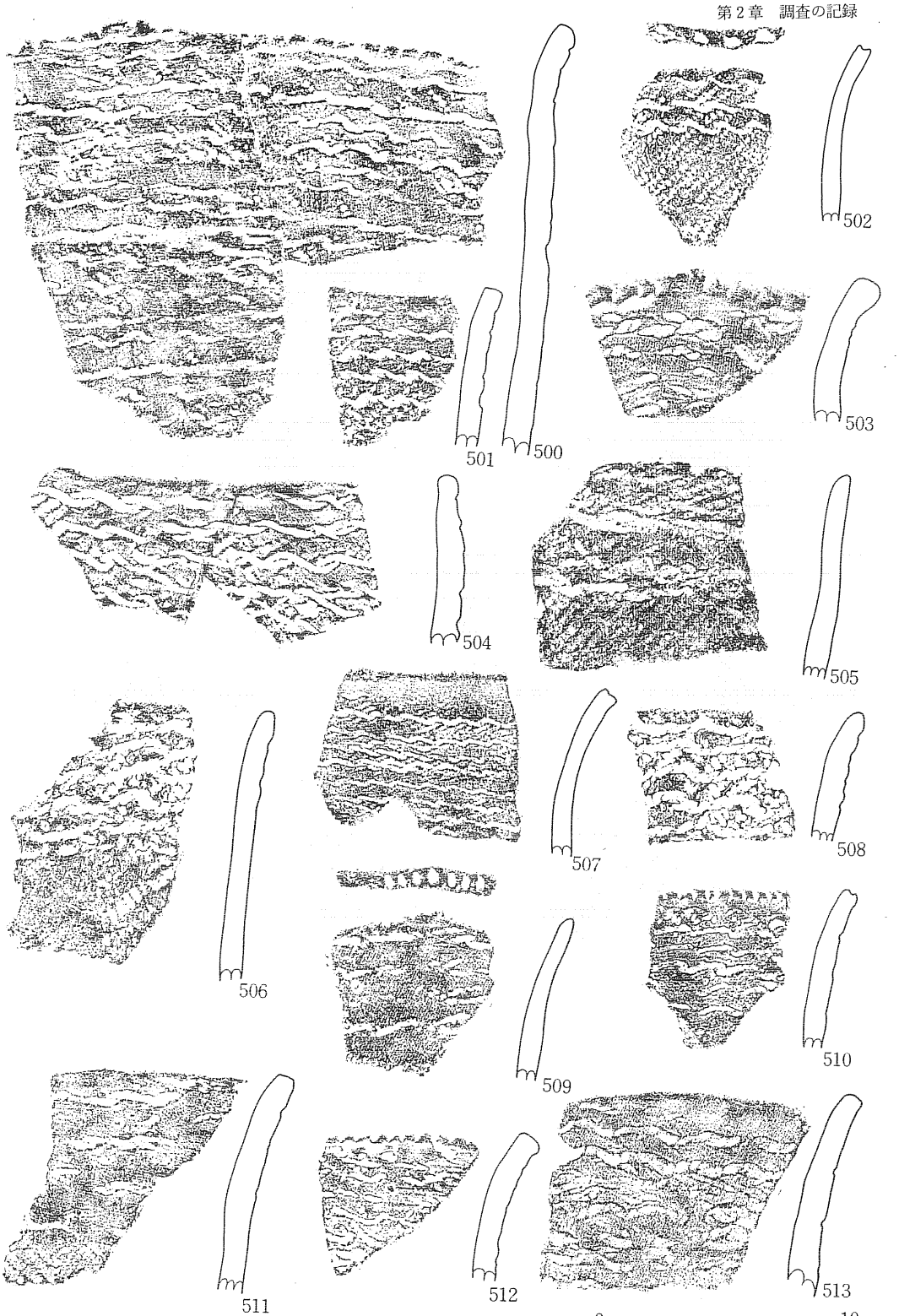



第Ⅰ群第18類

第122図　遺構外出土土器(37)

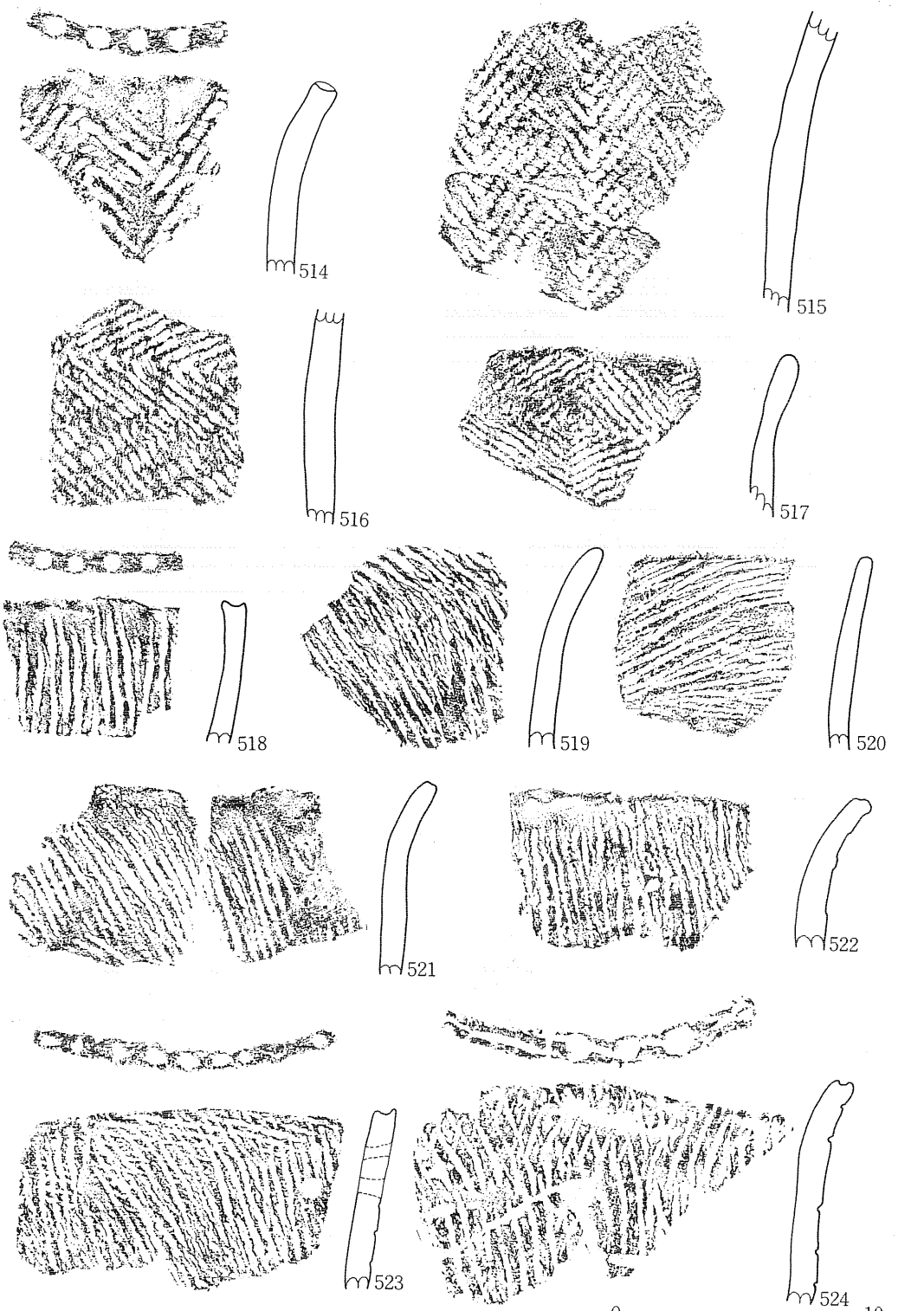



第123図　遺構外出土土器(38)



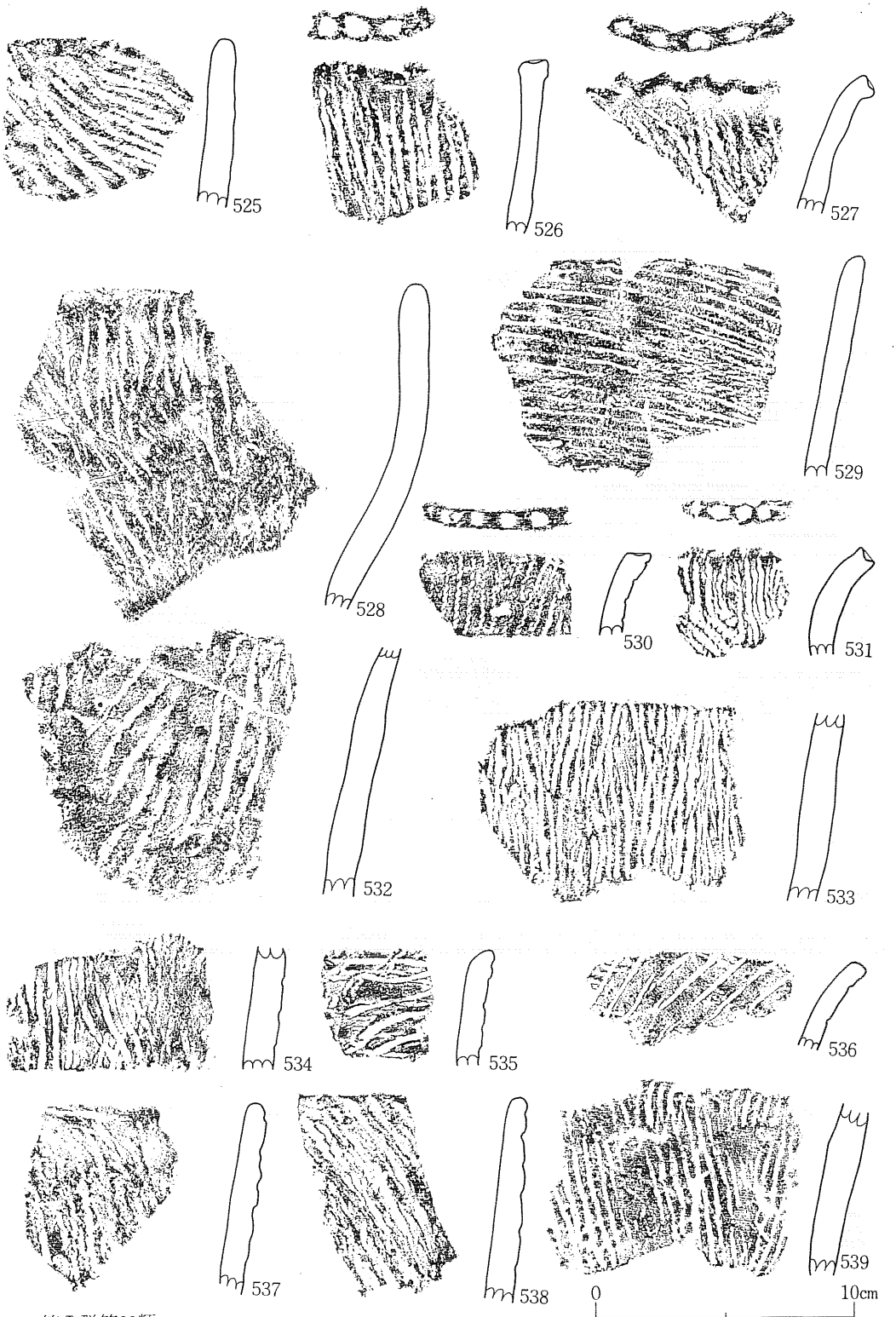

第Ⅰ群第18類

第124図　遺構外出土土器(39)



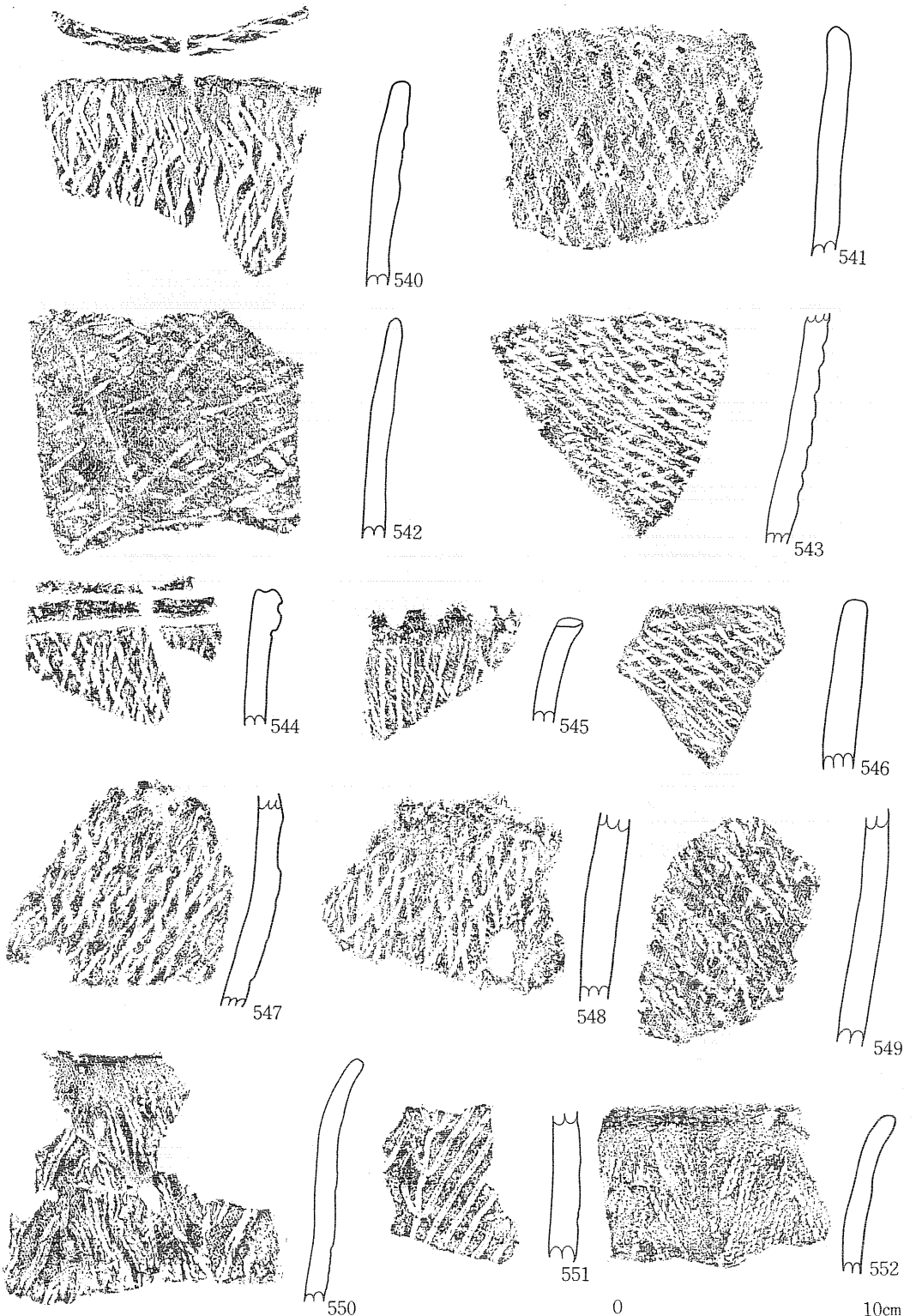

514～517：第Ⅰ群第19類　518～524：第Ⅰ群第20類

第125図　遺構外出土土器(40)



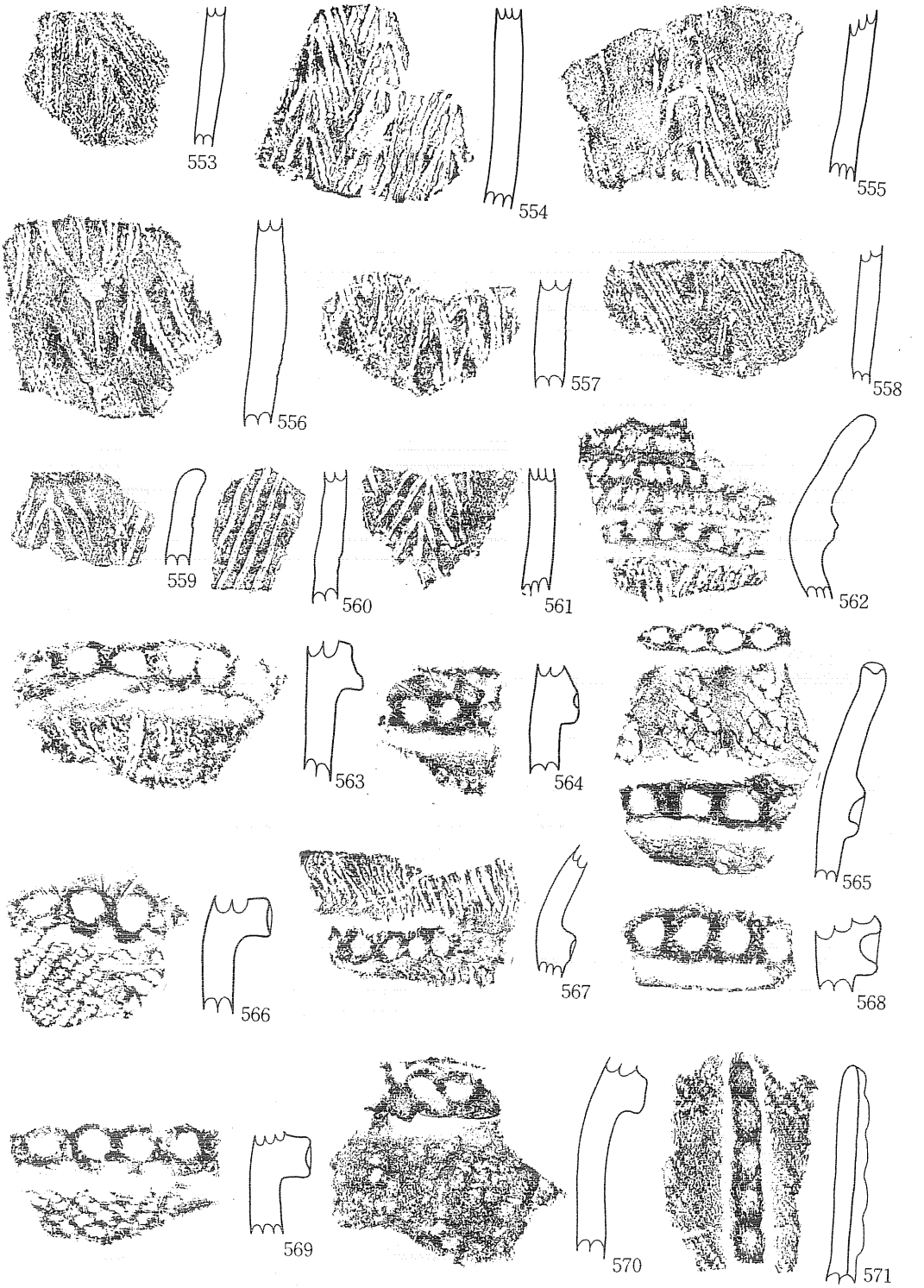

第Ⅰ群第20類

第126図　遺構外出土土器(41)



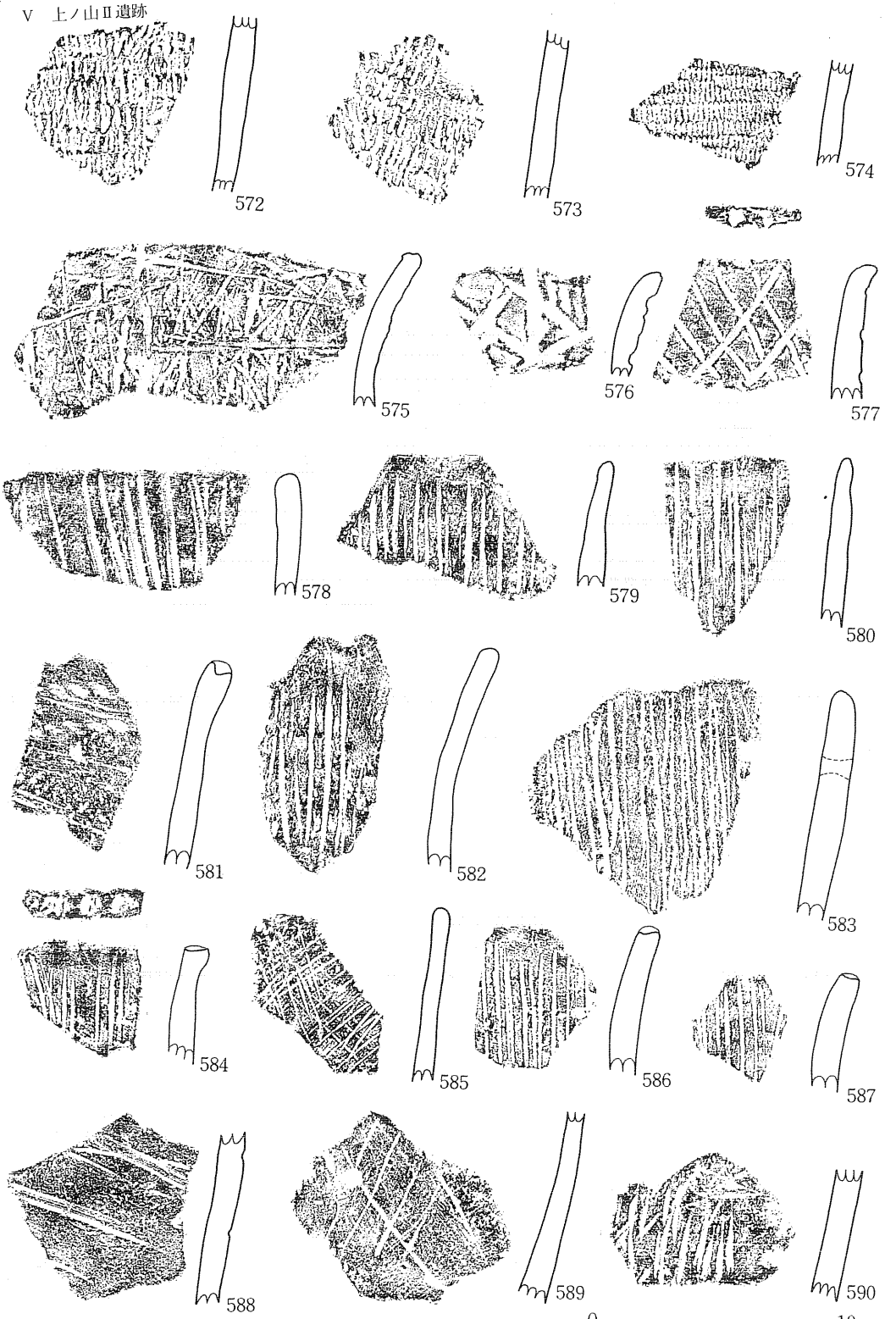

540～549：第Ⅰ群第21類　550～552：第Ⅰ群第22類

第127図　遺構外出土土器(42)



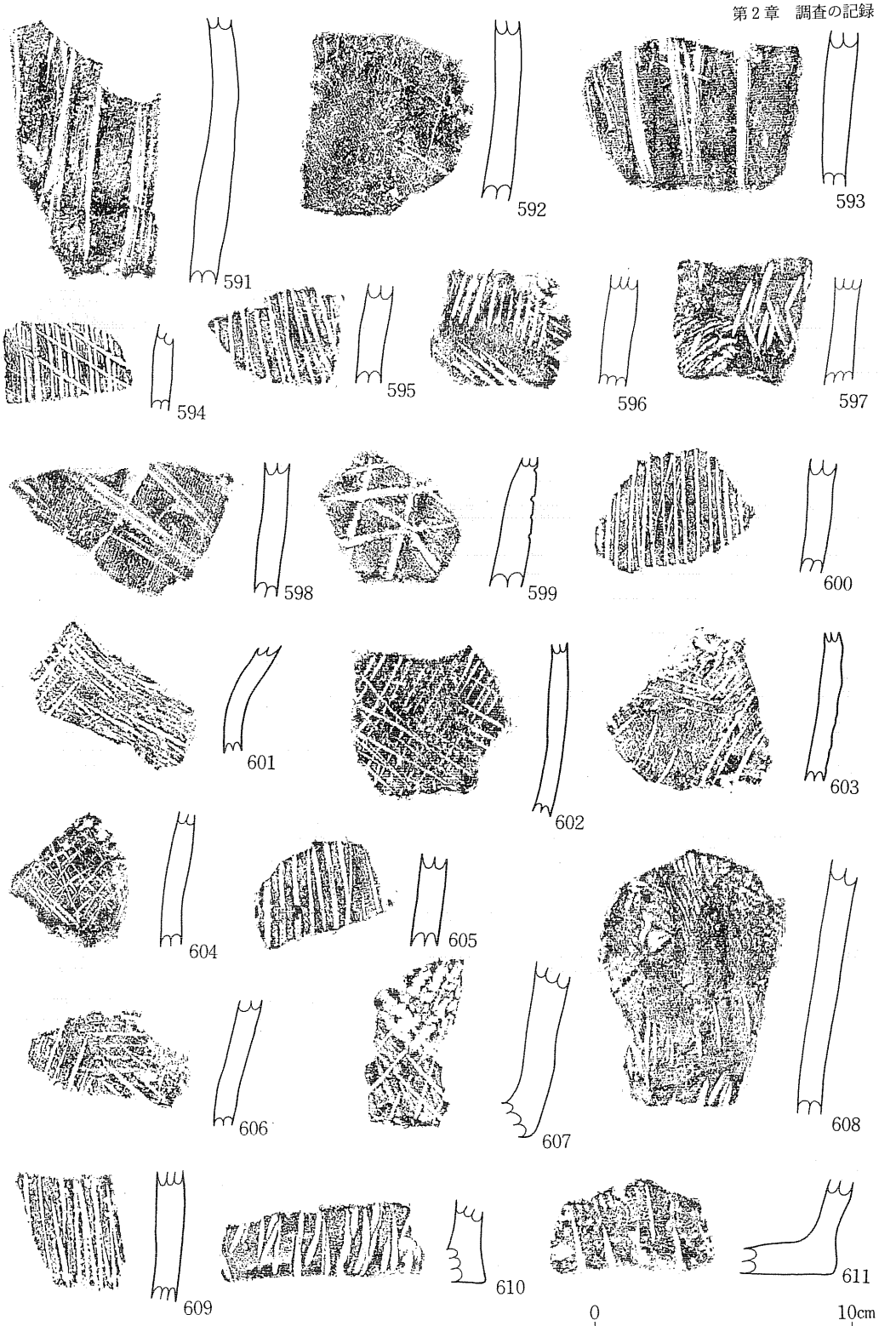

553～563：第Ⅰ群第22類　564～571：第Ⅰ群第23類

第128図　遺構外出土土器(43)



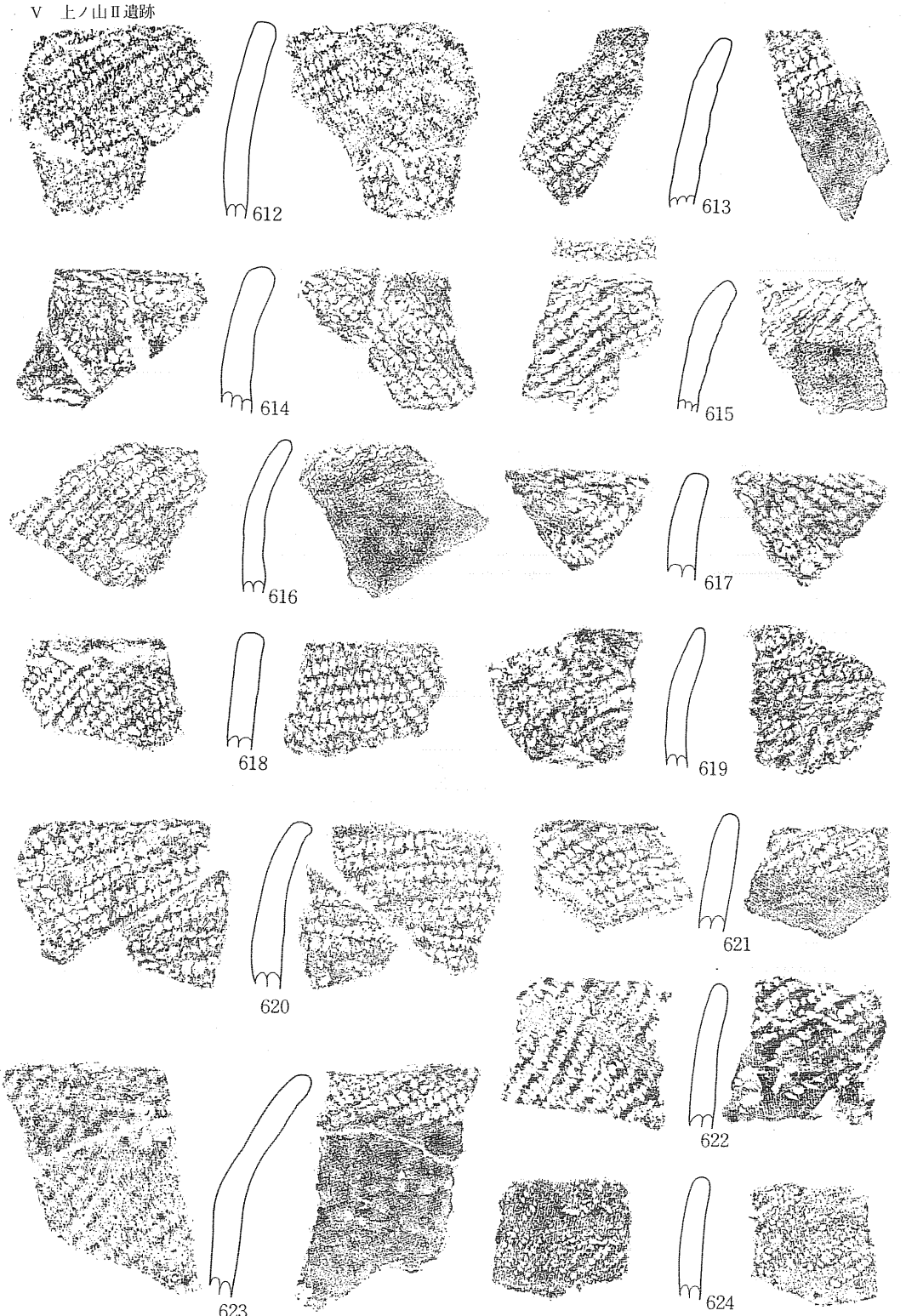

572～574：第Ⅰ群第24類　575～590：第Ⅰ群第26類

第129図　遺構外出土土器(44)



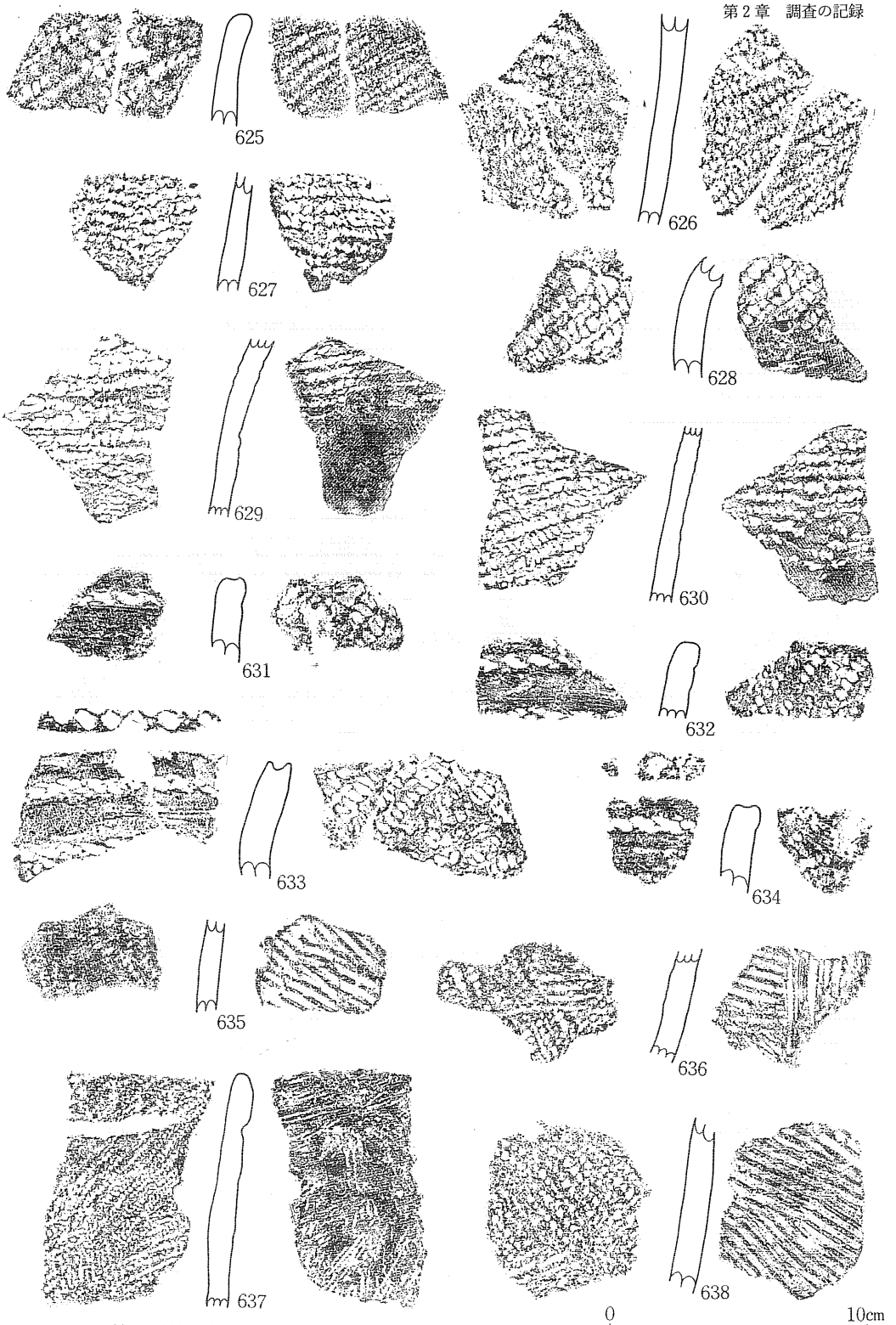

第Ⅰ群第26類

第130図　遺構外出土土器(45)



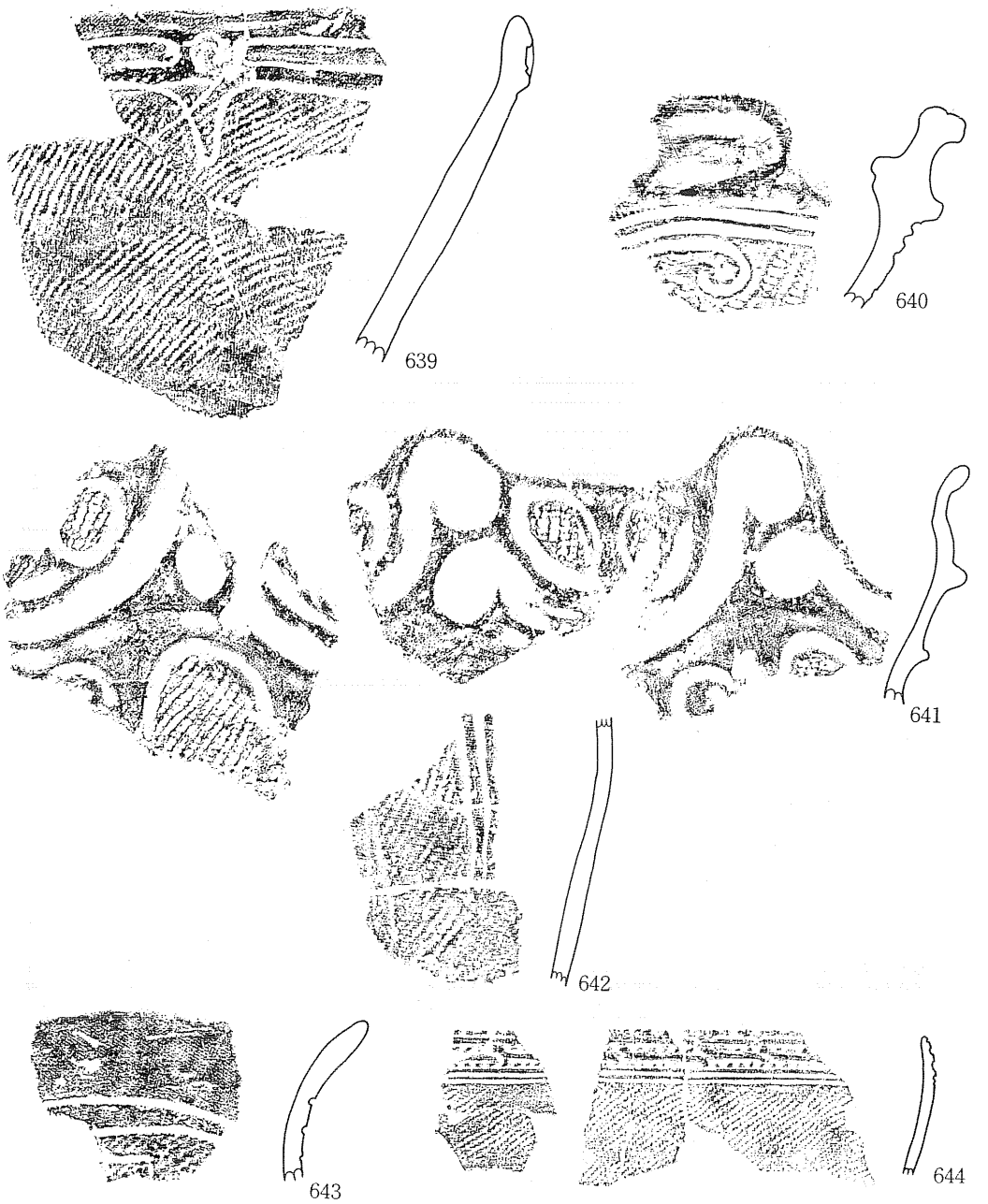

第Ⅰ群第27類

第131図　遺構外出土土器(46)



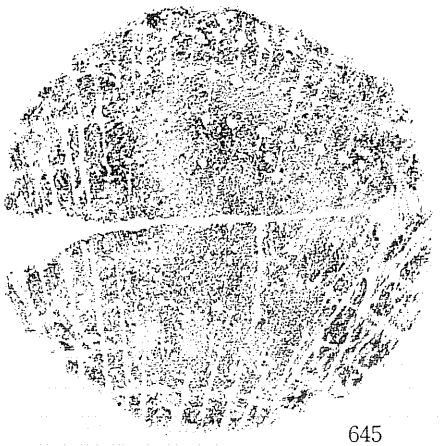

625～634：第Ⅰ群第27類　635～638：第Ⅰ群第28類

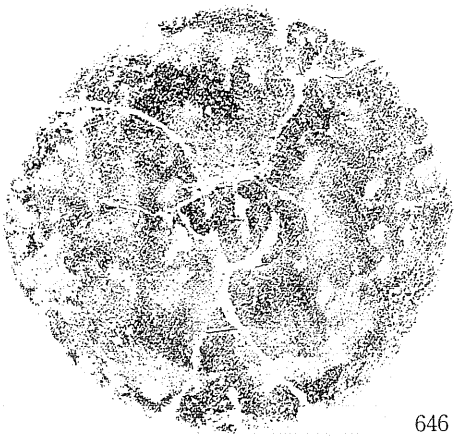
第132図　遺構外出土土器(47)

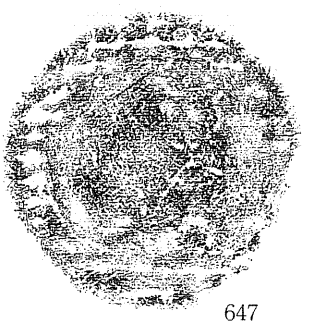


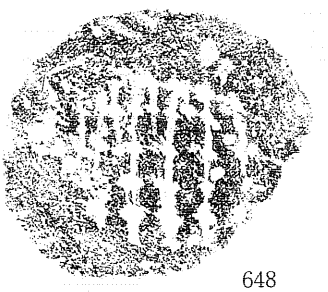

639：第Ⅱ群第１類　640：第Ⅱ群第２類　641・642：第Ⅱ群第３類
643：第Ⅲ群　644：第Ⅳ群

第133図　遺構外出土土器(48)

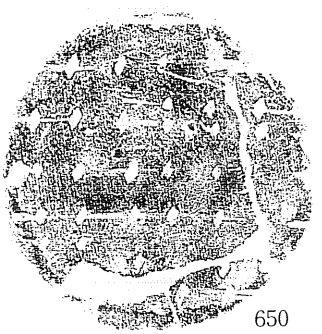

645

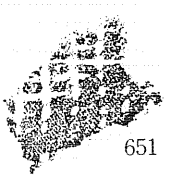

646


647

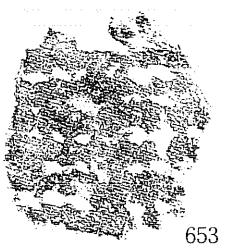

648

649


650


651

652


653

654

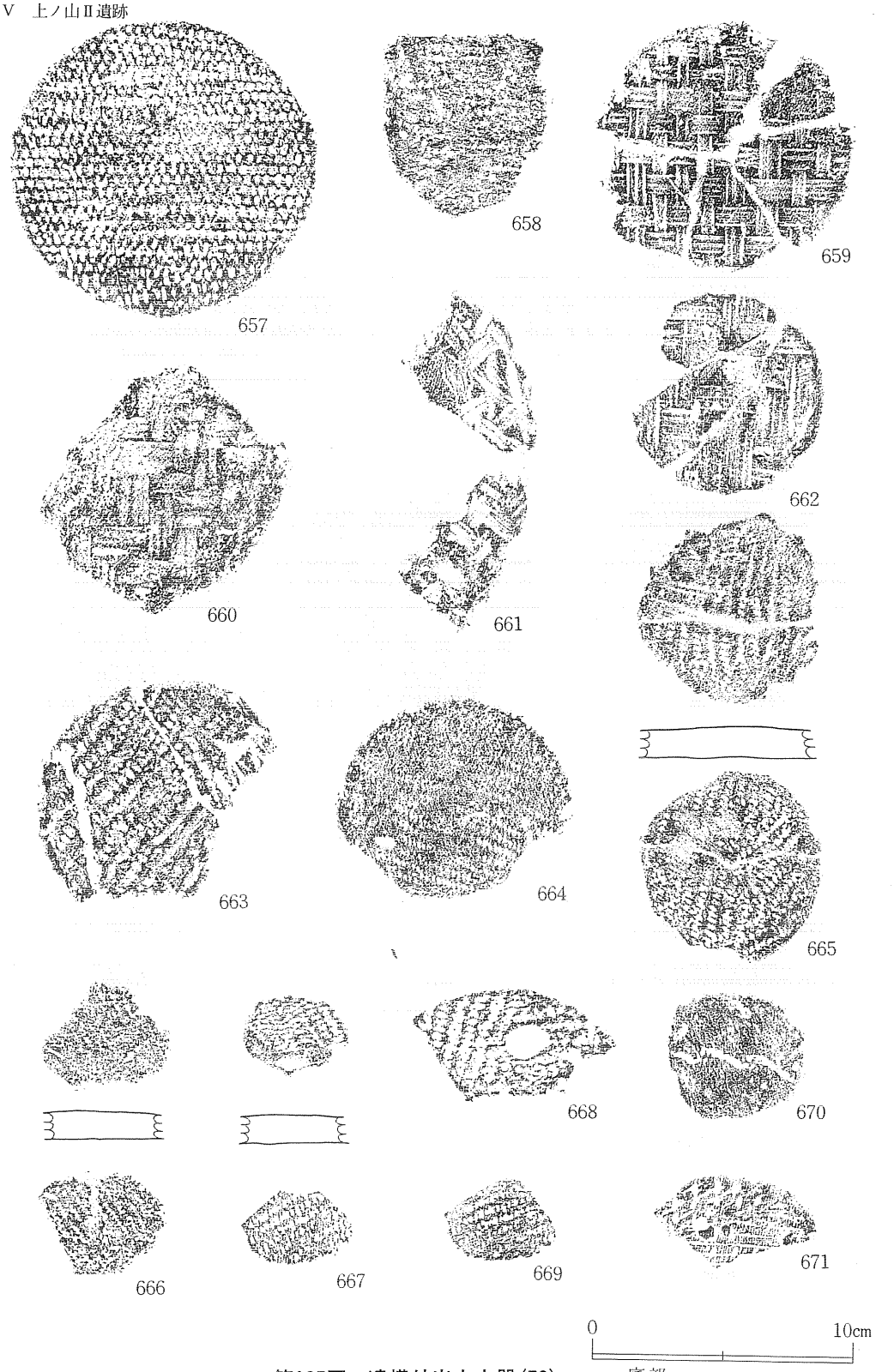
655

656

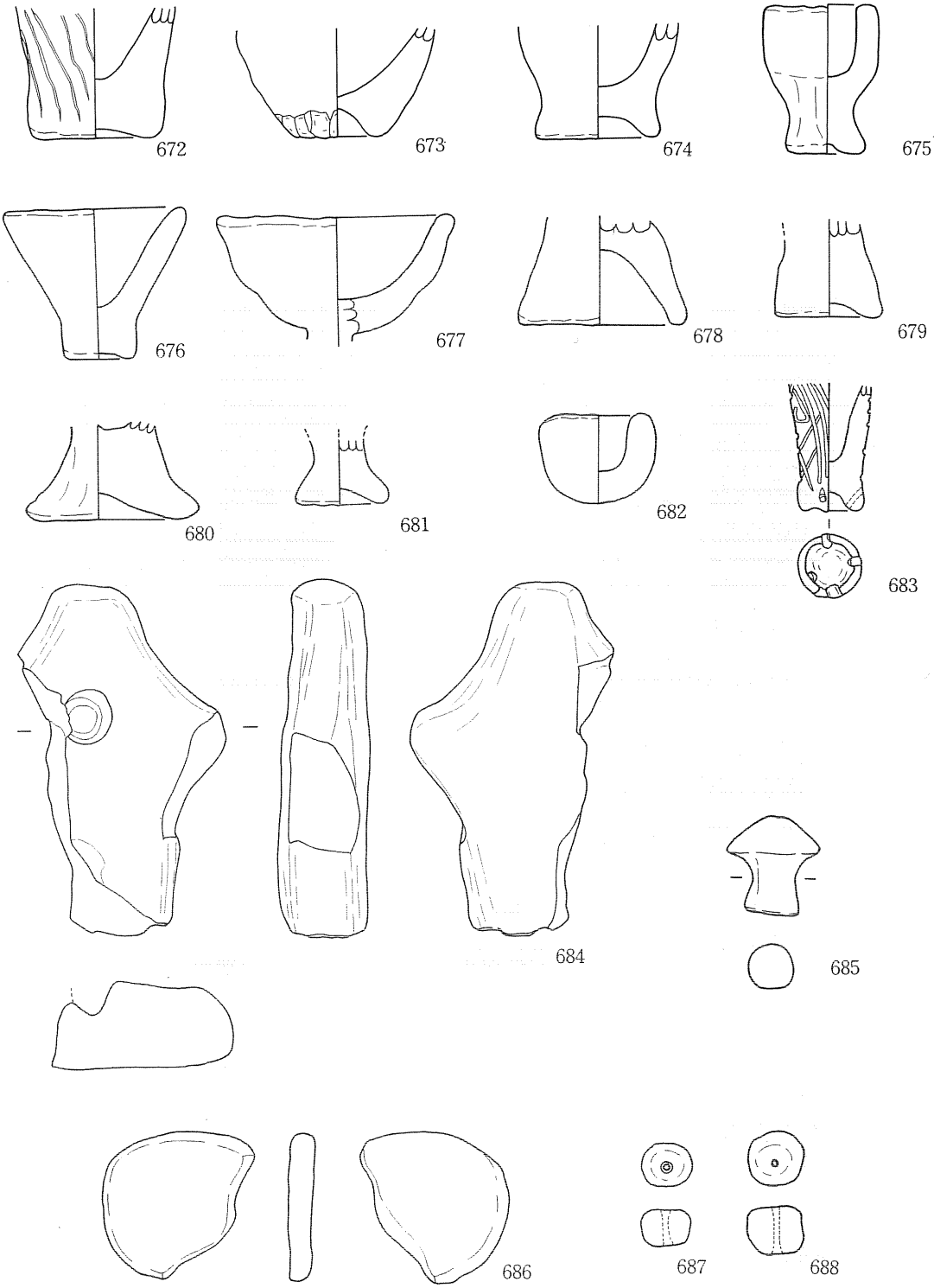
0　10cm

底部

第134図　遺構外出土土器(49)

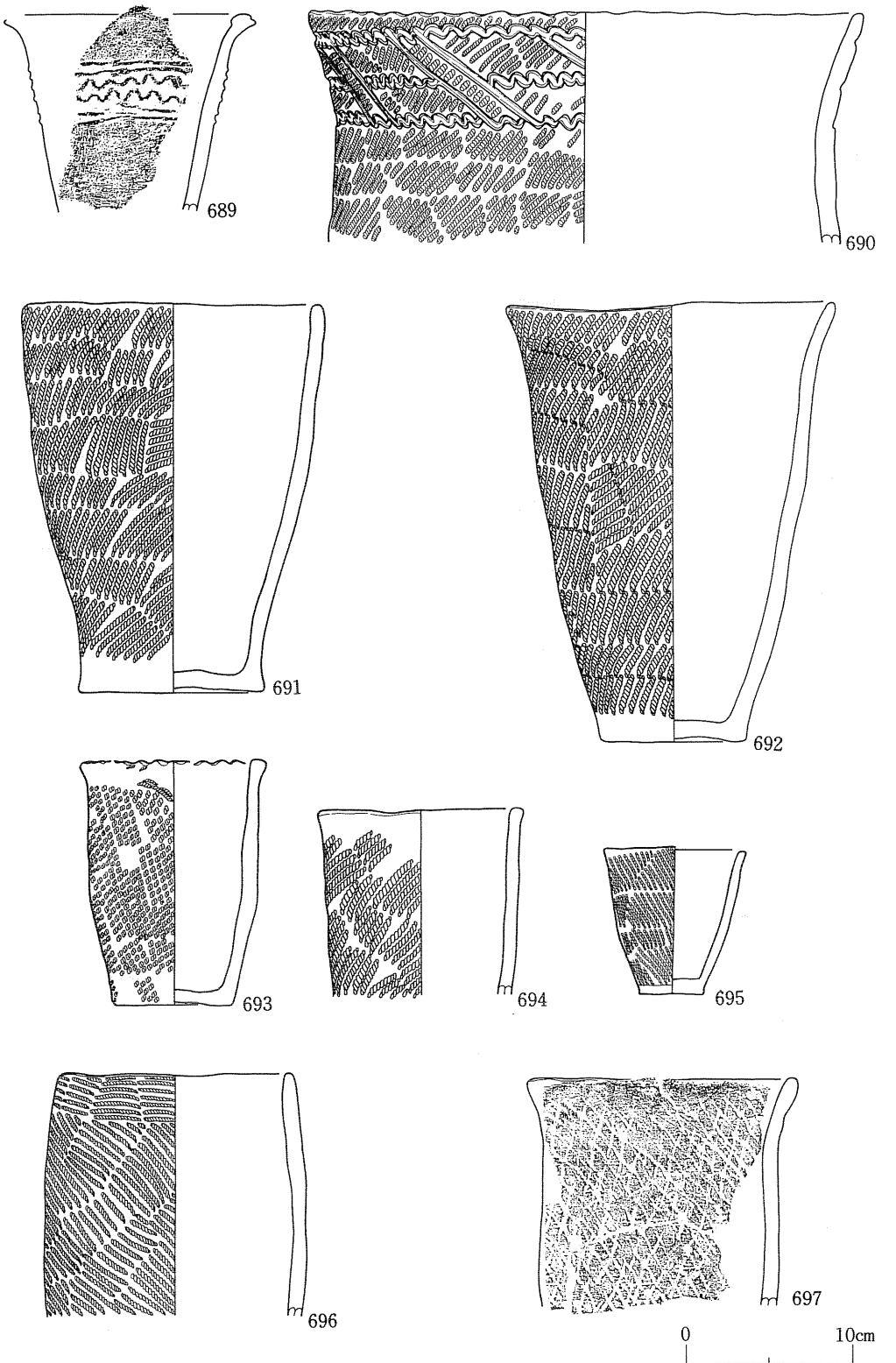



第135図　遺構外出土土器(50)

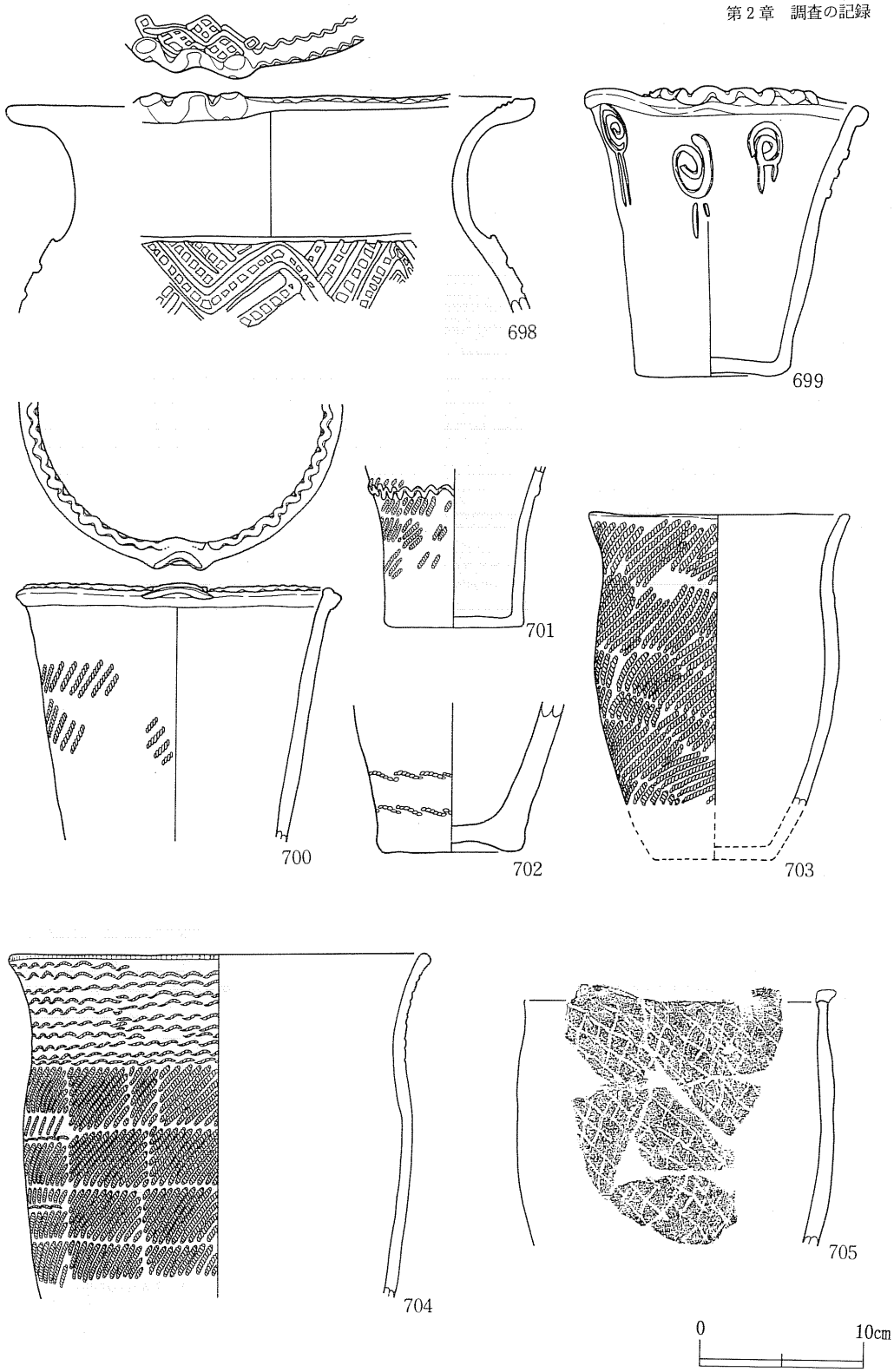



672～683：小型土器　684：土偶
685：きのこ形土製品　686：板状土製品
687・688　：土製小玉

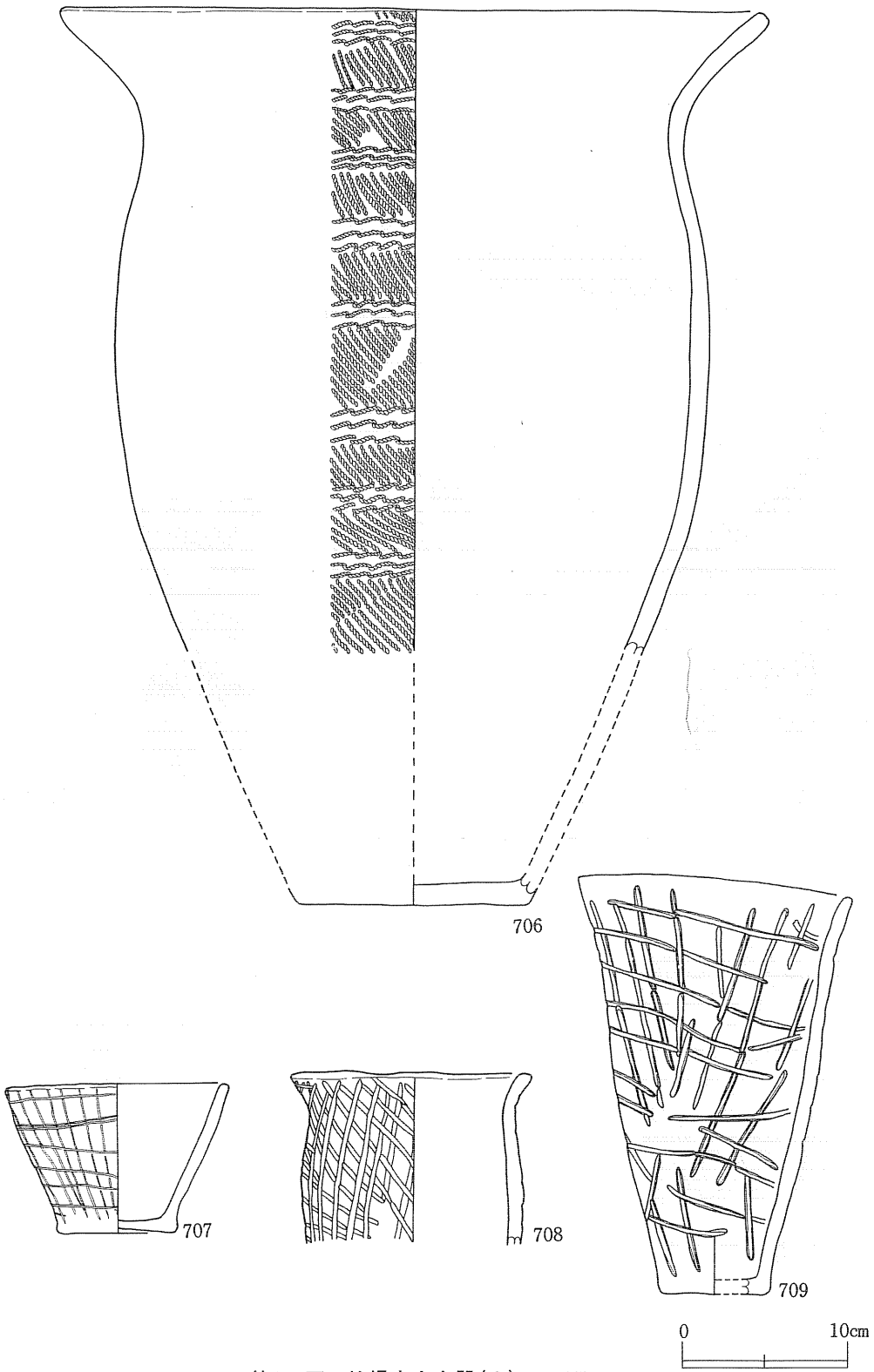
第136図　遺構外出土土器・土製品



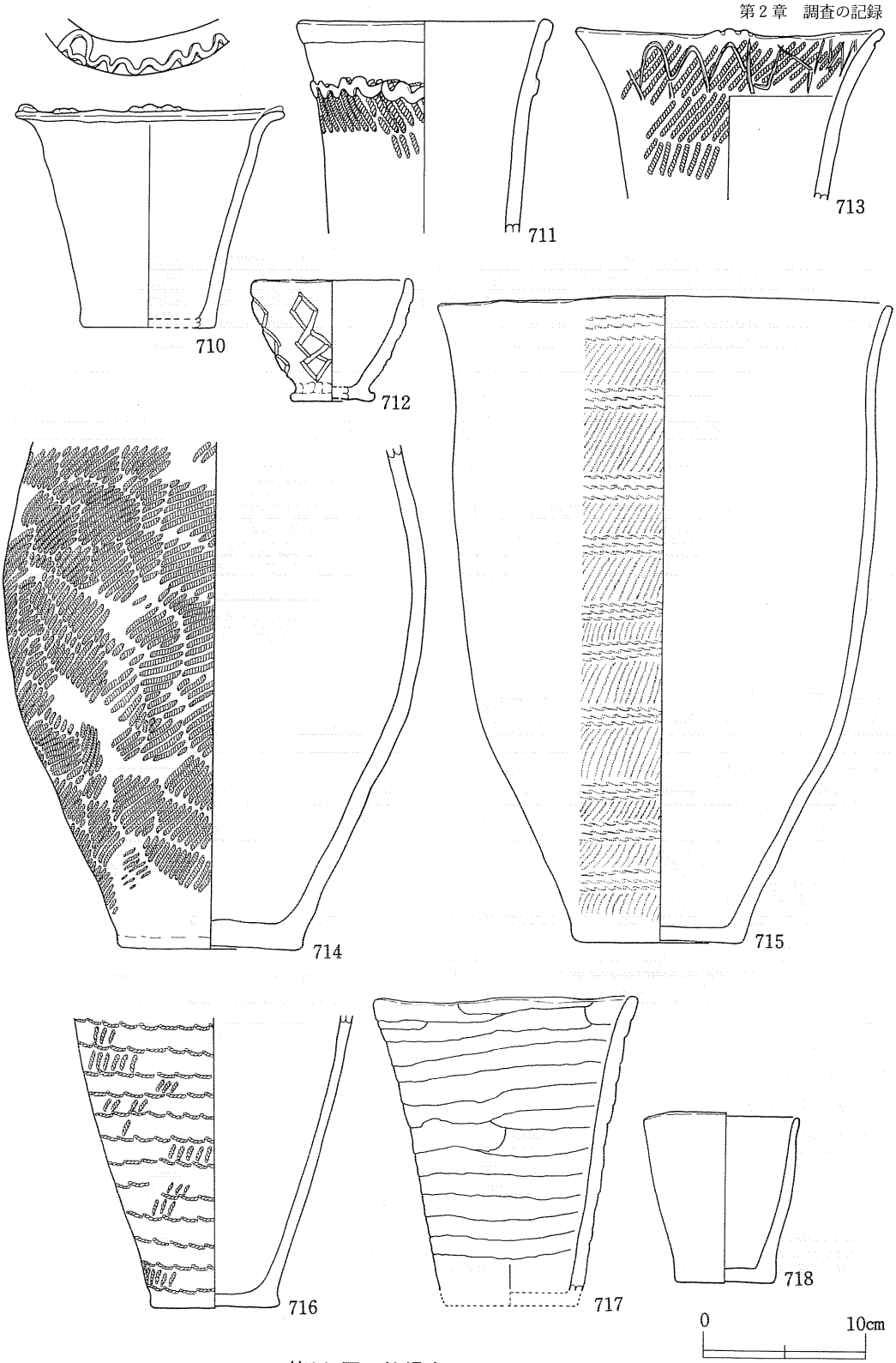

第137図　捨場出土土器（1）　1回目



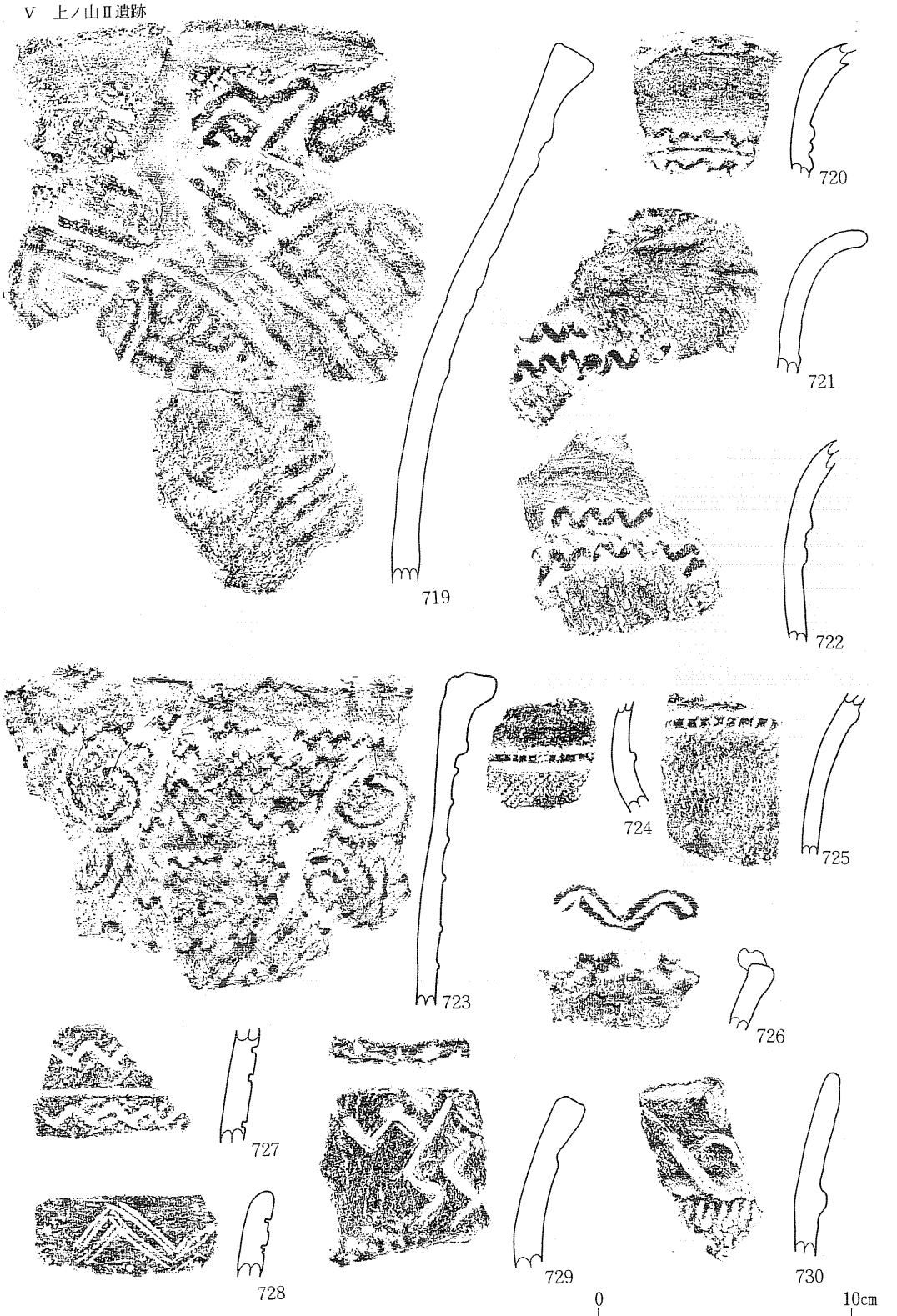

第138図　捨場出土土器（２）　２回目



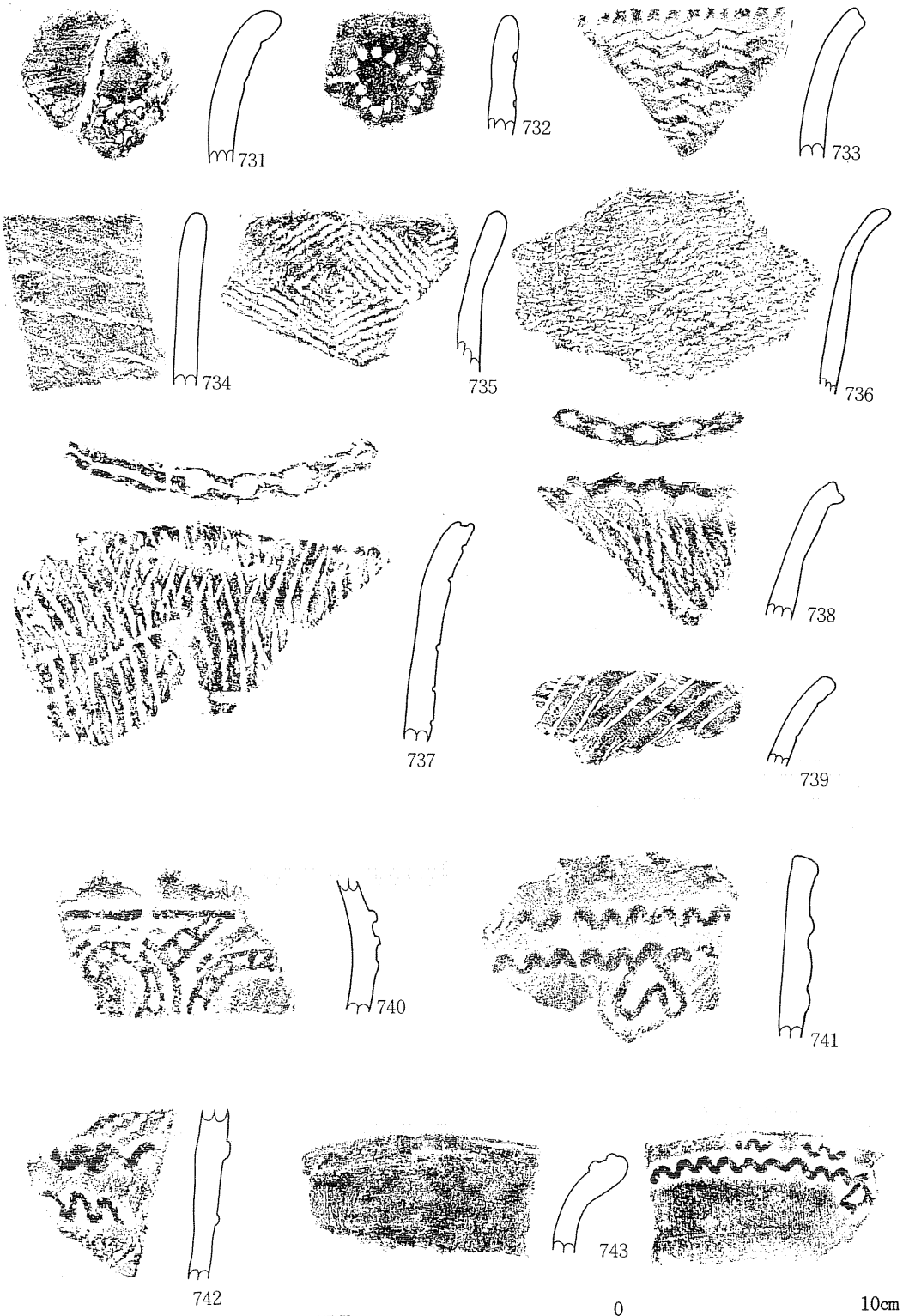

第139図　捨場出土土器（3）　2回目




第140図　捨場出土土器(4)　3回目

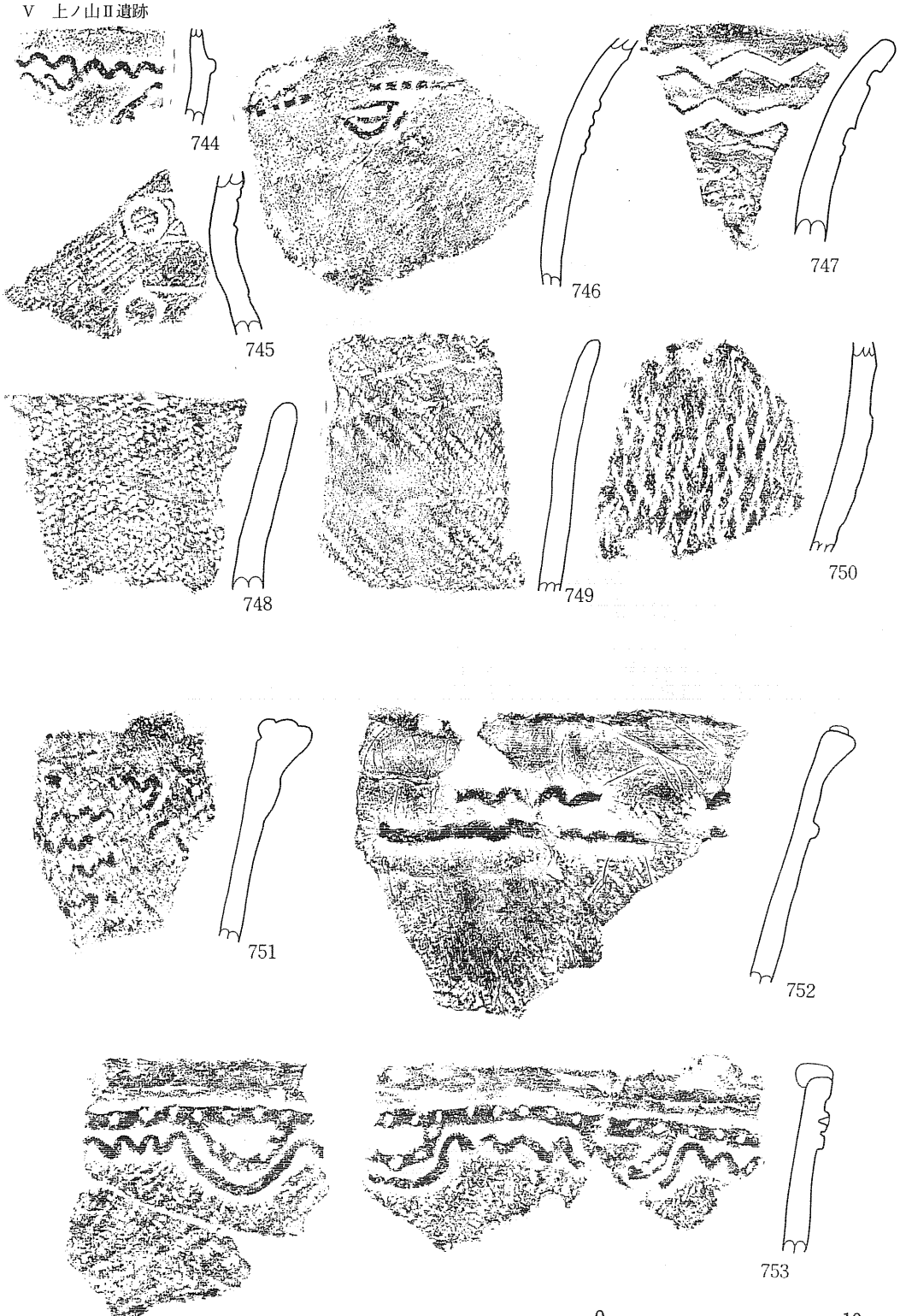



第141図　捨場出土土器（5）　1回目




731～739：1回目　740～743：2回目

第142図　捨場出土土器（6）




744～750：２回目　751～753：３回目

第143図　捨場出土土器（７）

## 3　石器

遺構外から出土した石器・石製品は総数で約13,000点にも上る。これらの石器・石製品は伴出した土器などから、大半は縄文時代前期中葉～後葉のものと見られる。これらの石器・石製品の出土した位置（発掘時に定形的な石器・石製品として確認できたものはRQ番号を付してその平面的な位置を記録したが、これの出来なかったものはグリッド毎に取り上げている）は、大部分、捨場あるいは竪穴住居跡等の遺構周辺であるが、各石器のグリッド毎の分布図と遺構配置図を重ねてみると、明らかに遺構上面から出土しているものも認められる。そしてそれらの中には竪穴住居跡などの覆土中に含まれていたと考えられるものも多い。しかしここでは、それらのものについても遺構外から出土した石器・石製品として一括して扱っている。

約13,000点の石器・石製品は、素材（石材）・製作方法・考えられる機能などによって、3大別される。それは、（1）主として頁岩などを素材とする剝片石器類、（2）主として安山岩・凝灰岩・花崗岩などを素材とする礫石器類、（3）緑色凝灰岩・粘板岩などを素材とする石器・石製品類、である。（1）は剝片のほぼ全体に剝離調整を施したもの、（2）は礫の全体あるいは一部に剝離調整を施したもの、（3）は原材の分割後に（一部剝離調整を加え）主に研磨による調整を施したものである。

出土した石器・石製品の3大別は上記のとおりであるが、以下これらについて説明するにあたり、ここでは（2）に含まれる打製石斧と（3）に含まれる磨製石斧については、便宜的に（1）の項に含めることにする。

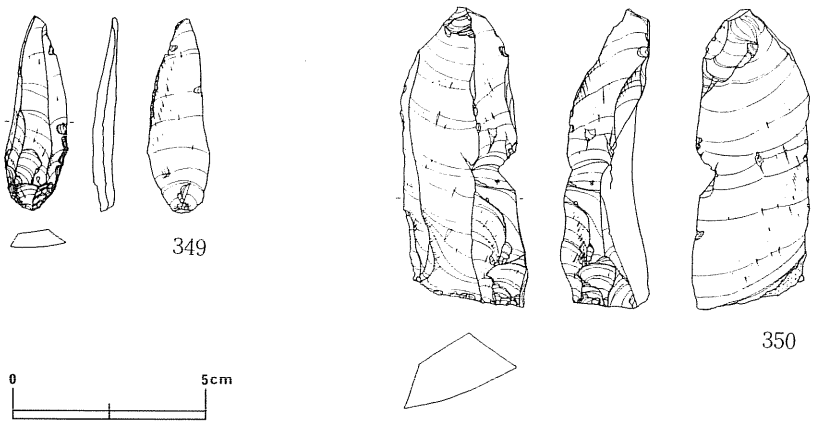
なお、各石器・石製品の中でいくつかの器種別に分類したが、それらの中には厳密にはどちらの器種に含めるべきか判然としないものもある。また、各器種毎の点数があまりにも多いために、実測図等で図示できたものは、同一器種・あるいはその細分種のごく一部にすぎない。

### （1）　剝片石器・石斧類

出土した定形的な剝片石器・石斧類は、6,407点に達するが、これ以外に剝片類が多量に出土している。それらの剝片類は主に捨場から出土したものであるが、それ以外の場所では、剝片が一箇所に集中して出土するという傾向はほとんど見られなかった。石材の大部分は頁岩であるが、この他には鉄石英・黒耀石・玉髄などがある。頁岩以外の石材を素材とする石器は各器種中に数点ずつあり、ある特定の器種に集中することはない。

定形的な剝片石器は、ナイフ形石器・有舌尖頭器・石鏃・尖頭器・尖頭器様石器・石錐・有撮石器・石匙・篦状石器・削器・掻器・鋸歯縁石器・円形石器・楕円形石器・握槌様石器・敲石・ピエスエスキーユ・石錘形石器・帽子形石器・彫刻刀形石器・異形石器の21器種、石斧類は磨製石斧・打製石斧の2器種である。

**ナイフ形石器**（第144図349）　旧石器時代のナイフ形石器が1点出土している。平坦打面の




**第144図　遺構外出土石器（1）　ナイフ形石器**

小型石刃を素材とし、背面基部周縁と、主要剥離面の先端と一方の側縁の一部にわずかな二次調整を施したものである。第144図350はこれと同期と考えられる石核である。上・下面に平坦打面を持つ。

**有舌尖頭器**　縄文時代草創期のものと考えられる2種類の有舌尖頭器が出土している。

A＝（第162図351～354）　基部にわずかな返しを持つものである。二次調整のあり方は、剥片のほぼ全面に調整が及ぶもの（352・353）と、縁辺にしか施されないもの（351・354）がある。

B＝（第162図355）　長身で、基部に逆三角形状の舌部が付く形のものと思われる。尖頭部と基部を欠く。身部は表裏面ともに流麗な押圧剥離が施され、残存する身部最大幅が16㎜あるのに対し、厚さは2㎜しかない。チャート製である。

**石鏃**　原則として、弓矢の矢の先端に付けて用いた石器と考えられる。偏平で左右対称、尖頭部とそれよりも幅広い基部を有する。基部の形状によって大きくA、B、C、Dの4つに大別され、さらにそれぞれが細分される。破損したものも含めて978点が出土している。

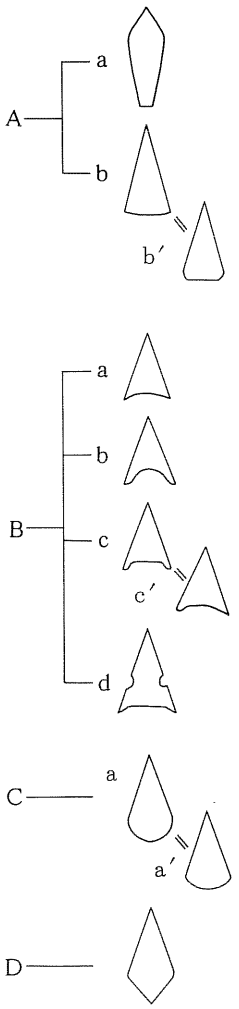
A＝平基無茎鏃：全体の形状によって2種類に細分される。

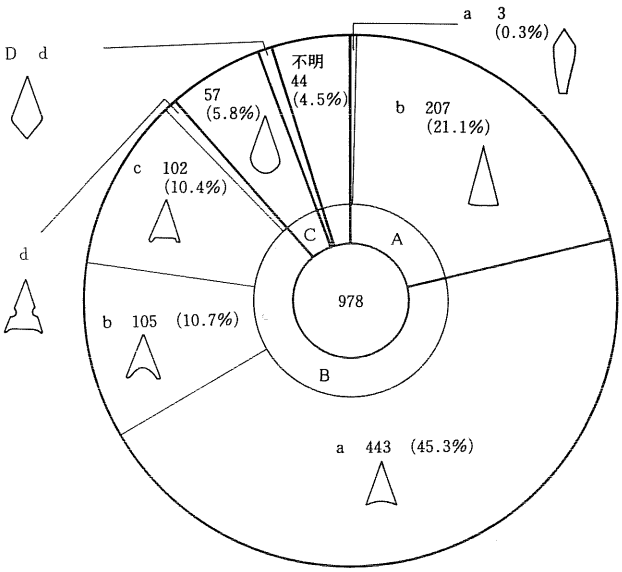
A—a:（第162図356）　両側辺が並行するか基部側に向かってすぼまる形状のものである。出土した点数は3点と少ない。

A—b:（第162図357～359）　平面形が二等辺三角形を呈し、基部両端が角張るものが主体であるが、360のように丸みを持つもの（b′）もある。207点と多い。

B＝凹基無茎鏃：基部の形状などによって4種類に細分される。本遺跡の石鏃の中にあっては主体を占める。

B—a:（第162図361～367）　凹基ではあるが、凹み部分の弧の半径が、石器の最大幅より




**第145図　石鏃分類模式図と出土百分率**

も大きい。従って凹みは深くない。443点出土しており、上ノ山Ⅱ遺跡での石鏃の中では最も多い。

B—b：（第163図368～371）　凹基の凹み部分の弧の半径が、石器の最大幅よりも小さく、B—a類にくらべ凹みが深い。

B—c：（第163図372～375）　B—a類の基部の凹みが弧とならず直線的になるもので、平面形とすれば、基部両端が下方に突き出したような形になる。中には基部両端の突き出しが一方にしか見られないもの（c′）もあり、B—a類との区別が困難なものもあった。

B—d：（第163図376・377）　基本的には、B—c類の両側辺基部近くに抉りの入る類である。8点と少ない出土であるが、非常に特徴があり、しかも形態的にしっかりしている。

C＝円基鏃（第163図378～380）　全体の形状が水滴形あるいは「なみだマーク」形を呈する。基部がより円弧に近いもの（a）と、ゆるい弧になるもの（a′）があり、量的にはa′の方が多い。

D＝尖基鏃（第163図381）　完形品はないので詳細は不明であるが、基端が尖るものであろう。9点と少ない。石錐の中に平面形では似ているものがあるが、その場合は縁辺の調整が急斜度であるために石錐にした。

この他石鏃の中には、いずれかの部分（特に基部）が欠損しており、分類できなかったものが44点ある。

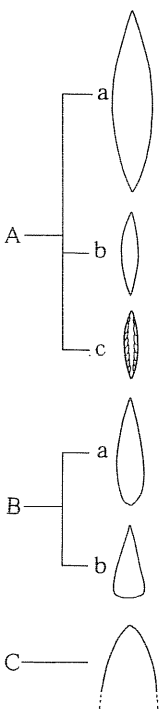
**尖頭器**　槍先形の石器である。基本的には、偏平縦長で一方の先端に鋭い尖頭部を持つ。次項の尖頭器様石器とは二次調整の細かさなどの点、箆状石器の一部のものとは先端部の違いなどによって区別したが、破損品や近似したものになると、分別が困難である。全体の形状や調整のあり方によって4つに大別される。破損品も含めて123点出土している。

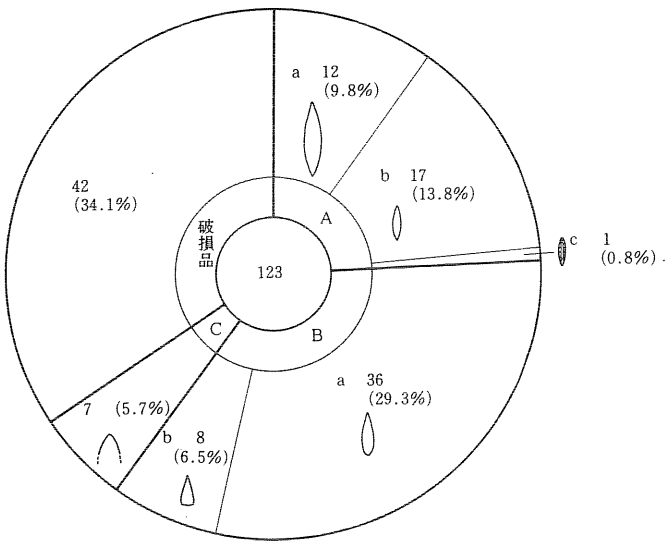
A＝尖頭部・基部ともに尖る類である。大型のものと小型のものがある。

A—a：（第164図382～384）　石器の長さがおよそ14㎝以上の大型のものである。表裏ともにていねいな押圧剝離が加えられ、断面形は薄い凸レンズ状を呈する。382・383のように、両側縁下部にごく浅い抉りが入って、基部側を識別できるものもある。

A—b：（第164図385・386）　石器の長さがおよそ12㎝以下で、a類よりは小型のものである。両面調整されて、加工はほぼ全面に及ぶが、断面形はa類よりも厚みのある凸レンズ状を呈する。385・386のように基部側のわかるものもある。

A—c：（第165図387）　1点のみの出土であるが、うすい縦長剝片を素材としており、二次調整が側縁にしか施されていないものである。




第146図　尖頭器分類模式図と出土百分率

B＝A類が尖頭部・基部ともに尖るのに対し、基部が丸味を持つ類である。A類に比べ二次調整が丁寧でない。基部の丸みの具合で2つに分けられる。

B—a：（第165図388・389）　基部の丸味の小さいものである。断面形は厚味のある凸レンズ状を呈する。上ノ山Ⅱ遺跡出土の尖頭器の中では36点と最も多い。389の器中央部から尖頭部側の中軸線周辺の稜やリングなどが潰れるくらい摩滅しており、その部分に光沢がある。この部分の顕微鏡観察では、石匙などに見られるポリッシュと同じ光沢面で、その中に中軸線に平行する線状痕が見える。

B—b：（第165図390）　両側縁が基部側ほど膨らむものである。

C＝（第166図393）　大型で幅広の尖頭器と考えられるが、完形品がないので、全体の形状はわからない。

**尖頭器様石器**　尖頭器の仲間の一つと考えられるが、二次調整のあり方が尖頭器よりも粗いため、一応、尖頭器様石器として扱った。二次調整のあり方で3類に大別される。36点出土している。

A＝両面調整のもので、大型と小型がある。

A—a：（第165図392）　大型のもので、両端が尖るが、調整が粗く、断面形が菱形となる。

A—b：小型のもので、断面形はやはり菱形か厚みのある凸レンズ状を呈する。

B＝半両面調整のもので、断面形が板カマボコ状を呈する。

B—a：（第165図391）　表面は両側縁からの調整が急斜度で施されるが、裏面は全面が平坦剝離のものである。

B—b：形状はB—aに似るが、裏面の調整が尖頭部側周辺に集中し、この部分が断面三角形を呈する。

B—c：B—a・bに比べ、全体に幅広で断面形も厚みのない板カマボコ状を呈する。基部裏面にも角度のある丁寧な調整の施されるものもある。

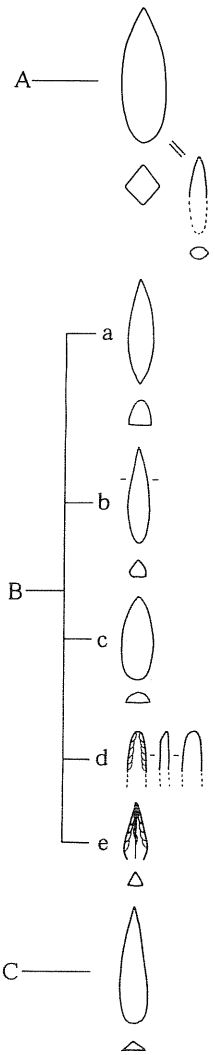
B—d：二次調整が表裏面ともに素材の縁辺にしか及ばないものである。細長く、断面形は高さの少ない三角形を呈し、先端部はあまり尖らない。

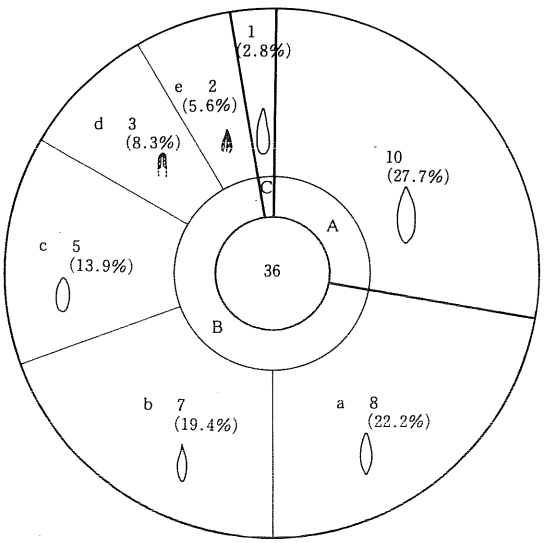
B—e：断面が三角形に近い剝片の2～3つの稜から調整を加えて、鋭い尖頭部を作出したものである。

C＝平面形は尖頭器B—a類に似ているが、裏面の調整が全く施されないものである。断面形は高さの少ない三角形を呈する。

**石錐**　断面が菱形・三角形・凸レンズ状の尖頭部を持つ石器である。石製の錐（ドリル）と考えられる。全体の形状、二次調整の部位によって4大別される。225点出土している。

A＝（第166図394・395）　表裏全面に調整が及び、一方の先端に鋭い錐部、その反対側につ




**第147図　尖頭器様石器分類模式図と出土百分率**

まみ部が作出されたものである。全体の形状がスマートなもの（394）と、ややずんぐりしているもの（395）がある。

B＝（第166図396・397）　全体の形状が棒状のものである。断面形は菱形を呈するものが多い。両端のうち、どちらが錐部なのか判然としないものもあるが、大部分は396・397のように錐部側がわずかに細く尖る。

C＝（第166図398・399）　小型で厚手の剝片の両先端を尖らせたものである。器最大厚が器最大幅の1／2以上あるものが多い。急斜度ながら両面調整の施されているもの（398）と、小さな剝片を切断するように両側縁に一方の面から直角に近い調整を加えたもの（399）がある。平面形の上では尖基石鏃との区別がつきにくいものもある。

D＝あまり形の整っていない多角形の剝片の2～3辺に二次調整を加えて、比較的鋭い錐部を作出したものである。全体の形状や錐部の大きさ等によって3細分できる。

D—a：（第166図401）　厚手の小剝片の一端に小さいが鋭い錐部を作出したものである。錐部は、少しねじれている。

D—b：（第166図400）　二等辺三角形状の剝片の2～3辺に二次調整を施したものである。器全体は比較的うす手であるが、錐部の断面形は菱形を呈する。

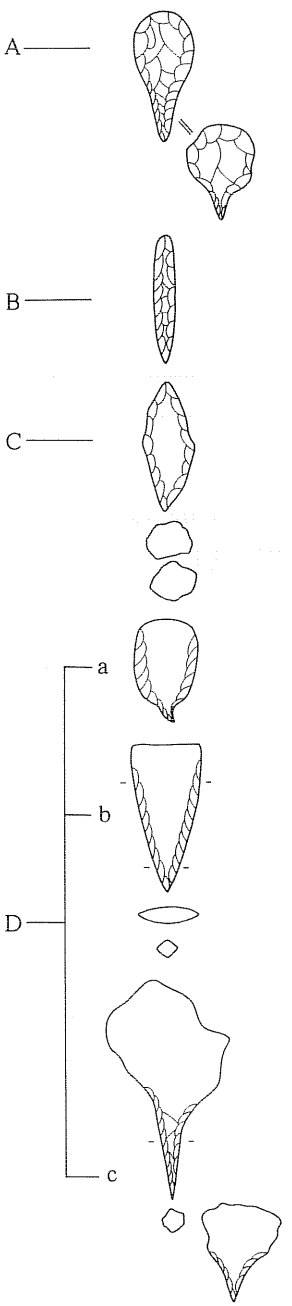
D—c：（第 166 図 402）　一端が細くなる剝片の両側辺にのみ二次調整を施して錐部としたものである。錐部の断面は五角形以上の正多角形に近いか、菱形を呈する。器最大長が６cm以上のものから２cmくらいまである。

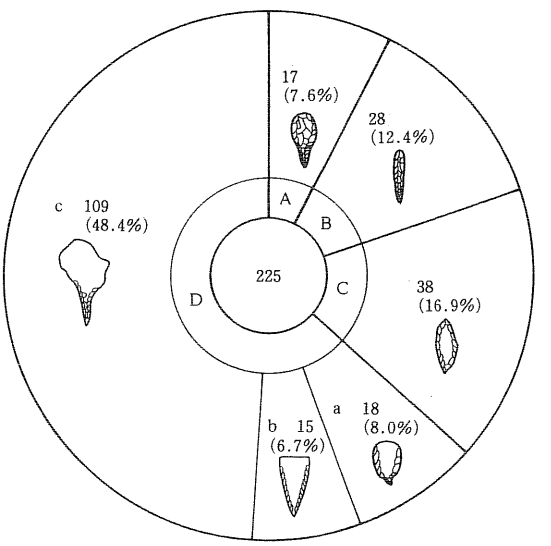
**有撮石器**　石匙のつまみ（撮）と同様の作り方をしたつまみを有するが、両面あるいは半両面調整を主体とし、器中軸線で左右対称となる石器である。器中央部の断面形は強・弱の凸レンズ状・三角形・菱形などを呈する。139 点出土している。全体の形状、二次調整のあり方によって２大別される。

A＝尖頭器の基部側につまみの付いた形のものである。断面形がうすい凸レンズ状を呈する。形態によって３細分される。

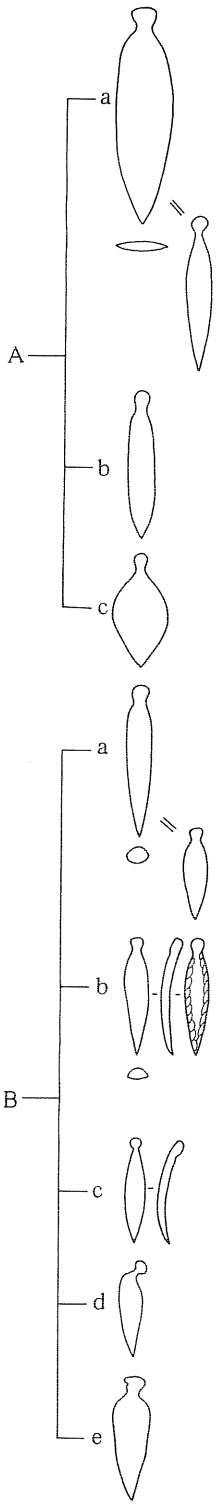
A—a：（第 167 図 403 ～ 405）　きれいな押圧剝離による両面調整が施され、器中央部に最大幅を持つ柳葉形のものである。403 のように幅広のものから、405 のように幅のせまいものまである。

A—b：（第 167 図 406）　両側縁がほぼ平行し、先端




**第148図　石錘分類模式図と出土百分率**




部で急にすぼまる形のものである。

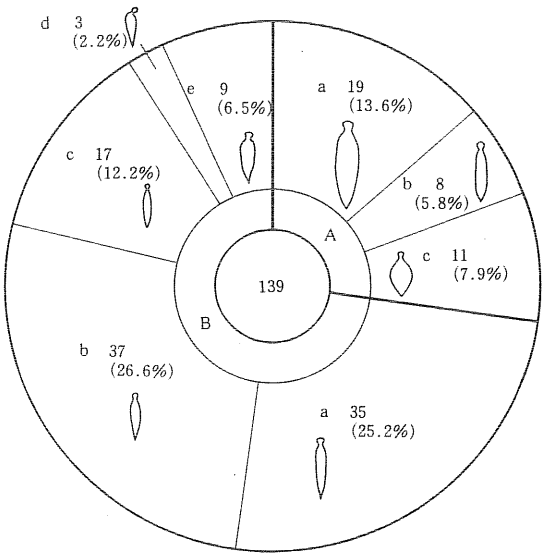
A—c：（第 167 図 407）　器最大長に対しての最大幅の比較的大きいものである。

B＝器長に比べて器幅がなく、断面形が算盤球状を呈する類である。つまみ幅が器中央部の幅よりも大きいものもあり、形態と素材となった剝片の形状などによって 5 細分できる。

B—a：（第 168 図 408 ・ 409）　縦長剝片を側面から見た場合に、ほぼ一直線で曲がらない素材を使用したものである。表裏両面の全面に急斜度の二次調整が及び、断面形が算盤球状か菱形を呈する。器中央部から尖頭部にかけてポリッシュの見えるものが多い。

B—b：（第 168 図 410）　器表面観は形の整った左右対称形をなすが、側面から見ると直線的ではなく、裏面に主要剝離面を残すものが多い。器中央部から尖頭部にかけてポリッシュの見られるものが多い。

B—c：（第 168 図 411）　基本的には B—b 類と同じであるが、主要剝離面の反りが大きい縦長剝片を素材としているため、側




第149図　有撮石器分類模式図と出土百分率

面観は弓なりになっている。

B—d：（第168図412）　つまみ部の中軸線が器中軸線と一致しないものである。

B—e：（第168図413）　他の有撮石器に比べ全体の形状が整っていないもので、厚手の器中央部から急にすぼまって錐状の尖端部が付く。

**石匙**　両側縁から抉りを入れて、つまみ部を作出し、片面からの加撃によって刃部が作られた石器である。器中軸線あるいは刃部と、つまみの中軸線の交わる角度によって大きく3大別される。破損品も含めるて2,507点出土しており、上ノ山Ⅱ遺跡の中で最も多い器種の1つである。なお、以下の記述にあたっては、二次調整が組織的に施されている側を表面とする。主に裏面に、顕著なポリッシュのあるものが多く、1つの側縁のつまみ部に近い部分が摩滅しているものもある。

A＝縦型石匙　つまみ部の中軸線にほぼ平行する刃部（直線的であったり曲線であったりする。）を持つものである。破損品を含めると1,737点あり、石匙全体の69.3%を占める。つまみ部の中軸線と刃部とのあり方で3大別され、それがさらに細分できる。

A—a：つまみ部の中軸線にほぼ平行する直線的な1～2の刃部を持つものである。

A—a—1：（第168図414・415、第169図416～419）　器表面の右側縁に直線的な刃部を持つものである。製作方法の問題ではあるが、417のように直線的な刃部のうちの一側縁裏面に、急斜度の調整面を作出した後に、これを打面として表面側にていねいな押圧剥離を加たものは少ない。

A—a—2：（第169図420～422、第170図423）　器表面の左側縁に直線的な刃部を持つものである。422は数少ない黒耀石製の石匙である。

A—a—3：（第170図424・425）　ほぼ平行する直線的な2つの側縁を持つものである。

A—a—4：（第170図426・427）　つまみ部から先端側に末広がりの直線的な2側縁を持つものである。

A—b：つまみ部の中軸線に平行する刃部を持たないもののうち、極端に刃部が内湾したりしないものである。

A—b—1：（第170図428、第171図429・430）　基本的には、器中軸線に対して外側にふくらむ左右対称な2側縁を持つものである。

| A　1,737　(69.3%) | B　383<br>(15.3%) | C　387<br>(15.4%) |
|---|---|---|

第150図　縦型・斜型・横型石匙の比率

A—b—2：（第171図431～433）　2側縁が外側に大きくふくらみ、全体の形状としては広葉樹の葉に似ているものである。

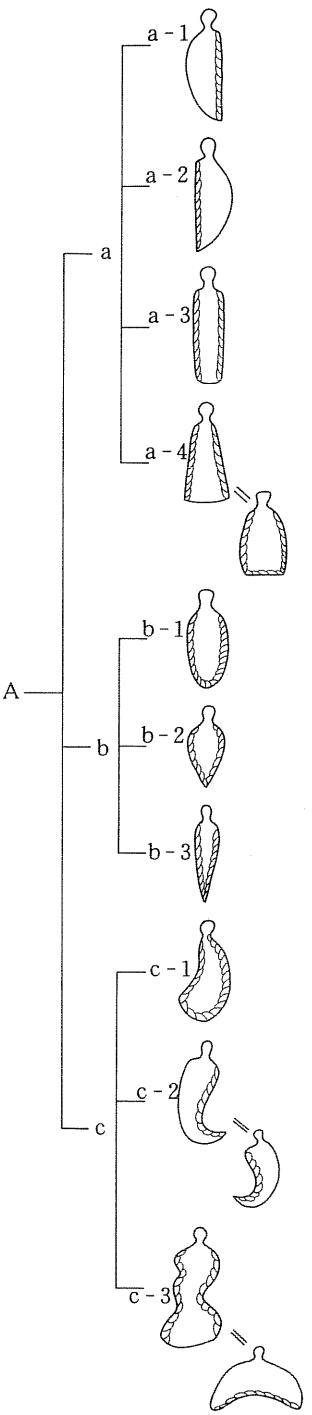
A—b—3：（第171図434、第172図435・436）　2側縁が先端部で尖るもので、434・435のように先端部の裏面にも調整が加えられ、この部分が錐状を呈するものである。

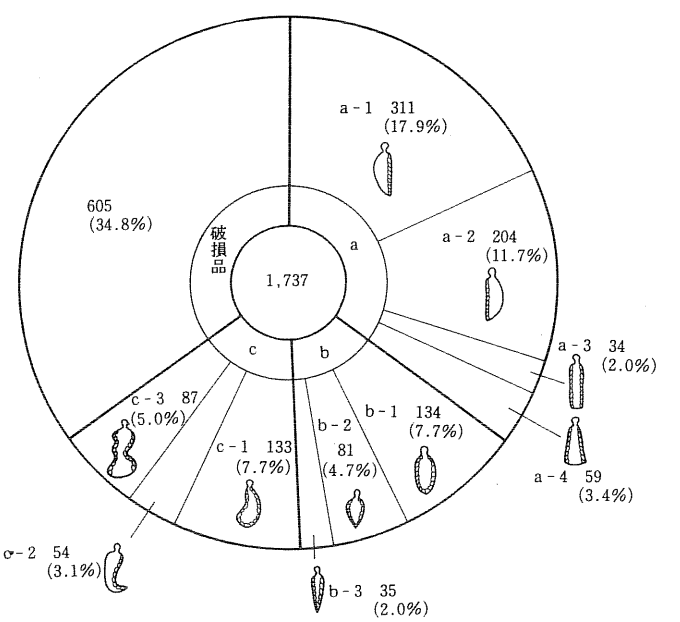
A—c：つまみ部を除く側縁が曲線を描き、器中軸線に対して左右対称にならないものをこの類とする。

A—c—1：（第172図437～439）　側縁がゆるい勾配の曲線を描くものである。437は上の山Ⅱ遺跡の石匙中、最大のものの1つで、器中央部両面ともにポリッシュが顕著である。表面左側上半は摩耗が激しいためにトロトロで、稜やリングがぼやけているし、側縁が鋭いエッジとならず丸くなっている。

A—c—2：（第172図440）　2側辺が同方向に曲がり全体の形状が「し」の字になるものである。先端の尖るものが多い。

A—c—3：（第172図441、第173図442・443）　側辺の中に抉状の部分をもつものである。




第151図　縦型石匙分類模式図と出土百分率

B＝斜型石匙　　2～3つの側辺の中で最も長い側辺の中心と、つまみ部の中軸線とが約45°で交わる石匙である。約45°で交わる角度が器表側の右側にあるか、左側にあるかで2細分される。

B—a：（第173図444～447）　約45°で交わる角度が器表側の右側にあるものである。つまみ部中軸線と交わる側辺が弧状をなすもの（444）と、直線的なもの（446・447）と、その中間的なもの（445）がある。また、2側辺が交わる先端が尖るもの（445・447）と、丸味を持つもの（444・446）がある。

B—b：（第174図448～451）　器裏側から見るとB—a類とほぼ同じ形状をなすものである。

C＝横型石匙　　最も長い側辺と、つまみ部の中軸線とがほぼ直角に交わる石匙である。側辺の形状、つまみ部の位置などによって細分される。

C—a：全体の形状がつまみ部を頂点にして見た場合、略二等辺三角形を呈する類である。この場合の底辺にあたる側辺は直線的なものや、ゆるい弧を描くものである。

C—a—1：（第174図452）　2側辺の交わる部分が鋭く尖っているものである。

C—a—2：（第175図453・454）　2側辺の交わる部分が弧状になるものである。

C—a—3：（第175図455）　最も長い側辺と他の側辺とが約90°で交わるものである。

C—b：C—a類以外の横型石匙である。

C—b—1：（第175図456・457）　つまみ部の位置が器中軸線からずれているものである。

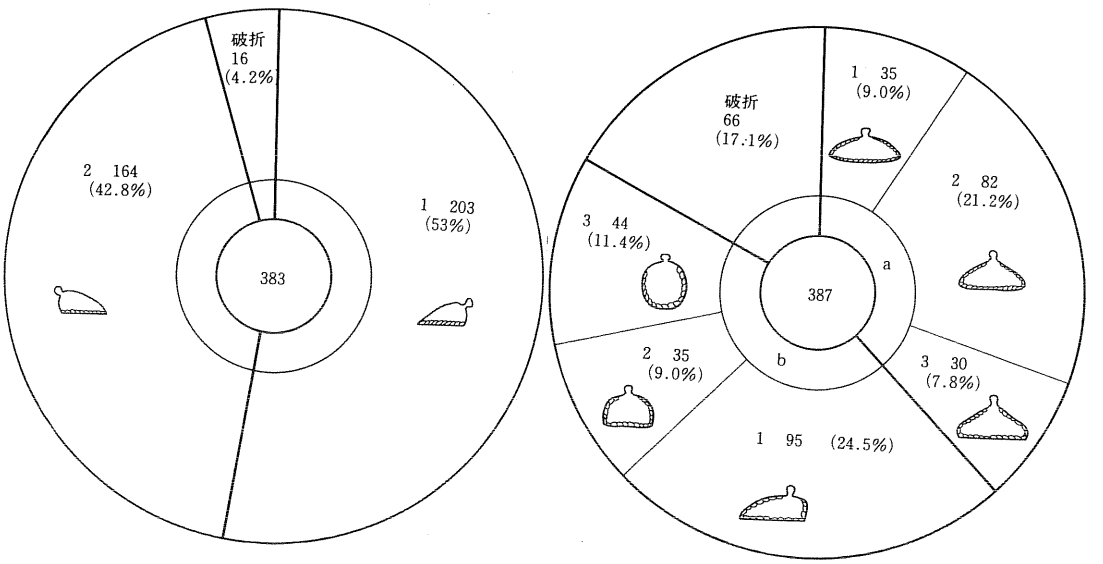
C—b—2：（第176図458）　器の縦と横の長さがほぼ同じで、つまみ部と相対する側辺が直線的なものである。

C—b—3：（第176図459）　器の縦と横の長さがほぼ同じ石匙の中でC—b—2に含まれないものである。円形の石器につまみ部が付いた形状を呈する。

**箆状石器**　　平面形が撥形あるいは短冊形・長方形・小判形等の各種のいわゆる“ヘラ”状を呈し、一端に刃部が作出された石器である。器中軸線で左右対称となり、断面形は凸レンズ状あるいは板カマボコ状を呈する。1,023点出土している。4類に大別され、それぞれがさらに細分されるが、それは以下の順序で行った。

①平面形状、②細部の形状、③二次調整のあり方、④刃部の平面形状、⑤刃部の側面観で、このうち③・④・⑤については各類に共通する。③の場合は両面調整・半両面調整・片面調整、④の場合は丸刃・直刃・丸のみ形、⑤の場合両刃、片刃が基準となり、この組み合わせで細々分される。また、各類中で共通することは、以下のことである。両面調整と半両面調整が相半ばして、片面調整は少ない。丸刃が圧倒的に多く、丸のみ形はごく少ない。両刃のものよりも片刃のものの方が多数を占める。

なお、各部分の名称と刃の種類は磨製石斧にならうものとした。




**第152図　斜型・横型石匙の出土百分率**

A＝平面形が、基部側よりも刃部側で幅広のものである。

A—a：（第176図460～463、第177図464～467）　平面形が撥形を呈する類で、458点と全篦状石器の約半数を占める。460は両面調整・丸刃・両刃、461・462は両面調整・丸刃・片刃、463は両面調整・直刃・片刃、464～466は半両面調整・丸刃・片刃、467は片面調整・丸刃・片刃である。

A—b：（第177図468・469）　A—a類が基端に辺あるいは弧を持つのに対し、基端の尖るものである。469は両面調整・丸刃・片刃、468は半両面調整・直刃・片刃である。

B＝両側縁が平行する類である。

B—a：（第178図470）　平面形が長方形を呈する。平面形が長方形を呈する類は後述のD類もそうであるが、D類は二次調整のあり方が特殊なので独立させてある。470は半両面・直刃・片刃である。

B—b：（第178図471）　平面形が隅丸長方形を呈する。471は両面調整・丸刃・片刃である。

C＝基部・刃部ともに弧を描くもので、他の類よりも器最大幅に対する器長率が大きい。

C—a：（第178図472）　平面形が長楕円形を呈する。平面形は尖頭器のようにも見えるが二次調整のあり方が尖頭器よりも粗く、尖頭器の作出もない。472は半両面調整・丸刃・片刃である。

C—b：（第178図473）　B—b類と同じく隅丸長方形とすべきかもしれないが、それに比べて非常に長いものをこの類にした。473は両面調整・丸刃・両刃である。

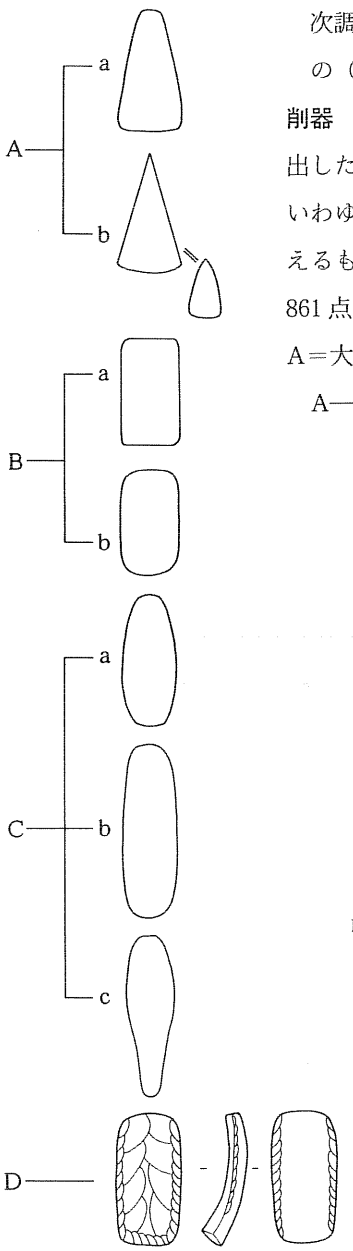
C—c：（第 178 図 474 ・ 475）　基部よりも、刃部の幅がせまいものである。基部側に比べて刃部側の調整が入念である。474 ・ 475 は両面調整・丸刃・両刃である。

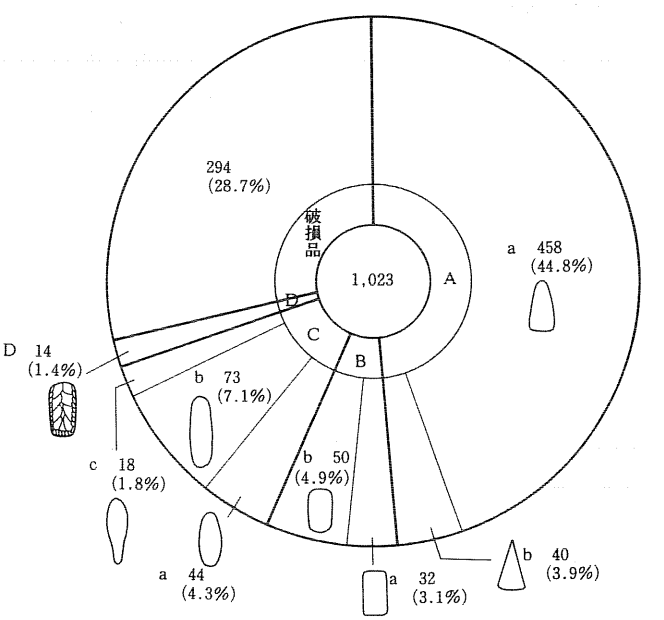
D＝（第 179 図 476 ・ 477）　基本的には平面形が長方形あるいは撥形を呈し、基部を除く各辺は表裏両面からの急斜度調整で、基部は一方の面からの調整を施した類である。他の篦状石器の側面観が直線的であるのに対し、湾曲するものが多い。二次調整は各縁辺から５㎜程度しか器内側に及ばない。直刃のもの（476）と丸刃のもの（477）があるが全て片刃である。

**削器**　　大小の剝片の側縁に連続的な二次調整によって刃部を作出した石器で、二次調整は片面からだけのものが圧倒的に多い。いわゆるサイド・スクレーパーで、表裏面ともにポリッシュの見えるものがある。刃部の形状・器の大小によって６大別される。861 点出土している。

A＝大型の剝片に内湾するか、直線的な刃部を作出した類である。

A—a：（第 179 図 478 ～ 481）　部厚い大型の剝片の１～２側縁に急斜度の調整によって刃部を作出したものである。細長い剝片（478 ～ 480）と半月形の剝片（481）の両側縁に角




第153図　篦状石器分類模式図と出土百分率

度が大きく、やや内湾する刃部を作出している。側面観は479・480のように、多少弓なりになるものが多い。

A—b:（第180図482）　細長くて部厚い剝片の両側縁に急角度の刃部を作出したものである刃部は直線的で、断面形は正三角形か台形を呈する。

B=（第180図483～485）　大型の剝片の1側縁に直線的な刃部を作出したものである。平面形状が半月形あるいは長方形に近いものが多い。

C=（第181図486・487）　比較的大型の剝片に弧状の刃部を作出したものである。刃部はA・B類に比べて角度が小さい。大部分は片面のみからの調整である（487）が、両面からのもの（486）もある。

D=（第181図488～490）　A～Cの形状で小型のものをこの類とした。一部破損したものも含めてある。

E=（第181図491）　大型の剝片に、U字形の刃部を作出したものである。

F=大型の剝片にV字形の刃部を作出したものである。

**掻器**　部厚い剝片の一端に片面調整による急斜度の刃部を作出した石器である。97点と、他の定形的な石器に比べ出土点数が少ない。裏面（大部分が主要剝離面である）が反っているか否かで2大別される。

A=裏面が反っている剝片の先端部に刃部が作出されたものである。刃部の平面形状によって3細分される。

A—a:（第182図492・493）　刃部の平面形がゆるい弧を描くものである。492は、基部が火熱を受けて火ばねしているので詳細は不明であるが、基端に彫刻刃面が作出されている可能性がある。

A—b:（第182図494）　刃部の平面形が直線的なものである。

A—c:（第182図495）　刃部の平面形が急な弧を描くものである。

B=（第182図496・497）　裏面が反らずに水平な剝片の一端に刃部を作出したものである。496は旧石器時代の掻器を想わせる。

**鋸歯縁石器**（第183図498）　比較的大きめの剝片（縦長剝片が多い）の1～2側縁に、粗い調整によって鋸歯状の刃部を作出した石器である。45点出土している。

**円形石器**（第183図499）　全体の形状が円盤状を呈する石器で、全周に粗い鋸歯状の刃部を持つ。13点出土している。499は初めに表面側に全周する調整を施した後、裏面にも同様な加撃を加えたもので、刃部の側面観も連続山形状をなす。

**楕円形石器**（第183図500）　全体の平面形状が楕円形を呈するものである。二次調整は円形石器よりも粗くなく、刃部も鋸歯状にはなっていない。10点出土している。

**握槌様石器**（第183図501）　平面形状が旧石器時代の握槌に似ている。全体に二次調整は粗い。

**敲石**（第184図502）　球状あるいは多面体状の残核などの稜に、敲打した痕跡が見られる石器である。11点出土している。

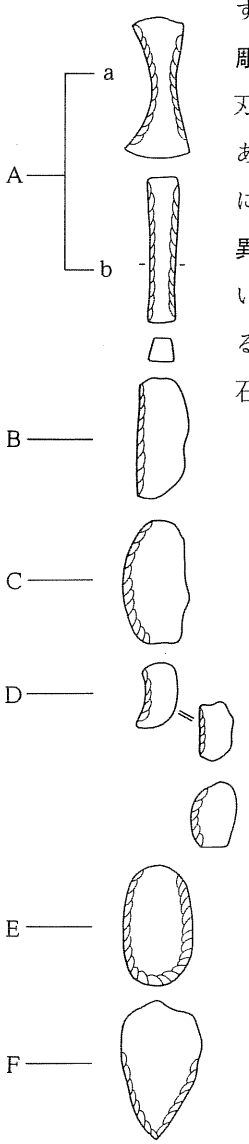
**ピエス・エスキーユ**（第184図503）　比較的大きくて薄い剝片の上下端に調整を加えて、上下辺が平行になるように仕上げた石器である。2点出土している。

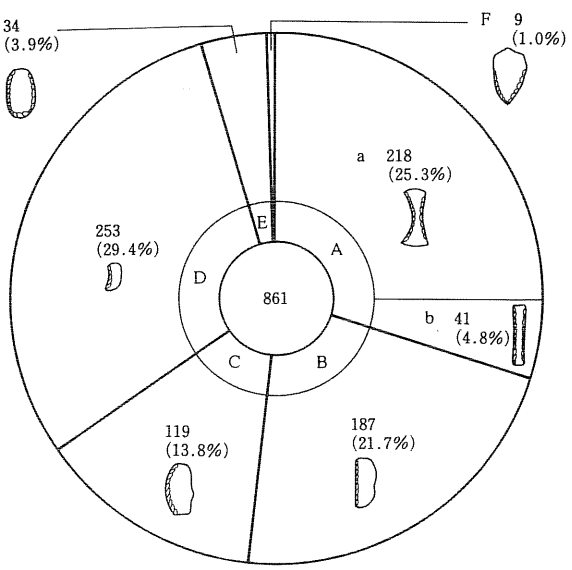
**石錘形石器**（第184図505）　片面調整によって全体の形状が略楕円形に仕上げられたものの両端に、両面から抉りの入る石器で、平面形は石錘状を呈する。2点出土している。

**帽子状石器**（第184図504）　両面調整によって、平面形が帽子状を呈する石器である。2点出土している。

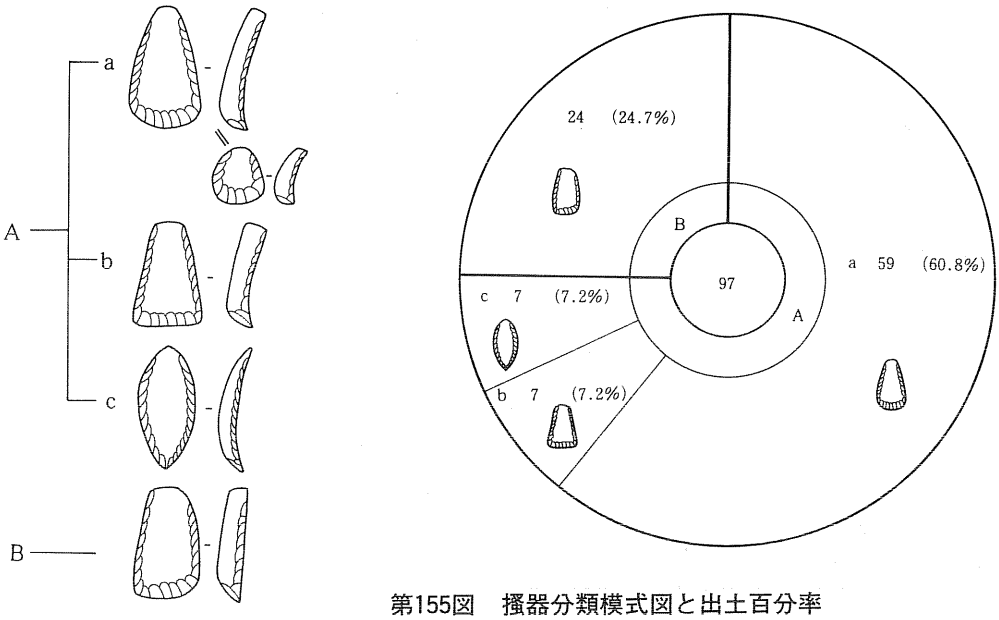
**彫刻刀形石器**（第184図506）　506は、もともと半両面調整・丸刃・片刃の篦状石器であったものの、基部側に角形の彫刻刀面を作出したものである。出土点数は少ないが全石器・剝片を仔細に観察すれば10点以上になるものと思われる。

**異形石器**　これまで述べてきた剝片石器類の各器種には含まれていない、あるいは含まれていても特殊化したような石器が38点出土している。A類を前者、B類を石匙の特殊化したものにして述べる。これらの石器の石材は若干の頁岩を除いては鉄石英を主体とし、他に黒耀石・玉




第154図　削器分類模式図と出土百分率




第155図　掻器分類模式図と出土百分率

髄・チャートである。

A＝（第185図507～515）　図示したような特殊な形のものである。514・515は縄文時代後期に見られる三脚石製品に似ている。

B＝（第185図516～520）　石匙の小型のもので17点出土している。大部分の石材は美しい赤色をした鉄石英で、とても実用の具とは考えられないものや、摩滅の著しいものが多い。SI 180出土の3点の超小型石匙もこの仲間である。当時の人々の、石材に対する特異な思い入れの反映なのか、祭器としての機能を有していたと解釈すべきなのか不明である。

**磨製石斧**　270点出土している。全体の形状・製作技法・素材となる石材などによってA・B・C・D・E類と5大別され、さらにそれぞれが形状・刃部の側面観などによって細分される。製作技法でみると、D・E類は擦切技法によっており、A・B類は一部を除き擦切技法は用いられていない。また、石材の面からみると、A・B類は安山岩など、D・E類は緑色凝灰岩などを主体とする。

斧身の部分名称と刃の種類については佐原真（1977）[(註1)]によった。なお、器面の一部、特に刃部周辺しか磨いていない石斧は打製石斧の一種として扱った。実測図中の矢印は研摩の際の方向でありそれ以外の刃部周辺の線は擦痕状の使用痕である。

A＝乳棒状磨製石斧で、4点しか出土していない。断面は楕円形を呈するが、基端に面を有するか否かで2細分される。

A—a：（第186図522）　明瞭な基端面を有しないものである。522の刃部は強凸弱凸片刃で

ある。

A—b：（第186図523）　明瞭な基端面を持つものであるが、完形品がないので刃部については不明である。523は刃部欠損後、敲き潰すような道具として使用されたものか、下端面が平らになっている。

B＝安山岩などの河原石を擦切技法によらずに仕上げた定角式磨製石斧である。

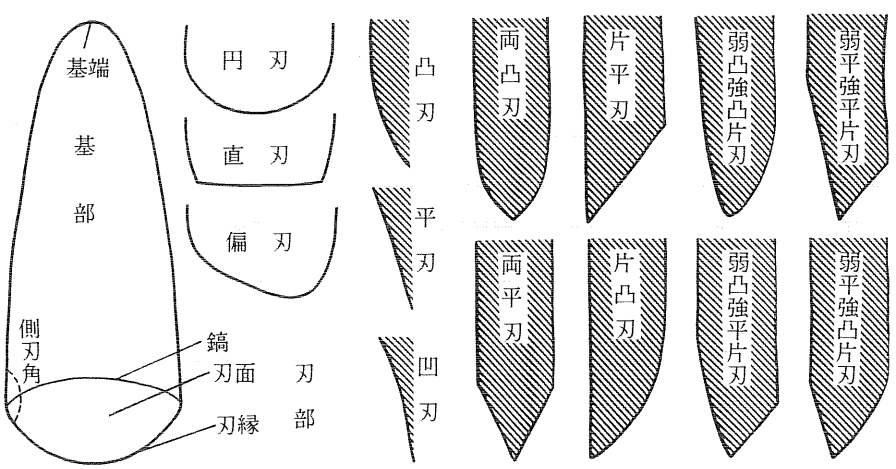
B—a：（第186図524）　側辺には部分的にしろ稜を持つが、基端には明瞭な面を持たないものである。524は刃部と斧身の後面側半分を欠いているが、裏面には図版98のように化石化した木の葉が入っている。

B—b：（第186図525・第187図526）　最も定角式磨製石斧的なものである。両側縁および基端が研磨されてそれぞれが面を持ち、石斧主面との間に稜を作り断面は隅丸長方形を呈する。

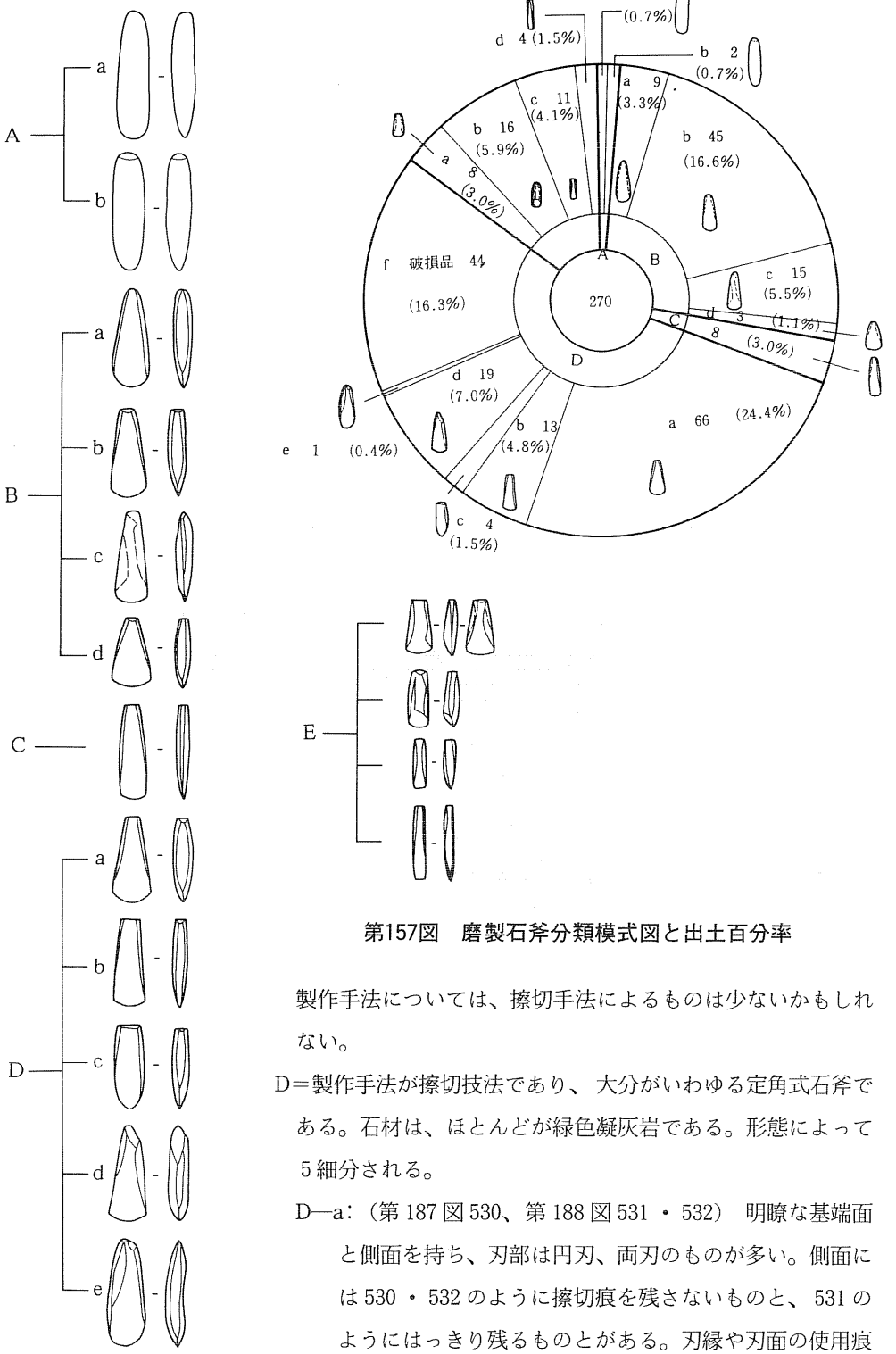
B—c：（第187図527）　擦切技法によらない磨製石斧の製作工程は一般的に、粗割→整形剝離→敲打→研磨の四段階を経て完成されるとされているが、本類は整形剝離面が最終工程の研磨を行った後でも残っているものである。なお第三段階の敲打痕は見えない。

B—d：（第187図528）　偏平で小型、基端に対して刃部の幅の大きい類である。刃縁まで残存しているものはないので正確には不明であるが、恐らく片刃になるものと思われる。製作手法については、大部分が擦切手法によらないものであろう。528は蛇紋岩製で側辺に面を持たない。

C＝（第187図529）　粘板岩などを素材とし、比較的細長く側辺の稜が明瞭でなかったり、側面の幅が小さいものである。基端に面を持つものと、持たないものとがある。刃部側の幅もせまく器厚も小さくなると、石剣の中の一部のものとの区別がつけにくくなる類である。




第156図　磨製石斧・斧身の部分刃の部分名称




**第157図　磨製石斧分類模式図と出土百分率**

製作手法については、擦切手法によるものは少ないかもしれない。

D＝製作手法が擦切技法であり、大分がいわゆる定角式石斧である。石材は、ほとんどが緑色凝灰岩である。形態によって5細分される。

D—a：（第187図530、第188図531・532）明瞭な基端面と側面を持ち、刃部は円刃、両刃のものが多い。側面には530・532のように擦切痕を残さないものと、531のようにはっきり残るものとがある。刃縁や刃面の使用痕

を観察できるものにおいては、530～532のように刃縁に対して斜交するものが多く、縦斧として使用されたことが推定できる。

D—b：（第188図533）　全体に器厚が少なく偏平で、直刃風のものが多い。側辺には明瞭な面を持つものと、そうでないものがある。D—a類に比べ、平面形が撥形にならず斧身下半からは側縁がほぼ平行するものが多い。533は両刃であるが、一方の面（後主面と考えられる）に残る刃縁から刃面への使用痕を観ると、刃縁に対して直交しており（図版101）、横斧としての機能が推定できる。

D—c：（第189図534）　完形のものがなくて、全体の形状は不明であるが、明らかに偏刃であるものをこの類とする。534は側面に明瞭な擦切痕を有し、刃面には刃縁に斜交する使用痕を持つ（図版101）。ただしこの場合の使用痕は、前側縁側がより偏刃であることを物語っている。

D—d：（第189図535）　基端の尖る類である。刃部は円刃のものが多い。535は側面に擦切痕を残す。

D—e：（第189図536）　1点だけの出土であり、全体の形状からして擦切技法によって製作されているか否かは不明であるが石材が緑色凝灰岩であり、この類とした。一方の面（後主面）に残る使用痕は刃縁に直交しており横斧としての機能が推定できるが、側面観では前主面側に反っている。図のスクリーントーン部分には漆と思われる付着物があり、側面には横縞状にそれのない部分がある。着柄痕と考えられる。

D—f：磨製石斧の破損品の中で、類別できないくらいの細片を一括した。それらの大部分がこのD類のものである。

E＝器長が11㎝以下の片刃石斧である。緑色凝灰岩を主に用いており、擦切技法によるものであろう。形状などによって4細分される。

E—a：（第189図537・538、第190図539）　主面のうち、一方の面が基部から刃部まで平坦な面をなす片凸刃で、基端は尖るものが多いようである。使用痕は刃縁に対し直交するものが多いが、539は若干斜交する線も見られる。537は両主面中央に浅い擦切痕がある。538の斧身中央部の上下では色調が異なっており下半はやや黒ずんでいる（スクリーントーン部分）。着柄の際、上半がソケット部分に入っていた痕跡であろう。

E—b：（第190図540・541）　全体に小さく、側辺がやや平行気味であるが、形状そのものは定角式石斧に似る類である。使用痕は刃縁に直交あるいは、ほんのわずか斜交するものである（540・541が図版100）。540は全面研磨の後、基部側の側面及び基端面を敲打している。おそらくは着柄に関連するものであろう。側面には擦切痕を残す。

E—c：（第190図542～544）　器長がおよそ9㎝以下、器幅がおよそ2.5㎝以下で、平面形が

短冊形を呈する小型品であるが、器長・器幅に対して比較的厚い。542は基端に厚みがあり、543・544は両端に刃部がある。使用痕は、542・543が刃縁に直交するが、544は斜交する。544は一方の側面に顕著な擦切痕を残す。この場合、上・下面からの擦切痕が中心部で一致せず、断面形では段をなすようにして残るが、その痕を軽く研磨しただけで放置している。

E—d:（第190図545）　極く細身で両側縁が平行する類である。545の場合、器最大幅が14㎜なのに対し、最大厚が9㎜もあり、側面には擦切痕を残す。使用痕は刃縁に直交する。

**打製石斧**　厚さが3～5㎝で、平面形が撥形や短冊型を呈した礫に刃部を作出し、石斧としたものである。53点出土している。打ち欠いて刃部を作出しただけで使用したものと、主に刃部周辺を研磨して使用したものとがある。製作技法・平面形態によって3大別される。

A＝（第191図546）　礫のほぼ全面を打ち欠いて石斧に仕上げているものである。181は、一方の主面の一部と、もう一方の主面の大部分に礫の自然面を残す。

B＝素材となる礫の刃部、あるいは刃部周辺を中心にして剝離を加えているものである。全体の形状、あるいは刃部の作出方法によって細分される。

B—a:（第191図547）　礫の両端にのみ剝離が加えられ、刃部周辺が研磨されているものである。547は側面を持つが、礫の自然面のままである。

B—b:（第192図548）　B—a類の研磨のないものである。

B—c:（第192図549）　礫の一端にのみ両面から剝離を加えているものである。

B—d:（第192図550）　初めから撥形を呈する礫の下端（幅の大きい方）に一方の面からのみ剝離を加えて刃部としたものである。

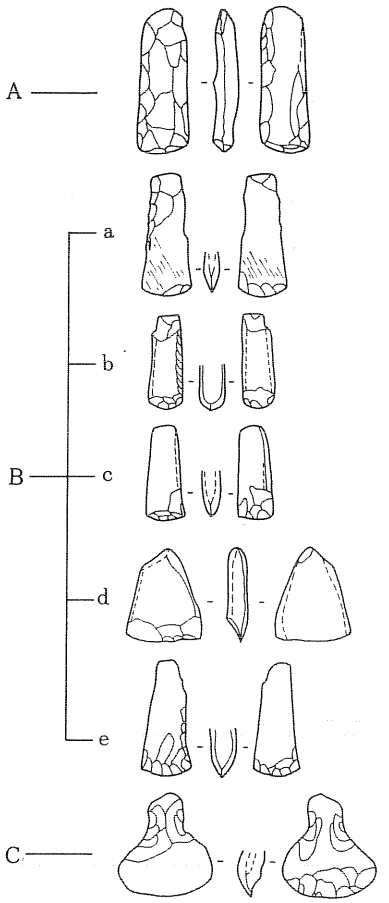
B—e:（第193図551）　B—d類よりは下端が広がらない礫の下端に、両面から刃部を作出したものである。

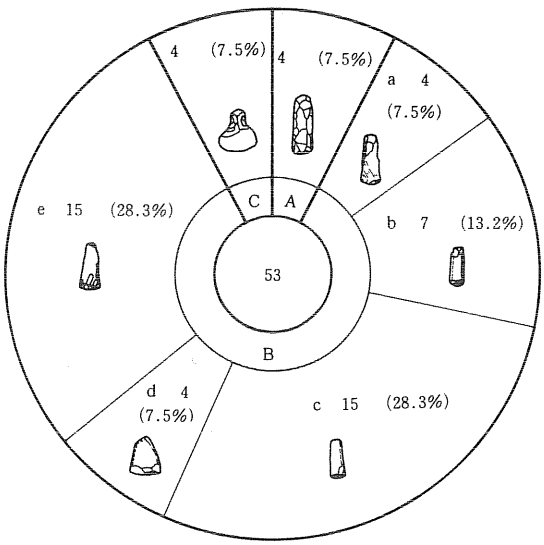
C＝（第193図552）　平面形が三角おにぎり状の礫の中央やや上部に抉りを入れ、全体の形状をダルマ形に仕上げたものである。刃部は一方の面からのみの剝離である。

## 小　結

今回の上ノ山Ⅱ遺跡の発掘調査区から出土した剝片石器・石斧類の総点数とその内訳・百分率比は第159図のとおりである。なお、この中には遺構内から出土した石鏃20点・尖頭器2点・石錐7点・有撮石器1点・石匙41点・篦状石器35点・削器58点・掻器5点・磨製石斧8点・打製石斧2点・その他1点を含む。

定形的な剝片石器・石斧類が1つの遺跡からこれ程多量に出土したことは、秋田県内でも初めてのことである。このことは勿論、これまで1遺跡が捨場も含めてほぼ完全に発掘調査され



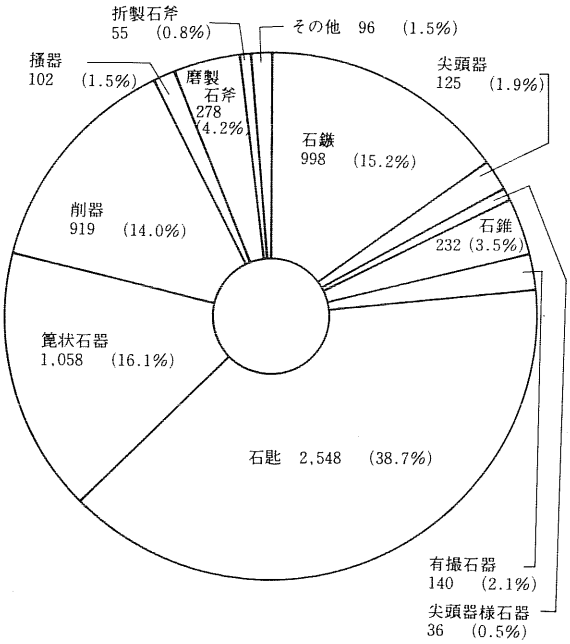




**第158図　打製石斧分類模式図と出土百分率**

ることが少なかった、ということもその理由の１つにはなろうが、それにしても多い。石器が多量に出土したこと自体が、上ノ山Ⅱ遺跡の遺跡としての性格の一面を物語るものであろうが、その出土状況・出土地点などから、本遺跡が単なる石器製作跡であったとすることはできない。後述するように、捨場などから出土した石器には使用痕の見られるものが多く、破損品も多い。従って、今回上ノ山Ⅱ遺跡から出土した剥片石器・石斧類の大部分は、捨てられたものであったと考えられる。

剥片石器・石斧類6,407点は、分類の結果23器種に分けることができた。もちろん全ての石器１点１点について、その機能が明らかにされた訳でもないし、例えば形の整っていない一部の石鏃と石錐との判別などでは困難なことが多かった。しかしながら、多少の増減があったとしても、各器種毎の点数が多いので、全体の中における各器種の比率はそう変わるものではなかろう。それでは、以下に各器種内での若干の特徴的なことに触れてみたい。

有舌尖頭器は2タイプ5点出土している。A類は、新潟県柳又遺跡や愛媛県上黒岩岩陰遺跡出土のものに似ており、いわゆる「柳又型有舌尖頭器」か。B類は、新潟県小瀬が沢洞窟出土のもの（「小瀬が沢型有舌尖頭器」）に似るが、側縁がそれほどギザギザではない。県内ではA類が六郷町安楽寺、B類が東成瀬村矢櫃遺跡からそれぞれ1点づつ採取されている。(註2)




**第159図　出土剝片石器・石斧類の点数と百分率**

石鏃は978点出土しているが、明らかに基部にアスファルトの付着したものはない。わずかに2点のみ基部に付着物が見られるが、これは漆かもしれない。石鏃は4タイプのものが出土し、凹基無茎鏃（B類）が約半数を占める。この中でB—d類は点数こそ遺構内出土のものも含めて9点と少ないが、他に例を見ない形態であり新型かもしれない。

有撮石器は、これまで石匙あるいは石錐、まれに石槍の仲間の1つとされていた石器である。これまでは、この種の石器が1遺跡から10点以上出土することは稀で、それだけに新しい器種として認識されることはなかったのかもしれない。上ノ山Ⅱ遺跡では139点出土している。つまみを有し、そのつまみが石匙のものとほぼ同じであるが、全体の平・断面の形状・調整技法などにおいては明らかに石匙とは異なっている。分類ではA・B類に分けたが、つまみ部を隠すとA類は尖頭器そっくりであり(註3)、B類は細長い石錐に似ている。B類が器中央から尖頭部にかけて著しいポリッシュの見られるものが多いことも、石錐としての機能を想起させる。A類は、尖頭器あるいは手持のナイフのようなものであったと考えられる。

石匙は縦型・斜型・横型を合わせて2,500点余出土しており、本遺跡での主要な石器の1つである。縦型石匙がこの中で主体を占めることでは、該期の石匙の特徴として他の遺跡と同様である。また、裏面（あるいは表裏面とも）に顕著なポリッシュの見らるものが多いことも他の

遺跡と同様であるが、この他に、一方の刃縁が摩滅しているものが散見される。摩滅のために剝離面と剝離面との間の稜線や、通常鋭いエッジをなす刃縁が、断面形でいうと角張らずに丸くなっているものである。人為的にそのような状態にしてから、使用を開始したものではないようである。このようになるためには、どのような使われ方を経なければならないのかは不明であるが、石匙の機能・使い方を究明して行く上で、あるいは重要なポイントになるかもしれない。また、明らかに刃部再生を受けたものが見られるところから、これ程まで刃部の摩滅の激しいものは、使い込んだ石匙の刃部再生前の姿なのかもしれない。

篦状石器は、平面形状などによって大きく４タイプに分けられるが、刃部の側面観が片刃を呈するものが多い。片面調整の片刃篦状石器刃部裏面の拡大鏡あるいは顕微鏡観察では、刃縁に直交する線状痕が見られる。石器の使用痕跡の１つと見られるこの線状痕のあり方は、磨製石斧の横斧に見られる使用痕と酷似している。このことは一部の篦状石器において、小型の磨製石斧（横斧）と同様の機能を有した可能性があることを示している。もちろん両者の間では、作業工程による使い分けがなされたであろうし、篦状石器の中には、他の機能・例えば鑿としての機能が専らのものもあったと考えられる。(註４)このことは、今後証明されなければならない多くの問題を前にしての可能性にすぎないが、国外の着柄状態での出土例などからすれば、この可能性は高いように思われる。

削器の中で、Ａ・Ｂ・Ｃ類としたものの裏面には顕著なポリッシュの見えるものが多い。このポリッシュの状況は、顕微鏡観察によると石匙のポリッシュに似ており、その中に刃縁に直交する線状痕が見える。

磨製石斧は270点と、１遺跡からの出土量としては非常に多い。これらは全体の形状・製作技法・素材となる石材などによって５類に大別されるが、石材と製作技法には密接な関係があり、さらにそれが製品としての形態・機能を規定しているようにも窺える。Ａ・Ｂ類の石材は安山岩などのいわゆる河原石であり、これらの製作には擦切技法は用いられておらず、製品としても両刃（一部に片刃）の定角式石斧・乳棒状石斧で、機能としては縦斧が主体である。Ｄ・Ｅ類は緑色凝灰岩などを主な石材とし、大部分は擦切技法によって製作され、定角式石斧や小型で細身の石斧となる。Ｄ類は縦斧が主体を占めるものの、横斧としての機能を有するものもある。Ｅ類は横斧が専らであったと考えられる。横斧の場合は、前主面が片刃となる前主面片刃石斧が主体である。このように、上ノ山Ⅱ遺跡から出土した磨製石斧は縦斧と横斧の２種類が共存するものであるが、横斧の中で特に見過してならないのは、Ｅ類とした小型の類である。それらは、大きさ・重量・刃部の幅等から小型の木製品類の製作に供された可能性が強い。今回の調査区内には泥炭層などがなく、製品としての木製品類の出土は見ていないものの、福井県鳥浜貝塚出土木製品類の種類と量の豊富さからして、(註５)そのような状況にあったことは想像に

難くない。また、もし今回出土した鉢状石器の大部分が、小型の横斧あるいは鑿としての機能を有していたとすれば、E類のような小型磨製横斧の存在とも相俟って、縄文時代前期段階での“木工”が盛行しており、道具（＝工具）の分化が我々の予想以上に進んでいたことを物語るのではあるやまいか。

註1　佐原　真「石斧論」『考古論集』1977（昭和52年）

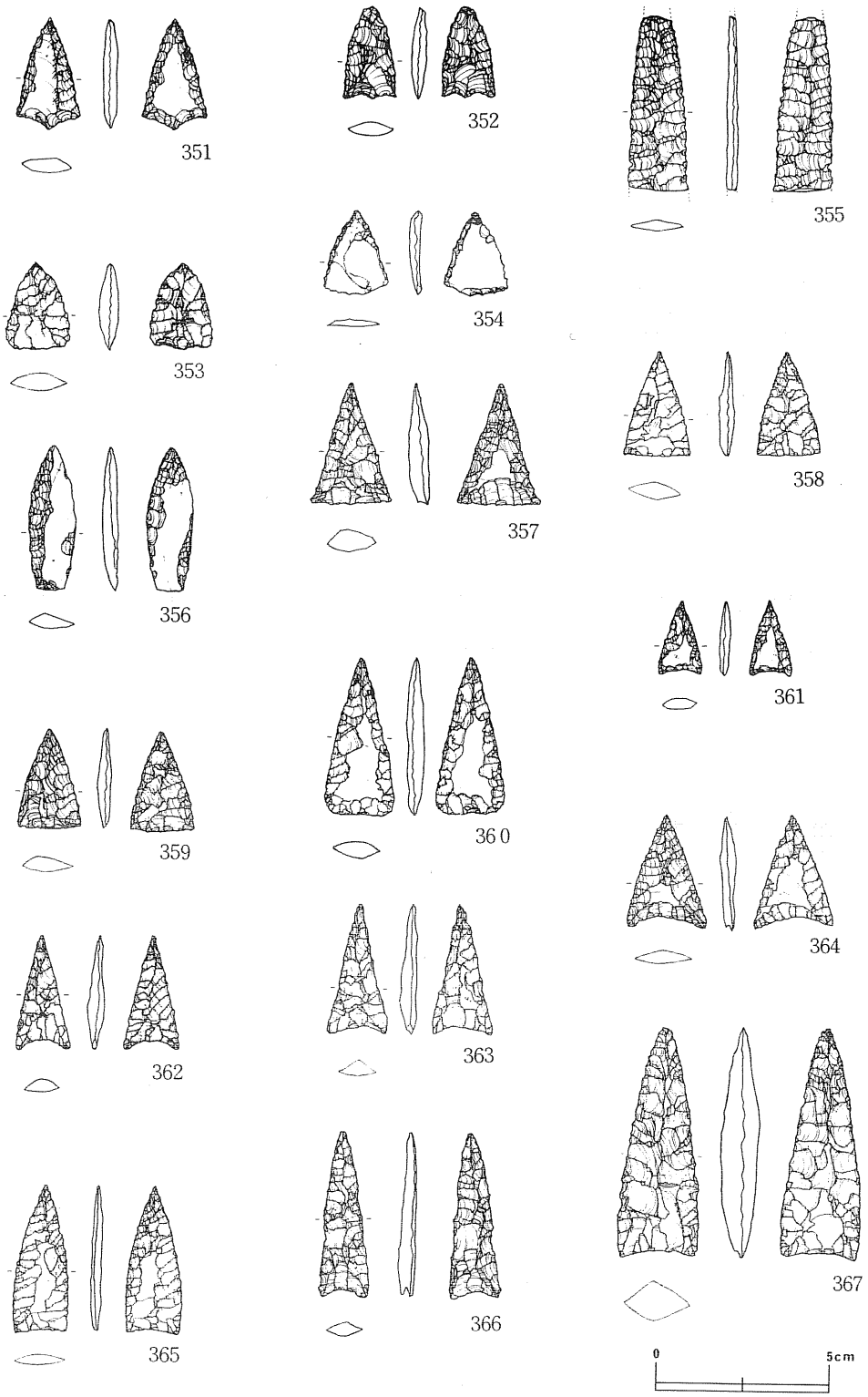
註2　平鹿町史編集委員会『平鹿町史』1984（昭和59年）

註3・4・5　山形県高畠町の押出遺跡から、A類にやや似た石器が出土している。やはり尖頭器（石槍）につまみを付したような形状であるが、つまみ部の形態が上ノ山Ⅱ遺跡のものとは異なっており、調査者は「押出型ポイント」と仮称している。

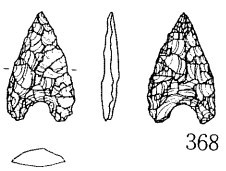
第160図　石匙の出土平面分布図

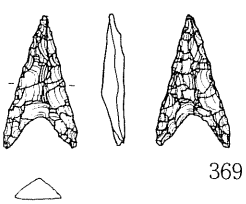
第161図　篦状石器の出土平面分布図

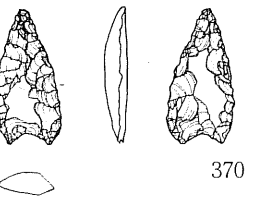
259、 260

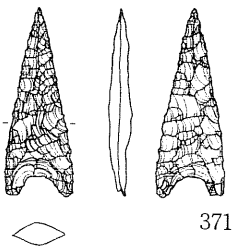


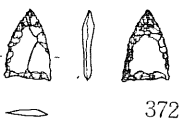

第162図　遺構外出土石器（２）　有舌尖頭器・石鏃（１）

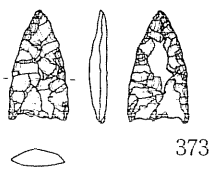

368

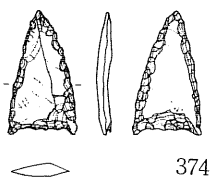

369

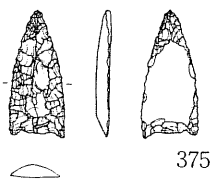

370

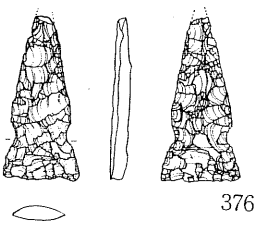

371

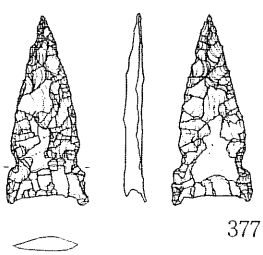

372

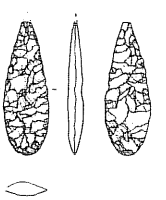

373

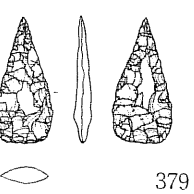

374

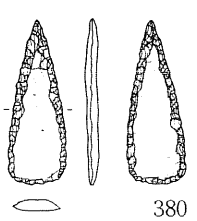

375

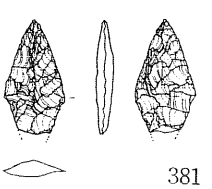

376

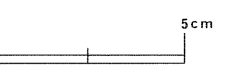

377


378

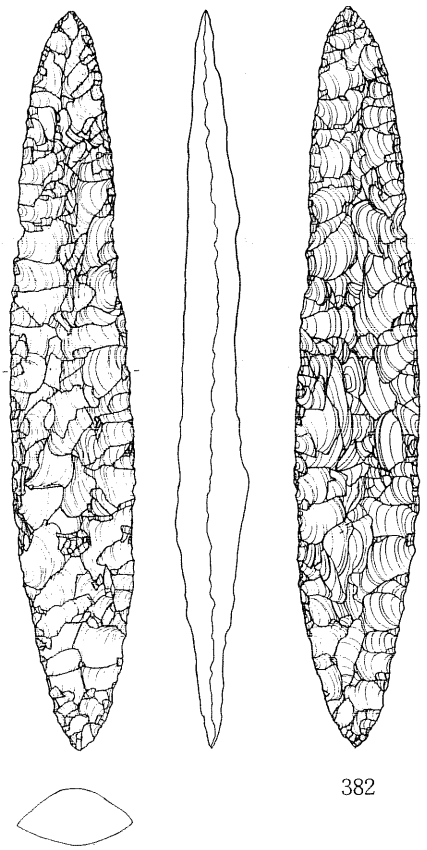

379


380

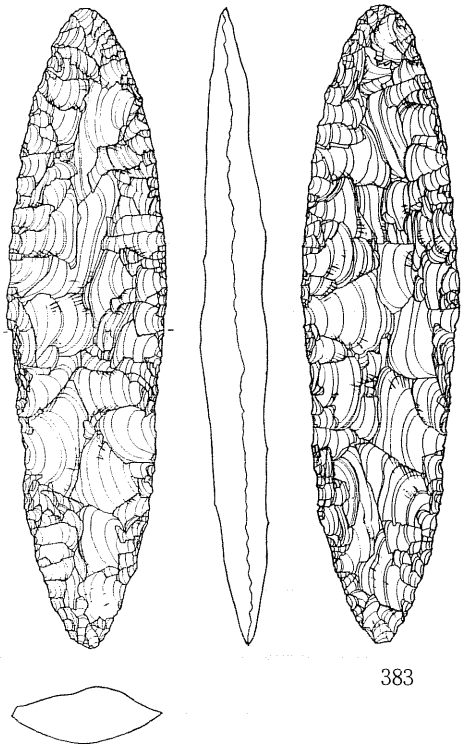

381



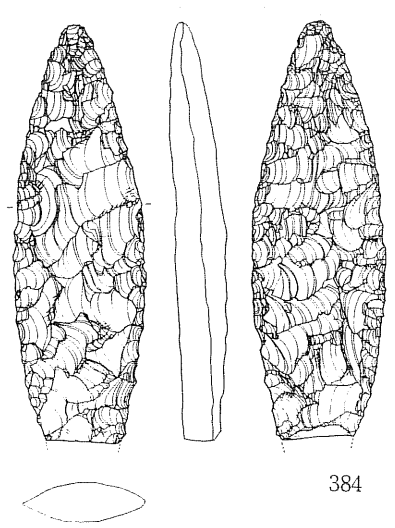

第163図　遺構外出土石器（3）　石鏃（2）



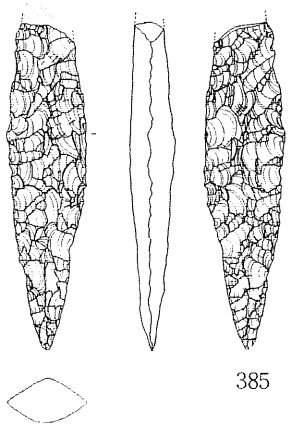
382



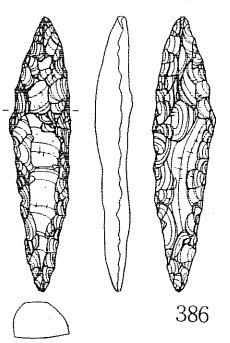
383



384



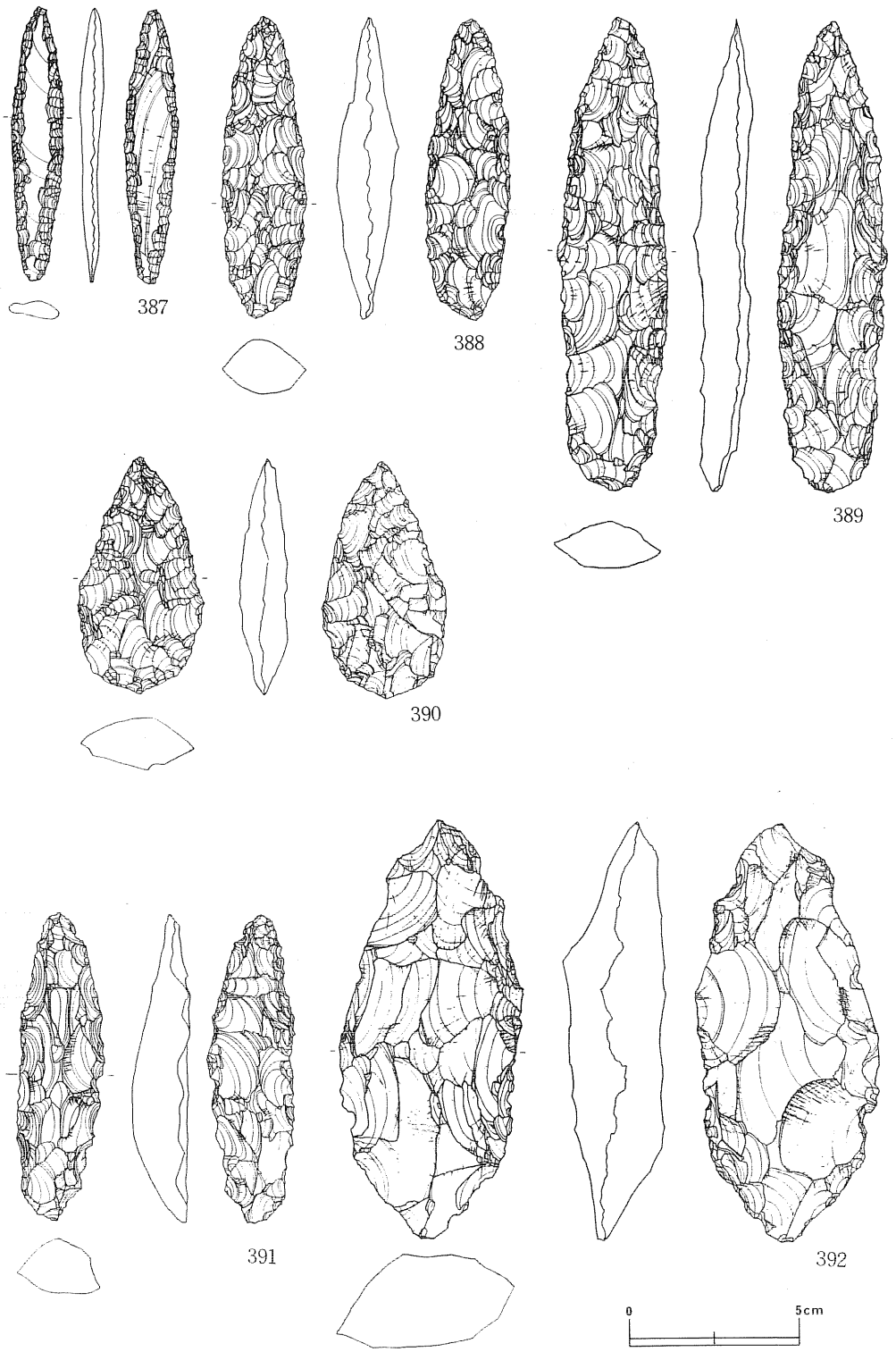
385



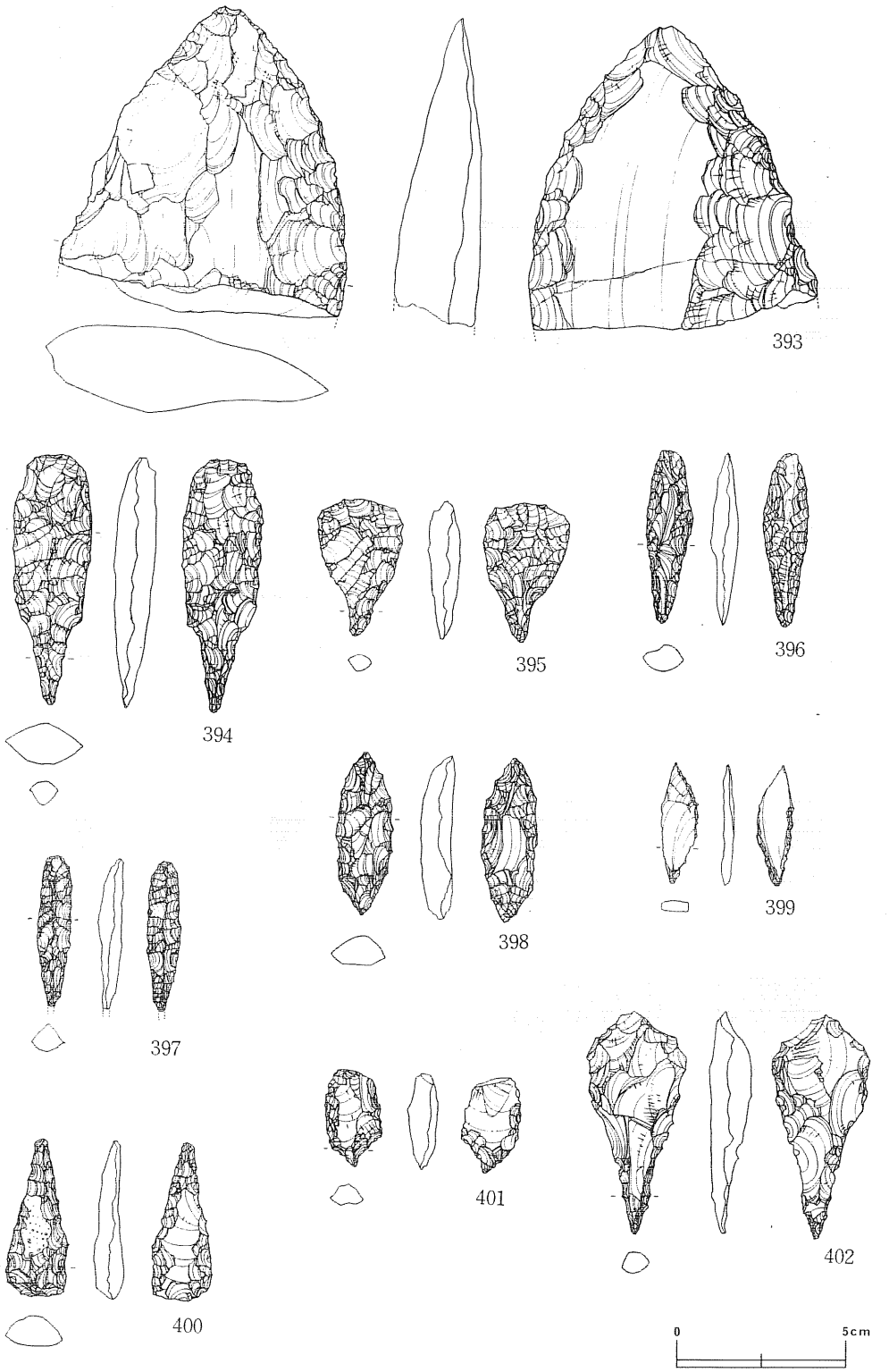
386

0　5cm

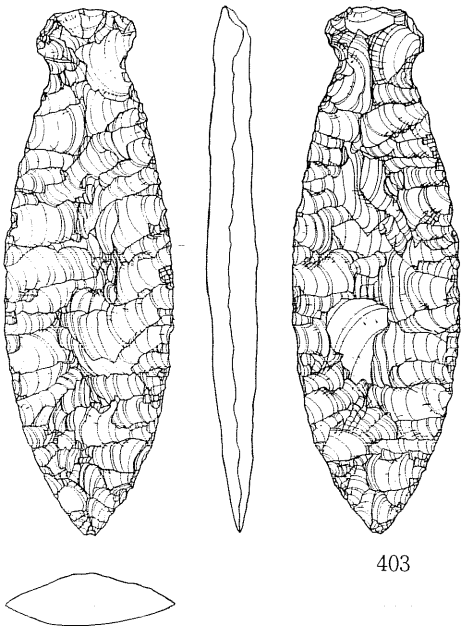
第164図　遺構外出土石器（4）　尖頭器（1）

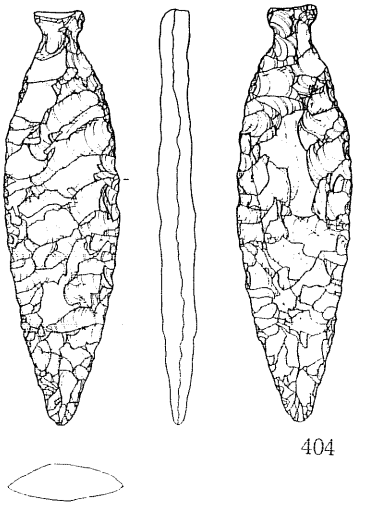


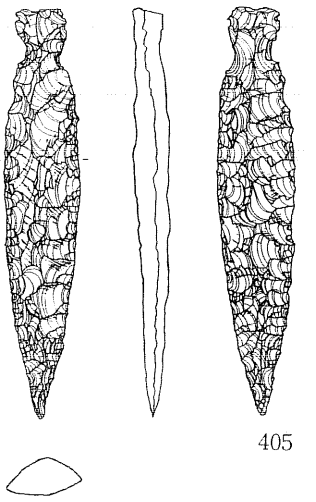

第165図　遺構外出土石器（5）　尖頭器（2）　尖頭器様石器

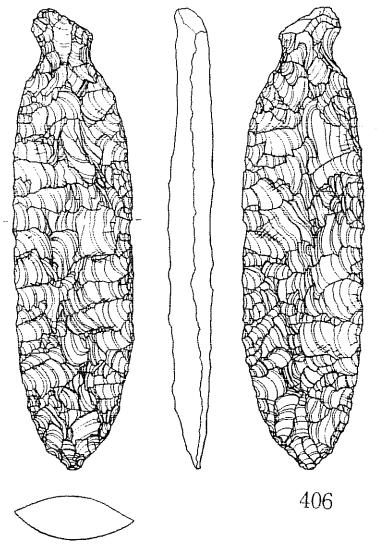


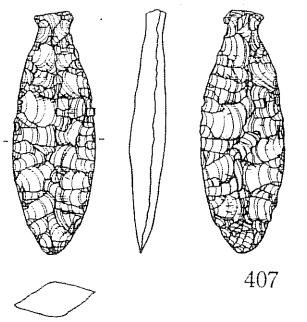

第166図　遺構外出土石器（６）　尖頭器（３）　石錐

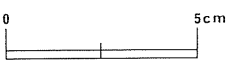


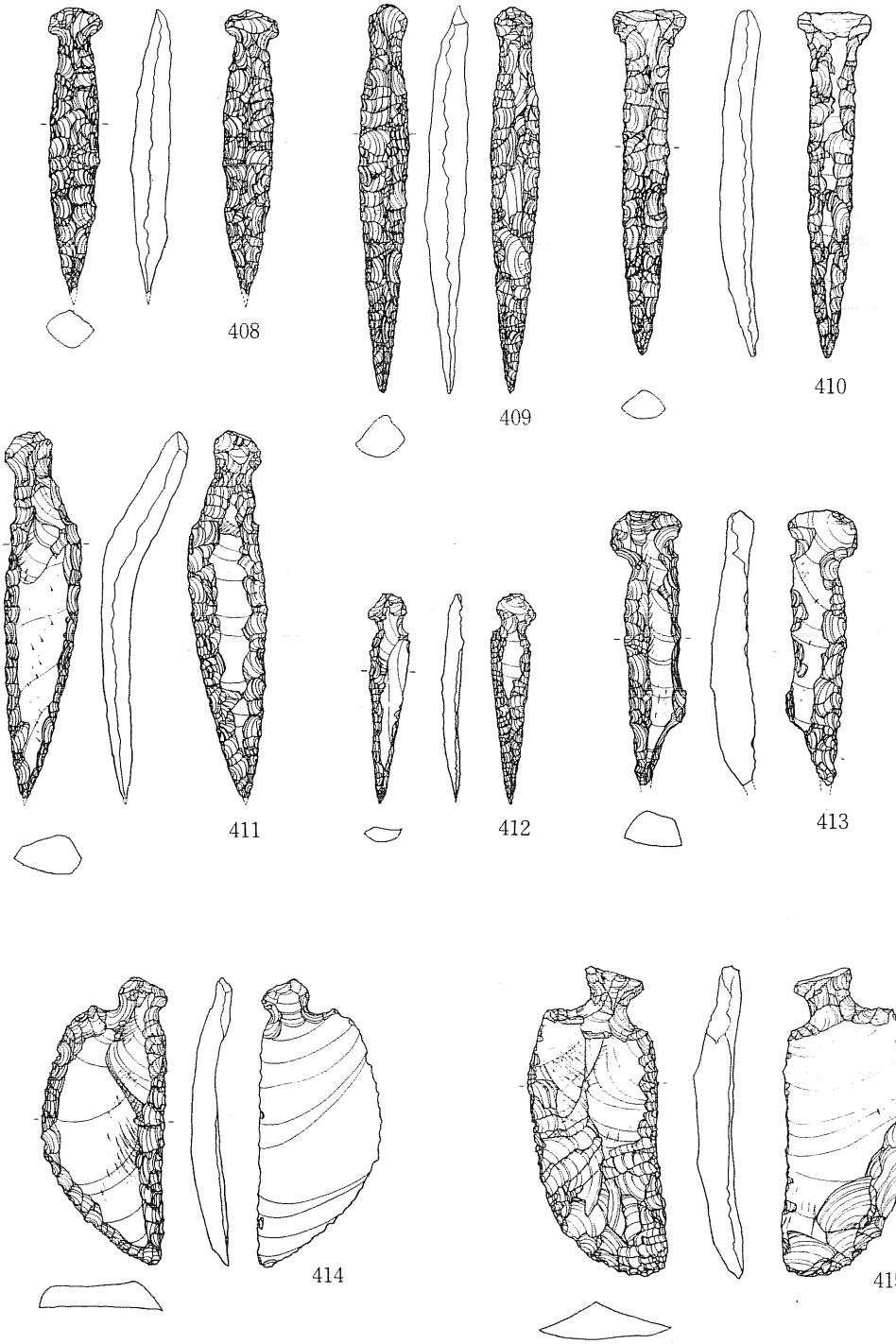



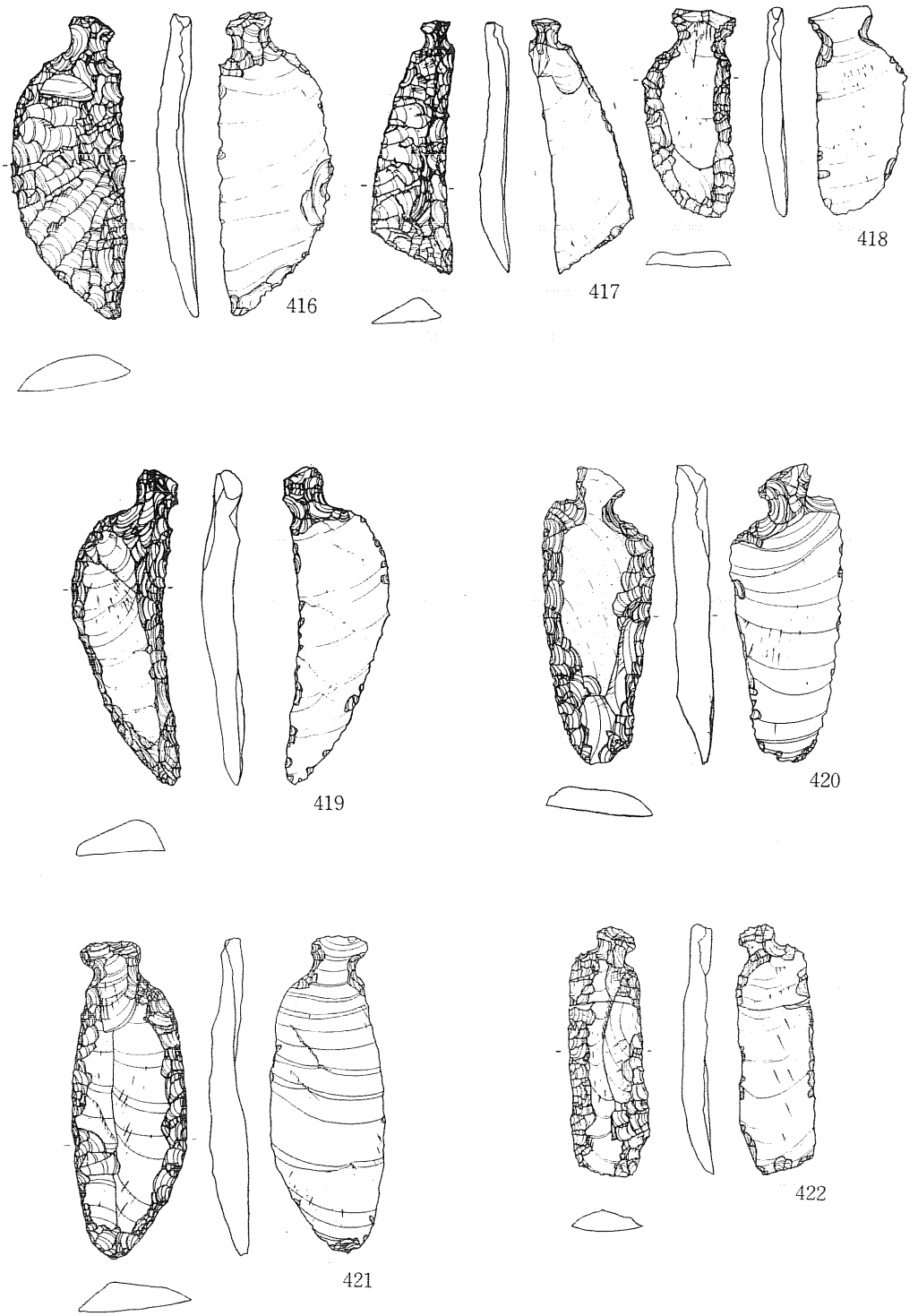



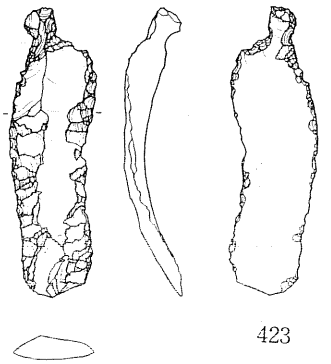

第167図　遺構外出土石器（7）　有撮石器（1）

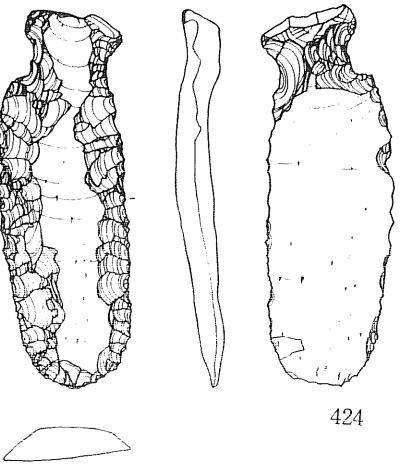


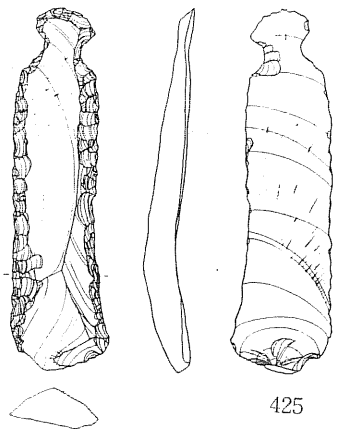

第168図　遺構外出土石器（８）　有撮石器（２）　石匙（１）

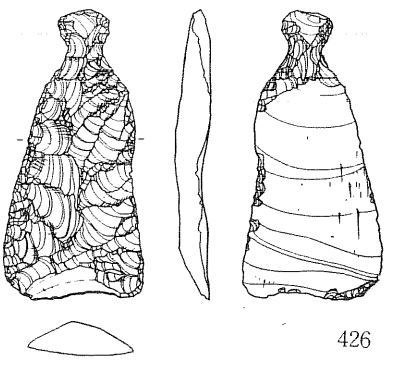


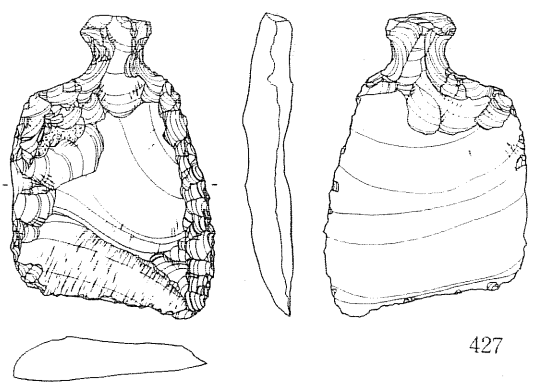

第169図　遺構外出土石器（9）　石匙（2）

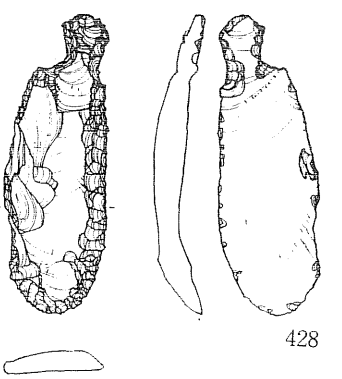

423

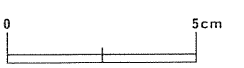

424


425

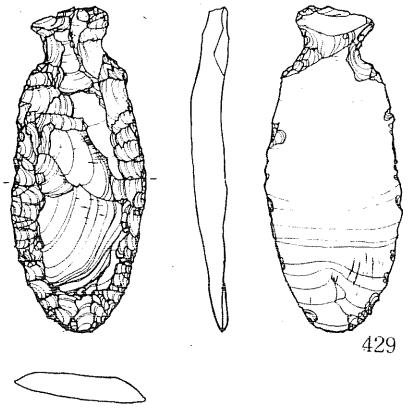

426

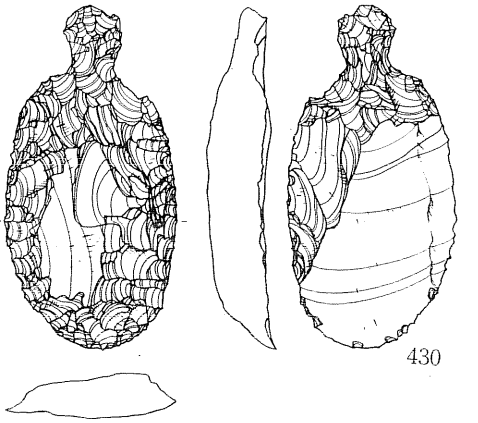

427

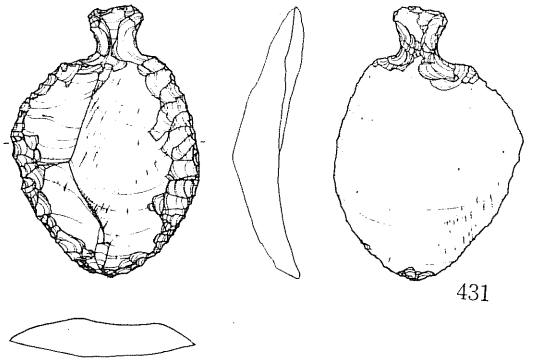

428

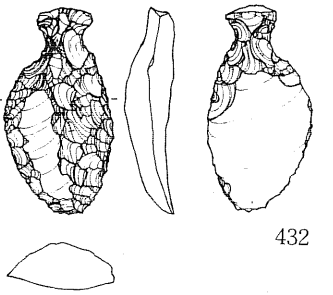


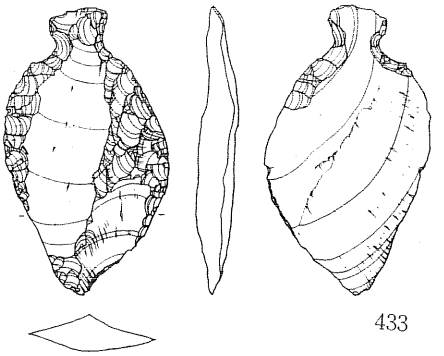

第170図　遺構外出土石器(10)　石匙(３)

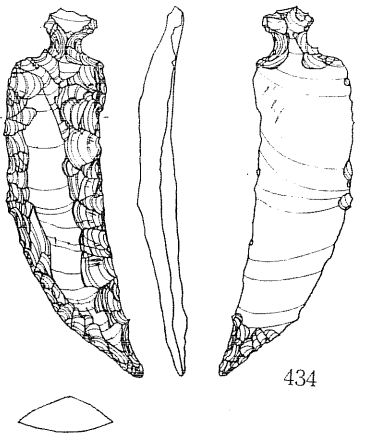


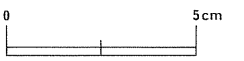



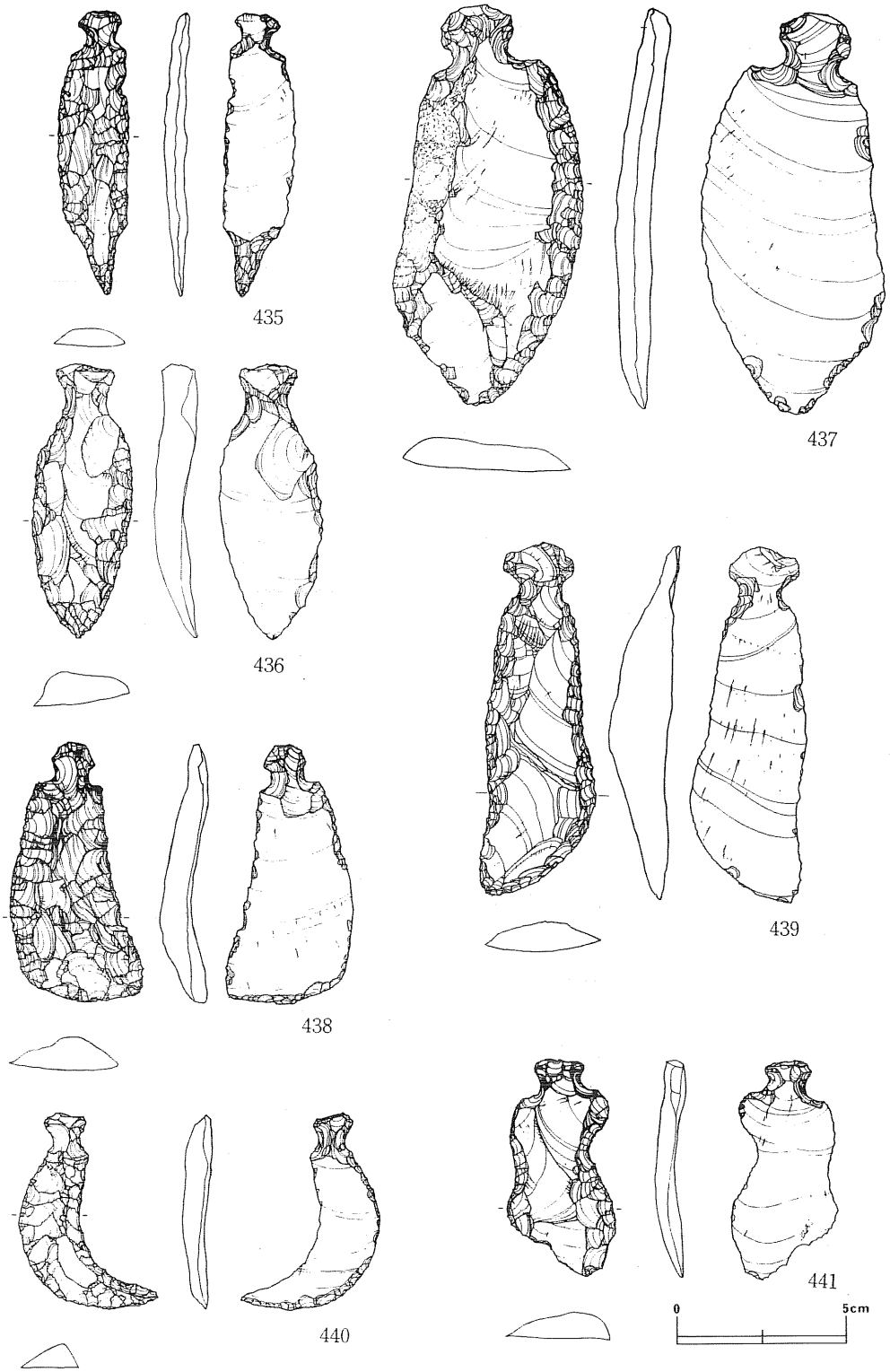



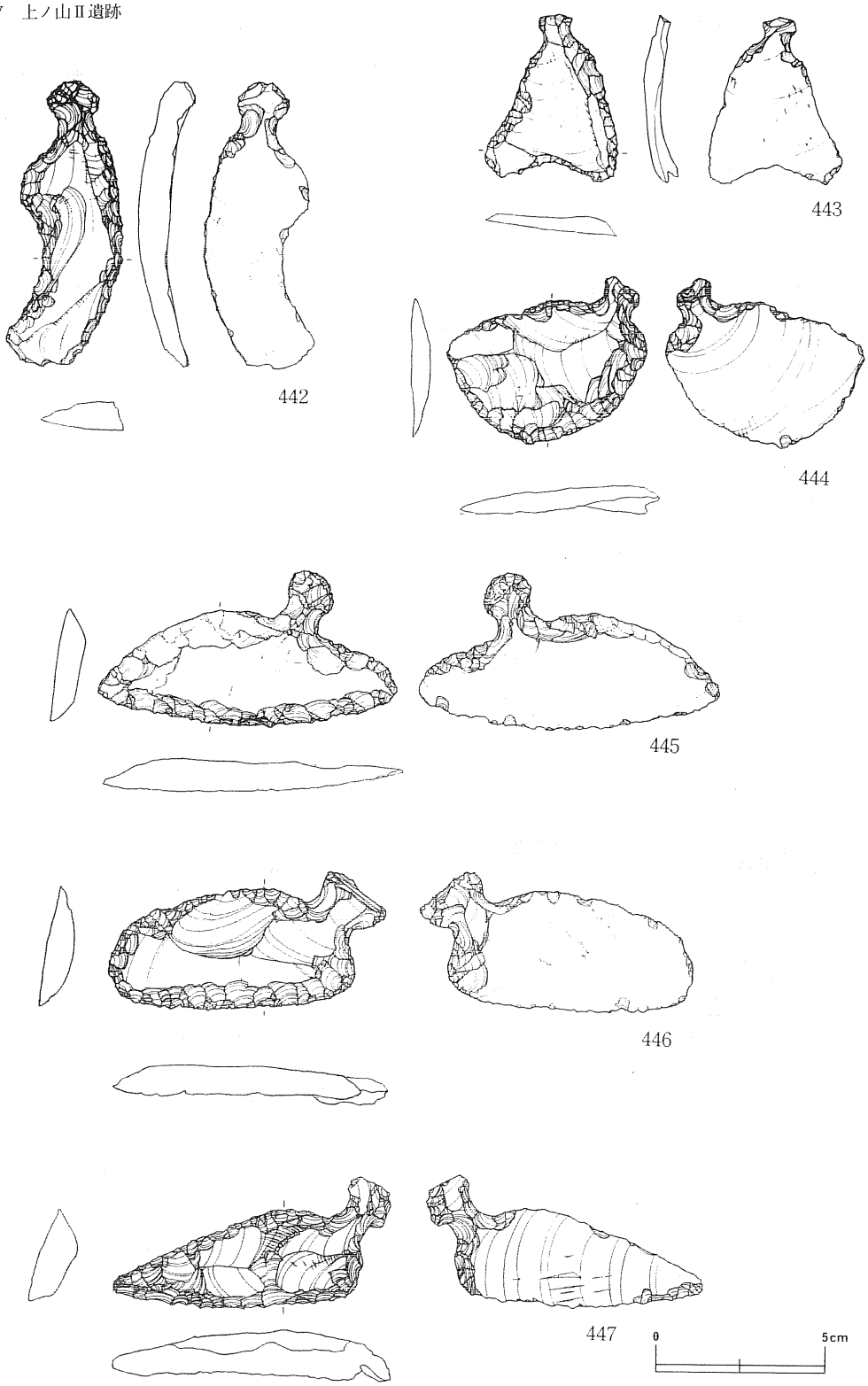



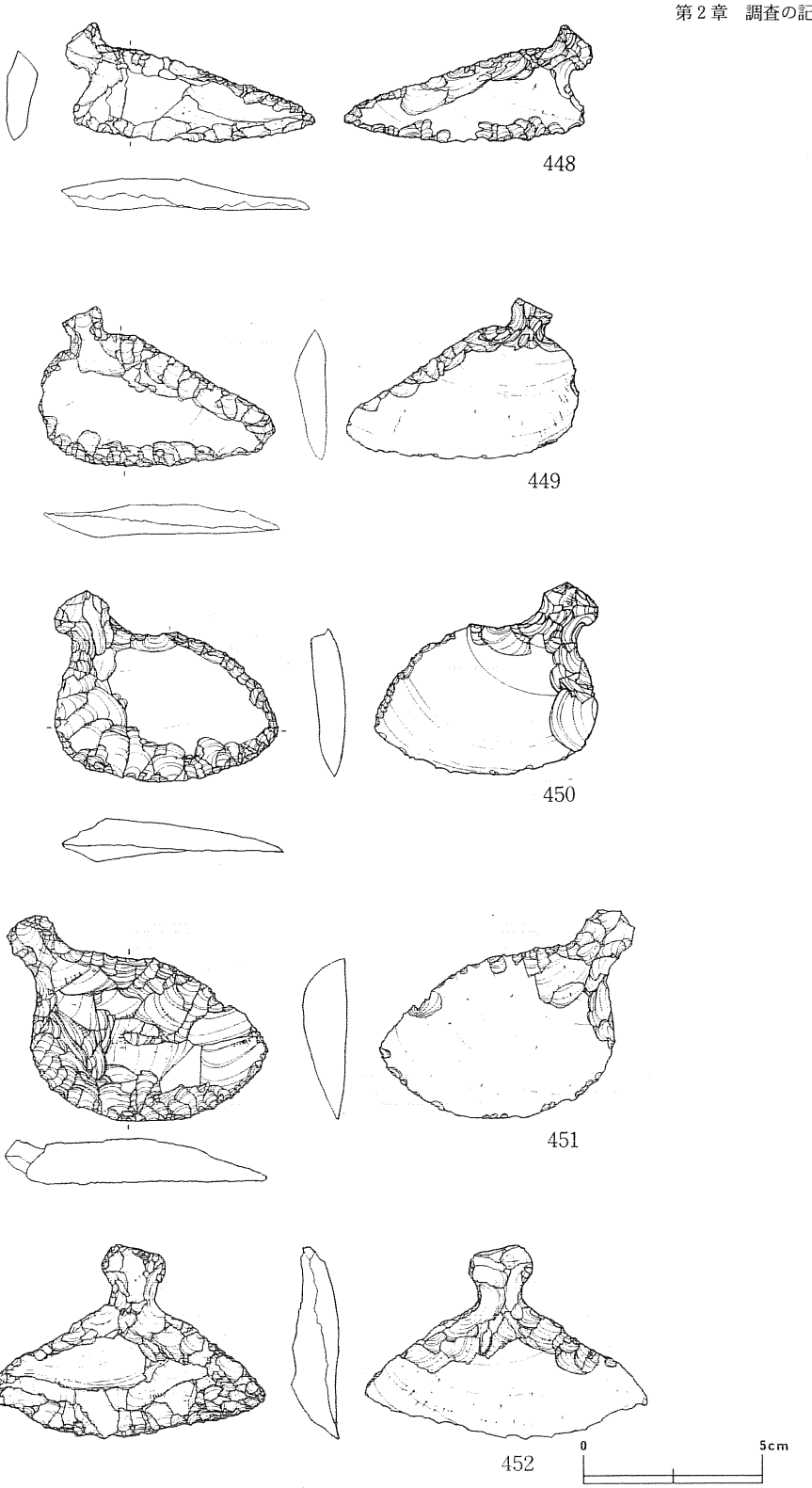

第171図　遺構外出土石器(11)　石匙(4)



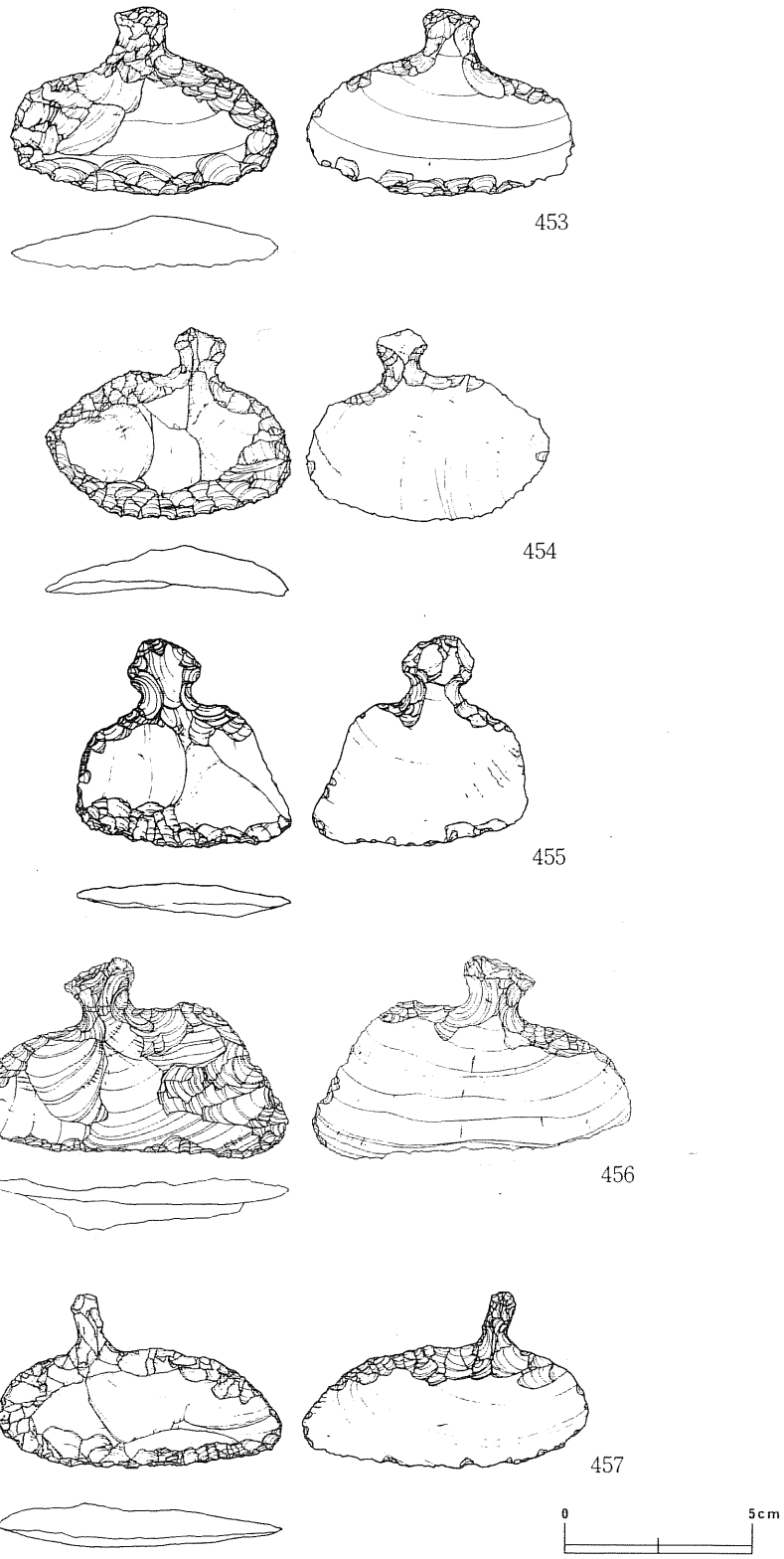

第172図　遺構外出土石器(12)　石匙(5)



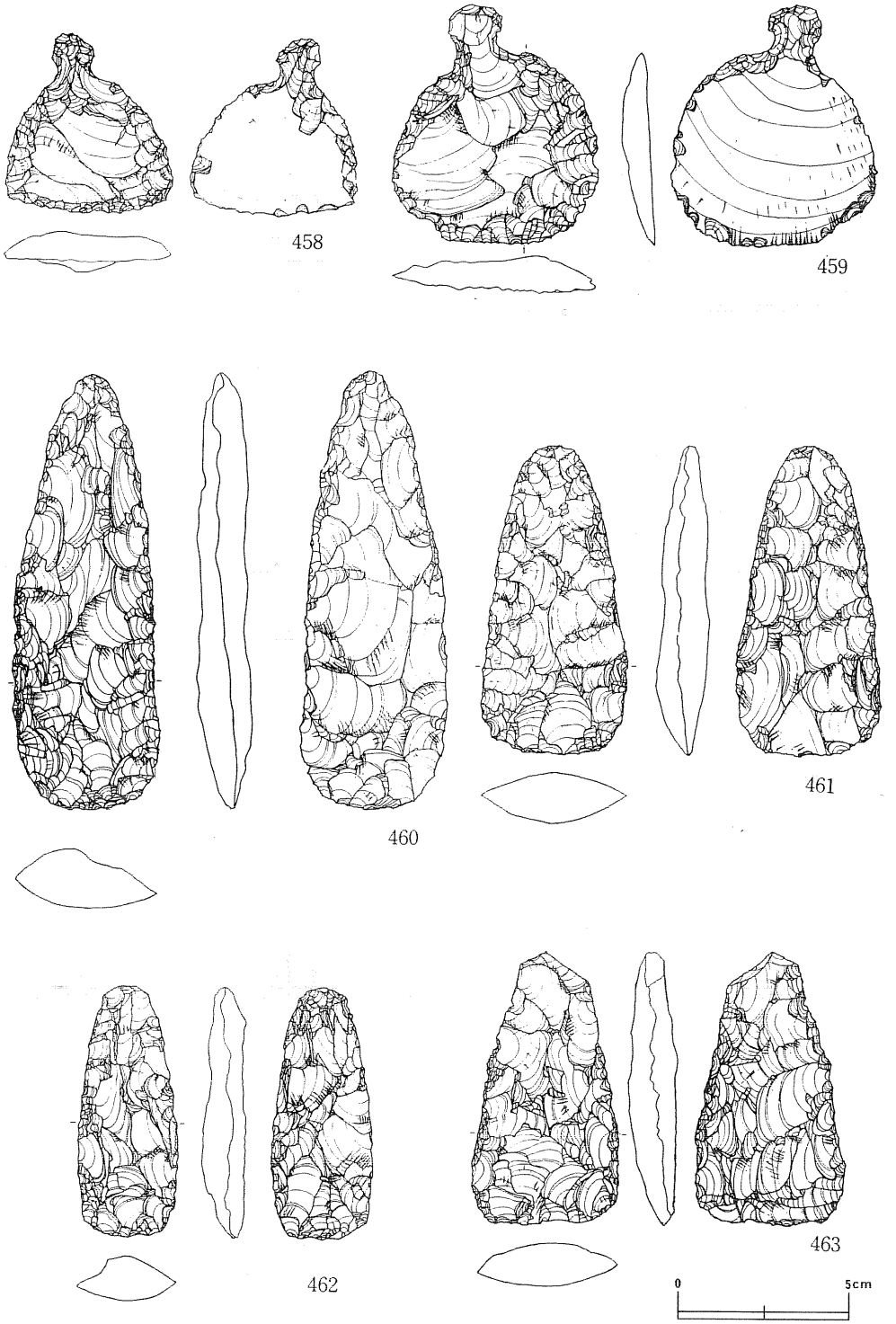

第173図　遺構外出土石器(13)　石匙(6)



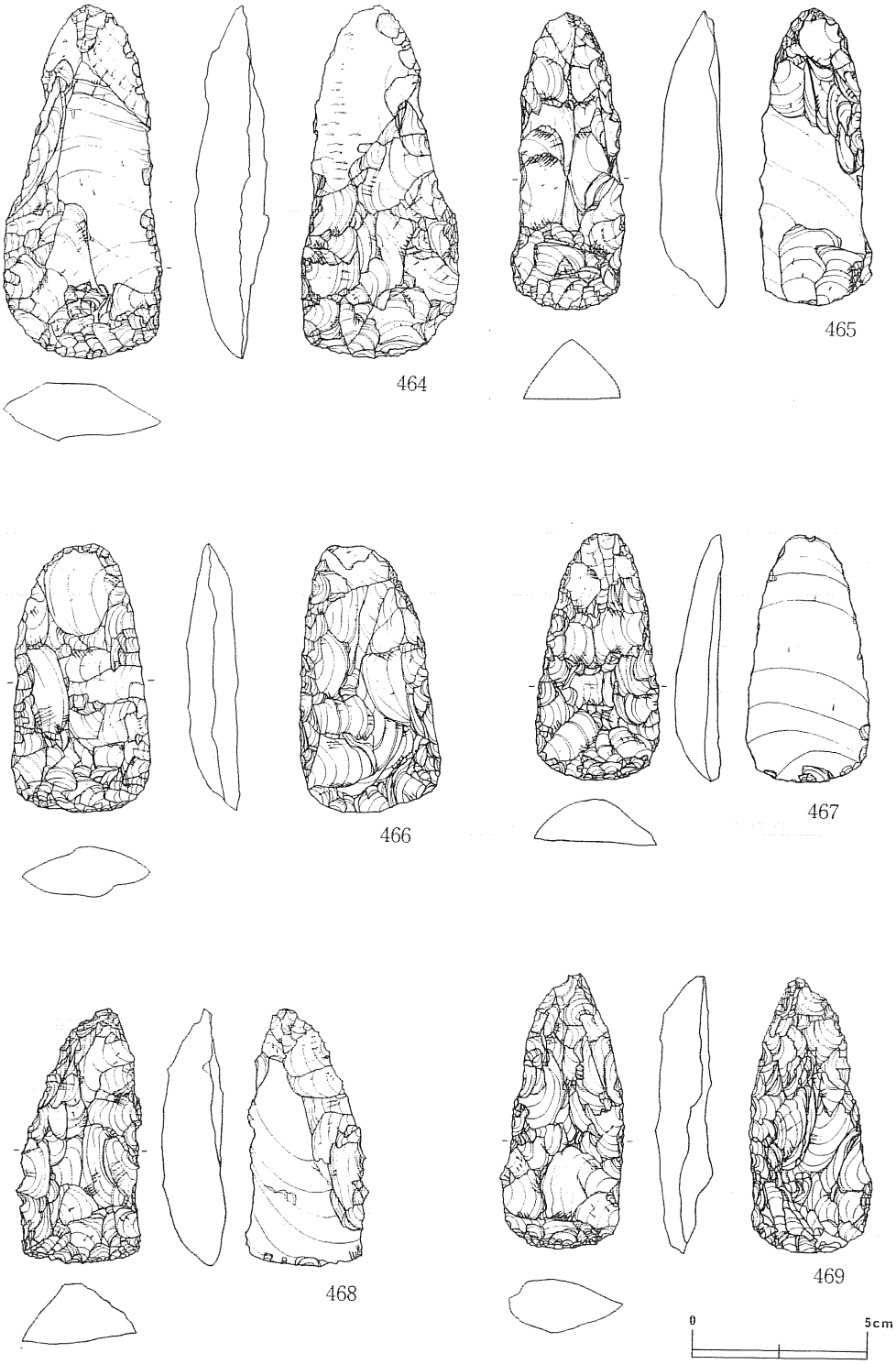

第174図　遺構外出土石器(14)　石匙(７)



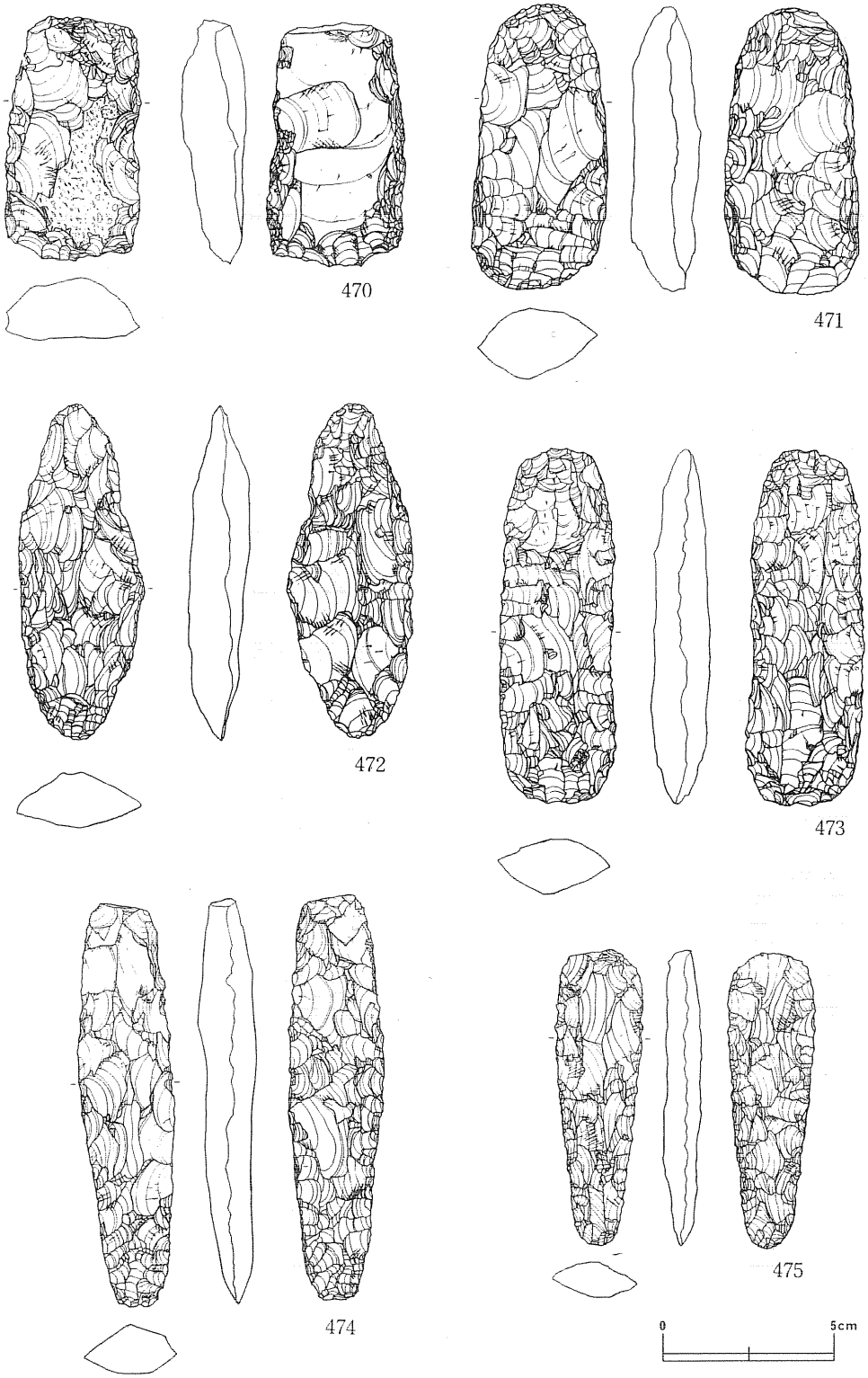

第175図　遺構外出土石器(15)　石匙(８)



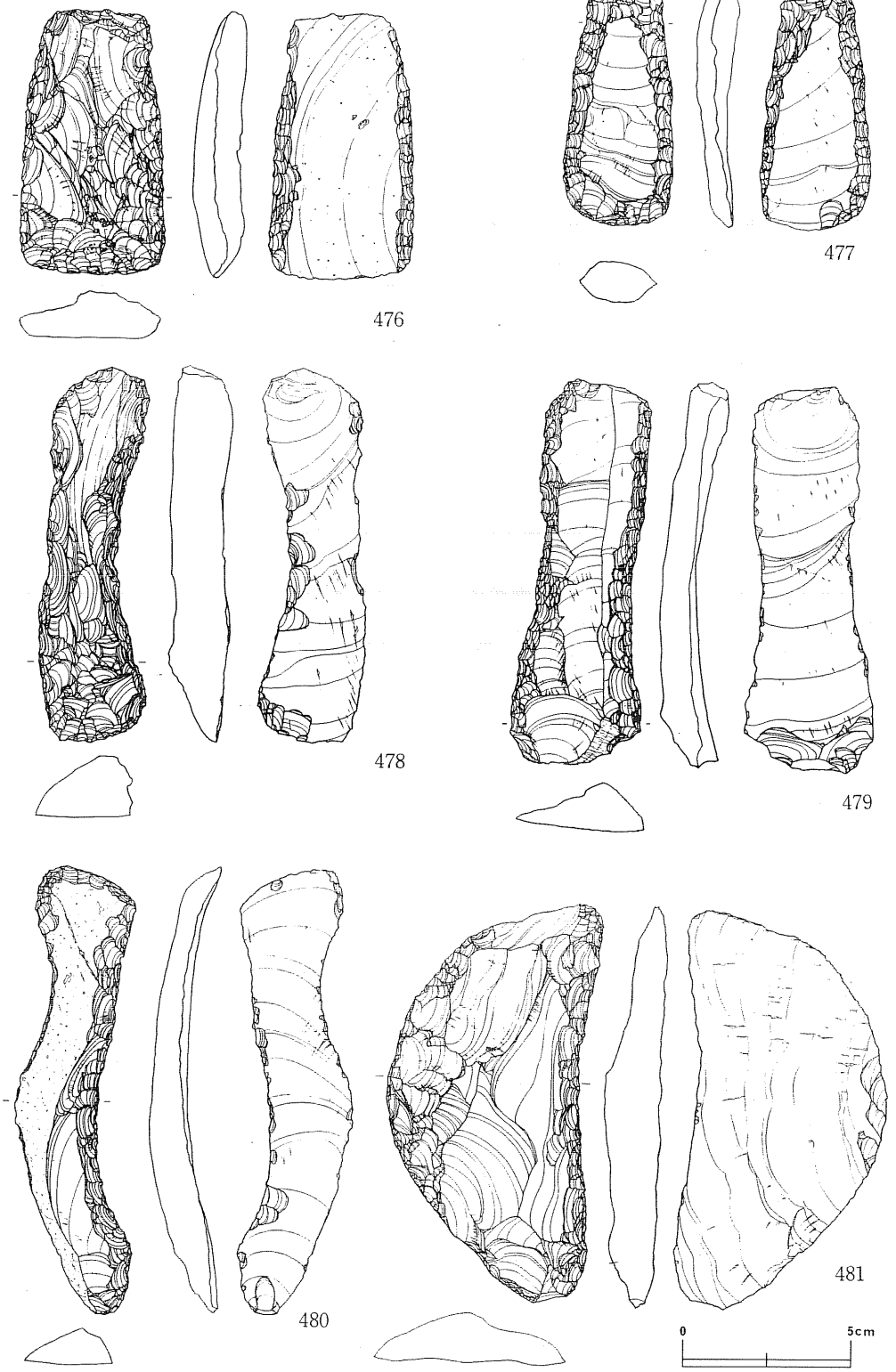

第176図　遺構外出土石器(16)　石匙(９)　篦状石器(１)



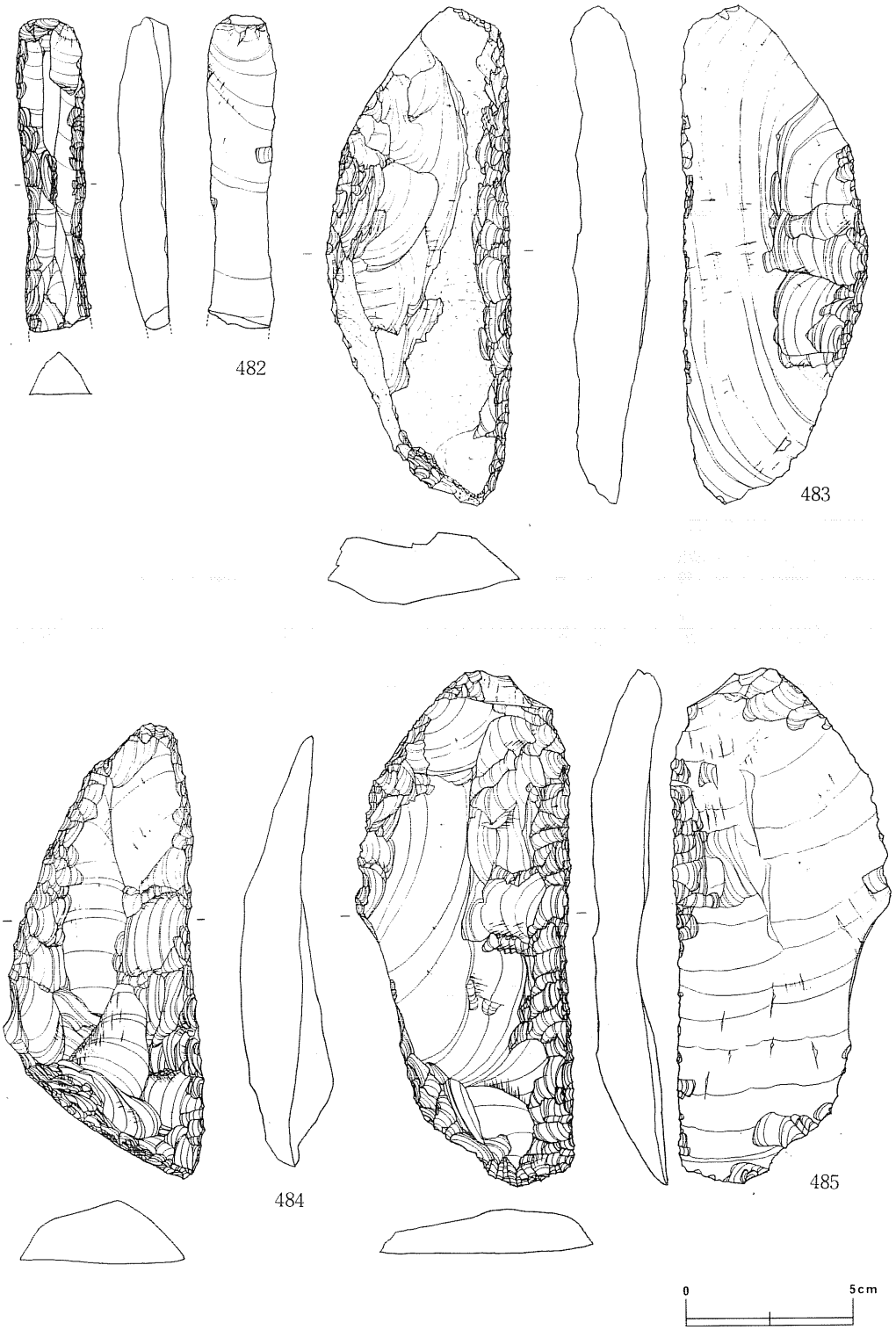

第177図　遺構外出土石器(17)　篦状石器(2)



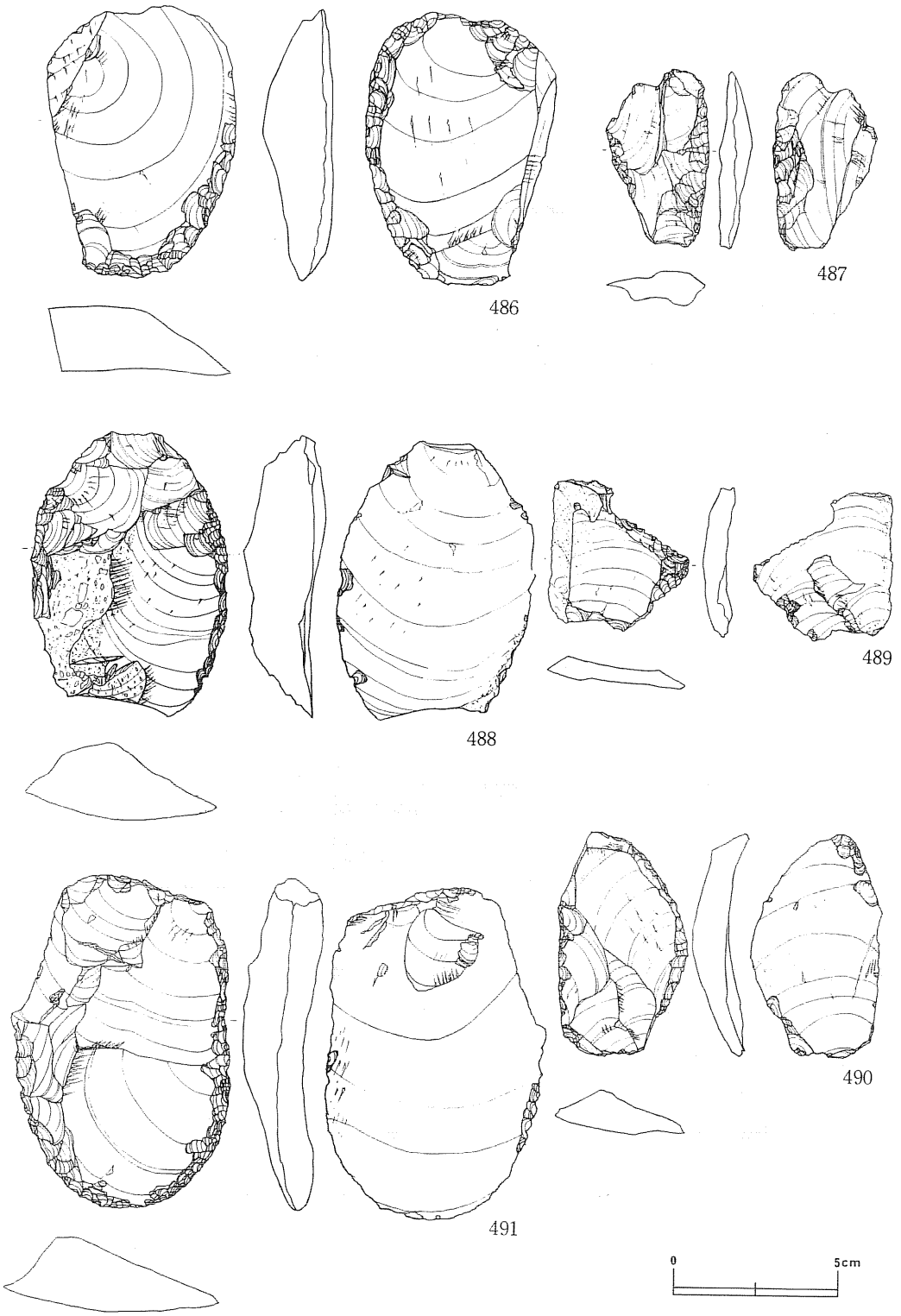

第178図　遺構外出土石器(18)　篦状石器(3)



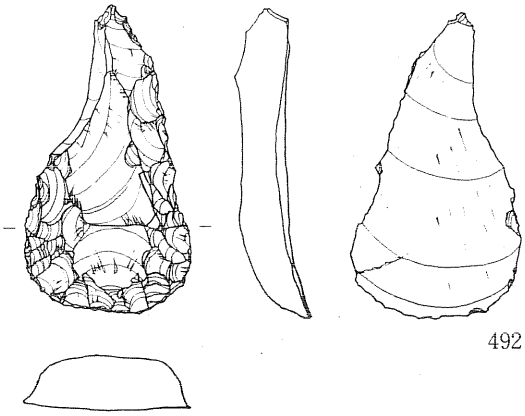

第179図　遺構外出土石器(19)　篦状石器(４)　削器(１)

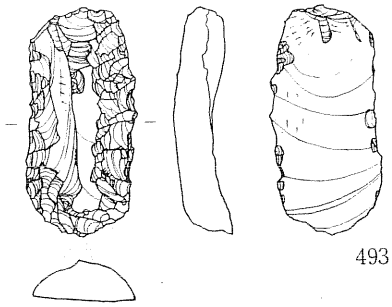


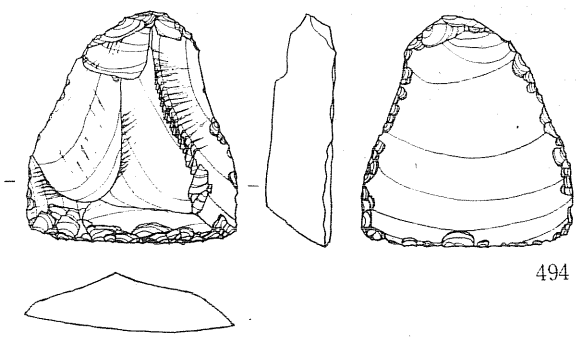

第180図　遺構外出土石器(20)　削器(２)

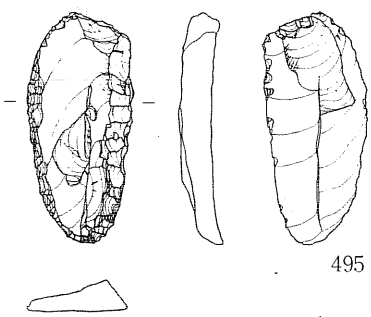


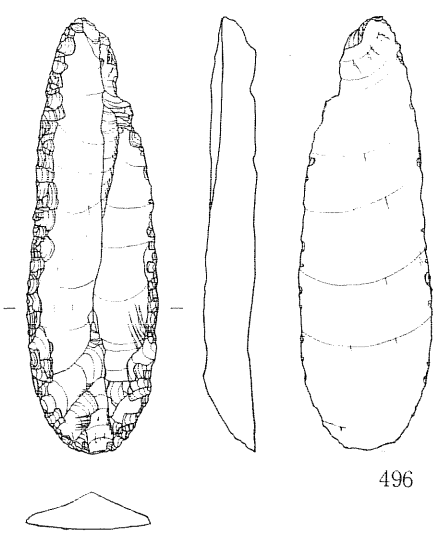

第181図　遺構外出土石器(21)　削器(3)

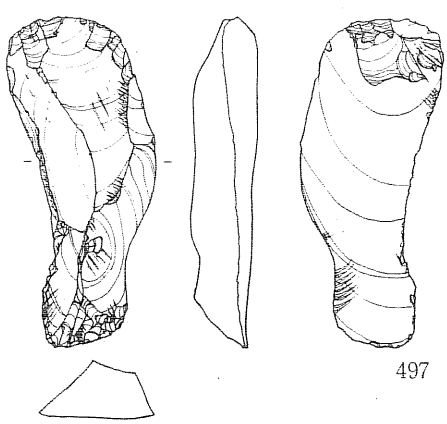


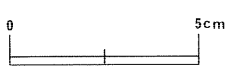



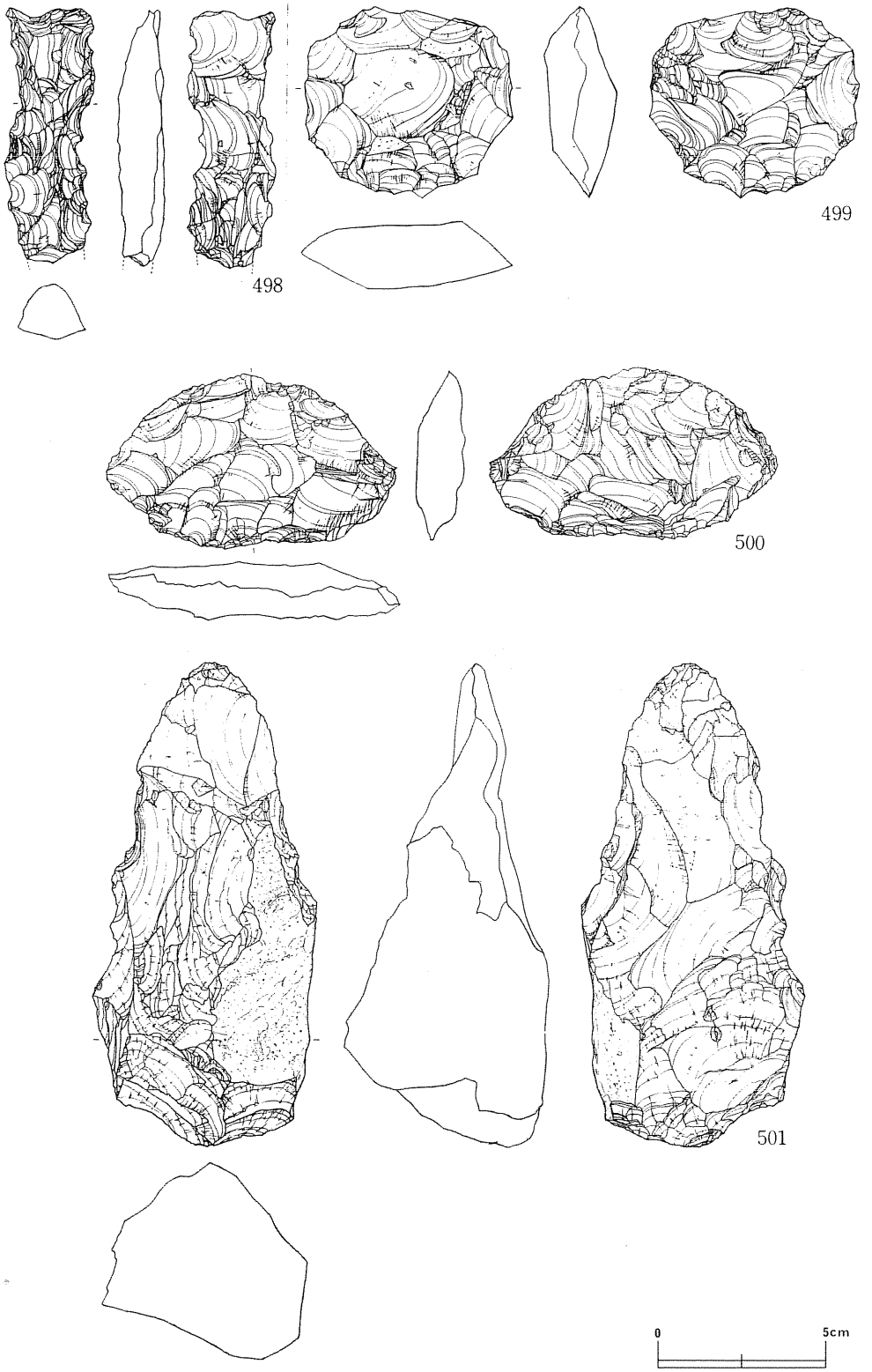



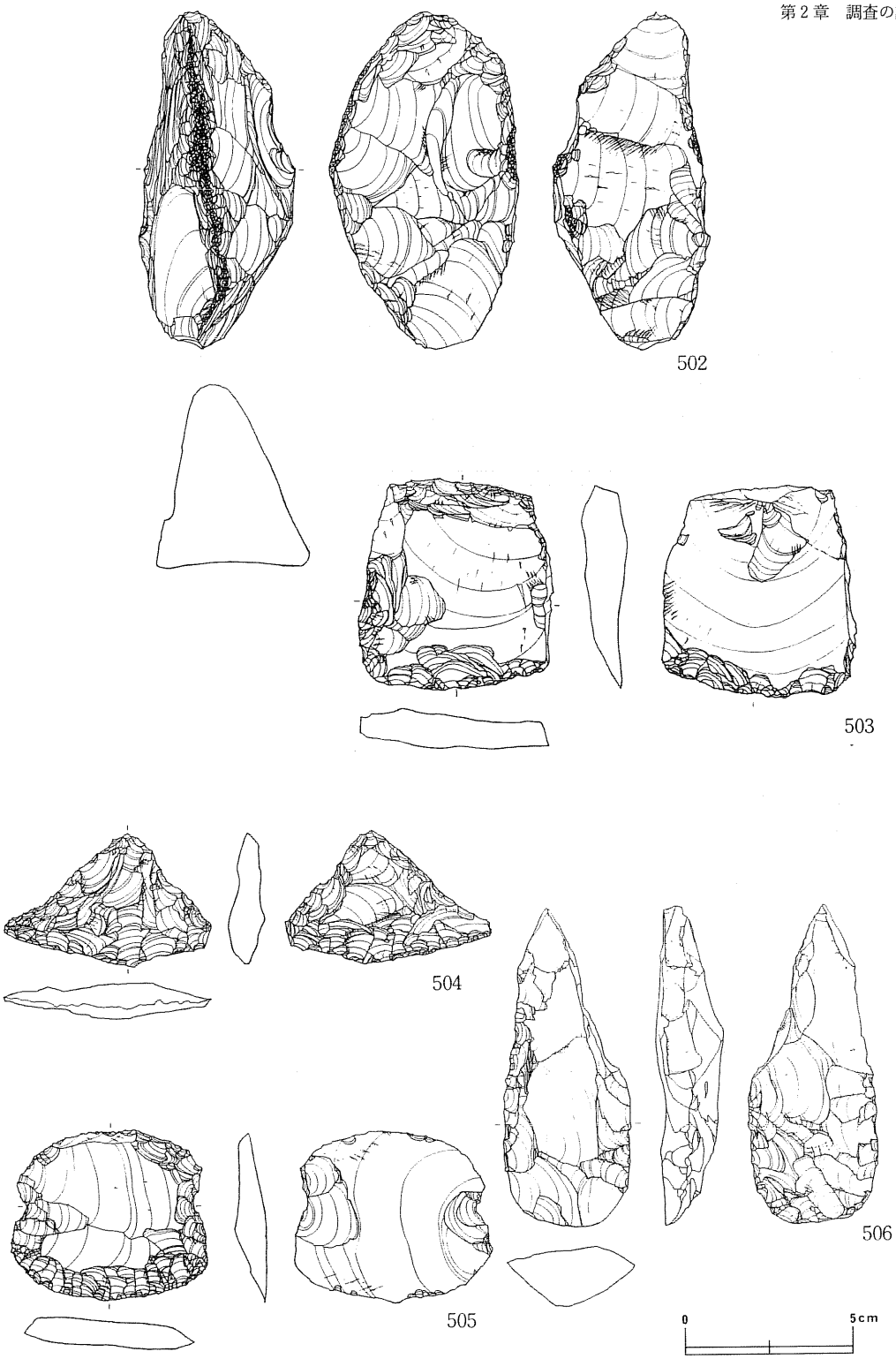



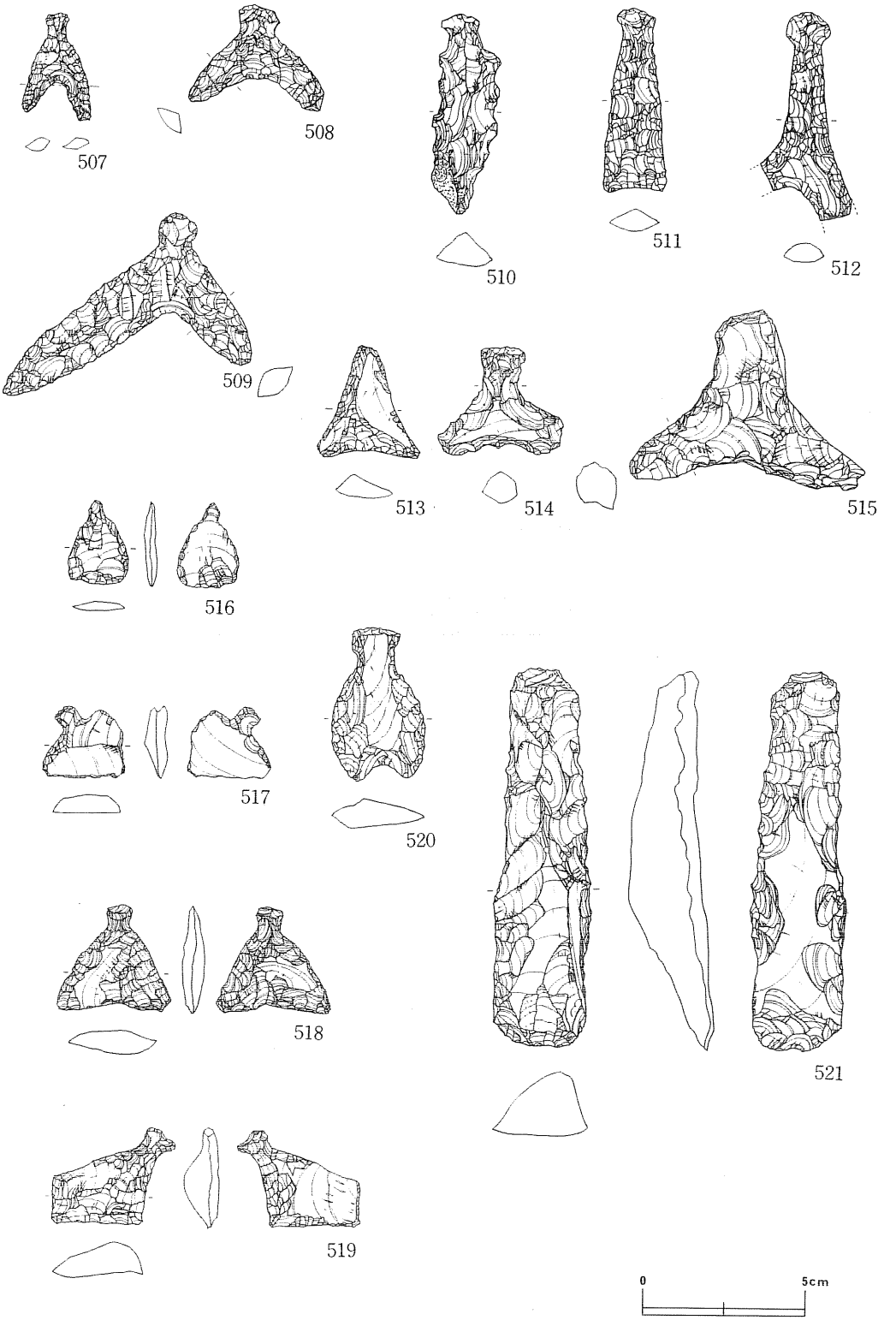

第182図　遺構外出土石器(22)　掻器



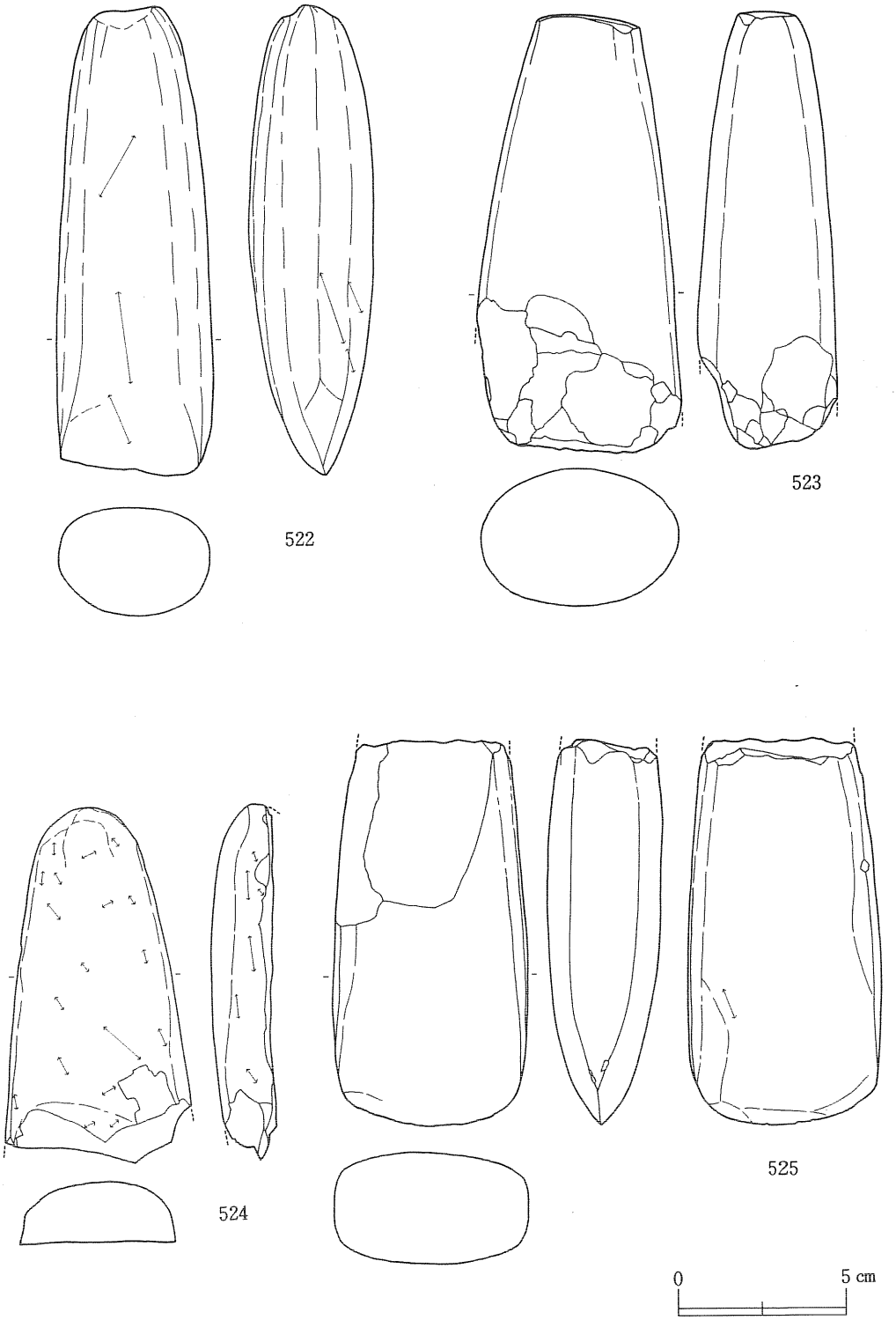

第183図　遺構外出土石器(23)　鋸歯縁石器・円形石器
楕円形石器・握槌様石器



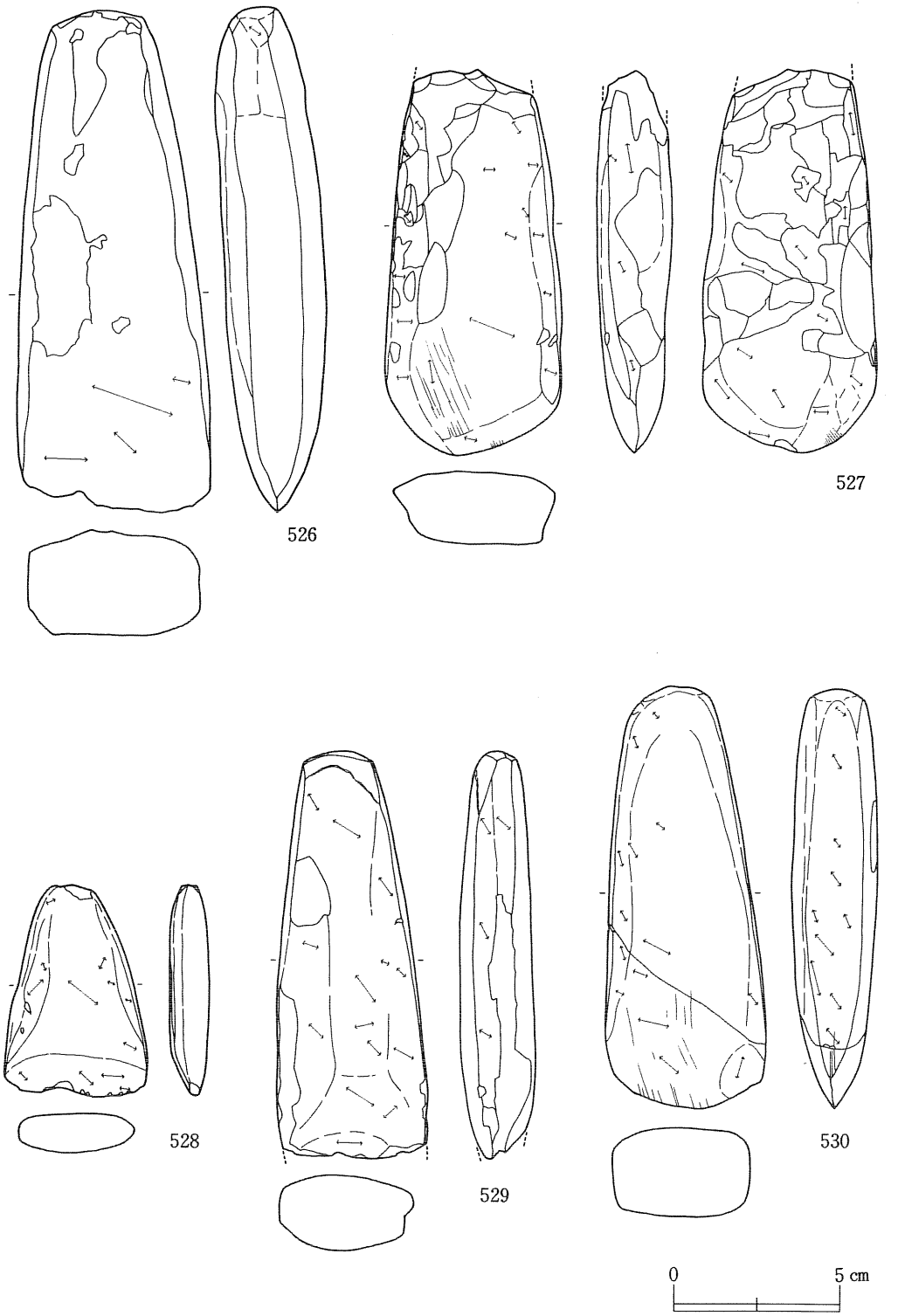

第184図　遺構外出土石器(24)　敲石・ピエス・エスキーユ
帽子形石器・石錘状石器・彫刻刀形石器



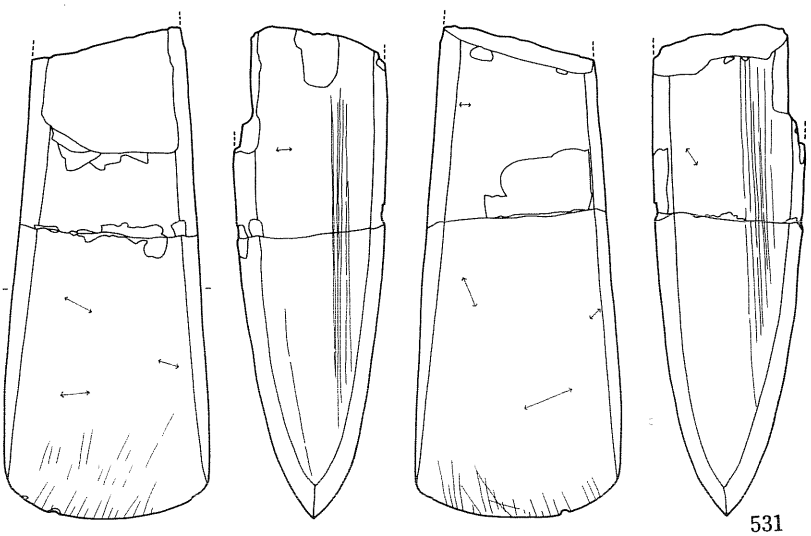

第185図　遺構外出土石器(25)　異形石器・篦状石器(5)



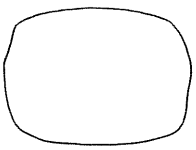

第186図　遺構外出土石器(26)　磨製石斧(１)

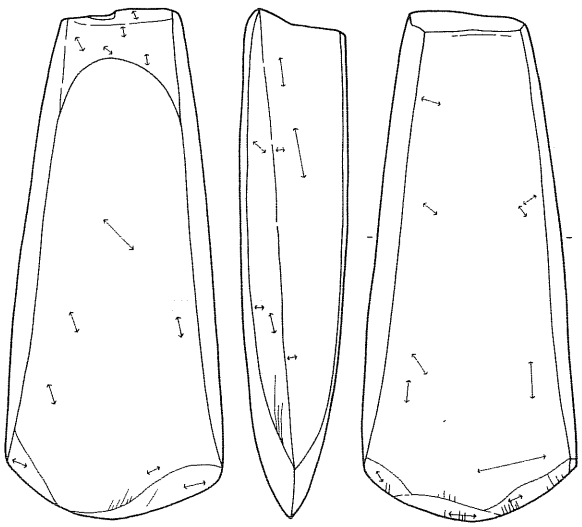



第187図　遺構外出土石器(27)　磨製石斧(２)

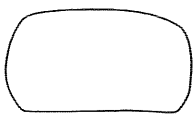


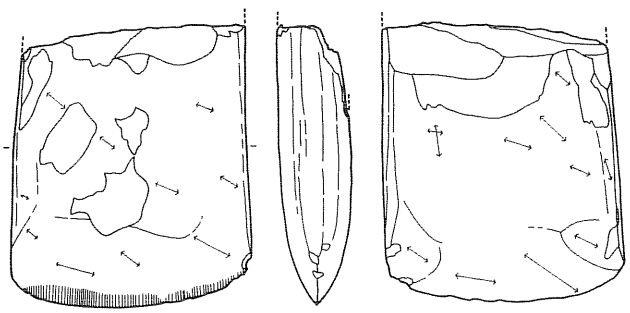
531



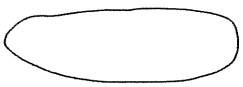


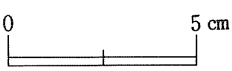
532



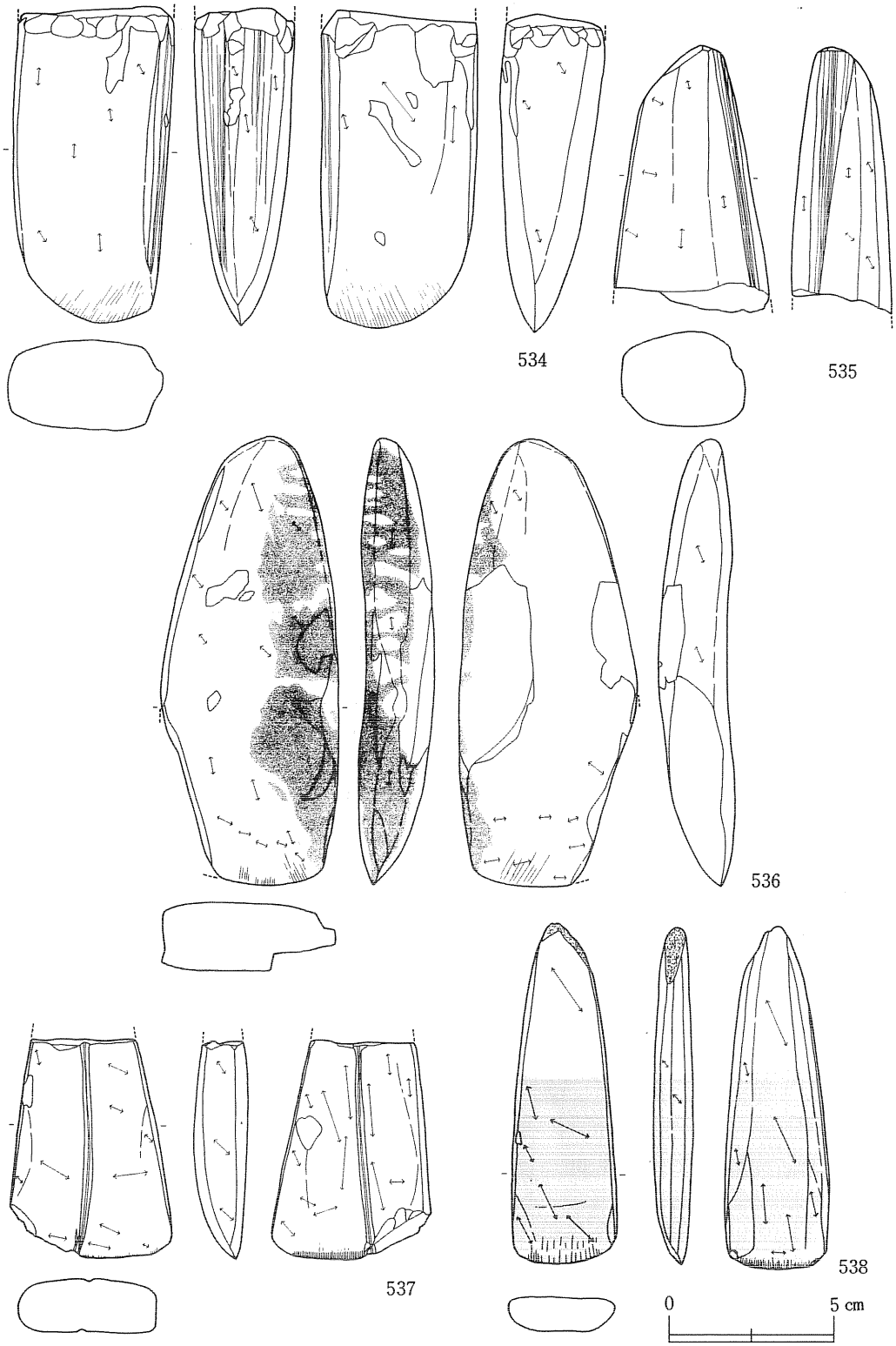


533

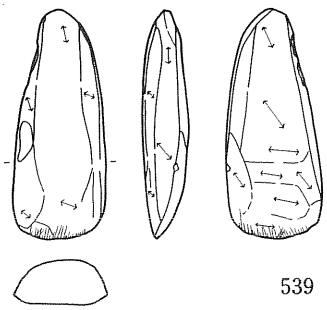


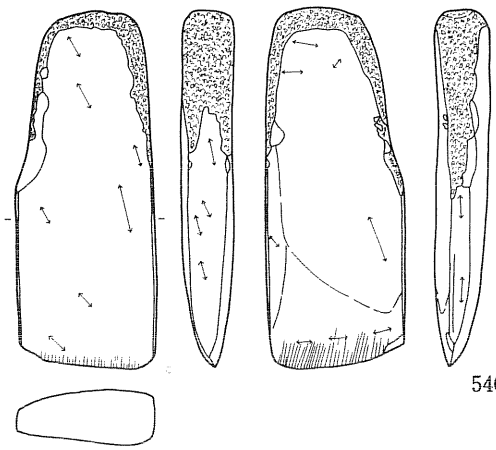


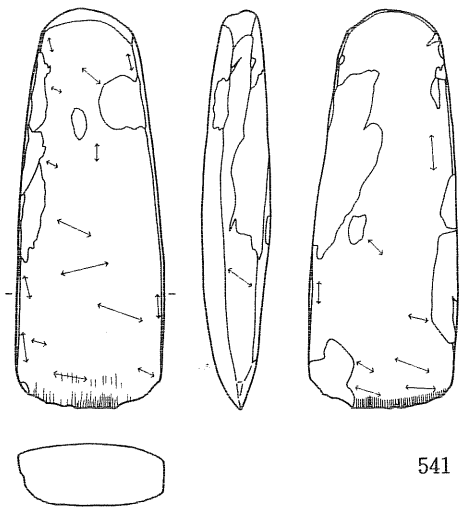

第188図　遺構外出土石器(28)　磨製石斧(3)

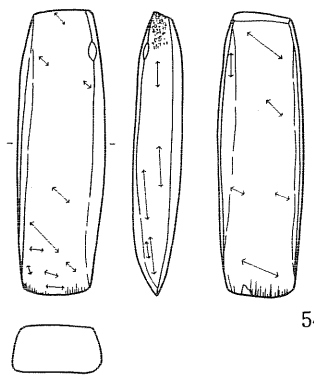


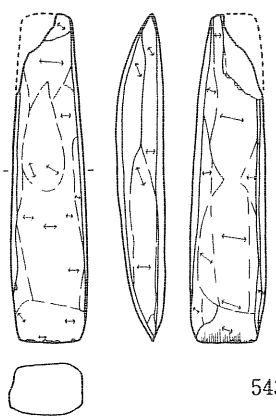

第189図　遺構外出土石器(29)　磨製石斧(４)

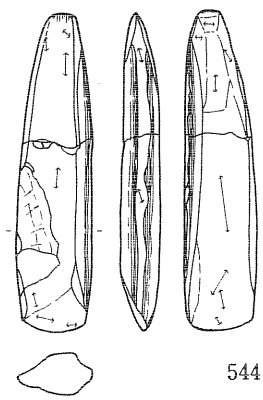

539

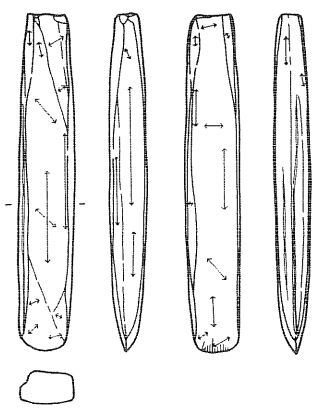

540

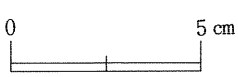

541


542

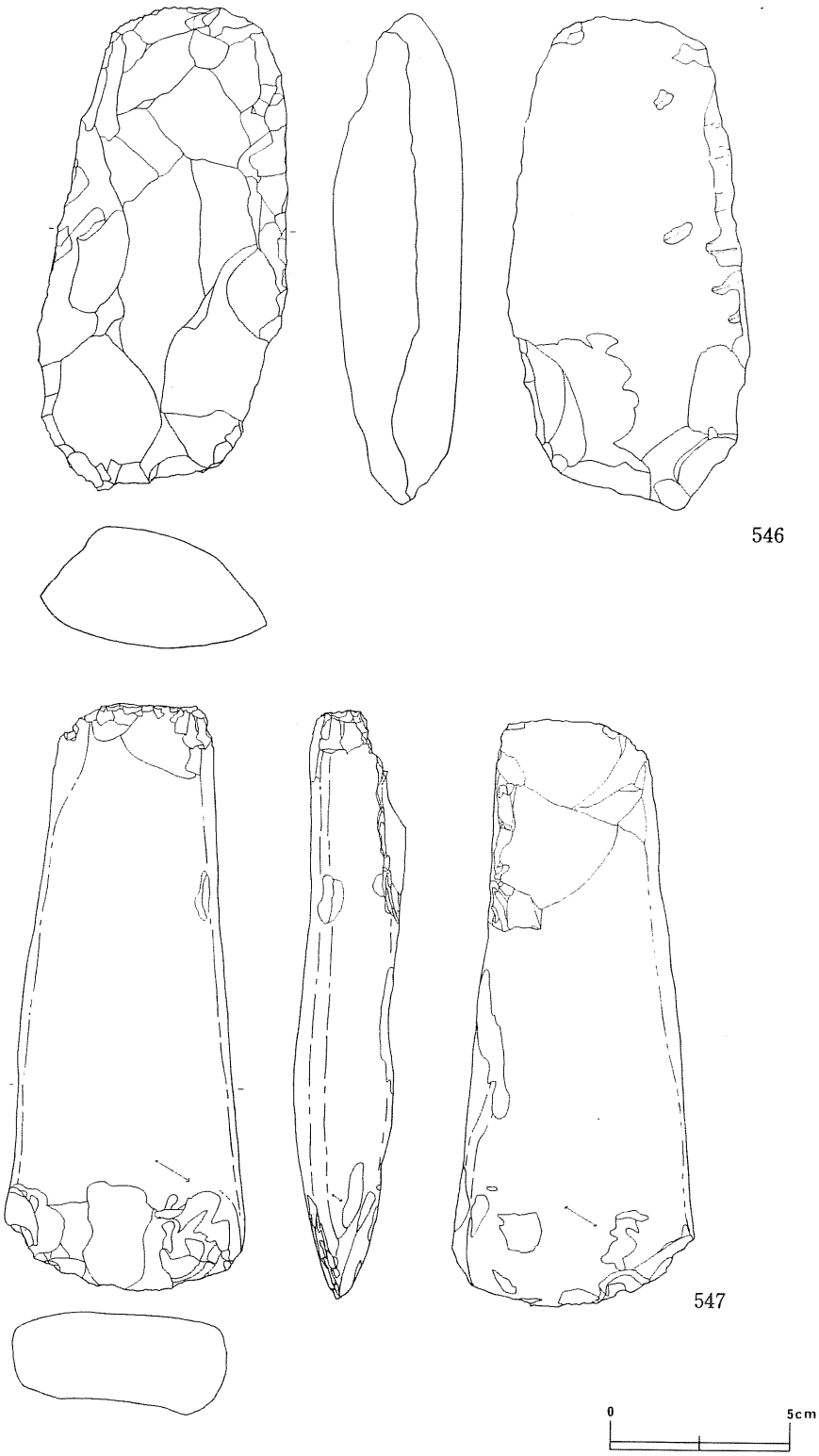

543


544

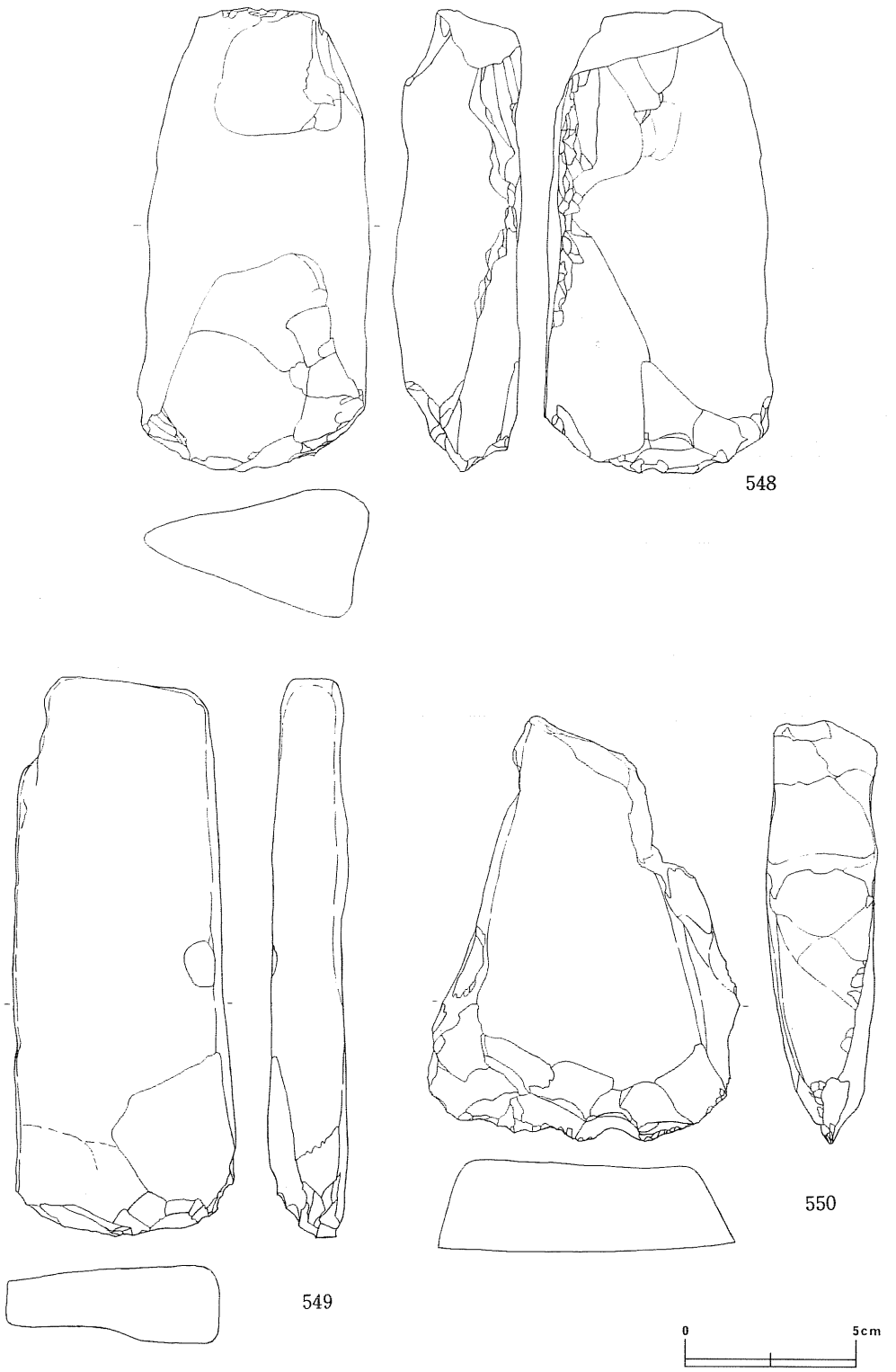

545




第190図　遺構外出土石器(30)　磨製石斧(5)




第191図　遺構外出土石器(31)　打製石斧(1)




第192図　遺構外出土石器(32)　打製石斧(２)

第193図　遺構外出土石器(33)　打製石斧(3)

（2）　礫石器類

本項で扱う石器は、半円状扁平打製石器・擦石・石錘・凹石・磨石・敲石・砥石・石皿・台石・礫器など一般に礫石器とされているものである。遺構内出土を合わせると総数で約6,100点にのぼる。

これら石器群の大きな特徴は、一般的な石錘などを除くと、「する」「たたく」「つぶす」などといった機能を受動的あるいは能動的に想定でき、明瞭なる痕跡を残していることにある。一方この行為の結果は単独ではなく複合して残る場合が多い。従って石器群の帰属を「する」「たたく」「つぶす」といった単一の想定機能で規定していくことは困難である。そこで石器群の線引きを、まず従来より称されている石器名を踏襲したうえで、序列を定め、仮に上位とした石器に下位の石器の要素を含む場合には、下位のものは上位の石器の範疇に収める。すなわち、半円状扁平打製石器＞擦石＞石錘＞凹石＞磨石・敲石と序列を定めておき、たとえば磨石と凹石の要素が複合している場合には凹石の項で扱おうというものである。

ここで一点明らかにしておかなければならないことがある。「する」という行為、結果をいかに把らえるかということである。これは石器群の機能を十分に把握できていない点に起因するものである。一言で「する」といってもさまざまな石材のいろいろな部位がすられているものが存在する。これを大きく「すり石」としてしまえばそれまでであるが、いくらかでもその石器が有している機能に近づくため、次の2種類の「する」を想定してみた。

「磨」＝石材の面をすっているものに「磨」の字をあてる。みがく＝磨くから用いたものである。石皿等とのセット関係を想定できる。磨石、凹石・石錘・半円状扁平打製石器などの磨面が該当する。

「擦」＝石材の辺・稜をすっているものに「擦」の字をあてる。擦り切る、あるいは擦り潰すということから用いたものである。石皿等とのセット関係は積極的に想定できない。半円状扁平打製石器、擦石などが該当する。

従ってこれ以降の記述を「する」に関しては、「磨」と「擦」の使い分けを行うものである。

**半円状扁平打製石器**　（第198～212図、図版102～104）

石器は用字のごとくおよそ半円状を呈する扁平な礫を素材とし、下辺（底縁）部を打ち欠いて刃部を作出しているものである。多くの場合刃部底縁を擦っており、擦（磨）石として報告されている例も少なくない。いわゆる地域性の強い石器として、東北地方北半において縄文時代早期末～中期頃にかけての遺跡で普遍的に出土するものの1つである。住居跡出土119点、土坑出土15点を含め、実に2,466点、総重量約970kgにのぼる。

形態から大きく7分類できる。

Ⅰ類（553～569）：素材の下辺部を打ち欠いて刃部を作出したもの。この部分以外には、手

を加えていない。これが基本型となる。

Ⅱ類：Ⅰ類の側辺に抉りをもつもの。抉りの部位から細分すると

1（570～581）：側辺の両端にあるもの

2（582～587）：いずれか一方にあるもの

3（588～590）：刃部の対辺にのみあるもの

4（591～596）：1と3を合わせたもの

5（597～599）：2と3を合わせたもの

6（600～602）：抉りが刃部対辺近くに位置するもの（1の変形）

7（603～608）：抉りの位置が非対称で片方が把手状のもの

Ⅲ類：Ⅰ類の側面に両面から「打ち欠き」が加えられるもの。「打ち欠き」の部位から細分すると、

1（609～611）：両端に「打ち欠き」が加えられるもの

2（612～617）：いずれか一方に加えられるもの

3（618～620）：2の一方に抉りをもつもの

4（621～624）：3の上部（刃部対辺）にも抉りをもつもの

Ⅳ類：Ⅰ類の対辺に両面から「打ち欠き」が加えられるもの。抉りの有無で細分すると

1（625～630）：抉りを持たないもの

2（631～636）：側辺の両端に抉りをもつもの

3（637～640）：いずれか一方にもつもの

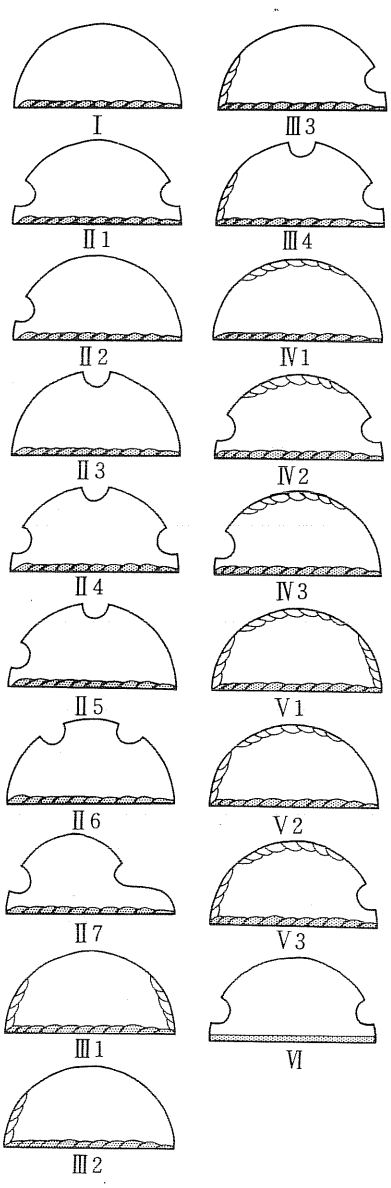
Ⅴ類：Ⅳ類のものに側辺に両面から「打ち欠き」が加えられるもの。

1（641～646）：両端に「打ち欠き」を加えているもの

2（647～649）：いずれか一方に「打ち欠き」を加えているもの

3（650～653）：2の一方に抉りをもつもの

Ⅵ類：刃部側縁に擦り切りによると考えられる使用痕（擦痕）を有するもの。いわゆる石鋸と呼ばれているものである。刃部に打ち欠きを加え、半円状扁平打製石器として底縁を擦っている例も多く、石鋸として独立しては扱わなかった。




第194図　分類別模式図

1（654～657）：石鋸専用として使用されたもの、刃部縦断面がV字形となる。

2（658～665）：刃部底縁に擦りが加わり、半円状扁平打製石器としても使用されたもの、縦断面が逆台形様となる。

Ⅶ類：摩滅あるいは欠損のため分類不能なもの。

各分類別点数は第5表のようになる。

**第5表　半円状扁平打製石器分類別点数表**

| 分類 | | 点数 | |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | | 621 | |
| Ⅱ | 1 | 289 | 638 |
| | 2 | 137 | |
| | 3 | 18 | |
| | 4 | 107 | |
| | 5 | 20 | |
| | 6 | 18 | |
| | 7 | 49 | |
| Ⅲ | 1 | 114 | 341 |
| | 2 | 141 | |
| | 3 | 73 | |
| | 4 | 13 | |
| Ⅳ | 1 | 107 | 269 |
| | 2 | 112 | |
| | 3 | 50 | |
| Ⅴ | 1 | 69 | 195 |
| | 2 | 56 | |
| | 3 | 70 | |
| Ⅵ | 1 | 13 | 36 |
| | 2 | 23 | |
| Ⅶ | | 346 | |
| 計 | | 2446 | |

まずⅢ～Ⅴ類において用いた「打ち欠き」について若干言及しておく必要がある。ここでいう「打ち欠き」とは、製作上は両面から剥離を行う刃部作出と同じであるが、この部分を何らかの機能に供するため打ち欠いたもの（いわゆる刃部）なのか、単に整形に伴う打ち欠きなのか区別できない。「打ち欠き」が鋭利になされているものに関しては打製石斧様の用途も想定できるし、明らかに刃部の対辺を「打ち欠き」ののち擦りを加えているものは、2辺を刃部として使用したことがわかる資料であり、36例ある。ただ刃部側辺（短辺）についてみれば擦りの入る例はない。また「打ち欠き」が純角であり、刃部としては利用不可能な場合は、整形に伴う打ち欠きと理解できるかもしれない。いずれにしろ、両者の線引も明確にできず、かつ鋭利な「打ち欠き」部分をはたして利用したか否かについては不明であるので、打ち欠き＝刃部作出の可能性を残しつつ、「打ち欠き」と記しているのである。

次いで着目点を刃部に限定してみる。この石器を他と画する決定的特徴は下辺部を打ち欠いて刃部作出を行っていることである。刃部を観察してみると次のような相異を認めることができる。

A：鋭利な刃部がそのまま残っているもの。

B：部分的に擦りが加わるもの。Aの要素は残っている。

C：刃部ほぼ全体が擦られているもの。

B・Cの存在からAは未使用の可能性もあるが用途を特定できない現段階においては、

**第6表　半円状扁平打製石器刃部形態分類別点数表**

| 分類 | （1） | （2） | （3） | （4） | （5） | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | 22 | 55 | 9 | 14 | 22 | 122 |
| Ⅱ | 2 | 22 | 5 | 7 | 16 | 52 |
| Ⅲ | 2 | 20 | 1 | 7 | 4 | 34 |
| Ⅳ | 1 | 13 | 1 | 0 | 2 | 17 |
| Ⅴ | 1 | 6 | 0 | 0 | 0 | 7 |
| 計 | 28 | 116 | 16 | 28 | 44 | 232 |

これ以上言及できない。刃部を観察できた2,028例のうち、Aは743例、Bは852例、Cは433例となり、擦りの加わるB・Cは全体の63%を占める。

転用あるいは併用かどうかは不明であるが、この石器には種々の痕跡が認められる。

（1）　磨石の要素が加わるるもの

（2）　凹石の要素が加わるもの

（3）　線条痕が認められるもの

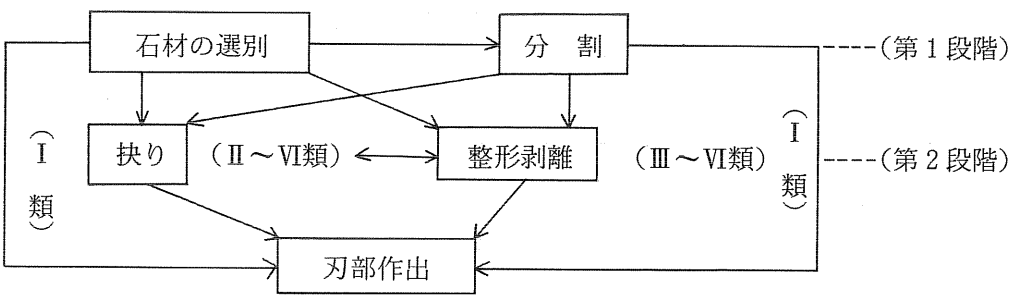
（4）　石材の周縁を利用して敲きが加ええられるもの

（5）　（1）～（4）の2つ以上の複合しているもの

分類別の個数は第6表のとおりである。

製作過程を復元的にみてみよう。

刃部作出をこの石器製作の最終段階であるとすれば、以前に種々の意図をもって分割や剝離が行なわれていることに気付く。まず、石器製作過程を模式的に表してみると次のようになる。




この模式図に添うと先きの分類は主として、第二段階の過程に基づくものであり、ここでは、第一段階の分割に注目してみる。

石器を観察すると、刃部作出にあたって大きく2つの意図（＝方法）で分割を行っているようである。1つは、石材の厚さを特定するため、いま1つは、石材の形態を特定するための分割である。模式的に示すと第195図のようになる。

ア：石材の厚さを減じさせるため、両面から削ぐように剝離をおこなっているもの。この方向に剝離し易い板状節理の石材を用いている例が多い。566・595・599が好例であり13例認められる。

イ：アと同様の意図で、片面から削ぐように剝離を行っているもの。片面全面に及ぶもの、片面の半分程を剝離しているものがある。前者は564・577・586・594・596・629が該当し全体で133例ある。後者は568・585・620など193例認められる。

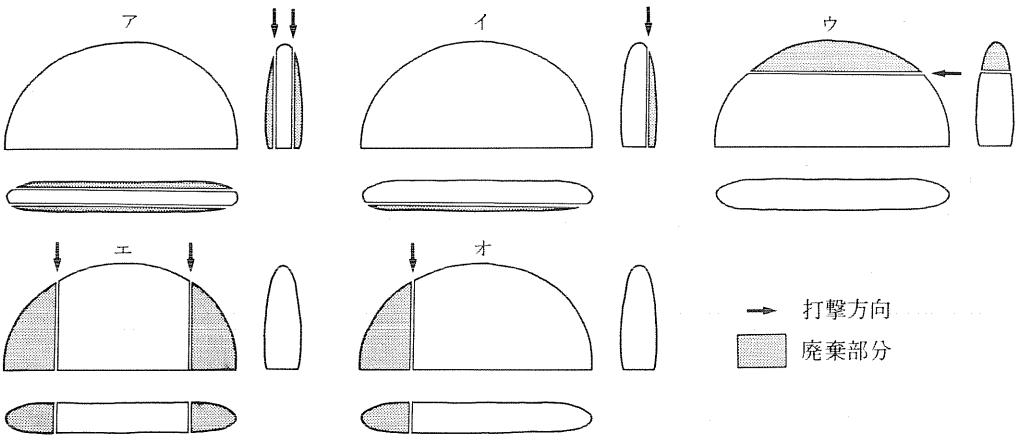
ウ：石材に対し横方向に打撃を加え分割しているもの。569・580・587など24例ある。

エ：石材に対し縦方向に打撃を加え分割しているもの。石材の両端をカットしているもの

567がこれに該当し、オと合わせて8例ある。

オ：エと同じく、石材の一端を縦方向の打撃によって分割しているもの。

この他、579は斜位方向に加撃している例。565は小型の製品（完形）であるが、片面を剝離（イ）ののち左上から右下方向に加撃し、三角形様に形作っているものである。




**第195図　半円状扁平打製石器分割模式図**

ア～オのような分割を行っているものは371例を確認している。総数の18%程である。中でもイが全体の88%を占めている。一方分割という過程を経ずに第二段階に進んでいるものは全体の80%と圧倒的に高い率となっている。しかしながら、この第一段階の分割というのは、その後の剝離作業で観察できなくなっている可能性を充分に考慮しておく必要はあろう。

また第二段階の整形作業において例は少ないのであるが、意図的な研磨工程を経てから刃部を作出しているものが存在する。言い換えれば、素材をそのままあるいは剝離整形ののち、最終的に刃部以外全面を磨き上げているものである。明らかに磨石とは異なるもので581・607・608・658が該当し、合わせて10点出土している。608は、握り部分を石冠様に作り出している。半円状扁平磨製石器とでも言うべきであろうか。

**擦石**　（第213図）

礫材の底縁を打ち欠きを伴わずに擦っているものを、擦石と呼ぶ。住居跡出土6点、土坑出土1点含めて69点出土している。この石器の形態と擦るという観点からすれば半円状扁平打製石器のB・Cタイプと同一の機能を果たしていたと考えられるものである。

形態的に大きく2分できる。

Ⅰ類：素材をそのまま利用しているもの。縦断面から細分が可能である。。

A（666～668）：断面が楕円形を呈するもの。いわゆる扁平な形をなしている。扁平擦石と称することができよう。39点出土している。うち6点には凹石（敲打）の要素を含み、5点に磨石の要素を合わせ持つものがある。

B（699～671）：断面が逆三角形を呈するもの。いわゆる三角柱に近い形状をなしている。10点出土している。うち3点は凹石の要素を含んでいる。本類は、他県において三角柱状磨石、特殊磨石などと呼ばれているものである。

Ⅱ類（672・673）：短辺に抉りを有するもの。半円状扁平打製石器Ⅱ1・Ⅱ2類に相当する。20点出土している。断面形態は全てⅠ類Aと同じである。672は片面に凹みもつ。底縁の擦り幅をみてみると、最小で5㎜、最大でも15㎜であり半円状扁平打製石器と比較しても若干幅が狭くなる傾向は認められる。

石錘　（第214図、図版105）

一般的には、漁網錘あるいは編物のオモリとしての用途が想定されているもので、住居跡出土29点、土坑出土6点含めて942点出土している。ここで見られる石錘は、いずれもほぼ扁平な礫を素材とする礫石錘と呼ばれているものである。抉りの数とその部位から分類すると、以下のようになる。

Ⅰ類：抉りを石材の両端2箇所にもつもの。

A（674～695）：長軸の両端に抉りをもつもの。599点出土している。一般には、両面から打ち欠いて抉りを入れるものであるが、676・677のように片面からの打ち欠きのものも散見できる。675は抉りを両端とも敲打により作り出しているもので、685・691も片方（図左）を敲打による抉りをもつ。680は両端とも両面からの打ち欠きののち敲打を行って抉りを完成させている。694は片面に磨り面をもつもの、695は両面に横位を主とする線状痕が認められる。この他凹石（敲打）の要素をもつものも含めて、付加要素をもつものは40例ある。

B（696～707）：短軸の両端に抉りをもつもの。143点出土している。697は、形態的に石匙のつまみ作出のような抉りで、本来的に石錘の部類に属しない可能性がある。

Ⅱ類（708～727）：抉りを4箇所にもつもの。98点出土している。717は図右の抉りを除く3方を、718は全ての抉りを敲打により作出している。719～721は凹石の要素をもつもので、721には両面に線状痕を合わせもつ。722～727の6個についてはMJ24グリッドからほぼ一塊となって出土したもので、位置的にはSI240東方の南側斜面の捨て場の一角にあたる。

Ⅲ類（728～736）：Ⅱ類のうち1箇所には抉りの入らないもの。48点出土している。抉りの入らない箇所は、自然の凹みがあり抉り入れる必要がなかったと考えられるもの（728・729が相当するであろうか）は例外的で、いかにして3箇所で紐掛けを行ったか興味のもたれるところである。

Ⅳ類：欠損等のため分類不能のもの。54点ある。

**凹石**　（第218～222図、図版106・107）

石器は、礫材の面に主に敲打による凹みを有するもので、一般に凹石と称されているものである。住居跡出土62点、土坑出土16点を含めて2,240点出土している。凹石には、磨石の要素、周縁部（端部）を利用した敲石の要素、さらに線状痕の認められるものが存在する。

形態から分類してみると、大きく円形、楕円形、棒状、球形の4分類が可能である。ここでは形態の決定を次のように数的に処理してみた。

Ⅰ：円　形　長さ／幅＝1.0～1.29

Ⅱ：楕円形　長さ／幅＝1.3～2.99

Ⅲ：棒　状　長さ／幅＝3.0～

Ⅳ：球　形　長さ／幅＝1.0～1.29　かつ
　　厚さ／幅＝0.6～

Ⅴ類：欠損等のため分類不能のもの

次いで、凹面の特徴からみてみると、

A：凹面がU字あるいはV字状にくぼんでいるもの。敲打作用の集中した結果と考えられる。

B：凹面の輪郭が明瞭でなく、小さな凹凸の集合体のように見えるもの。分散的な敲打作用の結果と考えられる。

C：A・B両者の併存するもの。

さらに細分するとすれば、凹面の数からも分類可能となる。最大で4面に凹みをもつものがあり、14例確認している。分類別の個数は第7表の通りである。

**第7表　凹石分類別点数表**

| 分類 | | 遺物番号 | 点数 | |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | A | 737～741 | 189 | 293 |
| | B | 742・743 | 51 | |
| | C | 744・745 | 53 | |
| Ⅱ | A | 746～758 | 706 | 1071 |
| | B | 759～761 | 157 | |
| | C | 762～765 | 208 | |
| Ⅲ | A | 766～772 | 332 | 498 |
| | B | 773 | 59 | |
| | C | 774 | 107 | |
| Ⅳ | A | 775～778 | 44 | 77 |
| | B | 779 | 13 | |
| | C | 780～783 | 20 | |
| Ⅴ | | | 301 | |
| 合計 | | | 2240 | |

前述のように凹石には凹面以外に多くの要素を含んでいる。

(a) 磨面をもつ（磨石の要素）

(b) 線状痕（擦痕）をもつ

(c) 石材の周縁（端部）を利用して敲きが加えられるもの（敲石の要素）

(d) (a)～(c)の複合しといるもの

集計してみると、総数の約3分の1にあたる721点に何らかの付加要素を認めることができる。なかでも磨石の要素を含むものが全体の74%を占めている。

**磨石**　（第233・224図、図版107）

およそ扁平な礫材の面を磨いている石器であり、序列上最下位に置いたため、磨面のみを有する一群となる。住居跡出土3点、土坑出土1点を含め97点出土している。磨面数と磨面の状態から次のように分類できる。

A：磨面を片面のみに有するもの

B：磨面を両面に有するもの

A・Bはそれぞれ磨面と自然面の間に明瞭な稜線が形成されるものと明瞭な稜線が認められないものの別が観察でき前者を1、後者を2として細分すると、A1・B2のように分類できる。ただこの1・2が使用頻度を反映しているものか、石材の差異に基づくのかについては明らかにできなかった。分類別個数は、A1（784～786）11点、A2（787～789）35点、B1（790～791・795）20点、B2（792～794）31点である。795はB1としているが、面と面の間の2辺（稜）を擦っているもので磨石と擦石の要素が合わさったものと考えられる。同種はこの1例のみである。

**敲石**

石材の周縁（端部）に敲打剝離痕をもつもの。25点出土している。磨石同様、序列上の最下位であるため、単一の痕跡をもつものに限定される。形態的には棒状の石材の長軸端部を使用しているものと、他の形態を示す石材を用いているものに分けられる。しかし、斉一性に乏しく形態細分は困難である。この点において、他の石器群と異なる様相を示すものであり、敲くという単独の行為からすると石材に形態的意味をもたせる必要性は少なかったものと考える。

**砥石**　（第224図、図版108）

797はいわゆる有溝砥石であり、ある種の石（石器）を研磨するために使用されたと考えられる。軟質の凝灰岩を荒く打ち欠いたものを素材としており、完形である。溝は石のほぼ中軸線上に、幅8㎜長さ26.5㎝の痕跡を残す。断面はU字形を呈し、最深で5㎜である。またこの溝に平行して細長く溝状にわずかに凹んでいる箇所を観察できる。これも中央の溝と同じ役割をはたしたものと考えられる。溝のある面は、溝に向かって緩く傾斜しかつ磨かれている。溝同様なんらかの研磨に伴うものであろう。

また、第81図324のSI213出土の石皿にも、幅7～8㎜、長さ5～10㎝の溝が表裏面にそれぞれ2本ずつ刻されている。溝の幅、断面形が先きの砥石と合致することから、両者は同種のものを研磨したと考えていいであろう。

796は立方体をなす破損品であるが、3面に砥面をもつものである。石皿の再利用である可能性が高い。

**石皿**　（第226・227図、図版108）

石皿は住居跡出土7点、土坑出土2点を含めて39点出土している。欠損例が多く形状の知れ

るものは少ないが、隅丸長方形ないし楕円形を呈するものが主となると考えている。意図的な縁を形成しているものはない。磨痕をもつ使用面は浅い皿状にくぼむもの、あるいは平盤状を示すものが多く、断面がU字形に大きくくぼんでいるのは、SI 213出土（第81図324）と805の2例のみである。この2例は他の石皿とは用途が異なると考えられる。使用面は、片面のみ25例、両面を使用したもの14例ある。802・803は、後者に属するもので、表面（図示面）が浅い皿状、裏面は平盤状となっている。804・805は片面のみの使用である。火熱を受けているものが10点あり、806が該当する。

台石　（第227図）

台石としたものは、住居跡出土2点を含めて10点出土している。石皿的機能も入るが広義に「作業台」的道具を台石と認知している。従って台石に認められる痕跡は磨痕、擦痕、敲打痕、など多枝にわたる。

807は、弱い磨痕をもつもので、使用面は皿状にややくぼんでいる。断面形が逆三角形を呈するもので、石皿とは形態的に異なるため台石とした。明らかに土中にある程度埋め込んで使用したものであろう。

808は、片面2箇所に敲打による潰れが認められるもので大型の凹石様である。

礫器　（第225図）

意図的な剝離等を行っている石器のうち、いままでみてきた礫石器の枠に入らないものを礫器として一括する。不定形な礫材の一角を打ち欠いて打製石斧あるいは石鍬様に加工したもの、敲石、台石の可能性のあるものも含まれる。100点近く出土している。

このなかで第225図の礫器に注目したい。形態的に「ナタ状」を呈するものでナタ状礫器と仮称しておく。刃部、握手部から成る。この類の形態を示すものは、第74図278のSI 126出土を含めて13点ある。打ち欠きの部位から細分できる。

A（1）　：刃部のみを打ち欠いているもの。4例ある。

B（2，3）：刃部、握手部を打ち欠いているもの。5例ある。SI 126出土はここに入る。

C（4）　：握手部のみを打ち欠いて握り易くしているもの。4例ある。うち2例には、刃部にあたるところに弱い潰れが認められる。A・Bとは異なり敲石的用途を想定できる。

このような形態を示す例は、青森、岩手方面でも散見できる。打製石斧あるいは石鍬の項目で扱う場合、青龍刀に似るとして石刀の項目に入っているものもある。

有孔石

これは自然石ではあるが、孔のある石を有孔石と仮称している。遺構内出土の2点を含めて133点出土している。この点数からみても、当時の人々が何らかの意図をもって集めたと考え

るのが妥当であり、石器に準じる扱いで項目を設けたものである。

重量は最小で 10 g、最大では 950 g に及ぶ。平均すると 130 g になるが、50～69 g に最大のピークをもち全体の 20% を占める。50～109 まで枠を広げると 46% になる。一方 300 g 以上のものは全体の 8% にすぎない。

この有孔石が、実用品として使用されたものであるとすれば、孔の存在から石錘同様の用途を想定できるであろう。

## 小　結

6,000 点を超す礫石器類を 11 器種に分類し、形態により細分を試みたものもある。礫石器を出土比率に応じてグラフ化したのが第 196 図である。器種により大きな偏りがあることが分かる。石器の想定される機能がこの出土比率に反映されているとしても、現段階で言及できる程のデータはないに等しい。今後、膨大に蓄積された資料に詳細な検討を加えていくことによって、機能の一側面なりを明らかにできるものと考えている。

礫石器類、ここでは半円状扁平打製石器、石錘の 2 器種に特定し、機能を想定していくうえで必要と思われるデータ提示を兼ねて若干の結びとしたい。

半円状扁平打製石器(註1)（Ⅰ～Ⅴ類）について

法量についてみれば、形態同様斉一性が強い。殊に厚さは扁平の名が示すようにかなり限定されているようである。最小で 0.9 ㎝、最大の 8.3 ㎝は例外的であり、平均値の 2.7 ㎝前後に集中している。この数値は最大幅を計測したもので、刃部作出にあたってはこの部分に剝離を行って厚さを減じさせている。結果として平均 1.4 ㎝の刃部厚をもつことになる。B・C タイプの底縁に擦りが加わるものについては擦り幅の平均 0.84 ㎝を測る。

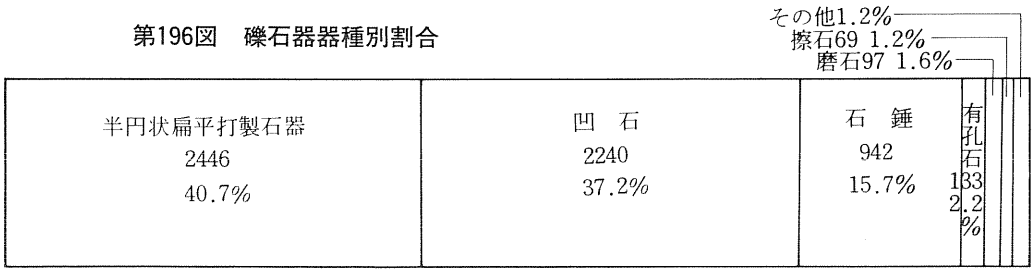
石器の長さは最小 8 ㎝、最大 23.7 ㎝で平均 14.8 ㎝。幅は最小 4 ㎝、最大 16.1 ㎝、平均すると 8.6 ㎝になる。重量では最小 80 g、最大 1420 g、平均 417 g となる。これら平均値は長さ、幅等を含めて各分類毎に偏った数値を示すといった点は認められなかった。

一方、使用している石材については他の遺跡で報告されているのと同様、安山岩を用いている例が圧倒的に多く 80% を超す。次いで軟質の凝灰岩が 15% 前後を示す。その他、砂岩、花崗岩などはそれぞれ 1% 未満の割合となる。なお頁岩を素材としているものが 1 点確認されている。先きに述べた分割を伴う資料と石材の関係を調べてみると、アないしイの分割を行っているものは凝灰岩を素材としている比率が 28% と高くなる。逆にウ～オの分割例はほぼ例外なく安山岩を用いている。これらは明らかに石材の性質に基づくと理解できる。

石鋸（半円状扁平打製石器Ⅵ類）について

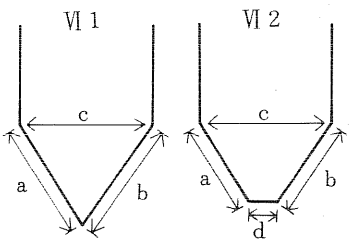
Ⅵ類については、先に側縁部に擦り切り痕跡を有することから石鋸という名称を援用してき

**第196図　礫石器器種別割合**




た。事実、主に東北地方北部以北に分布するこの種の石器を石鋸として報告している例は多い。擦切石斧製作にあたって、原石を引き切る道具であるという認識がなされているようである。まずは形態と法量からⅠ～Ⅴ類との比較を含めて述べてみる。

石鋸の分類においてはⅠ～Ⅴ類で用いた形態分類とは異なる視点において類型化したため、形態についてはふれ得なかった。ここで出土している石鋸の形態には強い斉一性を認めることができる。出土した36点のいずれもが抉りをもつものであり、半円状扁平打製石器Ⅱ１・Ⅱ４・Ⅱ６・Ⅱ７類のいずれかに該当するものである。殊に特異な部類に入るⅡ６・Ⅱ７の抉りをもつものが13例あることは特筆すべきであろう。




a・b：擦り切り幅
c：刃部最大厚
d：底縁部擦り幅

**第197図　石鋸縦断面模式図**

また、法量についてはⅠ～Ⅴ類よりひと回り大きい傾向を示している。平均値でみると、長さ15.2㎝（Ⅰ～Ⅴ類14.8㎝、以下同じ）、幅10㎝(8.6㎝)、厚さ2.9㎝(2.7㎝)、重量ではⅠ～Ⅴ類より約100ｇ重い平均512ｇを量る。

**第８表　石鋸刃部計測表**

| | サンプル数 | 最大値㎝ | 最小値㎝ | 平均㎝ |
|---|---|---|---|---|
| a・b | 161 | 3.85 | 0.5 | 1.74 |
| c | 85 | 2.9 | 1.0 | 2.12 |
| d | 67 | 1.2 | 0.25 | 0.56 |
| 角　度 | 85 | 34° | 89° | 57.8° |

石鋸の刃部となる側縁部を注視してみる。第197図にこの部分の縦断面模式図を示す。１つの特徴は片面にしか擦り仕り痕跡をもたないものが５例存在するということである。これを石鋸と称してよいのかについても問題はあるが、以後述べることとの係わりもあり、一応石鋸の仲間に入れておく。ついで各部のデータを第８表にまとめてみる。石器１点につき２ないし３箇所の測点を設けている。ａとｂの幅（長さ）は必ずしも同一ではなく、比率でみると、１：1.2～１：1.99に45%、１：２～すなわち仮にａが１㎝でも裏面のｂが２㎝以上という場合も12%ある。片滅りとでも言えるであろう。ｃの幅はⅠ～Ⅴ類の平均1.4㎝に比して広く2.12㎝を測る。角度はａとｂの交点、Ⅵ２ではａとｂを延長して得られた交点で計測したもので、平均すると57.8°になる。５°刻みで集計してみると50°～54°が全体の25%を占め、40°～54°に最大のピークをもち約50%、次いで60°～69°に26%のピークがくる。逆に平均値となる55°～59°の頻度の少ない点が注目されよう。

以上を踏まえたうえで、側縁部の擦痕を観察してみる。原石を引き切るものとの見解に立てば、残る擦痕は基本的には刃部（下辺）に平行、すなわち横方向に認められるはずである。実際観察不能のものを除いて、横方向に擦痕をもつものは多い。ただし40％弱である。その他の過半数は右上がりもしくは左上がりの痕跡として、また1例ではあるが縦方向の擦痕が認められるものである。

引き切るという行為から想定される痕跡は、二側縁同時に付されるものと考えられる。たとえば片面に右上がり20°の擦痕が認められるとすれば、裏面には左上がり20°の擦痕が付くはずである。ところが、すくなくとも10例についてはあてはまらない。擦痕の方向が合致しないのである。（図示したものでは、第211、212図656、658、659、663、665が該当する。）しかも、複数方向に痕跡が認められる例が多い。656でみると、片面には横方向、右上がり15°、左上がり15°の擦痕、裏面には横方向と右上がり20°の擦痕が残っているのである。この事実をいかに把らえるかである。先の5例の片面のみの擦り切り痕の存在、a・bとした擦り切り幅の比率差と合わせて次の点を指摘しておきたい。

引き切るといっても、一定方向に均一の力をかけて作業するというより、側縁部の左右いずれかに力点をおき、石器の持ち替え（180°回転）等を繰り返すことによって作業を進めていったと考える。この結果、片減りの側縁部が形成され、不定かつ複数方向の擦痕が付されることになる。これである程度の不自然さは一応解消されるであろう。

石錘について

法量から若干のデータ提示を行う。第9表が重量分布である。最低20ｇ、最高で1,276ｇを量る。平均では240.3ｇとなるが、分類別でみると、ＩＡ類262.1ｇ、ＩＢ類127.4ｇ、Ⅱ類224ｇ、Ⅲ類340ｇである。ＩＢ類が平均値の半分ほどに、逆にⅢ類は300ｇを超す。この分布図から全体として言えることは、分類が抉りの部位により行われていることからして、重量差が抉りの部位にはあまり反映されていないようである。ただＩＢ類についてみれば、1点を除いて530ｇ未満に収まること、Ⅰ類が50～109ｇにピークをもつのに対し、Ⅱ類では特にピークをもたずに50～270ｇの広範囲に分散している点を見いだすことができよう。

長さについても、その分布は重量分布とほぼ比例しているようである。全体では最小2.7㎝、最大20.6㎝とだいぶばらつきがある。ピークは7㎝台で14％、7～10㎝台までだとほぼ半分を占める。平均は10.1㎝である。ＩＡ類については全体と同じ傾向を示すが、ＩＢ類、Ⅱ類、Ⅲ類では若干様相が異なる。ＩＢ類は平均すると、8.2㎝と小さい。Ⅱ・Ⅲ類では5㎝未満のものは存在しない。かつピークはⅠ類より高く10㎝代に20％、Ⅲ類では12㎝代に19％となる。Ⅲ類で平均すると、11.7㎝となる。

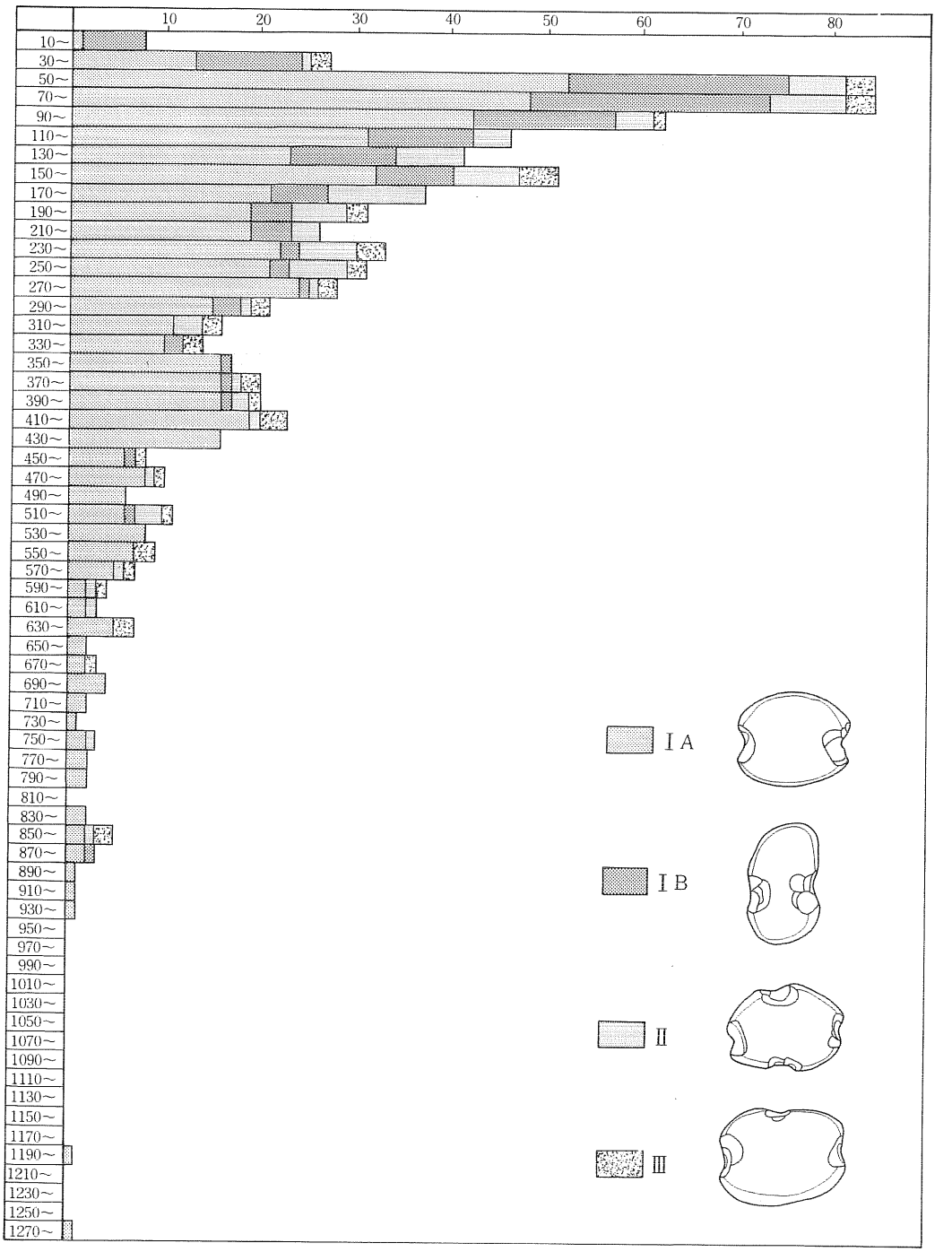
註1　半円状扁平打製石器という名称については、昭和33年に刊行された岩手県の水切場遺跡調査報告において鈴木孝志が命名したものである。近年はこの名称が一般化しているがおよそ昭和40年代までの報告をみると、種々の呼び名でいい表されている。秋田県内に限定してみても次のような名称・表現がなされている。

①大形打石器（森吉町狐岱遺跡、昭和29年調査）

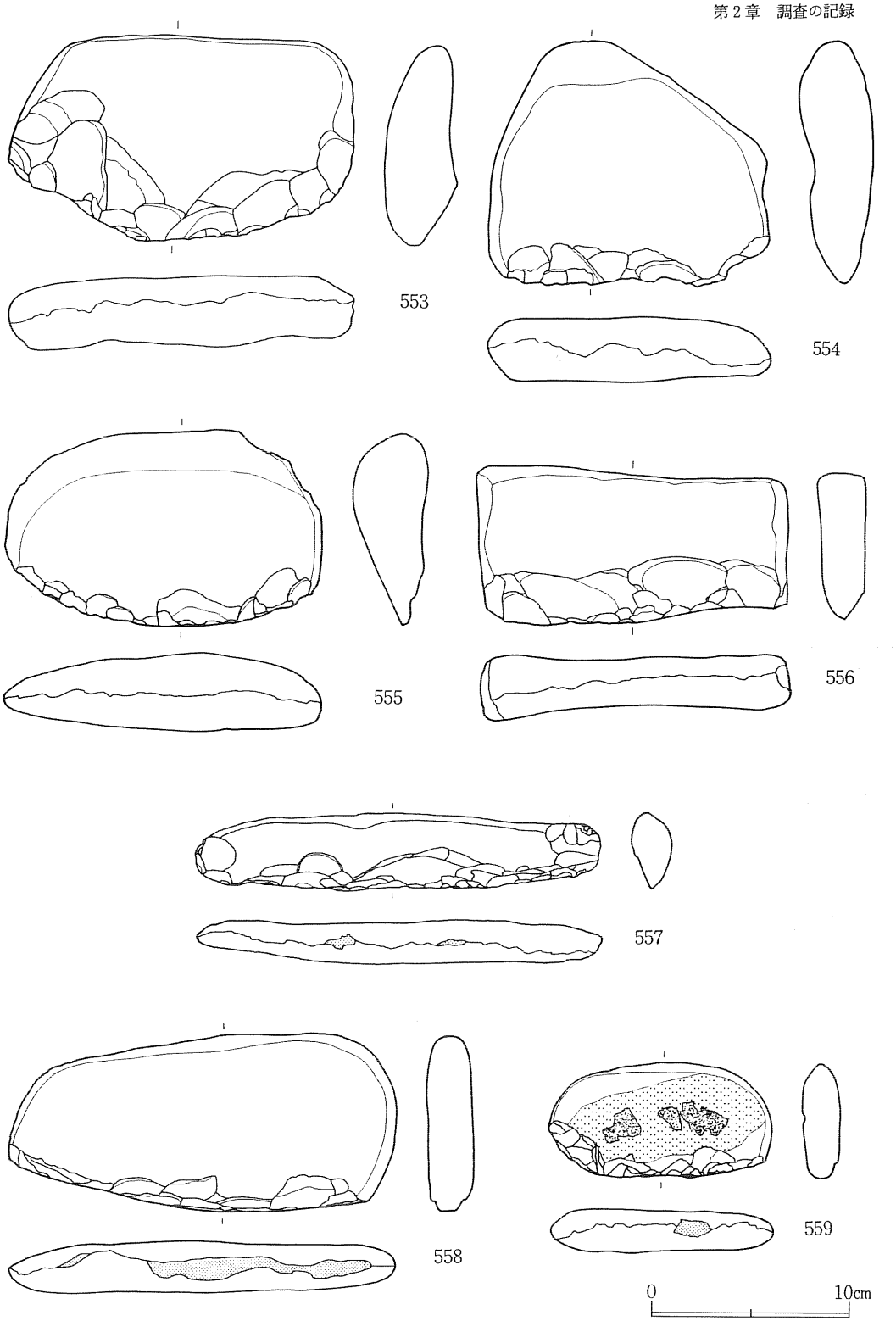
②石鉈「円筒式の分布圏に普通みられる形の石で、円筒式の全期間にわたる様である。大木式に伴うかどうか、今のところ確実な出土例がない。……重量を利して横に使用すると石器と思われ、……打調は極めて粗雑である。形には半円形、半月形など様々であり、一側を使用するものと両側を使用するものとがある。」（秋田県史考古編　p93・94、昭和35年）

③横形打製石器「この石器は繊維土器、特に円筒下層式に多く併出する特色ある石器である。厚さ1～2㎝の扁平な安山岩の自然石で、半円形または半月形で石鉈と称する人がある。全体粗く打ちかいたり、絃の部分も少し打ちかいたりしている。いずれも絃の部分に摩擦痕を残している。清水向遺跡からは全体磨製によってつくられ、底部と平行に肩部に磨込みのあるものが一例発見され、石冠との関連がうかがわれる。」（秋田県の考古学　p74・75、昭和42年）

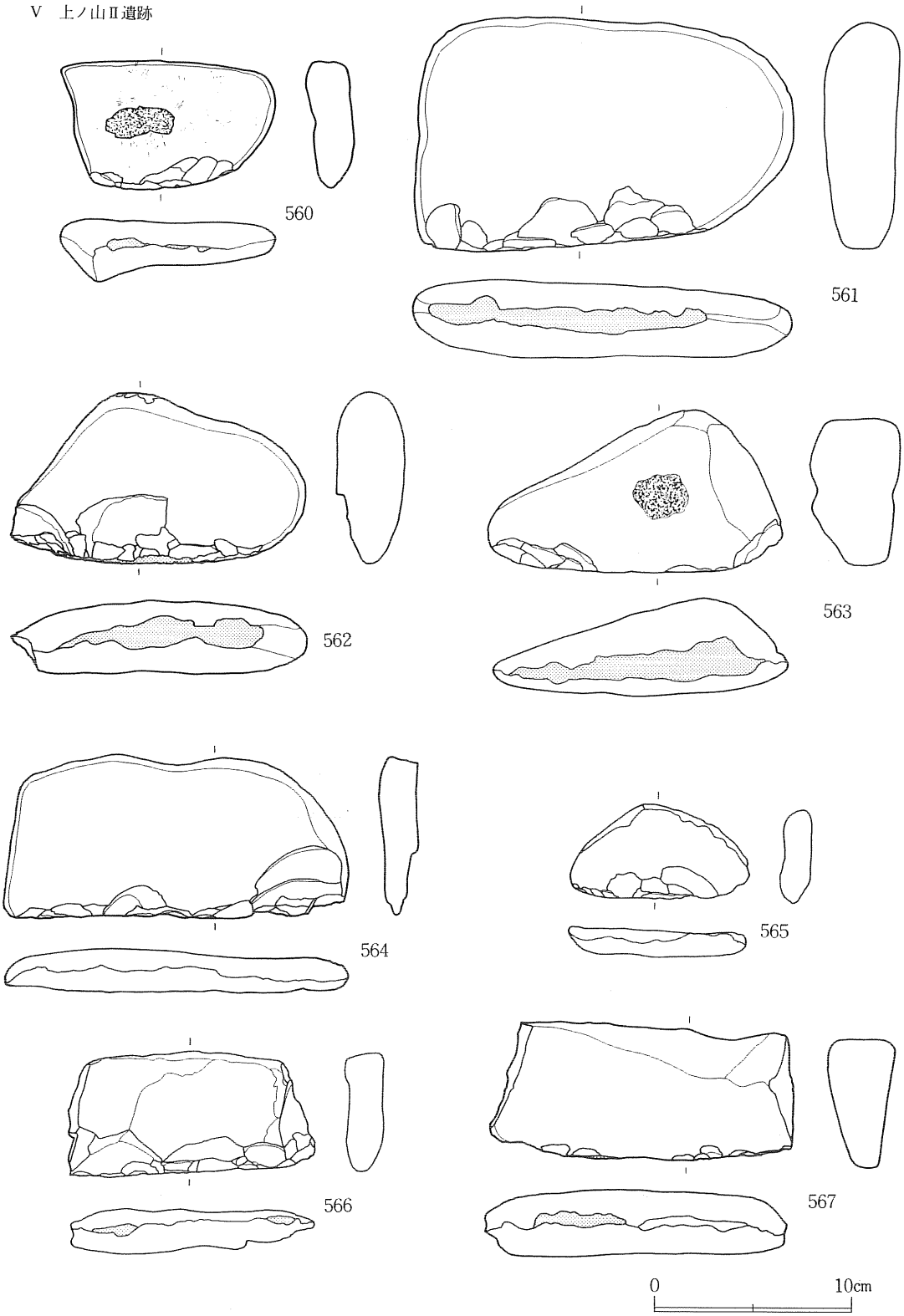
④敲打器（田代町茂屋下岱遺跡、昭和44年調査。大館市芋掘沢遺跡、昭和45年調査）


10
20
30
40
50
60
70
80
10～
30～
50～
70～
90～
110～
130～
150～
170～
190～
210～
230～
250～
270～
290～
310～
330～
350～
370～
390～
410～
430～
450～
470～
490～
510～
530～
550～
570～
590～
610～
630～
650～
670～
690～
710～
730～
750～
770～
790～
810～
830～
850～
870～
890～
910～
930～
950～
970～
990～
1010～
1030～
1050～
1070～
1090～
1110～
1130～
1150～
1170～
1190～
1210～
1230～
1250～
1270～
ⅠA
ⅠB
Ⅱ
Ⅲ

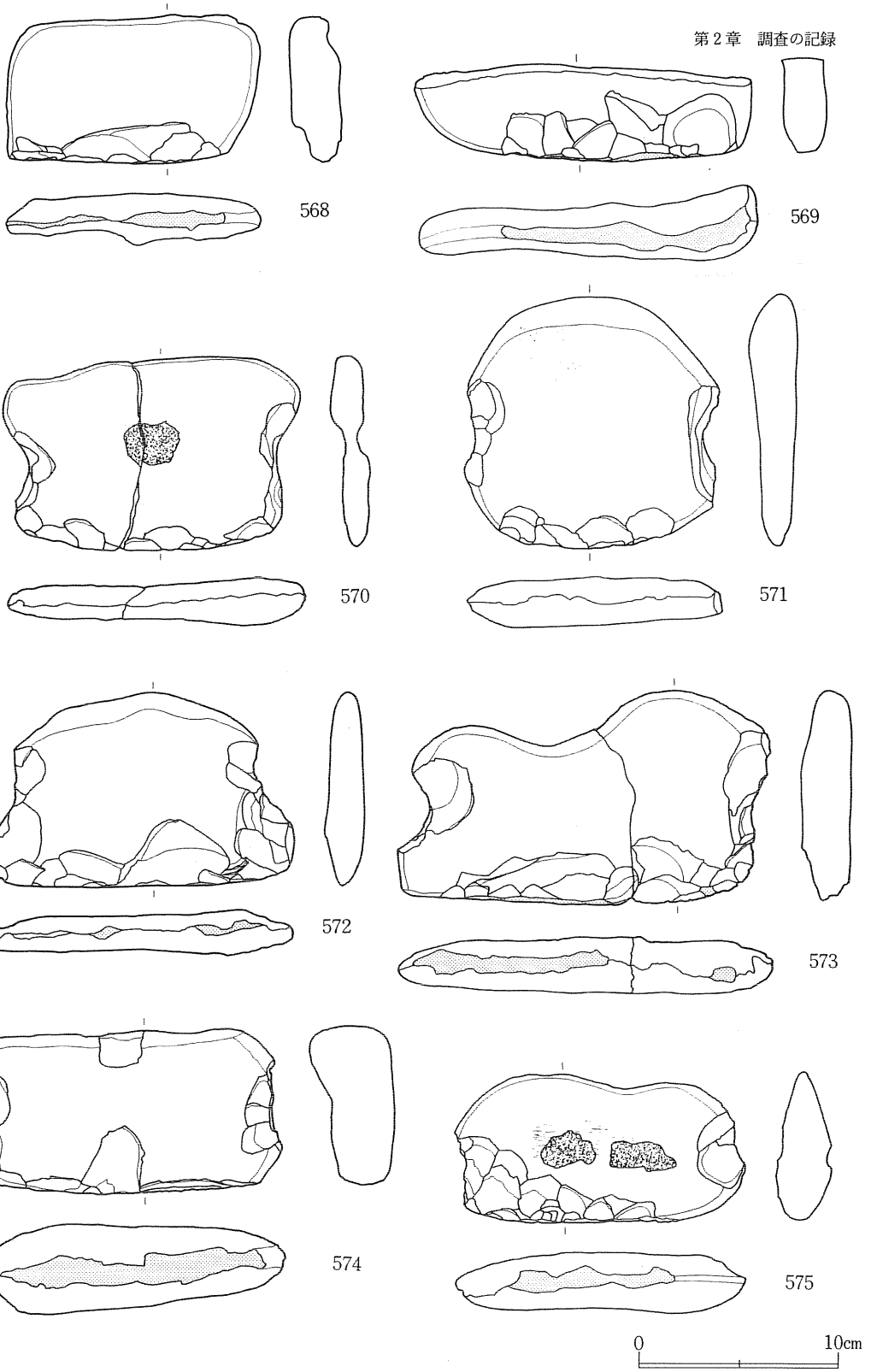
第９表　石錘重量分布表



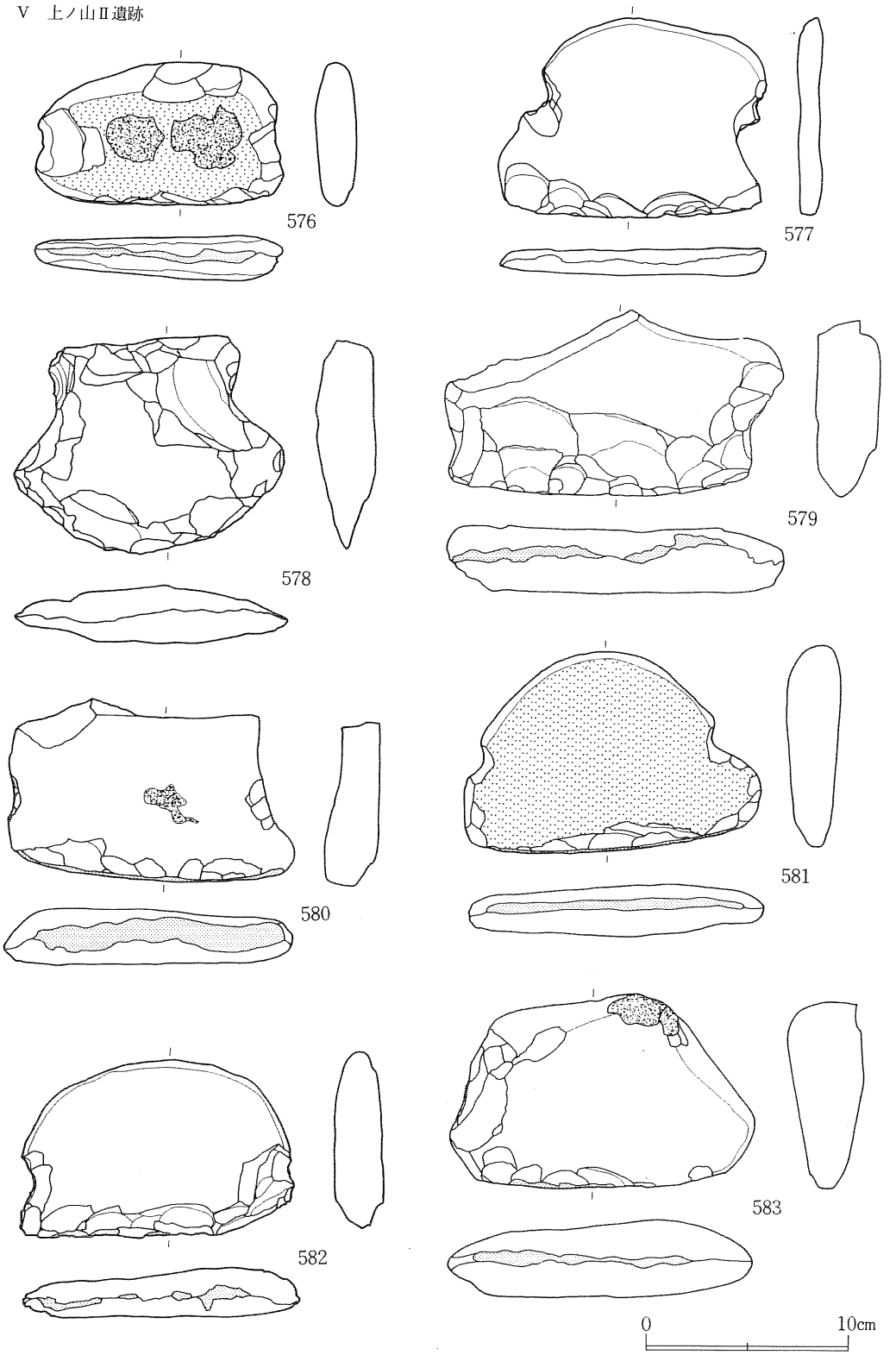

第198図　遺構外出土石器(34)　半円状扁平打製石器(１)



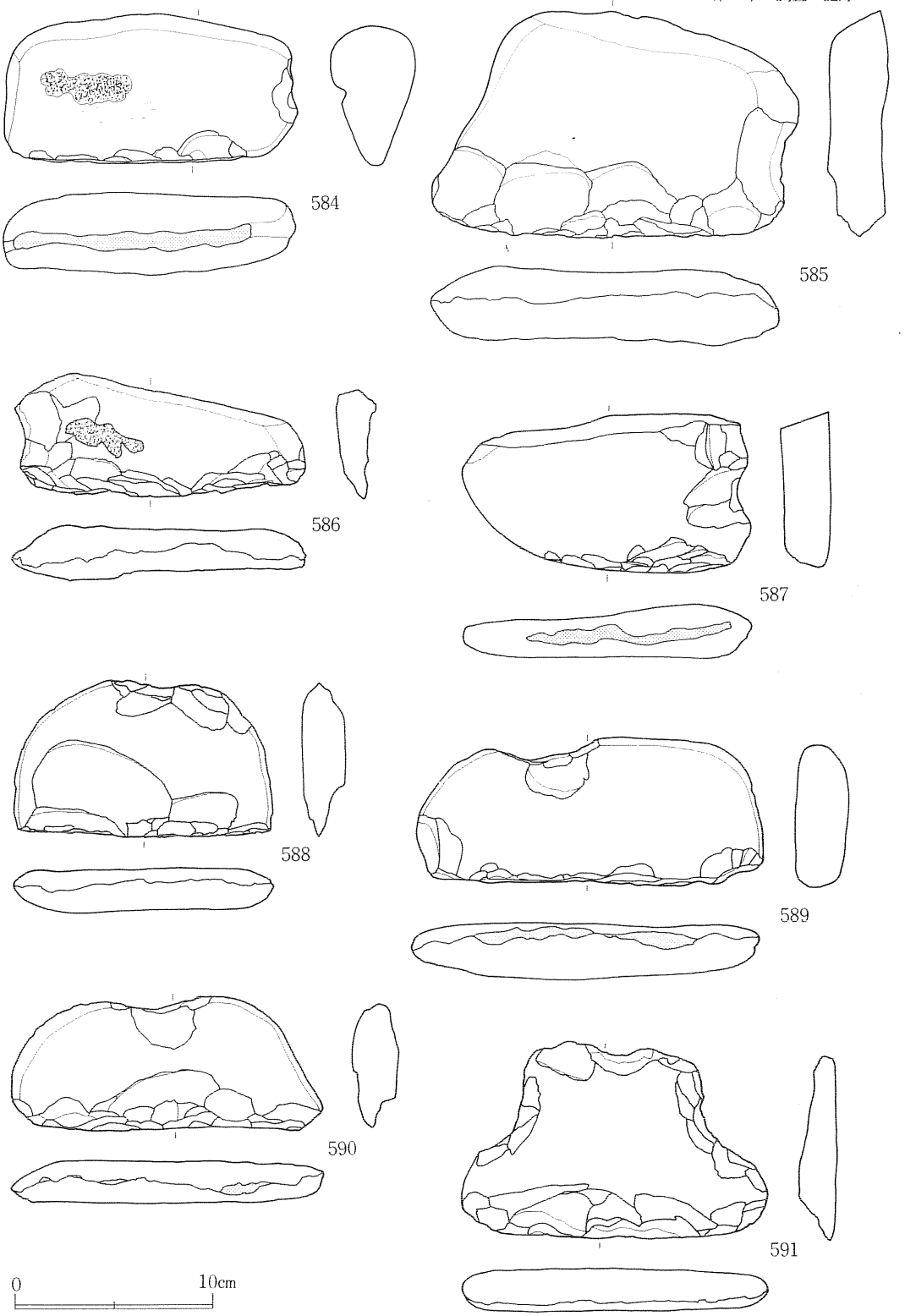

第199図　遺構外出土石器(35)　半円状扁平打製石器(2)



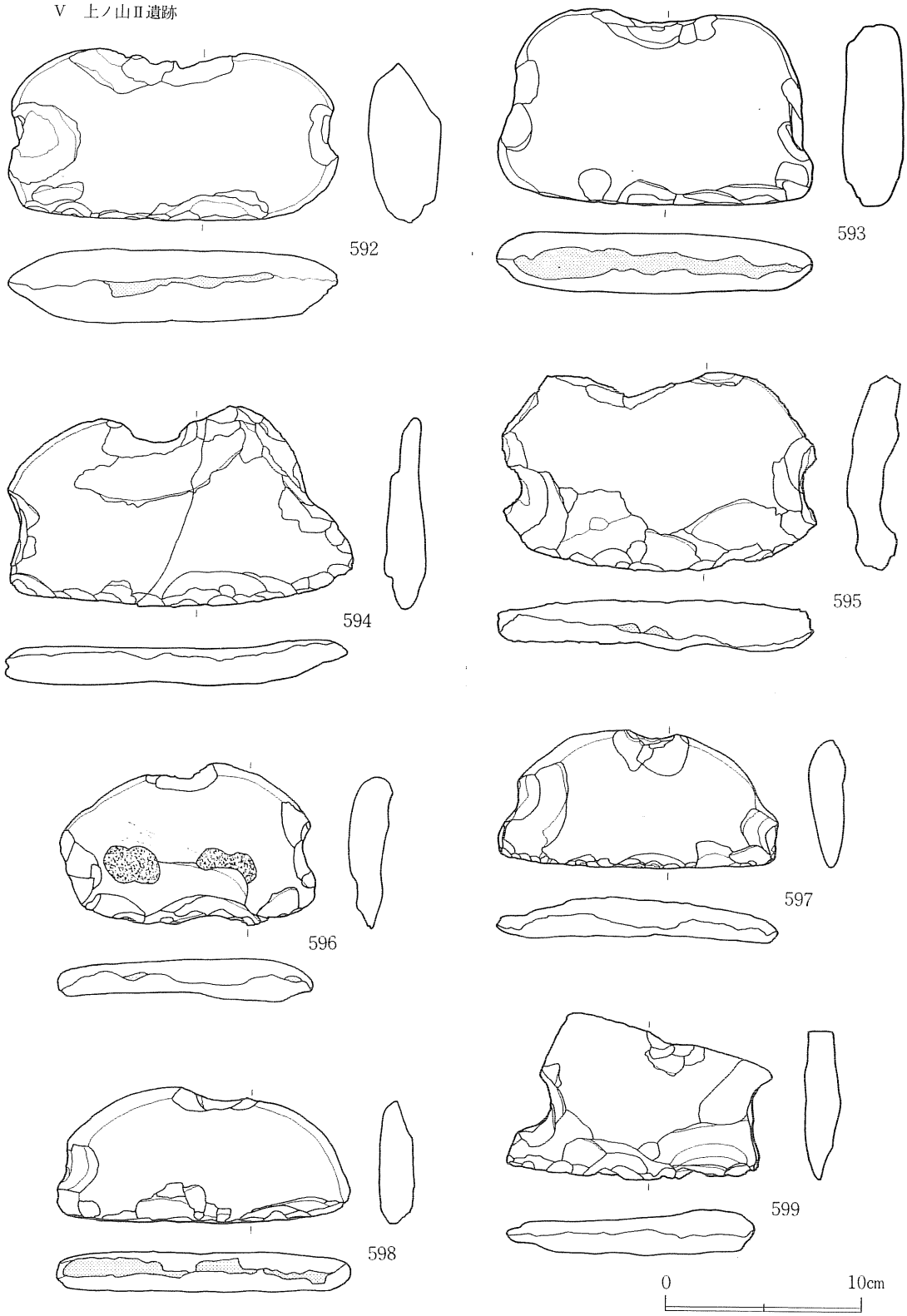

第200図　遺構外出土石器(36)　半円状扁平打製石器(３)



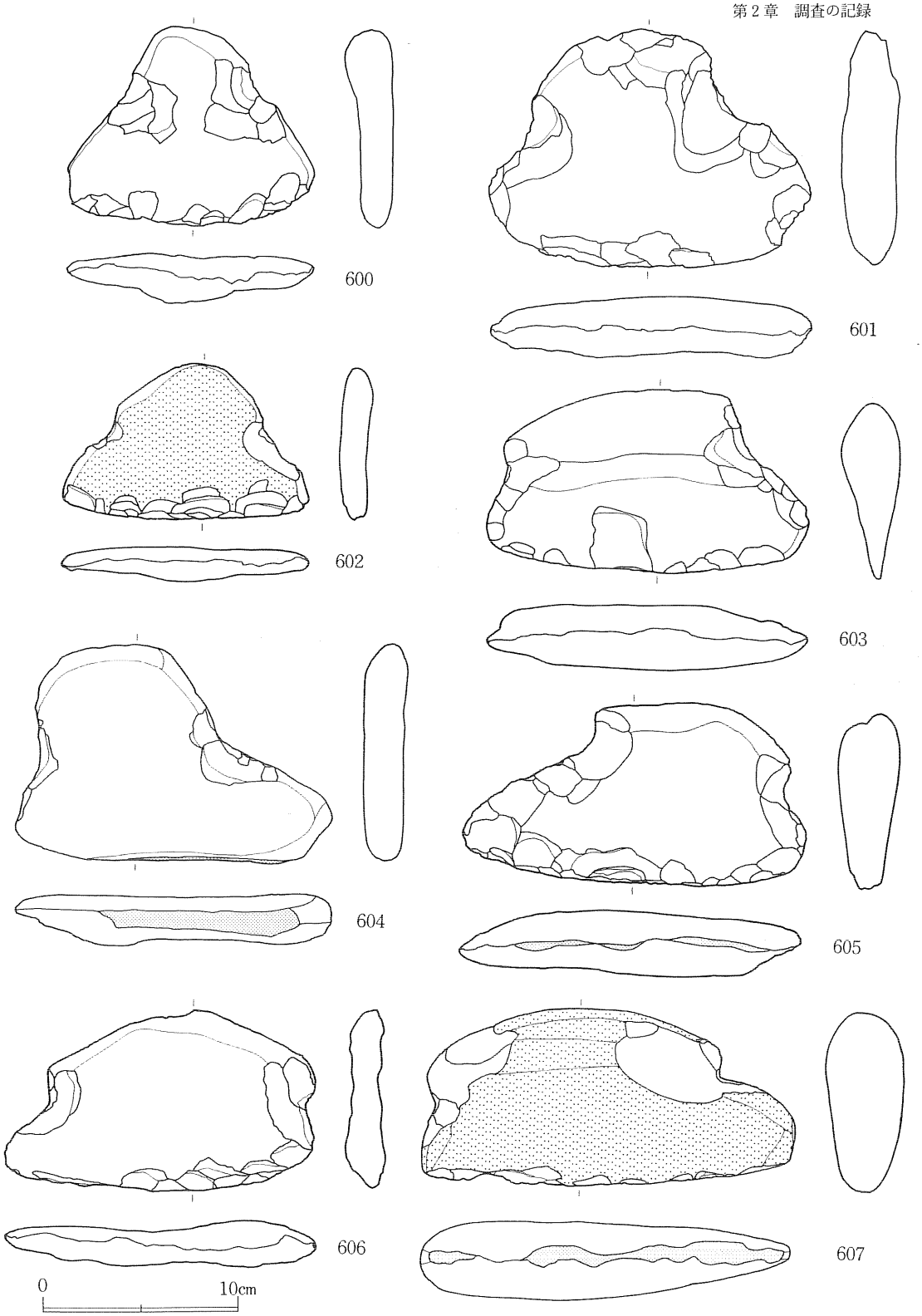

第201図　遺構外出土石器(37)　半円状扁平打製石器(4)



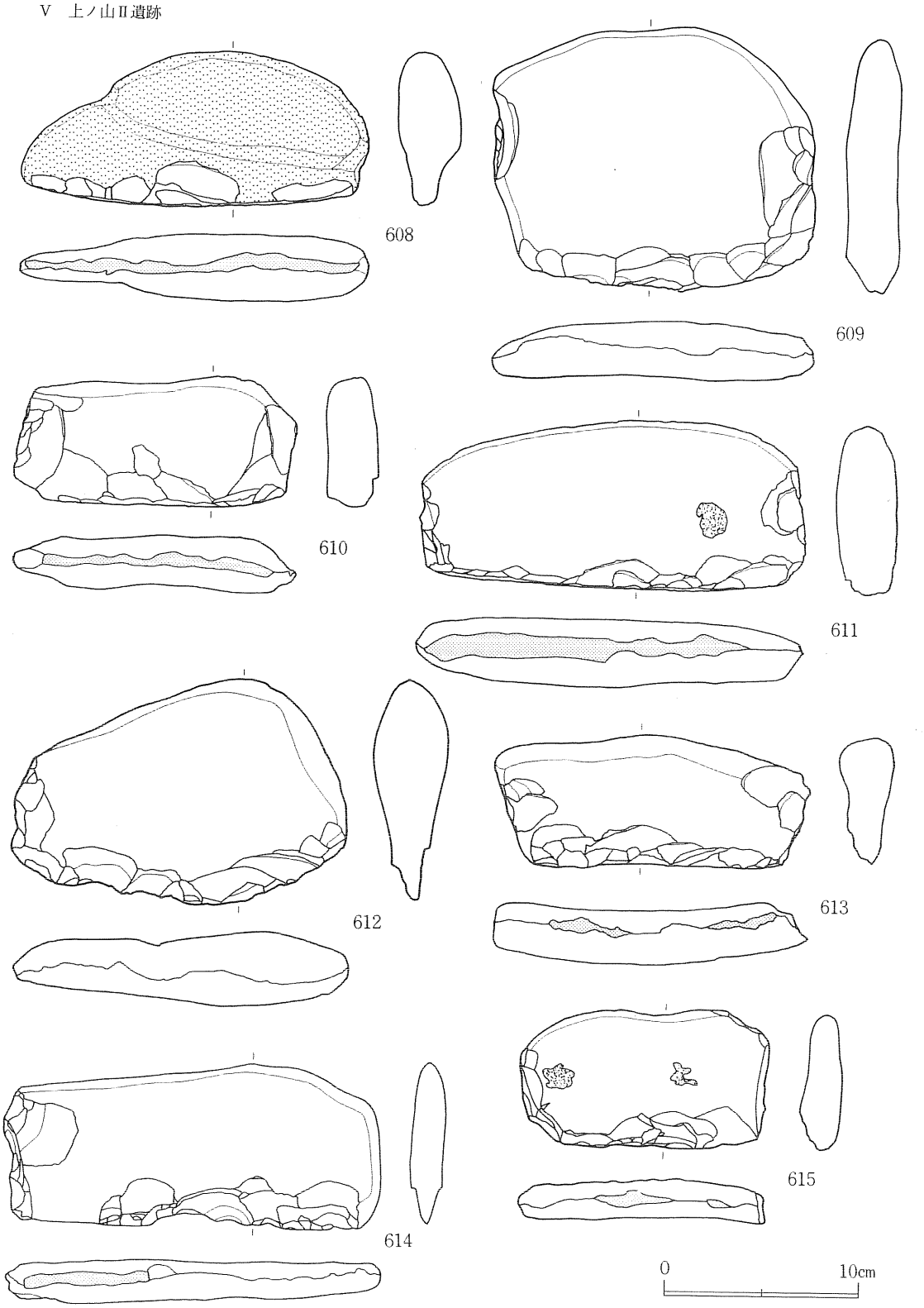

第202図　遺構外出土石器(38)　半円状扁平打製石器(５)



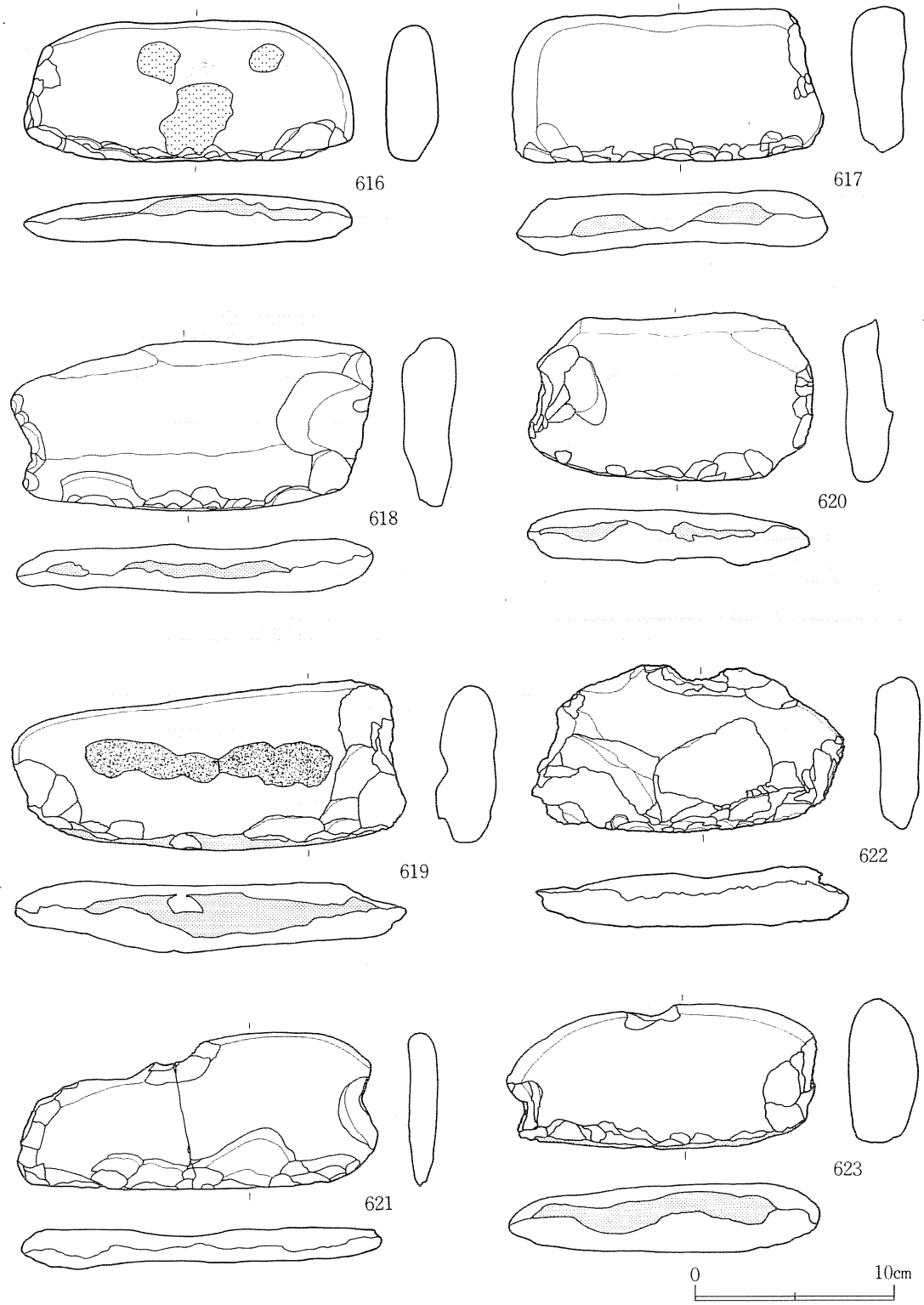

第203図　遺構外出土石器(39)　半円状扁平打製石器(6)



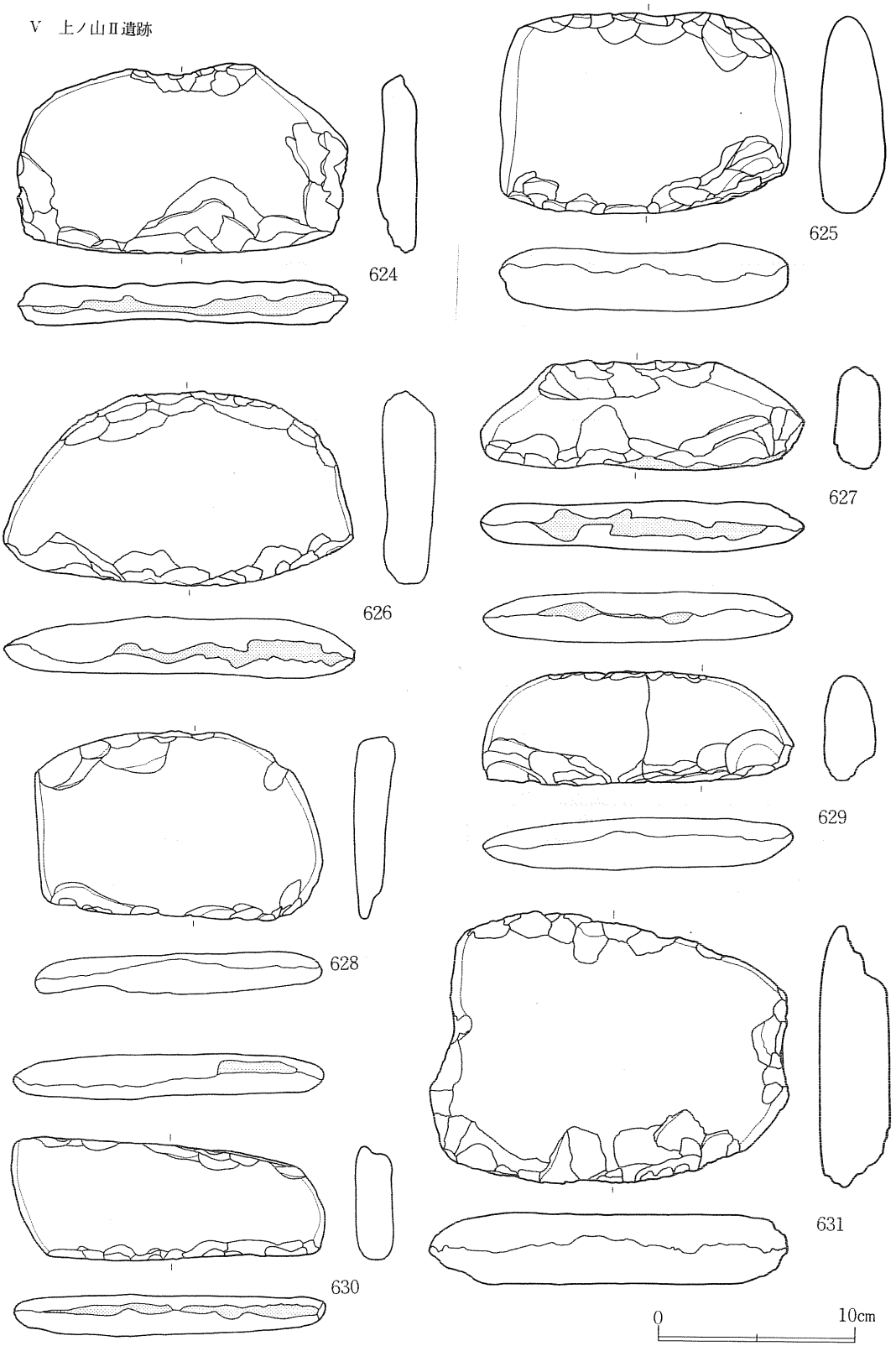

第204図　遺構外出土石器(40)　半円状扁平打製石器(７)



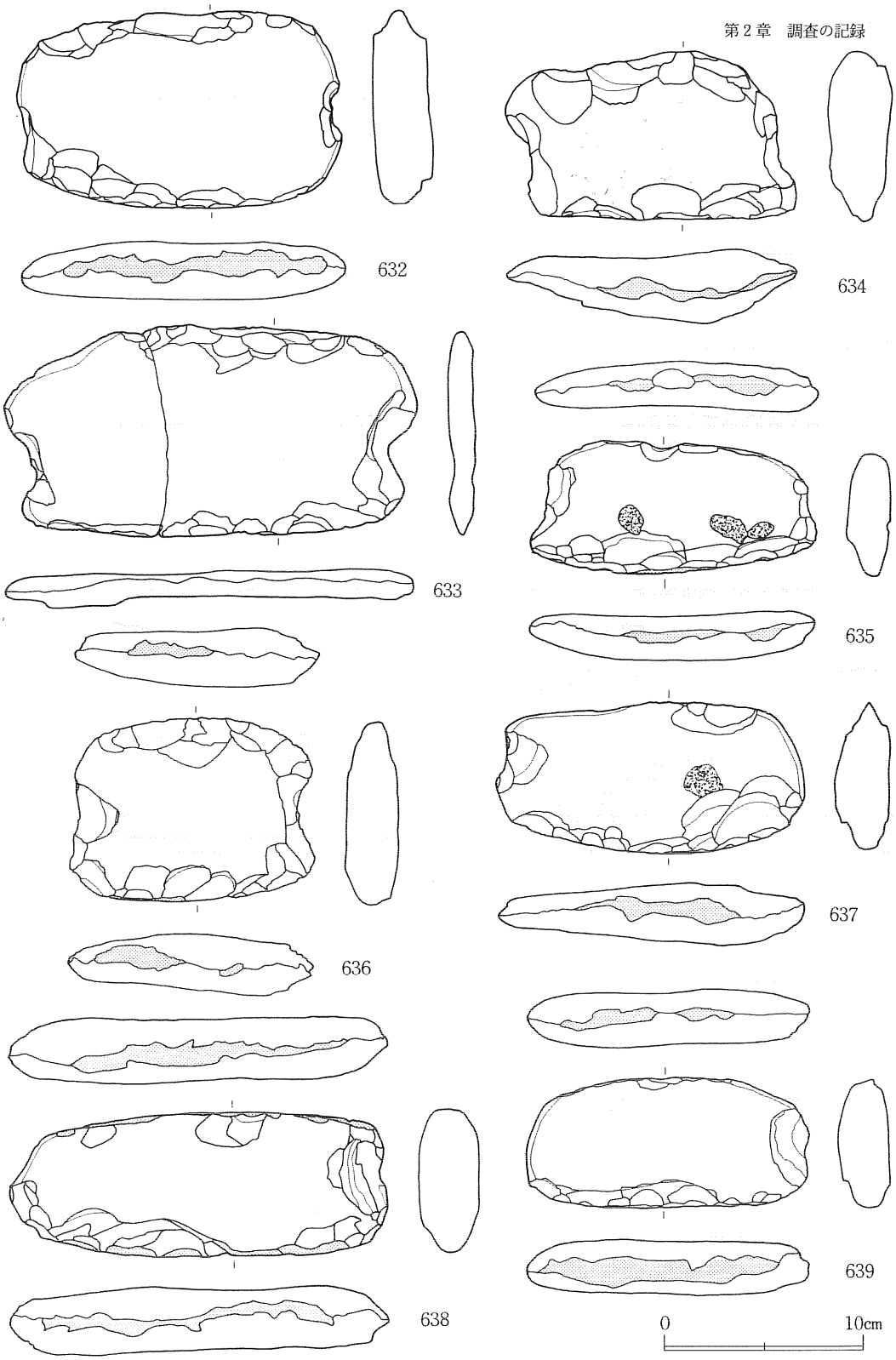

第205図　遺構外出土石器(41)　半円状扁平打製石器(8)



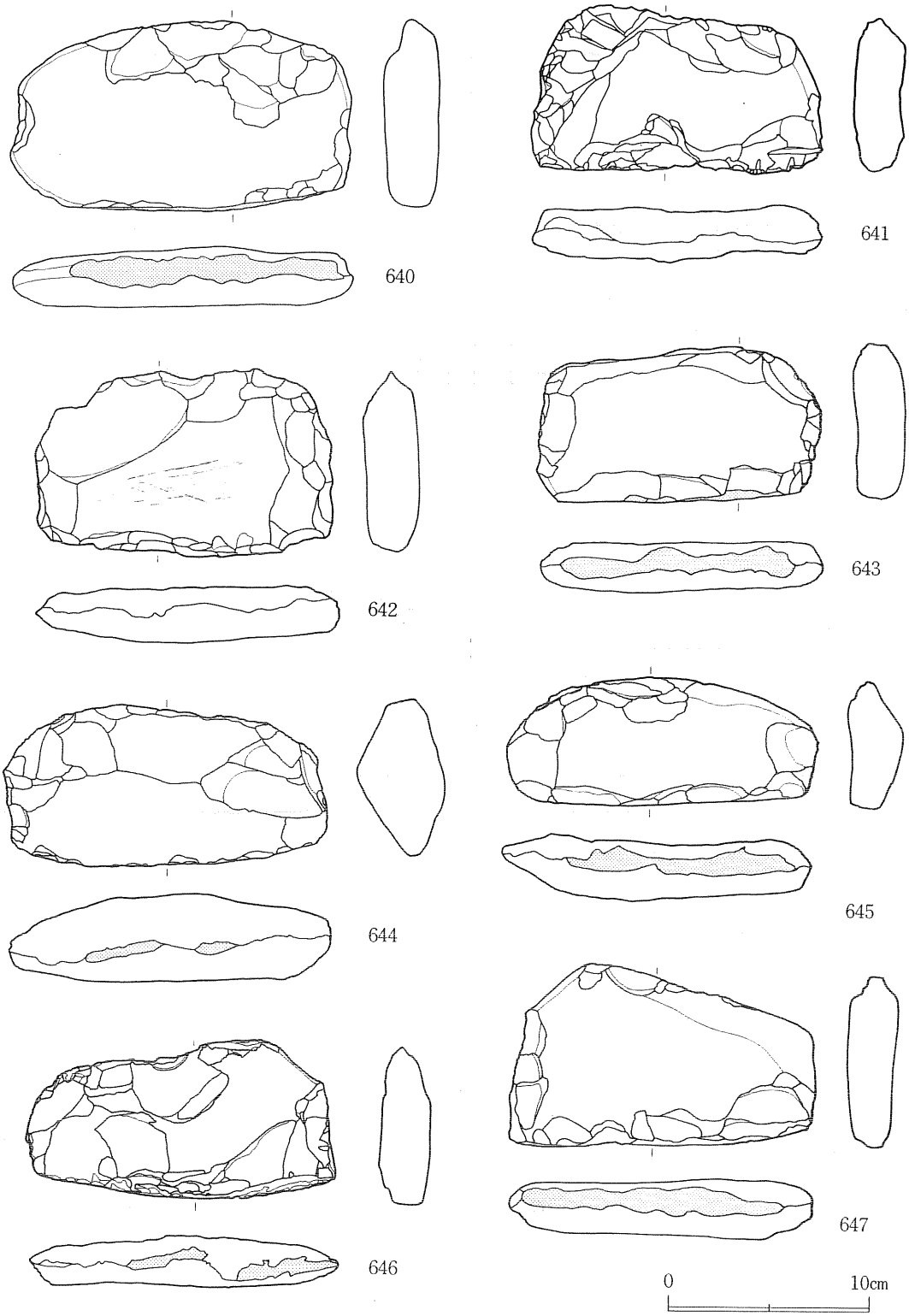

第206図　遺構外出土石器(42)　半円状扁平打製石器(9)



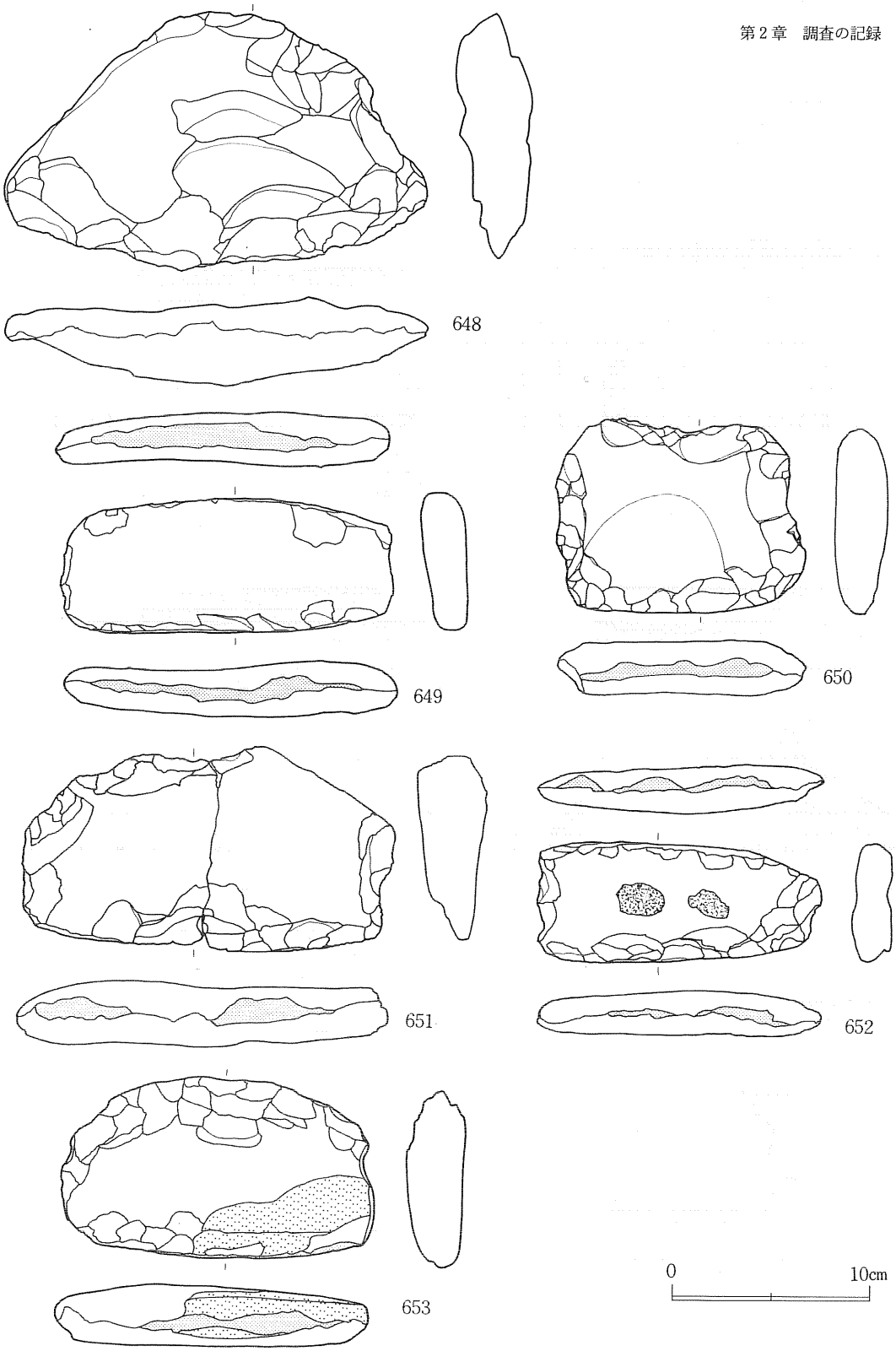

第207図　遺構外出土石器(43)　半円状扁平打製石器(10)



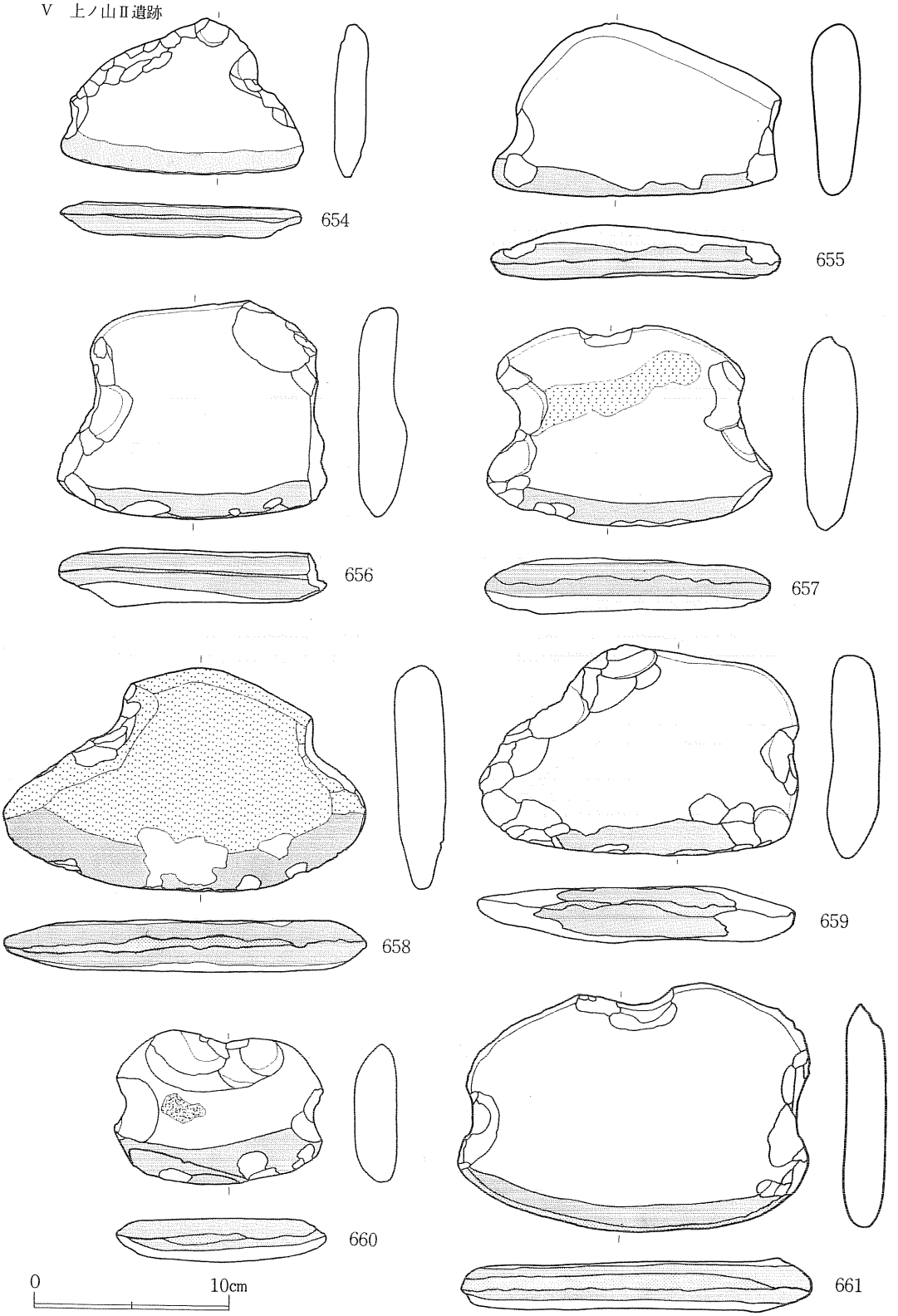

第208図　遺構外出土石器(44)　半円状扁平打製石器(11)



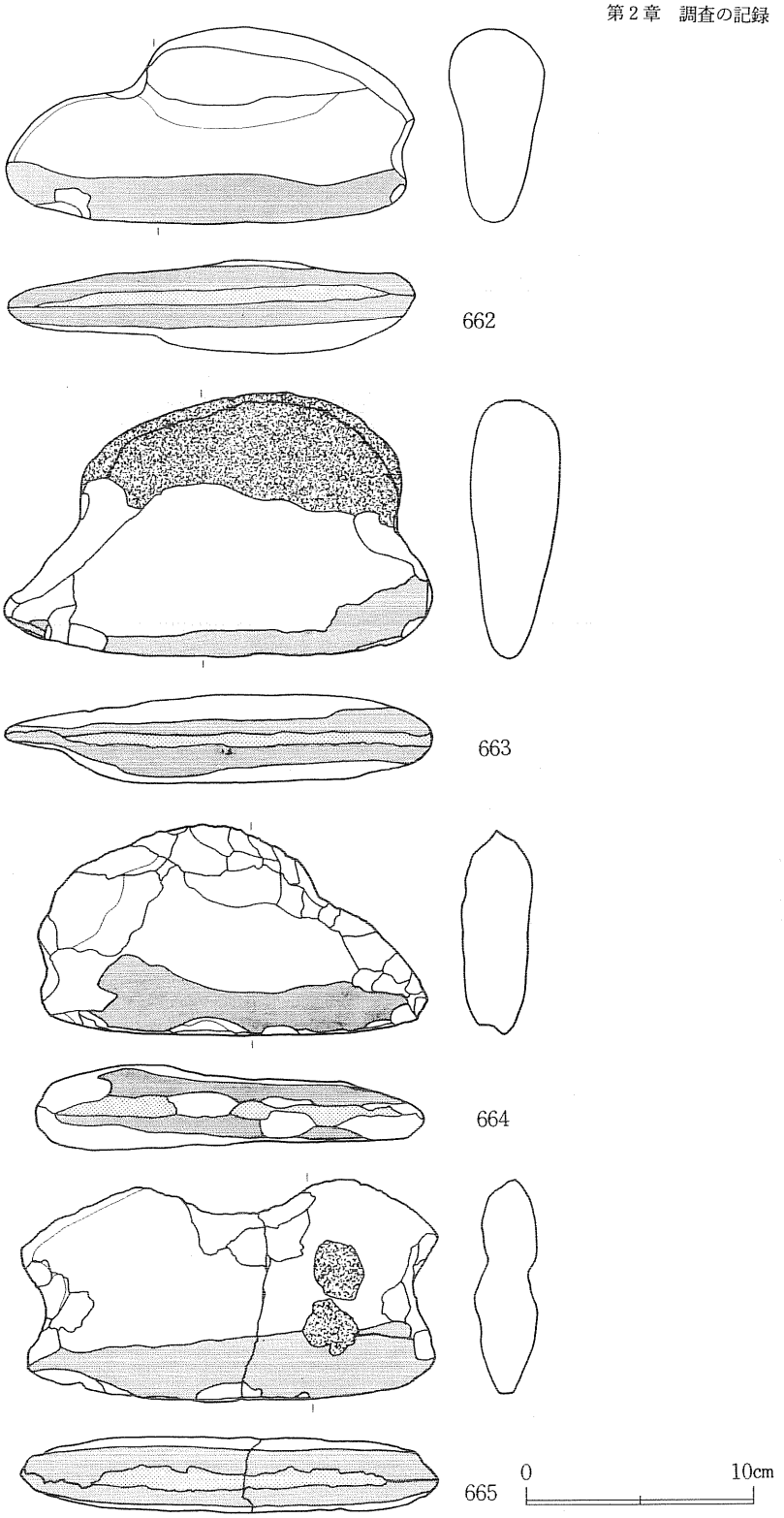

第209図　遺構外出土石器(45)　半円状扁平打製石器(12)



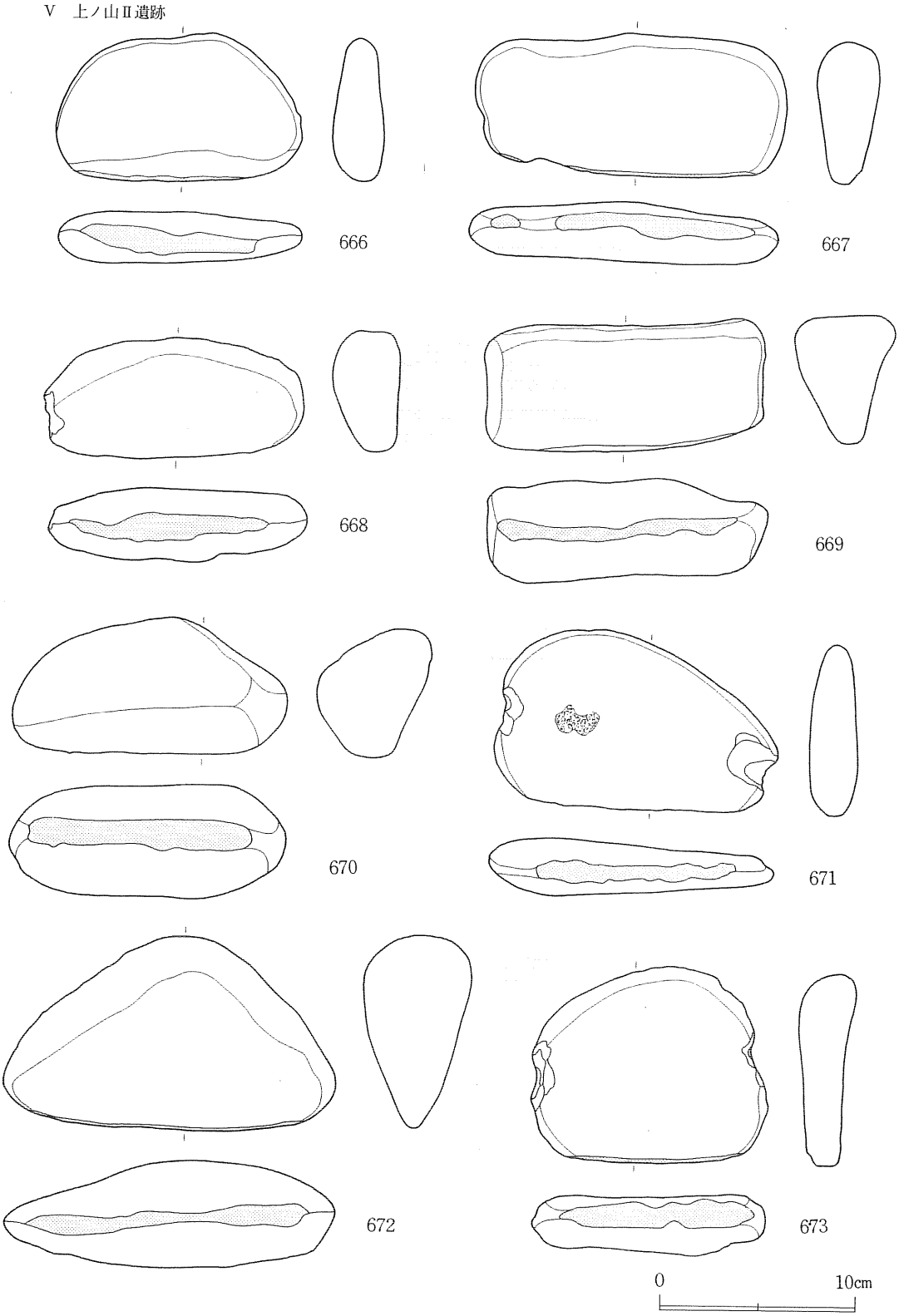

第210図　遺構外出土石器(46)　半円状扁平打製石器(13)



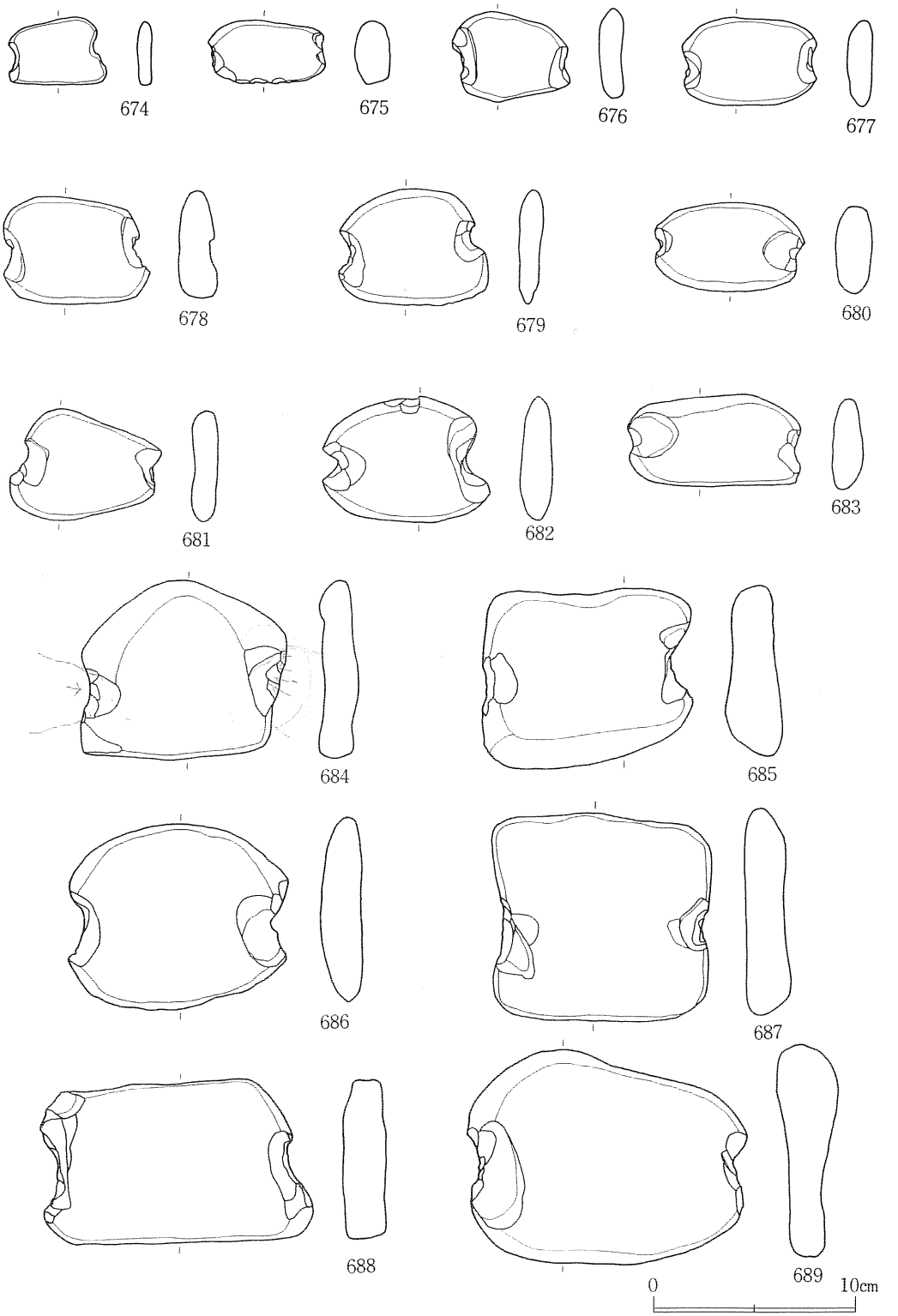

第211図　遺構外出土石器(47)　半円状扁平打製石器(14)



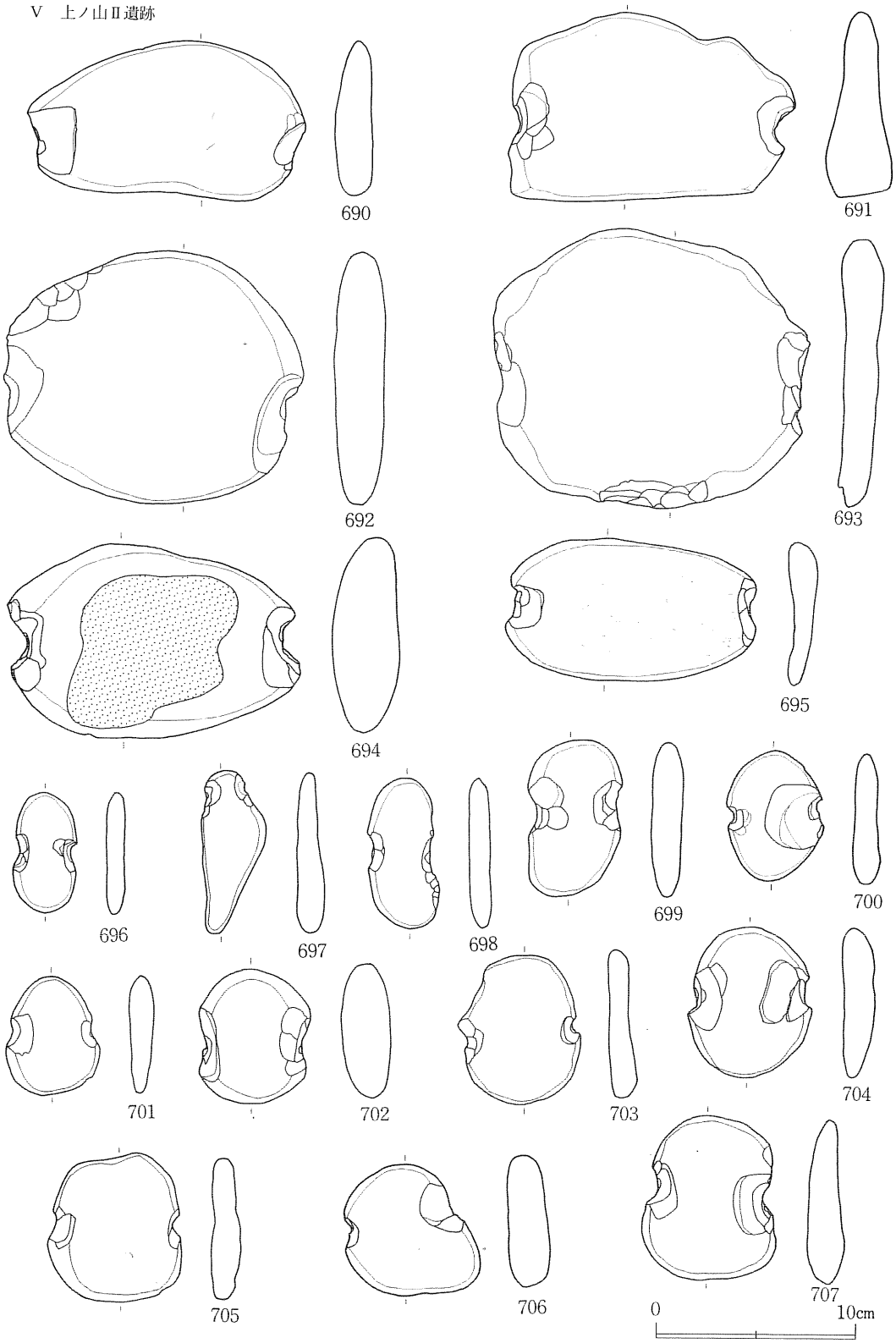

第212図　遺構外出土石器(48)　半円状扁平打製石器(15)



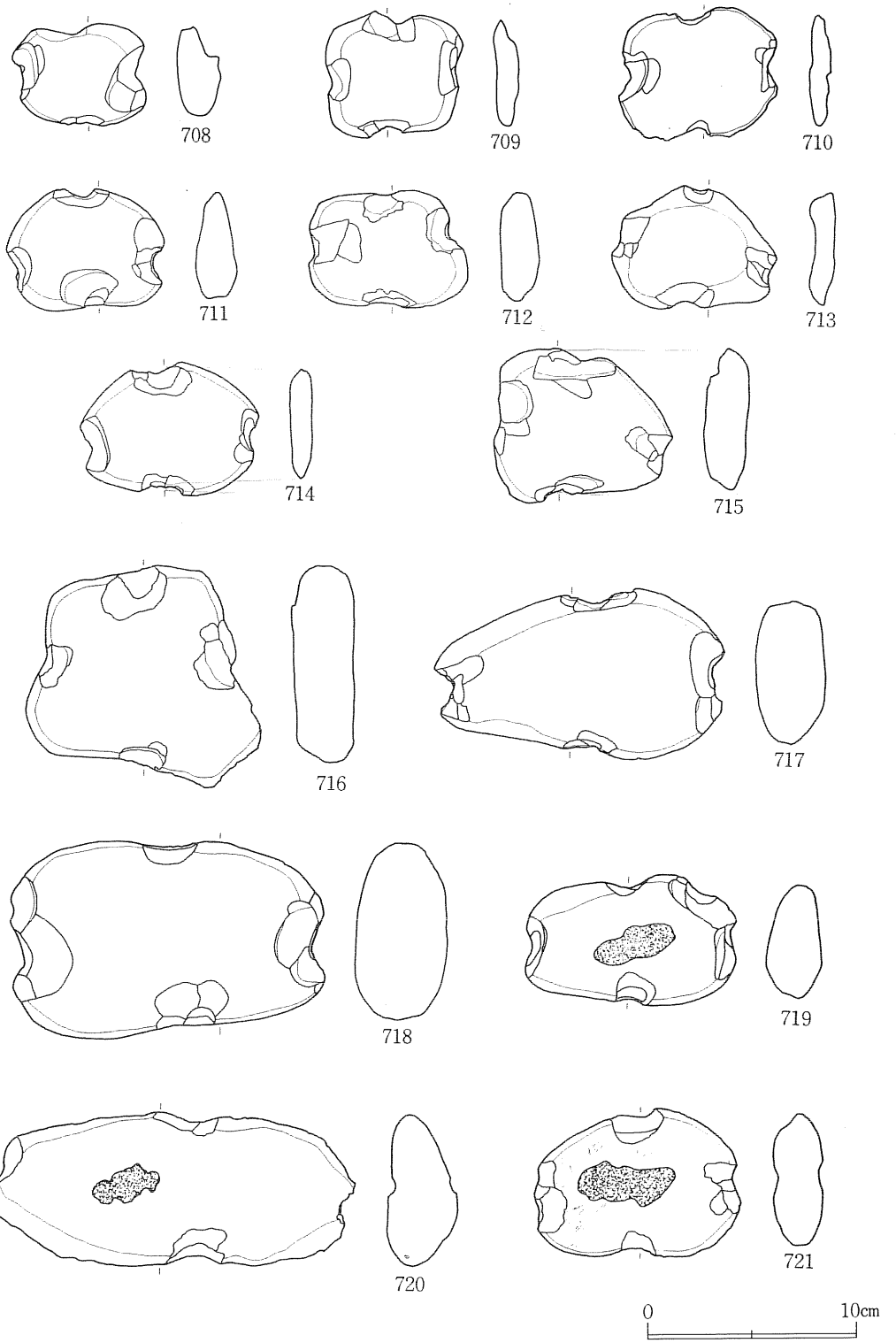

第213図　遺構外出土石器(49)　擦石



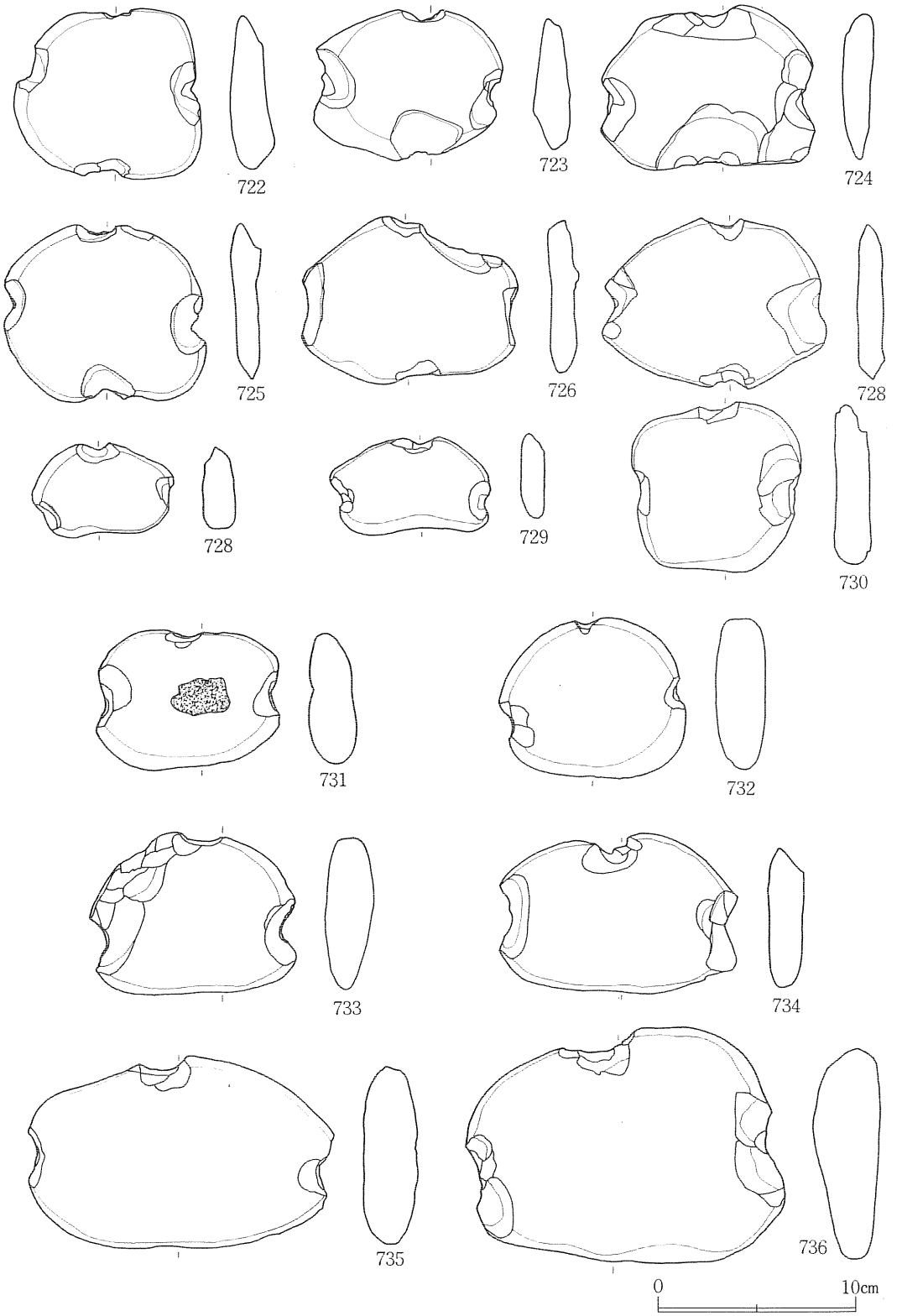

第214図　遺構外出土石器(50)　石錘(１)



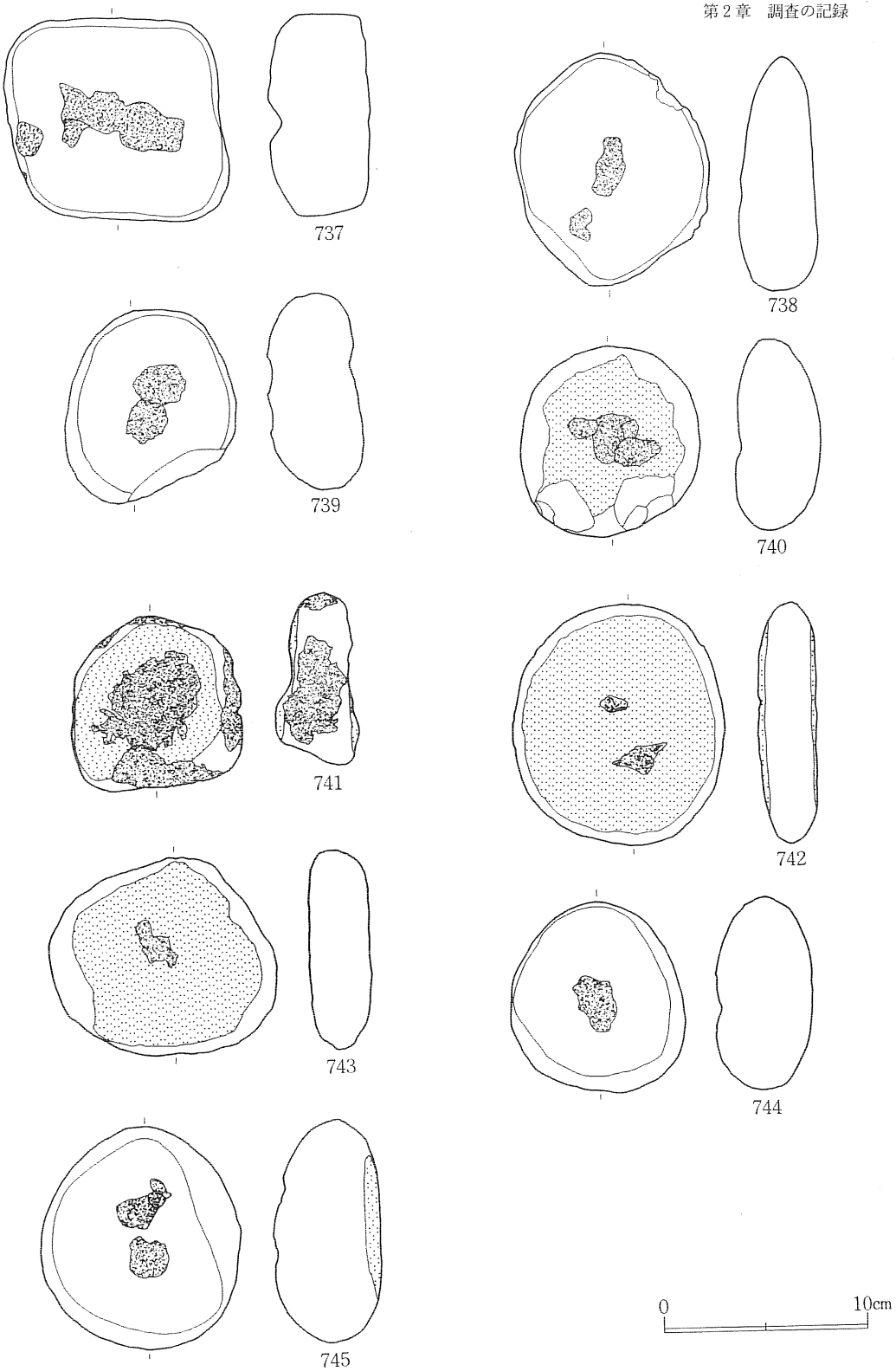

第215図　遺構外出土石器(51)　石錘(2)



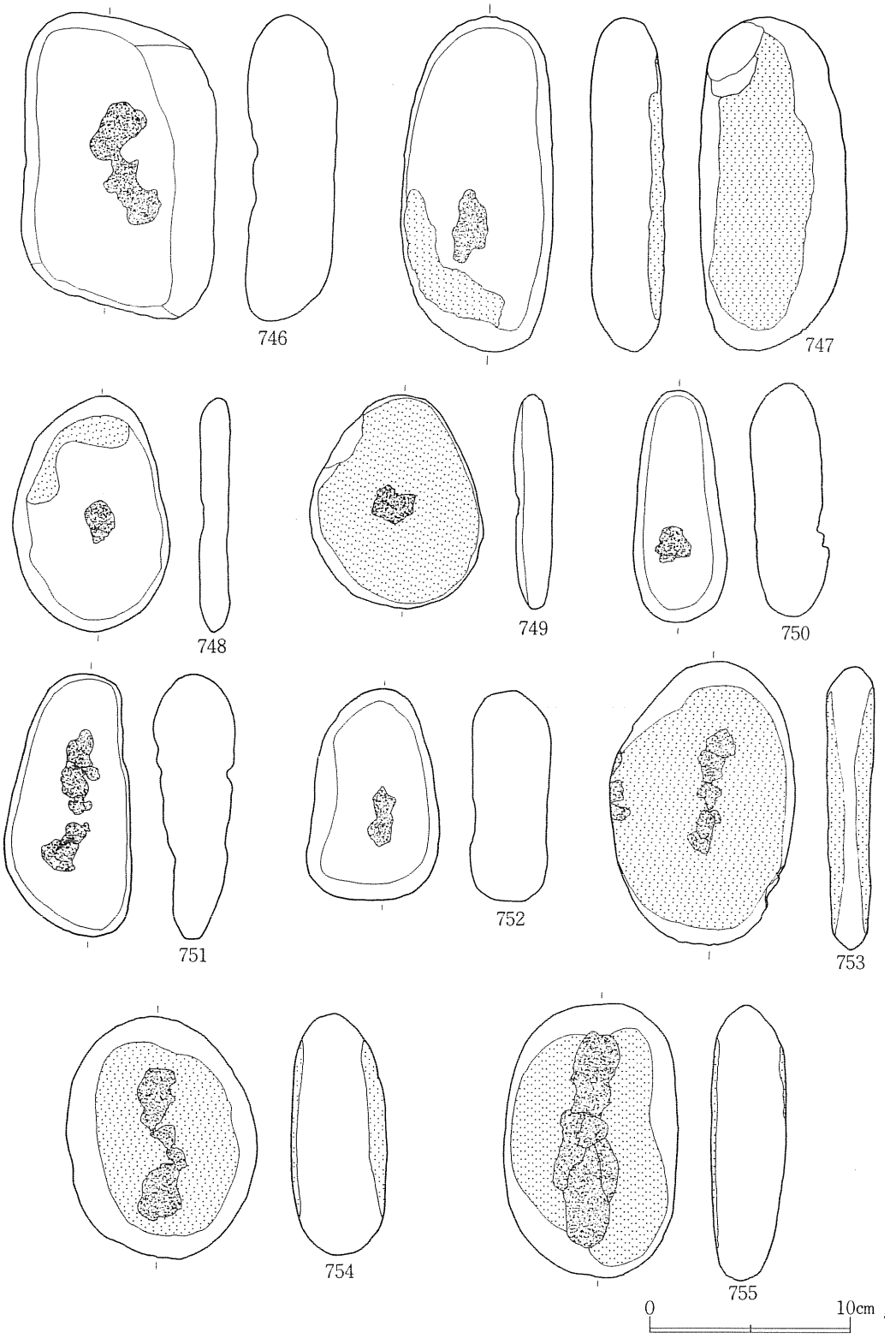

第216図　遺構外出土石器(52)　石錘（３）



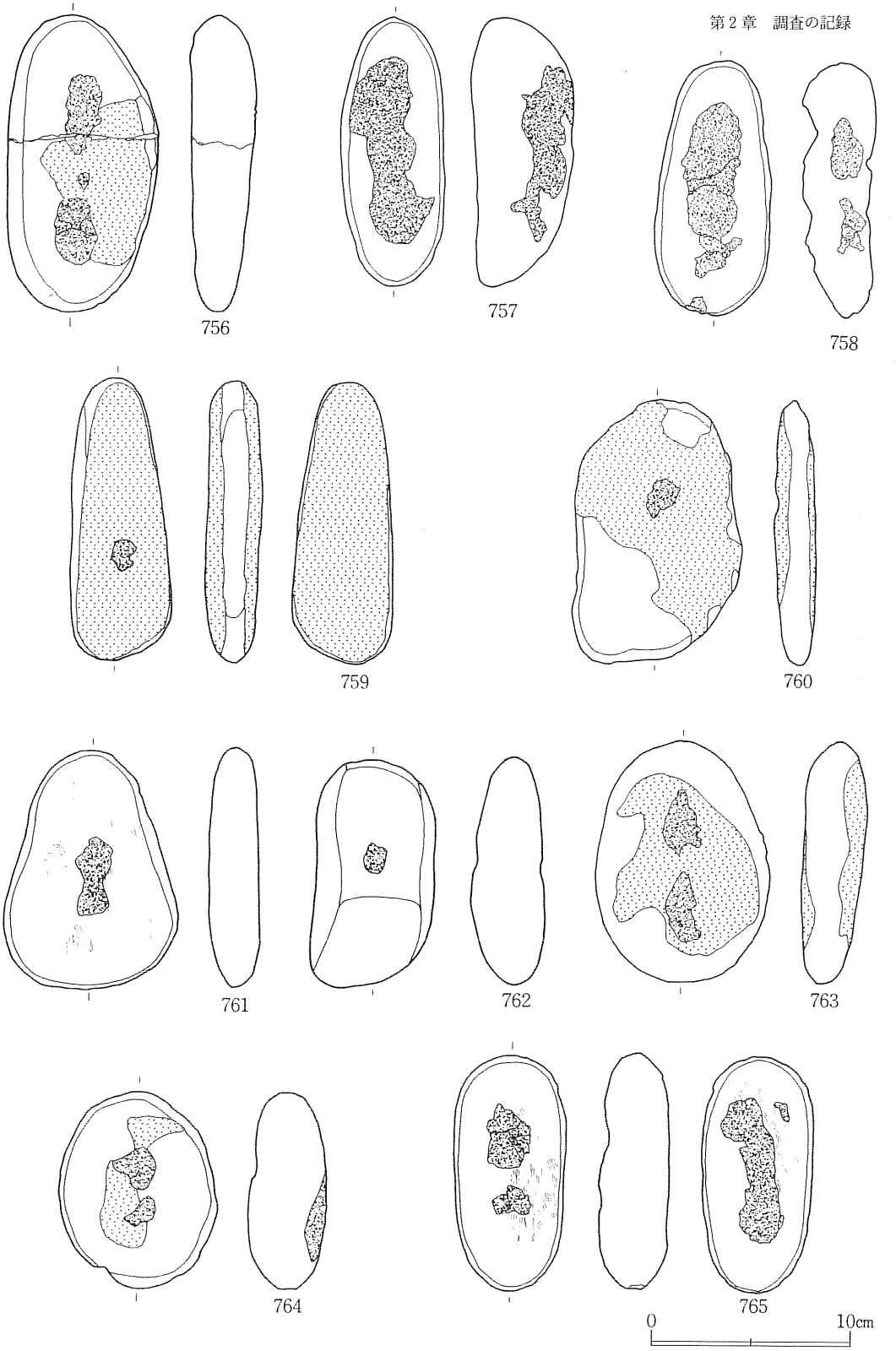

第217図　遺構外出土石器(53)　石錘(4)



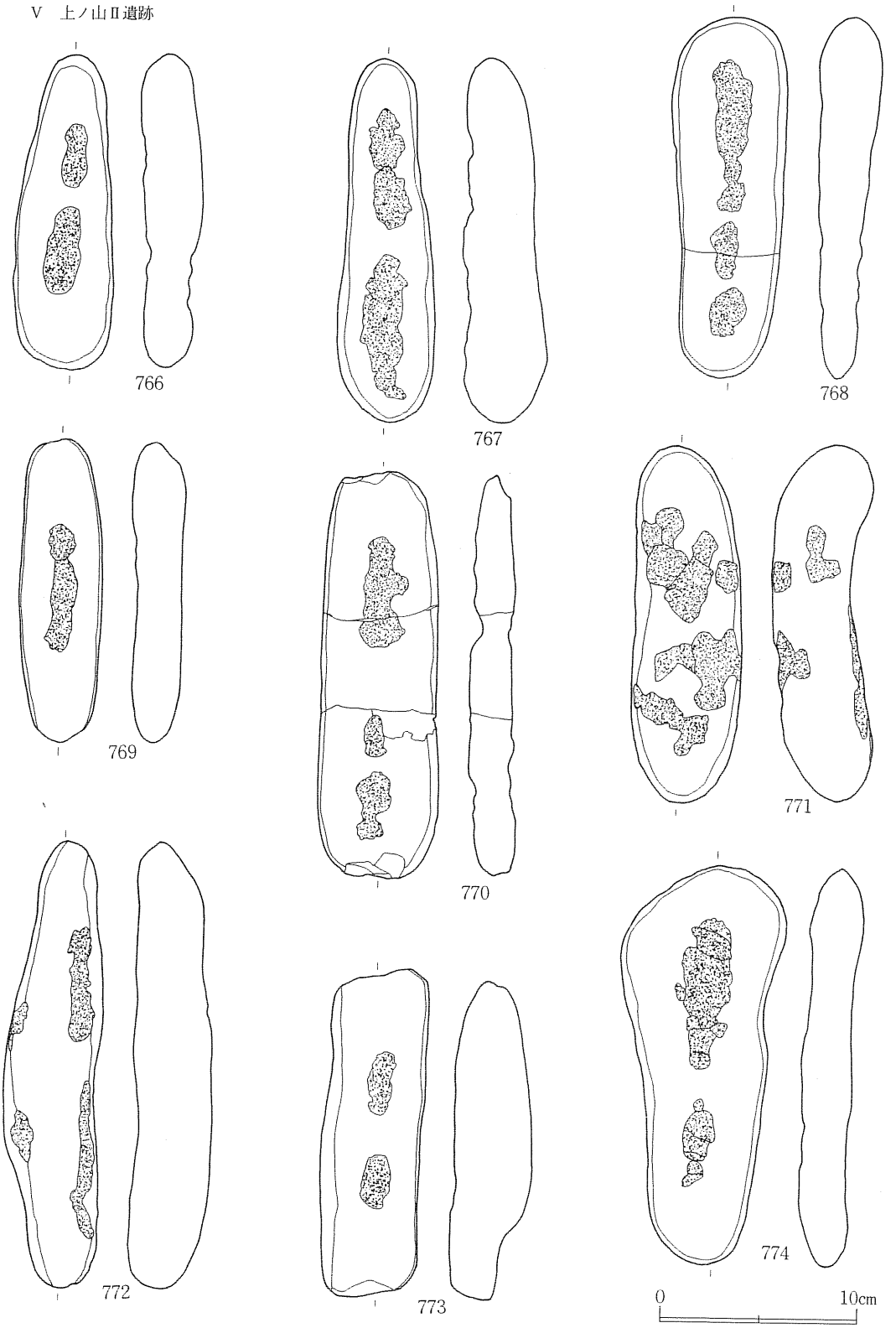

第218図　遺構外出土石器(54)　凹石(１)



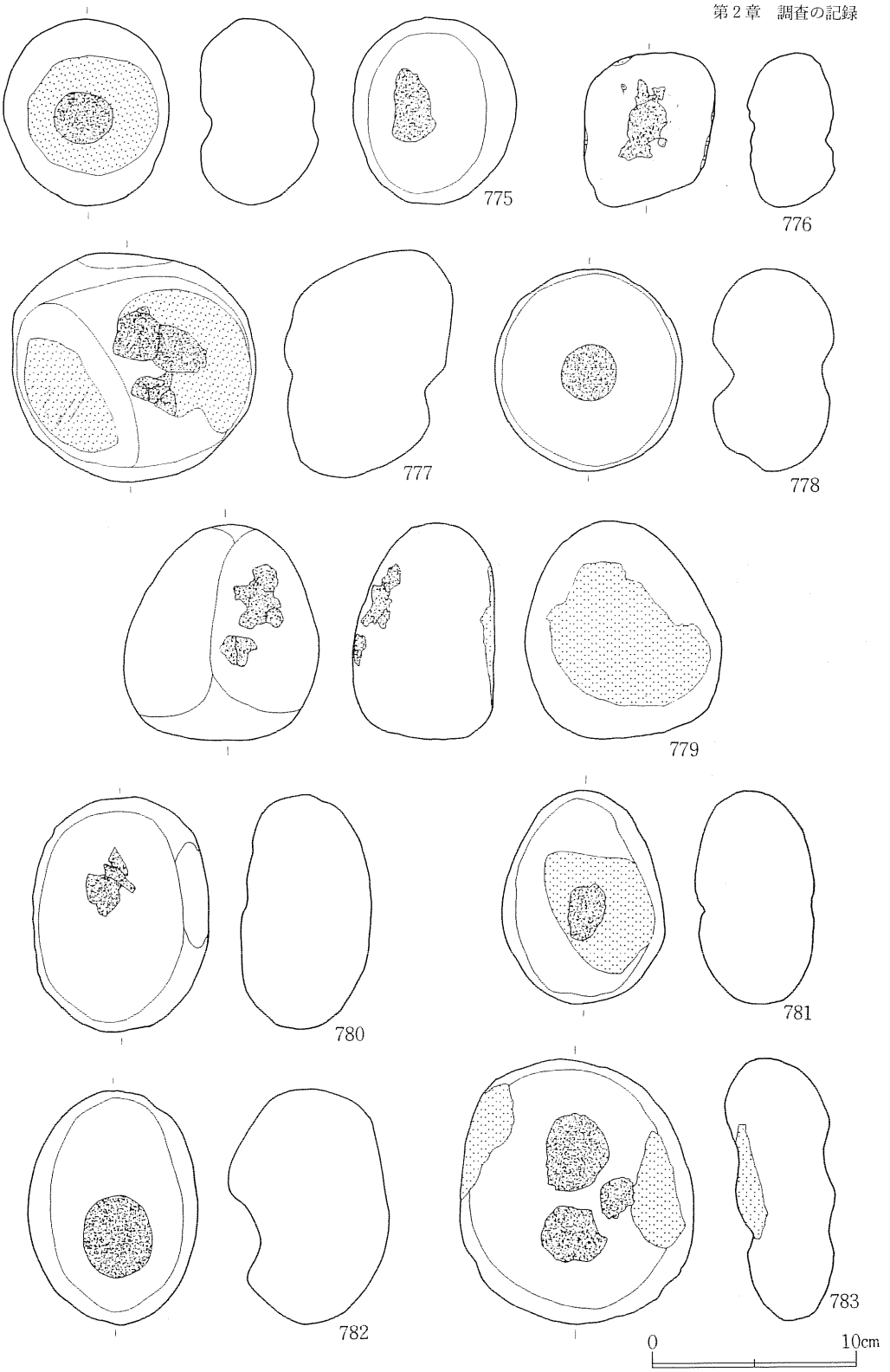

第219図　遺構外出土石器(55)　凹石(2)



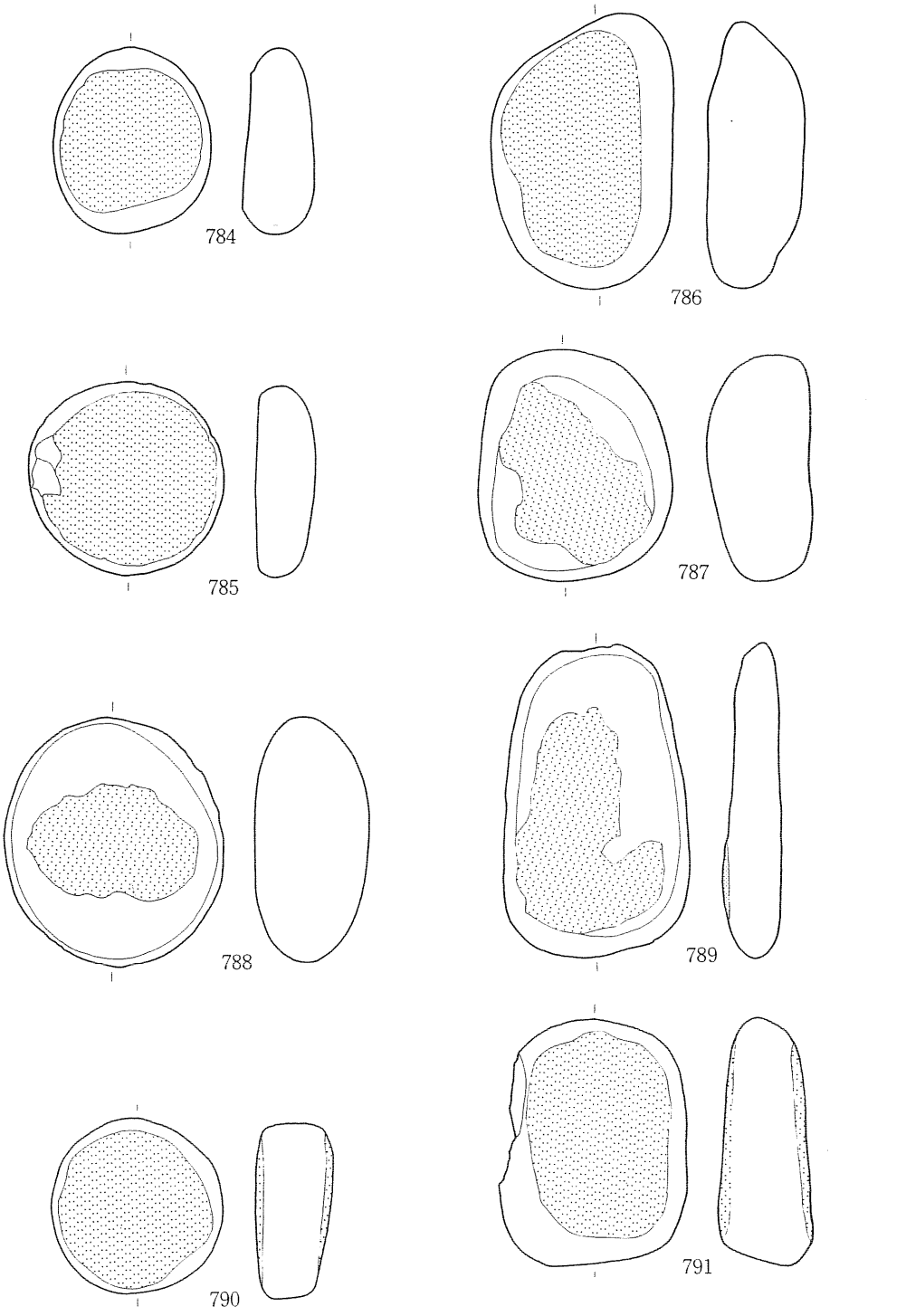

第220図　遺構外出土石器(56)　凹石(3)



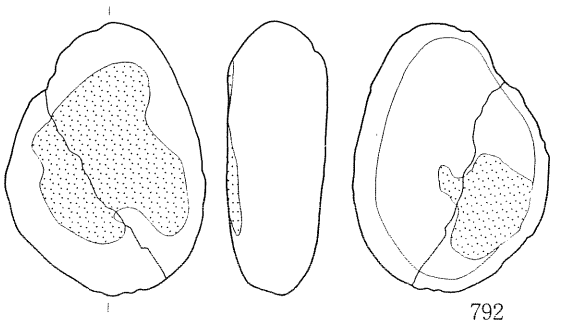

第221図　遺構外出土石器(57)　凹石(4)

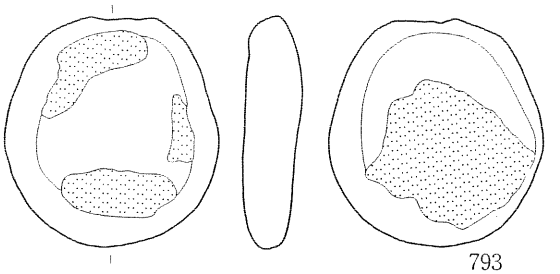


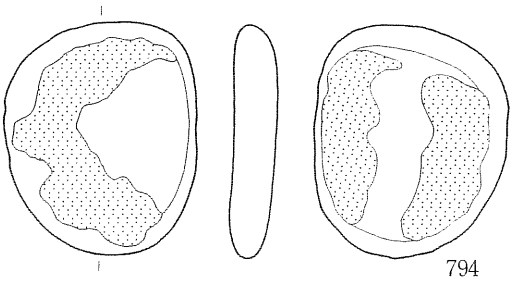

第222図　遺構外出土石器(58)　凹石(５)

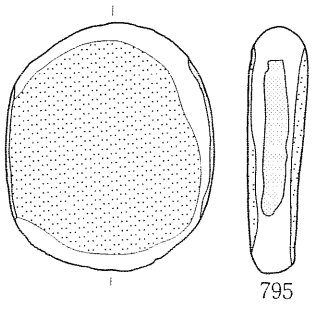


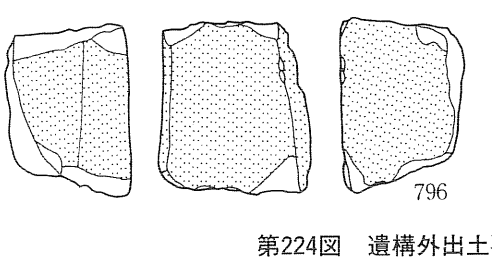

第223図　遺構外出土石器(59)　磨石(1)

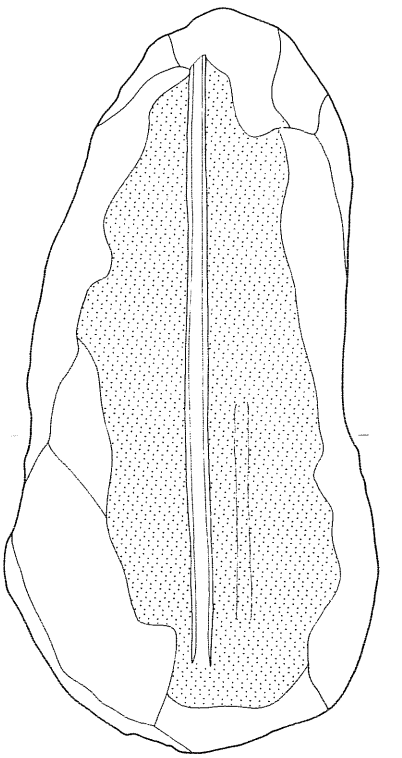

792

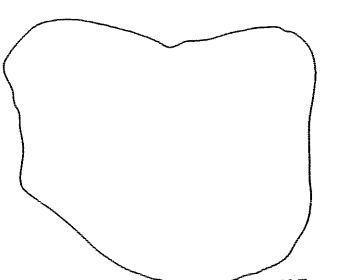

793


794


795

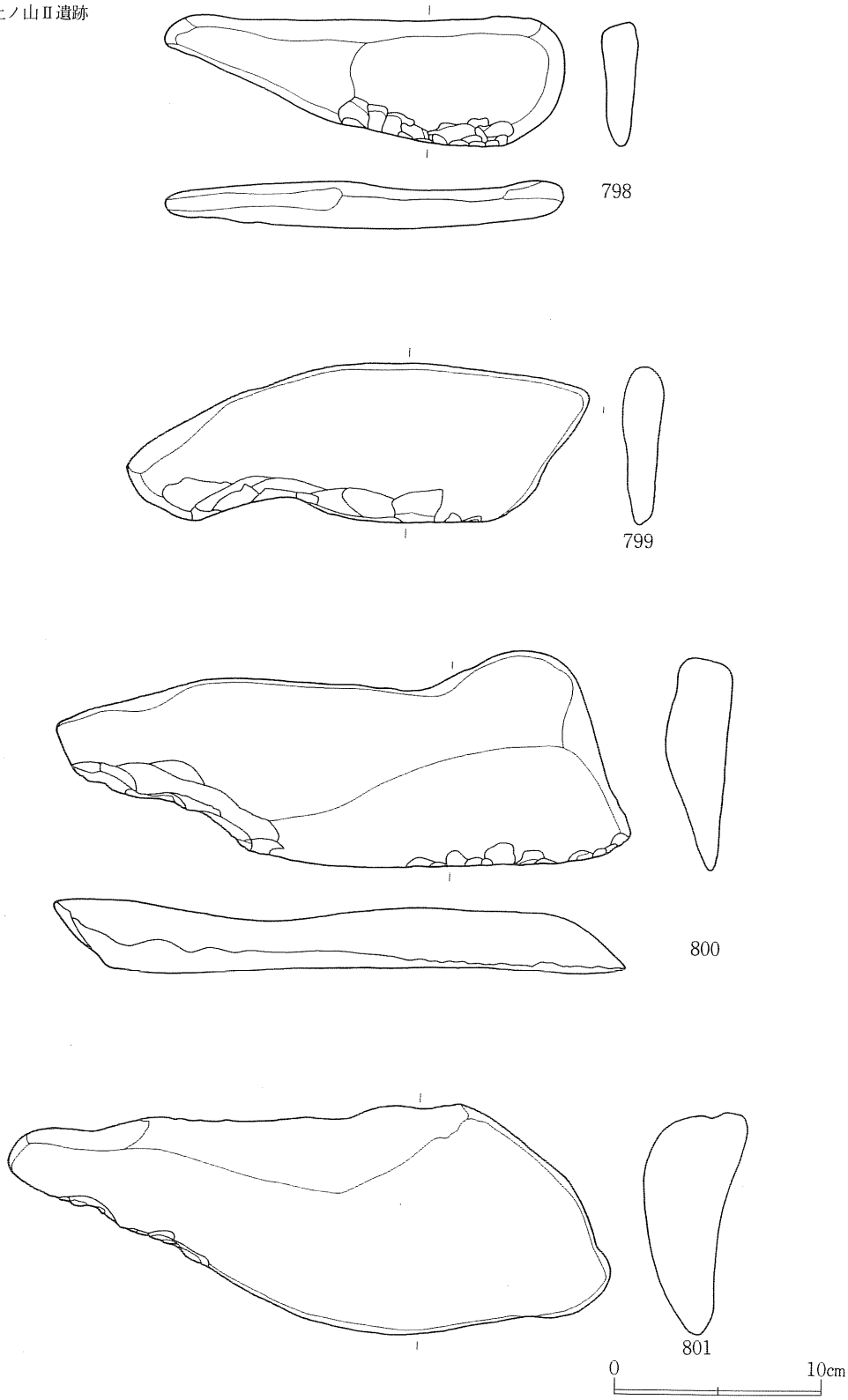

796



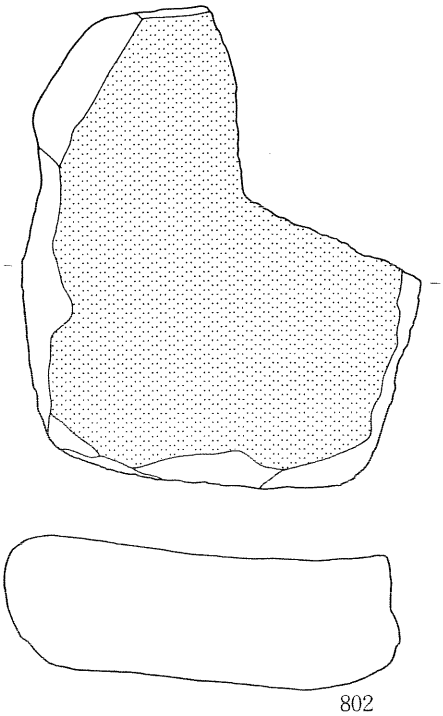

797

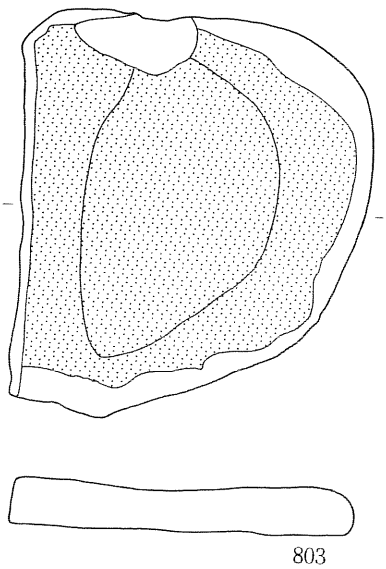
0　10cm

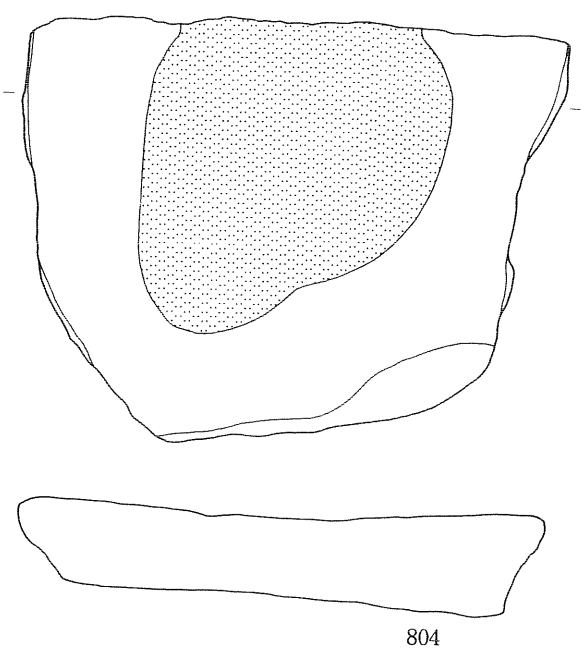
第224図　遺構外出土石器(60)　磨石(2)　砥石

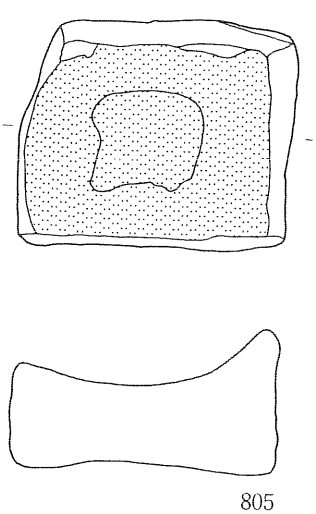



第225図　遺構外出土石器(61)　ナタ状礫器


802

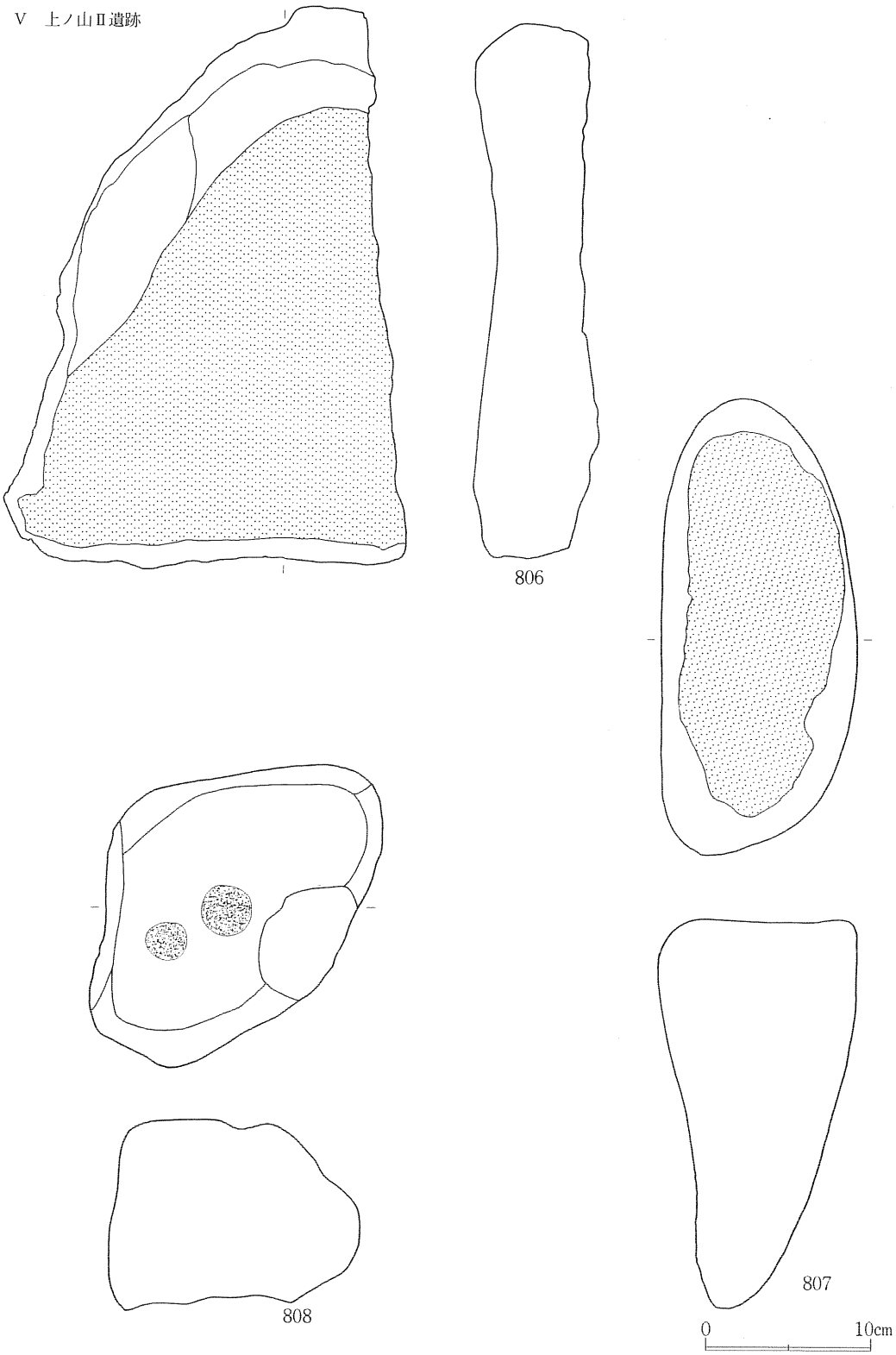

803


804


805

0　10cm

第226図　遺構外出土石器(62)　石皿(1)




第227図　遺構外出土石器(63)　石皿(２)　台石

## 4　石製品

ここで扱う石製品とは、前項で説明した石器以外を対象とし、これまで慣例的に石製品とされたものや、新種の石製品を含んでおり、その数は欠損品も加えると300点ほどになる。これら石製品の出土状況・分布とも他の遺物、土器・石器のそれと変わるものではなく、環状に連なる大型住居跡群の周辺から出土している。

**玦状耳飾**　（第85・233～238図341・342・809～855）

玦状耳飾は欠損品・未完成品も含めて50点出土しているが、第85図の341・342の2点を除く48点は遺構外からの出土である。この50点の玦状耳飾は、その材質によって分類することができる。

a類　蛇紋岩を材質とするものである。（809～815）

黄灰色や透明感のある緑色を呈している。7点のうち完形品は815だけで、また809・814・815以外には補修孔が両面から穿たれる。形状的には円形ないしは楕円形と考えられ、孔は両面から穿孔が行なわれ、断面は「く」の字状で螺旋状痕が明瞭である。切り目も両面から縦方向に行なわれている。器面全体は光沢があり研磨時の擦痕が観察できないものもあるが、810・811では孔付近に凹部があり、この中には横に走る擦痕が認められる。この横方向に走る擦痕が認められるのはこの2点に限られる。

b類　滑石を材質とするものである。（816～826）

黒色からやや透明感のある茶色を呈しており、11点のうち完形品はないが、補修孔の穿たれるのは817・818・822～824の5点である。a類と同様、光沢があり、穿孔・切り目は両面から行われている。

c類　緑色凝灰岩を材質とするものである。（342・827・833～842）

明るい緑色を呈しており、11点のうち827・830・833は未完成品である。また841を除けば全て破損品で、342以外は補修孔の穿たれるものはない。形状的には円形に近いが、小型の834～836、大型の837～842があり、342は縦長で断面も台形に近い。孔は比較的大きく、切り目も長く、器面には擦痕が明瞭に残っている。本類は全体的に整形も粗く、孔も整った円形ではなくa・b類に比較して洗練されていない。

d類　軟質の凝灰岩を素材とするものである。（828～832・843～855）

白色ないし黄白色を呈していて、18点のうち828～832は未完成品で、また855はほぼ円形の自然礫に孔と切り目を加えただけのものである。器面全体には粗く擦痕が残り、851では、何度か穿孔を行っており、853では下方にも穿孔しようとした痕跡がある。4類のうち最も粗い作りをしている。

50点の玦状耳飾をその材質によって4類に分類したがa・b類とc・d類ではその完成度に

大きな差のあることが解る。

次に玦状耳飾の製作工程を知ることの出来る資料がある。第235図に示した未完成品である。前述したように827・830・833はc類で緑色凝灰岩を材質とし、その他はd類とした軟質凝灰岩であり、蛇紋岩・滑石を材質とするものは1点も存在しない。

製作工程は概ね以下の5段階が考えられる。

第1段階　全体を粗く円形に整形するもので、827のように素材を打ち欠いてほぼ円形にするが、この段階以前には当然ながら剝片素材の獲得がある。827には擦痕が認められ磨製石斧などの破損品を利用したものであろう。また828・829・831・832のように自然の円礫を利用した場合は、素材の採集という段階が考えられる。後者の円礫を利用する場合は827に認められる打ち欠きによる整形は必要としない。

第2段階　器面全体の研磨である。最初側面部を次に両面を研磨する。

第3段階　孔部と切り目部の割り付けである。829・831・832から見ると割り付けの際に用いられる工具は先端部の細い鋭利な剝片が考えられるが、描線は比較的稚拙である。

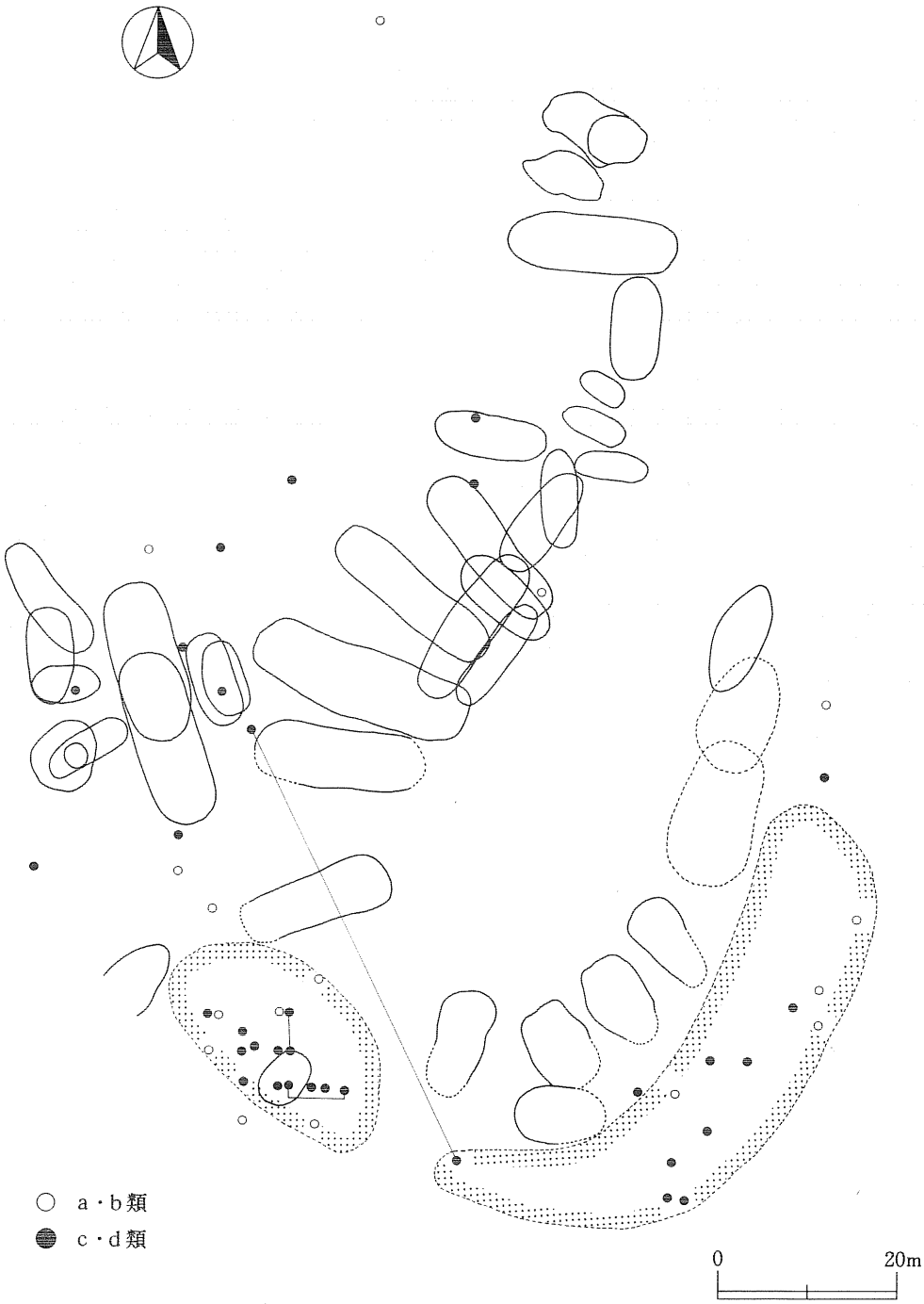
第4段階　穿孔ないしは切り目の作出。この二つの作業は相前後するものである。832では穿孔を貫通しない程度に行い、その後切り目を入れるようである。また831も貫通していないが両面に穿孔の痕跡が認められる。

第5段階　最後の整形と研磨を行うものであるが、d類では前段階で終了するものである。

5段階の製作工程は、凝灰岩を素材とするc・d類から観察可能なことであって、a・b類の製作に関してはさらに1～2段階の工程が考えられるのではないだろうか。特にa類の810・811に認められる横方向の擦痕を有する凹部は、いつの段階で何を目的としたものか、またa・b類の光沢のある面の作出は最終段階での樹皮・布・皮革などによる研磨の工程も考える必要がある。

第228図は玦状耳飾の出土分布図である。a・b類、c・d類と大きく二つに分けたものであるが半数以上が大型住居跡群の南側から出土しており、これは土器や他の石器群の出土分布と変わるものではないが、a・b類の中には住居跡群の北に分布するものがある。

第10表は藤田富士夫氏が行っている「玦状耳飾分類の一方法」に拠って作成したものである。表によれば型式率にはa～d類の分類に関係なく大きなバラつきのあることが解る。




第228図　玦状耳飾出土分布図

## 第10表　玦状耳飾計測表

| 番号 | 分類 | 孔側(a)㎜ | 切目(b)㎜ | 型式率(b／a) | 重量ｇ | 番号 | 分類 | 孔側(a)㎜ | 切目(b)㎜ | 型式率(b／a) | 重量ｇ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 809 | a | 14.4 | 29.2 | 2.0 | 15.6 | 834 | c | 10.6 | 9.6 | 0.9 | 8.8 |
| 810 | 〃 | 12.6 | 20.2 | 1.6 | 6.9 | 835 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 3.9 |
| 811 | 〃 | 15.3 | 15.7 | 1.0 | 7.7 | 836 | 〃 | 6.4 | 7.4 | 1.1 | 1.6 |
| 812 | 〃 | 18.1 | 13.9 | 0.8 | 10.9 | 837 | 〃 | 11.5 | 15.4 | 1.3 | 4.2 |
| 813 | 〃 | 14.3 | 19.0 | 1.3 | 5.9 | 838 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 2.7 |
| 814 | 〃 | 9.2 | 10.0 | 1.1 | 2.8 | 839 | 〃 | 13.2 | 20.1 | 1.5 | 7.4 |
| 815 | 〃 | 9.3 | 16.3 | 1.7 | 6.0 | 840 | 〃 | 9.7 | 15.8 | 1.6 | 3.2 |
| 816 | b | 11.5 | 13.5 | 1.2 | 8.5 | 841 | 〃 | 15.1 | 21.3 | 1.4 | 17.3 |
| 816 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 3.8 | 842 | 〃 | 12.3 | 21.3 | 1.7 | 7.2 |
| 818 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 3.2 | (342) | 〃 | 5.8 | 34.5 | 5.9 | 4.6 |
| 819 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 10.0 | 843 | d | 11.7 | 22.4 | 1.9 | 4.8 |
| 820 | 〃 | 13.6 | 22.0 | 1.6 | 10.2 | 844 | 〃 | 13.1 | 22.9 | 1.7 | 4.8 |
| 821 | 〃 | 17.0 | 22.7 | 1.3 | 8.5 | 845 | 〃 | 9.6 | 23.3 | 2.4 | 3.1 |
| 822 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 8.1 | 846 | 〃 | 23.0 | 41.5 | 1.8 | 6.7 |
| 823 | 〃 | 10.9 | 13.0 | 1.2 | 2.8 | 847 | 〃 | 14.3 | 23.3 | 1.6 | 5.9 |
| 824 | 〃 | 9.5 | 17.3 | 1.8 | 5.1 | 848 | 〃 | 10.8 | 21.1 | 1.9 | 6.4 |
| 825 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 3.0 | 849 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 6.5 |
| 826 | 〃 | 10.9 | 14.1 | 1.3 | 3.4 | 850 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 11.8 |
| 827 | c | ／ | ／ | ／ | 9.7 | 851 | 〃 | 11.6 | 45.1 | 3.9 | 17.3 |
| 828 | d | ／ | ／ | ／ | 26.1 | 852 | 〃 | 15.7 | 30.0 | 1.9 | 11.0 |
| 829 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 19.1 | 853 | 〃 | 7.1 | 27.2 | 3.8 | 3.1 |
| 830 | c | ／ | ／ | ／ | 20.7 | 854 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 3.8 |
| 832 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 15.0 | (341) | 〃 | ／ | ／ | ／ | 4.7 |
| 833 | 〃 | ／ | ／ | ／ | 11.8 | 855 | 〃 | 16.7 | 24.4 | 1.5 | 18.2 |

**燕尾形石製品**　（第 239 ～ 243 図 856 ～ 882）

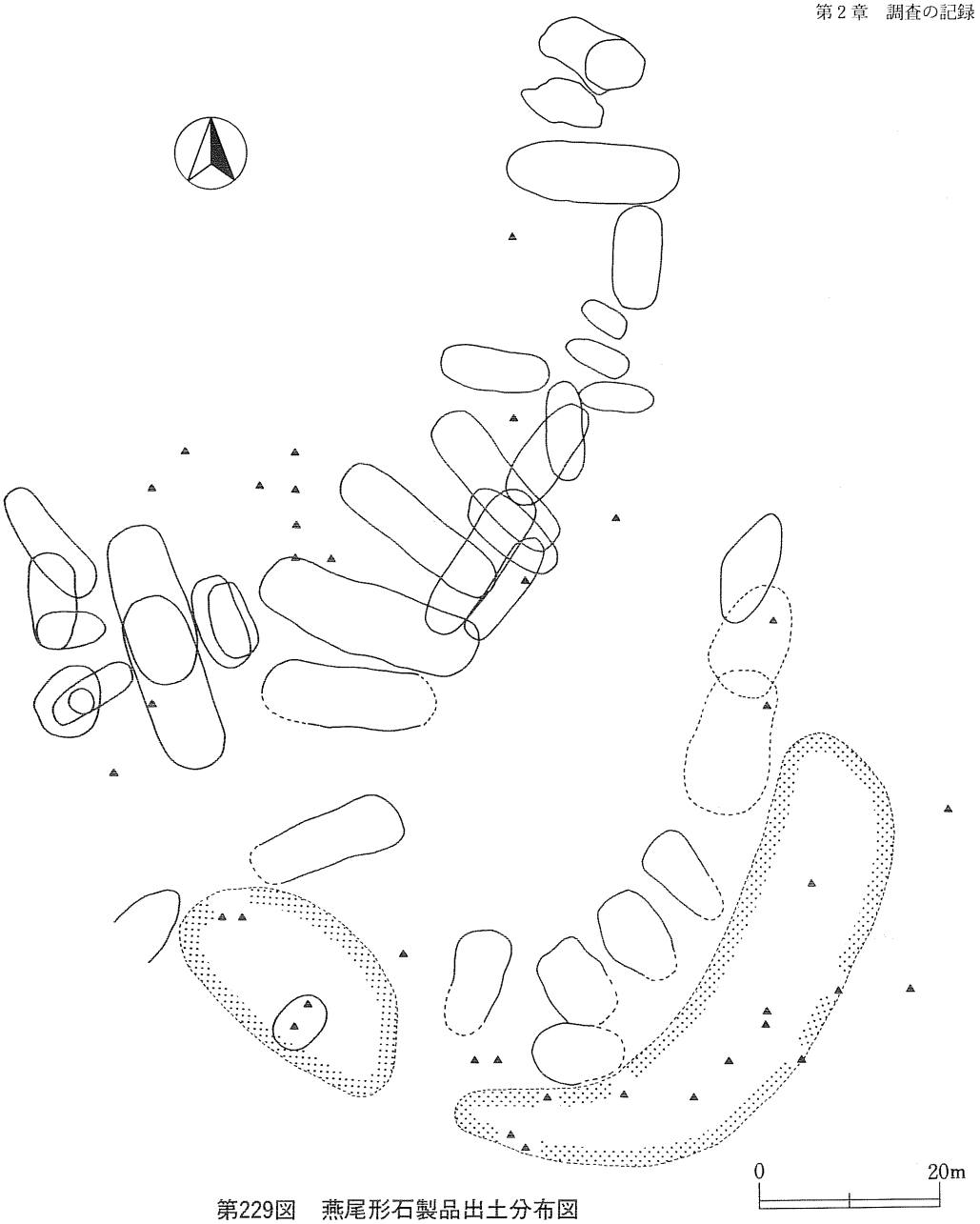
この石製品は、全体を短冊状や棒状に研磨した後に長軸の一端に切り込みを入れることで、一端が「燕の尾」状になっていることから燕尾形石製品という名称を付したものである。出土点数は欠損品も加えると 58 点で、材質はスレートと凝灰岩に限られ、転石を利用したのが大半であるが、石棒や石剣の破損品を転用することもある。形態的に次のように分類できる。

a 類　切り込みと反対側の一端に孔を有する。（856 ～ 859、861 ・ 862）

燕尾部を作出する切り込みが長く、孔は両面から穿たれる。856 ・ 857 では孔側に浅い溝がある。断面は長方形や楕円形を呈しているが、857 のそれはカマボコ型である。燕尾部の断面は、方形から円形に近く先端部も厚味があるが、858 の燕尾部先端は両面から研ぎ出されている。

b 類　長軸の一端のみに切り込みがある。（860 ～ 876 ・ 881 ・ 882）

燕尾部を作出する切り込みは比較的短く、a 類に比べると全体の整形は粗い。866 ・ 868 ・ 870 ～ 873 は石棒などの縦長の剝片を、863 ～ 865 では石棒の切断破片を利用している。また 860 ・ 867 ・ 576 は柱状節理のある転石、881 ・ 882 は軟質凝灰岩の転石を素材としている。石




第229図　燕尾形石製品出土分布図

棒の縦長剝片や切断破片を素材とするものは、一端に単に切り込みを入れただけのものが多いが、863～865では燕尾部先端を両面から薄く研ぎ出している。転石を利用するものには研磨によって整形した後、切り込みによって燕尾部を作出している。881・882はともに軟質凝灰岩を素材としており、全面を研摩した後に切り込みを入れる。形態的には前者は和鋏、後者は後述するカツオブシ形石製品に類似している。

c類　両端に切り込みがある。(877～880)

4点とも緑色凝灰岩を素材とし、断面が楕円形の板状を呈し、両端に切り込みを入れている。877を除けば他は両端が著しく破損しており、a・b類の燕尾形石製品とはやや趣きを異にしている。

燕尾形石製品を概ね以上の3類に分けたが、この石製品の典型は比較的長い燕尾部と一端に孔のあるa類と考え、b・c類も切り込みが長軸の一端ないしは両端に加えられることから、広義の燕尾形石製品として捉えている。しかしながら、b類のうち867・869・874～876のように切り込みが極めて短く浅いものや、c類の878～880のように両端が著しく破損しているものなどを燕尾形石製品の用途を考えるときに等しく扱っていいのかという疑問の生じる所である。いずれにしろこの燕尾形石製品と銘々した一連の石製品は上ノ山Ⅱ遺跡で初めてまとまって出土したわけであるが、残念ながらその用途までは明確に言及できない。第229図は出土分布図であるが、これも他の遺物の出土分布と変わることなく大型住居跡群の南側から多く出土しているものの、西側に8点ほどまとまって出土しており、他の石製品の出土状況とやや相違している。

**カツオブシ形石製品**　(第244～250図883～930)

軟質凝灰岩の縦長の転石を研磨し、両端を砲弾状に削り出すことによって全体がカツオブシの形状に似ていることからこの名称を与えたものである。全体の長さはほぼ大人の手中に収まる程度で、断面は方形から長方形となる。出土点数は70点であり、以下の6類に分類できる。

a類　断面が長方形に近く全面の研磨が丁寧ではあるものの両端は研ぎ出しただけのものであり、側面を研ぎ出すことによって両端を鋭くしている。(883～894)

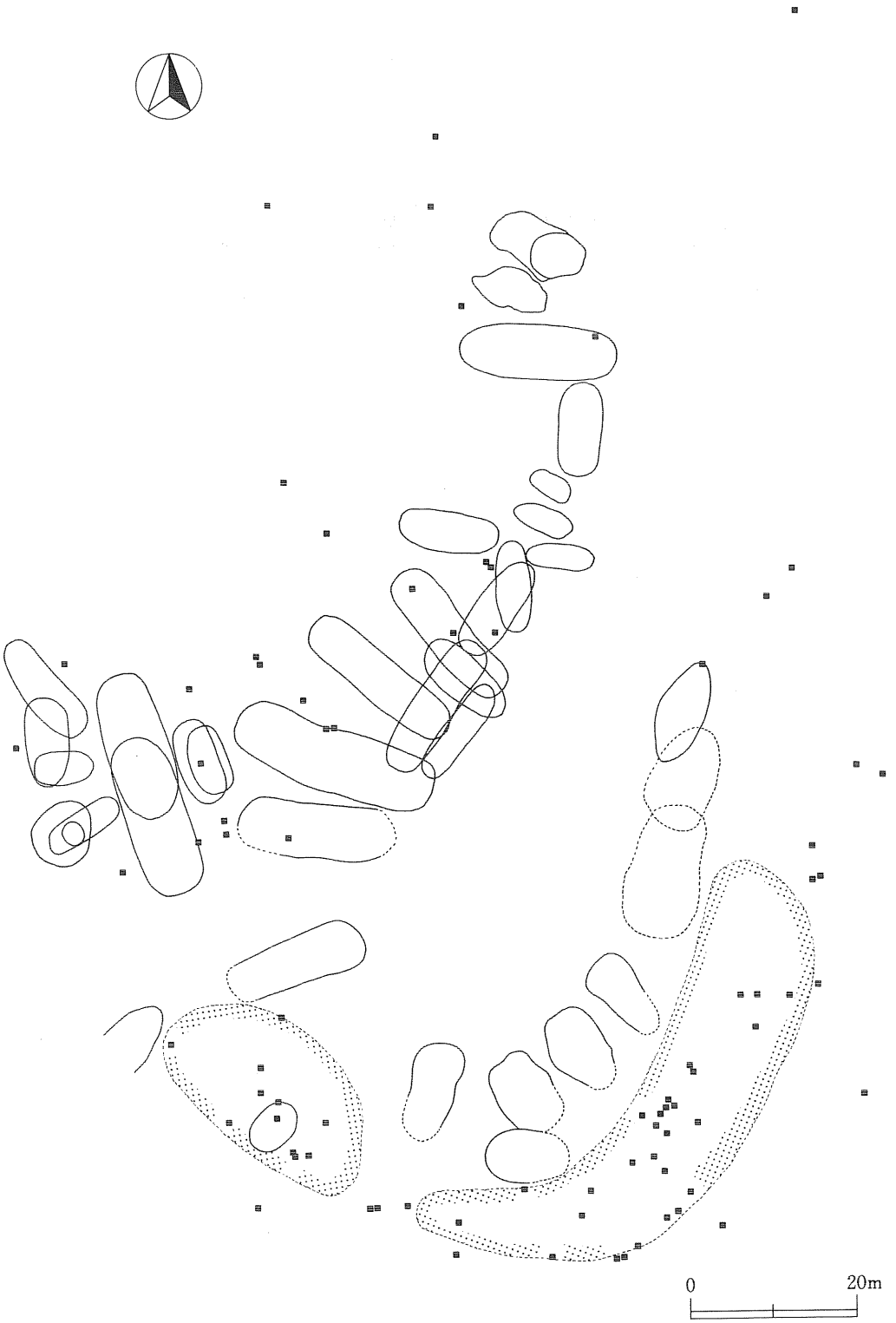
b類　断面が正方形に近く、両端が幅の狭い小刀様の工具で砲弾形に削り出されるもので、895・899などは削り出しが顕著である。(895～902)

c類　断面は長方形で、両端が直線的になるものである。作出方法はa類とほぼ同じで両端の削り出しは行われない。(903～908)

d類　転石の形状と自然面を残しており、一端を鋭くしたものが多い。909・910では一端を削り出す程度であり、911～920は小型のもので、両面には自然面を広く残し、側面の研磨によって整形しているものがほとんどである。先端部も片側面からの研ぎ出しだけで鋭くしている。(909～920)

e類　整形のための剝離痕を残し、一部研磨が行われるもので、カツオブシ形石製品の未完成品と考えられるが、a～d類ではこうした剝離痕跡が認められる製品がないことから、この類は、剝離痕を残しながらも923～927などを完成品と考えることもできる。(921～927)

f類　一端に孔の有するもので、全体の形状、作出方法などはa・b類と変わるものではな




第230図　カツオブシ形石製品出土分布図

く、カツオブシ形石製品の範疇に加えたものである。(928～930)

このカツオブシ形石製品もその用途が明確ではなく、形態的変化以上に言及できるものはない。出土状況も他の石器同様大型住居跡群の南側からまとまって出土しているが、そのうちの東側に全体の40%が集中している。

**第11表　カツオブシ形石製品計測表**

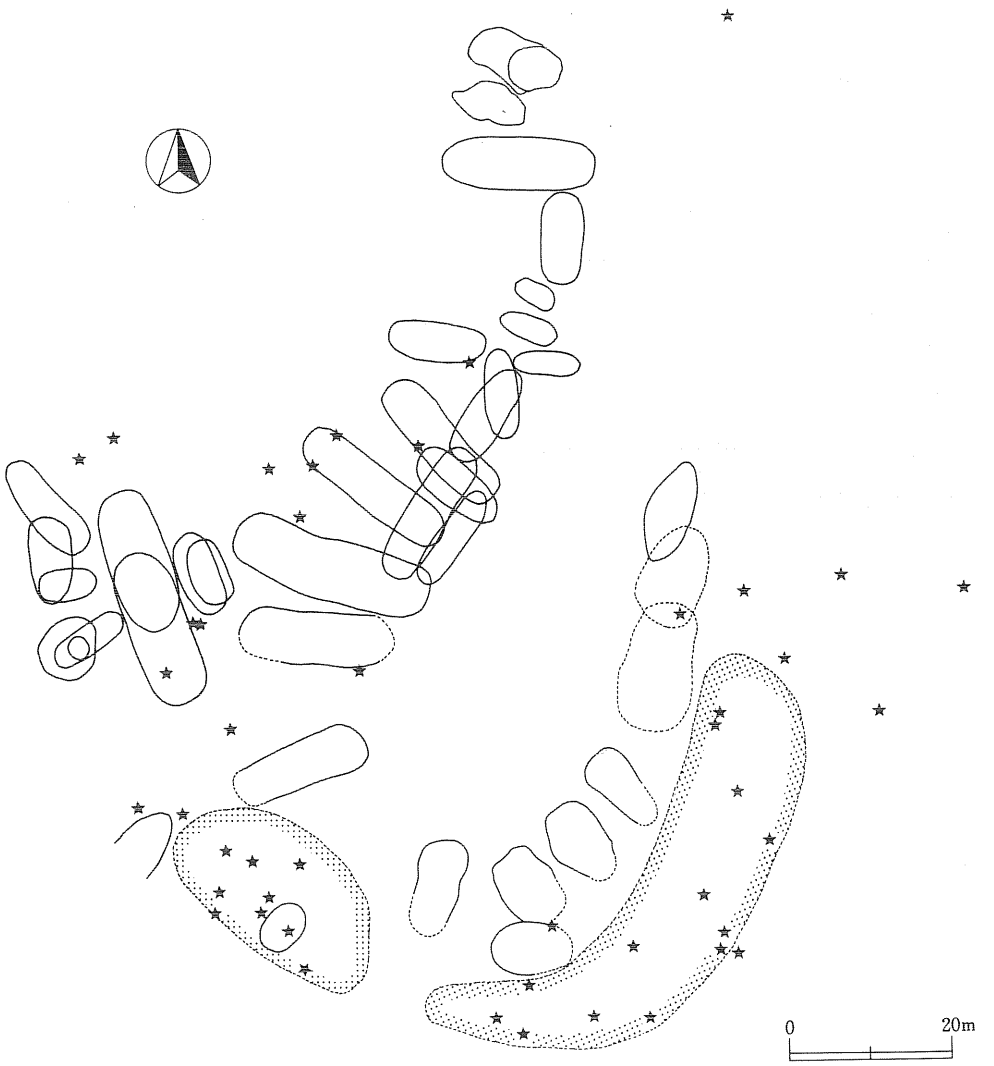
| 遺物番号 | 分類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|
| 883 | a | 108.8 | 30.4 | 17.3 | 62 |
| 884 | 〃 | 97.3 | 22.8 | 13.5 | 32 |
| 885 | 〃 | 109.2 | 26.9 | 16.5 | 55 |
| 886 | 〃 | 82.3 | 22.5 | 10.9 | 24 |
| 887 | 〃 | 81.8 | 18.6 | 9.6 | 24 |
| 888 | 〃 | 89.5 | 26.1 | 11.5 | 34 |
| 889 | 〃 | 85.2 | 27.9 | 15.2 | 33 |
| 890 | 〃 | 92.4 | 24.4 | 13.5 | 35 |
| 891 | 〃 | 94.5 | 25.0 | 8.1 | 23 |
| 892 | 〃 | 90.6 | 25.9 | 9.5 | 26 |
| 893 | 〃 | 88.7 | 24.9 | 9.2 | 24 |
| 894 | 〃 | 81.8 | 23.3 | 7.1 | 15 |
| 895 | b | 86.1 | 20.1 | 15.7 | 31 |
| 896 | 〃 | 77.6 | 17.2 | 16.0 | 25 |
| 897 | 〃 | 71.2 | 17.9 | 10.7 | 18 |
| 898 | 〃 | 123.8 | 26.1 | 17.1 | 57 |
| 899 | 〃 | 104.1 | 22.2 | 14.3 | 39 |
| 900 | 〃 | 97.4 | 19.5 | 13.9 | 27 |
| 901 | 〃 | 87.5 | 17.1 | 13.7 | 20 |
| 902 | 〃 | 96.8 | 14.8 | 11.4 | 20 |
| 903 | c | 95.4 | 19.6 | 10.9 | 23 |
| 904 | 〃 | 113.4 | 23.6 | 13.1 | 47 |
| 905 | 〃 | 91.5 | 23.8 | 12.1 | 34 |
| 906 | 〃 | 80.5 | 19.9 | 9.8 | 21 |
| 907 | 〃 | 97.6 | 25.7 | 12.7 | 38 |
| 908 | 〃 | 86.1 | 23.1 | 12.0 | 28 |
| 909 | d | 108.4 | 29.8 | 17.1 | 59 |
| 910 | 〃 | 73.6 | 23.5 | 16.8 | 39 |
| 911 | 〃 | 67.7 | 21.8 | 11.8 | 20 |
| 912 | 〃 | 78.9 | 21.1 | 9.0 | 19 |
| 913 | 〃 | 54.0 | 15.8 | 7.0 | 7 |
| 914 | 〃 | 80.3 | 18.7 | 10.3 | 12 |
| 915 | 〃 | 61.3 | 15.8 | 11.1 | 11 |
| 916 | 〃 | 58.7 | 15.2 | 9.2 | 10 |
| 917 | 〃 | 86.5 | 25.0 | 15.8 | 34 |
| 918 | 〃 | 81.8 | 23.5 | 10.5 | 28 |
| 919 | 〃 | 89.5 | 26.1 | 11.3 | 49 |
| 920 | 〃 | 83.8 | 31.3 | 8.8 | 31 |
| 921 | e | 100.2 | 34.4 | 11.7 | 58 |
| 922 | 〃 | 102.0 | 35.3 | 8.5 | 44 |
| 923 | 〃 | 94.8 | 21.9 | 4.5 | 16 |
| 924 | 〃 | 106.5 | 25.0 | 8.6 | 31 |
| 925 | 〃 | 99.9 | 27.0 | 14.8 | 47 |
| 926 | 〃 | 84.8 | 10.3 | 25.6 | 31 |
| 927 | 〃 | 105.5 | 31.4 | 15.0 | 48 |
| 928 | f | 93.7 | 24.0 | 16.1 | 41 |
| 929 | 〃 | 104.9 | 29.7 | 7.7 | 34 |
| 930 | 〃 | 132.6 | 29.0 | 16.7 | 81 |

石刀　（第251図931・932）

2点とも板状のスレートを材質とするもので、931は全面を研磨しているが、932では研磨はやや粗く、反りも顕著ではない。

石剣・石棒　（第251・252図933～949）

100点ほど出土しているが、いづれも破損品ばかりで両者の分類は困難である。断面は円形か楕円形であり材質はスレートか緑色凝灰岩である。出土分布は大型住居跡群の南側からやはりまとまって出土している。遺構外出土の石剣・石棒に関しては全て破損品であるが、一方遺構内出土のものは第83図329～332のようにほぼ完形品であるという事実は、石剣・石棒の使用目的を考える上で重要である。




第231図　石剣・石棒出土分布図

**膠着剤及び縄目の残る石製品**　（第253図950～954）

完形品はないが、膠着剤や縄目の痕跡を残すのが5点出土している。膠着剤は光沢のある黒色を帯びており、縄目は950ではRLの縄を使用している。950・951・954では片面にのみ両者の痕跡が認められることから、石器の長方軸方向に平行に片面に着柄したことが考えられる。着柄は縄で縛った後、黒色の膠着剤を使用したものである。黒色の膠着剤に関しては肉眼的観察ではアスファルトではなく漆の可能性がある。

**ヘラ状石製品**　（第254図955～961）

断面は薄い長方形で、スレートを材質とし、全体を研磨し、長軸両端はやや丸みをもっている。全体的には竹ベラに似た形状を呈している。両端には縦・横・斜め方向に振幅の短い使用痕が観察できる。

**使用痕のある石製品**　（第255・256図962～974）

転石の一端に擦痕の明瞭に認められるもので、素材となる転石の材質と形状から2つに分類できる。

a類　安山岩の転石で楕円形に近い石を利用する。（962～968）

転石の長軸の一端あるいは両端に擦痕が明瞭に確認できる。963～965・968では擦痕が横方向かやや斜め方向に走っており、擦痕の認められる幅は963～965では1.0～1.5㎝である。

b類　緑色の凝灰岩やスレートの縦長の転石を利用する。（969～974）

縦長の転石の一端に横方向の擦痕が認められる。断面は厚い方形に近く、969～972では先端部の擦痕の認められる幅は0.5㎝ほどである。

**抉りのある石製品**　（第257図975～982）

板状の安山岩の両端に抉りのあるもので975・977・978が典型的である。抉りのある部分は磨滅が著しく、また975～978では中央部側面に、敲き潰された痕跡を広く認めることができる。長軸に直交する着柄が考えられる。

**打製石斧様の石製品**　（第258・259図983～999）

安山岩や軟質の凝灰岩を粗く剥離し、打製石斧に似た形状を有している。983では全面が研磨されているが、175・987・988・990などは部分的に研磨されている。また985・987・990・992・995の端部には使用痕が認められる。

**側縁部打ち欠きの石製品**　（第260図1000～1006）

楕円形や縦長の転石の一側縁を粗く打ち欠いただけのものである。材質は凝灰岩やスレートなどである。

**円盤状石製品**　（第261図1007～1015）

安灰岩を材質として片面に剥離を施し、全体を円形にしたものである。1007・1008は裏面

が湾曲している。また1009は両面から彫刻刀様の工具で抉り取っており両面とも菊花状の文様に似ている。

**鍬形石製品**　（第261図1016）

凝灰岩の扁平な自然礫の周辺を両面から打ち欠いているが、擦痕等は観察できない。

**短柵形有孔石製品**　（第262図1017～1024）

短柵形に研磨し、一端に穿孔するもので、全体の形状は把握できないものの1017はほぼ完型品に近いと考えられる。

**棒状有孔石製品**　（第263図1025～103）

棒状の軟質凝灰岩の一端に大きめの孔を穿ったもので、全体を軽く研磨しているものである。

**盤状有孔石製品**　（第265図1038～1047）

安山岩や凝灰岩の転石に孔を穿ったもので円形や楕円形のものが多い。1047・1048は安山岩を素材とし、全体を円形に整形して、穿孔あるいは切り込みを入れたものである。

**有溝石製品**　（第264図1031～1037）

1031～1033は盤状の転石に細い溝を入れたものである。1035は幅は1.0㎝の溝、1036は研磨した後に鋭い溝を入れている。1037は凹石に転用されたものであるが片側面に4条の溝がある。

**男根状石製品**　（第266図1049～1052）

いずれも軟質の凝灰岩を利用するものである。1049や1050は全体を削り出すことによって成形している。特に1049に関しては具象的である。1051は円柱状の転石に溝をめぐらしており下端はその溝部分で折断されている。

**刻線画礫**　（第267図1053）

円盤状の自然礫に細い沈線で絵を描いている。表面左上には左回りの渦巻文、その下には三角形を思わせる縦方向の沈線が引かれる。裏面にも何条かの沈線があるが、明確ではない。

**岩板**　（第267図1055・1057）

2点とも軟質の凝灰岩を利用しており沈線も不明瞭な部分がある。1055は三角形の頂点から垂下する沈線があり、その中央部に渦巻き文があるが摩滅が著しく左側半分に渦巻文があったかどうかは不明である。

**その他の石製品**　（第267図1054・1056）

1054は両端に獣類の手を思わせる刻目があり、1056は凹のある球状の石製品である。

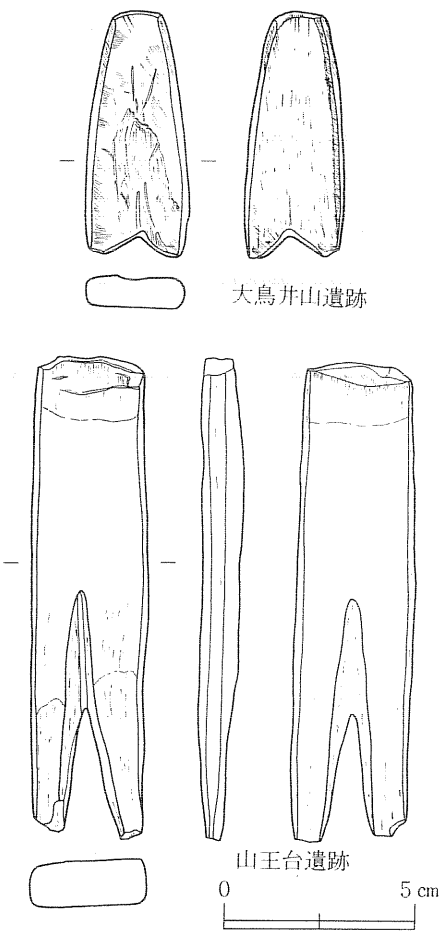
## 小　結

上ノ山Ⅱ遺跡出土の石製品には多様な種類の石製品が存在する。玦状耳飾については、前に分類したａ・ｂ・ｃ・ｄ類のうちａ・ｂ類とｃ・ｄ類では完成度に大きな差があることが解った。こ

れは技術と原材の石質によるものと考えられる。しかし、これまで県内では蛇紋岩や滑石を含む岩脈が発見されておらず、産地同定の必要性があろうと考えられるが、多少飛躍的に考えるならば、a・b類の耳飾は完成品として搬入された可能性があり、それの模倣品がc・d類と考えることもできるであろう。このことは蛇紋岩や滑石の剝片あるいは原石が、調査では1点も出土していないという事実にも裏付けられる。

燕尾形石製品に関しては、当遺跡でまとまった資料として出土したのを機に周辺地域を調査してみると、これまでも県内を中心に数点出土していることが解っている。しかし資料としてのまとまりからすれば上ノ山Ⅱ遺跡を初出としても差し支えないものと考えている。

燕尾形石製品の出土例は古くは昭和15年に樋口清之氏の「垂玉考」の中に掲載されている。(註1)図を見ると孔と燕尾部があり上ノ山Ⅱ遺跡のa類に相当しよう。出土地点は現在の山形県東田川郡とあるだけである。一方秋田県内では雄物川町の根羽子沢遺跡(註2)、横手市の大鳥井山遺跡(註3)、南外村の山王台遺跡(註4)、田沢湖町の黒倉B遺跡(註5)で出土している。根羽子沢例は短い切り込みだけのb類、山王台例は切り込みの長さからa類、黒倉B例は破損品ではあるがおそらくb類であろう。大鳥井山例は燕尾部を作出する切り込みが、敲打によるものであって燕尾形石製品の作出方法とは異なるようである。上記遺跡の中心となる出土土器は根羽子沢が大木7a～8b、山王台は大木8b、黒倉は大木7a・7bである。出土例が少なく、早計ではあるがこの燕尾形石製品は縄文時代前期～中期の大木文化圏域の内陸部に分布するのではないだろうか。またこの石製品の用途は全く不明であるものの、脂肪酸分析の結果では石器の両端に堅果類の脂肪酸が多量に検出されたという注目すべき結果がありこの石製品の用途を考える上で極めて重要な点である。



第232図　他遺跡出土の燕尾形石製品

カツオブシ形石製品は、これまで全く発見されなかったものであり、また用途も全く不明である。先の燕尾形石製品とともに、これを機に出土例の報告が増加することを期待したい。

使用痕のある石製品とした、転石の一端に横方向を中心とする擦痕が認められるのは玦状耳

飾や燕尾形石製品の切り込みに使用された工具と考えられないだろうか。

この他膠着剤の付着する石製品や、打製石器様の石製品、抉りのある石製品などはいずれも軟質の石材を素材とし、また着柄方向も考えることもできるし、他に頁岩を利用した打製石斧や磨製石斧が存在することを考慮すれば、この軟質の石製品類は土掘り具などの用途を考える必要があろう。

上ノ山Ⅱ遺跡出土の石製品は、その量とバリエーションからすれば、従来の縄文時代前期の石器組成に関する概念に少なからず影響を与えるものである。

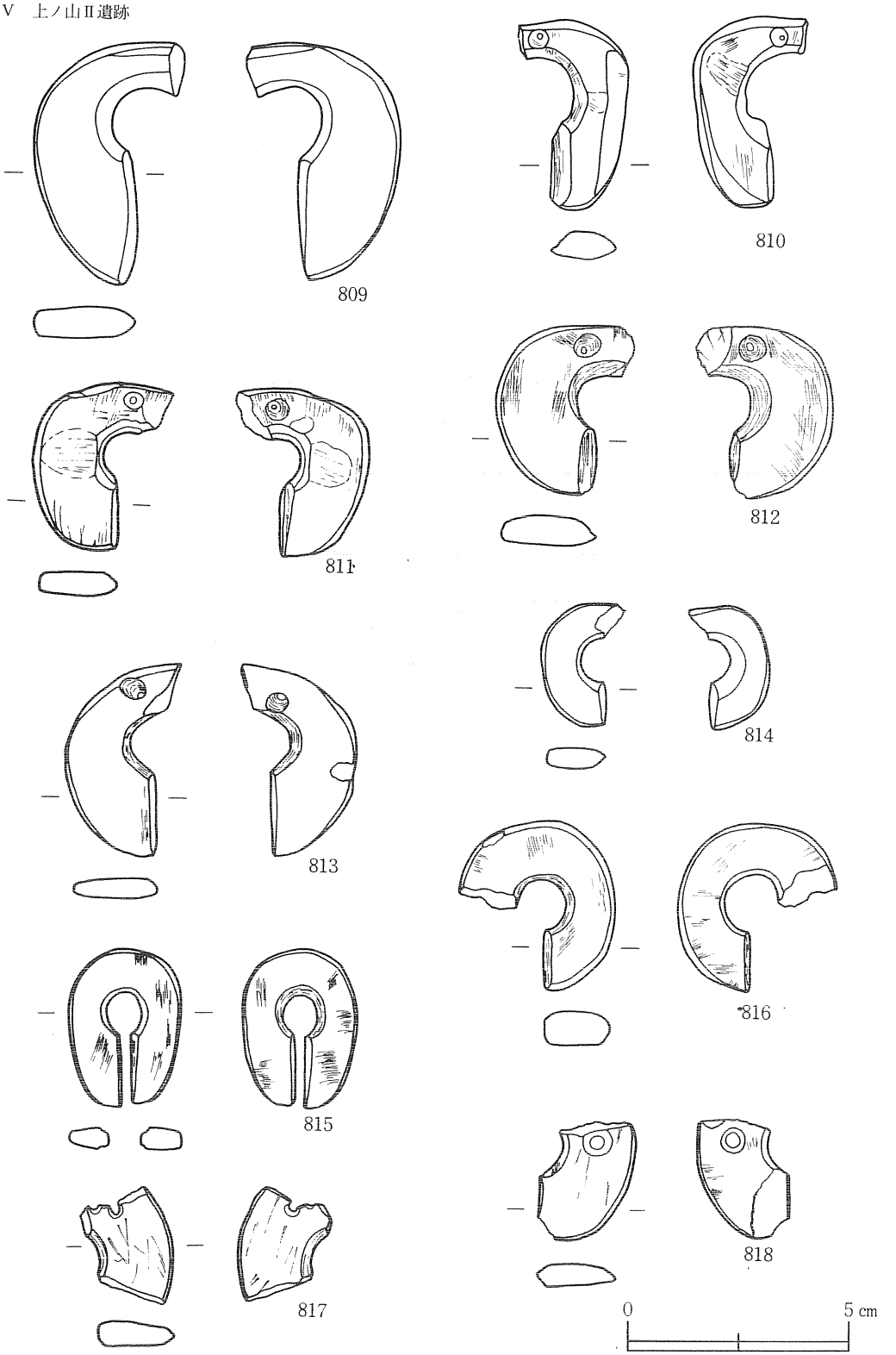
註1　樋口　清之　「垂玉考」『考古学雑誌』　第三十巻第六号　考古学会　1940（昭和15年）

註2　雄物川町教育委員会　「根羽子沢遺跡発掘調査報告書」　1987（昭和62年）

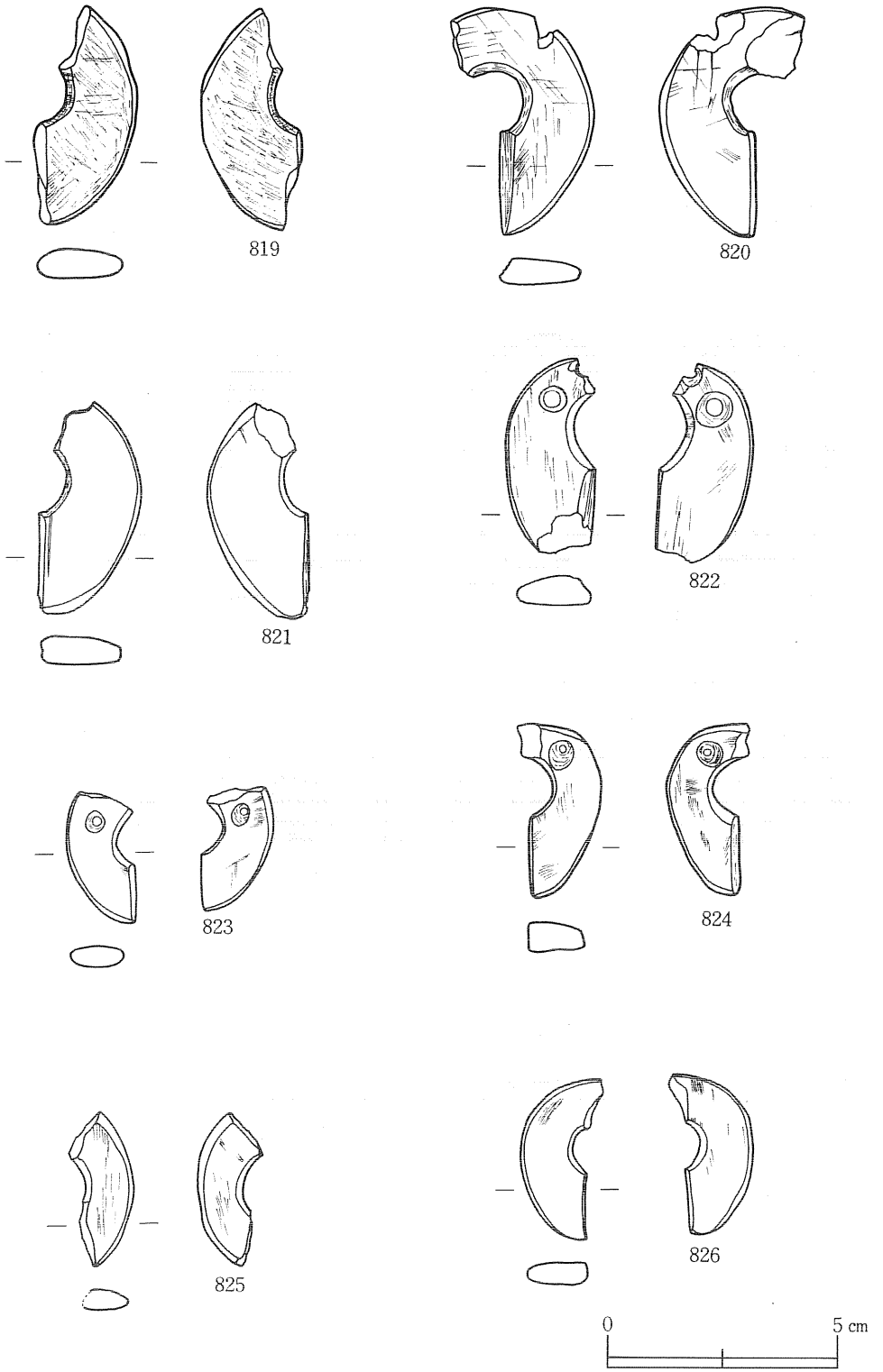
註3　横手市教育委員会　沢谷　啓氏の御好意により実見、測図したものである。

註4　遺跡の紹介は南外村教育委員会「南外村誌」資料編第六集1982（昭和57年）によるが、燕尾形石製品の実見、測図は同村教育委員会教育長　伊藤　順三氏の御好意によるものである。

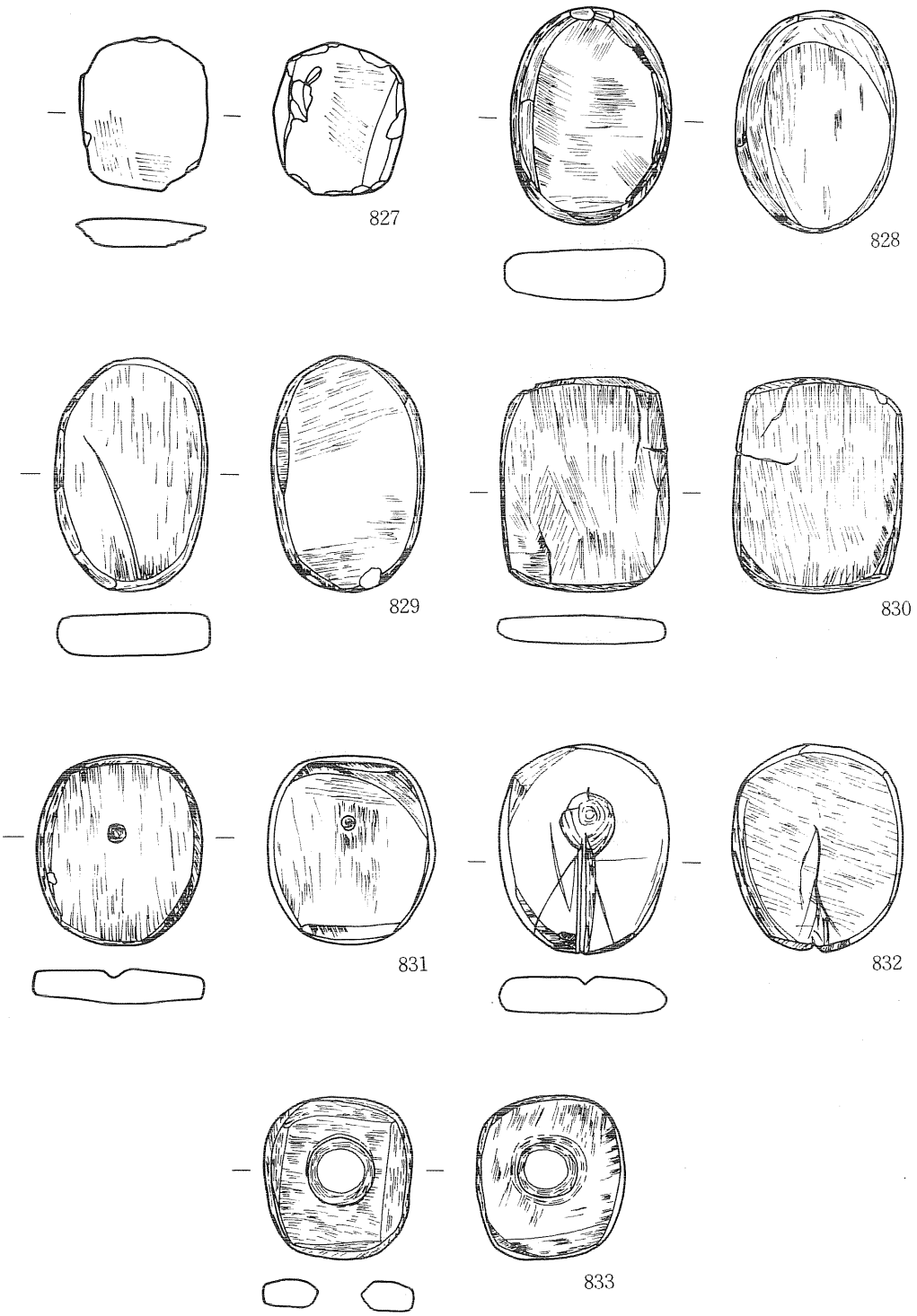
註5　田沢湖町教育委員会　「黒倉B遺跡―第1次発掘調査報告―」　1985（昭和60年）



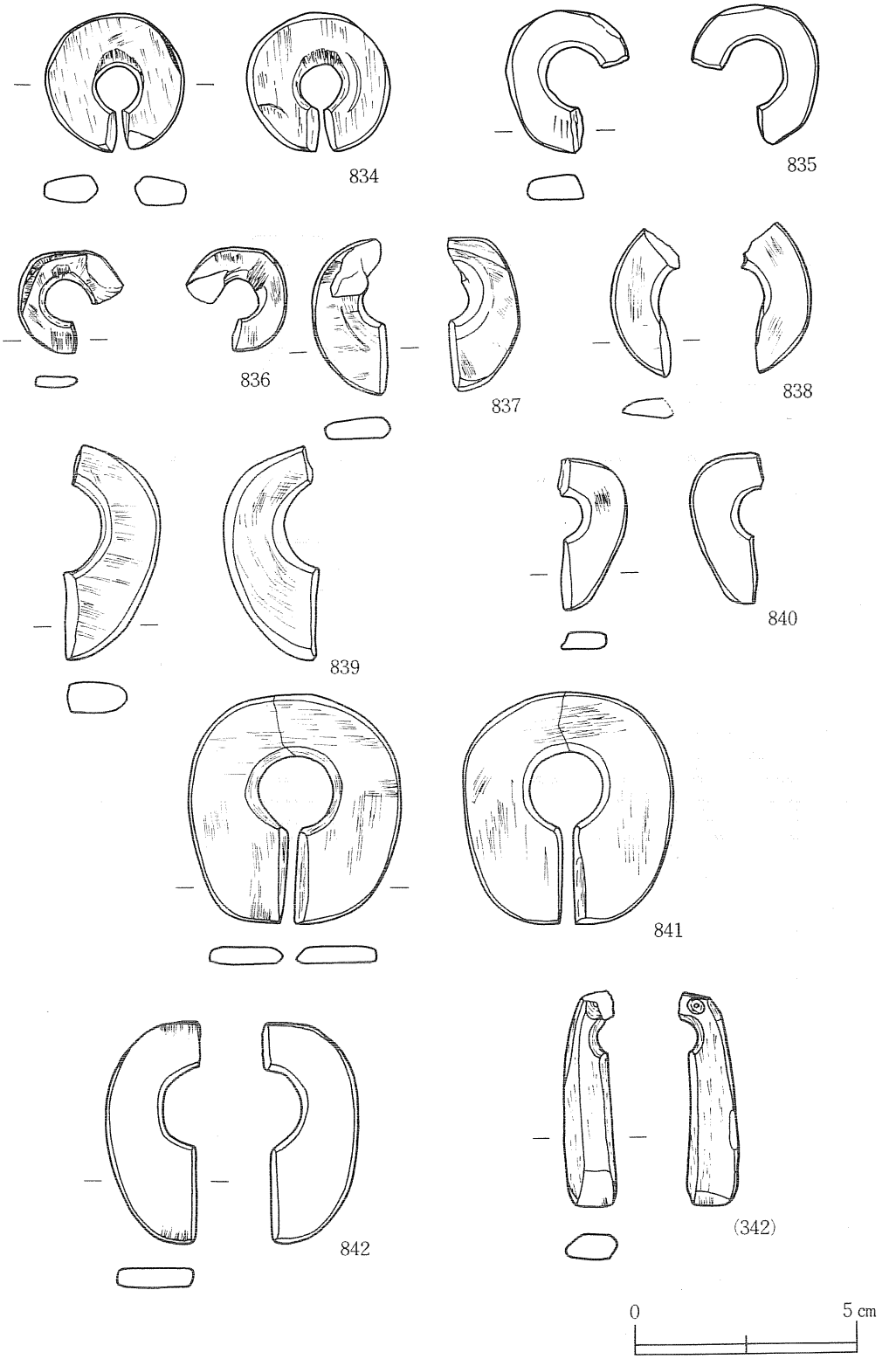

第233図　遺構外出土石製品（1）　玦状耳飾（1）



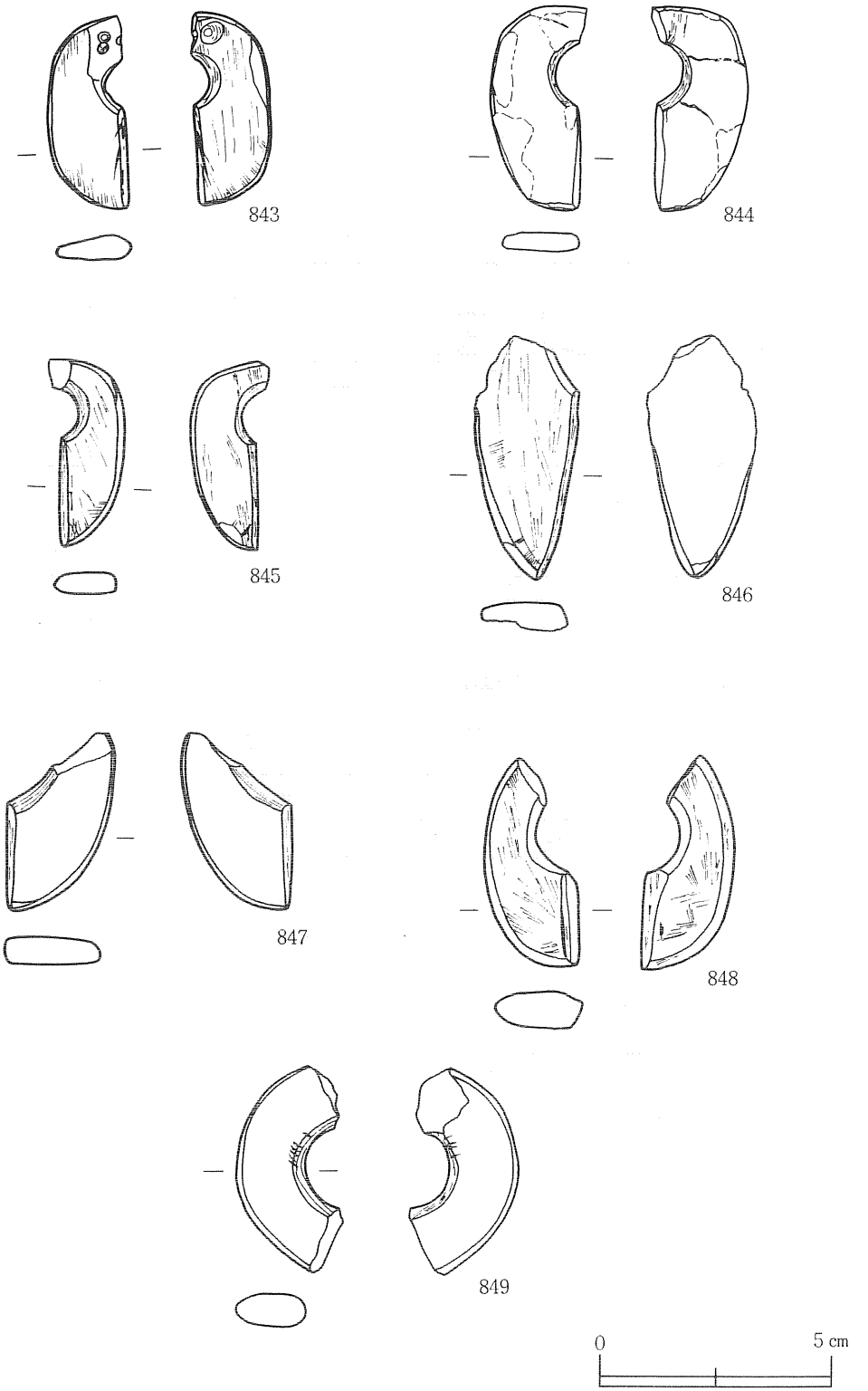

第234図　遺構外出土石製品（2）　玦状耳飾（2）



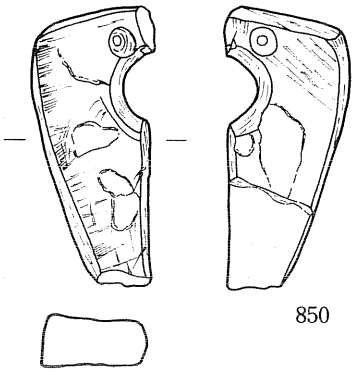

第235図　遺構外出土石製品（３）　玦状耳飾（３）

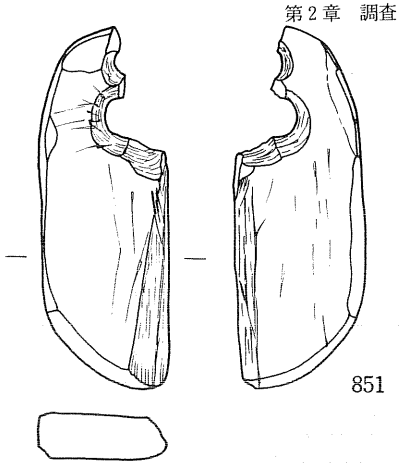


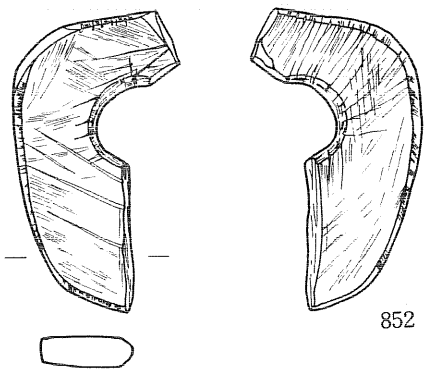

第236図　遺構外出土石製品（4）　玦状耳飾（4）

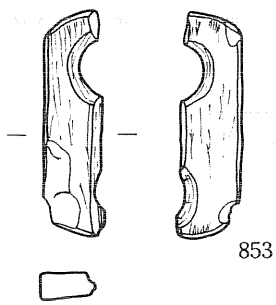


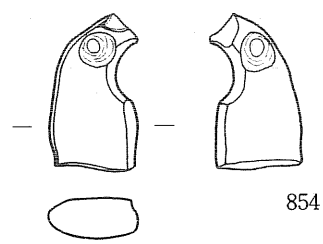

第237図　遺構外出土石製品（5）　玦状耳飾（5）

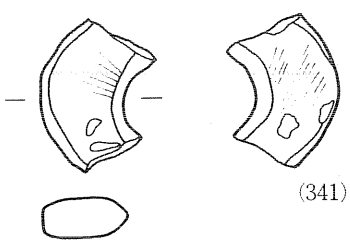


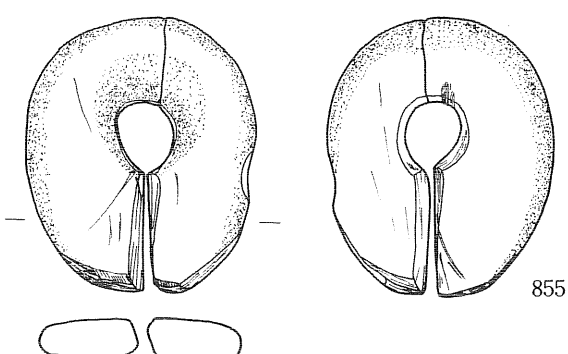



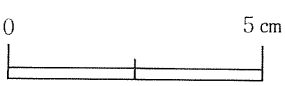



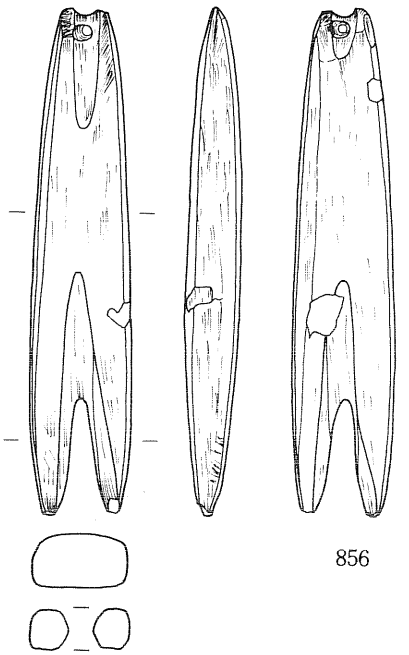



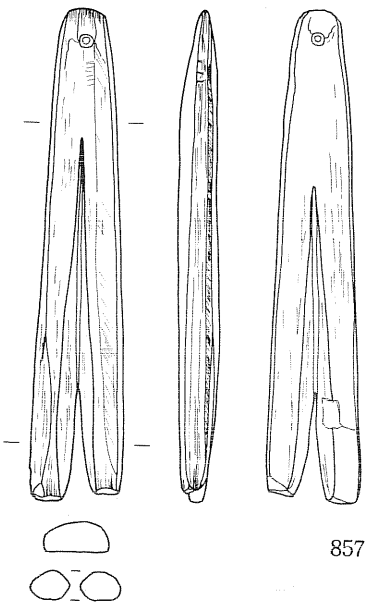



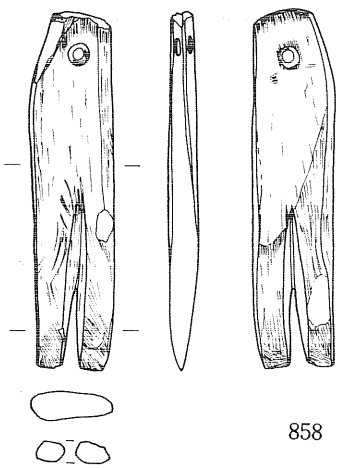



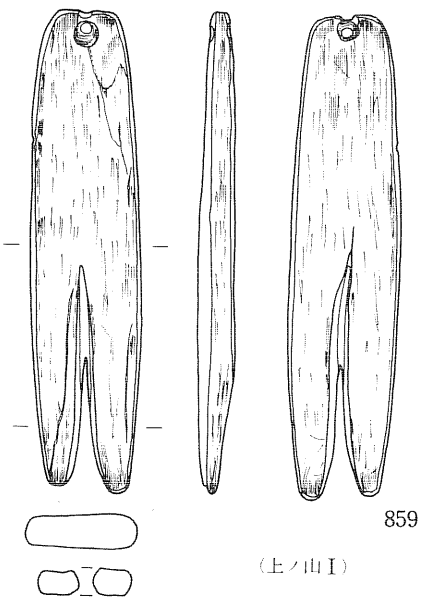




第238図　遺構外出土石製品（6）　玦状耳飾（6）

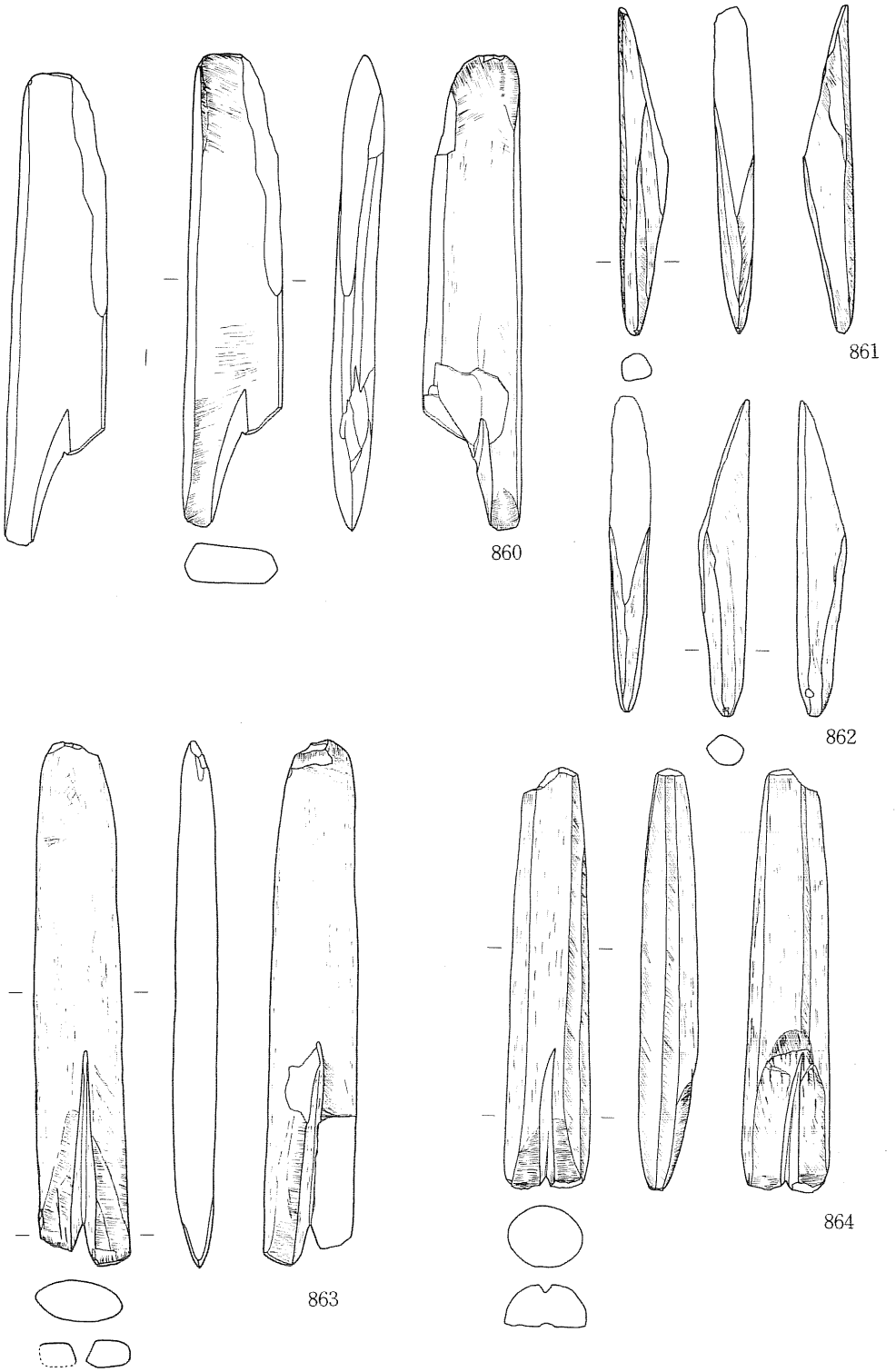


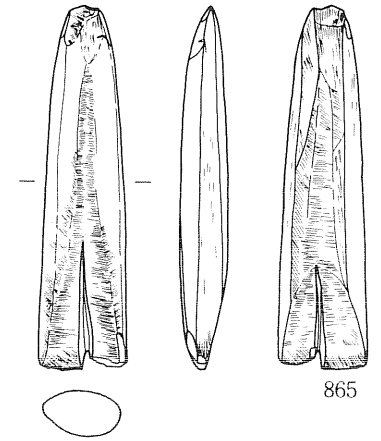



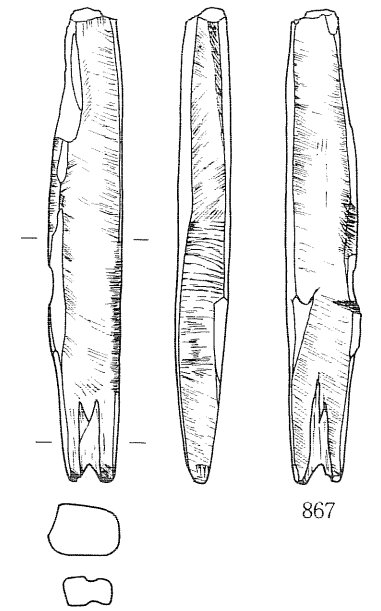



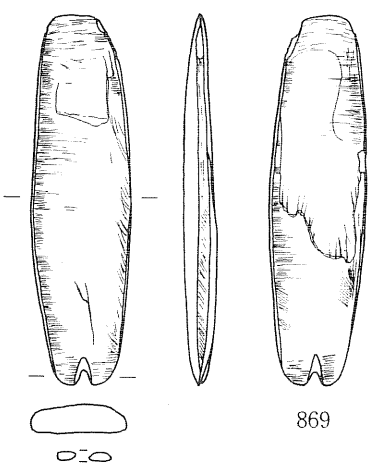
第239図　遺構外出土石製品（7）　燕尾形石製品（1）

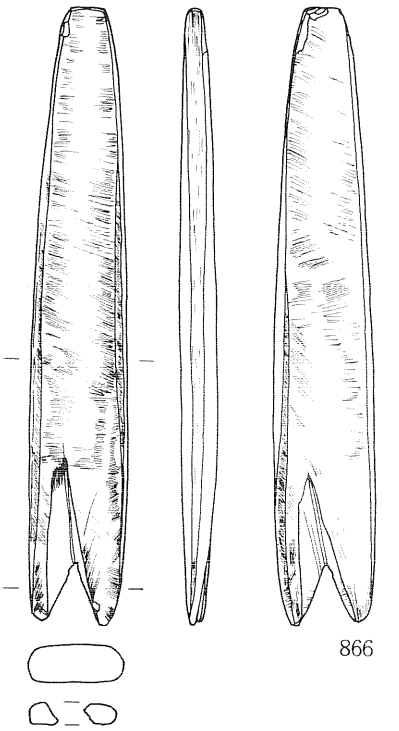


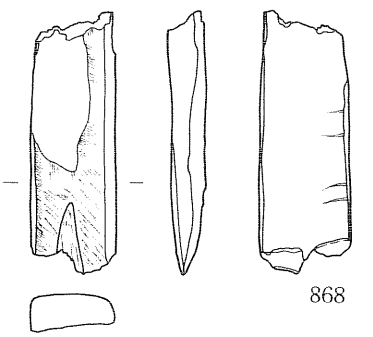

第240図　遺構外出土石製品（８）　燕尾形石製品（２）

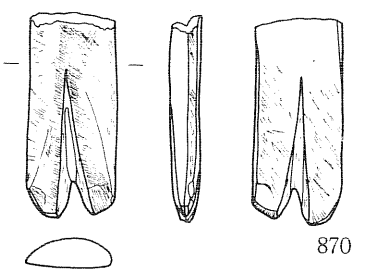


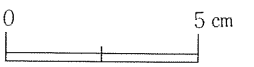



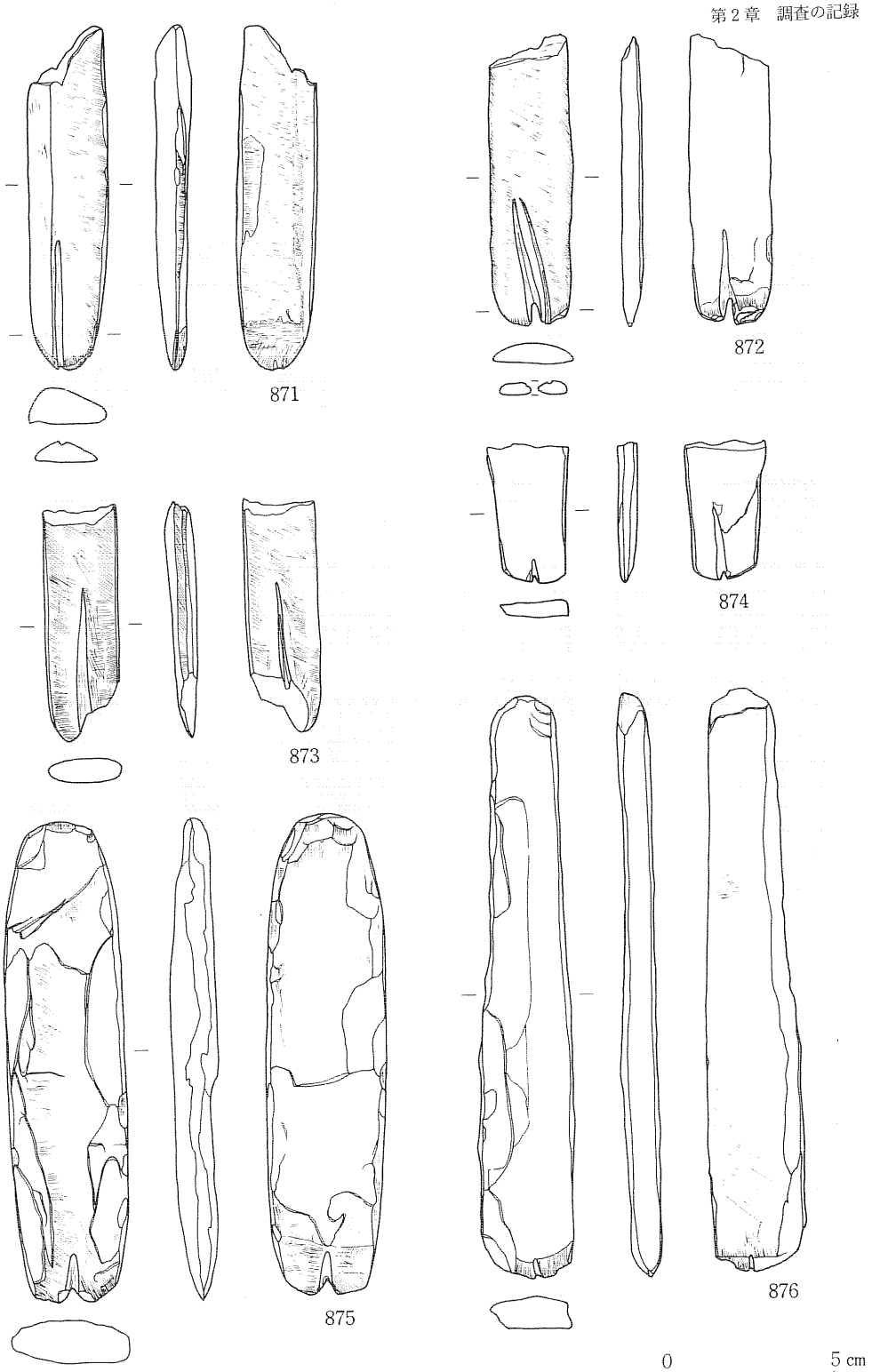



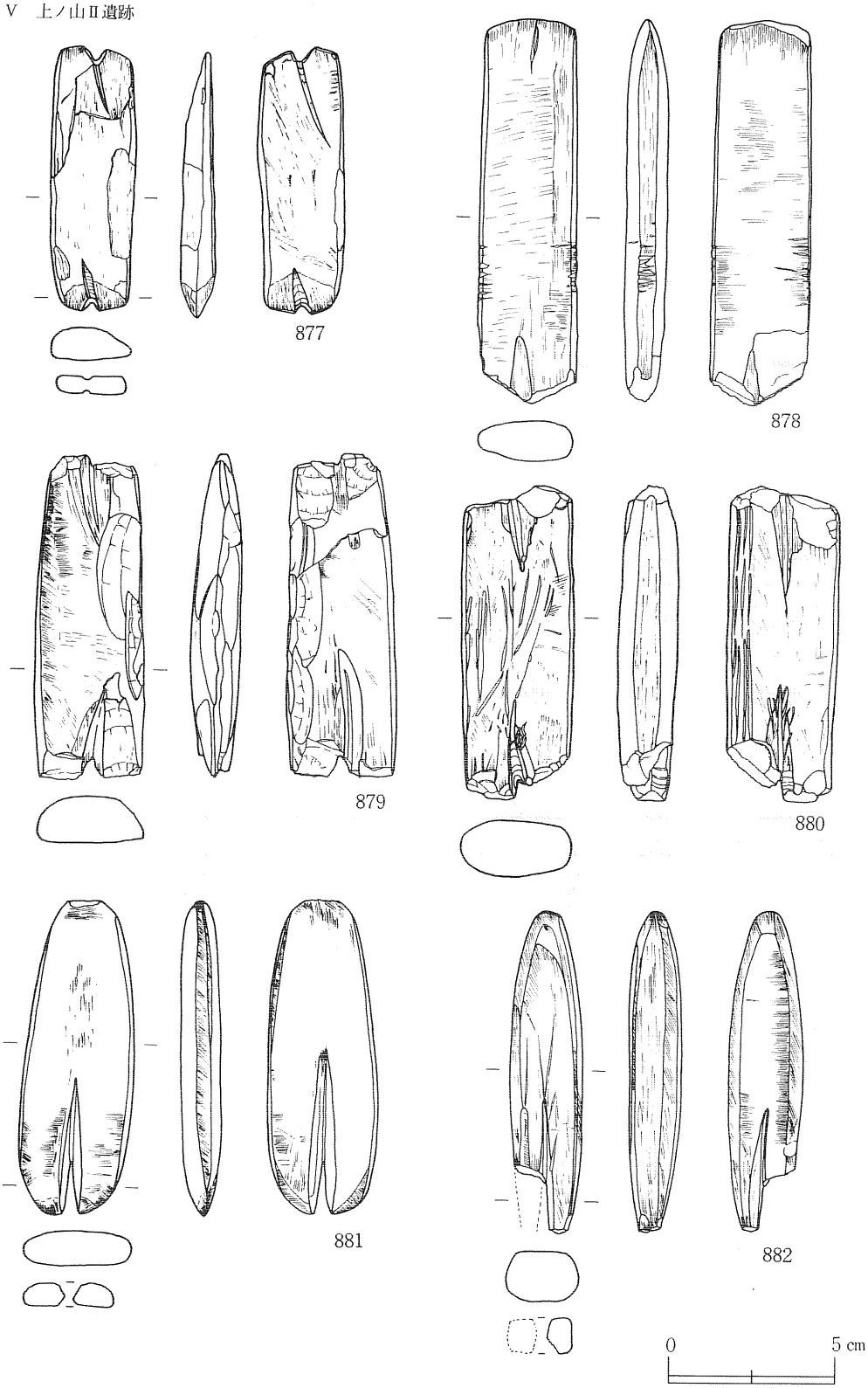



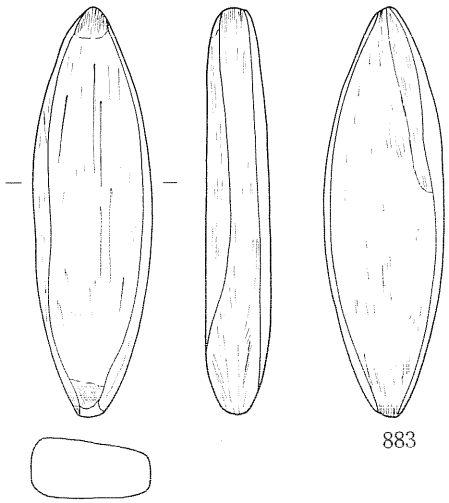

第241図　遺構外出土石製品（9）　燕尾形石製品（3）

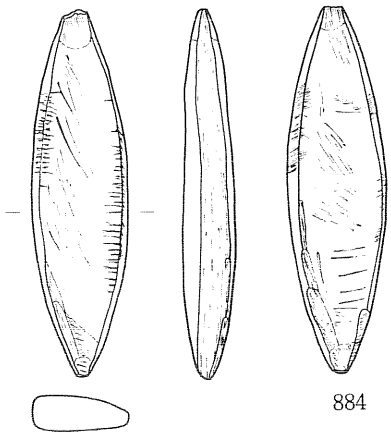


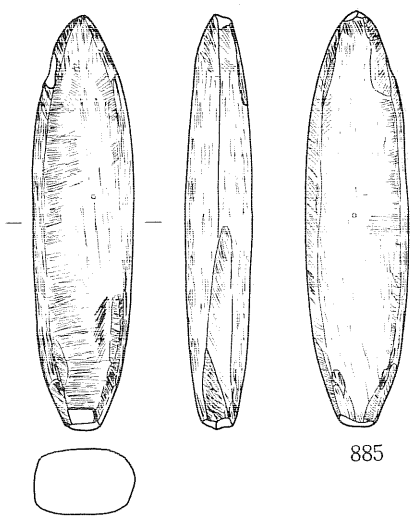

第242図　遺構外出土石製品(10)　燕尾形石製品(４)

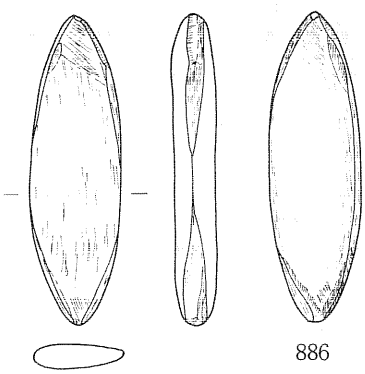


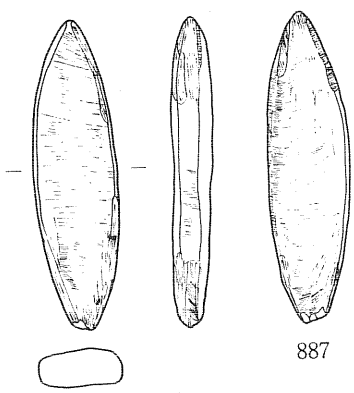

第243図　遺構外出土石製品(11)　燕尾形石製品(5)

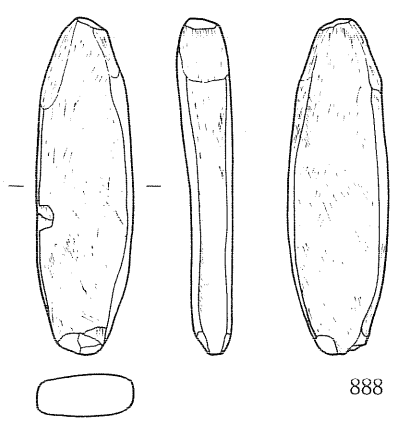


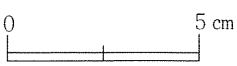



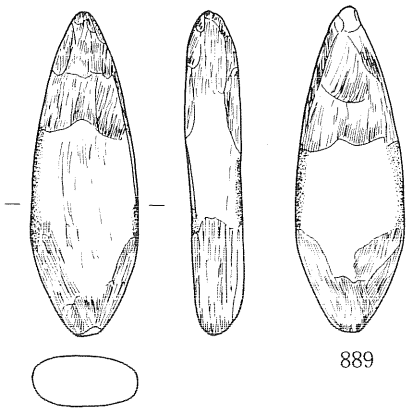



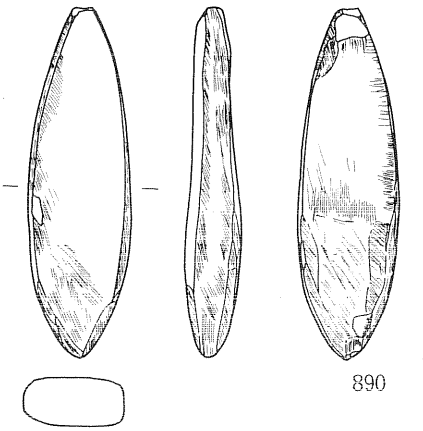



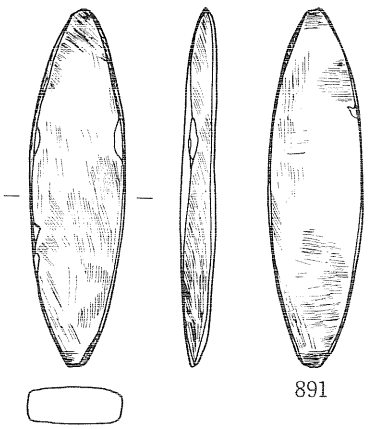



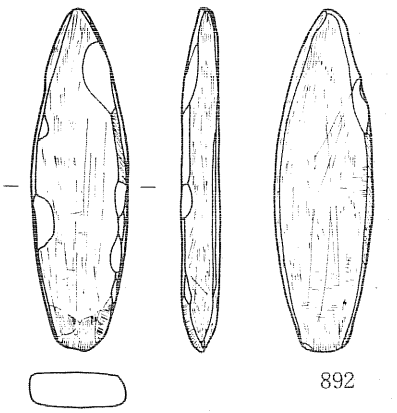



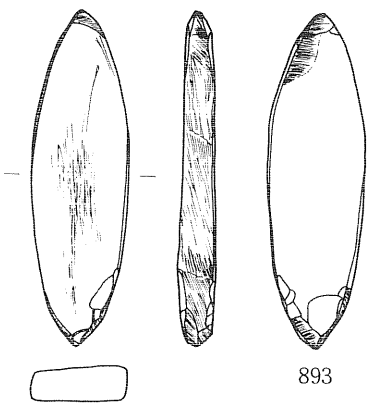

第244図　遺構外出土石製品(12)　カツオブシ形石製品(１)

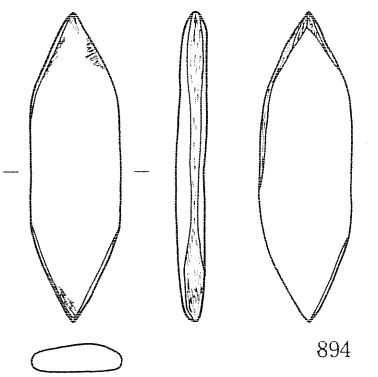

889


890

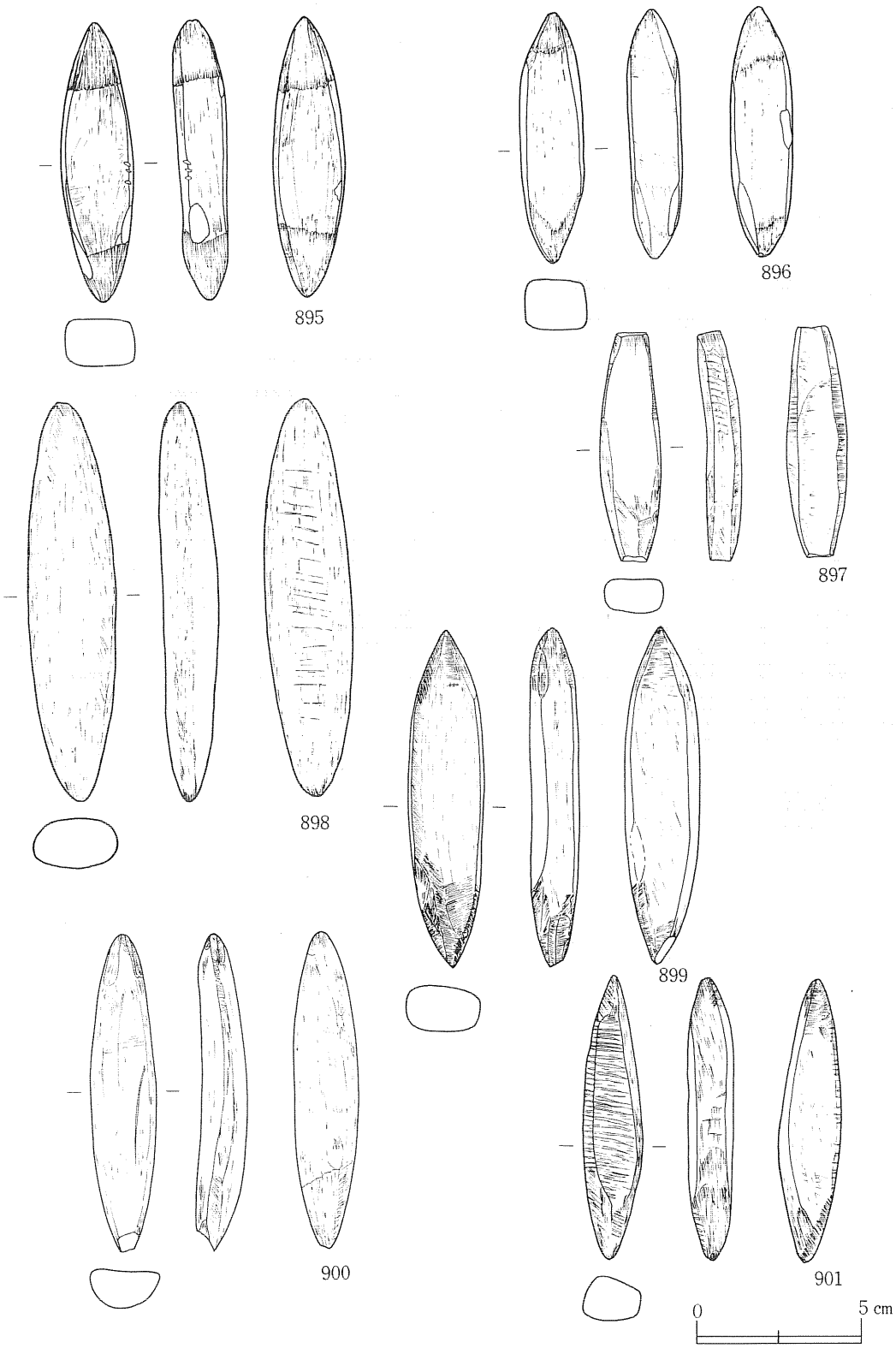

891


892

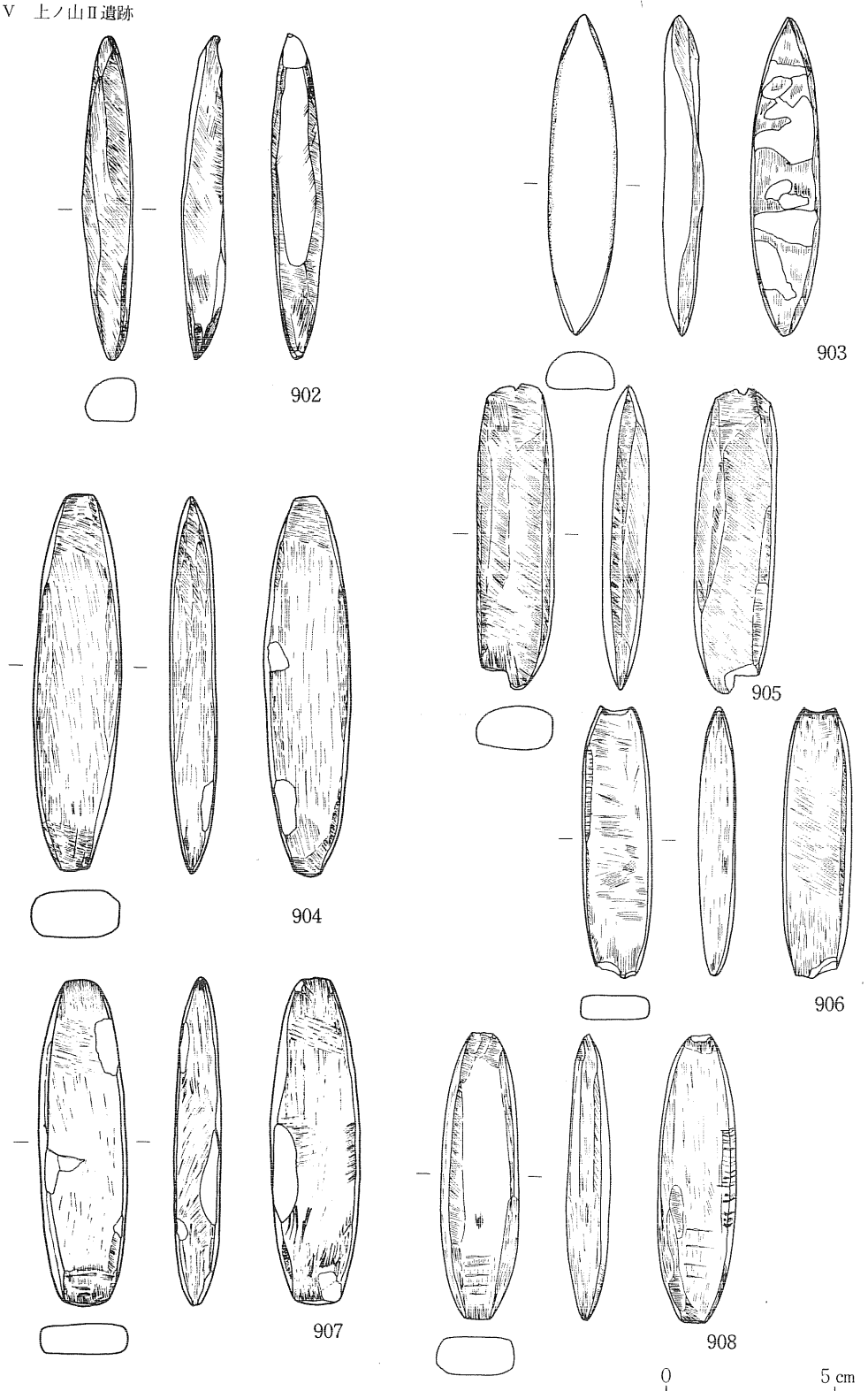

893


894

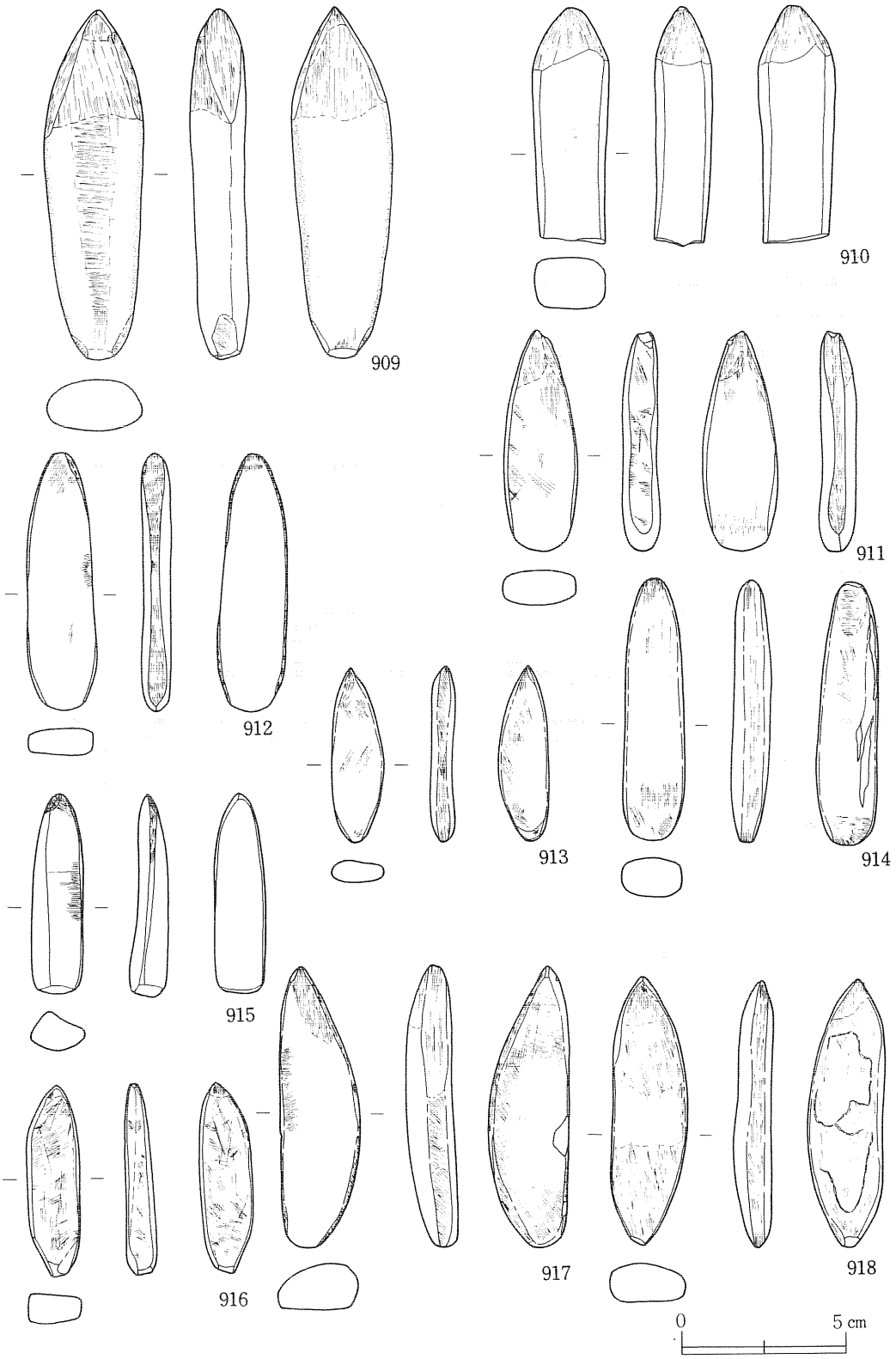
第245図　遺構外出土石製品(13)　カツオブシ形石製品(2)



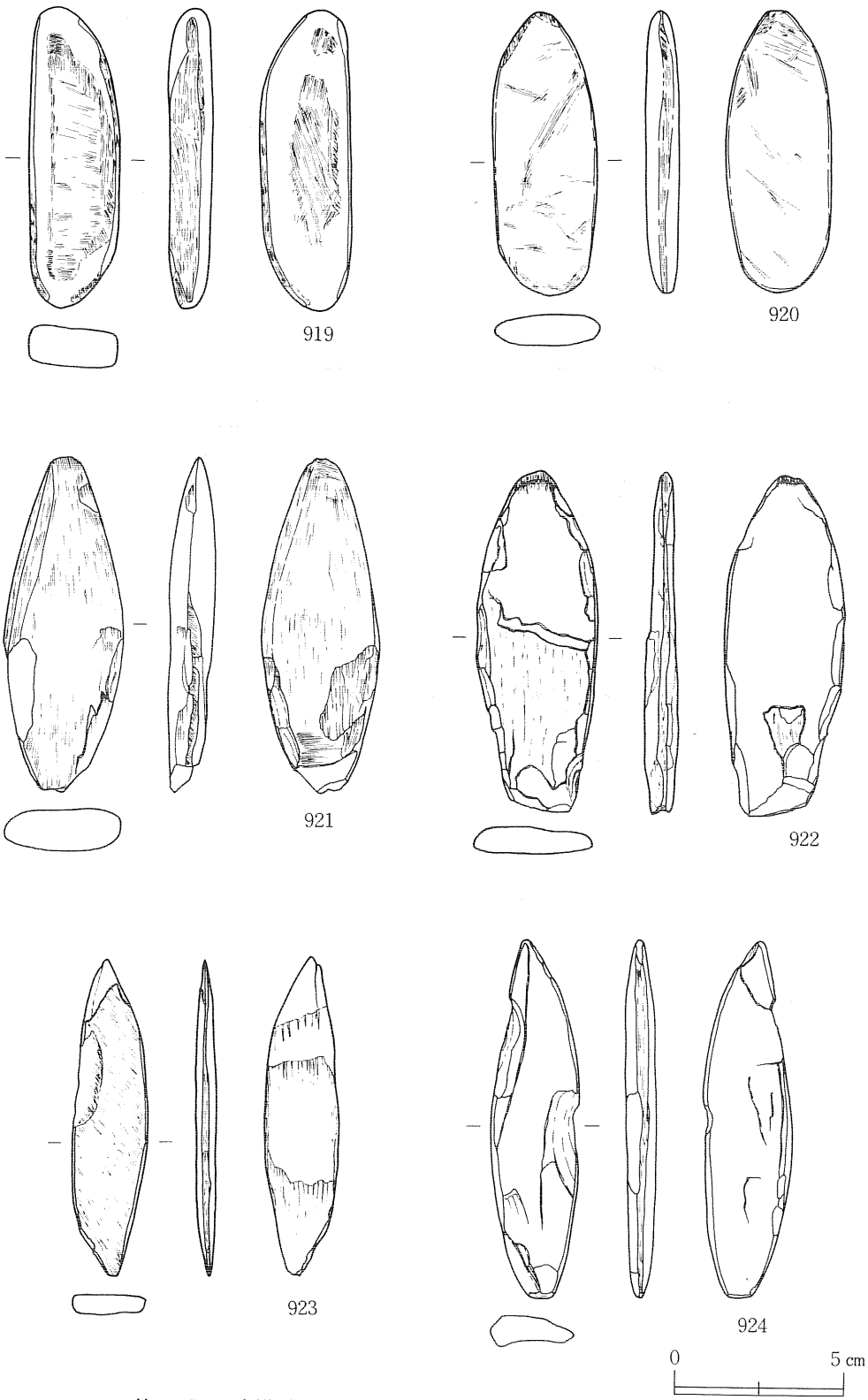

第246図　遺構外出土石製品(14)　カツオブシ形石製品(3)



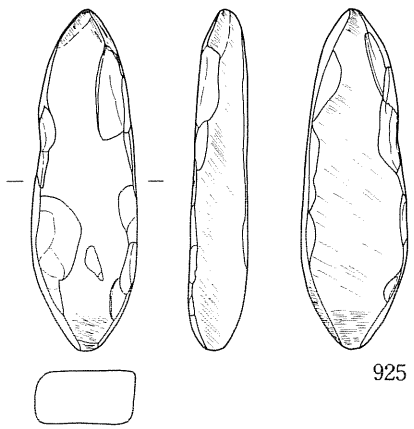

第247図　遺構外出土石製品(15)　カツオブシ形石製品(4)

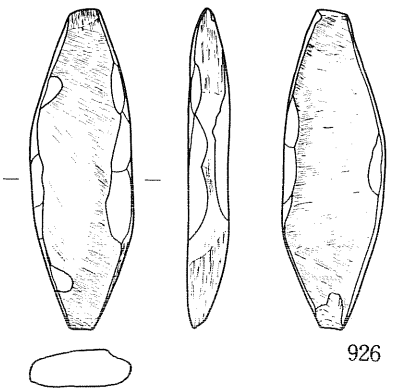


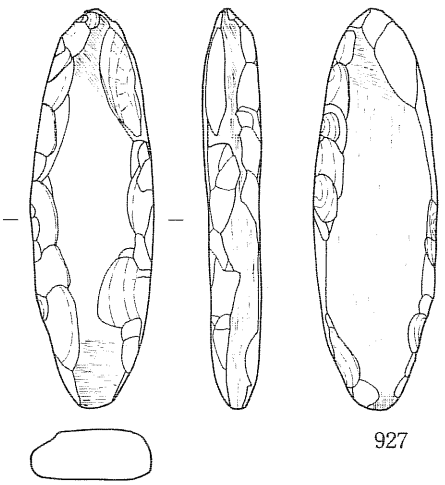

第248図　遺構外出土石製品(16)　カツオブシ形石製品(５)

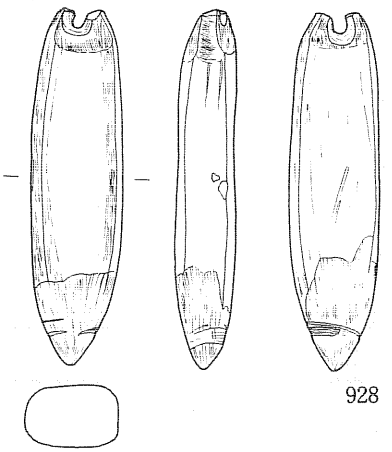


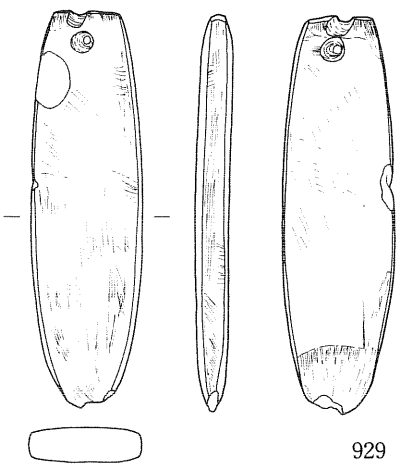

第249図　遺構外出土石製品(17)　カツオブシ形石製品(6)

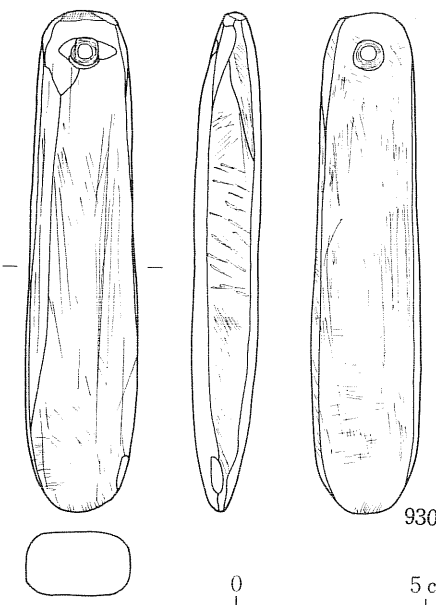

925


926


927

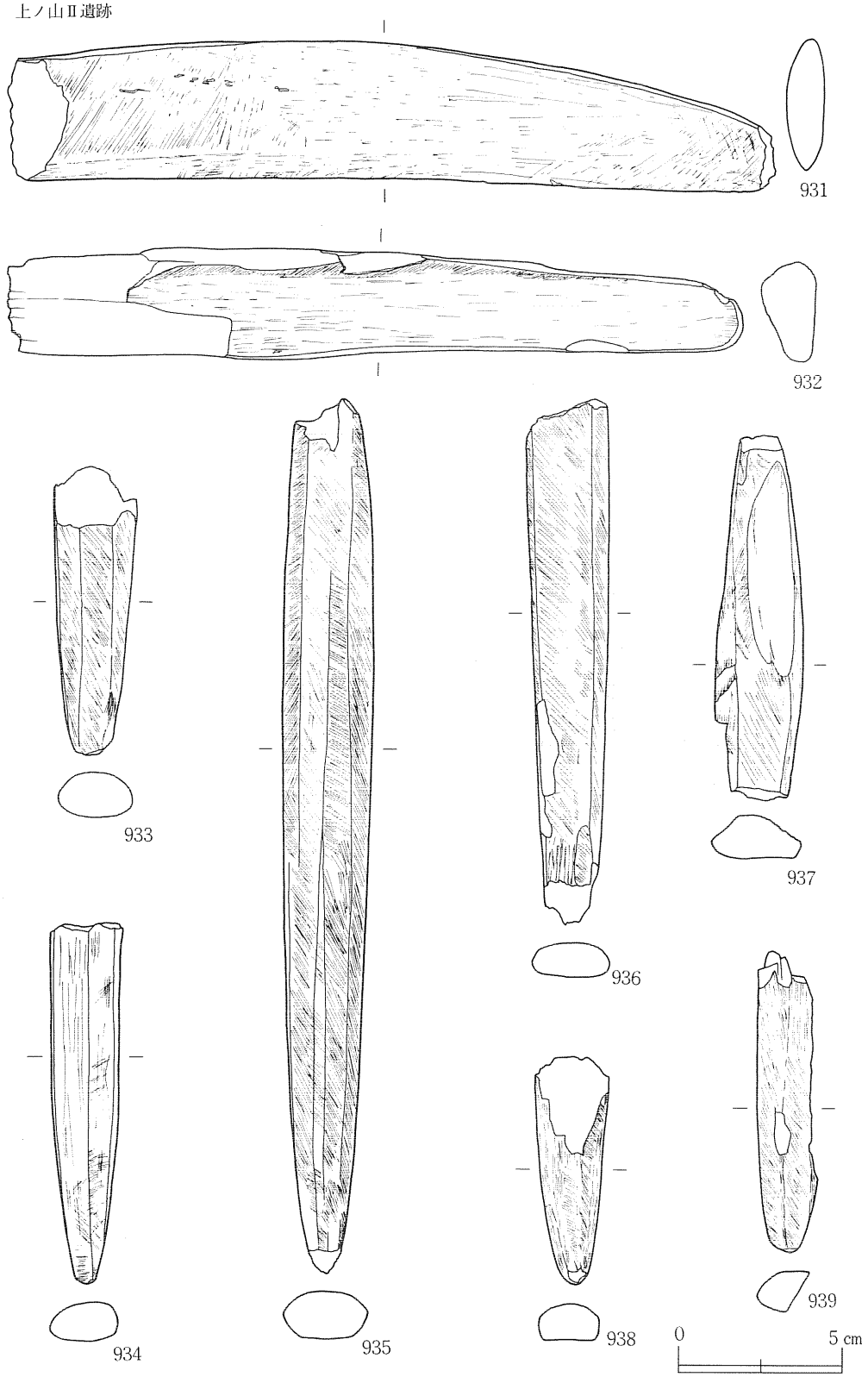

928


929

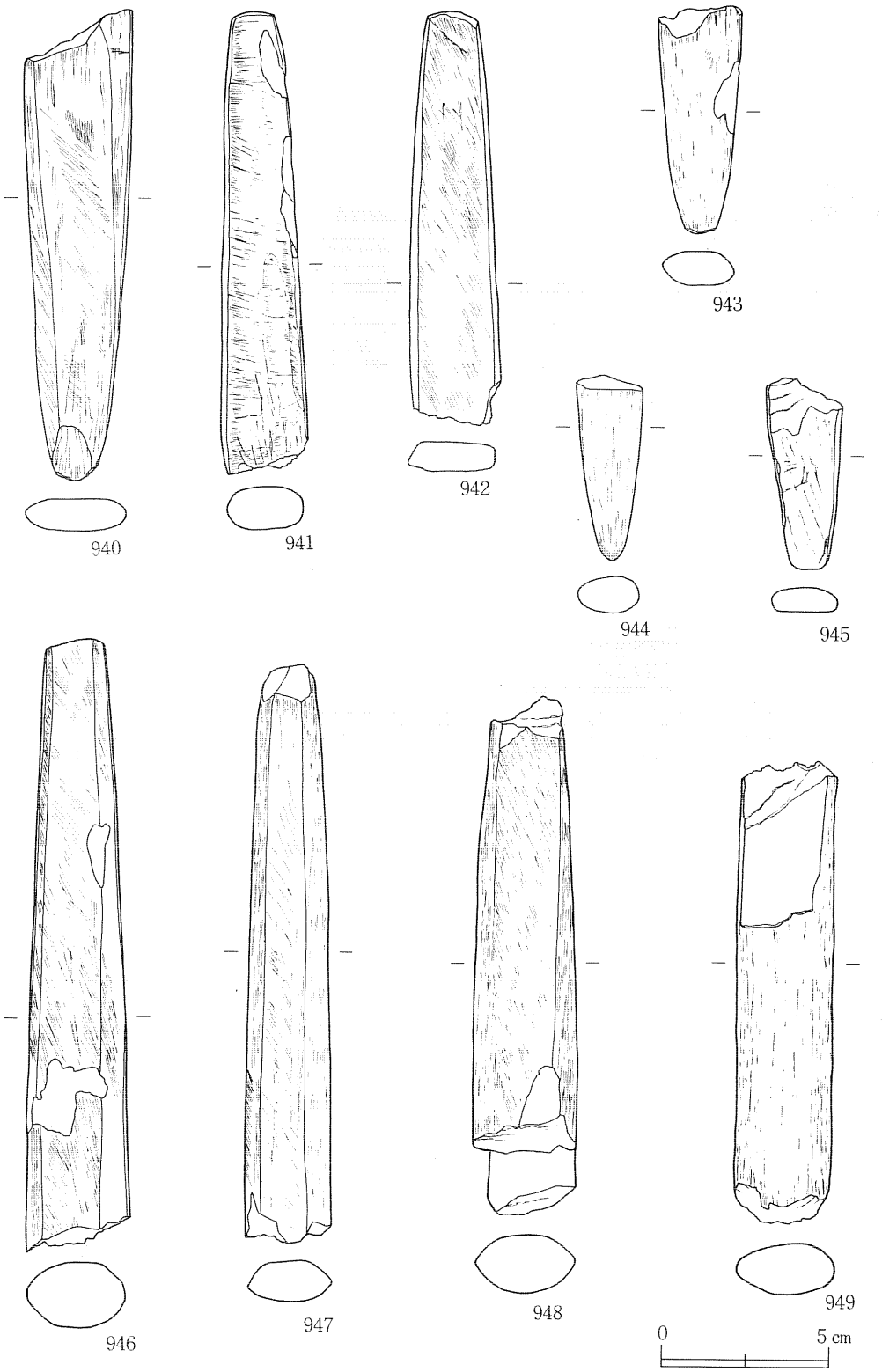

930

0　5 cm

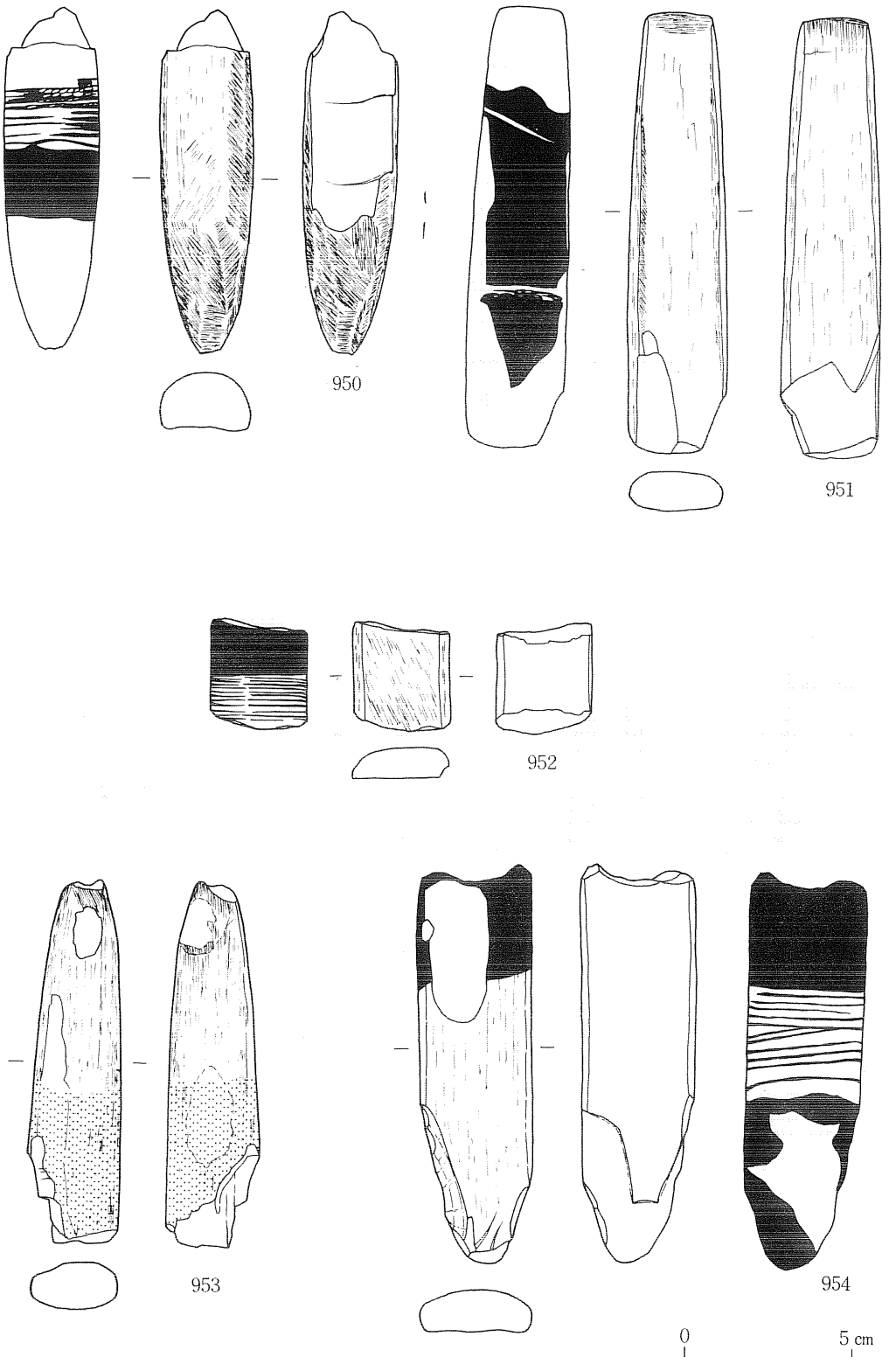
第250図　遺構外出土石製品(18)　カツオブシ形石製品(7)



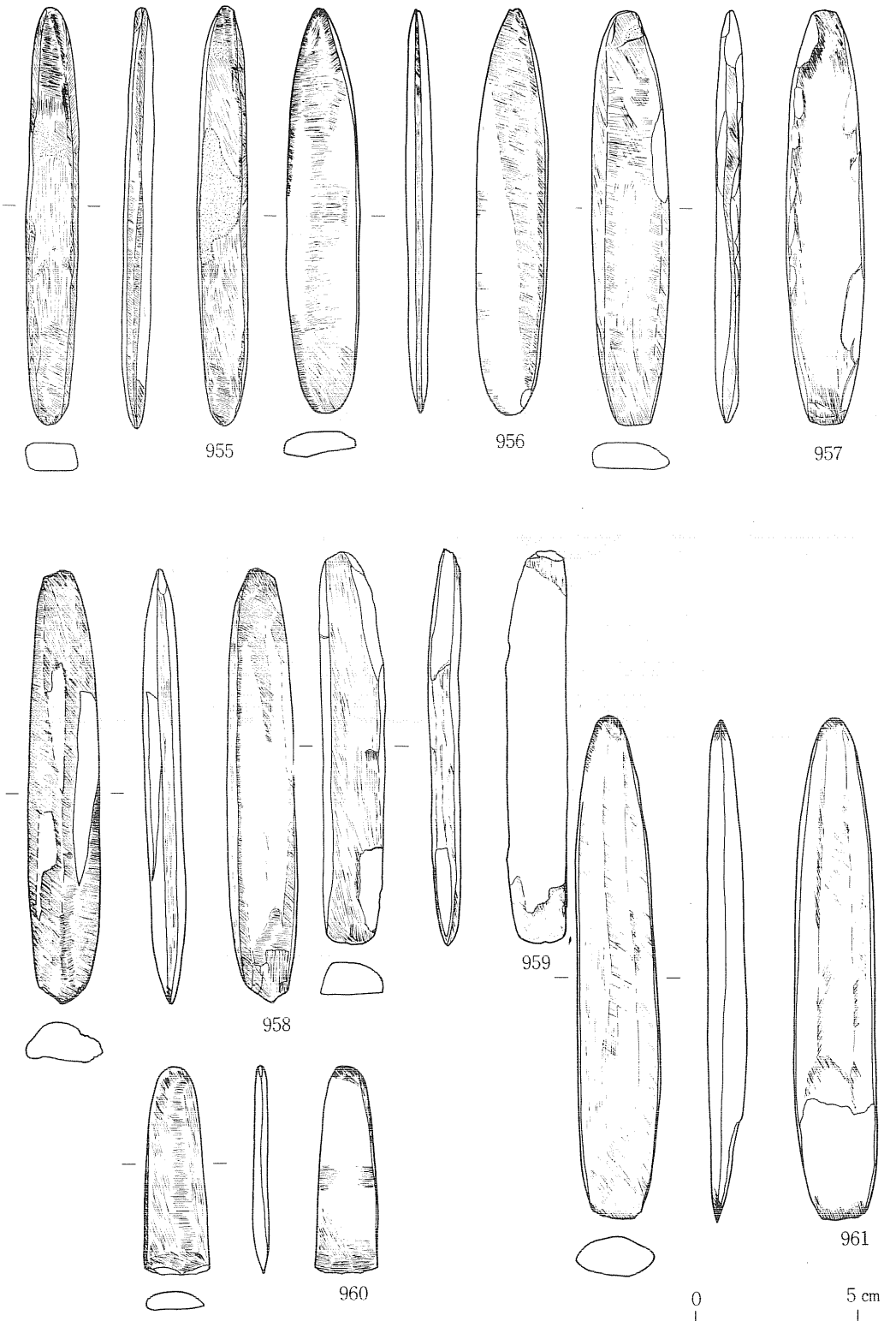

第251図　遺構外出土石製品(19)　石刀・石剣・石棒(1)



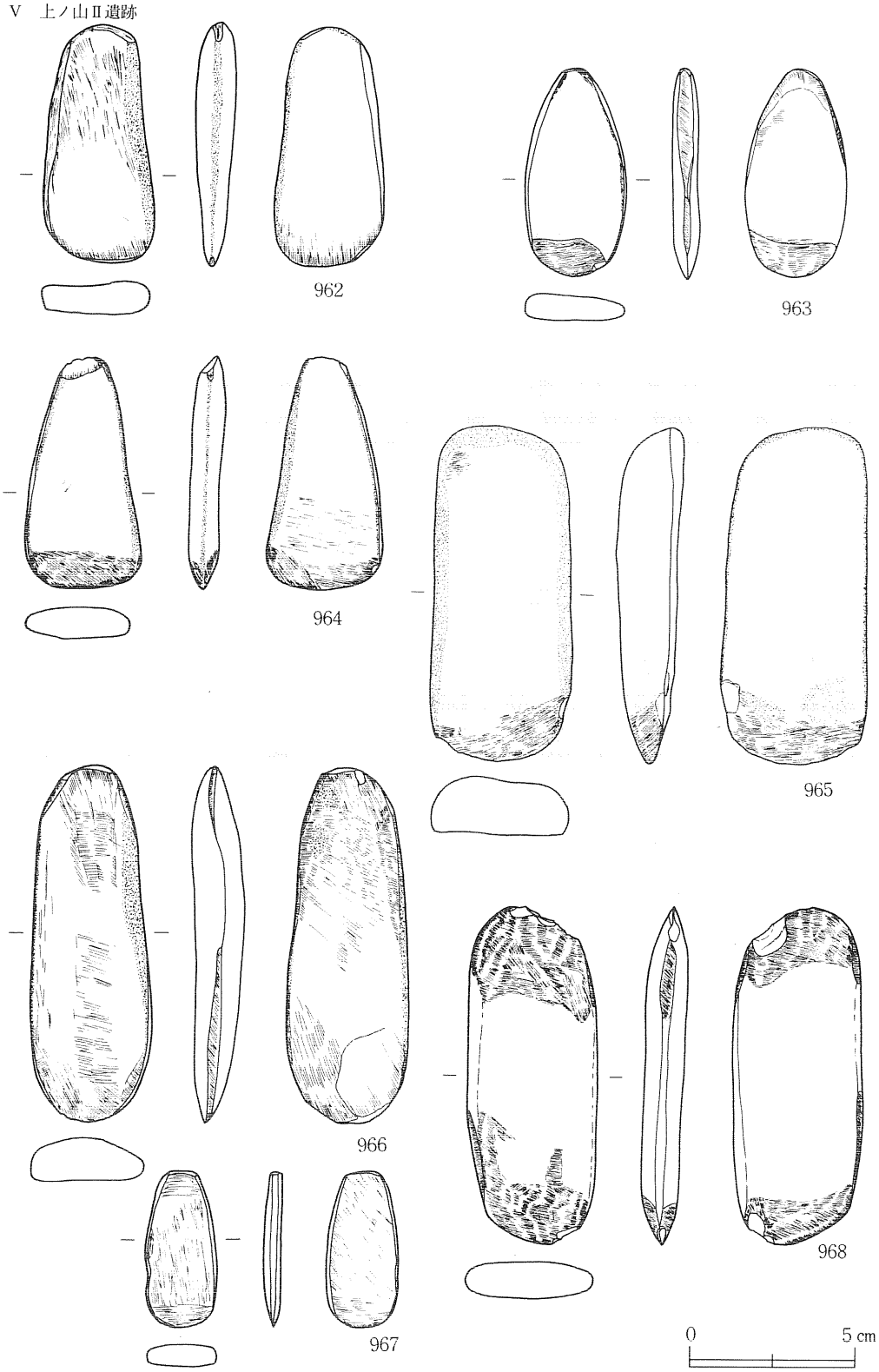

第252図　遺構外出土石製品(20)　石剣・石棒(2)



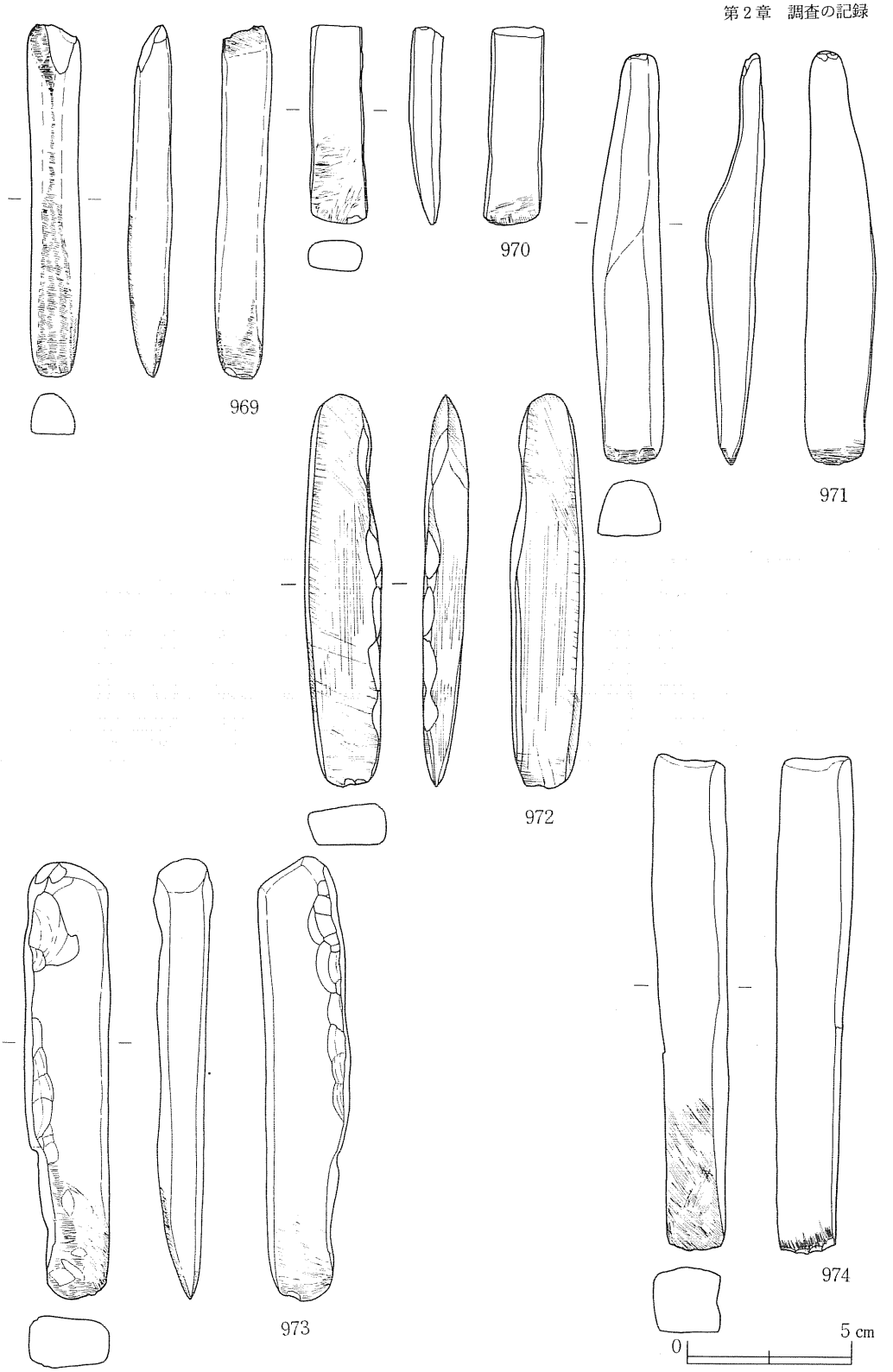

第253図　遺構外出土石製品(21)　膠着剤及び縄目の残る石製品



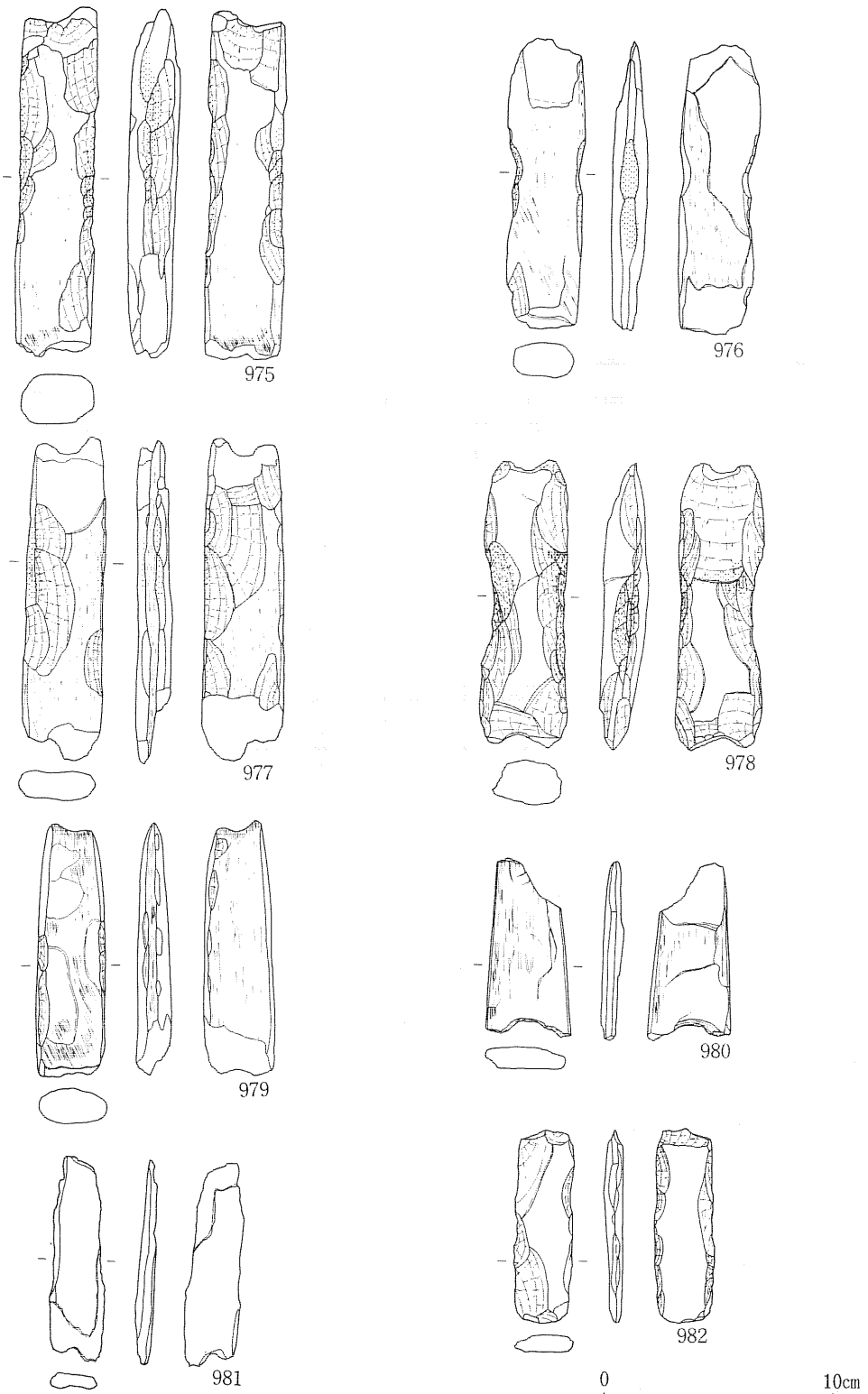

第254図　遺構外出土石製品(22)　ヘラ状石製品



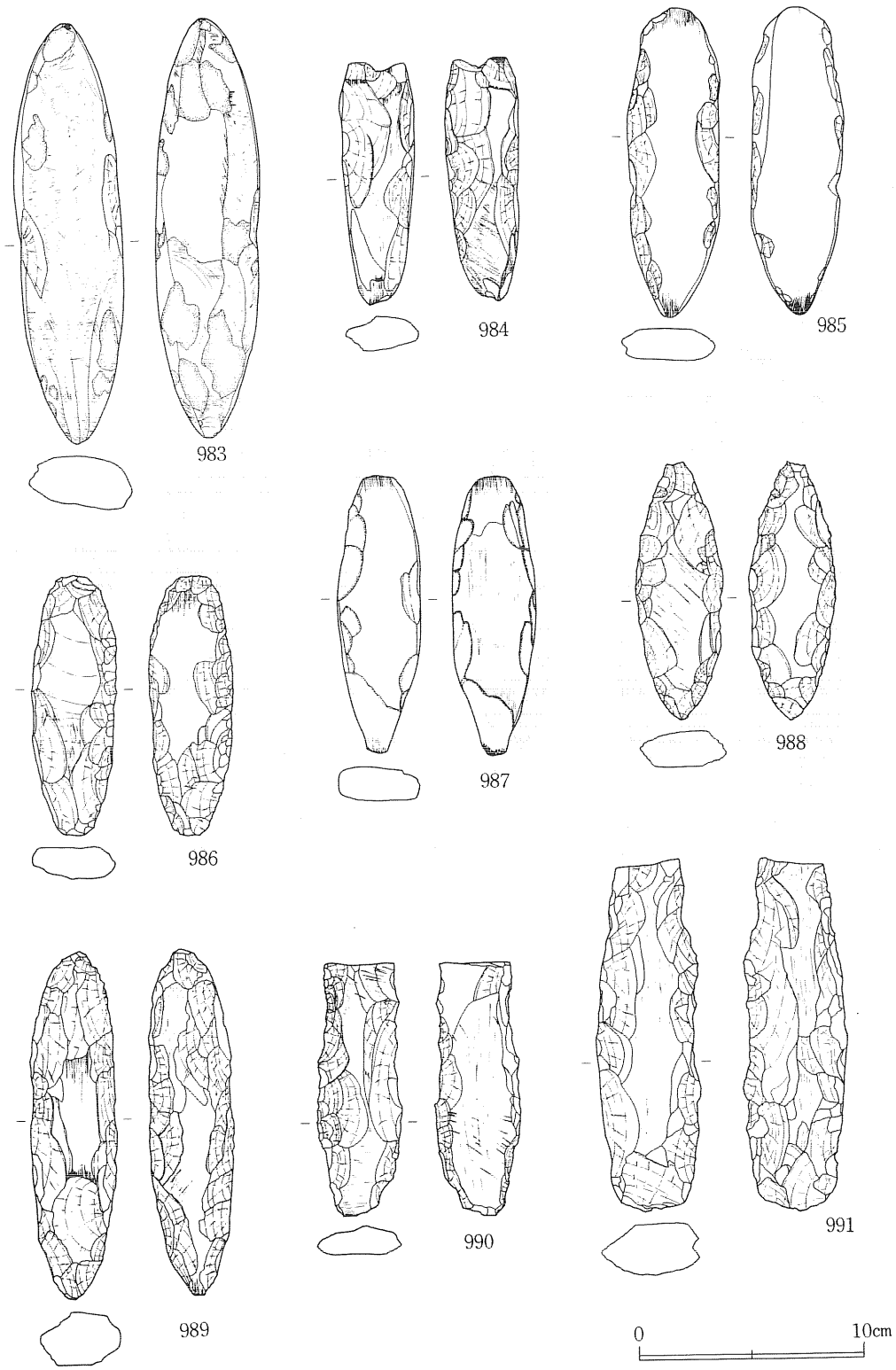

第255図　遺構外出土石製品(23)　使用痕のある石製品(a類)



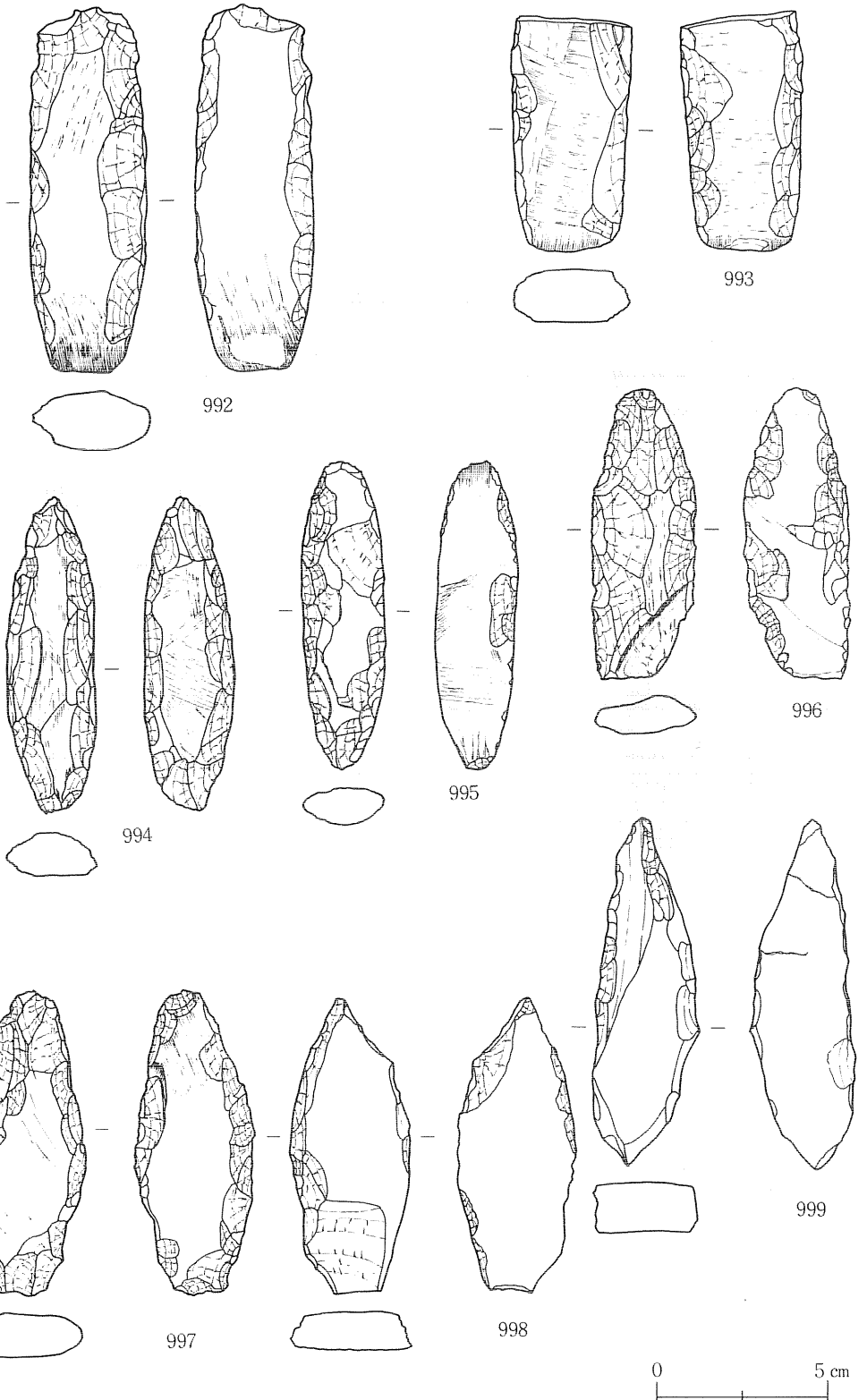

第256図　遺構外出土石製品(24)　使用痕のある石製品(b類)



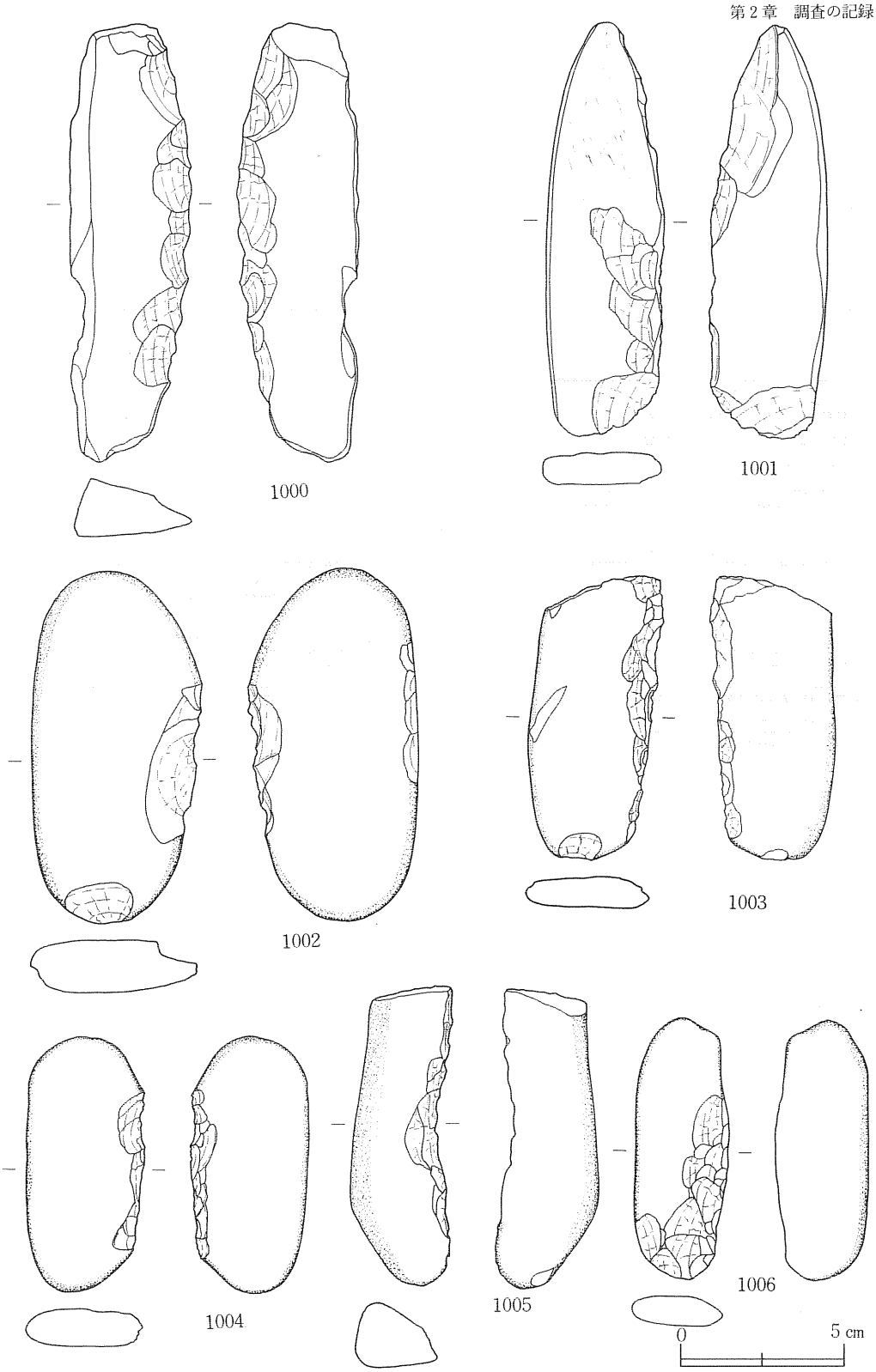

第257図　遺構外出土石製品(25)　扶りのある石製品(スクリーントーンは磨威範囲)



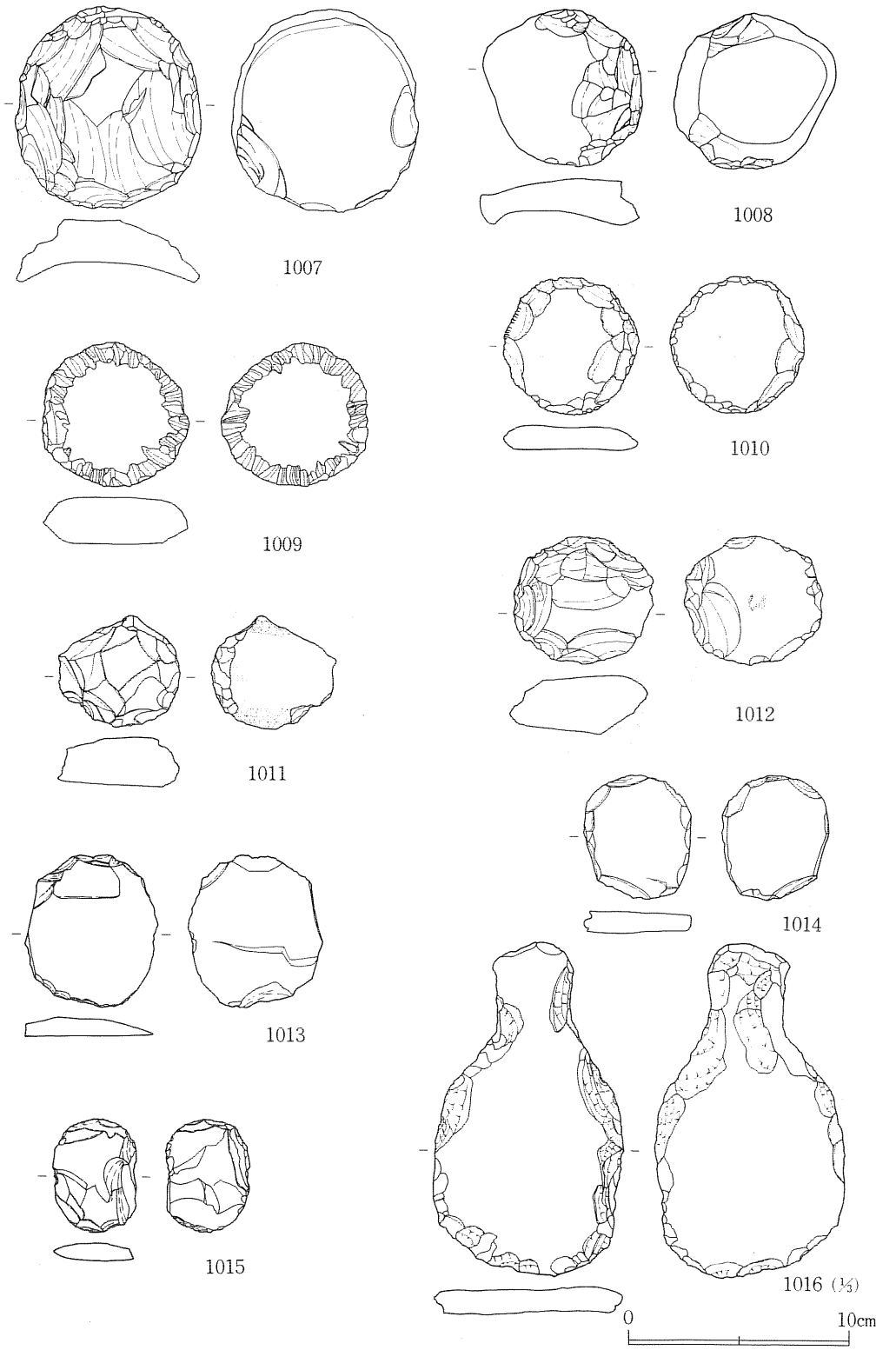

第258図　遺構外出土石製品(26)　打製石斧様の石製品(1)



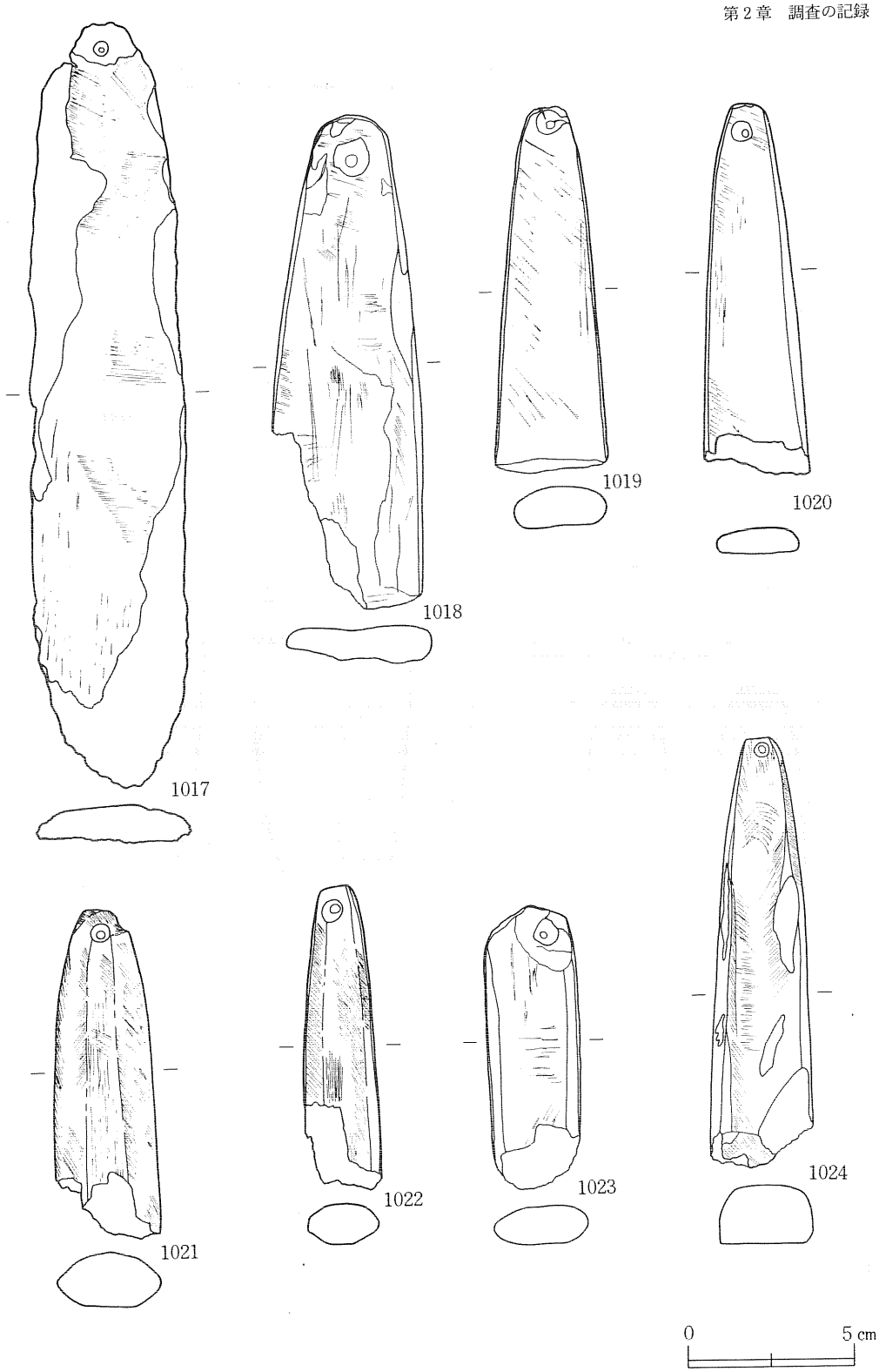

第259図　遺構外出土石製品(27)　打製石斧様の石製品(2)



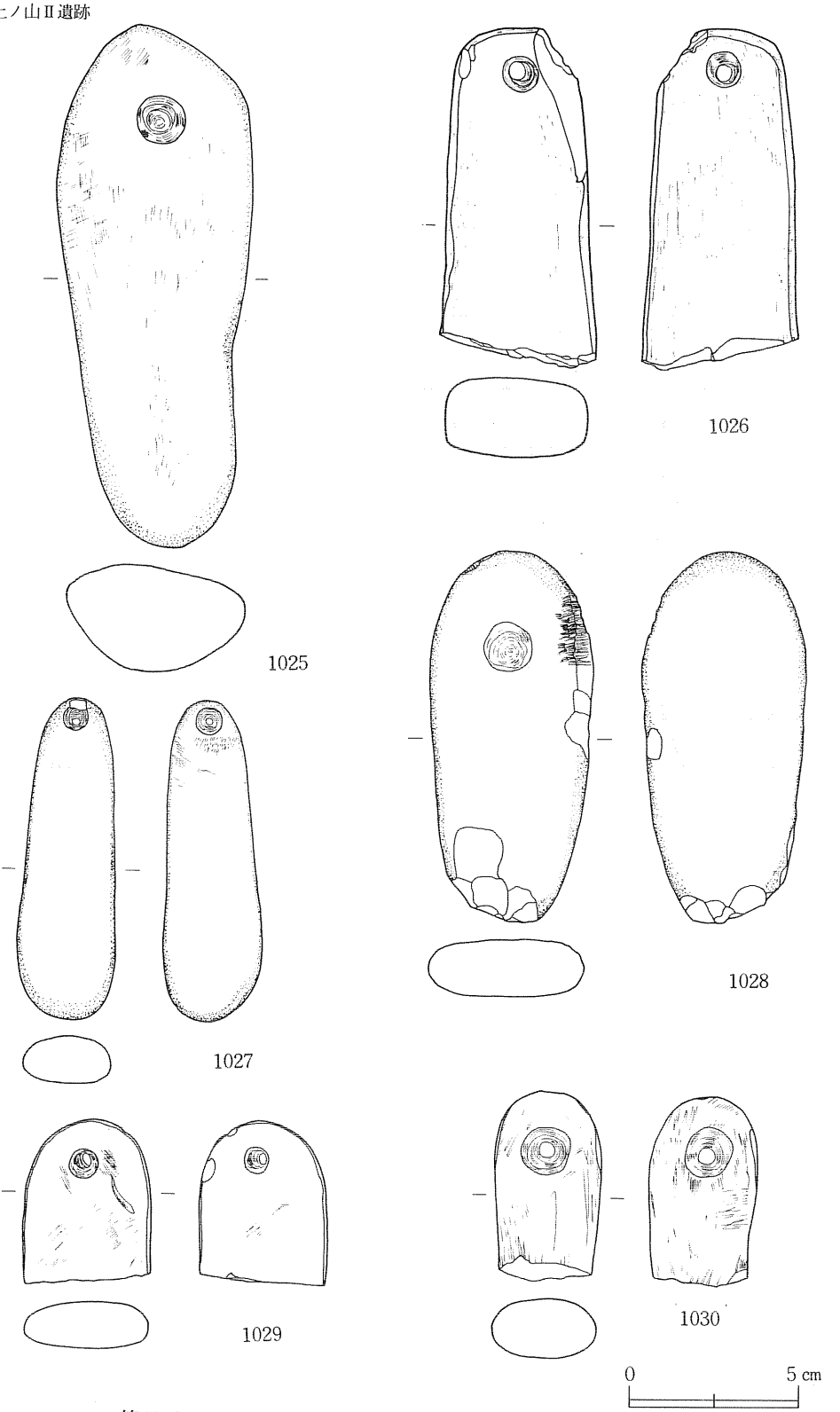

第260図　遺構外出土石製品(28)　側緑部打ち欠きの石製品



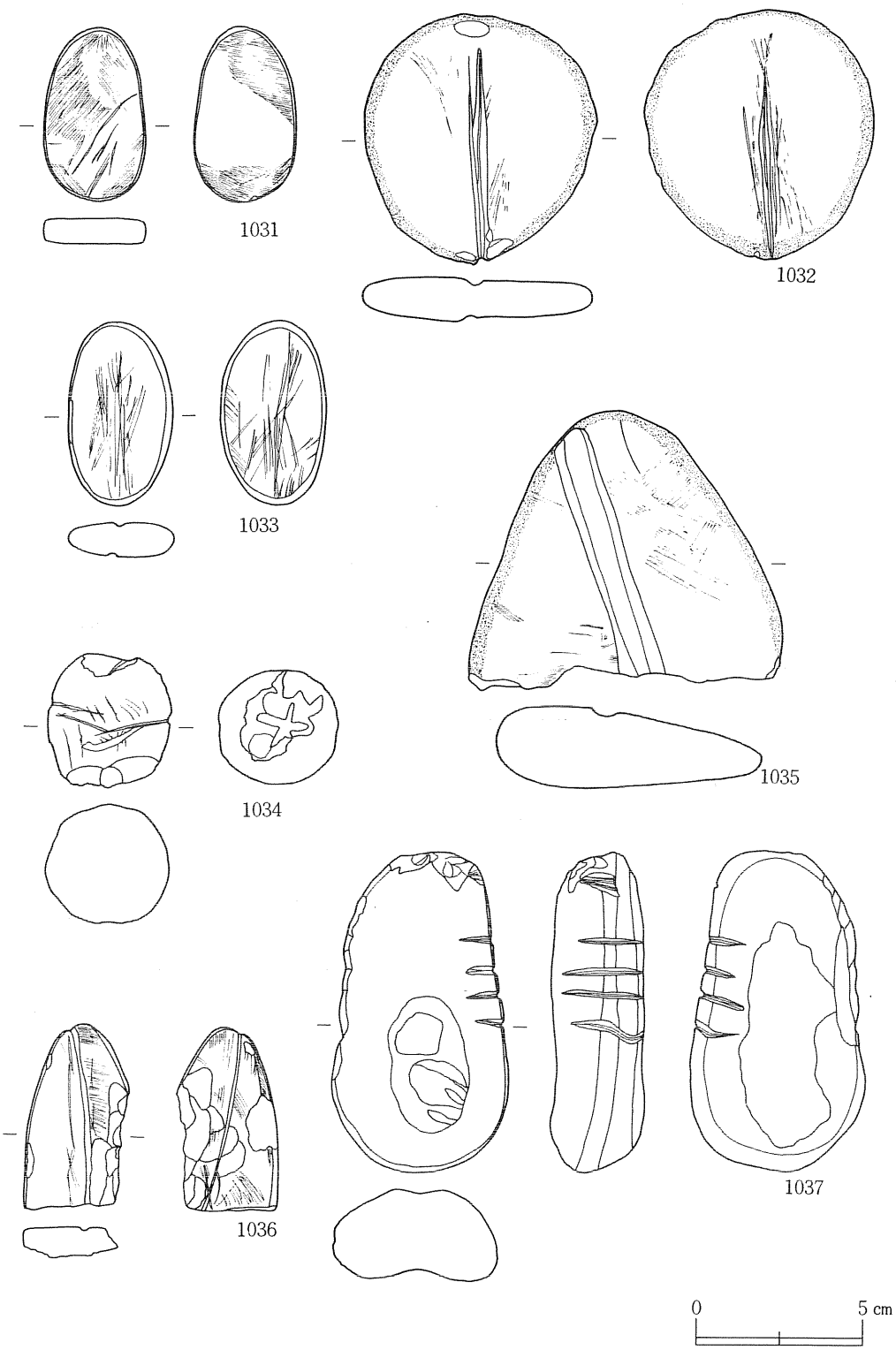

第261図　遺構外出土石製品(29)　円盤状石製品・鍬形石製品



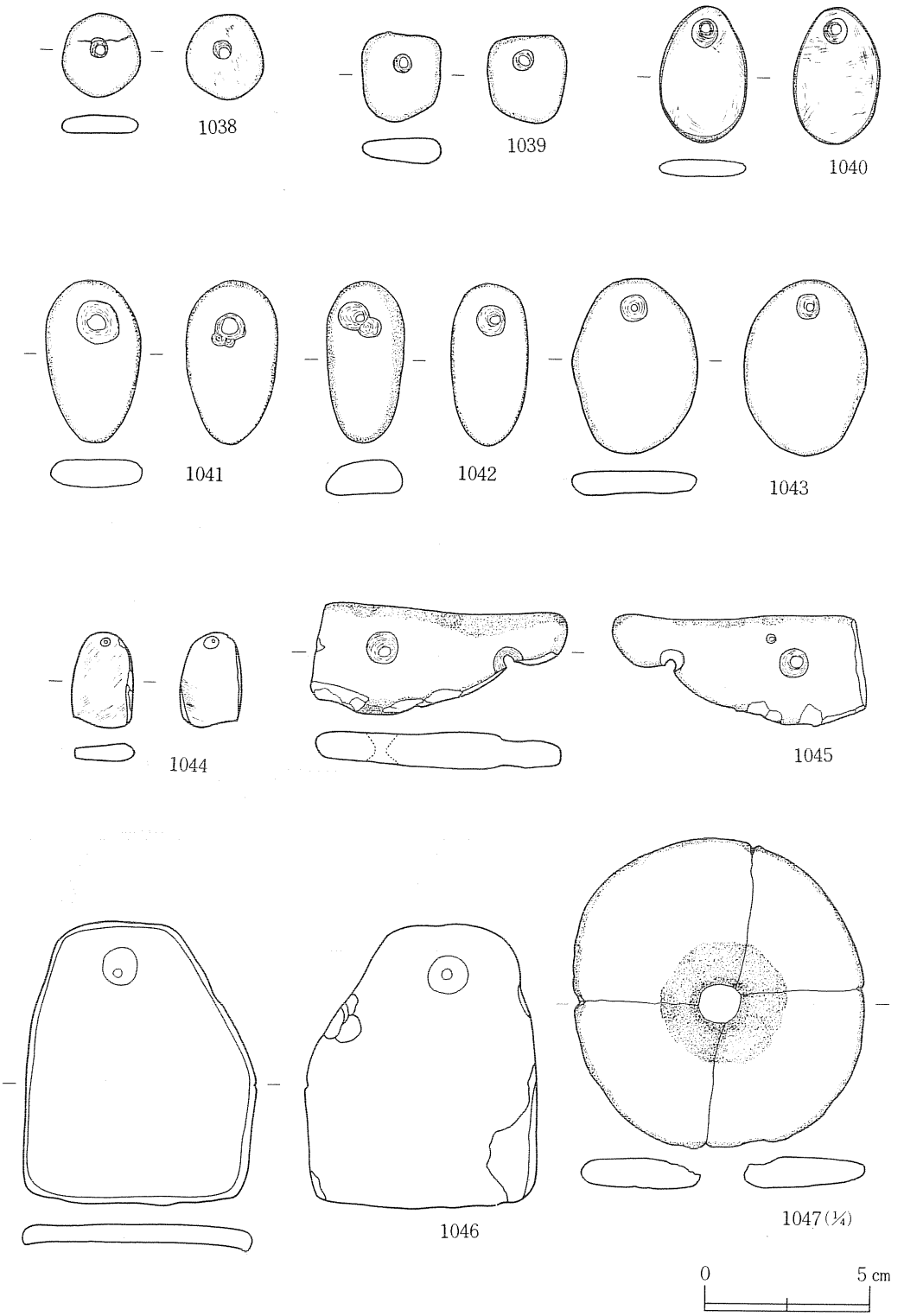

第262図　遺構外出土石製品(30)　短柵形有孔石製品



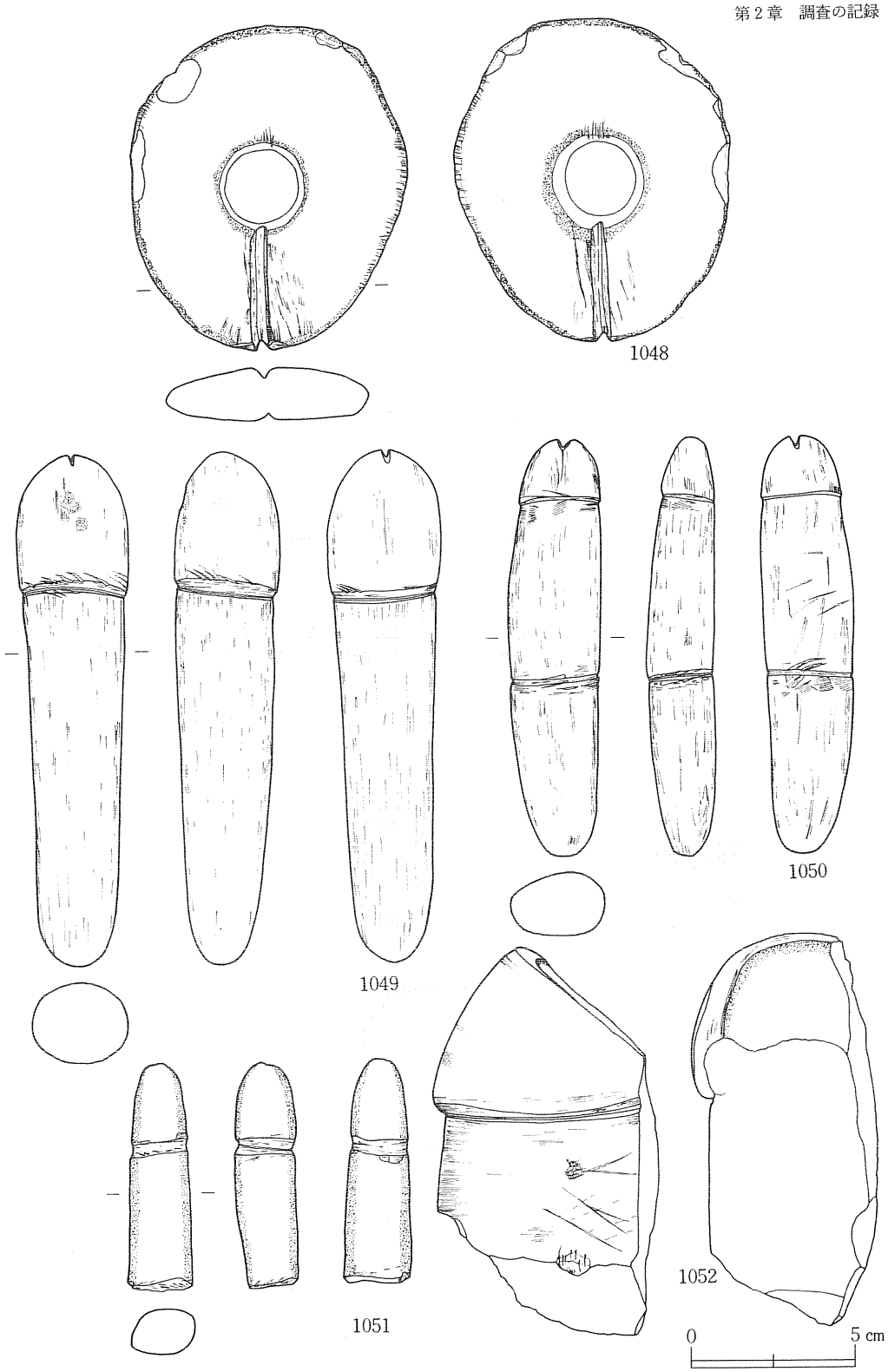

第263図　遺構外出土石製品(31)　棒状有孔石製品



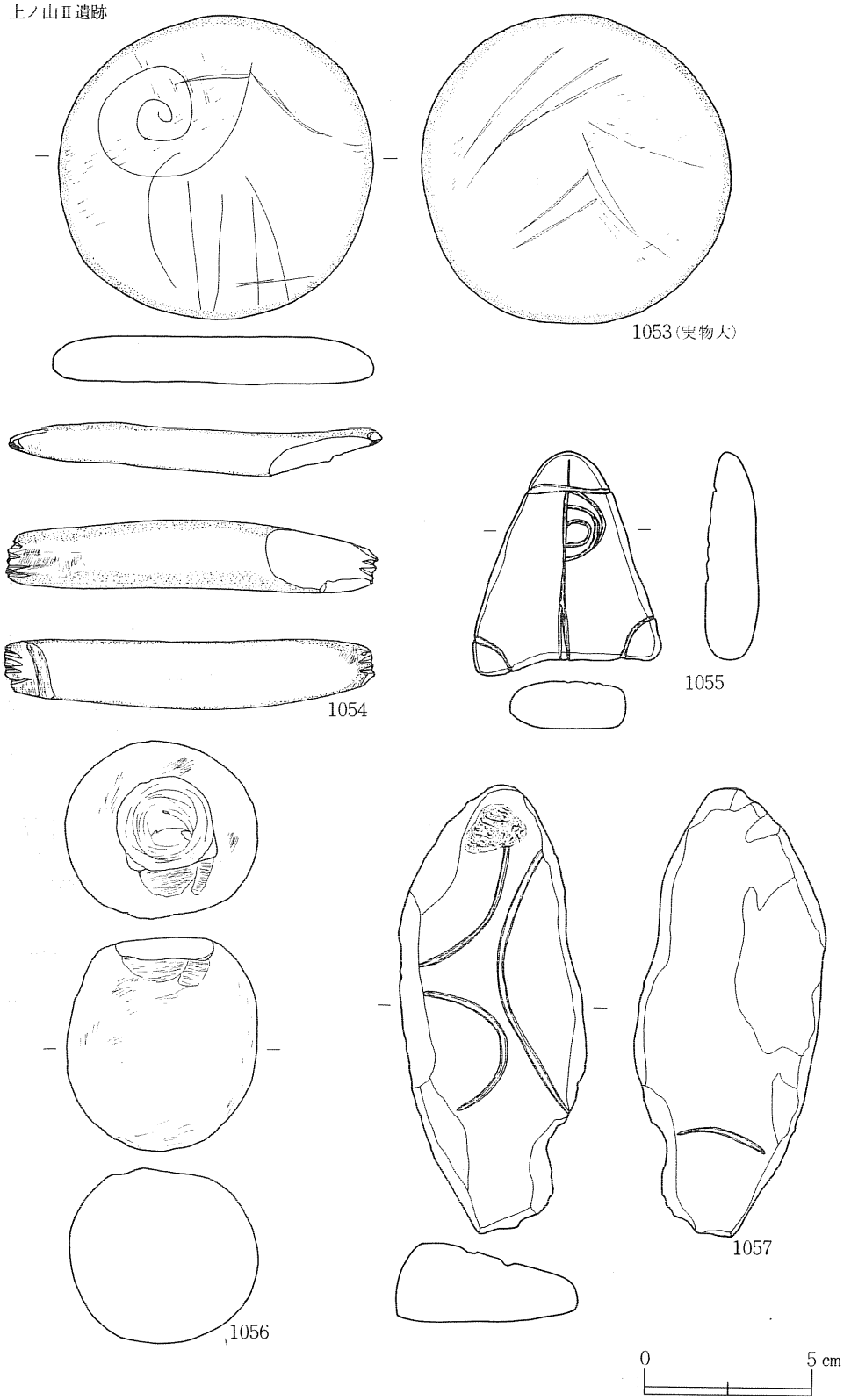

第264図　遺構外出土石製品(32)　有溝石製品




第265図　遺構外出土石製品(33)　盤状石製品




第266図　遺構外出土石製品(34)　盤状石製品・男根状石製品




第267図　遺構外出土石製品（35）　刻線画礫・岩板・その他の石製品

# 第３章　自然科学的分析

## 第１節　鉱物組成の分析

### １　分析の目的

本分析の目的は、協和町上ノ山Ⅰ遺跡と上ノ山Ⅱ遺跡の各基本土層中から採取された試料の鉱物組成を明らかにし、屈折率測定を行なうことによって、上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡間の地層層序の対比を行ない、示標テフラ層の検出をすることを目的とする。分析試料は、協和町上ノ山Ⅰ遺跡から採取された６点及び上ノ山Ⅱ遺跡から指取された14点、合計20点の試料である。

### ２　分析の方法

分析は、次の手順で行なった。最初に試料約40ｇを秤量とする。次に超音波洗浄と1／16㎜分析篩による湿式篩別を行なって粘土分を除去する。そして乾燥後、実体鏡下で鉱物の形態や種類を観察した。さらに1／4～1／8㎜の粒子を分析篩によって乾式篩よって乾式篩別し、その後テフロブロモエタン（比重2.96）により重液分離を行ない、軽鉱物と重鉱物に分けた。軽鉱物・重鉱物を偏光顕微鏡下で250粒以上同定し、各々軽鉱物組成、重鉱物組成とした。

また、広域示標テフラとの対比を行なうために、火山ガラスを手選後、新井（1972）の方法によって屈折率の測定を行なった。

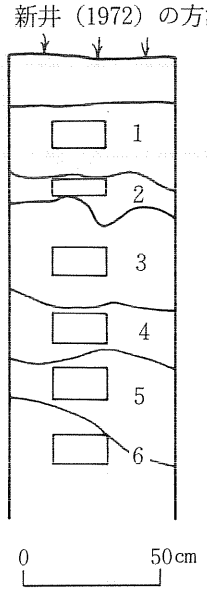
### ３　分析結果

（１）　上ノ山Ⅰ遺跡

上ノ山Ⅰ遺跡から採取された試料の層位を第268図に示す。また軽鉱物組成を第269図に、重鉱物組成を第270図に示した。

a.　軽鉱物組成

いずれの試料にも火山ガラスが認められるが、おそらく風成と考えられる第３層以上で量が多い。火山ガラスの形態は様々で、透明バブル型（平板状）、褐色バブル型、透明や褐色で比較的大きな気泡をもつバブル型、透明や褐色で小気泡を非常に多く含む軽石型、透明で繊維束状に発泡した軽石型、さらに透明や褐色がかった中間型（黒曜石の破片）などからなる透明や褐色のバブル型ガラスの割合は、非常に少

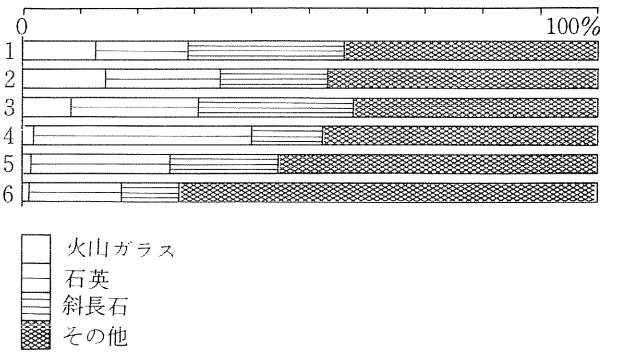



第268図　上ノ山Ⅰ遺跡
分析試料の層位

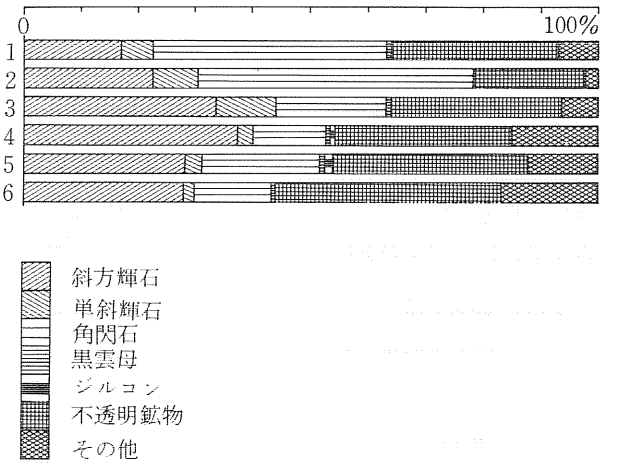
ない。これらのことから、大部分の火山ガラスは比較的ローカルなテフラに由来していることが考えられた。火山ガラス以外では、とくに水成堆積物で石英が比較的多いことが目についたが、全体的に斜長石に対する石英の割合が大きい。

b.　重鉱物組成

いずれの試料にも黒雲母が認められたが、黒雲母はへき開面に沿ってこわれやすく、粘土分除去中にも数量が変化するので、鉱物組成を数量で示すときには一般に考察の対象外とする。下位より鉱物組成を記載すると、第6層が不透明鉱物＞斜方輝石＞角閃石＞単斜輝石、第5層が不透明鉱物＞斜方輝石＞角閃石＞単斜輝石＞ジルコン、第4層が斜方輝石≒不透明鉱物＞角閃石＞単斜輝石＞ジルコン、第3層が斜方輝石≒不透明鉱物＞角閃石＞単斜輝石、第2層が角閃石＞斜方輝石≒不透明鉱物＞単斜輝石、第1層が角閃石＞磁鉄鉱＞斜方鉱石＞単斜輝石である。風成堆積物のうち、第3層と第2層および第1層では角閃石の量比傾向が異なる。




第269図　上ノ山Ⅰ遺跡基本土層の軽鉱物組成




第270図　上ノ山Ⅰ遺跡基本土層の重鉱物組成

c.　屈折率測定結果

一般的に火山ガラスの形態は比重の特徴から、火山噴火の際に遠方まで分布する場合が多く、広域示標テフラの遠隔地での主な構成物となっていることが多い。本分析では火山ガラスの割合が比較的大きく、野外での層相が異なる第3層と第2層の火山ガラスを屈折率測定の対

第12表　上ノ山Ⅰ遺跡テフラ試料の屈折率測定結果

| 遺跡名 | 試料番号 | 火山ガラスの屈折率(n) |
|---|---|---|
| 上ノ山Ⅰ | 2 | 1.504± |
| 上ノ山Ⅰ | 3 | 1.504± |

象とした。屈折率測定の結果、両ガラス共に1.504前後の値が得られた（第12表）。火山ガラスの形態や屈折率（n）の特徴から両火山ガラスは、同じテフラに由来していると考えられる。

（2）　上ノ山Ⅱ遺跡

a.　軽鉱物組成

上ノ山Ⅱ遺跡から採取された試料の層位を第271図、軽鉱物組成を第272図、重鉱物組成を第273図にそれぞれ示す。

上ノ山Ⅰ遺跡同様、火山ガラスの割合が少なく（最大13%）、同定不可能な鉱物が多い。火山ガラスの出現するピークが第2′層及び第12層で認められた。火山ガラスの形態は、前者のピークを構成するものが上ノ山Ⅰ遺跡の火山ガラス同様多種多様であり、後者のピークを核成するものは透明バルブ型の火山ガラスである。火山ガラスの他には石英と長石がふくまれており、前者の方が後者よりも多い。

b.　重鉱物組成

重鉱物組成を上位より以下に示す。（　）内はごく少量を示す。

第2層　：　角閃石＞斜方輝石＞不透明鉱物＞単斜輝石
第2′層　：　角閃石＞不透明鉱物≒斜方輝石＞単斜輝石
第3層　：　角閃石＞斜方輝石≒不透明鉱物≒単斜輝石
第4層　：　不透明鉱物＞斜方輝石＞角閃石＞単斜輝石
第5層　：　不透明鉱物≒角閃石＞斜方輝石＞単斜輝石
第6層　：　不透明鉱物＞角閃石＞斜方輝石＞単斜輝石
第7層　：　不透明鉱物＞角閃石＞斜方輝石＞単斜輝石
第8層　：　角閃石≫不透明鉱物＞斜方輝石＞（単斜輝石）
第9層　：　角閃石≒不透明鉱物＞斜方輝石＞単斜輝石
第10層　：　角閃石≒不透明鉱物＞斜方輝石＞単斜輝石
第11層　：　角閃石≒不透明鉱物＞斜方輝石＞（単斜輝石）
第12層　：　不透明鉱物＞角閃石＞斜方輝石＞（単斜輝石）
第13層　：　不透明鉱物＞角閃石＞斜方輝石＞（単斜輝石）
第13′層　：　角閃石≒不透明鉱物＞斜方輝石＞単斜輝石

以上のことから、次のことが読取られる。①第5層以下では同定不能の粒子が大きく、第4層以上では少ない。②第4層以下では風化にたいして比較的強い不透明鉱物（特に磁鉄鉱）の割合が大きく、第3層以上では小さい。③第8層では、とくに角閃石の割合が大きい（73%）。④第4層以上で、斜方輝石の割合が大きい。⑤第3層以上では、角閃石の占める割合が最も大きい。

c.　屈折率測定結果

測定の対象試料として火山ガラスの量が比較的多い第12層と第2′層を選んだ。火山ガラスの屈折率（n）を（第13表）示す。第12層の火山ガラスは、1.500前後、第2′層の火山ガラスは1.504前後であった。

## 4　考察

### （1）　上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡間の土層対比

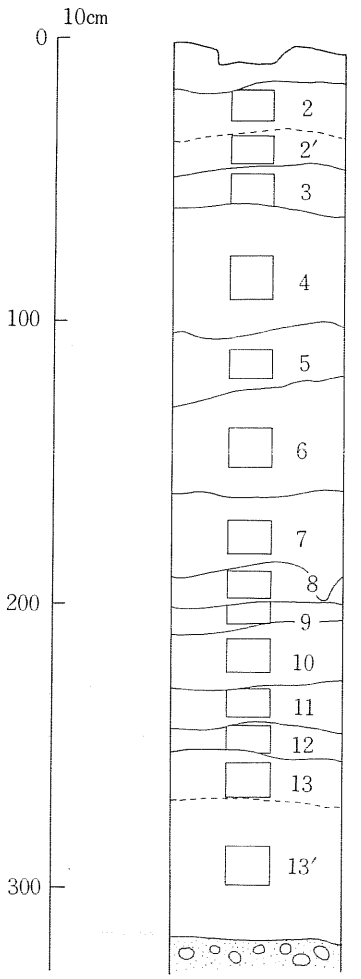
層相、火山ガラスの量比傾向等から、重鉱物組成、両遺跡の土層は次のように区分できる。

1）上ノ山Ⅰ遺跡第1層および上ノ山Ⅱ遺跡第2層、第2′層：黒褐色土。様々な形態の火山ガラスを比較的多く含む。重鉱物としては、角閃石の割合が大きい。

2）上ノ山Ⅰ遺跡第2層および上ノ山Ⅱ遺跡第3層：褐色土で、上位の黒褐色土と下位の黄褐色土の漸移層。火山ガラスの量は比較的多い。重鉱物組成では、角閃石の割合が大きい。

3）上ノ山Ⅰ遺跡第3層および上ノ山Ⅱ遺跡第4層：明黄褐色で、ローム質の土壌。同定不能の粒子は少ない。

以下の土層は各々水成堆積と考えられる。



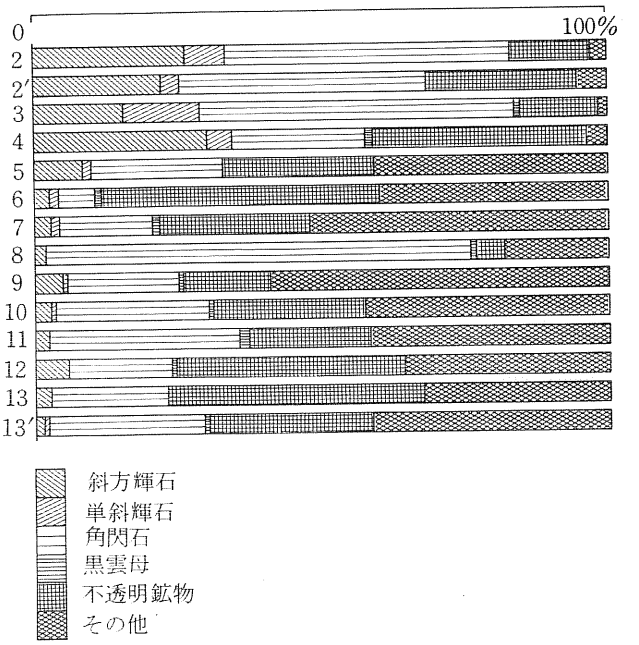
第271図　上ノ山Ⅱ遺跡
分析試料の層位

なお、上ノ山Ⅰ遺跡の第4層以下は館野段丘堆積物、上ノ山Ⅱ遺跡の第8層以下は西段丘堆積物に対比され（段丘区分は、秋田県埋蔵文化センター，1986による）、おそらく堆積年代の異なる水成堆積物と考えられる。ただし上ノ山Ⅰ遺跡の第6層以下は、その上位との間に不整合の様な構造が認められることから、西段丘堆積物あるいはさらに古い段丘堆競物に対比される可能性も考えられる。

### （2）　示標テフラとの対比

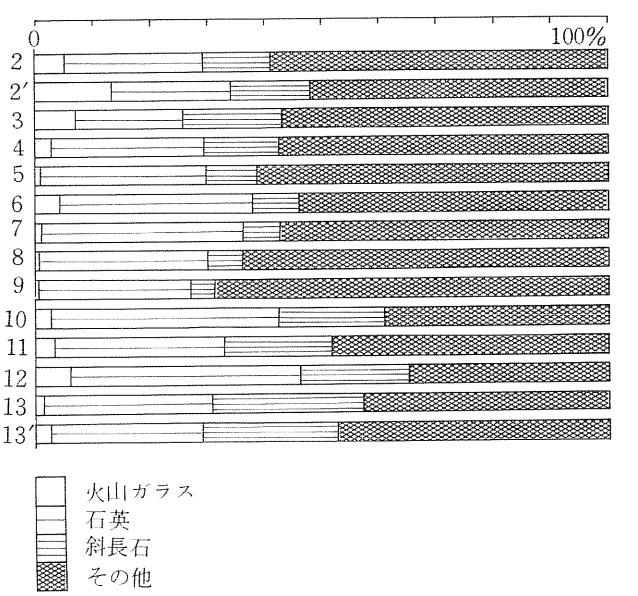
上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡の黒褐色土（2層、2′層付近）あるいは黄褐色土には、火山ガラスの形態が多様で、屈折率〔(n) が1.504前後〕、さらに角閃石が多く含まれるテフラ層が堆積している。本火山ガラスは、①後述のように、下位のテフラがATに対比される可能性があることから約2.2万年前以降に噴火・堆積したテフラ、②段丘堆積物の基盤のテフラ等に由来する可能性が考えられる。①のテフラに相当する東北地方北部のテフラとしては、10,000～13,000年前に十

和田カルデラから噴出した十和田八戸火砕流堆積物や十和田ａテフラ（A．D．915）がある（テフラの噴火年代について：町田ほか、1981．町田ほか，1984）。前者については、これまで知られている同火砕堆積物の分布域からは、かなり離れている。また屈折率も今回の試料は若干低い。なお、協和町に比較的近い秋田駒ケ岳、森吉山等のテフラについては、まだ不明な点が多い。②の田沢湖起源と考えられる火砕流堆積物や玉川溶結凝灰岩等があるが、これらのテフラについての岩石記載学的研究はまだない。




第272図　上ノ山Ⅱ遺跡基本土層の軽鉱物組成

上ノ山Ⅱ遺跡で発見された第12層のテフラは、火山ガラスの量が少ないこと、また純層でなく水成堆積物中に堆積しているため、第1次的に堆積したテフラかどうか明確でない。しかし、火山ガラスについては、ガラスの形態、色調あるいは屈折率が1.500前後であることから約21,000～22,000年前に南九州姶良カルデラから噴出、東北地方までを広く覆っている姶良Tn火山灰（AT：町田・新井，1976）によく似ている。しかし、火山ガラスの量が少ないのでこれ以上の言及をさける。




第273図　上ノ山Ⅱ遺跡基本土層の重鉱物組成

ATは津軽半島の出来島海岸で純層で発見されている（0.3㎝：辻・遠藤，1978）ほか、宮城県北部の鳴子火山周辺でも純層で発見されている（3㎝前後：早田ほか，1986）。一般に堆積段丘等の堆積物中ではテフラの保存状態が良い場合があるので、当地域においてもATが純層で

発見される可能性がある。ATの層位が確認されるようになれば、考古学だけではなく段丘編年等地形学の分野でも役立つことが多い。

**第13表　上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡テフラ試料の屈折率測定結果**

| 遺跡名 | 試料番号 | 火山ガラスの屈折率(n) |
|---|---|---|
| 上ノ山Ⅱ | 2' | 1,504± |
| 上ノ山Ⅱ | 12 | 1,500± |

パリノサーヴェイ株式会社

秋田県埋蔵文化財センター　『東北横断自動車道秋田線埋蔵文化財発掘調査略報』　1986（昭和61年）

新井房夫　「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定―テフロクロノロジーの基礎的研究―」『第四紀研究』　11　p. 254～269.　1972（昭和47年）

町田　洋・新井房夫　「広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―」『科学』　46　p. 339～347.　1976（昭和51年）

町田　洋・新井房夫・森脇　広　「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』　51　p. 562～569.　1981（昭和56年）

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫　「テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ―」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』　p. 865～928.　1984（昭和59年）

早田　助・八木浩司・新井房夫　「宮城県北部のテフラと前期旧石器時代異物包含層」『日本第四紀学会講演旨集』　16　p. 36～37.　1986（昭和61年）

辻　誠一郎・遠藤邦彦　「津軽半島西海岸の第四紀系に関する新知見」『日本大学文理学部研究所紀要』　13　p. 69～72　1978（昭和53年）

## 第２節　残存脂肪の分析

動植物体を構成している主要な生体成分に蛋白質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪）がある。これらの生体成分は、環境の変化にたいしては不安定で、長期間地下に埋蔵されると、圧力、水分などの物理的な作用や、土の中に住んでいる微生物による生物的な作用によって分解していく。しかし、まれにこの生体成分が完全な状態で遺存する場合もあり、それは地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡などごく限られた場所と考えられてきた。

最近、生体成分の一部、とくに脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年、万年と言う長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した(註１)。すべての動植物体は体内に脂肪を持っており、これらを構成する脂肪酸およびステロールの組成は動物・植物の種ごとにすべて少しずつ違っている。この化学組成と考古学資料に遺存する脂肪の化学組成とを照合させることで、脂肪の持主を特定しようとするのが残存脂肪分析法である。この「残存脂肪分析法」を用いて、上ノ山Ⅱ遺跡の石器及び埋設土器の性格を解明しようとした。

### １　石器及び埋設土器試料

石鏃、石槍、石匙、石篦、すり石等の石器16試料、燕尾形及びカツオブシ形石製品３試料、埋設土器及び土器内埋土等25試料について残存脂肪を分析した。

### ２　残存脂肪の抽出

各試料に３倍量のクロロホルムーメタノール（２：１）混液を加え、超音波発生浴槽中で30分間処理する。石器及び石製品は、あらかじめクロロホルムーメタノール（２：１）で表面を洗浄してから抽出溶剤に浸漬して超音波処理した。超音波抽出を３回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶剤に１％塩化バリウムを全抽出溶剤の４分の１容量を加えて、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存胞肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を第１表に示す。抽出量は、石器及び石製品で0.012～0.050％、平均0.0103％、埋設土器0.0035～0.006％、平均0.004％、埋設土器内埋土0.001～0.0056％、平均0.003％と微量ながら各試料から残存脂肪が抽出された。とくに石鏃の試料No.10とNo.15、石槍の試料No.11とNo.16、石匙の試料No.12で残存脂肪抽出量が多かった。石製品のうち、燕尾形石製品では、先端の中央部に逆Ｖ字状の切り込みのある側よりも、その反対側の方が残存脂肪量が８倍も多かった。土器に残存する脂肪は、石川県真脇遺跡出土土器(註２)の平均0.008％、秋田県大湯環状列石周辺遺跡の配石遺構(註３)から出土した甕棺土器の平均0.036％と比較して低かった。また、埋設土器埋土の残存脂肪についても、土壙墓の埋土から抽出され残存脂肪(註４)の平均0.02％と

## 第14表　上ノ山Ⅱ遺跡の残在脂肪抽出量

| 試料No. | 出　土　地　点 | 遺物番号 | 器　種 | 重量(g) | 全脂質(mg) | 抽出率(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SI003　床面直上 | | 石匙 | 18.04 | 0.6 | 0.0033 |
| 2 | SI312　埋土中 | RQ352－1 | 燕尾形石製品 | 113.17 | 3.8 | 0.0034 |
| 3 | SI312　埋土中 | RQ352－2 | 燕尾形石製品 | 113.17 | 0.5 | 0.0004 |
| 4 | MD38 | RQ9191 | 石槍 | 97.91 | 1.2 | 0.0012 |
| 5 | MD39 | RQ9201 | 石匙 | 28.60 | 0.8 | 0.0028 |
| 6 | MB36 | RQ9206 | カツオブシ形石製品 | 25.32 | 1.0 | 0.0039 |
| 7 | ML39 | RQ9209 | 石箆 | 43.60 | 1.8 | 0.0041 |
| 8 | MM43 | RQ9215 | 石匙 | 26.98 | 1.3 | 0.0048 |
| 9 | MM43 | RQ9217 | 石匙 | 15.92 | 0.7 | 0.0044 |
| 10 | MF24Ⅱ | RQ11197 | 石鏃 | 4.56 | 0.8 | 0.0175 |
| 11 | MH23Ⅱ | RQ11212 | 石槍 | 6.90 | 1.4 | 0.0203 |
| 12 | MG23Ⅱ | RQ11213 | 石匙 | 9.45 | 4.1 | 0.0434 |
| 13 | MF23Ⅱ | RQ11216 | 石匙 | 21.13 | 1.3 | 0.0062 |
| 14 | MG22Ⅱ | RQ11220 | 石匙 | 26.08 | 1.7 | 0.0063 |
| 15 | SK224　埋土中 | RQ11265 | 石鏃 | 1.40 | 0.7 | 0.0500 |
| 16 | MI22Ⅱ | RQ21267 | 石槍 | 4.96 | 0.8 | 0.0161 |
| 17 | MC32Ⅱ | RQ11272 | 石鏃 | 3.24 | 0.2 | 0.0062 |
| 18 | MG23Ⅱ | RQ11308 | すり石 | 800.00 | 4.8 | 0.0006 |
| 19 | MG23Ⅱ | RQ11307 | すり石 | 358.03 | 4.6 | 0.0013 |
| 20 | SI190・SR304 | RP1270－1 | 埋設土器・上部 | 298.34 | 10.7 | 0.0036 |
| 21 | SI190・SR304 | RP1270－2 | 埋設土器・下部 | 499.23 | 18.9 | 0.0038 |
| 22 | SI190・SR304 | RP1270－3 | 埋設土器・底部 | 358.32 | 14.3 | 0.0040 |
| 23 | SI190・SR304 | RP1270－4 | 土器内土壌・側上部 | 445.56 | 10.3 | 0.0023 |
| 24 | SI190・SR304 | RP1270－5 | 土器内土壌・側下部 | 163.56 | 9.2 | 0.0056 |
| 25 | SI190・SR304 | RP1270－6 | 土器内土壌・中上部 | 532.99 | 12.2 | 0.0023 |
| 26 | SI190・SR304 | RP1270－7 | 土器内土壌・中下部 | 572.03 | 6.0 | 0.0010 |
| 27 | SI190・SR304 | RP1270－8 | 土器内土壌・底部 | 421.54 | 7.6 | 0.0018 |
| 28 | SI190・SR305 | RP1271－1 | 埋設土器・上部 | 440.94 | 20.3 | 0.0046 |
| 29 | SI190・SR305 | RP1271－2 | 埋設土器・下部 | 271.24 | 13.0 | 0.0048 |
| 30 | SI190・SR305 | RP1271－3 | 埋設土器・底部 | 222.00 | 8.4 | 0.0038 |
| 31 | SI190・SR305 | RP1271－4 | 土器内土壌・側上部 | 609.11 | 19.1 | 0.0031 |
| 32 | SI190・SR305 | RP1271－5 | 土器内土壌・側下部 | 341.30 | 11.6 | 0.0034 |
| 33 | SI190・SR305 | RP1271－6 | 土器内土壌・中上部 | 277.95 | 7.7 | 0.0028 |
| 34 | SI190・SR305 | RP1271－7 | 土器内土壌・中下部 | 405.48 | 5.0 | 0.0012 |
| 35 | SI190・SR305 | RP1271－8 | 土器内土壌・底部 | 235.63 | 6.1 | 0.0026 |
| 36 | SI190・SR305 | RP1271－9 | 土器内土壌中・石 | 128.48 | 0.6 | 0.0005 |
| 37 | SI190・SR306 | RP1272－1 | 埋設土器・上部 | 205.70 | 10.2 | 0.0050 |
| 38 | SI190・SR306 | RP1272－2 | 埋設土器・下部 | 178.00 | 10.7 | 0.0060 |
| 39 | SI190・SR306 | RP1272－3 | 埋設土器・底部 | 179.27 | 10.3 | 0.0057 |
| 40 | SI190・SR306 | RP1272－4 | 土器内土壌・側上部 | 222.76 | 10.2 | 0.0046 |
| 41 | SI190・SR306 | RP1272－5 | 土器内土壌・側下部 | 196.36 | 9,3 | 0.0047 |
| 42 | SI190・SR306 | RP1272－6 | 土器内土壌・中上部 | 186.22 | 6.6 | 0.0035 |
| 43 | SI190・SR306 | RP1272－7 | 土器内土壌・中下部 | 213.23 | 8.2 | 0.0038 |
| 44 | SI190・SR306 | RP1272－8 | 土器内土壌・底部 | 171.23 | 8.5 | 0.0050 |

比較して5分の1と低かった。

### 3　残存脂肪の脂肪酸組成

石器、石製品及び埋設土器の残存脂肪から調整した脂肪酸メチルエステルをガスクロマトグラフィーで分析した(註5)。脂肪酸メチルエステルは次のようにして調整した。残存脂肪に5％エタノール性塩酸を加え、125℃で2時間封管中で分解。メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分解し、ケイ酸薄属クロマトグラフィーで精製した。

残存脂肪の脂肪酸組成を第274図に示す。残存脂肪から13種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸（C 16：0）、パルミトレイン酸（C 16：1）、ステアリン酸（C 18：0）、オレイン酸（C 18：1）、リノール酸（C 18：2）、アラキジン酸（C 20：0）、エイコサモノエン酸（C 20：1）、ベヘン酸（C 22：1）、リグノセリン酸（24：1）の12種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料のうち埋設土器、埋土（試料No.23～27、No.31～35、No.40～44）はパルミチン酸からリノール酸までの中級脂肪酸のパターンはよく類似し、主としてパルミチン酸とオレイン酸で構成されていた。この部分の脂肪酸パターンは土壌植物腐植に由来する脂肪酸パターンとよく類似していた。この土壌中に残存する脂肪酸を対照として遺物脂肪酸を比較した。試料No.1、No.12、No.13及びNo.14石匙は、植物腐植の脂肪酸組成と比べてパルミチン酸とリノール酸が高く、更に試料No.12では動物脂肪酸由来の高級脂肪が多い。この脂肪酸パターンは動・植物を混合型を示している。とくにパルミチン酸の占める割合が高いことから、脂肪は火にかざされている可能性がある。従って、残存脂肪酸組成を見る限り、これらの石器は、動植物素材を調整したり、時には、食糧を加熱処理する際の用具として活用していたと推測される。

試料No.10及びNo.15の石鏃、試料No.11及びNo.16の石槍の脂肪酸パターンはよく類似し、パルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸の中級脂肪酸の他に動物の臓器、血液に由来する高級脂肪酸のベヘン酸、リグノセリン酸等の高級胞肪酸がとくに多い。このことは、石器が狩猟道具として使用されたと推測した。

試料No.7の石篦は、他の石器の脂肪酸パターンと全く異なり、アラキジン酸以上の高級脂肪酸が約56％以上を占め、とくにベヘン酸とリグノセリン酸が多かった。これら高級脂肪酸は、動物臓器、血液、神経組織に多く分布する。従って、石篦は削具としての用途の他に物臓器等の剝離・破粋道具としての用途も推定された。

燕尾形石製品は石器の両端ともよく似た脂肪酸組成を示した。植物腐植と比べてリノール酸の占める割合が高い特徴が見られるところから、石器には植物性脂肪が存在していた可能性が高い。その脂肪酸パターンは現生植物脂肪のうち、クルミ科、ブナノキ科、及びマツ科の木の

実の脂肪に類似していた。従って、燕尾形石製品は、木の実割器としての機能を有しているのかも知れない。

埋設土器は、いずれもよく似た脂肪酸組成を示し、主として植物性脂肪酸からなり、動物性脂肪酸は検出されなかった。土器は、植物性食品の貯蔵容器であろう。

### 4　残存脂肪のステロール組成

土壙及び礫の残存脂肪からステロールをケイ酸薄層クロマトグラフィーにより分離・精製後、アセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

残存脂肪の主なステロール組成を第15表に示す。残存脂肪から16種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど11種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。コレステロールは動物、エルゴステロールは微生物、カンペステロールは穀類、シトステロールは植物一般に特異的にみられるステロールである。従ってこれらのステロールの占める相対比は、動物性起原の指標となる。そこで代表的な石匙についてみると、試料No.8 で0.382、試料No.9 で0.523、試料No.13 で1.091 となる。土壙墓の場合、動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロール比の指標値は0.5～0.6以上にある。従って、試料No.13石匙は動物性脂肪が多く、他の石匙についても動物性脂肪が混合していることがわかる。しかし、試料No.4 石槍のステロール比は0.072で、動物性脂肪は付着していない。埋設土器のコレステロールとシトステロール比は、すべて0.1以下であることから、動物性遺物は土器内に存在していないことを示している。この成績は先の脂肪酸組成の結果ともよく一致していた。

**第15表　石器及び埋設土器のコレステロールとシトステロールの割合**

| 試料No. | コレステロール(%) | シトステロール(%) | コレステロール／シトステロール比 |
|---|---|---|---|
| 4 | 4.04 | 56.05 | 0.072 |
| 8 | 14.59 | 38.19 | 0.382 |
| 9 | 12.15 | 23.21 | 0.523 |
| 13 | 21.14 | 19.38 | 1.091 |

帯広畜産大学畜産環境学科　中野益男

北海道測量図工社総合科学研究所　福野道広、中野寛子、長田正宏

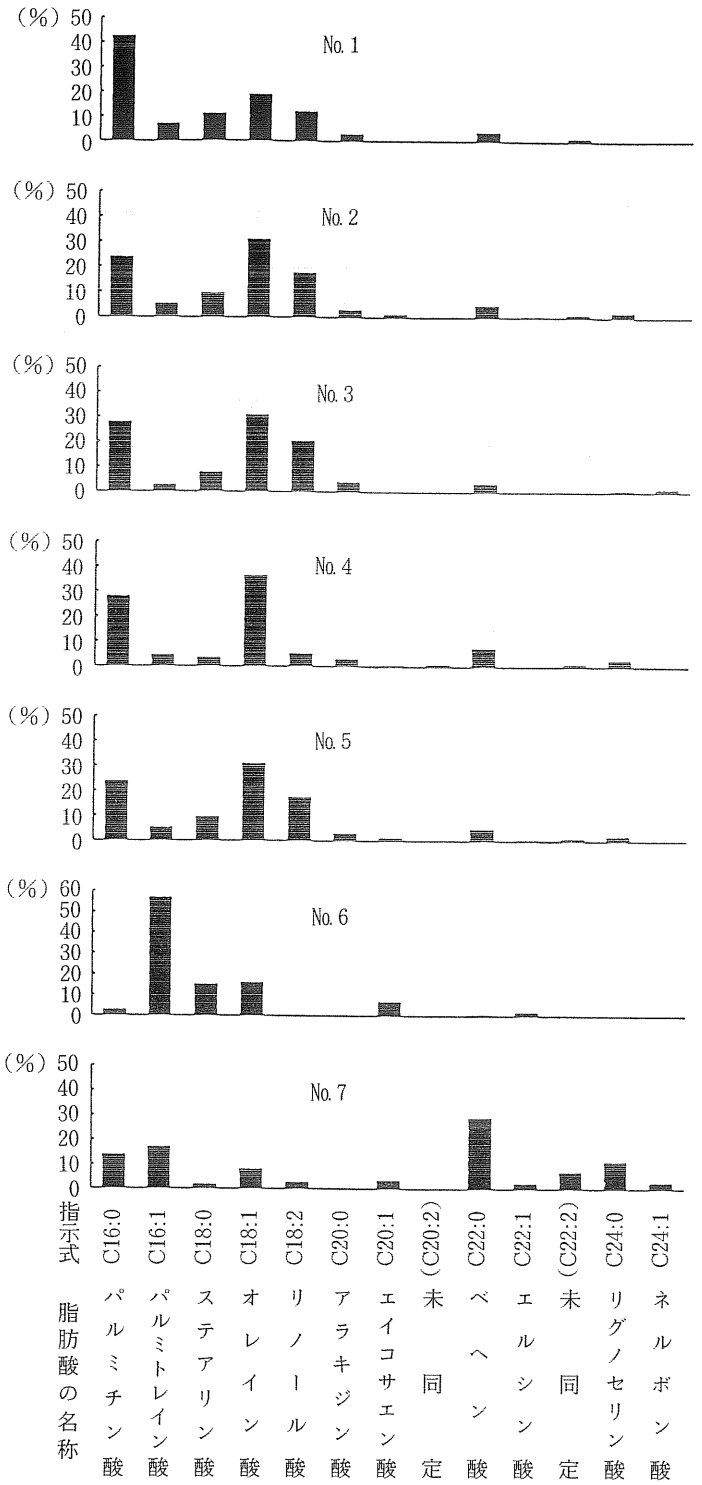
註1　中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻（6）pp 124. 1984（昭和59年）

註2　中野益男「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」『真脇遺跡』石川県能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　pp 401. 1986（昭和61年）

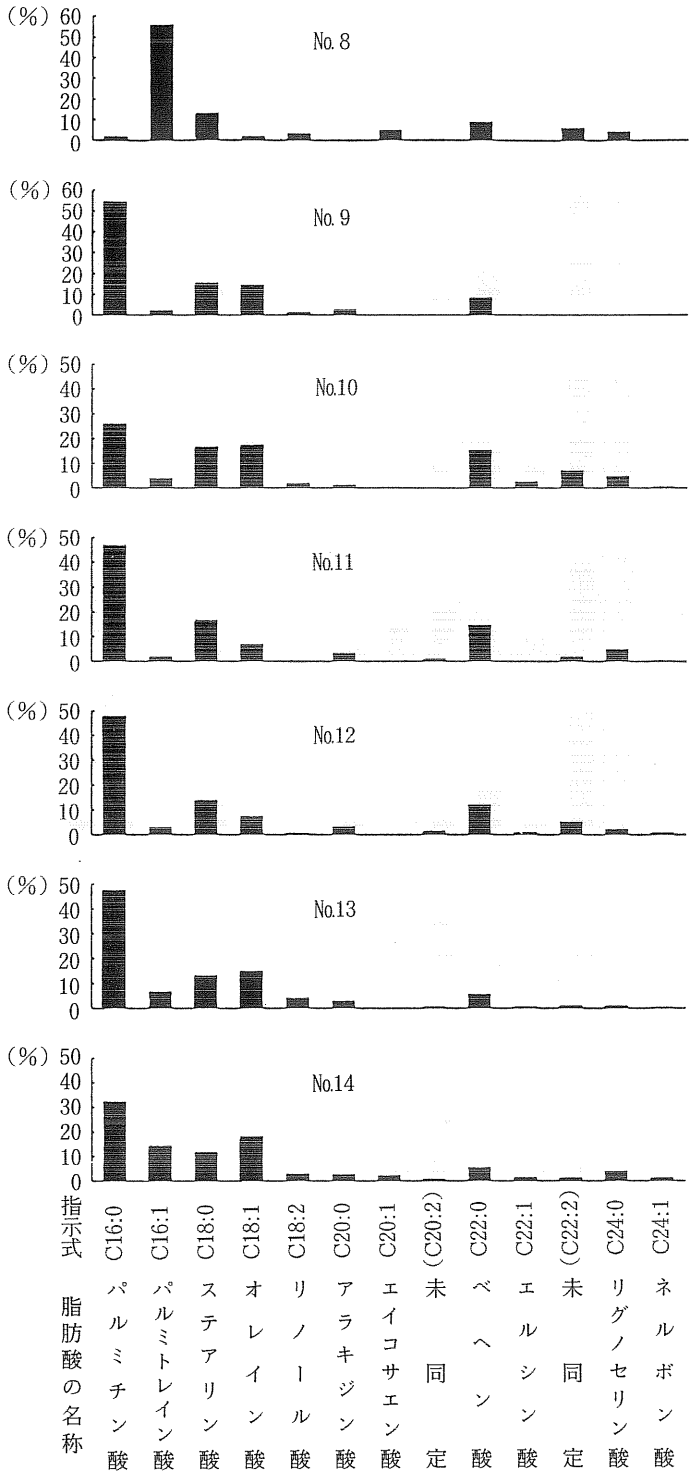
註3　中野益男・中岡利泰「配石遺構の土壙及び甕棺土器に残存する脂肪の分析」『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査団報告書』秋田県鹿角市教育委員会　pp 113. 1986（昭和61年）

註4　中野益男・伊賀　啓・根岸　孝・安本教伝・畑　宏明・矢吹俊男・佐原　真・田中　琢「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』第27巻　pp 41. 1985（昭和60年）

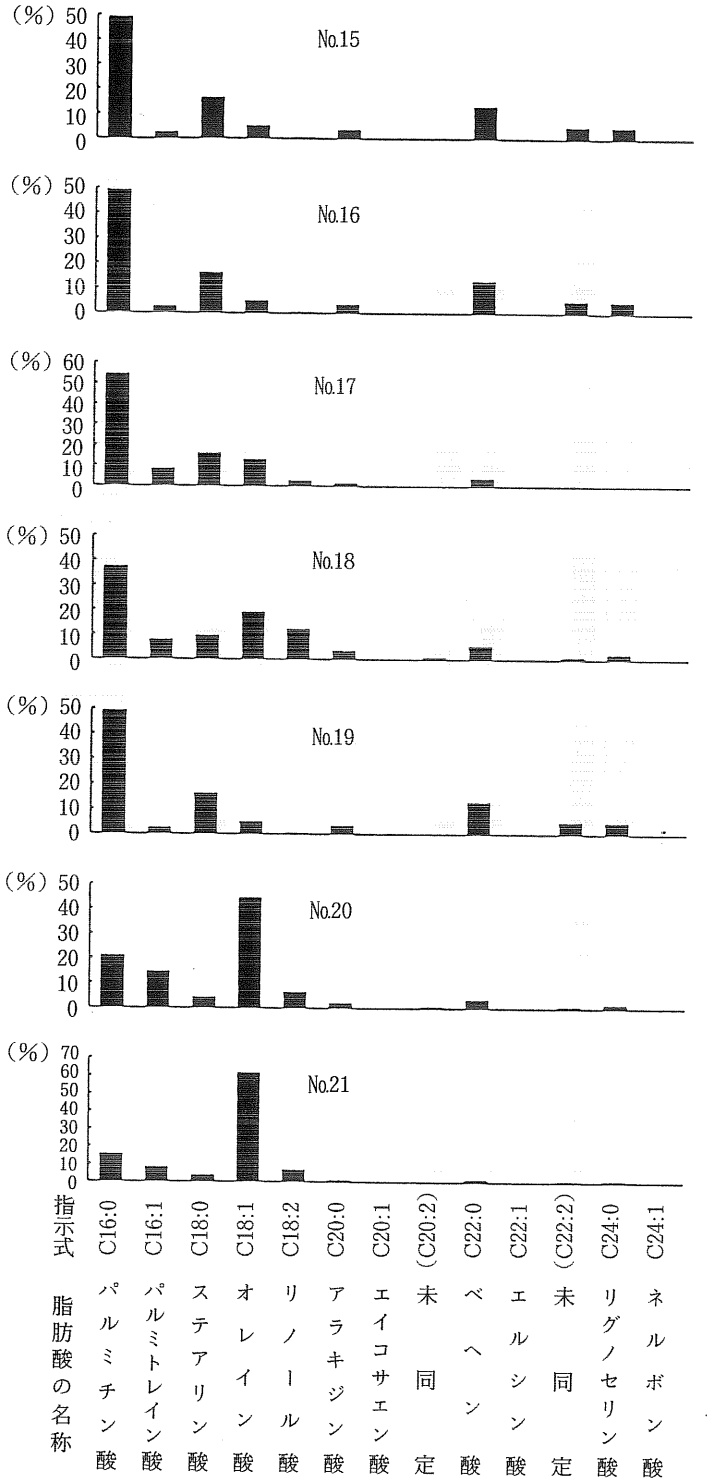
註5　中野益男・伊賀　啓・小林進介・根岸　孝「湯の里4遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」『湯の里遺跡群—津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書』北海道埋蔵文化財センター　pp 223. 1985（昭和60年）



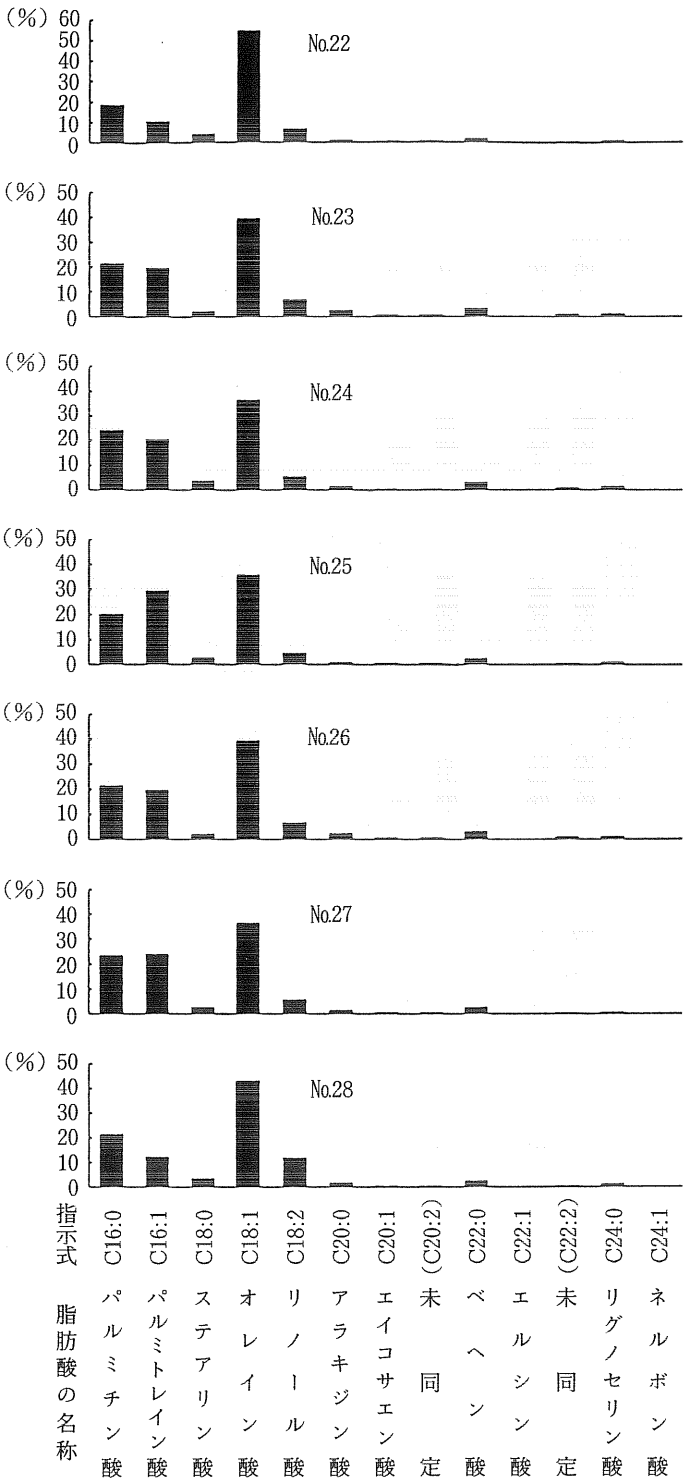

第274図　石器及び埋設土器に残存する脂肪酸組成



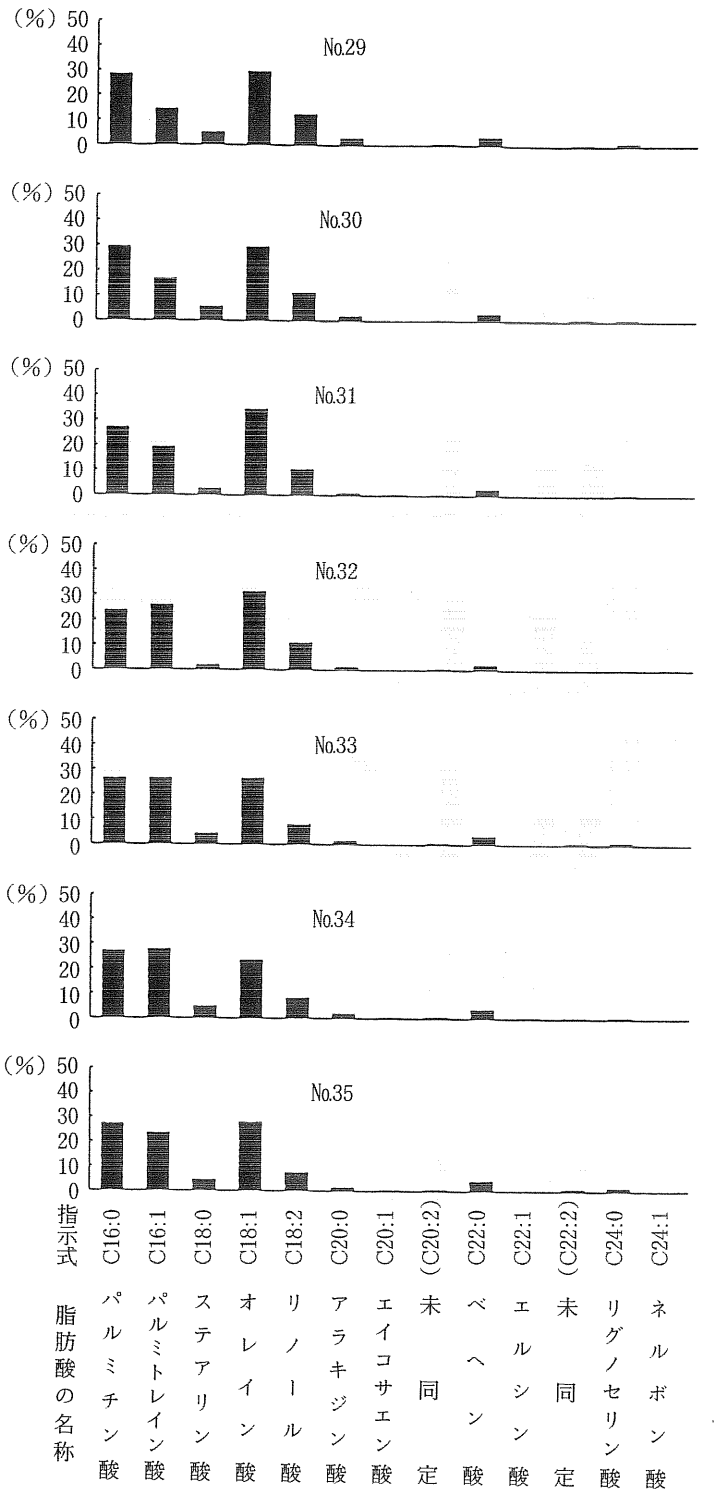

第275図　石器及び埋設土器に残存する脂肪酸組成



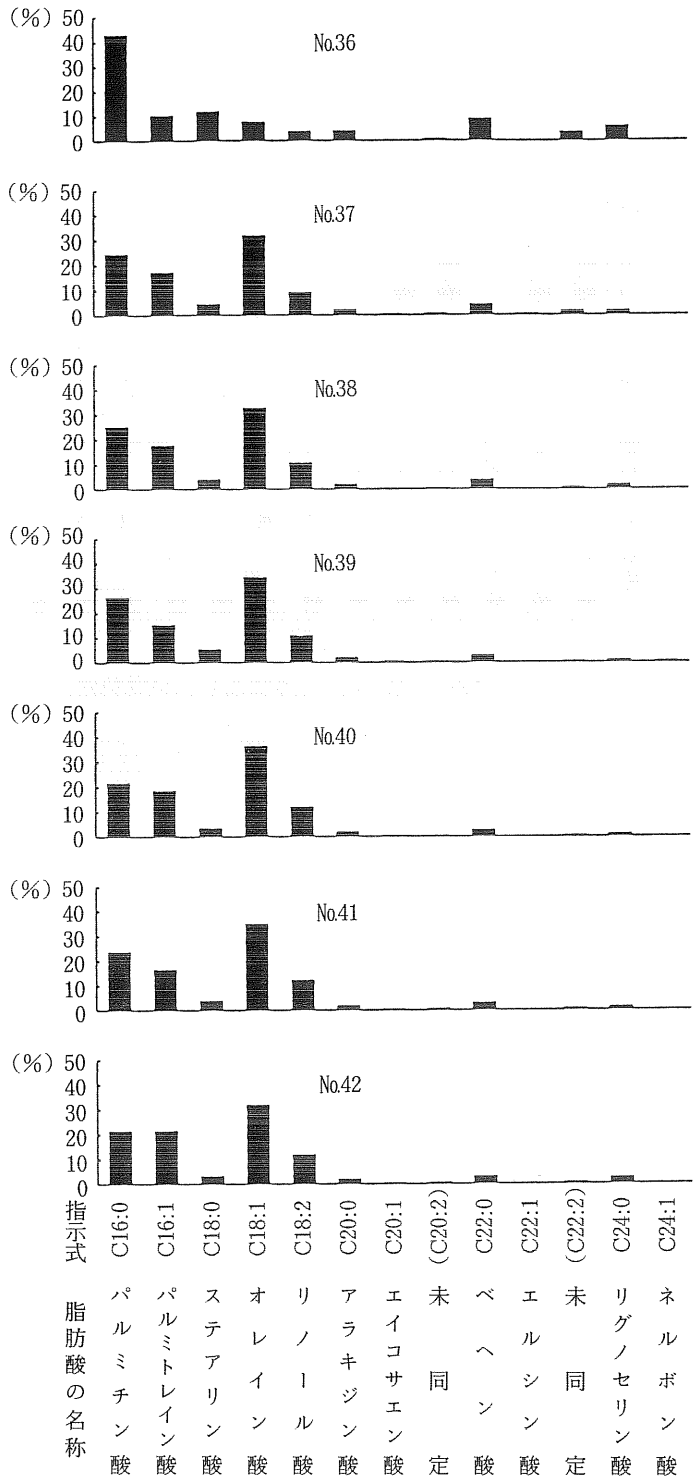

第276図　石器及び埋設土器に残存する脂肪酸組成



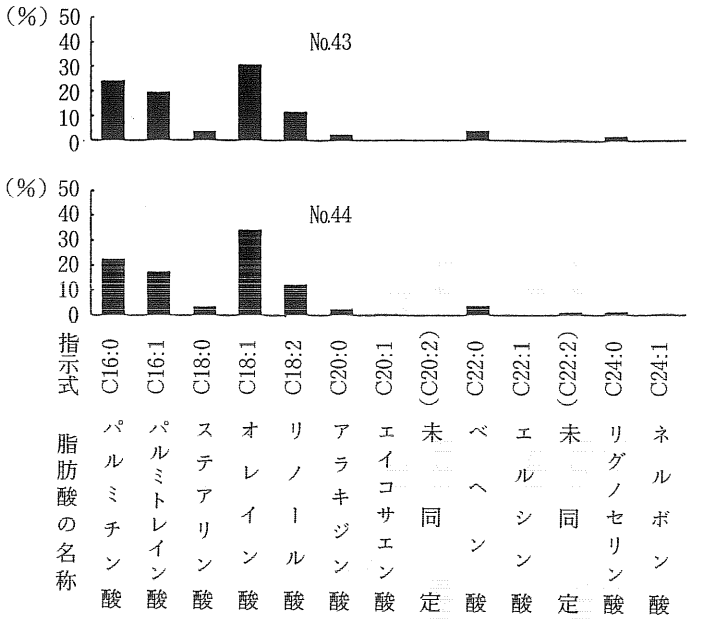

第277図　石器及び埋設土器に残存する脂肪酸組成



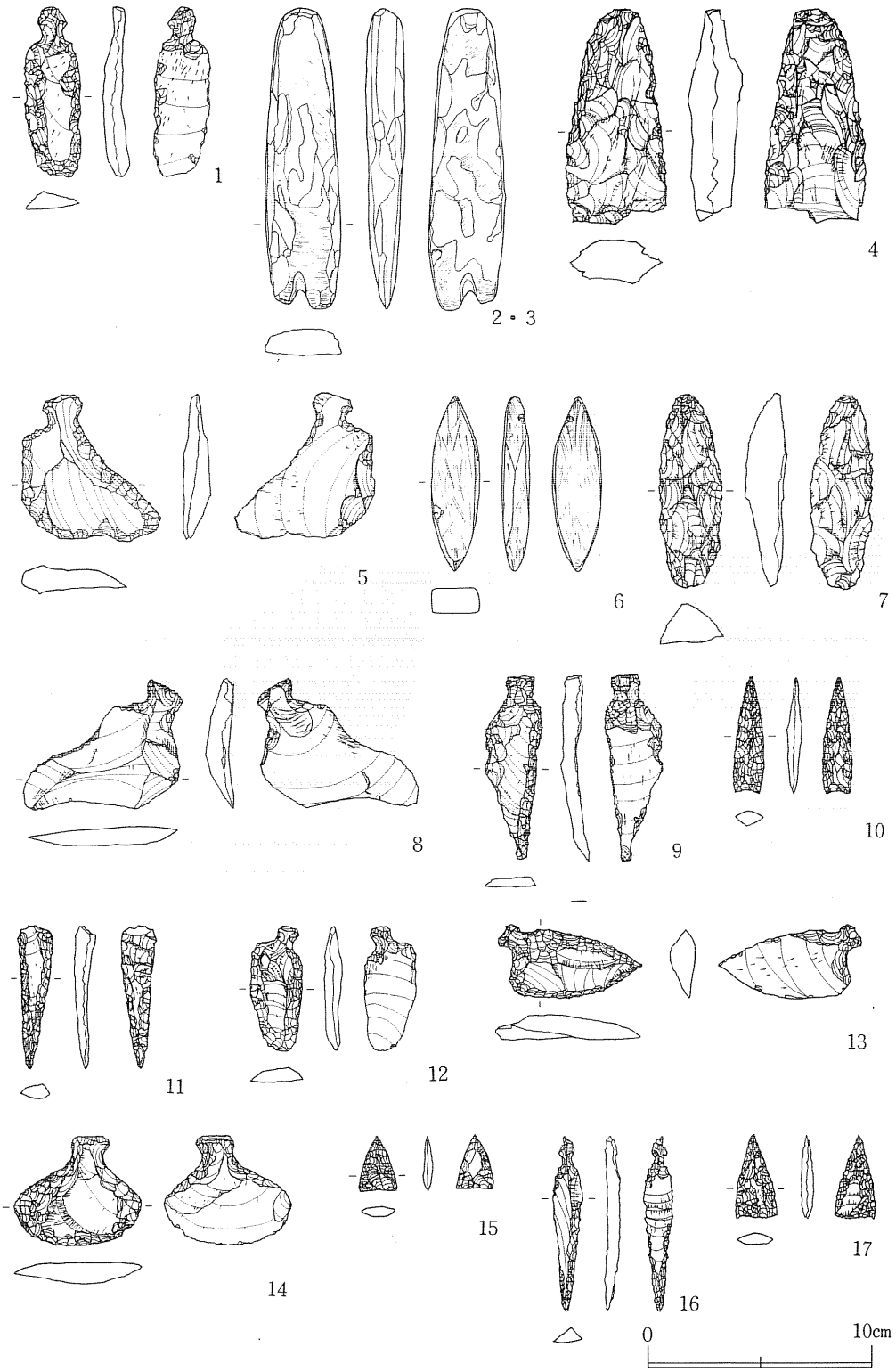

第278図　石器及び埋設土器に残存する脂肪酸組成



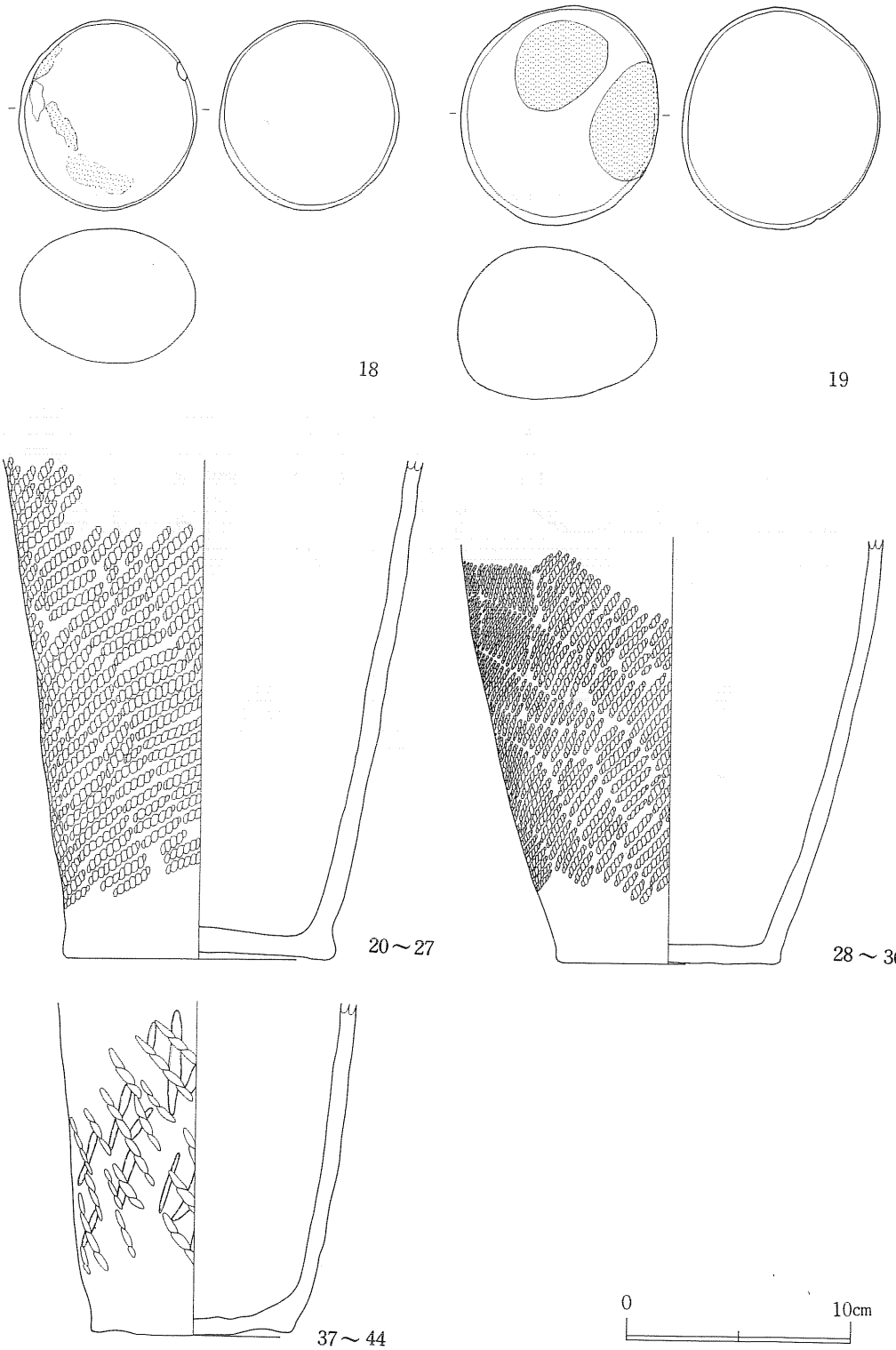

第279図　石器及び埋設土器に残存する脂肪酸組成




第280図　石器及び埋設土器に残存する脂肪酸組成




第281図　残存脂肪の分析試料（１）




第282図　残存脂肪の分析試料（2）

# 第4章　まとめ

上ノ山Ⅱ遺跡は、秋田県仙北郡協和町中淀川字千着上ノ山1番地他に所在する縄文時代の遺跡である。遺跡は、雄物川の支流淀川の右岸河岸段丘上に立地し、標高は遺跡中央部で約50m、南端斜面裾部で約45mである。発掘調査は昭和61年6月16日から同年12月9日まで行なわれ、24,300㎡を調査した。

調査の結果、竪穴住居跡64軒・土坑135基・土器埋設遺構6基・配石遺構3基・溝状遺構1条・その他の遺構が検出され、コンテナ700箱にも上る遺物が出土した。出土した土器の99%以上は縄文時代前期中葉～後葉に属するもので、その出土状況などから、検出された遺構群もほぼこの時期のものとすることができる。

これら検出されたあるいは出土した遺構・遺物については各項目で詳しく述べられ、若干のまとめも行なわれている。そこで、ここでは検出された遺構相互の関連性・配置のあり方、出土した遺物などに重きをおきながら、縄文時代前期中葉～後葉の集落・遺跡としての上ノ山Ⅱ遺跡をまとめてみたい。しかしながら、本遺跡の発掘調査及びこれをまとめるに当たっては、我々の作業能力を超える量の遺構・遺物があり、例えば全ての遺構についてその伴出遺物を明らかにはできたわけではない。このため各遺構間の同時存在や新旧関係については一部を除いて明らかにできず、全体の遺構の変遷についても把えることができなかった。

## 1　3つの遺構群

上ノ山Ⅱ遺跡が立地する台地は南北約200m、東西約120mの南側に延びた舌状を呈する。検出された遺構・遺物の100%近くはこの台地の南半部にあり、それは直径約130mの円形の範囲内である。検出された遺構や捨て場などを平面的に観察すると3つの群に分けることができる。つまり、ほぼ中央部に大型住居群が楕円形の帯状に分布しその内側には、中心部に1基の配石遺構が存在する「広場」(註1)がある遺構群が1つで、これを「中央部遺構群」とよぶ。中央部遺構群の西側と北東側には、大小の竪穴住居跡・土坑などが集中する遺構群があり、前者を「西部遺構群」、後者を「北東部遺構群」とよぶ。また、中央部遺構群の南側には捨場(註2)がある（第283図）。

3つの遺構群は各々の遺構群内で数期の変遷があったものと考えられるが、これらがそれぞれ時期を違えて形成された遺構群であるか、ほぼ同時に存在したかについて確証はない。しかし、ここでは以下のような理由によってほぼ同時に存在したものと考えておく。

①中央部遺構群が存在する場は、北から南に延びた舌状台地の南側にあたり縄文時代集落の形

成に当たっては通常、一般住居や土坑などが最も構築されることの多い場にあたる。しかしながら、中央部遺構群中にはそれらがない。このことは、西部・北東部両遺構群が形成される際に、中央部遺構群の範囲内には一般住居や土坑などを構築してはいけない場として意識され続けたことを物語っている。3つの遺構群が同時に存在していなければ、このように意識され続けることはなかったと考えられる。

②中央部遺構群内には捨場が存在せず、出土遺物も他の部分に比べて極めて少ない。これに対し、中央部遺構群の南・南西側斜面や西部・北東部両遺構群中には捨場が形成されている。このことは、中央部遺構群内は廃棄物を捨ててはいけない場であり続けたことを示している。3つの遺構群が同時に存在していなければ考えにくいあり方である。

なお、西部遺構群と北東部遺構群の同時存在については、これを証明する根拠はない。しかし、それぞれの遺構群中から出土した土器に明確な時期差がないことから、ここでは同時に存在したものとしておく。

前述した3つの遺構群は、西部・北東部遺構群が一般住居・大型住居・土坑から構成されるのに対し、中央部遺構群は大型住居・広場・配石遺構から成る。ここで、各遺構群を構成する遺構間や周囲の状況についての異同についてまとめると、以下のようになる。①西部・北東部遺構群中の大型住居や一般住居・土坑の配置のあり方には、特に規格性等が認められないのに対し、中央部遺構群中の大型住居は長軸線の延長線が広場のほぼ中心部に集中する1群と、楕円形を呈する広場の中軸線に平行する1群とがある。②西部・北東部遺構群中の大型住居の中には床面が堅く踏みしめられ、しっかりした炉をもつものが多いのに対し、中央部遺構群中の大型住居は床面の確認が困難を極めるほど堅くないものが大部分(註3)で、炉としての焼土も数例を除けば痕跡程度のものがほとんどである(註4)。③遺構間の重複は西部・北東部遺構群中では、一般住居・大型住居・土坑などがかなりの頻度で見られるのに対し、中央部遺構群中では、一部で大型住居の長軸線が直交するように重複する以外にはほとんど見られない。④西部遺構群中には一般的に貯蔵用施設と考えられているフラスコ状土坑が数基集中して見られ、中央部遺構群中にはその中心部に配石遺構が存在する。⑤中央部遺構群中には捨場Bは存在せず、捨場Aが南西から南の外側に存在する。

このように各遺構群を構成する遺構とそのあり方を見て来ると、西部・北東部遺構群は、これまで大型住居が検出された縄文時代前期集落遺跡(註5)の内容とほぼ同等のものであることが分かるのに対し、中央部遺構はこれまで発掘調査された同時代の遺跡の中には類例のないものである。つまり、西部・北東部遺構群は、例え中央部遺構群が存在しなかったとしても大型住居を持つ縄文時代前期集落遺跡としての内容を持つものであり、これに中央部遺構群が加わることによって、上ノ山Ⅱ遺跡を他の遺跡と比べて際立った存在にしているのである。

## 2　中央部遺構群と遺構全体の変遷

中央部遺構群は、合計17軒の大型住居と1基の配石遺構及び広場から構成される。広場は配石遺構を略中心として長径約50ｍ、短径約25ｍの楕円形を呈し、その長軸方向はおよそ南南西―北北東の線である。

17軒の大型住居跡は長軸方向のあり方でＡ・Ｂ2つのグループにわけることができる。すなわち、長軸線がおおよそ広場の中心部に集まるように配置された1群（Ａグループ＝「広場を囲む放射状配列の大型住居群」）と、住居の長軸線が広場の長軸線とほぼ平行するように配置された1群（Ｂグループ＝「広場をはさんで平行する大型住居群」）である。Ａグループは11軒、Ｂグループは6軒からなり、2つのグループは平面形・柱穴配置などからそれぞれ細分できる。Ａグループは、平面形が長方形あるいは隅丸長方形で、柱穴も長軸線に平行する直線的な配置となり一部壁溝も見られる1群（Ａ―1グループ）と、平面形は楕円形あるいは隅丸長方形ではあるが長軸がＡ―1グループに比べ短く、柱穴も長軸線にきれいに平行しない1群（Ａ―2グループ）がある。Ａ―1グループはSI 328・180・326・170・150・314・213、Ａ―2グループはSI 215・229・218・217である。また、Ｂグループも同様な基準でＢ―1グループはSI 199・190・327、Ｂ―2グループはSI 230・220Ａ・220Ｂである。

これらＡ・Ｂグループは、一部で重複も見られることから同時に存在したものではない。確認時や柱穴どうしの切り合い関係などから、以下のような新旧がわかっている。Ａ―1グループに属する大型住居は、Ｂ―1グループの全ての大型住居よりも古い。また、Ａ―1グループ内ではSI 180がSI 326よりも古く、Ｂ―2グループ内のSI 230はSI 220Ｂよりも古いと推定され、Ａ―2グループのSI 229は埋土の状況などから他のＡ―2グループの仲間よりは古いと見られている。さらに、同一グループ内の新古の関係が明確ではない大型住居にあっても、その位置関係からそれら全てが同時に存在したとは言えない。例えばSI 180と170、150と134、190と327、220Ａと220Ｂなどはお互いが接近しすぎており同時に存在し得ないのである。このような新旧の関係及び同時併存の困難な状況等を考慮に入れて、あえて中央部遺構群の変遷を推定するならば、以下のようになるものと考えられる。初めに「広場を囲む放射状配列の大型住居群」が広場の中軸線で対称となるような形で1～3軒ずつ建てられる。それがほぼ同一の場所あるいは場所を若干ずらして何回か建て替えられ、「広場を囲む放射状配列」という形で続き、次に「広場をはさんで平行する大型住居群」1～3軒が、やはり数回立て替えられながら続くのである。

ここで、以上のことを踏まえて上ノ山Ⅱ遺跡における遺構群の変遷を前半・後半に分けてスケッチすると、以下のとおりである。

前半：・舌状台地の南端近くに楕円形を呈する広場が設定される（恐らくはSQ 219配石遺構

もこの時に広場の中央部に構築されたのであろう。）

・広場の周囲には中軸線が広場の中央部に集中するように、１～３軒（数軒）の大型住居が配置され、その北西と西側にはそれぞれ数軒の一般住居・土坑、１軒の大型住居が構築される。

・広場を囲む放射状配列の大型住居及び、その外側の一般住居や大型住居は、それぞれ位置を少しずらしながら幾度かの建て替えが行なわれる。

後半：・広場を囲む大型住居は、その中軸線が広場の中軸線と平行する形で建て替えられる。

・広場をはさんで平行する大型住居は、やはり位置を若干ずらしながら幾度かの建て替えが行なわれる。もちろん、この間にその外側の一般住居・大型住居も数回の建て替えが行なわれる。

・西部遺構群中のSI 156大型住居がその使命を終える頃に、集落遺跡としての上ノ山Ⅱ遺跡が終わるものと考えられる(註６)。それは土器形式として大木５式期にあたる。

## ３　「上ノ山Ⅱ集落」

さてそれでは、上ノ山Ⅱ遺跡を他の遺跡と比べて際立った存在にしている中央部遺構群は誰が形成し、どのような機能・性格を有した縄文時代前期中葉～後葉の場なのであろうか。各遺構の細部の検討や出土遺物及び全体の出土遺物からの推定等からは不明であるが、あえてまたここでいくつかの推定をしておくと、以下のとおりである。①北東部遺構群や西部遺構群の人々が（仮称「上ノ山Ⅱ集落の人々」）何らかの理由で中央部遺構群を形成した。②「上ノ山Ⅱ集落の人々」をも含めたもっと大きな単位の集団が何らかの理由で形成した。

西部・北東部遺構群の同時存在の竪穴住居の軒数及びその変遷について、遺憾ながらこれを鮮明な形では把ることができなかったが、他の集落遺跡の例でも明らかなように、それぞれの遺構群で同時に存在した一般住居は２～５軒で、これに各々１軒ぐらいの大型住居があったものと考えられる。また、これまで多くの遺跡で検出されている大型住居は、本遺跡の西部・北東部遺構群中のように、一般住居や土坑その他の遺構と重なり合うような形で検出されているものが大部分である。もし大型住居がこのように、大きな集落の構成要素の１つであり、「上ノ山Ⅱ集落」も単に大きな集落の１つにすぎないならば、「上ノ山Ⅱ集落」としては〔西部・北東部遺構群＋捨場など〕で完結してよいように思われる。このような状況にある時、中央部遺構群も「上ノ山Ⅱ集落の人々」が建設し占有したとすることを全く否定する明白な事実はないが、これまで述べてきたような理由によって、この中央部遺構群は単に「上ノ山Ⅱ集落」という１集落の占有の場ではなく、「上ノ山Ⅱ集落」をも含めたもっと大きな集団の共有の場であったと考えるのが現在のところ妥当と思われる。広場ではこの大きな集団が集結して行う種々の

祭祀・儀礼などが行なわれたであろうし、諸々の行事のない時には、「上ノ山Ⅱ集落」がこの場を管理したのであろう。

## 4　出土遺物について

上ノ山Ⅱ遺跡は出土遺物の豊富さ、質の高さにおいても特筆されるべきである。出土した土器は縄文時代前期大木4・5式を主体にし、これに円筒下層b式，大木式・円筒下層式の融合形態の土器が加わる。前期大木式土器の調査例、個体そのものは秋田のみならず東北地方全体においても非常に少なく、その意味においても、今回の上ノ山Ⅱ遺跡出土のこれらの土器は1つの基準資料足り得る豊富さである。定形的な剝片石器・礫石器及び石製品にも目を見張るものがある。剝片石器及び磨製石斧の中にはその石器の機能を推定する手懸かりの1つである使用痕のあるものが多く、それが量的な保障を持っているだけに、今後のこの分野での研究に寄与すること大であろう。また、石製品をも含めた石器の機能の推定ということでは、第3章に載せた上ノ山Ⅱ遺跡出土の残存脂肪の分析結果が大変に興味深い。これによれば、我々の興味の的であった燕尾形石製品は、「木の実割器としての機能を有していたかも知れない」ということであり、この他に石匙の一部には「食糧を加熱処理する際の用具」、篦状石器の一部は「動物蔵器等の剝離・破砕道具」としての推定もなされている。石刀・石剣・磨製石斧は、これが前期のものかと思わせ、縄文時代の石器・石製品の変遷を考える上で重要である。また、有撮石器、燕尾形石製品及びカツオブシ形石製品は、上ノ山Ⅱ遺跡で初めて名称を与えられた石器であり、今後の類例の増加などによって出自及び変遷が明らかにされるものであろう。

上ノ山Ⅱ遺跡は、前期大木式土器文化圏と円筒土器文化圏の接するライン（秋田市―田沢湖―盛岡市―宮古市を結ぶ線）近くに位置し、この位置的な特色は、特に遺物の上で強く反映されている。出土した大木式土器・円筒下層式土器の微細な点では、それぞれの中心部のものとは若干異なっており、どちらに属するとも言い難いような中間的な土器も多い。また、大木式土器優勢の中にあって、円筒土器文化が持つ特有な石器とも言われる半円状扁平打製石器が多く出土し、円筒土器文化の臭いを強く感じさせたりもしている。

以上、今回の上ノ山Ⅱ遺跡の発掘調査結果についてまとめたわけであるが、広場を囲む大型住居群が検出されたのは初めてのことであり(註7)、この成果のみでも、上ノ山Ⅱ遺跡は稀有な遺跡で、今後の縄文時代社会を研究する上で重要である。

それにしても、上ノ山Ⅱ遺跡は昭和56年の分布調査まではその存在すら知られていなかった遺跡である。縄文社会の有する多様な面を持つ遺跡が、我々の知らないところで数多く眠ったままになっているのであろう。

註1　広場の北東部から東側にかけては、数基の陥し穴状遺構が連なっているが、これらは中央部遺構群中の大型住居よりは明らかに新しい。従って広場は、配石遺構以外には遺構がなく、遺物も極く少ない場となっている。

註2　上ノ山Ⅱ遺跡における遺物の廃棄のあり方には、3つの形態がある。1つはほとんどの遺構と重ならないように投棄の場所を定めている形態で、これが南西及び南側の斜面（捨場A）である。2つめは、廃棄された竪穴住居跡などの凹んだ部分に集中的に投棄する形態であり、中央部遺構群の西～北西～北側に見られる（捨場B）。3つめは、特に場所を決めずに、ほとんどの場合1個の破片などが単独で捨てられるものである。

註3　竪穴住居跡の床面の堅さについて、これまでの発掘経験からいうと、地山を掘り下げ床面としている場合、床面はかつての農家の土間のように十分に堅いのに対し、床面が地山より上の黒色土あるいは漸移層中に存在し粘質土等で貼床をしていない場合、床面の確認が困難なほどに周囲の土と堅さが変わらない。これは、黒色土を床面とした場合に十分に踏み固められなかったと考えるよりは、地山を踏み固めた場合と黒色土を踏み固めた場合では、その風化の度合が全く異なることを示すのではなかろうか。

註4　この場合の炉としての焼土は、小林達雄氏のいうように、「床面が火熱で赤化するほどではなかった」か、あるいは赤化したとしてもそれが著しくなかったことによるのかもしれない。

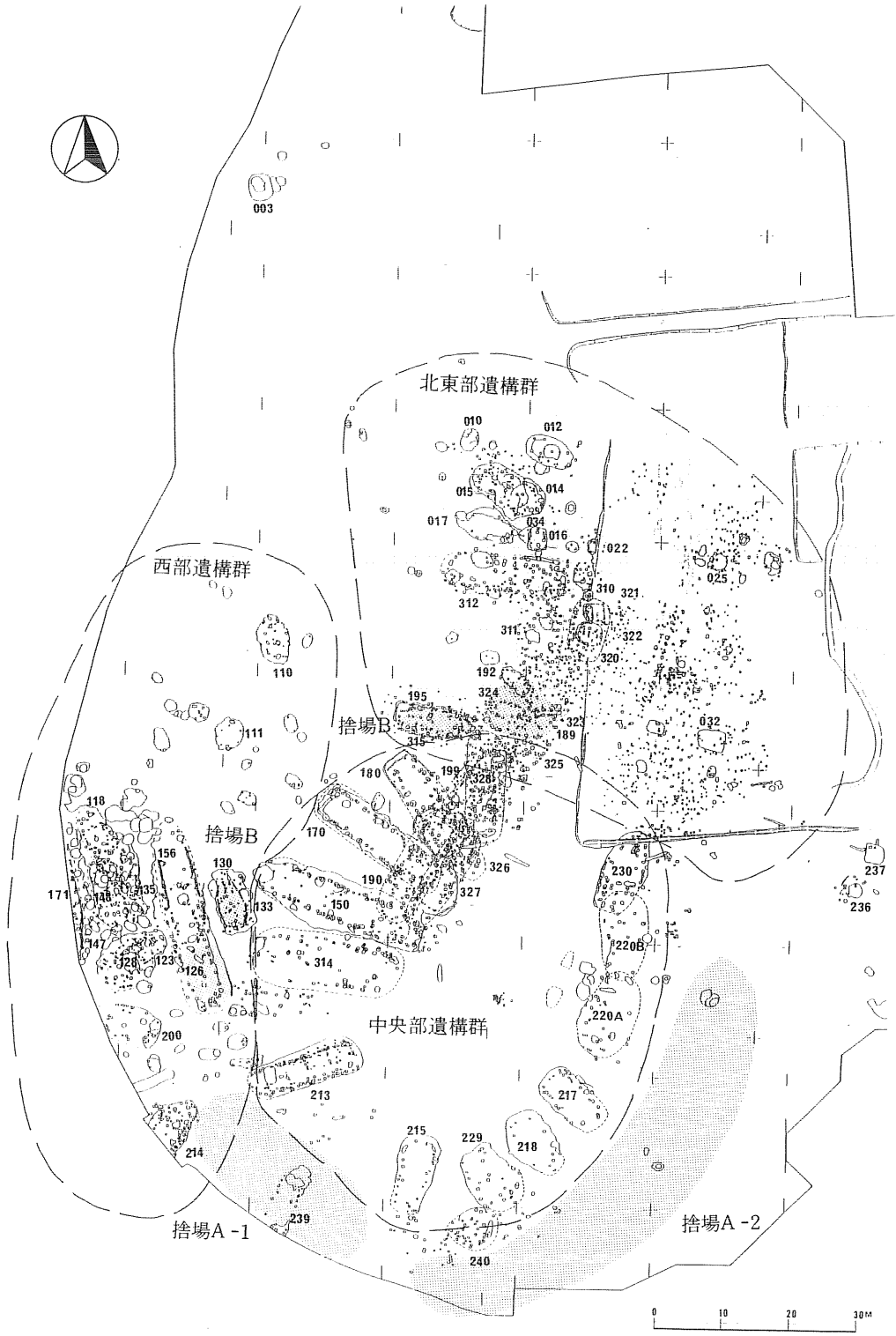
小林達雄「原始集落」『岩波講座　日本考古学4　集落と祭祀』岩波書店　1986（昭和61年）

註5　秋田県杉沢台遺跡　岩手県上里遺跡・同鳩岡崎遺跡など。

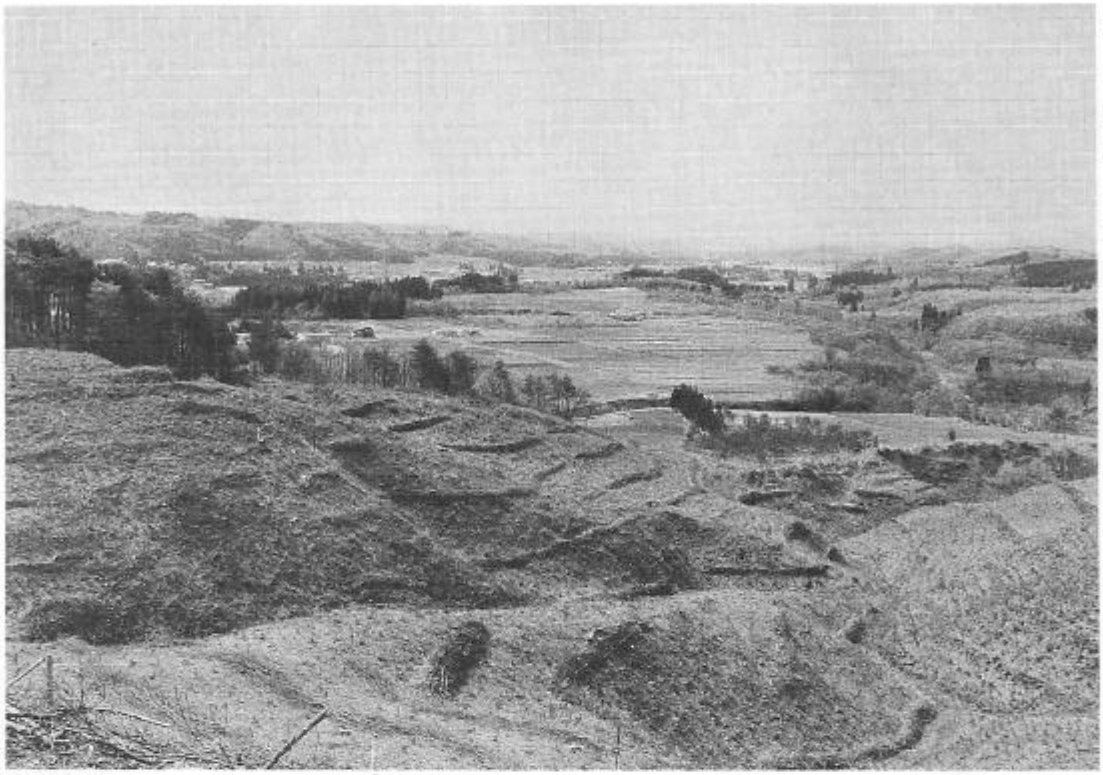
註6　SI 156の埋土は、人為的な堆積を示さず、ほとんどが自然堆積であり、その埋土中にも遺物の混入は少なかった。また、検出時には小さな沢状の窪みとなっており、いわば埋まりきっていなかった。このようなことから、SI 156は上ノ山Ⅱ遺跡の住居跡の中では最も新しいものの1つであると考えられている。

註7　縄文時代前期段階で、すでに広場を囲むように大型住居あるいは大型建物が配列された例として、最近公にされた栃木県宇都宮市聖山公園遺跡がある。大型の建物の形態・広場内に土壙墓群が存在するなど上ノ山Ⅱ遺跡とは細部では異なっているものの、同時存在した数遺跡をある部分では統括するような遺跡の存在したことを示す類例である。

宇都宮市教育委員会『聖山公園遺跡　縄文前期集落跡　遺跡見学会資料』1987（昭和62年）

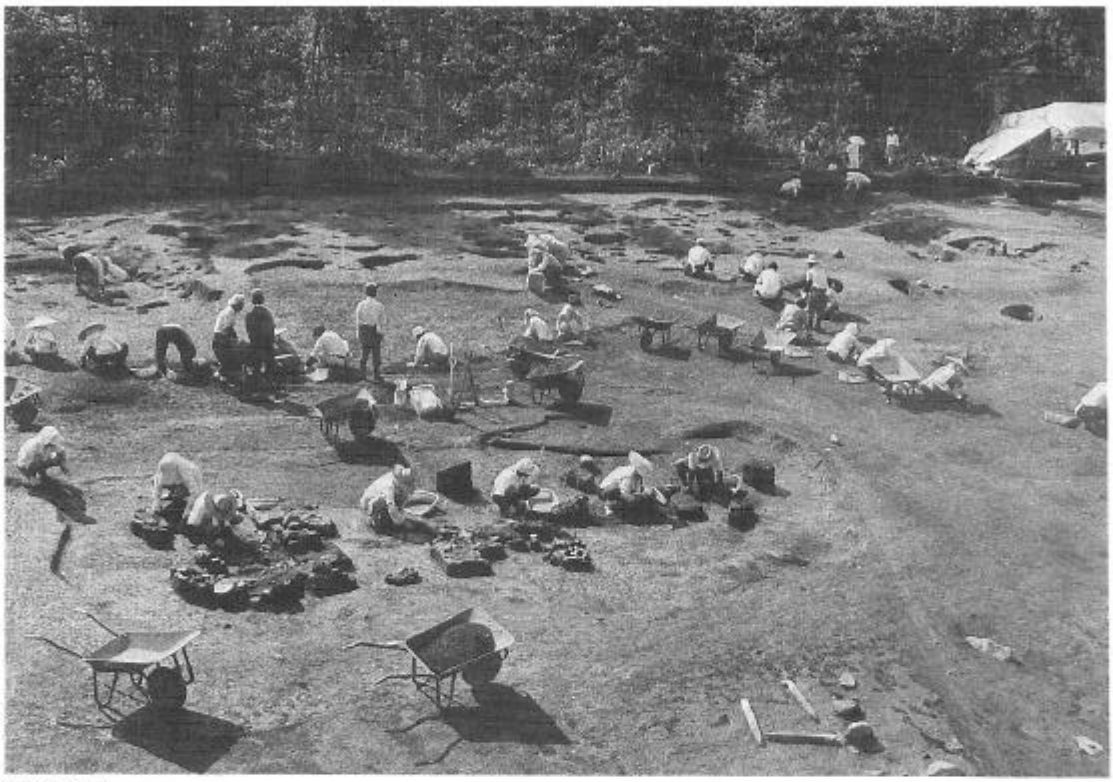



第283図　遺構群と捨場の位置



遺跡全景

調査前の状況

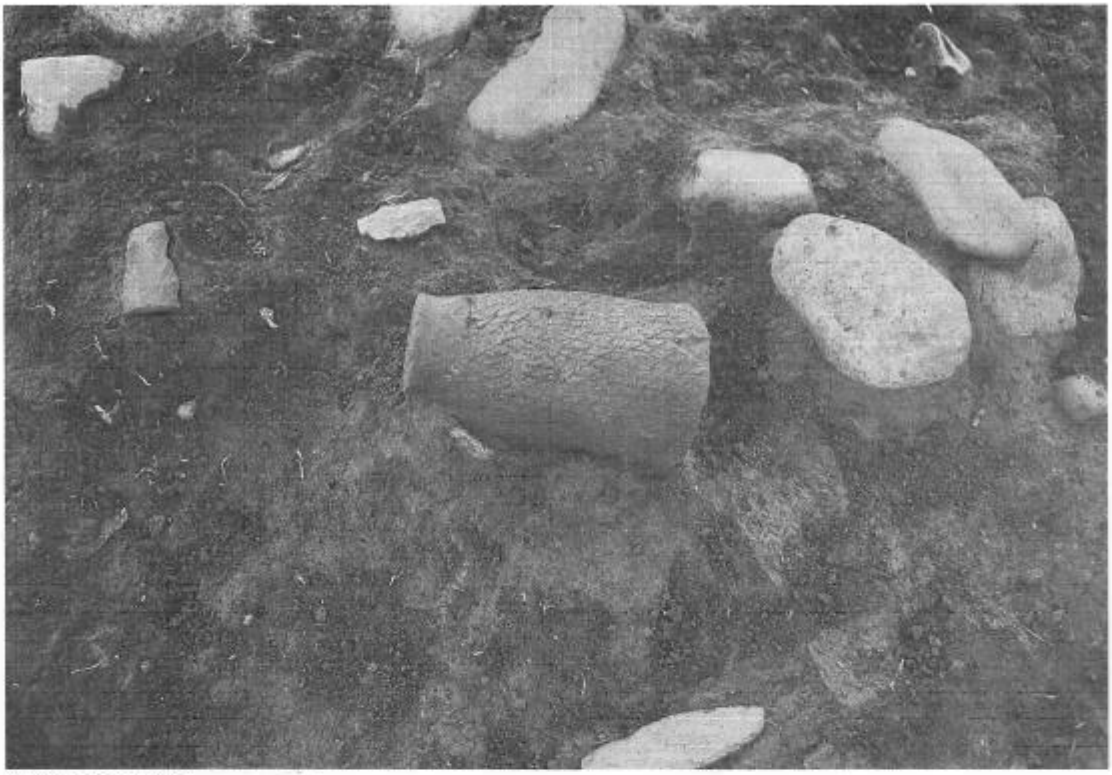


調査風景

調査風景

遺物の出土状況

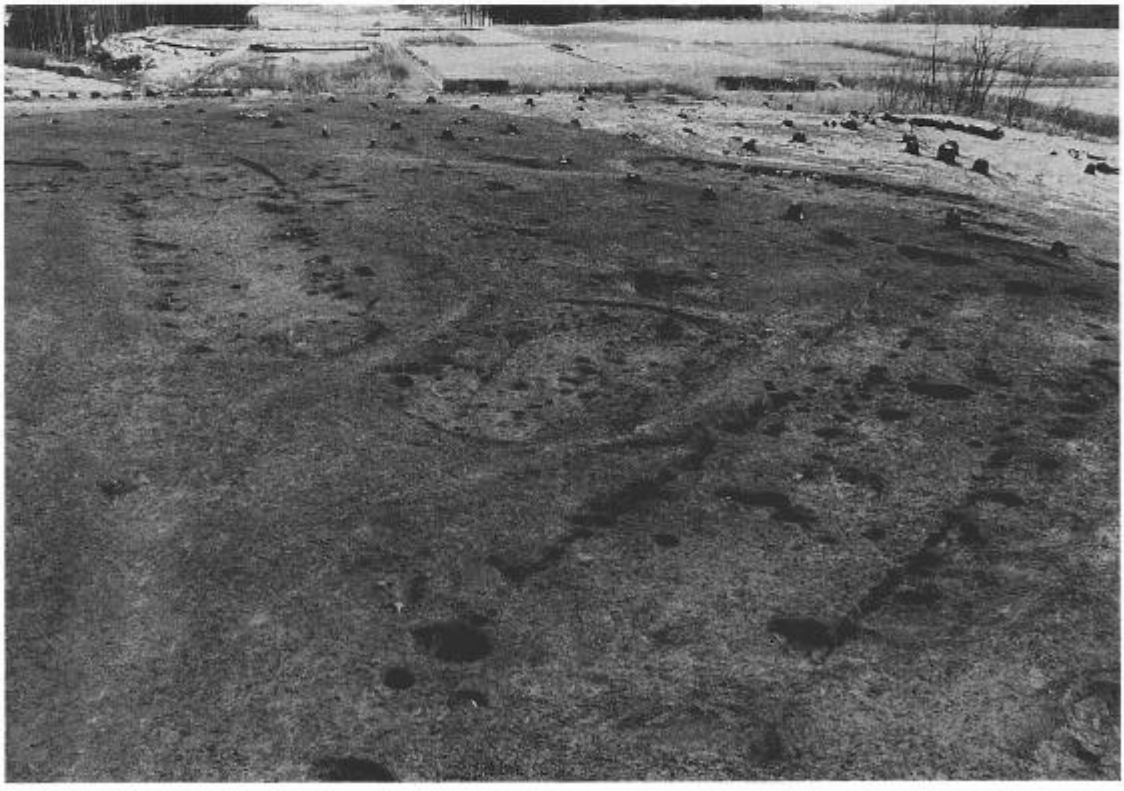
遺物の出土状況



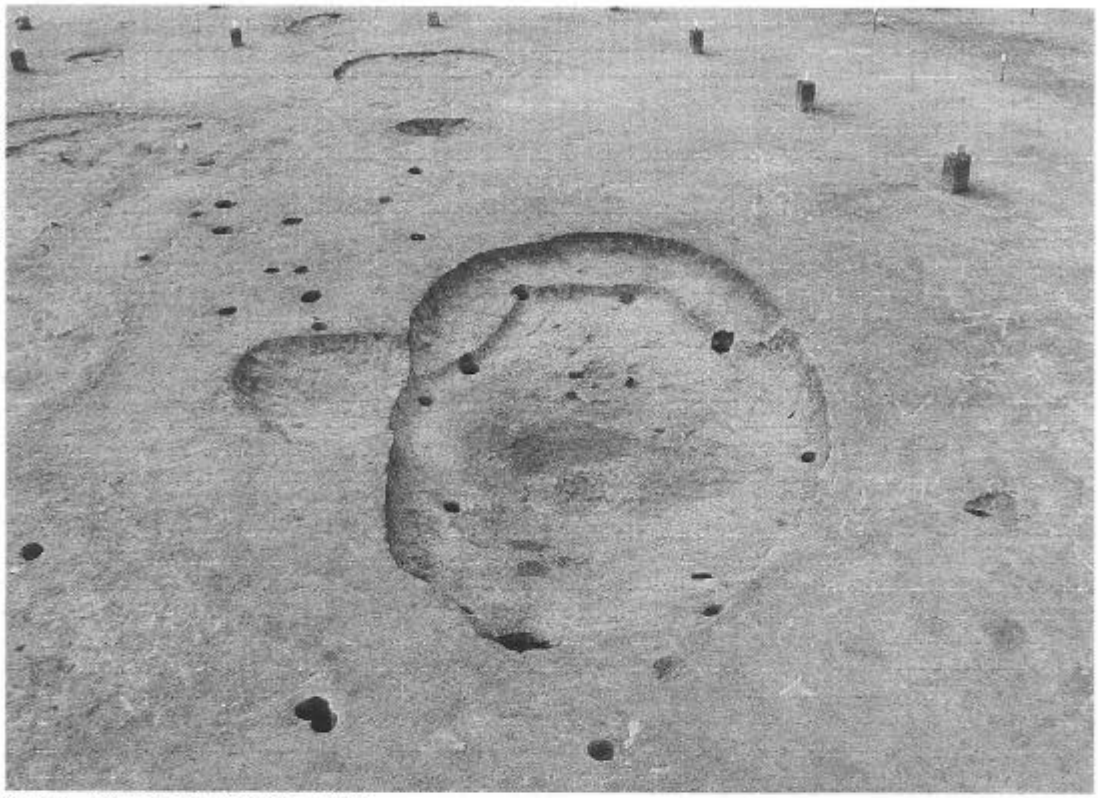
遺物の出土状況

遺物の出土状況

竪穴住居跡配置状況（1）（北西▶南東）

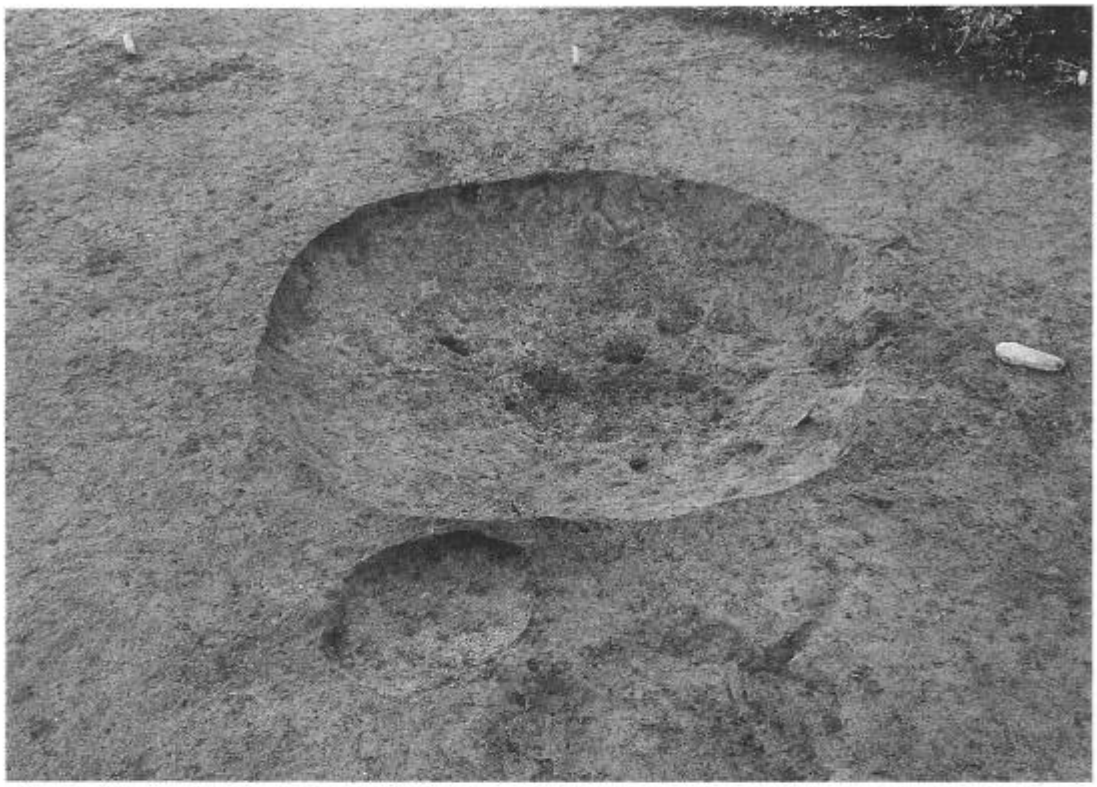


竪穴住居跡配置状況（2）（北西▶南東）

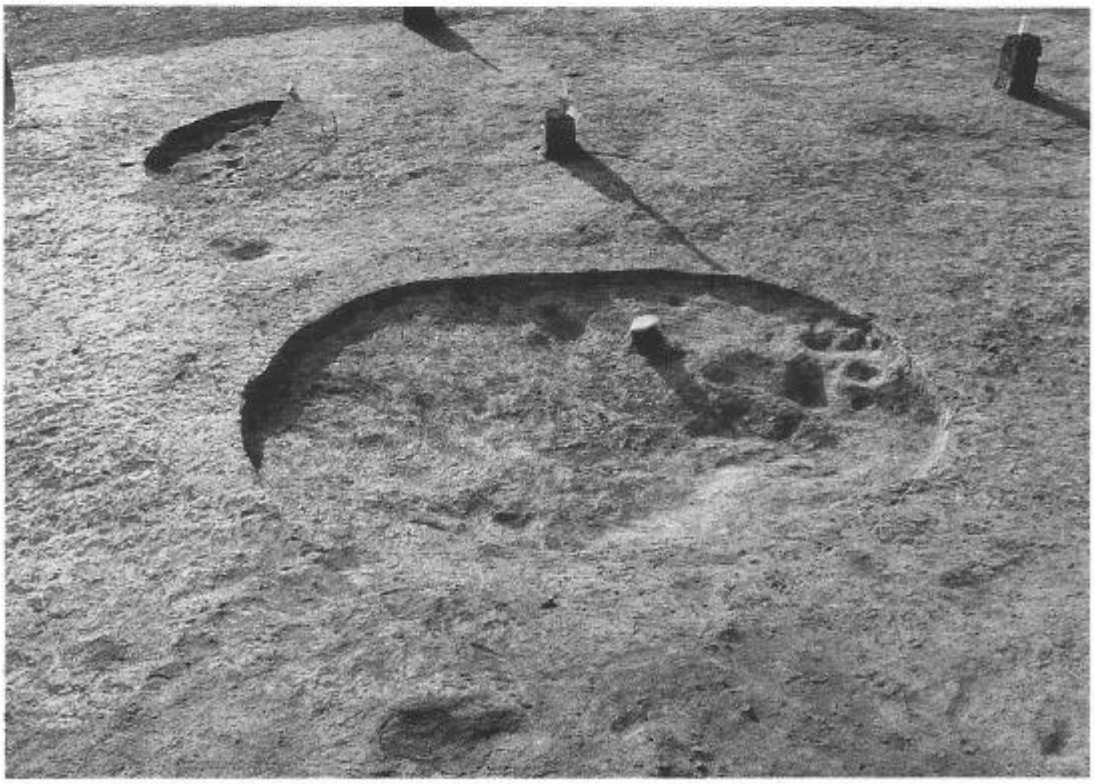


SI012　完掘状況（南東▶北西）

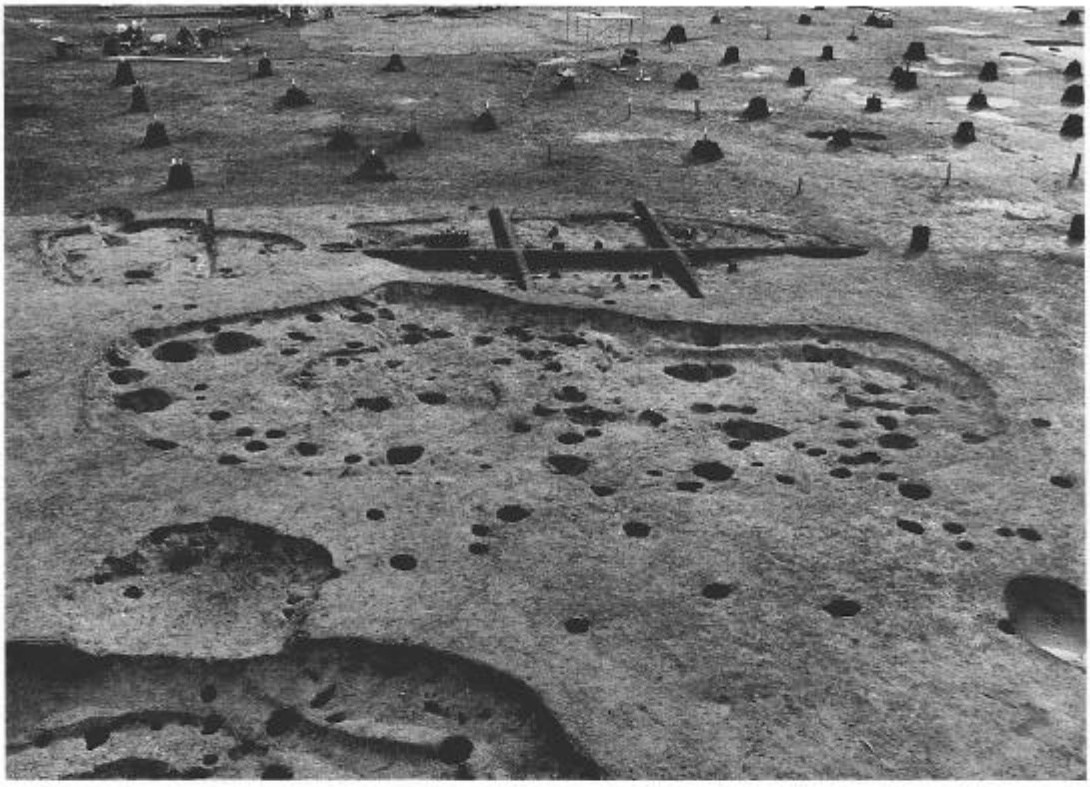
SI012・037　完掘状況（北東▶南西）



SI003　完掘状況（東▶西）

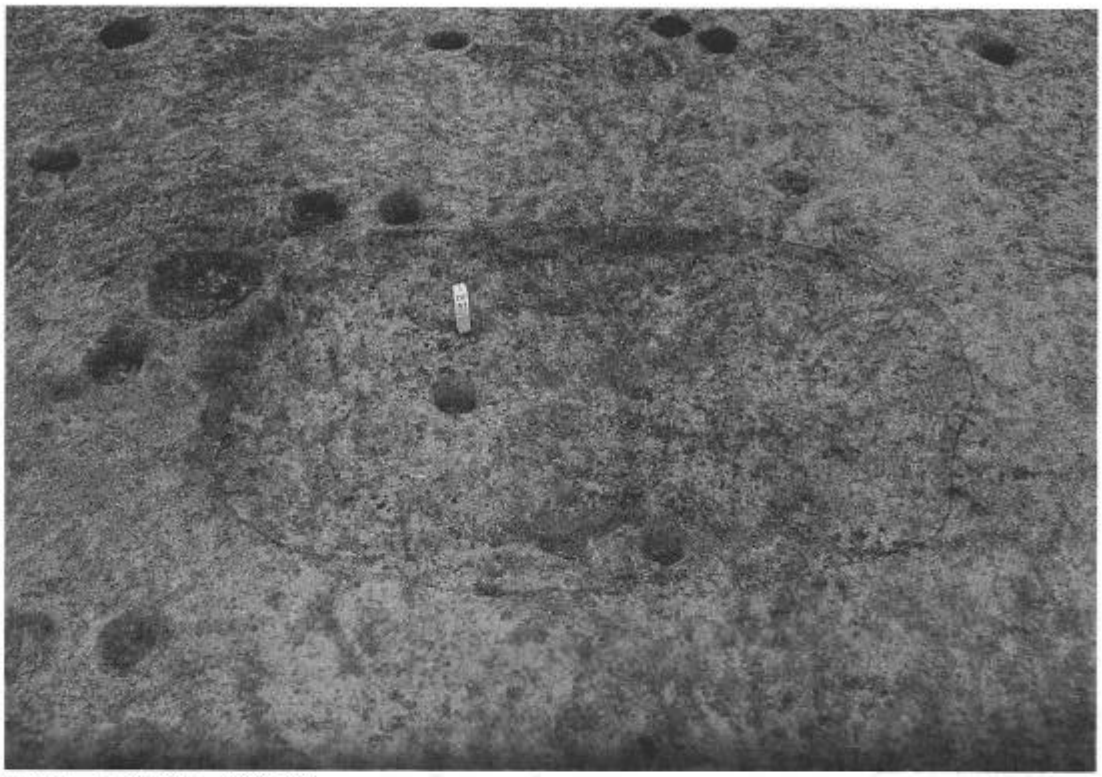


SI010　完掘状況（東▶西）

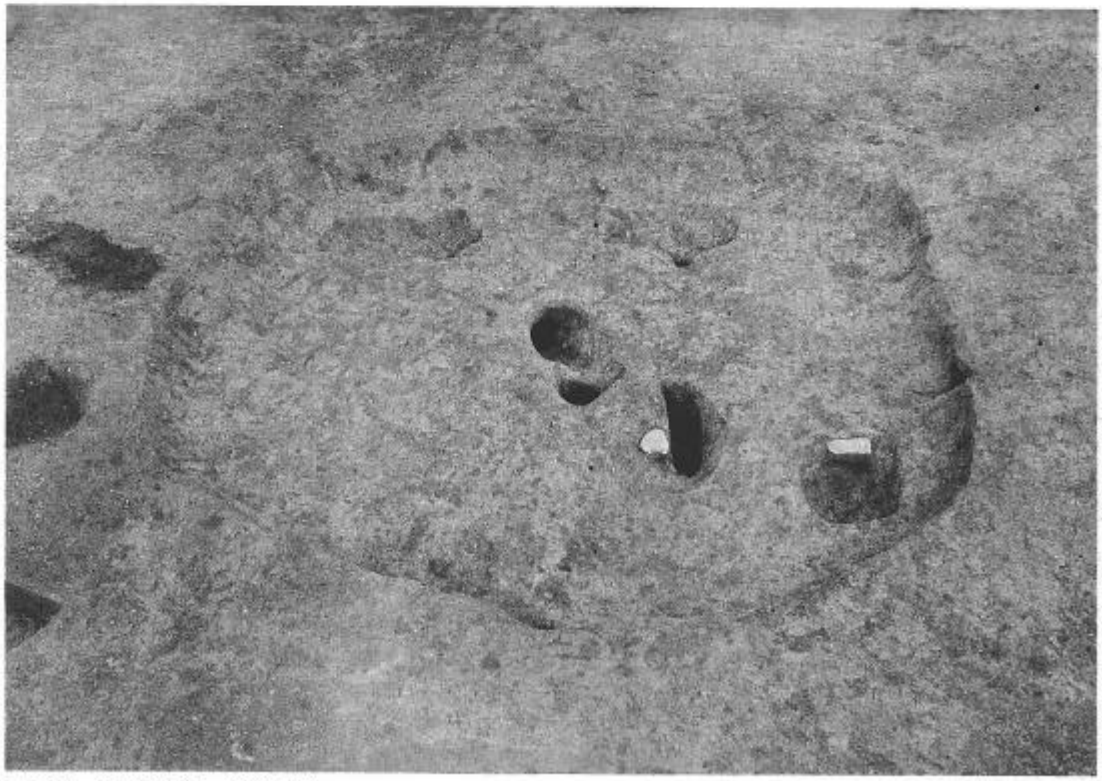


SI014・015　完掘状況（北東▶南西）

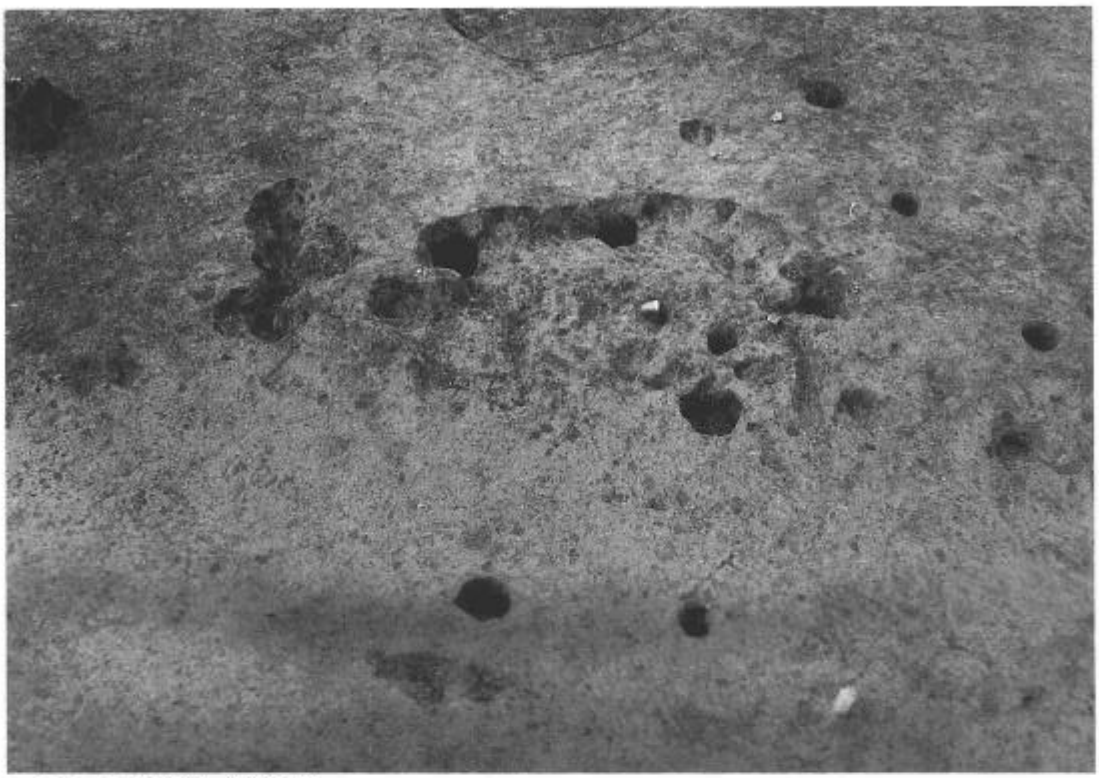
SI014・015　完掘状況（南東▶北西）



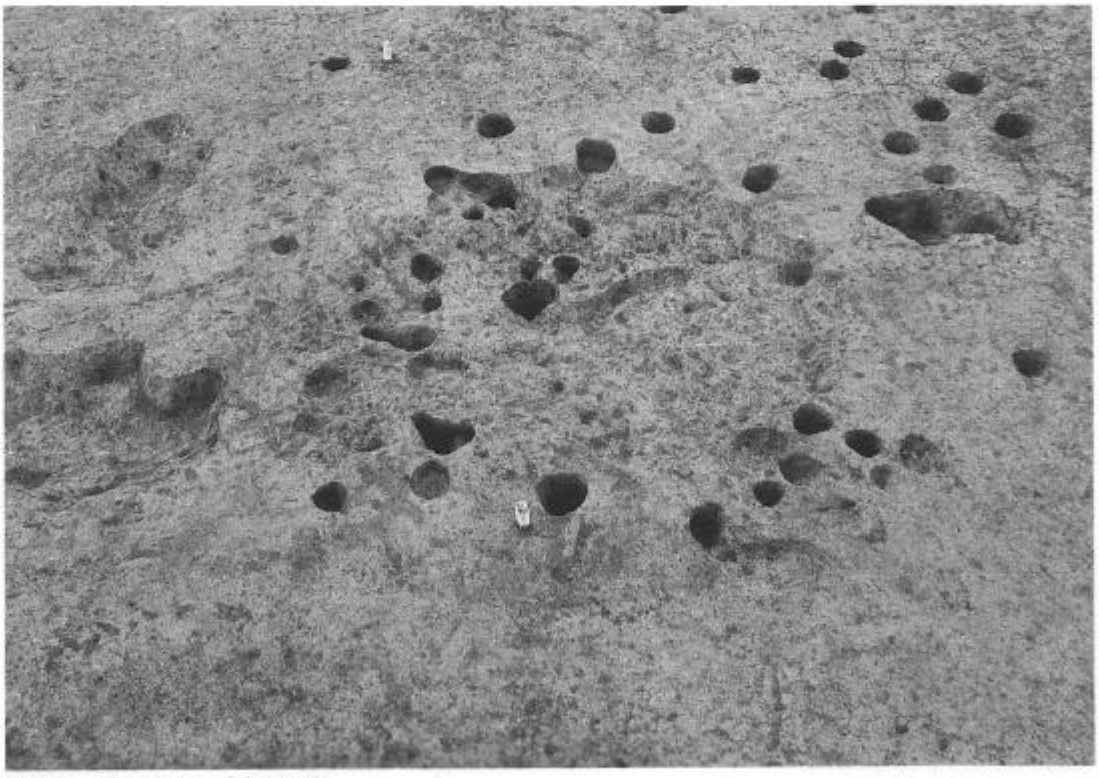
SI 031　完掘状況（北▶南）



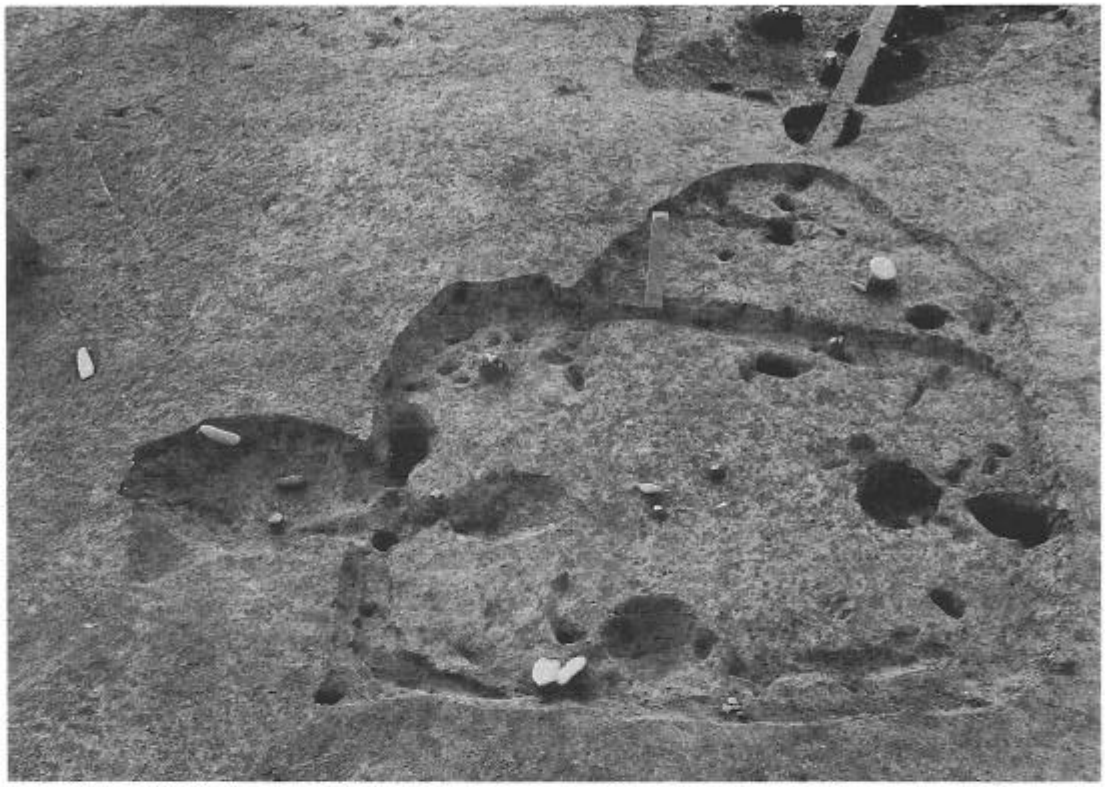
SI 107　完掘状況（南▶北）



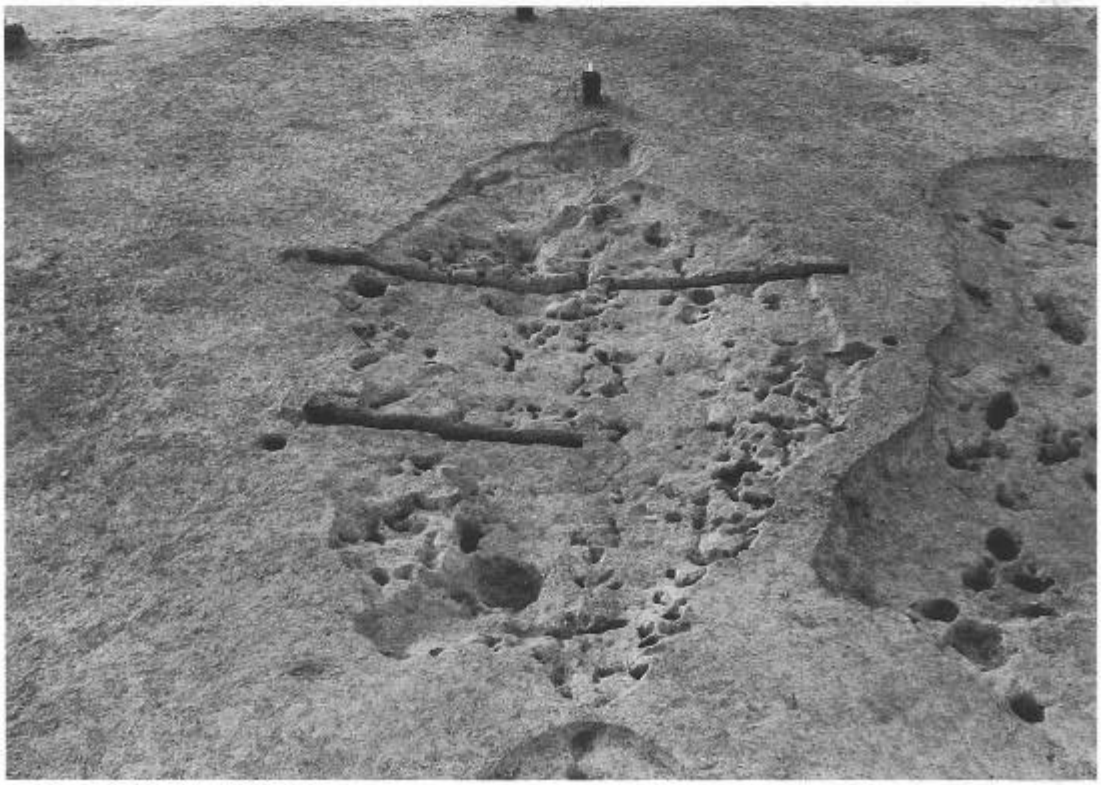
SI022　完掘状況（東▶西）



SI025　完掘状況（東▶西）

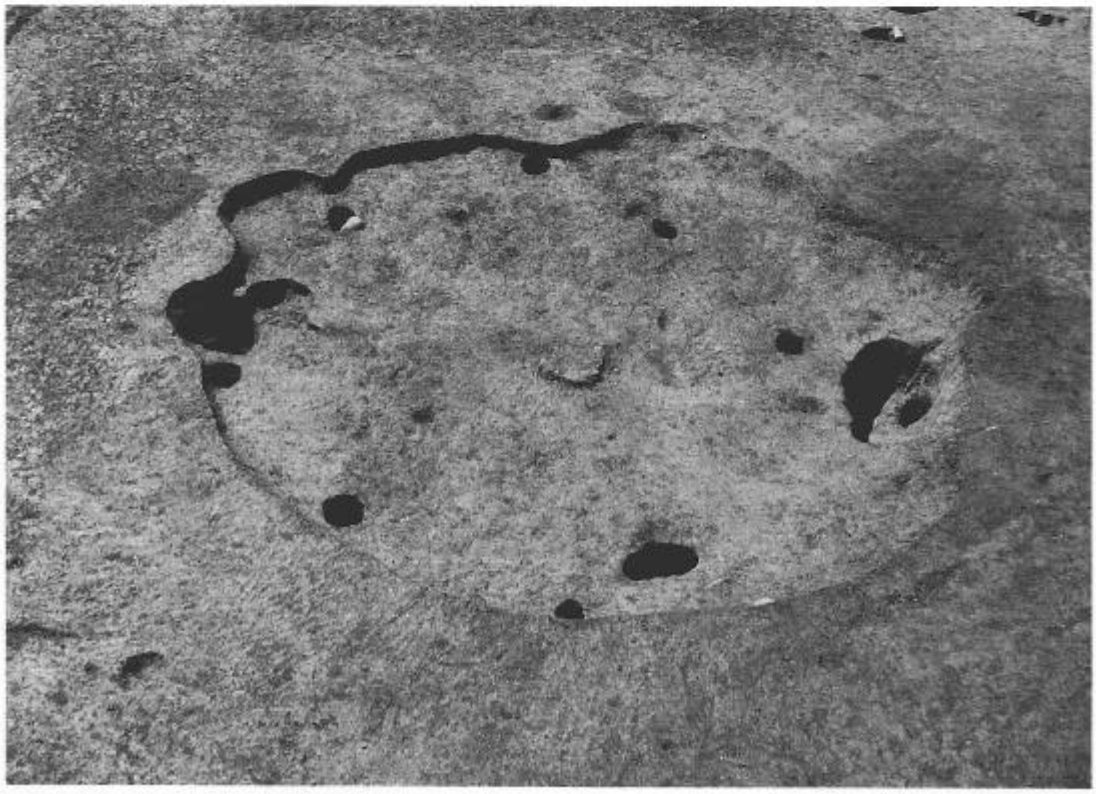


SI016・034　完掘状況（東▶西）

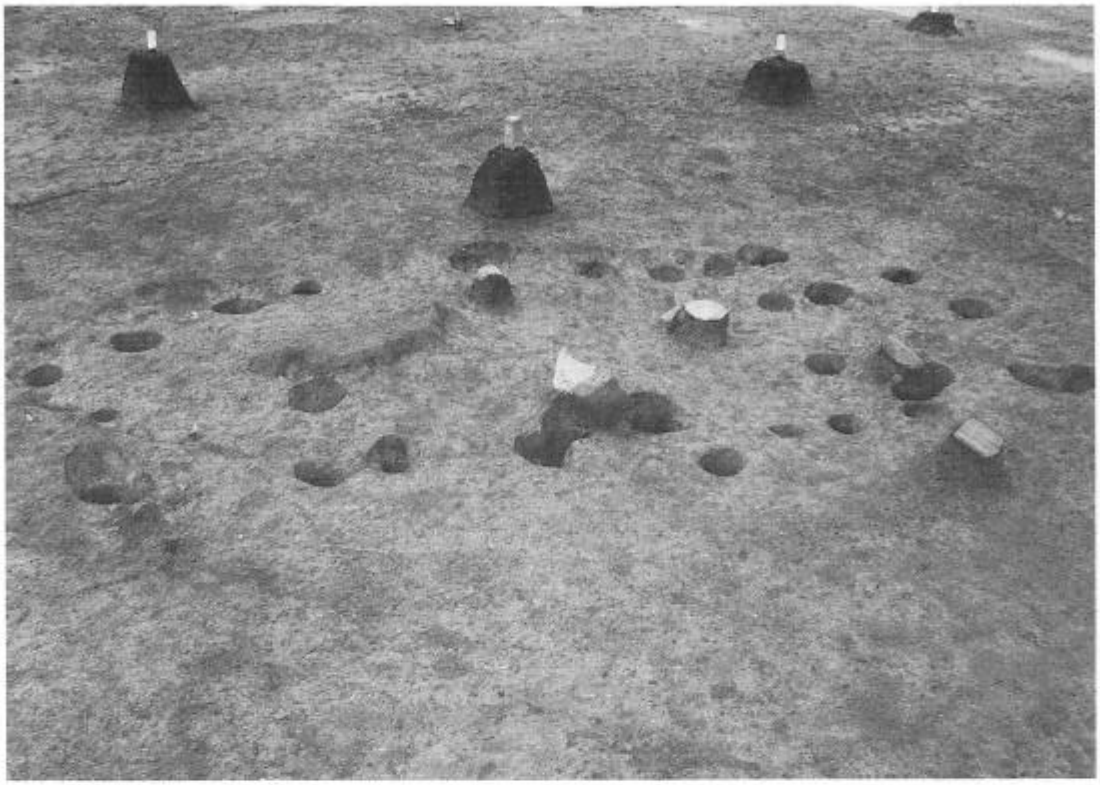


SI017　完掘状況（東▶西）

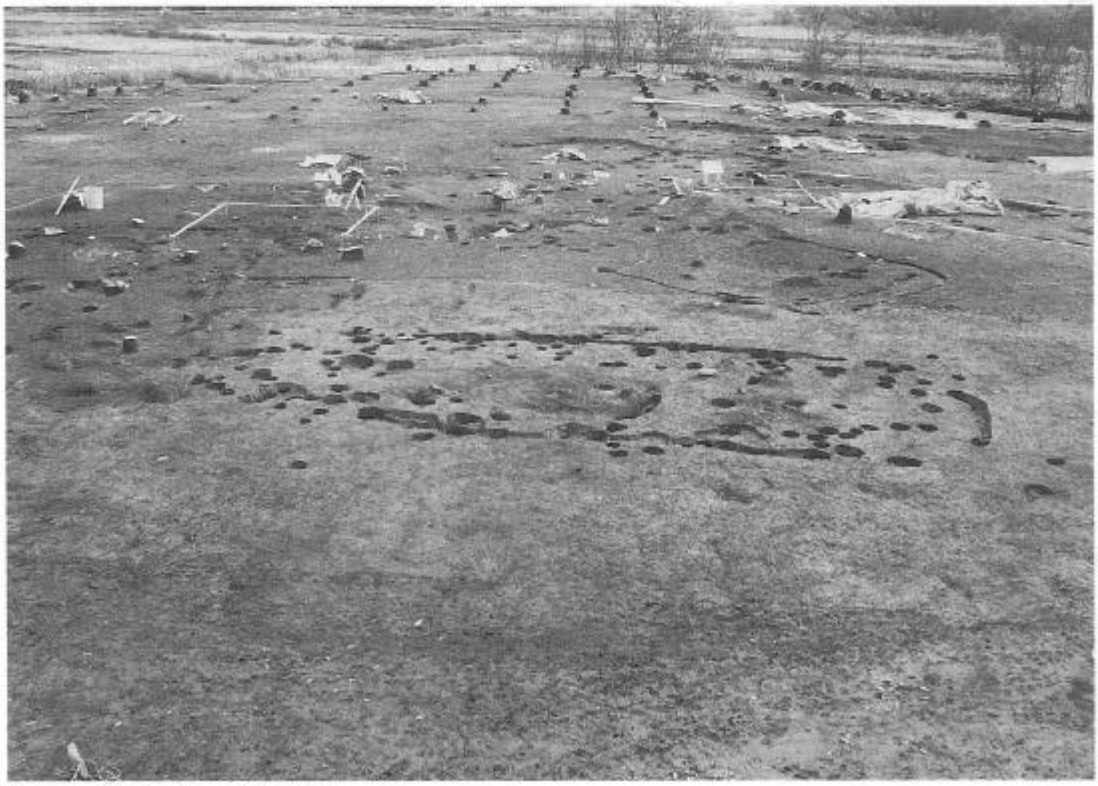
SI110　完掘状況（東▶西）



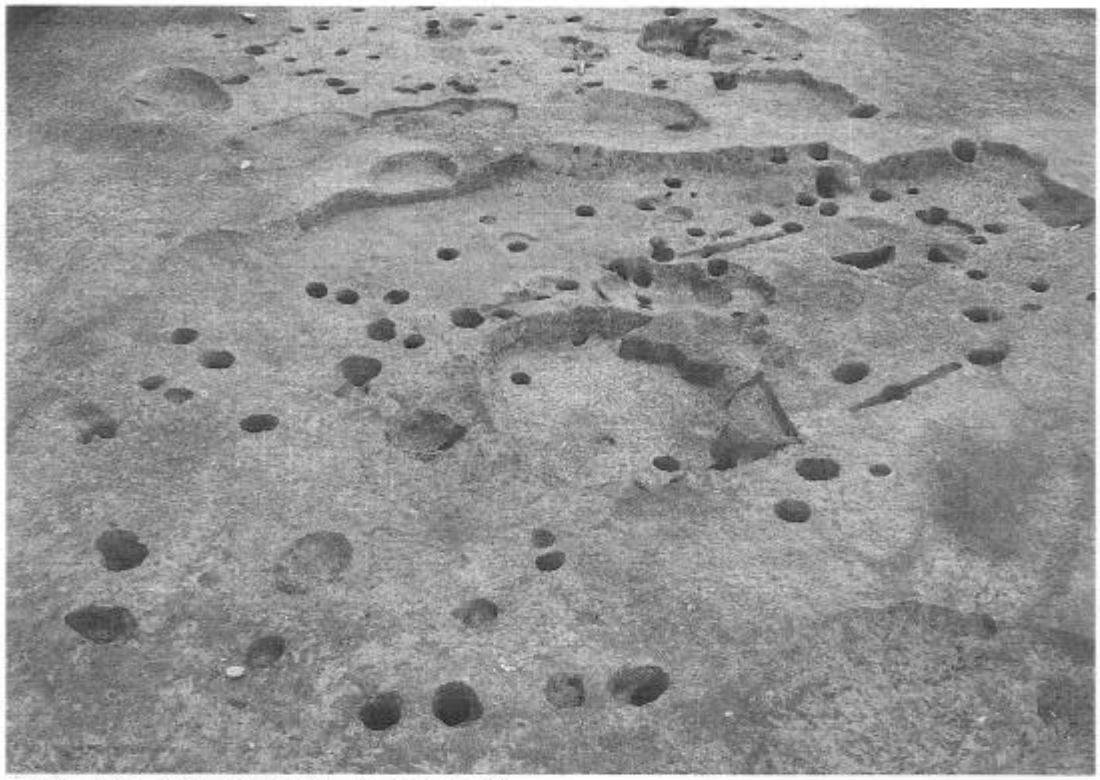
SI111　完掘状況（東▶西）



SI192　完掘状況（南西▶北東）



SI195　完掘状況（北▶南）

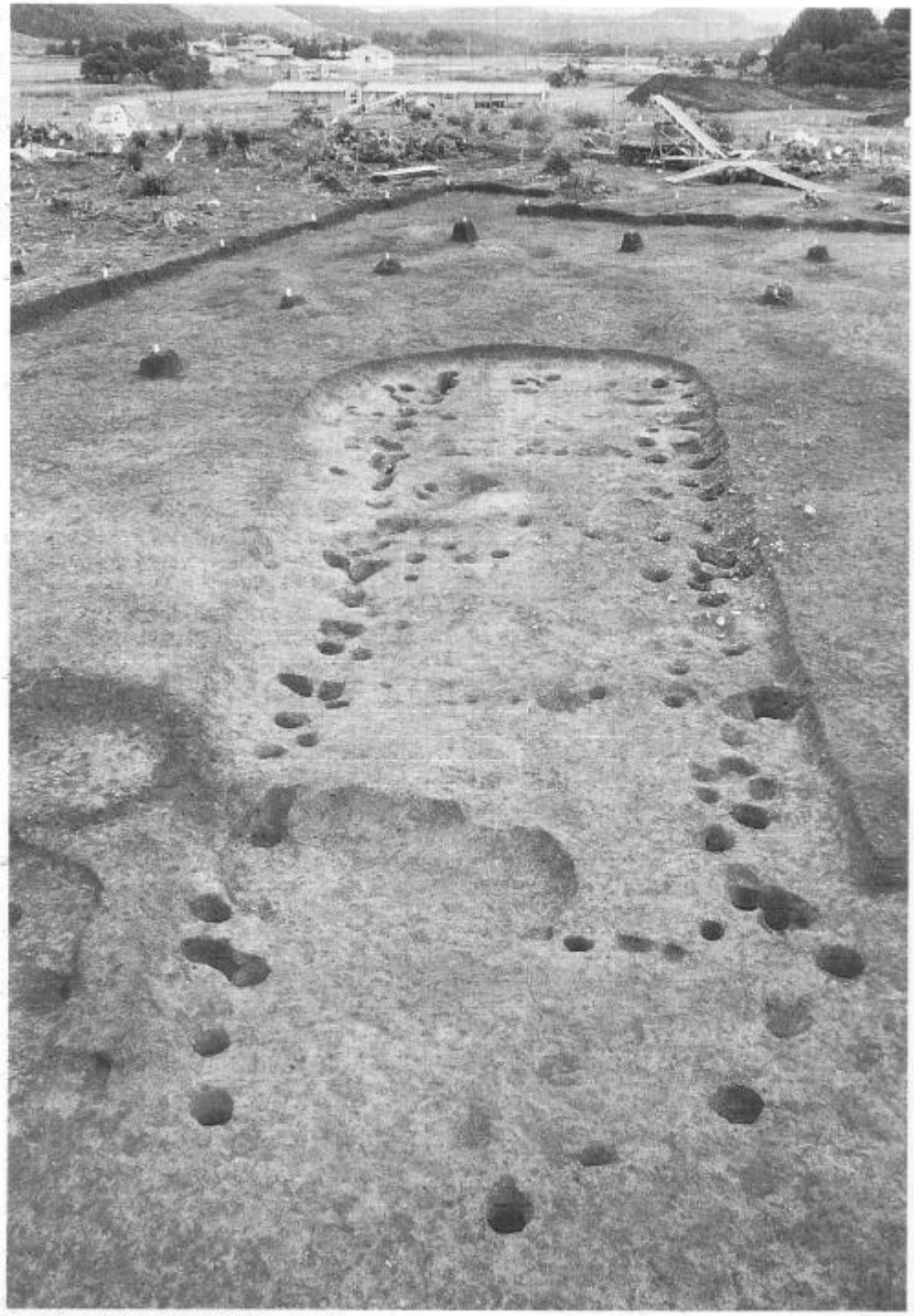


SI123・128・147　完掘状況（南東▶北西）

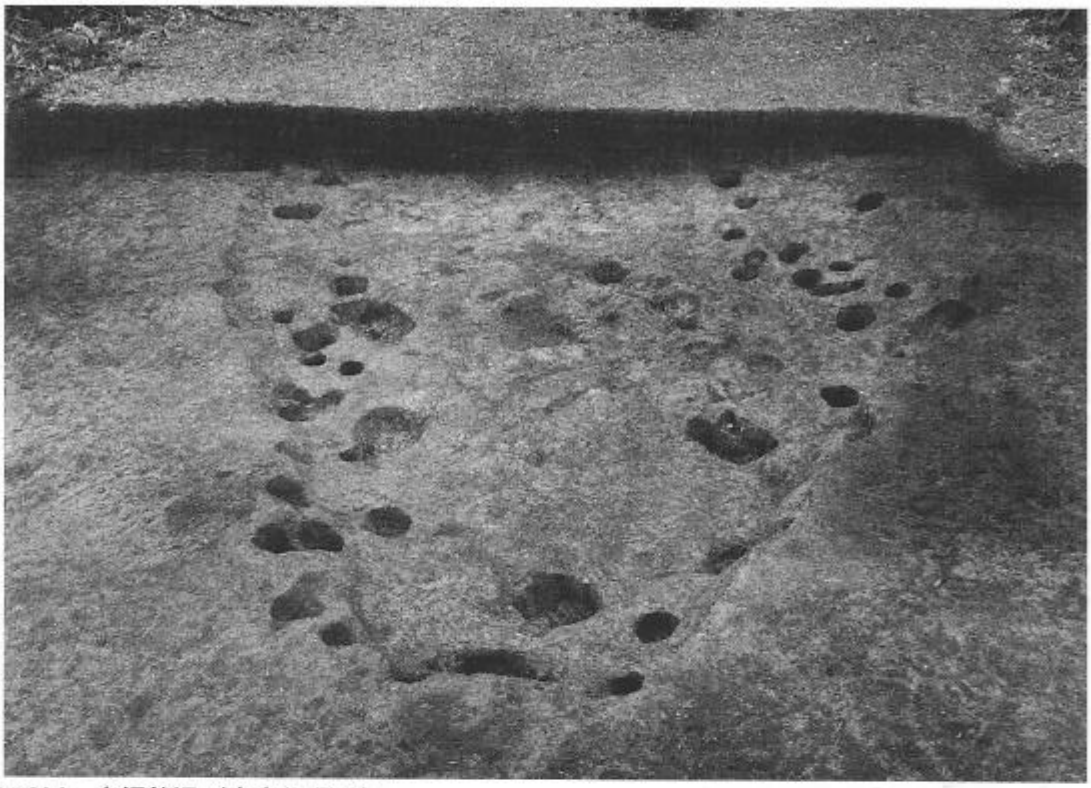
SI118・123・128・147・148　完掘状況（南東▶北西）

SI200　完掘状況（1）（東▶西）

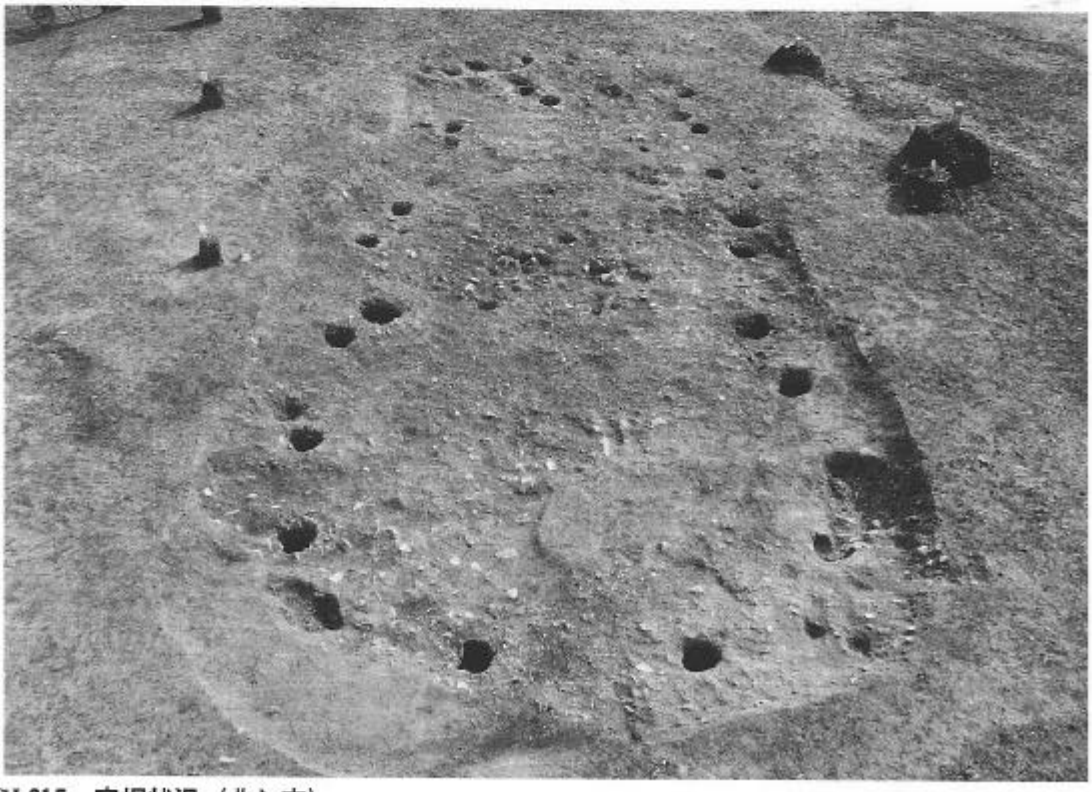
SI200　完掘状況（2）（西▶東）



SI 213　完掘状況（南西▶北東）



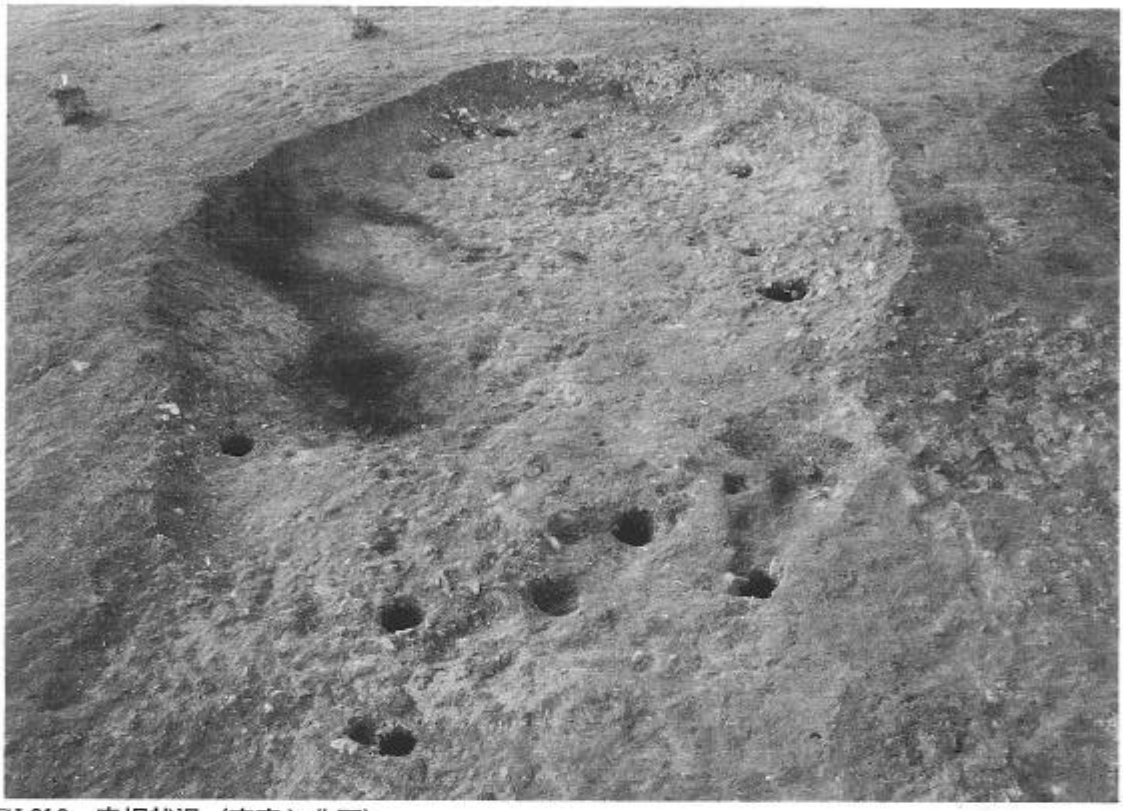
SI 214　完掘状況（南東▶北西）



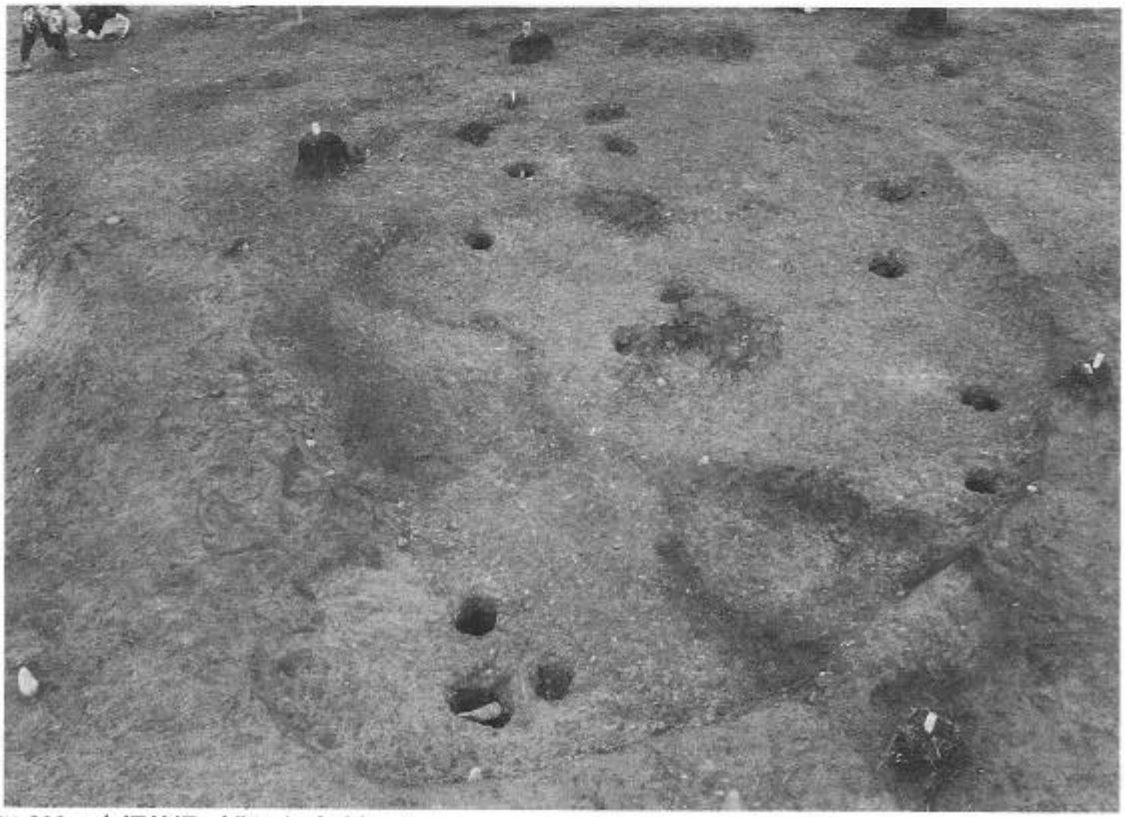
SI 215　完掘状況（北▶南）

SI217　完掘状況（北西▶南東）

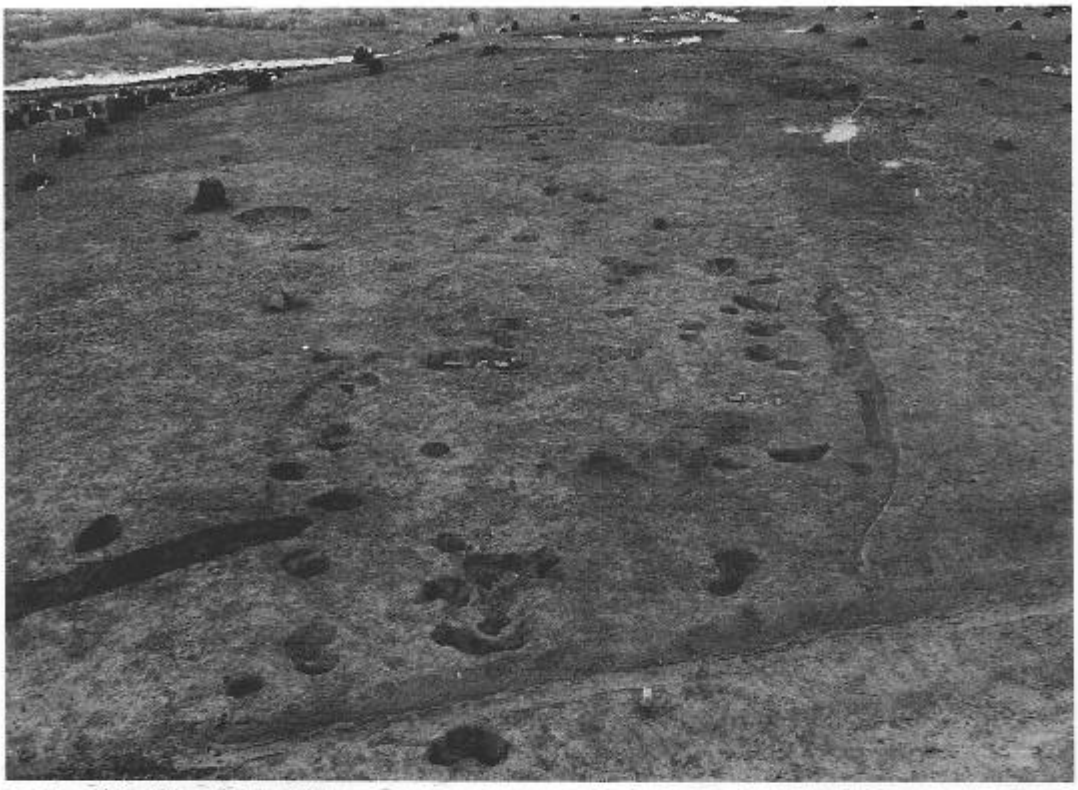
SI217・218・229　完掘状況（北東▶南西）



SI 218　完掘状況（南東▶北西）

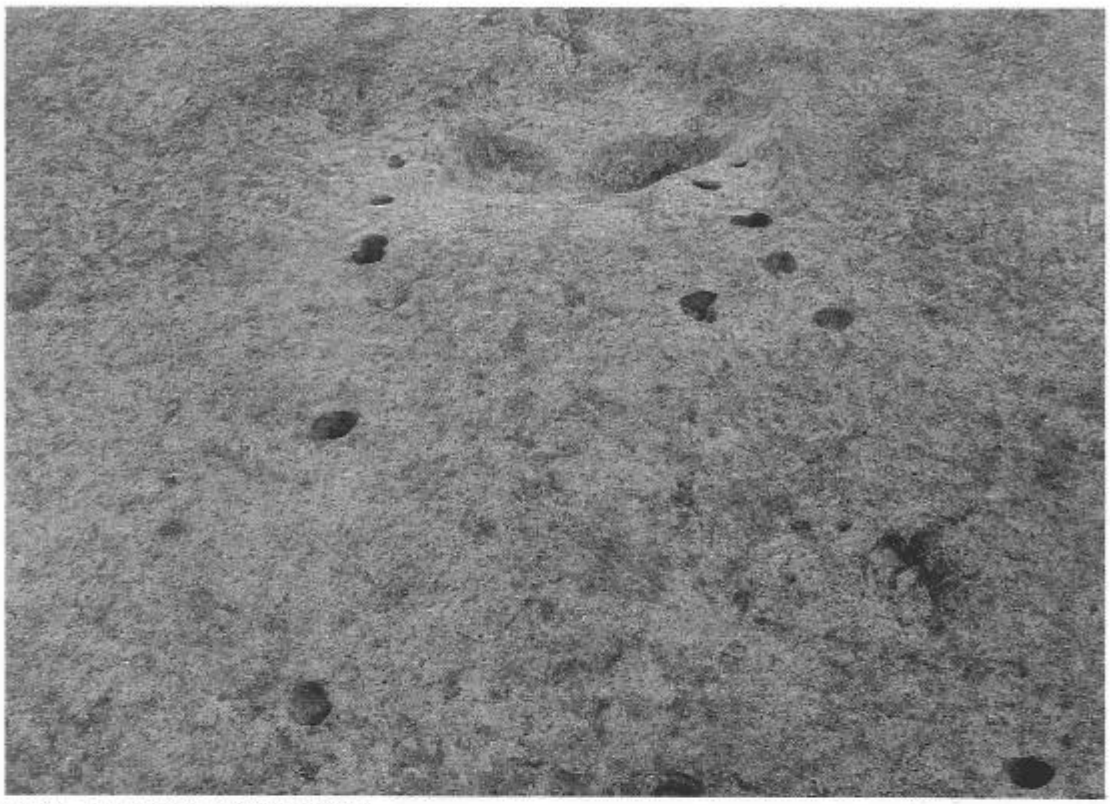


SI 229　完掘状況（北西▶南東）



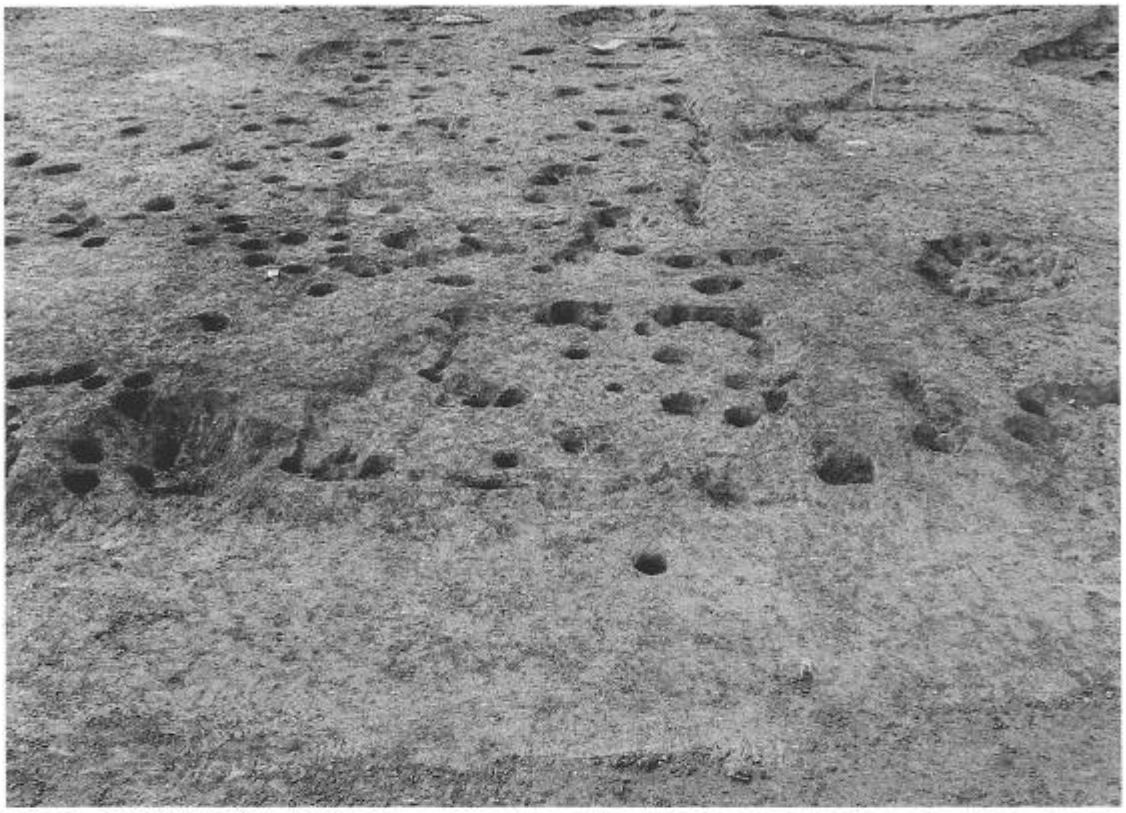
SI230　完掘状況（北▶南）

SI237　完掘状況（東▶西）



SI 239　完掘状況（南西▶北東）

SI 240　完掘状況（西▶東）



SI 310　完掘状況（東▶西）

SI 312　完掘状況（西▶東）

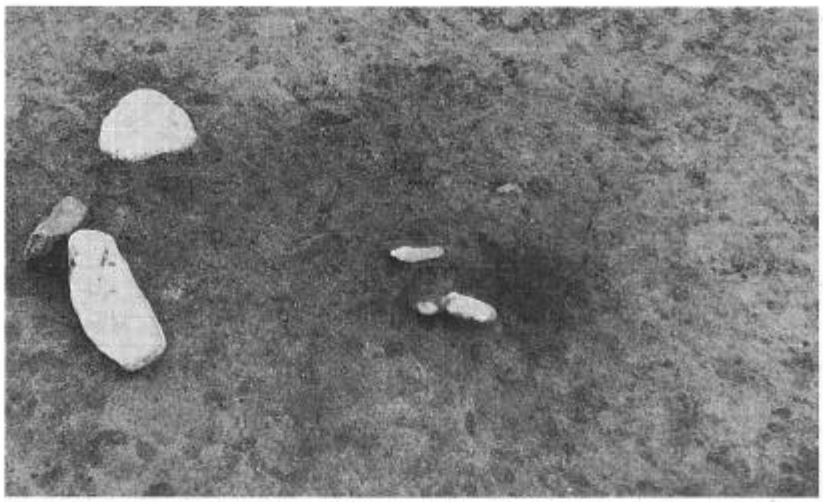
SI320・321・322　完掘状況（東▶西）

雪中の住居跡

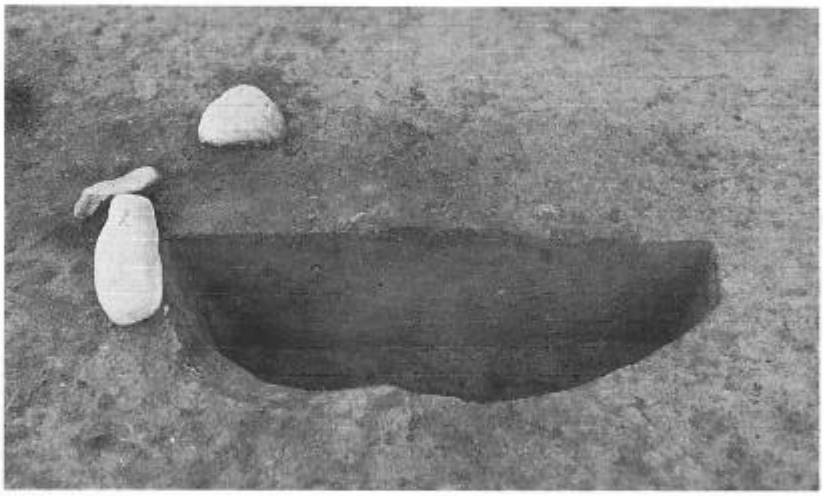
SK002　土坑

SK020　土坑

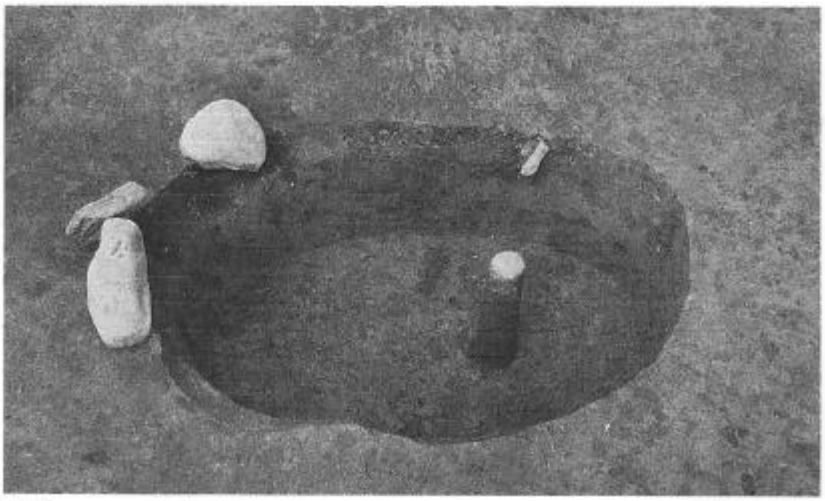
SK100　土坑



SK101　土坑

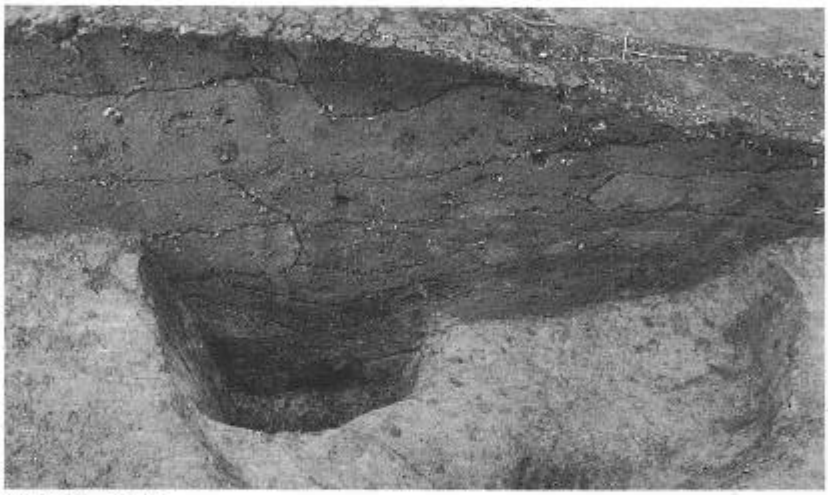


同上

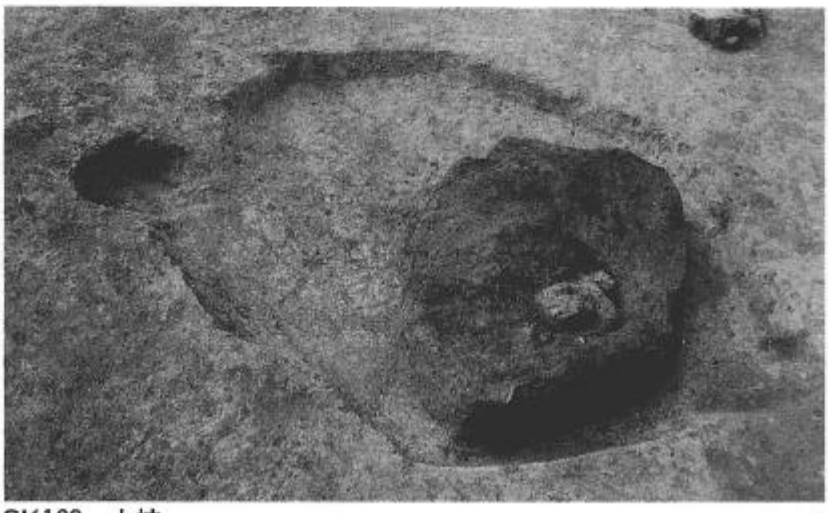


同上

SK106・109　土坑

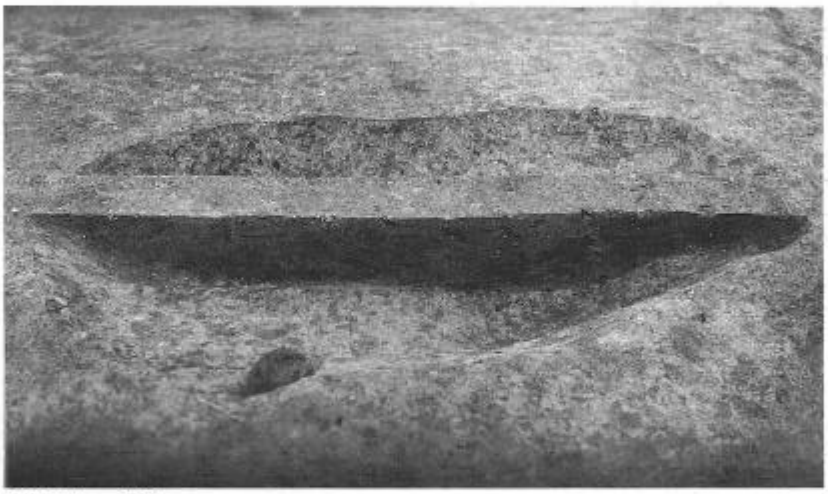


SK117　土坑

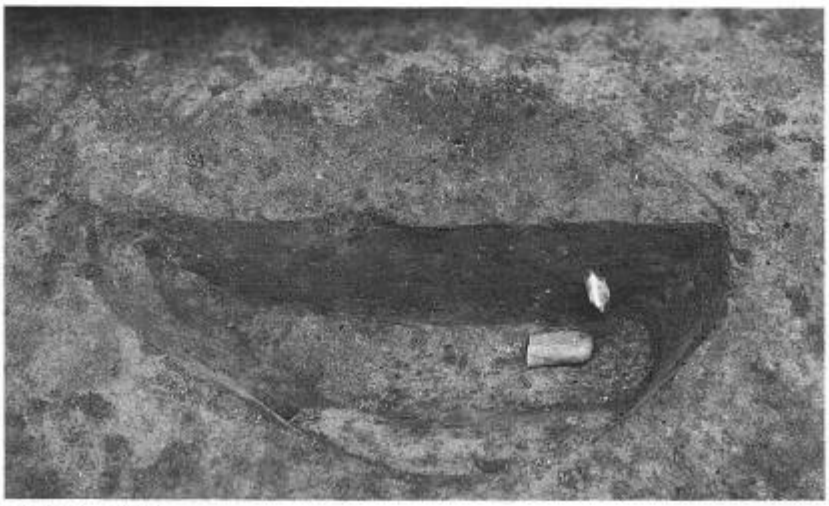


SK120　土坑

SK124　土坑

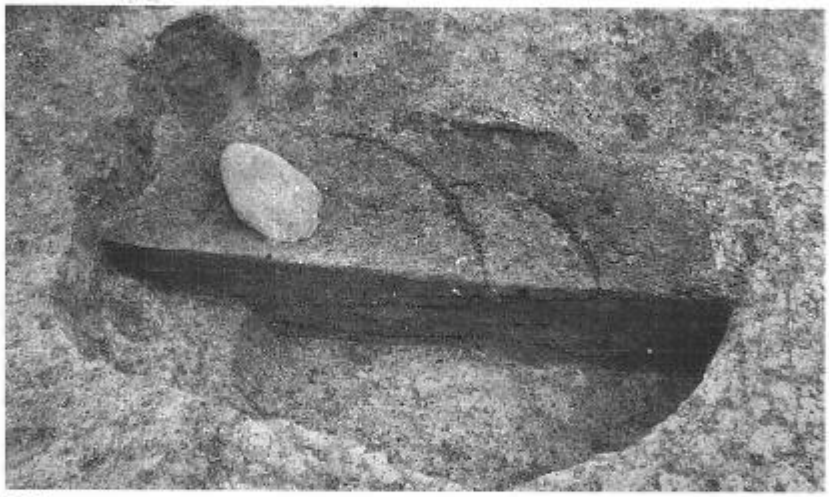


SK127　土坑



SK134　土坑

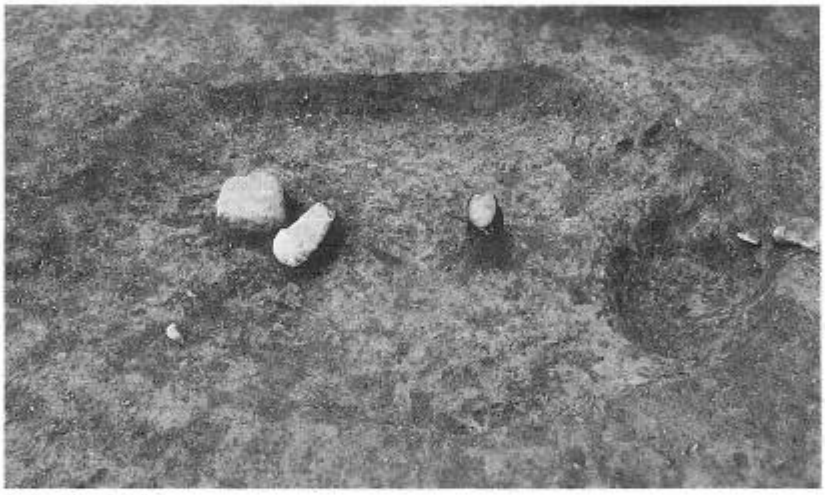
SK136・139　土坑



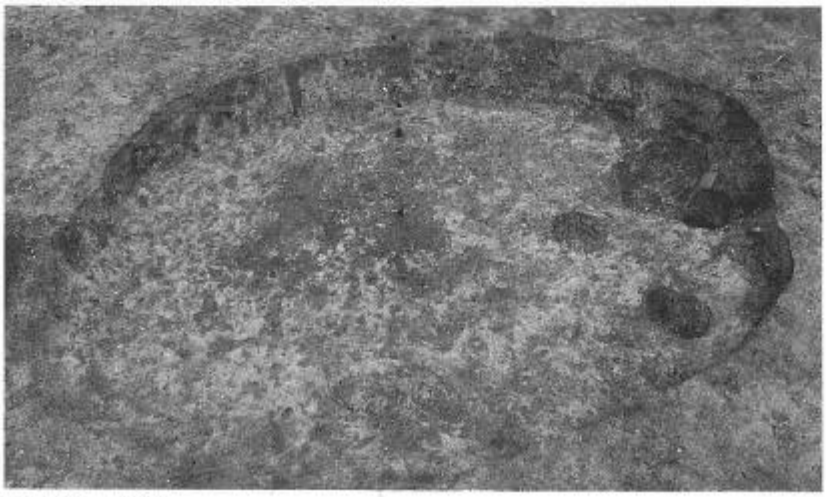
同上

同上

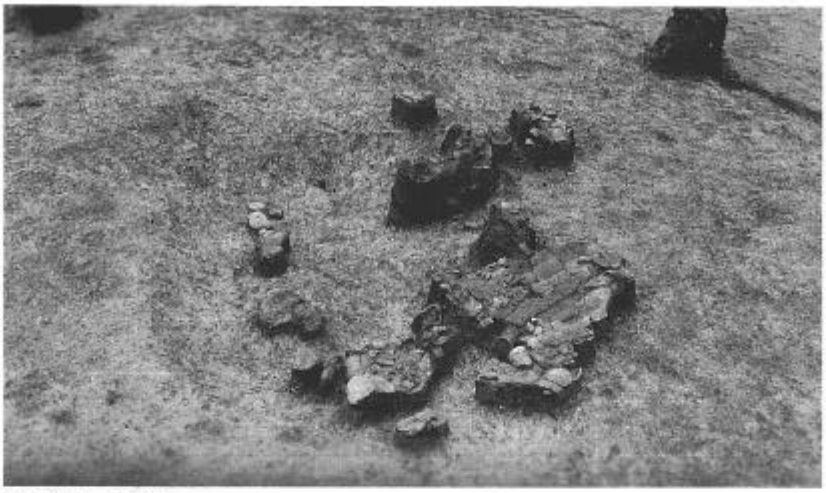
SK142　土坑



SK206　土坑



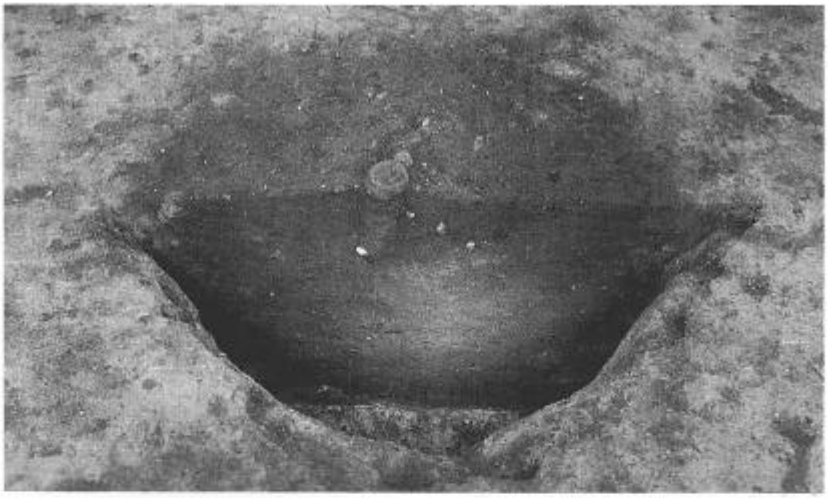
SK207　土坑



SK224　土坑

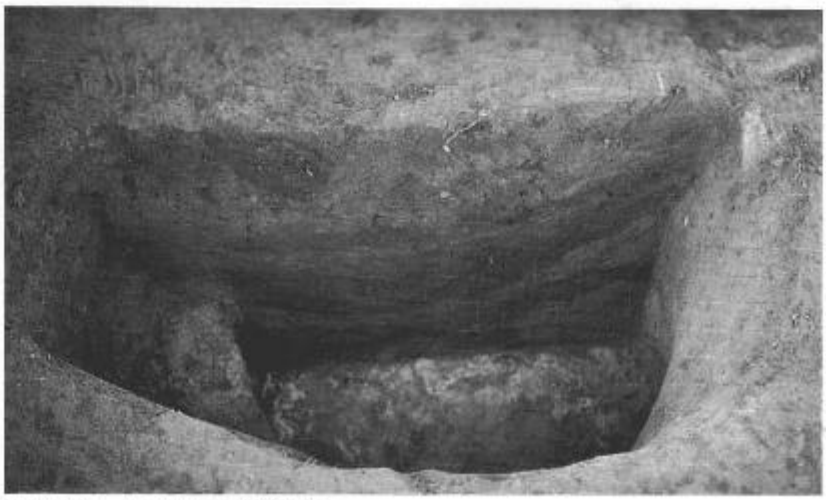
SK234　土坑

SK242　土坑

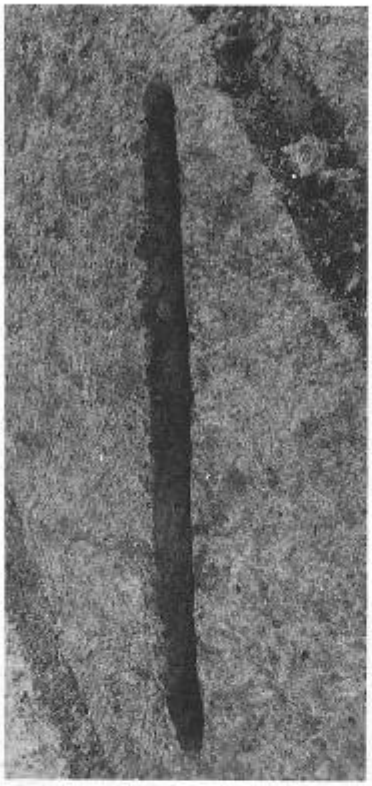


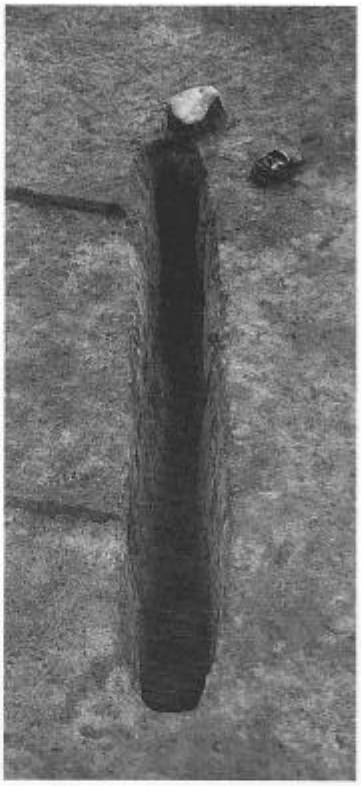
SKF151　フラスコ状土坑

SKF178　フラスコ状土坑

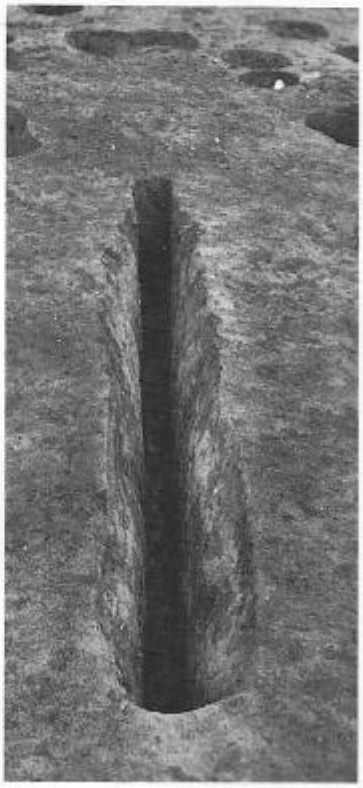


SKF181　フラスコ状土坑

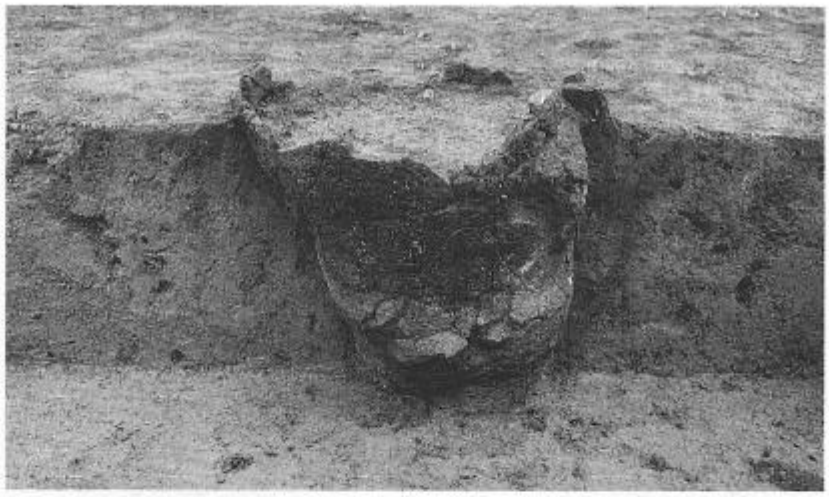




SKT041　陥し穴状遺構　SKT231



SKT316　陥し穴状遺構　SKT317



SR105　土器埋設遺構

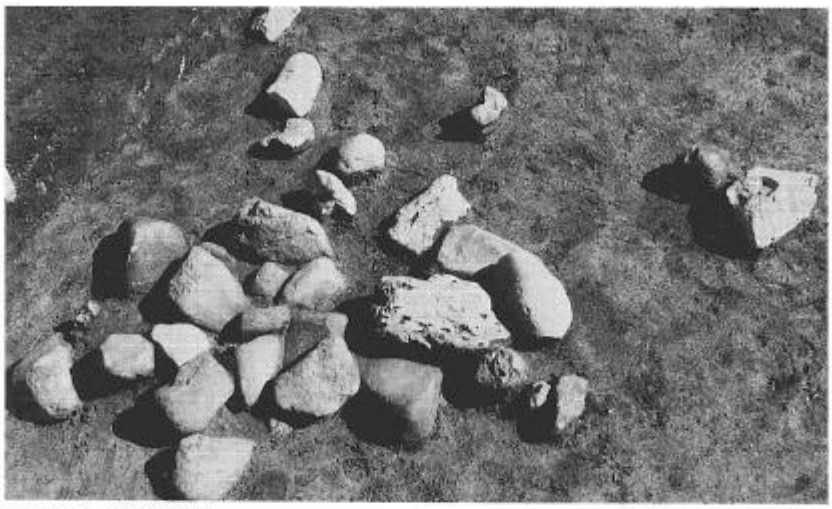
SR232　土器埋設遺構

同上

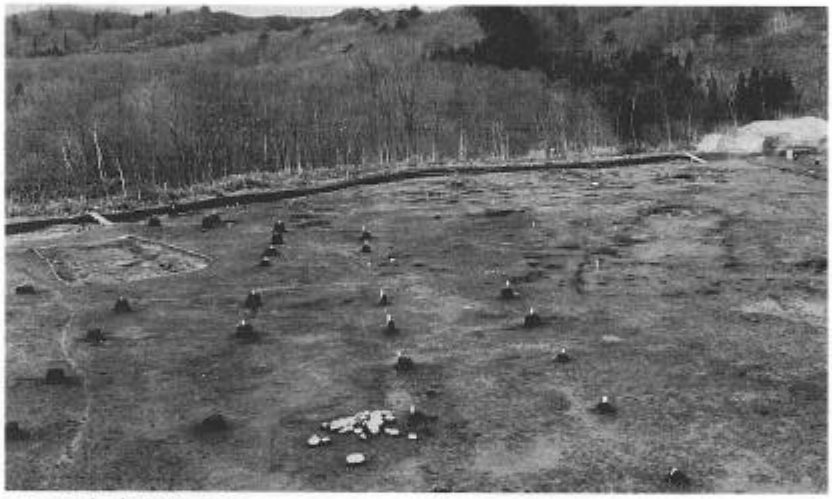
SR304　土器埋設遺構

SR305　土器埋設遺構

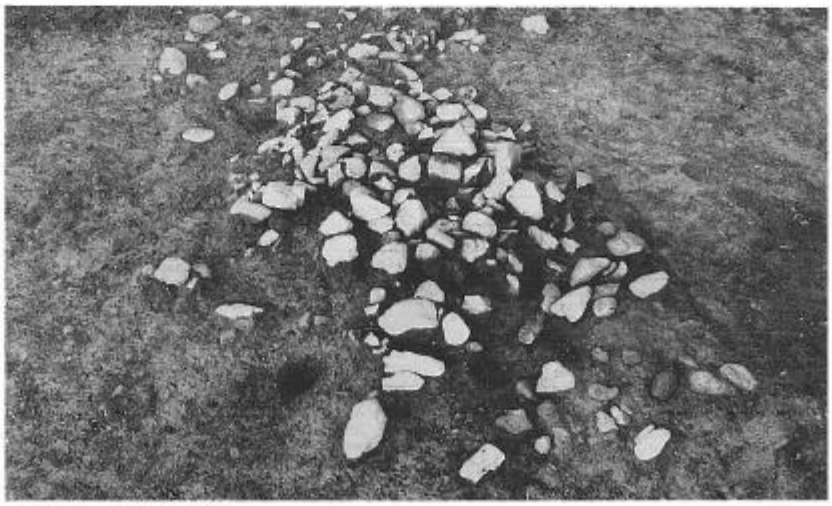
SR306　土器埋設遺構



SQ219　配石遺構



SQ219と大型住居跡



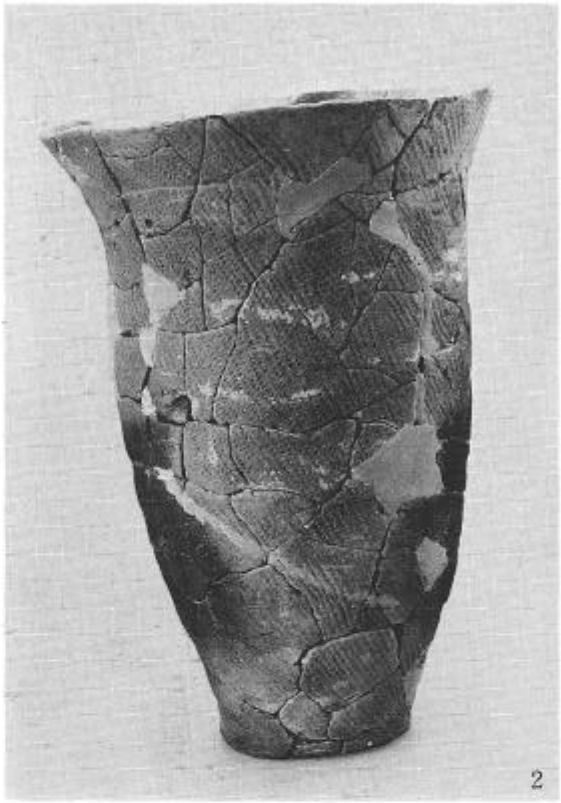
SQ241　配石遺構

SQ227　配石遺構

同上

同上

1

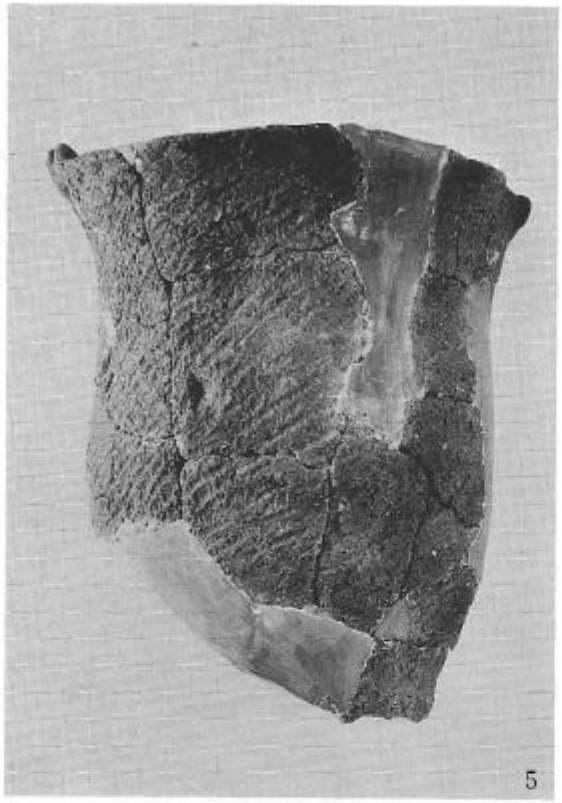

2

3

4

遺構内出土土器（1）

1～4：SI133


5

6

7

8

遺構内出土土器（2）

5～8：SI133

9

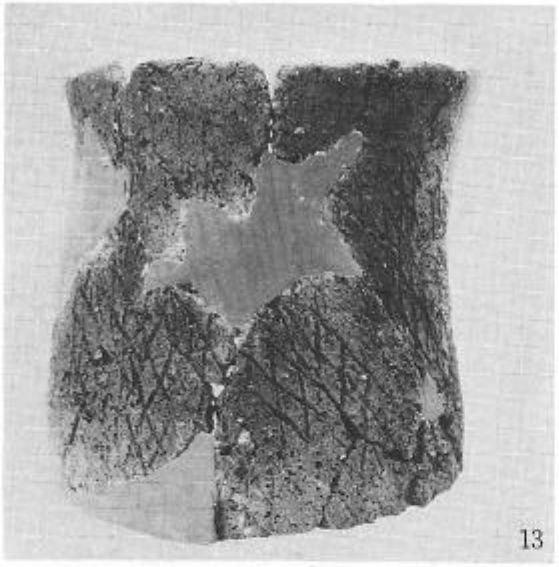
10

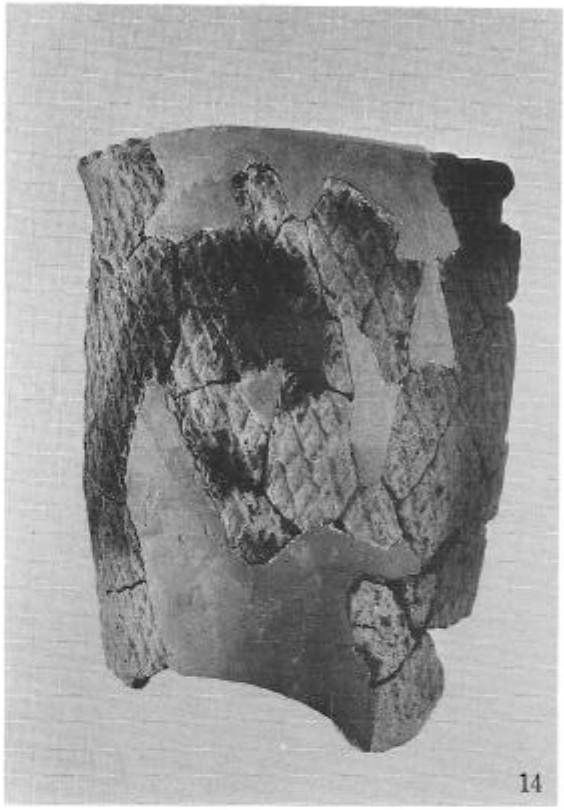
11

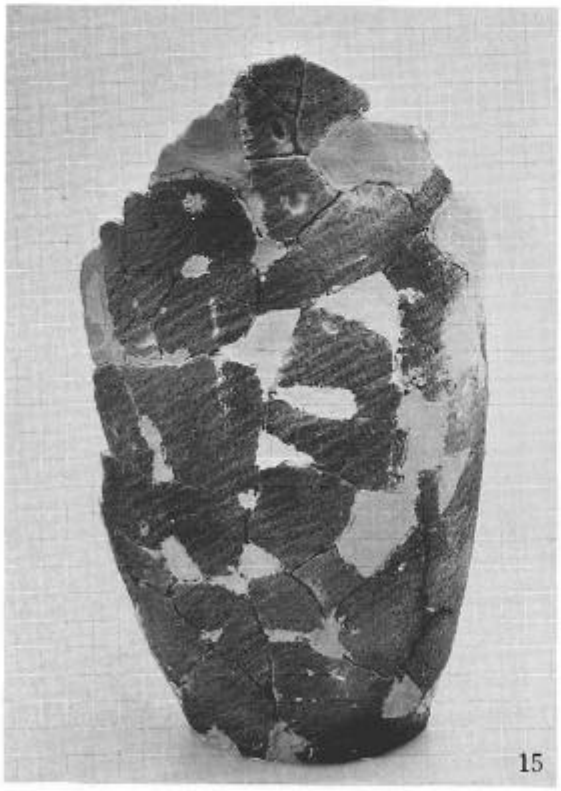
12

遺構内出土土器（3）

9～12：SI195


13


14


15

16

遺構内出土土器（4）

13：SI195　14：SI214　15：SK106　16：SK224

17

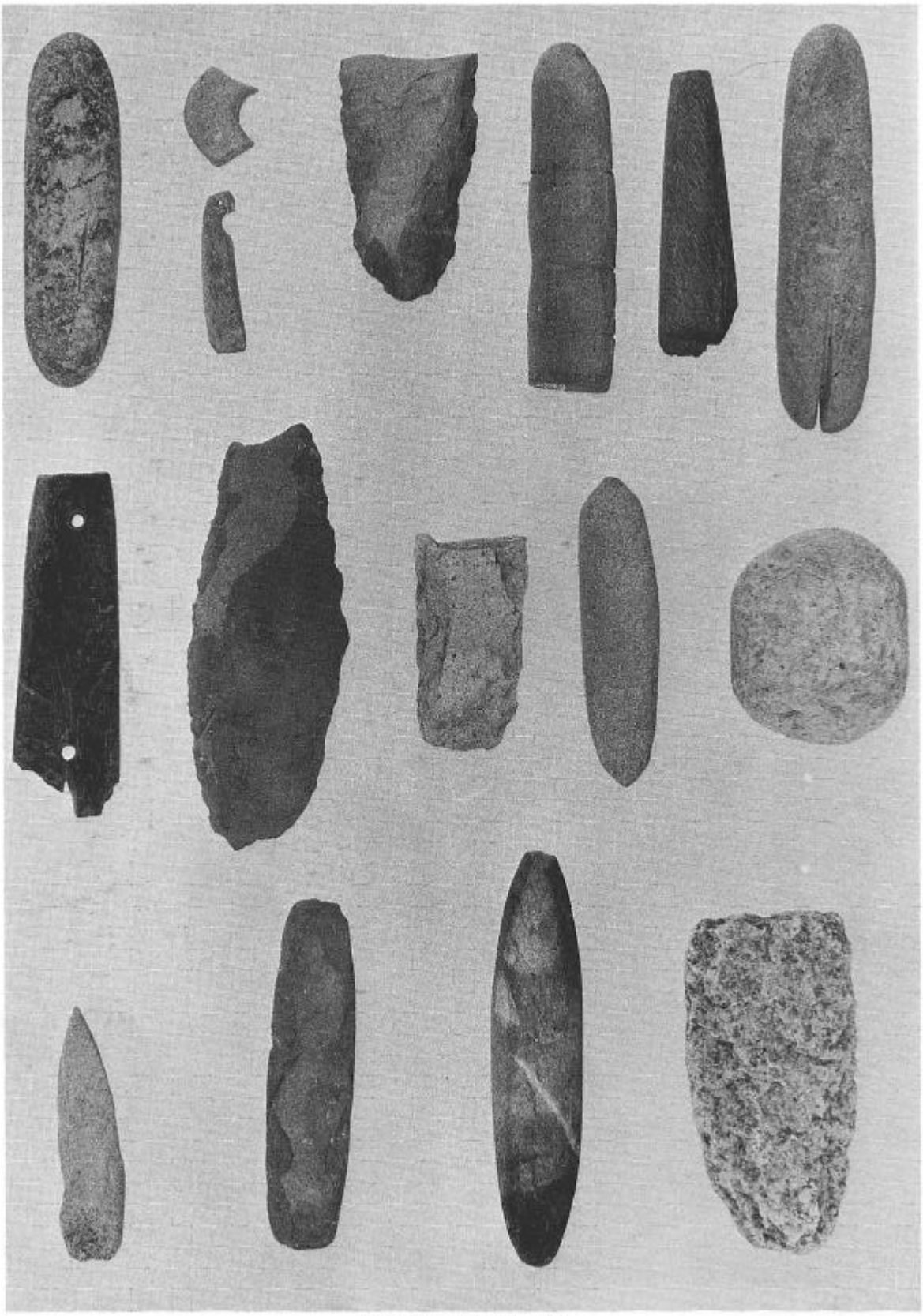
18

19

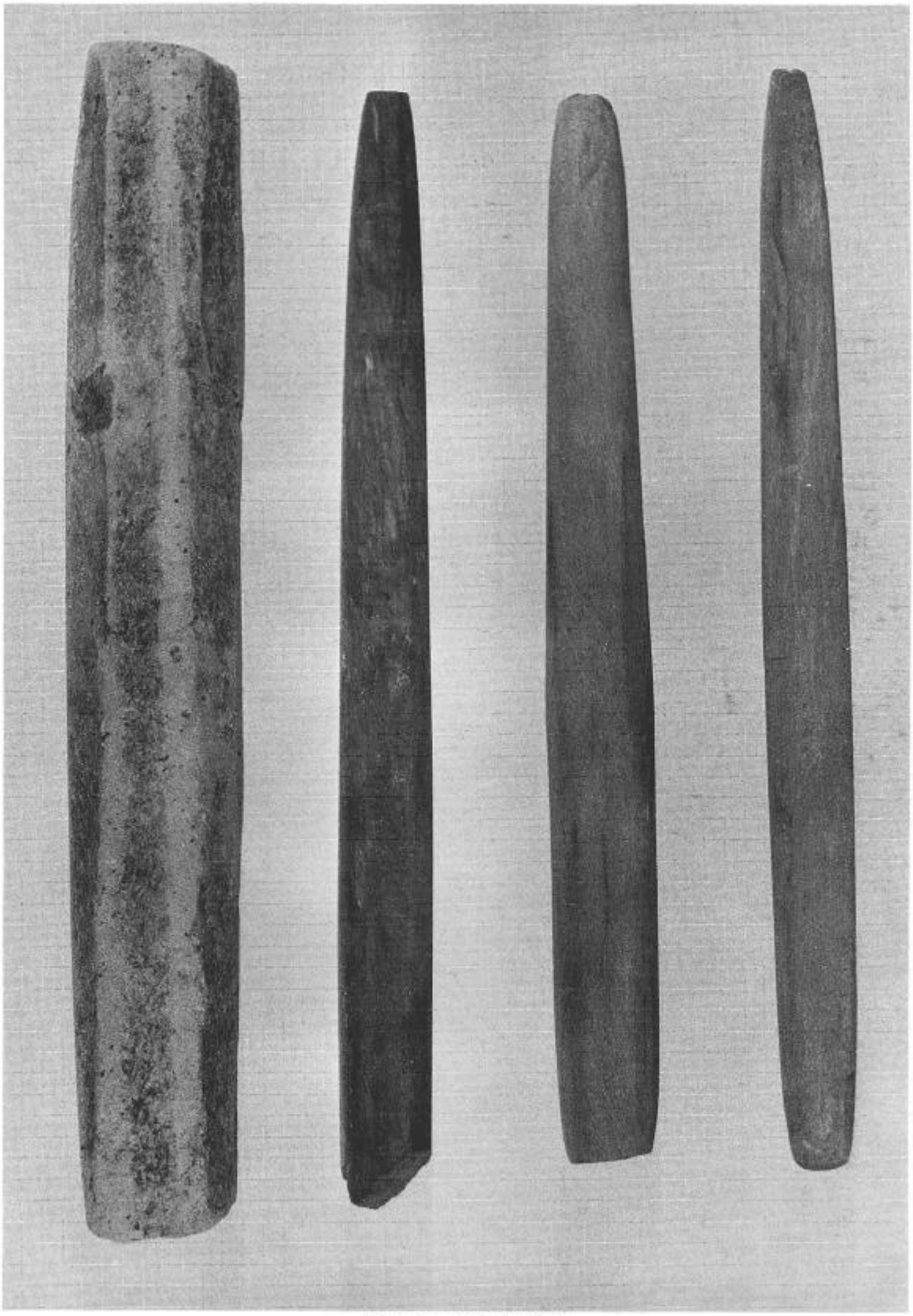
20

遺構内出土土器（5）

17～19：SK224　20：SR232



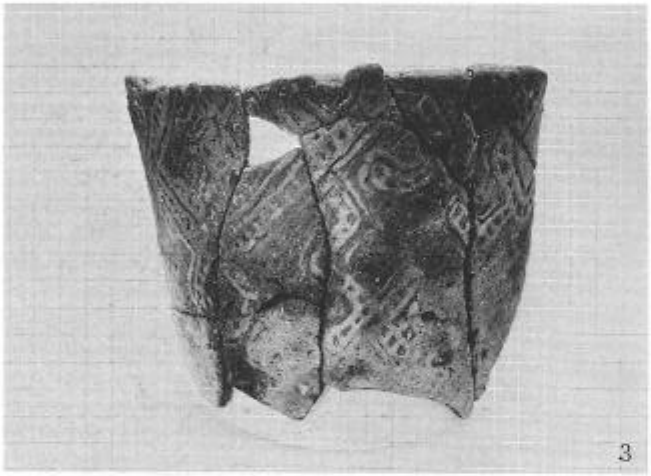
遺構内出土石製品（1）

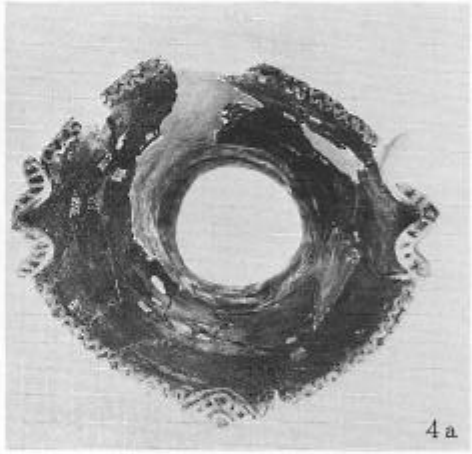


遺構内出土石製品（2）

1

2


3


4a

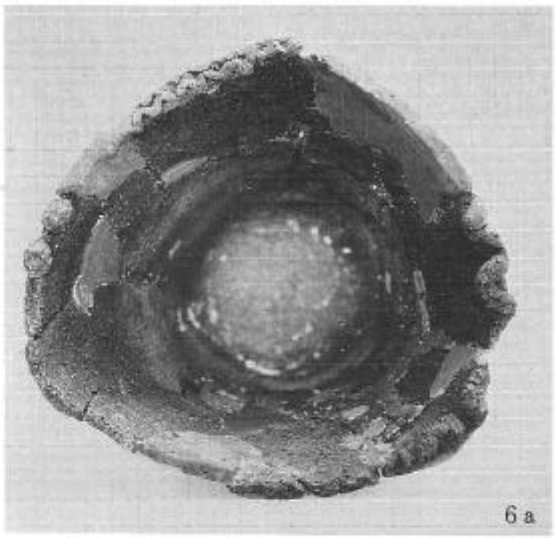
4b

4c

遺構外出土土器(1)

1～4：第Ⅰ群第1類

5


6a

6b

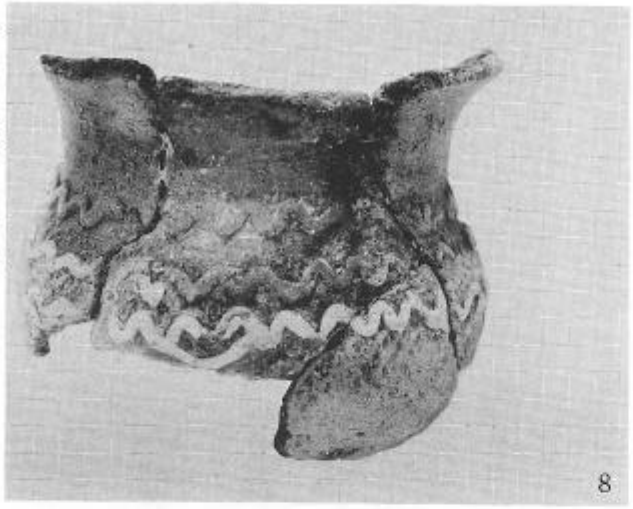
6c

7a

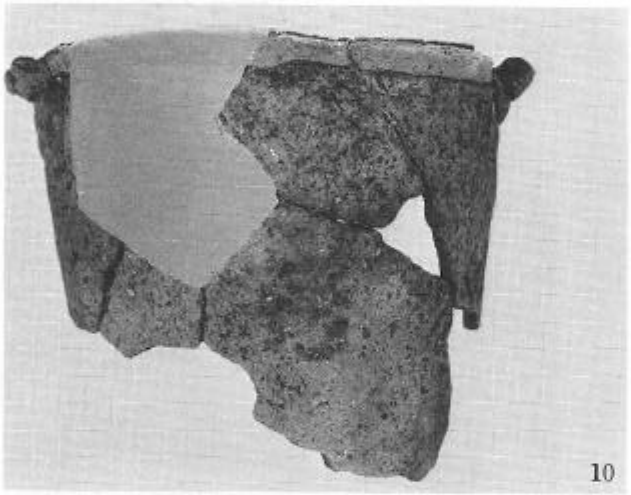
7b

遺構外出土土器（2）

5～7：第Ⅰ群第2類


8

9

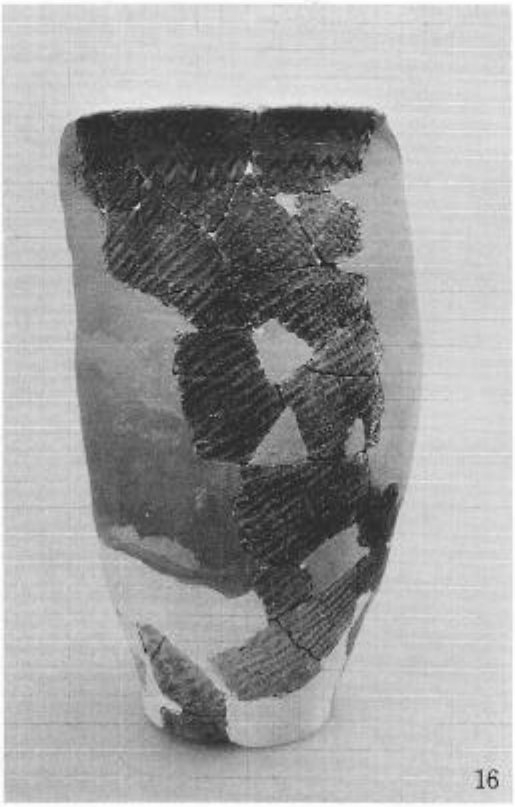

10

11

12

13

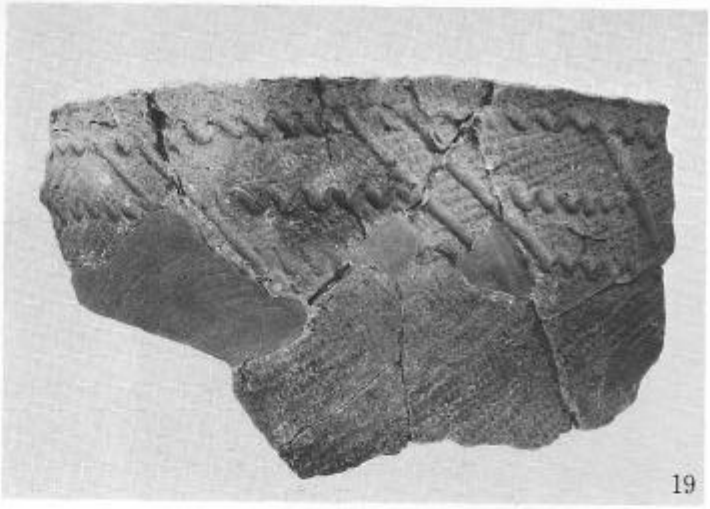
遺構外出土土器(3)　　8～10：第Ⅰ群第2類　11：第Ⅰ群第4類　12・13：第Ⅰ群第3類



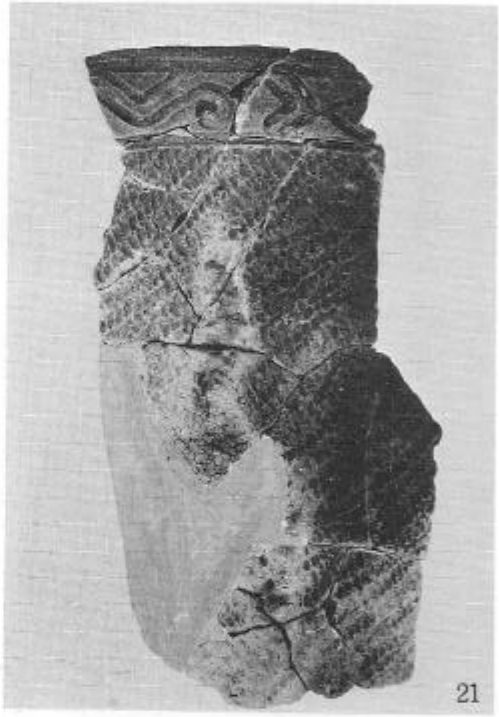
遺構外出土土器(4)

14・15：第Ⅰ群第5類　16・17：第Ⅰ群第7類

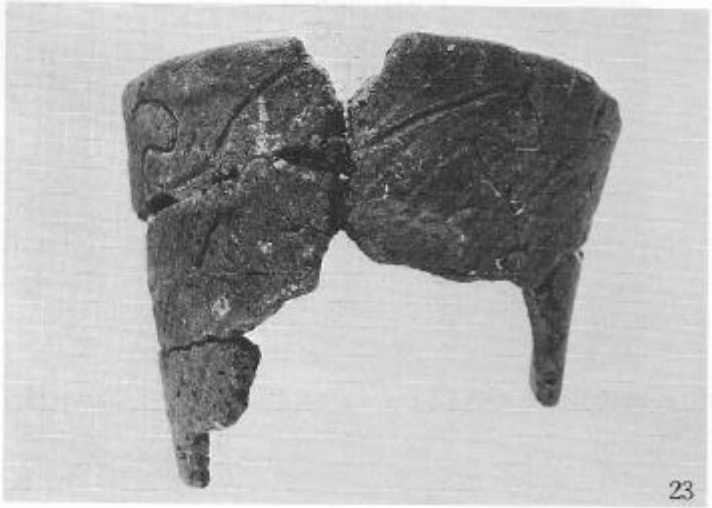
18


19

20


21

22


23

460　**遺構外出土土器(5)**

18：第Ⅰ群第7類　19：第Ⅰ群第8類　20・21：第Ⅰ群第9類
22：第Ⅰ群第11類　23：第Ⅰ群第13類

24

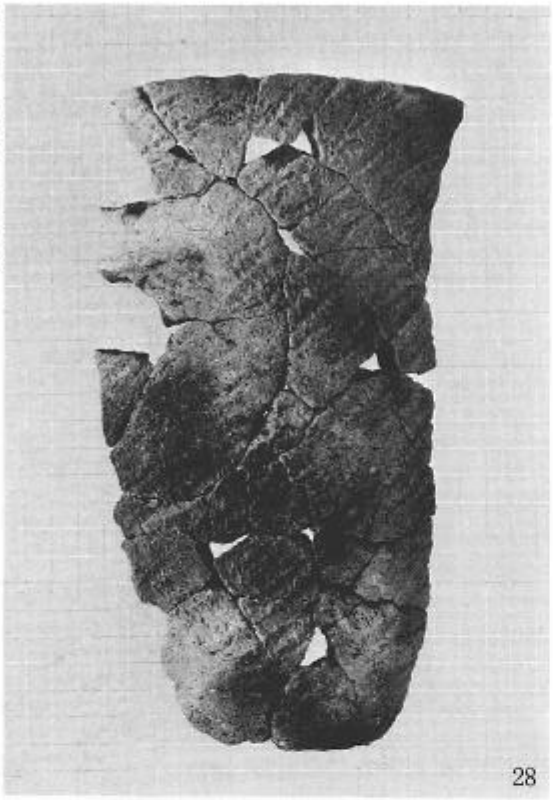
25

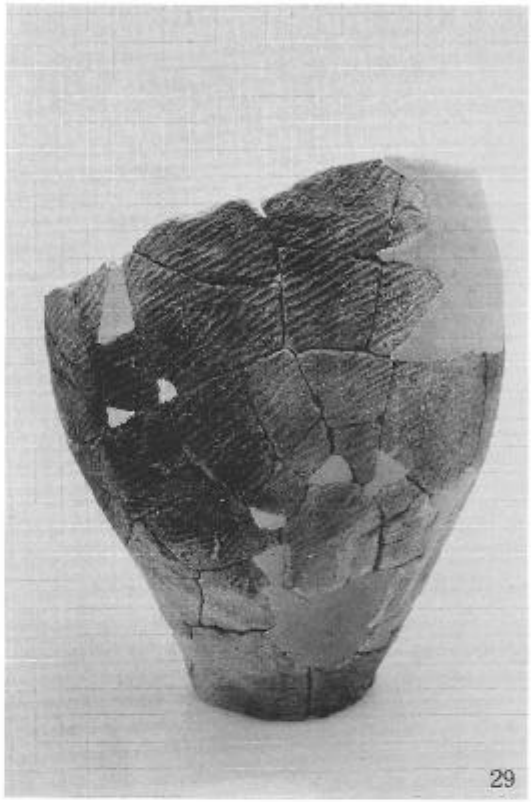
26

27

遺構外出土土器（6）

24：第Ⅰ群第13類　25～27：第Ⅰ群第17類


28

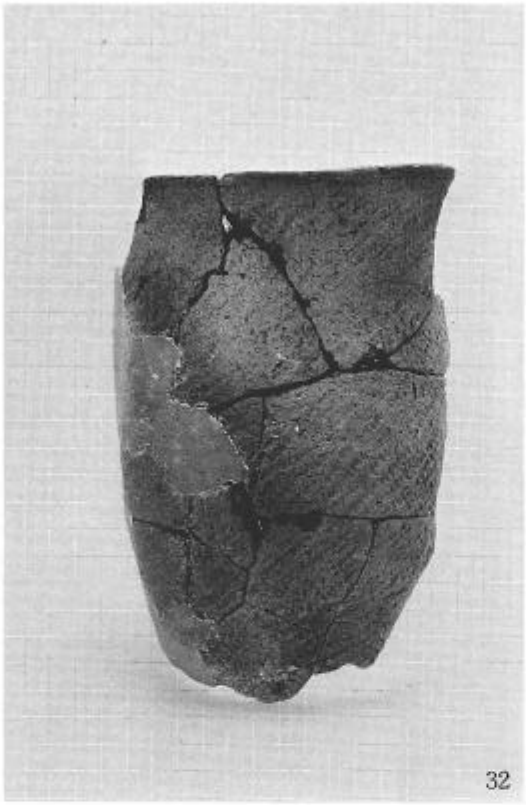

29

30

31

遺構外出土土器（7）

28～31：第Ⅰ群第17類


32

33

34

35

遺構外出土土器（8）

32～35：第Ⅰ群第17類

36

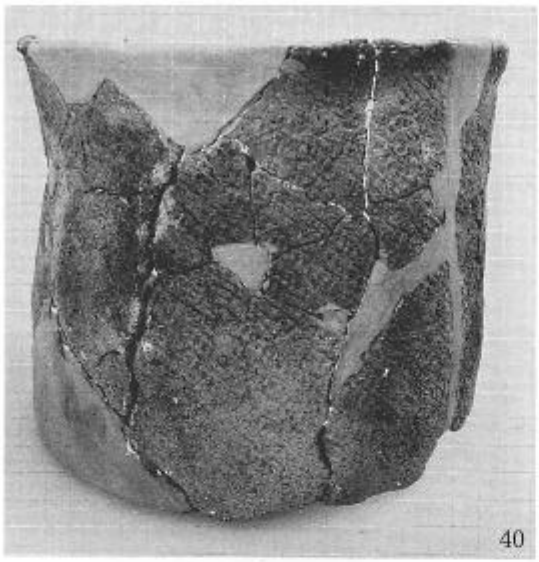
37

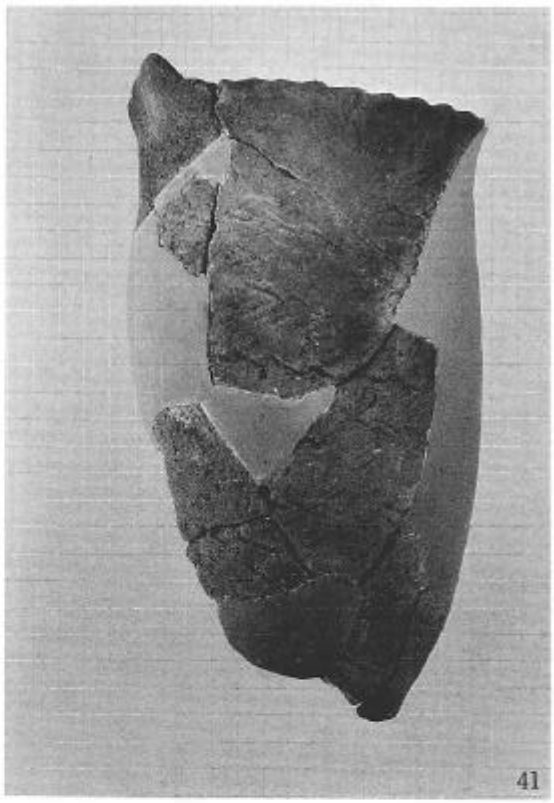
38

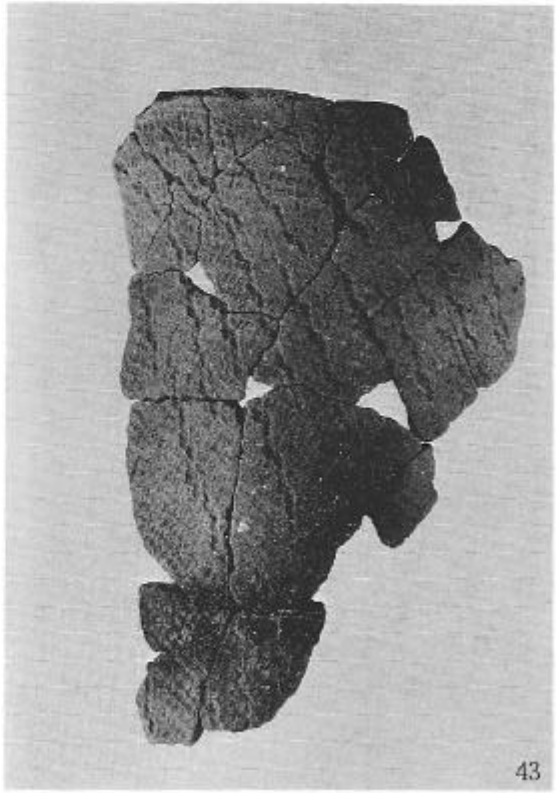
39

遺構外出土土器（9）

36～39：第Ⅰ群第17類

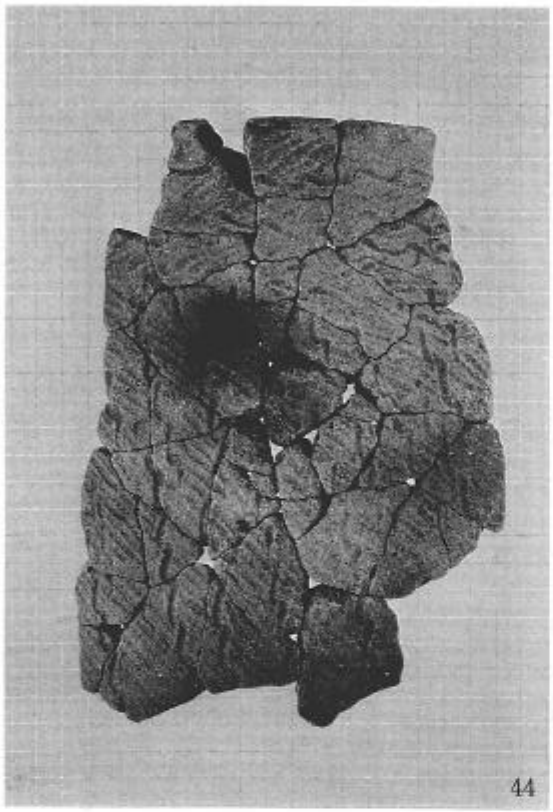


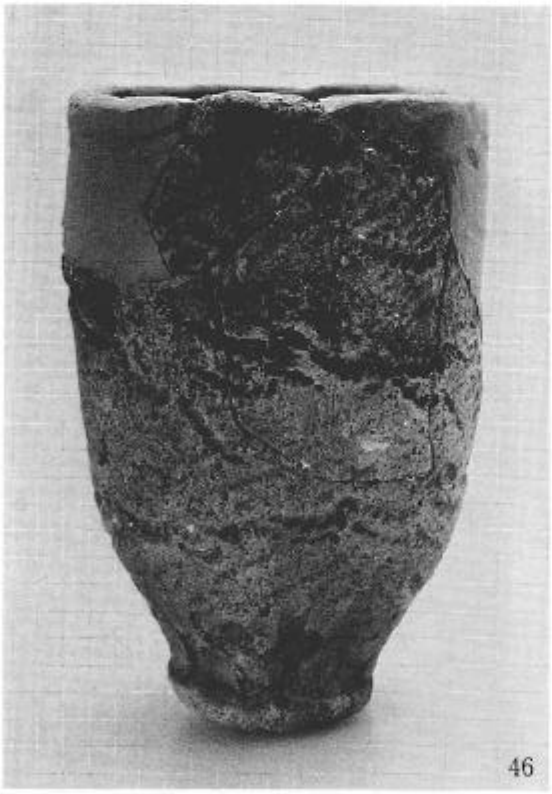






遺構外出土土器(10)

40～43：第Ⅰ群第18類



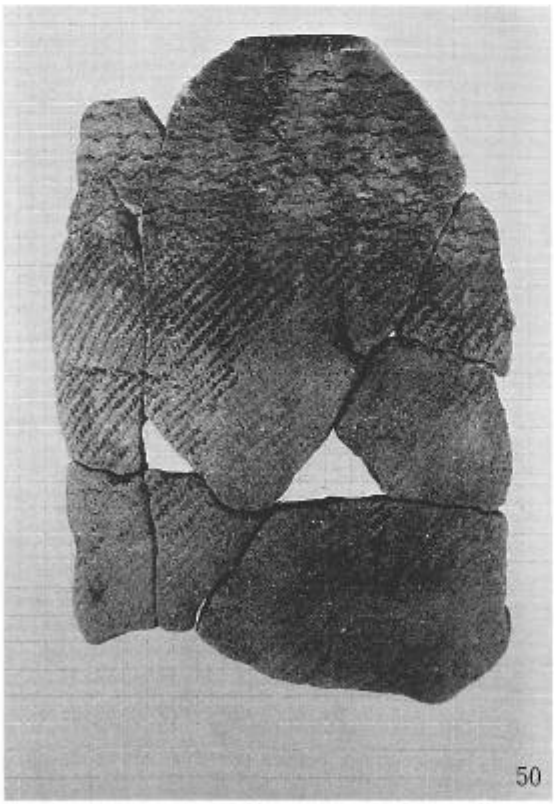


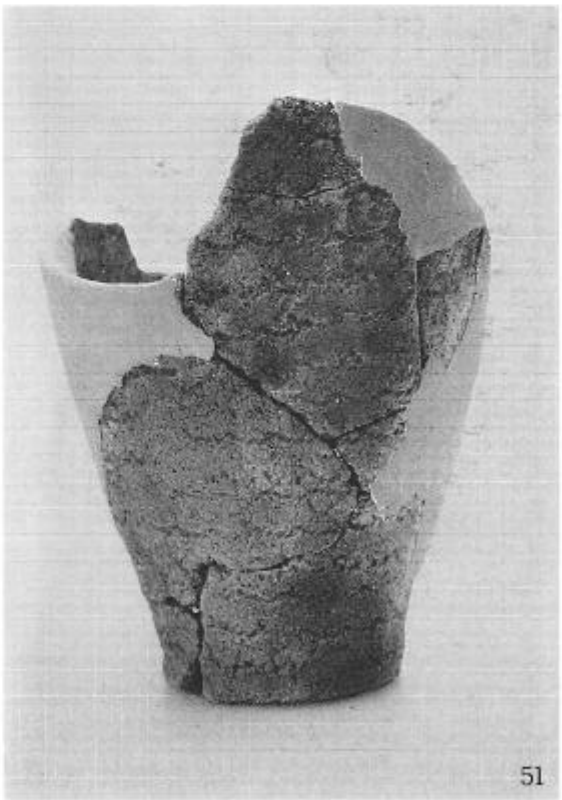
**遺構外出土土器(11)**

45～47：第Ⅰ群第18類

48

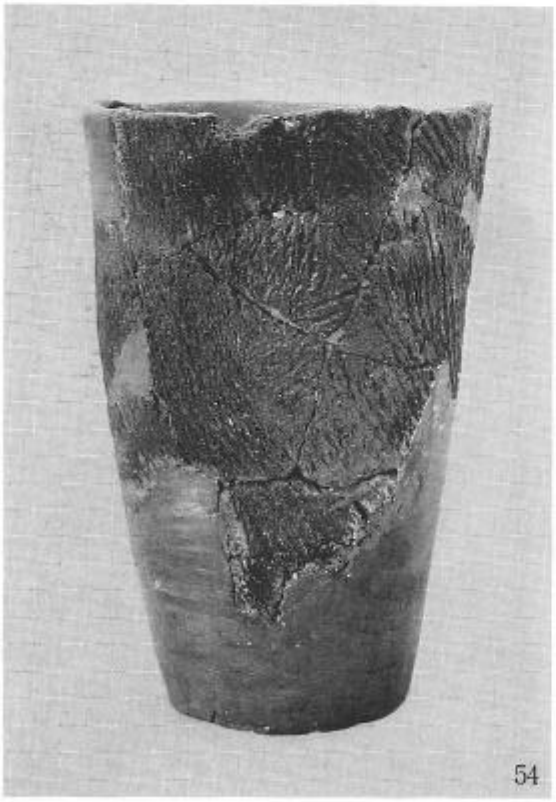
49


50


51

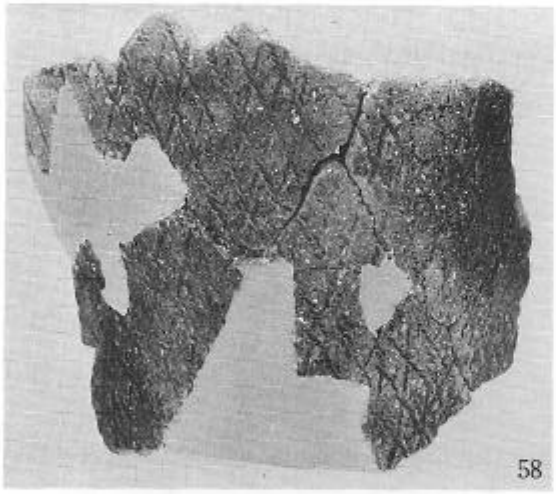
遺構外出土土器(12)

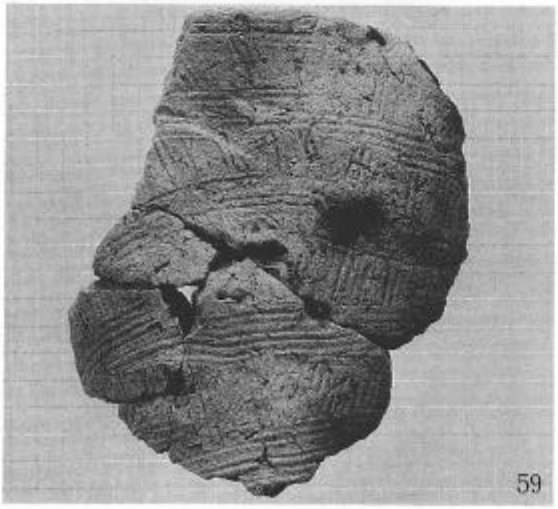
48～51：第Ⅰ群第18類



**遺構外出土土器(13)**

52・53：第Ⅰ群第18類　54・55：第Ⅰ群第20類

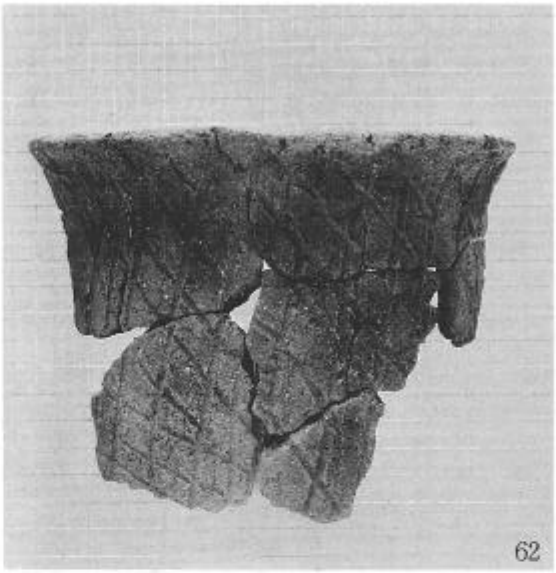


遺構外出土土器(14)

56～58・60：第Ⅰ群第21類　59：第Ⅰ群第26類

61


62

63

64

遺構外出土土器(15)

61～64：第Ⅰ群第26類

65

66

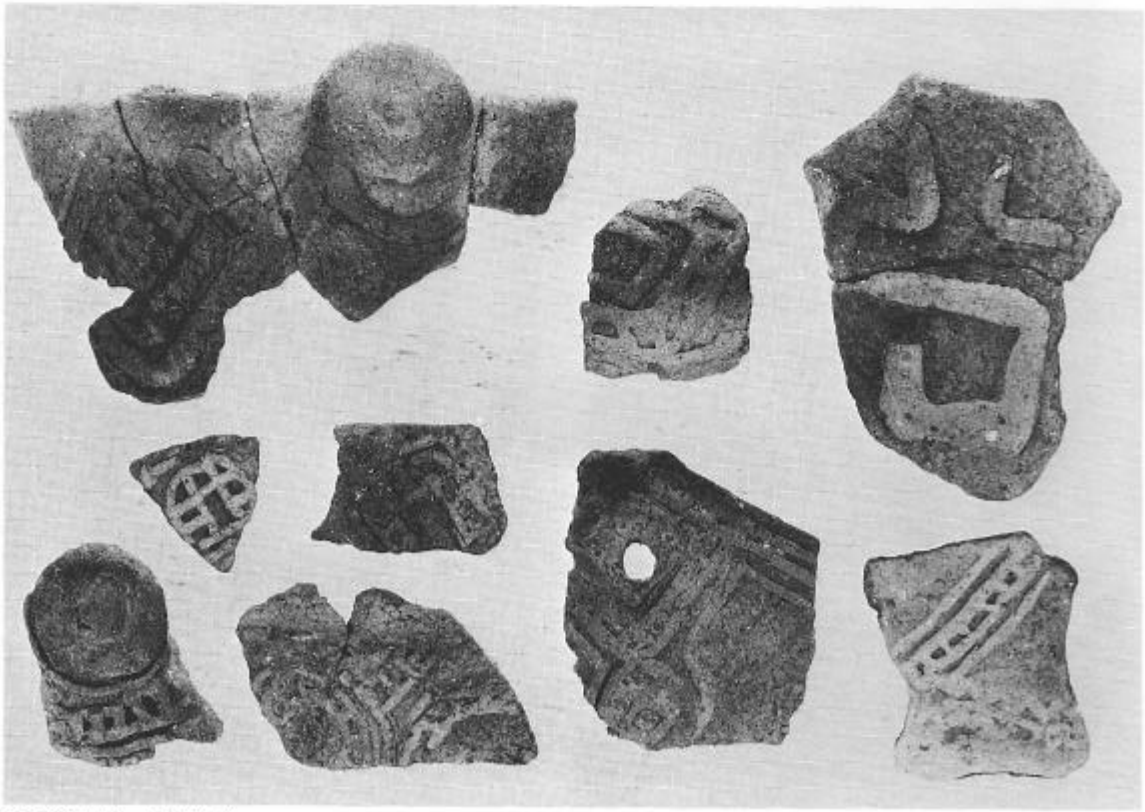
67

68

遺構外出土土器(16)

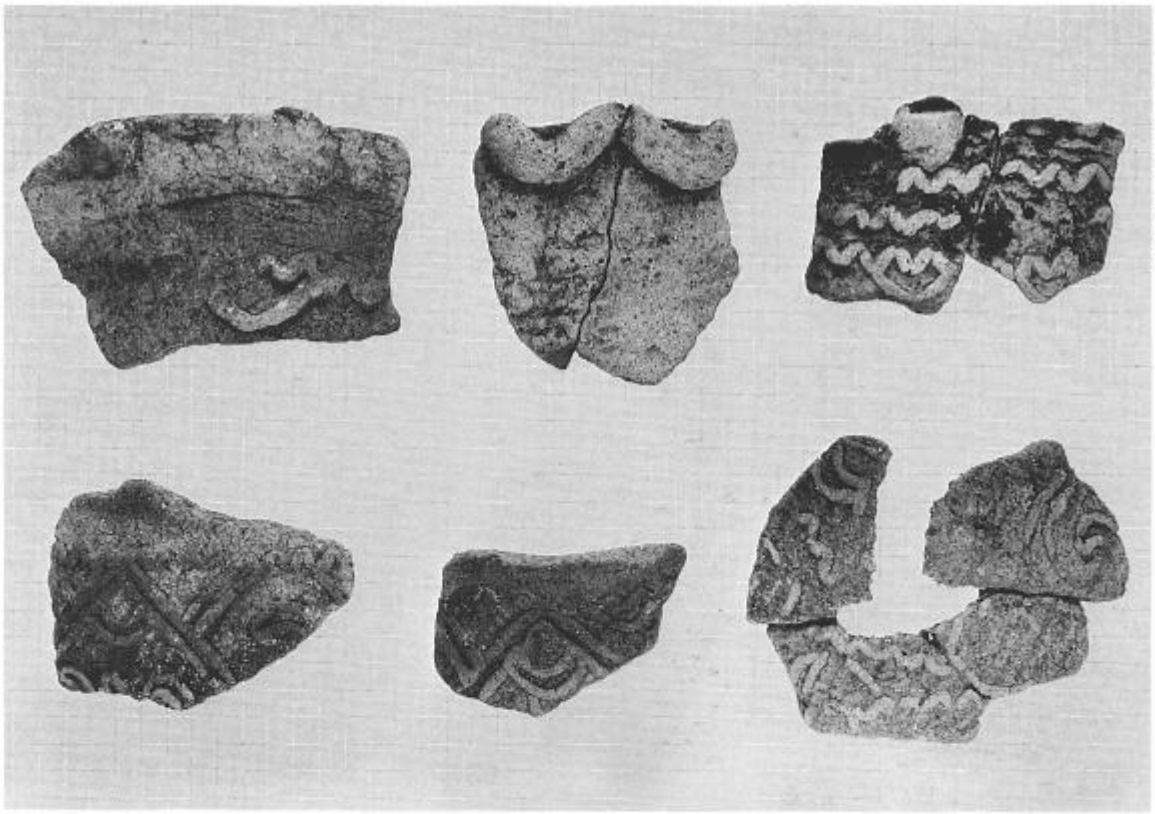
65：第Ⅰ群第29類　66～88：第Ⅰ群第30類

第Ⅰ群第１類

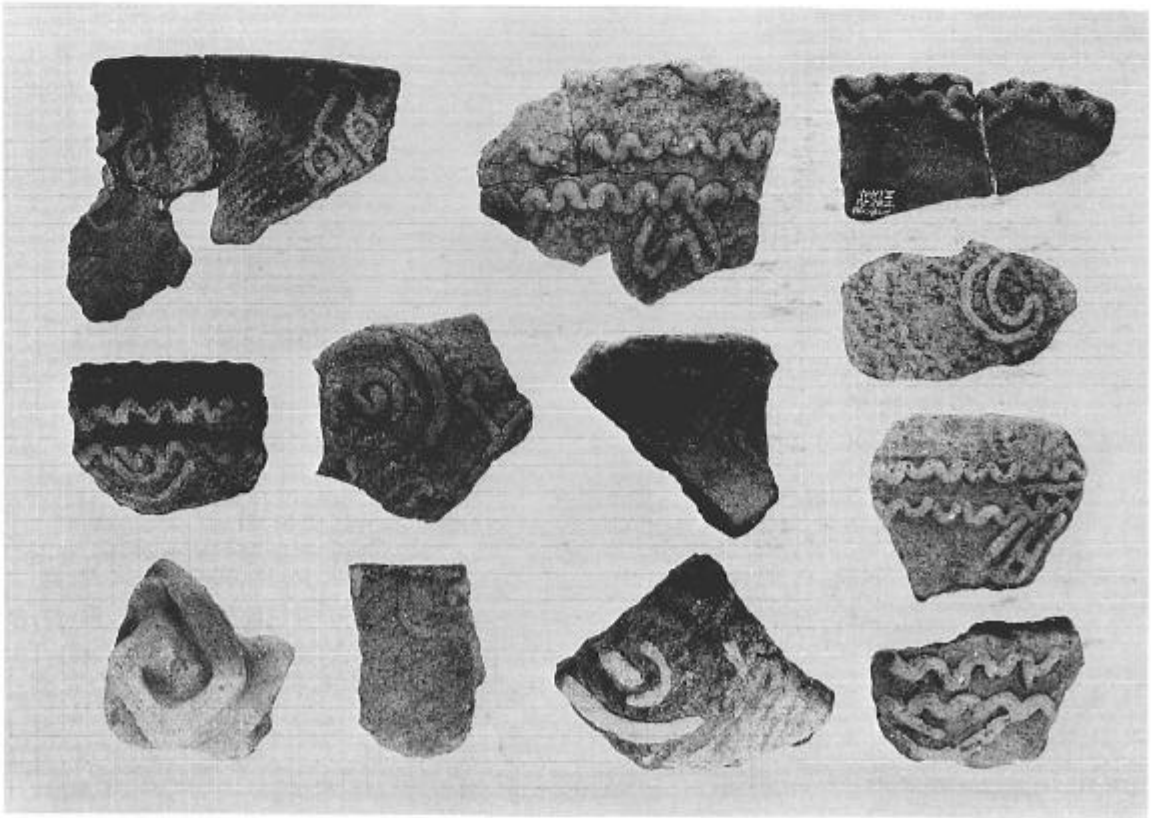


遺構外出土土器(17)

第Ⅰ群第１・２類

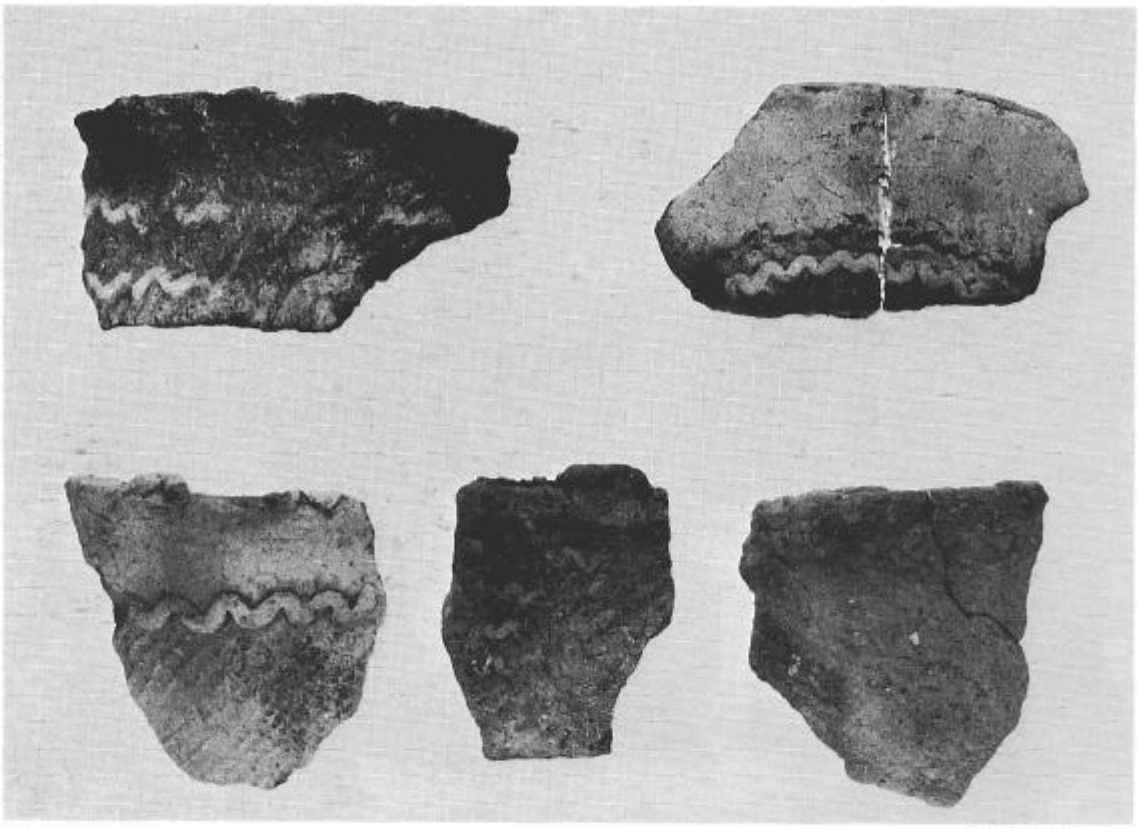


第Ⅰ群第２類

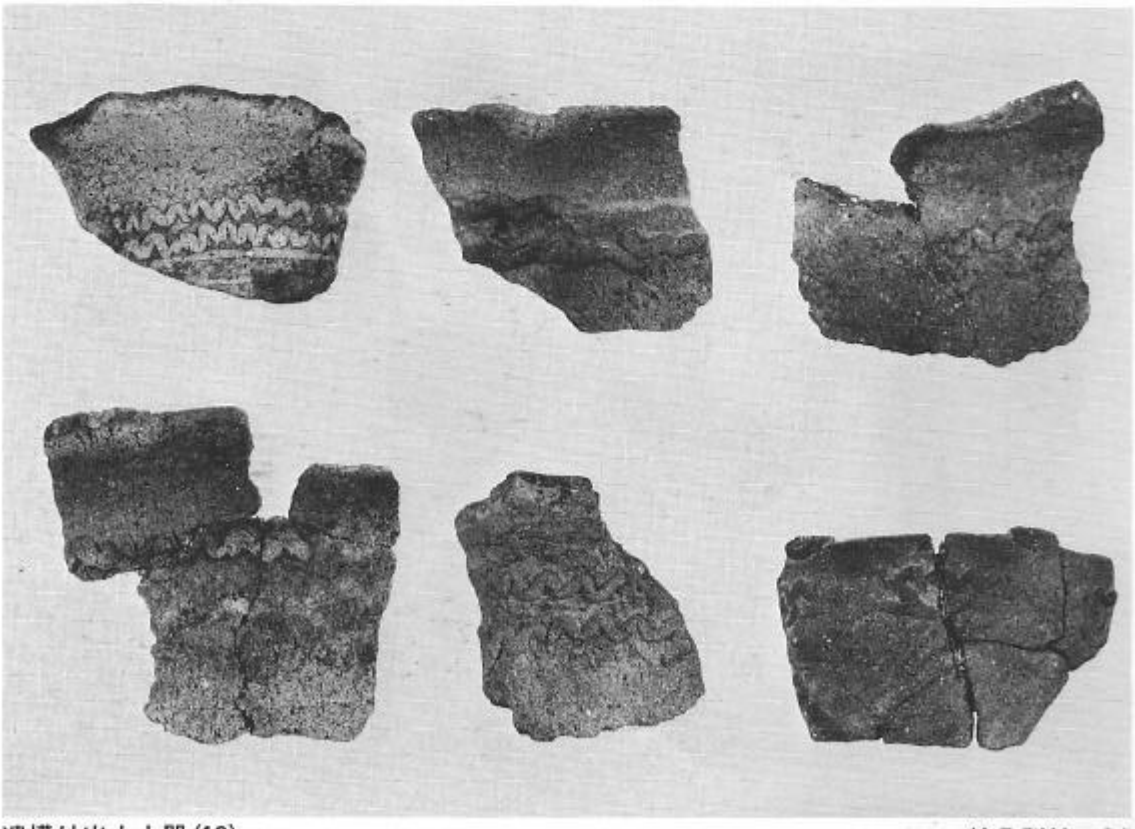


遺構外出土土器(18)

第Ⅰ群第２類

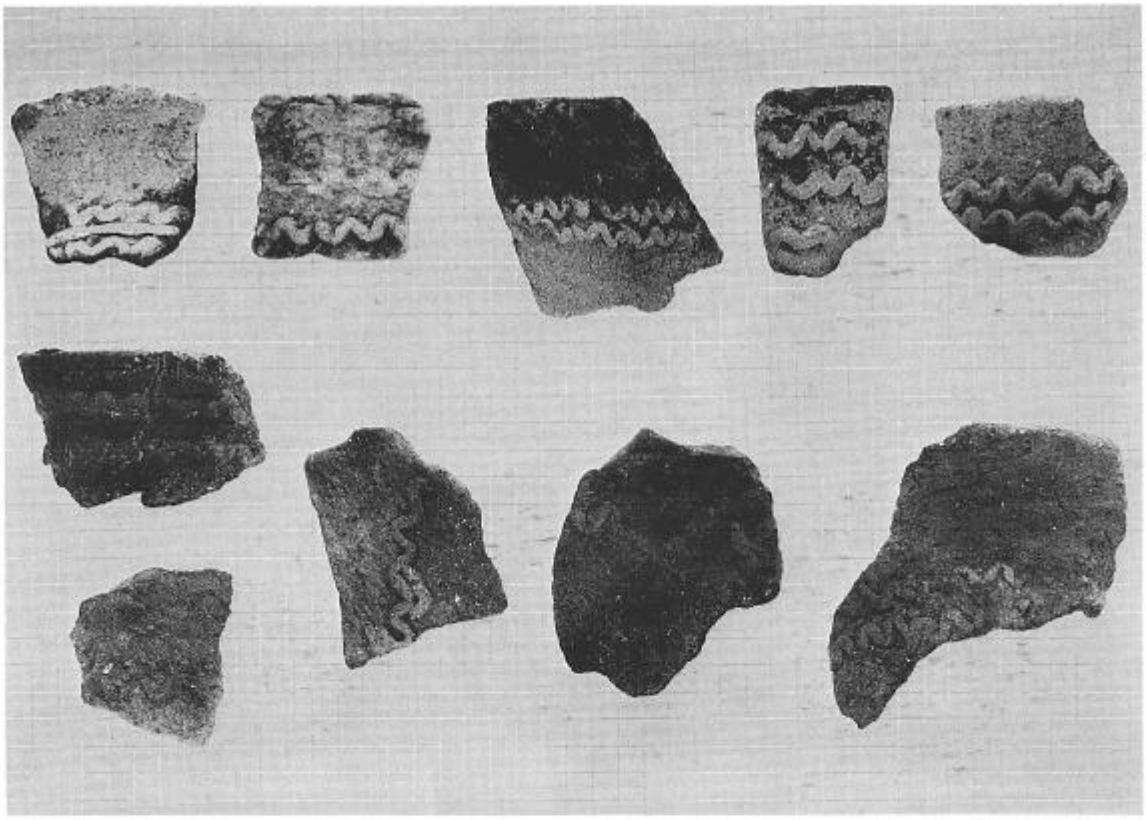


第Ⅰ群第4類

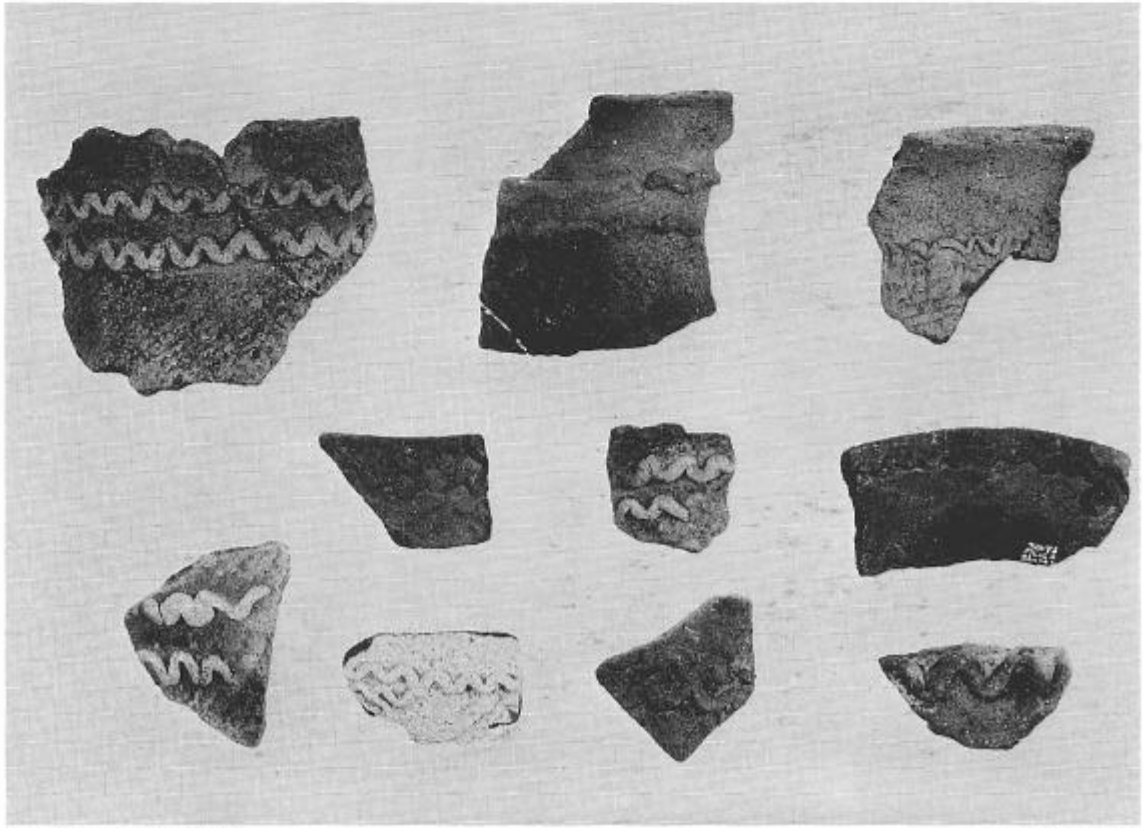


遺構外出土土器(19)

第Ⅰ群第4類

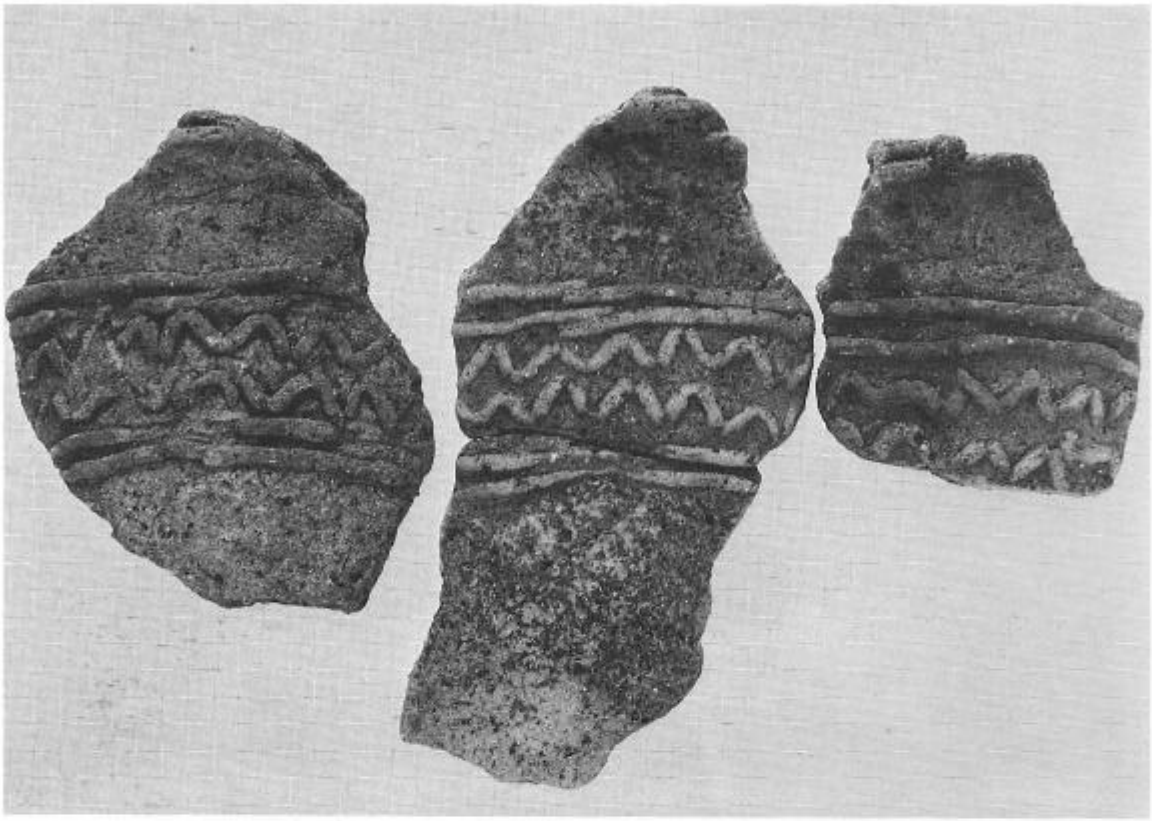


第Ⅰ群第4類

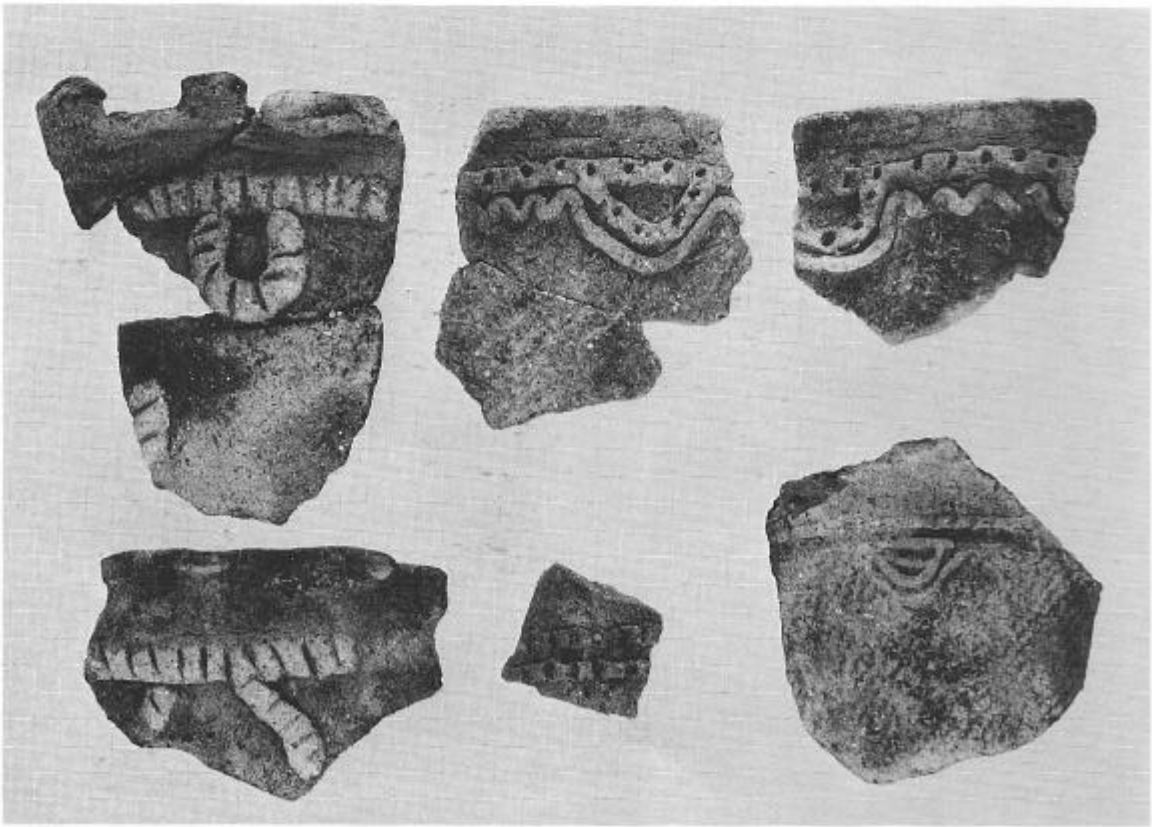


遺構外出土土器(20)

第Ⅰ群第4類

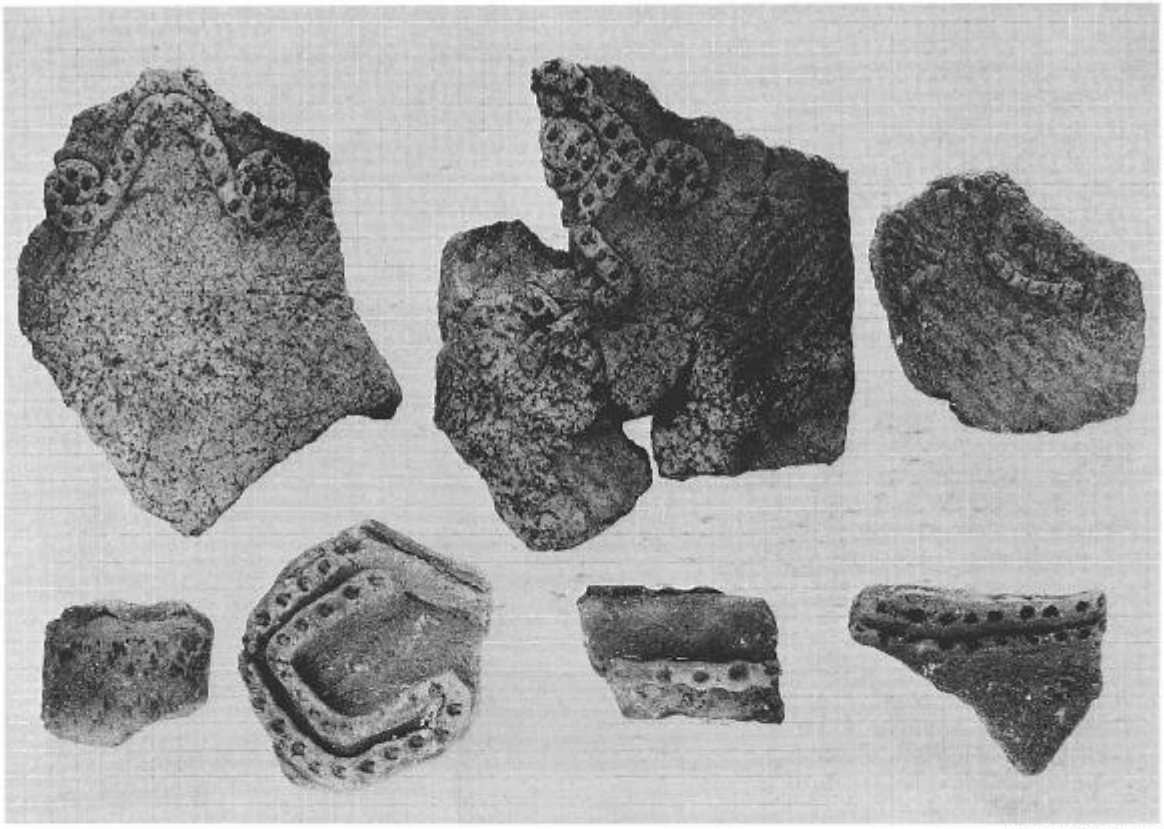


第Ⅰ群第4類

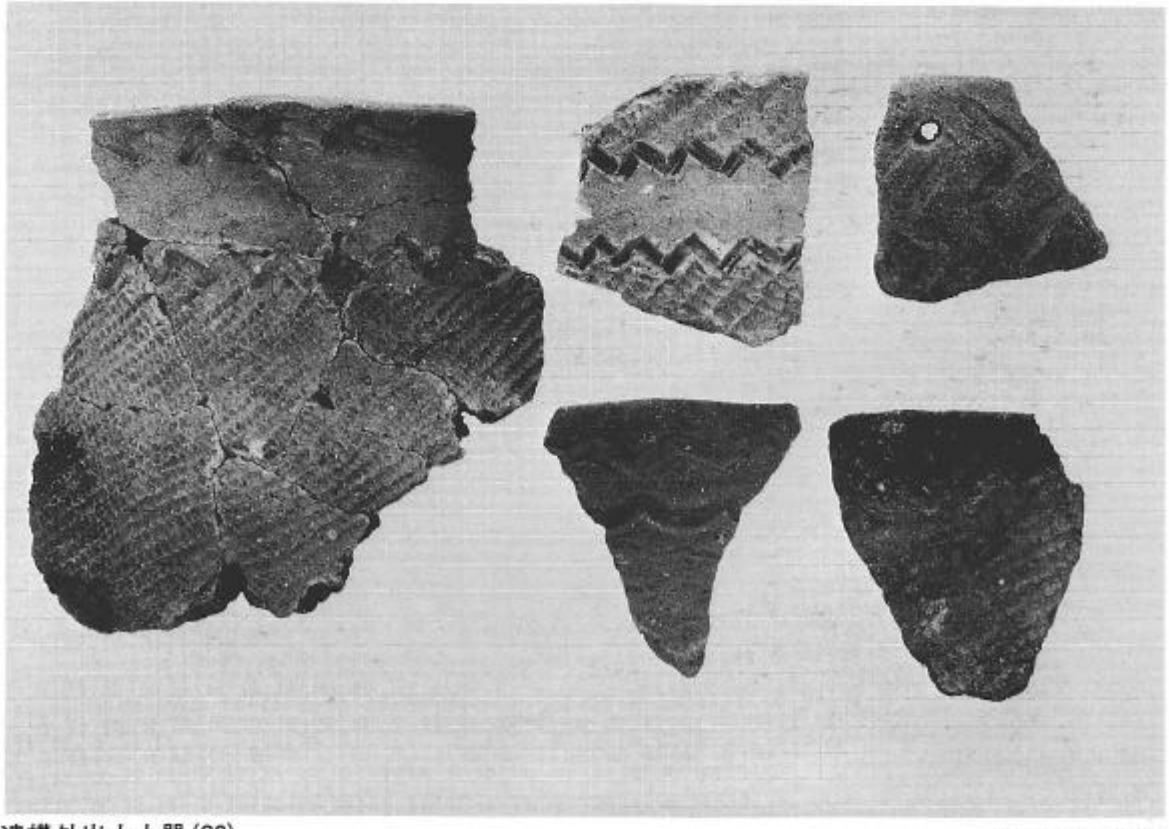


第Ⅰ群第6類

遺構外出土土器(21)

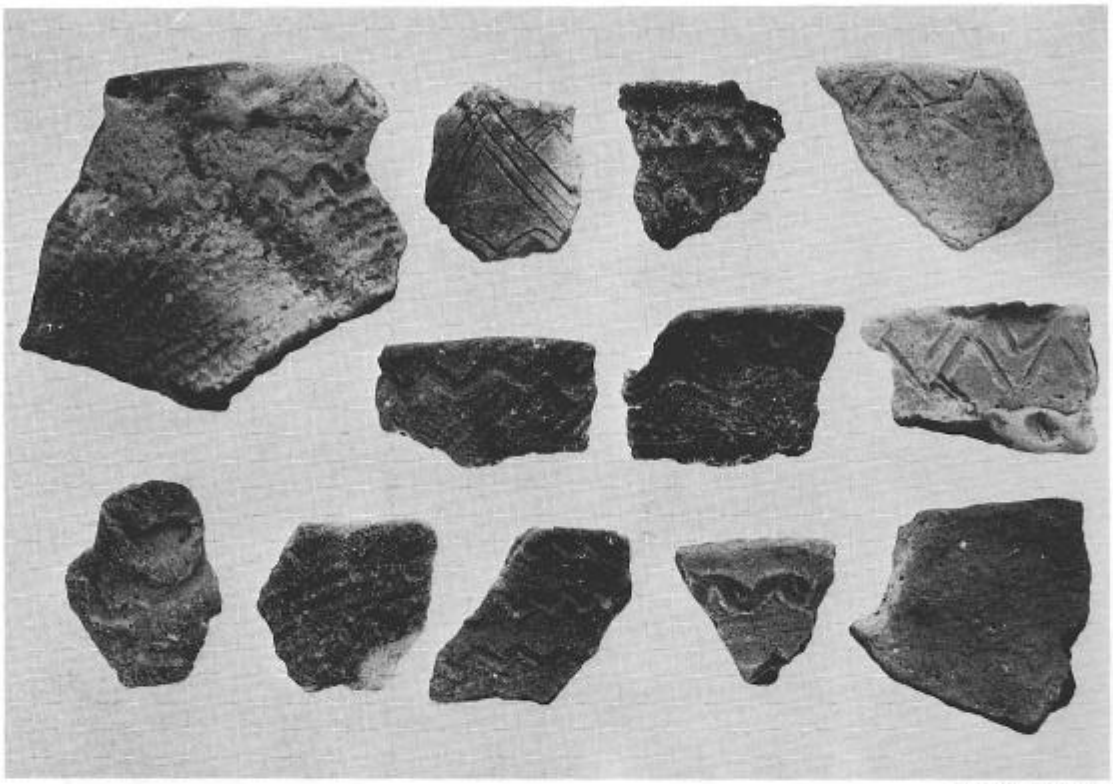


第Ⅰ群第6類

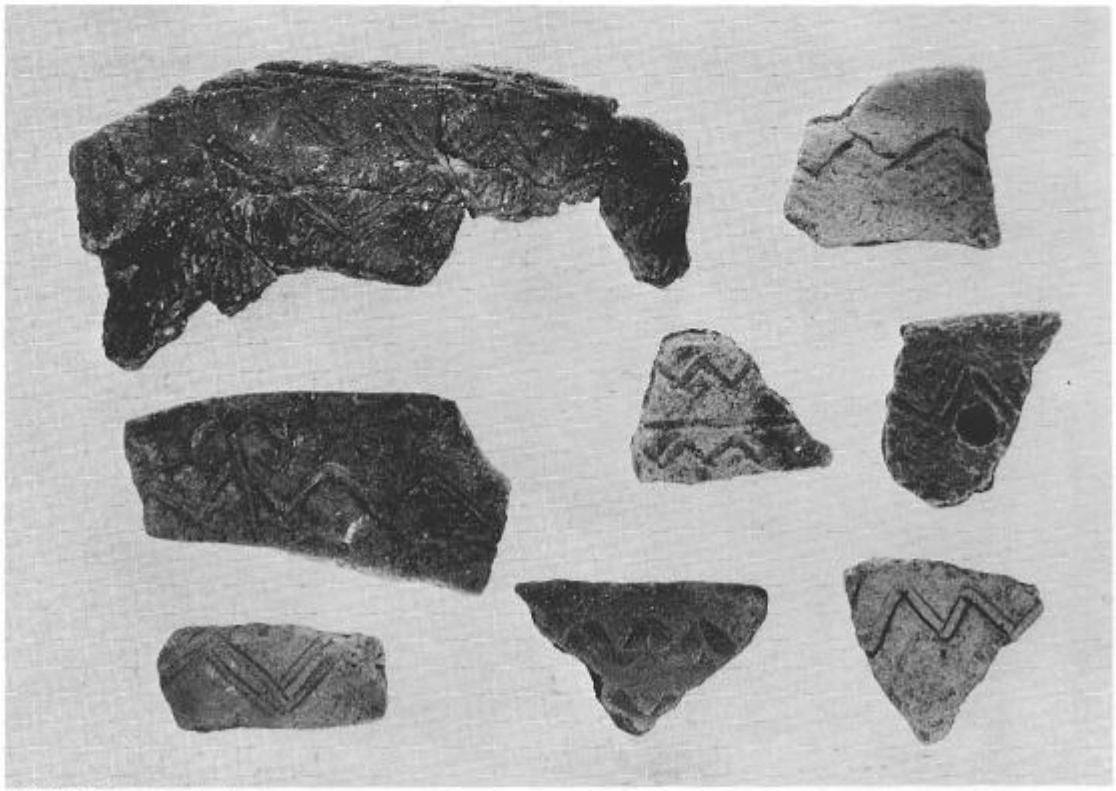


遺構外出土土器(22)

第Ⅰ群第7類

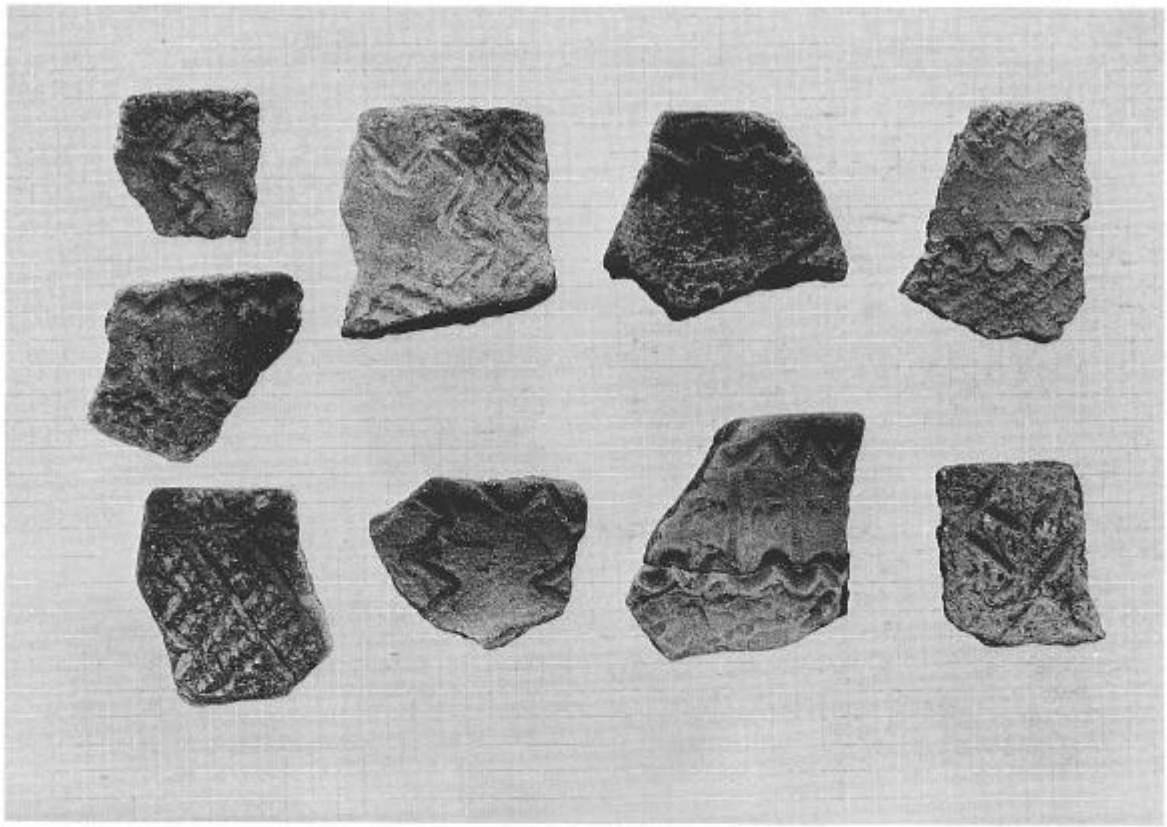


第Ⅰ群第7類

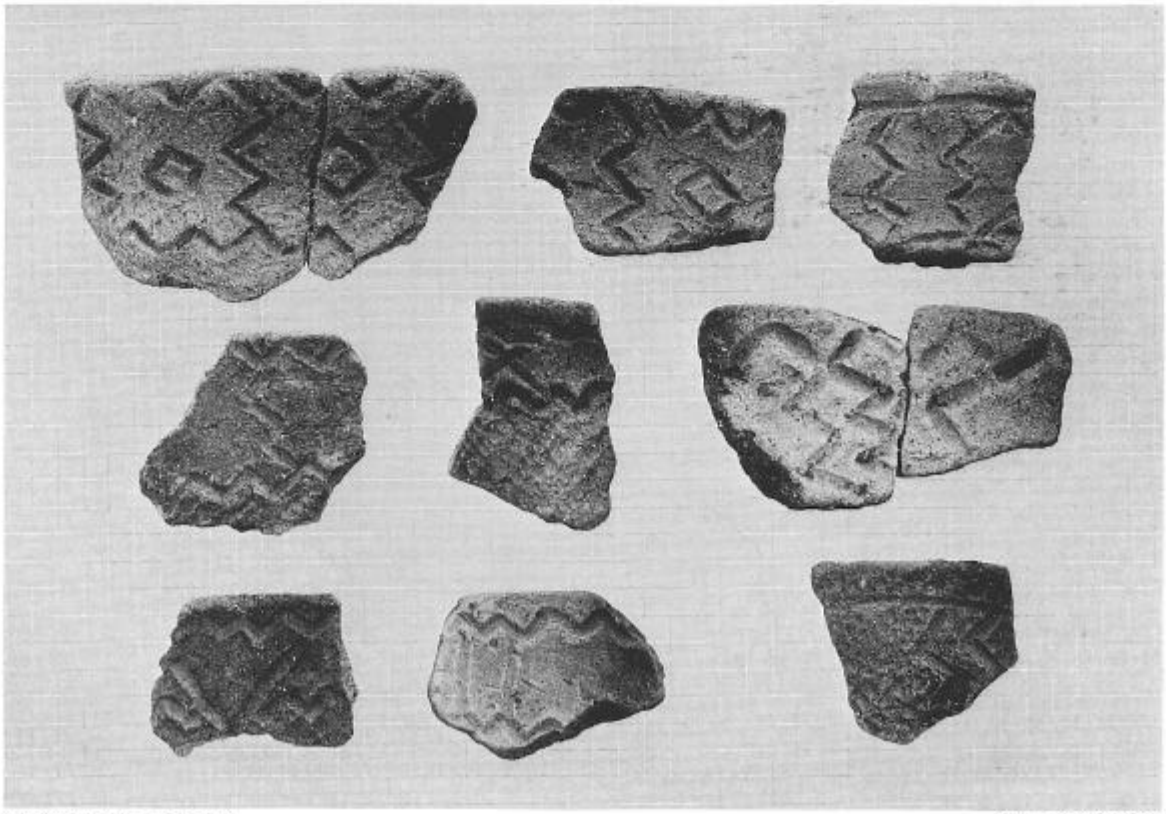


遺構外出土土器(23)

第Ⅰ群第7・8類

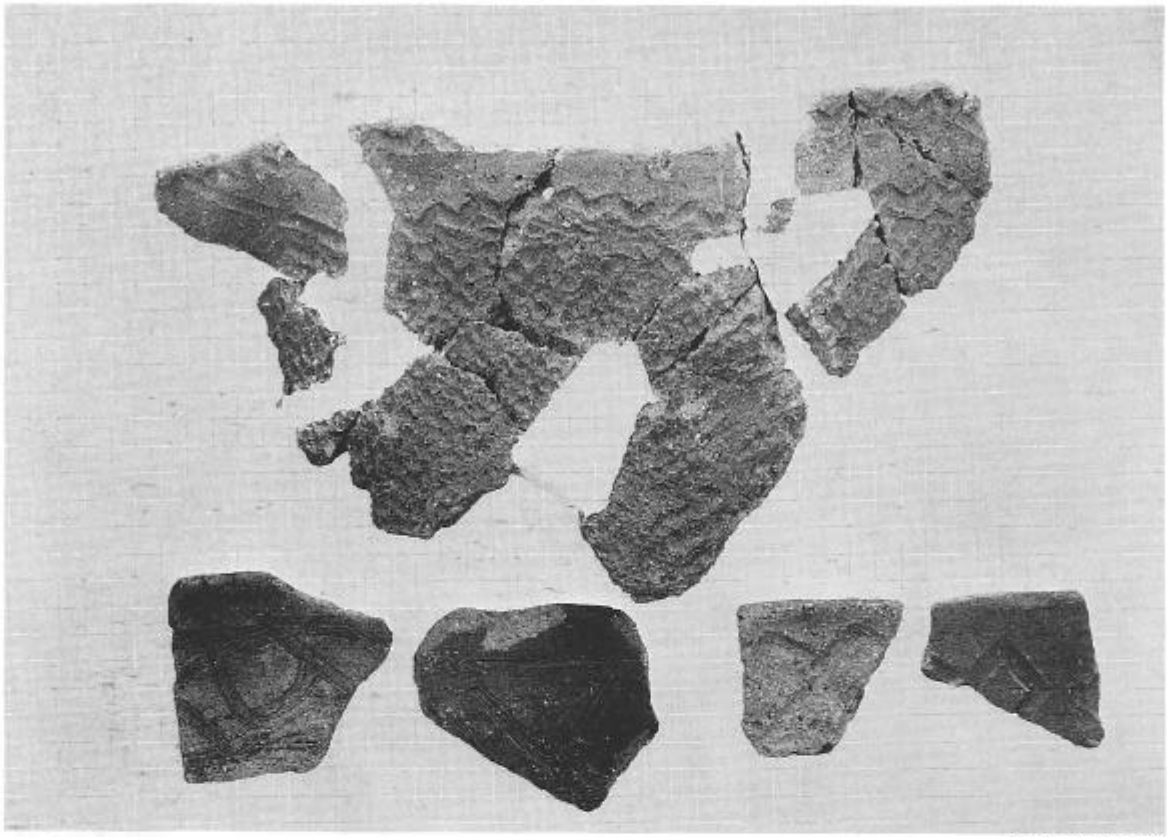


第Ⅰ群第8類

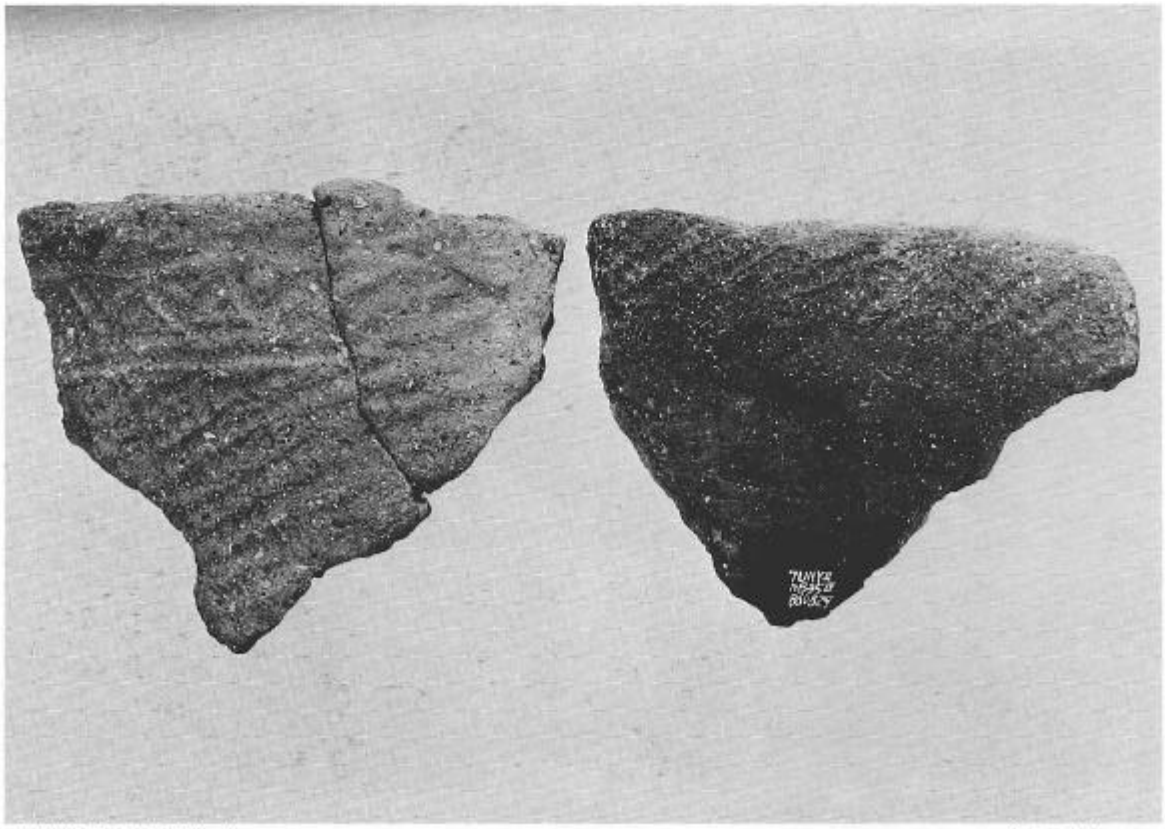


遺構外出土土器(24)

第Ⅰ群第8類

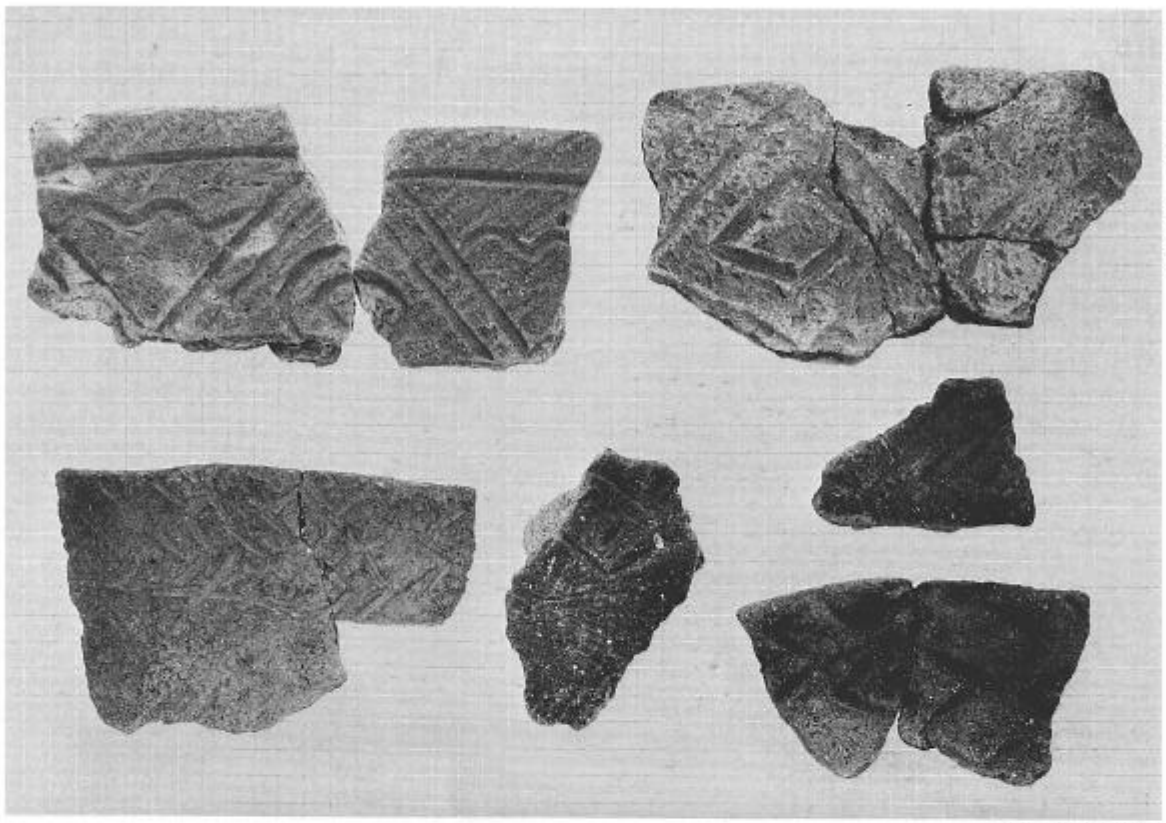


第Ⅰ群第8類

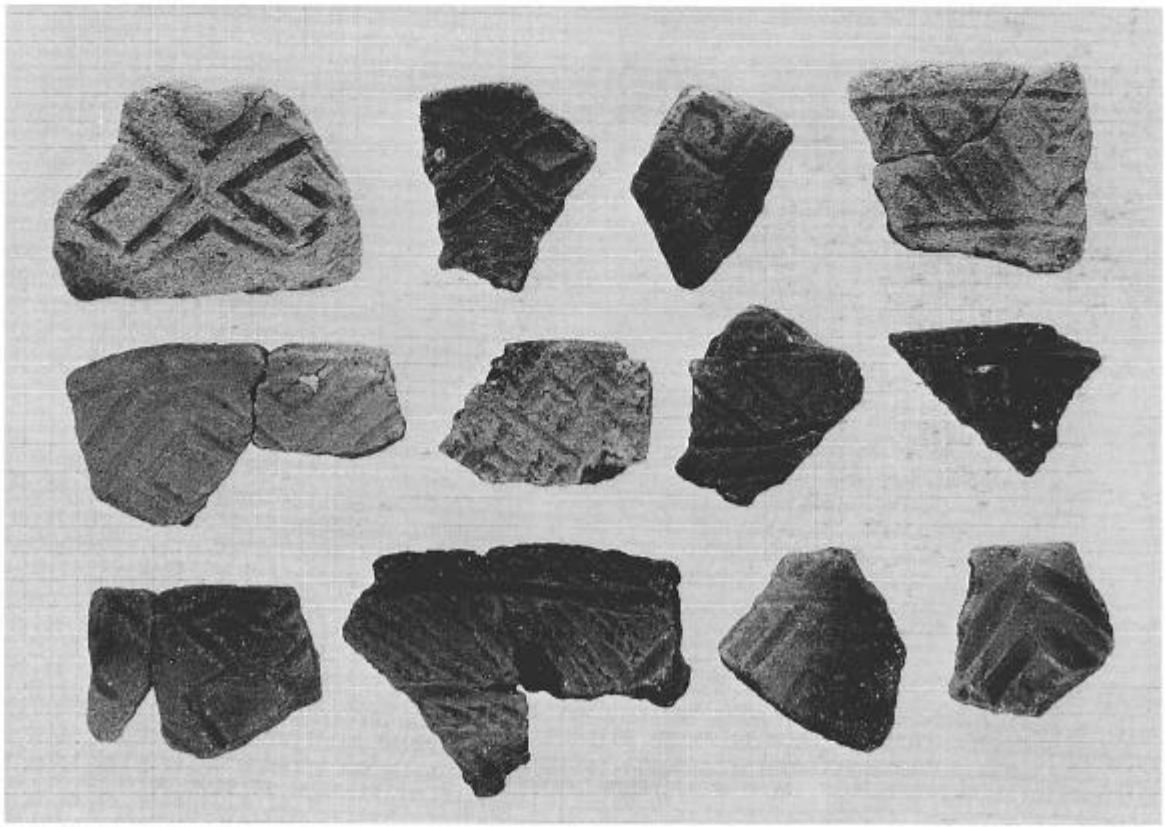


遺構外出土土器(25)

第Ⅰ群第8類

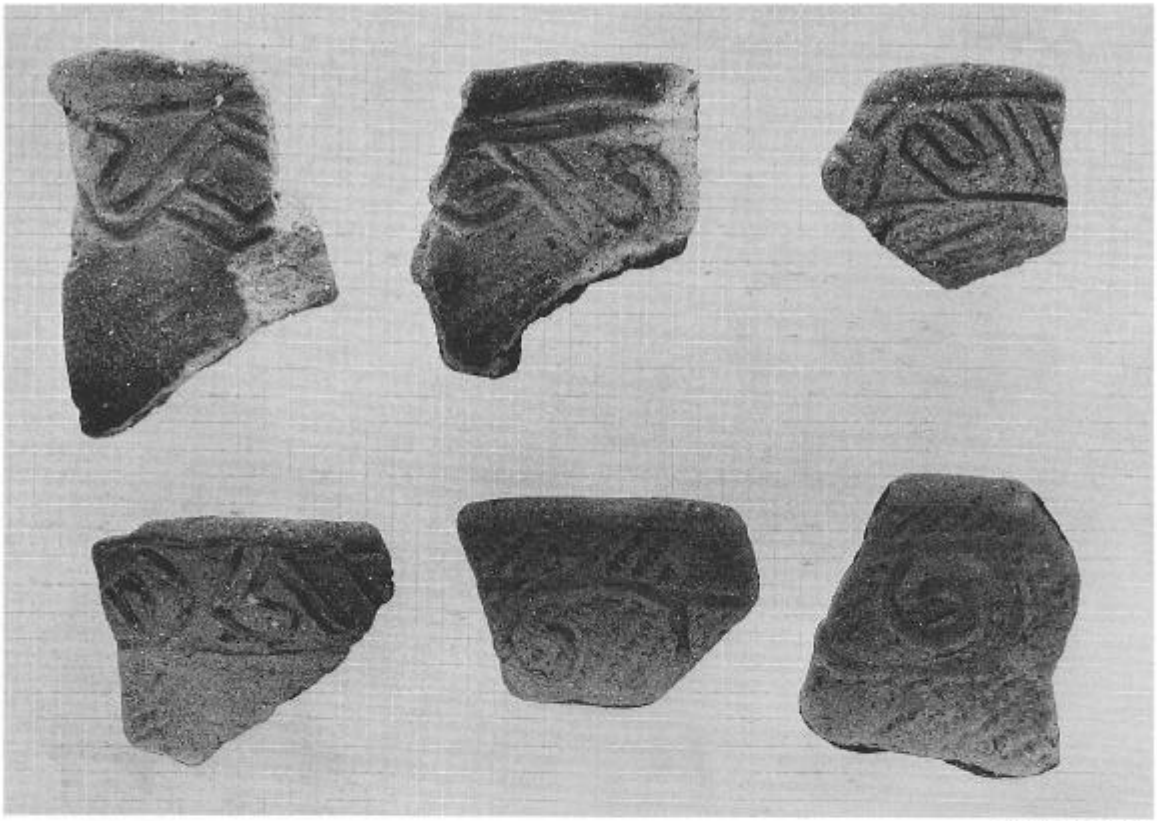


第Ⅰ群第9類

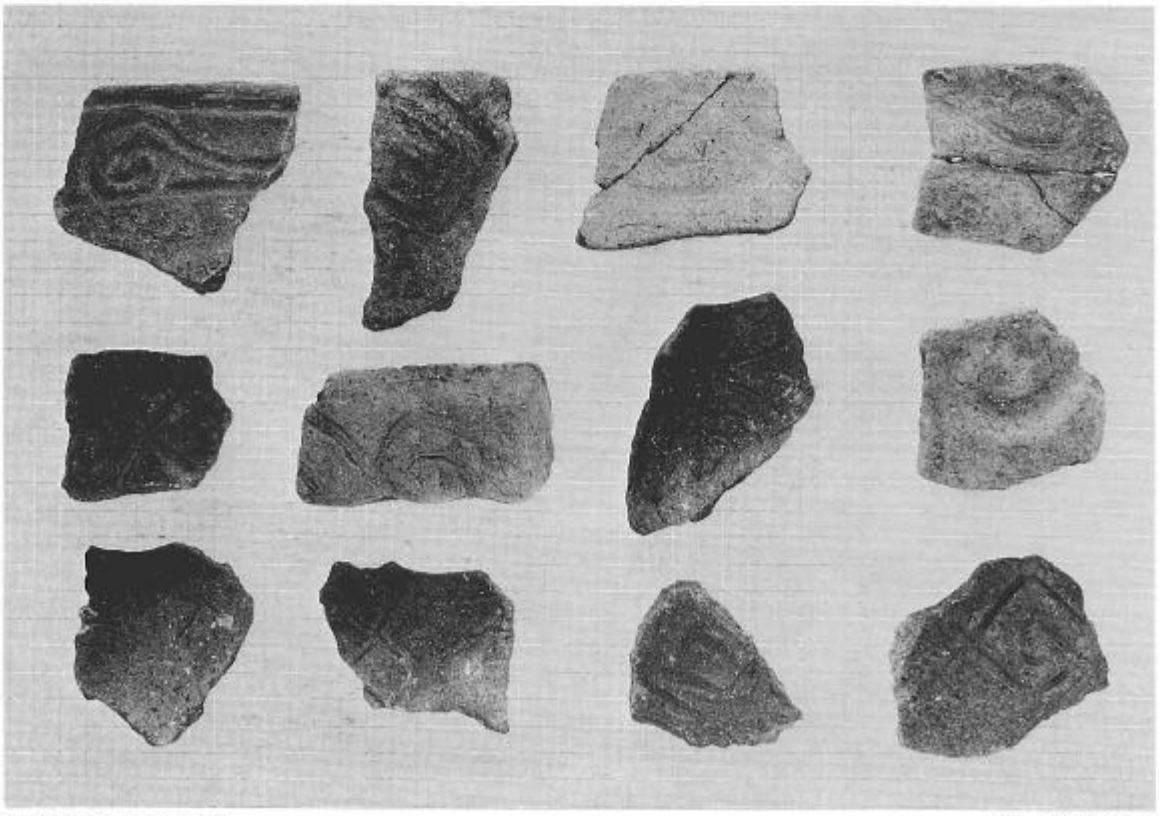


遺構外出土土器(26)

第Ⅰ群第9類

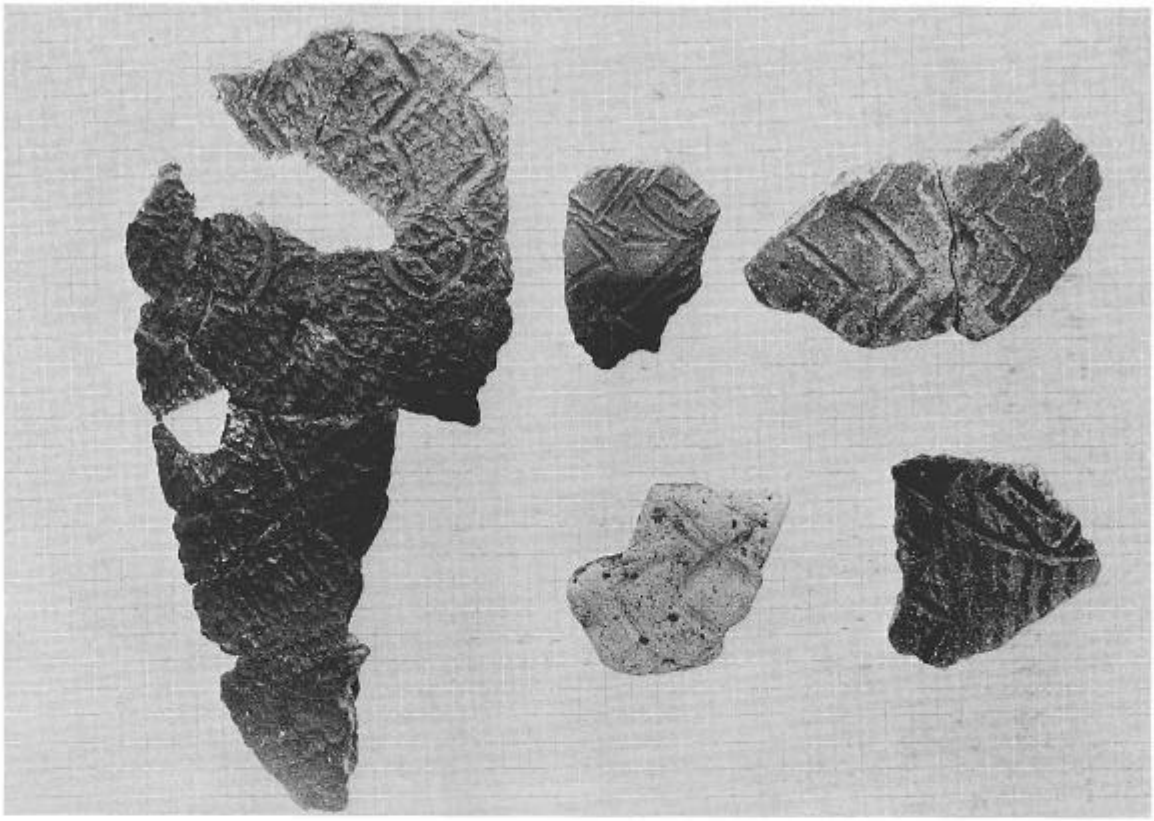


第Ⅰ群第9類

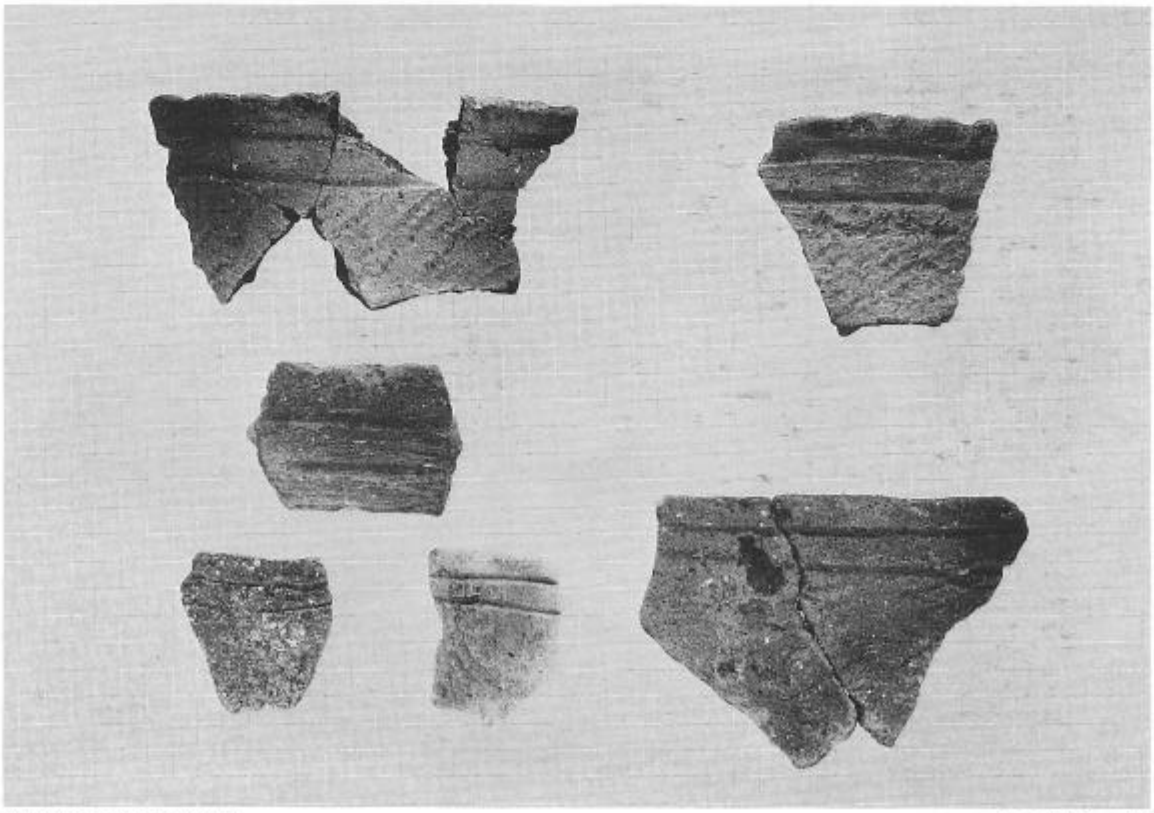


遺構外出土土器(27)

第Ⅰ群第9類

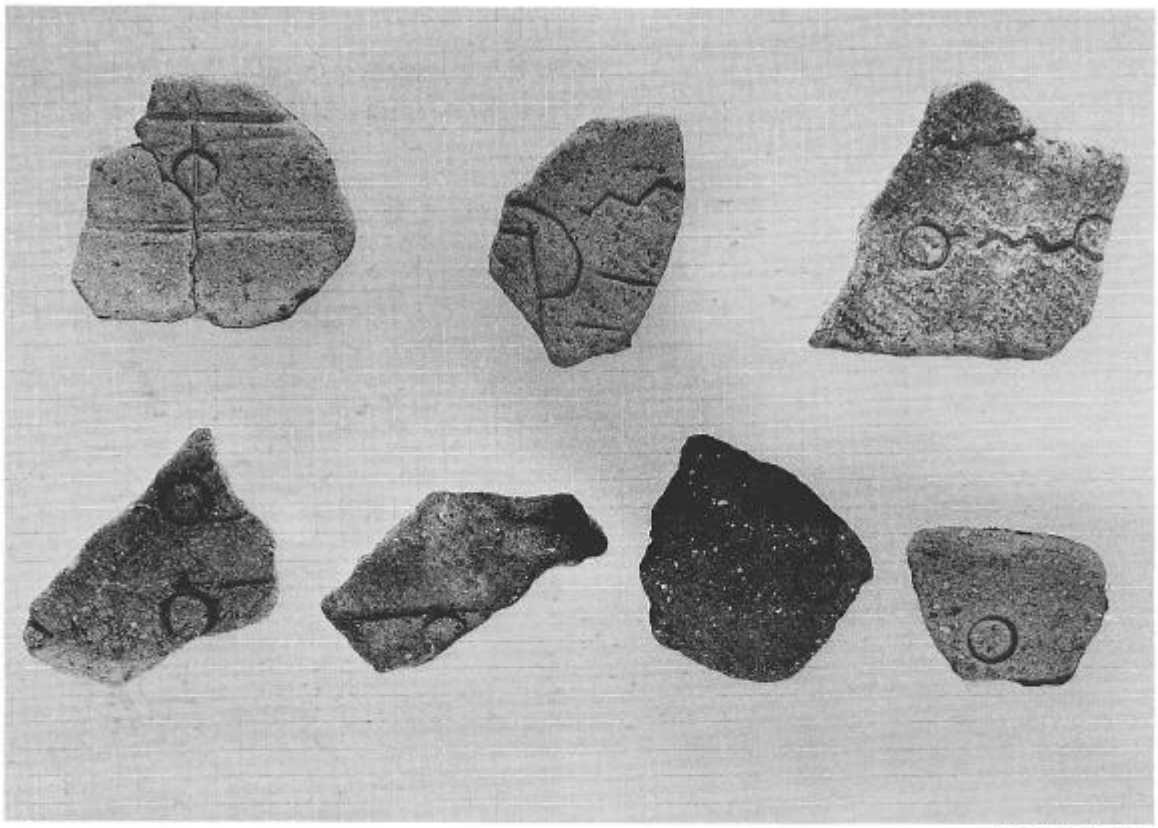


第Ⅰ群第10類

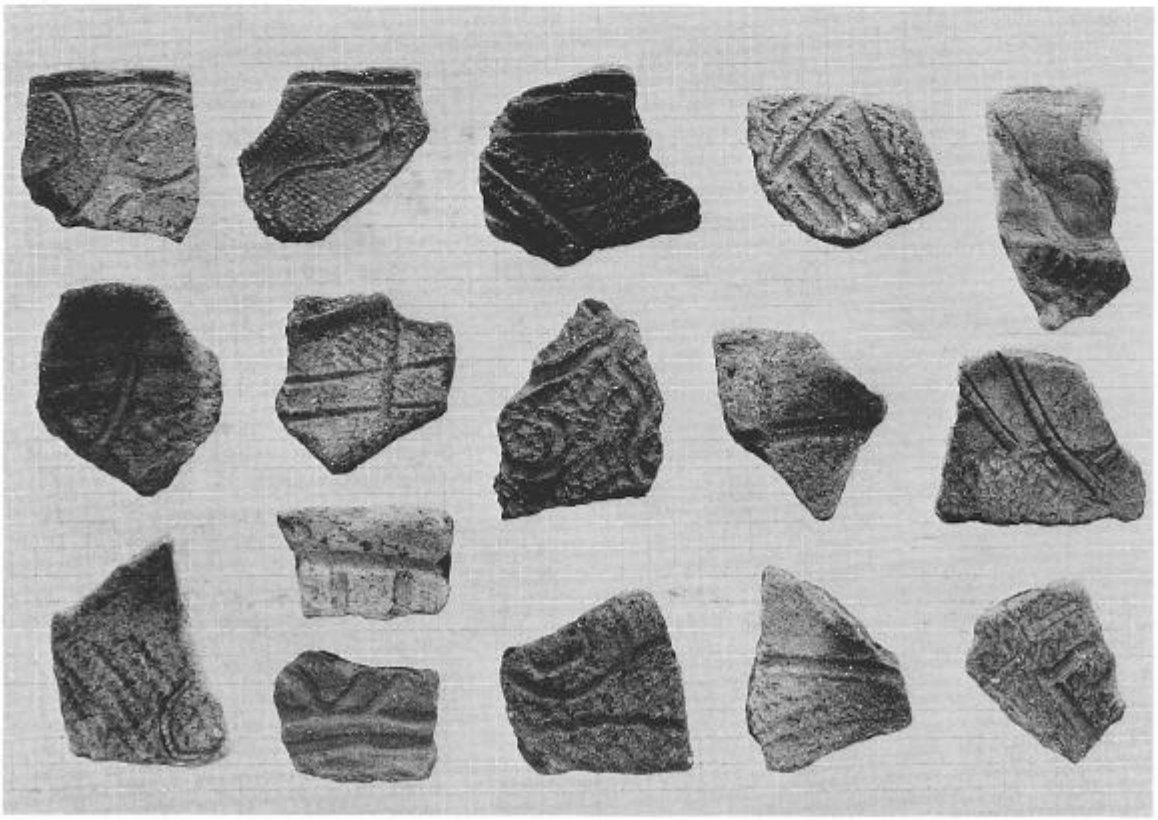


遺構外出土土器(28)

第Ⅰ群第11類

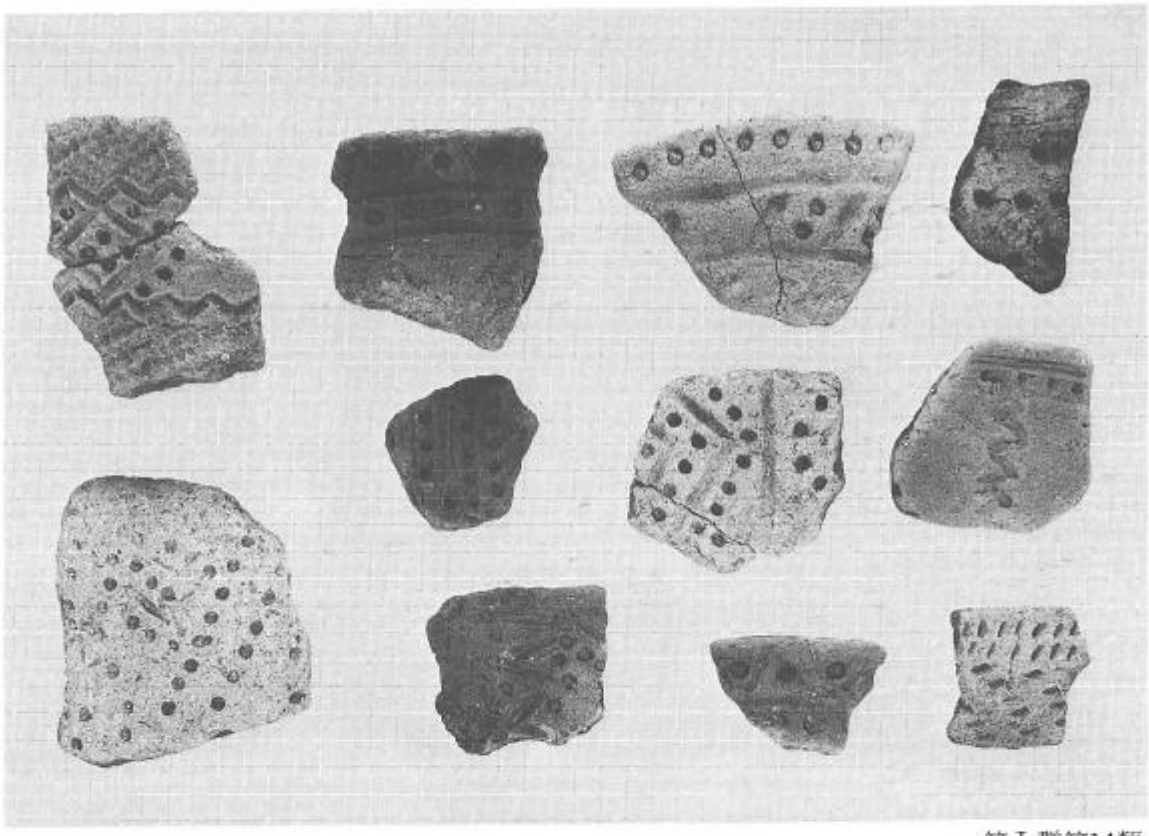


第Ⅰ群第12類

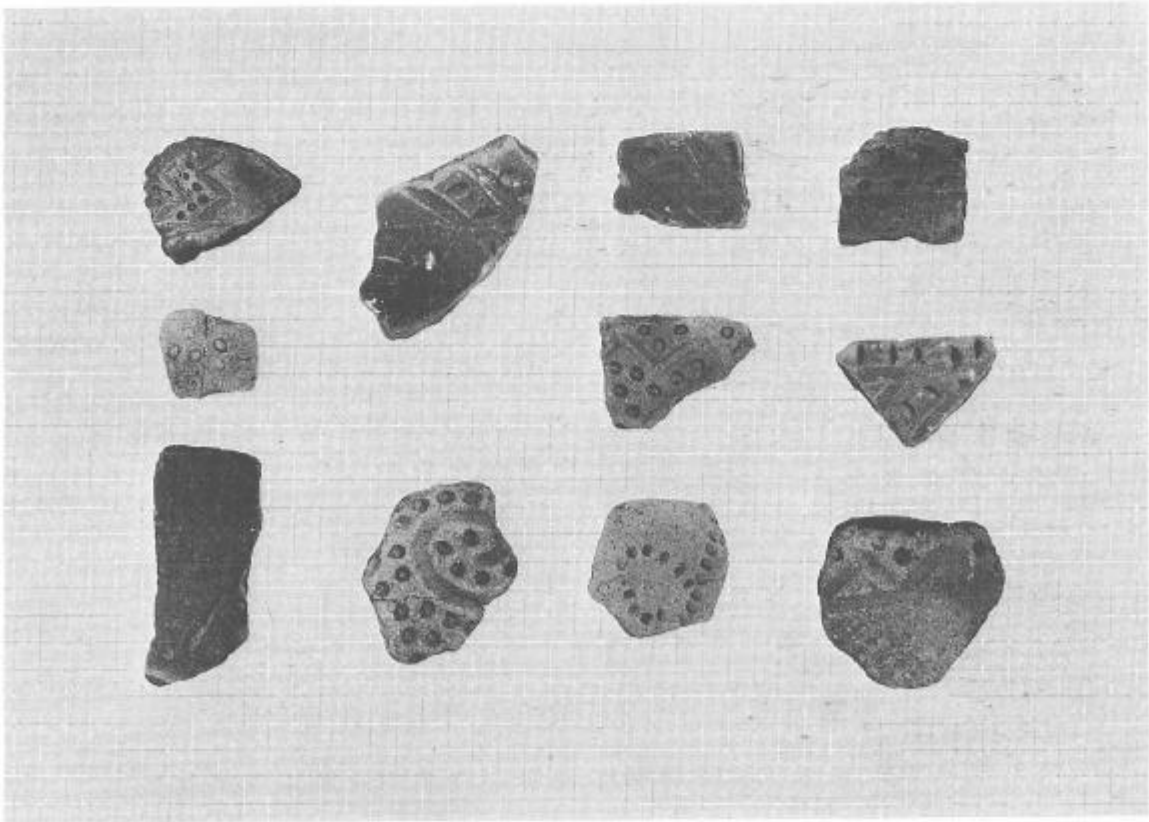


遺構外出土土器(29)

第Ⅰ群第13類

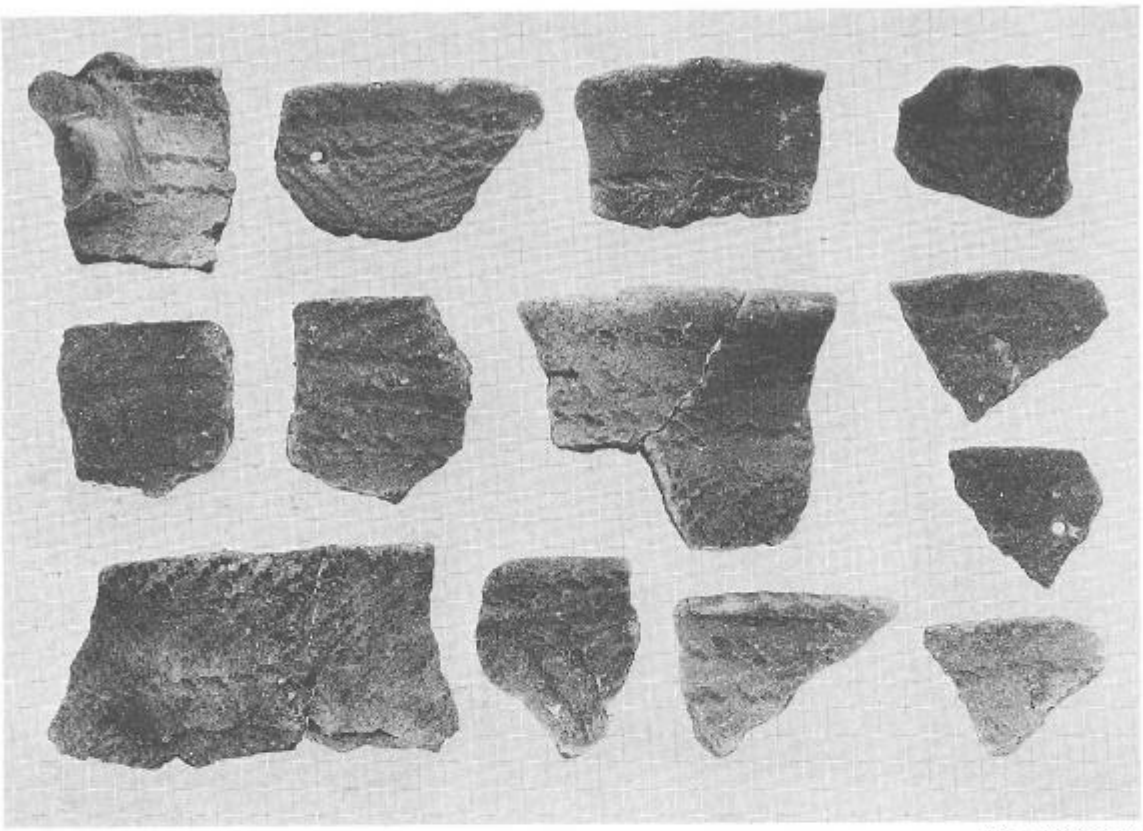


第Ⅰ群第14類

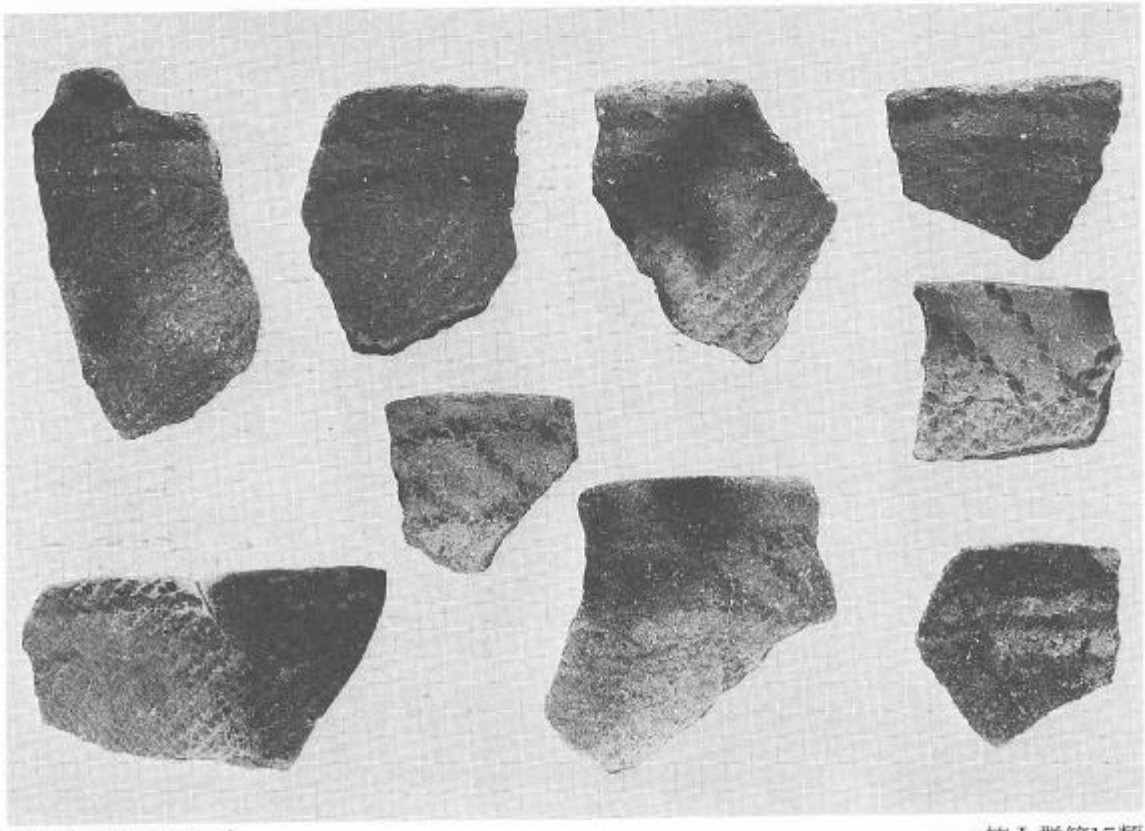


遺構外出土土器(30)

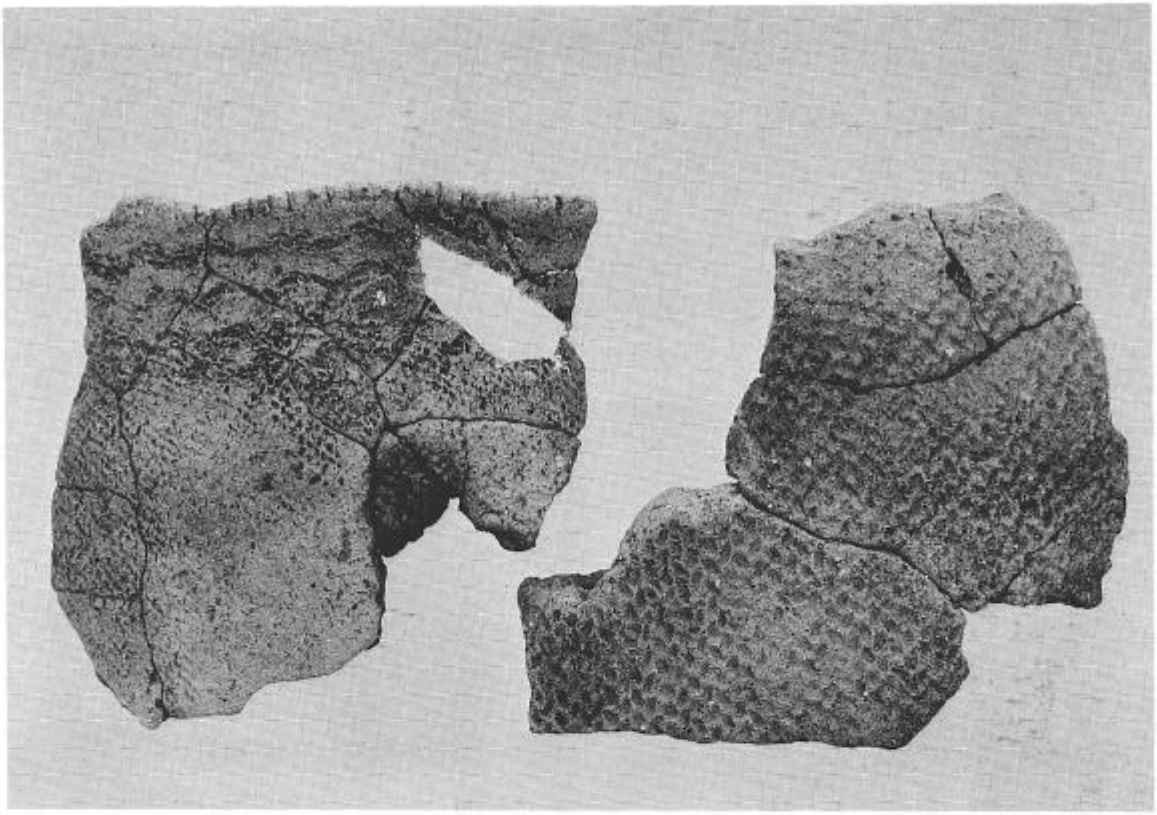
第Ⅰ群第14類



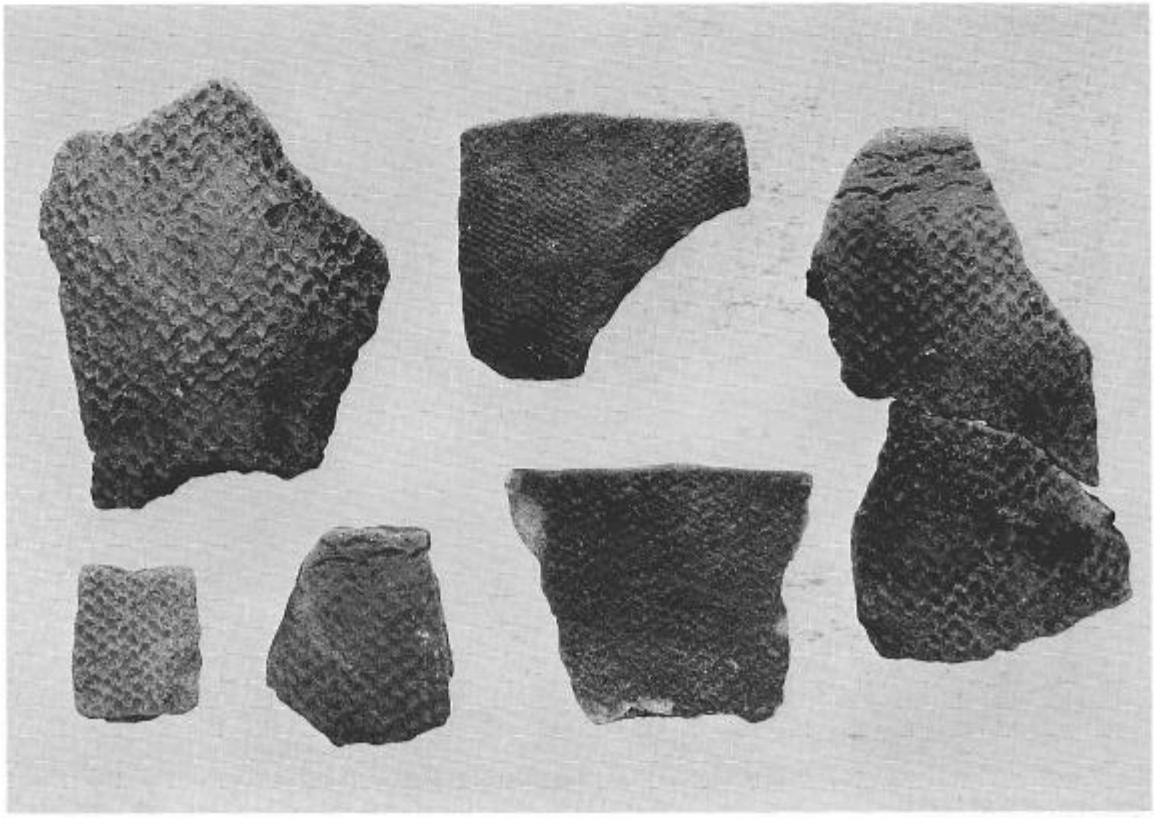
第Ⅰ群第15類



遺構外出土土器(31)　　第Ⅰ群第15類

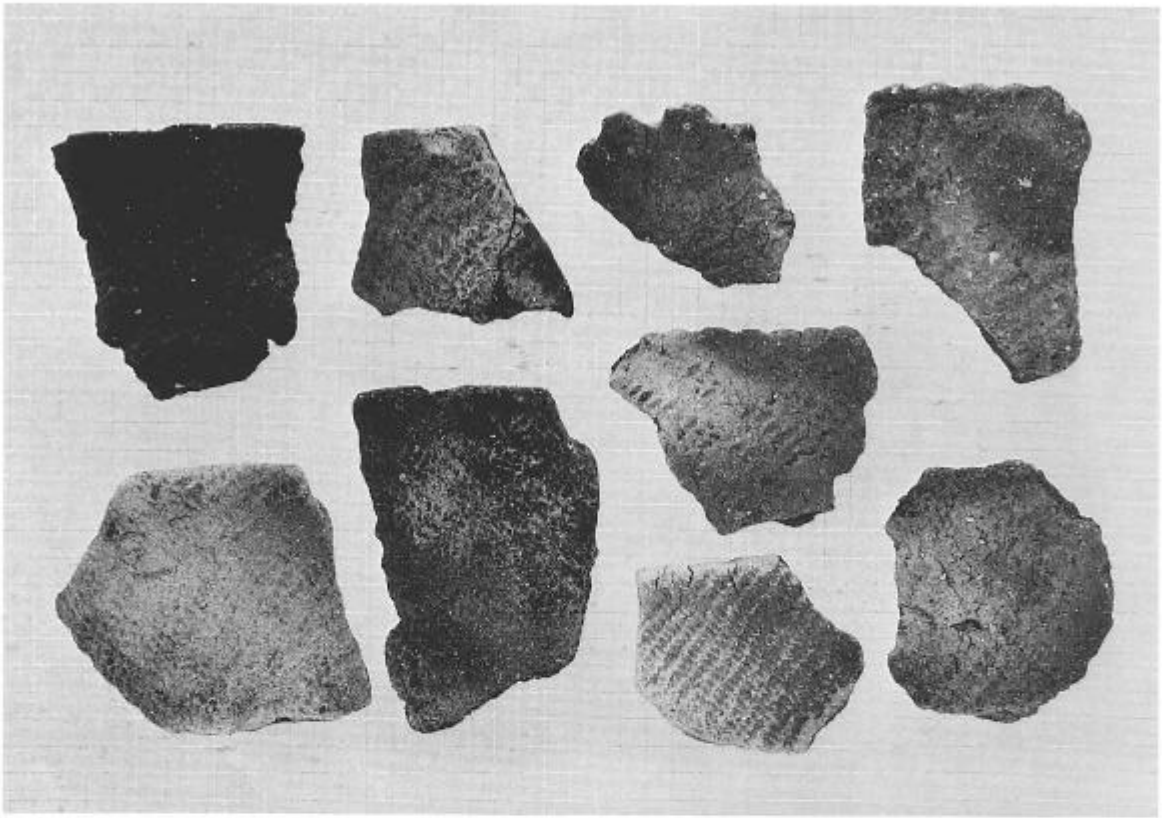


第Ⅰ群第16類

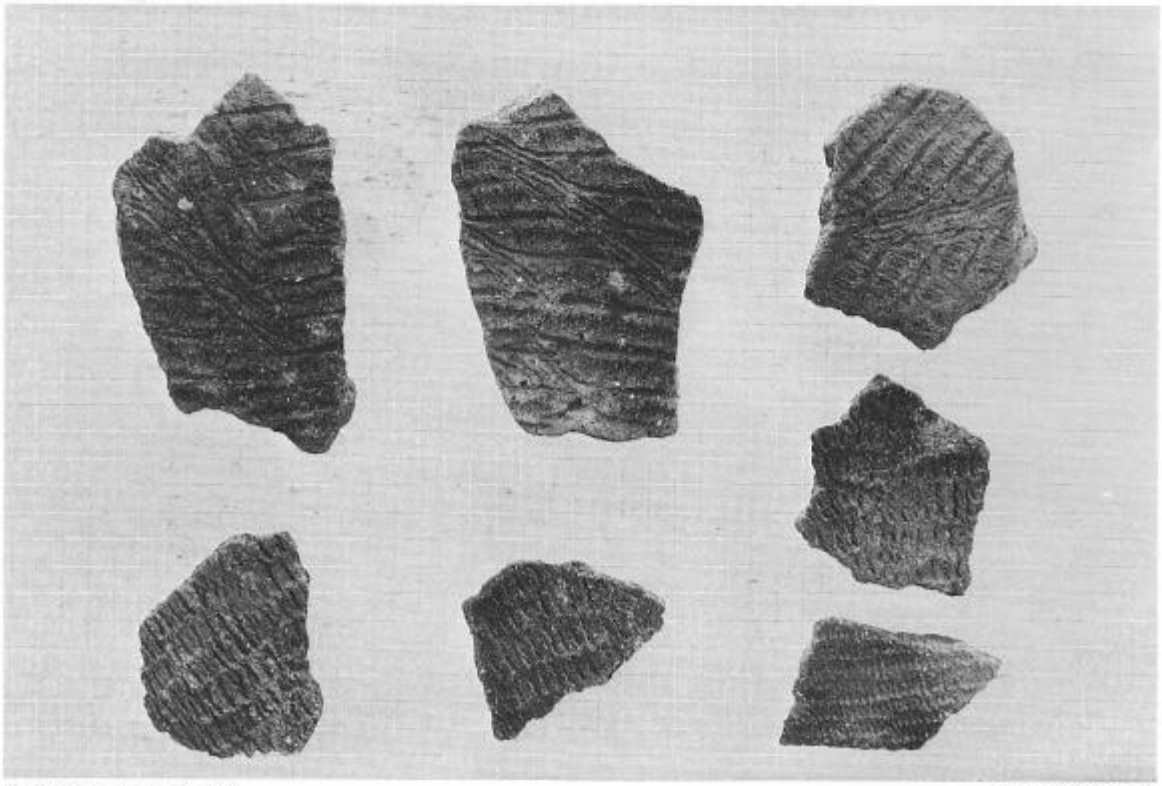


遺構外出土土器(32)

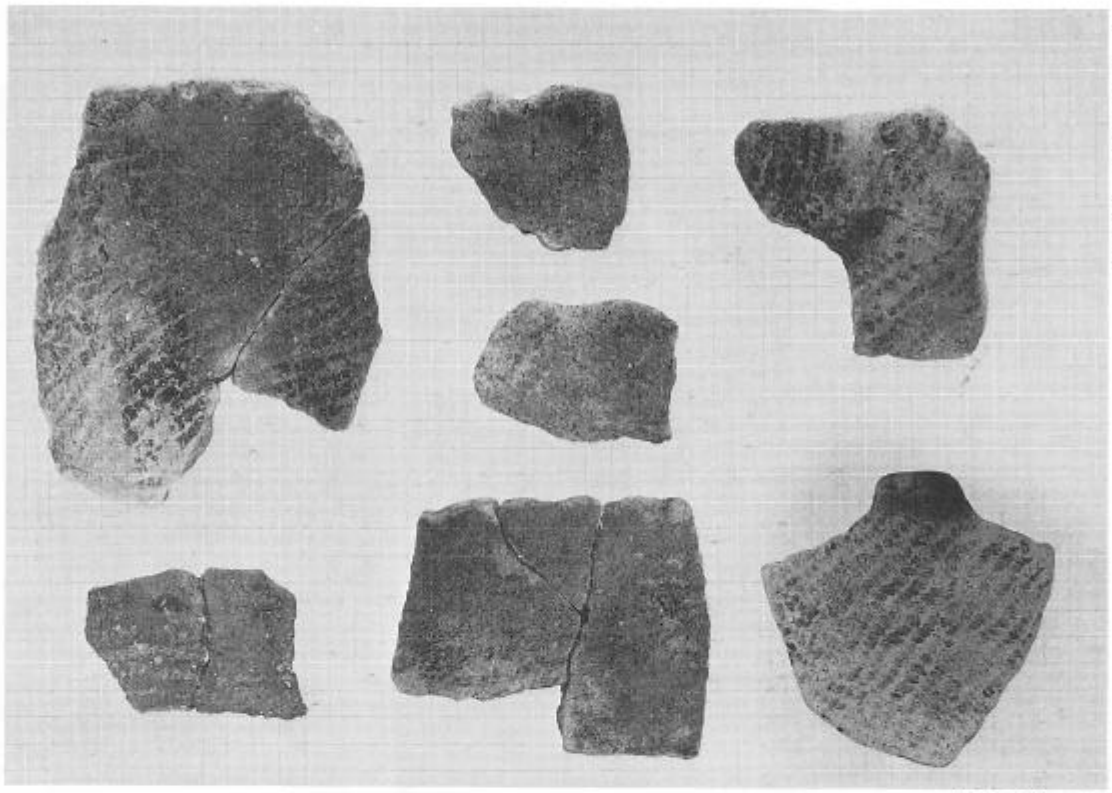
第Ⅰ群第16類



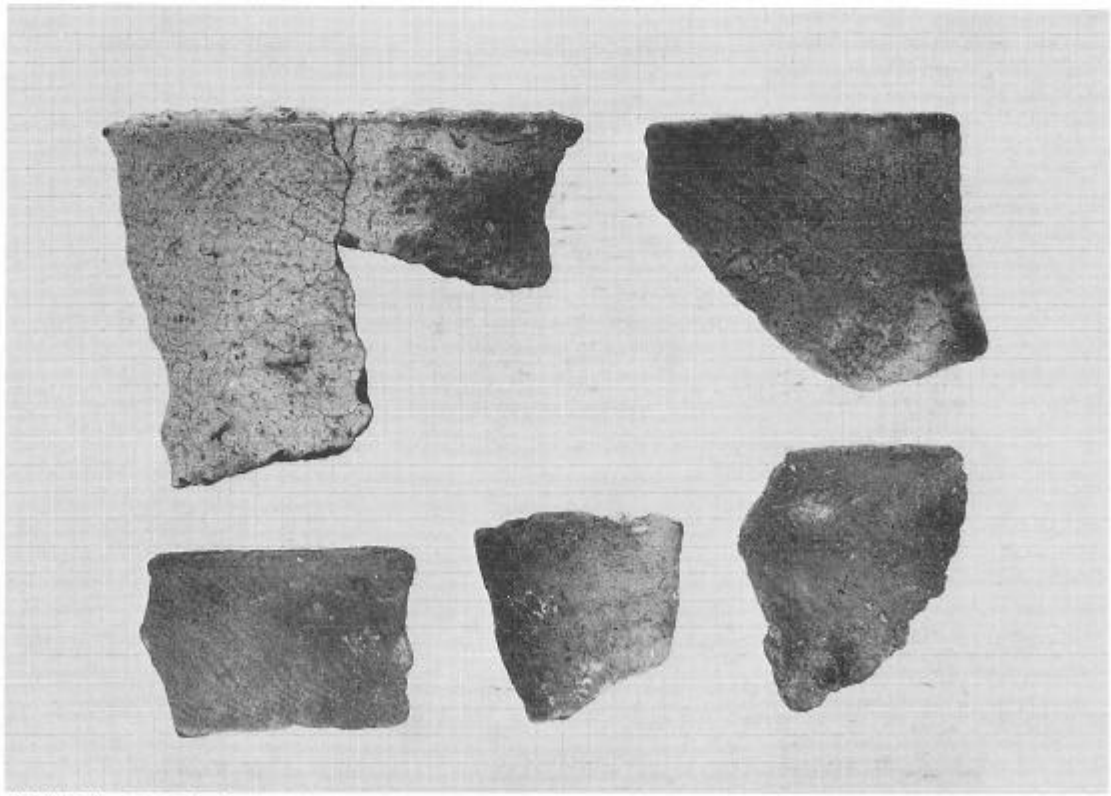
第Ⅰ群第17類



遺構外出土土器(33)　　第Ⅰ群第17類

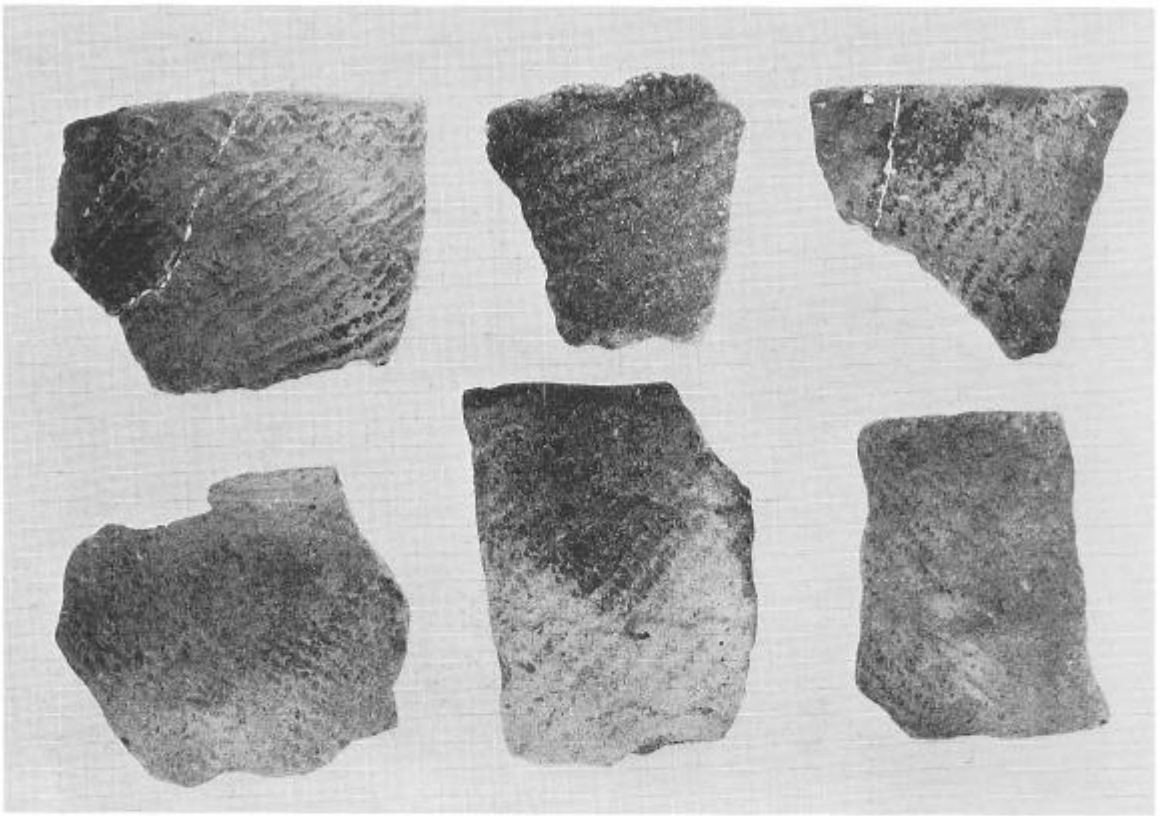


第Ⅰ群第17類

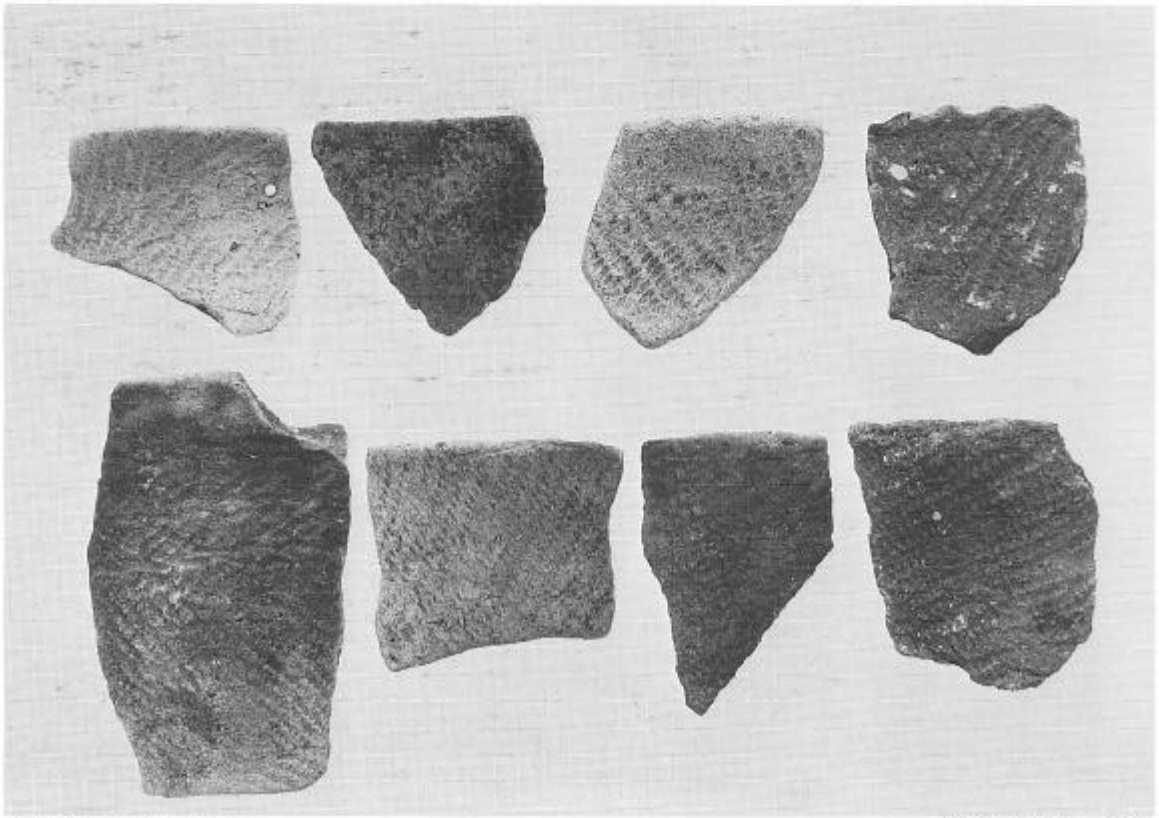


遺構外出土土器(34)

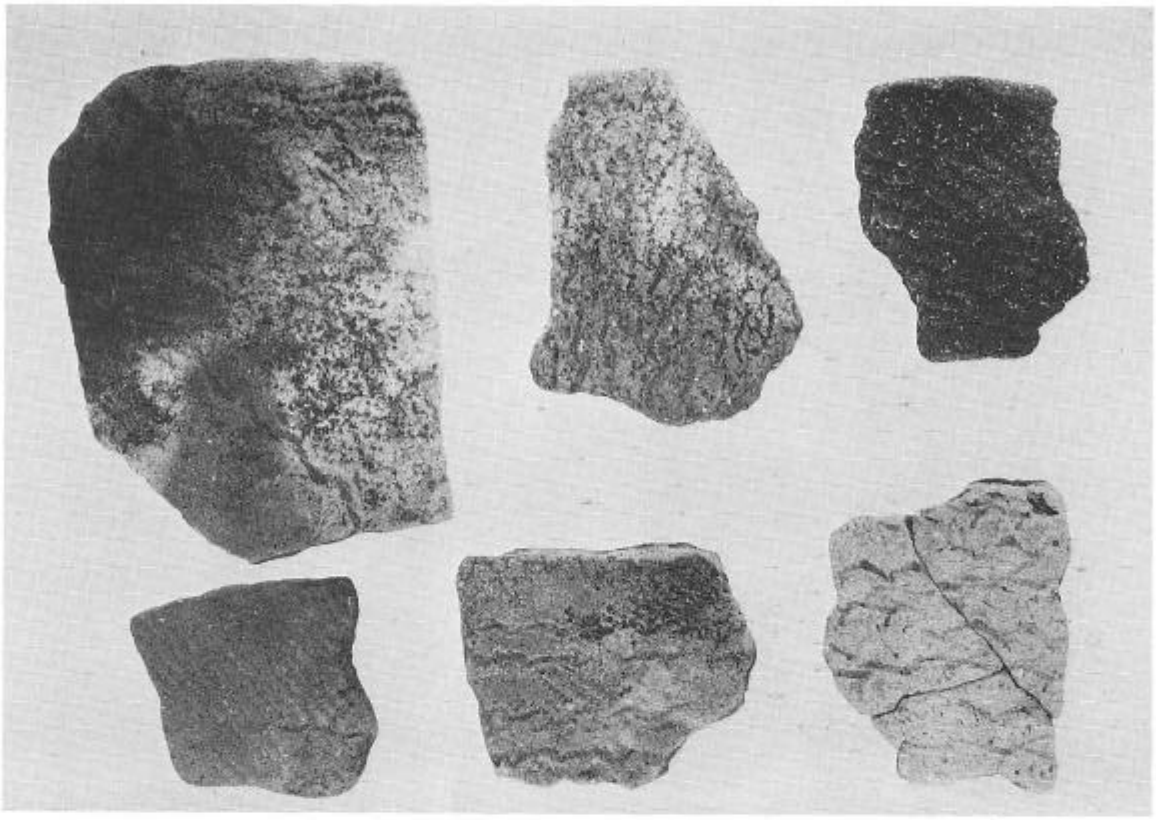
第Ⅰ群第17類



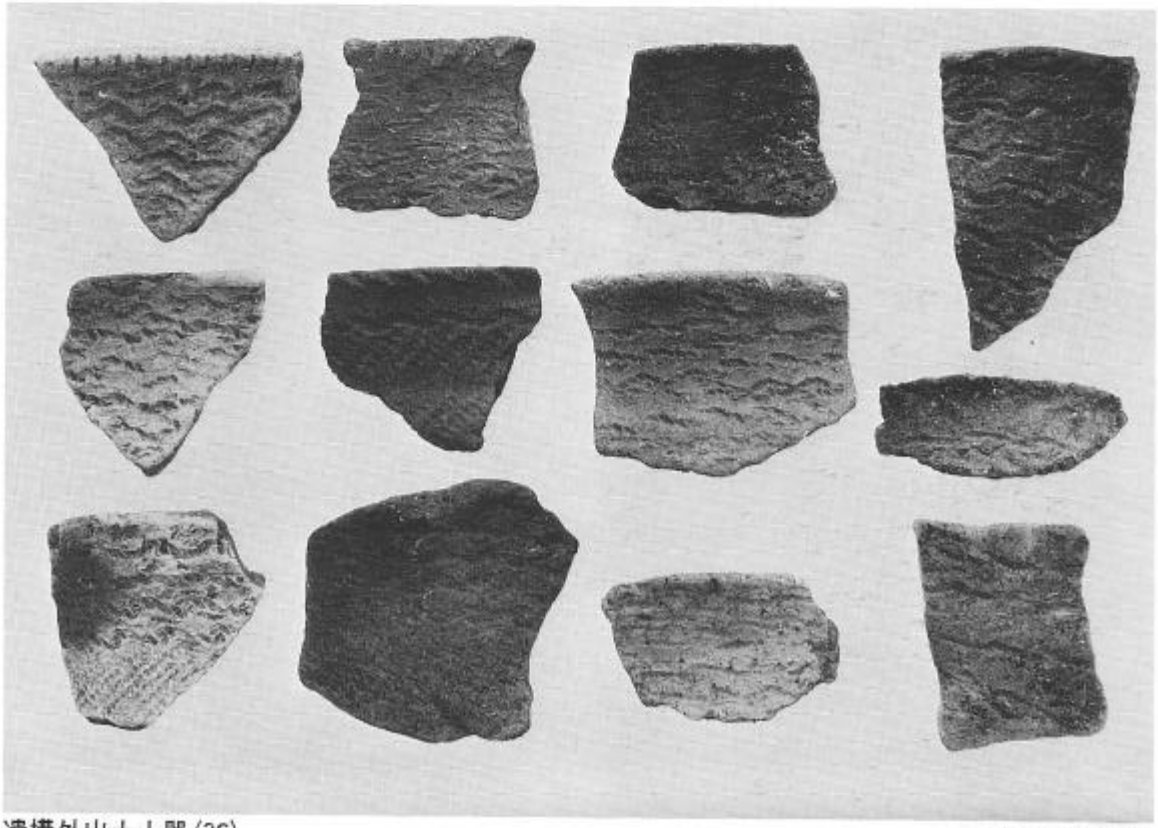
第Ⅰ群第17類



遺構外出土土器(35)　　第Ⅰ群第17・18類

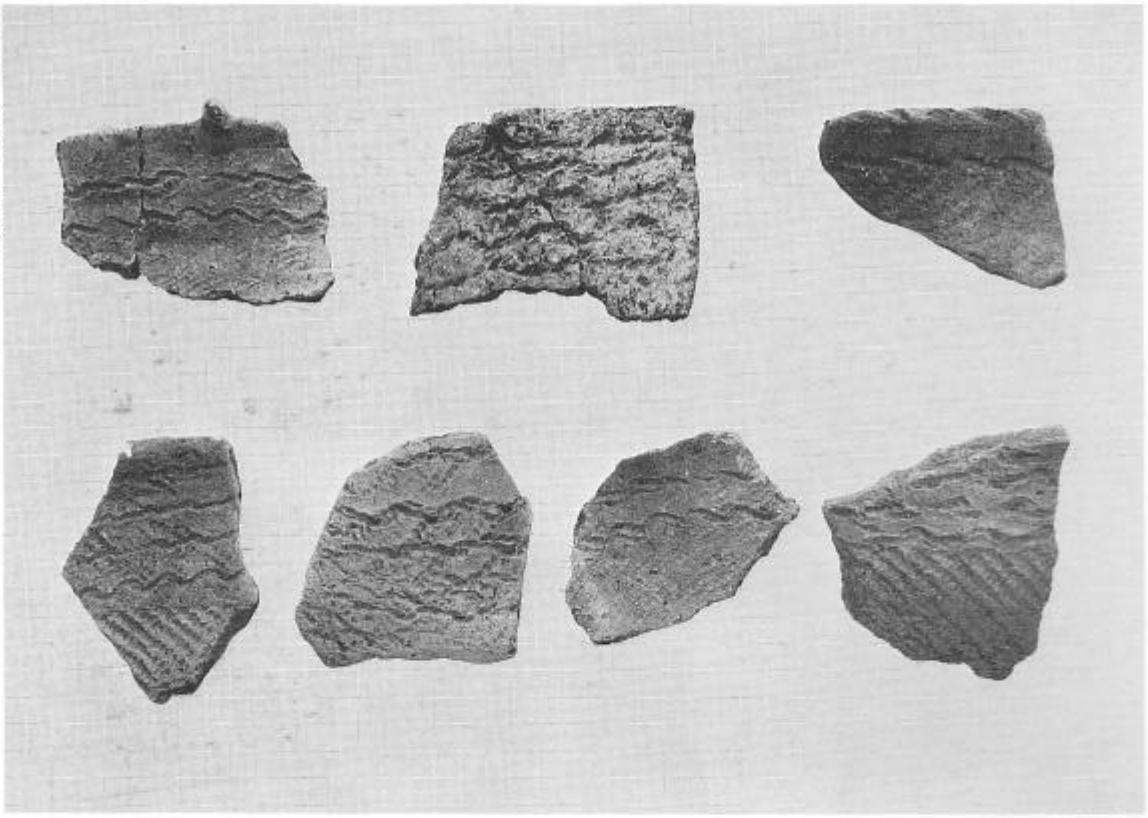


第Ⅰ群第18類

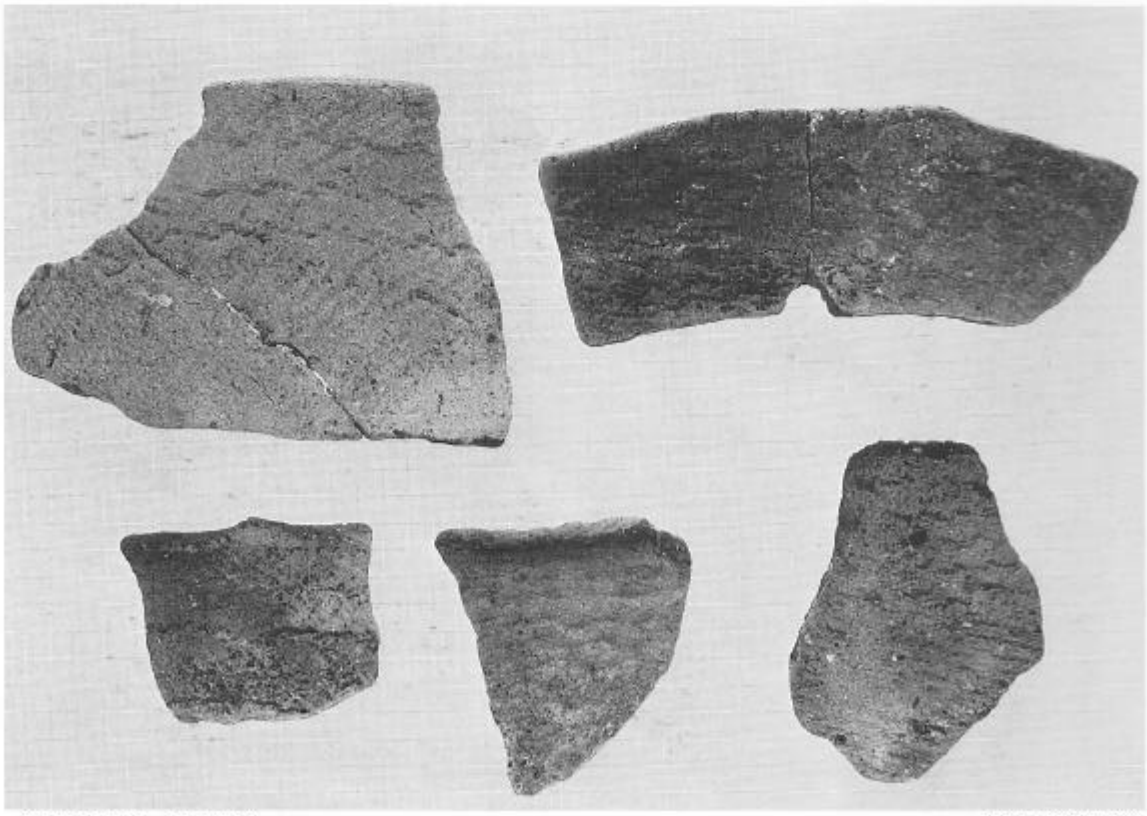


遺構外出土土器(36)

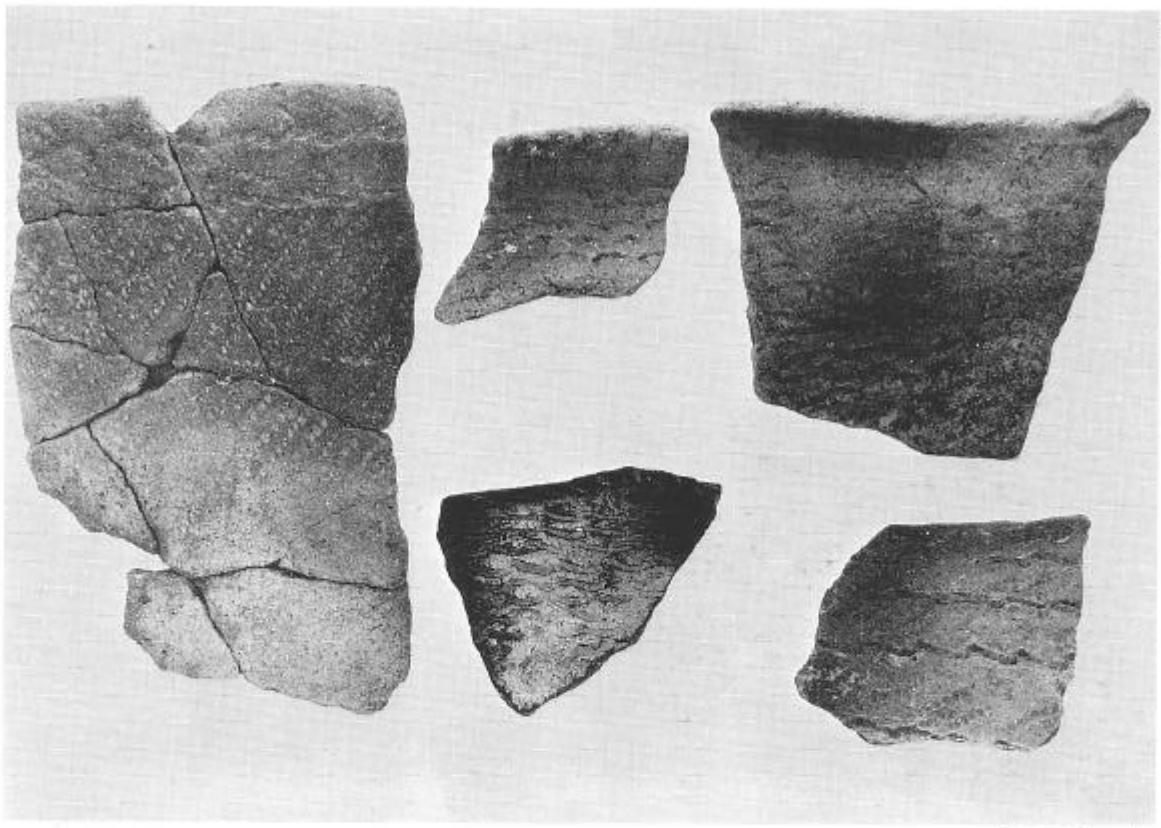
第Ⅰ群第18類



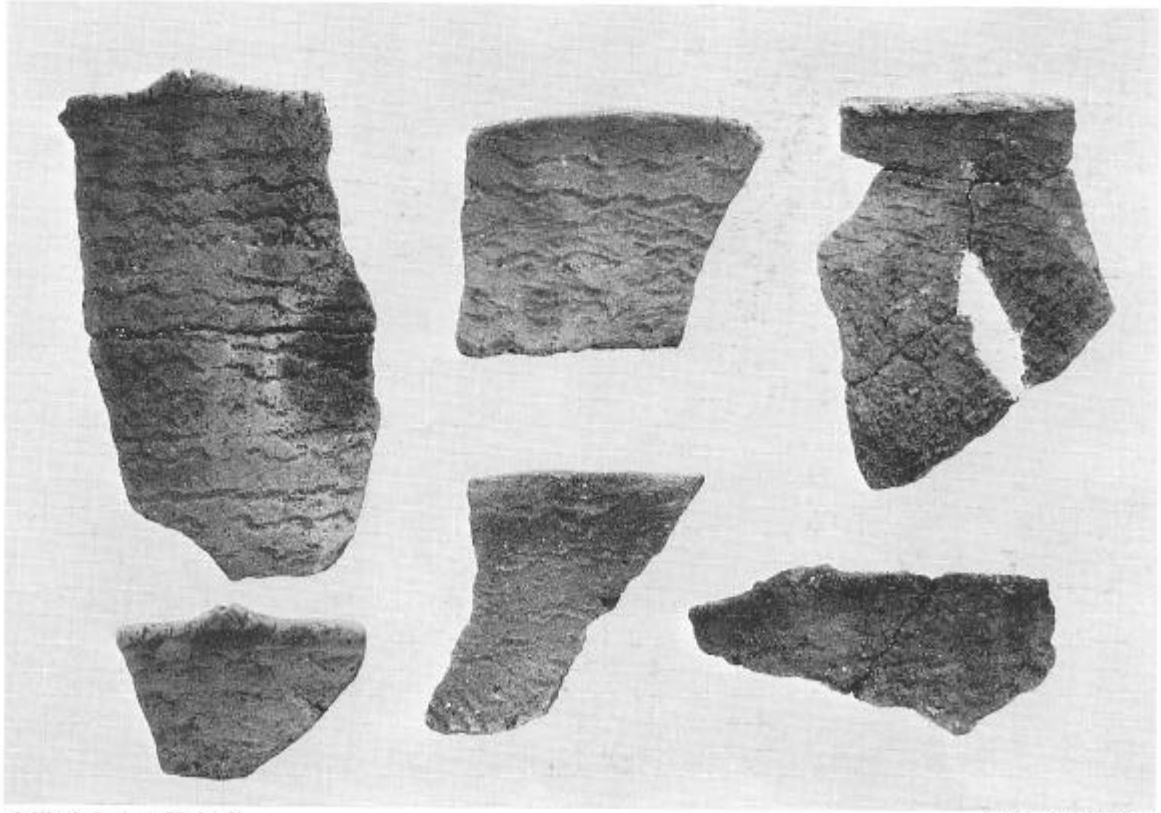
第Ⅰ群第18類



遺構外出土土器(37)　　第Ⅰ群第18類

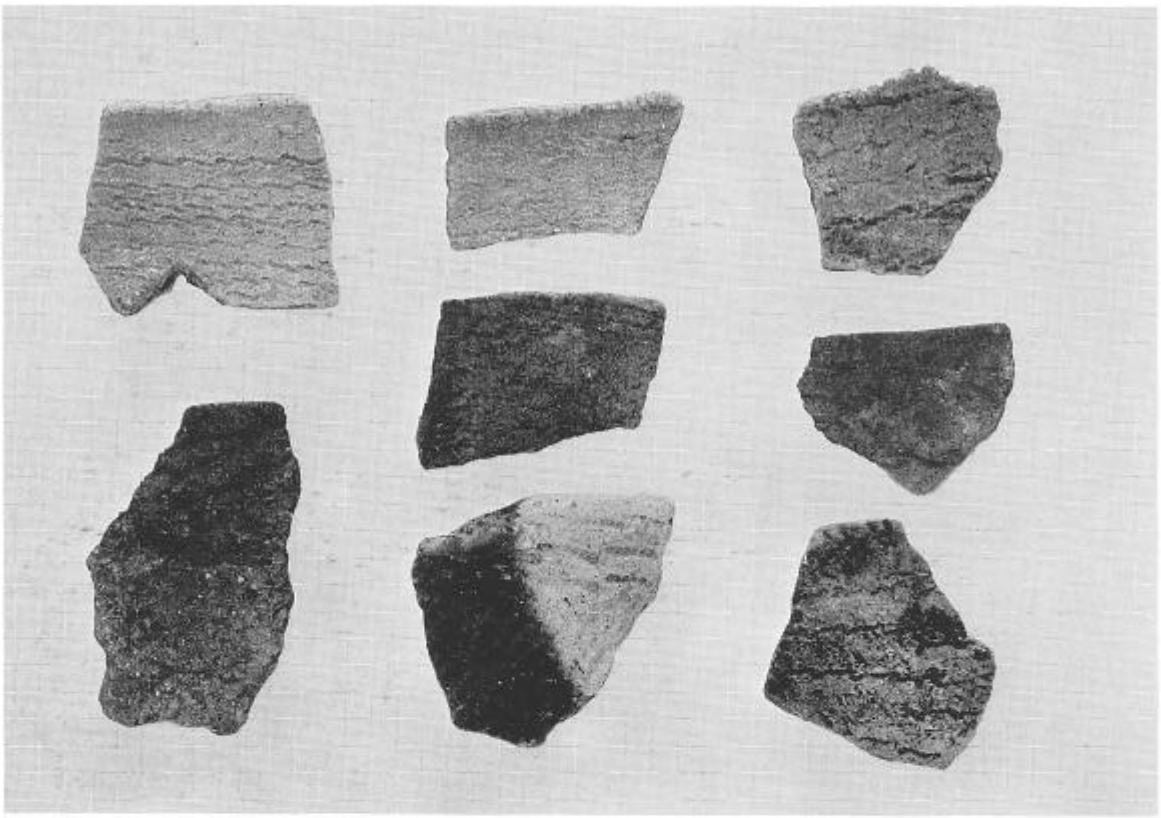


第Ⅰ群第18類

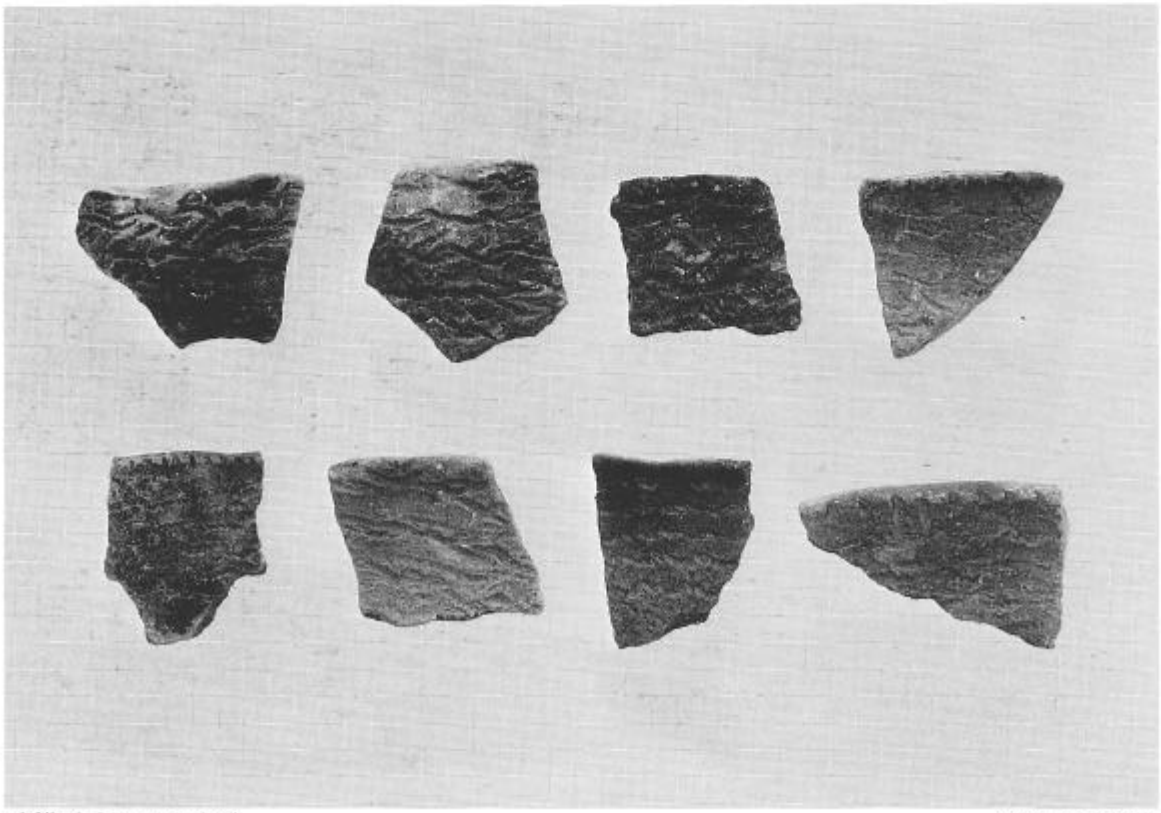


遺構外出土土器(38)

第Ⅰ群第18類

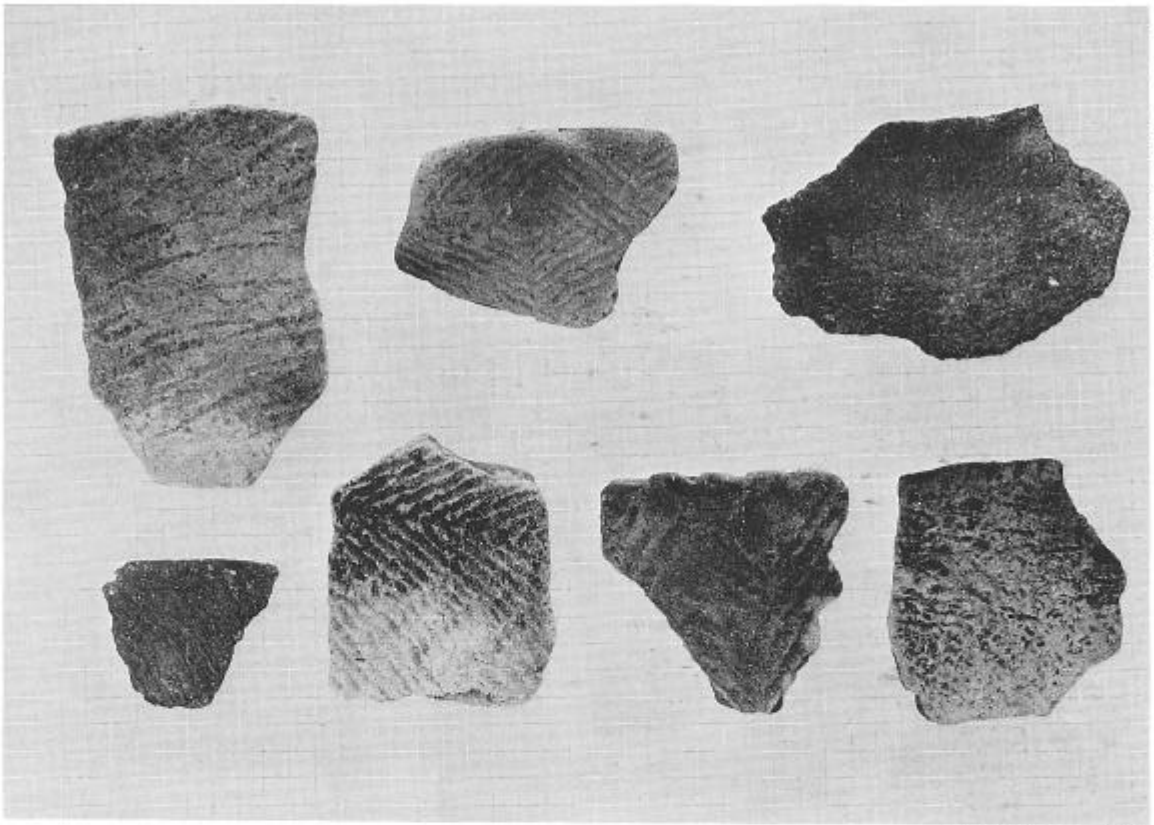


第Ⅰ群第18類

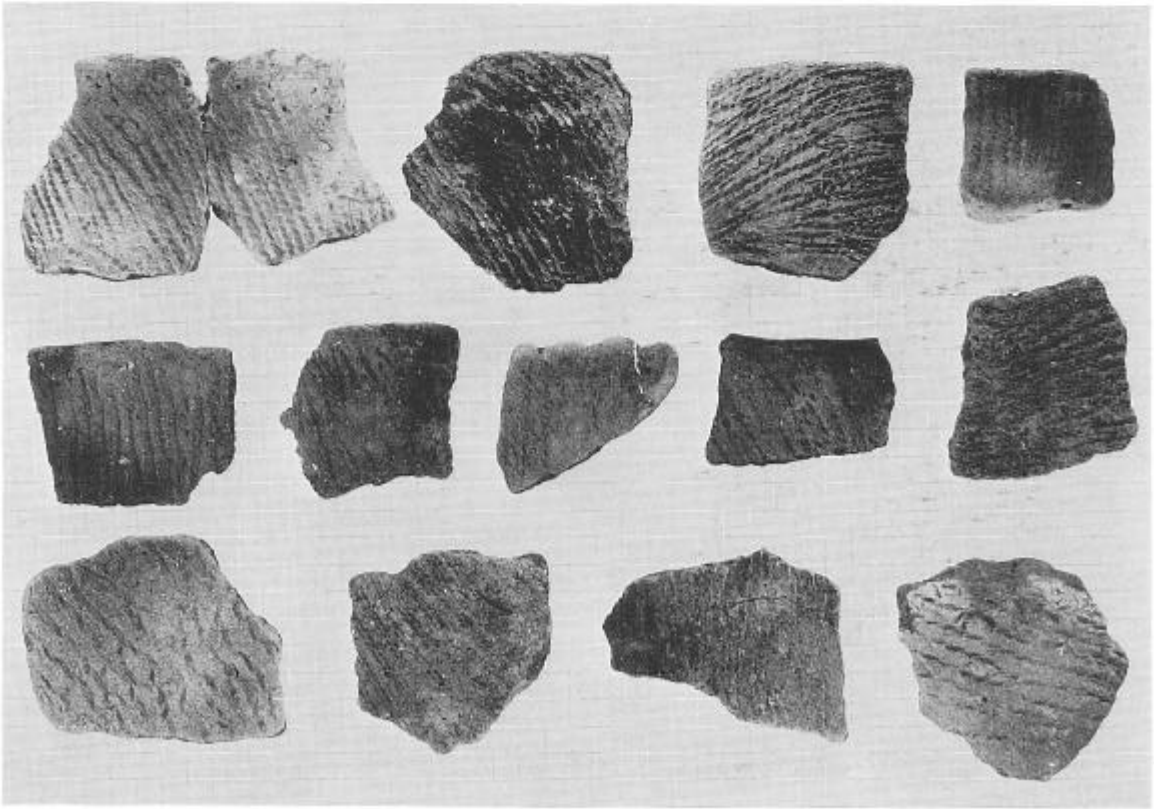


遺構外出土土器(39)

第Ⅰ群第18類

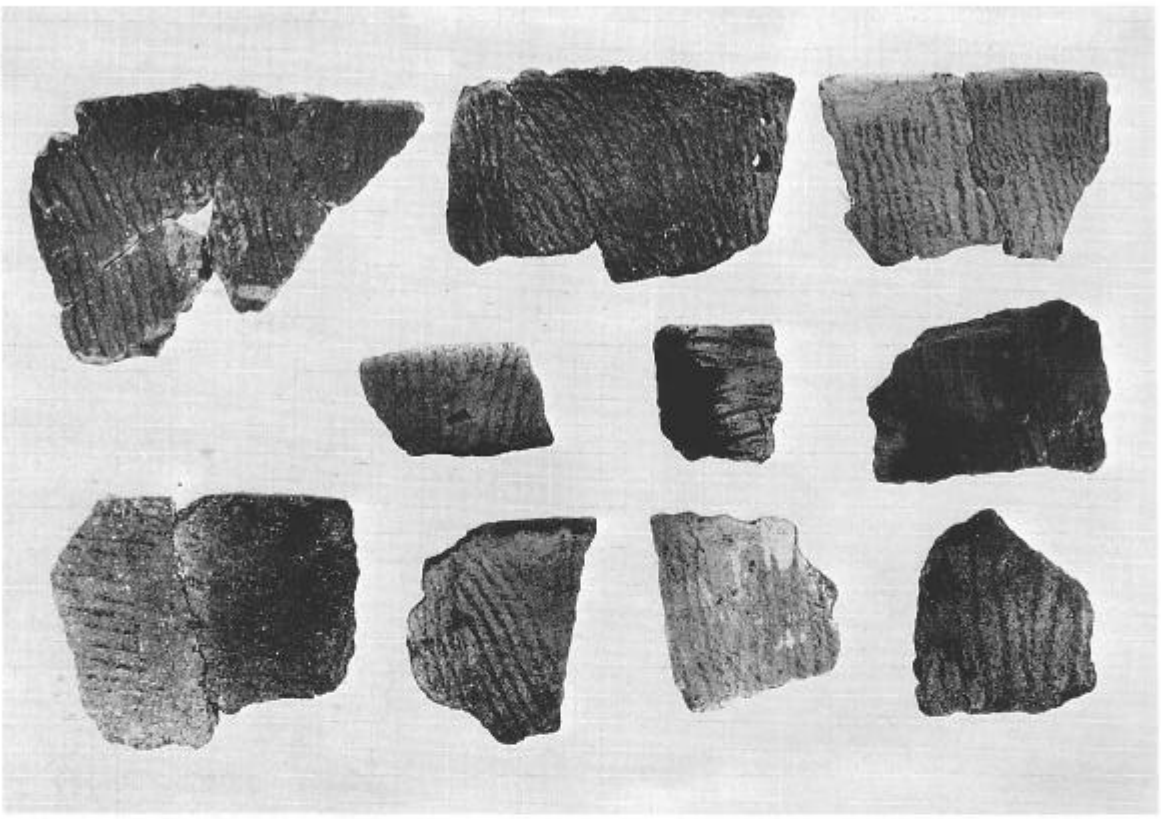


第Ⅰ群第17・19類

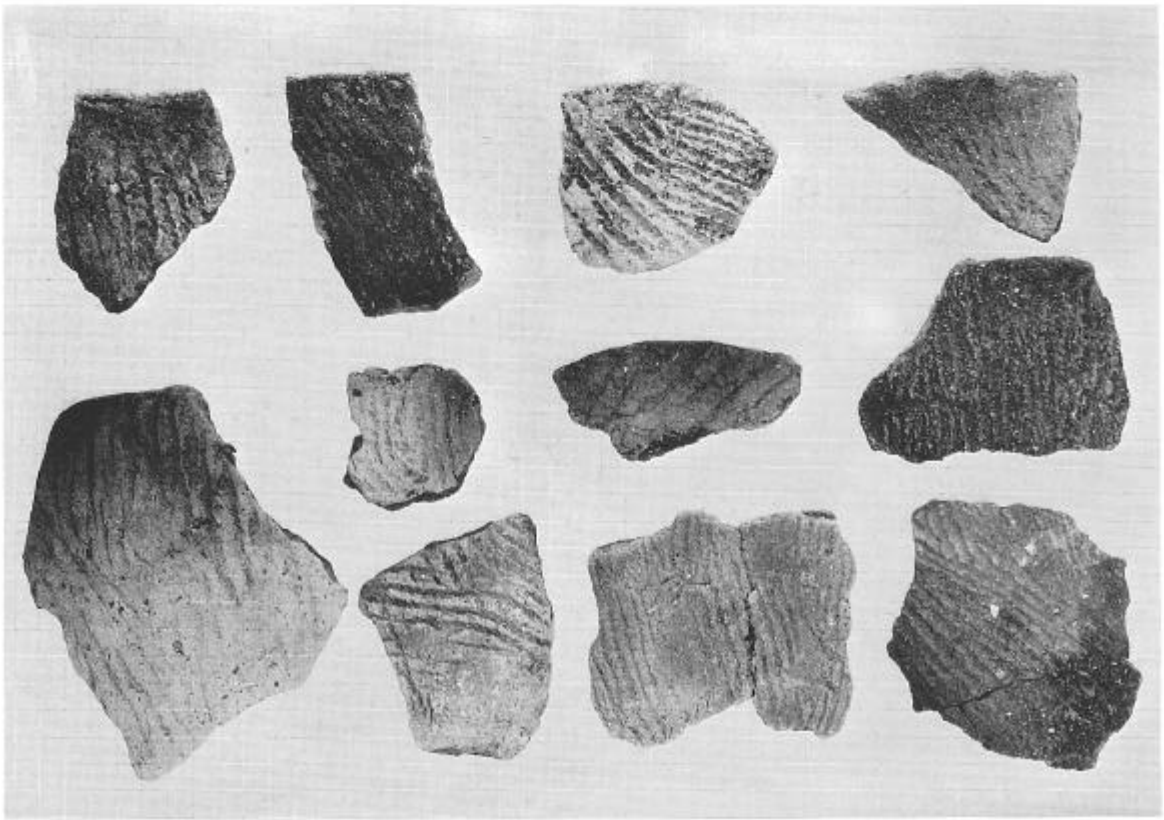


遺構外出土土器(40)

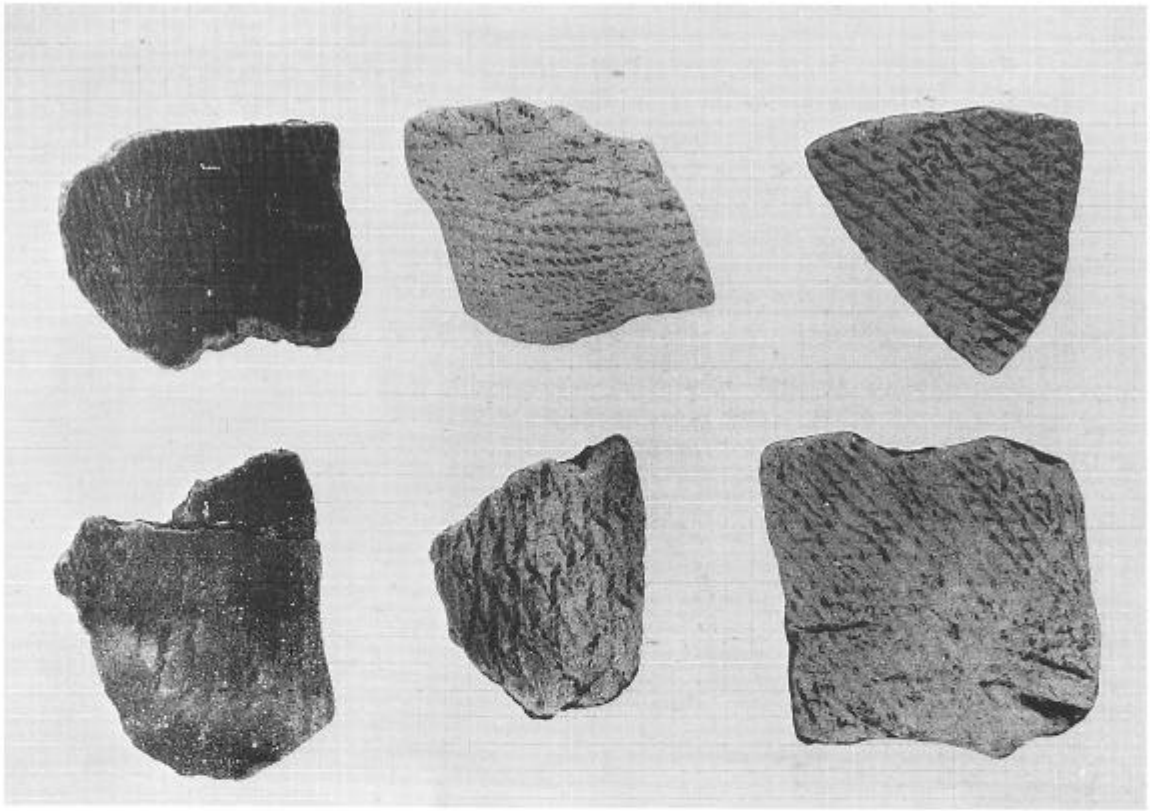
第Ⅰ群第20類



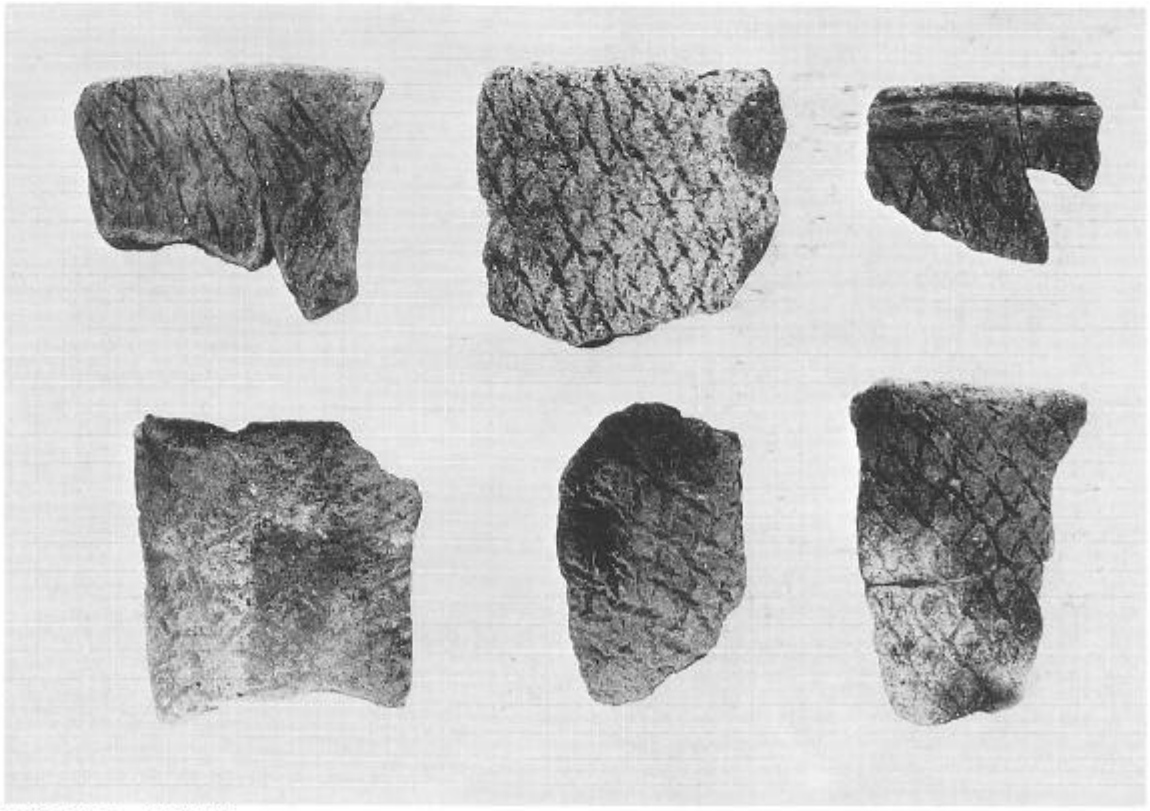
第Ⅰ群第20類



遺構外出土土器(41)　　第Ⅰ群第20類

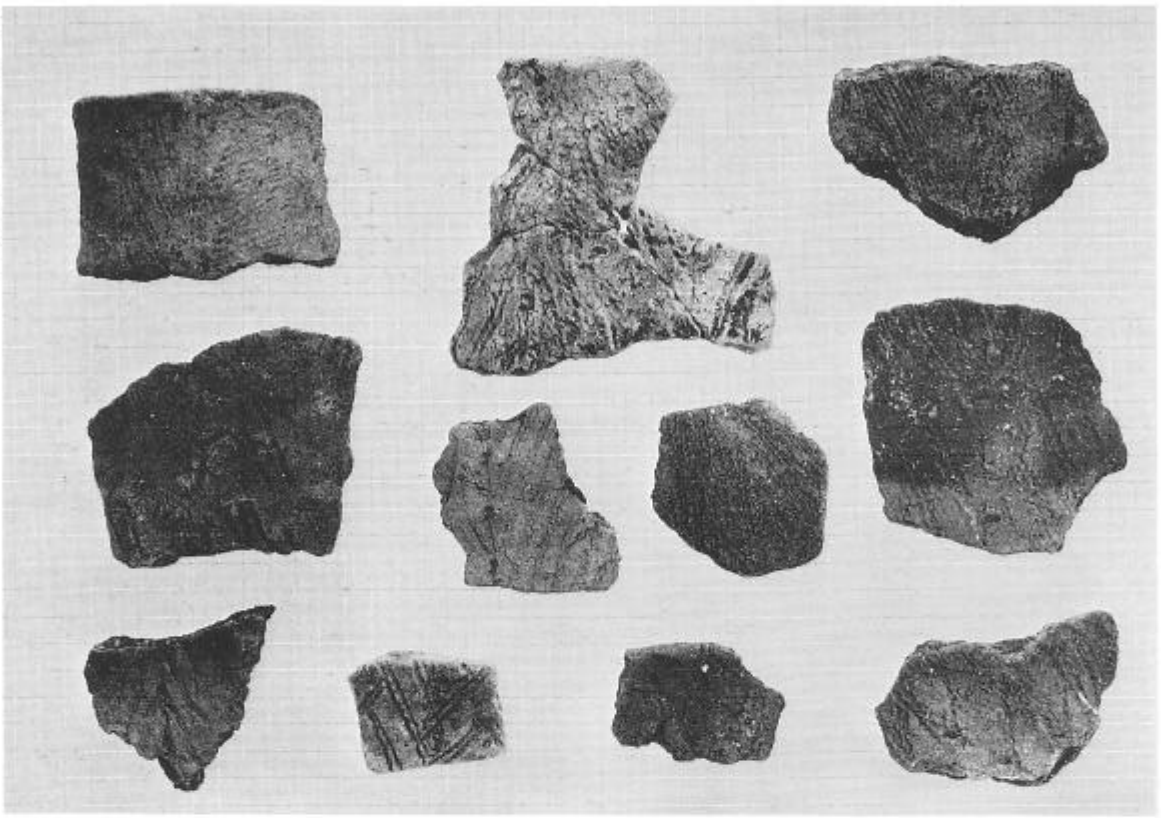


第Ⅰ群第20・21類

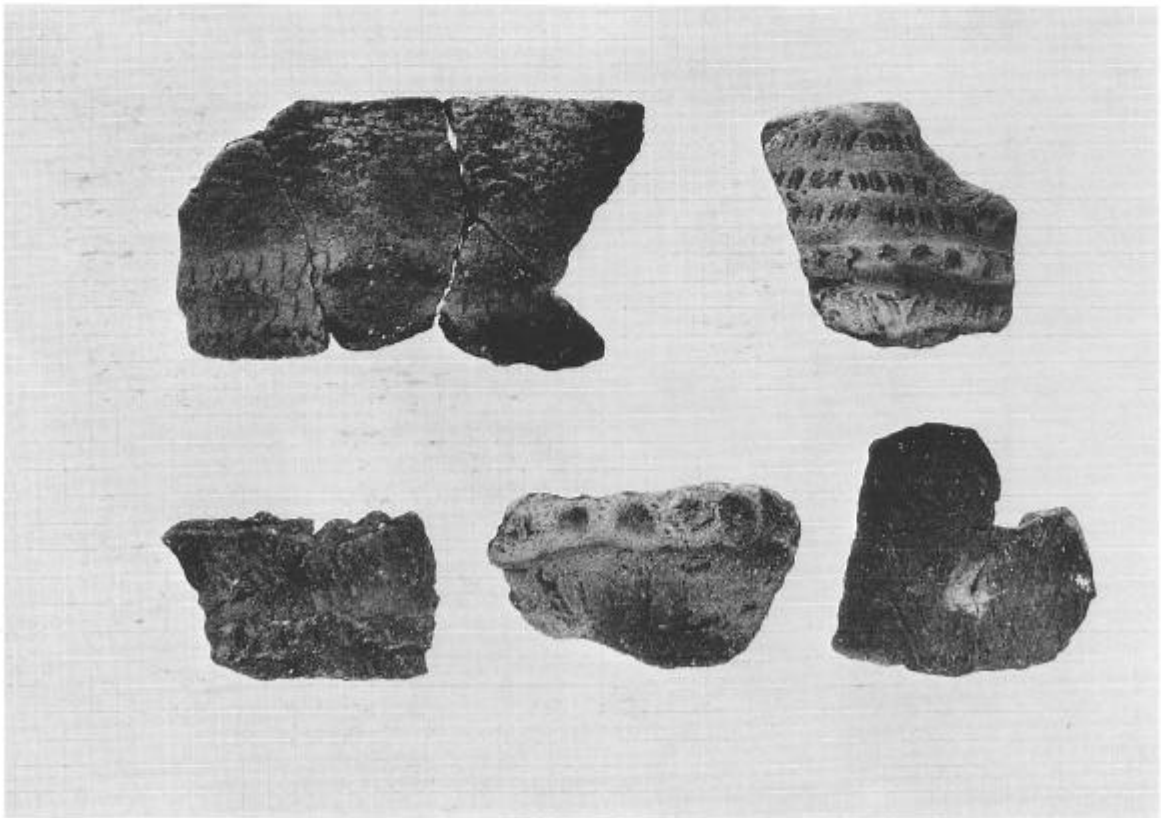


遺構外出土土器(42)

第Ⅰ群第21類

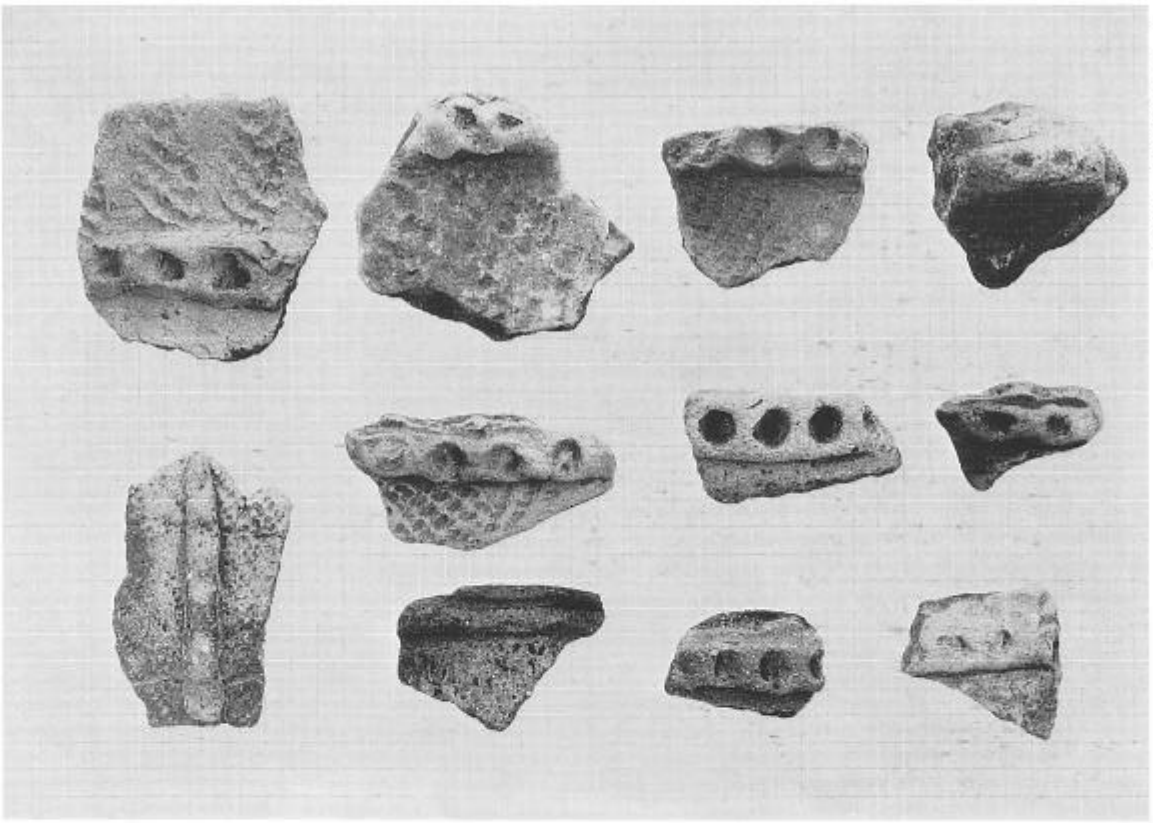


第Ⅰ群第22類

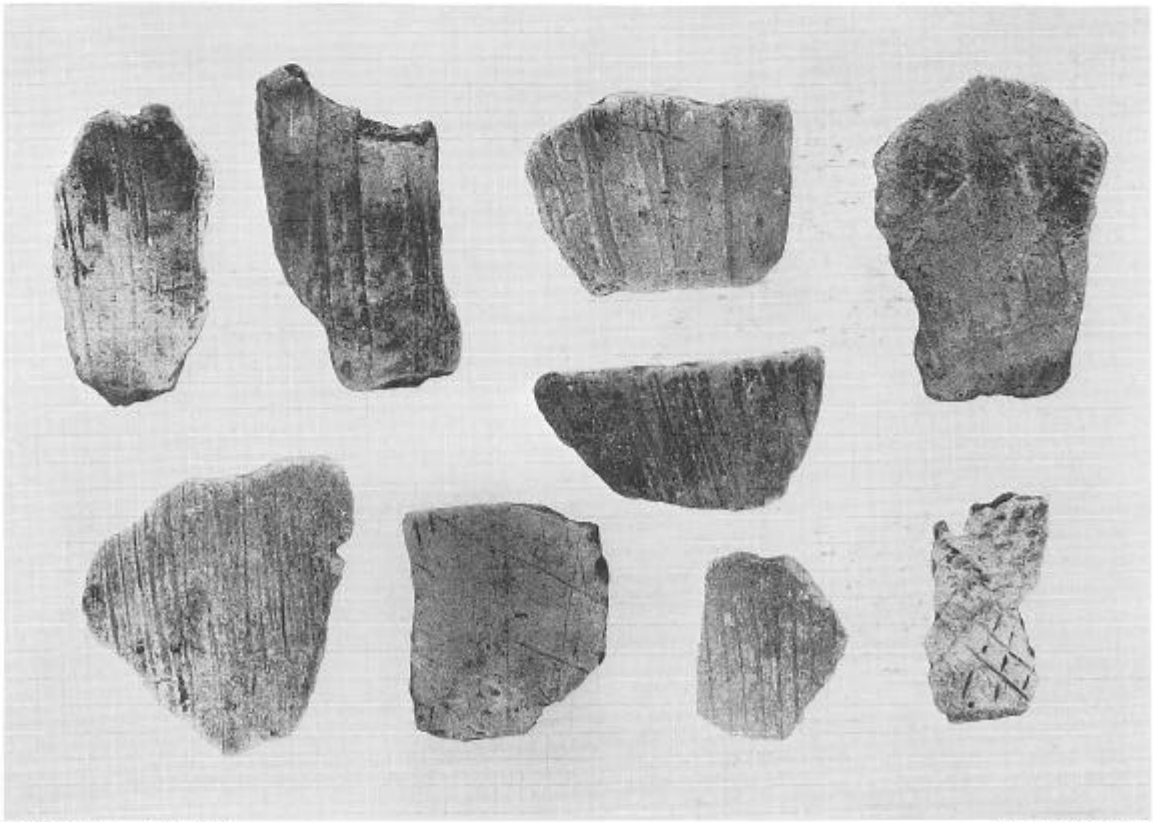


遺構外出土土器(43)

第Ⅰ群第23・25類

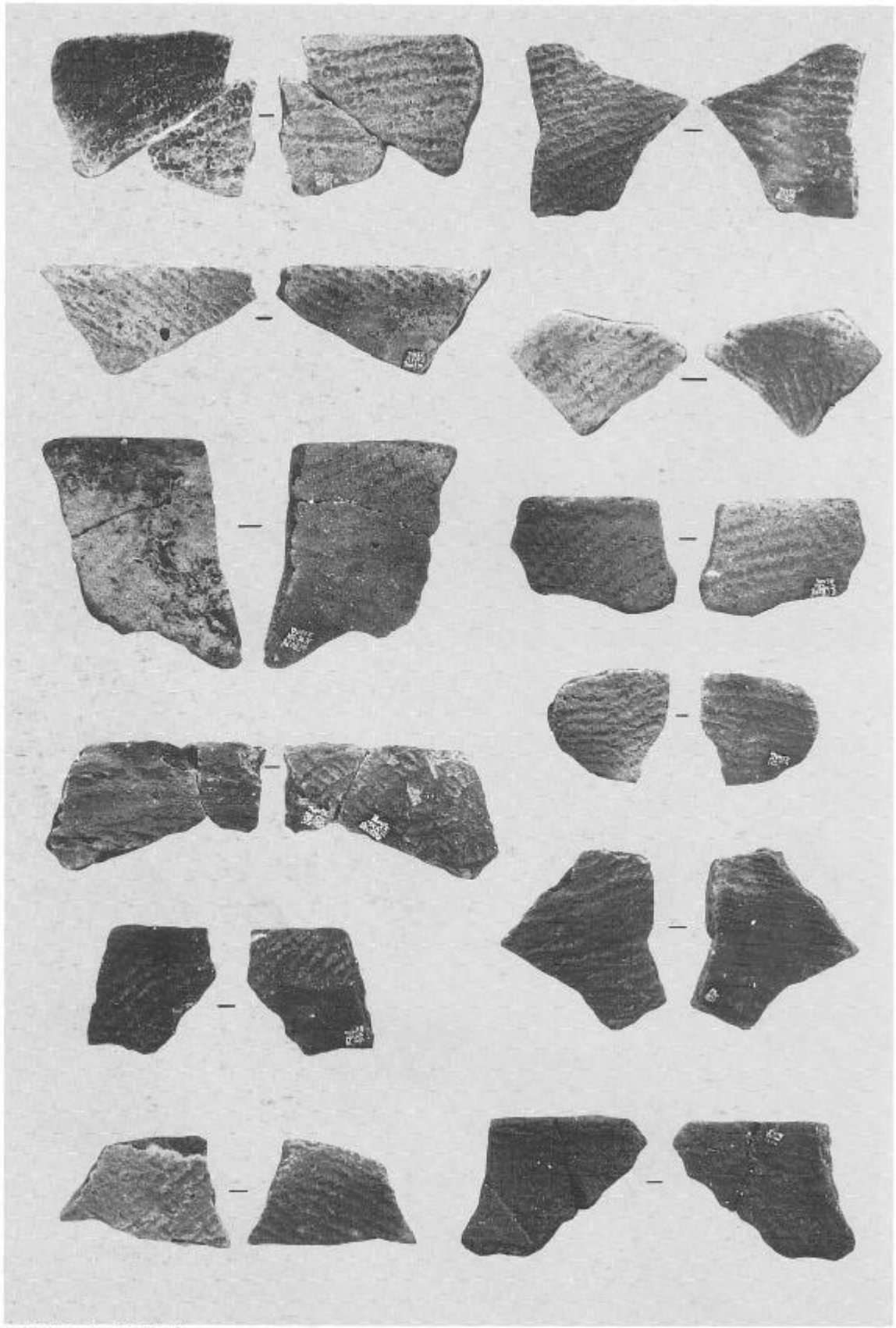


第Ⅰ群第23類



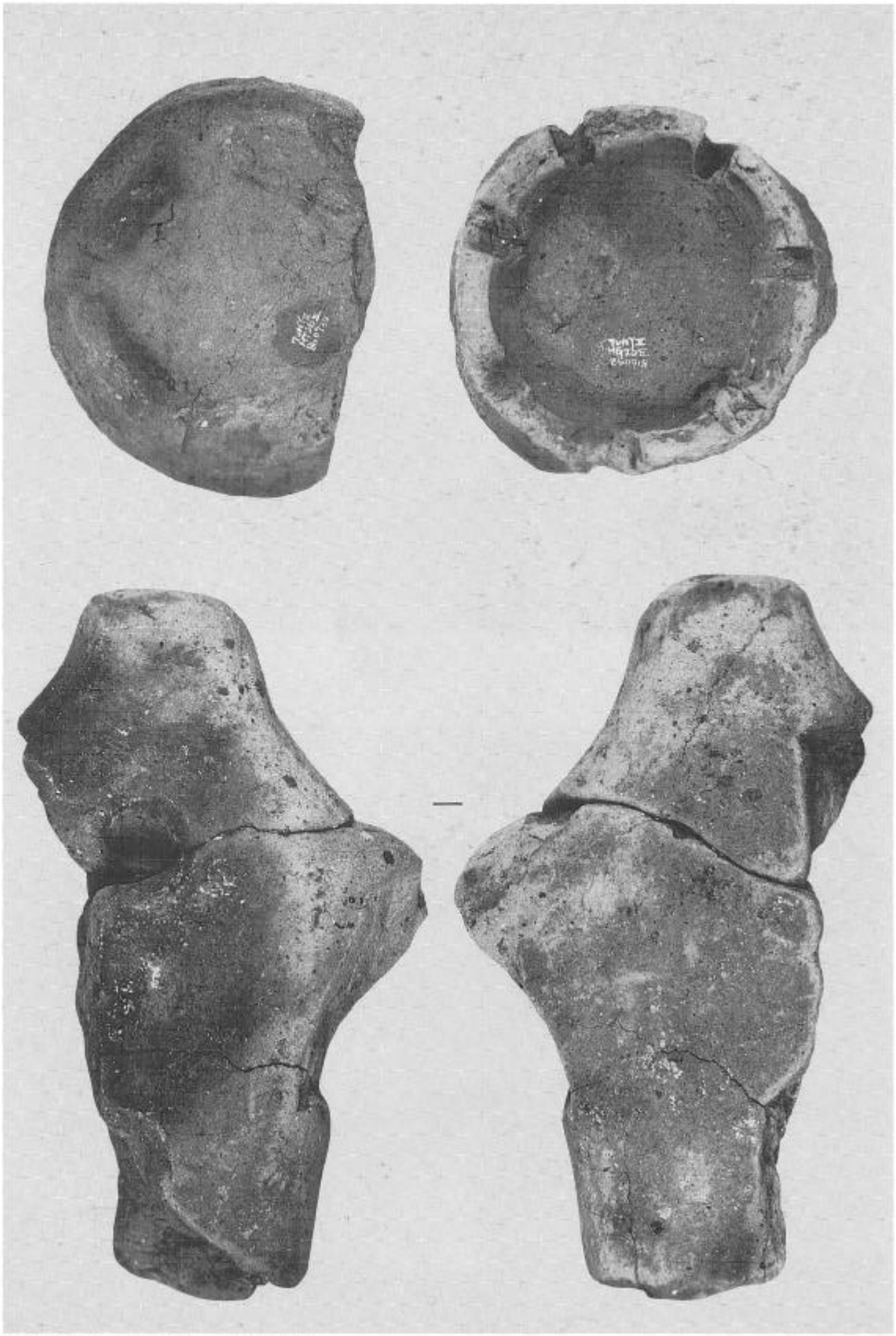
遺構外出土土器(44)

第Ⅰ群第26類

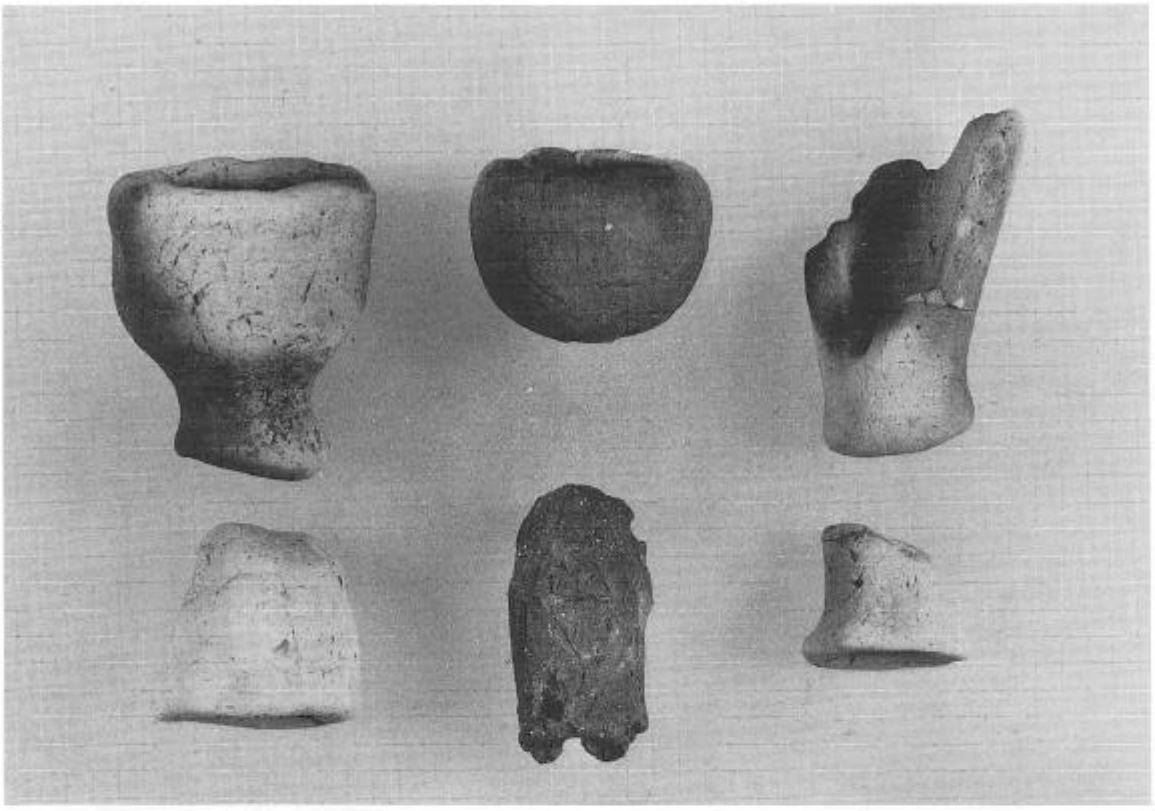


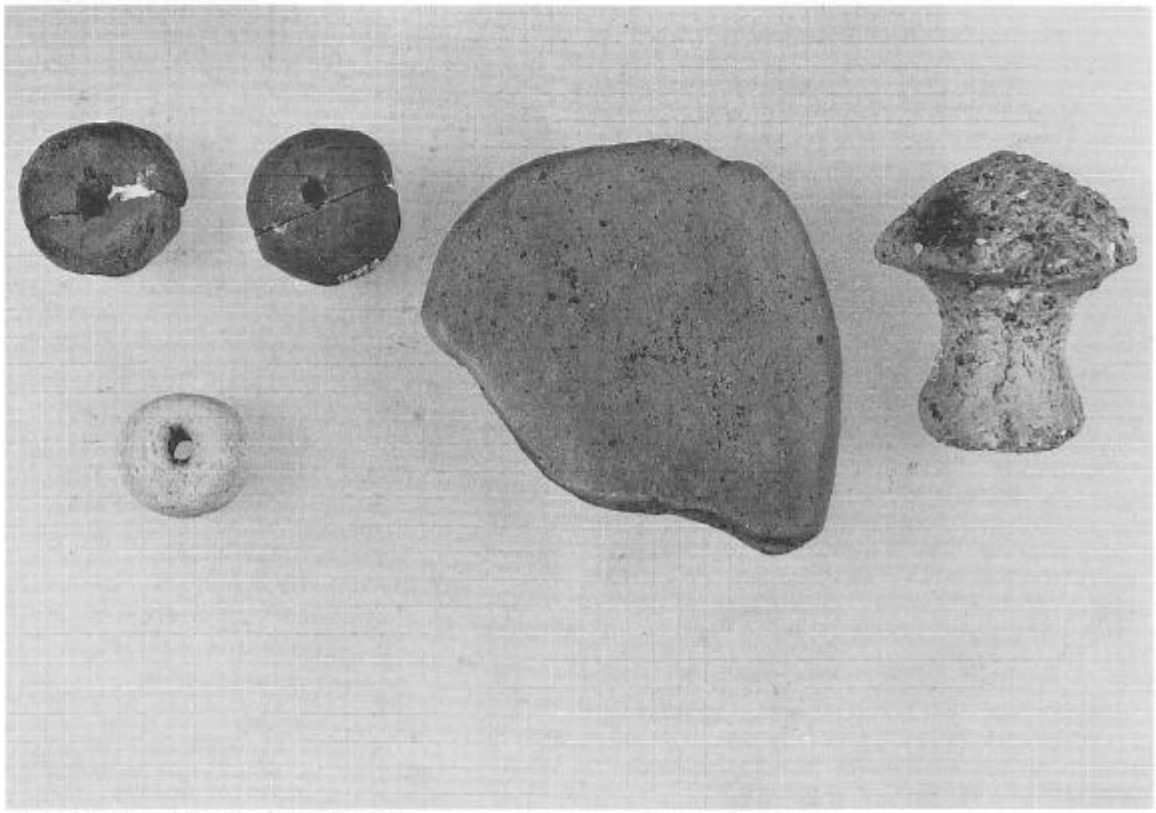
遺構外出土土器(45)

第Ⅰ群第27類

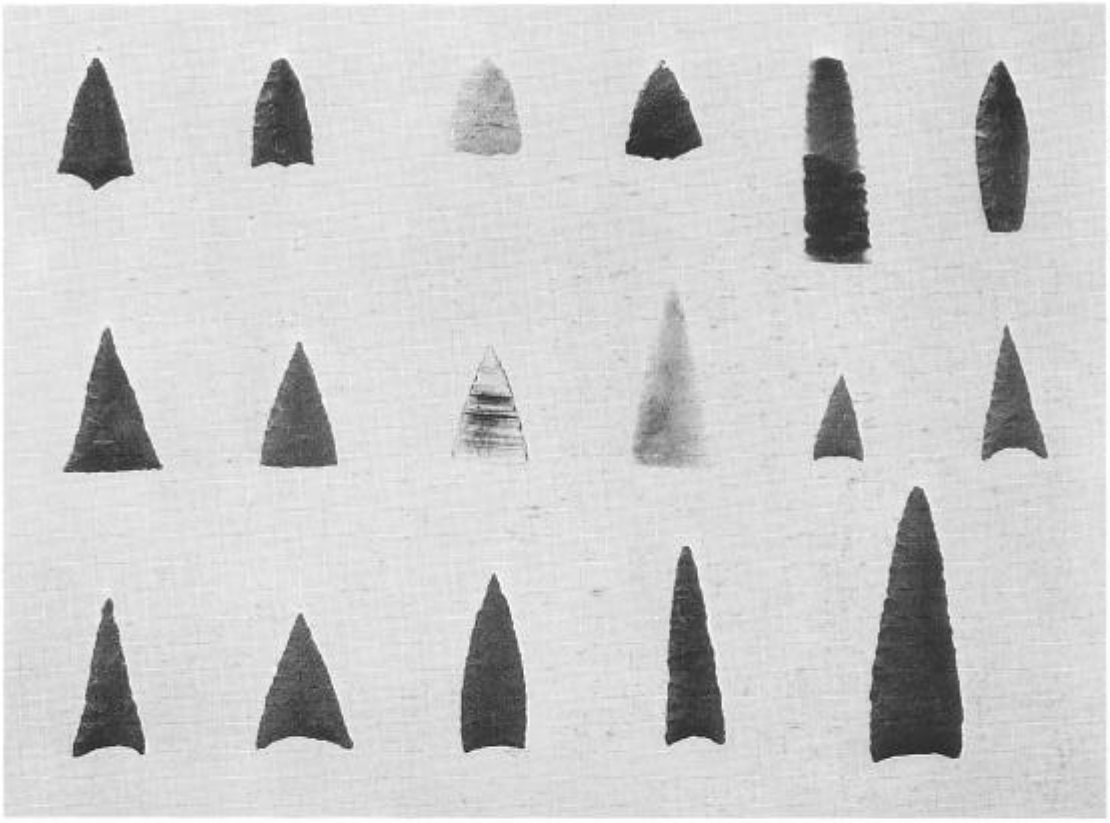


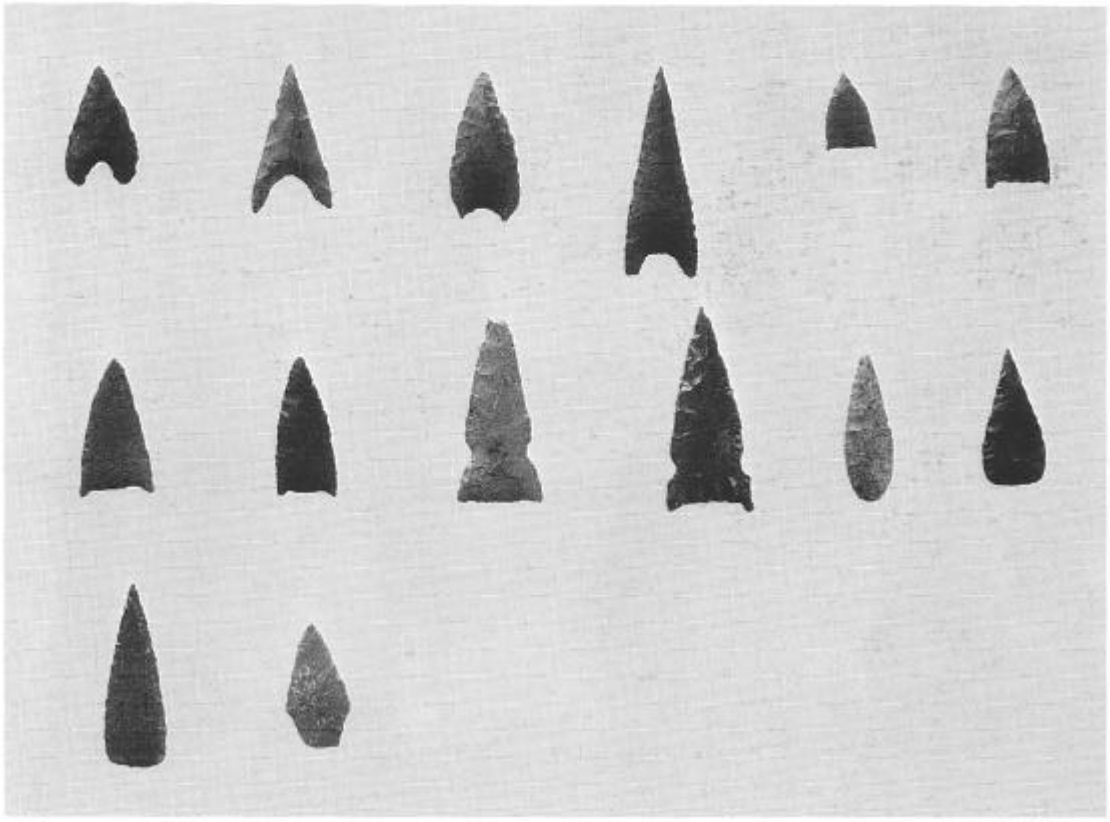
遺構外出土土器(46)・土製品(1)



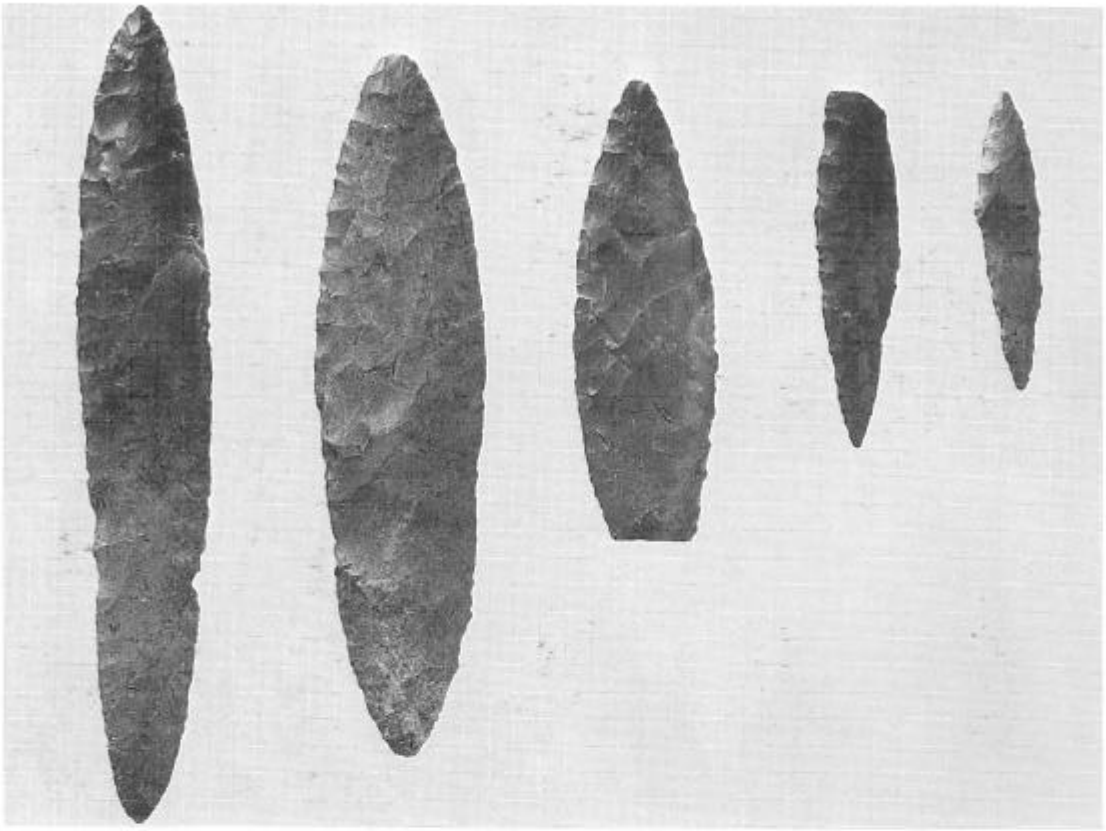


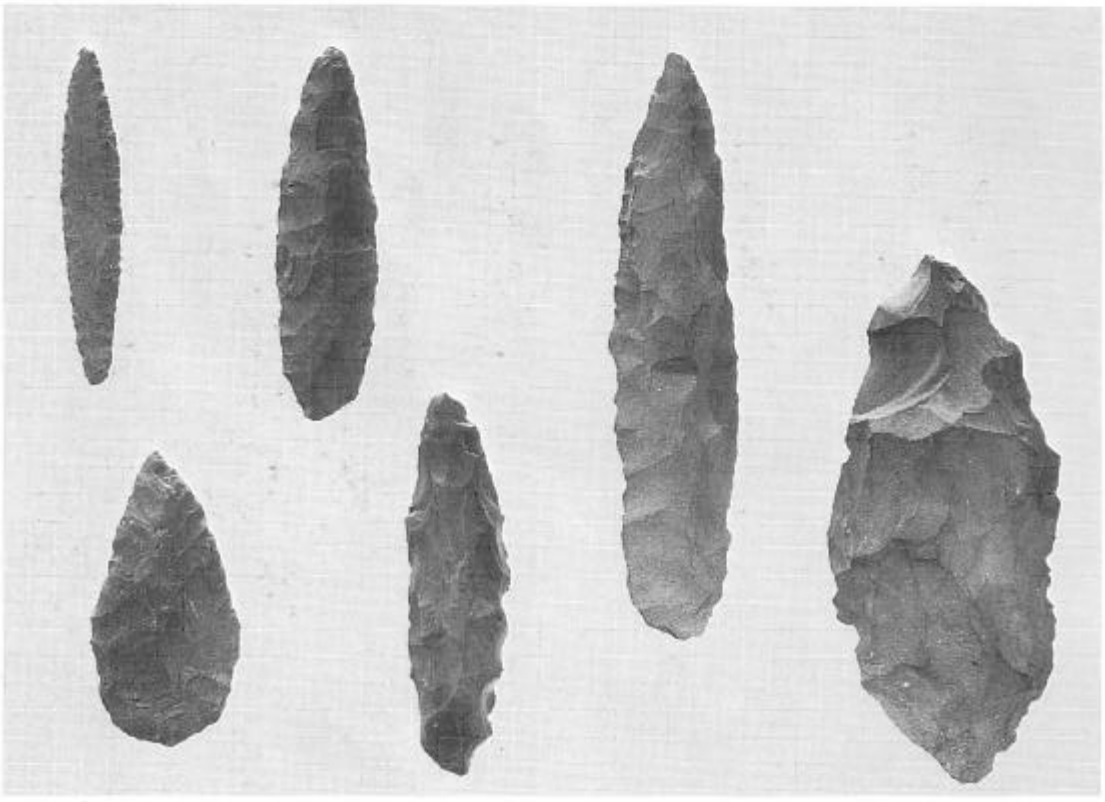
遺構外出土土器(47)・土製品(2)



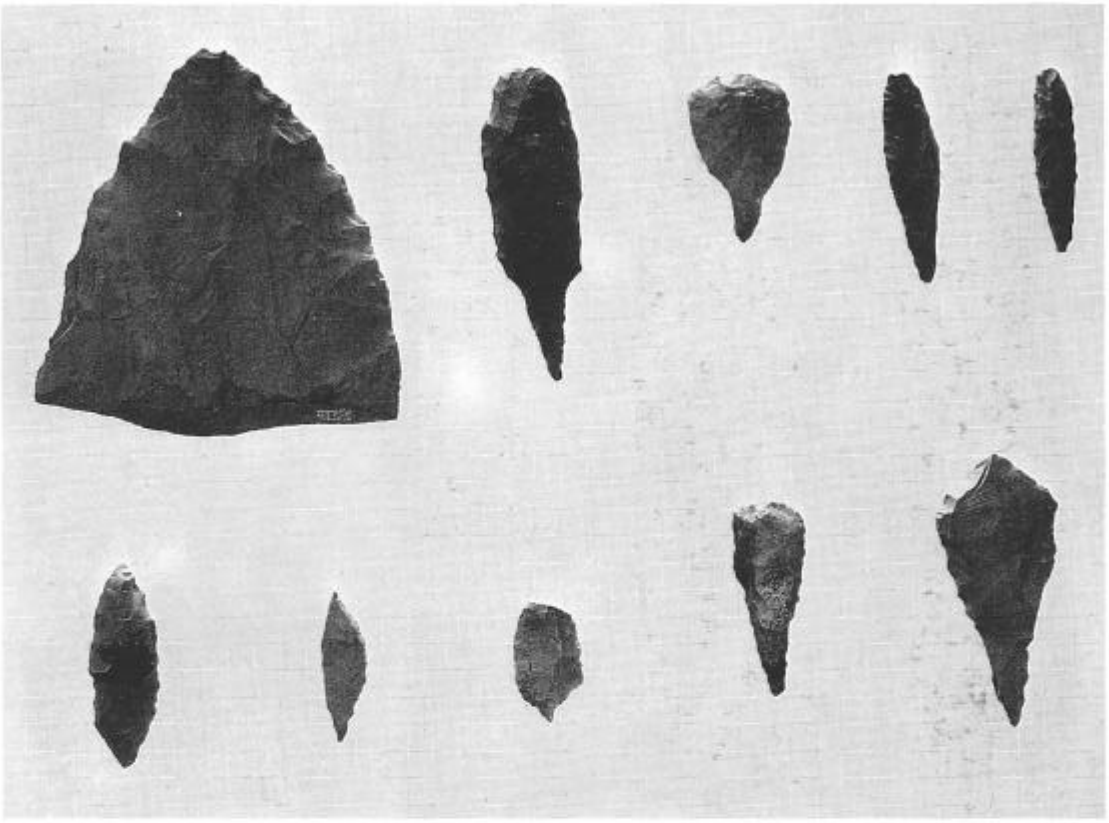


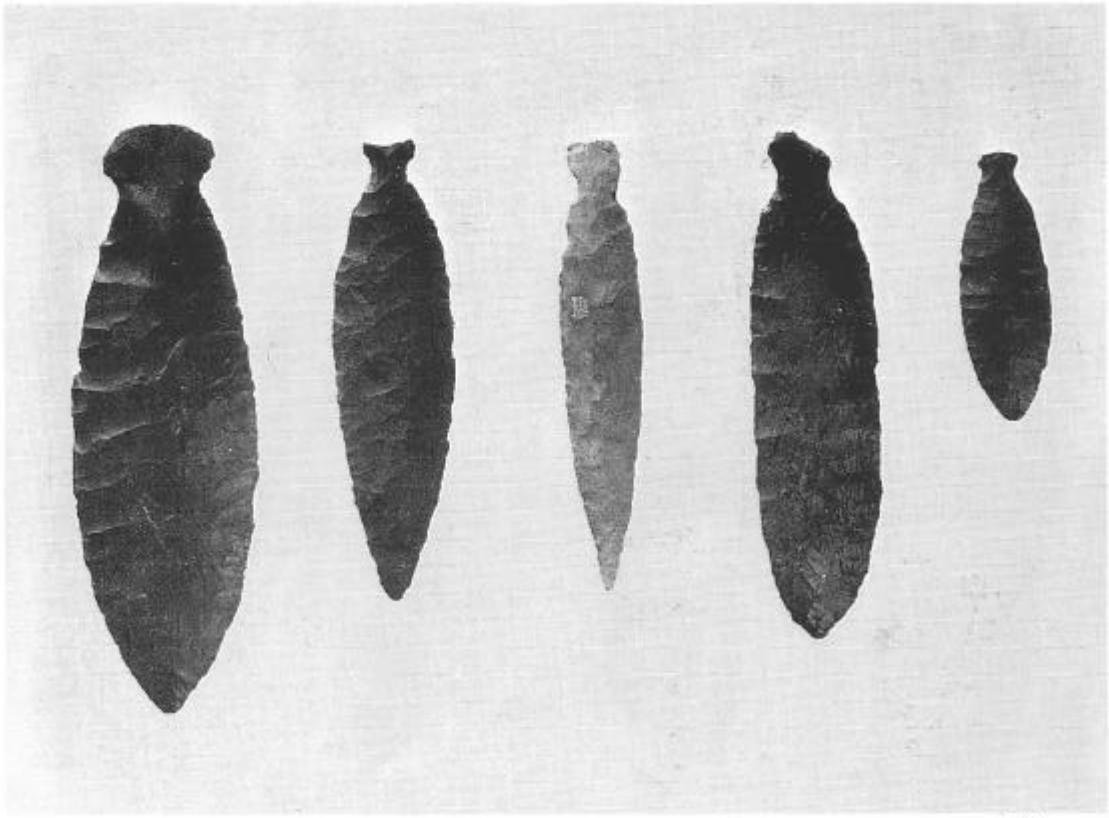
剝片石器・石斧(1)　有舌尖頭器・石鏃



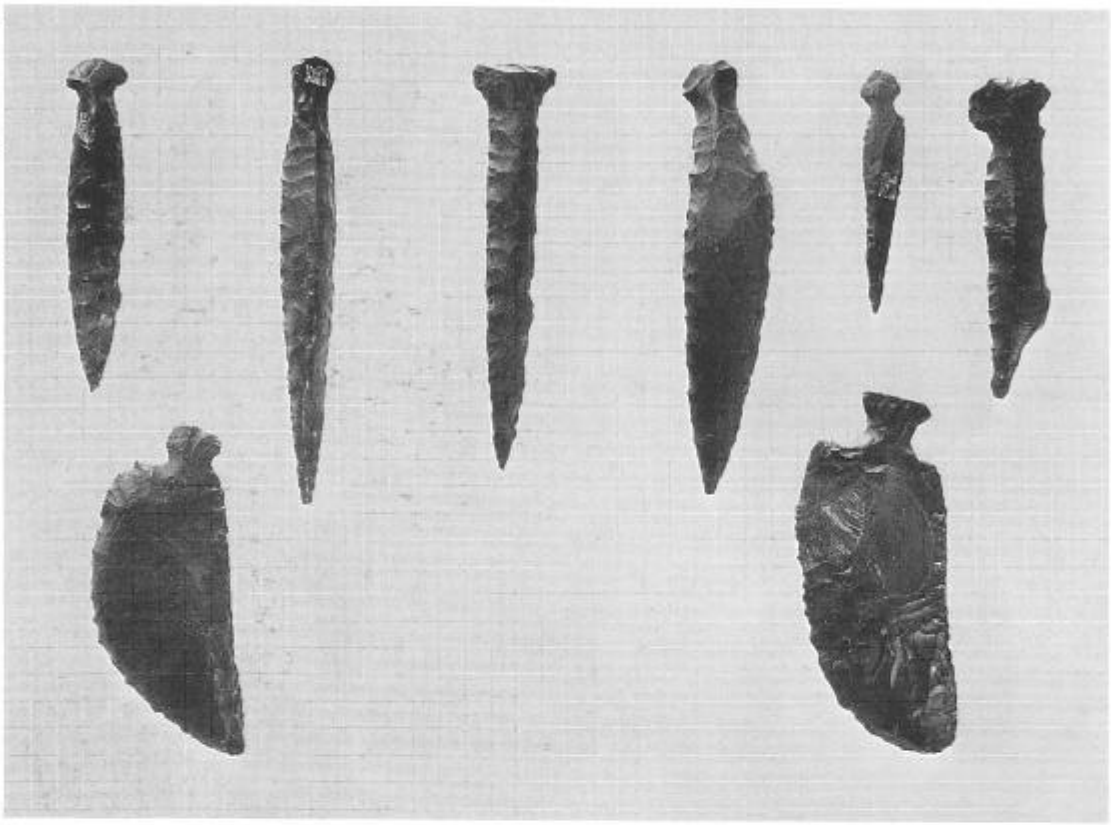


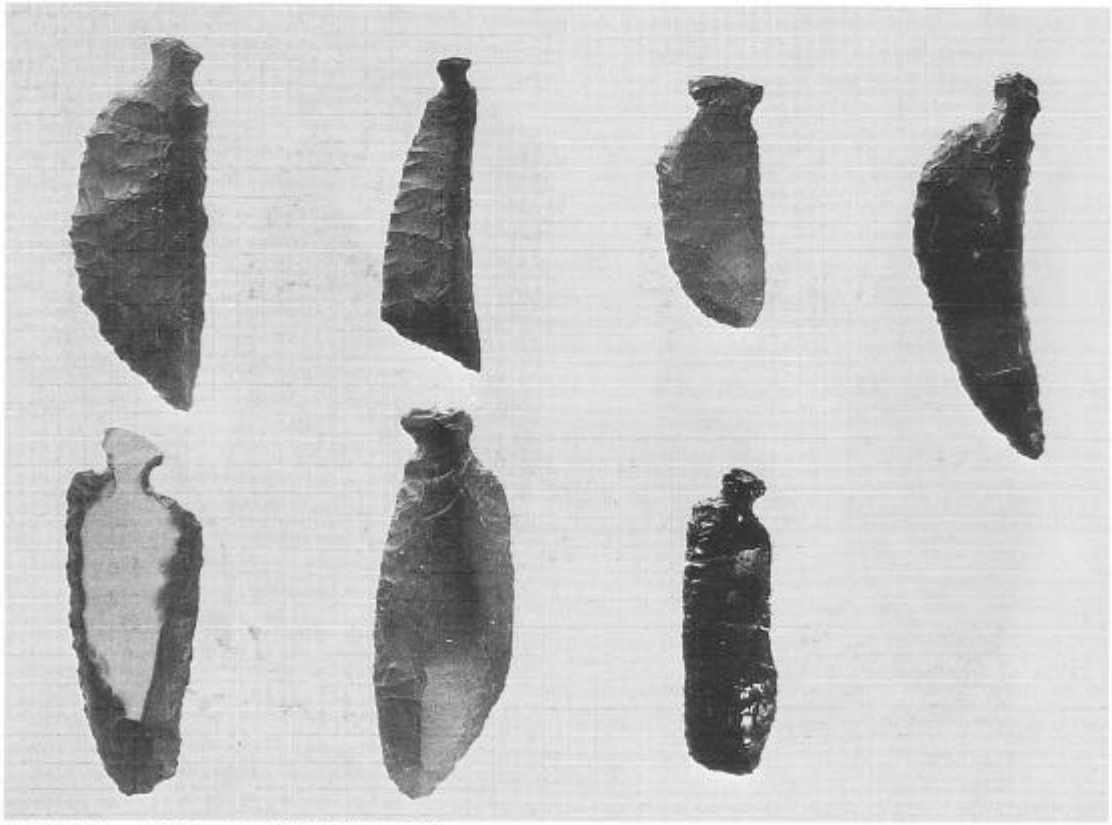
剝片石器・石斧(2)　尖頭器



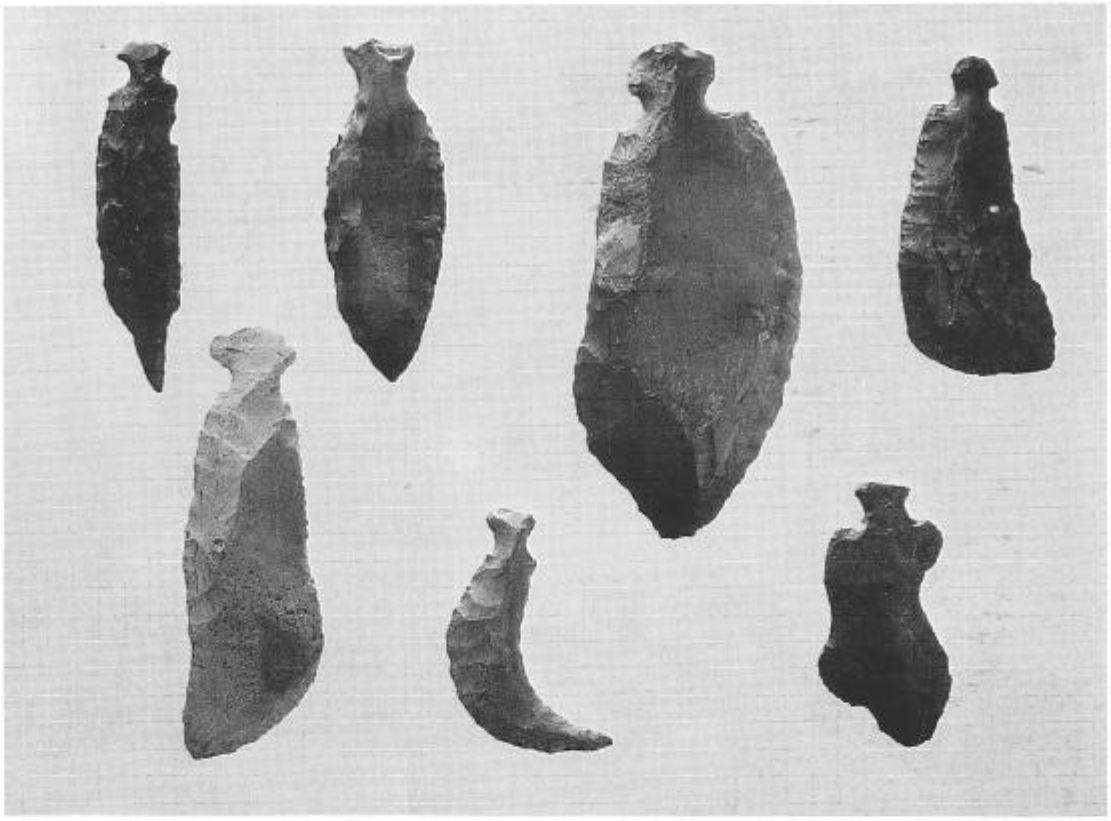


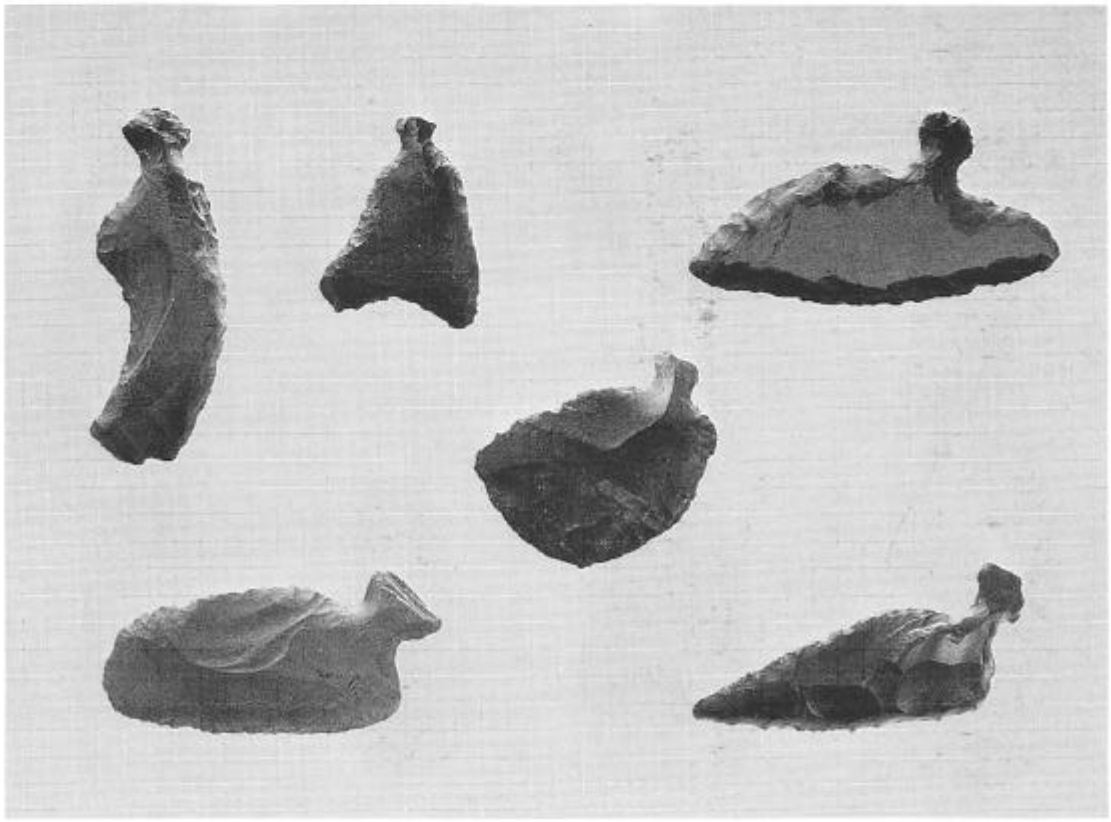
剝片石器・石斧(3)　石錐・有撮石器



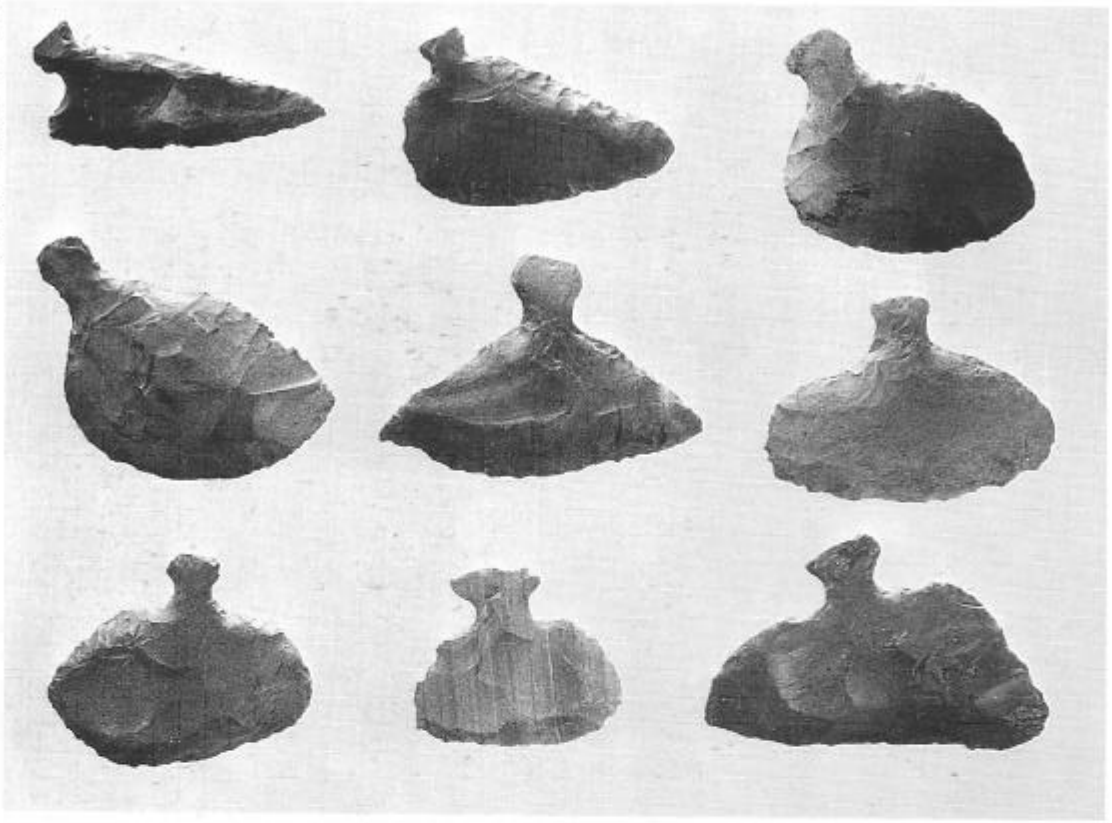


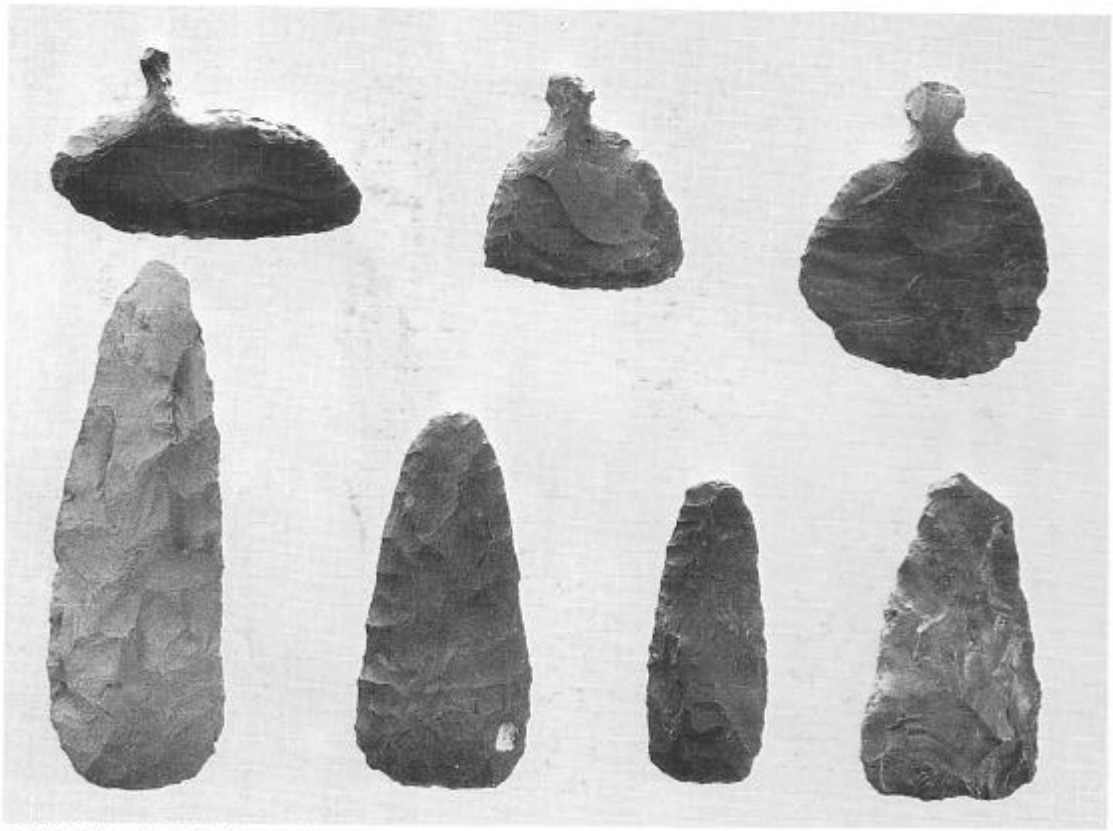
剝片石器・石斧(4)　有撮石器・石匙



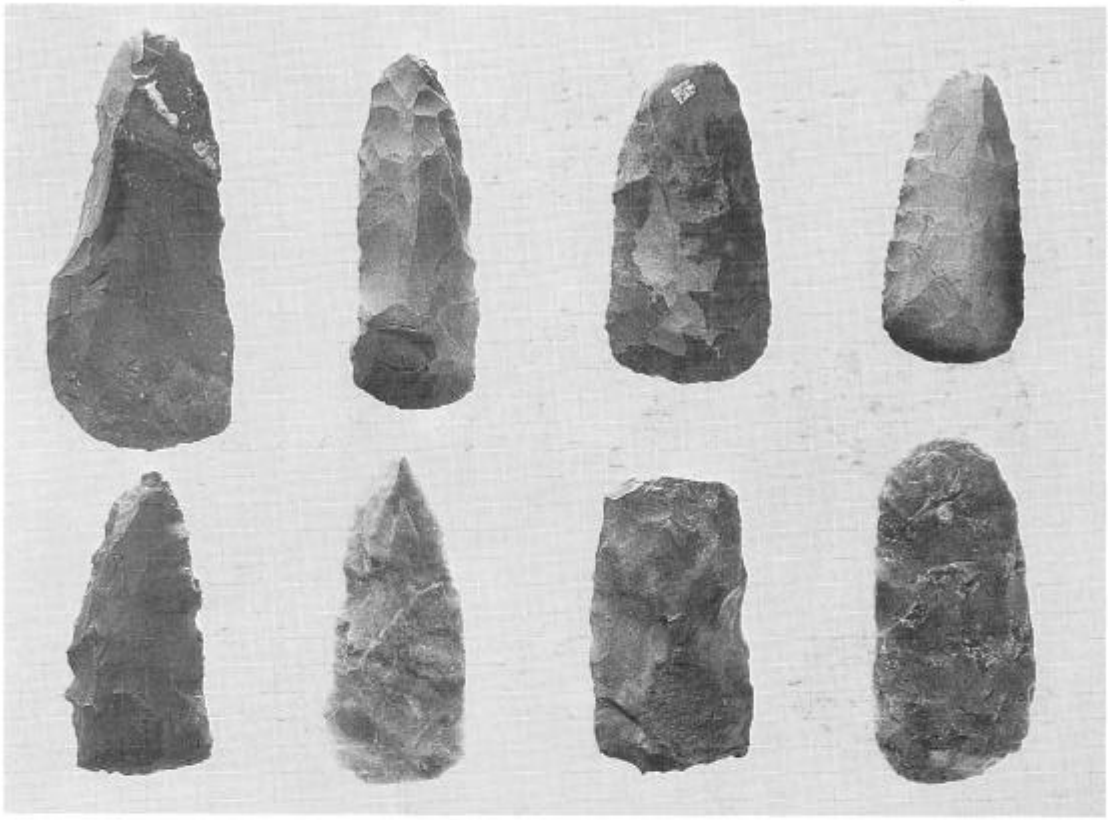


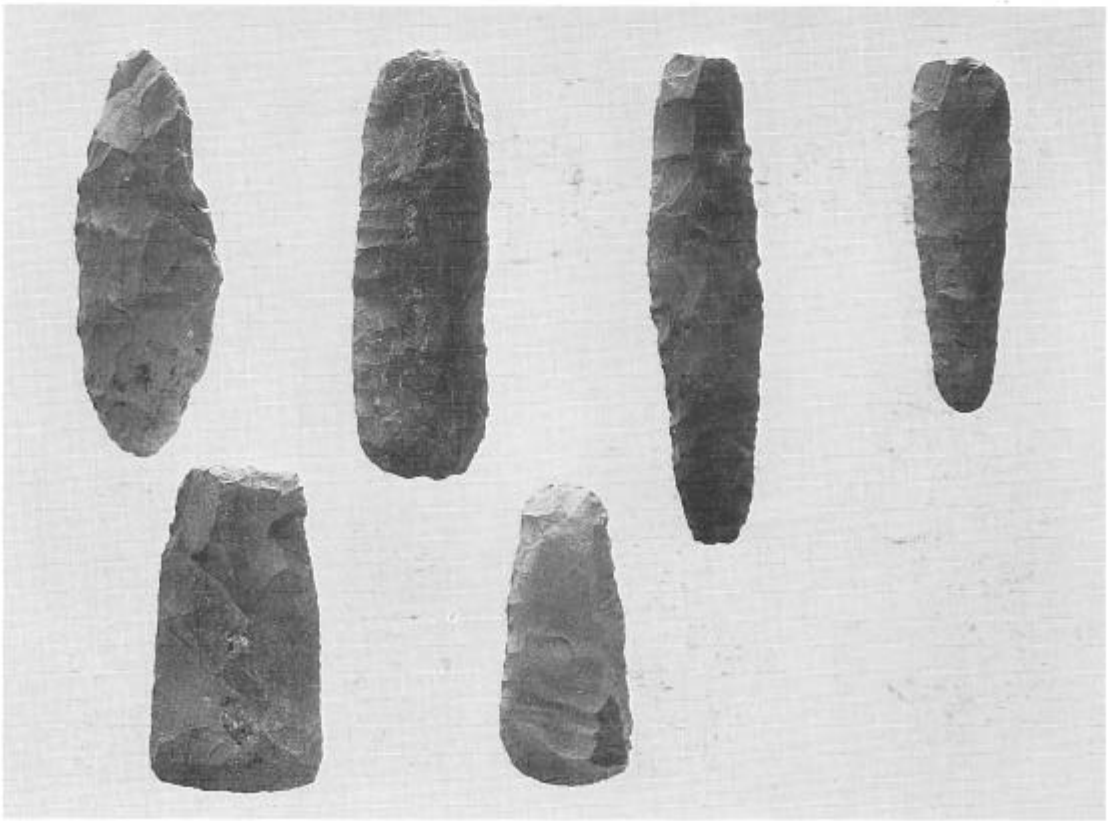
剝片石器・石斧(5)　石匙



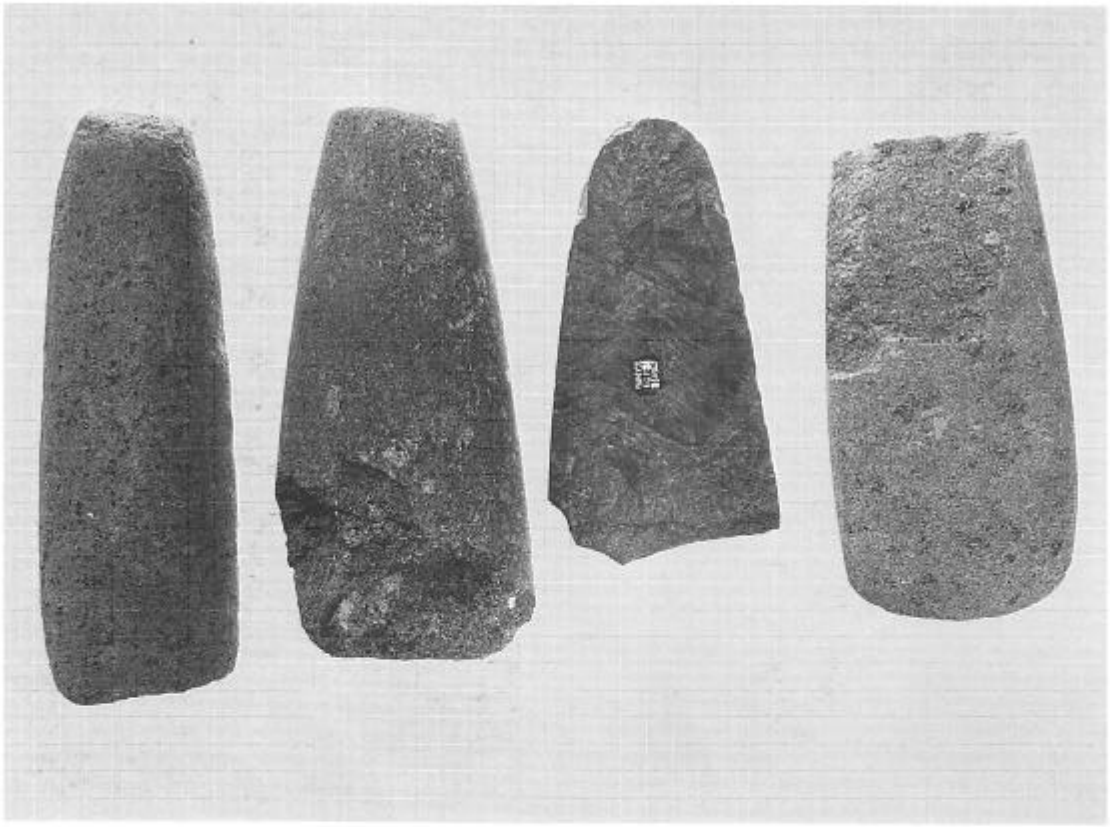


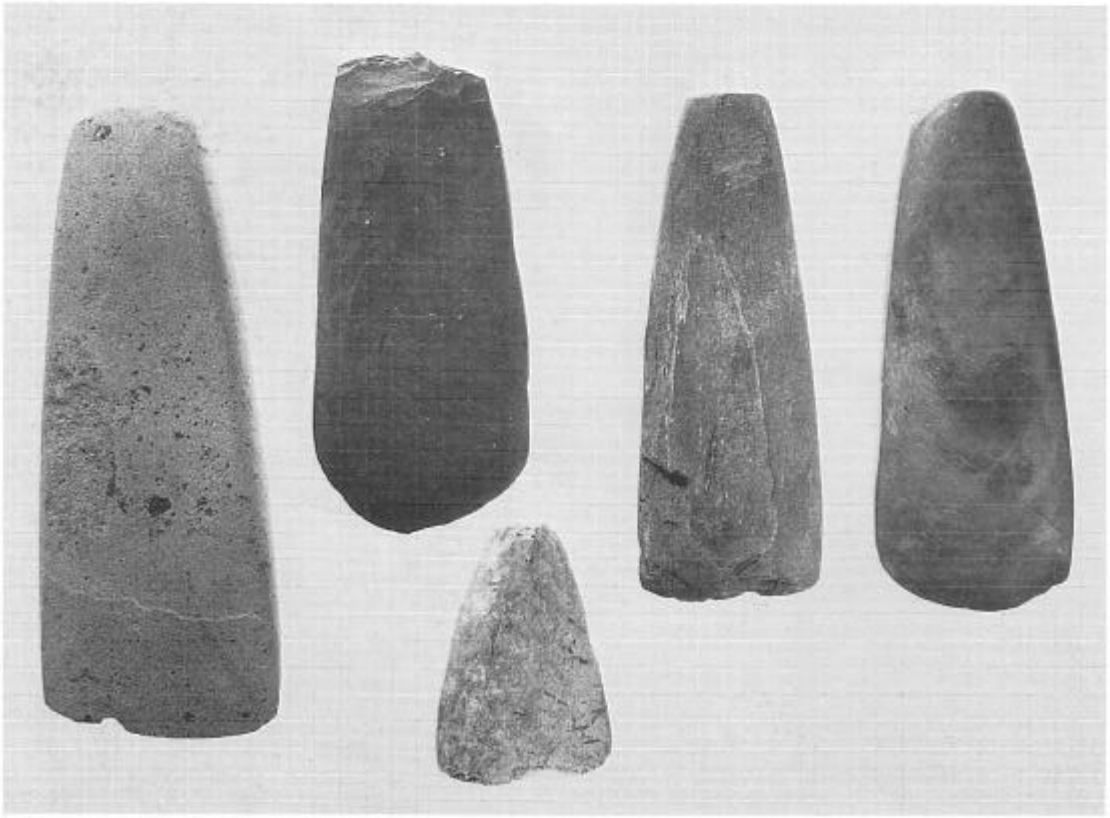
剝片石器・石斧（6）　石匙・篦状石器



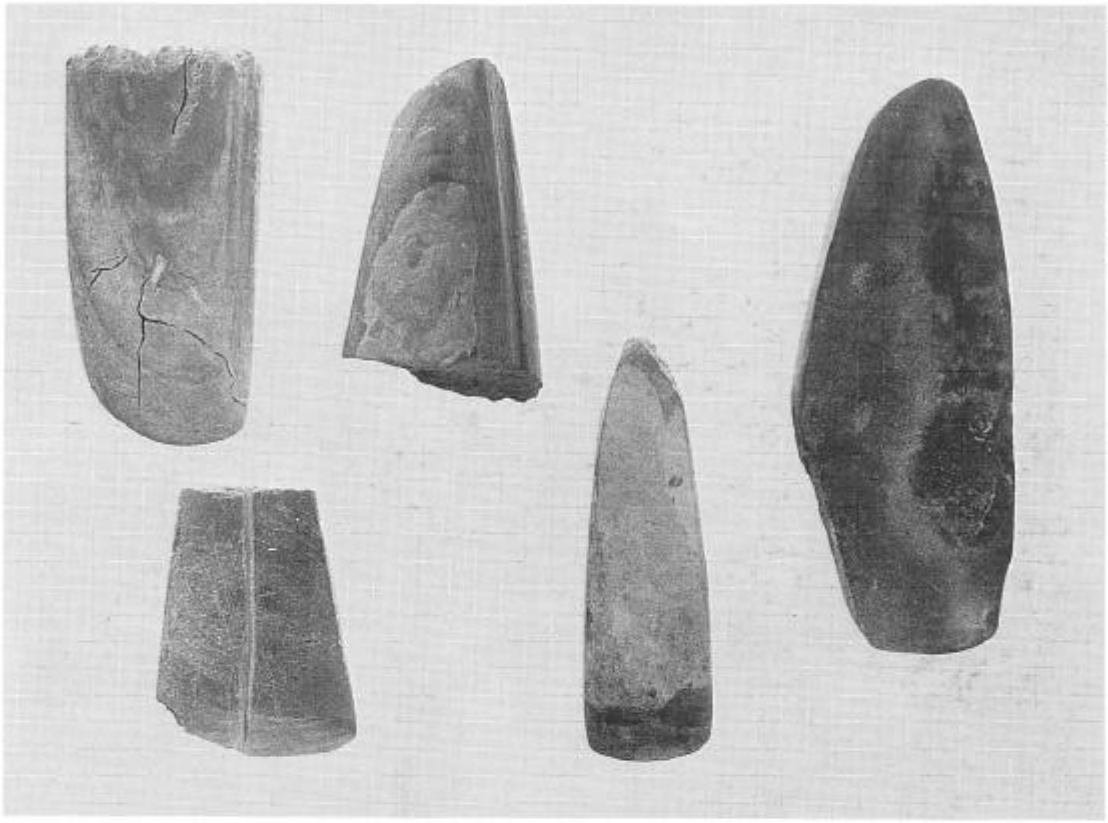


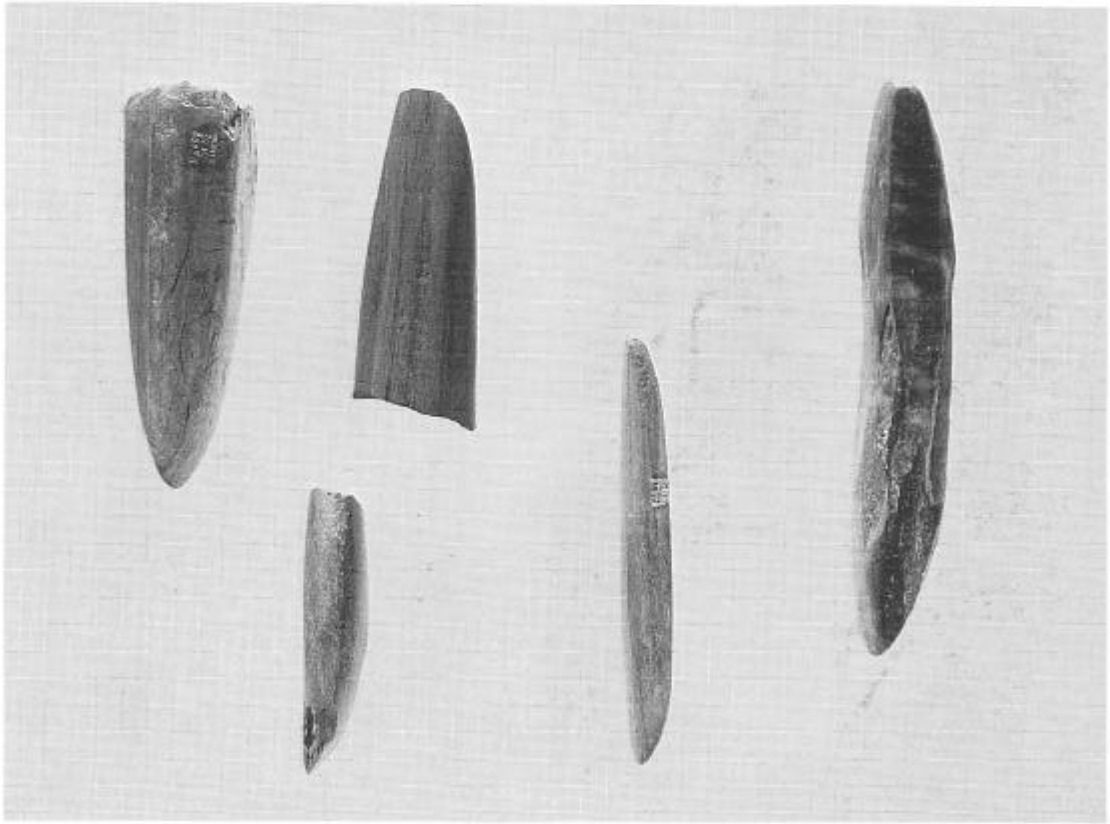
剝片石器・石斧(7)　篦状石器



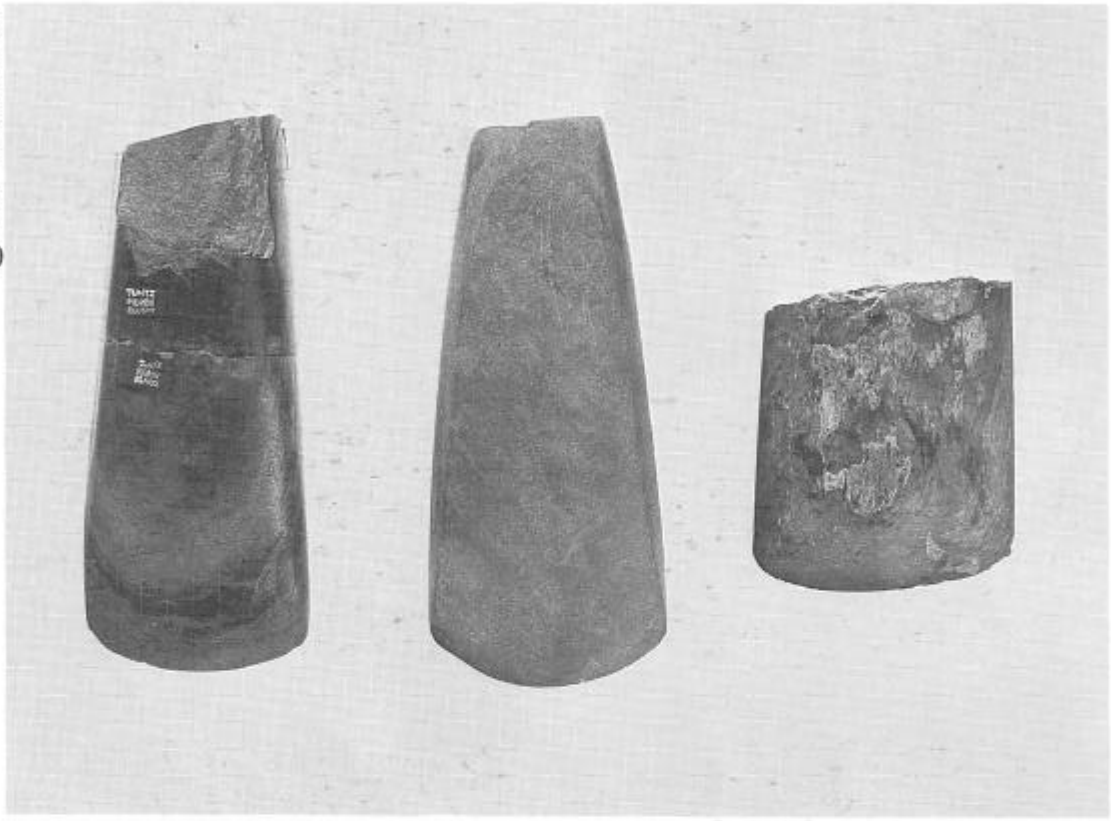


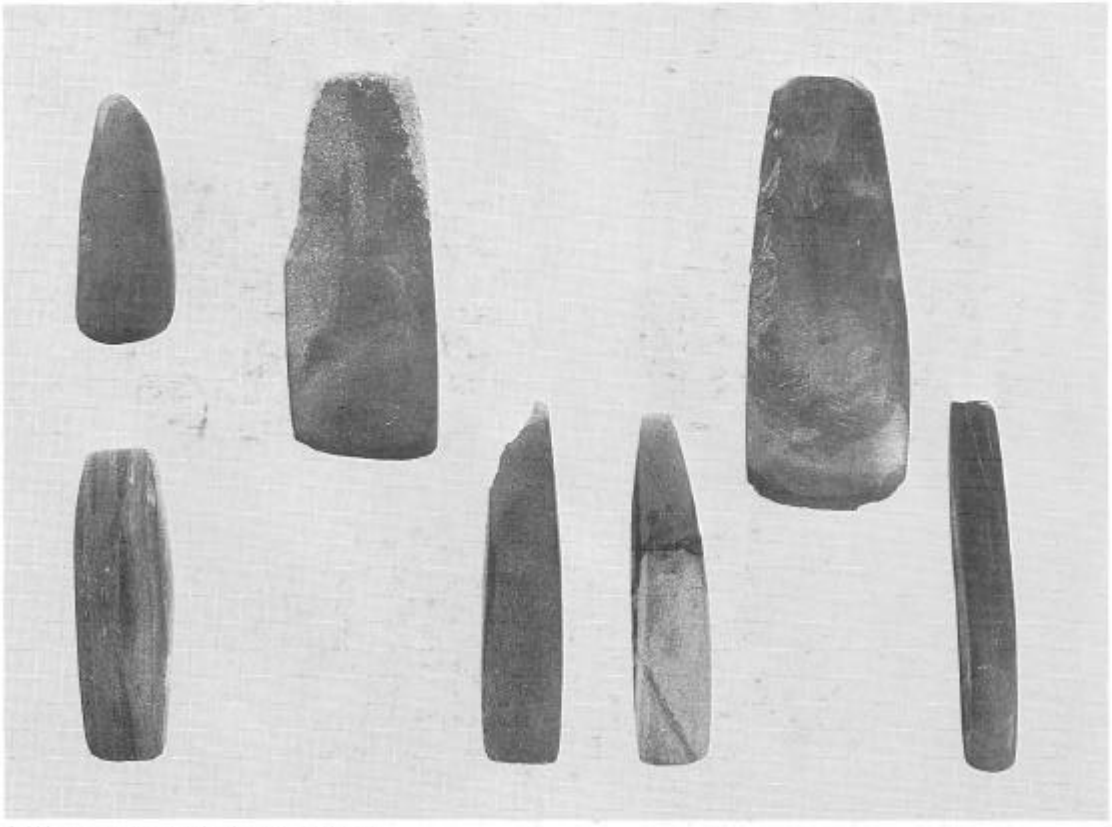
剝片石器・石斧(8)　磨製石斧



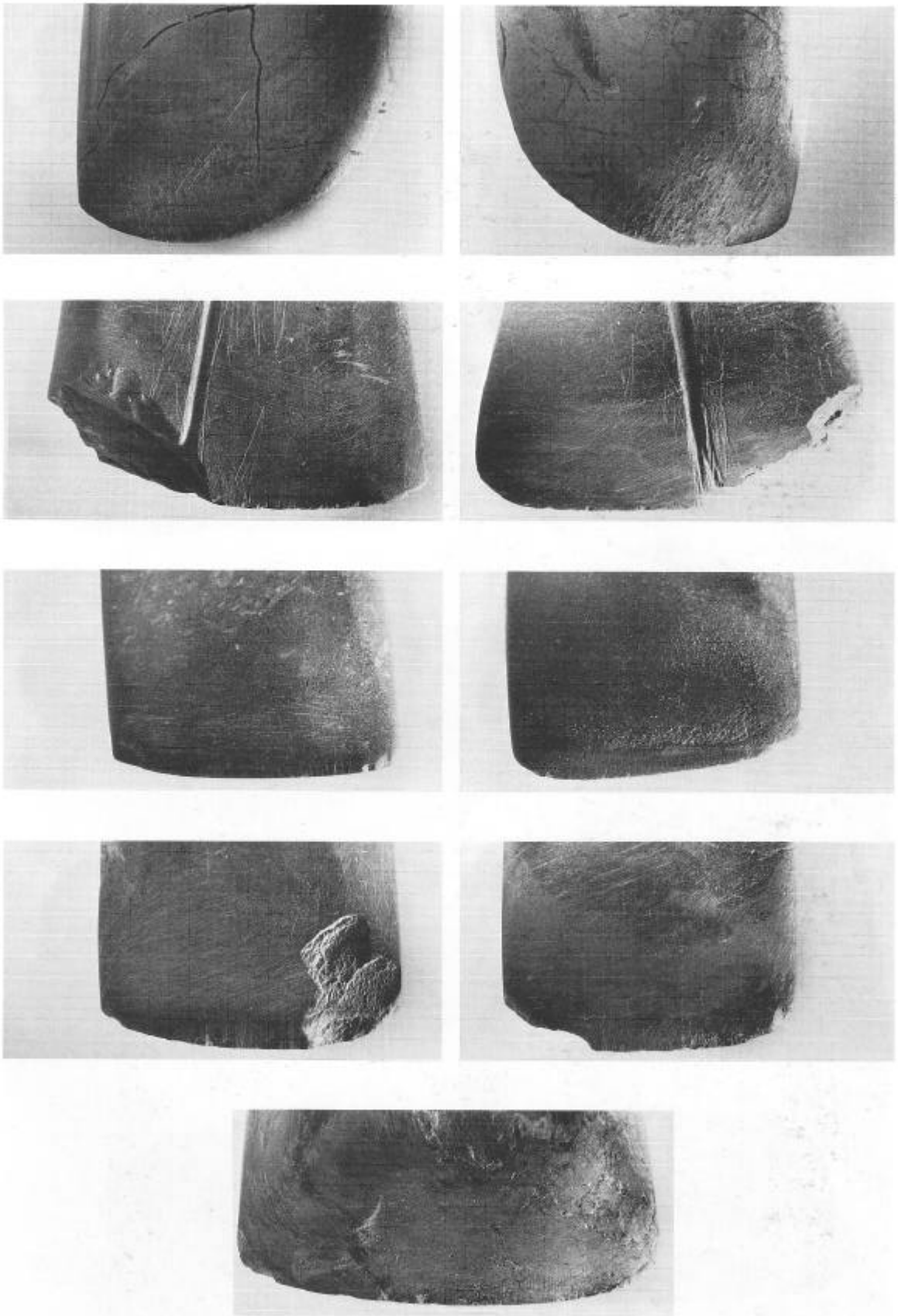


剝片石器・石斧(9)　磨製石斧

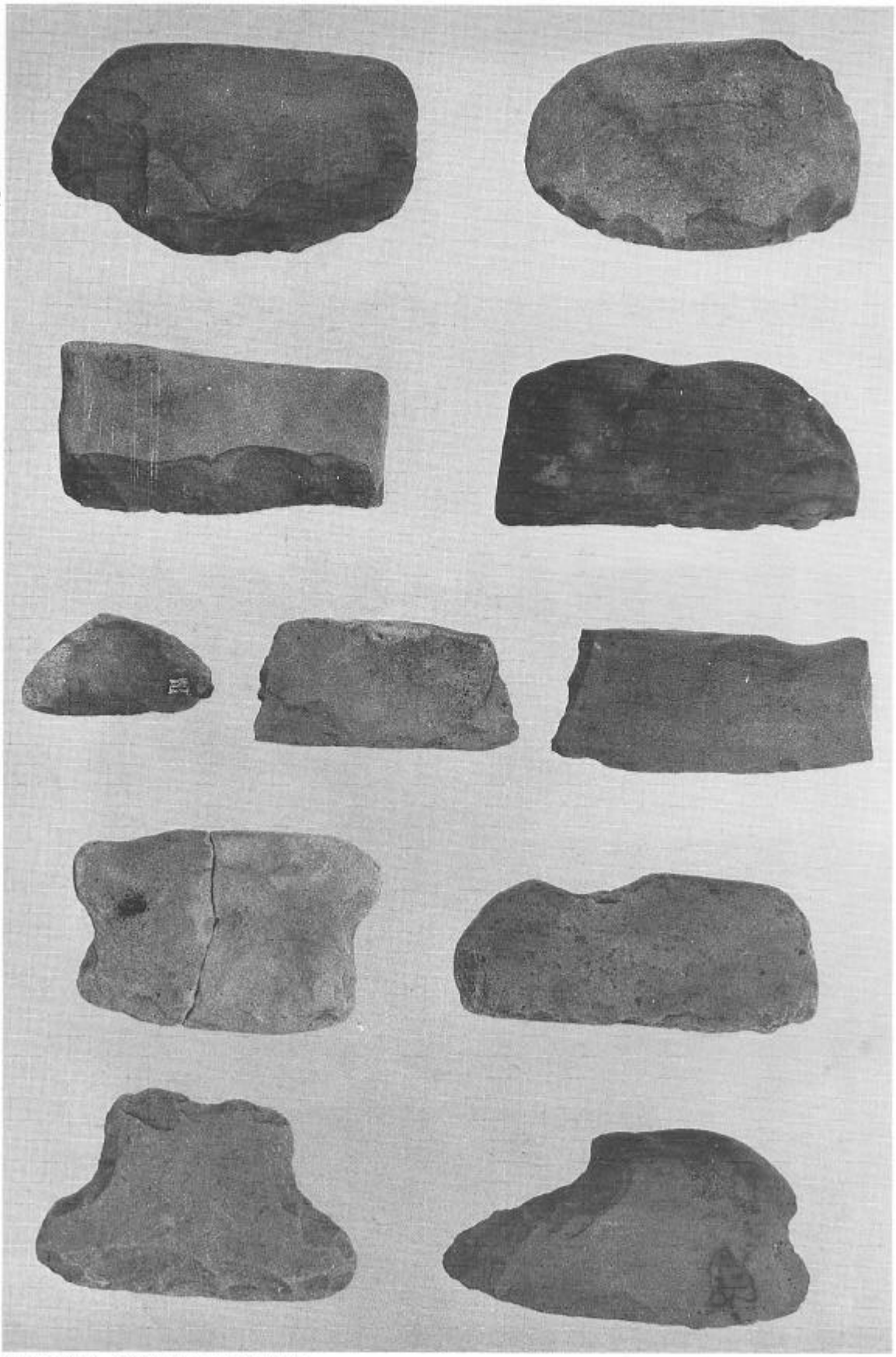




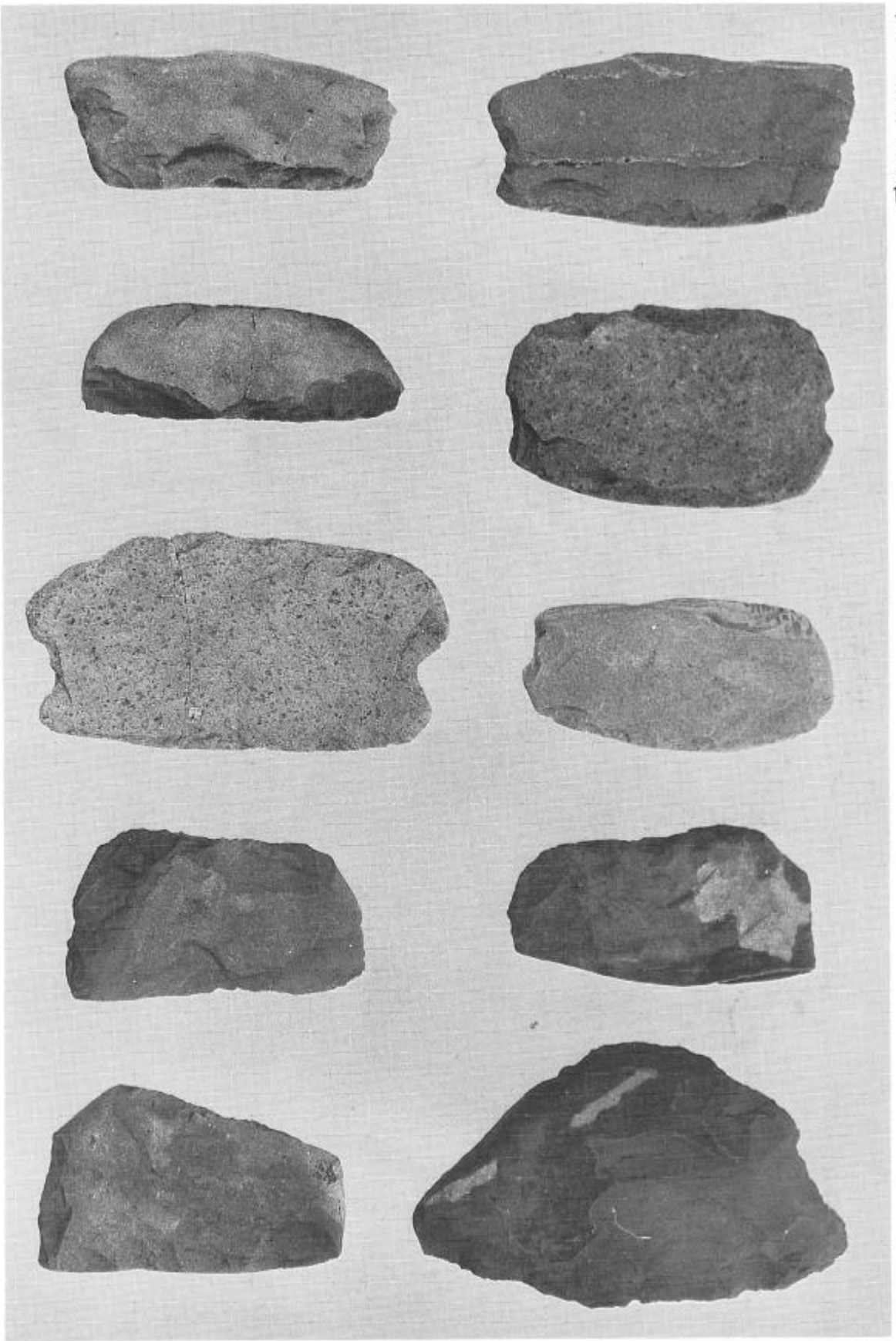
剝片石器・石斧(10)　磨製石斧



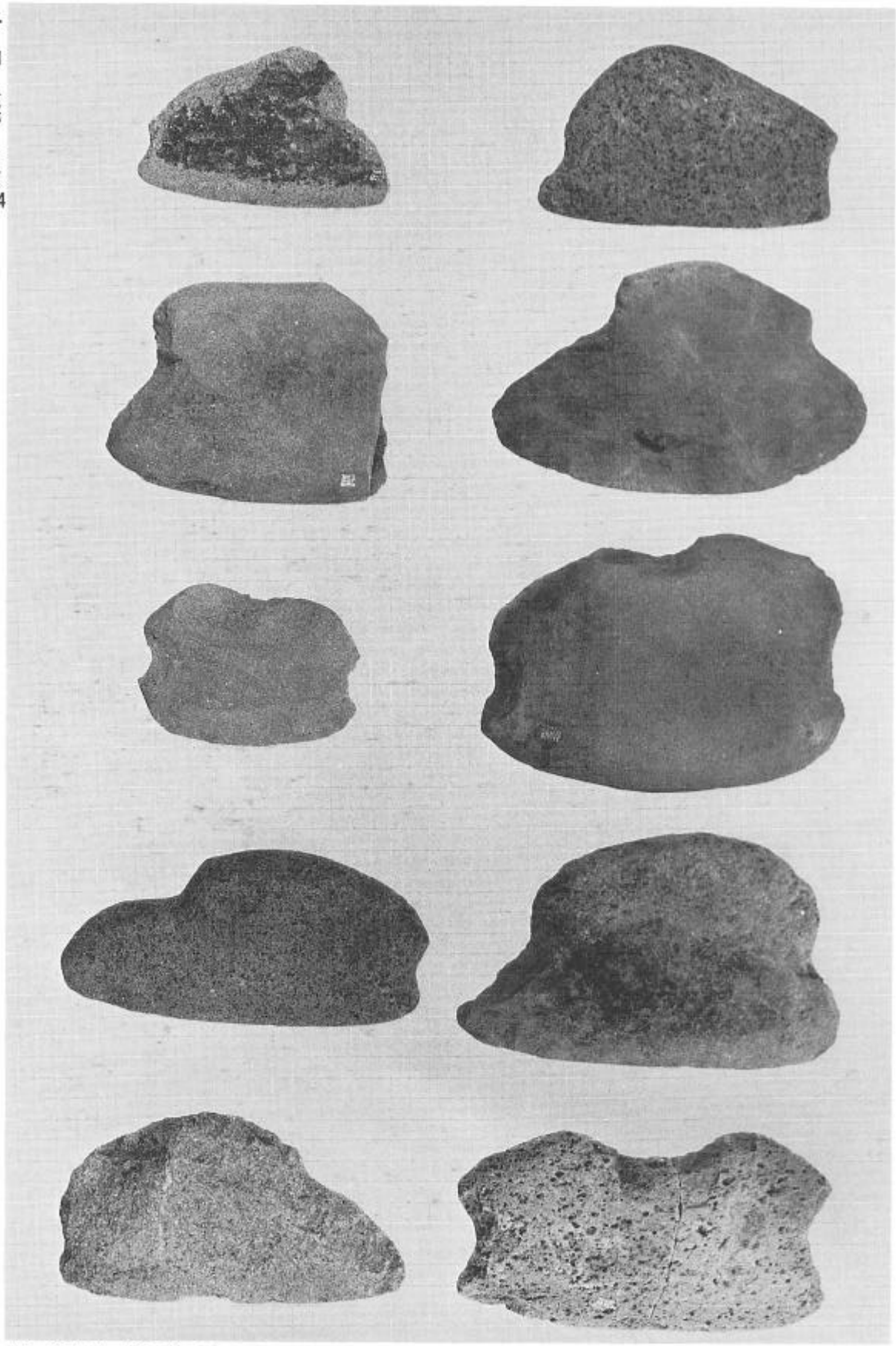
剥片石器・石斧(11)　磨製石斧刃部拡大写真(使用痕)



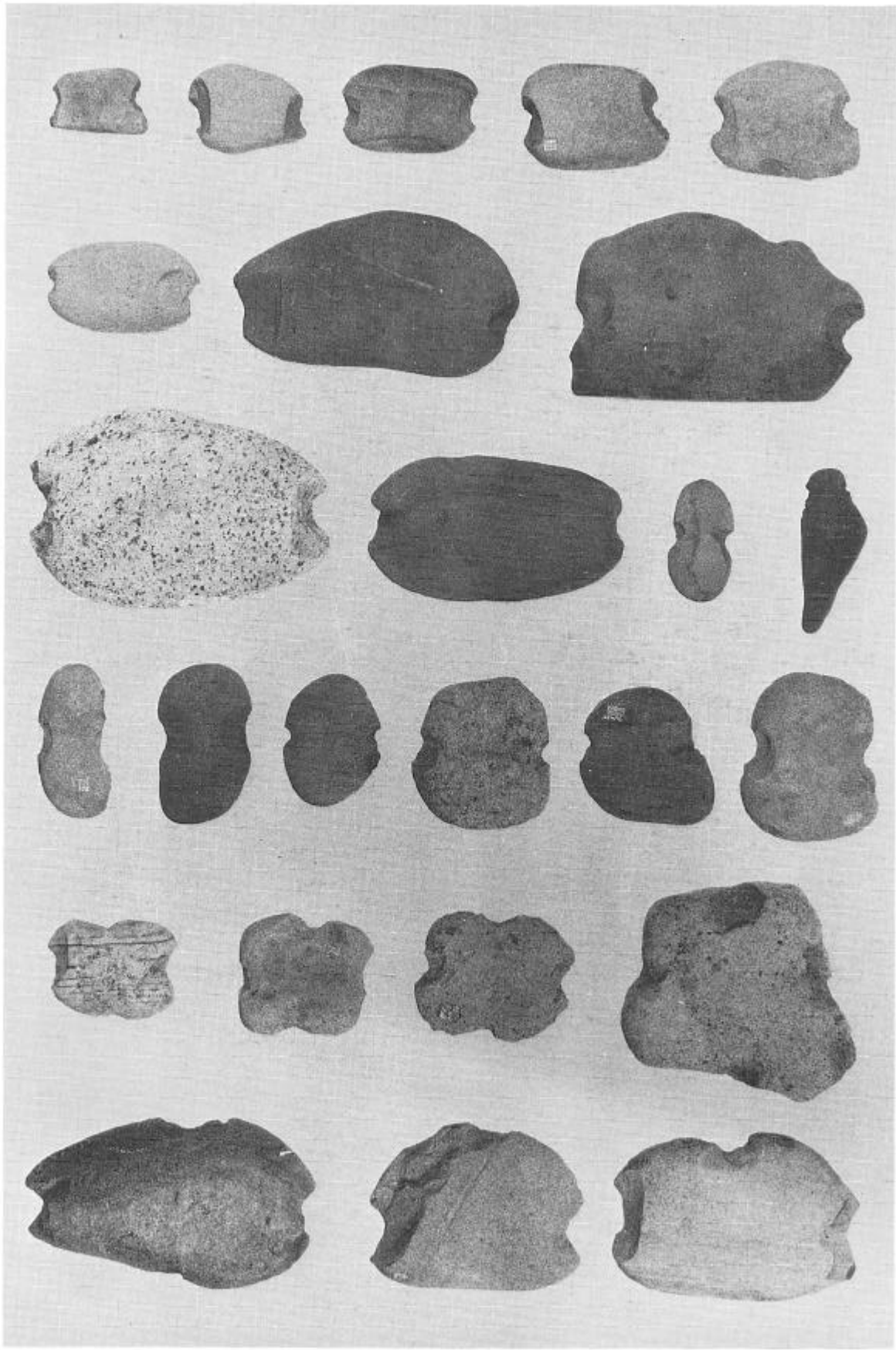
礫石器（1）　半円状扁平打製石器



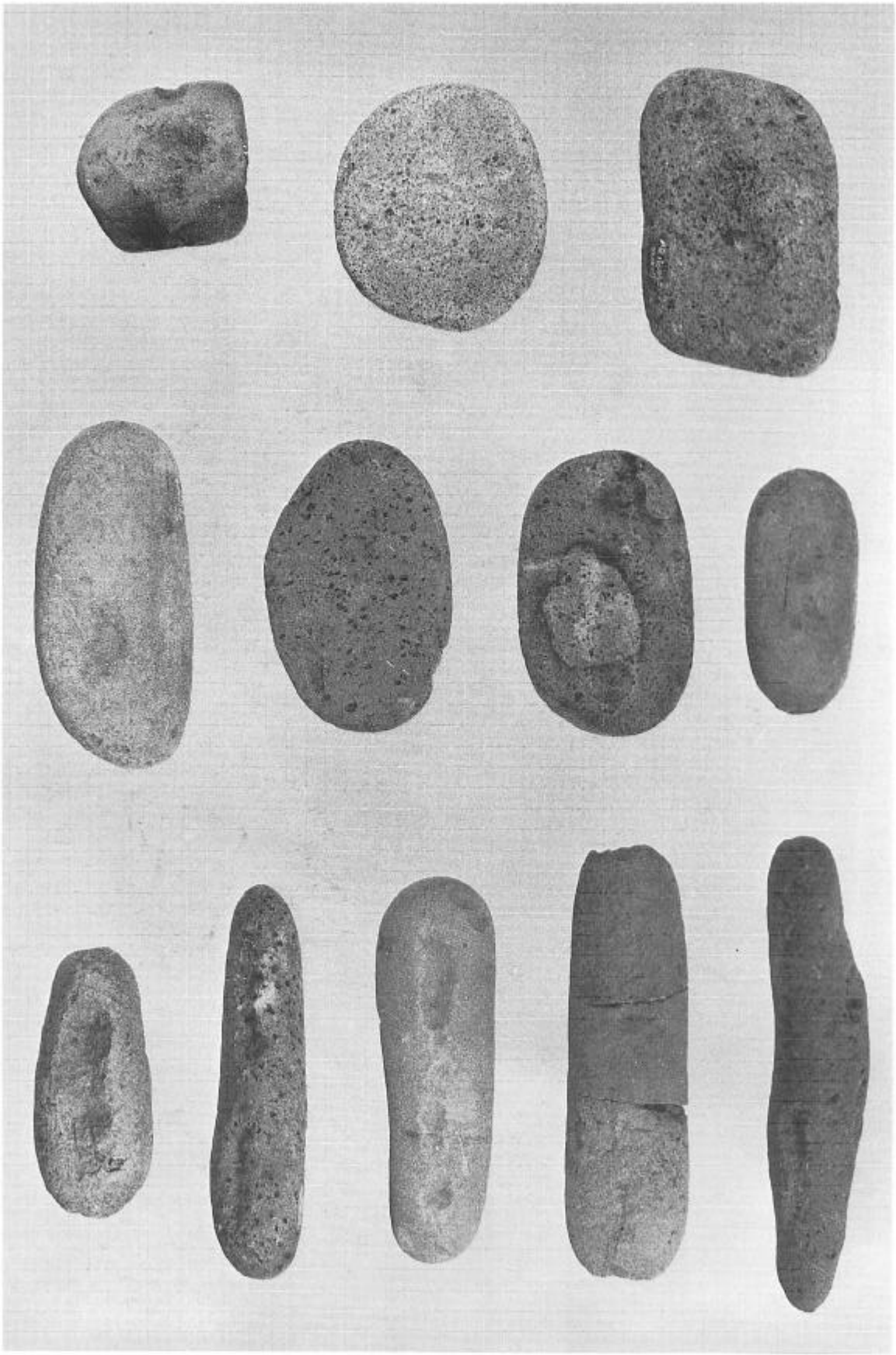
礫石器（2）　半円状扁平打製石器



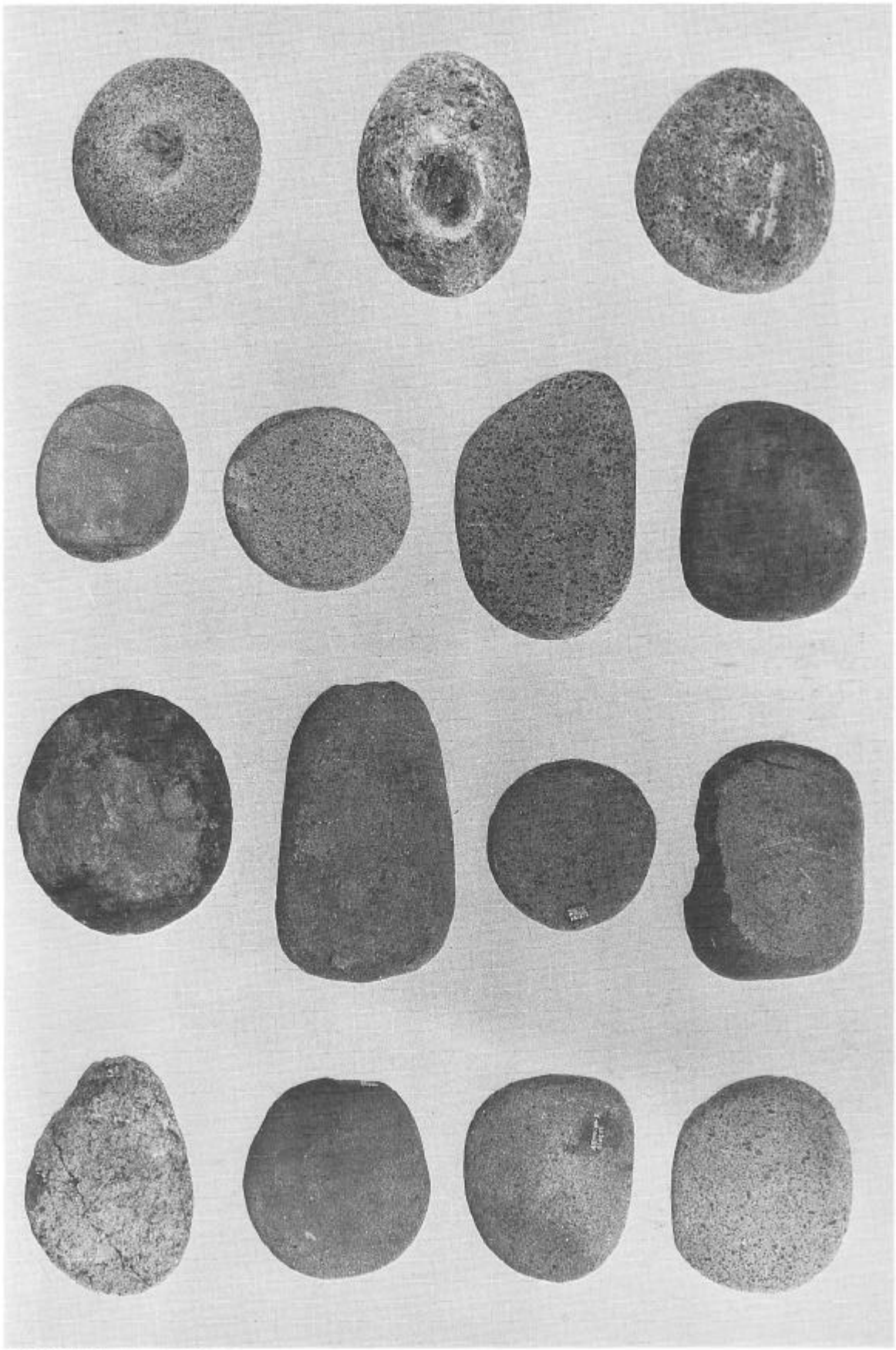
礫石器(3)　半円状扁平打製石器



礫石器（4）　石錘

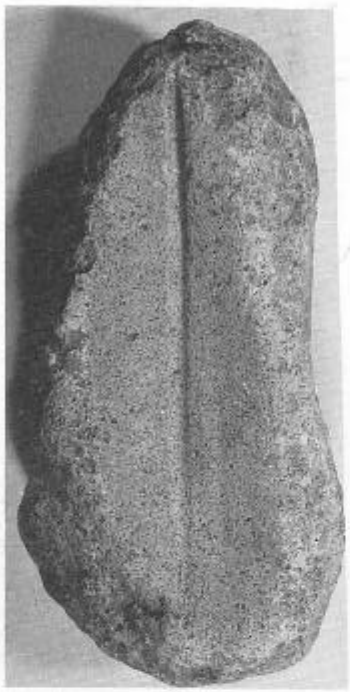


礫石器(5)　凹石



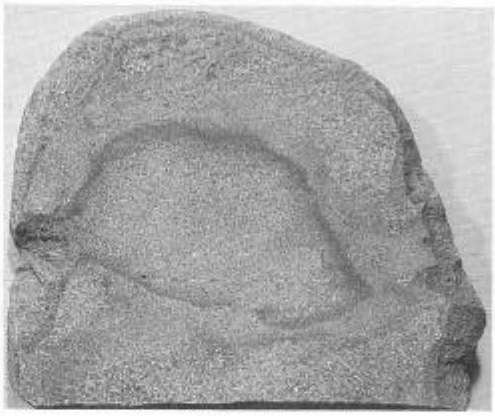
礫石器（6）　凹石・磨石

砥　石

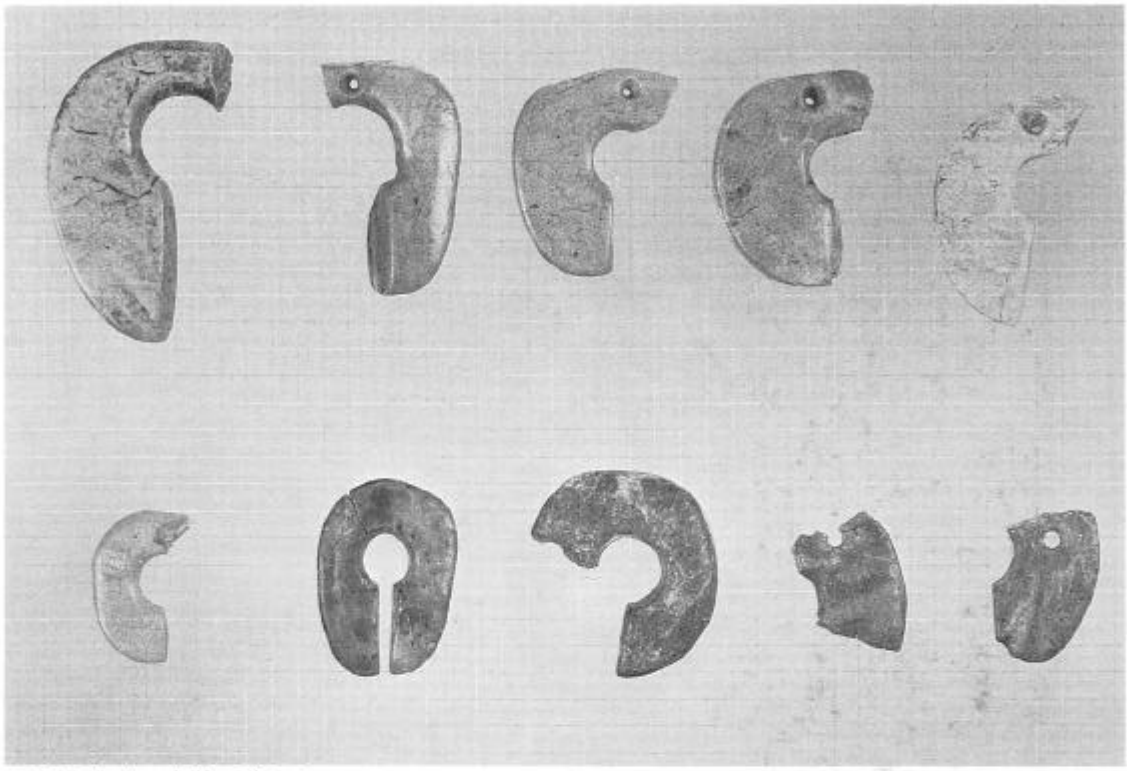


石皿（SI 213出土）

石　皿

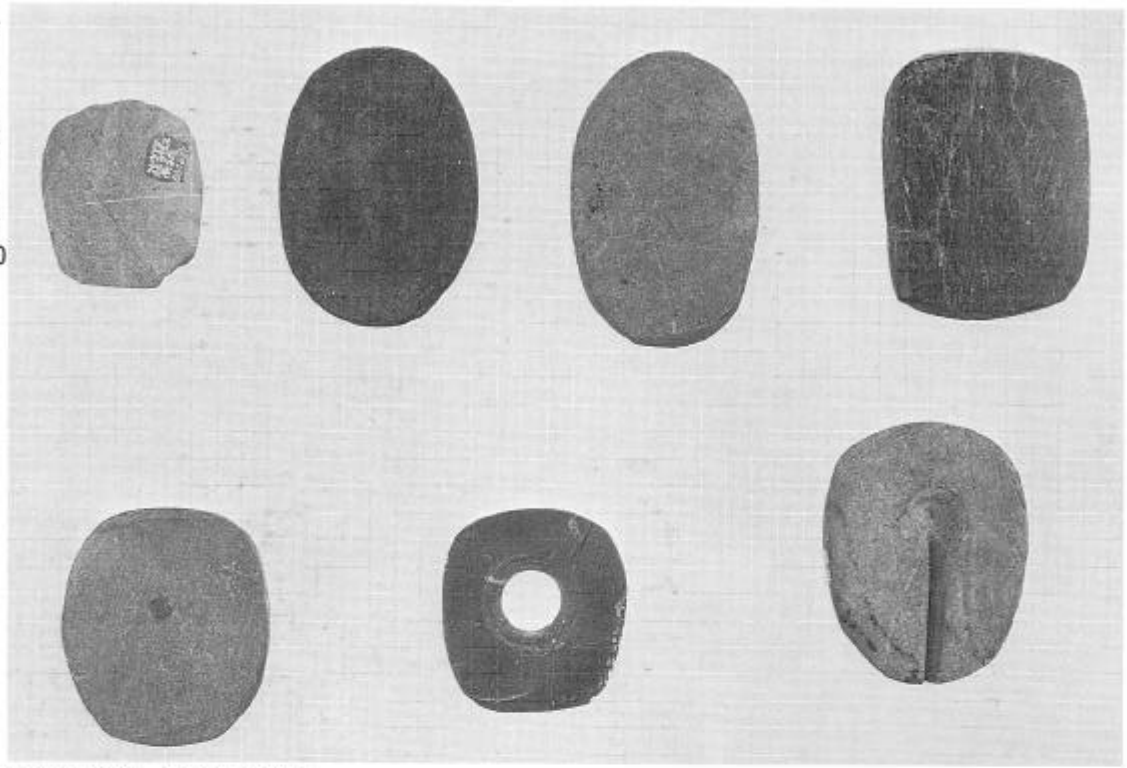


半円状扁平打製石器　集合写真

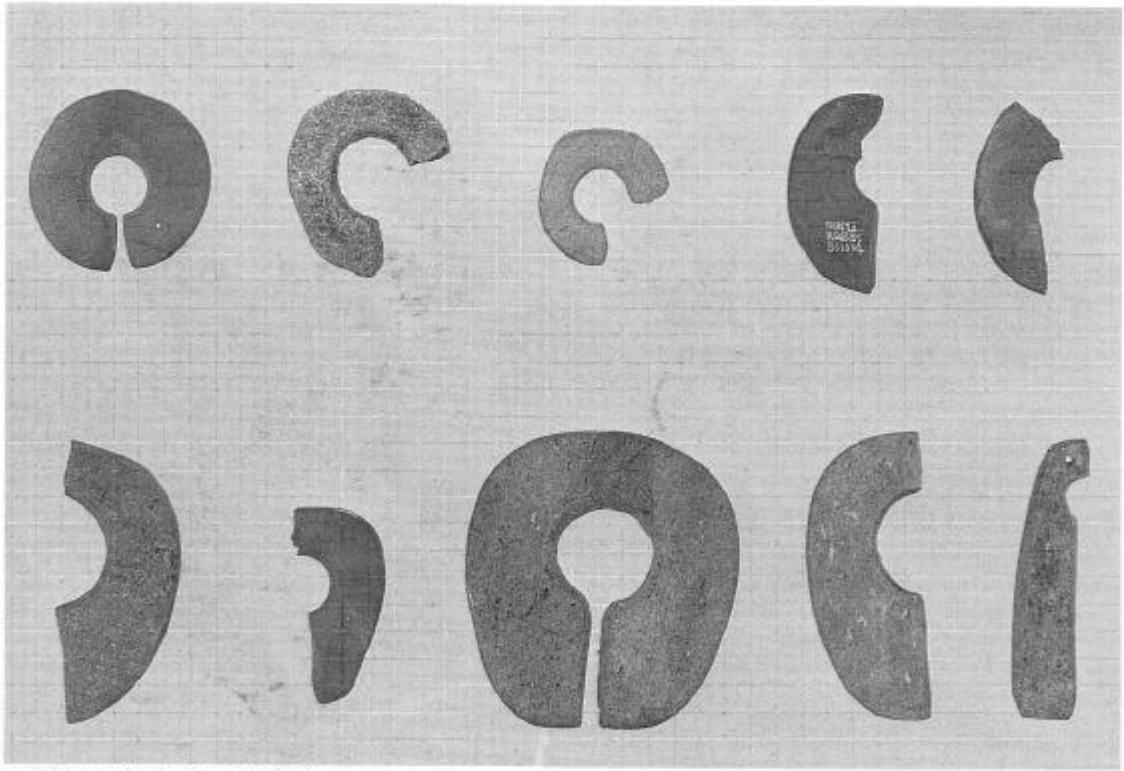


石製品（1）　玦状耳飾（1）

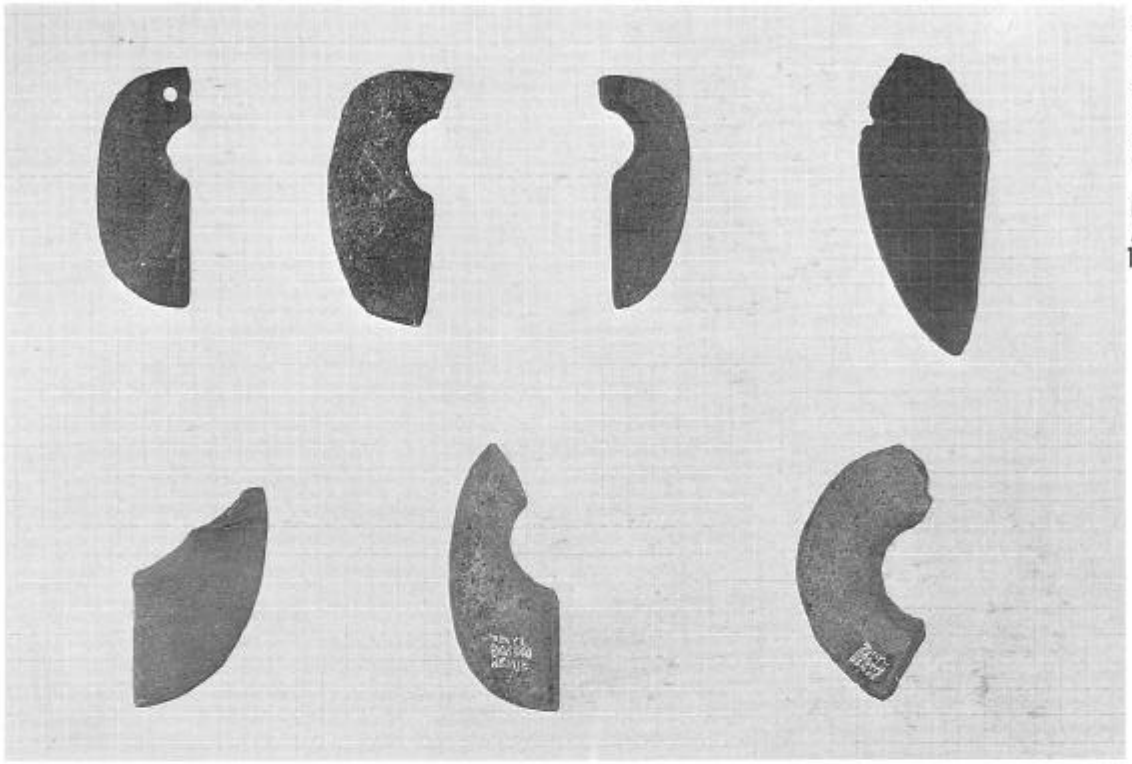
石製品（2）　玦状耳飾（2）



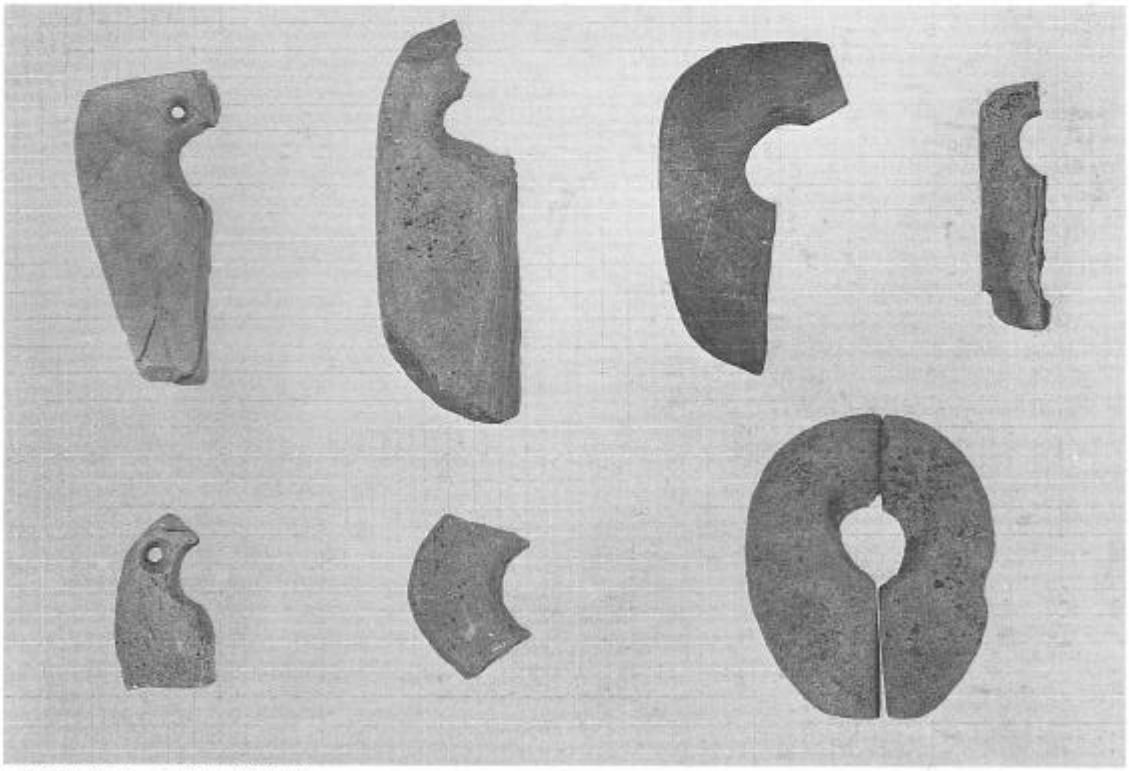
石製品（3）　玦状耳飾（3）



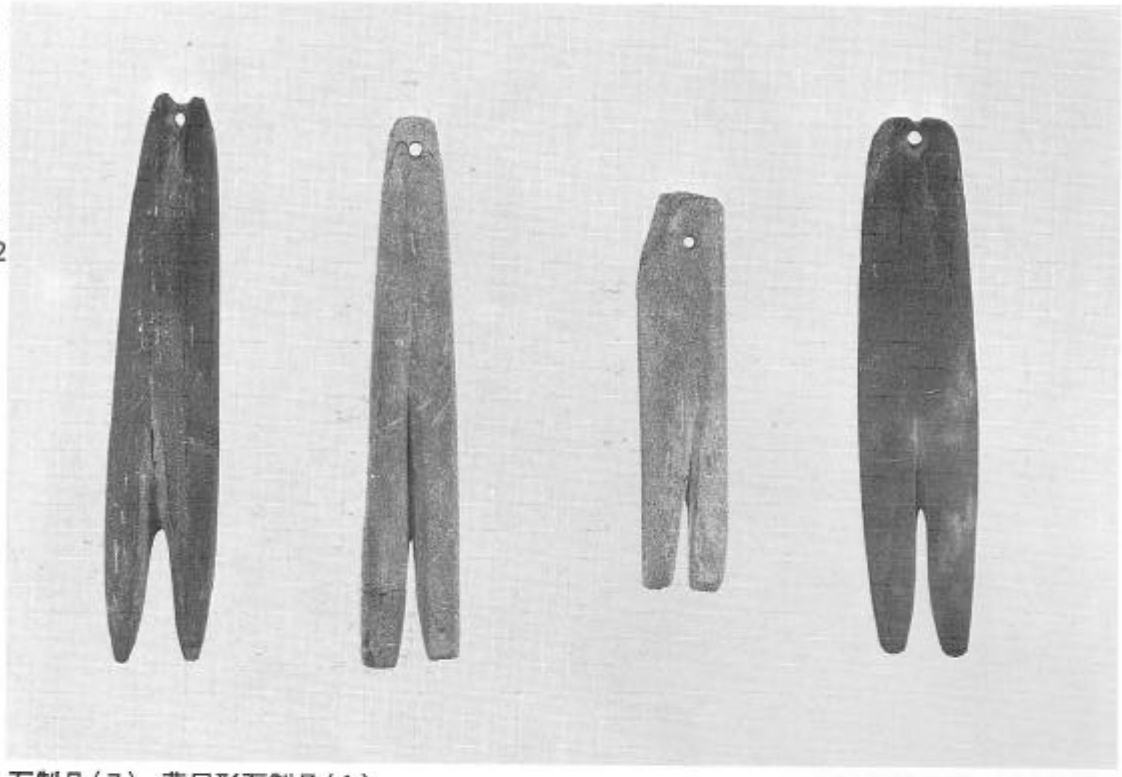
石製品（4）　玦状耳飾（4）



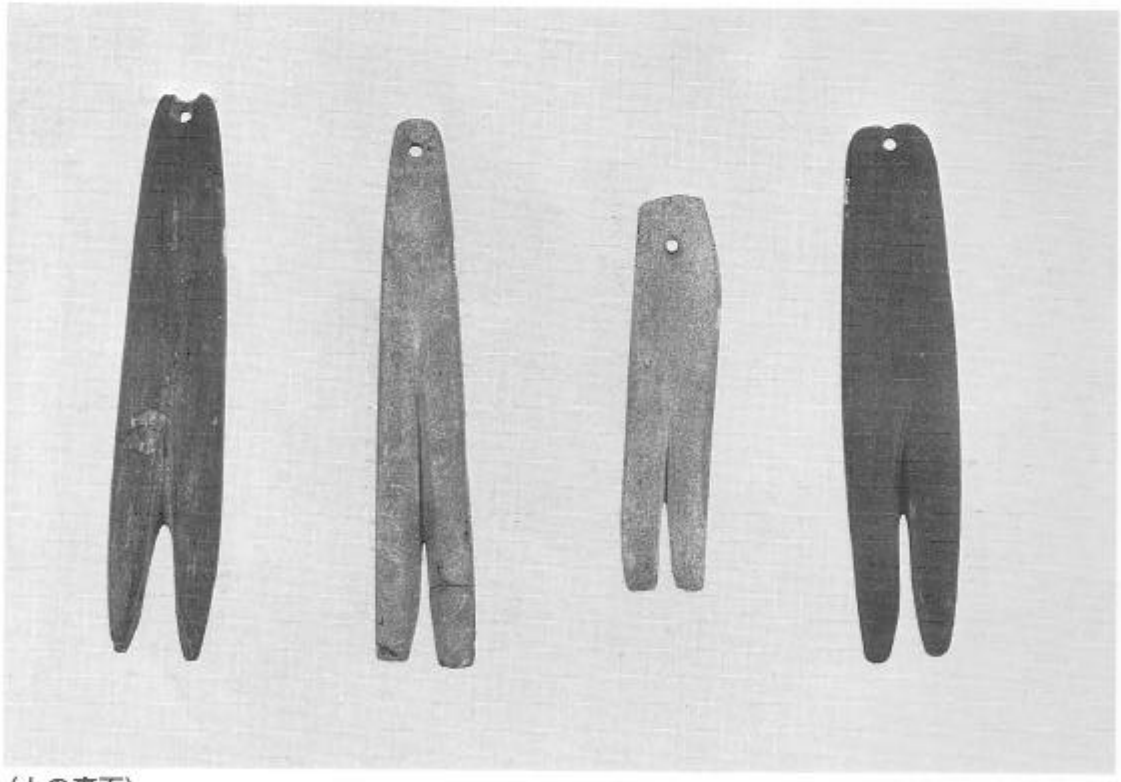
石製品（5）　玦状耳飾（5）



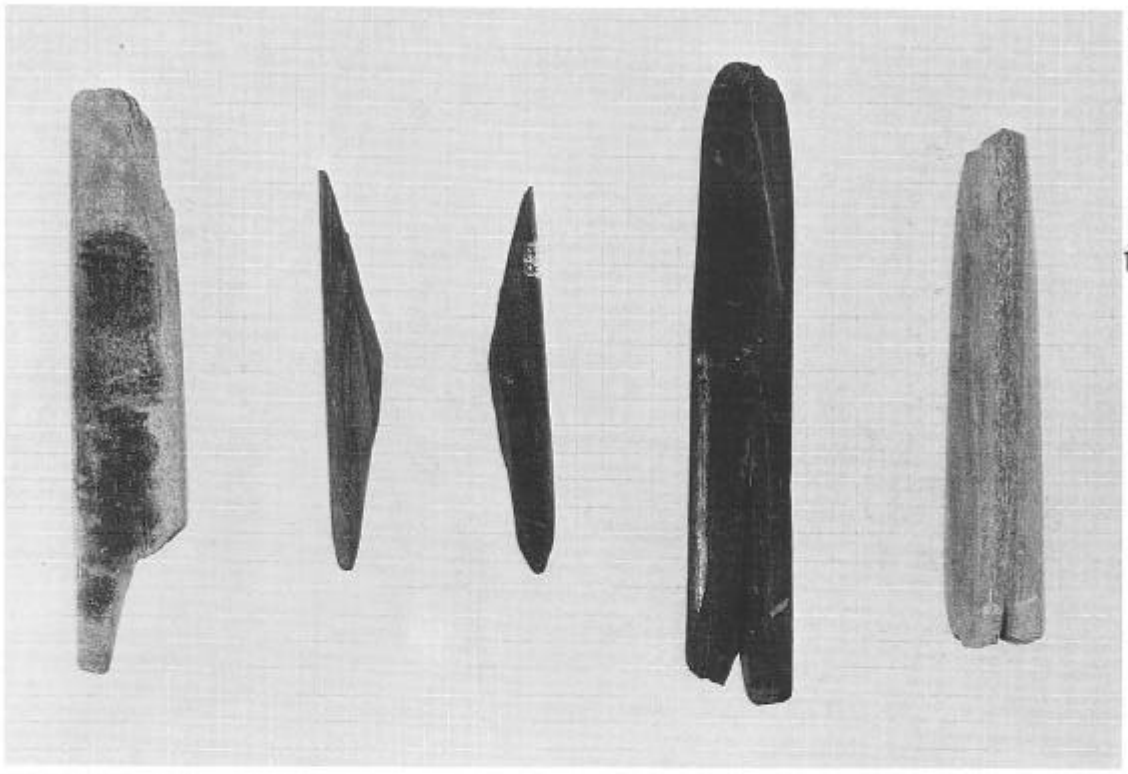
石製品（6）　玦状耳飾（6）



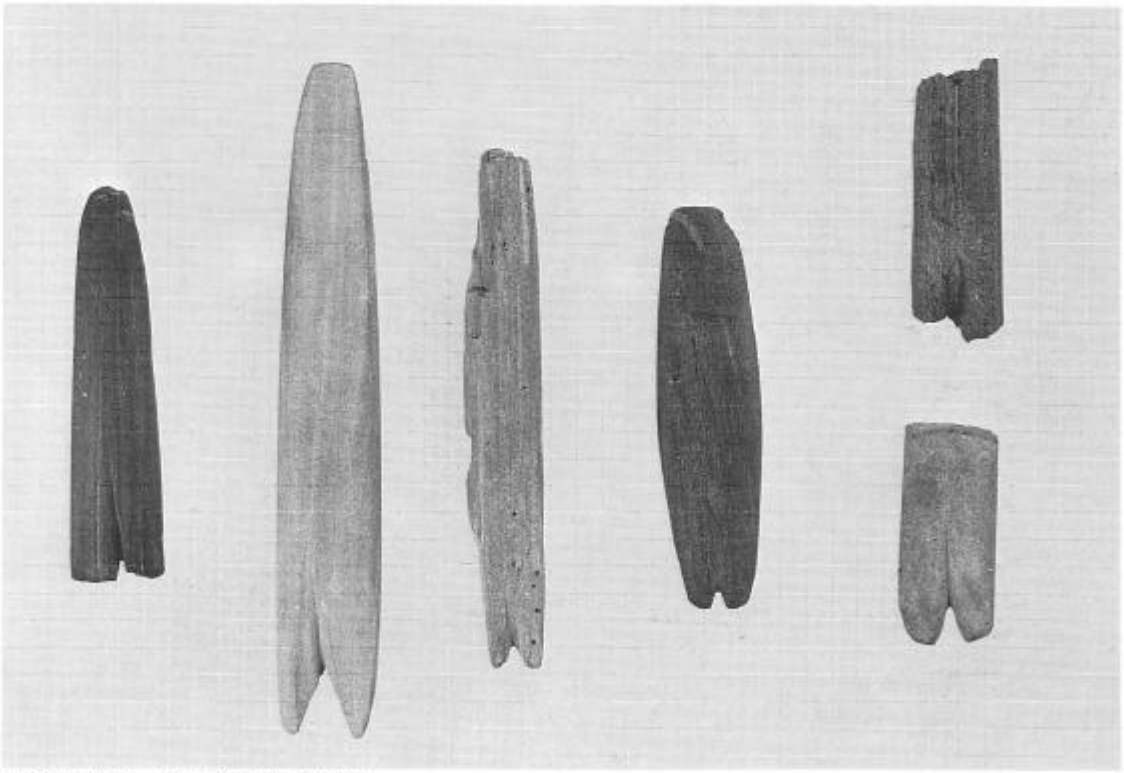
石製品（7）　燕尾形石製品（1）



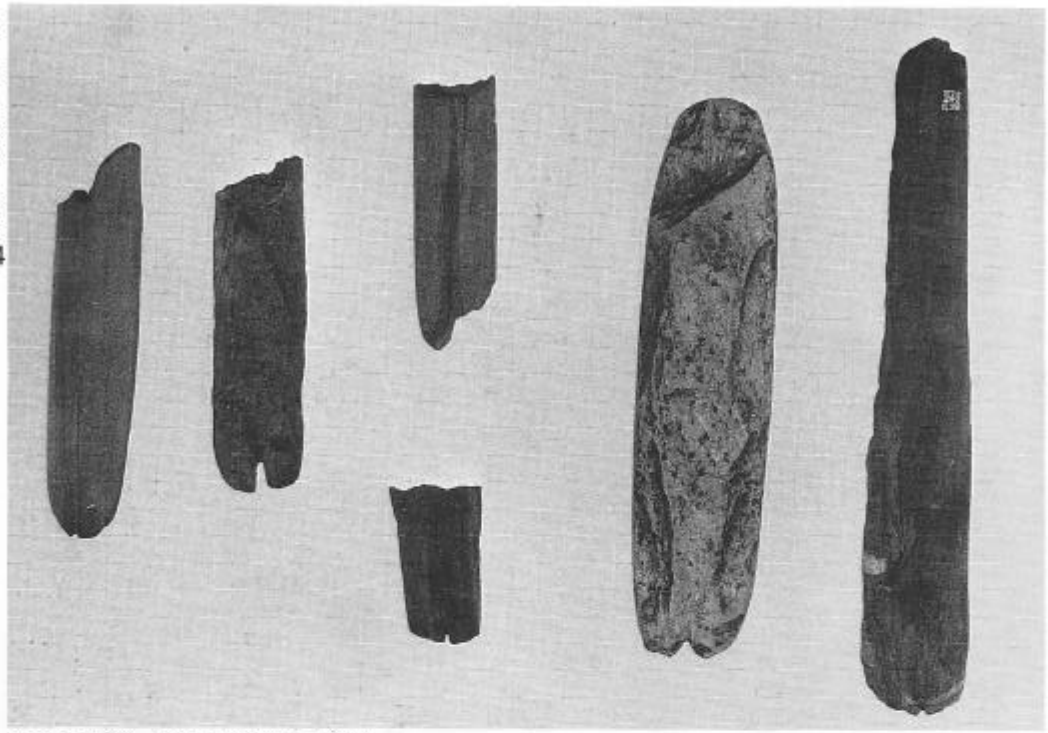
（上の裏面）



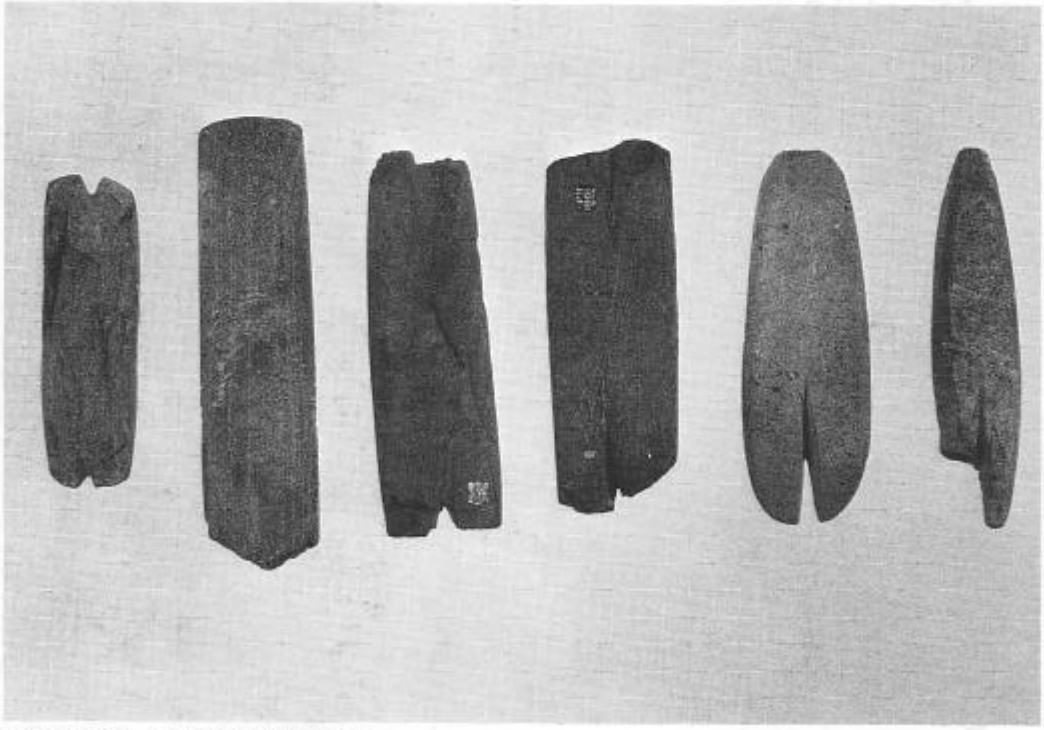
石製品（8）　燕尾形石製品（2）



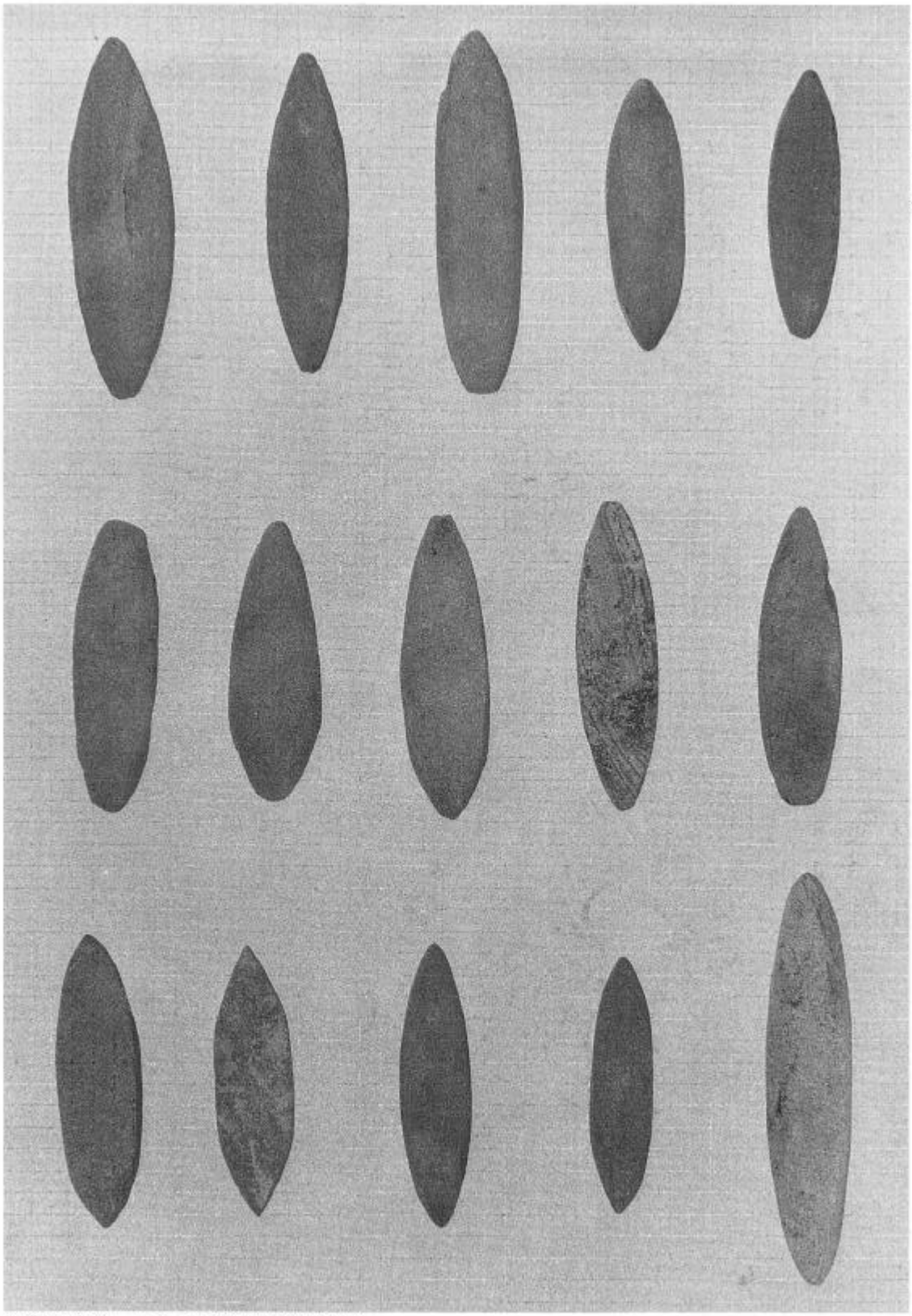
石製品（9）　燕尾形石製品（3）



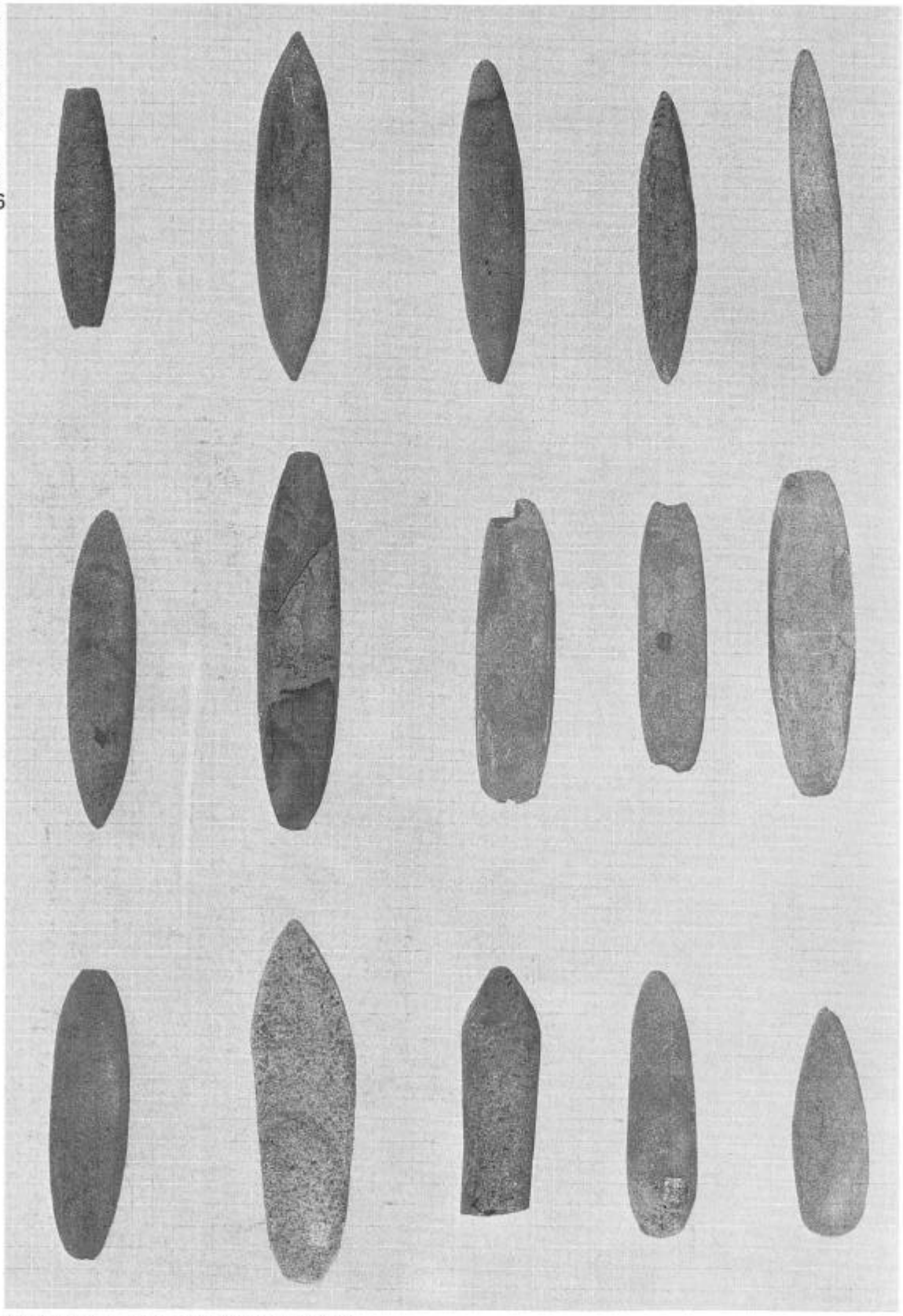
石製品(10)　燕尾形石製品(4)



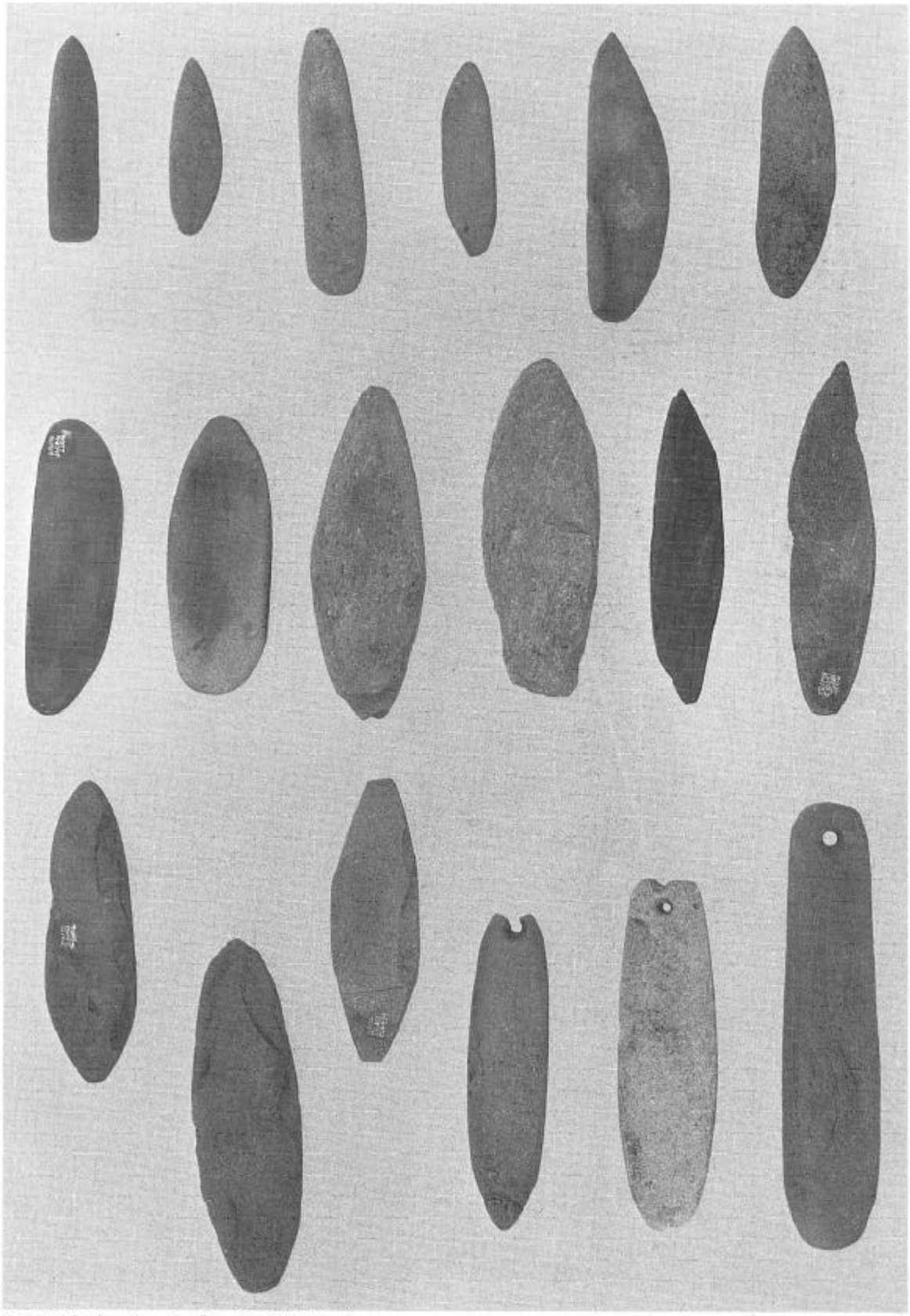
石製品(11)　燕尾形石製品(5)



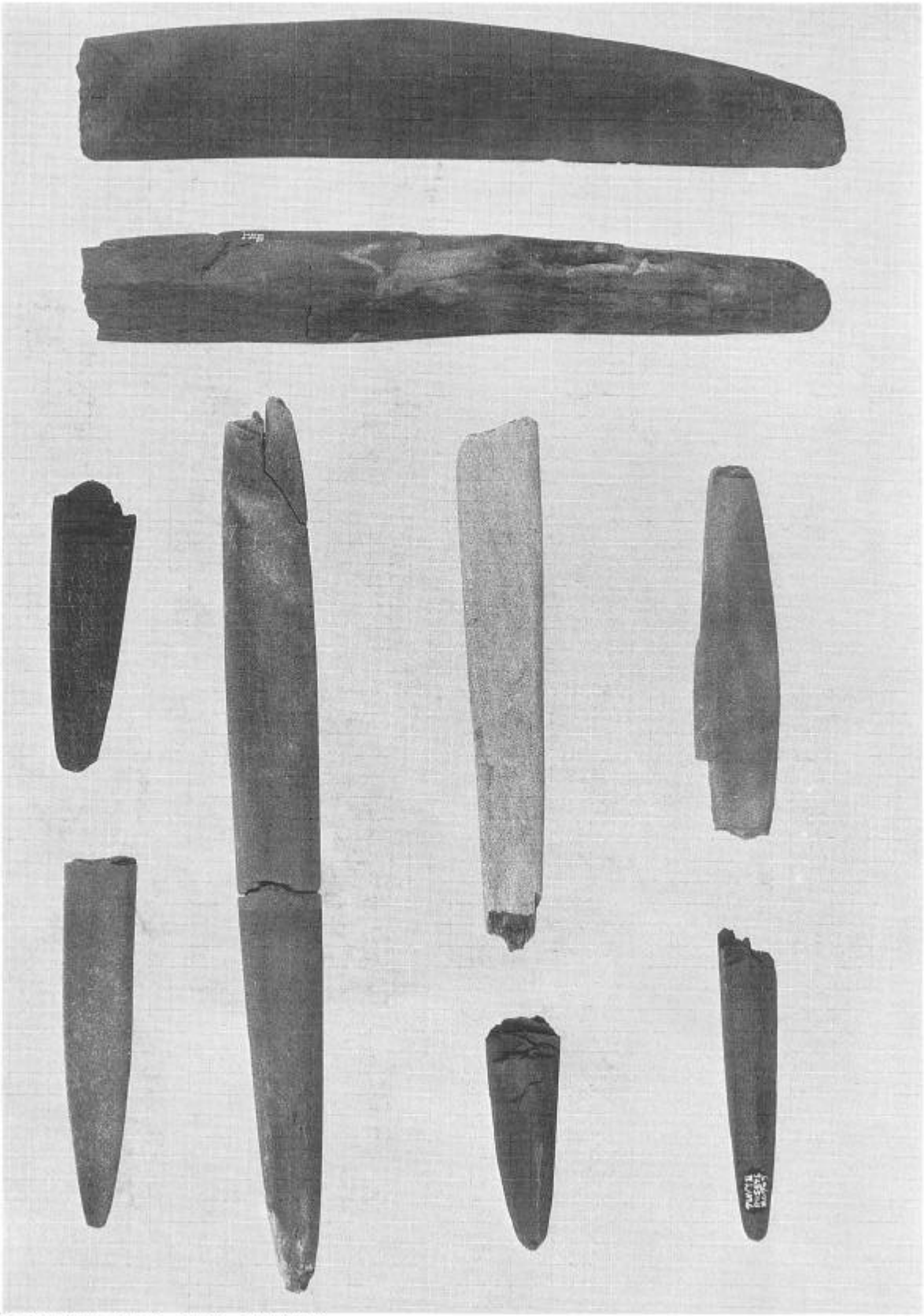
石製品(12)　カツオブシ形石製品(1)



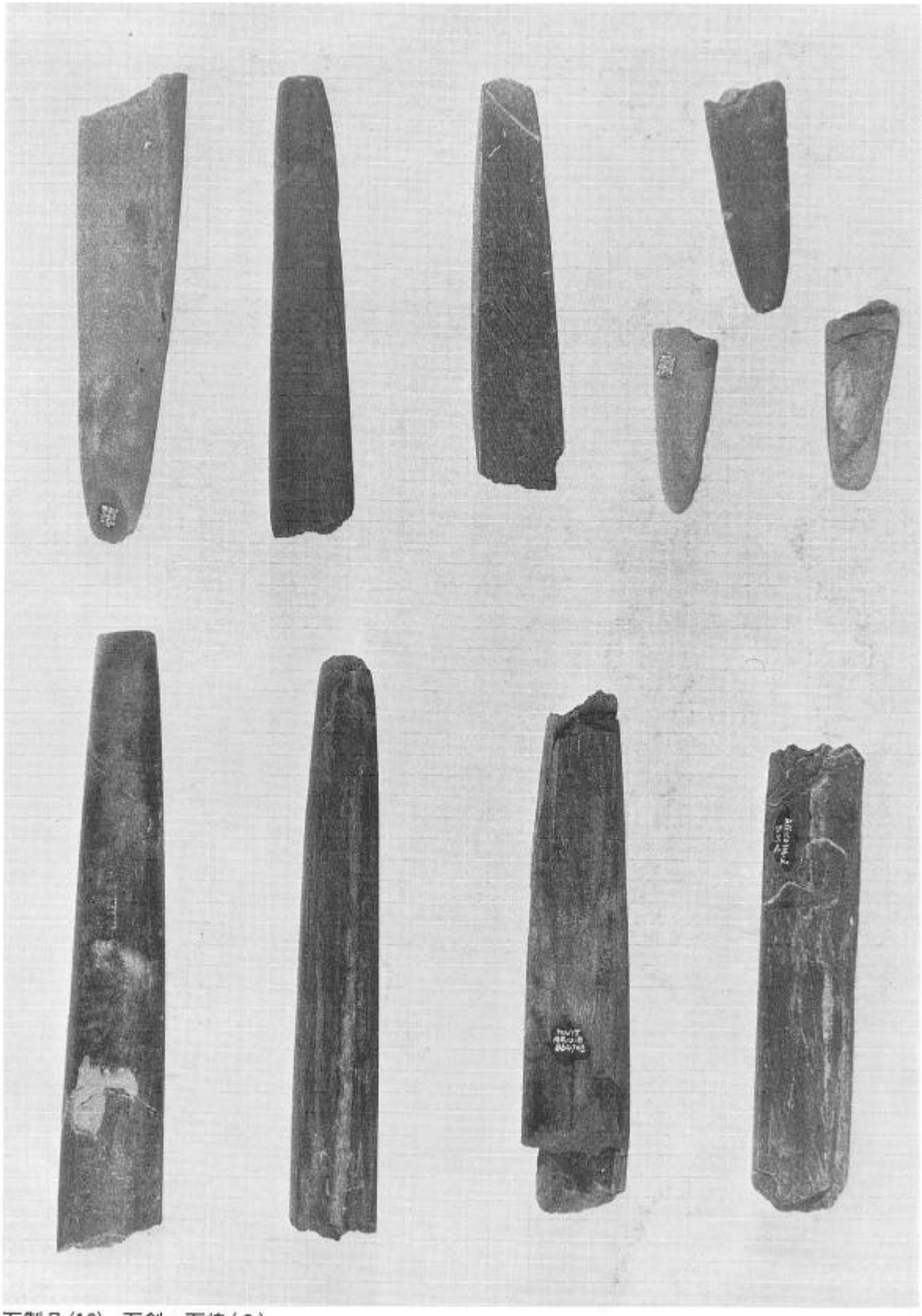
石製品(13)　カツオブシ形石製品(2)



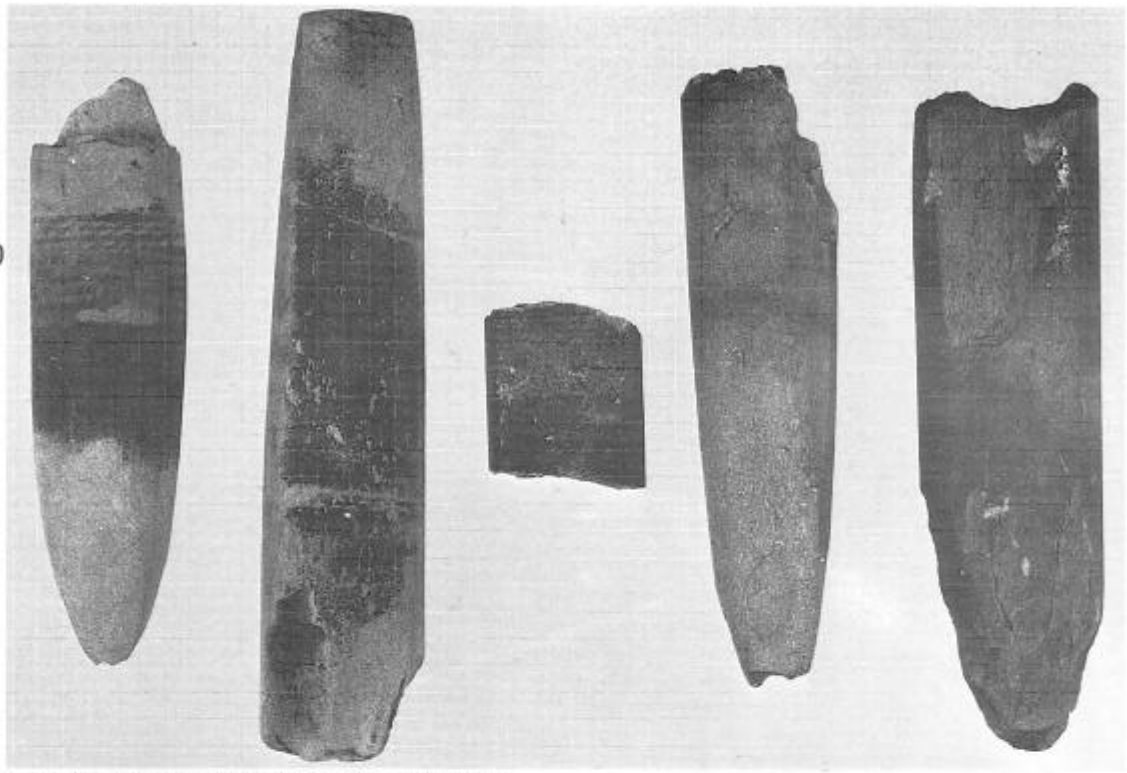
石製品(14)　カツオブシ形石製品(3)



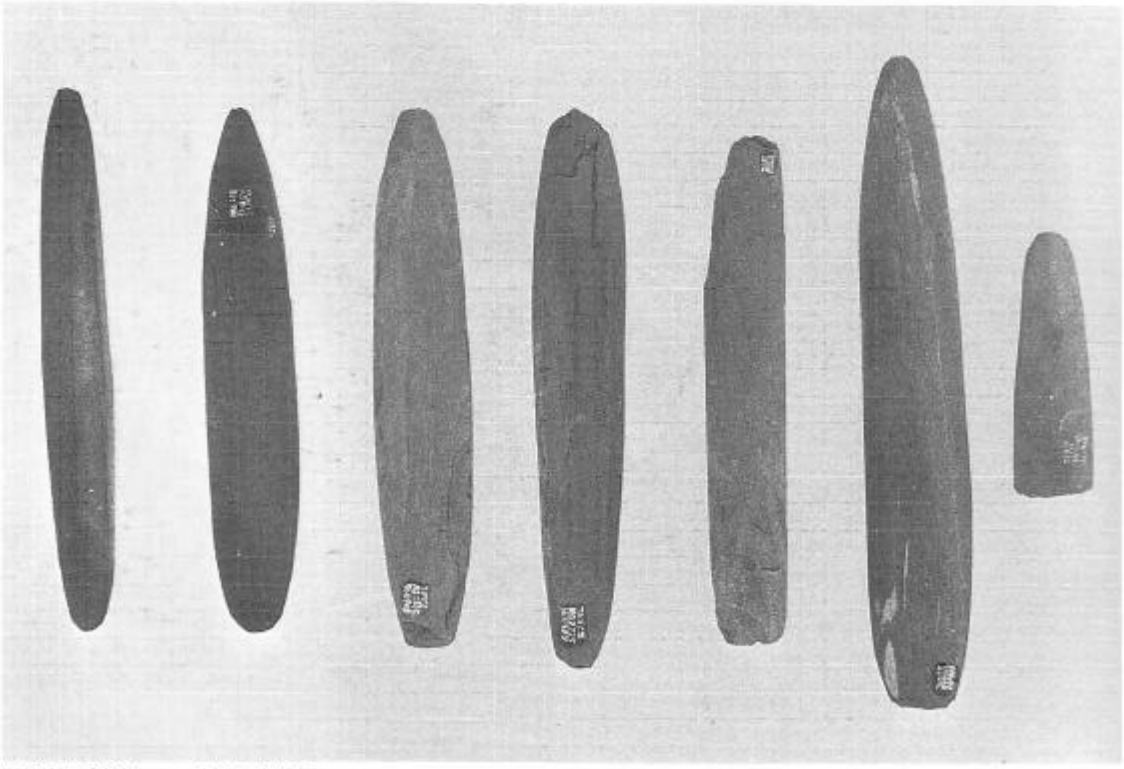
石製品(15)　石刀・石剣・石棒(1)



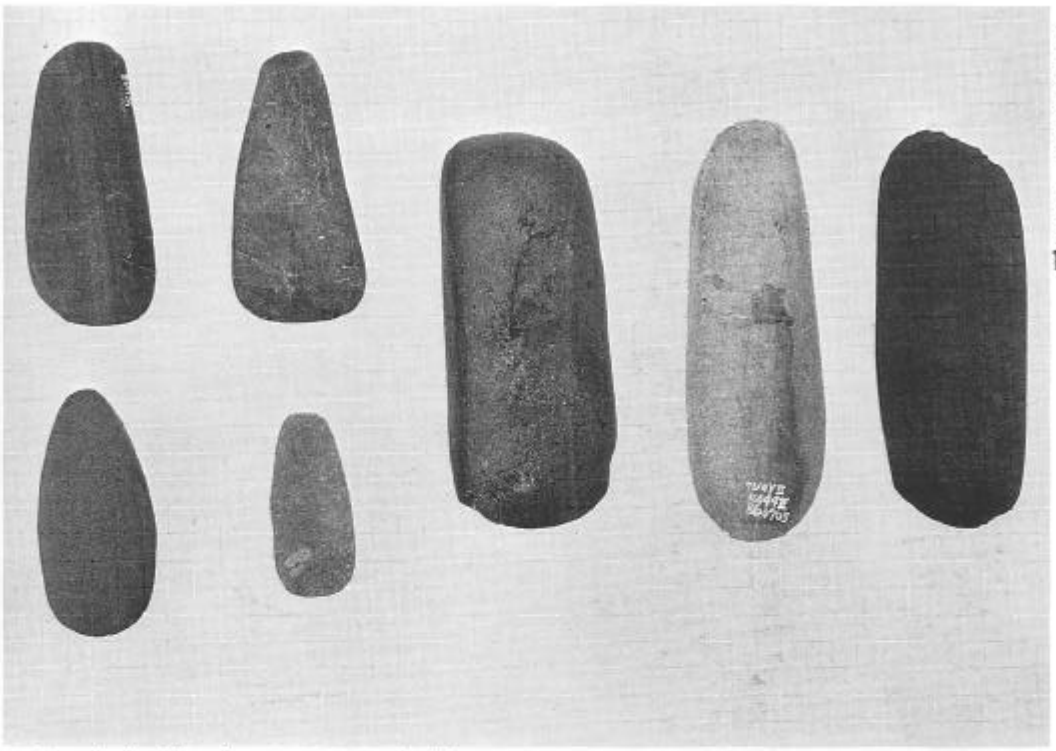
石製品(16)　石剣・石棒(2)



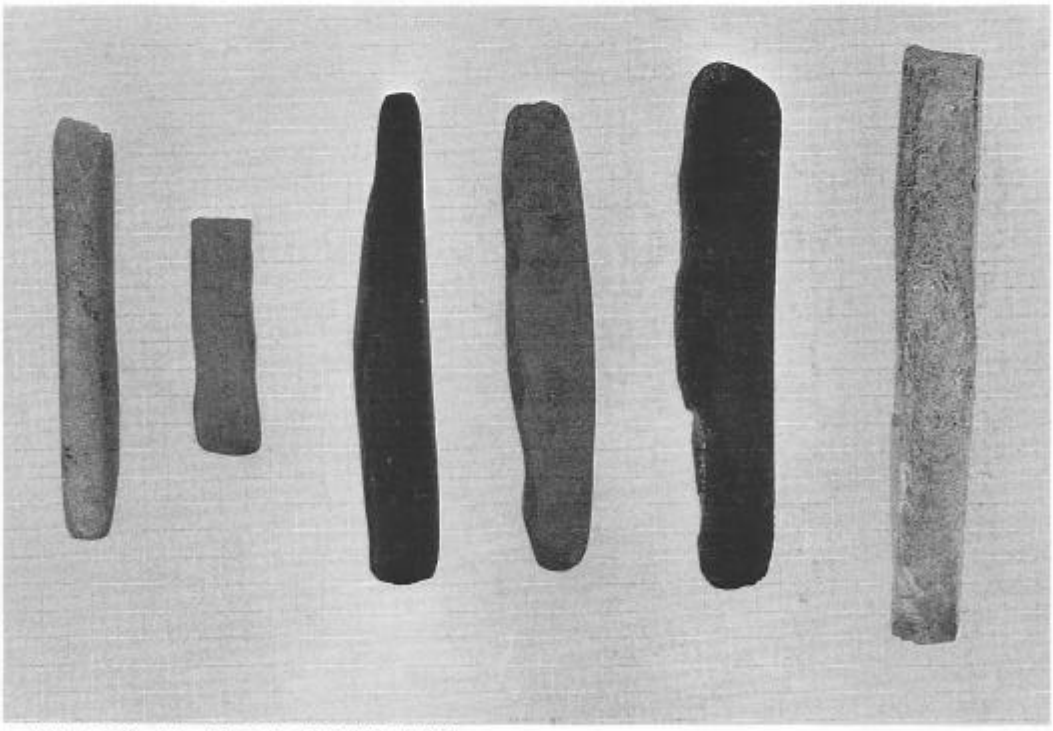
石製品(17)　膠着剤及び縄目のある石製品



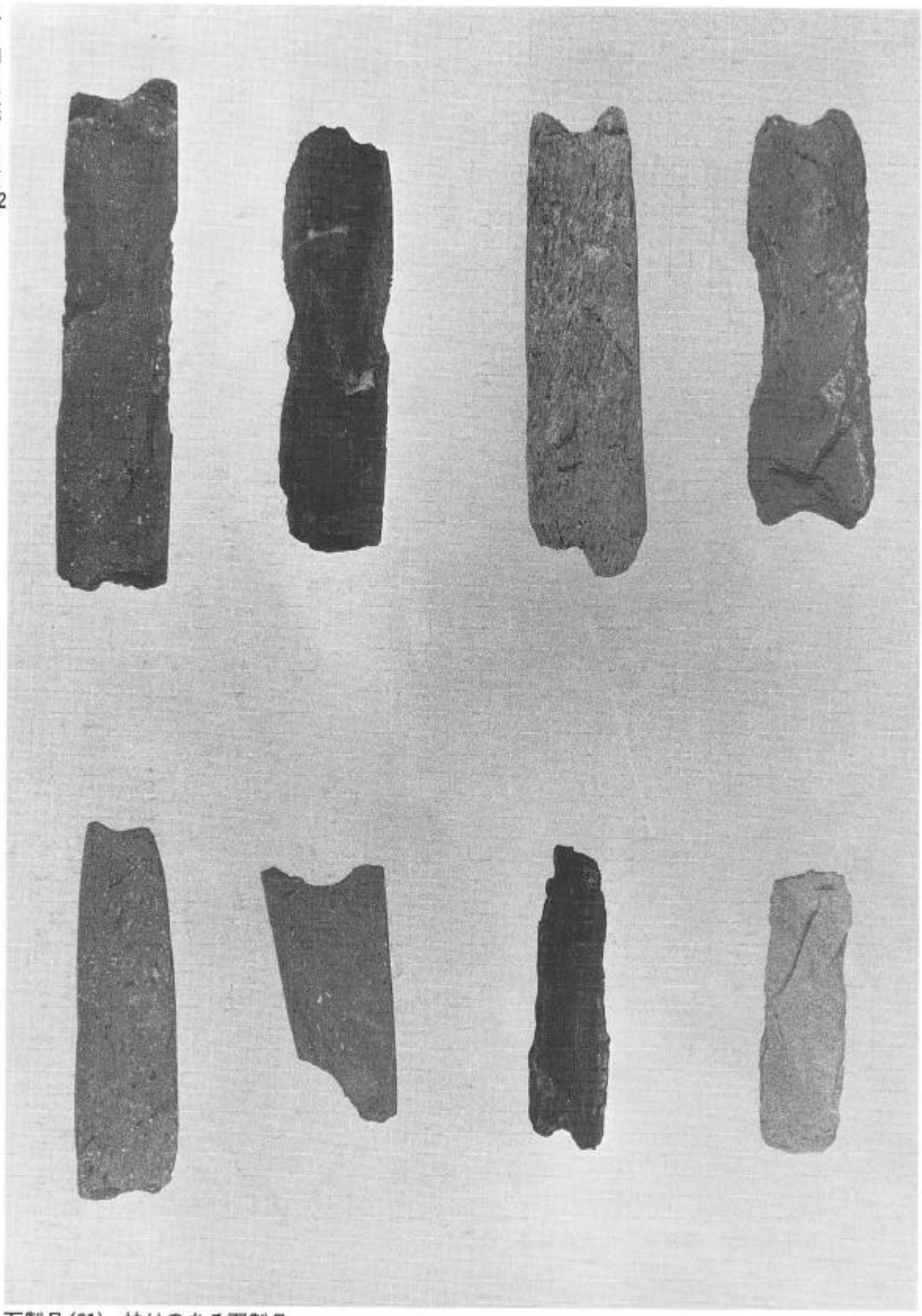
石製品(18)　ヘラ状石製品



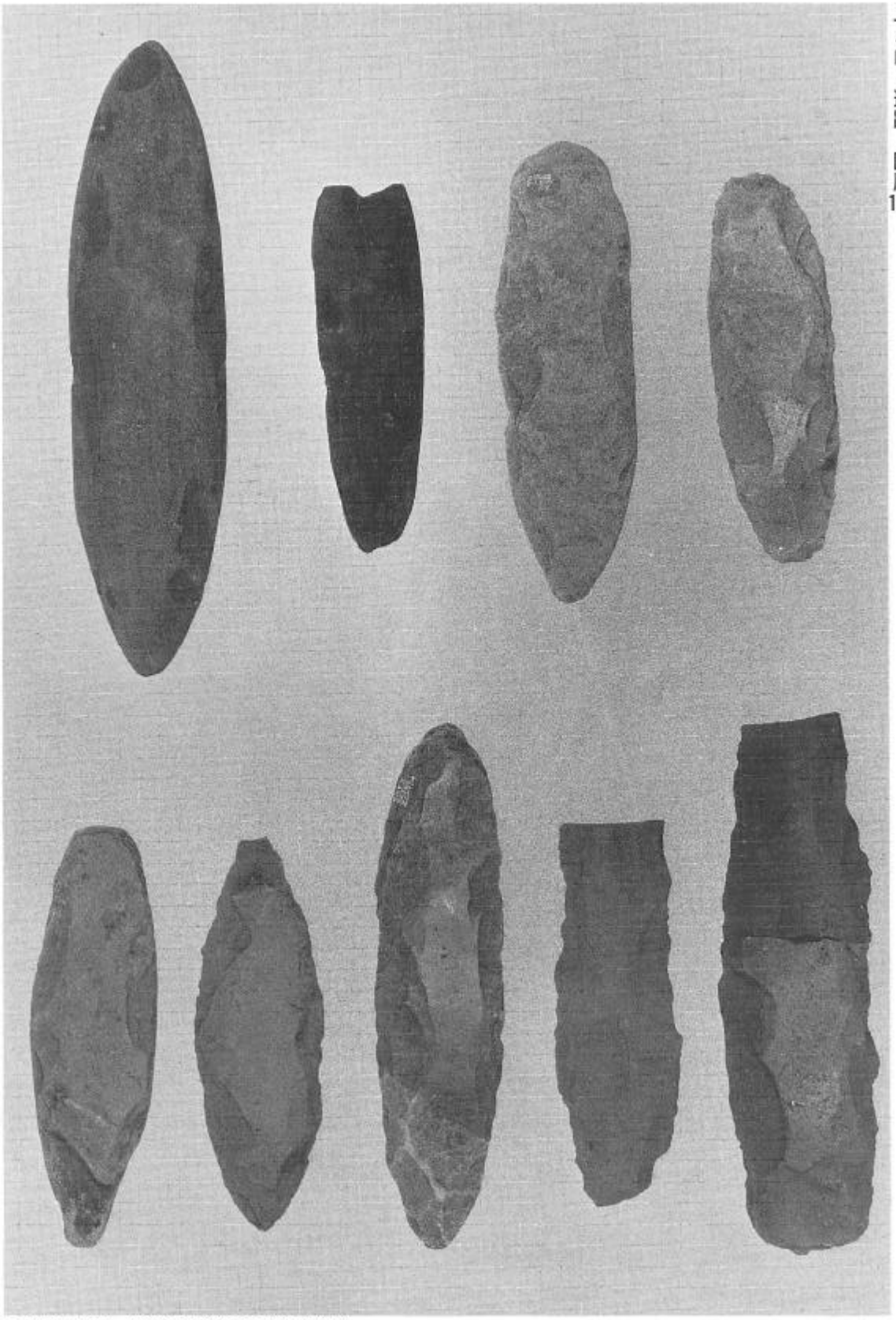
石製品(19)　使用痕のある石製品(a類)



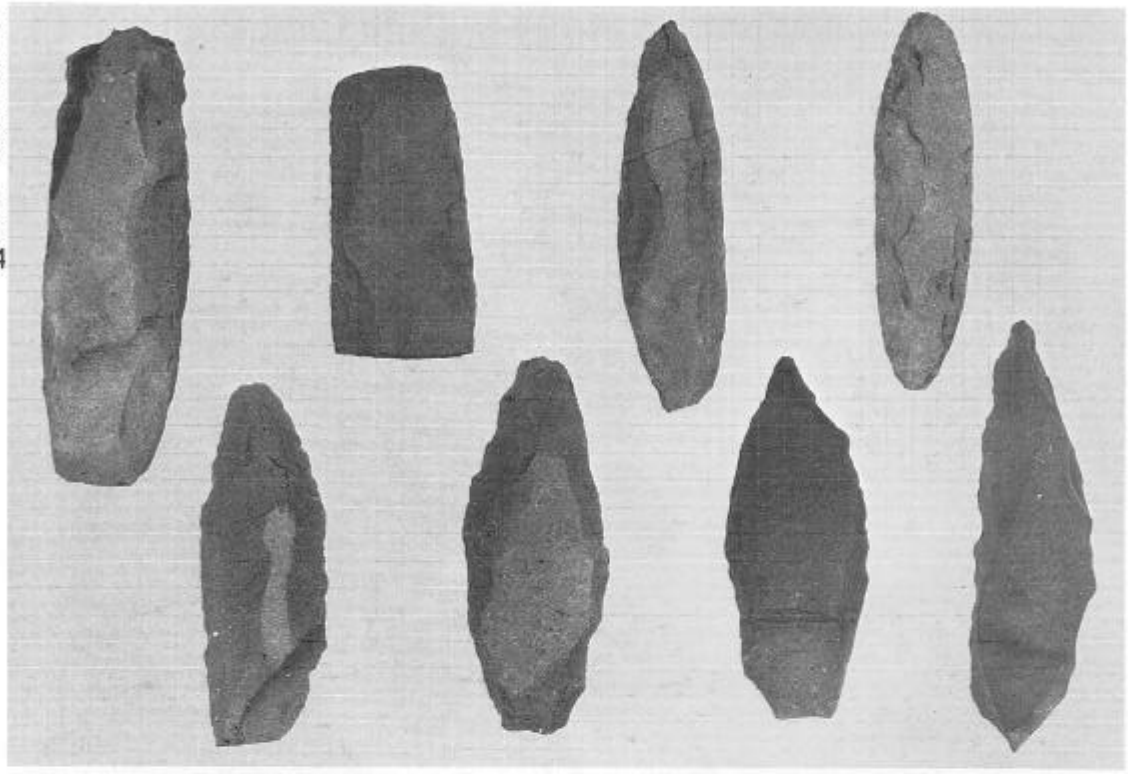
石製品(20)　使用痕のある石製品(b類)



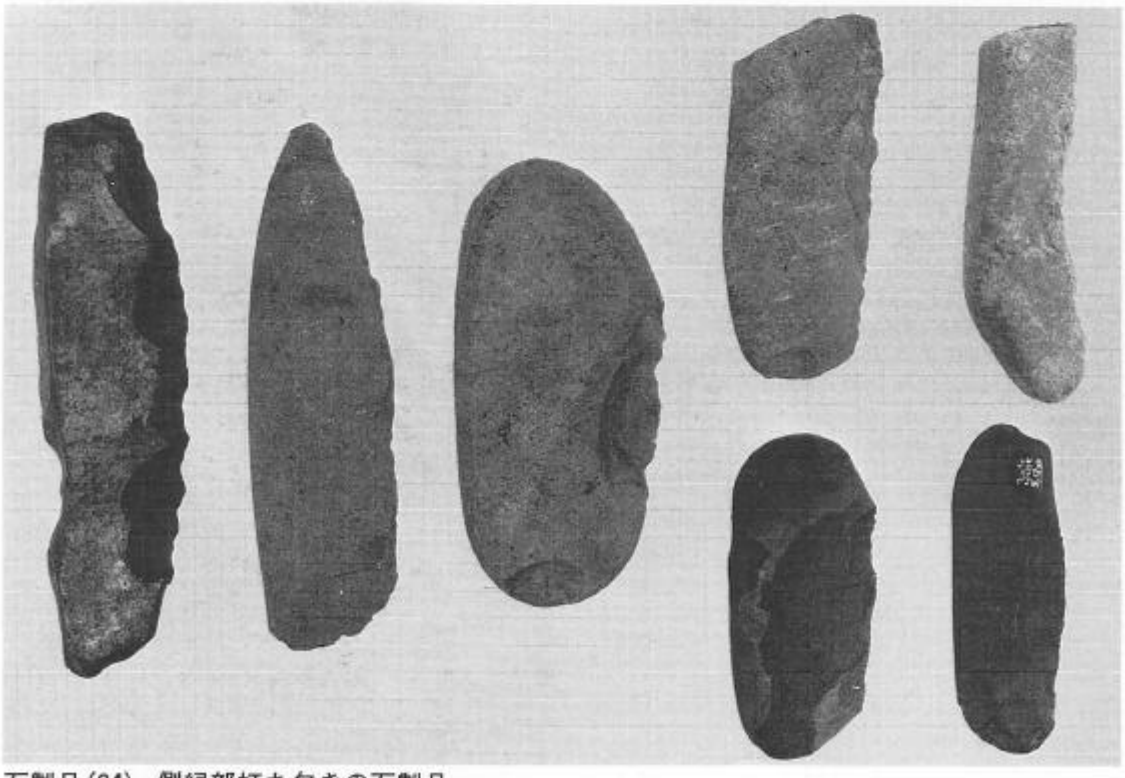
石製品(21)　抉りのある石製品



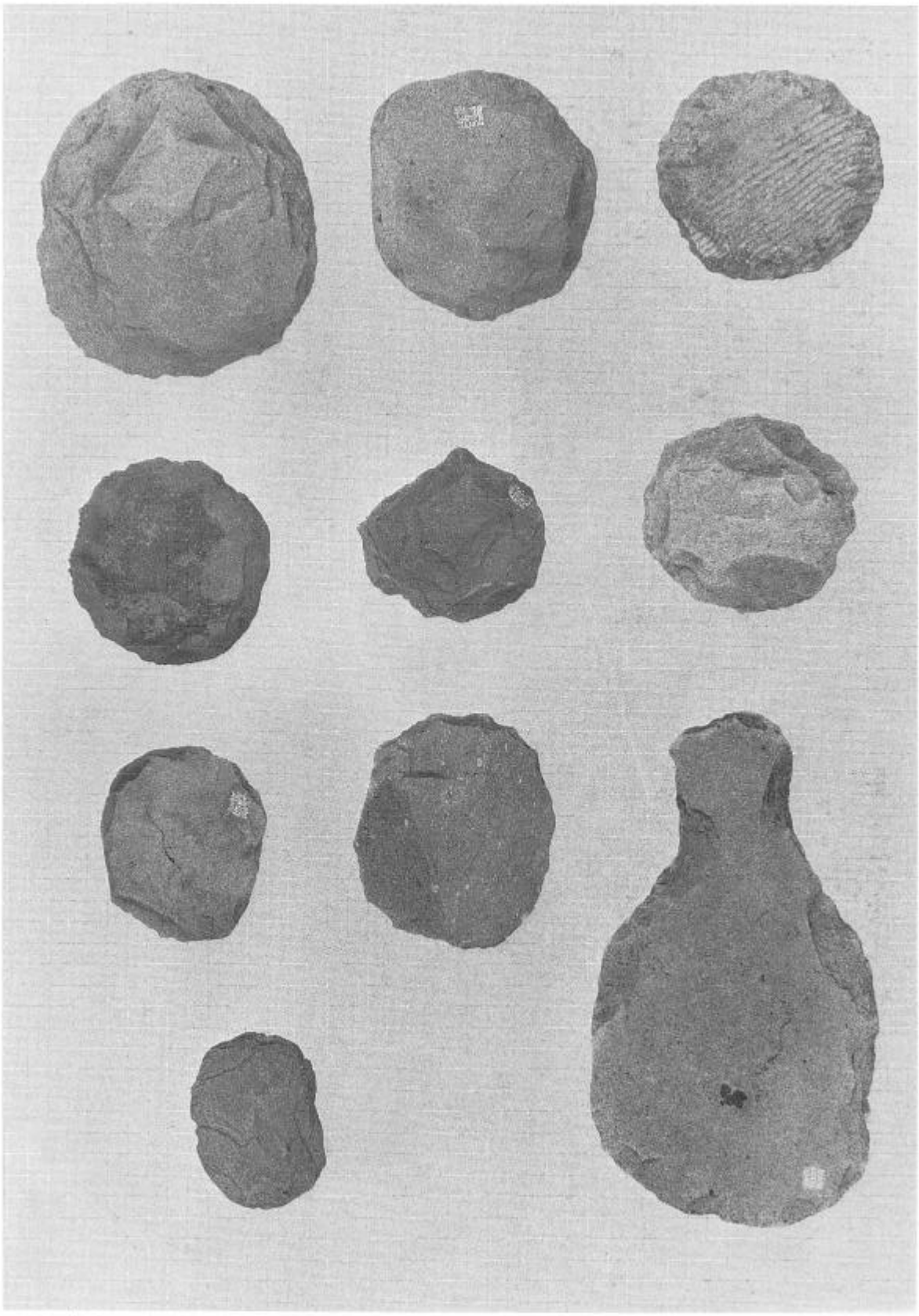
石製品(22)　打製石斧様の石製品(1)



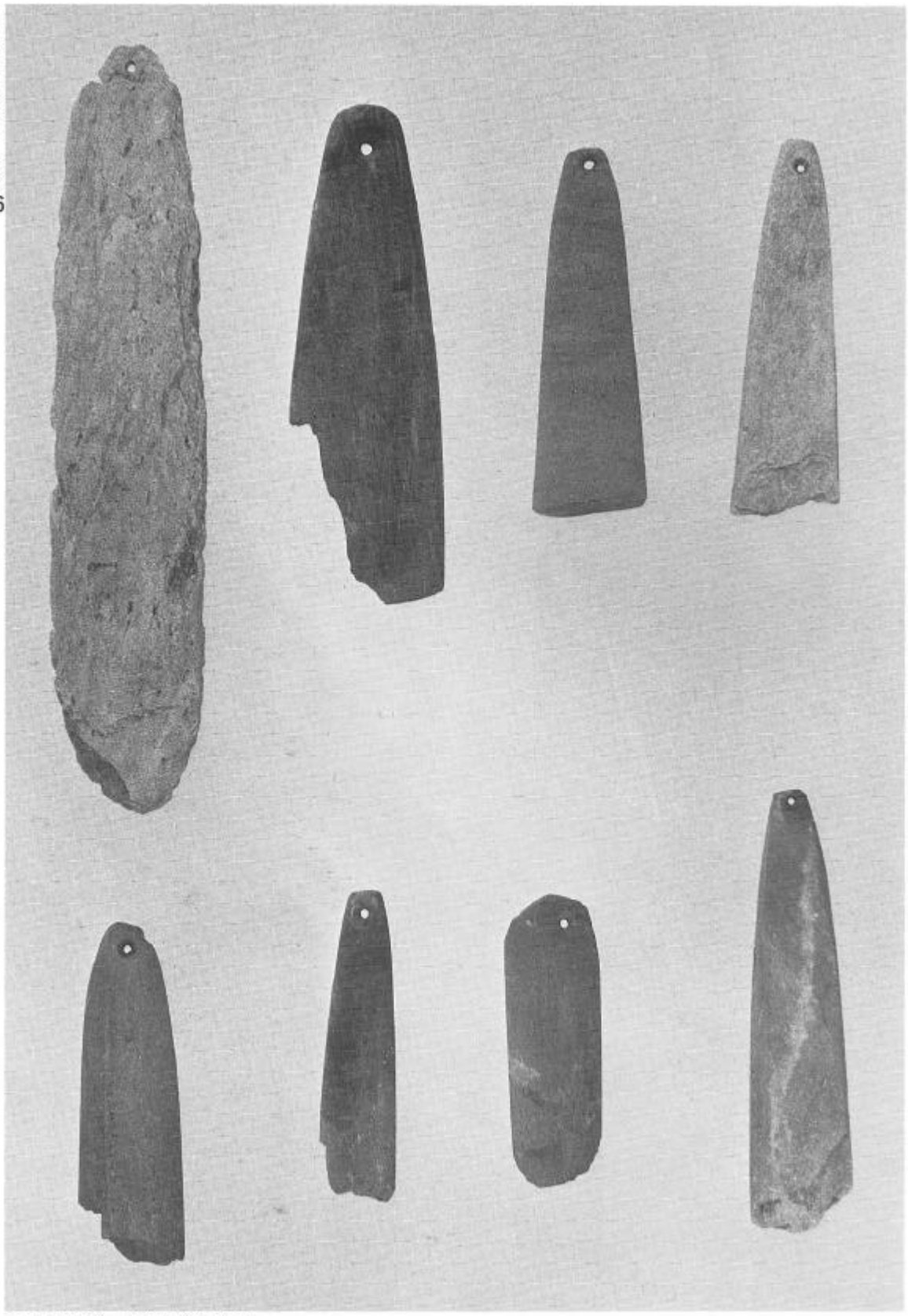
石製品(23)　打製石斧様の石製品(2)



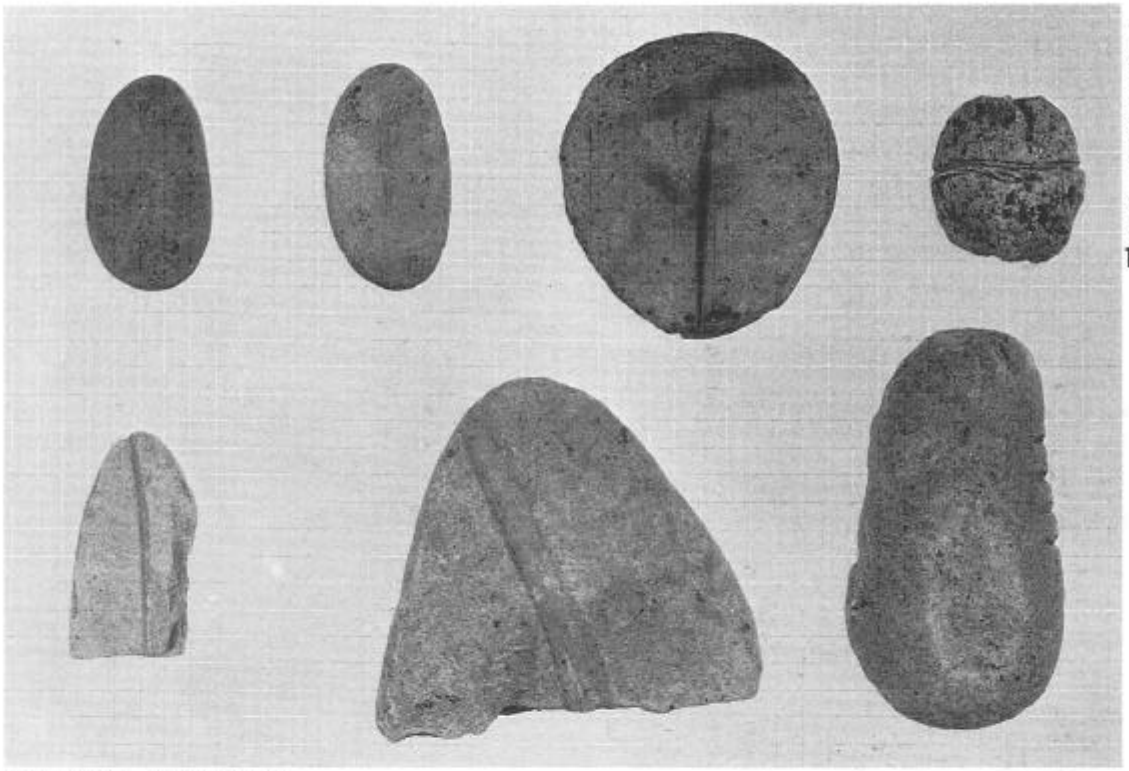
石製品(24)　側縁部打ち欠きの石製品



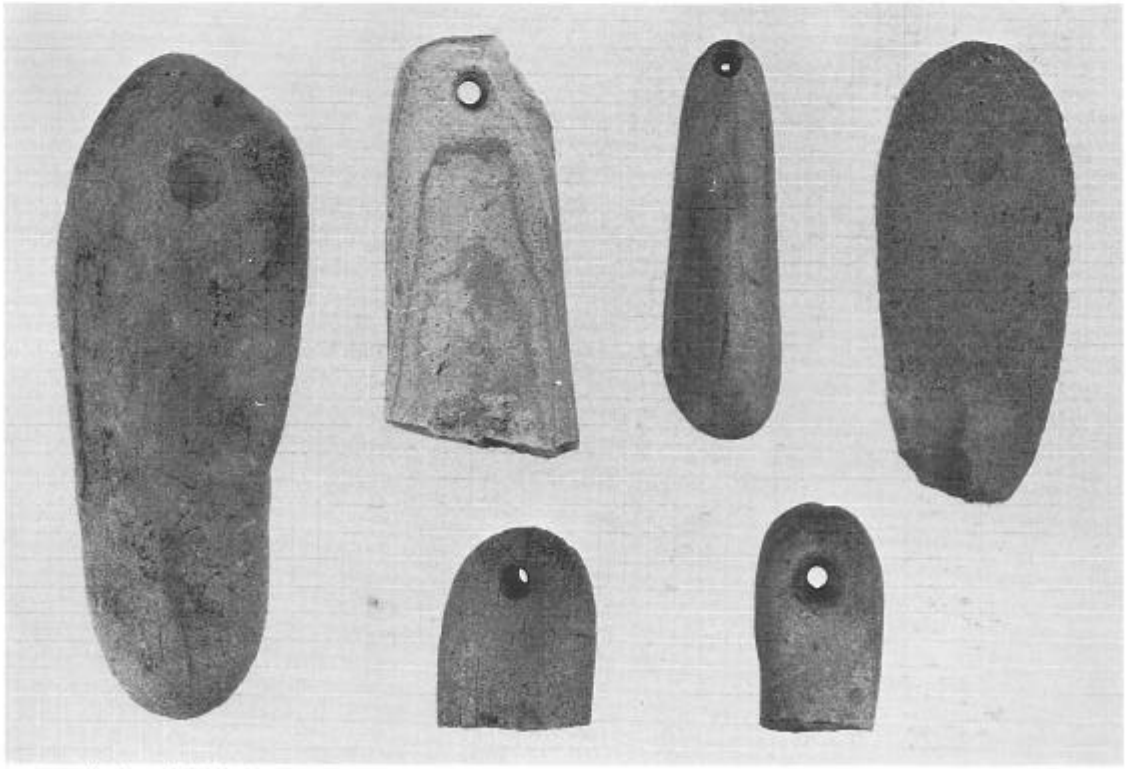
石製品(25)　円盤状石製品・鍬型石製品



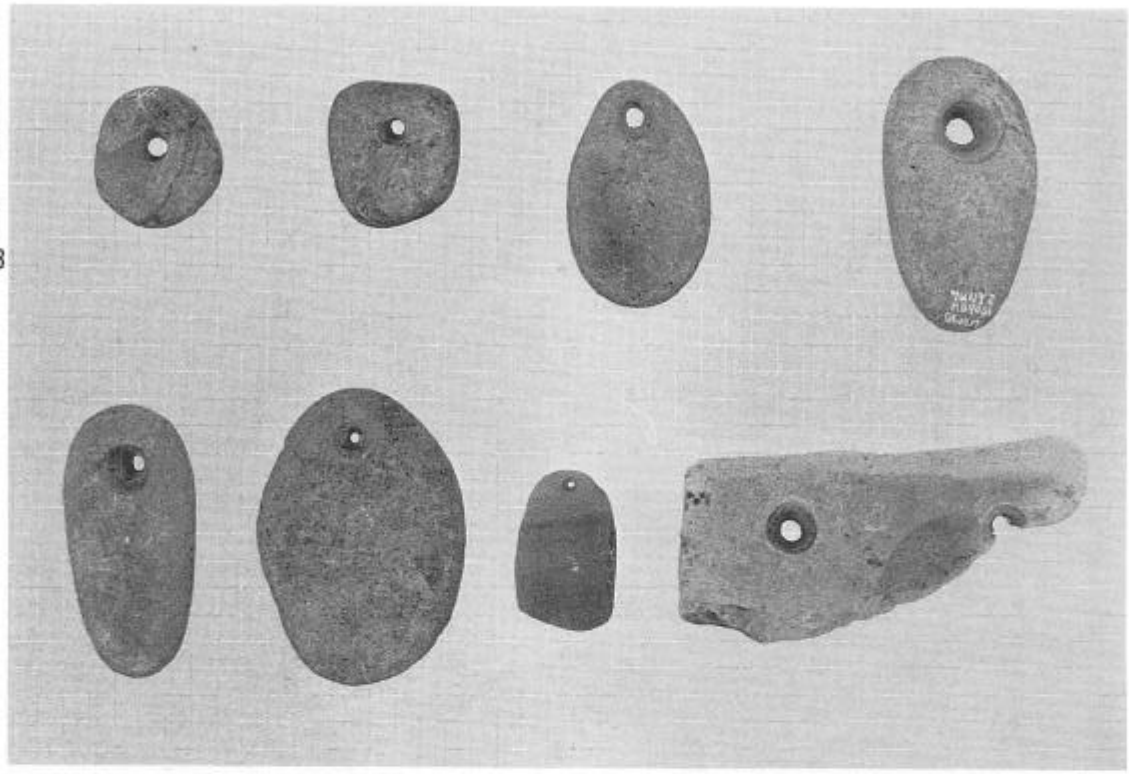
石製品(26)　短柵形石製品



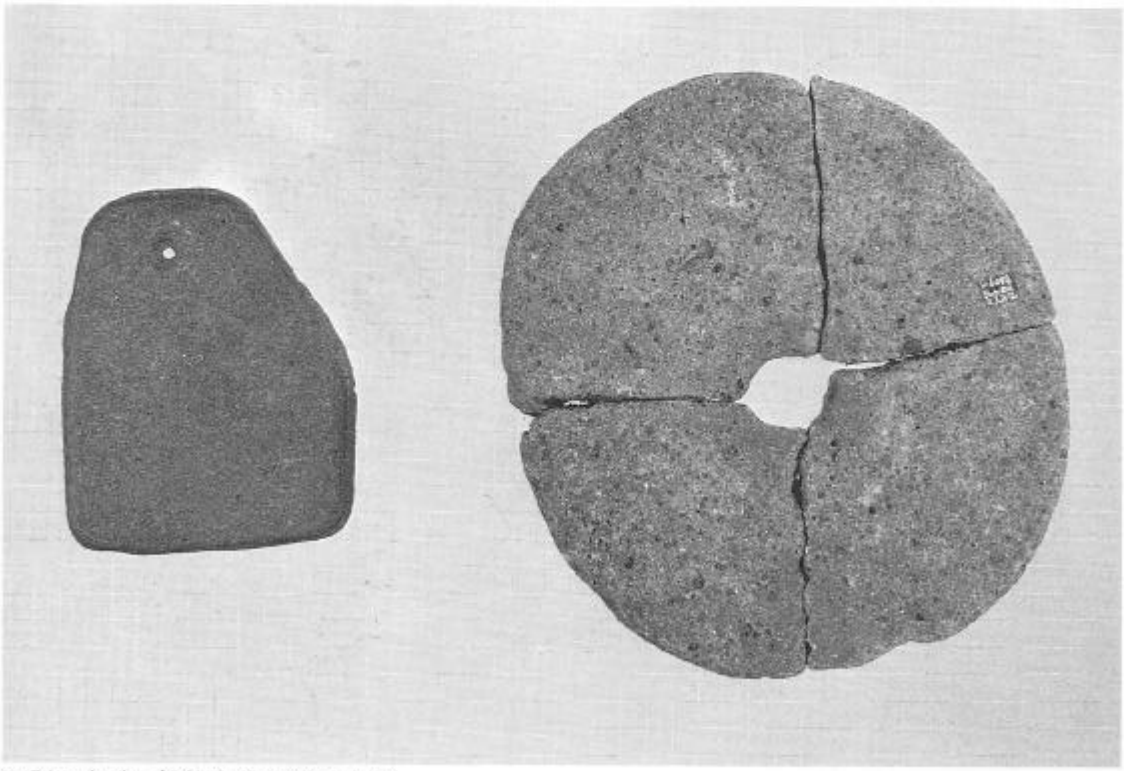
石製品(27)　有溝石製品



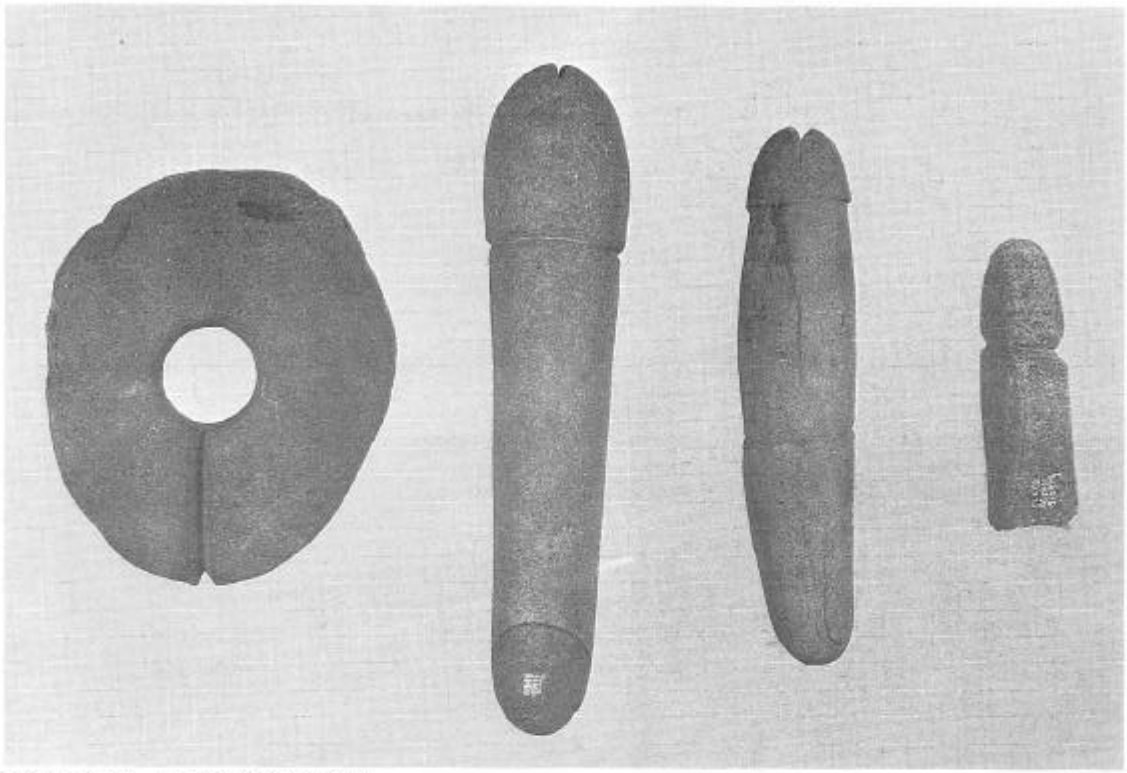
石製品(28)　棒状有孔石製品



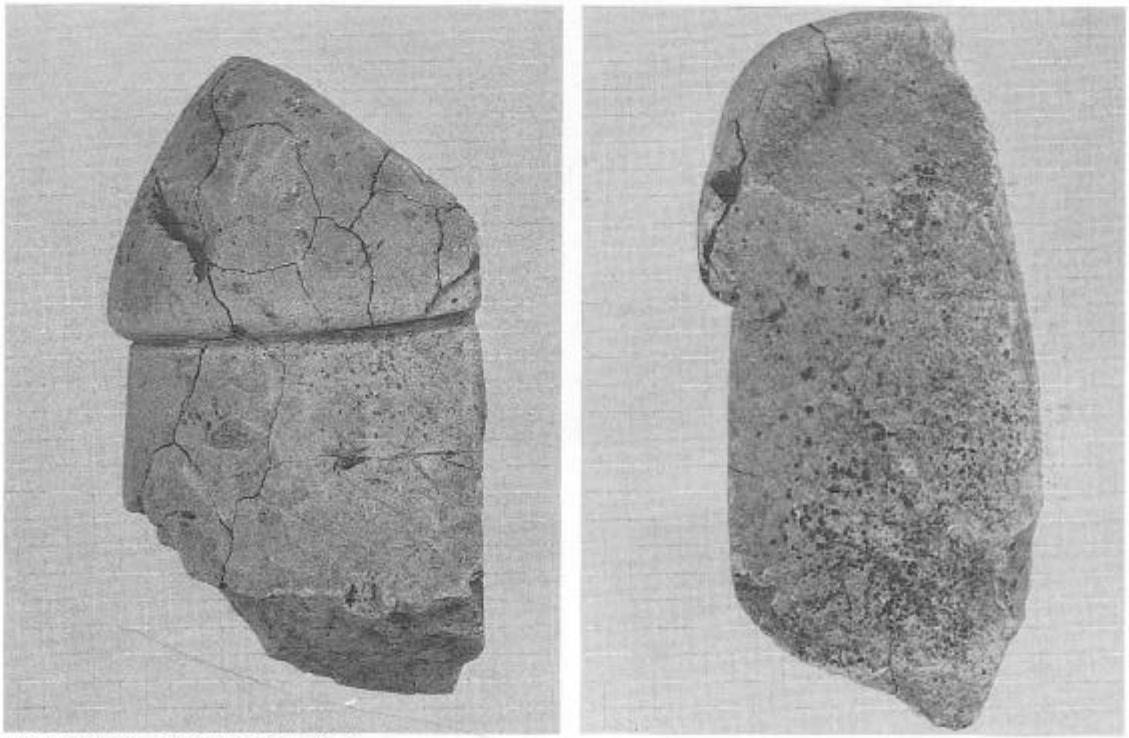
石製品(29)　盤状有孔石製品(1)



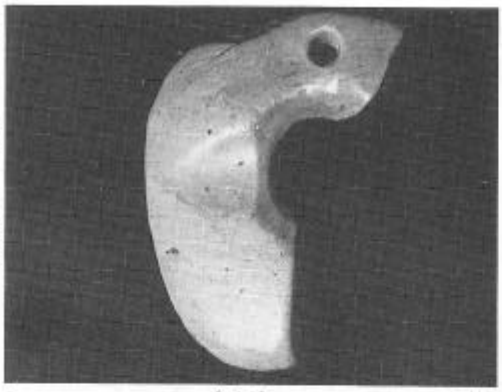
石製品(30)　盤状有孔石製品(2)



石製品(31)　男根状石製品(1)

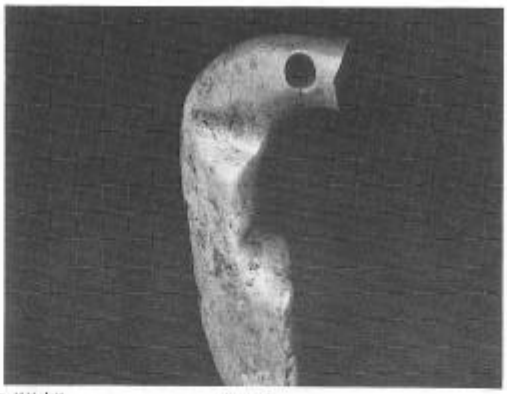


石製品(32)　男根状石製品(2)



(811)

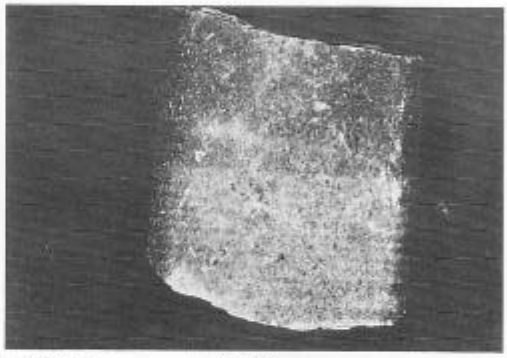
玦状耳飾の凹部



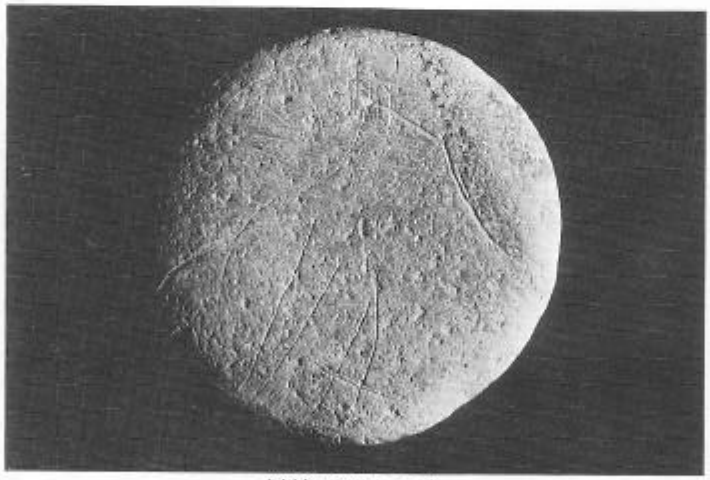
(810)

(950)

縄目の残る石製品



(952)

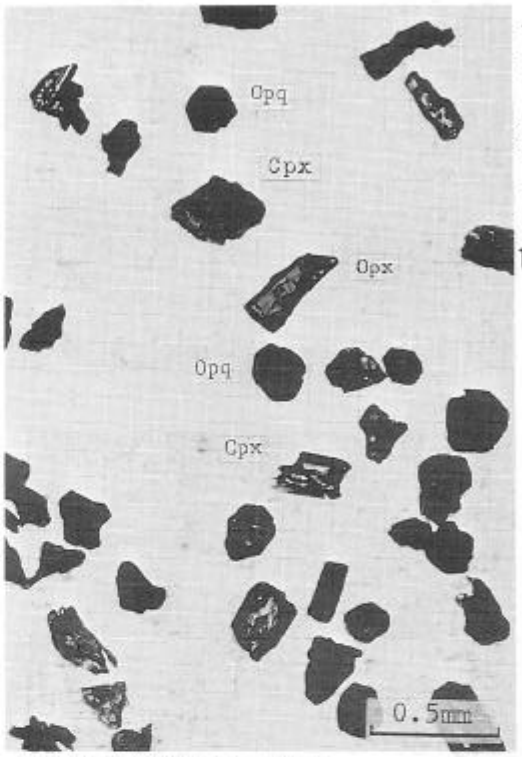


刻線画礫(1053)

使用痕のある石製品(965)

上ノ山Ⅰ遺跡 第3層 軽鉱物

Bw ：バブル型火山ガラス。
Pm ：小気泡を含む軽石型火山ガラス。




上ノ山Ⅰ遺跡 第3層 重鉱物

Opx：斜方輝石。 Cpx：単斜輝石。
Opg：(下、磁鉄鉱。上、チタン鉄鉱)

上ノ山Ⅱ遺跡 第12層 軽鉱物

Pm ：繊維束状火山ガラス。

上ノ山Ⅱ遺跡 第2′層 軽鉱物



上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡軽・重鉱物顕微鏡写真

# 付図１　　上ノ山Ⅱ遺跡遺構配置図(1)

秋田県埋蔵文化財センター

-47.12 -47.08 -47.04

-44.82 -44.86 -44.90 -44.94 -44.98 -45.02

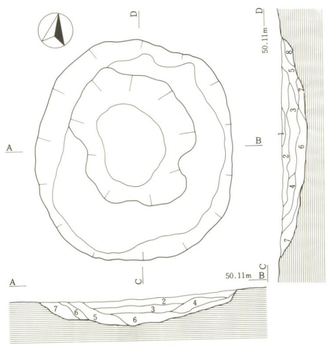
75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20

NF NA MP MK ME MA LP

0 10 20 20M

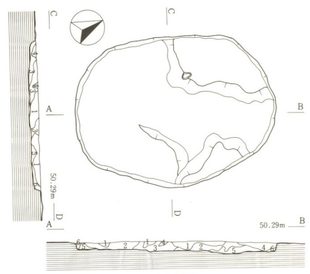
# 付図2　上ノ山Ⅱ遺跡遺構配置図(2)

秋田県埋蔵文化財センター



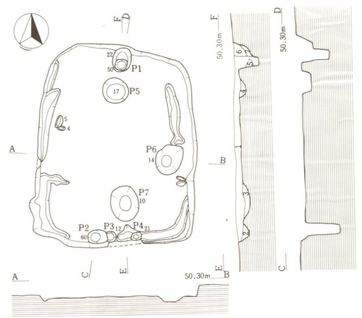
SI003竪穴住居跡

1 黒色土 10YR5/1 炭質物を多量混入。
2 黒褐色土 10YR3/2 黄橙色地山粒を多量混入。間隙あり。
3 暗赤褐色土 5YR3/3 凝固した粘質暗赤褐色土塊、地山塊の混合土。
4 黒褐色土 10YR3/2 明黄褐色地山塊を若干混入。
5 にぶい黄褐色 10YR5/3 間隙のある地山再堆積土。
6 暗褐色土 10YR3/3 汚れた地山再堆積土。間隙あり。
7 にぶい黄褐色土 10YR5/3 汚れた地山再堆積土。間隙あり。
8 明黄褐色土 10YR6/6 地山再堆積土。間隙あり。



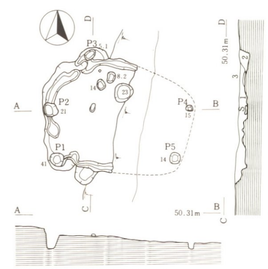
SI010竪穴住居跡

1 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・炭化物粒を若干混入。
2 にぶい黄褐色土 10YR5/3 ローム粒多量混入。
3 にぶい黄橙色土 10YR6/4 ローム粒・塊を多量混入。
4 明黄褐色土 10YR6/6 ローム粒・塊。間隙大。
5 黄褐色土 10YR5/6 ローム塊。
6 にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒多く混入。



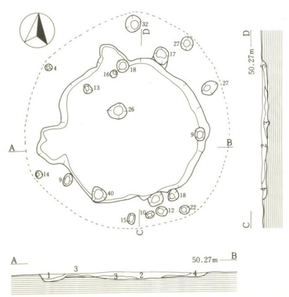
SI016竪穴住居跡

1 黒褐色土 10YR3/2 炭化物粒・黄橙色地山粒を少量混入。
2 にぶい黄橙色土 10YR6/4 間隙多い。パサパサ。
3 暗褐色土 10YR3/3 炭化物塊・黄橙色地山粒塊を多く混入。
4 黒褐色土 10YR3/2 炭化物粒・黄橙色地山粒を多く混入。
5 にぶい黄褐色土 10YR5/3 黄橙色地山粒を多量混入。間隙多い。
6 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒少量、黄橙色地山粒を多量混入。
7 黄橙色土 10YR7/8 地山の再堆積。間隙あり。



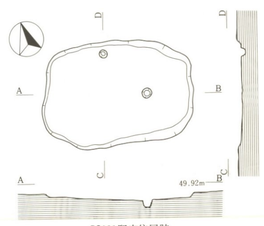
SI022竪穴住居跡

1 黒褐色土 10YR3/2 黄橙色地山ローム粒を炭化物粒が若干混入。
2 にぶい黄褐色土 10YR5/4 黄橙色地山ローム粒・塊を多量混入。
3 黄橙色土 10YR7/8 地山ローム塊。

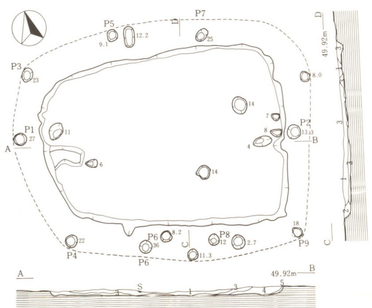


SI025竪穴住居跡

1 黒褐色土 10YR3/2 炭化物粒を多量混入。
2 黒褐色土 10YR3/2 炭化物粒・地山粒を少量混入。
3 暗褐色土 10YR3/3 地山粒・塊を多量混入。
4 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒・地山粒を少量混入。
5 暗黄褐色土 10YR5/6 汚れた地山の再堆積土。

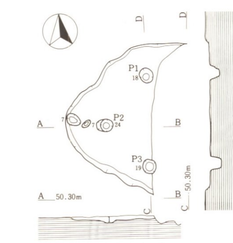


SI031竪穴住居跡



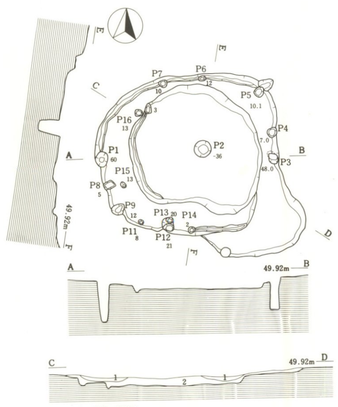
SI032竪穴住居跡

1 黒褐色土 10YR3/2 炭化物を若干混入。水田粘土の浸透がみられる。
2 にぶい黄褐色土 10YK5/3 地山粒・塊を混入。
3 黒褐色土 10YR3/2 地山塊を多量混入。
4 にぶい黄褐色土 10YR5/3 地山粒・塊を多量混入。炭化物粒を若干混入。
5 黄橙色土 10YK5/8 汚れた地山の再堆積土。



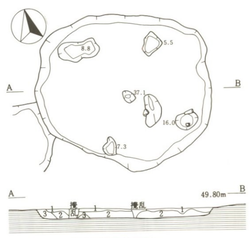
SI034竪穴住居跡

1 暗褐色土 10YR3/4 黄橙色地山粒を若干混入。



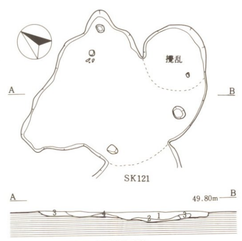
SI037竪穴住居跡

1 Ⅱ期 炉焼土。
2 貼床 暗褐色土(10YR3/3)と黄橙色地山ローム塊の混合土。



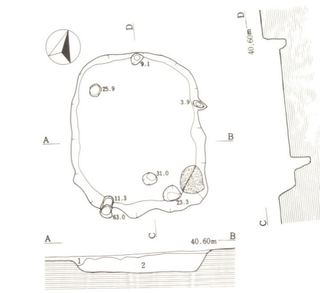
SI107竪穴住居跡

1 黒褐色土 10YR3/2 全体的に炭化物混入。
2 暗褐色土 10YR3/3 全体的に炭化物混入。
3 黒褐色土 10YR3/2 褐色土(10YR4/4)との混合土。全体的に炭化物混入。



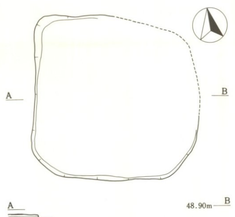
SI116竪穴住居跡

1 暗褐色土 7.5YR3/4 炭化物や焼土粒子が混入。
2 褐色土 7.5YR4/4 暗褐色土(7.5YR3/4)との混合土。
3 褐色土 7.5YR4/4
4 赤褐色焼土 5YR4/6 堅くしまっている。

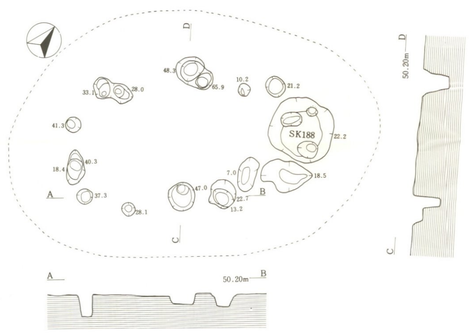


SI128竪穴住居跡

1 黒褐色土 7.5YR3/2
2 褐色土 7.5YR4/4 暗褐色土(7.5YR3/4)との混合土。

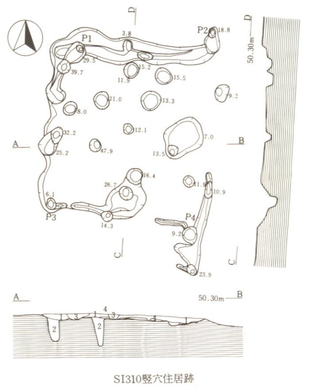


SI237竪穴住居跡



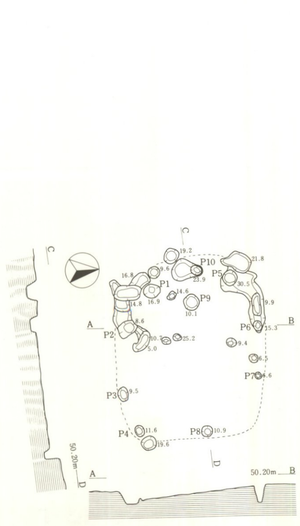
SI189竪穴住居跡

SI239竪穴住居跡

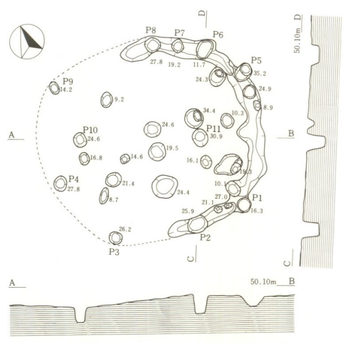


SI310竪穴住居跡

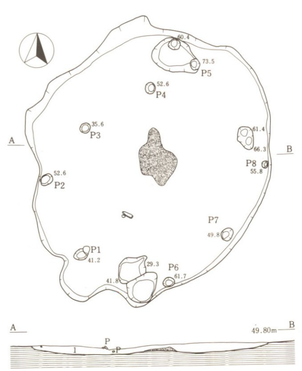
1 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色土(10YR5/4)5%ブロック混入。炭化物1%混入。
2 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色土(10YR5/4)30%ブロック混入。
3 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色土(10YR5/4)20%ブロック混入。
4 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色土(10YR5/4)とのブロック混合土。



SI321竪穴住居跡

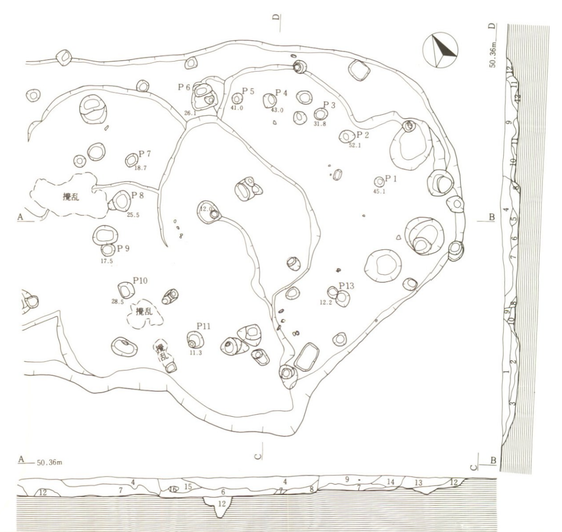


SI322竪穴住居跡



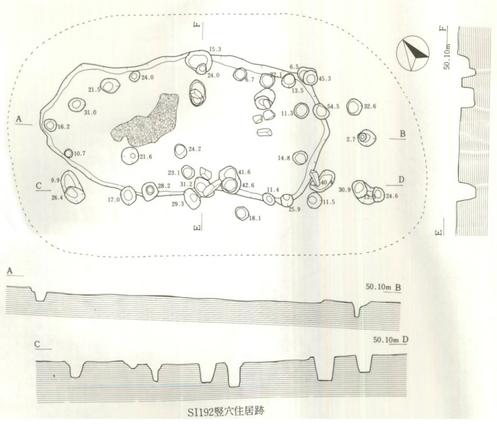
SI111竪穴住居跡

1 暗褐色土 7.5YR3/4 炭化物・土器片を含みしまりがある。

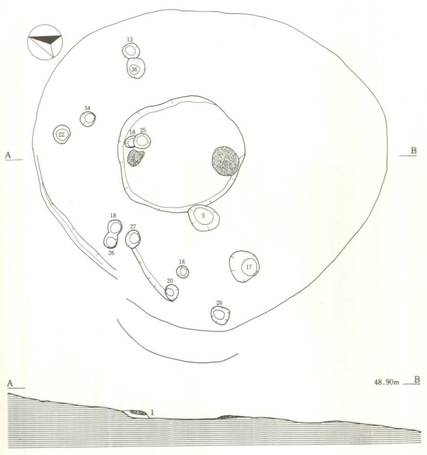


SI014竪穴住居跡

1 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒を若干混入。木の細毛根多い。
2 黒褐色土 10YR3/2 炭化物粒を1より多く混入。
3 褐 色 土 10YR4/6 黄橙色地山ブロック混入。
4 黒褐色土 10YR3/2
5 黒褐色土 10YR3/2 黄橙色地山粒子を若干混入。
6 にぶい黄褐色土 10YR5/3 黄橙色地山粒子を多量混入。
7 橙 色 土 7.5YR6/6 地山の再堆積。炭化物粒を若干混入。強粘質
8 にぶい褐色土 7.5YR5/4 地山の再堆積。間隙あり。
9 黒褐色土 10YR3/2
10 にぶい黄褐色土 10YR5/4 地山の再堆積。間隙あり。木根による攪乱あり。
11 褐 色 土 10YR4/6 汚れた地山の再堆積。強粘質。
12 にぶい黄褐色土 10YR5/3 黄橙色地山粒子を多量混入。
13 〃 10YR5/4 炭化物粒子・地山粒塊を若干混入。
14 〃 〃
15 黒褐色土 10YR3/2 にぶい褐色土塊・黄橙色地山粒を混入。
16 にぶい黄橙色土 10YR6/4 地山の再堆積ブロック。

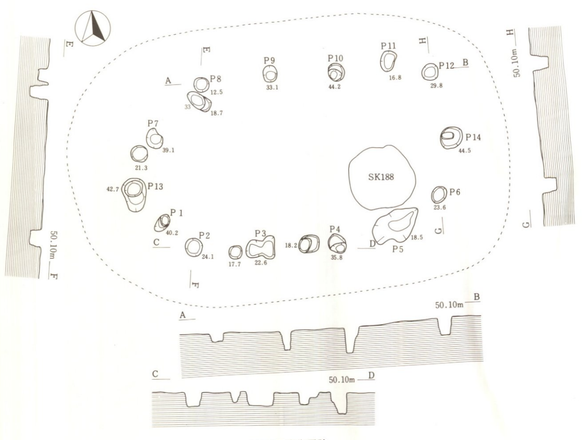


SI192竪穴住居跡

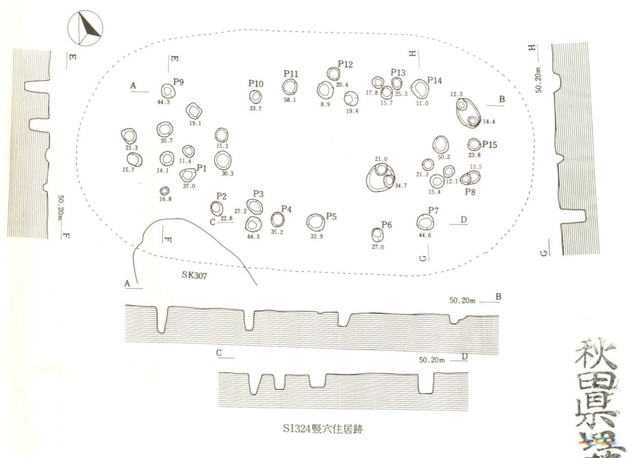


SI236竪穴住居跡

1 暗褐色土 (10YR3/3)



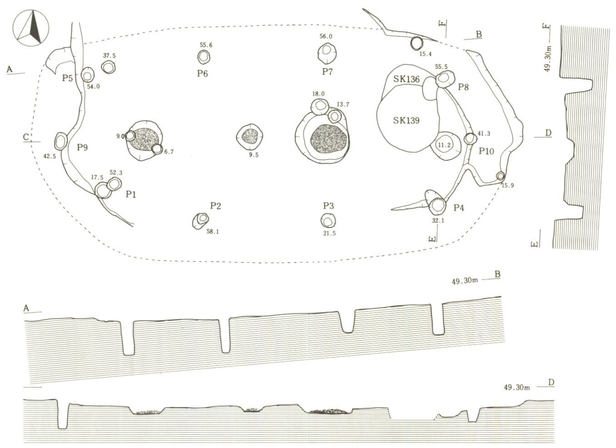
SI323竪穴住居跡



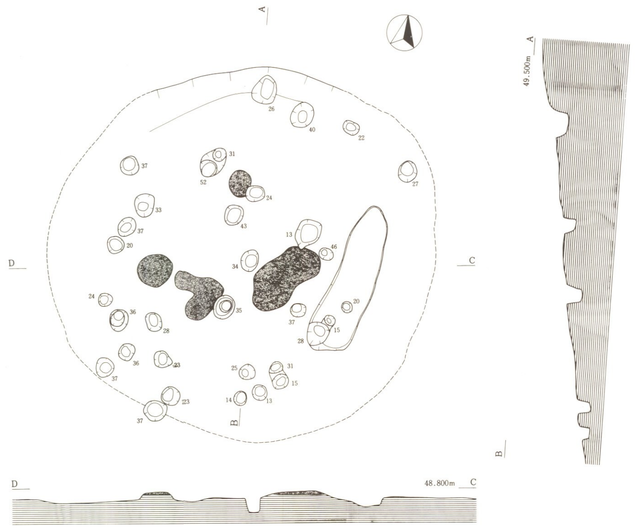
SI324竪穴住居跡

# 付図３　上ノ山Ⅱ遺跡竪穴住居跡実測図(1)

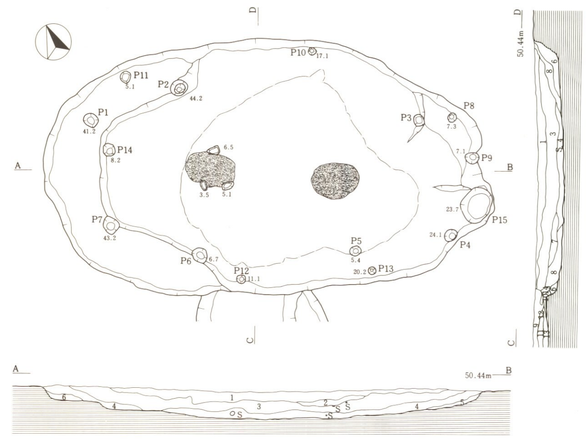
秋田県埋蔵文化財センター



SI135竪穴住居跡

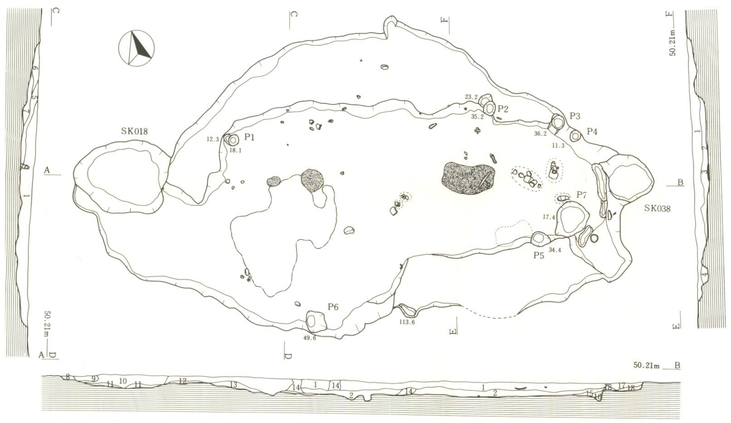


SI240竪穴住居跡



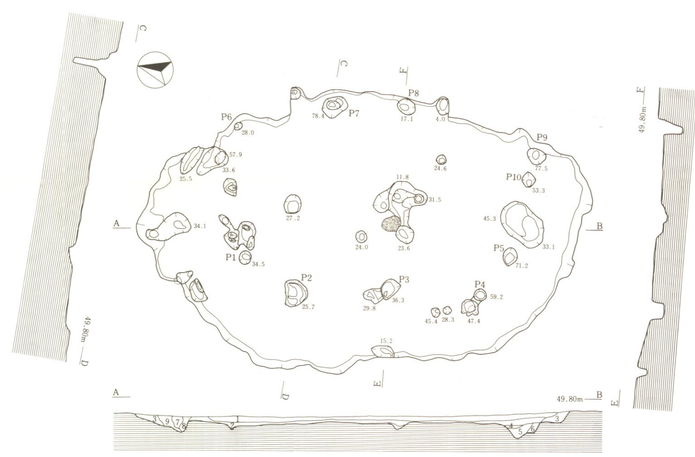
SI012竪穴住居跡

1 黒色土 10YR¾ 炭化物粒を若干混入。
2 にぶい黄褐色土 10YR¾ 強粘質。
3 にぶい黄褐色土 10YR¾ 地山ローム粒と炭化物粒を若干混入。(ローム粒は壁際に多い)
4 にぶい黄褐色土 10YR¾ 地山ローム塊と炭化物を若干混入。強粘質。
5 暗褐色土 10YR¾ 地山ローム粒と炭化物を若干混入。
6 にぶい黄褐色土 10YR¾ 強粘質。
7 にぶい黄褐色土 10YR¾ 地山ローム粒・同塊を多く混入。
8 にぶい黄褐色土 10YR¾ 地山ローム粒・同塊,炭化物を多く混入。
9 にぶい黄褐色土 10YR¾ 炭化物粒を若干混入。
10 黄橙色ローム 7.5YR¾
11 にぶい黄褐色土 10YR¾ 地山ローム粒と炭化物粒を若干混入。
12 にぶい黄褐色土 10YR¾ 木根による攪乱。
13 にぶい黄褐色土 10YR¾ 地山ローム粒・同塊,炭化物を多く混入。
14 にぶい黄褐色土 10YR¾ 木根による攪乱。



SI017竪穴住居跡

1 黒色土 10YR¾ 炭化物粒を少量混入。木根により攪乱。
2 暗褐色土 10YR¾
3 暗赤褐色土 10YR¾ 焼土層。¾ 焼土層。
4 明黄褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒を若干混入。
5 黒褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒を若干混入。
6 にぶい黄橙色土 10YR¾ 黄橙色地山粒・塊を多量に混入。
7 にぶい黄橙色土 10YR¾ 黄橙色地山粒・塊が多量に混入。
8 明黄褐色土 10YR⅚ 地山ブロックの再堆積。
9 黒褐色土 10YR¾ 炭化物粒を少量混入。
10 黒褐色土 10YR¾ 炭化物・黄橙色地山粒を若干混入。
11 明黄褐色土 10YR¾ 地山粒・塊を混入。
12 にぶい黄褐色土 10YR¾ 地山の再堆積。
13 暗褐色土 10YR¾ 地山粒・塊を混入。
14 木根による攪乱。
15 暗褐色土 N¾ 炭質物。
16 黒褐色土 10YR¾ 地山粒・塊を若干混入。
17 にぶい黄褐色土 10YR¾ 炭化物粒・地山粒塊を多量混入。
18 明黄褐色土 10YR¾ 地山の再堆積。

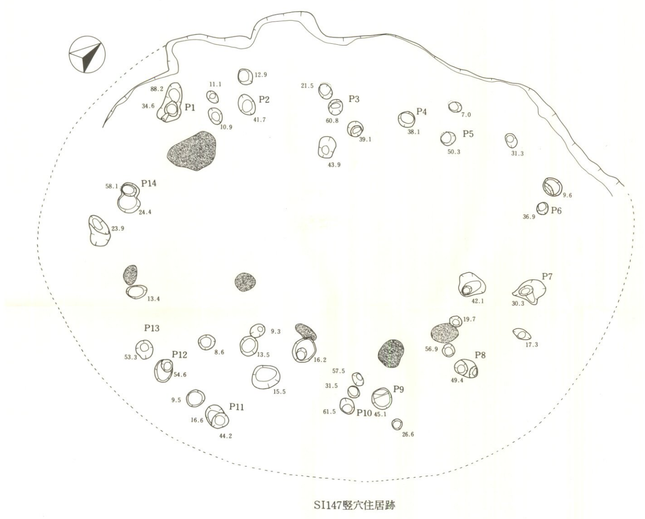


SI110竪穴住居跡

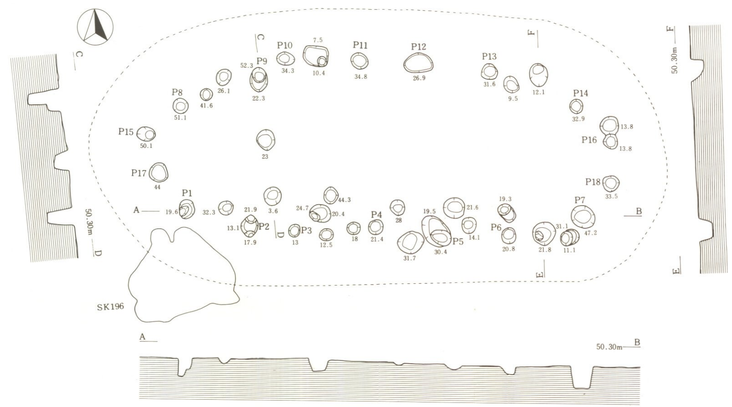
1 黒褐色土 7.5YR¾
2 褐色土 7.5YR¾ にぶい褐色土(7.5YR5/)との混合土。
3 黒褐色土 7.5YR¾ にぶい褐色土(7.5YR5/)のブロック少量混入。
4 褐色土 7.5YR¾
5 褐色土 7.5YR¾ にぶい褐色土(7.5YR5/)との混合土。堅くしまりがある。
6 暗褐色土 7.5YR¾ 炭化物混入。
7 黒褐色土 7.5YR¾ にぶい褐色土(7.5YR5/)がブロック状に混入。
8 黒褐色土 7.5YR¾ にぶい褐色土(7.5YR5/)がブロック状に混入。岸化物混入。
9 暗褐色土 7.5YR¾ 炭化物混入。

SI133竪穴住居跡

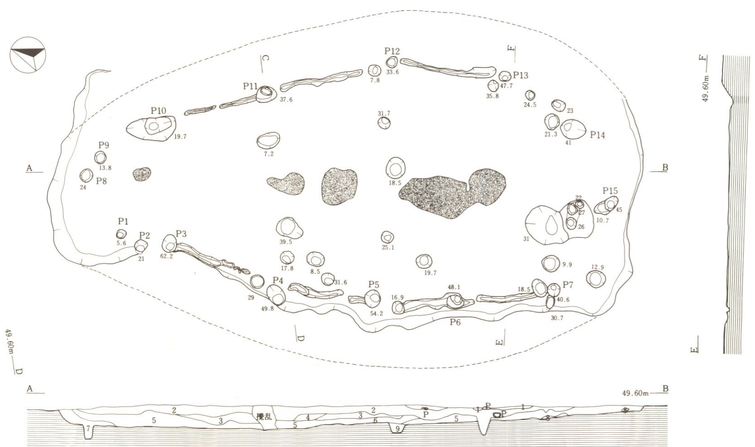
1 黒褐色土 7.5YR¾ 焼土ブロック混入。2層より堅くしまりがある。
2 黒褐色土 7.5YR¾ ボソボソしていて、炭化物、土器方、焼土、粒子が多量混。
3 暗褐色土 7.5YR¾ 2層以上に、土器片の混入が著しい。
4 黒褐色土 7.5YR¾ 2層と同じであるが、2・3層よりも堅くしまっている。
5 褐色土 7.5YR¾ 明褐色土(7.5YR¾)が径1.0cmの大きさのブロック状に混入。炭化物混入。堅くしまりがある。
6 暗褐色土 7.5YR¾ 褐色土(7.5YR¾)がブロック状に混入。堅くしまりがある。
7 褐色土 7.5YR¾ 堅くしまりがある。
8 褐色砂質土 7.5YR¾ 部分的にブロック状に混入。
9 黒色土 7.5YR¾ ボソボソの状態である。



SI147竪穴住居跡

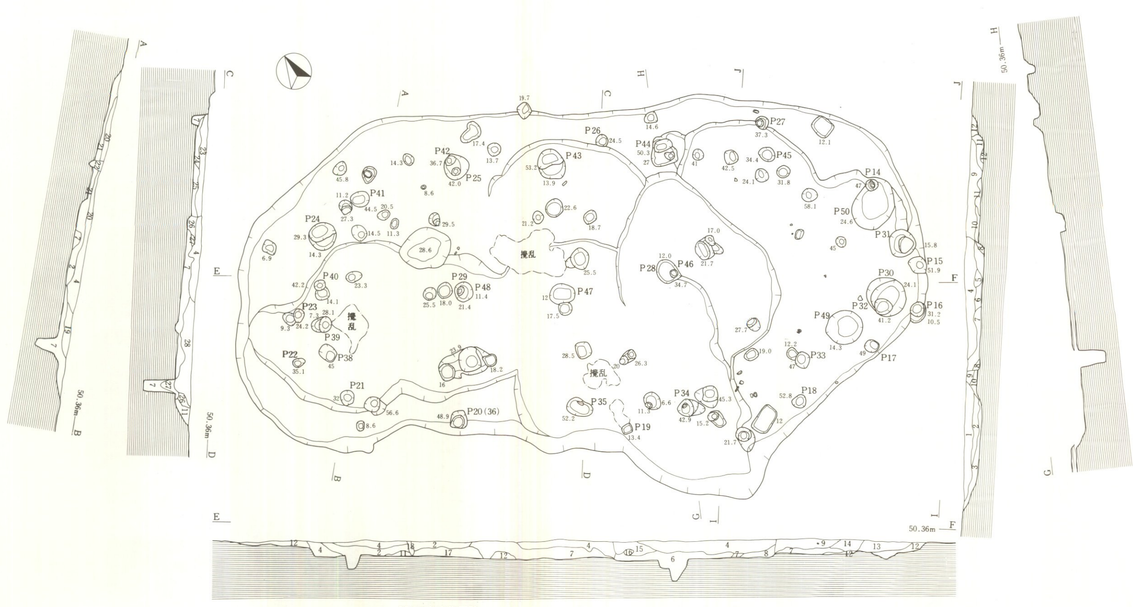


SI325竪穴住居跡



SI130竪穴住居跡

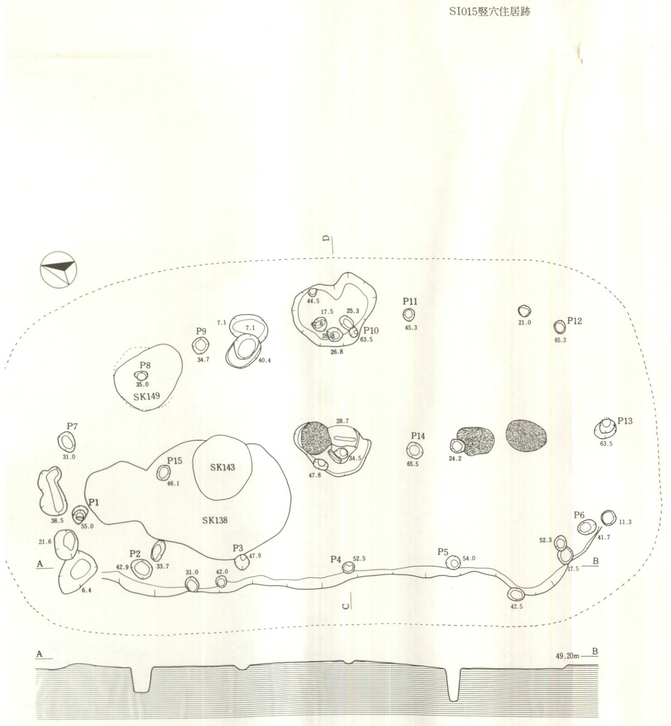
1 黒褐色土 7.5YR¾ 焼土ブロック混入。2層より堅くしまりがある。
2 黒褐色土 7.5YR¾ ボソボソしていて炭化物、土器片、焼土粒子が多量混入。
3 暗褐色土 7.5YR¾ 2層以上に土器片の混入が著しい。
4 黒褐色土 7.5YR¾ 2層と同じであるが、2・3層よりも堅くしまっている。
5 褐色土 7.5YR¾ 明褐色土(7.5YR¾)が径1.0cmの大きさのブロック状に混入。炭化物混入。堅くしまりがある。
6 暗褐色土 7.5YR¾ 褐色土(7.5YR¾)がブロック状に混入。堅くしまりがある。
7 褐色土 7.5YR¾ 堅くしまりがある。
8 褐色砂質土 7.5YR¾ 部分的にブロック状に混入。
9 黒色土 7.5YR¾ ボソボソの状態である。



SI015竪穴住居跡

1 暗褐色土 10YR¾ 炭化物粒を若干混入。木の細毛根多い。
2 黒褐色土 10YR¾ 炭化物粒を1層より多く混入。
3 褐色土 10YR¾ 黄橙色地山ブロックを混入。
4 黒褐色土 10YR¾
5 黒褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒子を若干混入。
6 にぶい黄褐色土 10YR¾ 黄橙色粒子を多量混入。
7 褐色土 7.5YR¾ 地山の再堆積。炭化物粒を若干混入。強粘質。
8 にぶい褐色土 7.5YR¾ 地山の再堆積。間隙あり。
9 黒褐色土 10YR¾
10 にぶい黄褐色 10YR¾ 地山の再堆積。間隙あり。木根による攪乱。
11 褐色土 10YR¾ 汚れた地山の再堆積。強粘質。
12 にぶい黄褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒子を多量混入。
13 にぶい黄褐色土 10YR¾ 炭化物粒・地山粒塊を若干混入。
14 にぶい黄褐色土 10YR¾
15 黒褐色土 10YR¾ にぶい褐色土塊・黄褐色地山粒を混入。
16 にぶい黄褐色土 10YR¾ 地山の再堆積ブロック。
17 にぶい黄褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒・塊を混入。
18 木根による攪乱。
19 にぶい黄褐色土 10YR¾ 間隙あり。
20 暗褐色土 10YR¾
21 暗褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒・塊を多量混入。
22 黒褐色土 10YR¾ 炭化物粒を混入。
23 にぶい黄褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒多量混入。
24 明黄褐色土 10YR¾ 地山の再堆積。間隙多し。
25 褐色土 10YR¾ 汚れた地山の再堆積。強粘質。
26 黒褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒・塊を若干混入。強粘質。
27 褐色土 10YR¾ 強粘質。
28 黒褐色土 10YR¾ 黄橙色地山粒を多量混入。

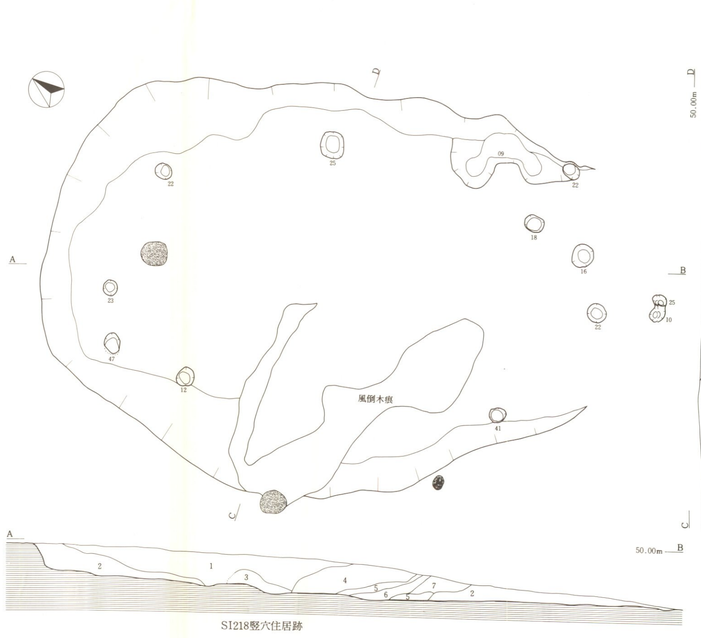
SI123竪穴住居跡



SI148竪穴住居跡

SI217竪穴住居跡

1 黒褐色土 7.5YR¾
2 褐色土 7.5YR¾
3 褐色土 7.5YR¾ 地山の盛り上がり,倒木痕。



SI218竪穴住居跡

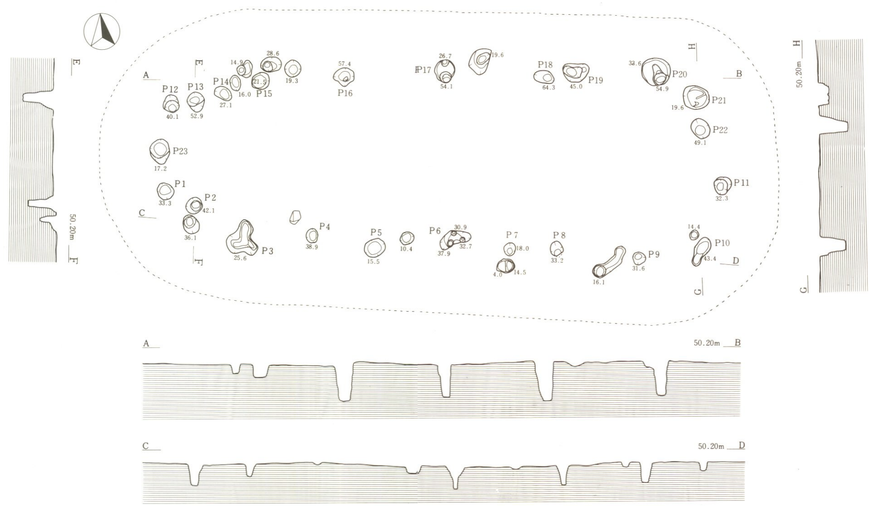
1 黒褐色土 7.5YR¾
2 褐色土 7.5YR¾
3 黒色土 7.5YR¾
4 褐色土 10YR¾
5 明黄褐色土 10YR¾
6 黒褐色土 10YR¾
7 黒褐色土 10YR¾

# 付図４　上ノ山Ⅱ遺跡竪穴住居跡実測図(2)

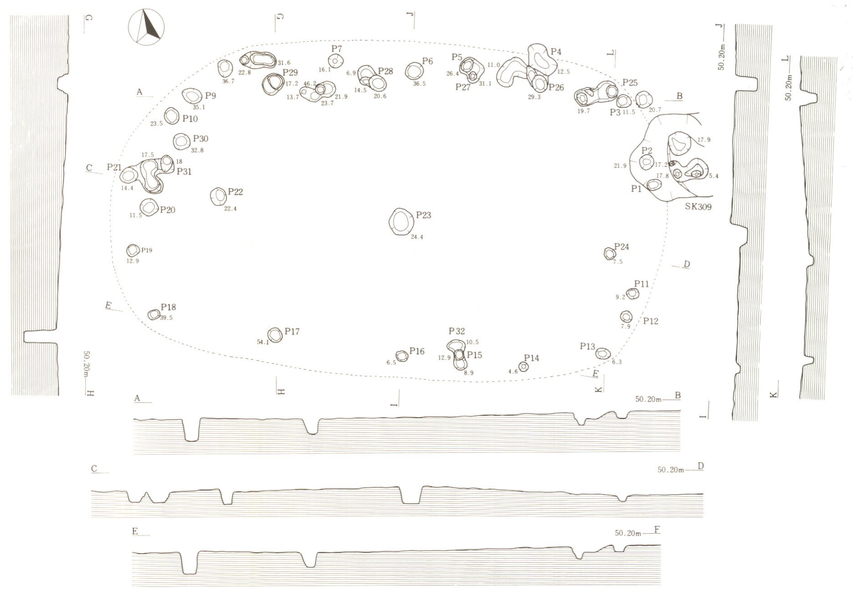
秋田県埋蔵文化財センター

SI229竪穴住居跡

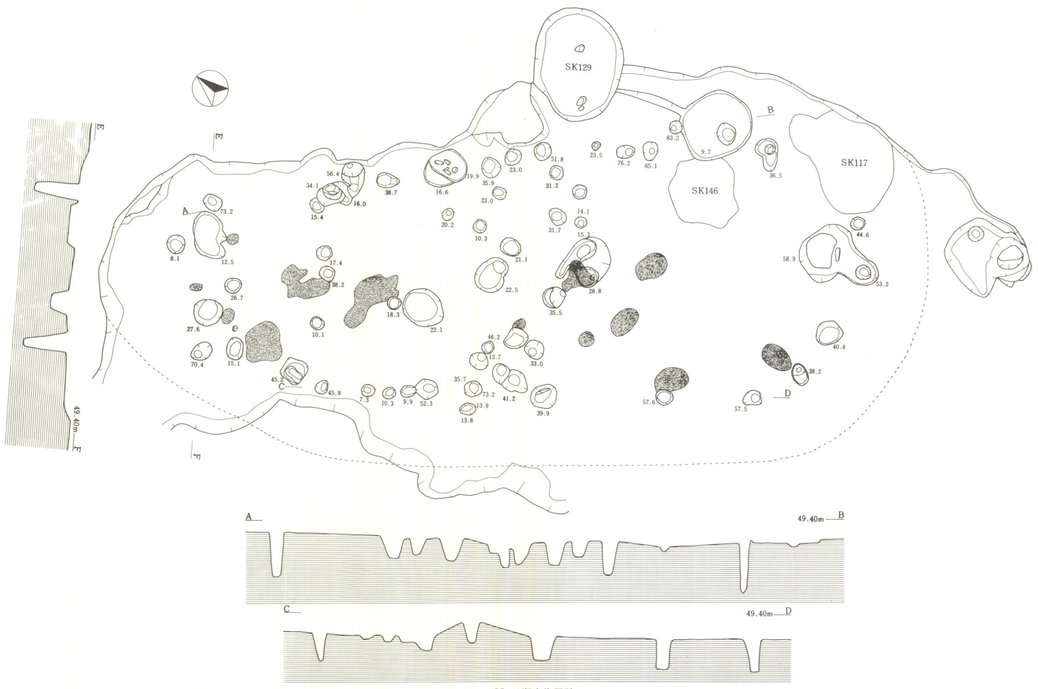
1 褐色土 10YR⅘
2 暗褐色土 10YR⅗
3 倒木痕



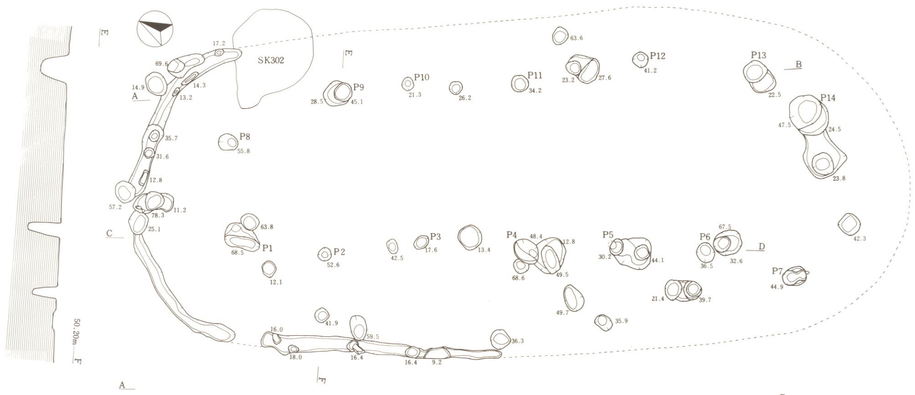

SI315竪穴住居跡




SI320竪穴住居跡




SI118竪穴住居跡




SI326竪穴住居跡

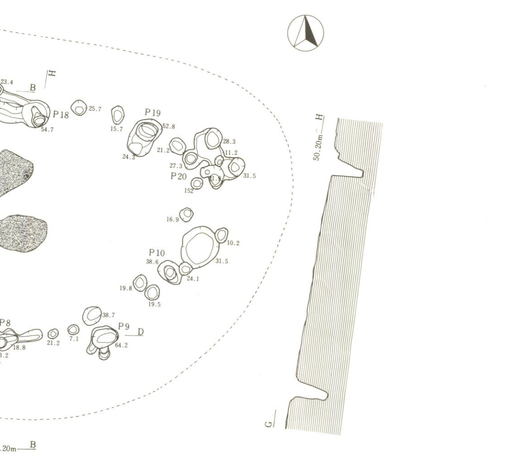
SI195竪穴住居跡

SI199竪穴住居跡




SI200竪穴住居跡

1 黒色土 5YR⅕
2 黒褐色土 7.5YR⅓
3 黒褐色土 10YR⅓
4 黒褐色土 7.5YR⅓
5 暗褐色土 7.5YR⅓
6 極暗褐色土 7.5YR⅓
7 オリーブ黒色土 5Y⅓
8 暗褐色土 7.5YR⅓
9 赤褐色土 5YR⅘ 焼土層。Bº。




SI214竪穴住居跡

1 暗褐色土 10YR⅓
2 にぶい黄褐色土 10YR⅗
3 黒褐色土 10YR⅓
4 にぶい黄褐色土 10YR⅗

断面図中の遺物は土器である

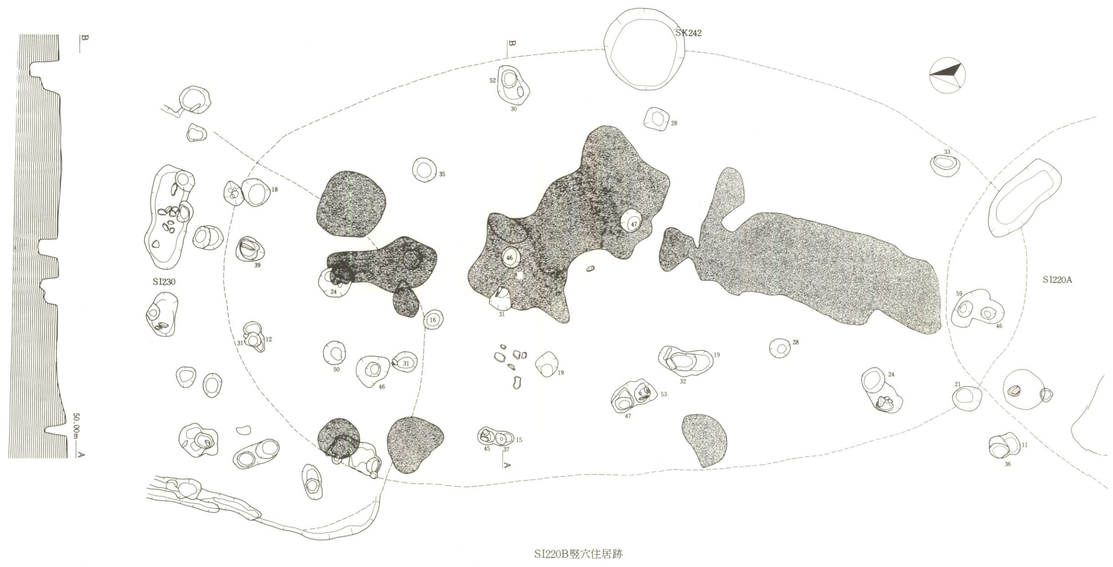



SI215竪穴住居跡

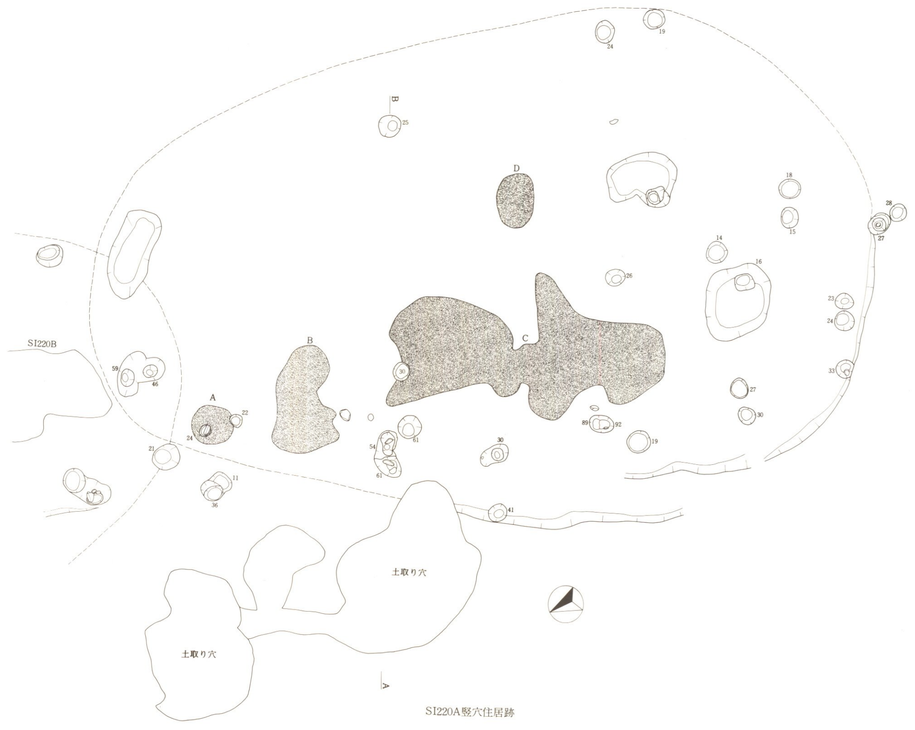
1 黒褐色土 10YR⅓
2 暗褐色土 10YR⅓
3 黒褐色土 10YR⅓

# 付図5　上ノ山Ⅱ遺跡竪穴住居跡実測図(3)

埋蔵文化財センター




SI220B竪穴住居跡

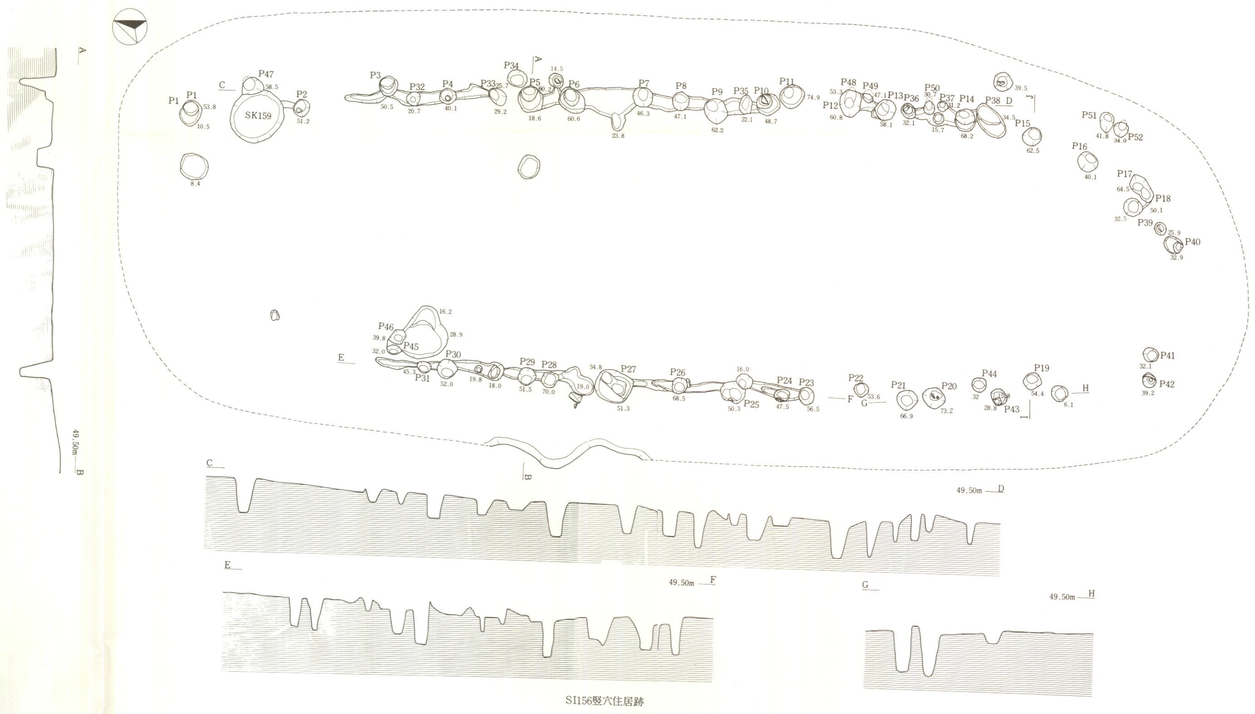



SI220A竪穴住居跡

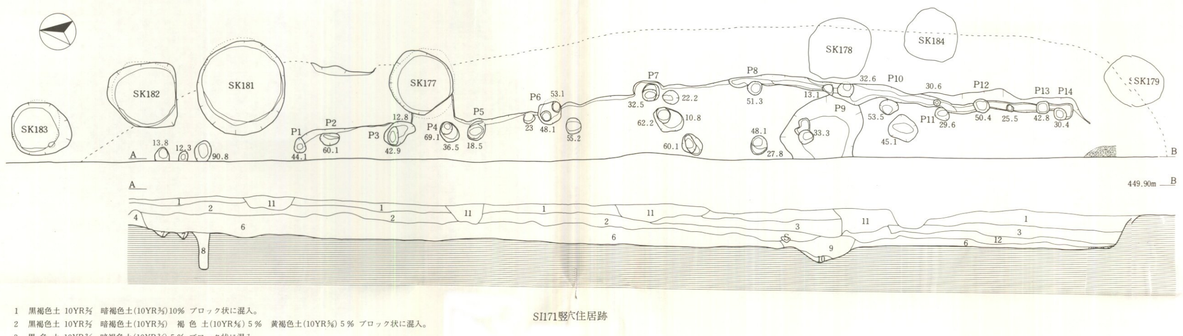
SI230竪穴住居跡

SI311竪穴住居跡

1 暗褐色土 7.5YR3/4
2 暗褐色土 7.5YR3/4
3 暗褐色土 7.5YR3/4
4 暗褐色土 7.5YR3/4
5 暗褐色土 7.5YR3/4
6 褐 色 土 7.5YR4/6
7 褐 色 土 7.5YR5/6




SI156竪穴住居跡

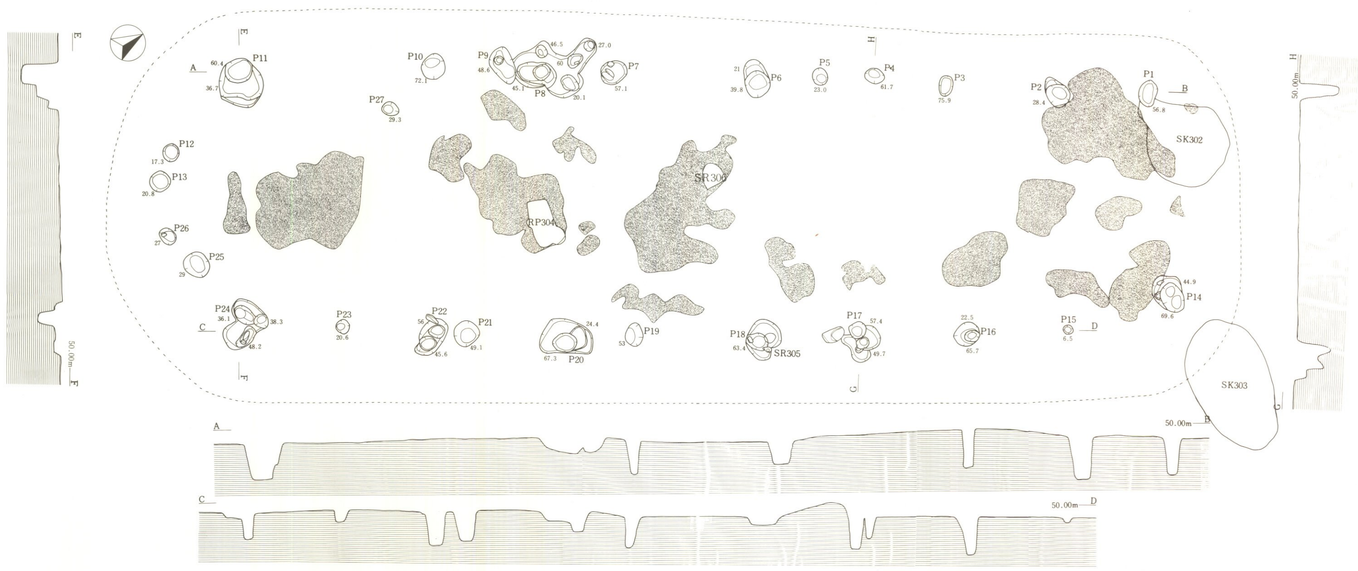



SI171竪穴住居跡

1 黒褐色土 10YR3/2 暗褐色土(10YR3/4)10% ブロック状に混入。
2 黒褐色土 10YR3/2 暗褐色土(10YR3/4) 褐 色 土(10YR4/6)5% 黄褐色土(10YR5/6)5% ブロック状に混入。
3 黒 色 土 10YR3/1 暗褐色土(10YR3/4)5% ブロック状に混入。
4 褐 色 土 10YR4/4 黄褐色土(10YR5/6)5% ブロック状に混入。炭化物1%混入。
5 褐 色 土 10YR4/4 黄褐色土(10YR5/6)30% ブロック状に混入。
6 褐 色 土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/4)5% ブロック状に混入。明赤褐色土(5YR5/6)南端にのみ集中してブロック混入。
7 褐 色 土 10YR4/4 黄褐色土(10YR5/6)40% ブロック状に混入。
8 褐 色 土 10YR4/4 黄褐色土(10YR5/6)20% ブロック状に混入。
9 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土(10YR5/6)20% ブロック状に混入。
10 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土(10YR5/6)40% ブロック状に混入。
11 木の根による表土層の攪乱。
12 褐 色 土 10YR4/4 暗褐色土(10YR3/4)20% ブロック状に混入。黄褐色土(10YR5/6)5% ブロック状に混入。炭化物2%混入。

SI180竪穴住居跡

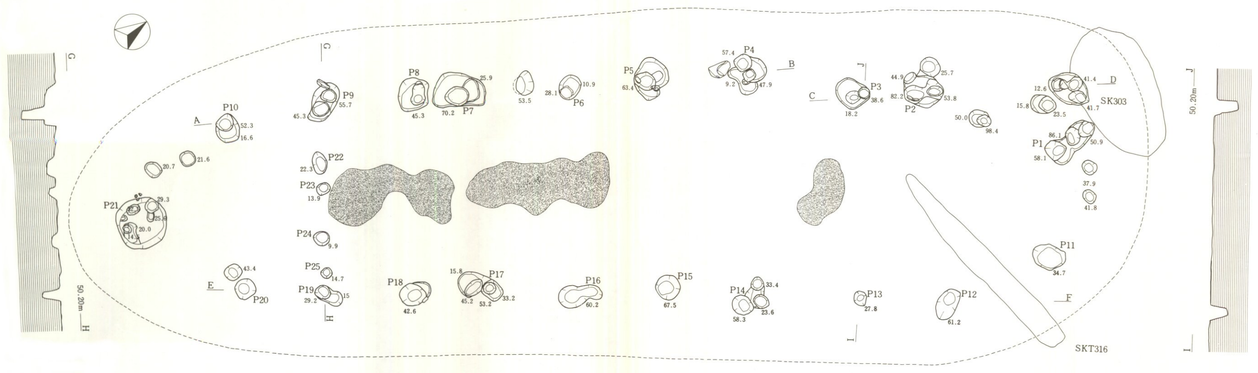
# 付図6　上ノ山Ⅱ遺跡竪穴住居跡実測図(4)



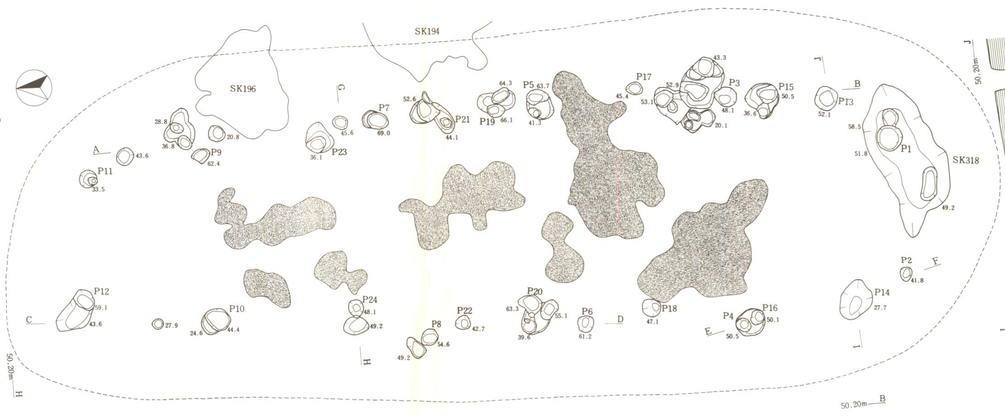

SI190竪穴住居跡

1　褐　色　土　10YR5/4　部分的に礫を多く含む。
2　赤褐色土　5 YR5/6　焼土層
3　赤褐色土　5 YR5/6　焼土層に地山の礫が混入。
4　褐　色　土　10YR5/4
5　暗褐色土　10YR3/4
6　褐　色　土　7.5YR5/4
7　褐　色　土　10YR5/4
8　赤褐色土　5 YR5/6　焼土層・地床炉に伴うものか。
9　暗褐色土　10YR3/4
10　黄褐色土　10YR7/4　地山土の二次堆積。
11　赤褐色土　5 YR5/6　地床炉に伴うものか。
12　赤褐色土　5 YR5/6　焼土層
13　褐　色　土　7.5YR5/4
14　赤褐色土　5 YR5/6　焼土層

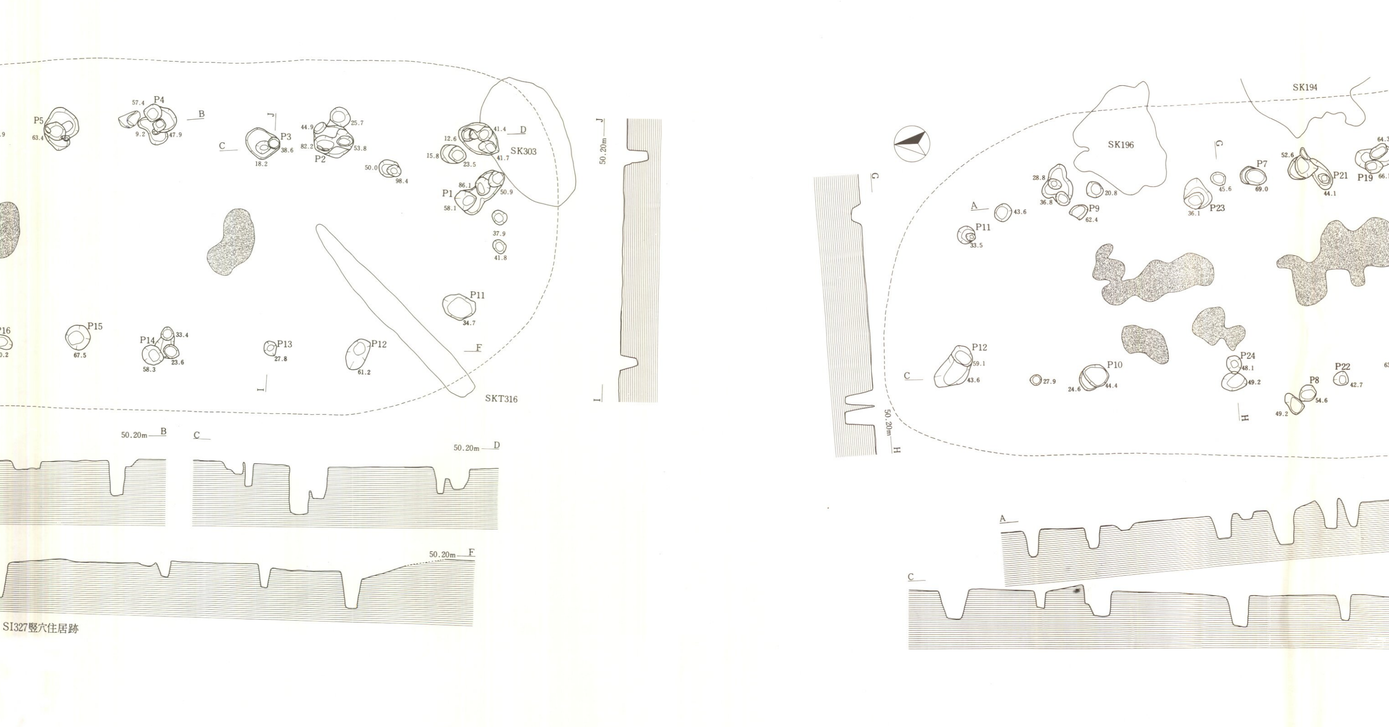
SI213竪穴住居跡




SI327竪穴住居跡




SI328竪穴住居跡

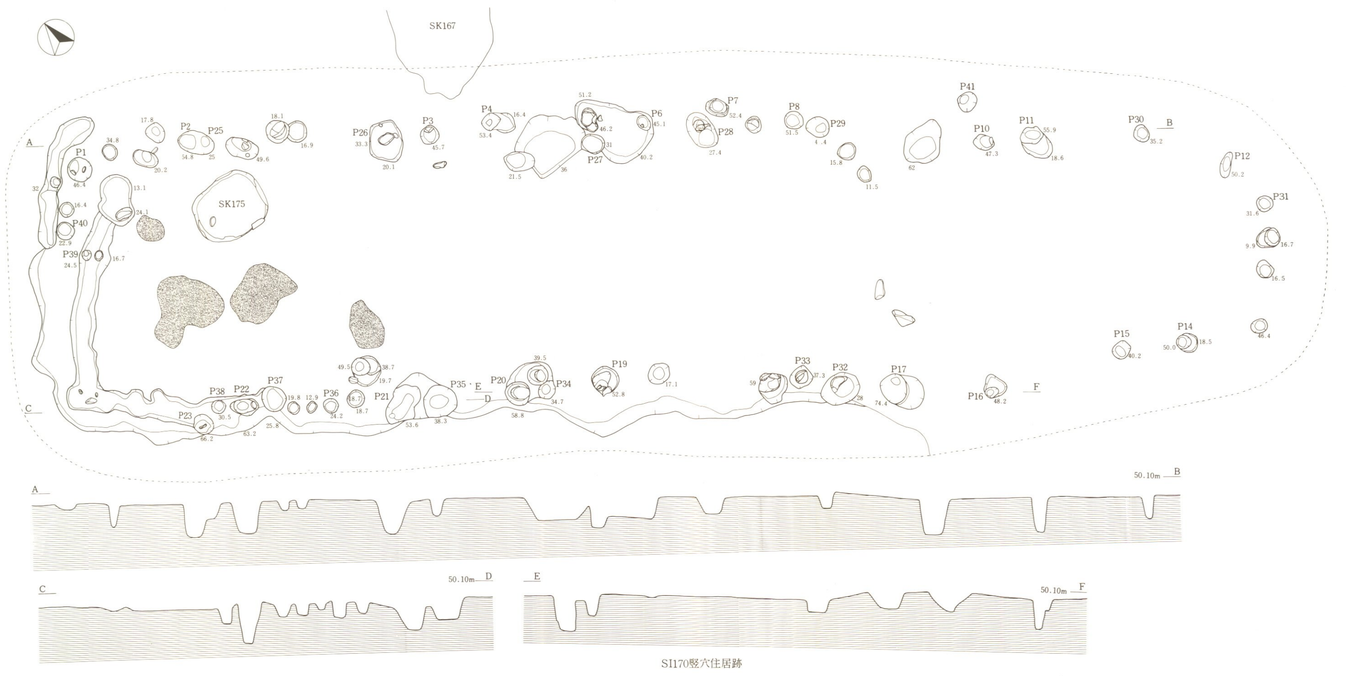



SI126竪穴住居跡

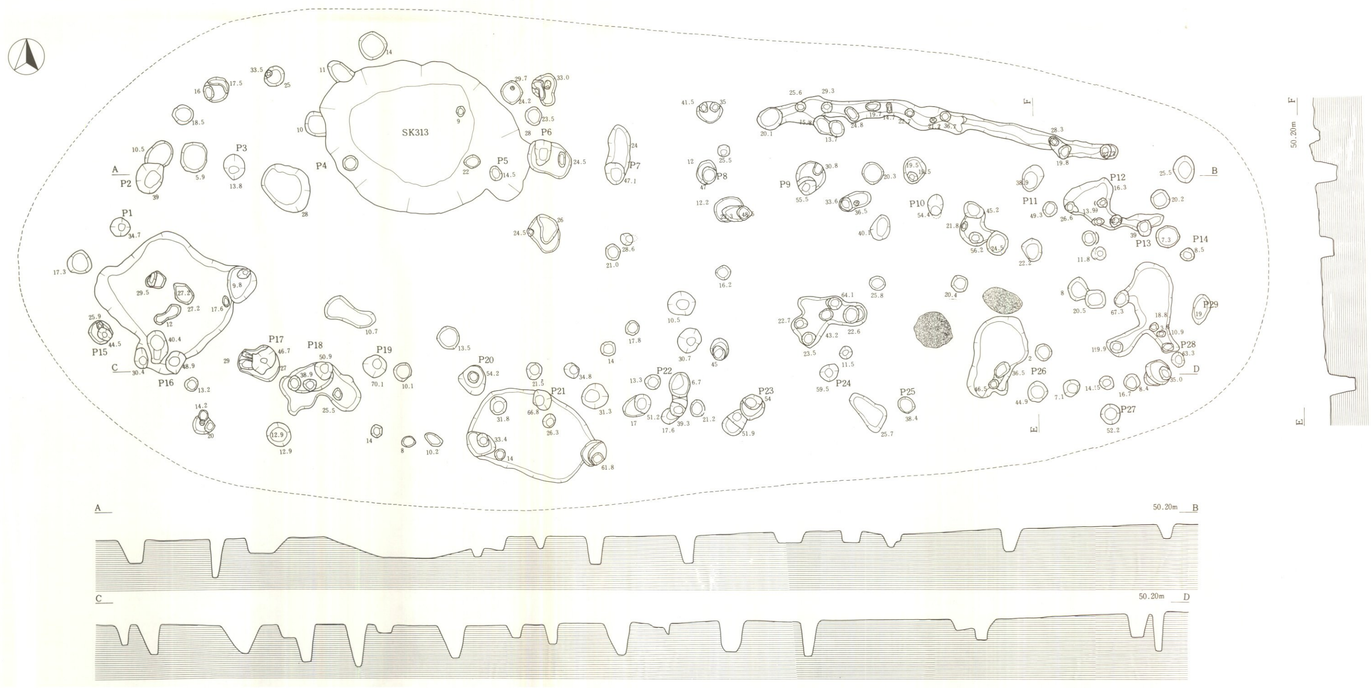
# 付図７　　上ノ山Ⅱ遺跡竪穴住居跡実測図(5)

秋田県埋蔵文化財センター

SI150竪穴住居跡




SI170竪穴住居跡




SI312竪穴住居跡

SI314竪穴住居跡

# 付図８　上ノ山Ⅱ遺跡竪穴住居跡実測図(6)

秋田県埋蔵文化財センター